王の帰郷

蒼井りゅう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
王の帰郷

【Ｎコード】
Ｎ０７７１Ｅ

【作者名】
蒼井りゅう

【あらすじ】
仇を愛することができるのか？
度重なる陰謀や裏切りから人間不信に陥り、残虐な男に変わってしまったヴィレール王ゴーティスは、ある地方を制圧した際に剣をふるったジェニーを、興味本位で自国に連れ帰る。王に動じない彼女に、王の腹心サンジェルマン含め城内の人々は当惑するが、彼女と接するうち、王の心情には微妙な変化が起きてくる。そんな中、ジェニーは城内に幽閉されていた謎の男ケインと出会い、城からの脱出を約束するが…。

★６／１４完結★

第一部　1．遭遇ー1（前書き）

以前に掲載されていた数話を一話にまとめたので、一話ごとの本文が長めになっています。
目次数を少なくしたかったので…すみませーん！
休み休み、読んでください～。

第一部　1．遭遇－1

緑豊かな森と水源に恵まれた肥沃な大地をかかえ、民族の移動がそれほど頻繁でない大陸北部は、いくつかの王や有力領主が統治する貴族社会国家が形成されつつあった。

その大陸北部地方で、近年急速に頭角を現してきたのが、大陸北西部に位置するヴィレール王国だ。現国王で五代目となる若い国ながら、若干二十歳の青年王が率いる強靭な無敵軍隊が元々の国境線を次々と塗りかえ、彼らの非情な奇襲攻撃に、その近隣諸国は恐怖と混乱に陥っていた。

ヴィレール王は残虐なだけでなく、若く美しく、彼はその容姿から、“白麗王”と呼ばれていた。

◇　◇

最近になって、ジェニーの自宅付近の人々が、毎夜、誰かの家に集まって話し合いの場を持っているという。確かではない噂によると、何かから逃れるための逃避行計画について相談しているそうだ。

「……略奪？」

中央の街中心部からは少しはずれたジェニー宅の納屋の上階で、幼馴染みのニールからされた話は衝撃的だった。

「うん。あちこちの街が略奪されているらしいよ」

彼はあくまでのん気に干草を数本取っては投げながら、彼女に何気なくそう話した。

「略奪って……一体、誰がそんなひどい事をするの？」

「さあ……。どこかの軍だって聞いたけど、どこだったかな。東サランドロンが襲われたって聞いたよ」

「それ、ここからそんなに遠くないじゃない！」

ジェニーが自分の体を抱いて震えると、ニールが笑って彼女の髪

に手を伸ばした。その手は、ここ二、三年で急成長し、大人となった男の手をしている。

「だけど、襲撃を受けるのはどこも要所で大きな街ばかりだから、ここは大丈夫じゃないかな。こんな田舎は、相手にされないさ」

「のん気ね、ニールは。でも、襲撃されるかもしれないじゃない？」

ジェニーの髪を指先でいじっていたニールは、肩をすくめた。

「そうしたら任せてくれよ、僕がこの剣で！　……いや、ローリーがいることだし、心配ない」

ジェニーの短剣をもてあそぶ彼に、彼女はつい笑いを誘われる。

「そうね、あなたはともかく、ローリーは頼りになるわ。彼に勝てる人なんて、この世にいないもの」

「きみはほんとに、兄さんが大好きなんだからなぁ」

ああ、と彼は息をついて足を床へ投げ出した。その目はいたずらっぽく笑っている。彼は、彼に言い返そうと口を開けたジェニーの両腕を引っ張り寄せた。

「でも本当でしょう？　誰も彼には勝てないわ。ちがう？」

「うん……。だけど、ジェニー？　きみのことは僕が守る。必ずだよ。約束するから……」

ニールの言葉を聞いたジェニーは彼に微笑んだ。彼がゆっくりとまぶたを閉じ、彼女の唇を探し当ててそこに唇を重ねる。ため息に似たニールの声。きついくせ毛の黄色い髪が、ジェニーの頬にふんわりと触れる。

十六になったばかりのジェニーは、あと一年もたてば彼と結婚することになると考えていた。彼の急速に早くなる心臓の音を肌に感じ、彼がどうやらもっと先の段階へと進みたがっているのを嫌でも自覚する。だが、はたして、その行為が正しいものかどうか、よくわからない。

彼もジェニーの背に手をまわしたが、彼女の反応を待っているのか、そこから動こうとはしない。婚前交渉の経験をする男女は、少なくないが。

その時である。

「ジェニー、ニール！　そこにいるんだろう、降りておいで！」

階下からの兄ローリーの大声に、二人ははっとしてお互いから体を離した。ジェニーはほっとした反面、ニールの短いため息を耳にして、ばつの悪い思いをする。

「いるわよ、今行く！」

気を取り直したジェニーが体を乗り出して下の兄をのぞくと、彼は、降りてこい、というように手招きした。仕方なく後ろのニールにそれを伝えると、彼は興ざめした顔でさっと立ち上がる。

「わかった、行こう」

ニールの不機嫌さが気になったが、どうにもならない。

衣服についた干草や砂埃をはらい、ジェニーは階下へ降りるはしごへと足をのばした。それから数段降りたところで、ふと上を見上げた彼女は、そこに彼女の知らない男の大人の足を発見し、なぜかぞっとした。同い年のニールはここ数年で声が低くなり、がっしりとした体に成長している。

いつになく真面目な顔で二人を見上げていたローリーが、地面まで数段のところでジェニーの腕をとって、降りるのを手伝ってくれた。すぐ後に、ニールが少し上から地面へと飛び降りる。

「行こう」

ローリーは二人を納屋の外へ出るように促し、先に立って歩く。ニールとの気まずい沈黙に耐えられなくなったジェニーは、ローリーに急ぎ追いついて隣に並んだ。ローリーが落ち着かないときによく出る癖――耳に髪をかけてはすぐにそれを戻す仕草――をジェニーは見て、不安になる。

「何があったの、ローリー？」

「……行けばわかる」

納屋の外にはそう広くはない土地が広がり、ジェニーたち家族が保有する数頭の馬や牛、山羊が点々と散らばって餌となる枯れ草や

草を食べていた。冬も近いために気温は低かったが、風がないためにまだ何とか屋外でもいることができる。

牧草地を囲む柵の外側の道を渡ると、手作りの木戸が三人を待ち受けている。その奥には、近所の助けを借りて一家総出で建設した、ジェニーたちの石造りの自宅がある。

居間兼食堂は吹き抜けで、家の真ん中にあるその部屋から続く、台所との境にある階段を上ると、ジェニーやローリーの部屋だ。広くはないものの、両親が率先して建造した、この近辺では変わった造りの家はジェニーたちの自慢だ。一家四人はいつも笑いあい、子どもたちは、就寝するまで居間から動かなかった。

その居間に一歩足を踏み入れたジェニーは、そこに集まる大人たちが醸し出す異様な雰囲気にびっくりした。何かのお祝いで集合した時のような陽気さは、まったく見られない。彼女らの登場に顔をひきつらせて一斉に振り返った人々の表情は、ジェニーにさえも胸騒ぎを起こさせるものだった。

「ジェニー！」

中央のテーブルの角に座っていた母親がジェニーに歩みより、彼女の肩を抱いた。

「どうしたの、ママ？」

母を抱きとめた彼女は、直感で何か重大な出来事が起きたのだと悟った。隣にローリーも来て、二人の肩を抱き、母親をなだめる。

「ねえ、ママ？」

ジェニーの問いかけに彼女は顔を完全にはあげなかったが、ローリーの方へ伏せた目は涙で濡れているように見えた。ローリーは母親の肩に手をやると、強制的につくった笑顔をジェニーに向けて言った。

「おまえは二階に行っておいで。ニール、きみには話があるから、ここに残って」

ジェニーがニールに振り向くと、彼は緊張してこわばった顔で頷いていた。彼にも、室内の冷たい緊張感が伝染していた。

理由もわからずに二階へ追いやられた彼女は、同じ待遇を受けている近所の娘たちと部屋で出会うはめになった。下は五歳から、上は二十二歳までの独身の娘たちだ。彼女と仲のよい友人ララもおり、彼女はジェニーの帰宅を心から喜んでいるようだった。最も幼い女児ですら落ち着かない中で、三軒隣のファビエンヌだけが退屈そうに寝台の端に座って、ミントの枝をかんでいる。

「とうとう、ここにまで来るのかしら……？」

ジェニーの両手を握りしめ、ララが怯えたようにつぶやいた。彼女が何を心配しているかをジェニーも察知し、その手を力強く握り返す。

晩秋の短い太陽の光は早々と落ち、ジェニーは部屋の明かりをつけた。いつまでも室外に出られないせいで、そろそろ夕飯時で空腹となってきた女児がぐずり始め、待機している娘たちの疲労と忍耐も限界に近づいてきていた。親たちの会談が長引いていることも、彼女たちの不安を無駄にあおっていた。ミントの枝を切らしたファビエンヌが、苛立ったように、指をならしている。

ほどなく、階段をあがってくる人の気配があり、直後に部屋の木戸をたたく音がした。来訪者は室内の返事を待たずに扉を開け、ファビエンヌの丸々と太った母親が、ゆっくりと扉の間をすり抜けて入ってきた。彼女の後ろにはジェニーの父親も立っていて、ジェニーと目が合うと優しく微笑んだ。

「みんな、そこに座りなさい」

彼女は大きな体を揺すり、手をたたいて娘たちをその場へ座るように促した。彼女の娘であるファビエンヌは母親の巨体を侮蔑したように見つめ、いちばん遠くの窓際の椅子に腰をかけた。

ファビエンヌの母親は何から話出そうかと考えあぐねているように見えた。彼女は自分の頬に手をあてたままでしばらくうつむき、何度もため息をついた。ジェニーが初めて目にした彼女の沈んだ表情は、なかなか回復することがなかった。

そのうち、ジェニーの父親が背後から彼女に何かを囁くと、彼女はついに意を決したように顔を上げた。まんじりともせずにそれを待っていた娘たちは、彼女の言葉を一言も聞き漏らさないようにと、彼女の顔を注視する。

「――聞いているとは思うけど、ヴィレール軍の侵略の話は知っているわね？」

侵略しているのが“ヴィレール軍”と初めて知ったジェニーは、ゆっくりと息を飲んだ。

「今日、ヴェスト地区が襲撃を受けたの。突然だったわ。皆、逃げようとする余裕もなくて――」

「そんな！　あそこには姉さんが住んでいるのよ！」

ララが悲鳴に似た声をあげると、ファビエンヌの母はうなだれて顔を振った。

「軍はとても非情なのよ。軍に包囲されたヴェストは全集落が焼き討ちにあって、もう、誰も……」

「いやよ、そんなの！」

耳をつんざくほどのララの悲痛な叫び声がした。

床にくずおれた彼女は泣き叫びながら、口惜しそうに床を力任せにたたき始めた。

他のみんなもヴェストには親類や知人がいる。ララの反応と全く同じとはいかないまでも、どの娘も放心状態で、ジェニーも驚きのあまり、口がきけなかった。

「軍はまだ近くに駐留しているにちがいないの。中央の街は小さい地区だけれど、いつ奴らに襲われるか知れたものじゃないわ。事態は一刻を争うのよ。だから、私たちは今後の事を話していたの」

自分の役目を認識しだしたファビエンヌの母は、気力を回復し、雄弁に話を進めだした。

「明日の夜、ここを出発することにしたわ。ここから南下してプラムあたりまで足をのばすの、そこならまだ安全らしいからね。一部の男たちはここに残るけれど、後で合流するわ」

いつも笑ってばかりのファビエンヌの母親は、少しも笑みを見せない。まるでどこか遠くの世界で起きていることのような、現実味を帯びない話に聞こえた。それでも、それが真実だという証拠に、ララが床に崩れ落ちて嗚咽をもらしている。

ジェニーは助けを求め、ファビエンヌの母親の後ろに立つ自分の父に瞳を向けた。娘の視線に気づいた彼は、ジェニーを安心させるように再び微笑み、冗談めかして肩をすくめた。

「今から家に帰ったら、すぐに支度をなさい。荷物は必要最低限に抑えること、わかったわね？　それから、明日は家の外に出ないでなるべく家の中にいるのよ、いいわね？」

彼女の説明をきき、父の笑顔に励まされたジェニーは徐々に正気に戻ってきた。と同時に、ヴィレール軍への激しい怒りで体を支配される。

その怒りのような熱情につき動かされ、ジェニーは床に倒れるララを抱き起こした。

ファビエンヌの母親から事情説明を受けた娘たちは、それぞれの親と一緒にジェニーの家を後にして、夜の闇の中へ消えていった。全員が重苦しい沈黙につつまれ、あの陽気なニールでさえもジェニーにおやすみのキスをせず、父母たちと急ぎ足で去っていった。

家に集まっていた人々が全員帰り、楽しい笑顔などない暗い食卓をジェニーたちは家族で囲んだ。その後、ジェニーとローリーは二階の部屋に上がり、お互いに無言で自分たちの荷物をまとめ始めた。

最低限必要な数の服、薬、剣などの武器。

兄が真剣な顔で剣を何種類も荷物に入れるのを見たジェニーは、それが実用に使われないことを祈るばかりだ。

小さい頃より、一風変わった“生き延びるための”教育を人知れず受けてきた兄妹は、身を守る訓練と、必要ならば攻撃する訓練を父母より受けてきている。一般家庭が保有することのない武器も多種類保有している。その甲斐あってか、ローリーは軍人にも匹敵す

るほどの剣の腕前を身につけている。
妹の切ない表情に気づいたのか、彼はジェニーをじっと見つめ、いきなりジェニーを自分の腕に抱きしめた。服をとおして聞こえる兄の心臓の鼓動が、とても早い。
ジェニーは、震える両手で兄を必死に抱き返した。
階下では、深夜まで両親が荷物の整理に追われていた。用心深い彼らは、外から窓に木枠をはめて明かりが外へ漏れないように配慮し、明かりをしぼった室内で黙々と作業をしていた。今回の理由はやむを得ない理由ではあるものの、今までに何度となく引っ越しをしてきた彼らにとって、荷造りは慣れたもののはずだ。

明日への不安から、兄ローリーと何年かぶりに同じ寝床で眠っていたジェニーは、どうにも寝苦しくて夜中に目を覚ました。隣のローリーは規則的な寝息をたてて眠っていたが、一階では父母がまだ起きている気配がある。寒さに尿意をもよおしたこともあり、彼女は大きな厚手のショールをまとい、部屋をそっと後にした。
部屋を出て階段の手前まで来ると、両親は、作業自体はどうやら終了して、静かに話しこんでいる様子だった。
きっと、二人も今後の不安から眠れないのだ。
そう考えた彼女は、自分も彼らに甘えるために、いそいそと階下へと急いだ。
二人がいるテーブルからは、娘の彼女の降りてくる姿が見えないようだった。母はすすり泣いているらしく、彼女のうつむいている後頭部がジェニーからも見えた。父親の低い声が彼女を励まし、彼女は彼の腕につかまって何とか耐えているようだった。父親は母親の肩を優しく抱き寄せ、そっと肩をたたいている。
「……よりによって、ヴィレール軍なんて！」
ふりしぼるようにほとばしった母の声は半分かすれていて、思わず、ジェニーは階段の上で身を低くして体を隠した。何だか、聞いてはいけない事を聞いてしまったように思えた。

ジェニーは四足で這ったままに階段をのぼり、何も気づかずに安らかな寝息をたてている兄の横に冷たくなった体を滑り込ませた。兄がちょっと体を震わせたが、彼が起きることはなかった。

体が温まっていくのを実感しながら、ジェニーはさっき聞いた母の言葉を反芻した。頭に何か引っ掛かるものがあった。

だが、ジェニーはそれが何かを思いめぐらせてみたものの、心身の疲れからくる眠気には勝てず、答えを見つけられないうちにいつのまにか眠ってしまった。そして、朝起きた頃には家中があわただしくなっており、ジェニーの頭には、昨日の光景も母の言葉も、すっかり記憶からなくなってしまった。

昨夜から夜通しで街の境界地点で見張りをしていた男たちからは、現時点では、何の異常も報告されていなかった。裕福な商工業地帯ヴェストに比べると、中央の街は農家や牧場を営む世帯が多く、比較的、田舎の土地だ。ヴェストや中央の街を含む三地区の統治者を降伏させてしまったかもしれないヴィレール王国にとっては、ジェニーたちの地域は既に襲う価値がない、と判断された可能性もある。しかし、それでも油断はできない。

中央の街の通りは人の往来こそ少なかったものの、各自の家では今夜の逃亡に向けて朝から大忙しのはずだった。朝早くから、父とローリーは小麦を取りに近所まで出かけており、母は納屋で荷物を馬車に積んでいた。ジェニーは家から出ずに室内で料理をするように言われ、パンの生地を大量に練っていた。

何も深く考えられなかったので、ジェニーは自分がどれぐらいの時間を生地作りに割いていたのか、どれだけの量を作りおきしたのか、まったくわかっていなかった。窓も扉も全て閉め切っていたので、家の中はとても暖められており、彼女は暑くなってきて、腕まくりをした。

焼き釜に火をおこし、釜が温まる間に、生地をちぎって釜に入れられる大きさの数個にまとめる。油をひいた鉄板の上に形を整えた

パン生地を置き、釜の奥にそれを押し込んだ。釜に重い鉄製の蓋をした彼女は、次は野菜の下準備をしようと台所の食品入れのところへと歩いていった。

「ジェニー？」

急に後ろから呼びかけられた彼女は、びっくりして振り返った。玄関の戸口に、母親が立っていた。

「ママ？　ああ、驚いた！」

ジェニーは心底ほっとして、大きく息をつく。彼女の母は自分の背後を気にしながら扉をしっかりと閉め、娘に弱々しく微笑んでみせた。

「荷物はもう全部積めたの、ママ？」

「まだよ。だからあなたにもちょっと手伝ってほしいの。納屋に来てくれる？」

「うん。ちょうど今パン生地を入れたばかりだから、しばらく目を離しても大丈夫。手伝うわ」

その日初めて外へ出たジェニーの目には、太陽の光がまぶしかった。外の空気はひんやりとしてはいたが、気温が比較的高く、気持ちのよい陽気の日だ。街中心部から少しはずれた場所に彼女たちの家があるせいで周辺はいつも静かだったが、今日はいつにもまして静けさに包まれ、鳥のさえずりさえ聞こえてこなかった。

二人が納屋に歩いていくと、その姿をみとめた鶏や山羊たちが寄ってきた。彼らは世の中の不穏な状況など知らず、いつもとかわらず元気そうだ。

ジェニーの前で母は納屋の扉をいっぱいに開け、娘を招き入れた。

「そこに置いてある荷物を荷台にのせたら、縄できっちり縛っておいてちょうだい。ママは今から、裏でちょっとやりたい作業があるの」

「裏で？　何するの、ママ？　私も手伝うわよ」

「いいのよ、あなたはこっちをやってちょうだい。終わったらまた

ここに戻って来るわ」

「これはすぐに終わっちゃうわよ、ママ。私の方が裏にまわるわ」

「いいの、ジェニー。作業が済んだら、ママがこっちに迎えに来るから。それまでここに居るのよ。いい？　わかったわね？　ここで待っていてね？」

納得はいかなかったが、母親の優しくも厳しい口調には従うほかない。

頷いたジェニーを見て母親は娘の頬にキスをすると、再度、すぐに戻る、と念を押した。

納屋から出た母親が、外から大きな扉を閉める。上方の小さな搬出口から入る光が納屋の中に明るい光を差し込んでくれたが、ジェニーは闇の中に一人で取り残された気がした。ジェニーは、大きなため息をついた。

母の頼みどおりに荷台の荷物を縄でしっかりと固定し、干草置き場の、柔らかで暖かい干草にうもれてうとうととしていたジェニーは、顔に当たる光線に眩しさを覚えて目覚めた。時間がたち、太陽の位置が移動して、光の差し込む方向がずれてきたのだ。

ジェニーは母親たちがまだ戻ってこないことに一抹の不安を覚え、はしごを使って下へと降りた。荷台は彼女が眠る前に見たのと同じ状態で、誰もここには来ていないのがわかる。

……おかしい。

ジェニーは不思議に思い、納屋から出ないようにとの母の言いつけに背き、出口の扉を押し開けようとした。が、なんと、扉が開かない。

見知らぬ誰かが納屋内にいる彼女の存在を知らずに、外から鍵を閉める可能性は少ない。そもそも、こんな日に訪問者があるとも思えない。だとすれば、ジェニーの母親が、彼女を納屋に残して出て行く際に閉めていった、と考えるしかない。

でも、何のために？

彼女の不安は、大きな胸騒ぎへと変わっていく。

内側から体当たりして扉を壊すことも考えたが、大きな音をたてたくなかったジェニーは、その方法を選択するのをやめた。

「どうすればいい？」

ジェニーは納屋の中を見渡して考えた。

そして、さっきまでうたた寝していた干草置き場まで登って戻ると、干草の搬入口からそっと外をうかがった。その出入口から、外へ脱出しようと考えたのだ。

納屋の外は相変わらず静けさに包まれており、のどかな牧草地帯が遠くまで広がっているだけだった。さっきまで納屋のすぐ近くで餌を食べていた山羊たちが、牧草地の遠くの方へいつのまにか移動しており、小さな白い点のように見えていた。彼女が見る限り、道にもどこにも人通りはなかった。

周囲に異常がないのを確認したジェニーは、一階にかかるはしごを引き上げて搬入口の外へ掛けようとしたが、ハシゴの重量があまりに重くて、早々とあきらめた。代用になる何かを求め、彼女は干草の山を見渡すが、そこにはスキが転がっているだけ。

ジェニーは困って息をついたが、突然、階下の荷物の存在を思い出し、再び、さっき上がってきたはしごを急いで降りていく。目指すは、荷物を縛った丈夫な太い縄だ。それを使えば、搬入口から外へ降りられる。

取ってきた縄を梁にしっかりと固定し終わった時、彼女はかすかな異臭が鼻につくのを感じた。何かは判断できなかったが、香ばしいような臭い。

「……あっ！　パンが焦げてるんだわ！」

母を手伝おうと納屋に来る前にパン生地を釜にかけたままだった。ジェニーはあわてて縄を外に向かって投げた。

自宅が火事になってしまう前に、急いで火を止めなきゃ！

再度、出入口から顔を出して辺りに人がいないことを確かめた彼女は、縄との摩擦で手が傷つかないように服の袖口を手のひらにま

で伸ばして自分の手を保護しながら、壁づたいに外の地面へと注意して降りた。

牧草地に面した南側から納屋をまわり、家のある方角である反対の北側へと移動した彼女は、そこで初めて、異臭の正体を思い知らされた。自宅からは焦げた臭いすらせず、煙すら出ていない。なのに、自宅の向こうの空には黒煙がもうもうとあがっている。それも、一つではなく、複数の違う箇所から何筋も見える。

それは自然発生したのではなく、あきらかに人工的に手を加えられた結果だ。彼女が考えられる唯一の発生原因は、ヴィレール軍の襲撃だった。

あまりの急展開に、彼女は呆然として、空高くのぼっていく煙の流れをただ見つめる。

「まさか……ママは、わかっていて私を閉じ込めて行ったの……？」

自宅は街の中心より少し離れているせいで、ここに残っていれば被害からは逃れやすい。

けれど、次の瞬間、彼女は思わず、黒煙の上がる方角に向かって走り出していた。

第一部　1．遭遇－2

中央の街は見るも無残な姿をさらしていた。とある門らしき前にばら撒かれたように残っていた野菜が、軍の急襲を物語っている。

ヴィレール軍兵士の姿はどこにも見えなかったが、ジェニーの目にするもの全てが炎に侵食されてしまった後だった。勢いよく立ちのぼる炎もあれば、焼き尽くす物を失ってくすぶっているだけの灰煙もある。彼女の行く手を、黒こげとなった、生物か建造物かもわからない物体が邪魔をする。焼けつくされて炭化した家々は、もはや誰の所有物だったかもわかりえない。

ジェニーは物陰から物陰へと身を移し、煙を吸い込まないように服で鼻と口をおおって、家族たちが訪問していたはずのモンタン家の方向へ向かって、ただ走った。だが、それが本当に正しい方向へ向かっているのか、目印がなくなってしまった今は、定かではない。

さらに街の中心部に近づくにつれ、彼女の肌に触れる外気は、顔が焼けるのではないかと思えるほどの熱気となってきた。動物はおろか、生きて動いている人間には、敵・味方ともに出くわさない。

その中で、ララの家がまだ燃えずに原型をとどめているのを発見して狂喜し、ジェニーは急いでそこへ近づいた。が、家の前まで来た彼女は思わず目をぎゅっと固く閉じた。

「ひっ……！」

心臓がわしづかみにされ、息が止まりそうな気がした。

ララの家の戸口には、首のない死体が、恐らく、それによって殺されたのであろう剣によって突き立てられていた。その鈍い銀色の剣からは、まだ赤黒い血がしたたり落ちている。

「なんて酷い……！」

血がまだ乾いていないのは、その人間を殺した相手が近くにうろついているということだ。

ジェニーは急に自分の身の危険を顧みて、あたりをさっと見回し

た。それから、息を殺し、庭の木の茂みに身を隠す。
首のない死体は、幸か不幸か、彼女の見知った服を着てはいなかった。だが、それを見たジェニーはますます、家族を見つけ出さねば、と強く感じる。その思いだけが彼女をつきあげ、煙の中へとまた舞い戻す。
軍の所有らしき矢が家の屋根や扉に点々と突き刺さっており、いくつもの馬蹄や轍の跡が道に交差していた。瓦礫となった家の周りに何体の死体が転がっていたことかわからない。こみ上げてくる涙を拭いながら、ジェニーはただただ、目的地へと突き進んだ。

ジェニーは家が燃える音に混じって人々の泣き叫ぶ声を聞いた。
まだ生きている人たちがいる！　きっと、ママもパパもローリーも皆、生きている！
女たちの声も混じっていたので、家族の生存に希望を持ち、モンタン家をめがけて炎の中を駆け抜けた。そして、ようやく炎をまぬがれているモンタン家を目にした時、ジェニーは大声で天に感謝した。
ジェニーが泣きながら戸口に駆け寄ろうとすると、その戸口から二人の若い男が絡みあうようにして、剣をかち合わせて飛び出してきた。そのうちの一人は兄ローリーだ。もう一人は、その武装からしてヴィレール軍の一人らしかったが、彼女が今までに見たこともないような白く輝く髪がとても印象的な、兄と同年代の若い男だった。彼らは一歩も譲らず、冷たい金属音をひびかせてモンタン家の戸口前で競い合っている。
「へぇ、女じゃないか」
そのとき、彼女の背後から低い男の声が聞こえた。はっとして振り返ると、ローリーと交剣している男と同じ武装をした、むくつけき男が二人、ジェニーを見下ろしていた。
にやついた男のうち一人が、ジェニーを上から下まで眺めまわした。とっさに後ずさって逃げようとしたジェニーは、しかし、二人

に挟みうちにされて、あっけなく捕まってしまう。
「……放してよ！」
「まだ若いじゃないか、ええ？」
兵に顎をつかまれ、それを逃れようと顔をそむけたジェニーは、その先でローリーの右肩に、白い髪の男の剣が振りおろされる瞬間を目撃してしまった。
「ローリー！」
ローリーの体からは吹き上げるように血が飛び、彼は一気にバランスをくずして尻餅をついた。そして、右肩を地面につけるように彼は後ろ向きに倒れると、自分の聞き覚えのある声を探して顔も後ろへ倒した。ローリーはジェニーの顔を判別し、唇を震わせて妹に何かを伝えようとしているようだった。
「嫌よ、ローリー！！」
ジェニーは泣き叫んだ。悲鳴をあげ、彼女を捕らえて引きずっていこうとする兵士二人に必死で抵抗した。彼らから逃れようと体をねじって暴れたが、男二人の手には何の痛手も与えていないように思えた。
「ローリー！」
ローリーを……ローリーを助け出さなければ……！
血にまみれた剣を手にした白い髪の男が、最後の一撃を倒れた男ローリーに向けて振り上げたそのとき、どこからかひっ迫した男の声が飛び、彼はその場からばっと飛びのいた。
その直後、黒焦げとなった家屋の一部がローリーの上に大きな音をたてて落下し、土埃と地響きをたてて彼の体をあっという間に埋め尽くした。ジェニーは、喉の奥から声を振り絞るようにして絶叫した。
そのときになって初めてジェニーの存在に気づき、ゴーティスは彼女を見た。ゴーティスの注意に気づき、彼女が憎悪を込めた瞳で彼を見返したが、彼はあっさりと無視した。いくつもの戦場をくぐ

り抜けてきた彼には、憎しみの目を向けられるなど、ごく見慣れた光景だ。

血を少しでも落とそうと剣を地面に向けて振り、ゴーティスはローリーの埋まる瓦礫の山を見た。

どこかで見たような顔だが思い出せない。こんな片田舎にいるにしては驚くほどの、自分と互角に戦えるだけの剣の腕だった。殺さねばならなかったのが、非常に惜しい男だった。

そのゴーティスを瓦礫となった落下物から救った声の主が、煙の中から姿を現した。その男はいつでもどこでも、主人であるゴーティスを常に見ている、彼の腹心だ。

兵士二人は、腕に捕らえている女にどうやらてこずっているようだった。

煙と土埃で汚れた、まだ少女のようにも見える、哀れな娘。

「放して！　あの人を……あの人を、殺してやる！！」

その言葉も、今までの戦場で何度も聞いて、聞き飽きた台詞だ。負けさった者たちの持つ憎悪や悲しみなど、同感できない。

ゴーティスは、近づいてくる自分の部下の姿に目をやっていた。

「やめて、放してったら！　絶対に許さない！　ローリーをよくも……！」

彼女のうらみがましい言葉を聞き、ゴーティスはつい、くすくすと笑い出してしまった。

この娘を捕らえる兵士たちの忍耐は無いに等しい、彼女の命も短かかろうに。

一方、ゴーティスのせせら笑いを聞いて、彼女はますます怒り狂ったようだった。体中で彼への怒りを示し、彼女は男たちの中で暴れ、もがいていた。

それは、ほんの一瞬のすきをついての出来事だった。

ジェニーは自分の左隣にいた男の腰から剣を引き抜き、あざやかに男の腕に下から上へと振り抜いて細長い傷をつけた。そして、そ

の彼がケガでひるんだ合間に、反対側の男の手の甲に剣を突き立ててやった。
「あうっ！？」
兵士たちの呻き声に、ローリーを負傷させた男が振り向いた。彼は驚いたように目を見開き、そして、視線を彼女の上で止めた。彼の危険を察したらしい別の男が、急いで走り寄ってくる。
負傷した兵士たちが彼女を睨みつけ、ふらふらと立ち上がろうとする。片方の兵の腕からは血が筋をなして流れ落ち始めていた。
「お、おのれ、この娘……！」
「近づかないで！　もう一度切られたいの！？」
「なにを言うか、この女！」
兵士たち二人が地面から飛びかかる態勢でいたが、そこへ、兵士に向かってあらぬ方向から声が飛んだ。
「待て！　手を出すな！」
ジェニーでさえ、一瞬、兄の仇が発したその言葉に注意を向けた。
「されど、王！」
……“王”？
ジェニーは唇を噛み締め、瞳を王と呼ばれた男へ向けた。彼女の視線を受けると、彼が満足そうにほくそ笑む。
「娘には手を出すな。俺の命令だ」
彼はぞっとするほどの冷笑を見せ、兵士たちを視線で黙らせた。その隣には王の直属の部下と思われる男がやって来ており、ジェニーにいつでも飛びかかれるよう、剣を手に、主人を傍から擁護する態度を見せていた。
だが彼は、その男でさえも引き下がらせ、ジェニーに視線を返した。そして、唇の右端をかすかに上げて笑った。
「そやつに切りつけるとは、大したものだな」
ゴーティスはジェニーに近づいていった。ジェニーは兵士たちにも注意を向けつつ、彼の接近に備えてか、剣の柄をしっかりと握り

直している。
「……あなただったら、斬り殺してやったものを」
「ほう？」
ジェニーの答えを聞いた彼は、舌なめずりをして彼女を見た。顔は埃などで汚れているが、大きな明るい茶色の瞳からは強い精気が放たれている。彼女は、ゴーティスから少しも視線をそらそうとはしなかった。それも、彼の、気に入った。
彼女を押さえ込もうかとゴーティスと彼女を見比べていた兵士たちが、彼の制止命令にも関わらず、彼女の下の方でもぞもぞと動き出している。ゴーティスは苛立ち、後ろで待機している部下を呼びつけて言った。
「こやつらを連れていけ、サンジェルマン！　さっさと隊へ戻せ！」
彼の部下は一瞬だけ迷う表情を見せたものの、ちらっと兵士二名に目をやり、王の命令を遂行するために近づいてくる。ところが、それに焦った彼らのうち一人が、地面に腰を落とした状態のまま、見苦しくも彼に反論を試みた。
「おお、お待ちください、王！　王をここにお一人で残せますまい！　どうか、私にこの娘の始末を！　先刻は小娘だと思ってつい油断いたしましたが、私がきっちりとこの娘を処分いたしますゆえ……！」
男は苦々しげにジェニーを振り返って、ゴーティスに訴え出た。ジェニーが歯を食いしばって兵士と彼の出方に視線を走らせ、緊張感を全身に漂わせている。その兵士の言葉で、ゴーティスの頭が、一気に冷めていく。
「“油断”だと？　小娘に傷を負わされるほどの、油断？」
ゴーティスの顎が小さく痙攣した。彼のあげた皮肉な笑みがいやみな乾いた声へと変化していく。
額をおさえていた王が、数秒の沈黙の後、その兵士に視線を移した。だが、その目はまるで、兵士を突き通して別の何かを見つめているかのような、遠い目。

少しして王が顔をあげ、その兵士を見た。
「おまえはどこの隊の所属だ？　名は何だ？」
その彼の一声で兵士たちの顔が引きつって呆然となる。ジェニーは彼らのその反応にあやしんで、彼の冷たく光る目を見た。
「王、あの……」
「名を言え」
有無をいわさぬ彼の口調に兵士二人ともが口をつぐんだ。王と呼ばれる男に、彼らは相当な恐怖を抱いているようだった。
「十六隊、レフィリオルです」
観念したように、兵士がつぶやく。王はにこりともせずに言った。
「レフィリオル。ようわかった。覚えておこうぞ」

王の部下がジェニーたちに近づいてきた。ジェニーは最大限の警戒心をもってその男の動向を注視していたが、彼は彼女の剣の存在など目に入らないかのように、彼女の視線を無視していた。かといって、攻撃をやすやすと受けるほどの隙は決して見せていない。ジェニーは下手に動けない。
彼は、ジェニーの脇で力なく地面に腰を落としている男たちに手を貸して起こした。同情するほどに彼らは意気消沈しており、男が二人の体を抱えるようにして、彼女の前から去って行く。ジェニーの数歩前にいる王も、それをずっと見つめていた。
――ゴーティス王が初めて背を向けた絶好の機会を、ジェニーはみすみす逃しはしなかった。彼女はずっと隙をねらい、この時を待っていたのだ。
ジェニーは手にした剣を握り直して息を止め、憎き敵の後頭部をめがけて鋭い剣先を振った。
やった、と思わせる手ごたえを感じる瞬間はなく、ジェニーの剣は大きくかぶりを振った。そして、肘までしびれさせる、金属の手ごたえ。
何と、王はジェニーに背を向けた状態で自分の体を沈めて剣をよ

けたかと思うと、後ろを振り向くこともなく、後ろ手に、自分の頭ごしに彼女の剣を受けていた。

金属音に注意をひかれて振り返った彼の部下や兵士たちが、急展開に息をのんだだろうその瞬間、王は、受けたジェニーの剣を彼女がこめる力を利用してはねのけた。本当にあっという間に、ジェニーの鼻先には彼の剣のきっ先が突きつけられていた。ジェニーが兵士から奪った剣は、彼の背後にすっ飛んでしまっていた。

彼女は信じられないといった表情で、剣の持ち手であるゴーティスを見つめ返していた。

「俺に剣を向けるとは！」

彼女の手首はまだしびれているようで、手は剣の柄を握ったままの形をしていた。

「おまえごときが俺に勝てるわけがなかろう！！」

ゴーティスが悠然と彼女を見返すと、彼女は静かな怒りを込めて彼の目をまっすぐ見返した。まるで、剣先など目に入っていないかのようだ。その彼女の反応に気をよくしたゴーティスは、また、笑みが口に浮かんでくるのを感じた。

自分と剣を交わしたあの青年と同じ髪の色、よく似た顔立ち。くもりのない、純粋な目。剣技にたけたあの男の妹だとしたら、彼女が剣を使うことにもある程度の説明がつく。顔立ちは、悪くはない。

しげしげと彼女の顔を眺めたゴーティスは、剣先を彼女の顔の前から降ろした。

「娘、名は何という？」

警戒した彼女は口を結び、彼に口をきくのを拒んでいるかのようだった。

灰で汚れた彼女の顔を拭おうとしたゴーティスの手は、彼女の手によって、無造作に払いのけられた。拒まれたその手を見つめ、ゴーティスは久しぶりに無礼な対応をされたことに、何となく可笑しくなる。

「おまえを取って食う気はない。名を教えよ、娘」
「あなたに名を教えるくらいなら、死んだ方がましだわ」
彼女はひるむ様子を見せない。命乞いをする敵方の人々と比べると、ずいぶんと肝の据わった少女だ。
ゴーティスは剣を振り上げもしなければ、娘を殴ろうとも思わなかった。いつもだったらそうしていただろうが、暴力が彼女に効果的に働くとは思えなかった。そのかわり、ゴーティスは含み笑いをし、彼女にゆっくりと告げた。
「……そうか、ようわかった。おまえには俺のもとで生きる機会を与えようと思うていたのだが……それが叶わず、残念だ。では、おまえには望みどおりに死を与えてやろう」
彼女が恐怖を見せることは、まったくなかった。それも、ゴーティスの予想範囲内のこと。
「ただし、その前に、おまえの兄の首がなくなるのをとくと見ておくがよいぞ?」
「なん……ですって?」
ゴーティスは、それまで勢いづいていた彼女の顔から一斉に血が引くのを見て、にやっと笑った。
首がない遺体は天上にも地獄にも行けず、死んだ後もずっとあてもなく地上を彷徨う、と、どこの土地の人々にも昔から信じられている。だからこそ、死んだ後もなお永遠の苦しみを味わってもらうために、戦では、憎い敵の首をとる習慣がある。
ゴーティスがローリーの埋もれた瓦礫に視線をちらりと走らせると、彼女が口惜しさに唇を震わせた。彼女には、ゴーティスが、そんな卑劣なマネを簡単にやってのける種類の人間だとわかっているのだろう。
そんな彼女の様子をつぶさに見ていたゴーティスは、声を低くして、もう一度彼女に質問した。
「名を言うか、娘?」
手で彼女の顎をつかみ、ゴーティスは無理やりに自分の方へと顔

を向けさせた。彼女は怒りと口惜しさのあまり、ゴーティスを激しく見つめるその目の端に、涙を溜めている。

「おまえの名は？」

「……ジェニー」

瞬きした彼女の瞳から涙がこぼれ、その消え入るような声に彼は満悦した。

「それでよい、ジェニー」

涙を流しながらも、彼女の視線はゴーティスからそれなかった。どこまでも、気の強い娘だった。

連行しようとしていた兵士たちを途中に残し、王の部下サンジェルマンは、主人のそばに近づいてきた。彼は主人の意図をはかりかねてジェニーを見、そして、涼やかな声で言った。

「王、ここは危のうございます。早く退散いたしましょう」

「わかっておる」

そして、王はジェニーの腕を引っ張って彼の方へと引き寄せた。

「この娘を城へ連れ行くぞ、サンジェルマン」

サンジェルマンは彼女に警戒心を持った。無言で涙を流している彼女は心身ともにぐったりしているように見えたが、剣の使い手ともなれば、主人の身が心配だ。サンジェルマンは瞬時に対応策を考え、腰にかけてあった鞭に手を伸ばした。

「それは構いませんが……」

歯切れの悪い彼の口調にゴーティス王が眉をひそめたが、次に彼が鞭を取り出した時に全てを理解したらしく、唇の端を微かに上げてみせた。

「念のために娘の両手を結わえます。いつ、剣を手にする機会を得るかもしれません」

ゴーティス王は、彼に快くそれを許可した。

二人の前にまわったサンジェルマンは、ジェニーの両手を王から譲り受けた。その場で細い鞭を宙でしならせて鳴らし、嫌がる彼女

の両手首にぐるぐると巻きつける。彼女は右へ左へと暴れたが、ゴーティス王は、サンジェルマンが何とか彼女に対応するその様子を興味深そうに見ている。

「動けば動くほど手首に食い込むぞ。無駄な抵抗はしないことだ」

娘は無言ながら、サンジェルマンに向けた瞳には精一杯の反発心が含まれていた。

「俺だとてそのような乱暴な事はしたくないが、おまえは手くせが悪いゆえ、仕方ないのだ、ジェニー」

ジェニーを引きずるように王の前へ差し出すと、王が不敵な笑みを彼女に投げかけた。彼女は興奮しており、縛られた両手をはずそうともがいている。

「おとなしくしておれ」

「いっそ、殺してよ……！」

「ふん、ほざくがいい。おまえは俺の捕虜だ、俺の好きなようにする」

「そんなことはさせないわ！　あなたの自由になんか！　あなたの意のままになんか、ならない……！」

突然、ゴーティス王の左手がジェニーの首にのびて、それをつかんだ。サンジェルマンは、度重なる彼女の無礼な行動がついに王の逆鱗に触れたと思い、彼女の死を予感して誰もが一瞬、目をそらした。が、それは、いきなりあげられたゴーティス王の高らかな笑い声によって中断された。

「おお、よう言うた！　それでこそ俺の捕虜だ、ますます気に入った！」

皆の予想に反し、王は上機嫌で顔を輝かせていた。向かいの彼女は、ゴーティス王に首をしめられて窒息しそうになりながらも、一秒たりとも彼から目をそらさずに睨み続けている。

彼女が苦痛にさらに顔をゆがめた時、彼はやっと気が済んだというように、彼女の首から手を離した。彼女は空気を求めて思い切り大きく息を吸い込み、同時に煙や灰を吸い込んで、激しくむせた。

「こやつを俺の幌の中へ放り込んでおけ。道中の良い退屈しのぎとなりそうだ」
「いや、よ……私どこにも……」
だが、王はただ笑い、彼女をサンジェルマンの手に委ねるとさっさと背を向けてしまった。

彼女は全身全霊でサンジェルマンに抵抗していた。両手の自由を奪われてもなお体全体で暴れて彼らに従おうとしない彼女に手を焼き、サンジェルマンは前方を歩く主人を呼び止めた。
「王、少し手荒にしても構いませんか？」
主人の男はその問いに振り向き、彼女に手こずる彼を面白そうに眺め、言った。
「好きにしろ」
ゴーティス王がまた前に振り向いた時、サンジェルマンは娘のみぞおちを拳で殴った。唸るような小さな声がくぐもって聞こえ、彼女は彼の腕に力なく落ちる。それから次に王がサンジェルマンに振り返った時には、サンジェルマンは彼女を抱き上げようとしている最中だった。
「俺が行くまで幌に閉じ込めておけ」
「御意」
ジェニーを腕に抱いたサンジェルマンは、今後の彼女の身にふりかかる悲運を思って、気の毒にも感じた。多分、まだ十代半ばの少女だろう。
そのあどけない、幼さの残る彼女の顔をまじまじと見つめると、戦乱の世に生まれたこと自体が不運にも感じられる。とはいえ、女でなくとも、不平等で理不尽な出来事は山ほどある。戦での被害者は常に、力のない弱者と決まっている。
「サンジェルマン、娘が気づく前に、隠し持っている短剣を取り上げておけ。左のわき腹あたりにある」
「……はっ？」

一見しただけでは短剣の存在など全くわからない。

彼女を一度地面に降ろし、服の上から手探りで短剣の位置を確かめたサンジェルマンは、主人の指摘どおりに脇腹の下あたりに、何か、固い感触を見つけた。サンジェルマンは王の観察眼にあらためて感銘を受け、彼女の体を素早く探る。

彼女の服の下から出てきたのは、紋章入りの、身分不相応なほどに立派な鞘に入った、よく手入れされた古い短剣だった。それを違和感とともに見つめ、自分の腰にそれをしまいこむ。後に一度その出所を探ってみようと思いながら。

負傷した兵士たちはお互いの肩を支えあいながら、仲間の待つ場所へと歩いていっている。ゴーティス王は顎をあげ、たちあがる煙をものともせず、その前を進んでいく。

王が今までの戦場で見つけてきた豊満な美女とは正反対の娘を城へあげることで、どういった予期せぬ状況が起こるのだろう。

サンジェルマンは、これから何か一波乱起きそうな、妙な胸騒ぎがしていた。

第一部　1．遭遇－3

薄暗い白い天井、まるで遊牧民が使う移動式住居の天井が、目覚めたジェニーの視界に入った最初の物体だった。意識も視界もぼんやりとして焦点が定まらなかったが、目だけで天井の曲線に沿って下へ追っていくと、自分の横に不鮮明な物の輪郭が見えてきた。体は動かさずにじっと目を凝らしていると、それは段々と人間の形をとり、同時に彼女も正気に戻っていった。

「気分はどうだ、娘？」

見覚えのある青い瞳と典型的な北ユーロ人の特徴をみとめ、彼女ははっと目覚めた。瞬時に全ての記憶が蘇えり、両手の痛みの感覚も戻ってくる。

「煙を吸って喉が痛いだろう？　水を持ってきたから、飲むがいい」

敵側からの施しなど何も受けるものか！

彼女はその意志をとおして、彼の言葉を無視した。ただ、この類の強情さを主人のゴーティス王で慣れている彼にとっては一向に困るものではなかったが。

彼女は見える範囲内の物を全部見渡し、ここがあの王とかいう男の幌の中だと推測した。自分の体の下にある寝台にひかれた分厚く柔らかい毛皮の敷物、小さなテーブルにかかる異国風の緑のクロス、細かい造作をほどこした鎧。ここは、彼女のいた世界とは全くの別世界だ。

心身ともに疲労困憊していたとはいえ、敵の陣地でこんこんと眠り込んでしまった自分に、彼女は情けないやら、腹立だしいやら。

一方、彼女に気が済むまで周囲を見させておいた彼は、この強情な娘をどう対処しようかと機会をねらっていた。主人の道中を慰めるぐらいの間は、せめて生き延びてもらわないと。

「他に入用なものはないか？　食物か何か？」

「……じゃあ、あなたの主人の命を」

やっと口をきいたと思ったらそんな物騒な言葉だ。サンジェルマンは、怒りよりもあきれる気持ちになる。まったく、自分の置かれた立場をのみこめない、なんと向こう見ずな娘。

彼女はそのまま彼に背を向け、彼との接触への拒否を体で表した。彼女の背中を見つめ、彼は小さく息をつく。あの灰が舞い散る戦場にいた彼女には、水が何よりも必要なはず。彼にはよくわかっていた。

「水はここへ置いておく。これは兵士の分を取り上げて持ってきた水だ、もしいらぬならば、後で兵士に返さねばならぬが、構わないだろうな？　ちなみに、今度水が手に入るのは明日の昼以降だ」

彼女のうつむいていた顔がちょっと動いたが、彼女は言葉を発しなかった。彼から身を隠したいかのようにさらに自分の体を小さく丸め、軍の施しを拒否する姿勢を止めない。

なんという、強情な子。

とりつくしまのない娘にサンジェルマンは仕方なく退散することとし、彼女の横から腰をあげた。ゴツゴツと重い靴音をたてて馬車内を歩き、入口の垂れ幕をめくりあげる。そこから差し込む眩しいオレンジ色の夕日に、彼は顔をしかめた。

サンジェルマンが去ってそれほど経たないうちに、今度は勢いよく入口の幌がばっとめくり上げられた。ジェニーが愕いて振り返ったそこに現れたのは、見知らぬ兵たち二人で、ほのかな光を放つ明かりと鎧をそれぞれ持っていた。

彼らは彼女に気づいても何も言わず、関心さえ示さないような素振りで中に入ってきた。一人は、右隅にある異国調のクロスがかけられた台に明かりを置き、別の一人は出入り口横に持ってきた鎧をそっと降ろした。彼は軽々とそれを持っていたが、床に置かれた時にはかなり重そうな音をたてた。

用事を終えた二人は、彼女の存在など全く気にかけず、そそくさとその場を後にした。めくれた幌の向こうに見えたのは、すでに日

の落ちた闇の世界だ。幌のすぐ外には男が後ろ向きに立っており、主人の留守中にジェニーが逃げないようにと見張る、あの王の部下だとすぐに確認できた。彼女の耳に、大勢の男たちの騒がしい笑い声や陽気にしゃべる声がはっきりと入ってきた。

今日一日で起こった数々の出来事が、次から次へと思い出される。母に納屋へ閉じ込められたこと。燃え盛る家々、住民を追い掛け回す兵士の姿。風になびく美しい髪を持ったゴーティス王が自分を見て笑う光景。

知らず知らずのうちに、彼女は涙を流していた。

兄ローリーの最期を見たわけではない。

でも、あんな重傷を負わされた上に瓦礫の下敷きになったのでは、彼の生存の望みは薄い。それに街中が燃え、あちこちに兵士がまだ残っていた。残った力を振り絞って兄が瓦礫の下から這い出しても、その傷を負った身でどこまで逃げられるのか。

兄が地面に腰を落とす光景を思い出しては胸を貫かれる思いがし、そして、城へと連行される自分の身を思うと激しく混乱してしまう。今のジェニーには、何をどうしたらよいのか、わからない。

しばらくして幌の前に姿を現した主人に、サンジェルマンは中のジェニーの様子を簡単に説明した。あいかわらず手首を拘束していること、食物や水を受け取ろうとしないこと、疲れて眠っているのが多いこと。

ゴーティス王が幌内に入ると、捕らえた娘が寝台の上で体を横たえている姿がうす明かりに浮かび上がった。彼は幌の奥まで歩くと、明かりの炎を大きくして室内をもっと明るくさせた。サンジェルマンが与えたという並々とあったはずの水の器は、半分ほどの水に減っている。喉の渇きに耐え切れず、彼女が飲んだのだろう。彼女の手を固定しているサンジェルマンの鞭は、気の毒なほどに彼女の手にくいこみ、赤黒い痕をつけていた。

彼がそうして彼女を見下ろしていると、ほどなく、彼女が眠りか

ら目を覚ました。
「やっとお目覚めか、ジェニー」
彼女は見たくないものから目をそらすかのように天井を仰ぎ、だが、思いなおして彼をむっとして睨み返した。彼は、彼女のとる態度に感心に近い思いを抱き、そして笑い出した。
「まだそのような態度をとるとは、おまえも大したものよ。俺はヴィレール王であり、おまえはヴィレールとの戦に負けた土地の民だというのに、いまだ自分の立場をよく理解しておらぬようだな」
「あなたのやったのは、奇襲して略奪しただけじゃない。戦なんてしていないわ」
「ほう？　側近でも俺に遠慮して言わぬ言葉を、よくもそう簡単に抜かしおること」
彼女は今も目をそらさない。
「……つくづく面白い娘だ、おまえは。だがな？　おまえの土地が征服されたという意味では、戦であってもなくてもどちらでも同じこと。おまえは賢いようだ、その意味がわかろうな？」
ゴーティス王は彼女の目の前でそう言い吐き、身をひるがえした。その反動で彼が身につけていたマントが彼女の頭にぶつかったが、彼女はそれをよけもしなかった。

身につけていた鎧をはずした彼は、ひとまわりほど体格が小さく見えた。兵士の一人が室内に持ち込んだ鎧はかなりの重量がありそうで、それを装着していてもなお、彼女の背後からの攻撃に敏速に対応した彼の技量と敏捷さ、優れた勘は想像を絶する。見れば、彼が今脱いでいる靴も頑丈で分厚く、それ相等の重量がありそうだった。マントの下から現れた腕はきちんと鍛錬を積んだ筋肉でひきしまっており、服の下に隠しきれない体もしっかりと鍛え上げられていた。彼女はあらためて、彼女が対抗しなければならない敵の強さを痛感した。
印象的な長い真っ直ぐな銀色ともいえる髪、かすかにのびる金色

の無精ひげ、筋骨たくましい厚い肩。ついさっき彼女に向けられた瞳は、見たこともないほど濃いきらめく緑色だった。

多分、彼のような類の男は世の中では美しいとされるのだろうが、憎悪こそ感じても、それ以外に彼女の心に何も響くものはなかった。

ジェニーはたしかに敵を隅々まで観察してはいたが、それは決して男性としての彼を見ていたのではない。

靴を脱ぎ捨てるのに成功した彼が、彼女に振り返って言った。

「……その鞭はそろそろ取ってやろう」

ジェニーは怪訝に想って彼を見たが、自由になりたかった彼女は、彼が鞭をゆるめるままにさせた。手首には赤黒い鞭の痕がついたが、特に傷にはなっていなかった。彼女の指の先端にまで血がかよい、重く冷たかった両手が軽くなっていく。

手が自由になった彼女は自分の前に立つ彼を見た。彼も、彼女をじっと見下ろしている。

外敵から護るように馬車で円陣を作り、野営の支度を整え終わった部隊は、円陣の中側で仲間が作った食事をとり、談笑していた。疲れのあまりか、その絶え間ない喧騒の中で眠りこけている兵士もいる一方で、捕虜の娘たちを無理やりに自分たちの幌の中に放り込んで、交代で彼女たちの体をもてあそび、楽しんでいる者たちもいる。

しばらくして、王の幌のすぐ外で待機しているサンジェルマンの耳に、女の短い悲鳴が聞こえてきた。馬車の内側からだ。近くで護衛しているほかの兵にもその声は届いたはずだが、皆、王を怖れるあまりに一様に知らん振りを決め込んでいる。そしてその後、王のどなり声と何かがぶつかるような音が。

サンジェルマンは幌の中にいる王が心配で馬車に振り返ったが、もう少し時間を置いた後に中の様子を確かめてみることに決めた。

どうせ、王に反抗した娘が剣で切られたか、殴られたか、蹴られたか……。日常的によくあることで、そう驚きはしない。

サンジェルマンは円陣の中央に振り返った。焚かれた火を囲み、兵士たちが何やら盛り上がっている。戦の後だというのに、いや、後だからと言うべきか、若い男たちが多数を占める兵士たちの熱気や興奮は治まらない。

王の幌から音は聞こえなかった。サンジェルマンは、幌の中の王に静かに声をかけた。

「王、特に何か入用はございませんか？」

そう言って、彼は主人の返事を待った。返事を急がせる素振りもせず、余計な刺激を与えぬように、王の答えを辛抱強く待つのが重要だ。すると、一呼吸置いて、中から静かな低い声が返ってきた。

「いらぬ。俺はこのまま眠る。明日の朝、出発する前に起こせ」

「承知いたしました」

王の返事の意味するところは、彼らが始末しなければならない死体は幌の中にはなく、掃除しなければならないほどに血は流れていない、ということだ。つまり、何かちょっとした不運な“行き違い”が王と娘の間に発生したのだろうが、王は娘を殺してはおらず、彼女も大きなケガはせずに無事で生きているということだ。

王の返答にほっとした彼は、脇で状況を見守っていた護衛兵に無言で頷いて、心配ない旨を伝える。彼らも表情を変えはしなかったが、彼の返答を聞いた後は、明らかに緊張がほどけていった。

ゴーティス王が遠征先で愛人にする女を見つけ、連行する場合は何度となくあった。しかし、彼に反抗する女たちは皆無だったため、彼女たちの三分の一は、無事に何とか王城にたどり着いている。その後に彼の寵愛を受けずに退城させられた女たちも数多いのだが、今回の少女のように、すきあらば王の命を狙っているという場合は特殊だ。今までに経験がない。

帰国前までに彼女が王の機嫌を損ねて娘自身が命を落とすだけでなく、軍一行にまでとばっちりがくるのではないかと、サンジェルマンは気が気ではなかった。静かになった王の幌を眺めながら、娘が騒ぎを起こさず、連隊が帰宅する道中に何の不愉快な問題も起こ

らず、ただ平穏に全員が無事に帰国できることだけを、切に強く願う。

肩に触れるひんやりとした冷気に震え、ジェニーは鈍い眠りから目を覚ました。辺りは真っ暗で、外で夜の鳥が低音で鳴く声と薪のはじけるような音以外、何も聞こえてこなかった。彼女は自分がどこにいるのか、一瞬、判断ができなかった。

しかし、すぐに、頬の焼けるような痛みとともに彼女に記憶が戻ってきた。闇になれた彼女の目に、誰かの白い髪が光って映る。白にも見えるほど明るい、白金髪。印象的な髪の色だ。

目の前に、視界をふさぐように横たわっているのが、あの忌々しいヴィレール王の後ろ姿だと気づくまで時間はかからなかった。

熱はひいたが痛みの残る左頬を手でそっと押さえ、彼女はさっきの王とのやり取りを思い出した。

“俺が見たいか？　俺を見たいのなら、正面から存分に見るがよい”

“なぜ？　見たくなんかないわよ”

“……いつまでも素直でない娘よ”

“なにを……？”

不敵な笑いを浮かべた彼は、何を思ったか、ジェニーの両頬を押さえて彼女の唇を自分のそれで覆った。

ジェニーは驚き、自分の唇を覆う気味の悪い物体を拒否して、そこから必死で逃れようとした。彼の手さえも触れたくないのに、唇をのせるなんて……！

ジェニーが首を振り、手を振り回したために、その両手の自由を奪おうと彼女の頬を押さえていた王の手が動いた。それでやっと彼の口からほんの一時逃れられた彼女は、そこで自分の手首を押さえる彼の左手の甲を、力の限り、噛み付いてやった。手の甲の肉を噛み切ってやるぐらいの勢いで。

口の中に広がる血の味に、吐き気がした。嫌悪感の味だ。

王が何か言葉にならない声を大きくあげて、彼女の顔を手から乱

暴に振り払った。ジェニーが唇をぬぐいながら彼の手を見ると、そこにはくっきりとした歯型の跡と真っ赤な血が噴出している。

自分のとった行動の結果をあらためて目にし、ジェニーは、不意に恐ろしくなる。怒りで燃えたぎる瞳を彼女に向けたゴーティス王は、あまりにも恐ろしい形相だった。今度こそ殺される、とジェニーは思った。

ところが、彼は噛み付かれたのとは反対側の手を大きく振り上げたかと思うと、ジェニーの頬を力任せに平手で打った。頬がどこかへちぎり取られたかのような凄まじい痛みだった。あまりの衝撃と痛さに彼女の頭は真っ白になり、体は幌の壁に反動でぶつかって倒れた。そして、彼は直後にまた何か吼えるように叫び、寝台の上にどすんと腰を降ろした。

ジェニーは身を縮めたが、彼は彼女に手を伸ばしもしなかった。彼は、ジェニーを殺さなかった。

そのことにどれだけの意味があるのか、彼女には全くわかっていなかったが、とにかく、彼女はその状況を生き延びた。

いつのまにか眠りに落ちて以来、どれくらいの時間がたったのかわからないが、外は静かで、前に眠る男も深い呼吸音をたてていることから、夜中だろうと思われた。彼は右脇を下にして、左手を右手の上に重ねるようにして眠っていた。

半身を起こしたジェニーの位置から、噛み付いてやった左手の傷がよく見えた。血はもう止まっており、赤黒いかさぶたになりはじめている。

男の顔をのぞきこんだ彼女は、彼のまつげがぴったりと閉じられているのを確認した。寝息は規則正しく繰り返され、体も呼吸にあわせてゆったりと揺れている。

この男は今、眠っている。

ジェニーは、王の体越しから暗闇の中に見える台や床に武器を探した。彼が脱ぎ散らかした靴、台に掛けたマント、水の入った皿。

目の前の彼は腰に鞘をつけていないのに、彼の外したはずの剣がどこにも見当たらない。

でも……もしかしたら、この寝台の陰か、下にあるかもしれない。

息を殺し、ジェニーは物音を立てないようにそっと膝を立て、寝台の長辺と平行方向に体をずらそうとした。

その瞬間、ジェニーの腰に王の左手が無造作に置かれ、びくっとして動きを止めた。おそるおそる彼の横顔をうかがったジェニーだったが、彼はあいかわらず健やかな寝息を立てており、彼のまつげも微動だにしていない。

……寝ぼけているのだ。

ジェニーは音にならない安堵の息を漏らすと、再度自分を落ち着かせようとゆっくり呼吸をした。それから、ゆっくり、そっと、その彼の左手から体を抜けさせようと、彼女は体をじりじりと移動させていく。

「……おまえの探しておるのは、これか？」

突然どこからか低い声がし、ジェニーはまたもやその場に凍りついた。すると、彼女の腰から引かれた王の手が、彼女の探していた彼の剣をともなって目の前に差し出される。

絶句し、体を硬直させたジェニーが王を見ると、彼がゆっくりと振り向き、細く開けた目を彼女の顔にしっかりと向けた。その目は寝ぼけている目ではなく、もうずっと前から起きている、覚醒した正気の瞳だ。思わず、恐怖のあまりにジェニーの体が震えた。

その彼女の恐怖に気づいたのか、彼は目を普通に見開き、にこりとも笑わずに続けた。

「おまえが俺の寝首をかこうとするとはな。俺の目も節穴になったものだ」

ジェニーはやっとのことで体の震えを抑え、口を開いた。

「……いつか……起きているなんて」

王は無表情でジェニーを見返す。

「俺は“殺気”には敏感でな」

なんという敏感さ、用心深さなのだろう！
またもや、ジェニーは背筋が凍る思いがした。そして、その彼女の心を見透かしたように、彼は自分の剣をジェニーに向けながら、嘲るように乾いた笑い声をあげた。
「おまえのあきらめの悪さには感服する。だが、おまえには俺を殺せぬだろうよ」
「どうして……よ？」
むっとしてジェニーがふくれると、彼はさらに笑い声をあげた。
「“どうして”だと？　おまえ、俺を本気で倒せるとでも思うのか？」
「やらなければわからないじゃない。私は、何度だって試すわ」
彼女の返答に口をつぐんだ彼は、その直後にまた小さく笑い出した。剣と彼女の顔を見比べては笑い、彼女が怒れば怒るほどおかしいとでもいうように、彼は肩を震わせて笑う。ジェニーの怒るのがむしろ頼もしいとでもいうように、彼は上機嫌だ。
「やってみろ、ジェニー。やれるものならばな」
彼の挑発にひるむことなく彼をまっすぐ見つめ返すと、ジェニーのそんな態度に満足したのか、彼はにやりと笑った。それから、それまで手に持っていた剣を自分の後ろの床に放り投げると、自分のひじを枕にして目を閉じ、再び寝入る態勢に入る。目の前に自分を殺してやるという女がいるのにそんな悠長な態度をとるこの男が、ジェニーには信じられない。
彼女が唖然としていると、彼は噛みつかれた手の傷を指でなぞった。ジェニーを挑発するためだろう。彼の目は閉じていても、その顔にはうす笑いが続いていた。

第一部　1．遭遇－4

サンジェルマンの心配をよそに、王の捕らえた娘ジェニーは大きな問題を起こすこともなく、王が機嫌を損ねて問題が引き起こされることもなく、七日間に及ぶ遠征の旅は終わろうとしていた。

彼女は最初の数日こそ脱出を試みてはみたものの、周囲にいる屈強で女ひでりの兵士たちの存在に逃亡をはばまれて、あきらめざるをえなかったようだ。彼女は極度の緊張と深い悲哀の感情で神経をすりへらせ、また、慣れない天候と環境のせいで日増しに弱っており、帰国が近づくにつれて元気になっていくゴーティス王とは正反対だった。

ヴィレール王国の主城であるラ・ヴィスコン城は、大きな海洋に通じるシエヌ河を眼下に臨む小高い丘に建つ。小国の王城としてはかなり立派な居城で、初代王が莫大な私財を投じ、外国の技師を雇って造らせたものだ。他国と比べれば決して広大ではないものの、その頑丈さや内装・造作の良さ、実用性と審美性を兼ね備えた構造などは、非常に優れた城だといえる。

くっきりと晴れ渡った秋晴れの空の下、ヴィレール軍はついに王城の門をくぐった。王城に戻る道すがらに所属地へ帰還していった分隊もあるため、実際に王城に入ったのは十分の一程度の人数にまで減っていたが、それでも、戦馬車と軍隊の列を王城の広場内に収めて重厚な門扉を完全に閉ざすまでには、相当な時間がかかった。

事前に連隊の勝利は伝聞されていたこともあり、王城の衛兵たちや使用人たちは大きな歓声をあげて彼らを迎え入れ、知り合いの顔を見つけては抱きあって喜びあった。

久々に目にした自分の城と見慣れた人々の姿に、ゴーティスは早速自分の幌の中へ舞い戻って、新しい住人となる者をそこに見つけた。彼の寝台の上で、当初は身につけることを散々嫌がっていたも

のの、寒さに耐え切れずに受け入れた彼の毛皮にくるまって、眠っている娘がそこにいた。目の下にはうっすらと青い隈ができていたが、頬は赤みが差しており、一時期よりは体調が復活しているように思えた。

彼はその寝台に大股で歩いて近づいていくと、彼女の頭のすぐ近くで靴をドン、と踏み鳴らした。

「ジェニー、起きろ！　ヴィレールに帰国したぞ！」

びくっとして起きた彼女の顔のすぐ上に顔を近づけ、彼はおどけて頭をぴょこんと下げた。

「ようこそ、我が城へ」

「――城？」

ジェニーが何のことかまだわからずにぼんやりしているのを気にも止めず、彼は冷たく笑った。

遠くから人々の騒ぎ立てる声が聞こえてくる。彼女は整理のつかないらしい頭を何とか動かそうと、深呼吸をした。その前を、落ち着きのない態度で彼は通り過ぎて行く。

「サンジェルマン！　サンジェルマンはおるか？」

「御前に、王！」

彼の呼び声に答え、幌のすぐ外から声がした。ゴーティス王が幌を外側にめくると、金髪の小さな頭がそこから見えた。

「入るがよい」

主人の言葉で、彼は身軽に馬車の上に飛び乗ってきた。ヴィレール王以外にジェニーが唯一、毎日顔をつき会わせた相手だ。彼はジェニーを見ると、意識的に無関心な様子を見せた。

「この娘をモンペール女官長の元へ連れて行け。それから……今宵の宴に出せるよう、身支度を整えさせろ」

王がジェニーのうす汚れた顔や服をちらっと見て顔をしかめた。サンジェルマンは、敵に施されることを可能な限りに拒否するこの少女に、女官長も手を煩わすだろうと思った。サンジェルマンが数度、彼女の手足や顔をふき取ってやった以外は、敵に体を触らせる

ことを許さず、おそらく彼女は自分の体を洗うこともしていないはずだ。最初に出会った時も灰で顔や腕は汚れてはいたが、今の彼女の姿はとても人前に出られたものではない。

サンジェルマンはジェニーをマントでくるむようにして後宮の裏口に通じる通路を歩き、手を離せば倒れてしまいそうな頼りない少女を盗み見た。足取りはふらつき、顔色は真っ青。初めて足を踏み入れる外国の王城と居並ぶ立派な衛兵たちの姿に圧倒され、言葉を失っている。あの恐ろしいゴーティス王に反抗できる力強さを持ちながら、一瞬で壊れそうな脆ささえ感じさせる、不思議な娘。

外の明るさに比べてほの暗く長い廊下を彼らは無言で歩き続け、縦長の窓をいくつか通り過ぎた。

「ジェニー、つらければ、私の腕につかまって歩きなさい」

見かねた彼はジェニーの前に自分のひじを差し出したが、彼女は頑なに無視した。敵一味の手など、間違っても借りるつもりなどない、とでもいうように。

行き場をなくしたひじを仕方なく引っ込めたサンジェルマンは、心の中で重いため息をついたが、その強情さになぜか失笑してしまった。この種の強情さは、幼少期のゴーティス王に通じるものだ。

ゴーティス王の姿を彼女に重ね合わせ、彼はなんだか微笑ましいものを見るように、くしゃくしゃになって乱れた髪に被われた彼女の横顔を黙って見つめた。

後宮は王城の中でも最も奥に位置するため、たどり着くまでには時間がかかる。通常ならば侍女たちが行き交うはずの延々と続く廊下にはひと気がなく、二人の靴音だけが気味悪く響いている。

城の奥深くに通じる暗い道。遠くに聞こえる人々の歓声が遠のき、サンジェルマンの高い靴音が大きく共鳴する。

急にジェニーの手に引っ張られたサンジェルマンはあやうく後ろ向きに転倒しそうになって、あわてて態勢を直した。

「ジェニー？」

後ろを振り返った彼は、ジェニーが口をあけて床にくずおれているのに驚いて、急いで彼女を助け起こした。

彼の手にふれた彼女の指先が死人のように冷たい。腕に抱えた彼女はすでに意識がなく、彼は青くなって彼女の体を揺すって言った。

「ジェニー？　しっかりなさい、ジェニー！」

彼女の指は硬直していて、何の反応も返ってこなかった。サンジェルマンはあわてて彼女を腕に抱き抱えると、一目散にモンペール女官長の元へ疾走した。

その日の夕方、サンジェルマンが身支度を済ませて王のいる部屋へと参じると、王は入浴をすませてちょうど着替えをしている最中だった。着替えを手伝う女たちに囲まれている。

祝宴用に見合う王の衣装。王族だけが身につける緋色の肩掛けには金色の縁取りがついており、ところどころに高価な色とりどりの宝石が縫いこんである。付き人の一人が紺色の長衣の上にそれをまとわせると、王の圧倒的な存在感が周りを威圧した。

主人と目があったサンジェルマンは小さくお辞儀をし、一行のいる部屋と間続きになっている小さな控え室に移動する。今夜の凱旋祝いの宴会に出席するため、彼も日常の地味な格好よりは多少良い衣装に身を包んでいる。

男の一人が装飾用に選んだ銀のサークレットをゴーティス王に差し出したところ、彼は何かが気に入らなかったらしく、それをむげに拒否した。彼を怖れてただでさえ口数の少ない使用人たちは、その否定の言葉を耳にしただけでいっそう身を縮ませ、誰もがぎこちない表情に変わり、伏し目がちとなっていく。そんな使用人たちの中に新顔の女がいて、王が少し興味を引かれて見やると、彼女は必要以上に緊張して顔をこわばらせた。

使用人たちの態度は、彼の勘に触り始めているようだ。

「どこか、苦しい部分はございませんか？」

サークレットを持参した男が勇気をふりしぼって訊いた問いに、

王はじろっと白目を向けた。
「服を着せたおまえたちが分からぬのか？」
「は、いえ……」
男が何か返答しようとするのを制止するように彼が再度にらむと、男はすぐに口をつぐんだ。一行の間に嫌な緊張感が流れる。
「よい。用が済んだらさっさとさがれ」
「ははっ！」
王の言葉が終わるのと同時に、彼らは蜘蛛の子を散らすように素早く退散していった。各自が手にそれぞれの荷物を持ち、彼の機嫌が損ねられる前に視界から一目散に消えなければというように。
使用人たちが出て行く気配を感じ取り、サンジェルマンはさりげなく姿を現した。部屋の中央に据えられた華奢な長椅子に、ゴーティス王が独り、座っていた。それだけで宝石のように輝かしい髪には何の装飾品もつけず、緋色の肩掛けの下には濃紺の長衣、黒と金の帯を締め、首からはそれぞれに大きな連珠がついた首飾りを三本垂らしている。腕輪はしていない。
腹心の出現に王は気だるそうに顔をあげ、近づいてくる彼を見上げた。白に近い琥珀色の長衣には淡い朱色の上服が重ねられ、その上に黒・白・黄の細かい刺繍を施した短い丈の肩掛けをまとっている。腰帯は上服よりも濃い赤に茶が混じった色で、金色の房が三つ付いているものだ。長衣の裾からは青銅色の靴が見え隠れし、濃い金色の髪もきれいに頭にとかしつけている。
王の前に来ると、サンジェルマンは柔和に笑い、彼の座る椅子の横に広げられた腕輪の山に目をやった。
「腕輪はどちらを着用されるのですか？」
「おまえはどれがよい？」
「そうですね……」
あくびをかみ殺す王を笑顔で見ながら、彼は王の衣装にあう腕輪を目で探した。
「今日の衣装であれば、こちらが合うのではないでしょうか。赤玉

も入っていますし、金細工も素晴らしい出来ですよ」
そのうちの一つを取り上げた彼がそう言うと、王はそれを横目にまたもやあくびをした。
「そうか。ならば、それはおまえがつけろ」
「王？　これは王の為に用意されている装飾品ですよ。」
サンジェルマンが苦笑すると、ゴーティスはその手から腕輪を取り、元あった場所へとそれを放り投げる。
「ふん、どれも俺の好みではない。それより、おまえもせっかく正装しておるのなら、腕輪ぐらいつけてもよかろう？おまえは容姿に恵まれておるわりには地味すぎる。他の男どものようにもっと着飾っておれば、女の注意もさらに引くというものよ」
「私は華美な服装を好まないのです。それに、私のような立場では、地味で目立たない方が何かと好都合なのですよ、王」
「ほう？　世の男どもに聞かせてやりたい言葉だな」
王の放り投げた腕輪を他の装飾品の場所へと移していたサンジェルマンは、そこでふと彼の左手に目をやり、そこに残るケガの跡に初めて気づいた。野犬に噛まれたかのような歯型だ。今の今まで全く気づかなかった。
「王、その傷はどうなされたのです？」
呆然と傷痕を見つめるサンジェルマンの視線に、彼はすっと真顔に戻った。
「これか？　見てのとおり、歯型だ。何ともあっぱれな歯型ではないか？」
「お戯れを！　ああ、不覚にも今の今まで気づきませんでした！」
サンジェルマンの心配そうな表情と勢いに彼はちょっと不快に思ったらしく、顔をしかめた。
「どちらで傷を負ったのです？　野犬の噛み傷は放っておくと大変な事態になりかねないのですよ、適切な治療をお受けになられましたか？」
「おまえは、ますます女官長に似てきおったな」

「王！」

「案ずるな、消毒はしてある。それに、これは――」

噛まれた状況を思い出してつい笑い出す彼を見て、サンジェルマンはあっけにとられる。

「――これはな、戦地でひろってきたあの娘ジェニーが、この俺に噛み付いてつけたのだ。俺の手に屈するのを嫌うてな。何とも反抗的な野犬ではないか？　くっくっ……俺は、あの娘の行動には感服するわ！」

そのまま大笑いする彼とは対照的に、サンジェルマンの顔は驚愕に引きつった。

あの“ジェニー”が王の手に噛み付いた？　王にケガをさせたと？　王の体に傷をつけた娘を、むざむざと私は介抱してしまったのか？　自分の喉に大きな唾液の塊がゆっくりと降りて流れていくのを意識し、サンジェルマンは冷や汗をかきながら主人の不自然に上機嫌な様子を再度見つめた。

いや、それよりも――それよりも、自分に抗った娘を、王は手打ちにされなかった……？

「――ところで、あの娘はどうした？　おとなしく女官長の言うことに従ったか？」

くるりと向き直った彼は、サンジェルマンを見て、眉をひそめた。

「は？　あ、いえ、それが」

「ふん、今度は何をやりおった？」

歯切れの悪いサンジェルマンにいらいらしたように、彼は先を促した。

「その、実は、女官長の元へ連れて行く前に彼女は倒れてしまいまして。おそらくは過労か風邪だろうと思いますが、現在は熱を出して部屋でふせっておりまして――」

サンジェルマンの説明が終わりもしないうちから、彼は押し殺した皮肉げな笑い声を立てはじめた。

「くっくっ……倒れただと？」

彼は髪をかきあげ、サンジェルマンに顔を向けた。
「どこまで俺に抗おうというのだ、あの娘は！　まったく、病になってまでも俺を遠ざけたいのか！」
肩をゆらして笑いつづける彼を怪訝に思いながらも、サンジェルマンはすべき事を彼に切り出すために、体を乗り出した。
「おそれながら、王？　娘に侍医をつけて休養させはしましたが、王に負傷させたのがわかった今――あの娘を部屋で介抱させておくわけには参りません。王のお体に傷をつけてのうのうと生きているなど、まったくもって許されぬこと。すぐにでも、私の方で相当の処置を行いたいと思います」
処置、つまり、処刑である。それがどんな軽微な傷であれ、王の体に傷を負わせた者は死罪と相場は決まっている。
サンジェルマンの厳しい表情を見た彼は、むっとして口を尖らせた。
「処置？　俺が退屈しのぎに連れてきた小娘に、何の処置が必要だと？」
「あの娘は王のお体に傷をつけたのですよ、王。それなりの刑を与えねばなりません」
「あれの処遇は俺が決める。おまえが口を出すことなど許さぬぞ」
「しかしながら、王」
「サンジェルマン」
焦ったサンジェルマンに、彼はなんともぞっとさせる嫌な目を向けた。激情にかわるちょっと前の表情だ。感情のない人工的な透き通った彼の瞳は、サンジェルマンを射抜くかのようだった。
「俺が決める、というのが聞こえなんだか？　あの娘の命運は俺の手の内だけにある。それを忘れるな」
ヴィレール軍が帰還して三日後、サンジェルマンは、ジェニーが回復の様子を見せたことをゴーティス王に報告した。王は、ここ数日間は朝遅くまでゆっくりと睡眠をとっており、体力も気力も充満

しているようだ。
彼女についての報告を王は無関心に聞き流しているかのようではあったが、サンジェルマンが話終わると、明夜に再び開催される宴の席に彼女を出席させるよう、指示を出した。
「おまえも宴には同席せよ。もし姿が見えなかったら、許さぬぞ」
「はい」
サンジェルマンが頭を下げると、彼は笑みを浮かべ、それまで寝そべっていた椅子にまた体をあずけた。
王の機嫌は、悪くない。
――明日の夜、今度こそ、王に抵抗したあの娘は亡き者となってしまうのかもしれない。
王に無礼を働いた上で生かされているジェニーの存在を面白くないと感じていたサンジェルマンは漠然とそう考え、心の内で何となくほっとしていた。

その当日、王城内にいくつかある内の比較的小さな広間では、こじんまりとした宴が開かれていた。まだまだ早い時間帯のせいか、卑猥な冗談もきかれず、ゆったりとした上品な口調の会話が続く今夜の宴は、連隊長以上の貴族身分の人々が集う男たちの宴だ。人々は一様に和やかに談笑している。給仕の女たちも連日の宴よりは落ち着いた雰囲気で飲食の用意を執り行い、サンジェルマンもよく見知った顔ばかりがそこには並んでいる。ジャン・ジャック近衛隊隊長、ライアン副隊長、それに側近たち。誰がどこに座るかという席は特定されてはいなかったが、入口から最も遠い上座から離れていくにつれて身分も下がっていく順番で、人々の席は自然に決まっていた。
サンジェルマンが自分の座る席に近づいていくと、王座のすぐ脇にある椅子に、見慣れない若い女が所在なさそうに腰を降ろしていた。透ける素材の薄い黄緑色のドレスを軽やかにまとい、上に結い上げた髪からほつれて揺れるおくれ毛がたおやかだ。うなじから肩

にかけての華奢な線には、彼にも見覚えがあった。
女の緊張した表情の中に居座る明るい茶色の瞳を見つけた時、サンジェルマンは、やっと、その娘が捕虜のジェニーだと気づいた。綺麗に化粧をされて着飾っているせいだけでなく、元々の顔立ちもそんなに悪くない方なのだろう。病み上がりとあって顔色はまだよくないが、初めて見た彼女の本当の姿に、彼は正直、びっくりした。
そわそわとその場に座っていた彼女は知った顔であるサンジェルマンに気づき、一瞬だけだが顔をほころばせ、しかし、その直後に元の緊張した顔に戻った。
サンジェルマンが彼女の斜め後ろに席をとってまもなく、急に人々のざわめきがぴたっと止まった。遠くの出入口から、ゴーティス王がひとり、意気揚々と姿を現したのだ。十二分に休養をとって活力を取り戻していた彼は瞳がきらきらと光輝き、体中から力がみなぎっているように見えた。着けるのを拒否したはずの銀のサークレットを、今は素直に頭に身につけている。
自分の席の近くに大人しく出席しているサンジェルマンの姿をみとめ、ゴーティスは、満足そうな笑顔を見せた。
「おお、よう来たな。そのまま、最後まで退席するでないぞ」
それから自分の座席に座った彼は、そこに居心地が悪そうに視線をさまよわせるジェニーを見つけ、一瞬目を見開いた。そして、ゆっくりと唇の両端があがる。

ジェニーの頭のてっぺんから足の先までを舐めるように見つめ、王は、まるで舌なめずりをするかのように満足げに唇の端をなめた。彼は一言も言葉を発しなかったものの、彼の発するぬめりのような感触は彼女もしっかりと感じていた。服を着ていながらも丸裸にされたような気分にさせられ、彼女は一刻も早くこの場から逃げ出すことしか考えられなかった。
ジェニーが彼の視線を逃れてうつむいていると、その視線の先に赤茶色の杯が不意に差し出された。はっとして目をあげると、ゴー

ティス王の挑戦的な視線とぶつかる。
「酒をつげ、ジェニー」
背後からの脅迫めいたサンジェルマンの視線にも後押しされ、ジェニーには選択の余地がない。
仕方なく、差し出された杯に酌をする。王は故意に、ジェニーの歯型のついた左手を彼女に見せるようにして杯を持っている。その意図にむかむかと腹が立った彼女だったが、この場で騒ぎを起こすのは自分の身も危うくし、得策ではない。二度目の酌の催促にも静かに従った彼女だったが、込み上げる怒りを抑えることだけに必死だ。
王は酒で満たされた杯をゆっくりと口元へ運んだ。彼女がいまいましそうに見ていることも、たぶん、彼は承知の上だ。
すぐに空になった杯を彼女の前へと突き出し、彼は次の酒を催促する。彼女によって酒が満たされた杯は一息で飲み干され、またすぐに彼女の前へと出される、その繰り返しがしばらく続いた。
王は何も言おうとせず、ジェニーも口をきくつもりもなかったのだが、怒り心頭で耐えられなくなった彼女は、できるだけ冷淡に皮肉をこめて言ってやった。
「……次から次へと、よく飲む人ね」
ジェニーがやっと口を開いたことに満足したらしく、彼は片方の眉をあげてにやりと笑みを浮かべ、彼女を見た。
「酒はヴィレール人のたしなみだ。俺が酒ばかり飲んでおるのは、おまえが食べ物を一切よこさないせいだ。見ろ、他の女どもは酒も食物も渡しておるぞ？」
「私は、あなたの給仕じゃない！」
その小声は周囲の談笑にかき消されて他の人々の耳には届かなかったはずだが、ジェニーは後ろにいるサンジェルマンが動く気配を感じ、彼がそれに敏感に気づいたのだ、と思った。王はほんの少し瞳を細めてジェニーを見つめ、彼女も彼をまっすぐ見返していたが、それはとても恋人同士が見つめ合うような、愛情のある微笑ましい

光景には見えないだろう。
いきなり、王がジェニーの手首を掴んだ。彼の目は、酔いがまわっている目だった。
「何するのよ！」
ジェニーが振りほどこうとするのを頑として拒み、彼は彼女の腕を強く引っ張り寄せた。酒壷を胸にかかえた格好で、ジェニーは彼の腕の中に抱かれた状態になった。
「おまえは、もう少しにこやかにできぬのか！　俺の、このヴィレール王の隣におるのだぞ？」
彼はあきれたような口調でしゃべり、本気でつっかかっているとは思えなかったが、それでも、彼女の頭の中に、何かの警鐘が鳴り響き始めた。
「この俺の側に席をとれる者はそうそうおらぬ。捕虜の分際でここにおるのを有難いと思え」
「有難くなんかないわ！　私はあなたなんか大嫌いなのに！」
「ほう？　これはまた、はっきりとものを言う娘だな」
頬がふれるほどに近距離で二人はお互いに火花をちらしあい、彼女は怒りで顔が赤くなるのを感じた。
彼が、ジェニーの前に静かに人差し指を立てる。
「――されど、ジェニー、言動に気をつけるがよいぞ？　おまえの生死は、俺の一存で決まる」
「私は誰の所有物でもないわ。死ぬのも怖くない。気に入らないのなら、早く殺したらいいじゃない！」

王の顔色が変わっている。
押し殺した声での会話だったので周囲の雑踏にまぎれて聞こえるはずもなかったが、背後のサンジェルマンの目には二人がどんな会話をしているか、なんとなくわかっていた。サンジェルマンは、彼が激昂して手がつけられなくなる状況を極端に恐れていた。
――どうやら、サンジェルマンの見る限り、王の機嫌は良くない方

向へと一直線に向かっている。

ゴーティス王の表情が急にさめて、つかまれていたジェニーの腕も解放された。やっとのことで自由の身となった彼女はあわてて、彼の近くから体を離して元の席へと移動する。息を整えながら彼の方に注意を向けると、彼はナッツに手をのばしているところだった。

「酒をよこせ、ジェニー」

緊張した面持ちのジェニーが笑いもせずに新しい酒壷をあけると、ゴーティス王もまたにこりともせずに杯をさっとあおる。奇妙な、異常ともいえる緊張感がそこには漂っていた。

しばらく宴が続き、ゴーティスの元に交代で訪れていた要人たちがとだえるころには、すっかり夜も更けていた。そして夜の闇が濃くなるにつれて、男たちの歓談は徐々に賑やかで色めいたものにと変貌していっている。いくら身分の高い者ばかりが集結するとはいえ、そこは男ばかりの集まりだ。遠征生活を送ってきた軍人たちは情事にも飢えていた。

出席者たちは宴会中にそれぞれに目当ての給仕女を見つけておき、王が退散した後につづいて自分たちも退席するのが慣例だった。宴会後の情事は、貴族社会では容認されている。そのため、出席者たちは上座にいる王と横の女との進展具合をさりげなく気にかけているのだ。

数々のめずらしい海外からの果物、羊・豚・牛・兎・鹿・鳩・鴨の肉料理、川魚料理、豊富な種類のキノコ、彩りを添える野菜、濃厚な上質ワインと麦酒、蒸留酒。そこからたちのぼる匂いと人々の熱気にあてられ、ただでさえ体の弱っていたジェニーは気分が悪くなってきていた。目の前には無言で酒を口に運ぶ世に悪名高いヴィレール王、斜め後ろにはまるで自分を監視するかのように動向を見守っている彼の腹心がいる。彼女はほてる顔を時々手で押さえ、視線をあちこちにさまよわせて、宴の終わりをまだかまだかと首を長

くして待っていた。

その彼女の様子に気づいていながらもきっぱりと無視し、給仕女たちからの直接的ではないが絡みつくようなねっとりした視線にいい気になりながら酒をすすめていたゴーティスは、そろそろ退屈になってきた。彼の元に来る出席者たちも短い挨拶をするだけで、彼を適当に放っておいてくれる。彼が隣に新しい女を座らせている時には、部下たちは彼の元で長居をしようとはしないのだ。

第一部　1．遭遇－5

何杯目かの杯が満たされると、ゴーティス王はそれをジェニーの顔の前へとぬっと突き出した。

「飲め。これはおまえの分だ」

彼女は青ざめて唇をかみ、あわてて首を左右に振った。

「私は、お酒を飲まないわ」

「俺の勧めを断れると？　飲み干せ」

彼はさらに杯をジェニーの体に押しつけた。彼女は拒否しようとしたが、背後のサンジェルマンの重圧に押され、仕方なくその杯を口につける。

甘く、濃い酒の味。

その発酵臭とどろっとした濃厚な液体をほんの一口含んだだけで、ジェニーは胃の奥深くからむかむかとしてきて、思わず口と胸を押さえた。とても、杯を全部飲み干せるとは思えない。

彼女が体を震わせて咳き込むと、王は彼女の近くに行き、その体を引き寄せた。そして、その温かい手で彼女の頬に触れる。

「そうか、おまえは病み上がりであったな」

「……えっ？」

「気分がよくなるまで、静かにしておるがいい」

彼の胸に抱き寄せられたジェニーは生きた心地がしなかった。彼女のまつ毛の上に、ゴーティスの湿った、酒の匂いの混じった息がかかった。彼の指の腹がジェニーの頭皮にあたり、視線のすぐ上には濡れた朱色の彼の唇がある。

恐怖で彼女が体を震わせると、彼は心配そうな表情を作って彼女の顔を覗き込んだ。

「寒いのか？」

「いいえ！」

彼の腕の中でジェニーが小さなくしゃみをした。熱がまだ残って

いるせいか、頬から顎、首にかけてまでが熱く、うっすらと赤く染まっている。

ジェニーの額にゴーティスの唇が押しつけられて思わず彼女が恐怖でのけぞった時、誰かが彼女の後ろに来た気はいがあった。

「御前に」

声だけで、それが腹心サンジェルマンだと彼女にはすぐにわかった。彼女はその出現に警戒して体を緊張させたが、彼は主人の命令だけを待っているらしい。王が落ち着いた声で言った。

「ジェニーは疲れたらしい。部屋へ案内してやれ」

ジェニーは、サンジェルマンが自分の背中を見ているのを感じた。

「仰せのとおりに」

その後、すぐにゴーティス王の体が自分から離れたので、彼女はやっとこの場と彼から解放されると思ってほっとした。あまりにあっけなく、彼は自分を送り出そうとしているのが不思議ではあったが。

立ち上がったジェニーは思いのほか立ちくらみがして、仕方なく王の犬サンジェルマンに手をとらせることにした。温和そうだがどこか掴みきれない男で、彼の差し出した腕を親切からだととれるほども、彼女は信用していない。それに彼も、どうやら彼女に良い印象を持ってはいないようだった。

ひそかにゴーティス王を振り返ると、彼はもう彼女などに関心を払っていないかのように二人に背を向け、うまそうに酒杯に口をつけていた。彼女と入れ替わりに、どこからか給仕女が彼の世話のためにつめ寄ってきている。その女は顔を上気させ、彼の近くにいけることに喜びを感じているように見えた。

こういった環境にいるから、あんな自己中心的な男が出来上がるのよ。ジェニーは怒りも新たに、そう思った。

彼女たちが壁づたいにひっそりと退室する姿は、宴席の出席者の誰もが関心を持って、しかし、見て見ぬ振りをされながら全てを観

察されていた。彼女の噂はこれから秘めやかに出席者の口にのぼるはずだ。そして、王の今宵の相手が退室したとなれば、王が宴から抜ける時も近い。その後は、自分たちも続いて存分にはめをはずせる時間帯がやってくる。

正面入口に真近い末席で、周囲におとらず、今宵の進展をかけた男女が駆け引きを行っていた。茶色の巻き毛が印象的な三十代半ばの男は黒と赤の軍服を身に着け、ふくよかな体の線が目立つ若い金髪の女を口説きつつも決定的な成功までには至っていなかった。女は、彼の誘惑に悪い気は持っていないながらも何かに遠慮した仕草を見せ、手を握ってくる男の手を何度もやんわりと押し返していた。

「おまえのように美しい女はいない。なあ、どうだ、俺はおまえを落胆させやしないぞ？」

「でも、メゾネ隊長」彼女は自慢の長い金髪をしならせ、彼を思わせぶりに見つめた。そのことで彼はますます興奮し、さらに彼女に詰め寄ってくる。

「メゾネ様、私も気持ちは同じでございますわ。でも、でも――私はオルガン様に連れてこられた身。私の一存ではとても……」

「なに、オルガン？」

男は彼女の肩ごしに見えるオルガンの姿を目で探している。二人からそう遠く離れていない席に別の女たちと座っていたオルガンではあったが、明らかに怒った形相でこちらを睨みつけており、二人の様子に相当口惜しい思いをしているのがはっきり見てとれた。だが、メゾネが彼に視線を合わせたことで、彼はあわてて気まずそうに視線をさっとはずした。

「あんな男！」

男は見せつけるように彼女の肩を抱くと、その耳に低い声で囁いた。

「俺はあの男より位の高い七隊だ。おまえなどあの男にふさわしいものか！　何も心配するな、おまえの身は今宵より俺が引き受けて

やる！」

「ああ、本当に？　嬉しいわ、メゾネ様！」

女はとろけそうな甘い声を出し、自分の前にいる男に腕を伸ばした。男が自分の手に入れた勝利品を逃さぬようにと女を抱きすくめると、彼女は弱々しい力で男を抱き返した。けれど、その態度とは裏腹に、彼女の顔には勝ち誇ったような笑顔が浮かんでいる。オルガンらしき憎悪の視線を後方から感じたけれども、今となっては彼女には痛くも痒くもない。

オルガンの方が器量良しではあるけれど、身分の高さが重要。今までのように、田舎でくすぶった暮らしなど、私はもうたくさん！

「後悔はさせないぞ、ファビエンヌ！」

男の肩を抱きながら、彼女は、王の腹心に連れられて後方入口から宴席を抜けようとしている若い娘の姿を遠目にぼんやりと見た。自分たちの場所からは女の顔がはっきりとは見えなかったのだが、華奢な少女のようないでたちだった。上座にいる麗しい青年王は口についた肉汁を指で拭いながら、その少女らの姿に何度か視線を送っている。

直接近くで見たことはないが、ゴーティス王は相当の美貌の持ち主だと聞く。あのゴーティス王に召抱えられたらどんなにいいか！

最高の身分であり、強く、賢く、美しく、そして誰よりも恐ろしい。

「ねえ、メゾネ様？　あの方は王の側妾ですの？」

彼女が目で指し示す方向を見やったメゾネは、そこにいる娘を見て、すぐに首を振った。

「いや、違うだろう。王は側妾を宴にははべらせない。その辺でひろった女だろう。だが、何でそんな事――」

彼女は腑に落ちない顔をした。

「・・・なんだか知り合いに似ているような気がして……」

メゾネは彼女のつぶやきを笑いとばした。だが、皮肉なことに、ファビエンヌのその言葉は、当たっていたのである。

夜中まで延びそうな喧騒の場を後にしたジェニーとサンジェルマンは、広い通路を延々と歩いていった。細長い、似たような形の窓が壁にはまっている。同じ服装の衛兵と何人もすれ違い、何度か角を曲がったのだが、それが行きに通った道なのかどうか、ジェニーには判断できない。それに、彼女の頭は熱のせいか、朦朧としてきていた。

そのうちにやっと、サンジェルマンがどっしりとした両開きの扉の前に立ち止まった。扉の両側には体格のがっちりとした衛兵たちが構えており、サンジェルマンよりももっと高い位置から彼に向かって鋭い動きで敬礼をした。扉の向かいに燃え盛る松明の炎に照らされた男たちの形相はあくまで険しく、どんな状況にも動じそうに見えなかった。

「こちらへ」

サンジェルマンが押し開いた扉に彼女は招き入れられる。そこは彼女が数日間を寝込んでいた部屋とは別の場所だったが、もともと、彼女自身の部屋など城内に存在しない。なにより、彼女は疲労した体をどこかに横たえたいと思っていた。

自分の背で扉を支えて彼女を迎え入れたサンジェルマンは、彼女が部屋に入ると素早く周囲に視線を走らせ、後ろ手にしっかりと重い扉を閉めた。扉の内側にある小さな部屋には、昔ながらの波型寝椅子が二つ、細長い栗の木製の台や小ぶりな飾り棚が置かれ、台の上には白っぽい寝間着が置かれている。

彼はジェニーの先に立って歩き、あらかじめその小部屋で待機させていた女二人に合図を送った。彼女らは足音もたてずに静かにジェニーの近くに寄ると、サンジェルマンから彼女の身を譲り受ける。

「この者たちが着替えを手伝います」

ジェニーは、サンジェルマンの穏やかな笑顔ともの静かな口調になんだか拍子抜けした。

「ええ」

「私はこれにて失礼しますゆえ、ごゆっくりお休みください」
ジェニーが不審に思って彼を見つめても、彼の表情に変化は見られなかった。
彼が丁寧に夜の挨拶を述べて退室すると同時に、女たちはジェニーのドレスを脱がせにかかった。人に着替えさせてもらう経験など大人になってからはほとんどない彼女ではあったが、今の体調では逆に有難くも思える。
彼女らは手慣れた動きで、簡素だが上品で清潔なベージュの寝間着を彼女にまとわせていく。その服は軽いだけでなくふんわりと暖かで、ジェニーの肌に優しくまとわりついた。それから女たちは結い上げてあったジェニーの髪をほどき、入念に櫛を通して髪のくせを伸ばし、それが終わると、彼女の手足の指先を隅々まで観察した。寝間着がきちんと着用できているかも、何度も確認した。その頃までにはジェニーの瞼はいつのまにか何度も上下し、すぐにでも眠りに落ちることができる状態に陥っていた。
無口な女たち二人に手を引かれ、ジェニーは次の間へと移動した。扉一枚を通り抜けると、そこは、二箇所の角に据えられたトーチのやわらかな灯りで心地よく照らされた寝室となっていた。壁に据付けられた広い天蓋付き寝台には厚い緋色のカーテンと薄い金色のシルクカーテンが引かれている。右脇にある丸いテーブルには豪華な刺繍が入ったクロスが敷かれ、白い陶器の水差し、水用の杯、南国産らしき果物の数々が乗った木皿がある。カーテンを引いた寝台にはベージュ色のシーツの上に緋色の毛布が重ねられ、ジェニーを穏やかで暖かな世界へ誘っていた。
「どうぞ、お楽になさっていてくださいませ」
女の一人が手際よく柔らかそうな枕の形を整え、毛布をめくって、ジェニーを見た。女はまったくの無表情だったが、毛布の皺がジェニーに笑いかけている。足が自然に寝台へと近づいていった。
女たちが隣の部屋へと抜けていき、彼女たちが扉を閉める音でさえもジェニーはほぼ夢の中で聞いていた。彼女はあっという間に心

地よい眠りに落ちていった。

しばらくたった後、廊下の奥から一人の男が衛兵二人と共に姿を現し、サンジェルマンたちの立つ扉の方へと向かってきた。ゴーティス王だ。扉を守る屈強な衛兵たちが緊張で身をこわばらせ、その緊迫感はサンジェルマンにもしっかりと伝わってくる。

自室の前で待機している腹心の姿を目にすると、彼は無言で異状がないかを彼に問う目つきをした。サンジェルマンは姿勢と表情を正し、主人に向かって首を縦に振った。

部屋の前に着いた彼はサンジェルマンにちらりと視線を走らせたが、口をきこうとはしない。衛兵たちが、王の到着に合わせて重厚な扉をゆっくりと開ける。

開かれた扉の内側に、そこで待機していた女たちが王にうやうやしく頭を下げている光景が見えた。サンジェルマンが素早く控えの部屋を見渡すと、ジェニーが宴席で身に付けていた黄緑色のドレスが洋服かけに掛かっており、台の上にはトーチがほの明るい光を放って弱々しく燃えているのも見えた。

女たちがゴーティスの着替えを素早く済ませている間に、ジェニーのドレスを見つけた彼はそれをしばし見上げていた。ジェニーの強気な物言いを思い浮かべ、今からの壮絶な展開を想像して、笑みが浮かびあがってくる。

だが、着替えが終わるやいなや、彼は何事もなかったかのように次の部屋へと抜ける扉へ向かった。

あとは、王の呼び出しがあったときに駆けつければよいだけの話だ。

サンジェルマンは息をついて、閉ざされた扉を見た。

いかに反抗的なあの娘も、たとえ武装していたとしても、今度ばかりはあの王に屈するしか道はあるまい。

――願わくば、娘が王を必要以上に激昂させず、彼女自身の身だ

けでなく、周囲の人々の身をも危険にさらすまねをしないでもらえれば。

サンジェルマンは王の部屋を守る男たち二人を振り返った。彼も信頼を置いている、城内でも指折りの口の堅さと強硬な体を兼ね備えた衛兵たち。

「おまえたち」

サンジェルマンがその穏やかな表情の中に厳しさを込めて彼らを見ると、衛兵たちは彼に向き直り、あらためて敬礼をした。

「はい」

「言うまでもないが、中の女が何を言おうと決して外へ出すな。いいな？」

「ははっ！」

サンジェルマンがそう再確認するように二人を見つめると、彼らは忠誠の表れを示すように胸に右手を置いて、彼に再度敬礼をした。

自分の寝室へと続く扉を開けたゴーティスは、その空間に、女からの違う匂いが入り混じっていることに気づいて満足げに笑みを浮かべた。部屋は心地よい温度にまで温められており、さわやかな香も焚いてある。壁にある明かりはそれぞれに火の勢いを弱めて部屋を薄暗くしつつあり、あと数時間もしないうちに部屋を暗闇にしてしまうはずだ。

部屋の正面にある寝台は、内幕の薄いカーテンが半分だけ引かれていた。足先にあたる側の毛布はゆるやかに盛り上がっていて、そこには人が存在することを物語っている。彼の素足が床に敷かれた絨毯をふみしめ、その寝台に近づいていく。宴でのんだ酒は、すでに彼の体から蒸発しつつあった。そこへ近づきながら、彼は自分の体を包む白い寝服の前をゆるめた。

薄手の金色のカーテンを押し上げた彼は、目の前に目的の娘が幸せそうに眠っているのを見つけ、ひとり満足した。彼に対して強情な態度しか見せなかった彼女が、無防備で、安らかな笑顔を浮かべ

て眠っている。城へ連行するまでの幌内では少しも感じなかった清純さと愛らしさだ。
それを自らの手で壊すことを想像した彼は、込み上げる興奮で下半身が熱くなり、背筋がぞくぞくとした。

不意に体が左へと傾く感覚と、ひんやりとした冷気が頬に触れたことで、ジェニーは心地よい眠りから目を覚ました。目の前は薄暗い闇で、自分自身がどこにいるのか、何をしているのか、彼女はすぐには判断できなかった。

次第に目が暗闇に慣れ、そこに人の腕らしき物体をみとめ、そしてそれを上にたどった先に彼女が見たものが人間とわかったとき、彼女は息をのんだ。彼女に背を向けてはいたが、自分の横たえた体の前に腰を降ろしていた人物は男で、輝かんばかりの明るい髪を持っていた。

「誰……？」

かすれた彼女の声に気づいたのか、彼女が体を動かしたときの振動に気づいたのか、男が顔を上げてゆっくりと後ろを振り返った。

えっ・・・・・！？

「お目覚めか、お姫さま」

薄暗さの中でも光る、あのまばゆいゴーティス王の瞳。

二つの目がにやりと笑ったと同時に、ジェニーの体は瞬時に震え、体中から一瞬にして血の気が引いた。

「なぜ！　どうして！？」

彼女が目を見開き、逃げようと何度も腕を立てようとして失敗すると、彼は地の底からひびくような低い声で笑った。

その瞬間に、彼女は、あまりにあっさりと宴から出られたこと、サンジェルマンがあまりにも穏やかだったことなど、全部の事情をのみこんだ。

「なんて……なんて卑劣な人！」

彼女が声を振り絞って言うと、彼は片方の眉を不機嫌そうに上げ

た。

逃げなければ！

ジェニーは自分の背後をうかがいながら、この男からどう逃げようかと必死で考えた。周囲を見渡し、何か打開策となりえるものを、彼女は焦りまくって探した。

武器は、どこ？

「無駄だ、ジェニー。ここには武器などない」

彼女の思いを読んだかのように、ゴーティス王が低い声で言った。彼女は歯をくいしばって、彼をきっと見返す。

彼女が再び背後に視線を走らせると、彼はさっと態勢をかえ、彼女に体の正面を向けて寝台に片方のひざを乗せた。驚いた彼女が動くより先に、彼は毛布ごと彼女の上に押し乗る。大きくはだけた寝服の先は、彼はもう何も身につけていなかった。

「嫌っ！！」

足をばたつかせ、彼のかける体重から脱出しようとする彼女の上で、ゴーティス王が醜く笑った。

「やめて！　一国の王がこんな卑怯なマネをするなんて！」

「卑怯？　それがなんだ」

「放してよ！」

自分のあごをつかむ彼の手を離させようと、彼女は顔を激しく左右に振った。が、あまり効果はない。彼の左手がジェニーの左耳から頭をすっと撫で、彼女はぞっとして青ざめた。

「このゴーティス王を己の居城で三日も待たせたおまえを、どうしてくれようか……」

彼の顔が近づき、自分の首元へと唇がつけられたとき、彼女はあらんばかりの大音量で悲鳴をあげてやった。

「この小娘！！」

ジェニーは毛布の中を転がり、彼の体の下から這い出ることについに成功した。つんざくような声に耳をやられたゴーティスは、思いがけずに自分から逃れ出た彼女をいまいましそうに睨んだ。

彼女が急いで寝台の上に立つと、半裸状態の彼も、耳を押さえながら素早く寝台の上に立ち上がった。息を切らした彼女は強気な眼差しで彼を憎らしそうに見返し、まだあきらめずに逃れる道を探している。彼の体には暗い怒りが急速に沸いてきた。

「こちらへ来い、ジェニー！」

彼は手招きをして彼女を呼んだが、当然、彼女がそれに従うわけはない。頭にきた彼は、自分の上半身にまとわりつく寝間着をはねのけて床に投げ捨てた。彼は身軽な全裸状態となって、彼女に容赦しない姿勢を見せる。

「今ならまだ手荒にはせぬ。来い、ジェニー！」

「嫌よ！」

じりじりと間合いをとって近づく彼を全く信用せず、彼女は叫び返した。

「俺の言うことがきけぬのか！」

「来ないで！」

「こちらへ来い！」

「嫌よ！　それ以上近づいたら、許さないわ！」

“許さない”だと？　この――俺に？

自分の目が本気で獲物を執拗にねらう猛獣と化すのをゴーティスは自覚した。

それに気づいたらしいジェニーが、恐怖で膝を震わせる。が、それを敵に見破られるわけにはいかないと思ったのか、ゆっくりと呼吸し始めるが、かえって緊張が顔の表情に出るばかりだ。

「……その言葉、必ずや後悔させてやろうぞ、ジェニー」

ゴーティスは、ついにジェニーにとびかかった。ジェニーは悲鳴をあげながらも寝台の上で身をひるがえし、すんでのところで彼の腕から逃れる。

「こやつ！　俺から逃れられると思うのか！」

「来ないで、向こうへ行って！」

「来い！」
「いやよ！」
足元にあった枕をいくつか彼に投げつけ、数歩走って、ジェニーが足側に引かれているカーテンをつかんだ。枕をよけたゴーティスがその彼女の寝服の裾を足で踏んづける。
「きゃーっ……！？」
ジェニーは平衡感覚を失って、彼の足元に後ろ向きに倒れた。そのはずみで、彼女が掴んでいた薄いカーテンが大きな音をたてて斜めに裂け、ちぎれた布が彼女の体の上にはらはらと舞い落ちる。あわてて彼女が起き上がろうとするのを、ゴーティスの大きな片手がむんずと掴んで止めた。彼女が両手両足をつかって暴れたせいで彼は足を蹴られたのだが、それをものともせず、彼は片手で彼女の首を押さえつけるようにして寝台の上に押さえつけた。
「は……なして！」
「はん！　手間をかけさせおって！」
息ができないのにゴーティスをなおも睨み返す彼女には感服すらしたが、彼はさらにその腕に力を込めて彼女を見下ろした。彼女の腰をとめていた紐がほどけかかり、はだけた襟から大きく見えている鎖骨が次第に赤く変わっていく。彼は、情事のときとは違った興奮を感じ、戦のときと同様の高揚を感じ始めていた。
「いい様だ、ジェニー。俺に抗うおまえが悪い」
「う……！」
悲愴な表情ながらも自分に屈せず、にらみ続けている姿のなんと勇ましいことか。彼は敵のあっぱれぶりに笑い声さえあげた。
「苦しいか？　お望みなら、このまま、おまえの兄が待つ場所へいかせてやろうぞ？」
ゴーティスは冷笑してジェニーを見下ろす。彼女の苦しむ様子を楽しむ気だった。
「どうだ？」
「その方が……何倍もましだわ……！」

その返答が気に入らなかったゴーティスは、ついに彼女の首にまわす手に力を込めた。
「ああ……！」
彼女は身もだえ、涙を目じりにあふれさせた。

しかし、その直後、ジェニーは苦しみからいきなり解放された。
「あ……私……？」
不可解ながらも生きる自由を手に入れた彼女は、痛む首を手でさすりながら大きく息をした。頭が重くて痛い。体も重く、熱くなってきている。急に空気を吸い込んだことで、彼女はひどく咳き込んだ。
咳が少し治まると、口を押さえる自分の腕が柔らかくつかまれ、彼女ははっとした。目の前のゴーティス王が彼女の手首をつかみ、精気のあふれる目で彼女をじっと見返している。
「え……？」
「殺すのは後の楽しみに残そう」
「や……めて？　何する――」
ジェニーの両手を頭の上でねじりあげ、その上半身をそのまま壁に押しつけた王が彼女の伸ばされた両足の上に馬乗りとなった。そして左手だけで彼女の両手を壁に押さえつけ、残った右手で彼女のはだけた寝服の胸元を荒っぽく引きちぎった。
「やめて！」
「静かにせい、悪いようにはせぬ」
そのとき、彼女の体がらくになった――と思うと、彼女の全身を覆っていた薄い布は見事に全てはがされていた。そして、彼女の肩に温かい人の手が触れたかと思うと、全身が壁からするりと滑るように寝台の上へと倒され、その直後に、彼女の視界は白い柔らかな長い髪で埋め尽くされた。
「いやよ……！」
彼女の腕は彼の体をどけようとむなしい努力を続けていたが、彼

の腕はそれさえも愛撫と受け止めるかのように滑らかに彼女の体の上を動いていく。ニールにさえ触れさせなかった肌を、いとも簡単に。

ジェニーの胸や腹に密着するゴーティスのかたく重い体は日に焼け、全てに無駄のない筋肉がついていた。酒の匂いが混じる体臭は大人の男のもので、彼女の顔をつかむ指からさえも強烈な色香を放っていた。ジェニーの周りには兄をはじめ多くの同年代の男がいたが、この彼のように“男”を強く感じさせる男はいなかった。それに、自分に対してはっきりと男を示された経験など、彼女には今までに一度もなかった。

彼女は屈辱を感じる前に、恐ろしいほどの恐怖を感じていた。あまりの恐怖からか悲鳴が出ず、叫び声は消えてうめき声しか漏れない。

彼女が体を震わせている一方、ゴーティスは彼女の肢体から香る好みの匂いや吸い付くような肌の質感を思いがけずに発見して、予想外の満足感を得ていた。体はまだまだ子どものそれだったが、早く彼女を征服したい気持ちが徐々にわきあがってくる。

ふと彼女と視線が合った彼は、彼女が屈辱と恐怖から顔をそむけたことで意地悪い気持ちを起こした。

「俺を見ろ、ジェニー」

彼女が顔を激しく振り、瞳から口惜しさと怒りで涙が流れ落ちた。

ゴーティスはジェニーの耳元で名を囁やき、彼の手が彼女の太腿の内側にゆっくりと円を描きながら上になぞり、動いていく。それに反応した彼女が、大きく首を左右に振って、抵抗の意を示した。

「ジェニー」

何度目かに名を呼んだとき、ゴーティスは彼女の口を唇によってふさいだ。すぐに彼女の口内に進入した彼の舌は、逃げ惑う彼女の舌に執拗にからみつき、彼女の大混乱を誘発する。その隙をねらって、彼は彼女の右太腿を大きく押し開かせるのに成功した。彼女が、

息をのんだ。
「うっ……」
彼の唇から逃れた彼女が、憎悪にみちあふれた目でゴーティス王を見上げた。
「あなたに……あなたになど……！」
だが彼は、彼女と唇が触れ合うほどの距離で彼女に不敵に笑うと、その目を直視して言った。
「死んだ方がまだよい、か？」
ジェニーが口惜しさや怒り、憎しみに口をつぐんで顔をしかめた瞬間、ゴーティスは右手で彼女の右足を強く外側に押した。彼女はそれから逃れようと体をよじったのだが、彼の腕によってすぐに引き戻される。ジェニーが恐怖におののき、彼の顔を見上げて凝視する。
「大丈夫だ、おそれるな」
「ゴーティス王――」
体をのけぞらせる彼女を押さえつけ、彼は彼女の耳たぶを甘噛みした。
「――この俺が初めての男となるのを、ジェニー、おまえはこの上なく幸運に思え」
彼女の中心部を、ゴーティスは笑いながら一気に貫いた。
大きな、悲痛な叫び声。

第一部　1．遭遇－6

後宮の新しい住人ジェニーの噂は、初日のうちに城中をかけまわった。王の六人の愛人たちや侍女たち、城中が彼女の動向に関心を持つことになった。愛人たちの中で彼女の実際の姿を見た者はまだいなかったが、彼女がまだ年若い少女で、自分たちと比べるに値しない容姿という事だけは早々に伝わっていた。それは彼女たちに優越感を与えはしたが、同時に、少女のような女が後宮にあげられたという違和感と不審感も湧き上がらせていた。

しかし、彼女たちの本当の興味は、はたして王が新入りに二回目の“お召し”をかけるかどうかの一点に集中している。それは、今までに数多くの女たちが二回目のお召しを受けることなく城を追放される憂き目にあっているからで、彼が引き続き同じ女を召すということは、つまり、後宮の現住人である自分たちのライバルともなるからだ。

その当人ジェニーは、心身に受けた度重なるショックによって、まるで抜け殻のような日々を送っていた。彼女はただ眠りたいときに床につき、思い出したときに食事をほんの少量だけ口にし、それ以外は何もせずにぼんやりとしているばかりだった。ジェニーのあまりの呆然自失ぶりには、彼女付きの侍女でさえ気味悪がって、めったなことでは近づこうとしなかった。

王が彼女を訪問することは、その後しばらく、全くなかった。

ジェニーが入城して一ヶ月経ったある日、ヴィレール王国に夕方から冷たい雨が降り出した。前日ほどに外気が冷えていないために雪に変わることはないだろうが、城の中が冷たい湿気で覆われ、多くの人を不愉快な思いにさせていた。

夜もだいぶ更けた頃、後宮の一室ではゴーティス王とその愛人の一人である女が室内の空気を体温で熱く変えていた。

彼より七、八歳年上のタチアミラは、赤い口紅の似合う肉感的な唇を持っている。そこが気に入って、彼は彼女を後宮へと引き入れたが、逆に今ではその官能的な部分が目につくようになってきていた。ひととおりの営みを終えるまで、彼女の大きな唇からは悩ましい熱い息が何度も漏れていたが、その一方で、彼はその呼吸音が耳障りに感じて、最高潮に達することができなかった。

「おお、王……！」

ゴーティスが息を整えて上下させる胸にもたれて、彼女はうっとりとした眼差しで彼を見つめる。彼女にそうやって見つめられることも、うっとうしい。

彼は聞こえないふりをして遠くを見るかのように視線をあげていたが、彼女はそれを悪いようにはとらず、彼の腕に顔をすり寄せた。

「王、そういえば……今度後宮にあがった娘」

「何だ？」

「何と言いましたかしら、あの――？」

「……ジェニーか？」

「ええ、そう。そうでした、ジェニー、でしたわね。彼女、ずっと部屋にこもりきりの様子で、ニーナ様のせっかくのお誘いも断ったそうですわ。……私たちはただ、お話がしたいだけですのに」

彼女がそう言ってちらりとゴーティスを上目遣いで見るが、彼はその話題には全く無関心な振りを装った。笑顔の下にある、彼女のあからさまな好奇心が彼をいらいらさせる。汗で顔に貼りつく髪を払いのけながら、彼はあいまいに頷いた。

「彼女はまだ十五、六の年若い娘とか？　お姿を拝見してはいないのでどんな娘か想像もつきませんけど。私たち、王のお心を捕らえたのがどんな魅力的な娘かと、少し気になっているのですわ」

「……ほう？」

彼は嫉妬感情からくる質問を向けられることに嫌気がさしていた。それでもさほど気にしていない振りをし、台にある葡萄酒に手を伸ばした。

「俺が、年少の趣味に走ったとでも危惧しておるのか？」
「いいえ、そんな！」
彼女は彼の機嫌を損ねてはならない、とあわてて酒の手伝いをしようとした。だが彼は、宴の時以外は他人の手をわずらわせずに自分の手で杯に酒を満たすことを好む。それを忘れて彼の手から酒壷を奪おうとしたタチアミラに彼はむっとし、彼女の手をかすめて壷を台の後方へと置いた。
彼女の唇は、今日会った最初にはしっかりと塗られていた口紅がすっかり剥げ落ち、ところどころがむらになっている。彼女の媚びるような目元も汗で化粧が醜く落ち、夜の薄明かりの中でさえも、同一人物とは思えない。彼の心は、ますます冷えていく。
「あの娘は、ある意味において魅惑的といえよう。それゆえ、ここに連れてきた。だが、あれはまだ幼い」
幼い、という言葉を耳にしたタチアミラがうっすらと意地悪な笑いを浮かべたのを、ゴーティスは見逃さなかった。使用人たちを通じ、ジェニーが彼に会うまで男を知らなかった事実は、彼女をはじめ後宮中に知れ渡っているのだろう。
「――幼いと知って、安心したか？」
杯の酒をあおり、彼が問うと彼女はすぐに顔を引き締めた。
「そんなつもりで申し上げたのではありませんわ、王」
彼女がおそるおそる彼の顔をうかがったが、彼は特に怒った素振りもせず、次の酒をついだ。タチアミラは目を細め、酒に濡れて光っている彼の唇に見惚れている。
夜更けになって強くなってきた雨が、窓の木板にぶつかって大きな音をたてていた。杯の半分ほどを飲み干したところで、彼女がゴーティスの右太腿の上に頭を預けてきた。彼女が再度、欲情してきた兆しだ。
自然に、彼が彼女の茶色い髪の中へと手を入れて頭をゆっくりとなでると、彼女は唇を薄く開け、心地よさそうに目を閉じた。そのうっとりとした彼女の全身を眺める彼の目は、しかし、女の体を求

める目ではなく、あくまで氷のように冷ややかだ。彼の手が彼女の耳に触れると、彼女の腕が彼の腿へと伸びた。ゴーティスの口が、笑ったように少し開く。

「口を開けろ、タチアミラ」

おもむろに、ゴーティスは彼女の顔の上に杯をかかげた。彼女はとろんとした目で彼を見上げ、真顔の彼がしゃべるのを音楽でも聞くように聞いている。

「これはおまえに捧げる。さあ、飲むがよい」

そう言うなり、彼が半分ほど酒の入っている杯を斜めに傾けたものだから、タチアミラはこぼれてくる赤葡萄酒を受け止めるために大きく口を開けた。赤く強い酒は彼女の舌に当たり、受けとめきれなかった酒が顎に零れ落ちた。せっかくの高級な酒をじっくりと堪能できることなく、その熱い液体は彼女の喉の奥に流れ込んでいく。そして、そんな彼女の慌てた様子を見ながら、彼は声をたてることなく笑っている。

ゴーティスの行動はいつも不可解で彼の愛人たちは常に不安と恐怖を抱いていたのだが、この時もその例にもれなかった。彼女に声をかけさせる機会を与えず、彼はしばらく冷笑し続けた。彼が投げ捨てた杯が、毛布の皺の波間にさびしそうに転がっている。彼女は彼を心配そうに見つめ、笑いが止むのを待っていた。

その終焉は突然に訪れた。

彼が無言で寝台から立ちあがる。

「王？」

自分の温もりがまだ残る寝所で、タチアミラが不安そうに眉根を寄せ、ゴーティスを見上げた。

「王、どうなさったのです……？」

彼はその問いには答えず、部屋の中央にある大きな肘掛いすに腰を落ち着けると、まったくの無表情で彼女の視線を受け流した。すでに、彼女の体に対しての未練も、思いも、何もなかった。

「王？」
「――タチアミラ。おまえは何故、ここに残っておる？」
「……えっ？」
彼女の恐怖の表情が、二人が出会った当時の場面を彼に思い出させる。タチアミラと姉はともに、ヴィレールが制圧した遠征先の領主の愛人だった。領主の隠し部屋に彼と兵士たちが踏み込んだ際、彼女は今と同様に恐怖に歪んだ顔を見せていた。
「俺が捧げた酒は、別れの酒だ。そして、おまえはそれを飲んだ」
「な、何を、王？」
「おまえにもう用はないと言うたのだ。さっさとここから去れ」
「おお！　まさか、王、どうかそんな事をおっしゃらず――」
「去れ。俺に同じことを言わせる気か？　おまえはこの城から、俺の視界からさっさと消え失せろ！」
「おおお、王！？」
タチアミラはあわてて寝台の上に起き上がろうとし、シーツに足をとられてその場に転んだ。その慌てふためきぶりとすがりつく様子は、出会った際と全く同じだ。負傷して体の自由がきかない姉をかえりみず、自分だけ助かろうと命ごいをした浅はかさ。ゴーティスのあの場での選択は、足手まといになる姉より、連れ行くのに容易な妹タチアミラをとっただけのこと。
「おお、どうかお許しを！　どうかお考え直しを、王！　私はここを出れば行く宛がないのです、王！」
「つべこべ言わずに早く立ち去れ！」
彼は寝間着を乱暴に体に巻きつけると、彼女に一度、背を向けた。
「そんな、どうか、王！　私にお許しを……！」
しかし、嘆きむせび泣く彼女の声は彼の神経をさらに尖らせ、彼は持っていた酒壷を彼女に向かって投げつけた。だが、それは彼女の体をはずれて後ろの壁に激突し、大きな音をたてて粉々に割れた。それにも腹を立てたゴーティスはついに怒鳴り声を出し、外に待機している衛兵を呼びたてた。

「衛兵はおらぬか！」
「御前に、王！」
一人の衛兵が素早く入室してきた。ゴーティスは激しい怒りのこもった目を彼にも向けたが、彼は当然、その視線に目を合わせようとしない。
彼の頑なで非常に怒り狂っている表情を目にした衛兵は、一瞬にして事の重大さを確信したようだ。寝台で泣き崩れる裸の女に驚いた事をすっかり隠し、これ以上彼の機嫌を損ねて死人が出ないよう、任務に徹することに決めたらしい。
「衛兵、今すぐこの女を城の外へ放り出せ！　即刻だ！」
「ははっ、ただいま！」
衛兵がタチアミラに駆け寄って肩をつかむと、彼女は首を激しく振り、奇声ともとれる声を出した。
「おお、王、お許しを！　どうか、どうか、今一度！　王、お側にいさせてくださいませ、お願いでございます……！」
「女、静かに！」
女の悪あがきがさらに悪い事態を招くことを恐れ、衛兵は一喝したが、半狂乱となっている彼女に効き目はない。王がそんな懇願を聞く耳を持たないのは知っているはずなのに。
「王！　おお、王！　どうか私に今一度！」
「うるさい！　さっさと連れてゆけ！」
「ははっ！」
叫ぶ女を両腕で抱え、衛兵は一刻も早く、彼の前から去ろうとした。男の腕の下で、つかめるはずもない王の手を求めて彼女は必死に両腕を伸ばし、自分を哀れんで叫んでいる。
「さあ、早くこちらへ来い……！」
暴れる彼女を必死に抱えて衛兵が扉を通り抜けようとしたとき、ゴーティスは彼を後ろから呼び止めた。
「待て、衛兵」
それは、不気味なくらいに穏やかな声だ。

彼は、とばっちりを受ける可能性に恐怖で顔をひきつらせ、一方の彼女は期待に表情を明るくし、ゴーティスの方へとふり向いた。ゴーティスは、大股で彼らの方へと歩み寄っていく。にこりともせず、冷たい目を彼女に注いで。

「ひっ――！？」

いきなり、ゴーティスはタチアミラの口に手を突っ込んで舌をつかんだ。

タチアミラの期待に輝いた表情が一瞬にして恐怖に歪む。彼女を支える衛兵も目を白黒させながら、つっ立っている。

ゴーティスは彼女の口に手を伸ばしたかと思うと――右手に隠し持っていた短剣で下からそれを振り払った。生温かい赤い血にまみれた小さな肉片が、床にポトリと落ちる。

「んぐっ……！！」

口をおさえるタチアミラの両手の指間から、血があふれ出て腕を伝わり、流れ落ちていく。焼けるような痛みでうめき声をあげながらも、彼女は目の前の王に対する恐怖から叫び声を出せず、彼女はひきつった表情を元に戻せなかった。衛兵も、王の怒りを買う恐ろしさから、彼女の体を決して放そうとはしない。

手に飛び散った血を服の裾で拭い、多少気がはれたゴーティスは息をついた。そして、床に根が生えたかのように動けない衛兵を見て、言った。

「これで静かになっただろう。連れていけ」

「……は！」

衛兵は床に投げられた王の短剣から視線をそらさず、返答した。

タチアミラの身に起こった悲劇は、瞬く間に後宮の住人たちに伝わった。後宮中は王の残酷さに震えおののき、それがいつ自分たちの身に降りかかるかもしれない、と誰もが底知れぬ恐怖に身をふるわせた。伝える者がいないジェニーのみ、その事件を知らずにいた。

◇　◇

王の愛人の一人が減って数日後、ヴィレール王国に雪が飛来して冬の始まりを告げた。屋外への出入りがままならなくなる不自由さから、冬季はゴーティス王が不機嫌になる。昨年の場合も同じで、この時期は、彼と直接に関わる機会のある人々は彼に人一倍神経を使い、自分がうっかり彼の機嫌を損ねて命を落とすはめにならないよう、最大限の努力をしようとする。それは後宮内でも周知の事実だ。

本来ならば新参者ジェニーにも最優先の注意事項として伝えられるべきだが、彼女は誰からも何も知らされなかった。王の訪問が皆無だったことで、後宮の人々が彼女を軽視する傾向があり、侍女でさえ、彼女に何も言わなかったのだ。

王城に初雪が降った日の夜、ゴーティスは真夜中に目を覚ました。胸の内が騒いで落ち着かない。戦にでも馬を駆りたてたい気分だったが、冬場ではそれも叶わない。彼はおもむろに起き上がり、靴を履いた。無意識に剣を身につけ、上着を引っ掛けて外に出る。

急に内側から開いた扉に、彼の寝室を護る衛兵たちは驚いて振り向いた。青白い顔色のゴーティス王が無言で現れ、彼の体から発散される妙な高揚感で、彼らは屈強なはずの体を瞬時に硬直させた。

「王、どちらへ……」

「すぐに戻る」

「ははっ」

衛兵たちの間を抜け、王は廊下の奥へと一人で歩いて行く。廊下のつきあたりに行き着く途中で、王の後ろに衛兵たちがその存在を消すようにして合流した。彼はもちろん二人に気づいたが、二人の気配は彼の神経を害するほどではない。

ゴーティス王の進む方向から二人は彼が後宮を目的地としていると想像していたが、彼はそれに続く通路に注意を向けることすらせずに素通りした。そして、ひっそりとしている城の本館に入る。

衛兵の二人が彼の意図を測りかねていると、彼は中央通路を左に

曲がり、階下に続く階段へ向かった。その時点で、彼らは王が何をしたいのかとはたと気づいた。地下には、城内の住人たちが“死の練習場”と呼んで恐れる王専用の剣の特別練習室がある。衛兵たちは、彼についてきた自分たちの身が危ういかもしれないと、緊張と恐怖で急激に胸の鼓動を一気に高まらせた。

練習場と名はついていても、ゴーティス王がそこで剣の腕を上げるために練習している姿は、ここ数年の間に目撃されたことはない。そこは誰もが怖れて近寄ろうとしない、王が年に数回、自らのどうしようもない血の高まりを治めるための犠牲者を出す部屋だ。

「衛兵」

「ははっ！」

二人はびくっと体をふるわせて、前を行く彼を見た。

「衛兵待機室に行って、交剣相手を一人連れて来い。あまりにも弱い奴を連れて来たら、おまえたちのどちらかと代わってもらうぞ」

「は、はい！」

二人はお互いを見て、役目を譲りあい、牽制しあった。やがて、一人が今歩いてきた階段を戻り、王の命令を持って衛兵待機室へと向かう。

冬の地下は地上より幾分暖かだが、地下特有の湿った、空気のこもったにおいがする。ほの暗く狭い通路を目的の部屋を目指し、ゴーティス王と衛兵は静かに歩いていた。彼と一対一になり、彼の後ろを歩く衛兵の緊張感は増すばかりだった。

「いっ？」

いきなりゴーティス王が立ち止まって振り返り、衛兵が心臓が飛び出すほどにびっくりして小さな悲鳴をあげた。

「しっ！」

王が衛兵に鋭く言い、壁際に身を寄せる。

「――王？」

「静かに。こちらへ来い」

彼は、王が顎をしゃくって自分の隣を示すのを見て、生きた心地がしなかった。ついに死ぬのかと思い、家族の顔さえ脳裏に浮かんだ。

「早う！」

王がむっとして押し殺した声で言い、衛兵は息をのんで隣に向かう。ゴーティス王の右手が腰の鞘から剣をゆっくりと抜き、目の前で光を見た衛兵は、鋭く光る刃先から視線が動かせなかった。脇の下に冷たい汗が一筋流れていく。だが、剣先は衛兵の方に向けられているのではなく、ゴーティス王の緊張と視線ももっと前方に向けられていた。

「部屋に……誰かおる」

衛兵がその方向へ視線をやる前に、王がかすれた声で言った。衛兵が驚いて目を見開くと、彼はまた顎をしゃくって“死の練習場”の扉を示した。

全身の動きを止め、衛兵が息をひそめて耳をすました。かすかに、何かがうごめく鈍い物音がしている。彼の反応を見たゴーティス王は剣を握り直し、足音を消して扉に近づいていく。

「王、私が先に――」

「邪魔立てをするな」

扉の前に着いたゴーティス王は真っ黒な炎を瞳に燃やし、衛兵の言葉を遮った。彼はその気迫に怯え、口をすぐに閉じた。

扉越しに音の根源を確かめようとしたゴーティス王だったが、ここはその部屋の目的のために従来よりも分厚い扉に交換されており、室内で起きる音の種類が特定できなかった。彼は、扉に強く耳を押しつけた。

「男の声だ」

衛兵がはっとして目を見開く。王はなおも音を聞き分けようとして耳に神経を集中した。

「それに、女もいる」

衛兵に振り返った彼は苦々し気に歪んでいて、こめかみに青筋が

立っていた。衛兵はその言葉で、室内にいる、命知らずで愚かな男女が何をしているかを瞬時に理解した。

「入るぞ」

部屋は剣を振り回す男たちが余裕で飛びまわれるほどに広い。ゴーティスが静かに扉を開けると、室内はほんのり暖かく、通路と同じくらいの明るさ――つまり、人工的な明かりがそこにはあった。

彼が扉越しに聞き分けた声の主を見つけるのは簡単だった。女の甘ったるい声が彼らのいる空間に充満し、男のしゃがれた喘ぎ声が湿った空気の中に響いていた。四角い部屋の左側、壁にほど近い床には重なり合って動く物体があった。衛兵はその正体をみとめて、あらためて大きな衝撃を受ける。一方のゴーティスの方は、つかつかとその男女の方へ近寄って行った。

ゴーティスに背を向けている男の下半身は裸で、床に膝をついた彼のふくらはぎには剣による古い傷痕があった。その男の腰にからまる女の足が白く闇に浮かび、床に体を投げ出した女は髪を振り乱し、快楽のために口を半開きにしていた。男が顔をのけぞらせて女を動かす度、女の口から声が振り絞られる。

恍惚に身を委ねながらも瞳を開けた女は、快楽を共有する相手の後ろにいきなり現れた侵入者の姿を見つけ、はっと驚いた。女がその人物が誰かを判別するまで、数秒もかからなかった。

「あ！　あああ！？」

彼女はあわてて男の腕をつかんで知らせようとしたが、彼は、女が自分にもっと激しさを強要しているのだと勘違いした。彼女の驚愕の表情さえも都合よく解釈し、男は女をつかむ手に力を込める。

「待っていろ、今――」

「ちが、ちがう！　後ろを！　後ろ……！」

女に手を強くはたかれ、男は面倒そうにゆっくりと後ろを振り返った。

「ああっ！？」

男の背後には、唇を震わせて彼らを見下ろすゴーティス王の姿があった。

「王！？　なぜここへ！　あ……そ、その、私たちは――」

行動を移すのは女の方が早かった。あれだけ締めつけていた男の体からぱっと脚を離すと、周りに散らばっていた衣服をかき集め、いまさらのように体を隠した。それを視界の端にとらえつつ、ゴーティスはあとに残された男の髪をむんずとつかんだ。

「ひいいいいい！」

男の髪をつかんで床に引き倒した彼は、女にもちらりと視線を走らせた。

「おまえたちの名を訊く気はないぞ！　一瞬で死ねることを、俺に感謝するがよい！」

「おお、どうか王――！」

ゴーティスは男の髪を引っ張りあげて体を浮かすと――目にも止まらぬ速さで男の首元を深くえぐった。男の首から、天井へと血流がほとばしる。

勢いよく噴出した男の血が目に入り、女は火がついたように泣き叫んだ。必死で、両手で目を拭っている。男が気絶して後ろにひっくり返ると、彼女は汚物か何かのようにそれを手で押しやり、気が狂ったように体についた血を取ろうとしていた。

肩で息をしたゴーティスはそんな彼女を軽蔑して見た。さっきまではあんなに情熱的にからみあっていた情夫に何の未練もないかのようだ。裸の女はまだ若く美しい部類だったが、その白く輝く裸体は下品で汚らわしかった。

「女」

ゴーティスが剣先で彼女の顎をつつくと、彼女はひるんで彼を見上げた。どこかで見たような顔だ。

「王、おお！　どうか、どうか、私にご慈悲を！　私は悪くないのです、男にここに連れ込まれただけで……！」

「おまえの汚らわしい言葉など聞くつもりはない！」
女は一言の悲鳴をあげることさえ叶わず、彼の放った左胸への一刺しで絶命した。
女は男の胸の上に倒れ、男の首筋から流れる赤黒い血が彼女の金色の髪を赤く汚す。二人の体から流れ出る大量の血が、床に大きな赤い染みを作っていく。血液ににおいはないと言われるが、室内に生臭い血のにおいが漂った。
二人を惨殺したゴーティスは、妙にすっきりとした気分で立ち上がった。気づけば、彼も一人目の男を切った際の返り血を浴びて、上半身が真っ赤に染まっていた。剣を宙で振り、刃の半分についた血を払う。
ゴーティスが扉の方に向くと、そこには彼の犠牲者となる予定だった衛兵の男と、その男を連れてきた衛兵が扉の前に驚愕の表情を浮かべて立ちすくんでいた。
「お、おケガは、王……？」
彼と一緒に部屋に最初に入った衛兵が青ざめた顔でゴーティスに尋ねた。
「ない。返り血だけだ。俺はこれから湯殿へ行く」
「は！」
その衛兵に続き、扉の前に立っていた男たちも彼に道を開けた。愚かな男女が先客としていてくれたおかげで、ひとりの衛兵は命拾いした。その安堵感を表面に出して王の機嫌を再び損ねてしまうのを恐れ、男はいつまでも神妙な表情を作っていた。

第一部　2．疑念―1

ジェニーはその日、同じく後宮の住人であるニーナという女の思いがけない訪問を受けた。貴族出身だという物腰はあくまで優雅で、女らしい曲線が美しい、王の愛人。柔らかな何重にもなるフリルの布かざりを胸元に縫いこんだ、薄紫色の豪華なドレスが彼女の長い茶色の巻き毛とよく似合う。微笑むとできる目の下のしわも、妙に官能的な女性だった。

「ごきげんよう、ジェニー」

背が高く色白の女はしずしずとジェニーに近づき、戸惑い気味の彼女の小さな手を取った。

「私はニーナよ。あなたの体調がいつもよくないみたいで会えないから、私の方からお見舞いをかねてご挨拶に来たの」

彼女の吸い込まれそうな大きな青い瞳にはどきどきしたが、やっとのことでジェニーも挨拶を返した。

「右も左もわからない後宮でお困りじゃない？　私も最初は慣れるまで時間がかかったから、よくわかるの。それにお知り合いがいないのでしょう？　私でよければ、お慰めになればと思って」

血管が透けて見えるほどに白く細い指、美しく魅惑的な表情。ジェニーよりは十ほど年上だろうが、それにしても、同じ女と思える造りではなかった。

「あの、お気遣いどうもありがとう」

彼女がそう答えると、ニーナは満足そうにゆったりと微笑んだ。ニーナが笑うその姿はとても美しく、周囲の皆を見惚れさせる。ジェニーはニーナに好印象を持ち、同時にその美しさには圧倒された。

「あなたのご出身はどちらなの、ジェニー？」

「それは――中央の街というところで、ここよりはずっと南の地方」

ニーナは思い出そうとでもするように首をかしげたが、すぐに首を振った。「聞いたことがない地名のようね、ごめんなさい」

「いいえ、小さい町だったから」
その答えによって、ニーナが態度を少し尊大に変えた。
しばらくの間、ニーナは自分の出身家のことや城内のことをゆったりと話していたのだが、彼女の部屋に来客があったと知らせが入ってそれは中断された。
「ジェニー、ではもう行くわ。いつでもお好きな時に私の部屋へいらっしゃい。私の部屋は侍女がわかっているわ。ここの暮らしに慣れるよう、私がいつでも力になるわ。いつでも歓迎するわよ」
「ええ。ありがとう」
ニーナが席を立って身を翻すと、高級そうな甘い香水の匂いがふりまかれた。その豪華であでやかな女の後に、侍女のブランが小股でちょこちょこと付いていく。部屋の扉の前でニーナが振り返って再度挨拶を言った際、背後のブランもジェニーに挨拶をしたが、それはまったく儀礼的で冷たいものだった。

二人が去った後、いつものように、若い召使がジェニーの部屋の炉に火をくべ直し、水差しの水を取り替えて食事の盆を無造作にテーブルに置いていった。最初の二、三日こそ、彼女におざなりでも気を遣っていた女は、今は無表情に彼女の脇を通り過ぎるのみだ。王がただの気まぐれで彼女に手を出したと配下では噂が出始め、それを信じた一人である女も彼女を軽視しているのだ。
彼女が部屋を動きまわる様を見るでもなく見ていたジェニーだったが、ふと食事用の木皿に目が留まった。一枚板から作られている食事用の棒とスプーン。それまで混沌としてまとまらなかった頭の中が、急に整理された気がした。
「それでは失礼いたします」
女が形式ばかりの挨拶をして退室するのを確認すると、ジェニーは静かに椅子から床へと立ち上がった。室温はまだひんやりと頬に冷たく、冬が到来したこの国では、窓の隙間から漏れてくる光も弱々しかった。

厚手の毛糸のショールを肩にかけ、ジェニーは部屋にある三つの窓を確認してまわる。南側の小さな窓は彼女の肩ぐらいの位置にあり、窓枠にしっかりと木板がはまっている。この木板は天気が良いときに外側に開閉できるようになっている。

そのうちの一つに近づき押し開けようとすると――石壁と木がすれる鈍い音がしてゆっくりと開いた。同時に、冷たく湿った空気と白い花びらのようなものが舞い落ちてきた。

「雪！」

外は細かいさらさらの雪が音もたてずに舞っていて、窓の向かい側に見える棟の窓枠や外壁にうっすらと白く化粧をしている。

ジェニーは白く明るい外の世界に一瞬あっけにとられ、辺りを見渡した。彼女の生まれ故郷ではこんな早い時期から雪など降る事はない。それほどに、彼女は北の国に移動してきてしまったのだ。

あらためて異国の土地に居るのだと自覚し、彼女の両目からは涙がとめどなく溢れてきた。手で何度ぬぐっても、それは流れてきてしまう。

一ヶ月ほど前の故郷での焼き討ちの光景。瀕死の兄ローリーの頭上に落ちていった屋根材。世から白麗王と呼ばれるゴーティス王の温かい肌の感触。

乾ききらない傷痕を鋭利な刃物で突かれたかのように胸が痛み、あの王の腕に負けた悪夢のような宴の夜が鮮明によみがえってきた。わずかな期間で、彼女の生活が信じられないほどに一変してしまった。

私は、あの男を倒さなければならない。

さっきまで窓から逃げ出そうと考えていた余念は消え、彼女の瞳からは涙が自然とひいていく。疲れ果てていた体にさえも活力がみなぎって、熱くなっていく。

そう、あの王を倒さなければ。でも……どうやって？

彼女の元々持っていた武器は当然取り上げられ、部屋にも武具など置いていない。

代用できるものを探し、彼女は親から受け継いだ知識を駆使して、部屋にある物を注意深く見ていくことにした。木灰剤、髪留め。飾り棚にあった黒い皿にそれらを記入する。彼女は、何ができるかを必死に考え出そうとしていた。

ついに、彼女は入城一ヶ月目にして自力で自室を出た。本来ならば侍女と出歩くはずだが、運良く、付くべき侍女からは見放されている。

彼女は後宮内を調べてまわるつもりでいた。後宮入りして数日後に、女官長より館内の造りや施設の説明は受けている。数名の王付き“特別侍女”、つまり、愛人たちが各部屋に暮らし、その倍以上の数の空室、広間が数室、食堂、サロン、遊戯室、地下には風呂施設。他の棟に通じる通路には衛兵が配備され、外からの来訪者を厳しく制限し、後宮の住人たちの移動を制限している。

彼女はまず、自室のある二階を見回ってみようと思っていた。部屋の外からは人の声がしない。昼間でも薄暗い廊下を静かに歩いていると、運悪く、複数の使用人たちと出くわしてしまった。怪訝そうに自分を見て何かを言いかけた女たちの顔に面し、彼女はあわてて部屋へ戻るしかなかった。

数日後の早朝、ジェニーは何度目かの探求を実行した。廊下も館内もひっそりとしており、ひと気がまったくない。愛人たちは眠っているだろうし、後宮務めの付き人たちが動き出す時間にはまだ早かった。ジェニーが一人歩いていたとしても、それを咎める者には誰も出会わなかった。

自室のある二階から階段を下に降りると、廊下がいきなり広くなった。人の姿こそ見えなかったが、遠くから複数の女たちの話し声がきこえ、いくぶん賑やかな雰囲気だ。

彼女は城に実際に入った事こそなかったが、建築に詳しい父から貴族の邸宅や宮殿の造りについて、幼い頃よりたくさんの話を聞かされていた。主寝室や重要な棟には必ず何かしらの脱出口が造って

ある、と彼女は知っていた。それがこんな意外なところで役立つとは。

廊下を壁に沿って歩いていったジェニーは、広間の手前まで来た。扉前の通路に凝った造りの装飾棚がある。その白石でできた大きな装飾棚上部の半円形の部分に、彼女は若干の違和感を覚えて立ち止まった。半円の右半分を縁取る部分が、左半分に比べて綺麗すぎる線を描いている。ためしに、彼女がその棚を手の甲で軽くたたいてみると――音が内側で反響している！

とっさに周囲を振り返って誰もいないことを確認したジェニーは、意を決し、棚の右半分の部分を両手で押してみた。すると、かなりの重量があるが、棚全体の右半分が後ろにずれていくのがわかった。

隠し扉だ……！

興奮状態で彼女は背でそれを押し、白い石扉が重苦しい音をたて、ほんの数センチ動いたのを見て、狂喜した。

サンジェルマンが女官長と真剣な面持ちで話しこんでいるのを見たのは、新しい剣の納品があり、ゴーティスがその性能を試そうと剣技場に歩いている途中だった。雪はこの数日間降っておらず、外の地面は乾いていた。

通路の窓越しに見え隠れする二人は、中庭の池近くでひっそりと話しており、女官長が少し興奮しているようだった。彼女からの話というのはほとんどが後宮内の事情に違いなく、しかしその大部分は、ゴーティスの耳に届くことはなかった。

女の愚痴などきかされてご苦労なことだ。

ゴーティスは大きな関心を示すことなく、付き人たちと一緒に剣技場へと向かった。

新しい剣の切れ味は素晴らしく、ゴーティスは上機嫌で夕食の席についた。これまた、彼の好物である子牛肉の料理がテーブル上にあり、デザートのパイまで食べきった彼は、良い気分のままに遊戯

室へと移った。そこは、いつもどおりに適温に部屋が温められ、彼が来ると同時に赤葡萄酒とつまみが数点用意された。一緒に飲む相手を頭の中で選んでいたとき、サンジェルマンがサロンへ姿を現した。

「王、話があるのですが」

「サンジェルマンか。よいぞ、酒を取れ」

ゴーティスの言葉にあわせ、給仕が素早くサンジェルマンのための酒をつくった。

「いえ、私は」

「座れ」

彼はゴーティスの誘いに従って腰かけはしたものの、酒の杯には口をつけない。

「堅い男だな、おまえは。一体、何の話だ?」

サンジェルマンは笑顔で王にうなずいたが、給仕たちを目でおって、王に言った。

「王、あまり好い話ではありません。お人払いを」

ゴーティスは彼の顔を怪訝そうに見返したが、その表情から何かを読み取り、即刻、部屋から給仕たちを下がらせるように命じた。サンジェルマンは用心深く、彼らが退室して扉がしっかりと閉まるまでは一言も口をきかなかった。

「それで?」

王は多少おもしろがったふうに、サンジェルマンに先を促した。

「何の話だ? 俺の暗殺計画でもあったか?」

彼はかぶりを振った。

「ジェニーの件です、王」

「“ジェニー”?」

しばらくの間彼女から関心が薄れていたゴーティスは、彼女の名前と顔を一致させるのに少しの時間を要した。

「ああ……あの、命知らずな娘か」

「はい」

「あの小娘が、何かやらかしたか？」
サンジェルマンは王を見つめ、慎重に切り出した。
「王、あの娘は真にただの村娘でしょうね？」
「……どういった意味だ、それは？」
「今日、女官長よりジェニーの件で報告を受けたのです。彼女が、後宮一階の隠し扉を開けているところを女官長が発見したそうですよ」
ゴーティスは、サンジェルマンと女官長が中庭で話しこんでいた光景を思い出した。女官長が大げさに騒ぎたてる様子が簡単に目に浮かぶ。
「口さがない誰かに聞いたのであろう。それか、偶然だ」
「偶然に見つけられるものではありません。それに、扉の存在は侍女たちでさえ、知りえません」
ゴーティスは彼の物憂げな表情を読み取って、先手を打って言った。
「他にも何かあるのか？」
「ええ。ジェニーの部屋を点検した召使が、二つの窓の十字格子が内側から折られているのを見つけました。女官長が問いただしたところ、ジェニーが自分でやったと認めています。布を格子に十字にしばりつけ、木製スプーンを布にくくりつけて左にまわしていくと、力のない彼女でも簡単に壊せたそうです」
サンジェルマンの訴えに、ゴーティス王は肩をすくめた。
「ほう。ここを逃げようとしたのか」
「そうでしょうね」
「なるほど、知恵のある娘だな」
「感心なさらないでください、王。それだけではなく、ジェニーはこれを所持していました」
そして、サンジェルマンはオークの実でできた首飾りのようなものをテーブル上に置いた。実は三分の一ほどのところで横に切られており、その切れ目に白い粉のようなものがついていた。薬に対し

て警戒心が強いゴーティス王は、それを見るなり、顔をひきしめた。
「ジギタリスか？」
「いえ、毒薬ではありません」
サンジェルマンは蓋となった上部を開き、中に詰められた白い粉末をテーブルに出した。匂いはない。彼は、小指の先でその粉末をとると、自分の舌にのせてみせた。
「生薬のセッカイです。このままでは体に害はありません。ですが、ご存知のように」
今度はゴーティスが、赤葡萄酒の入った杯をオークの実のそばへと置いた。
「――葡萄酒と混ざれば、死にはしないが全身痙攣がおこって立てなくなる」
数年前にその汁を飲まされた苦い経験を思い出した彼は、サンジェルマンの言葉を次ぐ形でそう言い、オークの実をつかんで壁へと投げつけた。胃がむかむかとした。
「俺に飲ませる気だったというのか！？　どこぞで入手したか！」
苦々しくそう吐き捨てたゴーティスに、サンジェルマンは穏やかに言った。
「ニーナ嬢からもらったハーブを粉にし、ジェニーが作ったのですよ」
「……なに？　作った、だと？」
「ええ。わざわざ、作ったのです」
サンジェルマンが言わんとしている意味をやっと理解し、ゴーティスは眉をひそめた。
「王？　これは、戦を経験している者が知っている知識であれ、片田舎の娘が知ることではありません。あの娘は剣の扱いもできるのですよ、王。セッカイを作って隠し持っていただけで充分に危険な存在です。まさかとは思いますが、王のお命を付け狙うどこかからの回し者かもしれません。私は、あの娘を王のお側へ、いえ、城へおくことさえ反対です」

断固とした口調のサンジェルマンに、ゴーティスは理解を示した。けれども、ジェニーの言動を思い出し、暗殺者としては抜けすぎている彼女に、つい笑えてしまう。

本当の策士でどこかの暗殺者ならば、彼女のように反抗的な態度はとらず、証拠をあっさりと敵に取られてしまうほど愚かではない。彼女は、兄の敵である自分を殺したいと思っているだけだ。だが周囲の状況は反対で、彼女には新しい侍女がつき、常時、彼女を見張っているような状況らしい。

彼は冷静に考え、サンジェルマンの疑念を一蹴した。

「俺は、むしろ回し者だとは考えぬ。暗殺者にしてはぼろが出すぎておるからな。おまえの言うように、ただの村娘にしてはでき過ぎるのは認めるが」

「王。されど、王の御身を危ぶめる者をお側におくわけにはまいりません」

サンジェルマンが再度注意をうながすように言ったが、彼は取り合わない。ただ、彼女への興味はわいた。

「あれは当分、城においておけ」

「ですが、王」

「かまうな。刺激が近くにある方が面白い。おまえは、俺があんな小娘にみすみすやられるとでも思うか？」

「いいえ。しかし、万事を期すのも大事かと存じます」

ゴーティスは苦笑した。

「心配性だな、おまえは」

「あの娘の監視は続けますよ、王」

サンジェルマンは王に頭を下げた。

「好きにせい。おまえが気になるなら、素性も洗え」

「はい、王」

サンジェルマンが退室し、ゴーティスは彼から聞いた話を反芻した。そして、ジェニーの肌の質感も思い出した。ジェニーとの最初の夜以来、彼の頭からは彼女への興味は薄くなっていたことは確か

だが、今回の一件でその関心はどうやらぶり返した。後宮にもしばらく足を運んでいなかった王は、何かに取りつかれたようにその場から立ち上がった。

その夜、一週間ぶりに後宮に姿を見せたゴーティス王に、後宮勤めの女たちは密やかに色めきたった。ジェニーの元へ向かうことは事前に一部には知らされていたが、それを知らない下働きの女たちは働く手を休めず見て見ぬ振りをし、どの愛人が今夜の相手なのかとゴーティスが階上へ向かう動きを追っていく。薄暗い通路を風のように颯爽と歩いていく、若く美しい王は、どんなに怖れられてはいても、女たちの憧れの的ではあった。

一方、ゴーティス王の来訪を告げられたジェニーは召使たちに身支度を整えられながら、逃げるわけにもいかず、落ち着かない気分でその時を待っていた。彼女の寝室はいつにもまして整理整頓され、王の好む酒が用意され、室内は暑いくらいにまで暖められている。ついさっき手入れされたばかりの爪先をいじりながら、ジェニーは何度も小さく息をつく。

彼を倒す準備もまだまだなのに。

一度の気まぐれで済まなかった証拠でもある今夜の王の来訪は、ジェニーが今後も後宮の住人として滞在するという意味において、使用人や他の愛人たちには重要な出来事になる。ジェニーの二度目の“お召し”は、口の軽い噂好きな女たちによって、あっという間に他の愛人たちの耳にのぼることだろう。

ジェニーの緊張して落ち着かない様子を、新しい侍女アニーに加え、モンペール女官長までが横で緊張して見つめていた。

冬に入ってから気の立っている王は、数日前にアニーの前任者であるジェニーの侍女と情夫を刺し殺したばかりだ。王専用の部屋で情事に興じていたなどあまりに逸脱した行為で、それぱかりは王の殺傷行為の方が正しい。愛人タチアミラの傷害・追放事件からも、

それほどの日数が過ぎていない。そんな状況下だというのに、庶民出身ののんきな少女ジェニーは、女官長に目眩を起こさせる、いくつかの無謀な行動をとってきている。

一連の彼女の行動から、女官長は彼女が脱出を試みているのだと疑い、その日の夕方、自分の境遇を客観的に見て幸せに思うのが常識だと彼女にくどくどと説教をしたばかりだ。天涯孤独の若い娘が、この世の中でどうやって生きながらえていけるのか。普通なら肌を売って生き延びる選択しかない境遇で、国王の寵を受けるのがどれほどの幸運なのかと。

最初こそジェニーがことごとく反論していたが、所詮、貴族社会で生きてきた女官長と彼女は話が通じる相手ではなかった。話が平行線になり、女官長が途中で一方的に話を切った。

女官長は、今後は彼女の行動を逐一注意していると彼女に警告もした。前任者の例もあり、侍女アニーにも口をすっぱくして注意をした。それでもまさか、ジェニーがゴーティス王に復讐を果たそうとまで考えているとは、女官長もこの時点ではまだ気づいてはいなかった。

第一部　2．疑念－2

ゴーティスが部屋へ通されると、そこには三人の女たちが彼に頭を垂れて挨拶をする図があった。向かって左より、女官長、侍女、ジェニー。女官長はいつにもなく深々と彼に頭を下げており、侍女は見慣れない小太りの中年女で、ジェニーはきちんと着付けられ、頬が赤らんでいた。

ジェニーに視線を止めたままで三人が頭を上げるのをゴーティスが待っていると、最初にジェニーが顔を上げた。彼女は彼と目が合うと瞳に反抗心を燃え上がらせたが、どことなく動揺しているようで、緊張感も漂っている。ゴーティスは、次に顔を上げた女官長を冷ややかに見た。

「女官長にまで出迎えられるとは思わなんだな」

「王においてはご機嫌うるわしく存知ます。一週間ほどお顔を拝見しておりませんでしたゆえ。たまには良いではありませんか」

彼女は素晴らしい笑みをうかべ、主君にそう丁寧に述べる。

「それは時と場合によろう」

ゴーティスが答えると女官長は一瞬口をつぐんだが、すぐににこやかな表情を戻した。ゴーティスは、女官長とは違う方向に視線をやった。

「ジェニー、来い」

ゴーティスはジェニーにあごでついてくるように示し、彼女もおずおずと彼の後をついてくる。彼らが向かう先は南側の壁の方で、その壁にはジェニーが格子を折った窓がついている。

女官長と侍女が顔を引きつらせる中、ゴーティスはそのうちの一つの木板を素手でつかみ、力任せに引っぱった。留め金が盛大な音をたてて壊れてはずれ、開口部が見えるべき場所が石でふさがれているのを目にした彼は、思い切り笑い出した。

「何と言うザマだ！　なんと間の抜けたやりよう！　ジェニー、お

まえは本気で脱出をはかったのか？」

女官長たちの青ざめた様子に反し、ジェニーは彼の行動に困惑したように顔をくもらせる。

「おまえのために知らせておくが、この窓の下は衛兵たちの待機する場だ。常に、見張りの男たちがいる場所だ。それでなくとも中庭に面する最も目立つ壁づたいに逃げるのは、捕らえてくれと言わんばかりの愚かな行為だな。ここから抜け出たい気持ちはようわかったが、ならば、別の方法を試みるべきだ」

困惑気味の彼女の腕をつかみ、彼はその窓の近くに引き寄せる。

「されど……この俺のすぐ足元から抜け出そうとする、おまえの大胆不敵さには感心する。それを、別の場面でぜひ発揮してもらいたいものだ」

はずれた木板を部屋の端に蹴飛ばした彼は、その行為に恐れをなしている侍女に気づき、女官長とともに退室するように合図した。女官長はジェニーに対して不信感を抱いているので名残惜しそうに彼女を見ていたが、王の機嫌を損ねる前に、侍女と一緒に部屋を出て行くしかなかった。

二人がいなくなった部屋に王と残されたジェニーは、彼に対する警戒心をいっそうむき出しにした。

「ここは寒い。あちらへ行くぞ」

彼女は彼を見上げ、傲慢な笑顔をうかべる彼をにらみつけた。無礼極まりない態度ではあったが、彼は、彼女のそんな反応に面白がっているようだ。

「来い」

彼女は首を横に振りつづけ、王の腕から自分の手を引き抜こうともがいた。すると、彼は顔をしかめ、腕に力をこめて彼女の腕をぐいっと自分の方へ引っ張った。

「いつまでも俺に逆らおうとするな。自分の立場を受け入れろと女官長にも言われたであろうに。来い！」

いやだ、私はまだこの男を殺す算段を何もしていない……！

彼女は焦りと恐怖、嫌悪で顔をひきつらせ、彼の指を腕から取ろうともがいた。

「やめろ！　せっかくおまえに対して優しくしてやる気でおるのに、この間のように手荒にさせたいか！」

宴の夜の惨劇を思い出し、ジェニーは顔をかっと熱くした。彼が驚いたようにジェニーを見つめ、彼女から目をそらさない。

「……来い」

隣の部屋へ移動しようとする王にジェニーは足を踏ん張って抵抗したが、彼女の肩を抱いた王はいとも簡単に彼女の体をそこから動かした。彼の手で引きずられるように寝室へ移動させられた彼女は、ほどよく明かりの落とされた、暖炉の放つ非常に暖かい空気に迎えられた。冷えた手足がすぐに温められた。

炎のような目で自分を見つめる王の目から逃れようと、彼女は視線をあちこちにさまよわせ、左足にほんのちょっと体重を移動させた。が、彼はその動きさえも許さないというように、彼女の左肩をつかむ。

「ジェニー、こちらを向け」

それを無視し、彼女は首を後ろに引いて、王の口から漏れる息から逃れる。彼の体から匂いたつ香りが恐怖を覚えさせる。

「おまえ、俺に口をきかぬことで反抗しておるつもりか？」

腕をつかんでいた彼の手が、彼女の肘を伝って二の腕の感触を確かめながら移動していく。

「この――肌の質感。娘にしては、引き締まった腕の筋肉」

「やめて！」

彼の手に触られることにぞっとして、彼と再会して初めて口をきいたジェニーに、王は唇の右側だけ上げて笑った。

「ようやく口をきく気になったか」

王は肩にある手をジェニーの顎に移し、もう片方の手で彼女の尻部分を抱え上げた。

「何をするの、降ろして！」
彼女は不安定に揺れる体のバランスを取りながら、背後にある寝台を振り返った。
「放してよ、ゴーティス王！」
「まこと、おまえは往生際の悪い」
「放してよ！　あなたには、私でなくてもたくさんの女が手に入るじゃない！」
彼女が叫ぶと、急に彼の獣の顔が無表情な男に変わった。その表情のない目で見られると、彼女の全身の筋肉がこわばっていく。
「たしかに。おまえである必要はない」
王の目が氷のように冷たく変わり、彼女はぞっとした。そんな突き刺すような人の視線は、今までに見たことがない。彼の首についた自分の手の下で、彼の脈がだんだんと速くなっていくのがわかる。
突然、ゴーティス王が怪訝そうに目を細めてジェニーを見た。
「おまえ、中央の街より前にはどこに住んでおった？」
「えっ？」
彼女の体を支え、王はさめた目で彼女を見上げる。
「他の場所にいたはずだ。どこにいた？」
「なぜ？　なぜ、そんなことを訊くの？」
ジェニーは混乱して王の冷たく光る目を見返した。
「言え。どこにおったのだ？」
ジェニーにからめた腕から力を抜いてその体を自分の前にすべり降ろさせ、王は彼女の瞳をのぞきこんだ。「言え」
「なによ。どこでもいいじゃない」
彼女は、一ヶ所に定住していたと否定をしなかった。彼はなおもしつこく食い下がった。
「俺の質問に答えぬのか！　どこにおった！」
「それが……何なのよ！　ニースよ！　その前はテレーズ！　シャンブリー、リモージュ、それに、ベルアン・ビルにだって住んでいたわ！」

それはどこも近隣の小さな公地名で、ヴィレール王国とは直接的には関係がない地方ばかりだ。だが、何かが引っかかる。

「なぜ、そんなに移動を重ねていた？」

「なぜって？　どうしてそんな事を訊くの？」

「俺に質問するな！　おまえは俺に答えるだけでよい！」

濃い緑の瞳が鋭くきらめいた。腰を押さえつける王の手に力がこもり、彼女は仕方なく口を開く。

「理由なんか、知らないわ。引越しはいつも突然で、行き先は両親が決めたわ。どこにも……ベルアン・ビル以外のどこにも、知り合いはいなかった」

家族同士は親密だったが、移住を繰り返していた時期は、彼女は兄とともにいつも孤独だった。中央の街に住み着いて以来、彼女には友人や恋人らしき者ができて充足感を覚えはじめることができたのだ。彼女は温かな心の平安を感じていた。彼女が受けたヴィレール軍の急襲は、そんな矢先に起きた。彼女の目の前にいる男が率いるヴィレール軍は、一瞬にして彼女の幸せな生活の全てを奪ってしまったのだ。

女官長に自分の立場を受け入れろと言われても、誰がその境遇をすんなりと受け入れられるのか、彼女にはまったく理解できない。

彼女の両目に浮かびあがった涙を見つめ、ゴーティスはたった今聞いたばかりの情報を反芻した。一般的な見方をすれば、彼女の一家は生活に困って移住を決意したというより、他に何らかの理由があって、追っ手から逃れるようにして数年ごとに居住地を去っているように思えた。

「おまえの姓は何だ、ジェニー」

「名字？　それがあなたに何の意味があるの？」

「俺に質問はするなと言うたはずだ、いちいち訊くな！　言わぬのか？」

彼が彼女の頬に顔を寄せて脅すように大声を出したので彼女はひ

るみ、呟くように答えを口にした。
「“剣使い”よ」
「は？　――何だと？」
彼はその返答に耳を疑った。
「剣使い？？」
ゴーティスの、大きな驚きをもった反応に彼女は戸惑ったようだ。
「それがおまえの姓なのか？」
「ええ、そうよ。“アマレット”よ」
彼女の姓はヴィレール古語で“剣使い”という意味を持つ。
意味ではなく音で言葉を聞き、彼は彼女の姓をようやく知った。
偶然の一致かもしれないが、ゴーティスはジェニーの一家に何かしら引っ掛かるものを感じた。

ジェニーは、王の思案した様子を不審に感じた。
「なぜ、急に私の事を知りたがるの？」
「俺に、何かを尋ねようとするな」
彼は心ここにあらずのように見え、ジェニーをつかむ手から力が抜けていた。このまま手を放してくれないものかと、ジェニーは自分から数センチの距離にある王の体を上から下まで眺めた。
「ベルアン・ビルの知人の名は？」
ジェニーの視線が上に戻った時、それを待っていたかのように王が別の質問をした。彼はジェニーの瞳を見つめて視線を合わせると、頬の曲線を下って彼女の唇に視線を移した。ジェニーは、王の重い視線に動きを封じこめられた。
「言え、ジェニー」
王の声は低く、聞き取れないほどだった。
「……知人じゃなくて、叔母よ」
「叔母？　親類がいたのか。名は？」
質問はもうたくさんだ。自分の境遇を思い知らされて、気分が沈む。彼の発する不快な重い視線にも、耐えられそうもない。

彼女は目をつぶった。その直後、彼女の唇が湿って温かな唇で覆われた。

「う！」

彼女が目を開けて体をのけぞらせると、そこには冷ややかな目をした王がいた。

「その反応は何だ？　おまえが目を閉じたから、俺は望むものを与えてやったまでだ。違うのか？」

ジェニーは呆れ、猛烈に腹が立った。

「あなたって……何て人なの？　私がそんなものを欲しいわけがないじゃない！　どうしてそんなに家族について聞きたがるの？　あなたが奪った私の家族について、あなたが知ってどうす――きゃっ！？」

全部を言い終わらないうちに王に足をすくわれ、彼女は床に転がった。

「何を――！」

「おまえには耳がないとみえる。俺の許可なく質問をするな！　俺に口答えをすることも許さぬ！　俺はおしゃべりな女は嫌いだ。いつぞやの女のように舌を切り取られたくなければ、口は慎め！　おまえはただ、俺の言うことに答えればよい！」

女の舌を切ったなど、いかにもゴーティス王がやりそうなことだ。恐怖になりかわり、憎らしさがジェニーの胸に広がった。ジェニーは奥歯を噛み締め、目の前の男を見つめる。

憤怒をためて王を見返すジェニーの隣に、王がひざをついた。

「その目も気に入らぬ」

「……どんな人でも、人の感情までは支配できないわ」

王は不快そうに顔をゆがめ、自嘲気味に笑った。

「残念だが、それは必ずしも正しくない」

彼はジェニーに顔を近づけ、淡々と言った。「だが面白い。他の者が同じ台詞を吐けば即刻殺してやるものを、おまえが言うと、俺はなぜか興味を引かれるようだ」

ジェニーは手を床について体を起こそうとし、彼の手でまた床の上に押し戻された。

「ジェニー、叔母の名を言え……」

彼の親指がジェニーの腹をなぞり、円を描き始めていた。彼女がはっとして彼を見上げると、さっきまで冷めていた王の顔は、男の欲望で色塗られていた。ジェニーは焦り、言い放った。

「どうでも――どうでも、いいじゃない！」

「ほほう、なるほど。おまえは、俺の言葉を聞く気はないらしい」

ジェニーが彼の腕を振り払うと、王は眉をひそめて彼女の目を見た。

「おまえは賢い女だ。生き延びたいならば、今何をすべきか、何が得策か、ようわかろう？」

王が、ジェニーの背を手で押さえた。

「静かにしておれ」

「いやよ、私は――！」

「おまえの感情になど用はない」

王が、逃げようとしたジェニーの腰にひざを乗せ、背後から彼女の足にのしかかった。

「やめて！　痛――」

「暴れるな。怖がらぬでもよい」

だが、彼はその言葉のように優しくはなかった。彼女が着ている寝間着の長い裾を上まで急いでたくしあげ、彼女を体の下に押さえながら、もどかしそうに自分の服を脱いでいる。

ジェニーは床の上で逃げようと、必死で彼の手をどかそうとした。この男に二度も征服されるのは、絶対に嫌だった。

「そう動くな」

「いや！」

「おまえは、俺の言うことが聞けるはずだ」

ジェニーの耳元で彼は囁き、彼は後ろから彼女の胸に手を伸ばして服の上からそれを強くつかんだ。その衝撃で腰が引けた彼女の尻

を持ち上げ、彼は耳元で小さく笑う。
「こんな事をしたって、何も変わらない……！」
「そうか。では、おまえが抵抗する必要もないな」
ジェニーが泣き叫んでも、彼は彼女の体を簡単に抱きかかえた。腿の内側に温かな肉の感触があり、ジェニーは身震いする。耳の後ろで息に似た笑い声がした。
「そう硬くなるな。この間のようにそれほど痛くはない」
ジェニーの耳のまわりに濡れた生温かい舌がつたい、彼女は涙が出そうになるのを必死に堪えた。
今何をすべきか？
何をすべきか……！
ジェニーが、今まさに彼女の内側に入ろうとしている背後のゴーティス王に振り向くと、彼は少しだけ目を細めて彼女に視線をやった。
私は、私の感情までをこの男に振り回されたくない。自分の身を嘆いたり哀れんだりして、涙などもう流したくない……！
彼女に入ってから、彼は彼女の耳に唇をつけ、囁いた。「何だ」
王の作る痛みを我慢し、ジェニーは必死で顔を上げ、背後の彼に振り返る。
「顔を……あなたの顔を見たい」
ジェニーは彼の唇から顔をそむけつつ、言った。王は彼女を怪訝そうに見つめ、にやりと笑う。
「俺の顔をか？　おお、よいぞ。悪くない傾向だ」
「そうじゃ――」
彼の作る振動で、彼女が一瞬、顔を歪めた。それを目にした彼の顔が、高揚して赤くなる。
「悪くない表情だ。もっと見せろ」
王は後ろから彼女の首に腕をまわし、彼女の顔を引き寄せようとした。
「ちがう、私は……私は――」

体の真ん中が痛かった。ただただ早く終わって、この肌の下から逃れたかった。

「どこを、どうしてほしい……」

ゴーティス王が温かな吐息をジェニーの耳元でもらす。

「私は――こんなひどい事をする人の顔を、覚えていたいだけ……」

ゴーティス王が顔を強張らせた。彼女を揺する彼の動きが、さらに早く激しく変わる。

◇　◇

自分がどうやら監視されていると勘づいたジェニーは、彼らをなるべく刺激しないようにと行動を注意していた。彼女が独りになれる時間は睡眠時間以外にほとんどなくなってしまい、常に侍女か誰かが側につきそっていた。おまけに、彼女の徘徊事件のせいか、女たちによる夜中の見回り回数が増えたらしい。彼女はがっかりしながらも、ほとぼりがさめるまでの我慢だと自分に何度も言い聞かせ、後宮生活を送っていた。

王の二度目の訪問があってからは正式な後宮の住人だと認められたのか、ニーナに加え、アンヌ・マリー、カトリーヌ、オルディエンヌという他三人の王の愛人とも顔を会わせる機会があった。

本来ならば彼の正式な妻である王妃が居住する後宮という場所に、彼は国内外からの結婚の申し込みを全て拒んで妻を持とうとせず、愛人ばかりを何人も住まわせている。後宮を愛人でうめるような生活を始めてから、かれこれ一年半もたつそうだ。その間、愛人たちとの間に、彼の子どもは一人も生まれていない。

アンヌ・マリーは濃茶色の豊かな長い髪を持ち、瞳が大きく、大柄な女だった。感情をはっきり表すタイプらしく、廊下でばったりと出会ったジェニーに軽蔑したような態度をとり、嫉妬心と怒りをあらわにして彼女の肩に体当たりして去っていった。ジェニーに対

する同様の感情をひた隠して余裕ぶってふるまうニーナとはちがい、正直でわかりやすい女だ。

あとの二人は比較的に穏やかな性質らしかった。カトリーヌは正統派の北ユーロ人の美女で、金髪と薄い青の瞳が優しげで、色が白く、豊満な肢体の女だ。貴族出身のニーナや王の初期の愛人であるアンヌ・マリーに非常に気をつかい、二人のような敵対心をジェニーには持っていないようで、気楽でのん気な感じを受けた。オルディエンヌは背が高く、手足が細くて長いが、胸は目立って大きかった。ただ、その目立つ風貌とは裏腹に、従順で寡黙なおとなしい女だった。彼女は後宮内にいる女たちの力関係に巻き込まれるのを嫌い、あまり部屋から外出することがないと聞いた。

どの女も違う種類ではあるが見事な体をもった美女揃いで、弱冠二十歳だというゴーティス王よりは全員年上の大人びた愛人ばかりだった。少女のようなジェニーの存在が浮くのもよくわかる。ジェニーが入城した時にはまだ居たという愛人の一人は、王によって退去させられたと聞いた。

「退去させられることもあるの？」

思ってもみなかった選択肢だ。それが叶えば城外に出られる。

「なぜ？　その理由は何なの？」

「私は存じませんね」

アニーは素っ気なく言い、他の付き人たちもこぞって迷惑そうな顔をして、知らない、と首を振った。

「そんな憂き目に合わないよう、どうかお気をつけくださいますように、ジェニー様。おわかりですね？」

アニーは疑わしい目で主人に言い、ジェニーは、その話題にそれ以上触れるのをやめた。

第一部　2．疑念ー3

久しぶりに明るい空がひろがったある晴れの日。

ジェニーが城で過ごして一ヶ月半ほどたった日の朝、彼女はアニーと連れ立って中庭に面するサロンへ出た。サロンの半外となっているポーチから続く石段を降りると中庭に出られる。ただ、後宮の住人たちは衛兵がつきそっていないと建物より外には出られない。

ジェニーたちはポーチに立ち、外の風を感じながらそこから景色を眺めることとした。出入口となっている場所には頑強な衛兵二人が中庭を向いて仁王立ちしているが、有事の時以外には後宮の住人たちに自分から声をかけないように命じられているため、彼女たちの気配に気づいていても無反応だ。中庭には人の行き来はなく、向かいの棟の入口をかためる衛兵たちの姿が見えるのみ。向かいの棟を何気なく眺めていると、不意にジェニーは誰かの声を聞いた。

「ジェニー嬢！」

男の声がもう一度聞こえ、彼女は声のした方向、中庭の方に振り返った。彼女のいるポーチから斜め下にある中庭に、彼女を見上げる一人の青年が立っていた。久しぶりだったが、彼女は彼の顔を忘れていなかった。

「あなたは――サンジェルマン？」

彼女が警戒して彼を見つめると、彼は無邪気な笑顔になって大きく頷いた。

「ええ、そうです！」

笑うと、意外なほどにかわいらしく幼く見える。彼女はゴーティス王にかしづくこの男に良い印象は持っていなかったが、あまりの親しみやすい表情に、肩に入っていた力が抜けた。

「こちらにはお一人で？」

彼は壁のすぐ近くまで来て、彼女を真上に見上げた。彼女の表情が少しだけ緩やかになったことにすぐに気づき、また笑顔になった。

「いいえ。アニーと一緒よ」
彼女がそう言うと、侍女のアニーが彼女の後ろから姿を見せ、サンジェルマンに目礼した。彼も笑顔で頷き、ジェニーに向き直って再び笑った。人を引き込む笑顔だった。
「こんなところで、何をしているの？　いつも、あなたはあの王と一緒だと思ったのに」
「私は常に王の側についているわけではないのです。散歩ですよ。ジェニー殿も、外に出られてはいかがです？　気持ちのよい朝ですよ」
そこに常駐する衛兵たちが一斉に不可思議な表情をしたが、運良くジェニーには見えなかった。彼らの知る限り、サンジェルマンが単独で庭にいたことなど今までに一度もない。
「よかったら、ご一緒にいかがです？　中庭をご案内しますよ」
衛兵たちはお互いの顔を見合わせた。サンジェルマンが女を何かに誘う場面など、見たこともない。
外出ということで気持ちが動かされたらしい主人ジェニーに気づき、後ろにいたアニーがあわてて彼女の横から顔を出した。
「サンジェルマン様？　せっかくのお誘いなのですが、ジェニー様はこの後に用事がございまして」
ジェニーは驚いて彼女に振り返った。用事など、何もない。
すると彼女は、ジェニーに厳しい視線を素早く走らせ、口を開かせないようにした。
「まことに残念でございますが、いずれの機会に、王とご一緒に」
アニーは愛想笑いも浮かべなかった。王の部下である彼が主人の女に妙な気をおこすわけもないだろうと信じながらも、かすかな猜疑心にさいなまれ、彼女は彼にくぎをさすつもりらしい。サンジェルマンは毅然とした侍女の口調に含まれる意味に気がついたようだが、表情に変わりはなかった。
「そうですか。残念ですが仕方ありませんね。それでは、またの機会を待ちましょうか」

サンジェルマンはいかにも残念そうに笑った。
「城はもう慣れましたか？　食べ物はお口に合います？　お困りのことがあれば何でも遠慮なくおっしゃってください」
彼はなんだか、健気だった。彼のその雰囲気にほだされ、ジェニーは彼につい話しかける。
「それは平気だけど――ここは、随分と寒いところね。暖炉がなければ凍えそう。十月に雪が降ることなんて、私の故郷ではなかったわ」
ジェニーがそう返すと、サンジェルマンが嬉しそうに顔を輝かせた。
「ええ、ヴィレールは北国です、あなたの故郷とちがって寒いでしょう？　私も故郷のベルアン・ビルからこちらへ越してきた年には、その寒さで体調をすっかり崩しましたよ」
「――ベルアン・ビル？」
ジェニーがびっくりして声をあげると、サンジェルマンが穏やかに彼女を見つめた。
「あなた、そこに住んでいたの？」
ジェニーが壁に身を乗り出して彼を見下ろすと、サンジェルマンの笑顔がそれに応えた。彼女の心がみるみるうちに明るくかわっていく。
「私も昔、伯母とそこに住んでいたの！　いつまでいたの？」
「七、八歳の頃までですよ、もう二十年近くも前のことであまり記憶にはありませんが。――伯母とはどんな方です？　もしかしたら、知っているかもしれません」
「本当？」
「ええ。お名前は？」
ジェニーの隣にいる侍女が耳元で警告したが、彼女は侍女から体を離し、彼に答えた。
「私の叔母はジョセフィーヌ・ゲンスブールっていうの。聞いたことある？　小高い丘の上に建つ家に小さな息子と二人で暮らしてい

るわ」

「ジョセフィーヌ・ゲンスブール――」彼が口の中でその名をつぶやき、遠くを見つめる。ジェニーは期待を込めて彼を見つめた。

「……いえ、聞いたことはないように思います。残念ですが」

申し訳なさそうに口ごもるサンジェルマンを見てがっかりしたジェニーだったが、思いがけないところで共通の地域の話ができ、彼に対して幾分かの親近感がわき始めた。それが王の忠実な家来である男であったとしても、孤独で人との交流に飢えていた彼女にその気持ちが抑えられるものではない。

次の日、昨日と同様にサロンに出たジェニーは、ポーチの南側の壁に寄りかかって外を見ていた。そして、またもや中庭を歩いてくるサンジェルマンと出くわした。彼女を見つけた彼が壁の向こうからにっこりと笑いかけ、彼女は思わず微笑んでしまった。一緒にいたアニーはいい顔をしなかったが、思いがけない再会に、ジェニーはなんだか嬉しかった。

ジェニーがサンジェルマンと偶然に再会した一週間後、その日は午前中から複数の統治区の代表者たちとの謁見があり、ゴーティス王は終日忙しく過ごしていた。

国を東・西の二つに分け、三ヶ月単位の城への定期報告とは別に年一度、各地域の統治者たちには城での謁見会が義務づけられている。今回は東部の番で、四つの統治区からの代表者たちが城内に二日間滞在する。謁見会は戦のない冬、雪で移動が困難になる前の初冬に行うと決まっている。一年前に東部の統治者全員を刷新して以来、今回が初めての顔合わせだ。

昼食会や夕方の宴には出席はしないが、大勢の前での謁見にはサンジェルマンも同席する。謁見の間での報告はおおよそ明るい内容ばかりだった。午前の部で各地の代表者一行のメンバーを観察し、男たちの間にその場に似つかわしくない一人の若い娘がいることに、彼は違和感と危機感を覚えた。ゴーティス王の好みの女性ではなさ

そうだが、王の興味を引いているのは確かだ。彼らの滞在が平穏無事に終わるようにと、彼は願わずにいられなかった。

午前の部が終わり、一行が王や側近とともに昼食の席へと引き上げた。それにともない、サンジェルマンも共用の食堂に戻る。そこは身分の高い近衛たちがつめる場所でもあり、彼も食事や休憩時には使用を許されている場だ。彼が食堂に顔を見せると知った顔があり、先客たち二人はちょうど食事の皿を用意してもらっているところだった。彼は召使の一人に声をかけ、食事の用意を頼んだ。

「謁見は滞りなく済みましたか、サンジェルマン様?」近衛兵の年上の方がそう問い、彼に微笑んだ。

「ええ」

彼は微笑み返すと、男のなため向かいに席を取った。女が彼の分の皿を置き始める。

「あと二日間は王も統治者たちとつきっきりか。今回は何事もなく、無事に終わってもらいたいものですよ」

男の言葉は言外に不安を含んでいて、隣の男もその場にいた女たちも、さっと口をつぐんだ。一年前の謁見会の際での、王の前に進んだ代表者の一人が王に切りつけるという暗殺未遂事件を示しているのだろう。それは、誰もが知っている事実だ。

「警備を強化なさったと聞きましたが?」

「いつもと変わらないように見えましたね。今回の使者の方々は、非常に友好的なご様子だった」

さっきまで見ていた統治者たちの表情と態度を思い出しつつ、サンジェルマンは彼に微笑んだ。

召使たちがパンの入った籠、バターとチーズを持ってきてテーブルに置いた。小麦色の丸パンを見ながら、サンジェルマンはいまだ記憶に新しい去年の暗殺事件後の事を思い起こしていた。その事件は人々にとって悪夢として映っているが、悲惨な出来事というだけで終わったのではない。

一年前の謁見の間で、ゴーティス王に襲いかかった無謀な男はすぐにひっとらえられた。その際に不運にも腕に軽傷を負った王は烈火のごとく怒り、見せしめのために男の公開処刑を命じた。かわいそうに、その男と付き添い達は、王がケガをしたのと同じ、右手の肘から下を切り落とされた姿で登場し、見物する民の前で首を一撃で落とされた。切られた首はしばらくの間、見せしめのために街の広場に吊るされた。また、故郷に住む彼らの家族は全員が住まいを追われ、一人残らず王軍によって命を落とした。

その暗殺未遂事件から少したって、ゴーティス王は事件の再発防止と自分により負担のない統治を考え、国で製造・発行する共通の貨幣を全統治区で使用するよう命じ、各統治区の豊かさに応じた額で国へ貨幣または物で納税するような仕組みを作った。各統治区に五年を上限として国からの統治者を配置し、各地区で住民から税金をとれるようにし、ある程度までの自治権利を与えた。

また、武術や運動能力のある者は、一定の試験の結果によって中央で訓練を受けられる資格を与え、訓練を終了したものには職を紹介するようにした。軍に入隊する者には家族にも手当てが与えられた。これにより、貧しいが能力のある若者が中央に集まるようになり、軍の増強が進み、中央の人材が豊かになった。

ゴーティス王の統率するヴィレール軍の侵略は非情で人々から怖れられていたが、その後の統治によって地域の秩序が保たれ、富んでいく。征服される前よりも各地区が経済的に改善されているのは、午前中の謁見会での報告の中でも明白だった。

ゴーティス王の優れた統治は、自らが率いる破壊行為とは相反するものだ。王が精神的な平安をもっと得られれば侵略行為もなくなり、その統治能力は惜しみなく発揮され、民からの賞賛と尊敬を得られるのだろうに。サンジェルマンはゴーティス王の少年時代を思い出して、胸に鋭い痛みを感じた。

テーブルにつく三人の男たちに具だくさんのシチューが配られた時、部屋にもう一人、仲間がやってきた。サンジェルマンと同じく謁見会に出席していた、近衛隊副隊長のライアンだった。

「ライアン副隊長！」

声を掛けて敬礼した男より先に、ライアンは先客として座っていたサンジェルマンに目を留めた。彼とこの場所で出会うのは初めてな気がする。彼もライアンと目が合い、静かに目礼した。サンジェルマンの前の二人は席から立ち上がっている。

部下に座るように合図したライアンはサンジェルマンの隣にやってきた。スプーンを持っていた手を止め、サンジェルマンがライアンを見る。彼らはゴーティス王の剣仲間であり、子どもの頃からの知り合いだ。ライアンが目礼したのに応え、彼も小さな笑みを返した。

「……きみとここで会うとはめずらしい」

「時々、利用させてもらっていますよ。副隊長こそ、ここには来ないと思っていました」

「そうでもない。私も時折はここに立ち寄る」

「そうでしたか」

ライアンは召使に声をかけて自分の食事の用意をいいつけると、サンジェルマンの横に腰をおろした。既に食事がきていたサンジェルマンたち三人は、シチューに口をつけ始める。ライアンもパンに手をのばし、ナイフでそれにバターを塗り出した。女が彼の前にパン用の平皿をそっと置く。

それ以降の彼らは口をきかず、食堂に微妙な緊張感と沈黙がぎこちなく広がった。近衛兵の二人は落ち着きなく、前に座る彼らをそっと伺った。

「――そういえば、副隊長殿は今宵の宴の場には出られるのです？」

ライアンの方を向くでもなく、サンジェルマンがなにげなく訊いた。

「ああ」

宴に参列するのではなく、警備の責任者としてその場に目をひからせるためだ。彼の返事を聞いて安心したサンジェルマンは満足そうに頷いた。

ライアンは彼に何かを訊きたいような素振りを見せたが、ちょうど自分の食事が運ばれてきたために遮られてしまった。そして彼らの間にはまた、ぎこちない沈黙が流れた。近衛兵の二人も食事に夢中な振りをした。

しばらくしてサンジェルマンがシチューを半分ほどたいらげた頃、ライアンが口をきいた。

「ところで、サンジェルマン？　オーランジェの一行に若い娘が一人混じっているのに気づいたか？」

「ええ、おりましたね。あの場には不相応ですが」

ライアンを見たサンジェルマンは彼の瞳を見て、彼が自分と同じ懸念を抱いていると直感的に気づいた。そして、すっと口を結んだサンジェルマンに、ライアンも彼が同様の考えを持っていることに気づく。

しばらくお互いを見た後、サンジェルマンが彼に言った。

「……娘の一行に注意を払ってください」

彼は、とっくに想定していることを改めて言われて少しむっとしたが、王付きの役である男の口から出ることとしては当然だと考え直した。ライアンはめったに笑わない者として有名だが、彼はその時、無理してほほ笑みを作り出した。

「心得た」

そんな彼らの奇妙で微妙な雰囲気に気疲れした近衛兵二人は、あっという間に自分たちの食事を胃に流し込み、上官の前から退散することにした。彼らがあわただしく去った食堂内にはさらに静寂が流れ、皿にスプーンがあたる音と召使の女たちの足音に支配された。

足早に食堂を抜けて廊下をしばらく歩いてから、近衛兵たちは大きく胸をなでおろした。

「あああ、緊張しましたよ！」
若い方の男が大げさに手をひろげ、肩で息をついた。年上の男も同意し、大きく伸びをしている。
「副隊長が来るとは思わなかったなあ！　サンジェルマン様も間が悪かった」
「あの二人は昔から知り合い同士だっていうのに。仲が悪いんですか？」
「そりゃあ、な。お二人は気まずいだろうさ」
彼のやけに確信をもった返答に、年下の男は不審そうに彼を見た。
「あれ、断言しますね。なんでです？　昔やったひどい喧嘩を今も引きずっているとか？」
「え？　あ、いや。別に」
彼の質問に男は急に口ごもる。その反応に彼はますます不審そうな顔をする。
「なんです？　言ってくださいよ」
彼は立ち止まって男の腕をつかんだ。バツの悪そうな顔をした男は、困惑して彼を見た。
「――おまえ、本当に知らないのか？」
「もしかして、皆も知っている話なんですか？　やだな、じゃあ、教えてくださいよ！」
「いや、だけどなあ」
「僕だけが知らないなんて嫌ですよ！　教えてください！」
「わ、わかった、わかったよ！　だから、手を放せ。」
彼は周りをきょろきょろと見回すと、大きな息を吐いて若い近衛兵の腕を振り払おうとした。
「俺が話したってことは絶対に内緒だぞ、いいな？」
「もちろんですよ！」
男がまた、ため息をついた。
「ちょっと前の話だ」
彼の小声で話す内容を聞き漏らすまいと、男は歩き始めた彼を追

った。

「副隊長の妹の、悲劇的な最期を聞いたことぐらいあるだろ？　ちょうど、五、六年前かな。ライアン家の家の塔から身投げして亡くなったっていう」

「ええ、聞いたことはありますよ。当時、副隊長はかなり悲しまれたそうですね。あちこちから引く手あまたの美しい娘だったとか？」

「そう、俺も一度しか見かけたことはないが……。それでも忘れないさ、そりゃあかわいらしい娘だった。副隊長と同じ髪の色で、顔が小さくて、深い青色の目をしていてさ」

「副隊長と同じ血筋なんですから、おきれいだったんでしょうね」

「まあな。それほどの器量もあって、身分も申し分ない。その少し前、当時はまだ王子だったゴーティス王との縁談が彼女に持ちかけられてな。おまえは知っているかどうか、当時は、次期王となりえるゴーティス王子の妃の座を争って、年頃の娘を持つ国内外の貴族の間で熾烈な争いがあったんだ。副隊長の家も状況は同じだったはずだ。だが王家とも繋がりがあり、信頼を勝ち得ていたライアン家は、他家より勝算があった。それに、これは噂だけだが、当時の王子が副隊長の妹を気に入っているという情報もあったんだ」

「はあ。そうだったんですか」

男よりも十も若い彼は当時の状況を知らず、のん気に相槌を打つ。

「ところが、だ。これは後から明らかになったことらしいが、当時の彼女はサンジェルマン様と密かに恋仲だったそうだ。お二人の家柄だって釣り合うし、近いうちの結婚をお考えだったらしい」

彼が続ける話に、結末を想像した男の顔が徐々に硬くなっていく。

「そういった状況の中で、ライアン家が王妃を輩出できる可能性を捨て、サンジェルマン様に娘を渡すと思うか？　俺たちが考えたって、結果は火を見るより明らかだ。彼女は悩んだあげく、誰にも、サンジェルマン様にも告げることなく、実家の塔にのぼって自らの命を絶ったそうだ」

若い男の顔に浮かぶ恐怖と驚愕を見て、彼は言葉をそこで切った。

「サンジェルマン様が彼女の葬儀に駆けつけ、そこで事の真相がわかったそうだ。それを境に副隊長とサンジェルマン様は交流を断たれたと俺は聞いている。……だから、そういう経緯であのお二人は、会うと何となくぎこちないのさ」

サンジェルマンがゴーティス王の腹心として選ばれたのはそれから数年後のこと。それも、何とも皮肉なことではあった。

第一部　2．疑念－4

王や側近たちが各地の総督の相手をする二日間は後宮にとって休息期間ともいえる。衛兵や召使たち、城の住人たちの注意はそちらに向きがちだ。その期間には王の来訪を受けることもなく、来客たちを刺激しないように外出も禁止されるため、ほとんどの後宮の住人達が室内で毎日を過ごす。それを事前に聞いていたジェニーは、今回こそ、後宮内部を調べる良い機会だと期待していた。初日の夜が来るのが待ち遠しかった。

その初日の夜、本館の広間での盛大な宴が始まっただろう頃、夕食を食べ終わったジェニーの部屋に不意な来客があった。アニーが入口の扉まで寄っていく。

「どなた？」

アニーが扉越しに声をかけると、聞きなれた中年の女の声が返ってきた。

「ブランでございます。ジェニー様はおられますか？」

ニーナの侍女だった。ジェニーの反応をうかがったアニーは、彼女が頷いたのを見て、扉を開けた。

「失礼いたします」

いつものようにピンと背筋を伸ばして、ブランが重い体を揺すりながら部屋に入ってきた。彼女はアニーを冷ややかな目で見て、それからドレスを手でつまみ、ジェニーにぴょこんとお辞儀をする。

「ごきげんよう、ジェニー様」

「こんばんは、ブラン」

使用人には挨拶が不要だと何度注意されても、ジェニーは幼少時からの習慣で誰にでも声をかける。それがいかにも下級階級の出身だと言っているようでアニーは気に入らない。ブランが軽蔑したように眉をひそめる様子に、アニーは恥ずかしくなってうつむいた。

「今日はどうしたの、ブラン？」

ブランは気を取り直して、すました顔で言った。
「ニーナ様のお使いで参りました。遠国からの珍しい黒真珠をたくさんいただきまして、皆様にも差し上げたいそうでございます。ぜひ、ジェニー様にもお部屋までいらっしゃるようにとのお言葉です」
「まあま、黒真珠！」
ブランが言い終わる前に、アニーは思わず声をあげてしまった。
ジェニーは不思議そうに彼女を見て、ブランが勝ち誇ったような笑みを浮かべている。二人の注意を不本意ながら引いてしまった彼女はあわてて口をおさえ、所在なさそうに床に視線をおとした。
ブランがアニーを無視してジェニーに向くと、彼女はにっこりと笑って言った。
「あの、ブラン？　クロシンジュって何でしょう？　私はそれが何なのか知らないの」
ブランの表情にあきれたような、嘲るような顔が一瞬浮かんだ。だが、彼女はそれをうまく隠して同情するような笑顔を素早く作った。
「これは、大変失礼いたしました！　黒真珠は民間ではなかなか目にする機会はありませんものね。知らない者の方が大多数ですわ、ジェニー様。黒真珠というのは、遠い東の海だけで採れる、非常に貴重な宝石の一種でございます。たった一粒でも大変高価で、どの宝石とも違って表面が滑らかで、それはそれは素晴らしい光を放つのですよ。先日、ニーナ様が贔屓にされている宝石商がニーナ様のためにと特別に大量の黒真珠をくださいまして！　それを、ニーナ様のご厚意で皆様にお分けくださるのです」
ブランはジェニーの表情がどう変わるかと観察していたが、彼女が話し終わってもジェニーには何の変化も見出せなかった。逆に、アニーの方はうっとりとした表情でブランの話を聞き入っていた。
「他の皆様もお招きしていますよ。すぐにお越しくださいませ」
最後にジェニーを誘うまでには他の三人の部屋を訪れたブランだったが、宝飾品に目がないカトリーヌは話を聞くなり部屋を出て行

き、残りの二人はしかるべき準備をして向かうと言っていた。彼女は、ジェニーの返答を待った。

ジェニーが柔らかな笑顔になったので、ブランは頭を下げて彼女の返答を聞く態勢をとった。

「ありがとう、ブラン。でも、せっかくなんだけど私は遠慮させてね。私は宝石が好きな方ではないの。ニーナ様のお誘いは本当に嬉しいけれど……私の分も皆さんで分けてください」

――なんですって？

それを声にこそ出さなかったけれど、ブランは驚愕で顔を引きつらせた。アニーも同じだった。希少な宝石に惹かれない女はいないし、ニーナの申し出に逆らえる者は後宮に存在しない。まさかと思ってブランは再び彼女を見たが、彼女はただにこやかな笑顔でいて、嘘を言っているようではなかった。

まさか！　ニーナ様のお誘いというのに、この娘は！

怒りに震えたブランが何とか二の句を継ごうとした時、間髪の差でアニーの必死な声がとんだ。

「まあ、なんというご親切なお心遣いでしょう！　ええ、もちろん行かせていただきますわ、ブラン様！　すぐに行かせていただきますとも！　申し訳ございません、ブラン様！　なにぶん、ジェニー様はいまだ不慣れな状況が本当に多く、このような寛容なお申し出に躊躇なされているだけでございます。今すぐ支度をして、ニーナ様のお部屋にお伺いしますわ。どうかご容赦のほどを、ブラン様！」

彼女の必死な形相に驚いたジェニーだったが、そのあまりの気迫に口をはさめなかった。それに、アニーが叫んでいる間に、ブランがだんだんと態度を軟化させていくのがジェニーにも明らかにわかった。不本意でも口をつぐんでいるべきだった。

アニーの訴えに機嫌をなおしたのか、無理にだが、ブランがひきつった笑顔を見せた。

「そうですの。……ええ、そうですか。そういうことなら、まあ、わからないわけでもありませんわね。遠慮は無用ですわ、ジェニー

様。ぜひお越しくださいませ！　ニーナ様も、きっと喜ばれますから」

威圧するかのようなブランの眼光に、ジェニーは場の空気を読んで仕方なく同意した。アニーがやっと胸をなでおろした。

「では、私はこれで失礼いたします。ジェニー様？　お部屋でお待ちしておりますよ」

もう一度確認するようにジェニーをにらみ、ブランは彼女らに背を向け、そそくさと退室していった。

ブランが去ってしまうのを待ちかねたように、アニーがジェニーに振り向いた。心なしか体が小刻みに震えているように見える。

「ジェニー様！」

ああ、また怒られる！

ジェニーはアニーのヒステリックな声に身を縮めた。彼女の赤ら顔を予想して、嫌々ながらに彼女を見る。彼女の思ったとおり、アニーは唇をふるわせ、自分のドレスをいまいましそうに力いっぱい掴んでいた。

「アニー？　そんなに興奮しないで」

「よくもまあ、そんな悠長でいらっしゃって！　私は寿命が縮まる思いがしましたわ、ジェニー様！」

「そんな思いをさせて悪かったわ。だけど、誘いを断るのは失礼にあたる？　自分の気がすすまないなら、行かないのは自由だと思うわよ」

「おお、なんてことを！　どうか、皆の前でそんな事をおっしゃらないでくださいませ！　ジェニー様、ニーナ様のご厚意を辞退することなどできませんわ。ええ、できるものですか！　アンヌ・マリー様も、ほかの誰もが、そのような畏れ多いことなどいたしません！」

「そんな大声を出さないで」

「ジェニー様！　例え不本意であろうともここにお住まいになるのなら、後生ですから、私の申し上げる事をお聞き入れください！

すぐに出かける支度をされて、早くニーナ様の部屋へ向かうのです！」

たしかに、ジェニーは敵であるゴーティス王を倒し、城を脱出するまではちゃんと生きていなければならない。自分が生き抜くために意思を曲げる状態でいる事には憂鬱だ。しかし、それも長く続くのではない、と彼女は決心をしたばかりだった。

自分が後宮も階級社会に対しても無知な人間だと考えたジェニーは、アニーがあわてて彼女の身の回り品を準備する様子を興味深く見た。厚手のショール、薄い白い手袋、絹の布、ビロードの巾着袋。移動用の灯りの木灰材を長い物に交換し、最後にジェニーの化粧を念入りに直す。華美になりすぎて女たちの反感を買わぬよう、また、薄化粧過ぎて女たる自覚がないと非難されない程度に。

ジェニーの身支度が済むと、アニーは主人の上から下まで全身をくまなく確認し、ため息をついて言った。

「ニーナ様に黒真珠を分けていただいたら、こうおっしゃってください。“本来ならば何か差し上げたいのですが、こちらに入ってまだ日が浅く、献上できるものがございません。ニーナ様には後日、善き日に返礼させていただきたく存じます”と。早口はいけませんわ。最後には笑顔もお忘れなく。いいですね？」

アニーはさらに、他の愛人たちへの挨拶の仕方から座る席までも指定した。信じられないくらい、不自由で、儀礼的で、堅苦しい。彼女の説明を聞いているうち、ジェニーは心の底からあきれてきた。

ニーナの部屋では中央に置かれた豪奢なテーブルの上に絹織物が広げられ、その上に二十粒ほどの丸い黒真珠が並べられていた。その横には彼女の金色の宝石箱があって、赤いビロードの上で黒真珠の大玉と白い珊瑚で丁寧に作られたネックレスが堂々と輝いていた。

「ああ、この輝き！　なんて美しいの！」

ジェニーより先んじてやってきたカトリーヌが、目を輝かせてネックレスの輝きに見惚れていた。横長椅子で体を横たえるように座

るニーナは、満足そうに微笑んでそれを見ていた。カトリーヌの隣では、黒真珠を目の前で見るのは初めてらしく、オルディエンヌが興味深そうに粒を眺めていた。彼女たちに付く侍女たちが主人たちを囲み、興味津々な様子で中央にある稀有で高価な宝石に注目していた。ブランが最初に声をかけたアンヌ・マリーはまだ来ていなかった。

やっとのことで主人の部屋にたどりついたブランが、女たちの中に姿を現した。ジェニーの生意気な反応にいらいらとしていた彼女だったが、主人の前でいつもどおりの無表情に戻った。

「あら、帰ったのね」

首を長くして彼女の帰りを待っていたのを隠し、ニーナが涼しい顔をして言った。

「ただいま戻りました、ニーナ様」

室内に集まってきていたカトリーヌとオルディエンヌに気づき、ブランはドレスの裾をつまんで礼儀正しく挨拶をする。

「あとの二人は？」

ニーナがブランの報告をせっついた。

「アンヌ・マリー様は所用を済ませて遅れて来られるそうです。ジェニー様も、すぐに伺うとのことですわ」

「そう。よかったわ」

予想どおりの返答にニーナは当然だといわんばかりに頷いた。

水面下でお互いを牽制し合い悪口を言うアンヌ・マリーも、彼女に直接的にははむかうような無礼な言動はとらない。王の気まぐれで後宮に入ったという田舎、娘ジェニーも、ニーナにとっては納得のいかない相手ではあったが、彼女の遊びの誘いには素直についてくる。自分が気をもむほどの相手ではない。後宮の女たちで、自分を脅かす存在の者は誰もいない。

自分の提供する宝石に群がる女たちの熱に浮かれた視線を心地よく眺め、ニーナは込み上げてきてしまう笑みを手で覆った。

アニーの剣幕に無駄な抵抗をあきらめたジェニーは、すっかりおとなしくなって自室を出た。廊下に出ると、居室との温度差でジェニーは思わず身震いした。暖房をしてある居室以外、城内にある通路はどこもかしこも底冷えしている。

灯りを持ったアニーが先に立って歩き、ジェニーはその後をついて、ほの明るくなった廊下を進んでいく。衛兵の立つ出入口は松明が備えられて明るいが、廊下の大部分は真っ暗だ。廊下を先に進むアニーはつんとした顔をして、黙々と歩いている。部屋を出る前の言い争いにも似たやり取りに憤慨しているか呆れているかで、ジェニーと口をききたくないのだ。ジェニーもあえて彼女に話しかけようとはしなかった。

二階は全体的に静かだったが、南にある階段に近づくと階下の者たちが動き回っている音が遠くから聞こえてきた。階段部分は階下からの光が届いて少し明るく、上下階へと続く階段の踏み面が見える。ニーナの部屋は三階だ。アニーが階段を上がり始めた。彼女に五段ほど遅れて、ジェニーも足を段に乗せた。

それは、ジェニーが三階に続く階段のちょうど半分ほど上がったときだった。いきなり、彼女のドレスの裾が後ろから何かに引っ張られるような感じがした。

「きゃあっ!?」

スローモーションのように、ジェニーの視界の中で階段の石の面が顔に近づいてきた。後ろに転ばないようにと前のめりに体を曲げていた彼女は、右ひざを石段の角で強打した。

「痛!」

顔を守ろうとした両腕を階段にぶつけながら、ジェニーの体は五段ほど下に滑り落ちていった。右ひざに加え、両腕の肘から少し下の部分に鋭く熱い痛みが走り、その瞬間、あまりの痛みでジェニーは息ができなかった。頭の中が真っ白に変わり、彼女は目を強く閉じた。滑っていったジェニーのつま先が二階の踊り場の床面に触れた時、自分の背後で、何者かの足音が素早く走り去っていくのを聞

いた。
「――ジェニー様？」
彼女の悲鳴で振り向いたアニーは、そこに主人が階段につっぷして倒れているのを見た。その後方の暗闇に人影のような物体を見たが、それを特定する前に人影は消え去って行ってしまった。それを追いかけたかったが、彼女はまず、あわててジェニーの元へと駆けおりた。
「ジェニー様！　ジェニー様、大丈夫でございますか！？」
「あ……」
寝返りをうつように体をアニーに向けた彼女は、痛みに顔をゆがめていた。投げ出されたジェニーの腕部分の服は大きく汚れ、横一直線に裂けてしまっている。
「ア……ニー？」
階段に倒れたまま、ジェニーは自分の腕を動かそうとしていたが、痛みがひどいらしく、できなかった。彼女が苦痛に顔を歪めてうめき、アニーは真っ青になって叫んだ。
「おお、なんということ！　誰か！　衛兵！　衛兵はいないの！」
「ああ……」
「もう少しの我慢でございます、お気をたしかに持って！　衛兵！　衛兵はどこ！」
しかし、その声にはどの方向からも応答がなかった。アニーは一階に向かう階段の途中まで降り、下の方に向かって大声で助けを呼んだ。男たちの大きな足音がジェニーのいる場所に近づいてくる。
「衛兵、こちらに！」
二人の衛兵が一階の奥から来るのを見つけたアニーが、彼らを階上から誘導している。彼らが階段を駆け上がってくるまでに、ジェニーは自力で何とか上半身だけ起こすのに成功した。
「どうなされた？」
サロンに向かう通路に常駐している、ジェニーも見知った顔の衛兵がアニーに言った。

「階段で転んでケガをされたのです！」
衛兵たちはジェニーの腕部分の服からにじむ血に目をやった。
「お怪我は腕だけですか？　他にどこか痛むところは？　立てます？」
ジェニーの前にしゃがみこんだ若い衛兵がたずねた。
「いえ、足も」
ジェニーは、痛みのひどくない左手でドレスの裾をつかみ、男たちも居る前でそれを大きくまくった。衛兵たちは驚き、咄嗟に二人ともジェニーの足から視線をそらしたが、当のジェニーはいたって平気で素足を見せる。ドレスの中から現れた右足のひざは、出血してはいないものの、赤黒く色が変わっていた。
「おお、なんとひどい傷！　すぐに部屋で手当てをさせますわ。ほんのしばらくの我慢でございます、ジェニー様！　さあ、ジェニー様、もう、わかりましたから。衛兵？　ジェニー様を部屋まで運んでちょうだい」
アニーが素早くドレスを脚にかぶせ直し、ジェニーを睨むように見つめる。アニーの言葉を受けて、二人の男たちが正面に向いた。
「非常時です。お体に触れるのをご容赦願います」
男の一人がジェニーを抱き起こそうとし、ジェニーは彼の肩に手をかけた。
ジェニーを抱きかかえた衛兵が階段の残り数段を慎重に降りてゆく。アニーは二人を上から見つめながら、気分が沈んでいくのを感じていた。
王の女に傷をつけてしまった。なんという失態なの。
もう一人の衛兵がアニーに振り向いた。
「侍医を呼んでまいります。本件を報告してまいりますが、階段から誤って落ちたということでよろしいですか？」
自分が主人を守れなかった不始末が公に知れ渡ってしまうのだと、彼女は暗い気分で彼に頷いた。ところが、衛兵の腕の中からジェニーが「いいえ、アニー」と、きっぱり言い放った。アニーが顔を上

げると、ジェニーが顔をしかめていた。
「ジェニー様?」
「ちがうわ、アニー。転んだんじゃなくて、私……後ろから引っ張られたの。誰かが走っていく音を聞いたわ。なぜこんな事をするのかわからないけど、誰かが私の後ろにいたわ。たしかよ」
衛兵たちが驚いてアニーに振り返った。「貴殿は見たのですか?」
暗闇の中での悪意ある人影を、アニーは思い出した。
「あ……暗闇にまぎれて去っていく者はいたように思うけれど……顔は見えなかった。ただ、その、それは……女、だったような」
アニーの言葉をきいた衛兵たちの顔が引き締まった。
彼らの表情の変化を目にしたアニーは、ジェニー付きの侍女として後宮にあがる際に侍女仲間に耳打ちされた、愛人同士の小競り合いや駆け引きの噂話を急に思い出し、背筋が寒くなった。ジェニーが他の女たちの脅威になるかといえばそうではない、とアニーは考えている。ただし、後宮どころか貴族社会のしきたりも知らない主人ジェニーが、本人の知らないところで敵を作っていてもそれは全然おかしくない。いや、むしろ、大いに有り得る。
報告に行くという衛兵がアニーに再度言った。
「では、上長にはそのように報告いたします。侍医を呼んでまいりますので、どうぞ、先にお部屋へお戻りください。不届き者に関しては、後々、こちらでお調べしますので」

謁見会は大きな問題も混乱も起きず、三日間がつつがなく過ぎた。全工程を無事に送った側近や侍女、衛兵たちは緊張の糸が切れてほっとしていた。

各領地は今回訪問を果たした総督たちの新しい統治下で徐々に復興の兆しを見せ、共通貨幣の導入にもそれほど大きな混乱はなく、新しい国土一帯に浸透してきているということだった。

現在の統治に代わった当時にはある地区で住民たちによる小規模の反乱が勃発したが、規模の大小に関係なく反乱分子は抹殺するとの国の方策どおり、王軍が直々に出向き、その反乱を半日もかけずに一掃してしまった。その事件が人々を震い上がらせたのか、それ以来、戦慄の王軍に反抗しようとするような目立った勢力はなく、住民たちは自分たちの生活を立て直すことに日常を優先させているようだった。

城の使用人たちが朝食の席につく時間帯、初冬の凍える雨が降る真っ暗な空をサンジェルマンはうらめしく眺めた。冬の雨は冷たく、日暮れには、地面にたまった水が凍って人々がその上で滑るから、雪よりも厄介だ。

自分の吐いた息が目の前で白くなるのを見つめ、一気に冷たくなった手をこする。そして、厚手のマントを頭の上から被り、彼は宿舎にしている棟から本棟へ小走りで向かった。

通用口に立つ衛兵たちは、朝食を済ませた昼番の者たちがやってくれば交代する。通常、サンジェルマンは、彼らが交代した後に通用口を抜ける場合がほとんどだ。彼らがサンジェルマンを見かけるのは、王に関わる何らかの問題がある時だと彼らは理解している。

「ご苦労」

彼ら二人の前に姿を現したサンジェルマンが声をかけると二人は

姿勢を正し、敬礼した。衛兵に挨拶していくのは、王城に出入りする貴族では彼ぐらいだ。衛兵たちよりも若いが妙な落ち着きの感のある彼は急いでいるふうに中へと入っていく。

サンジェルマンは、毎朝の打ち合わせより前に王の周囲にいる者たちに会って、彼らから直接の声を聞きたかった。城の本館を通り抜けた先にある西棟に足を向ける。

人が住まない本館はこの早朝の時間帯には各階に数名の衛兵がいるだけだが、西棟は大勢の人の気はいがあって賑やかだ。そちらには厨房や休憩室・食堂などがあり、多くの使用人や衛兵たちが出入りする。大厨房奥の小部屋では、入れ替わり立ち代りに使用人たちが来て足を休めているはずだ。

案の定、西棟に足を踏み入れると、召使女や男たちが控え室から急ぎ足で出てくるのに出くわした。彼らはサンジェルマンに気づいて驚き、あわてて頭を下げ、足早に自分たちの仕事場に向かっていく。

チーズの匂いだ。

厨房からは王や後宮の女性のためにこしらえている料理の良い匂いが漂ってきていた。朝食をまだ取っていないサンジェルマンは急に空腹を感じた。

小部屋の扉の前にきたサンジェルマンは中から女たちの話し声が漏れてくるのを耳にした。すると突然、彼の前で扉が内側に開けられ、彼は咄嗟に一歩後ろへと退いた。

「私、先に行きますね？」

部屋の中に向かって挨拶しながら出てきたのは、黒髪で背の低い、まだ少女のような召使だった。彼の知った顔ではない。

一方、部屋を出た目の前に若い見知らぬ男が立っているのに驚いた彼女は、面食らって彼をつい見つめた。自分をそう不躾に見つめる女はあまりいないため、サンジェルマンも彼女を見返した。呆然と自分を見上げる彼女がなかなかどいてくれそうもないので、彼は

微笑んで言った。
「君は新入りか？　この部屋に、王付きの付人がきているか知りたいんだが？」
「あ、えっ？　は、はい！　すみません！」
彼女があわてて横によけ、サンジェルマンはその前を通りすぎる。
サンジェルマンは侍女たちと話していた。そのとき、一人の女が彼に近づいてきた。突然現れた女の服装を見て下働きだろうと判断をしたのだろう、侍女たちが卑下したように彼女を見つめる。
「あの、サンジェルマン様でございますか？」
「そうだが、何か？」
彼が返答したことにほっとした女は思わず笑顔をこぼれさせ、彼とまともに視線がぶつかってしまい、あわてて再び下を向いた。
「あの……ライアン様がお呼びでございます。外の、階段の上り口の所でサンジェルマン様をお待ちでいらっしゃいます」
「ライアン殿？　彼が、この時間に来ているのか？」
「はい」
サンジェルマンは不審に思ったが、すぐに女に頷いた。
「わかった、すぐ行く。ライアン殿の元へ案内してくれ」
彼女がサンジェルマンを部屋から連れ出そうとした際、彼はさっきまでしゃべっていた侍女たちに微笑みかけた。
「君たちのおかげで助かった。また、頼む」
不満そうで名残惜しそうだった侍女たちが、彼の笑顔に吊りこまれて花が開くように笑った。
女に連れられて部屋を出た彼は、厨房の向かいあたりの壁際に佇んでいるライアンを見つけた。腕を組み、心もち頭を下に向け、居心地が悪そうに体を動かしている。
二人が直接会話を交わすのは、王の外出時と大きな行事の際、警備上での用向きがほとんどだ。剣の練習時などで顔を合わすことが

あっても、彼らが話をすることはあまりない。王の変事はサンジェルマンには報告されていないが、ライアンの物憂げな顔を見た彼は何となく悪い予感がした。サンジェルマンは女をさがらせ、ライアンの元に着くまでに思いつく限りの可能性を探しあぐねる。ライアンが彼に気づいて黙礼した。

「早い出城ですね、ライアン殿」

彼の前では心の思案を全てひた隠し、彼は鉄壁の柔和な笑顔で応対した。ライアンは壁から背を離し、一瞬だったが作った笑顔を彼に見せた。

「そちらこそ。今日は早いな」

「ええ、ちょっとした所用がありまして」

その時、二人のいる斜め前にある厨房の扉から女たち数人が出てくるのを目にし、ライアンが開きかかった口を閉じた。厨房の女たちは彼らを見つけて深く頭を垂れ、外へ出る通用口の方に忙しそうに歩いていった。

サンジェルマンがライアンのもう一歩近くへと近寄ると、彼が小声で言った。

「食堂へ行こう。私はまだ朝食をとっていないのだ、そちらで話そう」

「ええ」

サンジェルマンは、身を翻したライアンの左側に並んだ。

食堂の扉を開けると、中には女が一人おり、食堂のテーブルを拭いている最中だった。食堂内はまだ随分と冷えていた。

「お、おはようございます！」

彼女は二人の登場に驚いたようだったが明るく笑い、彼らを迎えた。ライアンは彼女に視線を走らせただけなようで、サンジェルマンは微笑んで彼女に応えた。

「少し早いが、食事は出るか？」

ライアンが問うと、彼女は机を拭いていた雑巾を後ろ手に隠して答えた。「はい、ございます。お二人分ですね？」

ライアンがサンジェルマンを見たので、彼はライアンを見て微笑み、女に頷いた。女は返事をし、続き部屋にと姿を消していった。

テーブルに向かい合わせで座った二人は、女がいなくなると何となく気詰まりとなった。サンジェルマンはライアンが彼の視線を避けて食堂内に目を向けるのに気づいた。夜明け前の暗い部屋に、照明は弱々しく、外の雨の音が静かに聞こえてきている。

外の見えるはずもない木枠がはまった窓を見つめるライアンに、サンジェルマンはさりげない口調で声をかけた。「ライアン殿、私に話とは？」

「え？　ああ、そうだな。いくつかあるのだが――まず一つは、後宮でのことだ。なんといったか、新しく入った王の――」

ライアンが助けを求めるようにサンジェルマンに続きを委ねる。

「ジェニー、ですか？」

「ああ、そうだ、そんな名前だ」

「彼女がどうかしました？」

ライアンが話を続けた。

「そのジェニー殿だが、後宮内の階段で足を滑らし、ケガをされたそうだ――とは表向きの事情だが、実際は、背後から誰かに引っ張られて階段を滑り落ち、手足を負傷したらしい。皆は、他の妾の誰かが嫉妬にかられて手を出したのだとみなしている。その線が濃いだろう。幸い、骨折はしなかったようだが足を痛めて動けぬそうだ」

「そうですか、動けない。……彼女には気の毒ですが、大けがでなくて何よりでした」

――ジェニーに嫉妬するほど、彼女は王の訪問を受けていないのに。なんと浅はかで、恐ろしいことを。

王の身辺警護を担っているがゆえに王の妾たちの身辺に起きた問題にも取り組まねばならない立場にいて、女同士の諍いなどに関わり合いたくないだろうライアンに彼は同情した。だが、正義感も自尊心も強いライアンへの同情はおくびにも出さず、彼はあくまでジ

ェニーに同情したような素振りを見せることに徹した。
「ああ、そうだな。今後は……彼女自ら身辺に気をつけていただくしかない。彼女が負傷した件は、女官長が王にお知らせするそうだ」
ライアンが少し言いよどんだのは、彼が正義感と事件の不本意な顛末の間で葛藤したからだろう。そして、この事件はあくまでも事故として処理され王に報告されるのだと、彼の言葉でサンジェルマンは判断した。
そういうことであれば、自分からは何も言うまい。
「そうですか。承知しました」
サンジェルマンの返事にライアンが満足そうに頷いた。

彼らの話が途切れたところ、さっきの女がパンの籠と卵と替えの灯りを、もう一人の女が盆に載せた皿を持って隣室から出てきた。楕円形の小麦パン、ゆで卵、塩漬け肉の薄切り二切れ、厚切りチーズ、苺ジャム、ミルク、水。小麦パンとミルクは肩書きを持つ身分の者に出される高級食材だ。温められたミルクの湯気とチーズの芳醇な香りが二人のいる空間に漂う。
灯りが取り換えられた食堂はさっきより随分と明るくなり、女二人は皿をそれぞれの前にきれいに整えてならべた。給仕し終わった彼女らは部屋の隅にいって、待機する態勢に入った。
ライアンが彼女らの存在を気にするかと思ったが、サンジェルマンの前で彼は口を開いた。
「それと、もう一つ。昨夜遅くに衛兵の一人を拘束した。王の室内剣技場に入ろうとするところを見回りの兵らが捕らえたのだ。朝食室に置かれた呪いの手紙や王の座椅子の傷、庭園の垣根損壊。運良く王が気づかれる前に全てを伏せられたが、数ヶ月前から続いていた王へのその種の嫌がらせは全て、そやつの仕業と判明した。これで、我々もやっと胸をなでおろしたところだ」
「おお、ついに犯人を挙げられましたか！　ご任務ご苦労様でございます。私もこれでようやく安堵できます」

「ああ。貴公には多大な協力をいただいた。かたじけない」
「いいえ、私は何も。ひとえに御隊のご功績でしょう」
彼が穏やかな笑みを向けるとライアンは一瞬戸惑ったようだが、すぐにいつもの面持ちに戻った。
「今、その衛兵の出身を特定しているところだ。つきとめ次第、貴公にもお知らせしよう」
「ええ。お願いいたします」
それから二人はやっと、用意された食事に手をつけ始めた。
水差しになみなみと注がれた水の水面を眺めたサンジェルマンは、戦場から帰国の途にある軍と共にいたジェニーが決して自分の手から水を受け取らなかったのをぼんやりと思い出した。
あれだけ反抗し脱出を図っていた彼女が手足を負傷して動けないという。哀れではあるが、体の自由がきかずに部屋でおとなしくいなければならないとは、彼女にとっていい薬だ。

無言で食事をそれぞれ進めていた二人だったが、サンジェルマンはふと、向かいに座るライアンが食事をしながらも何かを言いたげに機会をうかがっているのに気づいた。幼少時から彼に接してきていた彼には、ライアンがどんな時にそんな態度をとるのかをよく知っている。自分のことを話したいのだが躊躇しているのだ。
サンジェルマンは顔をあげ、ライアンの後ろの壁に待機していた女たちに退室するよう、頭を振ってそっと促した。彼女らは静かに頭をさげ、壁沿いに隣の部屋へと歩いていった。
物音に気づいたライアンが彼女たちの出て行くのを見送り、そして、肉片をつまもうとしているサンジェルマンを見た。ライアンは仕方なく、彼のお膳立てにのる事にしたようだ。
「先日、所用で久しぶりに君の家に寄らせてもらった。君の弟たちにも会ったぞ」
サンジェルマン家とライアン家は昔から親交が厚い。彼が自分の実家を訪ねることに何の疑問も抱かず、サンジェルマンは、友に話

しかけるかのような口調にかわった彼の言葉に頷いた。
「私はしばらく帰省していないのです。弟たちは元気でしたか？」
「ああ、皆そろって元気だ。末の弟は再来月、成人されるそうだな。聞いたところによると、君は一年以上も家を留守にしているそうではないか。帰省する時間が作りにくいかもしれぬが、何とか工面してやれ。お母上が心配されていたぞ？」
「私もそうしたいのはやまやまですが。時間はなかなか捻出できずにおります。お気遣い、感謝いたします」
自分の身を案じてはいるだろうが、両親は、王の腹心であり側近となった息子の帰省を期待してはいない。ライアンの本当にしたい話が出てくる前の前哨戦として、サンジェルマンはその話題を捉えていた。
塩の味でいっぱいとなった口を水で満たそうと彼が水差しに手を伸ばすと、ライアンが代わりにそれを持ち上げた。礼を言おうとサンジェルマンがライアンを見ると、彼が突然たずねた。
「きみは、結婚しないのか？」
「えっ？」
二人の間で私的な立ち入った会話は過去何年もしていないのに、何のつもりかとサンジェルマンが彼を怪訝に思って見ると、彼はまた同じ事をきいた。
「きみはまだ結婚しないのか？　上の弟が近々結婚すると聞いたが」
ぶしつけな質問にあまりいい気分はしなかったが、サンジェルマンは不快さが顔にのぼるのを即時に抑え、彼にさらっと言い返した。
「ライアン殿も独り身ではありませんか。それに、私より年上だ」
「私？」ライアンは白目を大きくし、声を荒げた。「私は単に多忙なだけだ。好んで独り身なのではない！」
「私も、実家に帰る暇がないほど多忙なのです。貴公と同じですよ」
「サンジェルマン、君は――」ライアンが何かを言いかけ、短く息をついた。口角が下方に向いている。
微笑みさえ浮かべて冷静に対応したサンジェルマンを、彼は面白

く思っていないらしい。
だが、サンジェルマンはライアンの機嫌を損ねたままにはしなかった。
「失礼な言い方をしてすみません。突然の個人的な質問に戸惑ったものですから」
ライアンの目が真偽を問うようにサンジェルマンの瞳を貫いたが、彼はその視線から逃げようとはしなかった。そうすると、ライアンの瞳から次第に勢いが消えていった。
「サンジェルマン。私は、もし、もしも君が一生誰とも添い遂げないとしたら……非常に、心苦しく思う」
最後の方は消え入りそうな声でライアンがそう告げた。彼の亡くなった妹でサンジェルマンの恋人だった、フランソワの事を言っているのだ。彼女に操をたてて、彼が一生を独身で過ごすつもりなのかと心配しているらしい。
行間の意味を読み取ったサンジェルマンは、彼に対する不快さを忘れ、笑いながら否定した。
「そんなつもりはありません、ライアン殿が考えているような理由からではありませんよ。私も、自分を支える家族は欲しいのです。私が独り身でいるのは、ただ……王が以前の王に戻られる日が来るまで、私は妻をめとらないと心にずっと決めているからです。私は今の王を心配しているのです。亡くなった女性に心を捧げているから独身でいるなど、決してありませんから、どうか、そのような心配はなさらないで」
ライアンの懸念を一掃するかのように、彼はまた笑顔で言った。
ライアンは納得のいかない態度を見せていたが、サンジェルマンが、信じてほしい、と言うと、一応の納得を示した。
「そうまで言うなら、君を信じることにする」
「そうして下さい。さあ、早く食べましょうか」
ライアンの注意を食事にひきつけるよう、サンジェルマンは明るく言った。

第一部　2．疑念－6

三日間にわたった謁見会のあくる日、普段より遅い朝食をとった後に移動した執務室。毎朝そこで、ゴーティスはその日の予定と城内の報告を受けることになっている。両辺が大人三人の両手を広げた長さぐらいしかない狭い執務室の続き部屋に、ゴーティスに加え、長官、女官長、サンジェルマンが入ったために、部屋は実際の広さ以上に窮屈に感じられていた。

「――怪我だと？」

女官長からジェニーが手足を負傷した件を知らされたゴーティスは、よくも次々と話題の主となって自分の注意を引くものだと、ジェニーに拍手すら贈りたい気分だった。

「はい。私の目が行き届かず、大変申し訳ございません」

女官長が深々と頭を下げるのを素通りし、ゴーティスは扉の前にたたずむサンジェルマンを疑わしそうに見た。ジェニーの負傷は、女同士の醜い争いの結果ではないのか。

だが、サンジェルマンは微動だにせず、目を伏せているばかりだ。彼からは返答らしきものは得られない。ゴーティスは女官長に視線を戻した。

「階段をあがると言うたな？　あの娘はどこへ行くつもりだったのだ？」

「はい、ニーナ様に呼ばれて部屋に向かう途中だったそうにございます」

ゴーティスは、ニーナの激しい気性を思いだした。

「ふん、ニーナか。あの女がジェニーを突き飛ばしでもしたか？」

彼がおかしそうに笑い声をあげると、女官長が身を乗り出してあわてて口をはさんだ。

「そのような事などめっそうもない、ただの事故にございますよ！　ニーナ様も、他の方々もその当時はニーナ様の部屋に集まってお

いでだったそうですわ！」
「他の者？」
「オルディエンヌ様にカトリーヌ様、アンヌ・マリー様に、それぞれの侍女たちも全員いたそうです」
「……ほう？　アンヌ・マリーまでもが？　それはよほどの余興があったとみえる」
　ニーナとアンヌ・マリーは、それぞれがゴーティスの元で相手をこきおろすような口をたたく。ゴーティスは、彼らの不自然な接触に興味を引かれた。
「ジェニーの怪我はどの程度だ？」
「両腕の傷と打ち身、右足も強く打ってうまく歩けないご様子です。侍医によると骨折まではされていないとかで、完治までには二週間ほどかかると思われます」
「なに、歩けぬのか？　それはまた哀れな！」
　哀れとは言うものの、ジェニーが歩けないと知った彼は断然面白がっていた。自由を好む彼女が不自由な状況に我慢する姿を想像すると、どうにも笑えてくる。
　彼女の脱出の試みを知らない長官が、女官長たちの横で困惑したように首をひねっていた。
「いやはや、歩けぬとはなんとも哀れな娘！　おお、あの娘には献上物にあった蜜菓子を見舞い品として与えてやろう。養生できるよう、充分に取り図れ」
「おお、なんというお優しきご配慮！　彼女に代わりましてお礼を申し上げます、王！」
　女官長が顔を喜びに輝かせて頭を下げるのとあわせ、長官もサンジェルマンも王に丁寧に頭を下げた。

　その夜、ゴーティスは、カトリーヌを選んで部屋を訪問した。彼女は地方都市に住む貴族の恋人だったのを王に見初められて城にあげられた女で、誰もが認めるほどの、最高の美貌の持ち主だ。肌は

どこまでも白く、しなやかな金髪にふちどられた小さな顔の中にある、真夏の空を映した湖のように深く青い瞳を向けられた者は、男女を問わず、彼女の魅力に放心して彼女の虜となってしまう。

薄暗い寝室に浮かび上がる、白い肢体のカトリーヌは美しい。寝着を体から払い落とすように床に落とした彼女を背中越しに抱き寄せた王は、彼女のうなじに唇をつけたまま、床へしゃがみこむようにして彼女を倒した。

その日の朝から降ったり止んだりしていた雨がみぞれに変わった深夜、情事を終えた二人は寝台の枕にやっとのことで頭をあずけた。彼女はぐったりしていながらも心地良さそうな笑みをうかべていて、白い全身はやわらかな桃色になっていた。

壁寄りに寝転ぶ彼も息を整えつつ、体のほてりが静まるのを待っていた。カトリーヌが頭を自分の左腕に寄せてきたため、彼は腕をあげて彼女の頭を腕の中に入れた。そして、ほのかな明かりを放つ照明が置かれている部屋の角の棚を何気なく見た。照明の横に白っぽい布が広げてあり、その上に大きな黒光りする珠が何粒か見えた。その隣には彼女が愛用している赤い宝石箱がある。

「あそこにある黒い珠は何だ？」

「えっ？」

彼に尋ねられた彼女は上半身を起こし、彼が指し示す方に視線をやった。

「まあ、あれは先日ニーナ様が分けてくださった黒真珠ですわ。あんなに大きな粒をくださるなんて、私、うれしくって何度も箱から出してうっとりしてしまって。つい出しっ放しにしてしまいましたわ！　あんな高価なものをくださるなんて、さすがニーナ様ですわね！」

彼女が目を輝かせてそう言い、うっとりしたように宙を見た。

十粒で肉牛一頭に値するほどに高価な黒真珠を、仲間たちに惜しみなく渡すニーナの見栄っ張りぶりには驚かされたが、思わぬ方向

に話をつなげられそうな期待で、ゴーティスはほくそ笑んだ。
「ほう、ニーナがな。おまえはあの女に気に入られているのだな」
「まあ、私だけ戴いたのではありませんわ！　オルディエンヌ様も戴きましたし、アンヌ・マリー様も。アンヌ・マリー様は、来るのがもう少し遅ければ頂戴できなかったでしょうけど。あのジェニーの事故で大騒ぎになってしまって、ニーナ様が全員を部屋に返されたものですから。アンヌ・マリー様も間に合ってよかったですわ！
……残念でしょうけれど、当夜来れなかったジェニーはもらっていないと思いますわ。こんな素晴らしいものを得られる貴重な機会でしたのに」
ゴーティスが一言も口をはさまずにカトリーヌに話を終えさせると、彼女は彼を見て、ばつが悪そうに視線を彼からそらして口を閉じた。
「ジェニーの件は聞いた。階段で転んだそうだな。気の毒なことだ」
「え、ええ。本当に」
ゴーティスはカトリーヌの動揺に気づかないふりをし、のんきな口調を装った。
「骨折はしておらぬようで何よりではないか」
「……そうですわね。近いうち、私もお見舞いに伺ってみようと思います」
カトリーヌが不安そうに王を見上げ、彼は彼女を安心させるために唇の端を上げた。
「行ってやれ。あの娘も喜ぶだろう」
彼女の考えを肯定してやると、彼女がほっとしたように笑顔を見せた。
ニーナがほぼ潔白なのはわかっていた。あの女の部屋に行く途中にジェニーにケガをさせれば、ニーナの方が先に疑われる。ニーナは、そんな単純なやり方を嫌う。それに、「もう少し来るのが遅ければ」とカトリーヌは言った。
ゴーティスは、くだらない痴情のもつれを軽蔑し、嫌悪している。

――取るに足らないあんな小娘を相手にするとは、あの女、愚かなことを。

ゴーティスは頭上にある天蓋の赤い布を眺め、ジェニーが自分を見上げる際の嫌悪のこもった瞳を思い出した。カトリーヌを腕に抱きながら、ゴーティスの心中は不快にざわめいていて、どうにも治まってくれない。

彼の頭の中からは、ジェニーの面影がなかなか去ってはくれなかった。

◇　◇

十二月も間近のある日、外では大きな塊の雪が絶え間なく降っていた。本格的な大雪の季節が始まったのだ。昼過ぎまでに、建物のそこかしこに雪が積もるだろう。

門番の衛兵たちは門扉横の、石壁を丸くえぐったように造られた半外の待機所に交代で避難して火を焚き、厳しい寒さをしのいでいた。食料や酒の納入業者たちは、通用門を通り抜ける際に荷物に積もった雪を払いのけながら、誰もが寒さのために背を丸くし、暗い顔で歩いていく。見回りの衛兵たちはかじかんだ両手に白い息を吐きかけ、白く冷たい雪を無情に落としてくる暗い空を眺めている。底冷えする城内は、いつもより早く来た使用人たちによって、どこの部屋にも火が焚かれた。雪によって移動や物品の運搬が予定より遅れ、使用人たちは誰もが朝から不機嫌となって作業していた。

他の使用人たちの例にもれず、ジェニーの侍女アニーも朝から機嫌が悪かった。それは、それまでの主人に対してのアニーの不満が一気にあふれ出た日だった。

彼女は平らで丸い黒土器の皿に白墨で何かが書かれているのを偶然に見つけると、ジェニーがそれを説明しかけただけで怒り始め、主人に憤慨して部屋を出て行ってしまった。部屋に取り残されたジ

ェニーと召使はなすすべもなく、アニーが出て行くのを見送るしかない。

女官長は、アニーの感情的な爆発のきっかけとなった黒土器の皿を召使に持ってこさせ、そこに書かれている文字が何なのか判別できず、お手上げとなって両手を広げた。今までに見かけたことすらない言語。庶民出であるジェニーが、字の読み書きができる事実にも驚いた。

――それにしても、あの風変わりな娘には手を焼かされる。

女官長は重いため息をついた。

入城してから二ヶ月経つというのに、彼女は、表面上こそ後宮の掟に従う姿勢だが、基本的な考えは変えようとしない。納得できなければ、相手が誰であろうと必ず反論する。アニーがおかしくなるのも無理はない。それでも、王にはむかう態度は改めたらしいが。

大体、抗う、という考え自体が間違っている。王に好意的な態度を見せないところが、そら恐ろしい。

女官長は手元の皿に視線を落とした。

されど、王のご意思が読めない。特別に彼女に目をかけているようでもないのに、彼女の無礼な対応を面白がっている。普段とちがって、彼女には手をあげることもないようだ。それが、彼女をつけあがらせる元凶だというのに。

女官長は両手を握り、内側を自分に向けてゆっくりと開いた。

アニーに言われずとも、あの王さえ彼女を放してくれればいつでも城から追放してやるのに。

彼女にしても、それを――心から望んでいるのだから。

「女官長様！」

部屋の外でマチルダの声がして、彼女は我に返った。

「ああ……お入り」

「失礼いたします」扉が開き、小さなマチルダが入ってきた。「木灰剤の替えを持ってまいりました」

彼女が籠を棚の隅に置く様子を見つめ、彼女がジェニーと二歳しか違わないことを思い出して、女官長は衝撃を受けた。
「他にご用はありませんか、女官長様」
マチルダは城勤めが初めてというわりに未熟ながらもよくやっている。
もしかして、ジェニーについても見方を改めた方がいいのだろうか。長い目で見るべきだと？
「女官長様、大丈夫でございますか？　お顔の色がすぐれないようですが？」
「ああ、平気よ。ちょっと考え事をしていて」
彼女が思わず手元の皿を見ると、マチルダの視線もそこに動いた。ふと、彼女はある事を思いついた。
「マチルダ。おまえ、ちょっとサンジェルマン様のところまで行って、見てもらいたい物があるから、時間がある時にここに来てほしいと伝えてきて。東館入口の衛兵に言えば、彼に取り次いでもらえるわ」
「サ、サンジェルマン様ですか？」
「そう。覚えているでしょう？」
「もちろんですとも！」
マチルダは退室の挨拶もそこそこに、東館への入口を目指して部屋から飛び出していった。

マチルダの伝言を聞き、夕食前のほんのちょっとした時間を割いて、サンジェルマンは女官長を部屋に訪ねた。彼は、東館入口で衛兵に王暗殺を疑われて殺された、哀れで軽率な少女の事件を耳にしたばかりだ。王の前に立ちふさがったのは、どこかの下働きらしいとは知らされたが、彼は、一介の少女の身元までを知ろうとはしなかった。
不注意な「事故」を犯した少女に対する怒りのようなもので、寒

さのせいで不機嫌だった衛兵たちはさらに気が立っており、サンジェルマンの接した使用人たちも皆、困惑と動揺を表情ににじませていた。伝え聞いた様子では王の機嫌に変化はないということだが、使用人たちの立ち振る舞いに一層の注意が促される件でもあり、サンジェルマンは、女官長が把握している事件の概要も教えてもらうつもりでいた。

女官長室の扉を二度たたいたが、室内には人の気配がありながら応答が聞こえてこない。返答がないのを不思議に思った彼は、扉越しに声をかけた。

「女官長殿？　サンジェルマンだが、おられますか？」

彼が待っていると、室内で誰かが動く気配がし、扉のすぐ向こうでひそやかな声がした。

「女官長殿？」

扉が軋む音をさせて内側に引かれ、彼も知る城の管理官が中から姿を現した。「失礼いたしました、サンジェルマン様。女官長と話しこんでいたもので……どうぞお入り下さい」

彼は誘われるままに入室しようとして、管理官に加え、扉の奥にいた女官長も緊張した面持ちをしているのに気づいた。二人の組み合わせから考えれば、彼らが来客を無視してまで話していた重要らしき一件は、サンジェルマンが知ったばかりの使用人の件だろう。彼女がサンジェルマンに黙礼した。

「邪魔をしたのでなければよいが？」

「もちろん、そんなことはございません。私は後で出直して参りますので、どうぞ、サンジェルマン様」

管理官がサンジェルマンに恭しくお辞儀をし、扉を広く開放して室内へと誘った。部屋の奥から、女官長も入口の方に歩いて来て顔を見せ、同様に頭を垂れた。

「サンジェルマン様。お忙しいところをわざわざ出向いて頂いたのです、どうぞお入り下さいませ」

管理官がその場を去った後、サンジェルマンは女官長が移動する

のに倣い、彼女のテーブルの前まで行って足を止めた。
「――管理官との話は、今日の東館での少女の一件か？　私もつい今しがた耳にしたばかりだが……」
　彼が話を切り出すと、彼女が、一秒に満たないほどだったが視線を床の一点に留めた。しかし彼女はすぐに顎をあげ、緊張したように硬い声で答えた。
「ええ、その不注意な娘――私の小間使いだった少女の件でございます」
「なに？　女官長殿の小間使い？」
「ええ。……お恥ずかしながら、一月ほど前に小間使いにしたばかりの新入りでございまして。あの子にはもともと少し鈍感なところがあって、もちろん、悪意などございませんが、その為に幾度か無礼を働くことがあったのです。気をつけるようにと口を酸っぱくして何度も注意していたのですけれども……よりによって、王の前へ飛び出すとは！
　王はあの子に対してお怒りにはならなかったようですが、私は、彼女の非礼を王に何とお詫びしてよいものやら……！　おお、それがどんな理由からだとしても、あの子があのように罰せられたのは当然でございます！　至らぬ娘のせいで、城中の者に迷惑をかけてしまいましたわ」
　口では小間使いを責めるものの、女官長がそこまで苦りきった口調で言っていないことから、サンジェルマンは、彼女が小間使いの死を少しは悲しんでいることがわかった。
「サンジェルマン様にもお気を使わせてしまい、本当に申し訳ございません」
「私の事は気にされるな。王には先ほどお会いしたが、王も娘の件でそれほど気分を害されてはおられないようだ。それゆえ――女官長殿、これ以上にこの一件を王に対して掘り下げるのは、控えた方が賢明だ。おわかりだろう？　それに、済んでしまったものはどうしようもない。今後は、皆に充分に注意してもらうしかあるまい」

「ええ、そうですわね……。おっしゃるとおりです」
サンジェルマンは女官長に頷き、亡くなってしまった小間使いの姿を想像し、言った。「せっかくの新入りに、私は会えずじまいだったな」
彼女が、自嘲気味にサンジェルマンに笑って見せた。

「ところで、女官長殿」
「はい？」
彼女の緊張していた口元が、彼が笑みを見せると少し弛んだ。
「その小間使いの伝言を聞いたのだが、私に何か見せたい物があるとか？」
彼女が、ええ、と同意し、いつものような事務的な笑顔を復活させた。
「ええ、そうなのです。些細な事なのですが、もしかしたら、何か大事な件ではないかと思いまして、わざわざお越しいただいたのです。――ジェニーに関する件で」
「ジェニーの？」彼は用心するように声音を落とし、胸で息をついた。「そうか。それならばどんな些細な事柄でも、私に知らせていただけるのはありがたい。ご存知のとおり、私は彼女の素性を探っている最中だ」
「そうですね、貴方のお役に立てられればよいのですが」
サンジェルマンの前で彼女がテーブルの下から紺色の包みを出し、その結び目を解いて、中から黒い楕円形の大きな飾り皿をテーブルに出した。それが何なのかと彼が目だけで問うと、彼女はその皿を両手で持って裏返し、彼の方へと寄せた。裏面の隅々に、書きなぐったような白い文字の羅列。
「これは？」
「彼女付きの侍女に持ってこさせました。これは全て彼女が書いたもののようですわ。外国語かと思うのですが、侍女も私も判別できませんでしたので、サンジェルマン様にも確認していただこうと思

ったのです。これが、どこの言葉かおわかりになりますか？」
サンジェルマンは皿を持ち上げ、手に取って文字を近くでたどった。彼やジェニーの話す、共用言語ではない。
サンジェルマンは語学に堪能ではないが、大陸で使用される言語なら、読めはしなくてもそれがどこの言葉かぐらいは特定できる。国境を接する隣国の言語でもない。しかし、はっきりとは言えないが、どこかで見たことがあるような文字だ。
「私には読めないが……どこかで見たような記憶がある。断言はできないが、多分」
そう言いながら、ジェニーへの漠然とした不安が以前より濃くなって、彼の胸の中に浸透していく。
「これを判読できる方をご存知ですか？」
女官長の問いに、彼は文字の並びに目をやった。
城に集まる有識者の顔を彼が頭の中で列挙していると、扉をたたく音が響き、部屋に女官長宛の来客があった。女官長と顔を見合わせ、サンジェルマンも扉の方を向いた。
「はい、どなた？」
「ナタリーでございます」
王のお召しの相手を告げにくる女だ。
女官長はサンジェルマンにそれを告げ、彼の前にある皿に紺の包みを上からかけて隠した。
「お入り」
入ってきた女はそこにサンジェルマンの姿を見つけて驚いていたが、平然とした態度を貫こうと努め、無表情となって彼にお辞儀をした。
「ご苦労様、ナタリー」
彼女は入口近くに留まり、女官長にもお辞儀をして声をはりあげた。
「申し上げます。今宵の王は、晩餐後にジェニー様の元へ向かわれるそうでございます」

彼女に背を向けていたサンジェルマンは、軽率にも女官長に視線を走らせてしまって、同じく彼を見た女官長と視線をぶつけ合わせてしまった。二人の視線は絡み合ったが、彼の方からさりげなく視線をそらし、女官長も何ということもなしにナタリーに顔を向けた。

「晩餐後ね。わかりました。後宮には伝えておきます」

「はい。失礼いたします」

ナタリーが退室すると、二人はどちらからともなく、探るような目つきで相手を見た。二人共、お互いにジェニーをこころよく思っていない事は知っている。だが、それをはっきりとした形で口にのぼらせることはしない。

「晩餐は……もうまもなくだな」

「はい。早急に、後宮に伝えねばなりません」

彼らは物言いたげに相手を見つめ、そして、女官長がやるせなさそうに息をついた。「私は行かねばなりませんわ。サンジェルマン様、こちらをお任せしてもよろしいですか？」

彼女は包みの端をつまみ、ジェニーの黒い皿を彼にもう一度見せた。

「そうだな、調べてみよう。……トーマス殿なら、判読できるかもしれない。彼は語学にも通じていて、八ヶ国語はできると聞いている。これを見せて、私から彼に直に訊いてみよう」

「ええ、それでは是非にお持ち下さいませ」

「承知した」

サンジェルマンは丁寧に包み直された飾り皿を、女官長の手から借り受けた。

月が変わると、雪は一日おきの割合で空から落とされてくるようになった。それが一日を通して降り続くことはないが、空はいつでも灰色だ。人々の暮らしは冬仕様に移行していた。

ジェニーに感情的に一度爆発したアニーは、それが功を奏したの

か、主人に対して割り切ることを覚え、ジェニーの動向に深く関わるのを避けるようになってきていた。一方で、主人のジェニーは女官長からこってりとしぼられ、アニーへの接触を極力控えるように心がけるようになった。ジェニーには窮屈で心地良くない対人関係ではあったが、そうやってお互いの距離を置くことが、うまく働く場合もあるのだ。

アニーを毎日早くに帰宅させるようになり、ゴーティス王が気まぐれでジェニーを訪問する機会がなければ、ジェニーの夜は早く終わることが多かった。階段での故意の転倒から数週間が過ぎて、ジェニーの手足の怪我はすっかり完治し、ジェニーは城が眠る時間帯を利用して後宮内の探検を再開した。

アニーの退室後、毎夜、ジェニーはひそかに後宮内を徘徊し、たどった軌跡を部屋にあった飾り皿の裏に書き記した。その記録が積み重なれば、後宮の構造が判明する。

ジェニーが前に発見した隠し扉の場所を忘れることはないが、一応、それも書いておいた。少し前に彼女が調度品目録のような物をつらつらと記した黒い皿は、いつのまにか消えていたので、今度の皿は、寝室の台の中に隠しておいた。

ゴーティス王の来訪時には、王付きの近衛兵が彼の滞在する部屋の前に構えているが、後宮出入口で番をする衛兵たちが後宮内に入ってくることはない。彼らは出入口付近を頻繁にうろつくことはあっても、女だらけの後宮内への出入りは、緊急時以外に許可されていないのだ。それを知ったジェニーはますます安心し、探索に身を入れることができた。

ジェニーがその捜索を開始してから一週間も経たないうちに、王の妾の一人であるアンヌ・マリーが、人知れず後宮から忽然と姿を消していた事が発覚し、後宮内は一時騒然となった。ところが、彼女の不可解な失踪事件については、女官長が一切の詳細を語らず、王もその行方に無関心で追求しなかった。そのため、衛兵と駆け落ちしたとか、ひそかに追放されたとか、夜中に脱走したとか、後宮

内で様々な憶測が飛びかった。
　王の残された愛人たちは、アンヌ・マリーの穴を埋めるような新しい女が来るのではないかとにらみ、何とか王の寵愛をとどめていようと、肌の手入れや衣装選びに余念がない。ジェニーはというと、他の女たちのように容姿に気を配ることはしなかったが、失踪した女がどこからか脱走を果たした可能性に期待し、後宮内の隠し扉や抜け道の探求にいっそうの熱が込められた。
　冬の寒さと雪に閉じ込められるこの時期は、ともすれば沈みがちな季節でもあるのだが、ジェニーは、春までに後宮捜索を完了しようという目標を設定したおかげで、自分の気持ちの矛先を明るい方向へずらしておくことができた。ゴーティス王が言った、「生き延びるために何をすべきか」という言葉は、皮肉にも、彼女の精神を上向きに引っ張ってくれていた。

　アニーが主人に関する文句を言わなくなり、最近のジェニーの平穏な様子に安心しかけていた女官長は、執務室を出た後に、ジェニーの件だ、とサンジェルマンに呼ばれても、それほど動じることはなかった。
　廊下を行き交う使用人たちが去るのを待ち、彼が女官長に静かに話を切り出した。
「トーマス殿の鑑定の結果、あの皿に書かれていたのはユートリア語と判明した」
「ユートリア？　ユートリアとは北の大国ですわね」
「そうだ、ここからはずいぶんと離れたところにある国の言葉だ」
　彼女は、サンジェルマンの言葉の底にある微かな脅威には気づかず、言った。
「彼女の言葉にはそれほど訛りがあるとも思えませんが、元々はそちらの出身なのでしょうか？」
「そうかもしれないが、わからない。トーマス殿によると、ユートリアは国が貧しく、国からの流出者が各国に散らばっているらしい。

だが、ここヴィレールには数少ないだろうということだ。なにしろ、こことユートリアとはかなりの距離がある。ユートリア語を知っている者も、それほどいないはずだとも言っていた」

彼は、トーマスがその言語を操れる者の存在を知って興奮していた事は、彼女にはあえて黙っていた。口に出してこそ言わなかったが、トーマスは明らかに、その稀有な言語を使う人間と接触したがっていた。

「それと、そこに書かれていた内容だが、大した事ではない。絹のカーテンや木灰剤、毛皮の敷物、オークの机。全て、身の回り品の名前ばかりだ。特に問題にするような記述は出てこなかった」

「なるほど、全て彼女の部屋にあるもののようですわね」

彼女の安堵した様子に、彼は同意した。

「その後、彼女の様子に変調は？」

「ここ最近はめっきりおとなしくなっていますわ。周囲と波風を立てることもないようです。少し前からはカトリーヌ様が彼女に接触するようになりましたわ。あの方は穏やかな気性ですから、ええ、あの二人はまずまずうまくやっているようですわね。彼女もようやく自分の境遇を受け入れて、ここでの暮らしを楽しむようになってきたのでしょう」

女官長は母親のような表情を見せ、彼に嬉しそうに笑顔を見せた。

あの娘が？　本当にそうだろうか？

心の底にわいた疑問とは逆に、サンジェルマンはにっこりと女官長に微笑み返した。

第一部　3．もつれる感情－1

暗闇で暮らし続けて二年、男は自分の五感が以前よりずっと鋭くなっているのを実感していた。耳に入る小さな物音、かすかな臭いを敏感に感知し、視線はほんのちょっとの動きに反応して動く。だから彼は、衛兵が、彼の幽閉される牢よりもずっと階上にある木の扉を手で押す音でさえも、気づくようになっている。衛兵が三度も方向を変えて長い階段を降り、彼のいる牢に通じる通路の扉を開ける軌跡を、彼の耳はずっとたどることだってできる。どのあたりで立ち止まり、どの地点で気まぐれに剣を引き抜いているかまで。

男のいる牢の前で常駐する看守はいない。日に一度、彼の食事を届けがてら様子を見に来る衛兵が一人いるだけだ。男は独房に一人で――隣の牢に仲間はいない。

男はこの二年間、まったくの一人きりだった。

通路の扉の鍵が開けられる。衛兵の手は落ち着いていて、機嫌がよさそうだ。たまに機嫌が悪いと、その彼はやたらに騒がしく音をたてるので、すぐにわかる。扉が内側に押された。

「メシの時間だぞ、五十二号！」

衛兵は檻の下にある開口部から食事の盆を無造作に押し込み、部屋の奥で座りこんで動く様子のない彼を冷たく見つめた。衛兵は彼の正体も知らなければ、何の罪を犯したのかも知らないはずだ。ただ、誰とも面会させず、絶対に逃がすなという命令を受けているだけだろう。

半年前に前任の衛兵と交代してから、彼と男は一度しか顔をあわせたことがない。ここ半年間の毎日、牢内の彼はぐったりとして粗末な寝台に寝ているか、床に手足を投げ出して座っているかのどちらかだ。

彼に変わった様子がないのをみとめた衛兵は、くるりと踵をかえした。鍵を手に通路の方へと去っていく。

通路の扉が再び鍵をかけられ、衛兵が階段をのぼっていく音を聞いた男は、やっと顔をあげた。男の顔からは虚ろな表情が消え、瞳に光が宿っていた。

「――五十二号だって？　人を番号で呼ぶとは！　私にはケインという名があるというのに！」

彼は衛兵の置いていった簡素な食事に手を伸ばし、臭いをかぐ。そして、固いパンを一口かじって舌の上で欠片を転がし、妙な刺激を感じないか、よく確かめた。

彼は、牢に閉じ込められた当初数ヶ月を毒殺されるかもしれないと怯えて過ごし、今となってはそんな危険もなさそうだと何となく感じていた。だが、そうやって送った日々の癖が、今では彼の日常としてしっかり身についてしまっている。

衛兵が地上に到着するまでの間に、彼は与えられた食事全てを食べ終えてしまった。水も飲み干した。当初は口や腹に馴染まなかった飲食物に、彼の体はすっかり慣れていた。

彼は、ここを住まいとする以前は体が弱く、よく体調をくずして母親を心配させたものだ。それが今となっては、当時とは比べものにならないくらいに生活環境が劣悪なくせに、腹痛さえおこさない。彼はいたって健康だ。彼をこの状況下に陥れた者の予想を裏切り、彼は病気にもかからず、衰弱死もせず、二年をも生きながらえている。

朝食から半日以上が経ち、世の中が就寝する頃だと判断したケインはおもむろに立ち上がった。一日を通して変わらない暗闇に過ごす彼だが、時間の経過は腹の空き具合でわかる。城が寝静まる夜は、彼の活動時間の始まりだ。

彼は約三ヶ月前に自然劣化で壊れてしまった檻の扉を外し、体を抜け出させてから、それを注意深く元の状態に戻した。彼が牢内に

いればそれで安心している衛兵は、檻が今でも使いものになるかどうかなど、わざわざ確認しようとはしない。

この地下牢のある空間には城内をめぐる抜け道に通じる出入口があり、思いがけず、彼はあちこちへと探検をしてきていた。この三ヶ月間で、彼の行動範囲は牢の外に広がった。しかし今まで、彼が歩いた抜け道がどこかの入口に通じたことはない。

地上の住人である時は、その出入口の存在は知っていても各入口の到達地点までは知らず、抜け道が途中で塞がる度にそれを知っておけばよかったと彼は後悔したものだ。それでも、悲惨な境遇からの逃亡の可能性が残っていることで、ケインの将来への希望の火は消えることはない。

今夜もまた、彼は抜け道への隠し扉に入って行く。一昨日の夜に探検していた際、彼がのぼる階段上方の隙間から光が差し込んでいる箇所があった。光はかなり弱かったが、抜け道自体がかなり暗いために、彼の目でもすぐにそれに気づいた。その光の出所をちゃんと探りたかったが、彼の五感がそこに人の気はいを感知し、一昨日はすんでのところであきらめていた。

「左、左、右」

細く急な階段をのぼり、分岐点にぶつかるごとに、彼は自分が覚えていた通りに道をとった。

「右……」

最後の階段の手前に来て、ケインは上にのびる細い階段を見上げた。突き当たりらしい地点に、ほのかな黄色い筋が見える。

――押し上げ扉だ！

彼はぞくぞくとする興奮を背筋に感じ、階段を二段飛ばしで駆け上がっていく。

探検し始めて三ヶ月、やっとどこかに出られる扉がある！

入り組んだ抜け道をたどって行き止まりに何度もあたり、何度も落胆のため息をついた数ヶ月を振り返り、彼は期待し過ぎないようにと自分を戒めながら、光線を放つ部分まで一気に駆け上がった。

階段を登りきったところに、正方形の木製扉があった。近くで見ると、その中央には黒い鉄製の細い取っ手がついている。

それが正真正銘の扉なのだとわかった時、紆余曲折を経てやっとのことで出会った出口に感動し、彼は少しの間、その取っ手に手を伸ばせなかった。なんといっても、二年ぶりの地上だ。二年ぶりの、暗闇でない世界。

瞳が乾いて瞬きをしたかったが、扉が幻と化してしまうことを恐れて目がつぶれない。ケインは胸を震わせ、こわごわと深呼吸をした。息を吐いた後でも、扉は変わらず、そこにあった。彼はまた、深く息を吸った。

「落ち着け、ケイン！」

自分の高鳴る鼓動に言い聞かせ、そうして、ついに黒い鉄の棒をつかむ。

開いてくれ！

彼は心に強くそう願いながら手に力をこめた。ギギッと木と石がこすれる不快な音がして、扉がずれて動きだした。扉は何年も開閉されたことがなかったらしく、周囲の石床に引っ掛かっているような反発があった。ケインは左手を扉板に添えると、両手の力をつかってそれを何とか押し上げようとした。扉が石とすれて小さく軋んでいたが、扉の向こうからは、何の音も聞こえてきていない。

ガツンと何かにぶつかるような衝撃音とともに、ケインの闇の視界に光が差し入ってきた。あまりにも扉が大きな音を発してしまったことに焦り、彼はあわてて扉を床面ぎりぎりの高さにまで引き下げた。だが、彼のとぎすまされた耳には、何の物音も入ってこなかった。

それまで止めていた息を少しずつはき、彼は石の床と扉の隙間から、明るい外の世界を注意深く見た。扉の上に何かが掛けられているらしく、茶色っぽい毛束の布がだらりと彼の方へ垂れてくる。扉から見た一方向の先には濃茶色の家具の脚があり、もう一方向には

桃色に似たカーテンのような布が床面すれすれに伸びているのが見えた。残った最後の方向を見てみると、石の床が続き、右奥の方が黄色く明るくなっている。暖炉だろう。

だが、暖炉の火は明々と灯っているわけではなさそうだ。室内は、ケインが思っていたよりもずいぶんと薄暗い。暗闇に馴れていた彼の目には、消灯後の明かりでさえもまぶしすぎるのだ。

彼は一度、扉をそっとおろした。気持ちを落ち着けて考える時間が必要だった。

ここは誰かの居室だ、城内のどこに出たんだろう？

手に握ったままの鉄の取っ手を何気なく見た。息をひそめて耳をすましてみると、暖炉でくすぶっている木々がたてる、ほんの小さな音がした。その他の音はやはり、聞こえてこない。彼はついさっき目にした家具の特徴を思い出して場所の特定を試みたが、さっぱり見当がつかない。

あの桃色のカーテンはたぶん、寝台だ。誰かが寝ているかもしれない。

彼は右手を伸ばし、扉にもう一度手をかけた。ケインは力の加減をしながら、慎重にそれを十センチくらい押し上げてみる。今度は、扉は微かな摩擦音しかたてなかった。

少し迷ったが、彼は自分の聴覚を信じて扉を大きく押し開けた。扉の上にあった布が、押し上げられた扉の傾斜にしたがって、扉の背後にずるずるとずり落ちていった。扉を肩で押さえ、階下の階段から地上の石床へと自分の身を素早く移動させると、音をたてないようにそっと扉板を閉じる。そして、しゃがんだ体勢で薄暗い室内を見回し、扉の近くにある寝台にもいち早く視線を投げた。

寝台には天蓋がついていて、分厚いカーテンが彼の視界をはばんでいる。自分が誰にも見つからなかったのを確認し、彼はほっと息をついた。

汚い灰色の石壁しか目に入らない地下と違って部屋は色で溢れ、かび臭くて陰湿な牢の空気と違って室内に流れる空気は暖かく乾い

ている。色彩が目に刺激を与え、地上の空気が肌に浸透するのを感じ、ケインは地上に出られた実感を身に染みて感じた。

彼がたどり着いた部屋はそれほど豪華で華美な居室ではないが、室内の内装や装飾品から、居室の住人が女であることを彼はすぐに見抜いた。しかし、城内で個室に住める立場の女性が極めて少ないのを知るケインは首を捻った。

モンペール女官長の部屋ではなさそうだ。それに、王がこの二年の間に結婚されていたとしても、ここが王妃の部屋というには、少し地味すぎる。

自分が王城内のどこかにある地下牢にいることには、彼には絶対の自信がある。王の腹心サンジェルマンは、彼を王城の敷地外には出しはしなかった。

彼が、天蓋の下で眠るだろう女を想像してカーテンに視線を走らせると、その彼の耳にくぐもった息のような声が届いた。彼は緊張で体を強張らせ、咄嗟に地下への扉に手をかけた。彼が全神経を集中させる耳に、寝台の上で寝返りをうっているような衣擦れの音が飛び込んでくる。彼は迷わず扉を開き、扉の上からずれていた敷物も引っ張って扉とともに掴み、階下に体を沈めた。

扉をきっちりと閉めたケインは、数秒そこに留まって地上の気配をうかがっていた。今までと違う物音は聞こえない。階上の女が起き出したような気はいもしなかった。

彼はもう一度だけ地上に戻りたい衝動にかられたが、それを冒すことの危険性を思って、ぐっと我慢した。地上にたどり着いたという事実だけで、今は満足する方が賢明だ。

取っ手から手を離し、ケインは無理に扉から視線を外した。ほのかに明るい室内に馴れた目に抜け道の階段は真っ黒に映る。だが、それもすぐに普段の視界に戻った。彼は急な階段を踏み外さないように気をつけながら、自分のいる空間へと重い足取りで戻っていった。

夕方から雪が降り、城内全体の温度が低くなっていた。夜中を過ぎた通路は吐く息が真っ白になるほどに冷えきってしまっていて、ジェニーはその夜の城内探索を断念した。それに、連日の探索で疲れていた彼女の体は、休養も必要としていた。寝床につくなり、彼女はあっという間に眠りに落ちてしまった。

暖炉の火が弱まりつつあり、部屋の気温が下がってきていた。寝返りを打ったジェニーの首に冷ややかな空気が触れ、彼女はふっと目を覚ました。

「……寒い」

彼女は、腹の方へとめくれてしまっていた毛布を上の方に引っ張りあげた。手に触れた毛布も、室温同様に冷えている。

顔にまで毛布をあげ、体をその中で丸めたジェニーは、部屋の奥深くのどこかから風が吹き込んでくるような物音を聞いた。隙間風が入ってくるような、空気がそよぐ小さな音。室内に漂う空気には、ほのかな土の匂い。

耳に入った音をあえて気にしないことにして、再び心地よい眠りにつこうとジェニーは静かに両目を閉じた。冷えた室内になど、暖かな毛布から抜け出たくはなかった。脚は温かく保たれているし、肩も温められてきた。毛布をさらに体に密着させ、ジェニーは無理やりに目を閉じ続けようとする。そのうちに頭も眠くなってくるはずだ。彼女はしばらく、訪れてくるだろう眠気を辛抱強く待っていた。

ところが、数時間の熟睡をとった後のジェニーの脳はしっかりと覚醒していて、次の眠気が襲ってこない。ちっとも寝られなかった。それに、目を閉じて視界がなくなってみると、耳に入る微かな風音だけがやけに彼女の意識に鋭く残る。

急に、暖炉の炭がくすぶってはじける音が耳について、さっきよりもはっきりとした風の音が耳に入ってきた。それを機に、ジェニーは眠りにつこうとするのを、仕方なく、あきらめることにした。

寝台から降り立ち、彼女はショールを肩に巻いた。吐く息が白く

変わるほどではないが、頬に触れる空気は冷たく、室温の低さが身に染みる。寝台をまわりこんで、彼女は、ほんのりと明るい室内を暖炉の明かりに向かって歩いた。

暖炉の薪の燃えさしに息を吹きかけ、暖炉の炎の勢いを強める。火の側は暖かく、彼女がおこした炎が大きくなっていくにつれ、部屋が明るくなっていった。黄色い炎に顔を明るく照らされながら、ジェニーはしばらくその場で暖をとっていた。冷たかった耳に体温が戻り、火にかざす手のひらがじんわりと温かくなっていく。頬が心地よい。

ぼんやりと火を見つめていたジェニーの耳に、またもや風のような音が聞こえてきた。冬が来て雪が降るようになってからは閉めっぱなしになっている窓が、何かのはずみで開いてしまったのか、それとも、召使が部屋を出るときに扉をきっちり閉めていかなかったのかもしれない。室内の寒さはそのせいかもしれない。ジェニーはショールの中に手を入れ、暖炉の前で立ち上がった。

音源を探して、窓のある壁面に目をやり、暖炉に背を向ける。ところが、空気を切るような音は、窓とは反対側である彼女の左側から聞こえてきた。ジェニーは怪訝に思い、視線を左側に移して、はっとした。

寝台脇の床面に敷かれていた毛皮の敷物が、斜めに曲がっている。彼女も召使もそれには触っていない。彼女が就寝する前にはその敷物はいつもと同じ場所に、寝台脇の家具と平行に敷かれていた。

まさか、ゴーティス王が来て……？

だが、彼女はその考えを即座に否定した。彼女の眠っている間に部屋に来て、彼女を起こさずに密かに帰るなど、あの男がするわけがない。けれど、彼以外の人為的な匂いを感じる。

ジェニーは誰もいない部屋を、違和感を求めて注意深く見渡した。明るくなった暖炉の明かりに照らされ、寝台脇の床にある敷物の下から黒い三角形の何かが顔を出していた。ジェニーは思わず息をのみ、そこに駆け寄った。近くで見る黒い物体は木の板のようだ。

床にしゃがみこんで厚い毛皮の敷物をめくると、一辺が手の長さほどある正方形の木製扉が姿を現した。その黒い扉の中央には浅い持ち手が一つついている。彼女は、唖然とした。

秘密の扉！

自分が抜け道を探して後宮内のあちこちを何日も探ってきた事を思うと、あまりにもあっけない。自室に対してあまり関心を向けなかったことを思い、ジェニーは自分が滑稽に思えて笑えてきた。

まさか、こんな身近にあるなんて！

しかし、彼女はもう一つの事柄にも気づいた。敷物がずれていたのは、誰かが自分の部屋にここから入ろうとして、この扉が開けられたからだ。さっきから聞こえる風の音も、この下から吹き上げてくる空気の音だ。昨日も一昨日も、こんな風の音は聞こえなかった。

もしかしたら今までにもその“人”はここにやって来ていたのかもしれないが、その侵入者は、ジェニーが住むようになってから、この部屋に入ったのは初めてだと彼女には思えていた。侵入者は、一度は扉を開けたものの、予期せぬジェニーの存在に気がついて扉の奥に戻っていってしまったのに違いない。

ジェニーは寝室を抜け、続く隣室へ行った。そこには彼女の服が揃えられている。その戸棚の中からなるべく簡単に着られる服を取り出し、彼女は薄い寝間着を脱いで急いでそれに着替えた。そして、明かりを持って寝室に走って戻った。

自分の部屋に侵入してきたその人に、危害を与えられるとは思わなかった。なぜだか、その人物が自分と同じように外の世界への出口を求めて彷徨っているのだと、彼女には思えてならなかった。だとしたら、その者は自分と同類だ。

だとしたら……会ってみたい。

第一部　3．もつれる感情－2

床の黒い扉は彼女が想像していたよりも重量がなかった。四角い扉を開けてみると、生温かく、湿った空気が彼女の顔の脇を吹きぬけていく。扉の直下には、床と同じ灰色の石でできた狭い階段が地下へと伸びていた。まだ新しい木くずが階段上に点々と散らばっており、黄色い埃をかぶった石階段の蹴上がり部分には人の足型がくっきりと残されている。扉のすぐ下の数段につけられた足跡はいくつもあって、違う方向にばらばらに向けられていたが、全てが同じ足型だ。

ジェニーは息をするのも忘れ、その足跡の続く先に目をこらした。その裸足の足跡は、暗闇の中へ降下する階段の奥深くへと消えていっていた。

ジェニーは左手で扉の内側を押さえ、階段の二段目と三段目に足をそれぞれ降ろした。明かりを持ち、扉が降りてくるのを肘で押さえつつ、足元に注意して階段を降りていく。

扉が頭の上で閉まると、真っ暗な闇の中で黄色い火が浮かびあがり、地下の通路が照らされた。階段を除く三方が灰色の石で囲まれている。天井は背の高い男でも余裕で通り抜けられる高さだが、通路は二人が横向きにならないとすれ違えない幅だ。ジェニーが着るドレスの広がった裾が、両側でつっかえている。階段は急勾配で段板がやや広く、真っ直ぐに下まで伸びている。

階段を降りていく足跡は全ての段についているが、上がってくる足跡は一段ずつとんでいた。彼女の足の大きさと比べると大きいことから、侵入者が“男”だというのがわかる。

ジェニーは、“彼”が興奮してこの階段を駆け上がってくる情景を想像し、自分の今の状況と重なって、心臓が大きな音に変わっていくのを感じた。

通路内は地上よりも暖かく、空気が重かった。階段に残る足跡は

男一人のものだけで、階段全体が茶色っぽい色で覆われていた。ジェニーが階段を踏みしめる音と衣擦れの音が狭い通路に反響している。他に音はせず、通路は静まりかえっている。

背後の入口が暗闇に入った頃、階段が突然にとぎれて長方形の床面が出現した。その先で通路が二手に分かれている。ジェニーが手に持った明かりを上にあげると、両方の道の奥が照らされた。右手の道にある階段はかなりの急勾配を見せており、先の方の部分は暗闇に消えていた。左の道を見てみると、彼女がたどってきた男の足跡がそちらに向かっていた。右手の道をもう一度見てみたが、男の足跡はない。彼女はほっと息をつき、左手に曲がった。

肌に触れる空気がかびくさく、重く変わってきた。細長い階段をくだり続けたジェニーの前に、またもや二つの道がいきなり現れた。今度はあわてず、彼女はそれぞれの道の先を明かりで照らす。彼女の道案内である足跡は右側を示していた。

左の次は右。

次の分岐点はまもなく出現した。

ところが、ジェニーの頼りにしていた足跡はどちらの道にも続いていた。左手の通路の方が、幅が広くなっている。明かりを照らして両方の道をよく見てみると、右手の道の方に足跡がたくさん残っていた。

彼女は息をついた。そして、右の道へと足を向けた。

そこからは天井が低くなっていて、ゴーティス王の背ならば頭がつかえてしまうくらいだ。通路の幅もほんの少し狭くなっていて、今までよりも圧迫感を覚える。

通路は狭まったが階段がゆるやかとなり、ふくらはぎに疲れを感じてきた。自室を出てから既にけっこうな距離を歩いている。ジェニーは自分のドレスの裾を手で抑え、歩行の邪魔にならないようにした。

「え？」

階段が彼女の前でいきなり終わった。正面三方向を壁がぐるりと取り囲み、ちょっとした部屋の大きさだ。右側の壁と床が接する部分に角の欠けた石段が山積みされ、石の破片があちこちに散乱している。そこで行き止まりだ。

ジェニーの頼みの綱である足跡は階段が終わった部分で消え、その床面には何も残っていない。三方の壁をきょろきょろと見回したが、扉のような切れ目や取っ手は見えない。何の変哲もない、ただの石壁だ。

「そんな！」

ここで終わり？

……ううん、そんなことはないわ、どこか、抜ける出口があるはず。

ジェニーは天井と床にも目を走らせた。隙間や境目のような人工的な線は見えない。彼女は、正面の壁に歩み寄った。目の前で壁面を注意深く観察してみるが、壁を構成する石段に不自然な部分はなく、規則的に交互に組まれている。

彼女は焦りを感じ、右手の壁に目をやった。そして、床部分に大量に転がる石段を見た彼女は、膝の高さにまで無造作に積まれた石段が妙に光っていることに気づいた。石段の山は半円を描くように積まれている。

石段と床の接触面を見た彼女の心臓が、どきっと跳ねた。石段の手前に摩擦でできたような白い線がついている。

石には気泡がたくさんついていて、壁を形成している石とは材質が全く異なっていた。無造作に積んであるはずの石と石の間が接着されている。ジェニーの探し求めていた、“違和感”がそこにある。ジェニーの焦燥感は興奮に移り変わっていった。

石段の山から飛び出している二つをつかむと、石は思ったより柔らかい手触りで少し温かかった。両手に力を入れ、その二つを自分の方に引っぱってみると、石段の山全体が手前に引きずられた。それほど重くはない。

もっと前に出してみると、山の輪郭状に、人間が一人やっと通り抜けられるほどの穴がそこにぽっかりと出現した。

地上への出口を見つけた興奮がいまだ冷めやまない中、ケインは、通路の奥の方から伝わってくる音の存在に耳をすましていた。その音源は彼のいる牢よりずっと上から徐々に近づいてきて、今は、壁一枚を隔てた反対側でせわしなくうごめいている。衛兵の出てくる扉の向かい側、牢の前にある通路のつきあたり、古ぼけた台が付けられた壁の向こう側だ。そこにある空間を行ったり来たりしている、まちがいようもない、人間の足音。それが、ケインと外の世界をつないだ入口を探し求めて、歩き回っている。

誰だろう、あの部屋の住人か？

ケインがこの二年間で顔を見たのは、衛兵二人と下働きの男一人だけだ。ケインの発見した秘密の抜け道を通って彼と顔を会わせた者は、今までに誰もいない。

誰だ？　誰なんだ？

ケインの興奮が否応なく高まってくる。動悸が止まらない。

彼が顔を出した部屋までは遠い道のりで、三回も分かれ道があり、最後の行き止まりまで着いても出口を発見できるかどうか。彼でさえも一ヶ月を費やしたのだ。そこにいた住人が同じ道をたどり、ケインの牢を探し当てるのはかなり難しいだろう。

だが、目を閉じたケインの耳に、重い物が引きずられていく衝撃的な音が届いた。ケインは床から立ち上がりかけ、あわてて床に戻った。心臓が興奮と期待とで激しく波打っている。

「ああ、神よ……！」

彼が祈っていると、通路の奥で衣服のこすれる音がした。ケインは飛び出しそうなほどに音をたてている心臓を収める胸を上から押さえ、床に足を投げ出してうつむいた。衛兵が見回りに来る時と同じ姿勢をとったのだ。相手が何者かもわからない状況下では、無力な捕らわれの身の存在でいた方が安全だ。それが誰であろうと、牢

の柵の内側にいる哀れな人間には向こうから危害を加えてくることもないだろう。

ケインの視界にかすかな光が入ってきた。地下牢への侵入者が持つ灯りで通路や牢が照らされている。

彼は顔を上げたくなる衝動を抑え、床を必死に向き続けた。聞いたことのない足音の持ち主が石の床を踏み、ケインの見つめる床がどんどん黄色く、明るくかわっていく。

息をのむ音がし、ケインはそれにつられて顔を上げてしまった。三メートルほど先に、白い服を着た女の姿がぼうっと浮かんでいる。はっ、とケインも息をのんだ。

女？

ケインは床に視線を戻し、もう一度、目の前に現れた者の姿を確認した。

やはり、女だ。

ケインは手を組んでひざまずいた。

「なんてことだ、私の前に天使が見える！　ああ、神よ、ついに我が身を引き受けに参られたとは……ああ、忌まわしい身のこの私を！」

突然に大声で祈り出したケインにびっくりし、ジェニーは後ろへ飛びのいた。暗い闇の中で、男は切ない目をして天井を見つめ、何かを呪文のように呟いている。

「ああ、どうか、我らをお許しください……！」

彼の口からしぼり出された声は若く、自分とそうかわらない年齢かもしれない、とジェニーは思った。男はぼろぼろに擦り切れた上下の服を着て、顔や手足が茶色く汚れている。全身が痩せていて、ゴーティス王や衛兵たちのように鍛えあげられた体ではない。牢で捕らわれの身である囚人の彼だが、危険な雰囲気は感じられない。

彼の必死な顔に引きつけられるように、ジェニーは牢の柵へと近づいた。

「あの……私は、神の遣いじゃないわ」
男が不可解な表情をしてジェニーに振り返った。彼女と視線が合った彼は一瞬、恐怖の表情を浮かべ、そして戸惑って彼女の姿を眺めた。ジェニーが近くであらためて見た男はやはり若く、どこかで見覚えがあるような顔をしていた。
「私はジェニーっていうの。あなたは誰？」

ケインは名を名乗った娘をしげしげと観察した。胸まで届く黄色っぽい髪を持った、十代半ばの娘。ゆらゆらと揺れる瞳。彼を見る視線に優しさが含まれている。身につけている白い簡素な服は召使たちが着るような粗末なドレスとは違う。そして、少し訛りのあるユーロ語をしゃべる。おそらく南部の訛りで、生粋のヴィレール人ではないのかもしれない。
彼女のしゃべる言葉に訛りがあることでその存在が現実の人間なのだと思え、ケインは急にほっとした。彼が床から起き上がろうと膝を立てると、彼女がほんの少しだけ戸惑った様子を見せたが、柵越しに彼を見る視線の温かさに変化はなかった。
「……私はケインだ」
彼女が頷くのを見て、彼は柵の前に歩き出した。彼がジェニーの前に立ち止まると、柵を挟んで彼を目の前にしたジェニーに、かすかな不安と動揺の色が見えた。
「囚人に会うのは初めて？　……安心して、君に危害は加えない」
「え？　ええ」
ジェニーの視線が柵にちらりと走るのを見て、ケインは微笑んだ。
「私たちを隔てるこの柵は何の役にも立ってないけどね。これは、とっくの昔に壊れているから」
「……え？」
「あはは、そんなに怖がらないで。私は、暴力は嫌いなんだ。暴力をふるうのも、ふるわれるのも、両方とも好きじゃない」
自分の前に立つ娘が目に見えて安堵している。ケインが笑顔にな

ると大きく笑い返してきた。笑うと大きな瞳が楽しそうに輝き、目尻がゆるやかに下にカーブを描き、親しみが増す。

「女の人に会うのは二年ぶりだ、とても嬉しいよ。君は、ジェニーと言ったね？　君はこの城の住人かい？　こんな地下牢にまで、どうやって来られたんだ？」

ジェニーが笑った。

「私は、この城に三ヶ月前からいるわ。元はこの国の民ではなくて、もっと南にある町の出身で」彼女が何かを思い出すように視線を遠くにやったが、間もなく、ケインに戻ってきた。「今日、私の部屋の床に隠し扉があるのを偶然に見つけて――ううん、そうじゃなくて、実際には、誰かが床下から部屋に入った形跡があって、それで部屋をあちこち調べていたら、地下への扉を見つけたの」

ジェニーが疑うように彼にちらりと目を向けた。

「扉の下には階段がずっと続いていて、誰かの足跡がはっきりと残っていたわ。通路には何度か分かれ道があったんだけど、その足跡を追ってたどってきたら、ここに出られたの」

彼女が肩をすくめて微笑み、ケインの反応を窺うように見つめた。彼が下を向いて決まり悪そうに笑うと、彼の足元が少し明るくなって、牢の柵に彼女の足が近づいた。俯いた彼の顔の先で、彼女が格子をつかむ手の動きが見える。

「……そうか、足跡。足跡が残っていたとはね」

ケインが思いきって顔を上げると、彼女が、思いがけずに彼の顔の間近で彼を見つめていた。至近距離すぎて、彼がさりげなく半歩後退したほどに。

「あれは、あなただったの？」

「あの部屋の住人は君だったんだ」

二人が言葉を発したのはほぼ同時だった。

ケインはジェニーを見返して、つい苦笑してしまった。それに吊りこまれ、彼女の顔にもほっとしたように笑顔がのぼる。それを見た彼は、軽やかに笑い声をあげた。

「私の足跡をたどって……あの行き止まりで諦めもせず、ここへの入口をよく見つけたものだ。私が数ヶ月もかけて見つけた経路を、君はたった一日で突破してしまうなんて！　君という人はなんて好奇心旺盛なんだろう！　普通の女の子なら、例え秘密の抜け道に興味を持ったとしても、こんな危険を冒してまで地下の通路を歩き廻らないだろうに」

彼が笑いながら彼女を見返すと、彼女が一瞬だけ寂しそうに笑った。

「そこの出口を発見できるなんて大したものだ。本当に驚いたよ！」

ところが、「そんなこと、ないわ」と彼女が沈んだ声で答えたので、ケインは怪訝に思って彼女を凝視した。彼女がまた、寂しそうな笑みを見せた。

「好奇心なんかじゃなくて。私は、逃げ道を探しまわっているの。ここのところ、私は夜中になると後宮中を歩き回って抜け道を探していたわ。でも、まさか、自分の部屋に秘密の扉があるとは思わなかったから驚いたけれど、どこかに通じる道があるとわかって、本当に嬉しかった。……私は、この城から早く脱出したいの。私はこの国の住民ではないし、あなたのように、私も城内に監禁されているようなものなのよ」

「ジェニー、君は――？」ケインは言葉を返しかけ、あわてて言い直した。「つまり、君は……君の意志に反してここにいるんだね？

君は、隠し扉から続く階段が外に通じているんじゃないかと期待して、ここまでたどり着いたんだ」

「外に出られたらいいなとは思ったけど、そこまで簡単じゃないと考えてはいたわ。それより、どちらかといえば、私は部屋への侵入者に会ってみたかった。少しは怖いとも思ったけど、私と同じで逃れられる道を探し回っているんじゃないかと、何となくそう思ったから――」

ジェニーの思いつめたような瞳に合い、ケインは咄嗟に彼女の顔をつかんでキスしたい衝動にかられた。頬の、柔らかそうな感触を

指で感じてみたい。
が、彼は無謀な思いを何とか押しとどめ、代わりにぎこちない笑顔を作って応えた。
「――私たちは、城からの脱出を図る同志なんだね」
彼女が穏やかに頷き、小さく微笑んだ。急激に心同士が近づいたような気がする。彼女との距離感を縮められたら。
彼の手が、格子をつかむ彼女の手に重なりたがっていたが、彼は急に自分の身なりの貧しさを思いだして恥ずかしくなり、彼女に手を伸ばすのをあきらめた。彼が、頬に熱がこもるのを感じながら彼女を見ると、彼女の瞳にもさっきまでとは違う熱がこもっていた。
彼女は、信用に値する人間だ。
「ジェニー。私たちは……協力し合えるだろうか？」
「協力？」
「そう。だって、君も私も城外に早く出たくてたまらない。君が夜毎に城内を歩き廻っているように、私もここ三ヶ月ほどを費やして城外への出口を探しているけど、今のところ、行き止まりばかりでどこにも出られていない。今後も探し続ける予定ではいるけど、もしかしたら、君の方が早く脱出口を発見できるかもしれない。無論、私の方が先に道を発見する場合もある。でも、どちらにしろ、咲きに発見した方がそれを相手にも教えればどうだろう？　そして、一緒にここから抜け出るんだ。脱出するにあたって、男の手があれば何かと便利だよ、そうは思わない？」
気づくと、彼女の両手が格子を力強く握りしめていた。ケインはそこから視線を移動し、彼女の上気した頬を見つめた。
「……本当？　そんな事、考えもしなかったけど、誰かが一緒ならとても心強いわ。本気で、そう考えてる？」
「嘘でこんな事は言わないよ。君とはついさっき会ったばかりだけど、何となく……何となく、私と君はうまく協力し合える気がするんだ。それに、なぜかはわからないけど、君と一緒ならば、必ず外に出られそうな予感がする」

彼が無意識に伸ばした手がジェニーにぎゅっとつかまれた。
「ジェニー？」
「ああ、私もよ！　私たち、きっと外に出られると思う！」
彼女は期待と喜びで瞳を輝かせ、あふれんばかりの笑顔でケインを明るく照らしていた。ケインは自分の汚れた腕が彼女の清潔な白い手につかまれているのが申し訳なくて恥ずかしく、手をそっと引き抜こうとしたが、逆に彼女のもう片方の手まで重ねられ、両手で押さえられた。

第一部　3．もつれる感情－3

ジェニーとケインが出会った日から五日間、冬の小休止に入ったかのように雪が止み、天空から薄日の差し込む爽やかな日が続いていた。冬場に雲の合間から覗く太陽は、それがほんの一時であっても、人々の気分をぐっと高揚させてくれる。空気はきりりと冷たいがどこまでも清らかに澄み、屋内に閉じこもりとなっていた人々が外へ顔を出して、弱々しい光が透ける空を眩しそうに見上げる姿があちこちで見られた。

少し前まで、しばらく地面を覆っていた雪が溶け、中庭の地肌が顔を出していた。雪と混じって醜い泥地と化した地面を均すため、下働きの男たちが一日がかりで庭内を清掃し、整備した。季節柄、中庭の景色の中に緑が現れることはなかったが、整備されたおかげで全体の見栄えが良くなり、天候の悪い時には閉められているサロンの扉が、久しぶりに開け放たれることになった。

サロンが開放されたと教えてくれたのは、意外にも、ジェニーの行動に好意的でないアニーだった。彼女もまた、長く退屈な冬に飽き、たまに訪れる晴れ間を待っていた一人なのだろう。そそくさと支度を済ませ、ジェニーはアニーを伴ってサロンへと駆けつけた。

戸外とほとんど変わりのないサロンに、先客となる者はいなかった。廊下からサロン内に一歩足を踏み入れたとたん、室内とはあきらかに異なる外気がひんやりとジェニーの頬をなでつけたが、思ったほどに寒くはない。中庭の出入口の両側には彼女も見慣れた衛兵二人が待機していて、屋内からの物音に気づいた彼らがジェニーに振り返り、ほんの一瞬だが、厳しい表情を微かに和ませたように見えた。

サロンを囲む二方向の壁面の上半分を占める開口部分から、やわらかな黄色の光がサロン内の床に滑り込んできている。開口部の向こうには、冬特有の寂しく殺風景な景色に変わった中庭。ジェニー

が壁面により近づいていくと、肌に触れる空気が一段と冷たくなる一方で、目に飛び込んでくる太陽の光がいっそう明るくなってくる。くり抜かれた開口部の奥行きの深い縁に両腕を預け、彼女は中庭を縫うように走る細道を目でたどった。雪は一片も残っておらず、濡れて茶色かった地面は既に乾き始めて黄土色だ。

天候に恵まれて見晴らしが良い場所にいるからだけでなく、数日前のケインとの出会いで今後に希望が見出せたことも手伝って、彼女の気分は晴れやかだった。久しぶりに心の奥が落ち着いていて、口元にまで笑みが自然に浮かんでくる。

中庭の真ん中にある木に視線を移したジェニーは、その先の細道を歩いてやって来る男に気がついた。衛兵や使用人の服装とは違う。木を通り過ぎたあたりで彼は足を止め、目の上に手をかざして空を仰ぎ見ている。

目を凝らして男をよく見てみた彼女は、あっ、と小さく声をあげた。ここで会うのは数度目になる、サンジェルマンだった。

東館の二階にある一室から中庭を何気なく見下ろしたゴーティスは、後宮に面する一角によく見慣れた男の小さな頭を見つけ、訝しげに見直した。彼は後宮に付帯するサロンの方に向いて立っており、表情は彼の方角からではしっかりと見えないが、頷いているように頭を数度、上下に振っている。

あの男、あんな場所で何を？

「王？　あの、お手を少し上げて――」彼は春用の上着のために採寸している最中だったので、担当者の注意を促す声で室内に視線を引き戻した。

「わかった」

しかし、返事とは裏腹に視線はまた中庭に舞い戻る。後宮のサロンは久しぶりに開放されていて、出入口には二人の衛兵が構えている。サンジェルマンの横顔を見ると、彼は顔を下に向け、笑っているようにも見えた。

当初、サンジェルマンが衛兵のどちらかと会話をしていると思ったのだが、ゴーティスの眺めている先で、サロンの開口部から女の腕が外に伸び、身体を中庭の方へ乗り出す若い娘の姿が映った。その隣に中年の女が寄ってきて何かを言っている。娘の行動をたしなめているようにも見えた。あんな子どもっぽい行動をとるのは、後宮ではジェニーぐらいなものだろう。

彼女の幼稚さを蔑視する一方で、彼女に警戒心を起こさせないゆえにその率直な反応を引き出したサンジェルマンに対し、怒りともつかない不愉快な感情が芽生えてくる。

ジェニーが顔を空に向け――ゴーティスの方向からは、今までに見たこともないような彼女の明るい笑顔が見えた。

彼は、ジェニーの泣くか怒るかの表情しか目にしたことはない。彼女の、あまりに屈託なく、幸せそうな笑顔に彼は面食らった。

あんな顔をして笑うのか……。

彼がそれを初めて見たというだけなのだが、ジェニーが笑う姿は、意外なほどに彼に強烈な衝撃を与えていた。

サンジェルマンに視線を移動すると、彼は腕組みをし、まるで全身で笑っているかのように肩をゆすっている。実際の声は届かなかったが、二人が笑い合う高らかな声が絡み合いながら、耳に入ってくるような気がした。

「王、あの……恐れ入りますが」

いつのまにか窓辺に移動してしまっていたゴーティスは、後方から掛けられた女の声で我に返った。

「もう少々で終わりますので」

彼は無意識に彼らに気をとられてしまっていたことに驚き、自分を情けなく感じて心の中で自分自身に悪態をついた。実体のない二人の笑い声が、今もまだ耳の奥で反響している。

「わかっておる。続けろ」

ゴーティスは憮然として女を見つめ返し、窓辺から体を離した。

一週間ぶりに、夜更けを過ぎた城内にちらちらと雪が降り出していた。サンジェルマンは自室の寝台に腰をかけ、部下が手を尽くして探し出したジェニーの短剣を手に取り、じっくりと眺めていた。

やはり、古い物だ。

それは、ジェニーを地方で拘束した日に彼女から奪い、その後、行方知れずとなっていたもの。今日の夕方、どこかに紛れこんでいたそれを、彼は家来から受け取ったばかりだ。刃先はきちんとした手入れがされて光り輝いているものの、鞘や柄の色が鈍くくすんでいる。長年の使用のせいか、持ち手の柄に彫られた意匠の突出部分が使用者たちの手の脂によって金色に変色し、磨り減っていた。

それでも、彫られている模様自体は目視でちゃんと確認できる状態だ。二十の輪に螺旋状に蔦が巻きつき、交差した二本の剣がその輪の中に描かれている。どこかで見かけた紋章の図柄であるのは確かだ。しかも、サンジェルマンが見覚えのあるものということは、第三貴族など下等貴族のものではないことを意味している。それを踏まえると、ジェニーという一介の娘の身元は、ますます謎に満ちてくる。

剣の扱いを知り、遠国ユートリアの言葉など四カ国語を操り、庶民ながら文字の読み書きができ、ある一定の薬剤知識を併せ持つ。彼女の口から、彼女たちは風変わりな一家で各地を転々と移動していたとも聞いた。もしかしたら、彼女の親はどこかの国の間者だった、という可能性もある。

あれこれと考えを廻らせていたサンジェルマンは、彼女の素性に対して不必要なほどにこだわっている自分にふと気がつき、ため息をついた。詳しい調査など必要ないのだ。王から素性を洗うようにと命じられているわけではない。

サンジェルマンが彼女の素性を探ろうと接触を重ねるうち、彼女の真の素性はまだはっきりしなかったが、わかったことがある。それは、彼女の裏表のない真っ向さと情の厚さだ。その両方に欠ける世界でもある貴族社会に生きているために、彼女は受け入れられず、

問題視されているはずだ。そして、その性質があるゆえに、王への嫌悪と憎悪を露わにし、自分の使用人に親切に接し、“同郷”のサンジェルマンの体を心配する。

ゴーティス王に対する非礼の数々を思えば、サンジェルマンは、ジェニーをどうやっても好意的に受け入れられるはずはなかった。彼女への不信感はあいかわらず抱いており、彼女が王の所属であるという立場上、彼は一定の距離を置いて彼女に接している。

それなのに、何とも自分で納得がいかないのだが、彼はジェニーに対し、ある種の好感と信頼の念が生まれているのを自覚している。それに、これもまた意外なことに、ジェニーも王の部下であるサンジェルマンに意識下で必死に抵抗していたようだが、彼同様、彼女の側でも同じような状況が起こっているようなのだ。彼女が彼に接する空気から漠然と感じられるだけだが、二人の間には、不思議な信頼に基づいた、淡い友情関係が築かれつつあった。

サンジェルマンは部屋の隅にある台に短剣を置きに行くと、壁際にある椅子の上に座って靴を脱いだ。室内にいても寒さは感じていなかったが、素足になると、足を伝わって寒気が身体を上ってくる。彼は寝台に戻り、寝具の内側に体を滑り込ませた。

次の日の朝、サンジェルマンは、光のあまり入らない執務室で女官長や長官と並び、王の予定確認に立ち会っていた。昨夜遅くから降り始めた雪はサンジェルマンが起床する前には止んでいたが、その代わりに気温が低いままに留まって、外は随分と冷え込んでいた。

ゴーティス王が女官長に、後宮のサロンはもう閉めたのかと訊ねた時、サンジェルマンは視線を床に向けていて、王の表情は見えていなかった。質問を受けた女官長が、サロンは今朝早くに再び閉められたと返答するのを耳にして、これでまた当分の間は閉められたままだろう、と彼はサロンの佇まいをぼんやりと胸に思い描いていた。

「――サンジェルマン。二、三日前、おまえが中庭におるのを見た

ぞ」
　突然に話を振られ、彼は顔を上げた。彼と目が合うと、王が自嘲的に微笑んだ。
「サロンの近くだ。あそこで、何をしておった？」
　女官長や長官が咎めるような目つきでサンジェルマンに視線を注ぐ。彼は王の問いが二人と同じ想像に基づくものと悟り、つとめてさりげない口調で王に事実を告げた。
「ジェニー嬢と話をしておりました。彼女の事で気になる点があったので、それを確認していたのです」
「気になる点だと？」
　王が疑わしそうに両目を細めてサンジェルマンを見返した。「どんな事だ？」
「彼女はユートリア語を操るのです。その語圏に住んだこともなく親の出身地でもないのに、どういった経緯で習得したのかと思いまして」
「ほう、あんな最果ての国の言葉を知っておると？　あの娘は思いがけずに才女だな。だが、それをあの娘がしゃべるとして、それほど重要視することでもなかろう。なにゆえ、おまえが気にする必要がある？」
「いえ、私はただ、彼女の素性が少しでも判明する手立てになればと思ったのですが」
　王がせせら笑うように鼻を鳴らした。
「ご苦労なことだ。それで、わかったのか？」
「いいえ。両親が博識で数ヶ国語を話し、ユートリア語は母親から習ったというのは聞きましたが、今のところ、わかりません」
「ふん。そうであろう」
　王はサンジェルマンの返答を聞き、あざ笑うかのように冷たく言い放った。
「されど、あの娘がよくぞ、そんな話をおまえにしたな」
「ええ――」彼が王を見返すと、王は口角を下げ、鋭い眼差しを窓

の方に向けていた。「ええ。――それはきっと、私が彼女の住んでいた土地ベルアン・ビルの出身者と聞き、同郷者のよしみで口が軽くなったのでしょう」

「――は？　何だと！？」王の視線がはっと戻ってきて、瞳が生き生きと輝き出した。「おまえが、何処の出身者だと？　生まれも育ちもヴィレールで、国外に出たことのない生粋のヴィレール人であるおまえが何を言う！」

王の態度がそれまでと一転し、肩をゆすって笑い出した。

「おまえ、あの娘に嘘をついたのか！　なんと、嘘など一つもつきそうに見えぬ、誠実そうなおまえが、あの小娘をそうも簡単に騙したとは！　何とも腹黒い様ではないか！」

「――必要な嘘でしたゆえ。ですから……私は国外に住んだことのある男として、彼女の前ではそうご承知おきください」

王はそれを聞き、さらに皮肉げに笑い続けた。

しばらくして、笑いすぎて目じりからあふれた涙を指でぬぐいながら、王が言った。

「あの娘も愚かなものよ、おまえの嘘にまんまと騙されおって。それなりに、おまえにも心を許したのであろうに」

「それはそうでしょうが――」サンジェルマンが決まり悪そうに微笑むと、王の笑いがぴたりと止んだ。

「……なるほど、どうやら、おまえはジェニーを気に入っておるらしいな。そうでなくば、どうでもよい者の身元調査になど、忙しい時間を割くおまえではない」

「――王、何を？　私は、彼女に対してそのような情など一握も持っておりませんよ？」

「おお、よい、よいのだ、気にするな。義理堅いおまえのこと、俺に遠慮して、娘の手さえ握っておらぬのだろう？」

「なんという畏れ多いこと！　そのようなこと、まったくの誤解でございます！　ああ、王！　どうかお許し下さい、私のとった行動

はなんと身勝手で軽率だったのでしょう！　私に他意はなかったのですが、誤解されて当然の――」

「ふん。おまえこそ、自分の心を誤解してはおらぬか？　俺は、おまえを責めておるのではない。それに……あの娘も俺よりはおまえの方を好むと思うがな」

「お戯れを！」

展開を恐々と見守っていた女官長や長官が身を固くして、サンジェルマンを非難するように見つめている。王は面白そうに笑うだけだ。

「主人が部下に女を払い下げることは、よくある話だ。俺はあの娘をおまえにくれてやってもよいぞ」

「ああ、どうか、王！　私はあの娘に特別な気を掛けてはおりません！　たとえ王がそういった心づもりでおられたとしても、王の目にとまった方をお相手するなど、私には畏れ多くてできかねます！」

サンジェルマンが珍しく語気を荒げて反論すると、それまで面白そうに語っていた王が彼にくるりと背を向けた。王はしばらく無言で、壁に顔を向けたままだった。

「王」

肩にどっと疲れを感じながら、サンジェルマンは彼の背中に向かって呼びかけた。

「王、彼女には……暇を出されるおつもりです？」

サンジェルマンの質問は、女官長たちの注意も必然的に引いた。王は顎を上げて上方を一、二秒見た後、静かに振り返ってサンジェルマンを見据えた。そして、にこりともせずに答える。

「さあて。……まあ、なかなかに良い退屈しのぎにはなっておる」

「そうですか。では、後宮より退かせなくともよさそうですね」

王は少し考えるような姿勢をとり、探るようにサンジェルマンの瞳を見つめた。

「――退城させたら、おまえが身請けでもするか？」

「私が？　いいえ、まさか！　そのつもりはございません！」

肯定すれば彼のジェニーに対する好意を認めることになる。

サンジェルマンは王の問いにたじろいだのは確かだったが、意図的にきっぱりと否定をした。王の目の中にある不信の曇りが、サンジェルマンの返事で少し薄くなったようにも見えた。

微妙に強張っていた王の顎が小さく弛み、彼はまたサンジェルマンにゆっくりと背を向けた。

◇　◇

冬の真っ只中に差し掛かる頃から、どういった心境の変化か、ゴーティス王が週におよそ一度の頻度でジェニーの部屋に訪れるようになっていた。それも、最近は夜だけでなく、午前や夕方の中途半端な時間帯に顔をのぞかせる時まである。そんな場合は大抵、極めて多忙だと自ら口にするゴーティス王はほんの三十分も彼女の部屋に滞在はしない。

ジェニーの部屋にやって来ると、王は彼女を怒らすような失礼な発言や行為を故意に繰返しては、彼女がかっとなって反論したり反抗したりするのを面白そうに眺めているのがほとんどだ。それは侍女や召使の恐怖や動揺を引き起こしはするが、彼がジェニーの言動で腹を立てる様子も見られないし、彼女が彼にキスされることも、抱擁されることもない。そして、一通り気が済むと、怒りのおさまらないジェニーを部屋に残し、彼はさっさと一人で去っていく。特に何をしたわけでもないのに、彼は概ね満足そうだ。

ジェニーには彼の真意がわからない。毎回、彼の訪問を受ける度に戸惑うばかりだ。

そういった環境の変化もあり、ジェニーがケインと地下牢で出会って以来、彼女が地下にたどる道に降りる機会はなかなか作れなかった。それに、ケインが彼女の部屋に再び姿を見せることもなく――いや、彼がジェニーの部屋に通じる入口まで上ってきたことはあって、たまたま彼女が城内を探索していて留守だったか、彼女が階

段の最上部に置いた“取り込み中”の注意書きの板を見て仕方なく引き返していったか、実際はそのどちらかなのかもしれないが。

とにかく、彼女はケインとの再会を果たすこともないまま、いつのまにか冬の終わりを迎えてしまった。そしてその頃には、王の頻繁な訪問を伝え知った召使や後宮に務める使用人たちが彼女に対する態度を改め、丁寧なものに移り変わってきていた。ただでさえ、王と接する回数が増えるにつれて心身に疲労を感じているというのに、人々の慇懃な対応は、ジェニーを自分が自分でないような気に陥らせ、辟易とさせる。

そんな息詰まるような毎日で、彼女はニーナが離宮で催すという、いかにも退屈そうではあるが外出のできる茶会の誘いに飛びついた。ジェニーに声をかけたニーナの侍女ブランは、後宮の外で行う茶会について王の許可を“特別に”賜ったと、「特別」という部分をやたらに強調したが、ジェニーには、彼女がそれによって何を伝えようとしているのか、全然理解できなかった。

ニーナが開いた茶会から数日後、夜になって、ゴーティス王がジェニーの部屋を訪ねた。夜に彼の来訪を受けるのは久しぶりだ。ジェニーは、この上なく気が重かった。

そんな彼女とは反対に、部屋に入ってきた王は既にほろ酔い加減で晴れやかな顔をしている。そんな様子を見るのも、彼女には腹立たしい。彼が自分に視線を注いでいるのは気づいたが、彼女はあえて彼に注意を向けないようにし、下唇を噛んで下を向いていた。

アニーや召使が部屋から去ると、王が彼女の方にせっかちに歩いてくる足音がした。

「おまえは！」

ジェニーは顎をつかまれ、そこに瞳をきらめかせ、あきれたような笑みを浮かべる王を見た。

「何よ……？」

「おまえは、そうもあからさまに嫌悪を顔に出すな！　俺の気がそがれるではないか！」

口ではそう言っているが、彼はあまり怒っているようには見えなかった。

「……ったく、わかりやすく正直というのか、幼いというのか――」

ぶつぶつと不平を呟きながら、彼は顎をしゃくり、ジェニーに移動するように示した。「酒の続きだ。おまえもつきあえ」

二人は酒や簡単な食事が用意されているテーブルについた。なるべく王から離れ、テーブルを挟んで向かいに座ろうとしたジェニーは彼に二の腕を引っぱられ、彼の隣に席を取ることを余儀なくされた。彼女は思いきり不機嫌そうに顔をしかめたのだが、彼女の反抗的な態度に免疫がついたのか、彼はそれをまるっきり無視している。彼からは、葡萄酒の甘い匂いがほのかに漂ってきた。

王に酌をしてやる気などなかったが、彼はジェニーの予想に反し、彼女に酒をつぐことを求めなかった。以前、宴の席で酒をつげと彼女に何度も迫り、気がきかないとなじったことからすると、あまりにも意外だ。彼は自ら酒壷を手に取り、木の杯にたっぷりと中の酒を注ぎ、喉を鳴らして中身の酒を飲んでいる。

彼女があっけにとられて彼を見つめていると、杯から唇を離した彼が宙をぼんやりと見上げた。

「――おまえ、俺に酒を飲むのを止めて寝所に早く連れていってほしいのか？」

「なっ……まさか！」

彼女が仰天して肩を彼から離すと、にらむように彼が彼女をじろりと見た。

「ふん。今、俺に熱い視線を注いでおったではないか」

「ちがうわ、そんなつもりじゃない！」

ジェニーは憤慨して叫んだが、彼はちっとも取り合ってはいない。彼女は口惜しくて、つい、そっぽを向いた。

その彼女のちょっとした隙につけこみ、王がジェニーの唇に自分の唇を押し付ける。

「やめて！」

「ふん、そう言うわりには顔が赤いぞ？　……まあ、よい、夜はまだ長い。まずは、満足いくまで俺に酒を飲ませろ」

彼が杯に残っていた液体を飲み干した。

暖炉の炎の光を受け、彼の赤く濡れた唇が妖しく光っていた。顔が白くて滑らかな分、不思議なほどに赤色がなまめかしく映る。

ジェニーは妙な雰囲気に呑み込まれそうになる前に無理に彼の口から視線をはがし、少しでも彼の側から離れようと、座っている腰の位置をそっと右にずらした。彼は無言で酒を静かにあおり、当然、ジェニーが彼に話しかけることはないので、沈黙が続く。

やがて、彼が自分の杯に酒をつぎ、ジェニーの前にあった杯にも並々と赤紫色の液体を注いだ。ジェニーがちらりと彼を見ると、彼も目だけを動かして彼女を見返した。

「おまえの分だ」と、王が音をたてて彼女の前に杯を置く。

「私？　私は、お酒は――」

「また、俺の酒を飲めぬと？　つべこべ言わずに飲め」

彼が淡々と言い、自分の酒をあおる。ジェニーはためらったが、それをむげに拒絶して彼の不要な怒りを引きずり出すより、口をつけてみる方を選ぶことにした。

上等な葡萄酒は甘酸っぱくて口あたりが良く、芳醇な旨みが喉全体を満たしながら流れ落ちていく。前回もよおした吐き気が嘘のように、彼女の飲んだ酒はすばらしく美味だ。

ジェニーは杯の中で揺れる、赤紫色の水面を見つめた。今度は自発的に、杯を口に運ぶ。体が徐々に温まり、意外なほどに気分が落ち着くと感じた。

そのうち、喉から胸にかけて体の内側から熱くなってきた。頭が、ゆるやかな円を何度も描いているように感じる。予想外の味に思わず杯の四分の三ほどを空けてしまった、その時になって、思い切り、後悔の念が彼女の身を襲う。決して不快な症状ではなかったが、ジェニーは自分が酔ってしまったことに気づいた。

隣の王がそんな彼女の様子を無関心そうに一瞥したが、彼女の心配をよそに、彼はショコラに手を伸ばし、自分の飲食に集中する気でいるらしい。やがて、心地よい温かさはジェニーの足にまで達しようとしていた。

彼女は何とかして気をまぎらわそうと、先日の茶会が行われた離

宮を思い出そうと試みる。茶会のあった広間を右に出て廊下を奥に歩くと、豊富な蔵書をそろえた図書室がある。そこには、床から天井の高さまである本棚に様々な分野に渡る大量の本がぎっしりと押し込まれ、入口に立った彼女を圧倒していた。そこまでの数の本を、彼女は今までの人生で目にしたことがない。

ジェニーは思いがけない発見に感激して本の貸し出しを申し出てみたのだが――後宮の女に書物など何の役にも立たない、と、アニーも女官長も彼女の願いを一笑に伏しただけだった。

あんなに多くの書物。きっと、貴重な情報がいっぱい詰まっているはずなのに。

ふと気づくと、ゴーティス王が無表情でジェニーの顔を眺めていた。身じろぎもせず、言葉を発しもせず、頬杖をついて彼女を見ている。

彼女が喉の奥にたまっていた温かな息を吐くと、彼が一瞬だけ目を見開いた。彼の瞳の中にある光に導かれたように、言葉がジェニーの口について出る。

「あの、私、お願いが――」

「……願い？」

彼が頬杖をついていた腕をはずし、まつ毛をしばたかせる。

「願い？　……おまえが？」

彼の反応を目にしたジェニーは、体の底から流れるように出てきた言葉に身を任せて彼に話を切り出してしまったことを、即座に悔やむはめになった。

こんな人に何かを頼もうと思ったなんて、ばかげている。

酔っているんだ、と、魔が差したとしか思えない自分の愚かな行動を、彼女は心の中で深く責めた。

ところが、疑わしそうに彼女を見ていた王の口から、彼女には到底信じられない一言が無造作に返されてきた。

「聞こう」

「えっ……？」
「おまえの願いとやらを、聞こう」
何かの聞き間違いだろうか？　ジェニーが茫然として王を見つめ返すと、彼は少し不愉快そうに唇を曲げた。
「何だ。よもや、また、退城させろと言うのではなかろうな？　その願いであれば、叶えるつもりはないぞ」
「ちがうわ！　そんなこと、自分で何とかする――」そう叫びかけ、ジェニーははっとして口を手でおさえた。ケインと地下で出会って交わした「協力しよう」という会話がはっきりと脳裏によみがえり、その光景が王に見透かされそうな気がした。
その王だったが、彼女を見て眉を跳ね上げはしたが、さして不機嫌そうではなかった。それを裏付けるように、口元が上向きに変わっている。
「なるほど、やはり、まだあきらめておらぬとみえる。……しかし、自分で何とかするとは、頼もしい発言ではないか。無論、それ相当の綿密な脱出計画を練り、虎視眈々とその機会を窺っているのであろうな？」
「……もちろんよ！」
ジェニーがやっきになって彼をにらみつけると、彼は大げさに怖がるふりをした。
「あいかわらず、なんと勇ましいことよ。されど、生憎、おまえが一人でこの後宮、いや、王城から外に出るのは不可能だ。後宮には外に通じる秘密の抜け道も、存在しない。残念だったな」
彼が意地悪そうに笑うのを耳にしてジェニーはげんなりし、小さなため息が口をついて漏れた。
ジェニーがこれ以上に話を掘り下げることをあきらめようとしていると、ジェニー、と彼女の名が呼ばれ、王が瞳を甘くきらめかせて彼女を覗きこんだ。
「それで――おまえがこの俺にわざわざ頼もうとするとは、一体どんな願いだ？」

「もう、いいんです」
「……よくはない」
彼が彼女の間近に顔を寄せ、瞳から鼻筋に沿って下に目線を移動させると、彼女の顎を親指と人差し指でつかんだ。
「早う言え」
ジェニーは反射的に抵抗を止めて口をつぐみ、血流がよくなって温かくなった頬に手をやった。彼が、ちらりと彼女の頬の上にある手に視線を走らせ、探るような眼差しを向ける。
「離宮にある図書室……あそこの本を、時々、貸してもらえたらと――」
ジェニーが言うと、彼の目が細くなった。
「“離宮”？」
「ええ、あのテュデル宮の――」
「……それが何処かぐらい、知っておる！」王が切り捨てるように言った。「離宮に行きたいだと？　おまえ、書物にかこつけて外出させ、後宮からの脱出の機会を与えろなど、よくも俺に言えような？　俺が、そのような望みをむざむざと叶えると思うのか？」
ジェニーはいきなり逆上した彼に戸惑う。
「そうじゃないわ、外出じゃなくて……本の事を言っているだけよ？」
「は！　外に出ることに変わりはない！」
「外に出るって……四日前に離宮で開かれた茶会には、何も言わずに――私を出したじゃない！」
「俺は、時間をもてあましている女どもの退屈しのぎに特別に場を提供しただけだ。おまえはついでに出られただけであろう！」
「その、暇をもてあましている女の一人でしかない私には、書物だって、立派な退屈しのぎになるわ！」
「おお、そうか！　おまえは数ヶ国語を操る才女らしいゆえ、書物があれば退屈はせぬというわけか！　なんともご立派なことだ！」
王がうんざりした口調で言い放って、椅子の背に乱暴に体を預け

た。椅子が、不快な高音を放って大きく軋む。酒の酔いからだけではない頬の強い赤みが、彼の興奮度合いを物語っている。

ジェニーは、唇の両端を下に下げて目を閉じて顔を天井に向ける彼を苦々しく見やった。彼に、気まぐれでつまらない申し出をしたことを心から後悔していた。

「――おまえに城から逃れる機会を作ってやる気などない。許可は与えぬ」

彼が呟いた。

「城から脱出するのは不可能だと、あなたが言ったのよ……！」

「黙れ」

なんて独裁的で勝手な男……！

目をつぶったまま、王がジェニーの手首をつかんだ。彼女は力任せに自分の方に手を引き戻そうとしたが、彼女の手の位置は動かず、彼の手にいっそうの力がこめられるだけだった。ジェニーは閉ざされた彼の目をにらみつけ、込み上げては消える怒りの言葉で口を忙しく震わせた。

「……されど、他の物ならば叶えてやらぬでもない。そうよな、装飾品か春用の新しい衣装か」

彼が静かに瞼を上げるのを目にすると、息詰まるような胸の苦しさがジェニーを襲い、彼女は小さく喘いだ。

「あなたからなど、何も要らない」

「……何だと？」

彼の低い声はこわばり、鋭い緊張感を帯びていた。ジェニーは、胸のつかえを一気に取り去ろうとするかのように言った。

「あなたに何かを頼もうとしたのが、そもそもの間違いなのよ……！」

彼が椅子から体を浮かせ、その振動でかすかな風が起きた。ジェニーが歯をくいしばって彼の方を見ると、顔全体が強張り、表情のない虚ろな緑色の瞳が彼女の顔の上に止まって、行ったり来たり、上下していた。頬が上気してうっすらと赤くなっているが、言葉を

失わせるほどに彼を怒らせたのかどうか、ジェニーには今ひとつ判断できない。薄く開かれた唇は小刻みに揺れ、隙間からは白い歯がのぞいていたが、とにかく、彼は言葉を一言も発しなかった。

不覚にも目頭を熱くさせ、涙をにじませてしまったのを隠そうと彼女が目をそらすと、それが引き金になったかのように、彼が、つかんでいた彼女の手をいきなり解放した。次に、がたん、と音がして、彼がそれまで座っていた椅子が床にひっくり返った。

「よう言うた！」

その衝撃音でジェニーの体が反射的に縮み、咄嗟に、彼から身を守るために体を背けようと動く。

ところが、王の体は彼女の動きよりも一瞬早くテーブルから離れたかと思うと、彼の髪が後ろになびいた。そして間髪入れず、彼は、ジェニーに背を向け、部屋の入口の方へと歩き出していくではないか。

ジェニーが唖然として彼を見送る中、彼はためらいもせずに部屋の扉を開ける。開いた扉の右側で、通路に陣取っていた王付き近衛兵が頭をくるっと振り向ける瞬間が見えたが、それも一瞬だ。王はジェニーを振り返ることなどせず、乱暴な音をたてて閉まった扉の奥にあっという間にその姿を消してしまった。

ジェニーは何が起こったのか把握できず、混乱した。機嫌を悪くしたからといって部屋を飛び出すとは、いつもの彼とは怒りの展開の様子が異なる。乱暴な行為に走るとばかり思っていたのに。

王が消えた扉をもう一度見た。扉はぴったりと閉じていて室外からの物音さえ聞こえず、彼が戻ってきそうな気配はない。一人取り残された室内は、いつにもまして耳に痛い沈黙だけが残っている。

視界がさっきよりもはっきりとぼやけてきた。王に去られ、独り残されたからでは、決してない。

私は、何をやっているのだろう……。

彼女はテーブルの上に放り出された杯を指でなぞり、そのほのかな木の温もりを指先に感じると、ますます泣きそうになった。

第一部　3．もつれる感情－5

所用で地方に外出していたサンジェルマンが二週間ぶりに王城に戻ると、彼が旅の疲れを癒そうとする間もなく、彼の帰りを伝え聞いた侍従長、衛兵隊長、女官長たちから相次いで呼び出しがかかった。城内に働く使用人たちの表情が固く緊張しているのを目にした時から、彼の留守中に城内で何らかの異変があったのだろうと察してはいたが、彼が挨拶に出向く前から呼び出されたとなれば、それ相当の好ましくない事情があるということだ。王と会える夕食時までにその全員と話をしておこうと考えた彼は、湯浴みを手早く済ませ、まずは侍従長のいる部屋を目指した。

部屋に入るなり、サンジェルマンの目に侍従長のめっきり老け込んだ顔が飛び込んできた。侍従長は五十を越えようかという年齢だが、ここ五年ほどの間で急速に年を取り、頭髪が白く変わる速度が速まっているようだ。侍従長の対面側には彼と同じくサンジェルマンを呼びつけた衛兵隊長が佇んでいて、神妙な顔をしてサンジェルマンに目礼する。サンジェルマンも黙礼を返した。

侍従長がサンジェルマンを手招きし、近くに来るように示した。室内に漂う空気には棘があって、体に重たくまとわりついてくる。彼が歩み寄っていくと、開口一番、侍従長が、王の機嫌が不安定だ、とサンジェルマンに告げた。

サンジェルマンは、驚きはしなかった。何度となく耳にした台詞だ。

「不安定とは？　どんなご様子なのです？」

「ここのところ何かを考え込んでおられるようで、心ここにあらずといった状態か、苛立っておられる事が多いのだ。貴殿が城を発った日、いや、次の日か、王はご自分の寝台を剣で切り刻み、剣一本をつぶしてしまわれた。それに、一週間ほど前、王に縁組を持ち込まれた隣国の使者が王の怒りを買って、危うく暴力沙汰になるとこ

ろだった。使者殿にはうまく対処して帰国させたので大きな問題には発展しないとは思うが――」

侍従長が言葉を濁しながら、反応をうかがうようにサンジェルマンを見た。サンジェルマンは、聞いている、という姿勢を示し、先に話を続けるように長官を促す。すると、その同じ日に、と、侍従長の話を継ぐ形で衛兵隊長が口を開いた。サンジェルマンが彼に注意を移動すると、彼はにこりともせずに話を切り出した。

「その夜、王が今年に入っては使われることもなかった、地下の“特別練習室”に向かわれ、交剣の末に衛兵の右手を切り落とされた。運良くとも言うべきか、その衛兵は命を落とすことはなかったが――今の王が、いつ次の練習相手を欲しがらないと言えよう？　今回の冬はいつになく安定したご様子で、このまま何事も起きずに温かい季節を迎えられるかもしれないと淡い期待を抱いていたのだがね」

衛兵隊長は無念とも怒りともつかぬ感情を交差させたように、顔をしかめていた。相手が王というだけに理不尽な行為に対する怒りの矛先が向けられないのだ。

「そうですか、私の不在の間にそんな事が……。何か、王の心情に影響を与えるような出来事でもあったのでしょうか？」

「私には皆目見当もつかないが――どうだね、衛兵隊長？」

「私にもさっぱり掴めません。冬季の屋内生活での鬱憤が溜まっておられたのか……」

二人より随分と年若いサンジェルマンの前で、二人は助けを求めるかのように彼を見る。

「王は、後宮には足を運ばれておりますか？」

「いや」落胆したような表情で、侍従長がため息まじりに否定した。「この約二週間は、まるで興味を失くされたかのように足が途絶えておるな。後宮へ行かれるようにお勧めしても、余計な世話を焼くなと仰るばかりで、王の機嫌を損ねるだけだ」

そう言って、侍従長と衛兵隊長の二人は顔を見合わせた。

「――だからこそ、今回に関しては私たちも困り果てておるのだ、

サンジェルマン」

午後も遅くなって、サンジェルマンは女官長に会った。先だって話した侍従長と衛兵隊長と同様、彼女も疲れが蓄積した元気のない顔色をしており、落ち着きがなく、どことなく苛立っているような印象を受ける。

彼と入れ替わりに退室しようとした彼女の新しい小間使いの背中がまだ見えるうちに、彼は女官長に告げた。

「先ほど、侍従長と衛兵隊長にお会いしてきた」

彼がにっこりと微笑むと、彼女の強張った頬が幾分か弛んだ。

「そう。それでは、王の最近の動向はご存知ね。……よかったわ」

「私の留守中にいろいろとあったと聞いた。女官長の気苦労、お察しする」

彼が真摯に小さく頭を下げると、彼女の口から短いため息が漏れた。

「いえ、私はいいのですよ。大変な思いをされているのは、むしろお二方……」

女官長が首を傾げるような仕草をし、二度、頭を左右に振った。額の真ん中に血管が青白く浮き立っている。彼女が疲れている証拠だ。

「女官長。お二人にも伺ったのですが、王を不安定にさせる何らかのきっかけについて、女官長の方で心当たりはないか？」

「……そうね」

若干の言いよどみが、サンジェルマンの気に掛かる。

「後宮から王の足が遠のいているとも聞き及んだが？　ジェニーはどうしている？」

話がジェニーに及ぶと、女官長が疲れをいっそう顔ににじませて彼を見つめた。

「ジェニー……あの娘ったら」

「どうされた？　何か、あったのか？」

王が度々ジェニーを訪ねていくようになったという話は、以前、彼も女官長から聞いていた。それなのに、王はここ二週間も後宮にすら足を向けていないという。

「あの娘にはしばらく安心していたのですが……。ジェニー、あの娘は事もあろうに――王に、離宮の書物を読ませてくれと直談判したそうにございます」

「書物を？」

「ええ、私たちに頼んでも取り合ってもらえないと知ってのことですわ」

彼女は力なく言うと、口元に手をやって大きく息を吐いた。また、顔を左右に振っている。

「王の元に暮らす女が書物などを手にしてどうするというのです？　おお、あの娘の身の程知らずなこと！　当然、王はそんなばかげた願いをお聞き届け下さるわけがございません、ジェニーにお怒りになって部屋を出ていかれたそうですわ。ジェニーは、出すぎた真似をしたと今頃になって気づいたのでしょう、めずらしく、反省している様子ですがね。王に愛想をつかされたとしても、もう、仕方がないことですわ。私としても同情はできかねます。そういったわけですから……それ以降、王が彼女の元を訪ねたことはありません」

女官長は一気にまくし立てると、呆れ果てたというように額に手をやった。

「それはいつの話だ、女官長？」

「貴方の出発された日です。ここでライアン様と三人で話した日ですから、よく覚えておりますわ」

「ああ、それなら私も覚えている。あの日は王がいつになく上機嫌だった」

「そうでしたかしらね」

女官長と会話をしながら、サンジェルマンは直感で、王の不機嫌の原因がジェニーにあるのではないか、と思った。

「では、ジェニーとの一件を境に王は不安定に転じてしまわれたと

――」

「さあ、それはどうでしょうか？　きっかけの一つにはなったのかもしれませんが、そうだとも言い切れませんわ。その次の日にはカトリーヌを訪ねておりますが、彼女が誤って酒壷を落として割ってしまったことで、ひどく機嫌を損なわれたそうにございます。そちらが原因かもしれませんし。後宮に姿を見せなくなったのはその日からですから」

「そうか。それでは、何とも言えないな」

サンジェルマンが小さく息をつくと、女官長が弱々しく微笑んで彼を見た。

「王の気が治まるならと、周囲に若い娘を何人か付けてみたのですが……王の目には留まらなかったようですわ。まったく、困りましたわ。今回は特に長く続いているようですし、何とかして静まっていただかないと。サンジェルマン様、今回は、一体、どんな手を打てばよいのでしょうね？」

サンジェルマンは、夕食の為に部屋に現れたゴーティス王についさっき会い、帰城の挨拶を済ませたばかりだ。王のいる晩餐の間から隣の控えの間に移り、中央にある椅子に身を沈めている。二つの間を繋ぐ扉を通して給仕たちの低い足音が時折聞こえてくるので、王が通常と変わりなく食事を進めているとわかり、サンジェルマンは安心した。

彼が王に挨拶にあがったときの、王の醒めた目が鮮明に記憶に残っている。王が神経質になっている時はそうであるように、顔色は病的に白く、目の輪郭全体が赤みを帯びていたのは同じだ。だが、サンジェルマンを目にするなり、瞬間的に凍ったかのように王の瞳の奥から温かみが失われた。本日戻りました、とサンジェルマンが述べても、王は無言で頷いただけだ。

最初こそ気のせいかと思ったのだが、サンジェルマンがさらに王に話をしようとすると、王の体の表面に緊張感が張りめぐらされる

のがわかった。場の空気が張りつめ、王の機嫌がじわじわと悪化していったのが見てとれた。彼は、話を後回しにされた。

私に対し、何らかの悪感情を持っている？

心に浮かんできた考えに半信半疑ながら、さがれ、と王に尖った声で命じられて、サンジェルマンは自分の考えが当たっているのではないかという思いが深まった。なぜ王に敵視されるのか心当たりはなかったが、王が、彼と同じ空間内にいるのを良しとしていないのは明らかだった。それ以上の事態の悪化を招く前に、彼は晩餐の間から退いた。

しかし、王が精神的に不安定な時には激情に任せて人を殺傷するのも珍しくないのに、彼は王に罵倒もされなければ杯を投げつけられることもなかった。サンジェルマンの存在が王の嫌悪を引き出しているらしいのに、負の感情は王の内側だけにこもっている。その事実の方がサンジェルマンを数倍も混乱させる。

王のとった態度の背景にあるものはまだ、掴めない。サンジェルマン自身が要因の一つであるとすれば、さらに、ややこしい。事態は聞いていたよりも悪そうで、収拾するのに、時間がかかりそうだ。

晩餐の終わりが告げられ、控えの間と晩餐の間を繋げる扉が向こうから開放された。開いた空間から別種類の明るさがサンジェルマンの脚の間にある床を照らしたが、物思いに耽っていた彼はそれに気づくのに遅れ、扉の先に視線をやるまでに若干の間を要した。彼がやがて顔を上げて晩餐の間を見ると、細長いテーブルを回って出入口に向かおうとするゴーティス王の姿が、扉の両側でサンジェルマンに背中を向けて立っている二人の給仕の合間に現れた。

機嫌の悪い王の目に触れないように、と彼が願ったのはほんの一瞬しか続かず、王はサンジェルマンが隣室で待機していたのを最初から心得ていたというふうに、彼を悠然と見つめ返した。あわてて彼が椅子の上で姿勢を正すと、王は片方の眉根を少しひそめた。あいかわらず人を射るような眼差しだったが、さっきほどの怒りは含

まれていない。
　王は無言で彼の視界から消えていった。サンジェルマンは急いで身を起こし、王の後を追うべく、駆けていく。
　王を護る近衛兵たちの後ろに追いつくと、彼の足音に気づいたらしい王が、その歩みは止めずにちらりと背後を振り返った。それがサンジェルマンだと予想はしていたようだ。王は表情を変えず、通路を先へと進んで行く。
「王」
　問い詰めたくなる気持ちを抑えこみ、サンジェルマンは普段と同じ調子で王に話しかけた。だが、彼は返事もせず、背後に注意を向ける素振りも見せない。
「王、私の出向してきた地の件で報告があるのですが――」
「それは大臣どもに言え」振り向きもせず、淡々とした口調で王が言い放つ。
　普段ならば、王の機嫌が多少悪かったとしてもサンジェルマンはもう少し食い下がって話を一方的に進めている。けれど今回に限っては、そうする事が良策かどうかは疑問で続きを口にするのを躊躇し、この後にどう出るべきかと彼は迷った。王が歩く度に肩の後ろにたなびく銀色の髪を見ながら、サンジェルマンはどうしても二の句を継げない。
　数秒後、王の歩みが遅くなった。サンジェルマンは足並みをゆるめ、自分から見える近衛兵の横顔がうっすらと強張っていく様を目にする。
「おまえはもうさがれ。今宵、おまえには用はない」
　王はゆっくりと歩いたままで振り向かず、サンジェルマンに向けてきっぱりと言った。
「さがれ」
　やっと立ち止まって振り返った王の顔には、緊張と苛立ちが混じり合ったような奇妙な高揚がひろがっていた。サンジェルマンは戸惑いを何とか隠し、唇をすっと引き締める。

「は。ですが――」それから彼が次に言葉出そうとすると、それにかぶせかけるようにして、王が言った。
「俺は今から後宮に向かう」
彼はサンジェルマンの追随をあらためて目で制止し、有無を言わせない口調だった。

東館から伸びる通路の先、後宮の入口付近では、二週間ぶりに予告もなく姿を現したゴーティス王を見つけた者たちがにわかに慌て出している。後宮側に向かって開かれた両扉の向こうに、二人の女が廊下の奥の方へ急いで駆けていくのが見えた。王の到着をきちんと迎え入れられるよう、入口を護る衛兵たちが顎をぴんと上げて背筋を伸ばす。
通路には小さな正方形の窓が等間隔に四つ並んでいるが、日没とともに木板で閉められている。通路はうす暗い。衛兵たちの頭上にある、壁につけられた松明が明々と燃えているだけだ。
二つの棟を繋ぐ通路のちょうど半分を過ぎたあたりに差し掛かった時、突然、ゴーティスは廊下の中央でぴたりと足を止めた。
両手が、指先が、小さく揺れている。
「おのれ……」
ゴーティスは手を握り締め、制御のきかない自分の手から目を背けて後宮の入口に視線を上げた。彼も見慣れた召使女たちが衛兵たちの後方に一人ずつ、頭を垂れて従順に待機している。その光景が目に入ると、彼の苛立ちがいっそう増した。
「おのれ、あの女……！」
彼が誰に言うでもなくそう罵ると、両側にいた近衛兵たちの体がわずかに震えた。まるで、自分の体自身に起きた震えのようだ。実際の彼の体は震えなどしていないのに、体の内側が震え続けているような、奇妙な感覚が続いている。
彼は歯を食いしばった。体の中心から、耐えられないほど熱く、重苦しい固まりまでもが喉をつきあげてきた。彼は自分の体を扱い

かね、両目をしばらく瞑るほかない。
「王？　ご気分でも……？」
遠慮がちに彼に声をかけた近衛兵の言葉に触発され、彼は目を見開いた。目の前に開けた視界は、少し明るく感じる。
ゴーティスは近衛兵たちの間から一歩踏み出し、足首をぐるりと回転させて後宮に背を向けた。王と対面する形になった近衛兵たちもあわてて彼に倣い、向きを変える。
後宮入口にいた者たちの間に動揺が走ったらしい気配は感じた。声や物音はゴーティスの耳まで届いてこなかったが、彼自身でさえ今の自分の行動が不可解なのだ、彼らが戸惑ったとしても何の不思議もない。
「女官長を俺の部屋に呼べ！」
通ってきたばかりの通路を戻ろうとする直前、彼は背後の者たちに聞こえるよう、大声で言った。続けて、女たちの切迫した返事が彼を追ってきた。

女官長は予期せぬ混乱と不満を腹の底に溜め、義務感だけで後宮への道を急いでいた。付き添いの者はいない。夜はまだそれほど更けてはおらず、後宮の住人たちも眠ってはいない時間帯だ。
彼女が後宮入口に姿を見せると、扉の番をする衛兵たちが彼女の為にと入口扉を開放した。ドレスの裾をひょいと持ち上げ、一段高くなっている後宮の廊下へと彼女は足を踏み入れる。王の訪れない後宮は静かで、どこか寂しげだ。行く道すがら、彼女の姿を見かけた召使女たちが頭を垂れる。
階段を上がろうとした時、「女官長様？」と、彼女の頭上から聞き覚えのある女の声が降ってきた。彼女は声だけでそれが誰かを特定し、何ともやり切れない思いで女を見上げる。
「ああ、アニー、ちょうど良いところで出会ったわ」
彼女が階段を登ろうとする前にアニーの方が素早く降りてくる。
「私、今から帰るところでしたが。どうなさったのです？」

「そう……。せっかくのところを悪いけど、ちょっと一緒についてきてちょうだい。ジェニー様はもう休まれているの？」
「いいえ、まだだとは思いますが。彼女が、何かご面倒でも？」
「ジェニー様に話があるのよ。すぐに終わるから、一緒に来て」
二人は、緊張感からか、無言でジェニーの部屋に入った。

第一部　3．もつれる感情－6

冬の雪が雨に成り変り、地面を温かく濡らす。あじけない砂色の土が生気のある彩りに移っていく、次の季節。

雨が降ったり止んだりの日々がしばらく続き、ようやく水色の空が広がった日の午後、二人の女が衛兵二人に付き添われ、後宮のサロンから中庭に降り立った。中庭も春の装いに整備されている途中だったが、女たちの目的地はそこではない。四人は中庭の小径を抜け、東館の端にある扉に消えていく。彼女たちは、テュデル離宮の図書室に向かっている。

東館の控えの間である一室で、サンジェルマンは、眼下を歩く四人が中庭を横切っていく様を一部始終眺めていた。その中でも、期待を押し隠せないといった様子のジェニーは、見ていてもほほえましい。彼女に同行していく侍女アニーは、若干の迷惑そうな、不機嫌さをその表情にたたえていた。

ごく最近になって、何が甲を成したのかわからないが、王の情緒は安定しているようだ。サンジェルマンにも、さほど冷たい態度をとりはしない。ジェニーの元には通っていないらしいが、後宮にも数度、足を向けたと聞いた。

女官長は城が平安を取り戻しつつある事に胸をなでおろす一方で、王が“気まぐれ”でジェニーの些細な望みを許可した、と嘆いていた。あまり頻繁でないのなら、衛兵を同行させればジェニーは自由に離宮に出入りできるのだと云う。

しかし、王は気まぐれのように見えて、必ず、何かしらの意図や計算の基に物事を決めていく。

サンジェルマンはそれを知っており、女官長とは違う意味で納得がいかなかった。

一人の娘の“些細な願い事”だったのかもしれないが、王の許可した事は、決して“些細な”内容ではない。

ジェニーへのこの特別な計らいは、おそらく、波紋を呼ぶ。

ジェニーが最初に離宮の図書室に訪れてから約一週間、ジェニーが二度目の外出を果たすと女官長の口から聞き、ゴーティスはつい、失笑した。

よほど、あの場が気に入ったらしい。

一度目に彼女が図書室に行った際、彼女はゴーティスが当初疑っていた脱出の機会を窺う素振りすら見せず、夕方遅くまでの時間をそこに留まり、付き添った侍女を困惑させたという。女官長の口ぶりからすると、どうやら彼にジェニーの行為を止めさせるようにとの願いが込められているが、彼にはそんな気は起こらなかった。むしろ、ジェニーの興奮度合いが手に取るようにわかって、面白がっている。

「そのうちに、あの娘の知恵熱も冷めよう。そちらに目を向けている間は他に注意を向けまい。当分の間は放っておけ。だが、監視だけは怠るな」

渋々と引き下がる女官長の隣には、サンジェルマンが微動だにせず、立っている。それを目にすると、ゴーティスの耳の奥深くに、サンジェルマンとジェニーの高らかな笑い声が反響した。彼女の笑い声を耳にしたことは一度もないのに、だ。

注意をそらそうと見上げた窓の外には、今日も明るく晴れわたった水色の空がある。

少々の湿気を含んだ空気は比較的冷たかったが爽やかで、その日の午後、ゴーティスはしばらくぶりに馬を繰り出し、城の敷地内を闊歩して周った。吸い込む風は、新しい緑と土の匂いがした。

最初こそ、彼は庭園の小径に沿って歩いていただけだったが、彼の乗る馬も久しぶりの外出に興奮気味で走りたがっていた。ゴーティスが城の北方に何気なく目を向けると、彼の牝馬が、甘えたようにいななく。

発作的に、ゴーティスは馬の腹を蹴った。馬が小さく鳴き、北を目指して駆け出していく。彼の後ろから、付き添いの兵たちが追ってくる蹄の音がした。風を受けた髪が顔を覆い、彼の前方の視界を隠してしまう。

執務室でサンジェルマンの穏やかに微笑む顔を見なければ、自分の耳の底に不愉快な笑い声が甦ってこなかったのだ。

ゴーティスは苛ついた。

今もまた、二人の楽しそうな笑いが彼に追いすがるようにまとわりつく。彼はその声の二重奏を追いやろうと、頭を左右に揺らした。視界が開け、左右対称の形をした小さな白い小城が現れる。

テュデル宮だ。

その白い小城は王城から目と鼻の先にあり、普段は掃除をしに来る召使たちがいるぐらいで住人はいない。宴や茶会が開催される時だけ、離宮につめる衛兵や使用人たちの数がぐんと増える。

ゴーティスは馬から降り、玄関の衛兵に敬礼された。運動の刺激とは別の何かが、ゴーティスの心臓の音を押し上げていく。

居城の東館も人はまばらにしかいないが、テュデル宮内はそれ以上に閑散としていた。玄関を入って左右に伸びる廊下には人影がない。左の廊下の先からは女達らしき話し声が漏れてきていたが、彼女たちが突然の侵入者の気配に気づかなかったことからすると、ゴーティスたちの立つ玄関とは少し離れた場所にいるのだろう。

宴を催す“右の広間”を通り過ぎると、廊下の突き当たり近くで退屈そうに欠伸をしている衛兵がゴーティスの目に入ってきた。男が待機する扉の向こうには、ジェニーのいる図書室がある。そう認識すると、さっきゴーティスの心臓の音を押し上げたのと同じ因子が、彼の喉元をわずかに締め付けた。

天井の高い廊下には音がよく響くため、彼らの立てる物音に気づいて衛兵が振り返り、見ていて哀れなほどに慌てふためき始めた。その一つ手前の部屋からは中年の女が顔を出し、――ゴーティスが何度となく見た侍女の顔だ――不機嫌そうないかめしい表情が瞬時

に驚愕に取って変わる。
彼女は部屋から転がり出るように廊下に出て、王の来訪を知らせようと隣の部屋に走ろうとした。
「待て」
扉をたたこうとしていた侍女の手が止まり、彼女が振り返った。怯えたように青ざめている。
「知らせずともよい」
彼女が困惑したように扉と彼を交互に見た後、消え入りそうな声で、はい、と返事をした。

自分と図書室を隔てる扉を押し開ける直前、ゴーティスは急にその場から逃げ出したい気持ちになった。体の中心部や頭では何の躊躇もないのに、末端の手足から力が萎え、それぞれに消えていこうとしている。
「愚かなことよ。何を恐れるというのだ?」
彼は口の中でそう呟き、扉を肘で静かに押した。
扉と面する壁には天井まで伸びる本棚があったが、L字形となった部屋の、彼の立ち位置からは奥の様子が見えない。ジェニーは部屋の奥の方にいるのだろう。物音はせず、室内には古びた油紙の匂いが充満している。
ゴーティスは足音をたてぬように注意しながら、右に折れる地点までそっと歩いていった。入口扉から離れるにつれ、部屋の奥にある窓から差し込む光で床が明るくなっている。紙のこすれる微かな音がし、彼は曲がり角で足止めをくらった。直後、女の忍び笑いのような小さな息遣いが流れてきて、彼は息を飲む。
彼が本棚の陰から奥の様子をそっと盗み見ると、視線の先で、ジェニーが本棚に背中を預け、両手に持った一冊の本に目を落としていた。楽しそうに書物の頁を指でめくり、唇の両端をさらに上にあげる。彼に対する時には決して見せない表情だ。冬の晴れ間に感じるような満ち足りた気持ちとは別に、焦燥感にも似た軋みが彼の胸

を襲った。

再び、彼女が幸せそうに微笑み、唇の間から軽い笑いがもれる。心臓が喉元まで移動してきたかのように、ゴーティスの顎のあたりで脈打った。頬に熱が流れこみ、耳が熱くなる。視線が彼女に固定され、離れられない。

自分自身に動揺し、ゴーティスは息をつめた。目は勝手に彼女の顔の造作を観察し、彼女の指の動きを追ってしまう。行動の制御がきかない。

不意に、幸福感と隣り合わせていた胸の軋みが、苦い痛みへと変わった。それは胸の中央で留まり、ゴーティスは思わず胸を手で押さえた。胸の興奮は高まる一方なのに、この不快な苦さは何だろう？

ゴーティスは本棚の陰にそっと体を戻した。彼女の笑顔を邪魔したくないためだけに、彼は、息をひそめる。

物音に気づき、ジェニーは書物から目をあげた。床を歩く音が近づいてきて、彼女の前に丸いシルエットが現れる。

「……どうしたの？」

アニーの怒ったような、困ったような顔を目にして、ジェニーは尋ねた。

「ジェニー様、王に何か無礼な事をされたのではないでしょうね？」

「王？」ジェニーは開いていた頁をぱたんと閉じた。「どうして？王なんて、ここしばらくは顔も見ていないのに」

「――見ていない、ですって？」

アニーが憤慨するように言い、彼女を責めるかのように見返した。

「何をおっしゃっているのです、先ほどこちらにおいでになったではありませんか！　つい今しがた、王が非常に張り詰めた面持ちでお帰りになるのをこの目で見ましたわ！　王の来訪が遠のいて以来、かれこれ数週間……せっかく王の気がお変わりになって、再び、しかもこんな場まで訪ねておいでだというのに……。私は、ジェニー様がまた何か仕出かした、いえ、失礼をはたらいたのではないかと、

そりゃあ気が気ではありませんわ！　ジェニー様、本当に何があったのです？」

彼女の剣幕にジェニーはびっくりした。

「そんな事を言われても、私は彼が来たことも知らないし……顔さえ、見ていないのよ？」

「では、私が嘘を申しあげているとでもおっしゃるのですか！」

「そうじゃなくて、私はただ――」

「ええ、ええ、わかりましたわ、それほどお疑いならば、どうぞ、外の衛兵にお確かめくださいい！　私と全く同じ事を申しあげるはずですわ！」

聞く耳を持たないアニーと今聞いた内容に、ジェニーは戸惑った。衛兵はアニーに詰問されて彼女と同様の発言をし、ジェニーをますます困惑させる。二人は見たというが、ジェニーは、本当に彼とは顔をあわせていない。

その後二週間近く、王はやはりジェニーの前に姿を現さなかった。召使たちの噂で、王が後宮の他の女を訪ねていると知ったが、ジェニーにとっては取るに足らない事だ。アニーは王の寵愛が失われてしまったと言って度々嘆き、召使たちには再びジェニーを軽くあしらう態度が見えるようになってきた。

その間に二回、地下に伸びる階段の横道を捜索してみたが、ケインが以前に言っていた通り、ジェニーはその度に突き当たりにぶつかるだけだった。ついでに地下のケインの元まで足を伸ばしてみたが、彼は城内の探索に励んでいるらしく、二度とも、地下牢は空っぽだった。ジェニーは、ケインの邪気の無い瞳をもう一度見てみたかった。しかし、ケインの方から彼女を訪ねて部屋に上がってくることは、結局のところ、今までに一度もなかった。

季節が春に入ってから、屋外の風景は日毎に移り変わっていった。中庭は黄緑色に覆われ、空の色は毎日濃くなっていく。離宮への外

出について、アニーが文句を言わなくなった。彼女曰く、王の来訪が途絶えた女が独りで後宮に残っているよりは、人の目に触れない場所にでもいた方がよいそうだ。ジェニーにその概念がよく理解できなかったが、彼女が迷惑そうな顔をしないだけ、ジェニーも気分的に助かっている。

城の出入口の一角からテュデル宮までは黄土色の小道が続く。昼前の暖かな空の下、ジェニーは数度目の図書室訪問の為、アニーや衛兵たちと先を急いでいた。

「これは、これは」

突然、庭園の垣根の陰から馬上の一行が現れて、歩みを進めていたジェニーたちの前を塞いだ。男が三人だ。ジェニーが仰ぎ見た馬上の人物が口元を歪めて笑い、彼女を見下ろす。

「なんと、才女殿ではないか。これは、ご機嫌麗しゅう」

ジェニーはアニーの手に乱暴に引っぱられ、彼女と共に脇によけた。衛兵が反対側によけ、いきなり出現した王に敬礼する。

「……顔を上げろ、ジェニー」

俯いていたジェニーは顔を上げた。久しぶりに顔を会わせた王は、かなり元気そうだった。

「俺の顔を見忘れたのか？」

それに、ずいぶんと上機嫌だ。

「おまえ、テュデル宮へ行くのであろう？」王が唇の端をきゅっと上げて皮肉そうに笑う。

「はい」

ジェニーは隣のアニーからの強力な圧力を感じ、日頃から彼女に命令されるかのように言われ続けていたことを切り出そうと、彼を見た。

「……王、あの」

「何だ」

アニーや女官長の脅迫じみた言葉を覚えていなければ、こんなこと、彼には言いたくない。

「あの……私に、離宮への出入りをお許しくださった事、心の底より感謝しております」

口調に嫌悪がにじみ出てしまう前に、ジェニーは一気に言い放った。すると、馬上の王が目を広く見開いてジェニーを見つめ返した。その目から逃れるように彼女が頭を下げ、彼に感謝の意を示すと、頭上で笑いが起きる。

「おまえ――」ジェニーがはっとして思わず頭を上げてしまうと、王が鼻をこすりながら笑っていた。

「その言葉、誰からの入れ知恵だ？　なんと似つかわしくない言葉づかい！　おまえの口から、“感謝する”などと聞こうとは！」

彼はそう言って、さらに笑った。常日頃に目にする嫌味な笑い方ではない。

ふと気づくと、衛兵や王の背後にいる近衛たちがぽかんとした表情で王の笑顔を見つめている。ジェニーが王を見ると、彼がいつもよりは柔らかい眼差しで彼女を見返していた。

「されど、おまえからの感謝は貴重だ。おまえには不本意だろうが、受け取っておこう」

「は……ありがとうございます」

自分の隣でアニーが肩で息をつくのが、ジェニーにもわかった。

「ジェニー」

王に呼ばれて彼女が振り向くと、馬の背の上で彼が後方へ体を少しずらしていた。

「おまえは馬の扱いにも慣れておろう？　無論、乗れような？」

「あ、はい」

「では、乗るがよい」

静かな口調だったが、断りを受け入れない彼の意思が見え隠れしている。ジェニーの隣でアニーが、返事をして、と彼女をせっついた。

勝手で気まぐれな彼は、いつでもわがままを通せると思っているのだ。彼と同じ馬に乗りたいわけがないのに。

ジェニーは彼の一方的な物言いにむっとしたが、あくまでそれを抑えた。

「あの……はい。私は乗馬にも慣れていますが、でも、あいにく、私は独りでの騎乗経験しかないのです。私が不慣れなせいで王にご迷惑をおかけするわけにはまいりませんから――私は、歩いていきます」

彼女がそう返答すると、その場が凍りついた。王の意思をはねつける者など、ここにはいない。

ジェニーが王を見上げると、周囲の者たちのうろたえぶりとは逆に、当の本人は意外に涼しい顔のままだった。

「そうか、経験がないとな」

彼が可笑しそうに片方の眉を上げた。「よろしい。では、これを最初の経験とせよ。――衛兵！」

「は、ははっ！」

ジェニーに同行してきた男がかすれた声で返事をした。

「ジェニーが馬に乗れるように手を貸せ」

アニーの手がジェニーの背を押し出し、ジェニーは王の乗る馬の前に出された。王の命令を受けた衛兵が地面に膝をつき、彼女の足が掛けられるようにと両手を出している。

「来い、ジェニー」馬上から王が左手を差し出す。

彼に手などとらせるものか、と、彼女が彼をにらみ返すと、彼は不敵に笑った。

ジェニーがその場で動かないでいると、若い衛兵が懇願するように小声で訴えてきた。彼は今にも泣きそうな顔をしている。

「どうか、ジェニー様」

それを見ると、ジェニーはそれ以上嫌だとは言えなくなってしまった。王の後ろに控える二人の男たちも、固唾をのんで彼女の動向を見守っている。

ジェニーが仕方なく手をおずおずと伸ばすと、王が手首に近い部分を掴んだ。そして、衛兵に押し上げられることもほとんどなく、

彼女の体は馬上の王の前に引っぱり上げられる。
馬上で彼女が掴まる箇所を探していると、首の装飾部だ、と耳のすぐ後ろで声がした。反射的に少し後ろを振り返った彼女は、目前に王の顔が迫っていたことに慌て、すぐに前方に顔を戻す。彼が怖くはなかったが、心臓が早鐘を打ち出した。
彼に言われたとおり、ジェニーが馬の首に付けられた装飾の突起部分を掴もうと前に移動すると、その分だけ王も体を移動させた。ジェニーの両腕の後ろから、王の手が馬の手綱に伸びる。
背中越しにジェニーのものではない心臓の音が伝わってきて、段々と早くなっていくのがわかった。それがわかると、ジェニーにも緊張感が高まっていく。
行くぞ、と声がして馬が動き出すと、ジェニーの腰に後ろから王の手がまわされた。

第一部　3．もつれる感情－7

月が変わり、日差しが鋭く変わりつつあった。去年とは違い、暖かくなっても王が戦に繰り出さないせいもあって、城も国も平安を保っている。穏やかな日々が続いていた。

後宮内も平和だったが、その中で唯一、手がつけられないほどに動揺し激怒している女がいた。一時的にはその座を奪われても、結局は後宮に君臨すると自他共に認める、王の愛人の一人、ニーナだ。ここ数日、彼女の周辺だけは嵐のような日々に見舞われていた。

「うるさいわね、おさがり！」

主人を気遣って世話を焼きたがるブランを追いやることには成功したが、それでも怒りがおさまらず、ニーナは彼女が消えた扉に向かって首飾りを投げつけた。大きさの異なる紅玉でできた首飾りは扉の上で勢いよく跳ね、床の敷物の上に落下していく。黒い毛皮でできた敷物の上で、紅の丸い玉の固まりは血の染みにも見えた。

事の発端は三日前、彼女が、王が離宮で一夜を過ごした、と聞いたことだ。そして当然、彼が独り寝をするはずもなく、そこには後宮のジェニーが一緒だったという。

「やってくれるじゃないの、あの小娘……！」

思えば、王が一介の娘に複数に渡る外出許可を出したこと自体、ニーナには合点がいかなかった。まことしやかに後宮内で流れる、王には間者としてジェニーを育成する意図があり、学習の場としての図書室通いを許したという噂にも、ニーナには何となく腑に落ちなかったのだ。

扉の前まで歩いていった彼女は、敷物の上にある首飾りを足で踏みつけた。足の下で硬い石同士がぶつかり、軋んだ音をたてる。

用心の為にとジェニーの様子を追わせていた、彼女の予感は当たっていたのだ。王が一時的に足繁く通ったジェニーに対して嫉妬が薄れかけていた矢先、ニーナは背後から奇襲に遭い、全てを盗まれ

た気分だった。

「おお、どうしてくれよう！　小娘の分際でこの私を足蹴にするなど、何としたものか！」

足の下で石が転がり、ニーナは足をとられそうになった。見ると、彼女が床に紅玉を押し付けていたせいで紐が切れ、数個の玉が外れている。黒い毛皮に飛び散る紅い玉は、まるで、血しぶきだ。

ニーナはそのうちの一つを指でつまみ、光で玉を透かして見ようと、角度を何度も変えて玉をのぞいてみた。だが、赤黒い玉には光があまり通らない。

彼女は紅玉を見ると、そっと、それを手のひらの上に置いた。

急に、微笑みがついて出る。

北の庭園に面した広間には十人ほどの女たちが集い、優雅に奏でられる音楽の調べに心地よく聴き入っていた。一曲が終わるごとに拍手が起き、楽団の一行は仰々しく頭を下げる。ニーナの呼んだ楽団は女たちの要望に応えてどんな曲も演奏し、彼女たちから喝采を受けていた。

「素晴らしい演奏でしたわ！　ニーナ様のお選びになる楽団はやはり一流の腕前ですわね！」

「まあ、ありがとう、カトリーヌ。貴女のお気に召したようで、私も嬉しいわ」

招待客の一人でもあるカトリーヌににこやかに笑い、ニーナは彼女の手を優しく取った。

演奏が一息つくと、給仕たちによってハーブのお茶が客人たちに配られた。ここに居るのは全てニーナの知り合いで、彼女が好んで開く茶会の出席者だ。お互いに顔見知りの客人たちは各々におしゃべりを始め、ニーナの隣に席を取るカトリーヌも反対側の貴族の女と楽しそうな会話に興じている。

ニーナは楽しそうな客人たちの様子を見て満足し、一番端の席で所在なさそうにお茶を口に運ぶジェニーを目にして、さらに満足し

た。ニーナもよく知る、気位の高い貴族の女がジェニーの隣に陣取り、ジェニーとは反対方向を向いて楽団の若い男としゃべっている。

「音楽はいかがでした、パルトロー夫人？」

ニーナが彼女と男の間にさりげなく近づいていくと、女がぱっと顔を輝かせて笑顔になった。

「これはニーナ様！　とても感激しましてよ！　特に、彼のつまびく弦楽器の音色が美しくて……ちょうど今、この方にそのお話をしていたところですわ」

「まあ、そうでしたか」

ニーナは女の瞳に宿る欲望に気づかぬ振りをして、男に笑いかけた。灰色の目の男は丁寧にニーナに頭を下げ、女に微笑みを送った後、ニーナに向いた。

「夫人には身に余るほどのお褒めの言葉を頂きまして、少々面食らっております。ニーナ様、この度は私共にこの場で演奏する機会を与えて下さり、誠にありがとうございました」

「いいえ、いいのよ。お礼を言うのはこちらだわ。皆も満足して……素晴らしい演奏だったわよ」

男が深々と頭を下げた。

夫人の視線が男の横顔に絡みつくのを見て、ニーナは早々に二人の間から退散する。

彼女がジェニーの前に立つと、ジェニーより先に侍女の方が嬉しそうな表情を見せた。

「ジェニー、今日はあなたに来ていただけて嬉しいわ。楽しんでいらっしゃる？」

「はい。私の方こそ、ご招待いただき、ありがとうござ――」ジェニーが微笑んで礼を言うのを遮り、ニーナは彼女に顔を近づけて囁いた。

「ジェニー、無理しなくていいのよ。これは儀礼的な催し……あなたなら、奥の書庫で書物を読んでいた方が楽しいに決まっているわ、ね？」

ジェニーが困惑したように眉をひそめたので、ニーナはそれが嫌味ではないと意味するため、なるべくにこやかな笑顔を作った。
「ねえ、ここは放っておいて外に出ないこと？　ここの庭園は見事なのよ、私が案内するわ。背丈のある垣根があって内側が見えないけれど、今の時期は見ごたえのある薔薇が咲き誇っているの。あなたもきっと気に入るわ。是非とも、見てもらいたいのよ」
ジェニーの表情が明るく輝いたのを見て、ニーナは心の中で笑った。彼女が自分の侍女を振り返っていたが、ニーナの申し出に侍女が嫌がるはずがない。
「よかったわ。あなた、きっと感激するわよ」

アニーを含めた三人が部屋の隅をつたって移動していると、楽団員の二人が満面の笑顔でニーナに近寄ってきた。
「今日は本当にありがとうございます。楽団の者たちもそりゃあ大喜びです！」
「そう、それはよかったこと。でも、まだ終わりではなくてよ？私たちが戻ったら、また再開してもらうわよ」
「それは――どちらかにお出かけで？」
ニーナはジェニーたちをちらりと見て、初老の男に微笑んだ。
「彼女を庭園に案内してさしあげるのよ。ここの薔薇はね、とても綺麗なの」
「薔薇！　薔薇ですか！」彼が驚いたように声をあげた。「――ニーナ様、そのう、できればですがね、その、私も同行させてはいただけませんかね……？」
「何ですって？」
「いえ、その、実はですねえ……、私、薔薇には目がなくて、旅の道中でもあちこちで見て回っておりましてね」
「おい！　またあんたはそんな勝手な事を言って！」
彼の隣にいた三十代くらいの立派な体格の男が彼に毒づき、ニーナに恭しく頭を垂れた。

「ニーナ様、申し訳ありません！　この男ときたら、薔薇と聞けばどこにでも飛んでいってしまうような男でして。毎回、苦労させられておるんですよ。どうか、こんな男のたわ言などお忘れください」
「しかし、王城の庭園なぞ、そうめったに見る機会はなくてなあ」
「そうだろうが、私たちの入るような場所ではない。未練がましい、あきらめろ！」
　若い方の男が彼の腕を掴み、ニーナに再び謝ると、男を無理に連れて行こうとした。
「待って。――たしかに、王城の庭園に目を触れる機会など、そうそうあるものではないわ。ここの薔薇はとんでもなく美しいの、それほどの薔薇好きなら、きっと感動するに違いないわ」
　ジェニーの視線を感じたニーナは彼女を見返し、にっこりと笑った。
「いいわ、おまえたちも連れていきましょう。おまえたちの奏でた素晴らしい演奏への褒美よ」
　男たちは驚愕の表情を浮かべると、二人揃ってニーナに頭を下げた。
「あっ、ありがとうございます！」
　ニーナの許可に、ジェニーが自分の願いが叶えられたかのように喜んでいる。その瞳の輝きを見たニーナは、彼女に対する軽蔑で胸がいっぱいに満たされていくのを感じた。
「あ、あの、ニーナ様？」
　ふと気づくと、ジェニーの侍女がニーナの隣に来ていた。
　名を何度聞いても覚えられない、目じりに皺の目立つ、中年女。
「何よ？」
「こちらは王の庭園にございます。その……楽団員などを入らせるべきではないと思いますが……」
「まあ、おまえには血が通っていないの？　薔薇を少し見せるぐらい、構わないじゃないの。彼らの嬉しそうな顔をご覧なさいよ」
　彼女が納得しかねている様子なのが、ニーナには腹が立つ。

「いいのよ。それに……おまえが黙ってさえいれば、この件は問題にはならないの」

広間を出ると、いつのまにかブランがニーナたちの後ろについてきていた。彼女が振り返ると、ブランはジェニーを一瞥し、硬い表情で小さく頷く。彼女も頷き返した。

……何もかも、あなたが悪いのよ、ジェニー。

ジェニーたちが入った北の庭園は、成人男性の背の高さほどはある垣根から成る外郭のせいで、外からは庭園の内部が見えない。垣根の切れ間のような庭園の入口を越えて目にするのは、緑色の樹木の壁だけだ。

庭に入るなり、ジェニーの体は外側では感じなかった、かぐわしい花の香りで包み込まれた。ニーナによれば、垣根に挟まれた道を内側に進んで行くうちに段々と風景が変わってくるそうだ。

ニーナの横には薔薇好きだという初老の男が並び、反対側の隣にはもう一人の楽団員の男が垣根を見上げながら大股でゆったりと歩いていく。この若い男の方は初老の男に付き合って来ているという様子で、庭園にそれほどの興味はなさそうだ。ジェニーが後ろを振り返ると、アニーが辺りをきょろきょろと見ながらついてきていた。

ジェニーが前を行くニーナを見ると、彼女が振り返り、ジェニーと視線が合って微笑んだ。ジェニーの心臓がどきっとする。ただ微笑みを浮かべただけというのに、ニーナの面持ちがさらに艶っぽく変わっている。

隣の初老の男が何かを話しかけてニーナの注意を引き、彼女がまた上品に笑った。

不意に、背後で金物が反響するような大きな音がして、ジェニーは驚いて振り返った。

ジェニーたちの最後尾にいたはずの衛兵がいない。その代わり、アニーの横に大きな若い男が目をぎらつかせて立っていた。

「ぎいいいいっ！？」
アニーが悲鳴とも喘ぎともつかぬ叫び声をあげた。
「そこに！　ジェニ……ジェニー様っ！？」
彼女が指さした先を追ったジェニーも、はっとして息をのんだ。
彼女たちの方に足を向け、地面の上に、彼女たちに付き添って来ていた衛兵の体が無造作に転がっている。衛兵の手は喉を押さえて小さく痙攣し、その両手の指の隙間からは真っ赤な血が幾筋も流れ出て、地面に血溜まりを作り始めていた。
彼は自分の身に何が起きたのかも把握できないうちに、地面に倒されたにちがいない。彼の腰にある剣は鞘に納まったままだった。
「助けて……！」
後方から聞こえてきた女の悲痛な声に、ジェニーは振り返った。
「ニーナ様！？」
「助けて、お願いよ！」
ジェニーの目は、短剣を首元に突きつけられて青ざめたニーナの姿に釘付けとなった。
短剣を手にしているのは、ついさっきまでニーナを崇拝するかのように接していた、あの初老の男だ。彼の連れの若い男も、どこから取り出したのか、両手に持った同じような短剣を別の衛兵に向け、彼の動きを封じ込めていた。
「なぜ！　なぜ、おまえたち……？」
ニーナが初老の男に視線を移すと彼は下卑た笑いを浮かべ、ニーナの顔は恐怖に歪んだ。
「ニーナ様！」
ブランが叫び、ジェニーは、ニーナと衛兵を威嚇する男たちと衛兵を殺した男とを交互に見た。ジェニーたちの背後から出現した男の手がアニーの背にあることに、ジェニーは違和感と恐怖を覚えた。アニーは剣で脅されているのかもしれない。ジェニーの視線を受けると、その男が薄い唇を細く開けてほくそ笑んだ。
ぞっとする。いつかのゴーティス王のような笑い方をしている。

「おまえたち、自分が何をしているかわかっているのか!?　ニーナ様を今すぐに放せ!」
「うるさいぞ、衛兵」
「やめて!」
初老の男がニーナの体に巻きつけた腕に力を込め、鈍く光る短剣の先をニーナの喉元に近づけた。
「ニーナ様!」
衛兵はつかみかかった剣から手を離し、威嚇する若い男の前で無念の唸り声をあげた。
「おお、殺さないで!　おまえたちの望む物を何でもあげるわ、何でもあげるから!」
「はは、それはいい心がけだ。いいぞ、存分に俺を楽しませてくれたらな」
ニーナが悲鳴をあげたが、男が口を手で塞いだので、それは途中で聞こえなくなった。男はもがくニーナを引きずるようにして垣根の奥に消え、主人を追おうとしたブランは彼に側頭部をしこたま蹴られ、あっけなく地面の上に落ちていく。
「ブラン様!」
ジェニーもアニーも衛兵も男たちに行く手を阻まれ、ニーナが連行されるのをただ見送ってその場に留まるしかない。ジェニーの後ろから、アニーがすすり泣くような音が聞こえてくる。
ニーナと男が消えてしまうと、衛兵に短剣を向けていた男が口を開いた。
「さて、と。本当の饗宴はこれからだ」
「お二人に危害を加えるな!　おまえたち、ここが畏れ多くも王城の敷地内だとわかっているのか!」
「やかましい男だな」
衛兵が剣を鞘から抜ききるより前に、男が彼の腕を短剣で傷つけた。衛兵は顔をしかめたが、大した傷のようではない。ジェニーからは男の横顔しか見えなかったが、男は面白そうに笑っているよう

にも見えた。
「――お二人とも、早くお逃げください！」
衛兵は鋭い口調で言ったが、それを合図にしたかのように、もう一人の男がアニーの背を押してジェニーの隣にさっと移動してきた。アニーは恐怖で真っ青な顔色をしており、ジェニーの読みどおり、その背には短剣がつきつけられていた。男を近くで見たジェニーは、あっ、と小さく声をあげた。
「“ジェニー”様、またお目にかかりましたね」
うってかわって穏やかに笑うと、男の人相はまったく別人のものとなる。その灰色の瞳は、彼女が茶会で隣り合った婦人と仲睦まじくしゃべっていた若い楽団員のものだ。
彼女が信じられない思いで見返すと、男は不敵に微笑んだ。
「……俺はあんな女より、ずっと若いあんたの相手をしたかったんだが」
男はアニーの背から短剣を離すと、ジェニーの顔の横にそれを差し出した。その刃全面に、彼が殺した衛兵の血がべっとりと残っている。現実化した恐怖に、ジェニーの背筋が冷えた。
「あなたたち……誰？」
ジェニーが悲鳴の一言もあげずに短剣の血から男に視線を移すと、男はわざとらしく感心する素振りをし、くすくすと笑った。その笑い声に重なるように、かすれた呻き声が別の方向から流れてくる。
アニーが顔を両手で覆った。ジェニーたちの先で、衛兵が苦痛に顔をゆがめながら、宙に片腕を伸ばして地面に落ちていく。衛兵の手からこぼれ落ちた剣が地面で二度跳ね、垣根の中にその姿を半分隠した。
「おお……！」
衛兵が地面に倒れるとアニーが喘いだ。ジェニーたちに振り返った男の顔は、興奮からか顔が赤く火照っており、彼の右手と、その手の中にある、衛兵を倒した短剣が柄の部分まで血で赤く染まっていた。

「気丈なお嬢さんだ」
震えて泣き出してしまっているアニーとは対照的に、ジェニーが状況を把握しようと周囲に視線をめぐらせていると、隣の男が静かに呟いた。男は一見、優しそうな顔立ちをしているのだが、時を刹那的に生きているような、いつ死んでもいいとでもいうような、生き急ぐ意思が瞳の光に表れている。
ジェニーは必死に隠している焦りと恐怖を見破られないように注意し、男を見返した。
「あなたたち、何が――あなたたちの望みは、何なの？」
灰色の瞳の男がジェニーの顔をじろじろと眺めた。彼女は、負けずに見つめ返した。
衛兵にとどめを刺し終わった男がジェニーたちの所に合流してきた。音楽を演奏している時には見えなかったが、上腕筋がぐっと盛り上がって太い血管が浮き上がり、楽団員というよりは兵士の方が似合う風貌だ。彼の膝の横には数本の長い傷痕があった。
「おい、相棒。このお嬢さん、俺たちの望みが何なのか知りたいらしいぞ」
「ん？　望みって――そりゃあ、なあ？」
二人は顔を見合わせて意味深に笑う。
ジェニーは唇を噛みしめてアニーを見たが、彼女は放心しているかのようにぼんやりとした表情だ。
彼女の協力は当てにできない。どうやって、この場から脱することができるだろうか。
ジェニーがじりじりと後退していたことに気づいたらしく、灰色の目の男が彼女のドレスの裾を踏み、嘲笑した。
「おい、どこへ行く？　俺たちは、あんたに用があるんだよ、お嬢さん」

アニーが垣根の中に沈んでいっても、ジェニーは、何もできなかった。

「心配するな、死んじゃいないさ」

耳元に息を吹きかけるようにして男は囁き、ジェニーがくやし涙の浮かんだ瞳を向けると、男は静かに笑った。彼女の口は、背後から絡まる男の腕でしっかりと塞がれていた。

灰色の目の男が彼女の腰に手を巻きつけ、庭園の奥へと無理やりに連れていく。男の仲間は周囲を気にしながら先に立って足早に歩き、押し殺した声で彼らを急き立てる。ニーナの言ったように、庭園の中心が近づくにつれ、緑色の葉だけだった垣根が色とりどりの薔薇に取って代わった。視界には鮮やかな色彩が無遠慮に入ってきて、やっとのことで息をするジェニーの鼻に、むせかえるような薔薇の香りがとめどなく流れ込んでくる。

甲高い弦楽器の音が風に乗ってのんきに流れてきたが、他の音は聞こえない。先に連行されたニーナの声も聞こえない。誰も、ジェニーたちの陥っている境遇に気づかない。

男が立ち止まり、ジェニーは発していた呻き声を止めて周りを見た。そこは周りを真紅の薔薇の垣根でぐるりと囲まれた円形の空間で、出口は彼女たちが今歩いてきた方角に一つしかないようだ。

――この男たちから、何とかして逃れなければ。

「おい、さっさと終らせよう」

ジェニーの前に立った男が、彼女の体を拘束している男に早口で言った。

「ああ、そうだな……」

ジェニーが体を硬直させると、男が絡めていた腕に力をこめ、彼女の顔に顔を摺り寄せた。放して、と言ったつもりの声にならない声が唇の間から漏れ、ジェニーが男の腕から逃れようと身をよじる

と、前にいた男が低い声で笑った。
「まあ――いいけどな。おまえは昔っから気の強い女が好きだよなあ。でも、早く済ませろよ？　あの方は、この女の死に顔を早く見たがってるんだからな」
死ぬ？　私を、殺したがっている？
「わかってる」
ジェニーがなおも逃げようとすると、男がぎゅっと力をこめて彼女の体を抱き寄せた。
「いい子にしてろよ」
ジェニーが混乱していると、灰色の目の男がジェニーの目を覗き込んだ。その目に浮かぶ欲望の種類を見定めた時――ジェニーは体をいきなり解放され、両肩を押された。次の瞬間、彼女は乾いた土の地面に背中と後頭部を強打する。
衝撃から体をかばう猶予もなかった。視界が真っ白に変わって息ができず、自分の喉の奥から出た呻き声がどこか遠くで鳴っているように感じた。会話の内容はわからないが、男たちの低い声が頭の中で反響している。
目の前の世界が外枠から順番に色がつき始めると、後頭部に強烈な痛みを感じた。やっとのことで喉に空気が通る気がして、必死に息を吸うと、彼女の真上から灰色の目の男が彼女を見下ろしているのに気づいた。
「あ……？」
男が穏やかに微笑んだ、と思うと、その顔がどんどん彼女に迫ってくる。
いやだ、来ないで……！
ジェニーが悲鳴とともに体を思い切りよじったために男が地面に飛ばされ、二人を見ていた男が大笑いした。
「この小娘、よくも！」
ジェニーは平手で顔を打たれたが、すぐに男に向き直る。
「こんなのは卑怯よ！」

「……おい、娘一人にそう手こずってないで、早くしろよ」
「うるさい！」
「――やめて！」
ジェニーは、肘に体重をかけて彼女の肩を押さえる男の、血走った目をまっすぐに見つめ返した。
「あなた、私を殺したいんでしょう？　死んでもらいたいんでしょう？　だったら早くそうしたらいい！　こんな無意味なことをしないで、さっさと早く殺したらいいのよ！」
「心配するな、すぐにあんたは死ぬさ」
男は冷たく乾いた笑い声をあげた。
「それに、これは無意味じゃない。俺の欲求は満たされ、あんたが最後に体を合わせる“名誉ある”男が、王じゃなくて俺だってことになる。ああ、そうだ、その事実はきっと……あの方を喜ばせるだろうよ」
男は抑揚のない口調でそう言い、顔をしかめて後方を見る。
「あの方？　あの方って誰……！？」
ジェニーの足元の方でばたばたと聞こえていた音が消え、ジェニーの顔面に茶色い何かが振り落とされた。悲鳴をあげると、その粗くごわついた布越しに、誰かの手がジェニーの顔を押さえつける。
それまでドレスごと彼女の体にのしかかっていた灰色の男の体が移動したかと思うと、次に、ジェニーは足元から風が吹きぬけてくるのを感じた。誰かの手が足首に触れる。焦ったジェニーがそれを外そうと足を振ると、その手は乱暴に彼女の足首を掴んで押さえた。小さな舌打ちとともに、ジェニーの顔のすぐ近くで誰かがそっと囁く。
「おとなしくしな、ほんのちょっとの我慢だ。そうすりゃ、すぐにあの世へ送ってやるさ。――まあ、あんたには何の恨みもないが、俺たちもさる高貴なお方に頼まれたんでな、悪く思わないでくれよ？」
どうして、誰がそんなことを！

声はちゃんとした言葉にならなかった。
膝頭に外気が触れる。顔を布で押さえつけられているせいで悲鳴にならない声を何度も出し、目からは涙がにじみ出た。
ああ！　ここに、ここに剣があれば！
彼女はめちゃくちゃに手を振り回したが、今のところ、無駄な抵抗に終わっている。男の荒っぽい呼吸音がし、彼女のふくらはぎに、乾いた体毛に覆われた硬い筋肉が当たった。

側近たちばかりが集う部屋の扉が細く開き、サンジェルマン様、と、差し迫った声が彼を呼んだ。室内では非常に繊細な議題が討議されていただけに、あからさまな非難の目が彼に集中する。しかし、声の主を特定したサンジェルマンは事の緊急性を察し、出席者たちに謝罪を繰り返しながら部屋を何とか抜け出した。
「何があった？」
走って駆けつけたらしい部下に、彼は尋ねる。
「はい。ご命令どおりに茶会の様子を見ていたのですが……。余興に呼ばれた楽団にどうも妙な点がありまして。全員ではないのですが、楽団員たちは体格に恵まれていて、反応が――その、なんというか、機敏、すぎるのです。その内の一人には足に複数の剣傷があります。彼らは普通の楽団ではないかもしれません。もしや彼らは……近頃の噂で聞く、金で殺しを請け負う“死に神の楽団”ではないかと――？」
「なに？　されど、入城許可を受けた楽団であれば、そうめったなこともあるまい？」
「は。ですが、今回の楽団は、ニーナ様が特別に懇意にされているという事で、初めて入場許可が下りたそうにございますので」
「ニーナ嬢の？」
彼女と何度か遭遇したことはあるものの、サンジェルマンは口をきいたことがない。
後宮に住む女たちの例に漏れず、彼女は美しく妖艶な女だ。人々

にかしずかれる状況に慣れている。人々に接する態度から、彼女がとても気位が高く高慢だという事は彼にもわかっていた。

彼女の顔を思い浮かべると、言葉では説明できない、憤然たる気持ちで彼の心が覆われる。

「サンジェルマン様？」

指示を待つように彼をうかがう部下の表情に浮かぶ焦りと、彼自身にくすぶり上がってきた不安が彼の足を廊下の先に向けた。

「私も行こう。――ただの思い過ごしであればよいが」

部下を伴って本館から外に抜けようとしていると、サンジェルマンたちが歩いてきた通路に降りる階段を、ちょうどゴーティス王が歩いてきた。王が二人に振り返ったような気もするが、彼らの存在に気づいたかどうか、定かではない。彼らはそれを確認する前に外に走り出ていた。

顔を覆われているせいだけではない息苦しさで、ジェニーは見えない空を仰いだ。肌にあたる男の感触への嫌悪で喉の粘膜が急速に乾く。顔に布を押し当てる男の手をどけようと必死に引っぱったり引っ掻いたりしたが、彼女の顔の上から、それはびくとも動かない。

殺されることへの恐怖より、男の身勝手な欲望によって意思を踏みにじられる口惜しさや辛さ、無念の方が何倍も強かった。

こんな思いは、ゴーティス王に対してだけで充分だ。

一瞬の間に家族の顔が頭に浮かび、ジェニーが反撃の機会を得られずにいるゴーティス王を思い、そして、一度会ったきりのケインの顔が思い出された。

この王城暮らしで唯一、自分に近い存在と思えた人。

彼女の手は男に捕らえられ、男は、彼女の手ごと、ジェニーの顔を押さえていた。その手から急に力が萎え、彼女の手から離れていく。それと共に、乱暴に彼女のドレスの裾をまくりあげていた男の動きが、不意に止まった。

「――そのまま、両手を頭の後ろで組め」
直後、ジェニーも聞き覚えのある男の声が静かながらすごみ、彼女の脚を押さえていた男の筋肉の重みから彼女は解放された。彼女の頭のすぐ近くに何かが落ちて、ため息にも喘ぎにも似た小さな音が聞こえる。
「そうだ。その姿勢のまま、動くな」
彼女の周りでは複数の者たちの存在が感じられた。ジェニーはやっと、閉じていた目をそっと開くことに成功した。
「拘束しろ！」
「ははっ」
誰かが、ジェニーのまくれあがっていたドレスの裾を直す。いきなりの出来事に何が起こっているのかはわからなかったが、ジェニーはそこに登場した者のおかげで、男の欲望の手から逃れられ、命拾いしたらしい。
けれど、身の安全が確保されたのだと悟っても、ジェニーの足は小さく震えている。力が入らない。彼女は、地面から立ち上がる気力がどうしても奮い起こせなかった。
「ジェニー嬢、大丈夫ですか？」
彼女を救出した男は、彼女の名を知っていた。彼の問いには本当にジェニーを心配しているような響きがこもっていて、ジェニーは、自分が助かったのが現実だとようやく認識できた。そして、そうやって安堵すると、足の小さな震えは全身に広がっていく。
「ジェニー嬢？」
ジェニーの視界が明るく広がり、彼女の左側から心配そうにうかがう金髪の頭を持った顔が現れた。ジェニーが日の光の眩しさで目を細めると、彼が頭の位置を少しずらし、彼女の顔の上に日陰を作る。
「……サンジェルマン？」
「はい」
彼女の目前に現れた彼がほっとしたように息をついた。無事でよ

かった、と彼は穏やかに微笑む。
「大丈夫、もう安全です。立てますか？」
ジェニーは無言で頷き、彼が見守る中、地面に手をついて上半身を起こした。ふと気づいて脇を見ると、彼女の右側の地面に男の筋肉質な片足が投げ出されていた。膝の裏側にかけて細長い剣傷がある。彼女たちを襲った男の一人だ。
それを上にたどって男の顔を見ようとし、ジェニーは思わず顔を背けた。仰向けとなってひっくり返っている彼の喉には二つの短剣が横に並ぶように突き刺さり、その柄から男の肩や地面に向かって赤黒い血の筋が二つできていた。
彼女が視線を移した先には、上半身を縛られてさるぐつわをされた灰色の目の男が、下半身を剥き出しにした格好で立っていた。上半身に比べ、体毛の多い脚がジェニーの視線を引きつける。彼女のふくらはぎにあたった、彼の足だ。
ジェニーに気づくと、彼は威嚇するようにさるぐつわの下から唸り、怒りでぎらぎらさせた目を彼女に容赦なく向けた。体の自由を奪われた彼から危害を加えられはしないとわかってはいるものの、さっきまでの入り乱れた思いが瞬時に甦ってきて、ジェニーは苦しくて泣きそうになる。
「……おまえたちは先に男を連れて行け。くれぐれも、用心だけは怠らないように」
サンジェルマンが衛兵らしき男二人に指示をすると、灰色の目の彼が一際大きな唸り声をあげ、暴れようとして男たちに押さえつけられた。
「無駄な抵抗はやめておいた方が賢明だぞ。おまえたちの楽団全員を既に拘束した。庭園の入口にいた男と……“女”もな」
サンジェルマンが淡々と告げると、灰色の目の男が目をひん剥いた。
男二人に脇を固められ、恨みがましい目をして彼が連行されていく。

「……私たちも行きましょう、ジェニー嬢。手をお貸しする」
唇を噛み締めたまま、ジェニーはサンジェルマンを見返した。彼は先に地面から立ち上がった。そして、ジェニーの返事を待つことはせず、彼女の手をつかんで体を引き上げる。
ジェニーは胸の奥が締め付けられるように痛かった。嫌悪感で吐き気までした。喉がからからに渇く一方で、体中の水分がその一点に吸い寄せられているかのように、瞳には涙が湧き出してきた。
「私どもの警備の不手際であなたをこんな危険に遭遇させ、本当に申し訳ない」
彼女のにじんだ視界の中で、サンジェルマンが気の毒そうに言った。謝罪されると、ますます自分が哀れに思える。
「ともかく、城に戻ることです。ジェニー嬢、色々と考えることはあるでしょうが……城に戻られたら、ただ、ゆっくりとお休みください」
ジェニーが弱々しく頷くと、サンジェルマンが毅然とした口調で言った。
「何も考えないように。いいですね？　何も考えなくていい。城までは私が同行いたします」
その時になってやっと、彼は掴んでいたジェニーの手を放した。それから、彼は彼女を促すように手で出入口の方角を指し、移動する旨を告げる。ジェニーは指で涙を拭い取った。

庭園の中心に来るために通ってきた道を二人で逆戻りし始め、周囲の薔薇の匂いがジェニーの鼻についた。かぐわしく、濃厚な甘い香り。今回の事件のせいで、せっかく優雅に咲き誇っている薔薇も、今後は見るのさえ疎ましく感じるのかもしれない。
薔薇の茎がからまる垣根の樹木を目にしたジェニーは、はっとした。
「ああ、サンジェルマン！　そういえば、アニーが――」
「アニー？　ああ、あなたの侍女ですね？　ご心配なく、彼女なら

無事です。私たちが見つけた時には失神していたようだが、ケガも特になかったようです。彼女には、先に城に戻らせました」

「そう！　ああ、本当？　よかった……」

彼女が安堵の息をつくと、彼は小さな微笑を浮かべた。

「あ、でも、ニーナ様が！　ニーナ様は無事……？」

サンジェルマンが一瞬、どこか遠くを見る目つきをした。ジェニーは不安に思ったが、しかし、すぐに彼は彼女に振り返り、ええ、と、頷いた。

「ニーナ嬢はご無事です。ただ、少し傷を……傍目からは見難い部位に深く醜い傷を負っている。回復されるのは相当に……難しいでしょうね」

囚人たちを収監する牢が並ぶ一角、サンジェルマンはある小部屋の扉の前に立ち止まり、いやでも高まってくる心臓の高鳴りを何とか整えようとしていた。扉の前には見張りの衛兵が無表情で立っていて、サンジェルマンが入室の指示を出す“時”を待っている。彼が対決しようとする人物の頭が、扉についた覗き窓から見え隠れする。

彼が瞬きをした瞬間、地面に倒されたジェニーが陵辱される寸前だった光景が目に浮かんだ。それだけでも十分に衝撃的な出来事だったのに、それが安全であるべき王城の敷地内で起きたことで、彼は二重の衝撃を受けている。

「開けよ」

腰の左側についた剣の鞘に手を当て、彼は小部屋の入口をくぐった。

彼がその狭い部屋に入ると、室内に監禁されていた女があきらかに不満そうな顔を彼に向け、苛立った声をあげた。

「まあ、これはサンジェルマン様？　やっと、来てくださいましたわね！　私をいきなり連行されたと思ったら、こんなむさ苦しい所に押し込んだりなさって。一体、どういうおつもりですの？」

サンジェルマンは硬い表情をくずさず、あくまで事務的に彼女に接する。

「ここは牢の中で最も良い部屋。あなたにはそれなりの敬意を払い、この特別室に収容したのだが」

「敬意ですって？　私をまるで犯罪者扱いの、そのどこに敬意がおありなの？　私が王付きの特別侍女とよくご存知のはずのあなたに、まさか――このような不当な扱いを受けようとは！　私、夢にも思いませんでしたわよ？」

サンジェルマンの前で、女は、嘲笑するような高らかな声をあげ

た。それを見ていると、ジェニーがぼろぼろと涙をこぼし、恐怖で震えていた姿が彼の脳裏に思い出されて、無性に腹立たしく思えてくる。それでも、感情的になることを恐れた彼は、その怒りを理性で何とか押しとどめた。

「――ニーナ嬢。なぜ、ジェニー嬢を襲撃しようなどと？」

「……嫌ですわ、まだ疑っていらっしゃるの？」

ニーナが流し目のような艶やかな視線をサンジェルマンに送ってくる。

彼は、色仕掛けをしようとする、この手の女が嫌いだ。彼女のなまめかしい視線をあっさりと受け流すと、彼は彼女に返答を迫った。

「……本当に困ったお方ですこと。サンジェルマン様こそ、なぜ私を疑うのです？　あれは楽団にまぎれていた傭兵が勝手にやったことですわ、私だとて被害者ですのに……」

「あなたがそのうちの一人の男と話していた内容を、私はこの耳で聞いたのだが？　ジェニーを早く処分しないとここから出られない、と、あなたは確かに言っていた。だからこそ、楽団の男とともに庭園の入口で、“その時”を待っておられたのだろう」

「まあ、そんな……空耳にございましょう。私がなぜ彼女を亡き者にしようと考えるのです？　なぜ、そんな陰謀めいたことを？　サンジェルマン様、そんな考えが頭に浮かぶなんて、日頃の激務のせいで本当にお疲れですのね」

ニーナが同情のこもった瞳を彼に向けたが、彼はそんな挑発になど乗りはしない。

「私をたばかるおつもりか、ニーナ嬢？　ならば、あの男たちが傭兵だとなぜ知っておられた？　あの楽団が“死に神の楽団”と知っていながら呼んだのには、それ相当の理由があるはず。拘束された男たちの証言は全て一致している。彼らはあなたから“仕事”の前金を受領したと認め、望みの女を処分したあかつきには莫大な報酬をもらう約束だったとも話している。あなたは何故そこまでして彼女を――ジェニー嬢を、消そうとされた？」

彼女はしらを切り通すつもりだったらしいが、彼の最後の問いを聞くと優雅な笑みを引っ込め、急に黙り込んで俯いた。サンジェルマンはその反応に警戒し、剣に触る手に力を込めて、彼女の動きの逐一を見逃すまいとする。

数秒後、顔をあげた彼女には、燃えるような憎悪が顔面いっぱいに広がっていた。

「……あの小娘なんかのどこがいいのよ、ただの子供じゃないの。なぜ――どうして、ジェニーなの？　世に名高いヴィレール国王たるお方が、あんな年端もいかぬ小娘を気にされるなんて！　あなたもよ、女と浮名を流さない堅物と有名なあなた様でさえ、心を奪われておいでとは、なんという笑止！　皆、どうかしているわ、あんな幼稚な女に振り回されて――王も、あなたもよ、皆！　狂っているわよ！」

「……そんな小娘に振り回されているのはあなたではないのか、ニーナ嬢」

「何ですって！？」

サンジェルマンは腹の底からわきあがってくる怒りを噛み潰した。

「私のことはいい、だが、あなたの今の言葉は王への侮辱にあたる。あなたが引き起こした一連の事件も――自己都合で危険因子を入城させ、衛兵二人を含む使用人たちを殺傷し、ジェニー嬢を襲撃して恐怖に陥れたこと全てが、無論、王への冒涜に値しよう。それ故、慣例にのっとって、私はあなたを断罪せねばなるまい」

「ばかばかしい！　“死に神の楽団”を見破れず、やすやすと王城に入れたのは門番たちの怠慢と過失だわ。それに、衛兵は自分たちの任務を果たした結果、死んだだけ！　ブランやアニーだって、結局は死んではいないのよ？　ジェニーだって――なんて運のいい小娘だこと、何のケガもない！　私は誰も殺してはいないのよ？　私を、何をもって、どう断罪できるとおっしゃるの？」

……なんて自己中心的な女だろう！

彼は普段、激しい怒りを感じることはあまりないが、彼女のふて

ぶてしさを目前にし、頭が真っ白になるような怒りに体を支配された。そして、それが表面上に出たのだろう、うすら笑いを浮かべて彼を見つめていたニーナの顔が、急にひきつった。

「――囚人“ニーナ”。慣例に則り、おまえを他の仲間たちと共に処刑することとする」

「な、何よ、そんなこと……できるわけがないじゃないの！　私は王の直属よ、王の許可がなければ……そうよ、そんな勝手な判断は下せないのよ！」

「必要ない。王を侮辱し、王城に住む我々に多大な危険をもたらした罪は、死罪をもって償ってもらう以外ない」

「そんな勝手なことはさせないわ！　王が私を死なせるものですか！　私を王に面会させるのよ！」

「無駄だ、おまえはここで明日の朝を迎えるしかない！　――本来であれば、王に対する無礼があった時点でおまえは即刻死刑の身。だが、そうしないのは、おまえに時間を与え、自分の犯した数々の罪を悔いてもらいたいからだ。全てを反省し、おまえの襲撃によって被害を被った人々に謝罪し、その後に来世へと行かれるように――それが、おまえに対する、せめてもの私の情けだ」

サンジェルマンがそう告げると、ニーナが甲高い声で笑った。

「まあ、なんとお優しい心遣い、私はあなたに感謝せねばなりませんわ！　でも、サンジェルマン様――あなたは、肝心なところで詰めが甘くていらっしゃるわよ！　明朝まで待てば、ブランから事情を聞いた王が私を解放してくださるに違いないの。そうなれば、危機的状況に陥るのは私ではなく、あなたの方なのよ……！」

彼は腰に手をのばして剣を抜きたくなる衝動をぐっと抑えた。彼が口をつぐんだ事により、彼女が勝ち誇った笑みを浮かべる。

「ほほほ、サンジェルマン様、お気が変わりまして？」

彼は気を落ち着かせるためにゆっくりと瞬きをした。

「おまえは何か――とてつもなく大きな勘違いをしている。王は色情が関わる事件を非常に嫌悪しておられ、当事者が誰だとて容赦な

どされない。数ヶ月前にも、王は同じ理由で騒ぎを起こした後宮の女を、人知れず処分された。――女が突然に失踪したと噂が立ったことがあるだろう？　その女だ」

ニーナの目が驚きで見開かれ、その後、動揺したように視線が動きだす。

「それに、ブラン？　おまえの侍女のことだろうが、今回の事件の関係者とされ、男たちと同じ牢に拘束されている。おまえと同じく、明朝の処刑を待つ身だ。つまり、それ故、王がおまえの処遇を知るのは、明日の刑執行後になるだろう」

ニーナが奇声をあげ、サンジェルマンに掴みかかろうとした。しかし、彼がそれを簡単によけたので、彼女はバランスを崩して床に転倒する。

彼が部屋を出ると、彼女が内側から扉に体当たりをし、訳のわからない事をわめいた。覗き窓から見える彼女は髪を振り乱し、顔を醜く歪めて歯を剥いている。扉の外で見張りを担当する衛兵は彼女の変わり身の激しさに衝撃を受けたようだが、その醜態こそ、彼女の本来の姿なのだろう。サンジェルマンは、そんな彼女に同情すら感じなかった。

◇　◇

夜中にうなされる度に、ジェニーは寝台の上で飛び起きた。目の前に広がる黒い闇が、服で顔面が覆われたせいではなく、照明の落ちた夜中の室内だと分かるまで、ジェニーは何度も何度も激しい動悸を経験した。薔薇の香りが何度も鼻をかすめた。

あんなに耐え難い精神的苦痛を与える行為を、単なる生理的欲求のはけ口として見知らぬ他人に強制することが、ジェニーには信じられない。足首に触れる男の手の感触がしっかりと残っており、胃の底からの吐き気を覚え、口の中にまで胃液が込み上げてくる。恐怖というよりは嫌悪からだ。ここまでの強烈な嫌悪感は、しばらく

ぶりだ。

後宮住まいが長くなり、ゴーティス王がいる環境や、窮屈ながらも物質的には恵まれた生活に不本意ながらも慣れ、馴染もうとまでしていたことは否定できない。今回の事件でそれを思い知らされ、ジェニーは自分自身に落胆し、同時に、王に対する嫌悪もあらためてぶり返してきている。

夕方から夜にかけての短い時間には弱い雨が降っていたが、今、窓の隙間からは月光の弱い光が差し込んできている。おそらく、既に日付が変わっている時刻だろう。

寝床の中で動悸が治まるのを待ち、ジェニーはおもむろに寝台から降り立った。室内の空気はひんやりとしていたが、石の床に裸足で降りても、冬の時期のような冷たさはもう感じられない。足が、ひとりでに地下への扉に向かっていく。

今夜こそ、ケインに再会できそうな予感がした。理由はわからないが、ケインに会えば全てがうまく変わっていくように思えたのだ。ジェニーは、この場から、何もかもから、早く逃げ出したかった。

扉を引き上げると、地下からの生温かい風が部屋に一気に流れて出てきた。しばし目を閉じ、空気の流れがおとなしくなるのを待って、ジェニーは地下階段を灯りで照らす。光の中に、床から五段ほど下の踏み面に置かれた細長い板と拳大の石が浮かび上がり、ジェニーは息を飲んだ。灯りをそれらに近づけてみると、照らし出された板には模様のような何かが描かれている。

「――“来るな”？」

古ぼけた板の表面の、何かで削り取って書かれた文字はそう読めた。その隣に置かれた石には、ジェニーは見覚えがある――秘密の通路の行き止まりからケインのいる地下牢に抜ける出入口に積まれた石段の一部。

つまり、ケインはここまでやって来ていたのだ。

その事実を知ってジェニーは嬉しかったが、彼からの伝言には一抹の不安を覚えた。

彼女が板を拾い上げて調べてみると、裏面に、殴り書きのような白っぽい文字が記されている。ジェニーは声に出して、“夜中に見回りがくる。不定期”と、読んだ。

だから、彼は階上に出てこられなかったのだ、と納得する一方、彼がここに来た時に自分が不在だったことがとても悔やまれた。ジェニーと出会った頃のケインは、夜中は自由に動き回れる環境下にいたはずだ。だが、夜間に監視されて牢から出られなくなってしまっては、この次、二人がいつ再会できるか、わからないではないか。

彼女が前回この扉を開いて以降、夜中に部屋を留守にしたのは、テュデル宮に泊まった一夜だけだ。だが、彼女の意思でそうしたのではない。その時は、上機嫌なゴーティス王が一緒だった。

口の中に生温かい血の味が広がり、それから必死で逃れようと必死で手を伸ばした先に冷たく固い物体が触れて、ケインははっとして指を止まらせた。不意に我に返ると、ケインは暗がりの石床の上に横たわっており、体全体にびっしょりと汗をかいていた。彼の左手の先には、彼が城内を探索した際に見つけて拝借してきた、短剣が落ちている。

「よかった、夢か……」

彼は顔を両手で拭い、いつのまにか床に転がり出ていた短剣を元の隠し場所、床石を一つはがし、その下へと押し込める。

夢の中で味わった血とその液体の感触が、口の中にまだ残っている。手で口を拭い取ろうと試みるが、生々しい感触はそう簡単には消えてくれない。しばらく、彼は床の上に足を投げ出した体勢のまま、茫然としていた。

そのうち、食事を持ってくる衛兵が階段を下ってきた。ケインが“口笛吹き”と呼ぶ男だ。

地下の空間には“口笛吹き”の鳴らす口笛が響き渡り、ケインは通路の扉の方に視線を移す。つい最近まで看守を務める衛兵はその

彼一人だけだったのだが、なぜか夜中にも監視の目が入るようになり、ケインは、斜視で無口な衛兵と顔を会わせるようになった。ケインはその衛兵を“梟の男”と名づけている。

「お待ちかねのメシを持ってきたぞ！　元気か、五十二号！」

衛兵が食事の盆を豪快に牢内に滑り込ませ、その勢いで水が杯からこぼれそうになるのを、ケインはやっとのことで食いとどめた。

「ははは、元気そうじゃないか！　ま、俺がここの担当でいる間はくたばらないでくれよ、俺は死体の処理なんかしたくないからな！」

ケインがむっとして衛兵を見ると、彼はしゃべりすぎたと思ったのか、あわてて口をつぐんだ。

「じゃあな、五十二号。せいぜい安生しろよ！」

ケインが眺めている中、衛兵は来た時と同じように口笛を吹きながら、地上へ続く扉の奥に消えていく。口笛は空間全体に反響し、しばらくの間、ケインの耳に聞こえていた。

口笛が聞こえなくなると、ケインは食事の盆に視線を落とした。空腹にもかかわらず食物を口に運びたくない。口全体に錆びた鉄のような味が広がったままだ。ケインは、自分をここへ追いやった者の顔を思い浮かべ、深いため息をついた。

――私があなたに何をしたのだ？　私自身、あなたに直接何かをしたことは、一度だってないじゃないか。

彼は緑色の目を細め、自分が突然に身を拘束された日を思い出した。まるで昨日のことのように、彼は鮮明に覚えている。血生臭い思い出だ。

それを思い出すときはいつでも、彼の口の中に気味の悪い血の味があふれ出す。自分の血では、ない。身を挺してケインを庇い、彼を殺そうとした者の剣がその身を貫いているのに、その男をそれ以上近くに進ませようとしなかった、彼の家来の高潔なる血だ。

しかし、結局、ケインを殺したがった者は彼の命を取りはしなかった。ケインは生きたまま拘束された。そして、それ以降、ケインは五十二という囚人番号をつけられ、城内の地下牢で今まで二年間

に渡る日々をひっそりと送ってきている。

当初、ケインは幽閉された自分の境遇に衝撃を受け、不安と恐怖で眠れぬ日々を送り、何かを考えるような余裕はなかった。それまでの生活が一変し、地の底に落ちたような、以前とはあまりにもかけ離れた生活。ケインをおとしめ、彼を劣悪な環境下に置き、誰にも知られないままに惨めな死を迎えさせることが、彼を拘束した男の望みだった。

「だが、私はまだ生きている」

ケインは水を口に含み、血の味がしないことを確かめてから、それを喉に流し込んだ。口や喉が冷え、血の味や感触が急速に消え去っていく。

ケインは、五十二という囚人番号を単なる連番だと長いこと思っていた。拘束されるまでの人生で実際の囚人を目にしたことは一度もなかったが、彼らが囚人番号で認識されることは知っていた。彼らは全ての場合において名を呼ばれることはなく、通常の人間扱いはされずに番号で片付けられる。

ところが、監禁されてから数ヶ月たったある日、ケインは突然にはたと気づいた。彼を五十二号と呼ぶのには、そう呼ばせるだけの相手の意図があるのだ。彼の囚人番号の数字に、特別な意味があるのだ、と。

そう気づいた彼は、自分に対する相手の憎悪の大きさに、あらためて愕然となった。

五十二という数字は、彼の、“彼らの”母親が亡くなった当時の年齢だ。母親が、己の罪をつぐなうために断罪されたときの年齢。その数字を、母親の裏切りがまるでケインのせいなのだと言わんばかりに、彼の認識番号としたのだ。

彼はもう一度、深いため息をついた。

されど――私があなたに何をした？　私があなたに何かをしたことは、ただの一度もないのに。

第一部　4．復讐のとき－1

サンジェルマンが事件の真相について報告をした時、女官長はあまりの衝撃で言葉を一瞬失った。彼がニーナと対面した直後のことだ。

女たちの大小様々な醜聞は昔から耳に入ってきたものだが、暗殺者たちを自ら王城内に引き入れて事に及ぶという大胆な手口に、女官長は、ニーナへの怒りを通り越して恐怖さえ感じる、と口にした。女官長の判断に基づき、ニーナが事件の首謀者だという事実は一部の者を除いて伏せられ、彼女は襲撃の中で命を落としたとされた。

ニーナとブランを含む複数の犠牲者を出したテュデル宮庭園での襲撃事件が明るみに出ると、後宮のみならず王城は事件に対する衝撃で大きく揺れた。安全粋とされる王城の敷地内、すぐ身近に起きた戦慄の事件は、城に所属する人々を恐怖と混乱に陥れたのだ。王城の警備にあたる衛兵隊への非難が続出し、突然で非業の死を遂げたニーナに同情的な声が寄せられ、真の被害者ではあるが襲撃を生き延びたジェニーの存在が注目を浴びるようになった。

時を同じくして、王の分家で激化した跡目争いの中で関係者二人が重傷を負う事件が勃発し、ゴーティス王や側近たちの注目はむしろ、思わぬ余波を被る可能性に警戒して、その動向に向けられていた。そのせいかどうか、王はニーナによるジェニー暗殺未遂事件を衛兵隊長から報告されて把握していたはずだが、ショックを受けて体調を崩しているジェニーを心配している素振りはまったく見せなかった。襲撃事件の詳細についても、真相を最もよく知るサンジェルマンに尋ねることは、一度もなかった。

女官長に加え、後宮内で襲撃事件の真相を把握している者の一人には、アニーが後宮仕えを放免され、その後任としてやって来たア

リエルという女がいた。女官長とは遠縁にあたる、第二階級の貴族出身で二十代前半の女だ。他の侍女たちがそうであるように、彼女もまた、地味な外見と前に出すぎない態度を持ち合わせていた。

彼女が後宮勤めを始める日の前日、女官長の部屋に呼ばれた彼女とサンジェルマンは偶然に行き合わせた。彼女が何者かを知る前だ。ほんの数分彼女と会話を交わしただけで、サンジェルマンは彼女が若いわりにはとても寛容な人物と判った。

事件のせいで特に不安がっているジェニーの良い支えになるだろう。

そう思うと、彼は心底ほっとした。

襲撃事件以降のジェニーは不眠が続いて、体調が思わしくなかった。そんな中、アリエルが、主人ジェニーの事で気に掛かる点がある、と女官長に報告したのは、事件から二週間を過ぎた頃だ。その日の午前中には、ゴーティス王が事件以降初めて、突然に現れ、短い訪問を果たしていた。

「気になるというのはどんな事なの？」

ジェニーに関する事となると多少うんざりして、女官長がアリエルに訊き返した。

「おまえにも話したと思うけど、あの方は少し変わったところがあるのよ。元々が庶民の出だから理解し難い部分も多いはずよ、前任者たちは苦労していたわ。だから、最初はおまえも気苦労が絶えないだろうけれどね――」

「いえ、ジェニー様は私にとてもよくしてくださいます。私がご報告したいのはそういった類ではなく――あの……まだ、確かとは言えないのですが、女官長様のお耳には入れておくべきかと――」

アリエルを後宮にあげるように女官長に薦めた人物から、彼女が物事に動じない度量を兼ね備えていると女官長は聞いていた。そして、彼女と接する日々を追うごとに、女官長もその言葉が嘘ではなかったと信じはじめている。女官長は、言葉を迷いながら話をする

アリエルを見つめた。
「わかったわ。では、とにかく、聞きましょう」
「はい、女官長様」
女官長は室内にいた小間使いの娘を念のために退室させた。彼女が部屋を去ると、女官長はアリエルを机の前の椅子に座らせる。
「さ、話してちょうだい」
「はい。女官長様、今朝のことですが、ジェニー様が再び体調を崩されたので侍医に診ていただきまして――」
「おや、そうなの？　かわいそうに……あの恐ろしい事件が尾を引いているのね。けれど、今朝は、王がお訪ねになったのではなかった？」
「はい。王は侍医が帰った後、ジェニー様が眠っていらした時においでになりました。王はジェニー様のお姿をご覧になっただけで、すぐに帰られましたけれど」
「そう。――王も彼女を心配されておいでのようね」
「私もそのようにお見受けしました」
王の最近の姿しか知らないアリエルとは違い、女官長はしみじみと自分の放った言葉の意味を噛み締める。
「女官長様。実は、勝手ながら、ジェニー様を診ていただいた際、侍医に尋ねたのです。ジェニー様の体調がすぐれないのは襲撃を受けた心労からくる不眠のせいではなく、他に理由があるのではないかと」
「他の理由、ですって？　ジェニー様は健康そうに見えるけれど？」
女官長が驚いて聞き返すと、アリエルの表情が意外そうな驚きに変わった。
「どうしたの？　何か――まさか、重い病にでもかかって？」
「いいえ、めっそうもない！　女官長様、ジェニー様は健康な若い娘にございます、それゆえ……。あの、女官長様は、ジェニー様の月の障りが約三週間遅れていることをご存知かと思いましたが……？」

今度は女官長が驚愕の表情を作る番だった。
「――まさか！　まさか、あの娘が……王の！？」
「あ、あの？　女官長様、その、いたって自然な流れかと存じますが――女官長様にそうも驚かれると、私も困惑いたします」
「おお、おまえは知らないのよ！　王の――王の御子をもうけた女は今までに一人もいないのよ、ただの一人も！　王にはそういった能力が……！　いえ、アリエル、ジェニー様は心身の疲労で月の障りが遅れているわけではないの？　その話は本当なの？」
アリエルが女官長の気迫にびっくりしながらも、首を縦に振る。
「はい。侍医の話では、ジェニー様には妊娠初期に似た症状がみられるそうにございます。ただ、事件のせいで精神的に不安定なこともあって、判断しかねる部分があるとかで……。あと一、二月待てば、確かなことが言えるとおっしゃっておりました」
「おお！　では、では――本当なのね！」
にわかには信じられなかった。ゴーティス王の歴代の女たちに、子供を産んだ者はおろか、妊娠した者はいない。だからこそ、王には生殖能力がない、と人々は密かに囁いているのだから。
事の重大さを考えると全てが確実となってからでなければ、公表はおろか、王自身に告げることもできない。晴天の霹靂ともいえるアリエルからの報告で、女官長の体は興奮と動揺とでみるみるうちに熱く火照っていった。
女官長は、ジェニー本人を含め誰にもそれを言わないようにとアリエルに固く口止めをし、ジェニーの体に細心の注意を払うようにと言い含め、彼女をさがらせた。

短い春の終わり頃になって、ゴーティス王が“王の森”へ狩猟に出かけることが決まった。王城とそう離れていないその森は決して広くはないが、限られた者たち以外は足を踏み込めないために、鹿や兎などの野生動物が数多く生息している。去年までの数年間、その季節のゴーティス王は戦――いわば、“人間の狩猟”――に明け

暮れて忙しく、動物の狩猟など見向きもしなかったのだが、今年は側近たちの提案を受け入れることにしたようだ。

狩猟の日程を王に告げた後、侍従長が少しだけ声をうわずらせて言った。

「フィリップ様もご参加いただく予定にございます」

「フィリップ？　どこのフィリップだ？」

「王の従兄弟にあたられる、ラニス公のご子息フィリップ様です」

納得したように、王が顎をかすかに上下に振った。

「おお、あの男か。剣の扱いは子供より劣るというが、弓の名手と聞いた。気弱な我が従兄弟どのは動物相手には強いとみえる。おお、そういえば、あの男には弟もおるのではなかったか？　名は何だったか、常に怯えた顔をした――そやつも来るのか？」

「いいえ、ジェラール様は体調が優れず、今回はお越しになれません。フィリップ様のみが参加されるそうにございます」

「ほう？　これまた臆病な従兄弟殿らしい、俺が余程恐ろしくて顔を会わせたくないとみえる。しかし、なるほど、フィリップが来る――これはまた、随分と久方ぶりな再会になろう」

「はい、おそらくは四年ぶりかと」

王が驚いたように眉をあげ、息をついた。

「他にも誰か来るのか？」

「いいえ、ただ今申しあげた四名が全てでございます。ですが、王がお連れになりたい方がおりましたら参加させますが……いかがいたしましょう？」

「そうよな――」

王が宙を見て、口をつぐんだ。候補者を考えているらしかった。その場に同席していたサンジェルマンだけでなく、彼の隣にいる女官長も、彼を注意深く観察する。侍従長が嬉しそうな笑みを浮かべて王の返答を待っていると、王が彼に視線を戻し、にこりともせずに言った。

「――では、一行の中にジェニーを入れろ」

「ジェニー様を？」
「そうだ。狩りの場へ連れていく」
一瞬の沈黙の後、サンジェルマンはあわてて彼を制止しようとした。
「お待ちを！」
すると、同時に女官長も同じ言葉を放ち、彼は驚いて女官長を見た。彼女も驚いた表情で彼を見返す。彼と目が合うと、彼女は硬い表情を崩さぬまま、黙って彼に頷いた。
「お待ちください、王」
サンジェルマンは、順番を彼に譲ってくれた女官長に微笑みながら、そう繰返した。王が疑わしそうに眉をひそめ、冷たい目をサンジェルマンに向ける。
「またか、おまえは。何が、そう不満だ？」
「そうではなく、私はただ案じているだけです、王。狩りの場は王城の外。彼女を連れて行くのは、私は、様々な点において危険なのではないかと」
王がせせら笑うように鼻息を鳴らした。
「危険というならば俺の身とて同じこと。おまえ、俺よりもあの娘を案ずるのか？」
「いいえ、私は王の身辺を案じているのです。娘連れでは一行の進行に妨げが出ることもありましょう」
「ふん、それも微々たるもの。あの森は王家の管理下で警備は普段から厳重だ、近衛隊もおる。おまえも同行するのであろう？　ならば、おまえが娘を専任で守り、歩みに遅れが出ぬようにでも注意するか？　それほど――」
王はそこまでしゃべり、はたと気がついたようにサンジェルマンを見た。そして、愉快そうに口角を上げる。
「サンジェルマン、あの襲撃事件以来、幸か不幸か、被害者であるあの娘は人々の注目を引いておる。あの娘が何処におろうと、それが例え王城の外であろうと、その行動は常に監視されておるのと等

しい。それ故――おまえが案ずる必要はあるまい？　娘に少しでも疑わしい行動があればすぐに人目に触れ、あやつはどこにも行けぬはずだ」

　王はそう言って、サンジェルマンを見つめて不敵に笑った。

「俺がその点を考慮しておらぬと思うたか？　俺が、あの娘を手の内からやすやすと逃がす機会を与えるとでも？　サンジェルマン、俺はそこまで間抜けではない」

　サンジェルマンが納得して黙ると、今度は女官長が、遠慮がちながらも断固とした口調でジェニーの同行に異議を唱えた。王はいかにも嫌そうな顔をし、女官長に体を向ける。

「何だ、おまえもか？」

「はい、王。おそれながら申し上げます。最近、ジェニー様は体調が優れないことが多く、体が弱っておいでです。外出されること自体に反対はいたしませんが、ジェニー様の体調が安定するまでの間、王にはいま少し時期をお待ちいただくよう、お願いしたいのです」

「あやつの体調不良は俺も知っておる。されど、おまえの言葉を聞く気はない。あの娘の場合は――外へ出られれば回復しよう。どちらにせよ、侍医が同行するのだ、案ずるには及ばぬ」

「けれども、王城とは違って環境も整っておりません。体力のない今、ジェニー様のお体に障るのではないかと私は心配でございます」

「あの娘はそれほど弱くはない。何しろ、おまえたちと違って庶民の出だ」

「ですが、王。彼女にとっては移動だけでも負担になりましょう。それ故、もう少しだけでも――」

「くどいぞ、女官長」

　女官長の言葉が終わるまで待たず、王が苛ついたように言い放った。

「ならば、他の女を連れていけばよいか？　おまえたちは、ジェニーと比べて身支度や準備に数倍も手のかかる女を連れていきたいのか？　それとも、この狩り自体をあの娘の体調に合わせ、延期させ

るか？」

王が椅子からさっと立ち上がり、女官長と侍従長に鋭い視線を向けると、侍従長があわてて首を横に振った。

「王、女官長は決してそのような意味では――」

「ならば、聞け！　この件で、おまえたちがとやかく口を出すことは一切許さぬ！　ともかく、あの娘を一行に加えればよい！　当日にあの娘の姿が見えない時は――体調が悪いなどと言い訳をつけて城へ残しでもしたら、その時は、おまえの身がどうなるか――ようわかっておろうな？」

王に睨みつけられた女官長が返答する迄に一瞬の間があった。王の顔色が変り、それを見ていたサンジェルマンは肝を冷やす。しかし結局、彼女は渋々だっただろうが頭を下げ、王に従う意思を示した。

“王の森”での狩りはそれから約二週間後に設定されていた。王家に何らかの繋がりを持つ参加者たちは、狩りが王の正式な承認を受けたと知り、その日を迎えるための心構えと狩猟用具の準備に余念がない。それが何であれ、王に同行することは最高の名誉ではあるが、同時に、王との同席は命を落とす危険性と隣り合わせていることも意味する。主人のその緊張感は、各家から同行する彼らの護衛たちにも飛び火していた。

参加者の一人である、ゴーティス王より十歳年上の従兄弟フィリップは、ゴーティス王がまだ王子だった頃までしか彼の姿を知らない。彼らが最後に会ったのは、王子だったゴーティス王がヴィレールの王として正式に即位した式典の時だ。四年前になる。その後ほどなく、王が各地に容赦ない侵略を始めてその残虐性で名を広めるようになり、フィリップ一家と王の間は断絶した。いやむしろ、フィリップ一家が王を恐れ、ひっそりと目立たない暮らしに逃げた、と言った方が正しいかもしれない。

そういった経緯もあり、フィリップには、従兄弟に久しぶりに会

える楽しみよりも、並々ならぬ恐怖と緊張が勝っていた。本当は彼の弟も狩りに招待されたのだが、彼よりもさらに気弱な弟はその招待を即座に断っている。彼もそうしようと思えばできたはずだ。

しかし、彼がそうしなかった理由は、即位した当時のゴーティス王の、期待に満ち溢れた晴れやかな表情を覚えていたからに他ならない。

彼は、再開された定例行事の狩りに、漠然とした王家の変化を敏感に感じ取っていた。

第一部　4．復讐のとき－2

数日後の夕方、ジェニーは涼やかな風の入るサロンにいた。彼女は最近になってようやく充分な睡眠がとれるようになり、体調もほぼ元通りになってきている。その日は朝から爽やかな陽気が続き、彼女は久しぶりに外気に直接触れられる機会を得ていた。

ジェニーがぼんやりと考え事をしながら空を見上げていると、アリエルの声が彼女の思考を遮った。「ジェニー様、そろそろお部屋に戻りませんと」

ジェニーが日光にさらされていた顔を背後に向けると、そこには、穏やかに微笑んでいるアリエルの姿がある。

数日前に女官長から言われた話を、ジェニーが繰り返し何度も考えているのを彼女は知っている。知ってはいるが、女官長から口出しを止められているせいもあり、彼女はジェニーに助言を与えるような行為はしない。その代わり、ジェニーがそれについて考えている時は邪魔をしないでいてくれる。ジェニーは、彼女のそのさりげない優しさが好きだ。

「間もなく夕食のお時間です。お部屋へ戻りましょう」

ジェニーに、納得できる答えは出ない。

「ええ。そうね」

彼女はあきらめてため息をついた。もう一度だけサロンから外を振り返り、ジェニーは傾きかけた太陽の光が降り注ぐ中庭の緑を見つめる。緑は日毎に濃くなってきていた。ジェニーは、アリエルの後について足を踏み出した。

ちょうどその時、サロン入口に複数の人たちが来た気配があって、二人はその場に立ち止まった。彼女たちの立つ位置からは、青の近衛服を着た男たちの屈強な体半分ほどが入口に見える。

「ジェニー様！」

アリエルが小さく叫び、彼女に先立ってサロンの中央通路の脇に

避けた。こちらへ、と彼女がジェニーを呼ぶ中、その男たちの体の前を通り、颯爽と靴音を響かせてゴーティス王が歩いてくる。ジェニーに気づいた王は、唇の右端を少しあげて満足そうに笑った。

「こちらにおったか」

ジェニーは彼に道を譲るのも忘れ、彼をぼんやりと見返した。頭の中に、女官長から言われた命令じみた言葉が甦ってくる。彼女に近づいてきた王が、彼女の前で怪訝そうに顔をしかめた。

「おまえ……何やら呆けた顔をしておるぞ？」

彼が正面に立って初めて、ジェニーははっと我に返り、あらためて彼を見返した。彼は尚も訝しそうにジェニーを見ていたが、彼女が動揺して視線をそらすと、嘲笑にも似た笑い声をあげた。ジェニーは彼にばかにされているようで腹が立ったが、とにかく脇へ避けようと足を右へ一歩踏み出した。

「まあ、待て。逃げぬでもよい」

「逃げるんじゃないわ」

つい反射的に言い返してしまい、ジェニーははっとして目をつぶった。その直後に二の腕を掴まれたためにジェニーはますます焦り、助けを求めてアリエルを見る。しかし、彼女は王の前で頭を下げたままでジェニーの視線には気づいていない。

「ジェニー、こちらを向け」

「痛いわ……！」

王の手がジェニーを引き寄せ、ジェニーは彼の間近に接近することを余儀なくされた。

「こちらを向けと言うておる、ジェニー」

王が手に力をこめ、囁くように言う。やけになったジェニーは彼に向き直り、彼の瞳を直視した。

「いきなり、何の用よ？」

「“何の用”だと？　おまえ、あいもかわらず、王たる俺に何という口ぶりだ」

そうやって文句は言いながらも、王の唇がにやりと笑った。

「ふん。だが、それだけの悪態がつけるようであれば、狩りにも行けような」
「――狩り？」
ジェニーが問い返すと、王が瞳を愉快そうに揺らし、言った。
「話は聞いておるはずだ。おまえを狩りに同行させる。この王城の外へ、出してやる」

数日前、ジェニーは女官長から、王が彼女を狩りの場へどうしても連れていくつもりでいる、と報告を受けた。その一報を聞き、ジェニーは耳を疑ったものだ。王はジェニーをなるべく王城内に閉じ込めておきたいのではなかったか？
けれども、王城の外に出られると聞き、それが王同行のものだとしても、ジェニーが浮き足だったのは確かだ。
ところが、女官長は急に深刻そうな表情になって、ジェニーの不安定な体調を非常に気にしているにも関わらず、王が聞く耳を持たない、と彼女に嘆いてみせたのだ。そして、ジェニーを同行することで護衛と召使を何人も増やさなければならない手間があり、一行の歩みの遅れにも繋がる、という苦労も併せて口にした。その上で女官長は、ジェニーの口から王に狩りへの同行を辞退するようにと、ジェニーに迫った。同席していたアリエルをジェニーが見ると、彼女からは、主人の体調がとても心配で今は外出を控えてもらいたい、と心配そうな顔で告げられた。
「……浮かぬ顔だな。あれほど王城の外に出たがっておったというのに」
「ええ、出たいわ。……出たいわよ」
「そうは見えぬ」
王が疑わしい目をして、ジェニーの目をのぞきこんだ。勘のよい彼に心の内を見透かされそうで、ジェニーはその目から逃れようとさっと視線を外す。すると、彼はジェニーの顎を掴んで自分の方へと無理に引き寄せた。

「言え。何を隠しておる？」
ジェニーは外に出たかった。女官長の命令めいた言葉を思い出しつつ、外出に心を動かされる自分とで葛藤し続けている。
「何もないわ。私はただ……あなたがなぜ私を外へ出そうと思ったのか、それが不思議なだけ」
ジェニーがそう答えても、王はじろじろと彼女の顔を見続けたままだった。
「私が、皆の隙をついて逃げ出すとは思わないの？」
ジェニーは、自分が外出先で逃亡できるとは考えてもいなかった。
「思うが、それは不可能だ。その心配はしておらぬ」
ジェニーは言葉を継ごうとし、思いなおして別のことを言った。
「本当に、私を外出させる気？」
ジェニーが尋ねると、王は不審そうに眉をしかめる。
「私はここのところあまり体調がよくないの。すぐに……疲れてしまうから」
彼女の言葉を聞き、王が不愉快そうに唇をゆがめた。
「おまえ――つまり、狩りの場には行かぬと言いたいのか？」
ジェニーは即答ができなかった。女官長が悲痛な口調で彼女なりの気苦労と手間をジェニーに伝えなかったら、ジェニーは外出に躊躇などしなかったはずだ。それに、女官長はともかく、アリエルがジェニーの体を心配していることは本当だ。つい、アリエルのいる方に視線を移したが、そうだといって、彼女が助け舟を出してくれるわけもない。
「――なるほど。そういうことか」
王のかすれ声がした。ジェニーが王を見上げると、彼がちょうど皮肉そうな笑みを浮かべるところだった。
「姑息なことを」
王の視線がジェニーに戻った。ジェニーの顔に王の顔が近づいてくる。ジェニーは咄嗟に顔を彼からそむけたが、予想に反し、彼は何もしない。ジェニーが不審に思って視線を返すと、目が合った王

が自嘲気味に微笑んだ。
「おまえは……正直な女だ。繕う、ということを知らぬようだな」
何のことか意味がわからずにジェニーが困惑して王を見つめると、彼は掴んでいた彼女の腕を離し、彼女の瞳をまっすぐに見て言った。
「狩りについて来い。よいな？　その日まで、せいぜい養生するがよい」

数年前まで恒例だった晩春の狩猟が復活したその日、空は彼らを祝福するかのようにすっきりと晴れ渡り、青い色がどこまでも広がっていた。総勢四十名余りの一行は王城の西側にある道を抜け、新緑の眩しい小さな森へ向かって進んでいる。森は街と反対方向にあたり、行く手に人の姿は皆無だ。
一行の半数以上は近衛兵など護衛の男たちだ。女たちを乗せた馬車が一行の真ん中におり、その前をゴーティス王が馬で闊歩する。その左隣には彼の叔父にあたるリヨン公、右斜め後ろにはサンジェルマンが周囲を警戒しながら馬を進めている。
午前中の日差しは、それほど肌にきつくはない。馬車に屋根はなく、そこに席を取る女たちの目には丘陵地帯の鮮やかな黄緑色が直接入ってきた。ジェニーにとって、数ヶ月ぶりの外の世界だ。風には籾と草の匂いが混じり、なつかしい思いが込み上げてくる。
アリエルとジェニーが周囲の景色を見ていると、二人の視界を遮るようにして、一人の男が脇に馬をつけた。ゴーティス王のように白く柔らかそうな髪を持っている。他の近衛兵たちと同様に青い制服をその細身の体につけてはいるが、剣の鞘の意匠が彼らの持ち物よりもずっと立派だ。ジェニーが男を見上げると、彼は彼女の視線に気づいたらしく、馬上からおざなりに黙礼した。ジェニーが微笑み返すと、彼は一瞬怪訝そうな顔をしたが、すぐに前方へと向き直った。
一行の目指す“王の森”がなだらかな丘の先に見えてきた。すると、それまでジェニーの横に並んでいた男が馬の歩みを速め、ゴー

ティス王の隣に追いついて並ぶ。
「あの人は誰？」
男からアリエルにジェニーが視線を移すと、彼女が一瞬だけ言葉をつまらせ、視線を泳がせた。
「位の高い人のようだけど。知らない？」
なぜか、アリエルが何かをためらうように言いよどむ。
「あ……ええ、存知あげております。あの方は、近衛隊副隊長のライアン様です」
ジェニーがもう一度彼を見ると、王を挟んで彼の反対側にいたサンジェルマンが後ろを振り返った。周囲に目を光らせていたのだろうが、ちょうどジェニーが前に視線を向けたので注意をひきつけられたらしく、彼と彼女の視線がぶつかる。彼が、緊張感を保ったまま、微笑もうとして途中で止めたような表情で彼女に目礼した。

ジェニーたちの到着先は森の入口付近に建つ小さな館だ。小さいと言っても、一通りの設備が整った厨房・晩餐室・大広間・サロン・遊戯室に加え、寝室は六部屋ある。召使用の部屋も当然備わっている。この館は王が狩猟をする時だけ使用する場所だ。馬車から降りるなり、アリエルが心配そうにジェニーに尋ねた。
「お加減はいかがです、ジェニー様？　どこか具合が悪いところはございませんか？」
王城からの道中に何度も受けた質問だ。彼女の気遣いを有り難く思っているとはいえ、ジェニーはさすがに少しだけ呆れ、アリエルを見返した。
「大丈夫よ。そんなに心配しなくても、私はもうすっかり元気なの、アリエル」
「本当でございますか？　移動でお疲れになったのでは？」
「そんなに遠い距離じゃなかったじゃない。心配性ね。私は本当に大丈夫」
ジェニーが元気に笑ってみせるとアリエルは安心したような笑み

を見せたが、完全に納得した様子ではない。
「女官長様もたいそう心配されておいででした。ジェニー様、気分が優れなくなったら、すぐにおっしゃってくださいね」
「ええ」
ジェニーは、女官長、と聞くと、ため息をつきたくなる。ジェニーが狩猟への同行を王に断れなかったと彼女に話す前に、彼女はジェニーに脅迫まがいの発言をしたことを侘び、数日前とは逆に、王に同行するようにジェニーに勧めた。そしてさらに、彼女はしつこいほどにジェニーに体を気遣うようにと言い続け、ジェニーを困惑させた。女官長自身も同行を願い出たが叶わなかった、とは、アリエルから後になって聞いたことだ。ジェニーを送り出した時の彼女の恨めしそうな顔が、ジェニーには今も鮮明に思いだせる。
ゴーティス王たちが狩猟にいそしむ間、ジェニーは館の敷地内で彼らの帰りを待つことになる。館に残される者は、ジェニーとアリエル以外に、料理番とその手伝い、侍医、召使女が四人、護衛が四人。一行の三分の二が王と共に出払ってしまう。館の維持管理人や庭師、下男がいるものの、王城と比べると何と警備の手が薄いことか！
狩りに出発するばかりとなったゴーティス王がジェニーに左頬をつきだした。意図がわからずに彼を見上げると、彼は冷めた目で彼女を見つめる。
「キスを、ジェニー」
「……なぜ？」
彼女が不審に思って問うと、王が目を輝かせ、にやりと笑った。
「俺の無事を願って送り出すためだ。おまえは、おまえ自らの手でこの俺を倒したいのではなかったか？　俺が狩りの最中にうっかり死んでしまったら、おまえもさぞ無念であろう」
ジェニーとゴーティス王の背後にはリヨン公やフィリップ、多数の近衛兵がいる。二人のにらみ合いは、ジェニーが負けるしかなかった。

傍目から見たら恋人同士にでも見えるだろう、ジェニーが彼の頬に唇を押し付けると、彼は彼女の後頭部に手を当ててそれを受ける。

「敷地内は自由にまわってよいが、つまらぬ気を起こすでないぞ、ジェニー。森の境界線には、大勢の衛兵が待機しておる」

ジェニーが唇を離す前に王が耳元でそう囁いた。逃げるな、と釘を刺したつもりだろう。ジェニーが彼を見ると、彼は勝ち誇ったような笑顔を浮かべた。

王一行を送り出すと、料理番たちが、帰宅した一行を迎え入れるための軽食の準備を始めた。釜に火が入り、厨房はあっという間に熱気に包まれる。召使たちが忙しそうに館内を動き回り、大広間を整え始めていく。護衛として追従してきた近衛兵たちには、一気に気の弛みが見えた。王の前では笑みさえも漏らさなかった彼らが、庭の木陰にいたジェニーの背後を通りすぎる時には楽しそうに談笑している。

館の維持管理人が下男を連れ、ジェニーとアリエルの近くを歩いていた。男はジェニーと目が合い、慇懃な態度で深くお辞儀をする。最初の挨拶の時と同様、敬意を払っている態度ではない。しかし、それは彼女を護衛する立場である近衛兵たちにも共通している。アリエルが、王が不在となってからの彼らの態度の変わりように憤慨していた。

男二人の姿が小さくなるのを見送りながら、ジェニーはかすかに喉の渇きを感じていた。心なしか、お腹も少し空いてきている。

「アリエル、水を飲みたいわ。中に戻りましょう」

ジェニーとアリエルが庭から館に移動していくと、玄関前にいた近衛兵たちの視線もそれと共に動いた。二人が玄関に近づくにつれ、彼らは数歩だけ退き、二人のために道をあける。彼らの立場上、ジェニーを正視するような振る舞いは許されていないが、ジェニーが彼らの間を通り抜ける間中、二人の男の視線は痛いほどに彼女に突き刺さる。決して、好意的な視線ではない。そんな扱いに甘んじな

ければならない境遇を思うと、ジェニーはやりきれない思いでいっぱいになる。

館内の廊下に面する扉は全て開け放たれていた。召使たちが各部屋に通風させるためにそうしたのだろう。ジェニーは解放された各扉から室内を何気なく見ていて、廊下の左側にあったある部屋の前で足を止めた。

「ジェニー様、どうかなされて――？」

室内に吸い込まれるようにして、ジェニーは部屋に入った。扉の対面に小さな窓が二つあり、その両方が全開となっている。濃茶色の長椅子と一人掛けの大きな椅子が二脚、中央の重厚なテーブルを囲む形で置かれていた。ジェニーは壁面を見回し――息をするのも忘れ、左手の壁面を見た。

「ジェニー様、急にどうなされたのです？」

アリエルが追いつき、ジェニーの横に立った。

「……まあ、これは」

アリエルが息をのむのに気づき、ジェニーは彼女に振り返った。彼女が、困惑したようにジェニーを見つめ返す。

「見て。どれも、とても立派な剣よ」

二人の見つめる壁の一面、右から左まで、剣がずらりと立てて飾られていた。その数は十五以上あるだろう。様々に見事な意匠が彫られた剣の鞘は近くで見れば見るほどに立派で、荘厳で、まるで誰かに使われるのを心待ちにしているようにも見える。

「ジェニー様？　まあ、お止めください！」

ジェニーが壁面に近づいて剣の一つに手を伸ばすと、アリエルが叫んだ。けれど、ジェニーはそれに手を伸ばし、黒に近い灰色の柄をそっと掴む。久々に触れる剣の柄は冷たく、しかし、彼女の手の下で妙に馴染む。

――私がここで剣に出会ったことには、何か、特別な意味があるのかもしれない。

ジェニーはゴーティス王の顔を思い浮かべ、思い切って鞘を壁か

ら降ろした。思った以上にずしりと重い。
「ジェニー様！」
ジェニーが剣を引き抜くと、真新しい刃を持った剣がそこに現れた。鞘を脱ぎ去った剣は半分以下の重量に感じられる。窓から差し込む光を受けて、銀色に刃がきらめいた。
「どうか、ジェニー様、そんな物騒なものを持つなど、お止めくださいませ！」
アリエルが悲しそうな表情をしたが、ジェニーは聞き入れなかった。
「大丈夫よ。私は昔から、これには慣れ親しんでいるの」
「ですが、ジェニー様……」
ジェニーはアリエルと距離を置き、その剣を一振りしてみる。久しぶりに本物の剣を扱ったせいか、その重量感はジェニーの二の腕に直にひびいた。

第一部　4．復讐のとき－3

狩りの一行は、まだ日が高いうちに館に帰ってきた。大猟とまでは言えないが、小鹿とキジを狩れたことで、王を含む四人は揃って上機嫌なようだ。王の後続にいるリヨン公が、隣の近衛隊隊長に大声で陽気に話しかけている。普段は人の会話に入りたがらず、気に障る、と言って王はむしろ人々と距離をつけたがるが、今日の王はリヨン公に何かを問われると、めずらしく嫌な顔をせずに何度か返答していた。

館の玄関前には、帰宅した一行を出迎えるために召使や館の主人が勢ぞろいしていた。その顔ぶれを見て、サンジェルマンはそこにいるべきジェニーの姿がないことに気づく。一抹の不安を覚え、サンジェルマンがその理由を尋ねようと手近にいた召使の一人をつかまえた時だった。

「サンジェルマン、王も久々に狩りを楽しまれたようではないか？」

サンジェルマンが足を止めて振り向くと、フィリップが彼を見て微笑んでいる。

「今日お会いするまでに様々な話を聞き及んでいたが、変わらず、王はお元気そうだ。私は、王のお元気なお顔を拝見できて嬉しいよ」

その言葉どおり、フィリップが嬉しそうに笑う。彼はサンジェルマンからの返答を聞きたがっているように見えた。そこで仕方なく、サンジェルマンは召使に目配せをし、その場から彼女を去らせることにする。

「はい。王もフィリップ様との再会を楽しみにしておりました」

「……本当にそうならよいが」

と、フィリップがもの静かに言い、寂しそうな笑みをもらす。だが、すぐに彼はいつもの微笑みを表情に戻した。

「しかし……王も、すっかり大人の男へと様変わりされたものだな」

フィリップが感慨深そうに王を眺める様子を、サンジェルマンは

複雑な思いで見つめる。

たしかに、フィリップが知る以前の王は今よりも華奢で小さく、もっと少年の面影を色濃く残していた。そして、もっと穏やかで優しい性格だった。

その彼らの視線の先で、王が出迎えの一同を見るなり、一瞬だけ眉をひそめる仕草をした。

近衛兵たちが外と館内に分散し、王と各家からの護衛以外の者たちは大広間に整えられた席に通された。サンジェルマンは召使にジェニーの不在理由を確かめる機会を逃していたが、王が退屈そうながらも焦っていないことから、ジェニーが館から逃亡したわけではなさそうだ、と結論づける。

サンジェルマンは入口近くに待機するライアンの横に留まることにした。彼らは最初に目を合わせはしたが、隣同士で立っていても口をきくことはない。

王が席に座るとすぐに、酒や軽食が彼らの前に運ばれてきた。香ばしく、甘い匂いが室内にだんだんと充満していく。リヨン公、フィリップ、今日は王の同行者として出席している近衛隊隊長、王の臣下でもあるランス公が和やかに話を進め、場は寛いだ雰囲気で包まれていった。

ジェニーが目を開けると、アリエルがちょうど侍医を扉の前で見送っているところだった。室内の見慣れない装飾品が目に入る。ジェニーは寝台の中に納まったまま、自分の部屋とは違う室内をゆっくりと見渡す。彼女がその場をどこかと思いだすまで、数秒の時を要した。

「アリエル？」

ジェニーに声を掛けられ、アリエルがびっくりしたように振り返った。

「ジェニー様？　ああ！　私、ジェニー様を起こしてしまいましたか？」

「いいえ、そうじゃないけど。……私、眠ってしまっていた？」
「はい。遠出は久しぶりでございましょう？　きっと……お疲れだったのですよ」
アリエルが少し心配そうに微笑む。
ジェニーは自分がこの寝床に入った時を思い出そうとした。あの時は頭がとても痛くて、倒れこむようにして寝床に入ったのを覚えている。そして、それよりも前、多くの剣が飾られたあの部屋で、ジェニーは剣の“感覚”を取り戻そうとして、それを何度か振りまわしていた。懐かしく、勇気を奮い起こされる、剣の重量感。
急に目眩がして、ジェニーがその場にしゃがみこんだのはその直後だ。アリエルが助けを呼び、ジェニーは召使が持ってきた水を大量に飲んだ後、二階のこの寝室に移動した。
「ジェニー様、今のご気分はいかがです？」
「悪くないわ。眠ったら、すっきりした感じ」
ジェニーが上半身を起こそうとすると、アリエルがそれを手伝った。枕に体を預け、大きな息をジェニーがつくと、アリエルが微笑ましいものを見るような目で彼女を見つめ、微笑んだ。ジェニーが笑い返すと、彼女はさらに微笑みを顔面いっぱいに広げる。
「お水を差し上げましょうか？　それとも、何か召し上がれそうですか？　料理番がジェニー様のためにお菓子を用意しておりますよ」
「お菓子？」
「ええ。ジェニー様のお好きなグースベリーと苺の砂糖漬けをのせたサブレですわ」
ジェニーはびっくりしてアリエルの満面の笑みを見つめた。果物の砂糖漬けがのせられた焼き菓子はジェニーの好物だ。アリエルが料理番にジェニーの好みを伝えてくれたに違いない。
「食べるわ！　ありがとう、アリエル！」
寝室に運ばれたサブレを堪能した後、ジェニーは再び眠くなってしまった。せっかくの外出なので館の周囲でも散策したかったのだが、強烈な眠気には、どうしても勝てない。一時間ほど後に起こす

ようにアリエルに伝え、ジェニーはまた、気持ちのよい寝床に戻った。

大広間の一行のための料理を一通り作り終え、料理番の男は熱さで赤らんだ顔に噴出す汗を手の甲で拭う。厨房の台には、料理番自慢の野菜づくしのクレープや果物のシロップ漬けが並べられ、配膳されるのを待つばかりだ。ずっと火が点っていた釜の圧倒するほどの熱気が治まってきて、厨房はやっと落ち着きを取り戻していた。

手伝いの下女が勝手口の扉を開くと、外の爽やかな空気が厨房内に流れこんできた。料理番が勝手口に注意を向けると、彼と同じく顔を真っ赤にした少女が言った。

「こちらに、食事を作っておきました」

彼女の示す先、部屋の隅には使用人用の料理が置かれている。野菜の先端部分など、料理番が残した部材を使った、いわば、賄い料理だ。王城であれば、王と同じ高級食材を使った料理を口にすることは許されていないが、こういった場では目をつぶってもらえることになっている。少女は料理番の真似をし、様々な野菜・香草を生地に混ぜ込んで数層に重ね、うっすらと焦げ目をつけたクレープを用意していた。

「ああ、わかったよ。じゃあ、最後の品が出された後、時間をみて皆につまんでもらおう」

「はい」

それから、少女は館の下男を庭で探し、水を補充するように申し付ける。館から二十分ほど歩けば、飲み水に使用できる小さな清流があるそうだ。下男が遠ざかっていくのを見送り、少女が館に戻ろうと踵を返すと、勝手口の近くに近衛兵が一人佇んでいるのが見えた。彼女がつい立ち止まると、彼はにこやかに笑い、小さく手を振ってみせる。

「デルフィー様！」

少女は彼に急いで駆け寄り、非難するように、だが嬉しそうに、

彼の名を呼んだ。

「どうしたのです、お役目は？　デルフィー様、こんなところにいるとお叱りを受けてしまいますよ！」

「大丈夫だよ、少しくらい。それに、こんな安全な“王の森”なんかで王が襲われるものか。皆ものん気なものだよ」

「ええ、でも――」少女は辺りをはばかるように素早く庭を見渡した。

「なんだ、君は僕に会えて嬉しくないのかい？　僕は君に会いたくて、ここまで来たっていうのに」

「いいえ、そんな！　嬉しゅうございます！　私のような身分のものに、そんなお言葉をいただけるなんて……。私はデルフィー様にお会いできるだけで、幸せにございます！」

彼が少女の小さな体を抱き寄せ、額にキスをする。少女が目を閉じると、彼女の唇が男のそれで覆われた。

長い抱擁が終わって彼女が目を開けて彼を見ると、彼が無邪気な笑顔を見せた。

「何だかお腹が空いたな。僕たちは夜まで食物は何も供給されなくってね。君、台所に何か残ってない？」

「何か――」と、少女は首を傾げ、やがて、顔を上げた。「あ、クレープがございます！　美味と評判で、王に差し上げるものと同じ食材を使ったクレープです！」

厨房には料理番の姿はなかった。少女は使用人分のクレープを一つくすねると、勝手口からそっと抜け、外で待っていた男に手渡す。それはまだしっかりと温かく、香ばしい匂いを放っていた。

皆が絶品だとほめそやしたクレープが出されてほどなく、その前から酒を大量に飲んでいたリヨン公が、さすがに飲みすぎた、と言って大広間を後にしようとした。王や近衛隊隊長に呼ばれ、話に加わっていたライアンが、退室するリヨン公に付き添っていくように近衛兵たちに指示する。部屋を出る寸前、リヨン公が室内に振り返

って豪快に笑った。
「老人は退散させてもらうゆえ、後は若者たちで楽しまれよ！」
「何をおっしゃるか、リヨン公！　まだ四十過ぎではないか、私と大して変わりませんぞ？」
「ははは、世辞はいらんぞ、近衛隊隊長殿！　見ろ、酔いが足にまできておる。酒に飲まれるのは、おのれが年を取った証拠だ」
リヨン公が、入口の脇にいたサンジェルマンの横を通っていく。疲れているせいか、リヨン公の目の下にはくっきりとクマができていた。
彼とすれ違いざま、その足元がおぼつかずにリヨン公が体勢をくずし、サンジェルマンは思わず手を差し伸べた。サンジェルマンの出した手をリヨン公が頼ることは結局なかったが、彼は今やっと気づいたかのように、サンジェルマンに目を留めた。
「――おお、ミシェルではないか？　達者だったか？」
リヨン公は元々がサンジェルマン家の出なので、彼らは親族だ。二人は、狩りに出る前の王城で再会の挨拶を交わしている。酔ったせいか、リヨン公はそれすら覚えていないようだ、と、サンジェルマンは彼に返事はせず、静かに黙礼した。
リヨン公は近衛兵に脇を固められ、廊下を歩いていく。普段から大酒飲みで酒に強い彼がめずらしくふらついた足取りで歩く姿は、サンジェルマンの目にも何となく奇異に映った。
リヨン公が立ち去って間もなく、今度はフィリップが王に退室願いを申し出ていた。調和を乱すことを嫌う彼が途中で引き上げようとするなど珍しい、とサンジェルマンが不思議に思っていると、彼が、「酒に酔った」というようなことを王に話しているのが聞こえてきた。
サンジェルマンから見えるフィリップの顔は真っ青だ。彼が酒に弱いかどうかはサンジェルマンも知らないが、気分が悪いのは本当だろう。王が、呆れたような、侮蔑するような表情をして、彼に何かを答えていた。

フィリップが場を退くと、大広間の人々の雰囲気はあっという間に冷めていった。王がしらけた表情をしているせいも大きい。酒の減るペースもぐんと遅くなった。

やがて、王が椅子から静かに立ち上がった。

「俺は少し休む」

王が歩き出し、入口にいるサンジェルマンに注意を向けた。彼は急いで体を横に向け、王が近づいてくるのをじっと待つ。

王が入口を出て、廊下を左に折れた。サンジェルマンが当然のようにその後を追っていくと、王が足を止め、彼に振り返る。そして、何の抑揚も感じさせない口調で言った。

「俺は休むだけだ。ついて来ぬでもよい」

「は。ですが、どちらへ？」

王が目を細め、苛ついたように息を短く吐く。

「二階の奥だ。ジェニーもそこにおる」

サンジェルマンは、ついさっきになって、ジェニーは具合が悪くなって寝室で休んでいる、と知ったばかりだ。そのことは当然、王も知っている。

「承知しました。では、私は階下で待機しております。……彼女の具合も回復していればよいのですが」

サンジェルマンがそう言うと、王がますます苛ついた様子に変わった。

「おまえは、そのような心配をせずともよい」

階段を上がっていく王を見送り、サンジェルマンは大広間には戻らずに館の外へ出た。日は弱くなり始めていたが、まだ外は明るい。サンジェルマンは館の周囲に異状がないかと目を配りながら、館の周りをゆっくりと歩いていった。外で護衛を担当する近衛兵たちが彼に気づき、次々に敬礼する。

近衛兵は二人で一組となって場を担当する決まりになっているが、サンジェルマンは庭を一人で歩いている近衛兵を見つけた。その若い近衛兵は退屈そうに地面を蹴りながら、のろのろと移動している。

「そこの近衛兵！」

サンジェルマンに呼び止められた近衛兵は、あまりにも驚いた様子で立ち止まった。単独行動を不審に思ったサンジェルマンにその理由を問われると、その近衛兵は気まずそうに顔を曇らせる。

「その、実はですね、相棒が急に腹の調子が悪いと言って持ち場を去りまして。ちょうど今、館内で介抱されているところなのです。あの、すぐ戻ってくると思っていたら、なかなか戻ってこなくて、僕も困っているわけでして……」

「それで一人でいるわけか。本来なら一人での任務は禁じられているはずだが。副隊長にはもう知らせたのか？」

「あ、いえ、まだですが……」

若い近衛兵の声がだんだんと小さくなっていく。サンジェルマンは身を小さくする彼を見て、息をついた。

「君の持ち場はどこだ？　いかにここが安全地帯とはいえ、油断は常に禁物だ。その者が戻らぬというなら、担当場所を別に変えてもらえるように計らってもらえ」

サンジェルマンがそう言うと、その近衛兵は意外そうに彼を見た。そして、安心したように微笑み、はい、と返事をした。

館の周りを一周し、サンジェルマンは玄関を再びくぐった。外の太陽の明るさに慣れた目が、室内の薄暗さに慣れるまでに少し時間がかかる。大広間の方から、騒がしいほどでもないが複数の人々の話し声が聞こえてきた。

サンジェルマンは大広間へ戻ろうとして、ふと、それとは逆方向の、開きっ放しになった部屋の扉に目を留めた。隣も向かいの部屋の扉もきちんと閉まっているのに、そこだけが半分ほど開き、室内からの光が廊下に細長く伸びている。

彼は部屋に近づくと、条件反射で剣に手をやり、その扉から室内にそっと入った。そこは、それほど広くはない遊戯室で、室内にひと気はなかった。二つの窓も開いていて、そこから差し入る日光が床の敷物の赤い色を鮮やかに浮き立たせている。中央の一人掛け椅子が斜めに動かされており、その脚に引きずられ、下にある敷物には大きな皺が寄っていた。

「誰もいないのか。召使の誰かが掃除をしようとして、他の用事ができて慌てて出て行ったか」

サンジェルマンは部屋の中央に寄っていき、椅子を元の位置に動かそうとして、はっとして足を止めた。彼は思わず、部屋を注意深く見回した。

壁面に飾られた数々の剣の並びで、右端から五本目の部分に空間ができている。一本の剣が忽然とそこから消えていたのだ。

彼はもう一度、剣を探して部屋をぐるりと見回した。しかし、それらしき剣は見当たらない。

彼は再び、はっと息を飲んだ。ジェニーの顔が頭にふって湧いてくる。

彼らが狩りで留守の間、ジェニーはこの館にいて部屋を自由に行き来できたはずだ。しかも、彼女は剣を扱う。戦地から王城へ連行される途中、「必要なものは？」とサンジェルマンに問われ、ジェニーは、王の命を、と彼に答えていたではないか。

次に、サンジェルマンの頭にゴーティス王の姿が映った。王はジ

エニーのいる部屋へ向かったはずだ。
「だが、いや、まさか……」
サンジェルマンは戸惑い、部屋から出ようとした。混乱の酷さからか、脚がからまってうまく歩けない。頭まで朦朧となってきている。胸に急について出た不安のせいか、何だか、考えがうまくまとまらない。
彼が扉に体を預けて息を整えようとしていると、その目前の廊下を、血相を変えた召使の女が一目散に疾走していった。
「……まさか！」
急に足から力が萎え、サンジェルマンは扉を下に滑り落ちるようにして床に腰を落とした。立ち上がろうと試みるが、なぜか足に力が入らない。
サンジェルマンの目に、大広間の入口から何人かの近衛兵が飛び出していく姿が見えた。さっきよりも大広間の方が騒がしくなっており、女の悲鳴に似た声まで聞こえる。下腹が急に重くなり、彼は腹を抱えて体を曲げた。
「ああ、まさか！　まさか、ジェニーが……！」
ジェニーが剣を掲げる姿が目にくっきりと浮かんで、サンジェルマンは激しく動揺した。足を床に立てようとするが、足はぐにゃりと曲がるばかりで、彼の意思をまったく無視している。
「誰かいないか！」
サンジェルマンは叫んだが、廊下の先には既にひと気がなかった。
「誰か！　誰か、王がご無事かどうか……！」
彼の言葉の半分がかすれ、誰ひとりとして大広間から出てこない。
身動きのできない自分の、今の身を呪いたくなる。階段の方角に、サンジェルマンは腕をむなしく伸ばした。
「王、どうか、どうかご無事で……！」
唇が痺れ、彼は喘いだ。彼の伸ばしたその手が、視界の中でぼやけていく。

いきなり開かれた扉に、ジェニーとアリエルは驚いて会話を中断した。扉口にはゴーティス王が立っており、二人を見て大きく眉をしかめている。

「具合が悪いと聞いておったが――」

彼は大股でずかずかと室内に入ってきた。アリエルがジェニーの座る長椅子の前から腰を上げ、窓際へとそそくさと移動する。ジェニーの前まで来ると、彼は上半身を傾け、彼女の目を疑わしそうに覗き込んだ。

「いやはや、元気そうではないか？　俺の不在を随分と楽しんだと見える。具合が悪いと理由をつけ、俺を体よく遠ざけるつもりでおったか？」

「王、ジェニー様は先ほどまで伏せっておりました、本当でございます！」

アリエルが慌てて口を挟み、その反論に王は冷ややかな目を向ける。

「おまえは黙っておれ。――そうなのか、ジェニー？」

王の視線を追ってアリエルを見た後、ジェニーは彼の不機嫌そうな顔を見た。

「頭痛がして休んでいたのは本当よ。もう治ったけれど」

「それゆえ、迎えに出なかったと？」

「そうよ。私が迎えに出たくないと思ったとしても、それは、アリエルが許さないもの」

ジェニーがアリエルをちらりと見ると王もそれに倣った。彼女が照れたように顔を赤らめ、ジェニーに微笑み返す。

「ふん。迎えに出たくない、など、よくもそうはっきりと俺に言えるものだ」

王の雲っていた表情がいつのまにか晴れている。彼が手を伸ばし、ジェニーの頬に手を触れた。彼は、自分の様子を見に来ただけなのではないか、とジェニーは感じた。頬に力をいれ、ジェニーは黙って彼を見返す。

「おまえ、ずっとここで寝ておったのか？」
「いいえ、庭には出たわ。だけど、せっかくの機会だったのに、外もあまり出歩けなかった。明日の昼前にはもう、ここを出るっていうのに」
「……ほう。それはまた不運な」
王は意地悪そうな笑みを見せたが、口調は静かで、その目にはどこか憂いが満ちていた。彼はジェニーの頬を指で触りながら、その一点をずっと見つめている。彼は、普段よりずっと落ち着いた態度だ。
ジェニーの視線を感じたらしい王が、彼女を穏やかに見つめ返して言った。
「明朝にも時間はある」
ジェニーは何だか面食らい、その目から逃れるため、視線を窓の外へと外す。
そのうちに衣擦れの音を聞き、ジェニーはアリエルの動く気配を感じた。見ると、アリエルが壁際に沿って入口の方に向かって歩いている。
頬に触れた王の手がジェニーの顔を引き戻し、ジェニーは王を見上げた。彼は、彼女の顔をじっと見下ろしている。身の危険は不思議と感じなかったが、ジェニーは、未知のものに接しているような恐怖を覚えた。
王が無言でジェニーから手を離し、さっきまでアリエルが座っていた椅子に腰を降ろした。それから彼はその簡易な椅子をジェニーのすぐ近くにまで引きずり、二人の膝が触れるほど近くに寄る。彼に近寄られると、心臓が騒がしくなる。ジェニーが腿の上に置いていた手を、王が手に取った。
「……そう抵抗するな」
ジェニーが手を引き抜こうとしたのを諭すように、王が静かな口調で言う。
「放して」

しかし、王は彼女の手を握ったまま、ジェニーをじろりと見るだけだ。

「やめて、放してよ」

ジェニーが尚も手を引っぱろうとすると、王がむっとしたように彼女をにらんだ。ジェニーも、次に彼がどんな行動をとるのかと警戒しながら、彼をにらみ返す。

「おまえという女は――」

王が彼女を見据えたまま、椅子から立ち上がろうとした。すると、何かに気をとられたのか、一瞬、彼が足元に目をやる。

「ようもそこまで俺を――」と、彼が言いかけ、言葉を途中で止めた。戸惑った顔をして、体勢までそのままで止まる。

不審に思ってジェニーが見守る中、ゴーティス王が彼女から離した手を自分の口元に当てる。その唇からは、赤みが消えている。

「何だ、これは……？」

次の瞬間、彼は喉を押さえ、いきなりジェニーの膝に手をついた。と思うと、彼女の足元に崩れるようにして、彼は床に片膝をついた。

厨房手伝いの少女が勝手口の外で調理器具を洗っていると、館から慌てて飛び出してきた下男に声を掛けられた。おそらくは南部人との混血で、肌の色が濃い、十二、三才の少年だ。

「私、忙しいのよ。なに？」

身分でいえばほぼ同じだが彼女の仕える先が王なので、彼女は偉ぶった態度で少年に尋ねる。

「あああ、あの」

と、少年は慌てた様子でしゃべろうとしたが、うまく口がまわらないようだ。彼女は自分と数才しか年齢の違わない少年を見下すように見つめ、苛々した調子でさっきの言葉を繰返した。

「私は忙しいの。何か用？」

「あの、ちょっと、どうも様子がおかしいみたいなんで！」

少年は膝を地面について、大きくため息をつく。彼女は呆れ、彼

の上下する肩を見つめた。
「何なのよ、一体。あのね、さっきも言ったけど、私は忙しいの。あんたがおかしいことはわかったわよ、わかったから。さ、私の仕事の邪魔をしないでちょうだい」
「だ、だ、ダメだ、そんなの！　早く来てくださいって！」
少年が興奮して彼女の腕をつかみ、彼女は仰天して悲鳴をあげた。
「――あんた、何するの！？　その汚い手を放しなさいよ！」
少女が彼の手を取ろうとしたが、彼は彼女の腕を引っぱって館に引きずって行こうとする。
「女の人たちはみんな出ちゃってるし、お城の近衛兵は僕の言うことなんか聞きゃしないよ。ふん、エラぶっちゃってさ！　早く来てよ、お医者様の様子がおかしいんだ！　すごく苦しがってて！」
少女はそれを聞き、反抗する手を弱めた。すると、少年が卑下するように彼女を見返す。
「何なの、どういうことよ？」
「僕にだって何が何だかわかんないんだ。ともかく、一緒に来て、お医者様を何とかしてよ！」
少年に連れられて少女が侍医のいる部屋に入ると、鼻につくような酸の匂いがした。侍医の助手を務める男が入口近くにいて、侍医の震える体を必死にさすっている。床には所々に嘔吐した形跡があり、少女はそれらから目を背け、助手の男におそるおそる尋ねた。
「これは――何があったのですか？」
男は疲労をにじませた顔を少女に向けると、力なく首を左右に振った。
「胃がもたれるとは普段からよくおっしゃっていたものだが、先ほどになって――その近衛兵を診察していたら急に嘔吐されてな。原因はよくわからんのだがね」
少女は部屋の中央の寝台を何気なく見た。誰かの足が見えるが、全く動かない。
「おまえたち、お湯を沸かしておいてくれないか。それと、どこか

から毛布でも調達してきてくれ」
　少女は助手に返事をし、単なる興味本位で、中央の寝台にいる患者を見ようとして、背伸びをした。そこには、見慣れた青い近衛兵の制服をきた男が体を丸く曲げて横たわっていた。顔が真っ青で、死んだように動かない。
　その顔をよく見ようと男の顔をのぞき込んだとたん、少女は悲鳴をあげた。それは、彼女がついさっきまで会っていた、近衛兵のデルフィーだった。

　サンジェルマンが目を細く開くと、そこは大広間の入口扉前の廊下だった。彼が意識を失った部屋の前から、彼は無意識のうちにここまで這って進んできたらしい。体全体が鎖で縛られたかのように固まっていて、重い。
　ぼんやりしていた視界が晴れるにつれ、大広間からの喧騒がはっきりとサンジェルマンの耳につく。室内の床に倒れた数人の背中と彼らを介抱しようとする近衛兵たちの姿、召使女二人が彼らの間を飛び回るようにして、布や水を配っている。戦地での情景のようだ。
　呆然として床に座りこむ者の中には、部屋に引き上げたはずのフィリップの姿があった。近衛兵と話していることから、彼は命に別状はなさそうだ。
　だが、そこにはゴーティス王の姿はない。誰かが王の無事を確認したかどうかも、知りようがない。
　サンジェルマンはひと苦労して体勢を変え、廊下の床に仰向けとなった。目を開くと真上に天井が見える。
「サン……ジェルマン？」
　誰かのしわがれた声がして、彼は顔を左側に曲げた。
「サンジェルマン……」
　入口の扉に肩を押し付け、それでやっと体を支えて立っているライアンが彼の反応を見て、あきらかに安堵した様子を見せた。若干ながら、ライアンの症状の方が自分より軽いようだとサンジェルマ

ンは見てとった。

「ライアン……殿？」

サンジェルマンの口から声は出なかったが、彼はその息に似た音が彼の名と理解したようだ。ライアンは頷き、恨めしそうな表情をして階段の方へと視線を投げる。

サンジェルマンは、彼のその視線が何を意図するかを瞬時に理解した。他の者たちと違い、ライアンとサンジェルマンが、何よりも優先する項目は共通している。ゴーティス王の身の安全確保だ。

「王を……頼む、ライアン殿」

彼が階段の方へ視線を送ってみせると、ライアンが口惜しそうに歯を食いしばった。震える膝を必死に持ち上げ、背中を壁に押し付けながら、横に進んでいこうとする。

「頼む……！」

ライアンが何度か床に膝をつきながら歩いていく様を、サンジェルマンは天に祈る気持ちで見送る。“毒”らしきものへの脅威からも、ジェニーの剣の攻撃からも逃れ、王がまだ無事に生きのびていられるように、と、彼はただただ願わずにはいられない。

サンジェルマンには、彼女に少なからず好意的な感情を持ち、つい油断したことへの自己嫌悪と無念が募るばかりだった。身体的苦痛をも越える、王を失うかもしれない恐怖とジェニーへの怒りで涙がにじんでくる。

サンジェルマンは無念で喘いだ。

――ライアンの目には、“何”によって苦しむ王の姿が映るのだろう？

ジェニーの膝からゴーティス王の手が滑り落ちた。ジェニーは思わず椅子から飛び起き、彼の前から慌てて移動して、椅子の背後にまわる。

王の広い背中が大きく揺れていた。激しい彼の息づかいが、彼女の耳にもはっきりと届く。

「お……これは、どうし……？」

顔をあげたゴーティス王の額には汗で濡れた前髪が貼り付いていた。顔色が青白く、唇が土色だ。何とかジェニーの方に顔をあげた王を、ジェニーは茫然として見つめる。

彼女が見ていると、王がもう片方の膝を床に落とし、肩を長椅子の脚部分にぶつけるようにして体を椅子に預けた。

「……どうしたの？」

あうっ、という喘ぎ声がして、王が脂汗のにじんだ顔を苦しそうに左右に振った。唇が小刻みに震えている。

ジェニーの質問には答えず、王は苦痛に顔を歪め、大きく咳き込んだ。そして、その反動で、王の体は支えをなくして床に横から倒れていく。耳につく、鈍い金属音が響いて、王が自分の身につけていた剣の鞘の上に落下し、その痛みでさらに顔をひどく歪め、大きく呻いた。

あまりの突然の出来事に、ジェニーには何が起こったのか想像がつかなかった。ジェニーには、何が理由であれ、彼が倒れる、ということ自体が信じられない。

彼が身悶える姿を目の当たりにして初めて、“王も自分と同じ普通の人間だ”という当たり前の事実を、衝撃ともいえる発見のように認識した。

王が痙攣させた体を反対側に勢いよくひねった。呼吸は荒く早い

ままで変わらず、何度も喘いでいる。彼が曲がった指先で椅子をつかもうと伸ばすが、それは宙をむなしく引っ掻くばかりだ。ジェニーは、目の前に晒された、彼の腰にある臙脂色の剣の鞘を食い入るように見つめた。

――彼は今、赤ん坊のように無防備だ。

倒れた王の足元に立つと、ジェニーの膝が震えた。とはいっても、幸い、ドレスの中にある膝は彼から見えない。息も絶え絶えとなっていた彼が乱暴に顔を上げ、ジェニーを見て目を細めた。

「お……まえ……？」

――ここでなら邪魔が入らない。

ジェニーが彼の体の脇にしゃがみこむ一部始終を、王の目が怪訝そうに追う。ジェニーが彼の手を見ると、両方の手の指は丸く曲がり、さっき見た時と同じ形をしていた。

急がなくてはならない。

ジェニーははやる心を必死で抑え、ゴーティス王の腰帯につく剣の柄に手を伸ばした。王がいっそう喘ぎ、信じられないものを見るかのように彼女を凝視している。しかし、彼には余力がほとんど残っていないらしく、体は痙攣していて動きはしない。

ジェニーが柄を掴むと、彼が反抗するように上半身を少し動かした。が、体の位置はほとんどずれず、抵抗もそれまでだった。ジェニーは、難なくそれを鞘から抜くことに成功した。

光る剣を手にし、ジェニーが弱った王を見下ろすと、彼は暗い目で彼女を見つめていた。彼女の動きの逐一を見逃さないよう、その目だけには気迫が残っている。そして、その目から、ジェニーに対する恐怖は微塵も感じられない。

ジェニーは大きく深呼吸した。

兄や両親の顔と、彼女の意思が踏みにじられた日々が頭をよぎる。

彼女は歯を食いしばり、一歩、彼に近づいた。

王が何かを叫ぼうとしたが声にならず、激しく咳き込んだ。彼の喉から顎にかけての肌が赤く変わり、最後の力を振り絞ってか、手

がジェニーをつかもうと動いたが、その動きはあまりに遅い。彼女が剣をわざわざ振り下ろさなくても、その口をちょっと塞いでやれば、あの世に逝ってしまうだろう。

しかし、ジェニーは両手で剣を持って、自分の体の上に振り上げた。

王が怒りのこもった瞳でジェニーを見据えている。何度も目を閉じそうになっては、必死に耐えている。乾いた唇の端に白い泡がたまり、言葉をつむぎだそうとしながらも声が出てこない。

およそ、あの強靭な王とは思えない有様だ。ジェニーの剣を持つ手が震える。

「兄の、両親の、そして……私の身を奪った仇……！」

叫びながら、ジェニーの目には涙がどっと溢れてくるのを感じた。王が呻きながらも横向きに転がり、ジェニーは彼の脇腹を足で踏んで押さえた。彼が、短く喘ぐ。

誰も来ない。このまま突き刺してやるだけで、彼は死ぬ……！

ジェニーは振りかぶっていた剣を降ろし、刃先を王の腹に向け、剣の柄を持ち直した。

彼の胸が大きく上下している。顔面蒼白となった王が、ゆっくりと瞬きしながらジェニーを見ていたが、やはり、彼には恐怖は見られず、命乞いをする気配もない。

ジェニーは唇を噛み締め、迷いを捨てて、剣を一気に王に向かって突き立てた。

ほんの一瞬だけ目を閉じたつもりだったが、サンジェルマンがはっとして目を開くと、彼の前には二人の近衛兵がひざまずき、彼を心配そうに見守っていた。

「おお、ご無事でしたか！」

一人が大声をあげ、サンジェルマンは無意識に床から起き上がろうとした。男たちがサンジェルマンを助け起こし、彼は背後の壁に体を預ける。実際に手足を自由に動かすことはできなかったが、彼

は、体の痺れがさっきよりも少しだけ軽くなってきているのを自覚した。

「心配いたしました、サンジェルマン様！　あまりに静かなので死んでいるのかと！」

「おまえたち、ライアン殿は？　王は……？」

「たった今、向かったところです。ライアン副隊長も――」

階段の方角へ視線を投げた男が、そこで何かに目を留めた。口を開け、唖然とした表情に変わる。

「……どうした？」

サンジェルマンは右側に頭を傾け、男の注意を引きつけた原因を特定しようとした。そして、彼は唇をきゅっと固く閉じる。

サンジェルマンが剣の紛失を発見した遊戯室の前に、女が一人、顔を両手で覆って、扉を背にして廊下に座りこんでいた。身につけたその服装から、彼女がジェニーだとわかる。それがわかったとたん、サンジェルマンは妙な胸騒ぎを覚えた。

サンジェルマンの前にひざまずいていた近衛兵の一人が立ち上がり、ジェニーに近づいていく。彼女は近衛兵が目の前に行っても顔を上げなかったが、その男が声をかけたらしく、彼女が妙にゆっくりと顔を上げた。なんだか反応が鈍く、奇妙な印象だ。

ジェニーが独りでいること、ぼんやりしている様子は、あまりにもサンジェルマンの不安を増長させる。

「彼女を拘……保護せよ」

ほとんど無意識に、サンジェルマンは自分についていたもう一人の近衛兵に指示した。男は彼を残していくことに若干の心残りを示したが、サンジェルマンの指示に従い、仲間の近衛兵の元に追いついていく。

彼女は二人の近衛兵に囲まれても立ち上がろうとしなかった。二度ほど首を左右に振り、また顔を手で押さえるような仕草をした。

サンジェルマンが彼女を無理にでも連れてくるように近衛兵たちに促すと、彼らに手を触れられたジェニーが、それに反発するよう

に彼らの腕を振り払った。彼女は、泣いているようだった。

サンジェルマンの不安と胸騒ぎはひとまわりも大きくなっていた。既に王の様子を見に行ったライアンや他の近衛兵たちがまだ戻ってこない。王に一大事があれば何らかの知らせがその者たちから届くはずではあるが、その知らせがないからといって、王が無事だと証明されたことにはならない。

サンジェルマンはジェニーに付いていた近衛兵を急ぎ招き寄せると、王の様子を一刻も早く確認してくるよう、彼に命令を出す。

ジェニーが近衛兵と並んでサンジェルマンの方へと歩いてきた。彼は彼女の足取りを注意深く見ながら、彼の感じた違和感が何なのか、判別しようと試みる。

「サンジェルマン？」

半分近くの距離を歩いたところで、ジェニーがふと立ち止まり、床に足を投げ出すサンジェルマンに気づいて驚きの声を上げた。そして、彼の方へ慌てて駆け寄ってくる。

サンジェルマンはジェニーに気を許すことはせず、彼女を注視していた。廊下に投げ出された彼の足はまだ痺れており、力が入らない。

その彼の足の横に、ジェニーが心配そうな顔をしてしゃがみこんだ。サンジェルマンの隣に膝をついた、彼女の目の周りが赤く腫れていた。まるで一晩泣き明かしでもしたように、瞳が赤い。サンジェルマンの不安が、喉元まで押しあがってきた気がした。

「どうして……？　何が、何があったの？」

ジェニーが息を飲んで口元に右手を当てた時、赤い何かがサンジェルマンの目にふれた。彼女の肘から下には赤い直線ができていて、それに沿って服の生地が破けており、服の肘の部分一帯が赤く変色していた。

それは血液の赤い染みだった。

「ああ、なんてことだ！」

サンジェルマンが放った言葉は思いがけずに大きな声となり、近

衛兵とジェニーを驚かせる。
「ジェニー！　おまえ――おまえは一体、王に何をした！？」
彼がジェニーの肘を凝視すると、彼女が怯えたようにその肘を手で覆った。
「これは――」
サンジェルマンはもう一度、ああ、と叫び、ジェニーを睨みつけた。体内からの激しい震えが外側にどうしようもなく溢れ出してくる。
「衛兵からの知らせはまだか！　王はどうされているのだ！？」
サンジェルマンが叫ぶと、ジェニーの表情が苦痛そうに歪んだ。それを目にしたサンジェルマンはますます怒りと恐怖を覚え、宙に吠えるように何度も喘いだ。
「ジェニー、王の御身に何かあったら、私は……私はおまえを決して、許しはしない……！」
興奮したせいか、サンジェルマンは咳き込んで下を向いた。顔を上げると、ジェニーが思いつめた表情を見せ、近衛兵が、彼のいつになく乱暴で無礼ともいえる態度に面食らっている。
「衛兵！　彼女を今すぐ拘束せよ！」
サンジェルマンがジェニーの隣にいる男に命令すると、ジェニーが傷ついたように、一瞬だけ目を細めた。
「サンジェルマン、私は――」
「衛兵、彼女を拘束せよ！」
「し、しかし、サンジェルマン様」
「早く拘束せよ！　その娘がいつ逃げ出すか、知れたものではないぞ！」
のん気ともいえる近衛兵の反応に、彼は腹が立って仕方がない。近衛兵がジェニーに触れようとすると、彼女はその手を振り払い、一歩後退した。近衛兵が助けを求めるようにサンジェルマンに振り返ったが、彼はただ、淡々と命令を繰返すだけだ。
「女の言うことを聞く必要はない。命令を遂行せよ！」

「サンジェルマン！」

彼女に必死な目をまっすぐ向けられても、サンジェルマンの心は揺れなかった。

「衛兵、何をためらっている？　王の御身に関わることであるぞ、今すぐに女を拘束しないか！　この女は、毒を盛って、王や私を含めた多くの人々も殺そうとしたのかもしれないのだぞ！」

「――毒を盛って？」

そう言ったジェニーの声が震えていて、戸惑っていた彼女の目が怒りを帯びたものに変わった。

「サンジェルマン、まさか、あなたはそんなことを疑って……！」

「当然だ、おまえの兼ね備えた知識を用いれば、毒を作り出すことなど些細なこと」

「待って、なぜ私がそんなことを――」

ジェニーの目の縁に大きな涙の粒がもりあがっていた。サンジェルマンが強硬な態度を崩さずにいると、彼女は口惜しそうに一度だけ視線を他にずらし、彼をきっと見つめた。

「私がそんな――関係のない人たちまで巻き添えにするなんて、私はそんなこと、絶対にしない……！」

サンジェルマンは彼女に取り合わなかった。ただ、対応に苦慮しているらしい近衛兵を淡々と急き立てる。

「サンジェルマン！　私は何もしていない……！」

サンジェルマンは彼女の声をまるっきり無視し、近衛兵に彼女の身を拘束させた。彼女は暴れて抵抗を試みたが、屈強な近衛兵の腕にかかってはそれも何の役にも立たない。

ジェニーがサンジェルマンの隣に拘束され、悲しみを含んだ目で彼を鋭くにらんだ。赤く腫れた彼女の目からは、新しい涙が何筋も流れていた。

大広間の入口扉は広く開放されていて、ジェニーの目からも室内の様子がよく見えた。テーブルの席には誰も座っておらず、割れた

食器が散乱した床には、数人の男たちが伏せったり座ったりしている。ジェニーは入口のすぐ隣にいた王の従兄弟だという男と一度目が合ったが、彼も椅子にもたれてぐったりした様子だ。

具合の悪い者は身分の高い者たちばかりだ。彼らを囲むようにして近衛兵が付き添っているが、ジェニーの見るかぎり、近衛兵は彼らに声を掛けてはいるようだが、彼らの間を走り回る召使女たちをあちこちから呼びつけるだけで何の処置も取ってはいない。

ジェニーが床から身を浮かそうとすると、彼女を見張る近衛兵の槍の柄が彼女の首に近づいた。ジェニーが息を飲んで近衛兵を見ると、男が刺すような視線で彼女を睨みつける。

右隣にいるサンジェルマンを見てみると、彼は壁に背をあずけ、ぐったりと目を閉じた状態のままだった。髪の生え際が汗で濡れていて顔色も良くはないが、ジェニーが目にしたゴーティス王の状態ほど具合が悪くはなさそうだ。彼でさえ放置されているところをみると、彼と同じような被害者は多数いるのだろう。おそらく、王も、その被害にあった一人だ。

「――ジェニー様？」

厨房の方から両手に瓶を抱えて出てきた女が、ジェニーを見つけて声をあげた。彼女は、ジェニーの身のまわりの世話をする召使女だった。

「ジェニー様ではありませんか！」

ジェニーに駆け寄った彼女に、近衛兵が威圧的な口調で、さがれ、と言った。近衛兵が斜めに構える槍の後ろから、ジェニーは、彼女を見つめるしかない。

「これはまた……何があったのですか？　なぜジェニー様がこのようなめに？　どういうことです？」

召使女がジェニーと隣のサンジェルマンを見つめながら、心配そうに眉をひそめる。ジェニーはサンジェルマンを一瞥し、彼が目を開けようとしているのに気づいた。

「心配しないで。何かの誤解があるみたいなの。後でちゃんと説明

するわ」
「ですが、ジェニー様がこのような扱いを――」
「――ここで話をする猶予があるなら、具合の悪い方々を早くお助けしろ」
ジェニーたちがはっとして声のした方を見ると、サンジェルマンの薄く開いた瞼の下から、瞳がジェニーの方に動いた。あいかわらず、ジェニーを疑った目だ。彼女から目をそらさない。
「……早く行って」
ジェニーはサンジェルマンを刺激しないようにと思いながら、召使の女に優しく言った。彼女はその言葉に拒む様子を見せたが、ジェニーは彼女を安心させようと、あえて笑顔を浮かべた。
「行って、皆を介抱してあげて。……アリエルは、平気よね？」
「は、はい。私どもを手伝ってくれております。ジェニー様のお姿が見えないので案じておられました。侍医も料理番も倒れてしまわれていたので、ジェニー様も、と思われたようですが……ひとまずのご無事を伝えておきます」
「ええ、そうして」

召使女が去ると、サンジェルマンが再び目を閉じた。死ぬ危険性はなさそうだが、処置の一切をしていないために体の回復が遅いのだ、と、ジェニーは判断した。
「……王の安否はまだ確認できないのか？」
「は。そろそろ戻ってきてもよい頃かとは思いますが……」
サンジェルマンは焦ったように、階段の方を何度も気にしている。彼は、本当に王の身を心配しているのだ。あんな乱暴な王を。
ジェニーはサンジェルマンが胸に手を置き、何度も深呼吸する様を見つめた。
「――サンジェルマン、たくさんの湯冷ましの水と……厨房にあれば、水芥子（みずがらし）を彼に持ってきてもらって」
ジェニーが自分に槍を向ける近衛兵を示して言うと、サンジェル

マンが怒ったように鼻を膨らませた。
「何を言っている？　おまえの疑いが晴れるまで、そんなことをさせるはずがない」
「じゃあ、誰か他の人に持ってきてもらって。あなただって解毒処置をしなきゃ。だから、早く」
サンジェルマンの顔から急に表情が消えた。それから、彼は肩で大きく息をした。
「おまえが私の解毒処置をする、と？　何という、ばかげたことを」
「でも、サンジェルマン、早くしないと――」
ジェニーが彼の腕に手を伸ばそうとすると、彼の反応は素早かった。
「私に指一本でも触れるな！」
サンジェルマンの渾身の怒りが込められた叫びに、ジェニーは大きな衝撃を受けて口をつぐんだ。彼はジェニーの伸ばした手を一瞥し、彼女がいるのとは逆の方向に顔を動かして、目を閉じた。彼の全身が、ジェニーに対する拒否を表している。
ジェニーが力尽きてうな垂れた時、廊下の先から誰かが走ってくる靴音が聞こえてきた。サンジェルマンが王の安否を確認させようと階下に行かせた近衛兵が、ジェニーたちの方に向かって走ってきた。
「サンジェルマン様！」
近衛兵の男がサンジェルマンの前にひざまずくと、サンジェルマンの体に張りつめた緊張が走るのが、ジェニーにもわかった。
「王……は？」
サンジェルマンがようやく口にすると、近衛兵がぱっと顔をあげて言った。
「ご安心を、王はご無事です！　サンジェルマン様たちと同じ症状をみせてはおりますが、早期に適切な処置をされたらしく、今は落ち着いて休まれておいでです！　侍医の代わりに助手を呼んで、今は彼が傍らに付き添っております。サンジェルマン様、どうか、ご

安心を！」

「……そうか！」

サンジェルマンがかすれた声で言い、頭を壁につけて、目を閉じた。

「よかった、ご無事だったか……！」

彼の感極まった様子を目にすると、ゴーティス王が現実に命を確かに取りとめたのだと、ジェニーはいやでも実感した。そして、王が誰からの救出も得られずに命を落とすかもしれない、と、一縷の望みをかけていたことを、ジェニーはあらためて気づかされる。気が滅入る。

サンジェルマンがおもむろに目を見開き、一瞬の間の後、ジェニーの方を見た。どうにも腑に落ちない表情を浮かべている。

ジェニーは唇を噛み締め、彼を無言で見返した。彼は口を開きかけたが、しかし、何も言おうとしない。その代わり、彼は、ジェニーに向けていた槍先を近衛兵に降ろさせた。

「私は……何もしていない」

ジェニーが呟くと、サンジェルマンは眉根にしわを寄せて視線をそらし、ゆっくりと二度、瞬きをした。その視線は床の上でしばらく止まっていた。

ジェニーはサンジェルマンの青白い顔を見つめた。呼吸も落ち着いてきてはいるが、呼吸をする度に彼の胸が大きく上下する。

「サンジェルマン」

ジェニーに呼びかけられた彼が振り返る。

「湯冷ましの水と、水芥子をここに持ってきてもらって」

ジェニーがそう言うと、サンジェルマンが怪訝そうに彼女を見返した。

「早くして。解毒剤があればそっちの方がいいけど、きっと、それほどの量を用意していないんでしょう？　部屋にいる人たちにも飲ませてあげて。何の毒かはわからないけど死に至るほどの毒じゃなさそうだから、たぶん、それでずいぶんと回復するんじゃないかと

思うの」

しかし、彼女が説明しても、サンジェルマンの硬い表情は消えなかった。

「それが、本当に害がないと、なぜ言える？」

「少なくとも症状を軽くはできるはずよ。だから、サンジェルマン、なるべく早く処置をしないと」

「たしかに、王はご無事ではあったが……この騒動を引き起こした“原因”はまだ解明されていない」

彼はジェニーを上目遣いににらんだ。

「サンジェルマン？　私に、あなたたちに危害を与える理由はないの。私が信じられない？」

彼はそれでも表情を変えなかった。彼の頑とした態度には、ジェニーも泣き出したくなるくらいだ。ジェニーはやりきれなくなって、思わず息をつく。

だが、何とか彼を説得しようと、ジェニーは再び口を開いた。「聞いて、サンジェルマン」

「――サンジェルマン」

聞きなれない声が飛び、ジェニーは後ろを振り返った。大広間の入口から背中半分を廊下の方にのぞかせ、ジェニーとさっき目が合った男が、彼女を見て小さく微笑む。

「サンジェルマン……それを、私にくれ」

「――フィリップ様？　いけません、そんな不確かなものを！」

「大丈夫。水芥子の効能なら、私も聞いたことは、ある。今聞くまで思い出しもしなかったが――」

「いえ、フィリップ様、彼女はですね」

フィリップが苦笑しながら、サンジェルマンに首を振ってみせた。

「これは私からの願いだ、サンジェルマン。ここには毒消しが足りない。私はまだ軽症のようだが……医者もいないのだ、ほかの者たちのためにも、それを用意してやってくれないか」

サンジェルマンは納得しかねる様子だった。だが、彼がフィリッ

プに同意するより前に、ジェニーは床から立ちあがっていた。
「おい、待てっ！」
サンジェルマンの声が後ろで聞こえる。ジェニーは、さっき召使が出てきた部屋を目指し、駆け出していった。

第一部　4．復讐のとき－6

ゴーティスは朦朧とする意識の中で、銀色の剣のきらめきに目を奪われ、それが空気を切る音を聞いた。ついに人生が終わるのか、と、彼はきらめく光の眩しさに両目を細める。

うすれゆく視界の中で、ゴーティスは、細く流れていく赤い血と、ジェニーが両手で顔を覆って泣き崩れる姿を目にした。

やっと念願の目的を成し遂げたというのに、彼女の泣き声はとても悲痛だ。その声はゴーティスの胸ぐらを掴み、彼の心ごと激しく揺さぶる。

「……？」

――数秒後、ゴーティスは自分がまだ生きていることに、突然、気づいた。体全体が痺れていて、腹の底が押さえ込まれているような痛みはあるが、剣で斬られた時の鋭い痛みは感じられない。

一体、何がどうなったのか、すぐには理解ができなかった。

ゴーティスは自分のものでないような体を何とか持ち上げて右側に体重を移し、体勢を変える。体のすぐ横に、ジェニーに奪われた彼の剣が放り出されていた。誰かを斬ったとしたら刃に残っているべき、赤い血の染みは見えない。

それからジェニーに目を移すと、顔を覆う彼女の腕には赤く細い筋が一つ、はっきりと見えた。

彼女は、彼を殺さなかったのだ。

ゴーティスは困惑し、ジェニーをあらためて見つめる。

手をかけなかった？　だが……何ゆえに？

けれども、剣で刺されなかったと安堵しても、彼の死が遠のいたとは言えない。もしかしたらジェニーは、剣を使うより、苦しむ彼を放置して死に至らしめる方を選んだだけなのかもしれない。

息苦しさはさらに増し、今は咳き込むことさえ難しい。腹に当たる自分の腕も冷たい。

ゴーティスはジェニーを見つめながら、まだ死にたくない、と切実に願う自分に気がついた。父のように、毒によって死にたくない、とも思っていた。視界に映るジェニーの姿を失いたくない、と漠然と感じていた。

それでも、目を閉じ、息をしない方が数倍も楽だ。

まだ何も、まだ何もかも、やり遂げてはいないというのに――。

ゴーティスの意識が遠のきかけた時、不意に唇に温かい何かが触れた。直後、割れるような声が頭の上に響く。

「口を開けて、早く！」

ゴーティスが言われるままに震える唇を開くと、その温かな塊は彼の口をさらに割って入り込み、あっという間に喉の奥に突っ込まれた。彼が突然の息苦しさに襲われて身をよじると、その肉の塊は素早く、彼の喉からするりと抜け出ていく。彼は咳き込み、そのおかげで、新しい空気が喉を通り抜けるのを感じた。

「ゆっくり息をして！」

ゴーティスが急いで空気を体内に取り込もうとしていると、さっきの声がそれを遮った。ゴーティスはそれに従い、ゆっくりと息をする度に、体に精気が徐々に戻ってくる感覚を得た。

「口を開けて」

声はまたゴーティスに命令し、彼は反抗する気力もなく、口を開かされた。誰かの温かい手が彼の顎を支えている。

今度は彼の舌にぬるくて味のない液体が当たり、彼は否応なく、その液体を飲まされた。直後、どうしようもない吐き気が彼を襲い、彼はその不快さを口から一気に吐き出してしまう。一度胃から何かを吐き出すと吐き気は止まらず、彼はその後三度にわたり、胃の内容物を外に放出した。

嘔吐したせいで、腹と背中が痛かった。気分は信じられないほどに悪く、頭にも鈍痛があったが、体の中心にほんのりと熱が戻り始めている。ゴーティスの吐き気が治まると、乾いた布が彼の唇に当てられ、その周りが軽く拭われた。

「これを飲んで。水よ」
ゴーティスが椅子に背を預けていると、彼の頬に冷たい感触があった。ぼんやりとしながら目を開けると、顔に水差しが押し当てられている。
「な……？」
「それを全部飲んで」
彼が弱って抵抗できないのをいいことに、水は強制的に口の中に入れられ続ける。彼が途中で嫌がって顔をそむけても、誰かの手がそれを引き戻し、口を固定して水を流し入れるのだ。全部でどれぐらいの水量を飲んだのか知れない。途中で何回かは水を吐き出したが、ともかく、大量だ。
ゴーティスは、この不調が回復したら、こんな無礼を働く者は即刻処罰してやる、とはらわたが煮えかえる思いがしていた。だが、その無礼な対応に心底腹を立てつつも、それがジェニー以外の何者でもないと気づいて、ゴーティスは訳がわからなくなる。
水が喉の奥に入らなくなると、ゴーティスは大きな安堵の息をついた。肩や背中、腰が重くて痛いが、我慢できないほどではない。何より、苦しくても呼吸ができる。生きている実感がたしかにある。
それから、ゴーティスは両肩を掴まれて床をずるずると引きずられた。やっと止まった先では頭が持ち上げられ、ゴーティスはその不快さに小さく呻く。しかし、頭の下には柔らかな枕が準備されていた。彼がそこに頭をつけると、彼の体の上には毛織の毛布がふんわりとかけられた。あまりにも心地よい、安心できる感触だった。
ゴーティスは、目覚めないかもしれない恐怖で眠りに落ちたくはなかった。生の世界から去るかもしれないことになるのは、嫌だった。この視界を失うことが、怖かった。
まだ何もしていない、何もやり遂げていない……。
しかし、その意志に反して、彼の疲れた体はゴーティスをあっという間に眠りに引きずりこんでいってしまう。

◇　◇

複数の召使が寝泊りできるように寝台が並ぶ一室に、サンジェルマンを含む数人の患者たちが運びこまれていた。そのほぼ全員が腹痛に嘔吐、体に何らかの痺れを訴えており、呼吸を乱している。それら症状を引き起こした原因はまだ特定されていなかったが、ジェニーの勧めた処置がフィリップに効果的に働いたことに加え、侍医の助手も彼女の処方を承諾したことで、被害者たちにも同じ対応がとられていた。

ジェニーはアリエルから部屋で休むようにも言われたが、何かに集中していないと体がばらばらに壊れそうな気がして、彼らの看護をやめられなかった。ほんの一瞬でも、頭に何かを考えさせる余裕を与えたくなかった。

王の無事が確認できるまで気力で耐えていたのか、サンジェルマンには激しい腹痛がぶりかえしたらしく、彼は脂汗をかいて苦しがっていた。彼は自分を介抱しているアリエルをジェニーだと勘違いしているらしく、彼女が彼に嘔吐させる手伝いをしようとする度、彼女の手をはねのけている。ジェニーはそれを横目に見ながら、何も感じないふりをして、ライアンに水を飲ませ続けることに集中した。ただ、王とよく似たライアンの髪の色は、王にも多量の水を飲ませたことをジェニーに嫌でも思い出させる。苦々しく、身を切られる思いがする。

「……もう休まれよ、ジェニー殿」

ジェニーがはっと我に返ってライアンを見ると、彼が遠慮がちな視線をジェニーに注いでいた。

「私は平気だ。貴殿はずっと私たちに付き添っているではないか。貴殿に、このようなことをさせるわけには――」

ジェニーは頭の中の思いを振り払い、彼に急いで笑顔を作った。

「そんなことは気にしないで。私は適当に休んでいるわ、あなたは自分の体のことだけを心配して」

「しかし、貴殿は……王の元へ行かれた方が――」
「こっちの方が人手が足りないのよ。彼には専任の看護がついて、今は眠っていると聞いてるわ」
ライアンが戸惑ったようにジェニーを見つめたが、それ以上の反論はあきらめたようだ。
彼は、苦しがるサンジェルマンの方へちらりと一度視線を投げ、それから、ジェニーの包帯のまかれた右手を見た。うっすらと血がにじんではいるが、既に血は止まっている。
「……ちょっとしたはずみで切ったの。傷は浅いわ」
彼に傷ができた理由を問われたわけではないが、反射的に、ジェニーは彼にそう告げた。ライアンはその説明に特に疑問を感じたようでもなく、ジェニーの手にある水の杯に注意を戻す。

しばらくして、フィリップが部屋に戻ってきた。歩けるようになった彼は自ら、階上の寝室で介抱されている王やリヨン公、近衛隊隊長の様子を確認しに行っていたのだ。手下の者たちに先んじて動くその姿勢に、ジェニーは彼を高貴な王族らしくないと思った。事実、彼は目下の人々にも分け隔てなく、親切に接している。
「王はよく休んでおられる」
ジェニーとライアンの前に来て、彼は穏やかに笑った。
「あなたのとった最初の処置が適切だったようだ。王の御命を救ってくれたこと、私からも礼を言わせてもらいたい」
フィリップがジェニーに優しく笑いかける。フィリップに感謝されるのは、ジェニーには非常に複雑な気分だった。ジェニーは、サンジェルマンが興味を引かれて自分の方へ振り向くのに気がついた。
「そんな。礼には及びません」
「ああ、あなたはまだ若いのに、親切で聡明なだけでなく、謙虚な心の持ち主なようだ。王があなたにお心を動かされるのも無理はないのだね」
ジェニーは反論しようとし、アリエルの鋭い視線を感じて思い留

まった。ふと気づくと、彼女の隣で、サンジェルマンが何かを言いたそうにジェニーを見つめている。
「ここはもういい、ジェニー嬢、あとは召使たちで対応できよう。あなたは王の元へ行ってくれ。王が目覚めた時、王もあなたの顔を最初に見たいだろう」
「でも――」
「そこの女」
フィリップに呼ばれ、アリエルがジェニーを一瞥した後に、はい、と返事をした。
「こちらの副隊長殿の面倒も一緒にみてくれないか。彼は比較的落ち着いてきているから、そう大儀でもないだろう」
アリエルが了承し、落ち着かない様子でライアンを見た。

ジェニーは王と顔をあわせたくなかった。今、彼と顔をあわせれば、自分が彼に手を下せなかったことを、まざまざと見せつけられることになる。
階段をのぼっていくジェニーの足は、足かせをつけられているかのように重かった。先導をする近衛兵が時々、彼女の様子を気にして後ろを振り返る。
ジェニーはゴーティス王の命を奪えなかった。仇とはいえ、抵抗できない状態につけこむような形で手にかけることはジェニーの正義に反する、その一瞬の判断だけで。
そのうえ、彼から狙いを外しただけでは済まず、ジェニーは瀕死の彼を救う手助けまでしてしまっている。あんなに死んでもらいたかった彼なのに、あの時は、ジェニーにはそうするしか考えつかなかった。
ジェニーたちは二階の奥の部屋に到着し、見張りの近衛兵が室内に声を掛けた。それを見ながら、ジェニーは後ろにまわした手をぎゅっと握る。ジェニーの来訪が告げられると、王のいる部屋の扉は内側に大きく開かれた。室内から医務服を着た細面の男が顔を出し、

ジェニーを見て小さく黙礼した。侍医の助手なのだろう。男に招き入れられ、ジェニーは仕方なく、部屋に一歩足を踏み出した。顔がこわばるのは止めようがなかったが、その男はジェニーの緊張をどうやら都合よく解釈したようで、ジェニーを気の毒そうに見つめるだけだった。

部屋はきれいに片付けられていた。床にも汚れは残っておらず、室内には微かな花の匂いさえ漂っていた。ジェニーがあのとき座っていた長椅子の前にあるテーブルの上に、王の剣が臙脂色の鞘に納められ置いてあった。それを目にすると、復讐を遂げなかったことを王にあざ笑われているかのような気になる。

ゴーティス王は、寝台の毛布の中で静かに眠っていた。息をする度に上下する胸の動きがなければ、まるで死んでいるかのような穏やかさだ。乱れた銀色の髪に覆われた顔には、ほんのりと赤みが戻っている。

彼の無事な姿を直視すると、ジェニーの落胆はさらに深まる。あだ討ちをし、自由になる機会を自らの手でつぶしてしまったことを思い知らされる。一時の気の迷いで取り返しのつかないことをした、と、押し寄せる後悔にジェニーは負けそうになる。

「解毒剤も処方いたしました。休養は必要でございますが、もう心配はいりません。ジェニー様が初期に介抱されたことで王は助かったのでございます」

男は目を輝かせてそう言ったが、ジェニーはそんな言葉など聞きたくなかった。彼に、助かってほしくはなかった。この男は今頃は死んでいるはずだったのにと思うと、ジェニーの目には涙が押しあがってくる。

「こちらに！」

待機していた下男の少年が、ジェニーに寝台脇の椅子に座るようにと手でさし示した。涙が流れ落ちないようにと堪えながらジェニーが少年を見ると、彼までもが涙を浮かべ、同情した眼差しでジェニーを見つめた後、すぐに視線をそらした。侍医の助手でさえも、

ジェニーの様子に感動したように瞳を潤ませている。
彼らの目には、ジェニーは、王の無事を知って安堵している女と映ったにちがいない。
ジェニーは下男の勧めを断って、長椅子に腰をおろした。視線の先には、彼女が一度は手に取った王の剣がある。室内には侍医の助手と、十二、三歳の下男が控えているだけで、扉の外には近衛兵が一人。
――近衛兵に踏み入られる前に、眠っている王を襲うだけなら何とかなりそうにも思う。彼らは王の寝台近くでなにやら小声でしゃべっていて、ジェニーには注意を払っていない。王も今すぐに起きそうな気配ではない。行動に移すなら、今しかない。
心臓音が高鳴って耳が遠くなる気がした。もう一度行動を起こすなら、今だけだ。
臙脂色の鞘を凝視しているとそれが急にかすみ、ジェニーははっとして視線を外した。首の後ろに、微かに鈍い痛みがひろがっている。
――次にジェニーの視界に映ったのは、小さくて丸い、誰かの手の甲だった。ジェニーが目を上げようとすると、優しく耳に馴染む声がジェニーの名を呼んだ。
「気がつかれました?」
その声の主は柔らかく笑い、ジェニーが見つめると、ゆっくりと微笑んだ。アリエルだった。
「ジェニー様?」
ジェニーは自分の居る場所を確認しようと、室内を見回した。王が眠っていた部屋ではなく、もっと狭い寝室だ。部屋は、アリエルの持つ灯りがなければ何も見えないほど真っ暗だった。
「ああ――もう、夜なのね」
「ええ。このままお休みください。皆も今は落ち着いて、休まれておいでですわ。今日はあの騒ぎのせいで、さぞお疲れでしょう」

ジェニーは知らないうちに眠りに落ち、この寝室に連れてこられたらしい。ジェニーは二度目の、絶好の復讐の機会まで逃したことを知った。

「……ええ。そうね」

アリエルが微笑み、その手がジェニーの体を覆う掛布をそっと直した。

「ライアン様も回復されておいでですよ」

ジェニーはふと、アリエルが馴染みの深いサンジェルマンでなくて、ライアンの名を出したことに違和感を覚えた。そういえば、彼に関することとなると、アリエルはちょっと変な反応をする。

「――“ライアン様”？」

アリエルがまた、動揺したように少しだけ瞳を揺らす。

「アリエル、あなた、ライアン様と前から知り合いなの？」

「まさか、そんな畏れ多いこと！」

「知り合いではないの？」

アリエルの反応を妙に思ってジェニーが問うと、彼女は顔を赤らめて首を横に振った。

「違います。ライアン様は私をご存知ありません」

「それは……あなたの方は彼を昔から知っていて、“好きだ”ってこと？」

「まっ！？　ジェニー様！」

アリエルは耳まで真っ赤で、その真相を確かめるまでもなかった。

ジェニーは彼女が世の中の一般的な女たちのように恋愛感情を持っていると知り、何だかほっとした。それは、心のすさんだ今のジェニーをほんの一時でも和ませてくれる、嬉しい事実だった。

第一部　4．復讐のとき―7

ゴーティスの体は毛布の中で温かく保たれていて、久しぶりに熟睡をしたような妙な爽快感があった。青白い光が窓から室内に細く差し込み、別の方角には黄色い灯火らしき光が見える。今がはたして夜明けなのか、日暮れなのか、目覚めたばかりのゴーティスには判断がつかない。

おもむろに頭を上げようとして、ゴーティスは、予想外に自分の頭が重いことに気づいた。

「なに……？」

毛布から手を出し、ゴーティスは後頭部に手をそっとあててみる。

「王？」

沈黙していた空間から女の声が聞こえ、ゴーティスは咄嗟に全身を硬くした。毛布の中で、それまでの仰向けから横向きに姿勢を変え、声の聞こえた方向に問い返す。

「誰だ？」

「おお、気がつかれましたか、王……！」

目の前に現れた女はジェニーの侍女だった。心底嬉しそうに顔を輝かせ、ゴーティスを見つめている。

「おまえは、たしか……ジェニーの？」

「はい！　ご無事で何よりでございます、王！　ご気分はいかがです？」

「気分……」

ゴーティスは手を額に当て、ぼんやりと質問の意味を考えた。そして、自分の全身が痙攣して動けずにいた状況をすぐに思い出す。床の上で眠りに落ちてしまって以降、記憶がない。

彼が考えている間に彼女は他にも控えていた者を呼んだらしく、寝台横には医務服を着た男が駆けつけた。ゴーティスの侍医ではないが、いつも侍医の側にくっついている男だ。

「……おまえは？　侍医はどこだ？」
ゴーティスが尋ねると、男がちょっと困ったように女と顔を見合わせ、申し訳なさそうに切り出した。
「それが……あいにく、何らかの中毒と思われる症状により、床に伏せっている状態でございまして。未熟者ながら、急遽、私が王の処方をさせていただいた次第でございます」
突然にゴーティスの身を襲った異変は、どうやら他の者たちの間でも蔓延しているらしい。ゴーティスが男の説明に無反応だったせいか、彼がゴーティスの機嫌をうかがうように、おそるおそる尋ねた。
「王、ご気分はいかがでしょう？　どこか痛むところはございませんか？」
喉が渇き、体全体は何となく重かったが、痛む部分はない。そう答えようとして、何気なくアリエルを見たゴーティスは、急に胸を両手で締めつけられた気分に襲われた。彼女は彼に飲ませるための水を用意して待っていて、その姿が、彼が眠りに落ちる前に見たジェニーの姿に重なったのだ。彼女がゴーティスにとった行動に対する不可解さは怒りの感情を呼び覚まし、お互いに絡まりあって、ゴーティスの腹を不快に重くしていく。
「痛むところはない。――ジェニーはどうした？」
ゴーティスが起き上がろうとすると、アリエルが慌ててそれを止め、答えた。
「ジェニー様はご無事でございます。今は別室で休まれておりますが――」
「無事なことは知っておる。どこにおるのだ？　即刻、連れてこい」
「王、ジェニー様はずっと他の方々の介抱をされ続け、相当お疲れのご様子で――」
「それが何だ？　それが俺に対する何の言い訳になる？　俺が呼べと言うのだ、即刻、あやつをここへ連れてこい！」
「はい！」

アリエルが膝を曲げてお辞儀をし、ゴーティスに背を向けた。興奮したせいで、ゴーティスの全身がさらに重く感じる。不愉快な感情が見えない重りとなって体にまとわりついていた。

「いや、待て」

ゴーティスは寝台の上に起き上がり、去りかけたアリエルを止めた。彼女が振り返り、立ち上がろうとする彼を見て心配そうな表情に変わる。ゴーティスの体には安定した感がなかったが、床についた足はふらつかなかった。

「俺が直接に向かった方が早い。部屋に案内しろ」

「王、まだそのような無理をなさっては――」その助手の男の言葉は、ゴーティスが睨みつけると途中で消えた。

ゴーティスが部屋を突っ切ってテーブルの上にあった剣を鞘から引き抜くと、二人はぎょっとして目を見開いた。そして、その驚きはすぐに恐怖に取って代わる。ゴーティスはその場に凍りついたように立ち尽くすアリエルに向かい、再び告げた。

「ジェニーの元へ案内しろ」

「……はい！」

扉の外にいた近衛兵も、ジェニーの部屋の前にいた近衛兵も、ゴーティスが手に持つ剣に気づくと、一様に怯えと焦りの表情を見せた。近衛兵がよけた扉の前で、アリエルが扉の取っ手をつかもうと手を伸ばす。

「おまえはさがれ」

先に部屋に入ろうとしていたアリエルを止め、ゴーティスは彼女に扉の前からどくようにと顎でしゃくった。だが彼女は移動せず、遠慮がちな態度で彼に言う。

「王、せめてジェニー様をお起こしするまでは、私にご一緒させては……いただけませんか？」

ゴーティスは眉をひそめ、彼女を見た。彼の神経が高ぶっている様子に気づいた者は誰もが彼のやることに口を挟まないというのに、

彼女は彼の行為を途中で阻もうとする。まるで、彼女の主人ジェニーのように。

ジェニーへの新たな苛立ちが沸き起こり、ゴーティスは静かに剣先を上げた。

「さがれ」

ゴーティスが剣の先をアリエルの首に突きつけると、彼女は口をつぐみ、沈んだ表情に変わった。

「俺がよいと言うまで部屋に誰も入れるな。よいな?」

ゴーティスに睨まれた近衛兵は姿勢を正し、大きく返事をした。それを聞いてから、彼はジェニーの眠る部屋へと静かに入る。

扉が閉まったとたん、ゴーティスは暗がりの中で何かが動く気配を感じ取った。

部屋にはジェニーだけしかいないはずだ。

そう知る彼は、裸足の足が床で音をたてないように注意しながら、警戒を強めて中央の寝台へと近づいていった。天蓋からのカーテンが開いており、寝台の横にまわったゴーティスに、その上で膝を抱えて座るジェニーの姿が見えた。膝を抱える腕には包帯が巻かれていて、もう片方の手は首の後ろに置かれている。そのジェニーの膝の上で、彼女の頭が前後に揺れているのがわかった。

ゴーティスが動かずにいると、ほんの数秒後、ジェニーが顔を上げた。両手で顔を覆うような仕草をし、それから、不意に注意を引かれたようにゴーティスの方に振り向いた。目が腫れているようだったが、泣いていたわけではなさそうだ。そして、その顔は、今、起きたばかりのようではない。

虚をつかれたように、ジェニーがその場で全ての動きを止めた。

ゴーティスは彼女を視線でからめとり、目をそらさなかった。ジェニーも、おそらくは彼女の意思で、視線をそらそうとはしなかった。

ゴーティスは、ジェニーがどういった行動をとるかを見極めようとした。二人はしばらく、微動だにしなかった。

やがて、ジェニーの方が重苦しい沈黙に負け、喉の奥から搾り出したような声を漏らした。
「……助かったのね」
泣くのを堪えたような顔つきだったが、それは決して、ゴーティスの無事を喜んでいる形相ではない。彼女はゴーティスから視線をそらし、もっと大きな息をついて天井の方を見上げた。
「生憎だったな」
低い声でゴーティスがそう言うと、ジェニーは肩を揺らし、再び俯いた。
「――おまえのおかげで俺は命拾いをしたのであろう。俺は、おまえに礼を言うべきか？」
すると、ジェニーが激しい怒りともいえる表情を彼に向け、何かを言おうと口を開いた。だが、彼女は肩で息をして口を何度も動かすばかりで、言葉は音となって外に出てこない。
ゴーティスがついに彼女に近寄っていくと、ジェニーがはっとして寝台の上に立ち上がった。いつもの彼なら逃げようとする彼女に瞬時に飛びついて捕らえることもできただろうが、今のゴーティスにそんな反射神経はなかった。彼の伸ばした手から、ジェニーはやすやすと逃げ出した。
「無駄な抵抗はやめろ、ジェニー！　この部屋から外には出られぬぞ！」
怒鳴ると、ゴーティスの後頭部にきりきりとした痛みが走る。
「そうだとしても……そんな簡単に、殺されるわけにはいかないわ」
ジェニーが視線を左側に寄せ、ゴーティスは自分の右手にある剣を見た。
「なるほど、おまえを殺すのはたしかに、そう簡単ではあるまい。だが、その前に――おまえに尋ねたいことがある。こちらへ来い、ジェニー！」
ジェニーは部屋の奥で立ち止まり、左右のどちらに行こうかとゴーティスの出方をうかがっているようだった。

「何か知らないけど……訊きたいなら、今、そこで言ったらいいわ」
「は――何だと？」
後頭部の痛みは、怒りの熱と入れ代わる。
ゴーティスが右足に体重をかけると同時に、ジェニーが彼の左側に走りだした。ゴーティスの反応は遅れたが、部屋が狭かったことが彼に幸いした。必死に伸ばして飛びついた彼の手は、ジェニーのドレスの腰付近をやっとのことでつかみ取る。そして、体勢をくずした彼女とゴーティスはもつれるようにして床に転がった。

ゴーティスは通常時よりも自分の体をうまく庇えず、ジェニーの服の一部を握った状態で脇腹を床で強打した。とはいえ、二人が転倒したのは厚い敷物の上で、直接に石の床に接触した場合の衝撃には及ばないだろう。ただ、ゴーティスを襲った痛みは思いがけず強く、痛みが鋭い痺れと変わって全身に拡散し、数秒間、彼は口がきけなかった。おそらく、内出血している。
ゴーティスがぼんやりする頭を振り動かして右手を見ると、手の中には剣がまだ残っていて、刃の先は宙を向いていた。一緒に倒れたジェニーはというと、彼女は既に床に手をついて起き上がろうとしている。
「――逃すか！」
右手の剣が空を切り、立とうとしているジェニーの服の裾に突き立てられた。彼女が短く叫び、後ろに引っぱられそうになって危うく、前のめりで膝をつく。体勢を何とか保ったジェニーが焦った顔で振り返った。ゴーティスの視線と彼女のそれとが激しく牽制し合う。
ジェニーが再び立ち上がろうとし、彼女の服の裾を押さえる剣先が飛び跳ねて動いた。ゴーティスはそれを必死に押しとどめつつ、左肘を床について身を起こそうとしながら、彼女を見た。彼女が服の裾を無理に引っぱり出そうとしており、彼の剣先がいっそう大きく揺れる。ゴーティスはそれを取られまいと剣を押さえる手に力を

こめたが、それからほんの一秒もしないうちにいきなり、剣から彼の手に伝わる振動がなくなった。

「ジェニー！」

ゴーティスの隣から立ち上がった彼女は振り返りもせず、彼の剣先の下にはドレスの薄い生地の切れ端だけが残る。ゴーティスの口からはかすれた声しか出なくて、彼女を捕らえようとした手は空気を掴んだ。

「おのれ、小癪な……！」

ジェニーは入口の方へと走っていっている。ゴーティスはすぐさま立ち上がり、床を蹴ってジェニーを追った。体と頭が分離し、体だけが床に取り残されたかのような不安定さだ。後頭部から首にかけて不快な痛みを感じていたが、構わず、彼は走った。

やがて、歩幅と手の届く長さで彼女に勝るゴーティスは、彼女が逃げる方向を左に直角に変えたところで、彼女の手首を掴むことについに成功した。

「きゃっ……！」

ジェニーの腕を力任せに引き寄せると、彼女の体は弧を描いて軽々と飛び、ゴーティスの胸にぶつかって止まった。

「放して！」

「おお、放してやろうぞ！　俺がおまえの首をはねた後でな！」

ジェニーが口を結んで彼をにらみ返し、彼の手にある剣に視線をちらりと走らせた。

「俺の命を狙った者は誰であろうと、それがたとえ未遂に終わろうとも、全て死罪と決まっておる！　おまえがそれを知らぬとは言わせぬぞ！」

「もちろん知ってるわ！」

ジェニーが怒鳴り返し、なおもゴーティスを強い眼差しでにらみ返した。ゴーティスは彼女の手首をねじりあげ、近づいた彼女の顔面すれすれのところでその反抗的な瞳を見返した。彼女の手首に波

打つ鼓動がゴーティス自身のものと思えるほどに、はっきりと感じられる。

――ところがほどなく、ジェニーの目からそれまでの眼力が消え、そうかと思うと、ジェニーの唇が微かに震え、その両目が涙でにじみ始めた。

「……ほほう？　さすがのおまえも、死を目前にして怖くなったか？」

「違うわ、怖いんじゃない」

ゴーティスはむっとし、ジェニーの瞳を覗きこんだ。彼女は反抗するかのように潤んだ瞳で彼をにらみ返したが、すぐに彼から瞳をそらした。

「ふん、口では何とでも言えよう？　今更、強情なおまえが俺に命乞いをするとも思えぬ。否、されたとしても、俺はそれをきく気はない。全てはもう遅い、ジェニー！」

ゴーティスの言葉が終わらないうちに、堪えきれないというように、ジェニーの瞳から涙が流れ落ち、頬を伝っていった。そして、ジェニーの口から嗚咽に似た音が漏れる。

「もう、遅い――」

「何を今さら！」

ゴーティスは苛立って怒鳴り、ジェニーの肩をぐいっと引き寄せて彼女の鼻先に口を近づけ、声を低くして言った。

「俺はおまえのように躊躇などせぬぞ？　俺自らの剣で裁かれることを最後の誉れとして、死にゆくがいい」

だが、ジェニーは両手で必死にゴーティスの胸を押し、そこから逃れようと左右に身をよじる。

「悪あがきはよせ！　全ては、おまえがあの絶好の機会に無用な躊躇をし、俺を殺し損ねたが所以(ゆえん)だ！　いさぎよく、腹を決めぬか！」

ゴーティスから顔をそむけたジェニーの頬が涙で濡れて光っていた。ジェニーが肩で大きく息をし、なおもゴーティスの腕から逃れようともがく。ゴーティスはかっとして怒鳴った。

「今さら後悔したとて遅い！」
「ええ、遅いわよ！　よくわかってるわ！」
振り返って怒鳴ったジェニーの顔は、頬全体が涙で濡れていた。
「私がどんなに後悔しているか！　あの時、あなたを剣で突かなかったことをどれほど後悔しているか……！」
「ならば、何ゆえにそうしなかった！　おまえが俺を倒せる機会などそうそうないというに、あの絶好の機をおまえが自ら逃すなど――ましてや、俺を助けようなど！　おまえに何らかの意図があるとしか思えぬ！　俺に恩でも売りたかったのか？　それとも、俺の命を救うことで周囲を味方につけ、逃亡の手引きでもさせるつもりだったか！　何の意図があって俺に手をかけなかった！？」
ジェニーは顔を左右に激しく振りながら答えた。
「意図なんかない！　私はただ、できなかったのよ！」
「は、よもや、俺の哀れな姿に同情したと言うのではあるまいな？　それこそ笑止！　あの時のおまえには殺気があった、俺はそれをよう知っておるぞ！　おまえの待ち望んだ復讐の機会を逃してまで俺を斬らず、命を救ったことに、何の意図もないなどと――」
「私はできなかったの！」
ジェニーが唇をゴーティスに近づけて叫び返し、その両目からは大粒の涙がこぼれ落ちた。
「あなたが私にしてきたことを思えば、あなたが王であろうが何であろうが、私は本当に刺すつもりだった！　ひとおもいに殺したかった！　だけど、できなかった！　私があなたに剣を向ける機会なんて、この先に二度とないかもしれないのに！　私はずっとあなたの命を狙ってきたのに……！」
「では、何ゆえ！」
ゴーティスは彼女の胸ぐらをつかんで挑発するように揺さぶった。
ジェニーは唇を激しく震わせて泣きながらも彼の視線から目をそらすことはなく、それが彼をますます腹立たせる。
ジェニーが一際大きくしゃくりあげ、辛そうに息を大きく吐いた

後に言った。

「……私は……私は、そこに苦しんで倒れている人を見て――それがあなたでも――抵抗できない状況につけこんで手をくだすような卑怯な真似は、私には……私は、どうしてもできなかったのよ！」

後悔してもしきれない、とジェニーが涙と嗚咽で声を詰まらせた。

「それを――俺に信じろというのか！」

見え透いた言い訳を、と彼女の震える肩を見ながら、ゴーティスには怒りと深い失望感が生まれてきていた。

どこの誰が、憎き仇が目の前に倒れていながら、一度突きつけた剣を納めようとするのか。勝ち戦を自ら放棄しようなど、背後に何らかの策略がある以外に考えられない。もしそこに策略がないのなら、その者はただ、愚かなだけだ。

彼は、苦々しい思いで目の前の彼女を見つめた。不快な鈍痛がゴーティスの頭の半分ほどを蝕んでいる。

彼女は、昨夜以来ずっと“本気で”泣いているらしい。この部屋でゴーティスが最初に見たときからジェニーの目は腫れてはいたが、その泣きようでは目の腫れはさらにひどくなりそうだ。

――急に、ゴーティスは、そこで泣いているのは彼女でなく自分なのだという不思議な錯覚に陥った。ゴーティスは、即位する直前に母親を断罪しなければならない状況に陥って、彼女を斬首刑にした夜、独りで部屋にこもって泣き明かしたことを不意に思い出した。彼と母親は良好な関係にあったとは言い難いが、それでも、胸がえぐられ、吐き気までもよおす苦い思い出だ。

ここ数年間に一瞬でも、あの夜の事が頭をよぎったことは一度もないというのに。

ゴーティスは無意識に手の力をゆるめたらしく、それによって体を支えられていたらしいジェニーの体が彼の足元に滑り落ちていった。だが、彼の手から自由になっても彼女は顔を手で押さえて泣くばかりで、床から立ち上がろうともしない。

愚かな彼女は、昨夜からずっと、泣いている。

ゴーティスが床にひざまずき、泣いているジェニーの顎をその手でとらえると、彼女の瞳に動揺が走った。
「おまえは――優れた兵士にはなれぬな」
ゴーティスがそう呟くと、彼女が困惑したように見返した。
「……兵士になどならないわ」
ゴーティスが小さく頷くと、彼女が怪訝そうに彼を見つめた。
「俺への復讐も無理だ」
ジェニーはそれには答えず、ただ口惜しそうにゴーティスに泣き腫らした目を向ける。
「昨日のような機会は二度とない。俺への復讐はあきらめろ」
ジェニーが何かを言おうとしたが、それより先にゴーティスの手が彼女の顎から頬に動き、彼女の体はびくりと震えた。
「その代わり――」ゴーティスが膝を少し寄せると、ジェニーが必死の形相で彼を見上げた。ゴーティスは彼女に顔を近づけ、その瞳を捕らえた。
「――その代わり、ジェニー、俺を愛するがいい」
ジェニーの顔に混乱が広がり、ゴーティスはそれまでずっと右手に保持していた剣を床の上に置いた。
「俺を愛せ」
ゴーティスが両手でジェニーの頬を挟むと、彼女が大きく瞳を見開いた。
「何を……言ってるの？　私はあなたを憎んでるのに、そんなこと――そんなこと、できるわけがないじゃない……？」
ジェニーの瞳が揺れている。
「……憎しみを持てる者は愛情も深いという。俺を愛せ、ジェニー」
ジェニーが、彼の言葉に弾かれたように叫んだ。
「嫌よ！　そんなの、命令されることじゃない！」
その返答で、ゴーティスは、彼女が彼女自身の正義を貫いたために彼を殺さなかったという彼女の一連の言葉が、全て真実だったの

だと瞬時に悟った。愚かなほどに真っ向な人間がまだ存在していると知り、胸に押し迫ってきた熱い想いで、ゴーティスは胸が貫かれる。

「ゴーティス王、私は――」

「それでも、愛せ」

ゴーティスがジェニーの首に手をずらすと、殺されるとでも思ったのか、彼女が観念したように目を閉じた。その閉ざされた瞼の上にゴーティスが唇を押しつけると、唇ごしにジェニーの肌の熱が伝わってくる。この感触を失いたくない、と気づく。

彼女の揺らすまつ毛が唇に触れる微かな感触があり、ゴーティスは、後頭部の頭痛が嘘のようにひいていくのを感じた。片手をジェニーの首の後ろに伸ばして抱き寄せると、彼女の身がゴーティスの腕の中で、固く縮んだ。

「俺は――おまえを愛せるように思う」

第一部　5．王の子－1

誰かが扉の外で話をしているらしく、サンジェルマンは現実と夢の世界を行きつ戻りつしていた瞼をあげて、細く開かれた扉の隙間から覗く廊下を見やった。彼は召使部屋に居て、彼同様に解毒処理を受けた数人もその疲れきった体を簡素な寝台の上に横たえている。彼の斜め向かいにある寝台にはライアンが場所をとっていたはずだったが、いつのまにか、ライアンの姿は既に消えている――。

狩りから戻って以来、何度も繰り返し見た夢から覚め、サンジェルマンは視線の先にある自室の扉を眺めた。それが今にも外側から押し開けられるように感じて彼はその瞬間を待ってみたが、現実の扉はぴったりと閉まっていて、小さく揺れることすらしない。

昨日になってやっと、王の従兄弟であるフィリップが王城を発った。彼も王と同様に中毒事件に遭遇し、その後の体調は悪くなかったが、大事をとって帰城後一週間を王城で過ごしていたのだ。王の叔父ラニス公一家の者は王を恐れて王城に近づきもしない、と密かに陰口をたたかれていたというのに、フィリップは一週間も王城に滞在して皆を驚かせたばかりか、ぎこちないながらも王と会話を成立させて、皆をさらに驚かせた。

フィリップの穏やかで優しい性格は、常に緊張感を漂わせる王城のとがった空気を変え、人々の気をほぐし、癒してくれた。彼のせいだけでもないだろうが、彼が王城にいた間は王も比較的静かで声を荒げることはなかったので、城内はいつもより和やかな雰囲気に保たれた。

フィリップはまた、王や彼自身を救ったジェニーの存在とその活躍を城中に広める役割も同時に果たした。事件のことでフィリップが彼女にひどく感銘し、感謝しているのは誰の目にも明らかだった。休養しているとされたジェニーとフィリップの再会は彼の滞在中に

ついに叶うことはなかったが、彼は、何らかの形で彼女に感謝を表す旨を王に約束した。王はフィリップがジェニーの話題を持ち出すたび、困惑を含んだ憂いを瞳にのぼらせ、彼の話を黙って聞いていた。

王の様子が普段とどことなく違うとサンジェルマンが最初に感じたのは、彼らが王城に戻り、王に、複数の者を襲った毒をジェニーが用意したかもしれない可能性を伝えたときだ。王はまじまじと彼を見つめて首を傾げ、その可能性は低いだろう、と一言返しただけだった。

事実、王のその発言は数日後に証明されたのだが、王のそのときの不可思議な様子はサンジェルマンの心にどうにも引っかかり、フィリップが滞在している期間のおとなしさも不気味だった。王の何がどう変だと明確には説明できないのだが、強いて言うならば、王の持つ雰囲気、なのかもしれない。

サンジェルマンが寝床から起き上がって階下へ降りると、朝日が白く眩しい光となって部屋の床を照らしていた。狩猟の館を発った日と同じ、明るい朝だ。おはようございます、と下働きの女がサンジェルマンに挨拶をし、朝食を用意するかどうか、彼に尋ねた。彼は女に頷く。

「ああ――いや、やはりいい。向こうの食堂で食べる」

サンジェルマンは考え直してそう返事をし、一度出た自室へと足を戻した。

あの日、サンジェルマンが狩猟の館で遊戯室にふらりと入った出発の日の朝、前日は確かにそこに無かったはずの剣が壁にきちんと戻されていた。彼が大広間を掃除していた召使を大慌てでつかまえて尋ねると、女は少しだけ安堵したような笑みを見せて、

「はい、椅子の下に転がっていた剣なら片付けました」

と、彼に答えた。女ののんびりした口調に嘘の匂いはなかった。

剣は誰かが手に取ったのかもしれないが、ジェニーが持ち去った

のではなくサンジェルマンが見つけられなかっただけで、ずっと部屋にあったのだ。

ジェニーの言い分を聞こうともしなかった事を思い出すと、彼は、早く謝罪せねば、という気持ちになる。彼女は王に毒を盛りはしなかった。彼女の言葉どおりに、彼女は何もしなかった――それどころか、王の命を救い、皆を救っている。騒動の夢を見るくせにジェニーの姿が現れないのは、サンジェルマンが彼女に対して申し訳ないと思う、その裏腹なのかもしれない。

サンジェルマンは自室の収納棚の奥深くに手を伸ばし、重ねられた服の下に隠しておいた古い短剣を引っぱり出した。しばらくは必要性を感じず、彼が放置しておいたジェニーの短剣だ。剣の鞘の凹凸を指で確かめながら、必要性はともかく、やはり、彼女の素性を調べてみたい、と彼はあらためて思う。

彼は短剣を服の中に滑りこませ、部屋を出て階段を降りた。彼の住む棟を出ると、夏が近づいて緑に覆われた地面が目の前に広がる。

夜勤明けの近衛兵の朝食時間としては早く、日勤の者たちは自宅や宿舎で食事を済ませて城にやって来るため、食堂には誰一人としていなかった。しかしそれは、サンジェルマンが予測していたこと。彼は、その閑散とした空間で、誰にも邪魔されずに物思いに耽りたかったのだ。

彼とはすっかり顔なじみである召使が彼のために食事を温めてくれており、隣室から漂ってくる肉の脂の匂いが食堂の空気を次第に濃厚に変えている。食事が用意されるのを待つ間、サンジェルマンは懐から取り出した短剣をあらためて眺めた。

ジェニーによると、彼女の家には剣が何本か備えられ、家族全員が剣を扱えるそうだ。私はまだちゃんとした剣を持たせてもらえずに短剣をもらったけれど、どこかで失くしてしまった、とジェニーはいつか残念そうに言っていたが、護身用に親から渡されたという短剣をまさかサンジェルマンが持っているなど、彼女は思いもしな

いだろう。
「――サンジェルマン？」
突然に名を呼ばれて顔を上げると、食堂の入口からライアンが顔を出していた。
「ライアン殿」
彼はがらんとした食堂を見渡し、サンジェルマンの方に向かって歩いてきた。
「今、食事か？」
「ええ」
サンジェルマンが頷くと、彼は疲労を色濃くにじませた顔をおざなりに笑顔に変え、サンジェルマンの対面に座った。帰城して以来、彼を城の敷地内で見かけることはあったが、しっかり顔を会わせるのはこれが初めてだ。彼は常に身なりをきちんとしている人間だが、ここ一週間は極めて多忙で身の回りを気にする時間がなかったらしく、顎に金色の髭が薄く生えている。サンジェルマンが見ていると、彼は視線を上げた。
「例の騒動についての調査報告を聞きましたよ。お手柄でしたね」
サンジェルマンが微笑むと、ライアンは渋い顔をして首を横に振った。
「そうでもない。結果的には原因が究明できたから良いようなものの――中毒の理由が判明したきっかけは、近衛の一人が規律に反して勝手に飲食したことによる。本人も被害を受けて苦しんだらしく反省はしているが、他の者に示しがつかない」
「でも、近衛隊は事件を解明されたのですから」
「いや、それより……真の功労者はあの彼女だろう。王の御命も救った、ジェニー嬢。ここ最近、皆の間ではその話で持ちきりだ。彼女については私もよく知らぬが――その、何やら一風変わっているように私も感じたが、少なくとも、彼女は皆を平等に、献身的に介抱していた」
ライアンは頬を指で掻きながら、決まり悪そうに笑みを浮かべる。

彼は人を褒めることが苦手な人間だから、それが彼なりのジェニーへの精一杯の賞賛なのだろう。
サンジェルマンの食事が運ばれてきて二人の会話は中断した。

給仕がライアンの杯に水を注ぎ始め、サンジェルマンはそれまで膝の上に置いていた短剣を再び懐に入れようとした。
「――それは？」
サンジェルマンが手を止めてライアンを見ると、彼が、興味を引かれたように短剣を見つめている。
「ああ、これは……」
「きみの物ではないな。どうしたのだ？　ずいぶんと古そうな短剣ではないか」
サンジェルマンは短剣についてあまり追求されたくなかったのだが、仕方なくそれを服の間から戻し、テーブルの上に置いた。
「これは私が偶然に拾ったのですよ。持ち主がわからないのです」
「拾った？」
ライアンは疑わしそうに眉をひそめて短剣を手に取り、それをひっくり返して紋章が彫られている裏側を見た。そしてすぐ、納得のいった表情に変わる。
「ああ、なんだ、これはベアール家のものではないか」
「ベアール家？」
サンジェルマンがおうむ返しに問うと、ライアンは笑みを浮かべて頷いた。
「この紋章はよく覚えている。家紋に剣の図を使うなど、いかにもあのユーゴ殿がおられる家にふさわしい模様だと思った記憶があってな」
「では――毎年の剣技大会で模範試合をする、あのユーゴ殿のベアール家？　……本当に？」
サンジェルマンが戸惑って問うと、ライアンが不思議そうに彼を見返し、再び頷いてみせた。

「本当だ。確かめたいのなら、近衛隊にいるベアール家の者に尋ねてみてもいいが？」
「あ……ええ」
サンジェルマンは混乱して、ライアンの持つ短剣を見つめた。
「ベアール家……？」
「もしくは――」と、ライアンが再び口を開いたので、サンジェルマンは顔を上げた。
「来月まで待てば、そのユーゴ殿が剣技大会の事前準備で城にやって来る。その際に本人に直接尋ねたらどうだ？　彼はベアール本家の者だ、何かしらの情報が得られるだろう」

◇　◇

ジェニーが後宮に戻ってから一週間以上たつが、ゴーティス王は彼女の部屋に一度も姿を見せていない。それはそれで心情的には助かったが、ジェニーには休養が必要だと女官長が後宮中に宣言してくれたおかげで訪問者もなく、ジェニーは、毎日の有り余る時間に余計なことばかりを考えてしまっている。
女官長は彼女がサロンに出ることさえ最初は禁じたのだが、アリエルが主人のためにと女官長を説得し、許可をとりつけてくれた。ここにすら出られないとなったら、ジェニーはきっとおかしくなっていたに違いない。
ジェニーが中庭に面する壁の方へ近づくと、中庭を横切って歩いてくるサンジェルマンと衛兵に気づいた。彼の顔を見るのも帰城して以来初めてだが、今は何となく、気まずい。ジェニーはサロンの奥へとさりげなく移動した。
ゴーティス王と顔を会わせない日々がその後も続いた。アリエルは城の近況をよく知らせてくれていたが、近頃では、サンジェルマンから得た情報も持ってくる。

王を狙った暗殺未遂事件と疑われた騒動は、近衛隊が彼らの威信をかけて調査をし、ジェニーたちが帰城して数日で、王専属の料理班が有毒な野草を高級食材と勘違いし、王や客の食べる料理に混用したことに起因すると突き止めた。王を死に目に遭わせた、単純な不注意ながらも赦されない罪に問われ、食材手配担当から料理班を派遣した料理長まで全員が死罪または牢獄行きとなったそうだ。

騒動の顛末を知ったジェニーは、王への復讐に失敗して逆に救出してしまった事実や王の不可解な告白を次々に思い出した。首をはねてやる、と息巻いて激昂していた王の瞳が、思いつめたように揺れる眼差しに変わって自分を見ていたことを、ジェニーはつい昨日のことのように覚えている。

彼の行為は、ジェニーの頭を混乱させる。

ジェニーは、自分があれこれ考えすぎていると自覚していた。それは繰り返し身にふりかかる事件のせいであり、体調が不安定なせいであり、頭の中に踏み入ってくる、あの王の緑色の瞳のせいだ。

重いため息をつき、ジェニーがサロンと中庭を遮る壁にもたれて向かいの棟をふと見上げると、二階の一室の窓際にゴーティス王の姿が垣間見えた。室内にいる誰かと話をしているようで横顔しか見えないが、その様子からすれば、もうすっかり回復しているようだ。ジェニーは彼から視線をそらした。

少しして、ジェニーが再び向かいの棟に視線をやると、窓枠に手をかけ、おそらくはその少し前から自分を見ていた王の姿に気づいた。ジェニーに気づくと、王は窓から体を離し、室内の方へと姿を消してしまう。彼女の位置からは彼の表情がよく見えなかったが、苛立っていたようにも見えた。

ジェニーはサロンの奥に進みかけ、だが、なぜか再び後ろを振り返って、向かいの棟を見上げた。王の姿はまた窓辺に戻り、ジェニーを見つめている。ジェニーの視線に気づくと、彼は少しだけ顔を傾けた。微笑んでいるようにも見えた。

ある夜、深夜に寝苦しくて目を覚ますと、ジェニーは首まわりにじっとりと汗をかいていた。体の節々が火照り、体中の感覚が鈍い。精神的に疲れているせいで、また微熱が出たのかもしれない。

体調が悪化したら夜中でも召使を呼びつけるようにと女官長からは再三言われていたが、ジェニーは寝台の横に垂れ下がっている召使呼び出し用の紐を眺めながら、その後の大騒ぎを予測して、その考えを打ち消した。これ以上、皆からの余計な注意を引きたくない。

梟か鳩か、哀しげな鳴き声が遠くで響いていたが、普段と同じく、夜の闇には他の何の音も混じっていない。ジェニーは顔を両手でごしごしとこすり、勢いをつけて寝台の上に起き上がった。肩が張って頭も熱っぽいが、動かずにいられない。

見えない誰かの手に導かれるように、ジェニーは久しぶりの地下の階段を後宮の奥深くへと下っていった。地下牢に真夜中の巡回があるとは聞いていたが、それが彼女の足を止める障害にはならなかった。最近の自分の身に起こった全てをかなぐり捨て、自由になりたい。地下に辿り着けば全てが解決するのだという、脅迫観念にも似た感情がジェニーの背を後押ししていた。

けれども、地下牢に続く入口を目前にして、ジェニーはさすがに二の足を踏んだ。石壁に耳をぴったりとあて、壁の向こう側での音の有無を念入りに確かめる。彼女の歩んできた道を振り返るが、そこには真っ暗闇しかない。自分とケインの再会の妨げとなりえそうな状況はない。ジェニーは息をつき、出入口を隠してある石段をずらした。

地下牢側の秘密の出入口に頭を出す前に、ジェニーは出入口を塞ぐ木板に耳をあて、神経を集中した。何の音も聞こえない。ジェニーは息をゆっくりと吐くと、木板に手をかけた。

「――ジェニー？」

出入口のすぐ近くで囁き声がし、ジェニーはびっくりして今にもしりもちをつきそうになった。

「ジェニーだね？」

今度は少し大きな、男の確かめるような声がし、ジェニーはそれがケインとわかって胸をなでおろした。
「ケイン？　そこにいるの？」
「いるよ」と、一瞬の間の後、ケインの柔らかく変化した声が返ってきた。
ジェニーが急いで木板を外すと、反対側からジェニーを覗く、ケインの黄色く光る瞳が縦に二つ並んで見えた。ジェニーが明かりを持ち上げて光の中に現れた彼と目を合わせると、彼の瞳は嬉しそうに笑った。
「待って、今、そっちに出るわ」
彼が首を振った。
「いや、だめだ、今日はまだ看守が来ていないんだ。そろそろ来るだろうから、きみは来ちゃいけない」
ジェニーはがっかりし、大人ひとりが屈んでやっと通り抜けられる壁の穴から、中腰の姿勢で彼を見た。
「せっかく……やっと、会えたのに」
ジェニーが言うと、ケインが横向きからうつ伏せに体勢を移し、地下牢の弱々しい明かりが彼の背中越しにジェニーの方に射した。彼の瞳がジェニーを優しく見つめている。
「私もずっと会いたかった。本当に、久しぶりだね」
ケインの視線がジェニーの目から少し下に動いたが、彼はただ微笑んで、言った。
「何回か、きみのところへ行ったんだ。でも、なかなか、うまく会えないみたいで――」
「私も何回かここに来たの、でも、あなたはどこかに行っていて――」
ケインが愉快そうな笑顔に変わる。
「やっときみに再会できて、嬉しいよ」
彼のうわずった声は、その言葉の字義どおり、本当に嬉しそうに聞こえた。彼の笑顔につりこまれてジェニーも笑った。

「ジェニー、実はいい知らせがあるんだ。私は最近、地下水路に通じる道を発見したんだよ。ほら、水道というのは城外から水を引き入れているよね？　だから、城外に達する水路を見つけてそれを伝っていけば、ここから抜け出ることも理論上は可能なはずなんだ。そう聞くと、なんだか希望が湧いてこない？」

ケインはそう言って瞳を輝かせ、屈託のない笑みを向ける。

「ただ問題は、水路は複雑に入り組んでいて、幅が狭すぎて通れない水路もたくさんあるんだということ。でも、心配しないで。私が今、必死に経路を探しているから。時間がかかっても、必ず見つけ出してみせるよ」

ケインの説明に感極まり、ジェニーは胸が詰まる。彼の示した脱出方法には確証はないが、ジェニーの今の状況から脱却できる、小さいが眩しい光の出口が見えた気がした。近頃は気の休まることがなかったジェニーは、ようやく安堵してため息をついた。

「――どうしたの？　嬉しくない？」

眉根をひそめて、ケインがジェニーに訊く。その表情は誰かに似ていたが、ジェニーにはその人物までを特定できなかった。

「ううん、嬉しいわ。一刻も早く――私はここから脱出したい」

あまりにも実感のこもった言い方に引っ掛かったのか、ケインが心配そうに顔を曇らせ、ジェニーに顔を寄せた。

「……何かあった、ジェニー？」

「えっ？」

「きみはとても悲しそうな顔をしているよ。何か、あったの？」

ジェニーは王の命を奪い損ねたことを話したかったが、彼が城からの脱出を図る囚人とはいえ、事の重大さを考えると躊躇わずにはいられない。

「秘密は守るよ。それに、私がきみ以外の誰に話すって言うんだ？」

ジェニーが思わずくすりと笑うと、ケインもつられて笑った。ジェニーは大きく深呼吸し、毒による一連の騒動から、王を殺し損ねて彼を救出したことまで、王の告白を除く全てを彼に吐露しようと

決めた。

ケインは真剣な面持ちでジェニーの説明に耳を傾けていた。が、彼女が王に剣を向けたところに話がさしかかると、彼は彼女の予想した以上に衝撃を受けた反応を見せた。彼の驚愕した表情を目にした瞬間、ジェニーは口から出してしまった言葉を飲み込んでしまいたいと悔やんだほどだ。その後すぐ、彼はジェニーを励ますように微笑み、精一杯の同情を言葉で表した。

「だから、一刻も早くここを脱出したいんだね」

だが、静かなケインの口調は、なぜか彼から責められているようにも聞こえ、ジェニーの胸に突き刺さる。ええ、とジェニーが無理に頷くと、ケインが妙にさみしそうに微笑んだ。

「きみが王に手をくだそうとしたことを、皆は知らないんだね？」

「ええ。知られていたら、私はこの世にはいないわ」

「それはそうだ」

ケインはジェニーから視線を外し、何かを考え込むように黙った。ジェニーは自分の告白が彼にもたらした影響の大きさを測りきれず、どうしたらよいかわからなかった。少ししてジェニーを見返したケインは、頬をやや強張らせていた。

「――なぜ、王はきみを咎めなかったんだろう？」

「それは、私にもわからないわ」

と言いながら、ジェニーは王の“俺を愛せ”という囁き声と頬にかかる彼の吐息の温かさを思い出した。

「私が彼を助けたからかも……。でも、あの人の本音はわからない」

ケインは何の返事もせず、ジェニーを思いつめた瞳で見つめていた。ジェニーが視線を合わせると、彼の視線が時々、下の方へと移動するのに気づく。彼が自分の唇を見ているのだとわかったのはそれからすぐだ。ジェニーがおずおずと身を乗り出そうとすると、ケインもゆっくりと顔を寄せた。黄色に見えた彼の瞳は、近づくにつれて薄い緑色だというのがわかる。

ジェニーが目を閉じようかとしたその時、ケインが弾かれたように体を離した。

「巡回だ！」

二人が耳をとぎすませると、遠くの方から微かな物音が聞こえてきた。ジェニーが彼を見ると、ケインが硬い笑顔を返した。

「近いうちに会おう。きっと！」

ケインの名残惜しそうな顔にジェニーは何度も頷き、出入口を隠す板を壁に戻した。

第一部　5．王の子－2

ある日の朝、王の執務室へ向かう前のひと時にサンジェルマンが女官長の部屋で彼女と話をしていると、二人がいる部屋の扉をたたく者があった。皆が忙しくしているこの時間帯に、女官長が誰かの訪問を受けることはほとんどない。彼が女官長をみると、彼女は、わからない、というふうに肩を小さくすくめてみせた。

「どなた？」

女官長がサンジェルマンの顔を見ながら部屋の外に声をかけると、彼も知る女の低い声が返ってきた。

「アリエルです。お忙しいとは存じておりますが、お知らせしたいことがございまして」

アリエルの返事を聞くと、女官長はそれまでの笑顔を一瞬で消し、次の瞬間には普段のとりすました面に変わった。そして、サンジェルマンを仰ぎ見て、入室の是非を問う。

サンジェルマンは、ジェニーに謝罪する機会を作るために一役買ってくれたアリエルとの思わぬ再会を前にし、胸中が急にざわつき始めるのを感じた。少し前のことだが、アリエルに会うことを口実として、サロン越しに彼はジェニーと直接言葉を交わし、率直に自分の非を謝罪して許された、という経緯がある。

彼が女官長に頷くと、彼女は尊大な口調でアリエルに入室を許可した。

「お入り」

扉を開けて室内に入ってきたアリエルは、室内にいたサンジェルマンを見てわずかに動揺したようだった。

「これは、サンジェルマン様？　お話し中でしたか、大変失礼いたしました」

「いや、もう終わるところだ。それより――こんな時間に来るとは、ジェニー嬢に何か変わったことでも？」

「あ、ええ」と、アリエルは素早く笑顔を浮かべて彼に答え、女官長に振り向いた。「ジェニー様に風邪のような症状がみられまして。昨夜より食欲も落ちておられるようで、朝食を軽いものに変えるよう、厨房に伝えておきました。朝食後には侍医が来てくれるそうです」

アリエルが黒目がちな瞳をサンジェルマンに向け、人のよさそうな微笑みを浮かべる。二人が偶然に再会した前回、中毒騒動の際にジェニーを犯人扱いして申し訳なく思っている、と、サンジェルマンがつい口を滑らせたのと同じ笑顔だ。彼はそう漏らしたことをその場で後悔したのだが、ジェニーに直接謝罪したらどうかと彼に勧めたのはアリエルだ。それに、彼とジェニーの仲が誤解されないようにと、いかにもアリエルに用事があるように装うことを提案したのも、彼女だった。

女官長がジェニーに同情的な言葉を言い、続けてアリエルに何か指示を与えていた。女官長の頭の向こうで、頭一つ分背の高いアリエルが彼女の言葉に真摯に耳を傾けている姿勢は、見ていてとても好ましい。

「王には彼女の具合を伝えておきませんとね」

女官長がサンジェルマンに振り返ったので、彼は同意して頷いた。

「王も彼女のことは気がかりだろう。彼女が十分に養生できるよう、お二人で取り計らってくれ」

サンジェルマンがアリエルに向くと、彼女は軽く頭を下げ、穏やかで柔らかな笑みを彼に再び返した。

平穏な日々が過ぎて月が変わり、剣技大会の開催月が来た。毎夏、戦の続いた年でもこれだけは中断されず、開催され続けてきた年次行事だ。ライアンが以前にサンジェルマンに話したように、過去七年間の模範試合を担当しているユーゴ・ベアールが十日後には王城へやって来る。

ジェニーの短剣は、本当にベアール家に所属するものなのか？

ユーゴ・ベアールとサンジェルマンとは親交がほとんどないが、お互いに存在は当然知っており、おそらくは、お互いに、そりが合わないだろうと認識している。ユーゴ・ベアールは、他に類をみない剣の腕前のせいだけでなく、妻帯者ながら派手な女性遍歴のせいで、貴族の間でも有名な男だ。女に関心がない、男色好みだとまで噂されるサンジェルマンとは、まるで正反対の位置にいる。

ベアールとの接触の日について考えていると、今まで別室にいた王が侍従長たちと共に部屋を出て、サンジェルマンの控える部屋の前の廊下を通り過ぎていった。サンジェルマンは慌てて立ち上がり、彼らの後を追う。ここ最近になってそうであるように、王を囲む者たちが護衛の近衛兵から大臣たちに代わっている。大臣たちの態度はまだぎくしゃくしていたが、王とは、一方通行ではない会話を何とか推し進めているようだ。

王に追いついたサンジェルマンはほんの一分にも満たない会話を彼と交わし、王が他の大臣と一緒に別室に入るのを見送ってから、侍従長について西館に行った。侍従長も最近ははれやかな顔つきで、愚痴をもらすこともめっきり減った。

食堂を過ぎて階段へ着く手前の廊下で、二人は女官長とアリエルにすれ違った。アリエルは普段どおりに柔和な笑顔で彼らに挨拶したが、女官長の方はどこか落ち着きがない。

後宮勤めの侍女でも使用人たちの場である西館に来ることは不思議ではないが、サンジェルマンが知るだけで、アリエルは週に一度の割合でここまで足を伸ばしている。彼女の主人ジェニーの体調が悪いことは知っていたが、他に特別な理由は思い当たらない。サンジェルマンの考えすぎかもしれないが、彼は何となく、二人の女たちの接触に引っかかりを感じていた。

近頃のゴーティスは多忙だった。一年前の同時期、あちこちの地域で戦をしていた時期も彼の身はそれなりに忙しかったはずだが、今とは雲泥の差だ。

フィリップとの会話の中でゴーティスが財務担当の大臣の不正を偶然に見つけ、即時に解任して以来、その後任の大臣が彼をつかまえて時折話しかけるようになったかと思うと、次には古株の大臣が、それからはその他の大臣たちが、何かと理由をつけて城のあちこちで彼を呼び止めるようになった。今では、どこから出るのかと思うほどに様々な相談が彼に持ちかけられ、彼はその度に次から次へと指示を出すか、何らかの決定事項を伝えている。

気が長くなったのだ、とゴーティスは自分で思う。ジェニーの予期せぬ反抗の数々に慣らされたのか、何事も、多少の事では腹も立たなくなっている。そのジェニーとはここしばらくの間、彼女がサロンにいる姿を目にはしても、直に口をきく機会には恵まれていない。

側近が書状の内容に目を通している間、ゴーティスは部屋から何気なく中庭を見下ろし、サロンの近くに立っているサンジェルマンに目を留めた。彼の腹心は、いつになく穏やかな笑顔を浮かべている。

また、あの侍女としゃべっているのだ。

最近のサンジェルマンは、ゴーティスと常に同じ場にいることはない。それまで王をいなす為に拘束されてきた時間が、別の任務に充てられることも増えてきたはずだ。彼にはある程度の時間の余裕が生まれたらしく、今まで見向きもしなかった“女性”に関心を移す気にもなったのだろう。本館の片隅で、女官長を交え、ジェニーの侍女とサンジェルマンの三人が話していたのをゴーティスは二度見かけたことがある。侍女とサンジェルマンの視線は女官長の頭上で何度かぶつかり、その度に、両者ともが遠慮したようにお互いから目をそらしていた。

「王、どちらへ？」

突然に身をひるがえしたゴーティスに側近の一人が声を掛けた。

「すぐに戻る」

彼の手の中にある書状を見ながら、ゴーティスは答えた。

ゴーティスが中庭を歩いてサロンに近づいていくと、サンジェルマンが最初に彼に気づき、少しうろたえる素振りを見せた。彼の前にはサロンの壁越しにジェニーの侍女がいて、中庭への降り口の奥にはジェニーが立っている。サロン入口の両脇に立つ衛兵たちが、王の出現に靴を鳴らして姿勢を正した。

「めずらしい場所で会うな、サンジェルマン」

ゴーティスが横目で彼をちらりと見ると、彼が戸惑ったように顔を下に傾けた。

「は。所用がありまして」

「所用、な」

彼の答えなど頭から信じず、ゴーティスはサロンへの入口に足をかけた。ジェニーと侍女は既にサロン出入口の奥に退き、王を迎えるために頭を垂れている。ゴーティスは黄色がかった明るい栗色のジェニーの小さな頭を眺めた後、左隣にいる侍女の、きっちりと分けられた髪の生え際を見た。

「おまえ！」

ジェニーが顔を上げた。血色は悪くなく、不機嫌そうにも見えなかったが、困惑したように彼を見返す。ゴーティスはジェニーに向かって首を振り、隣の侍女に指をつきつけて、言った。

「おまえの方だ、女！　こちらへ来い」

「は、はい！」

ゴーティスに呼ばれた侍女は明らかに面くらっていたが、王の命令とあれば行くしかない。緊張をたたえてゴーティスの前にやって来た彼女は、彼が認識していた三十代よりは若く、理知的で澄んだ瞳をしていた。ジェニーより、頭のある位置が高い。

ゴーティスが侍女の顎をつかんで顔を上げさせると、彼女の後ろで息を飲む音が聞こえ、彼は視線をジェニーにそらした。ジェニーが責めるように彼を見たが、彼が目を細めて彼女を見返すと、むっとしながらも侍女の背中に視線を移した。侍女は、彼の視線をまと

もに受けないように視線をそらしたままだ。
「おまえの名は？」
「……アリエルでございます」
ゴーティスはちらりと中庭の方に視線を走らせ、サンジェルマンがわずかに顔を強張らせ、うつむいているのを見た。
「ほう、変わった名だな」
アリエルの顎をつかんだ手を引いて顔を引き寄せると、彼女の顔に力が入った。だが、彼女は動揺を表面に出そうとせず、あくまで無表情で彼から視線をそらし続けている。主人ジェニーに似て、いい根性だ。
おもむろに、ゴーティスはその侍女の顔をひきつけて、くちづけた。侍女の体は一瞬だけたじろいだが、王である彼に抵抗することはせず、彼女の体はそれ以上、少しも動かない。
彼女から唇を離したゴーティスは、その背後で言葉を失っているジェニーの驚愕の表情を見つけ、サロンの壁の向こうに振り向いて、サンジェルマンが衝撃を受けてその場に凍りついているのを見て、ひとり満足して笑い声をあげた。
「あれを見ろ、女！　どうやら、あの男はおまえに本気なようだ！」
「……えっ？」
侍女が驚いて中庭に振り返り、そして、ゴーティスの前でみるみる赤面していった。サンジェルマンの方はといえば、見るのもかわいそうなくらいに動揺して、視線を地面にさまよわせている。彼が冷静さを欠いた姿など、めったに見られる光景ではない。
ゴーティスは侍女から手を離し、その背後にいるジェニーに目をやった。彼女はいまだ口もきけない様子だったが、彼の視線に気づき、瞳だけを何とか動かした。
「ジェニー」
ゴーティスが彼女を手招きすると、彼の前にいた侍女がはっと息をのんで振り向いた。
「おまえは外に行け。用があれば呼ぶ」

ゴーティスにそう告げられると、侍女は再び赤面してうつむいた。
ジェニーが動こうとしないので、ゴーティスは侍女の横を通り過ぎ、まだ呆然としている彼女の前に、久しぶりに、立った。

少し前、ジェニーが風邪で食が細くなったとゴーティスも聞いていたが、そのせいか、彼女の頬の肉がわずかに落ちたようにも見える。ゴーティスに名を呼ばれると彼女は顔を上げ、彼女に一歩近づいた彼の顔を、今になってやっと彼の存在に気づいたとでもいうように見返した。サロン内にもれる陽の光が彼女の顔右半分を照らし、瞳が琥珀色に透き通って見える。

彼女の肌や唇の色を注意深く見てみるが、それほど体調が悪そうでもない。ジェニーの体調が不安定だから夜の訪問は控えてもらいたい、と大げさに騒ぎたてる女官長の言動を思い出し、つい込み上げてきた笑みをゴーティスが指で押しとどめようとすると、彼の前のジェニーが大きく眉根を寄せた。

「来い」

笑みを隠せないまま、ゴーティスは顎をしゃくってジェニーにサロンの奥へ移動するように示した。ところが、彼女は口を固く結んで怪訝そうに彼を見つめ返すだけで、いつもの鋭い緊張感も体から放たれていない。いつになく反抗心の薄い態度だ。

「何だ、俺の顔に何かついておるのか？」

そう言いながらジェニーの腕をつかもうとすると、彼女は素早く一歩退き、鋭く彼を見返した。

「いいえ、そうじゃないわ」

彼女は首を振り、そして次に、どうにも納得のいかないような表情を見せる。ゴーティスは苛つき、彼女を見据えた。

「では何だ」

ジェニーは彼の問いには答えず、唇を閉じて、中庭の方に顔を向けた。ゴーティスは質問を無視されたことにむっとし、ジェニーに近づいて、彼女が胸の前で組んでいた左腕をぐいっとつかみあげる。ジェニーがゴーティスの手から離れようと腕を後ろに引っぱったが、

彼がその倍以上の力で押さえていたために自由になることが叶わず、彼女が、今日初めてとなる反抗的な表情を顔に浮かべた。

「何――」

「俺が尋ねておるのだ、答えろ」

ゴーティスが押し殺した声で言うと、ジェニーはさらに反抗心を瞳にたたえ、怒ったように肩で短く息をついた。

「あんなことをしたから……あなたがいつもと何だか違うと思ってたんだけど――気のせいだったわ」

「あんなこと？」

ジェニーは再びゴーティスの手から腕を引き抜こうとしたが、彼はそれを許さなかった。

「放してよ！」

「放せだと？　は――おまえは俺に命令できる立場か？　俺に手荒にさせるのはおまえだ、おまえはもう少し従順な態度を身につけたらどうだ」

ジェニーが明らかに怒った様子で彼をにらみつけ、ゴーティスもむっとした。しかし同時に、彼女が報告で聞かされていた状態よりはずっと元気だとも実感し、それはそれで安堵する。

少しの間、二人の間では、ジェニーが自由になろうと手を引いては彼が押しとどめるという、小競り合いが繰り返された。が、そのうちに、ゴーティスは小さな諍いがばかばかしくなって彼女の腕をすんなりと放した。彼から自由になったジェニーは彼の斜め向かいの壁際に急いで移動し、彼が追ってこないことを確かめて、大きく息をつく。そして、彼女は口を結び、ゴーティスの視線を避けるかのようにサロンの出入口の方に顔を向けた。

それを目にすると、剣先で浅く突かれたような、軽症の火傷にも似た痛みがゴーティスの喉元に走り、彼女に近づこうとした足がいやおうなしにそこに留まる。どちらの足も、まるで何かに怖気づいたようにそこから先に踏み出せないのだ。やるせない怒りと口惜しさで、ゴーティスの肩先がじわじわと熱くなっていった。

自分を無視しようというジェニーの態度に腹が立ったゴーティスだったが、彼女の落ち着きなく揺れる視線を見ているうち、ジェニーがいつになく動揺していることに気づいた。彼女は、中庭にいる彼女の侍女とサンジェルマンの動向をどうやら気にしているようだ。ゴーティスは彼女の視線の先を同じように見やり、窓の向こうに広がる緑色の大地とサンジェルマンの金色の頭半分しか見えないことを確認して、彼女を再び振り返った。

「ジェニー、何を焦っておる？」

「――えっ？」

「侍女をあの男に取られるとでも思うのか？　それとも、その逆か？」

ジェニーが面食らって彼を見つめ、もう一度中庭を眺めた後、今度はあきれるような顔に変わった。

「そんなこと、思うわけないじゃない」

ジェニーが口を尖らせ、腕を胸の前で組んだ。

「そうよな、たかが侍女だ。常に共におって、おまえが何も気づかなかったわけもあるまい」

ところが、彼女が瞬間的にひるんだ表情に変わり、ゴーティスは意外に思って彼女の顔に目を凝らした。「――気づかなかったのか？」

ゴーティスが眉を上げると、彼女がちらりと彼を見返した後、呟くように言った。

「知らなかったわ。私は、てっきり……」

「一目見ればわかるだろうに」

ジェニーがむっとなってその瞳に強気の光を宿らせ、彼をにらむように見返した。

「わからなかったの」

ゴーティスが中庭の方に振り向いてからサロンに視線を戻すと、ジェニーの場所からはサンジェルマンの頭さえ見えないはずだが、

彼女も中庭の方を眺めていた。彼と離れているせいか、ジェニーの体から緊張感が消えつつある。何を言ったのかはゴーティスには聞き取れなかったが、ジェニーのかすれた呟き声がし、短い吐息が次に続いた。彼はジェニーの思案げな顔を凝視し、彼女の注意を引いた。

「おまえ……今日はどこか妙だな」

「……それは、こちらの台詞だわ」

「俺が？　俺が、何かおかしいと？」

いつになく普通に言葉を返す彼女を訝しく思いながら、ゴーティスは続きを促すように彼女に目で問い返す。すると、彼女が一呼吸おいて、言った。

「まさか――あなたが、二人の仲を取りもとうとするなんて……」

そう言った後、ジェニーが己の放った言葉を噛み締めるように、自分自身に何度も頷いていた。ゴーティスは彼女の放った言葉に唖然とし、うつむき加減の彼女の横顔を見つめる。

「は？　俺がいつ、あの二人の仲を取りもったと？」

彼女が、微かに眉をひそめて振り返った。その彼女の反応も彼を苛々とさせる。彼は吐き捨てるように言った。

「あの男はあまりにも女に奥手で、やること為すことが遅々としておって、なんともふがいない。見ておるだけで苛々させおって、気分が悪い。俺はそれを解消したかっただけだ」

ゴーティスが苦々しく思って二人のいる中庭の方に視線を投げてからジェニーを見ると、彼女のなんとも不思議そうな顔に遭遇した。

「……何だ、その目は？」

彼が不愉快に思って言うと、彼女はゆっくりと息を吸い、まるで自分自身に話しかけるかのように静かに言った。

「サンジェルマンは、あなたが止めろと一言言えば、いつでも身を制する人なのに。でも、そうしないで、あなたはむしろ彼をたきつけて、アリエルとの仲を……取りもった」

「ふん。ずいぶんと知った口をきくではないか」

ゴーティスは彼女の言葉を鼻で笑ったが、ふと、彼女の言わんとする意味に引っかかって、首をひねった。
「“取りもった”？」
ジェニーが、彼の声に反応して彼に注意を向ける。
「取りもつ――」
ゴーティスは再び、彼女の言ったことを理解しようとその言葉を反芻した。そして、次に顔を上げたとき、ジェニーが意外そうに自分を見ている顔にぶつかって、彼はそれまで組んでいた腕をゆるめて彼女に尋ねた。
「今度は何だ？」
ジェニーが何かを言いかけ、否定するように首を左右に小さく振り、それから、彼をまた不思議そうに見上げた。
「何だ、いったい？」
声を荒げたゴーティスに、ジェニーが言った。
「あなた……あの、ゴーティス王……よね？」
彼女が怪訝そうに彼を見返した。
「……なに？」
不可解に思ったゴーティスがジェニーに問い返すと、二人の間には今までにない奇妙な沈黙が流れる。

中庭にいるサンジェルマンの頭の位置は変わっておらず、彼と侍女の声もしない。不意に訪れた暫しの沈黙は、ジェニーの硬い声でいきなり破られた。
「まだ戻らないの？」
彼女の瞳には普段と同じ緊張感が戻っていて、それに伴い、ゴーティスの口調も自然に冷めたものとなった。
「ここには少し立ち寄っただけだ。おまえに追い立てられるまでもなく、俺はもう戻る」
答えながら、ゴーティスはサロン出入口に体を向きかけ、自分が動けば率先して先に反応する他の者と違い、その場に立ち尽くすジ

ェニーを振り返った。後宮に住む他の女たちと同様の退屈な日々を過ごしているはずだが、彼女たちがたまに受ける彼の訪問の終わりに見せるような、名残惜しそうな表情を、ジェニーは決して浮かべない。

「――おまえ、毎日、暇を持て余しておろう？」

ふと思いついて彼が口を開くと、予想どおりに彼女は顔をしかめ、ゴーティスは思わず失笑した。

「やはりな」

彼は笑いをかみ殺し、ジェニーがむっとして唇を噛む様子を見つめた。

「退屈で死にそうなおまえの相手を、もっとしてやりたいところだが――」彼がそう言うと、ジェニーが身を固くさせて反応した。いつもどおりの、真正直な反応。

「あいにく、俺は明後日まで体があかぬ」

彼女が体から力を抜くのがわかり、ゴーティスは視線を中庭に移して言葉を続ける。

「それゆえ――あの男に書物をいくつか選ばせ、おまえに届けさせるとしよう」

彼がサンジェルマンのいる中庭から室内に目を戻すと、ジェニーが、信じられないといった顔で彼にふらっと一歩足を踏み出した。

「えっ？」

ジェニーの注意を引いたことにゴーティスは満足し、にやりとする。

「……え？」

彼女があまりに凝視するのできまり悪く、彼は逆に素っ気い口調で言った。

「書物は与える。だが、むやみにここであの男と会うな。俺は、王が家来に女を取られたなどという不愉快な噂を耳にする気はない」

ゴーティスはジェニーに一方的にそう告げると、サロンの入口の方に歩き出した。彼女が動き出す気配は感じない。

「書物の受け取りは、おまえの侍女にさせろ」
ジェニーが息をのむ音が彼の耳に届いた。
「それって――」
彼女が追ってくるような気配があったのでゴーティスが振り向くと、彼女は近寄ってきてはいなかったが、彼の体に伸ばすかのように手を出した。だが、それを宙で不意に止めた。
彼がジェニーの浮いた右手を見つめると、彼女は慌ててそれを体の脇の位置へと戻す。それから彼女は、大きな困惑をその顔に映し出し、彼に素早く背中を向けた。

サロンで王と別れて部屋に戻った昨日、ジェニーにサンジェルマンとの仲を訊かれ、恋仲ではないがお互いに慕っていると思う、とアリエルは素直に白状した。ライアンへ恋心を抱いていたはずなのに、とジェニーが疑問を口にすると、アリエルは、サンジェルマンと直に接し、自分の身分や立場におごらない、誠実な彼を大切に想うようになって初めて、ライアンへの想いが憧れだとわかったと答えた。でも、だからといって、王家に近い高貴な身分であるサンジェルマンと下級貴族の自分がつりあうとは思っていない、と彼女はひとごとのように語る。
「サンジェルマンが持ってきたの？」
「はい」
アリエルは普段どおりにもの静かな笑みをたたえて返事をしたが、書物に落とす視線が明らかに優しく変わる。
昼過ぎにはもう、ジェニーの元に複数の書物が届けられた。両手に書物を抱えて運んできたのはアリエルで、彼女は昨日から数度目となる王への感謝を繰り返した。単に任務を果たしたアリエルに罪はないし、書物にも興味があるが、それがあの王からの贈り物となると、ジェニーは素直にそれを手に取ることもできず、台の上に置きっぱなしにしている。
隣の寝室を整えていた召使が二人のいる部屋に現れ、他に用事が

ないかとアリエルに問いかけるような目つきをするのを目にした後、ジェニーは台に積まれた四冊の書物に再び視線を移した。あの王がどんな顔で、こんな“つまらぬ用事”をサンジェルマンに命令したのだろう。

召使が挨拶をして退室していき、アリエルが書物のある台に近づいて、ジェニーに尋ねた。

「ジェニー様はフランドル語もお出来になるのでしょう？　王がフランドル語の本も含めてくださったそうですわ、それをお読みになりますか？」

ジェニーは王の気遣いに慣れずに何だか苛々とし、いいえ、と一言だけ答えて、書物の隣にあるベリー類の盛られた皿を一瞥した。それもまた彼女の好物であり、「王からの下賜」といって午前中に届けられたものだ。新鮮なベリーの実はいまいましいほどに赤く、ちょうど今が食べ頃な程度に熟していて、甘くさわやかな香りを放っている。ジェニーは、それにも手をつけていない。

「そちらを、召し上がります？」

ジェニーは皿や書物の山から顔をそむけた。

「いらないわ」

断固とした拒否がジェニーの声ににじみ出ていたが、アリエルは常にジェニーには王を敬う態度を求めるというのに、そのときは何も言わなかった。

少したってアリエルが隣にやってきたのでジェニーが顔を上げて見ると、彼女はジェニーを見返し、わずかに寂しそうにも見える笑みを浮かべた。ジェニーが無理に微笑み返すと、アリエルが何かを言いたそうな表情になったので、ジェニーは、話すようにと彼女に促した。

「ジェニー様、今、城には隣国のご使者がいらっしゃっているそうですわ」

「……そうなの」

サンジェルマンからの情報だろう、とジェニーは判断し、それが

理由でゴーティス王は忙しいのだと理解した。
「聞くところによりますと、ここ数年来、この城には諸外国からの訪問者は皆無だったそうでございます。それがここにきて立て続けに――今回のご使者が帰られたらすぐにまた、別の国からの訪問客があるとのこと。訪問目的は正式には知らされておりませんが、皆の間ではもっぱら、ヴィレールが各国と同盟を結ぶという噂でございます」
「“同盟”？　あんなに各地を侵略し続けていたヴィレールが？――あの王が？」
「あくまで、皆の噂ではございますが」
アリエルはそう前置きし、ジェニーに向かって力強く頷いた。
「でも、だけど、同盟って……。そんなこと、とても信じられない……」
「私にも真実はまだわかりません。けれど、事実、隣国からの訪問客もあることですし。それに――ジェニー様？　今年に入って半分も経とうとしておりますが、ヴィレールは一度の戦も始めていないではありませんか」
ジェニーが王城に連行されてから、ヴィレールは一度も戦をしていないのは事実だ。けれど、ジェニーは、自分の故郷の街のあちこちで黒煙が上がっていた光景を瞬時に思い出した。
「これから、再開するのかもしれないじゃない」
ジェニーが言葉を返すと、アリエルの顔がゆっくりと笑顔に変わった。
「ええ、わかりませんね。ジェニー様？　王は明夜ここに来られるそうにございます。王に、それを直接お尋ねになってはいかがです？」

第一部　5．王の子ー４（前書き）

【注意】

＊不快感を与えかねない描写を含みます＊

第一部　5．王の子－4

部屋に漂う濃厚なベリーの香りにめまいを覚え、ジェニーがアリエルに吐き気をうったえたところ、彼女が大まじめな顔をして侍医を連れて来たのにはジェニーも驚いた。侍医に遅れること少し、女官長までもがジェニーの部屋に急いで駆けつけてきて、アリエルの横で侍医の診療をはらはらとしたように見守っている。ジェニーは、自分の体調にわずかでも変化があると繰り広げられるこの種の展開に慣れつつはあったが、彼らの大げさな対応にはあきれるばかりだ。

ところが、今回だけは普段と少し様子が異なっていた。

ジェニーから見れば形ばかりのいつもの診療を終えただけだというのに、侍医は女官長に振り返って何やら言葉少なに囁いたかと思うと、アリエルをジェニーの側に残し、二人はジェニーへの挨拶もそこそこにその場を去ってしまったのだ。侍医が話しかけたときに見せた女官長の反応が印象的で、ジェニーは、自分が何か重大な病に侵されているのではないか、と急に不安になった。そして、もしそうであるのなら、ここ最近の過剰ともいえる自分への対応全てに説明がつく。

「ねえ、アリエル」

二人の出ていった扉の方を見ていたアリエルが振り返り、ジェニーの押し込まれた寝台の方へ腰をかがめて身を寄せた。

「はい。何でしょうか？」

「私、まさか……重い病にでもかかっているの？」

ジェニーが不安にかられて問うと、アリエルは目を丸くして、そして、彼女を安堵させる笑顔を浮かべて頭を左右に振った。

「いいえ、そうではありませんわ」

「本当に？　それじゃ、いったい――」

そのとき突然に部屋の扉が開き、女官長の急を要する声がアリエルを呼びつけた。「アリエル、ちょっと来てちょうだい！」

ほどなく部屋に戻ってきたアリエルは、ジェニーに付き添っていた召使にベリーの皿をさげるように伝えると、ジェニーのいる寝台横に椅子を持ってきて座った。アリエルの頬はうっすらと赤く、まじめな顔をしてジェニーの視線を捕らえる。ジェニーは彼女が何か大事な話をするのだと勘づいて身を起こしかけ、彼女にやんわりと止められた。

「私の病気の話なのね？」

「いいえ、ちがいますわ」

アリエルは子どもをあやすかのように笑い、ジェニーをゆっくりと、じっくりと見つめる。ジェニーは面くらい、アリエルに先を急がせた。

「じゃあ、何なの？」

アリエルが微笑みを絶やさずに答える。

「ジェニー様のお体の話でございます」

「つまり、病気なん――」

アリエルはジェニーの問いをさえぎり、瞳をのぞきこんだ。「ジェニー様、最後に月の障りがあったのはいつか、覚えていらっしゃいます？」

「えっ？」

この数ヶ月の期間に複数回訊かれた質問だが、ジェニーはそれほど重要視もしていなかった。「それは、ええと――」

ジェニーはあらためて思い返してみて、それが規則的におとずれていないことを、今さらながら気づく。

「――私、二ヶ月半も遅れてる……！」

はい、とアリエルが慌てずににっこりと笑い、ジェニーは拍子抜けした。

「はい、って――アリエル」

アリエルは笑顔のままだ。

「アリエル、じゃあ、私の体のどこが……悪いの？」

「はい？」

あまりにも彼女が驚くので、ジェニーは逆に混乱する。

「そんなに遅れているのよ。私の体はどこか、おかしいんでしょう？」

ジェニーが声を荒げると、アリエルは穴があくほどにジェニーの顔を見つめた後、まあ、と一言だけ言い、ジェニーの方に体を少し寄せて彼女の疑問を穏やかに否定した。

「いいえ、おかしくなどありませんわ。ジェニー様はいたって健康でございます」

「健康？　訳がわからないわ、じゃあ、なぜそんな――」

「ジェニー様はまだ、“子の持ち方”を教えられていなかったのですね。……ええ、まだお若いのです、それも無理はございませんわね……」

彼女が自分だけ納得して満足するのを見ても、ジェニーはあまりいい気分ではない。

ジェニーは寝台に両手をついてアリエルの方へ体を移動させ、彼女の注意を引いた。

ジェニーが近づくとアリエルはさらに微笑みを深くさせ、言葉の一語ずつを慎重にかみしめるようにしてジェニーに告げた。

「ジェニー様は病気なのではございません。ジェニー様のお腹には……赤子がいらっしゃるのですよ」

「えっ……？」

ジェニーは聞きなれない名前を聞いたときのように戸惑い、やがてアリエルの伝えた意味が頭の中に浸透していくと、耳を疑って絶句した。

「驚かれたでしょう？　しばらく体調がすぐれなかったのはそのせいなのです、ジェニー様。ジェニー様のお腹には……王の御子がいらっしゃるのです」

ジェニーは再度耳を疑った。

「子どもなんて、そんなはずは――」驚きのあまりに自分の声が途

絶え、ジェニーは二の句を次ぐことができなかった。
“お腹に――王の御子が――”
耳の奥でアリエルの声がそう繰り返し、ジェニーは息がつまる。
嘘だ、そんなこと。
「アリエル！　今、王の……子、って……？」
そう口にした自分の言葉自体が信じられず、不本意ながらも語尾が震えた。聞き間違いに違いない、と、ジェニーは藁にもすがる思いでアリエルの唇を必死で見つめる。けれども、ジェニーの切なる願いもむなしく、アリエルはからかうように笑って否定もしないで、ジェニーをまっすぐに見て同意してみせた。
「はい。王の御子ですわ」
「そんな！　だって、私と彼は結婚だってしていないのよ！」
「結婚せずとも子は持てるのですよ、ジェニー様」
冷静なアリエルの返答に腹が立ち、ジェニーは彼女の制止を振り切って寝台から飛び起きた。
「ジェニー様！」
「そんなこと、あるわけないわ！　あの王の――あんな人の子どもなんて、私が妊娠するわけがないじゃない！　私たちのあいだに愛情なんか、そんなもの、何もないのよ！」
「落ち着いてくださいませ、ジェニー様」
「ああ、嘘よ！　そんなことって……！」
ジェニーは寝台から飛び降り、彼女に近づこうとするアリエルからあとずさって叫んだ。
「向こうへ行って！」
「ジェニー様、お気持ちはわかりますが、そんなに興奮されてはお体に障ります！」
アリエルが必死にジェニーの右腕をつかんで、冷静になるようにと何度も懇願する。
「放して！　じゃなきゃ、今の言葉を取り消して！　私はあんな男の子どもなんか――」

ジェニーが手を振りまわすと、アリエルが悲鳴に似た声をあげた。
「ジェニー様！」
アリエルがジェニーの左腕をつかもうとし、ジェニーはそれを振り払った。
「そんなこと信じないわ！」
けれど、アリエルの泣きそうな顔を見ているだけで、彼女の放った言葉の数々が決して嘘ではないのだとジェニーは痛感する。なぜ愛してもいない王の子を妊娠したのか、その原理はまだ理解できなかったが、自分が妊娠しているというのはまぎれもない事実なのだ。そう、ジェニーは認めるしかなかった。
「ジェニー様、どうか！」
気が遠のいて、アリエルの姿が次第に遠のいていくように感じた。アリエルの手に引っぱられるようにして、ジェニーの体は寝台の上に投げ出された。この寝台の上で王に組み敷かれたことを思い出し、悪寒がする。
ジェニーは、愛し合う夫婦にこそ、天から子どもが与えられるものだと信じて疑いもしなかった。
どうしてあの王の子どもが、自分のお腹の中にいるのだろう？愛してもいない男の子どもを孕むなど、ジェニーにとってはこの世に起きえない、ありえない展開だ。
ジェニーの悲鳴を聞いて、隣の部屋から女官長と侍医、その助手が血相を変えて走りこんできた。アリエルがジェニーに妊娠の事実を告げる役目をきちんと果たし終わるまで、隣で控えていたに違いない。ジェニーの腕も体からもとっくに力が萎えているというのに、アリエルは彼女の左手を押さえ続け、それとは反対側の腕を侍医の助手が押さえつけ、侍医が顔をこわばらせて医療箱の中から何かを取り出そうとしている。女官長の青ざめた顔が、侍医の背後で不安定に左右に揺れていた。
目の奥が重くて、目覚めているのに、夢の中をいつまでもさまよ

っているような不思議な感覚が続いていた。頭のてっぺんを鋭い痛みが断続的に襲う。寝室には普段とちがう香り――たぶん、ジェニーの精神を安定させるための花の匂い――が充満し、ジェニーはどう体勢を変えてもしっくりしないことをわかりながら、寝台の上で何度も寝返りを打った。

なぜ自分が妊娠したのか、理由を繰り返し考えてみても答えが出るはずもない。

ジェニーは途中で理由を探すことをあきらめたが、いずれにしろ、ジェニーの頭には次から次へと様々な場景が映しだされ、心は一時も休まらない。侍医はジェニーの精神を和らげる処方をしたそうだが、今のところ、まったくもって効果をなしていない。

声に出して大きなため息をはき、ジェニーは半分まで引かれていたカーテンの生地に手を伸ばした。それを今にも手で払いのけ、ジェニー、と名を呼びながら、ゴーティス王が入ってきそうな気がする。続けて、王がジェニーの腕を押さえて冷笑する光景が出てきたかと思うと、倒れた彼を剣で貫こうとしたが間際に狙いをはずしてしまった瞬間が、ジェニーの脳裏に鮮やかに浮かんだ。胸が痛み、目の奥が重くなる。

“復讐をやめるかわりに、俺を愛せ”

王の声が耳元で囁き、ジェニーは顔を両手で覆った。それは命令口調であったのに、どこか懇願しているようだった。

サロンでアリエルに口づけた後にサンジェルマンを見て大笑いし、微笑しながらジェニーを見る彼の顔が頭に浮かぶ。アリエルからジェニーに視線を移す前のほんの一瞬だけ、彼ははにかむような表情をした。

アリエルが、ジェニーと一緒にいる王を見る限り、王は世間の評判ほどに恐ろしい人物とは思えない、と何度か口にしている。しばらくは戦も仕掛けていない。最近の王の動向を考え合わせると、実は彼の真実の姿は少し違うのかもしれない、とジェニーの頭をよぎったこともある。

その考えを打ち砕くように、ジェニーは兄ローリーに剣を振りおろす王の姿を思い起こし、悔しさと無念を思い出した。それでも、王の様々な側面がジェニーを交互に襲って、ジェニーはますます混乱を極めるばかりだ。

ジェニーは寝台に突っ伏し、うめき声をあげた。

それに、ジェニーは絶対に認めたくなかったが、王の体からはずれた剣が石の床を打ちつけ、ジェニーの腕に強烈な衝撃が走ったあの瞬間、彼への復讐を果たすことはもう二度と叶わないだろう、とジェニーは頭のどこかで悟っている。

――子ができたということは、王を愛せという、神さまからのお告げ？

だが、ジェニーは厳格に神の存在を信じてはいない。

もう、何が正しくて、何を信ずればよくて、何をしたらよいのかわからない。

これからどうしたらよいのかと途方にくれ、ジェニーは室内の暗闇をぼんやりと眺めた。

第一部　5．王の子－5

しばらくぶりに見た、鮮やかで、生々しい夢。

ケインは叫びながら飛び起き、薄暗い空間の中で必死に両手を動かして、自分の唇を拭った。血の味が、消えてくれない。それはまるでついさっき身にふりかかった出来事のようで、ケインの息が乱れ、呼吸が浅くなっている。彼は体中を手で触り、体の各部位があるべき箇所にまだついていることを確認して、ようやくほっと息をついた。

「夢、か。本当に、夢……」

空腹感はそれほどひどくなく、まだ夜中前の時間だと思われる。ケインが短い眠りから目覚めてまもなく、“梟の男”が階段を降りてくる足音が彼の耳に届いた。男は左足を階段につけるまでにやや時間がかかるので、その足音を聞けばそれが彼だと簡単に判別できる。男はいつも無言で牢内のケインを眺め、奥にもう一つある空っぽの牢と通路を簡単に見回しては帰っていく。

うさんくさそうに見える男だが、ケインの劣悪な境遇に同情したのだろう、着古した服をケインに置いていった一ヶ月くらい前を境に、三日おきの割合で、小さな焼き菓子や固いパンを持ってくるようになった。その日の見回りにも、男は柵の近くに寄せてあった空の盆の上にパンの欠片を無造作に置いていった。

あの惨劇を夢で見たのは半年ぶりぐらいで、何か特別な意味でもあるのではないかと、胸騒ぎがして仕方がない。

“梟の男”の足音が階上で消えるなり、ケインは急いで床に立ち上がった。牢を抜け、廊下の突き当たりの壁にある穴をくぐって、ケインは三日ぶりに抜け道の階段に降り立った。同じ地下でも、そこは彼のいる牢とは違う空気の匂いがする。彼は階段を上がり、一つ目の十字路で左折して、下っていく細い階段を降りていった。

“人々から忘れ去られ、誰の関心をも受けることのない人生を楽しめ”

突然、黙々と歩みを進めるケインの頭に兄の声が冷たく反響し、彼は身震いした。予期せぬ殺戮の後、ケインの部屋を去る際に兄が吐き捨てるように残していった言葉だ。

何が兄をそうさせたのか、今でもわからない。

あの時の兄は狂ったかのようだった。あんな兄は、生まれて初めて見た。彼らの母親を断じなければならなかった時でさえ、あれほどまでに怒り狂い、我を見失ってはいなかったというのに。

――二年半ほど前、王国一の剣使いと世に名高い兄は、いきなり踏み入ったケインの部屋でその場にいた者たち全員をあっという間に斬り殺した。兄は少しの躊躇も見せず、気に入っていたはずの侍女も、兄弟の惨劇を阻もうと二人の間に立ちはだかったケインの家来も、あえなく兄の剣の犠牲となった。

“ケイン様を……ご自分の兄弟に手をかけては……！”

口から血をほとばしらせて家来が言うと、兄はさらに怒りで顔をひきつらせ、彼の体に突き刺した剣をぐるりと回転させた。家来の男が苦痛にあえぎ、その背中から突き出た剣先から滴った温かい血が、悲鳴をあげたケインの口の脇に落ちた。錆びた鉄の味がした。

“そやつが弟だったことなどない！　おまえも共に、地獄に落ちるがよい！”

“どうか、お静まりを！　殺しても何が……あ……ああ、ゴーティス……王！”

兄は血走った目を見開き、男の体ごとケインに剣を突き立てようとしたが、剣をつかむ血だらけの男の手を見て、急に無表情に変わった。

あの時、兄は本当に突然に、男から剣を引き抜いた。

力の抜けた家来の体は、単なる重いかたまりとなってケインの体の上にどさっと落ちてきた。男の流す血でケインの服や腕は真っ赤

に染まり、彼は自分まで死んだような感覚に陥って、大きな悲鳴をあげた。今ここで起きた現実が受け入れられず、ここで死んだ方がましだ、と思った。怯えるあまり、ケインは兄を全く正視できなかった。

全ての惨劇が終わった直後に駆けつけた兄の腹心がケインの傍に来て、ケインがそのとき初めて兄を見上げると、彼は背筋が凍るほどに冷たい視線をケインに投げかけた。それから兄は嘲るように笑い、血の海となったケインの部屋を悠々と立ち去っていった。女たちの悲鳴に気づいていたはずのケインの衛兵たちは、兄が部屋を出てからやっと彼の部屋に来て、そこに広がる衝撃の光景に言葉を失っていた。

次々に思いをめぐらせて歩いていたせいで、ふと気づくと、ケインは自分が今どこを歩いているのかがわからなくなっていた。彼の背後に続く急階段を見たとしても場所を特定できるはずもなく、自分がどこをどう曲がってここまでたどりついたのか、全く想像がつかない。彼は、上半身がすっと冷たくなるのを感じた。

地下牢に戻れなくなれば、朝になって牢がもぬけの空となったことに気づいた“口笛吹き”が、サンジェルマンにケインの不在をすぐさま報告し、今度こそ間違いなく、自分はこの世から永遠に消されてしまう――。

「ああ、何てことだ、すぐに戻らないと！」

大慌てで階段を引き返そうとし、階段を五段ほど駆け上がったところで、ケインははたと足を止めて後ろを振り返った。どこか、すぐ近くで水の流れる音がする。それも、今まで聞いた流水音とは異なり、大量の水がゆったりと流れるような静かな音だ。

ケインは全方角に耳を澄まし、もう一度、その音源の種類と場所を慎重に確かめようとした。たしかに、彼の立つ地点より下の方向から水の音が聞こえてくる。彼の下に伸びる階段は左にゆるやかに湾曲し、その先はさらなる真っ暗闇だ。

これまでずっと五感をとぎ澄ませながら抜け道を捜索してきたのに、彼がこんな水音を聞き逃すはずはない。かなりの高い確率で、ケインがここに足を踏み入れたのは初めてだ。ケインはどうすべきか迷って、来た道を頼りなく振り返り、次に、暗闇にぼんやりと消えていく下り階段の先を見つめた。

「ああ、ジェニー、どうすればいい？　私はきみと城外へ脱出するまで、死ぬわけにはいかないのに！」

ケインは彼女のせっぱつまった顔を思い出し、上に行く階段を眺めていて、やがて、足元を何気なく見てはっとした。埃の積もった階段の踏み面に、ケインの裸足の足跡がくっきりと浮かびあがっている。ジェニーが一度も迷わずに部屋からケインの地下牢にたどり着いたときに頼ったという、ケインの足跡。

喜びいさんでケインが階段を駆け降りていくと、その突き当たりの場所に、彼の体の横幅ほどしかない木の扉が出現した。流水音はさらに大きくなり、その扉の向こう側から聞こえてきている。ケインは扉の前で神に祈りを捧げ、期待感を込めて、取っ手をゆっくりと引いた。

扉の中の世界もまた、暗闇だった。だが、ケインが足を降ろした石段の目の前には、彼の手の長さよりも少し広い幅の人工水路が横たわり、いっぱいの水をたたえて右の方へゆるやかに流れている。彼が以前に見つけた水路はこの半分の幅もなく、水は水路の高さ半分にも満たなかった。

これが主流かもしれない、と思いながらケインが水の流れる方向に歩いていくと、いきなり、彼の前方の視界が大きくひらけた。そこはがらんとした空間で、左斜めに方向を変えた水路は膝丈ほどの低い壁にぐるりと囲まれた水槽に連結されていた。水路から流れ出た水は、その壁の内側半分ほどの水位にまで溜められている。

「――貯水槽か！」

ケインはなおも室内を見渡して、貯水槽の奥に下り天井となった部屋があるのを見つけた。貯水槽壁の曲線に沿って歩いていくと下

り階段が現れ、低い天井だと思われた部屋は下に向かって広がっている。そこにも小さな水槽がもう一つあり、床に設けられた細い排水溝が奥の壁にある穴に向かって続いていた。今までに見たことがない施設だが、彼がどこかで嗅いだことのある匂いが室内に残っている。水槽の壁には二段の石段が設置されており、入浴に使用される“泡立ち草”と呼ばれる薬草が床に転がっているのを目にしてやっと、ケインはその施設が入浴場だと気がついた。

誰かが水を抜き忘れたらしく、小さな水槽は満杯の水を残したままだ。水面に誘われるようにして水を指で触ったケインは、以前の地上での生活で召使たちに身体を丁寧に洗われた記憶を脳裏によみがえらせた。

子供の頃のケインは、人見知りだった兄とは対照的に、常に多くの人々に囲まれた日々を送っていた。ケインは使用人たちにも愛想よく振舞い、入浴の際にも召使たちとよく話しながら何度も腹を抱えて笑っては入浴が中断されるはめになって、そのたびに彼らにたしなめられた。また、傍らにいる彼らをからかおうとして、ケインは洗い終わったばかりの髪を左右に振って水滴を飛ばし、年長の召使の怒りを買ったこともある。

久しぶりの水の感触があまりにも心地よく肌になじみ、ケインは腕を水の中へ深く入れた。水は冷たく感じられず、ケインは、自分の手が水面に作る波紋を眺めながら、恍惚感が腕を伝わって全身に広がっていくのを楽しむ。

自分の頭が抑制するより早く、ケインは服を脱ぎさり、床の上に放り投げてしまった。足に触れる水が冷たいと感じられたのは最初の一瞬だけだ。肩まで水に浸かると、日照り続きで乾ききった地面のように、ケインの全身のそこかしこが我先にと水を吸い上げ始める。体の要求に素直に従い、ケインは頭までを水面下に沈めた。

水面から頭を勢いよく上げ、ケインは顔の水を両手で拭いながら歓喜のため息をついた。なにしろ、二年半ぶりだ――。

体が久々の入浴で嬉しがっているのか、勝手に笑い声が口をついて出てしまい、ケインは沈黙する空間を慌てて見渡しては無人をあらためて確認する。彼の記憶にある城の入浴施設は全て地下にあり、その法則がここにも当てはまるのならば、衛兵や使用人たちの出入りする場からはずいぶんと離れていて、多少の物音がしても彼らの耳には届きもしない。そう自分に言い聞かせると、床に放置された“泡立ち草”を目にして、ケインは静かに浴槽の中で立ち上がった。

初めて手にした“泡立ち草”の扱い方がわからず、ケインは苦労してそれを両手で泡立てると、召使たちの手の動きを思い出し、数度に分けて頭髪を洗った。白い泡からは、不快ではないが鼻につく香りがする。同じようにして身体も隅々まで洗うと、泡の下からはケインが本来持っていた肌の色が久しぶりに現れた。

もう一度だけ静かに水の中に体を浸し、ケインは顔を水の中にそっとくぐらせた。さっきよりも、水分が肌を通して流れ込んでくるような気もする。それからケインはおもむろに水面に顔を出し、目をぴったりと閉じて、手足の動きを封じ込めた。雑音の消えた空間の中で、水路から貯水槽に流れ落ちる水音が実際の音量よりも大きく反響して聞こえてくる。次に、ケインは両目をしっかりと開き、貯水槽に水を流し入れる水路に視点を定めた。

ケインが人工水路の敷かれた空間を上流へたどっていくと、それはやがて、一人の人間が腰をかがめてやっと進める大きさの空間に変わった。彼は何度か水路の中を歩くはめになり、その洞穴のような空間をなおも遡っていくと、広い場所で空気がさざめくような音が彼の耳に聞こえてきた。水路の上流を見やると、自分がそれまで見てきた水路の幅がさらに広くなっていく。それに伴い、当然、彼のいる空間も広くなっていく。

「ああ……」

ケインが別の空間へ繋がる出口に立ったとき、感動なのか、安堵なのか、判断がつきかねる、長いため息がもれた。水路の先は頑丈

な石造りの壁に伸びていて、その壁の左右がどこまで広がっているかを確認はできなかったが、ケインが背伸びをして壁の反対側を覗いてみると、そこには黒く光る水が一面に広がっていた。そしてその水面の上を、彼の方に向かってゆったりとした波が繰り返し押し寄せている。

ケインの記憶が正しければ、彼は城の最北端に位置する場所にいる。城の北方を流れるシエヌ河から水を引き込み、王城北側の城壁を挟んで水を貯めている場所があるのだ。城壁を通じて城内へ通じる引き込み口が一つだけあるというが、外敵の進入を防止するため、それとは別に“偽物の”引き込み口が複数設けられているそうだ。しかし、ケインは城内から水路を上流へとたどってきたのだから、この溜め池は城外にも続いているはずだろう――。

ケインは一心不乱に階段を駆け上った。腰も痛んだが、駆けずにはいられない。

もう一眠りすれば下働きの者たちが起き出す夜明けになろうという時間で、城中がまだ眠りについていることはわかっていた。ジェニーだって、今頃は部屋で熟睡している頃だ。石段を蹴るたびにケインのふくらはぎが張り、自分が道なき道を行き、時には水流に逆らって歩いたせいで足が予想外に疲労していることを思い知らされたが、ただただ、地上に向かって走り続けた。

一度も足を止めずに走ってきたケインは、階段とジェニーの部屋を遮断する扉まで手が届く位置に来たとき、ようやく我に返って急停止した。激しい呼吸音が地上に漏れないように手で口を覆いながら、彼は、自分を落ち着けるためにも、二度、ゆっくりと深呼吸をする。乱れた呼吸が、早鐘を打っていた心臓が、興奮冷めやらない頭が、徐々に平静にと戻っていく。

ケインはたった今の現実に目を向けようとし、木扉を見つめた。扉の前に、彼の侵入を防ぐジェニーからの“合図”は何もなかった。兄、つまり、ゴーティス王は彼女を訪ねてきていないということだ

——。

王が彼女と一緒にいる光景を心に思い浮かべると、ケインは、奥歯をきつく噛み締めてしまう。

扉に手を伸ばしかけ、ケインの手はあえなく止まった。彼女の眠りを妨げることに罪悪感があるからではない。彼女なら、むしろ、この思いがけない知らせに飛び上がって喜ぶだろう。

あの王を倒すことなどどうしてできよう？　おそらく、今の彼女には城を脱出することが最良の選択だ。

けれども、そうなれば、王はどうされるだろう？　命を狙われてもなお彼女を生かした、つまり、彼女に執心しているともいえる王の鼻先から、私が彼女を連れ去ったと知れば……？

頭をよぎった惨事を無理に振り払い、ケインはあらためて扉に手を触れようとして、やはり躊躇してしまった。ジェニーの喜ぶ顔を見たいのに、彼女を見ればその背後にゴーティス王の姿が見え隠れしそうな気がして、足がすくんでどうしようもない。

ケインは自分の情けなさに毒づきながら足元に視線を落とし、扉から漏れてきている淡い光に不意に気がついた。朝日というにはまだ早すぎる時間だ。

では、この光は？

ケインはあわてて扉を開き、暖炉の前に立って、心底驚いたように自分を振り返ったジェニーと鉢合わせた。部屋の小さな窓が開放されているらしく、室内には月の弱々しい明かりが射していた。

第一部　5．王の子－6

口をつけもしなかった夕食後にやってきた女官長を追いやり、心配そうに付き添うアリエルを無理に室外へ追い出し、看護の召使さえも拒否して室内に独りでいることを勝ち得た後、どれくらいの時間が既に経ったのか、暗闇をいくら見つめてもジェニーにはわからない。

ジェニーは悩み考えることに疲れきって、寝台からふらふらと這い出した。外から物音も声も聞こえてはこなかったが、隣の部屋ではアリエルか召使が控えているだろうことぐらい、簡単に予想がつく。

ケインなら、暗闇の濃度で時間がよめるのだろうか？

裸足で床をそっと歩き、ジェニーは窓のある壁面まで近づいた。以前、ジェニーの逃亡を危惧して塞がれたことのある窓も、今は本来の機能を果たすような形に戻されている。隣室に続く扉を気にかけながら、ジェニーは物音を出さないように注意して、窓にかかる木扉の鍵をゆっくりと開けた。外を明るく照らす月光が、室内にまであふれ出してくる。

「エクリシフェ」と、ジェニーは子どもの頃に父親に教えられた、月の女神の名を呼んだ。

「こんな時にだけお祈りすることをお許し下さい。でも、助けがほしいのです。私はどうすればいいのか……本当にわからないのです。どうか、迷える私を正しい方向へお導きくださるよう――」

ジェニーが床へ膝をつこうかと思ったそのとき、背後の暗がりで物音がした。あまりにも驚いてジェニーが胸を押さえながら振り返ると、そこには、床の扉から上半身をのぞかせた、ケインの驚いた顔があった。

薄明かりの中で二人は声を失って見つめ合った。

ジェニーからほんの数歩先、ケインは隠し扉を手で押さえ、微動だにしない。ジェニーは目をこらしてケインを見たが、彼が今そこにいる事実がどうにも信じられず、少しでも動けばその姿が背後の闇に溶けていきそうな気がして、足がなかなか踏み出せずにいた。

先に動いたのはケインだった。彼は、口を開きかけたが途中で気が変わったらしく、無言で頬をゆるめて笑みを作った。地下階段から部屋の床に足を上げようとしている。

「だめよ、戻って！」

我に返ったジェニーは咄嗟にケインの元に走り寄り、押し殺した声で彼を制した。ケインが戸惑い、扉を片手で支えた格好で静止する。

「隣に人がいて、いつこっちに来るかわからないから――」ジェニーが彼の脇にしゃがみこむと、寝台の方を注意深く見つめていたケインが彼女を見て、にっこりと笑った。

「大丈夫だ、二人とも寝ているよ」

「えっ？」

「いびきが聞こえるんだ。二人とも、相当に疲れているらしいね」

ケインが苦笑し、ジェニーは見えない扉の方を半信半疑で振り返り、耳をすました。何も聞こえない。ジェニーが彼に目で問いかけると、ケインは肩を小さくすくめてみせた。

部屋の出入口はケインの立つ場所のちょうど対角線上にあるが、誰かが戸口に立っても、運良く天蓋が視界の邪魔になってくれるので彼の姿は見えないはずだ。彼の聴覚が自分よりずっと優れているとジェニーは知っているが、念のためにそっと後退して扉を見、それが動く気配のないことを確かめた。

「誰も来ないよ」

ケインは階段を一歩上に上がり、ジェニーと目線を合わせる。

「でも、気をつけないと――」

ケインが木扉を肘で支えようとして体を横向きに変え、ジェニーはそれを見ていて突然、彼の大きな変化に気がついた。薄暗さに慣

れたジェニーの目に、ケインの肌の白さが飛び込んでくる。
ジェニーは口をきくのも忘れ、ケインの眉のすぐ下にある瞳の輝きを見て、鼻筋の線を追い、扉を支える彼の腕をたどって、彼の顔に再び視線を戻した。秀でた額、ふたえの上の線に向かって曲線を描くまつ毛は濃く、わずかに下向きに流れた両目は前よりずっと大きく、光って見える。髭に囲まれた、ふっくらとした唇が赤く浮き立つ。額にかかるブロンドの髪も前に見たときより金色に近い。どこもかしこも色が明るくなり、上品なたたずまいさえ感じさせる。肌の色が違うだけで全くの別人だ。
そのうち、ジェニーの視線が移動している最中も笑いを堪えているようではあったが、ケインが口を指で押さえて笑い出した。
「ジェニー、そんなに驚かなくても」
「だって――」ジェニーがそっと息を吸うと、ケインが瞳を細くして笑った。
ジェニーはケインの顔の造作を見ているうちに、彼の気品は生まれ持ったものだろう、と気がついた。彼は育ちがよく、たぶん、貴族だ。
「……こんな顔だったのね」
ジェニーが目を大きく開いてケインを見ると、彼はわざと不機嫌そうな顔を作ったが、すぐに表情を嬉しそうに崩した。
「顔は何も変わっていないんだけどな。入浴場を偶然に見つけたから、ちょっとだけ拝借させてもらって、全身を洗ってきてね。見違えた？」
「ええ、全然ちがう人みたい」
ケインはジェニーの返答に満足したようだったが、床に腰を降ろした後、顔を少し曇らせた。
「そうか、全然ちがう人みたいか。それは少し、困るな」
「困るって、どうして？」
「ほら、毎日見まわりにくる看守が私を見たら、いつもと違うと気づくだろう？　まさか、外に出て入浴した、とは言えないよ。気づ

かれないようにしないと……うーん。毎回、何とかして体を隠しておかないといけないな」

ケインは頬をふくらませながら唸り、ジェニーの視線に気づいて、照れたように笑う。

ジェニーは彼につりこまれて微笑んだ。彼の無邪気さに出会うと、ジェニーの肩の力が自然に抜けていく。

ジェニーが初対面の人物に会ったかのように彼をなおも見つめると、彼はそんな彼女の瞳を見上げ、苦笑する。

「そんなに見られると気恥ずかしいね。まだ、見慣れない？」

「何だかへんな感じ。今日が初対面みたいで」

ケインがくすくすと笑った。

それから彼は木扉を両手で支え、地下から床に両足を上げた。右の二の腕にある血管を太く浮き上がらせ、ケインは両手を使ってそれをそっと閉める。彼の視線がジェニーの背後に動いたのは、隣室の動向を探ろうとしたからだろう。そして彼は両足をジェニーの体の横に投げ出し、彼女と目を合わせた。

「はじめまして」

ケインが小声でうやうやしく挨拶し、ジェニーの笑いを誘う。

ジェニーの反応に気をよくしたらしく、ケインは満面の笑みで彼女を見つめ、ジェニーも彼を見つめ返した。すると、彼はさらに嬉しそうに口角を上げ、眼差しを優しく変えた。この人に出会うと、安心する。

なめらかな白肌に、ケインの黄色に似た瞳が幻想的に映える。ケインの体がわずかにジェニーに近づいた。

ふと、ジェニーはゴーティス王の顔を思い出し、王の緑色の揺れる眼差しをケインの中に見た。ジェニーが困惑して両目を閉じ、目の前から視界がなくなると、王の緑色の瞳は遠くにかき消されていく。ジェニーが安堵して次に目を開けたとき、ケインの唇は笑みを失い、彼はジェニーをじっと見つめていた。

「あなたって――男の人なのに、きれいな顔をしてるのね」

ジェニーが思わずそう口にすると、ケインがそれを否定するかのように首を振った。

それからケインは目を上げ、床についていない方の手をジェニーの首の後ろに向けて伸ばす。ジェニーが息を小さく飲むと、ケインが身を寄せながら囁いた。

「きみの方が、ずっときれいだ」

首にまわされた彼の手は温かく、その手が導く先にはケインの顔がある。ジェニーの顔が近づくと、彼は瞳を明るく輝かせて笑みをこぼした。ジェニーは彼につられて笑った。

ケインの唇は渇いていて冷たかったが、ジェニーが唇を離した後に鼻の上にそっとつけられた彼の唇には、心地よい温もりが戻っていた。

ジェニー、と彼女の頬の上でケインが囁く。返事のかわりにジェニーが小さく頷くと、ケインがためらったように息をついた後、さらに小さな声で囁いた。

「きみは泳げる？」

「ええ、泳げるわ」

胸に沸いた疑問の全てをおしとどめ、ジェニーは答えた。

よかった、とケインは独り言のように言い、ジェニーから体を離して、下を向く。ケインの次の句を待ちながらジェニーが彼の波打ったブロンドの髪を見ていると、彼がおもむろに頭を上げた。熱情のこもったさっきの表情とうってかわり、真剣そのものだ。

ジェニーが続きを促すと、彼は一瞬だけ視線を泳がせた。不安と期待に胸を高鳴らせてジェニーがなおも彼に先を促そうとすると、彼は、わかっているというように片手を上げた。

「――城外へ通じる出口が見つかったんだ、ジェニー」

ジェニーは反射的に彼に頷き返した。

ケインの硬い声が淡々と説明する。

「前にも話したように、地下水路を通っていく。水路をたどってい

くと、最終的に城の北側にある貯水池に繋がるんだ。その貯水池というのは城壁を挟んで造られていて、水中には柵のついた水の出入口がある。そこを泳いで通り抜けられれば――城壁の外に出られるんだ。柵はいくつか壊しておかないと人間が通り抜けることはできないけれど、それは、私が事前にやっておく」

――外に出られる。

彼の報告を耳にしながらジェニーは自分が泳ぐ姿を頭に思い描いたが、それはさっきまで彼女の頭の中でずっとめぐっていた過去の残像の一つのようだった。ジェニー、とケインに目の前で名前を呼ばれるまで、ジェニーは、彼が話をしている姿さえも現実とは受け入れられずにいた。

「どうしたの、大丈夫？」

「あ……ええ、大丈夫よ。私――びっくりして」

自分の放った言葉が頭の中で反響している。

ケインは心配そうにジェニーを見上げ、ジェニーは彼を安心させるために再び、大丈夫、と繰り返した。

ケインがジェニーの背に両腕をからませてジェニーの体を抱き寄せ、彼女の頬に唇を押しつける。ジェニーは片手を床について不安定な自分の体を支えながら、ケインの頭を反対の手で包むように抱きしめた。

「私とここを脱出しよう、ジェニー」

夢の中での宣告のように聞こえて、ジェニーの手の力がふわりと抜ける。ジェニーの右手が体の重みに耐え切れずに全体重がケインに寄りかかり、ジェニーを受け止めようと反応したケインの体が瞬間的に後ろに揺れた。ジェニーはケインの肩にしがみついたが、彼の体がたじろいだのはそれきりだ。

「ごめん、平気？」

「大丈夫よ」

ジェニーはいまだにケインの説明に実感がわかず、夢見心地のような気がしていた。でも、背にまわされたケインの腕の感触は本物

だ。彼の腕の温かさを感じながら、これが混迷の地から自分を救い出せる唯一の道だ、とジェニーには思えてならなかった。

彼がジェニーの額に唇をつけ、彼女をひとしきり抱きしめる。

「ああ、ジェニー。きみとは数えるほどしか会ったことがないのに、私はもうきみが大好きだ。きみに会えてよかった」

ジェニーの肩に顔をうずめながら、ケインが嬉しそうに瞳を閉じている。

「私も、あなたが好きよ」

彼は片目を開けてジェニーを見ると、幸せそうに瞳を揺らした。ケインは心から幸せそうに笑い、その笑顔は人を惹きこむ。

ジェニーは彼の笑みに重ねて微笑んだ。ケインの体温を感じていると、ジェニーの頭もゆっくりと平静を取り戻していくような気がしていた。

しばらくして、消え入りそうな声でケインがジェニーを呼んだ。

「決行は……剣技大会の前夜にしようと思う」

ケインがジェニーの肩から顔を上げ、ジェニーの瞳をまっすぐに見つめる。

「剣技大会なんてあるの？」

「毎年、今月末くらいにあるはずだ。専用の闘技場で三日間にわたって剣の腕を競い合う大会で、観客は貴族のみだけど、誰でも出場可能だ。開催前夜には城で大きな宴が催されるから皆の注意はそちらに向くし、衛兵たちも浮き足だつだろうから、人の目を盗んで城を抜け出すには最適な日だと思う」

ケインはジェニーの背にまわす腕に力をこめ、言った。

「だから、その日がいつか、調べておいてほしいんだ」

ケインの腕がかすかに震えていて、彼の抑えきれない不安と緊張が伝わってくる。

「わかったわ」

ジェニーはケインの瞳を見て答えた。彼もジェニーから目をそら

さない。
「ジェニー、私と一緒に……逃げてくれるね？」
ジェニーは迷わず、ケインに同意した。
「もちろんよ」
ケインの表情がほっとしたようにゆるむ。
ところが、ケインの問いに答えるなり、ジェニーは妙な違和感に急に襲われた。説明しがたい切なさがジェニーを引きとめ、行く手を阻もうとしている。
ジェニーが不可解な自分の感情に戸惑っていると、ケインが訝しそうにジェニーを見た。ジェニーはケインを心配させないようにと無理に笑い、何でもない、と彼の肩を軽くたたいた。
「きっと、うまくいく。これからは毎夜、私はエクリシフェに私たちの成功を祈るわ」
それを聞いたケインがびっくりしたように眉を上げた。
「それ――まさか、月の女神のこと？」
ジェニーは目を見開き、彼を見返す。
「知ってるの？」
「娘が魔王の城から逃げ出したときに月光で夜道を照らして正しい道筋を教えたっていう、エクリシフェのこと？　もちろん、知っているよ。これはヴィレールの神話で、私はヴィレール人だからね」
ケインがジェニーの返答を待つように見つめるので、ジェニーは小さく肩をすくめた。
「ヴィレールの神話だとは知らなかったわ。きっと、有名なお話なのね。私が幼い頃、父にその話をよく聞かされたの」
ケインはどことなく腑に落ちない様子だったが、ジェニーがケインに手を伸ばして微笑むと、彼は彼女を見返しながらその手を取った。
「膝を床について」
ジェニーがそう言うと、ケインはジェニーの意図をすぐに察したらしい。開放された窓の方に向き、彼はジェニーに並んで右ひざを

床につけた。
「きみとこうやって祈る機会があるとはね」
「私はあまり信心深い方じゃないけど」
「大丈夫、私はそれなりに信心深いから、神は私の祈りなら聞き届けてくださる」
「ケイン！」
ケインがくぐもるような声で笑い、ジェニーに片目をつぶってみせる。
「怒らないで。さ、一緒に祈ろう。二人で祈れば、彼女はきっと、娘にしたのと同じように私たちをお導きくださるよ」
ジェニーは納得して頷いた。ケインとつながれたジェニーの手が淡い月光の中で揺れ、床に薄い影を落とす。
ジェニーの手にキスをし、私たちをどうかお救いください、と、ケインがつぶやいた。そうしながら、彼はジェニーに目を閉じるようにと促す。ジェニーは言われるままに静かに目を閉じ、彼の言葉を口の中で繰り返した。追ってくる魔王の手から娘を護ったように、とケインが続けると、ジェニーはゴーティス王の冷笑をまた思い出した。「魔王」という呼び名が彼を思いおこさせたのだ。
ジェニーは何気なく、自分のお腹に手をそっと伸ばした。
静かで穏やかな夜だった。隣室からは物音も聞こえない。隣にいるケインが真摯に祈りを捧げる声がしばらく聞こえ、ジェニーもそれを復唱した。
ところが、その行為とは裏腹に、ジェニーがいくら待っても祈りにはちっとも集中できなかった。そればかりか、ジェニーが彼と共に祈ろうとすればするほどに落ち着かなくなって、気が散ってどうしようもないぐらいだ。
ジェニーは仕方なく目を開けた。月の青い光は二人の体にまで届き、月の女神に祈るにはぴったりな夜だというのに。
ケインはジェニーの様子には気づかず、穏やかな表情で祈り続けていた。

第一部　5．王の子－7

隣国からの使者を無事に送り出した次の日、朝早いうちから青空は広がり、すがすがしい空気が王城を包んでいるというのに、サンジェルマンの心はどうにも晴れなかった。昨日の夕方に知ったばかりの知らせは彼の気を散らせ、昨夜の眠りまで浅くした。

王の執務室に続く廊下で、サンジェルマンはその予期せぬ報告をした張本人である女官長と合流すると、まずは隣にいた侍従長に黙礼し、続いて彼女に挨拶した。侍従長の緊張した表情から、彼も同様に事情を知っていることがうかがえる。女官長はサンジェルマンに言葉短かに挨拶を返したものの、発した声が既にうわずっていて、彼女が尋常でないほどに興奮していることが彼にも手に取るようにわかった。そしてその態度は、サンジェルマンの心をさらに重くする。

朝の執務室には既に王が姿を見せており、先客が一人いた。隣国の使者との調整役を担当していたランス公だ。三人が室内に入っていくとランス公はやや硬い笑みを浮かべて会釈し、王の許可を得てそそくさと退室していった。

王は三人から順番に挨拶を受けながらそれぞれの顔を興味深そうに見て、最後にサンジェルマンを値踏みするように見た後、それまで座っていた椅子にさらに深く腰掛けた。

「今日はどうやら、ものめずらしい報告が聞けるようだな」

王の面白がった口調が、女官長の体をほんの一瞬、身震いさせた。

女官長がもたらした報告に、王は皆の予想どおりに大きな驚きを見せはした。だが、王はそれをあっさりと一蹴した。

「王には初めてのことでにわかには信じ難く、いえ、驚かれても無理もないとは存じますが――」女官長が震える声で先を続けると、王の視線が冷ややかに変わった。

「ありえぬな」

「王、このような重大事に誤りがあってはならないと時期を待ち、何度も侍医に確認をとった結果にございます。王、ジェニー様がご懐妊されていることは――間違えようのない事実なのです」

「女官長、おまえ……」

王がテーブルの上で両手を組んで、あきれたように顔を小さく横に振っている。サンジェルマンがそれを知ったときと同様に、王も彼女の報告を全く信じていないのだ。

昨日この話を知ったサンジェルマンも、「ありえない」と王と同じ言葉を口にして笑ったものだ。最初はまるっきり信じようともしなかった。ところが、女官長の横にいたアリエルが怪訝そうに自分を見返す表情を見つめるうち、彼は以前からの彼女たち二人の接触に、特別な意味があったことを突然に理解した。アリエルは、憶測で物事を判断しないはずだ。サンジェルマンはアリエルを見つめながら、つきつけられた事実に驚愕して、言葉を失った。

無言の王が作り出す緊張に朝の執務室が飲み込まれようとしていた。女官長は王の反応にひるんだらしく口をつぐみ、サンジェルマンは彼女の期待と喜びに輝く顔が瞬く間にしぼんでいくのを見ながら、彼女に同情していた。彼女の隣に立つ侍従長は、この場の状況に困惑を隠しきれない様子だ。

「ありえぬ」

女官長にあらためてそう繰り返した直後、王が眉間に大きな皺を作って顔をしかめ、大きな音をたててテーブルに肘をついた。王が、顔を覆った手の下で何やら毒づいている。王はため息をつきながら何度か頭を左右に振り、手で口を覆った。

何が王に起きたのか分からずに誰も何も口をはさめない中、王が呻いた。

「あの女……」

悔しそうにも聞こえる口調で王が呟き、顔を上げた彼とサンジェルマンの視線が合った。すると、王は唇を噛んで彼を見返し、眼差

しを鋭く変える。
少なくとも、これは王が望んでいた展開ではないらしい。
とすれば、今回の件については王の信条が曲げられたのではなく、用心深い彼にあるまじき過失か、不注意による結果だということだ。
王が顔を両手で抱えたまま、低い声で嘲笑した。
「――俺の子だと？　あやつがこの俺の、子を？」
王が突如立ち上がり、女官長の前までつかつかと歩いてきた。生気を体中にみなぎらせ、唇には冷笑にも似た微笑がのっている。彼が近づいてきただけで、サンジェルマンたちの周囲の空気が彼の迫力に負けて後退していく。
「今の話はまことであろうな、女官長？　俺をたばかると……承知せぬぞ！」
「は、はい、もちろんでございますとも！　来春にはご出産を迎える予定にございます！」
女官長の返答を聞き、王は目をひん剥いたかと思うと、三人にくるりと背中を向けた。そして、床を大きく踏み鳴らして、さっきまで座っていた椅子に戻る。
王はテーブルに両足を乗せ、何かを深く考えこむように押し黙った。執務室には張りつめた緊張と沈黙が再び流れ、サンジェルマンは女官長とは別の意味で王の反応をつぶさに観察した。王の顔には、ほんのわずかだったが、戸惑いが行き来していた。

女官長からの最初の報告以外に、特に目新しい連絡事項はなかった。一連の報告が終わって三人が退室の意を告げると、王が女官長を引き止めて訊いた。
「ジェニーの一件はどこまでの人間が知っておる？」
「今のところは、侍医と彼女の侍女や召使、それに私たちだけです」
彼女の返答を聞くと、王は満足そうに頷いた。
「当分の間、俺が許可するまではこの件を他言するな」
女官長は一瞬の間の後に神妙な顔をして、はい、と返事をした。

三人が退室しようとすると、今度は、王はサンジェルマンに部屋に残るように告げた。

「おまえに所用がある、サンジェルマン」

ジェニーの妊娠の一件を聞いて以来、サンジェルマンは王がそう言い出す瞬間を予感していたようなものだ。

「はい、王」

女官長と侍従長が去ってから彼が王を見ると、王は素っ気なく顎をしゃくって、彼に部屋の奥の方に来るように示した。

サンジェルマンが王の座る席の前に立つと、王は彼を上目使いに見て、肩を揺すって笑い出した。その低い声には嘲りが混ざっていて、彼は、王が王自身を笑っているのだと理解した。

「見たか、女官長のあの得意そうな顔を！　これがまるで自分の手柄とでも言いたそうな顔であったぞ！　サンジェルマン、おまえはいつ知った？」

「昨日です。すぐにでもご報告にあがりたかったのですが――」

「ふん。これが昨日でも今日でも、どちらにせよ同じこと」

皮肉そうに笑う王の顔を見ながら、サンジェルマンは、確かめずにはいられないことを口にした。

「王、本当にジェニー嬢には……？」

彼がそう切り出すと、王は笑いをぴたりと止めて、挑むように彼を見返した。だが、すぐに視線をそらし、大げさに息をついて彼に答えた。

「あやつは俺以外に男を知らぬ、俺のほかに誰がおると言うのだ？　まったく、あれほど注意しておったというに――俺の、なんと愚かなことよ！」

「そうでしたか」

王がじろりとサンジェルマンを見て、テーブルから足を降ろす。

「あやつは他の女たちと違って俺に抗い、逃れようとするゆえ、俺は何度か……二、三度ではあるが、俺自身がし損じたこともあれば、ジェニーに避妊剤を飲ませそこねたこともあった」

想像の範疇にあった回答に、サンジェルマンは静かに王に頷き、理解を見せる。王は自分の過失に悔いているような口ぶりだった。王はこれまで、子種のない、継承者を生むには致命的な欠陥を持った王、という屈辱的な皆の噂をものともせずに徹底した避妊を心がけてきたのだ、ジェニーが抵抗する状況を考慮すれば、王を一方的に責めることもできまい。

「彼女は妊娠三月、いえ、もしかしたら四月目に入っている、とのことでしたね」

「そのようだな」

サンジェルマンの前で王が表情を引きしめ、彼の言葉を待つかのように瞳を見返す。

ジェニーの笑顔を思い浮かべるとサンジェルマンの良心が痛まないわけでもない。だが彼は、王が庶子を持つことをどんなに恐れているか、あまりにも知りすぎている。

数年前、とある下級貴族の娘が王の寵愛を受けて子を孕んだはいいが、彼女の妊娠が公となる前に、王自らが腹の子共々、その命を奪った事がある。女の存在がきっかけで、王や当時はまだ成人前だった王弟を亡き者にした後に、彼女の産む子どもを擁立して勢力を広げようと暗躍していた一派の存在が明るみに出た。主犯の男は死罪となり、王暗殺未遂の名の下に男の一家は滅亡の憂き目にあった。一家は王の実母の実家に流れを組む分家であり、その半数以上の人間が何らかの形で死を迎えたため、この事件は今でも恐怖をもって語りつがれている。ただし、ほとんどの者は、その事件の主軸計画に沿った女の妊娠の事実を知りはしない。

王位継承の不要な争いを巻き起こす種となりえる分子は、この世に存在させてはならない。

「早めに手を打たねばなりません。こんなこともあろうかと……子を流す薬を入手してあります。ただし、母体を多少の危険にさらすことにはなりましょうが――」

「そうよな」
王に少しの動揺が見えたのは、サンジェルマンの目の錯覚ではないようだ。
「されど……しばし待て」
望まぬ妊娠の結末など想定できていただろうに、と彼は意外な思いで王を見返した。
「それほどの猶予はないのですよ、王？　あまり遅くなると母体への危険が増します」
「わかっておる」
王が決まり悪そうに視線を横に流し、サンジェルマンはますます意外に思って彼を見つめた。
「王が彼女を心配されるお気持ちは理解しますが……子のもたらす影響がどれほどのものかは――」
王がかっと目を見開いて、椅子から滑り降りた。
「それを俺が知らぬと言うか！」王の両手がサンジェルマンの胸ぐらをひっつかみ、彼の鼻に触れるほど口を近づけ、顔をひどくゆがめて怒鳴った。「他でもない、この俺自身が身をもって知っておることぞ！　子の存在がどう影響するかなど、それを俺が知らぬとでも言うか！？」
「いえ、決して――」
「俺は子を始末することに何の躊躇もしておらぬ！」
王がサンジェルマンの体を床にたたきつけるようにして倒した。
「子、だと？　おお、あの女、よくぞ俺の子を孕んでくれおった！　子の存在がどれほどに影響力を持つか、ジェニーは、あやつは運良く庶民の出だ、まったく想像もできぬだろう！　あの女の場合、庶子の王位継承権を主張することなど考えつきもせぬはず！　されど、母親の意思も身分も関係なく、周囲は庶子の存在を最大限に利用しよう！　それを――おお、それを俺は人一倍、わかっておるわ！」
王の怒鳴り声は怒りにあふれているのに、妙に哀しさばかりが胸

に伝わってくる。
サンジェルマンは床にぶつけられた肩や腕の痛みも忘れて、醜くゆがんだ王の顔を見つめた。
あの一族の話がからむと王は例外なく激昂し、手がつけられなくなる。王があのときの娘を愛してやまなかったことも、彼女は王など少しも気にもかけていなかったことも、サンジェルマンは把握している。でもだからといって、王の心の深い谷間を埋めてやることは彼にはできないのだ。
「王――」
王が興味をなくしたように、サンジェルマンからいきなり手を放した。そして、吼えるように罵り声をあげ、テーブルを力まかせに蹴りつけた。
王が落ち着くまでしばらく待ち、サンジェルマンは彼がやっと顔を上げたときを見計らって、声を掛けた。
「それでは……私はもう少しだけ待つことにいたします」
王が鋭く彼を見据え、彼の意味するところを理解したのか、無言で頷いた。
「いつでも手は打てるように、準備だけはしておりますゆえ。その時が来たら私に教えてください」
王が唇を真横に引き、わずかに目を細めて床を見つめた。サンジェルマンは幼少の頃より王の剣仲間で、当時はまだ王子だった王が、そんな表情を見せた後には必ず、人知れず涙を流していたことを覚えている。それはほとんどが悔し涙だったが、いつの頃からか――おそらくは母親を断罪したときあたりから――、サンジェルマンが王の涙を目にすることもなくなった。
自分の肘にできた擦り傷から血がにじんでいるのを見つけ、サンジェルマンは王の全身に目を走らせた。
「傷の手当てをさせましょう」
王の横に立って、出血している王の手の甲をサンジェルマンが指

し示すと、王がせせら笑うように言った。
「いらぬ」
「そうはまいりません」
王がむっとしたようにサンジェルマンをにらんだが、彼は負けずに笑い返した。
「王が負傷されたのに放置したといって女官長に叱られるのは、常に私なのです。私だとて、あの甲高い声を長々と聞かされるのは相当な苦痛ですよ」
サンジェルマンがなおも笑顔を見せると、王の眼力が若干弱まったようだ。王からの反論がなかったのを同意と捉え、サンジェルマンは人を呼び、傷の手当てをさせる手配をした。

召使が去り、サンジェルマンが王の席の方に振り返るとそこには彼の姿はなく、彼は窓際に移動して外を眺めていた。視線が下に向いているので、後宮と東館に挟まれた中庭を見ているのだろう。窓際からなら後宮のサロンも見えるはずで、王は、今日はそこにいるはずもないジェニーの姿を探しているのかもしれない。サンジェルマンは漠然とそう思った。
「王」
サンジェルマンの呼びかけに王が振り返り、テーブルの方へと戻ってくる。
「他に所用がないようであれば、そろそろ閣議の時間にもなりますゆえ、私はこれで戻ります」
「用事は他にない」
サンジェルマンはいつもより丁寧に退室の挨拶を述べ、王が彼を送り出そうとした。しかし扉を開く前にサンジェルマンはふと立ち止まり、疲れた様子で椅子に体を沈めようとする王を見て、再び王の方に歩みを戻す。王が怪訝そうに眉を上げた。
「王、これはよい機会です。この際――しかるべきところから、正妃を娶られてはいかがです?」

王に口をはさませる前にサンジェルマンがそう言いきると、王が唖然としたように彼を見返した。

「国外の、由緒ある家の娘がよいでしょう。今回の来訪国は国力にいささかの不安がありましたが、近いうちに使者がおみえになるカローニャは、広大な面積を持った大国です。何人かの王女がおられるとも聞いております。それ以外にも、ヴィレールの名は諸国にとどろいているはずですから――それゆえ、最近になって各国がこぞって使者をよこすのです、王さえその気になれば、妃のなり手はいくらでもありますよ」

「俺が……結婚だと？」

「はい。何の不思議がありましょう？　一国の王たる方が独り身だからこそ、様々な問題が生まれてしまうのです。独身でい続けることには限界があるのです。ジェニー嬢が流産し、女官長がそれを城内で公にしてくれれば――王が子を為せると知れば、これまで王妃選びに重い腰をあげなかった大臣たちも、すぐにでも動いてくれましょう」

王は目をぎらぎらとさせてサンジェルマンの言葉が終わるまで黙って聞いていたが、彼が言い終わって王の抵抗を待っても、彼の予想に反し、王は一言も言葉を発しなかった。ただし、それ以上にサンジェルマンに言葉を続けさせるのは許さなかった。

「王？」

「出て行け」

低くかすれた声で、王が彼に命令した。

第一部　5．王の子－7（後書き）

読んでくださる方々、読んで感想・意見までくださる方々、私が執筆する上でホントに大きな励みとなっています。
どうもありがとう！

☆Ｍｅｒｒｙ　Ｃｈｒｉｓｔｍａｓ☆

第一部　5．王の子ー8

ジェニーが自身の妊娠を知って一日経ち、王は訪問を約束していた夜になっても、ジェニーの前に現れなかった。急用ができたのだという。

王の存在に邪魔されないおかげで、ジェニーはケインとの前夜の約束を事実として徐々に実感できるようになり、彼との再会と思わぬ脱出計画がジェニーの心の負担をずいぶんと軽くはしてくれた。でもその一方で、王に手を下すことなく志半ばで去ってしまうことへの迷いや、説明のつかない、去りがたい想いは、彼女の胸にずっと渦巻いて消えていない。それに、王の子が胎内にいる事実もいまだ、彼女にはうまくのみこめていない。

ジェニーの前日の動転ぶりを心配して、召使に加え、アリエルまでが前夜から泊まりこみで彼女の側に付いていた。ジェニーの頭は食事の一切を拒否していたが、残念ながら、彼女の食欲は失せてくれない。アリエルが言うには、ジェニーの腹にいる子が食事を要求しているからだそうだ。

次の日になっても、ジェニーはアリエルと口をきく気にもならなかった。だが、ジェニーがうたた寝をして目覚めたとき、自分が眠りに落ちる前と同じ姿でアリエルが傍らにいてくれたのを見て、彼女には心配をかけてはならない、とジェニーは思った。そして、赤の他人の、年も身分も下の自分に献身的に尽くしてくれる彼女に、あらためて心を打たれた。

「どうしました？」

いつもと変わらないアリエルの声に、ジェニーは胸がつまる。

「まあ。どうされたのです？」

「このままでいさせて」

ジェニーがアリエルの手に自分の手を伸ばすと、彼女はその手を見て微笑みを浮かべ、ええ、そうしましょう、と優しく囁いた。

「……あなたは、私の母親みたいよ」
ジェニーがつぶやくと、アリエルがしたり顔で答えた。「では、私はとても幼い頃に母親になったのですね」
ジェニーがしのび笑いをもらすと、アリエルの同様の声がそれに重なった。その後にしばしの沈黙が流れたが、苦痛な時間にはならなかった。
「ジェニー様、こんなことを申し上げるのは失礼だとわかっておりますが」アリエルが遠慮がちに切り出し、ジェニーは彼女に笑いかけて先を促す。
「ジェニー様は、私の実家にいる末の妹によく似ておりますよ」
「妹に似ているぐらいで失礼にはならないわ」
アリエルが楽しそうに口角を上に向け、「今から申し上げることが失礼なのですよ」と笑う。
「私の末の妹はシャーロットと申しまして、年もジェニー様と近く、私とちがって髪の色も同じような明るい栗色ですわ。乗馬もいたします。彼女はとても元気で、いえ、元気すぎて、兄や友人たちとよく騒ぎを起こすものですから、母が嘆いておりますわ」
女官長様に叱られるジェニー様のように、とアリエルが付け足す。
「そうね、私に似ているかもしれない。でも、アリエルとはあまり似ていないようね」
「彼女は父親に似たのでしょう。私も彼女を見ていて心配なところはありますが、情の深い、優しい子です」
アリエルがジェニーとつないだ手に力を込めたので、ジェニーも彼女の手を握り返した。
「アリエルはシャーロットが大好きなのね？」
「もちろんです。それに、ジェニー様も」
「私もあなたが大好きよ」
もったいないことを、と、アリエルは言ったが、彼女が嬉しがっていることはその笑顔から明らかだった。彼女の笑顔を見ていると、ジェニーのねじれた心がだんだんとほぐれていく。視線が合った二

人は笑いあったが、ふと、アリエルがジェニーから視線を外し、声調を落として切り出した。
「ジェニー様、私はこう思うのです」
「うん？」
「ジェニー様の王に対するお気持ちがどうであれ、お腹の中の赤子は王の御子であり、ジェニー様の御子でもあるのです。生まれてくる子どもには、何の罪も落ち度もないのです。私は、シャーロットが家に生まれた日のことを今でも鮮明に記憶しております。あの子はとても愛らしくて――皆で守っていかなくては、と、私はまだ幼いながらも兄たちと誓いあったのです。そういったお気持ちを、いずれジェニー様も御子に持てるのではないかと。……いえ、ジェニー様であれば、もっと確固とした愛情を抱くのだと、私は少しも疑っておりません」
ジェニーは真顔となったアリエルを見つめた。
「それは、買いかぶりよ」
アリエルが大きく頭を振った。
「ジェニー様こそ、ご自分をわかっていらっしゃらないのです」
「アリエル、私はあの王が嫌いなのよ？　家族を――少なくとも私の兄を奪った彼の子を持つことを、私に喜べと言うの？」
ジェニーが反論すると、アリエルがめずらしく強い語気でジェニーに尋ねた。
「ではジェニー様、子の父親が王であるというだけで子までお嫌いになれますか？　せっかく授かった命なのに要らないと？　……ジェニー様、どうしてもというご所望であれば、お腹の子を始末する処置もないわけではありません」
そんな方法が存在するとは、ジェニーは予想だにしなかった。
「そんなことができるの？」
アリエルが頷くのを見て、ジェニーはそれが本当だと知り、さらに驚く。
「そんなことが、本当に？」

ジェニーがどう返事をすべきかと言いよどんでいると、アリエルが納得したように微笑んだ。

「ジェニー様は深い愛情を持てるお方ですよ。いずれ、ご自分でもおわかりになります」

彼女の用いた表現に、ジェニーは聞き覚えがあった。

その夜はアリエルがジェニーの寝室で付き添っていた。昨夜やその前夜よりもかなりすっきりとした気分で、今夜、深い睡眠が訪れるだろうことはジェニーにもよくわかっていた。ジェニーは寝台に体を横たえ、アリエルが長椅子にすわって肩をまわしている様を眺めた。静かな夜だった。

夜中、かすかな足音を聞いた気がして、ジェニーはふと目を覚ました。部屋はほぼ真っ暗だったが、天蓋から伸びる薄いカーテン越しに何かが動く様子が見える。

その前の晩にも、アリエルが夜中にジェニーの様子をたびたび確認しに寝台近くまで来ていたことを思い出し、ジェニーは大した注意も払わずに再び目を閉じた。体が急速に下降していく感覚があって、自分が二度目の眠りに入ろうとしているのだとジェニーは感じた。カーテンがそっと開けられる、小さな音がした。

温かで柔らかな手の感触。寝台脇に来た誰かの手が、ジェニーの手に触れた。

ケインを思い出し、ジェニーは夢の中でため息をついた。ジェニーが指をゆっくりと曲げてその手に触れると、その瞬間にその手がびくりと震えた。しかし、ジェニーが手をつかんで放そうとしなかったので、それは彼女の手をそっと包み返した。その温かさは、安心感を与える。

ジェニーが眠いながらも細く目を開けようとすると、彼女の手をやわらかく包んでいた誰かの手が動き、ジェニーの頬にその指が触れ、そして、頬全体が手で覆われた。信じられないくらいに心地よく、ジェニーは、自分の顔が自然にほころんでいくのを感じた。す

ると、その手が動いて、ジェニーの唇の上を二度、大事なものを触るように指を滑らせた。ジェニーは、夢の中で小さく微笑んだ。

何度試しても開こうとしないジェニーのまつ毛の向こうに、ぼうっとした白い人間像が見えた。その周りだけが光り輝いている。

ジェニーは目をもう少し開けてそれが何なのか見極めたかったが、周期的に襲ってくる眠気がやってきてジェニーの体の力は抜け、視界は闇に消えていった。

ここ数日間の口癖ともなっている“忙しい”という言葉を連発し、女官長が慌ただしくジェニーの部屋から立ち去ってしまうと、室内にいた誰からともなく笑いが起こった。召使二人は彼女の出ていった扉を見てはお互いに顔を見合わせて笑い、アリエルは二人をたしなめる。だが、アリエルの困ったような笑みは隠しきれない。

「女官長様はジェニー様を心配なさっておいでなの。ご自分の孫でも持つかのようにジェニー様のことを喜んでいらっしゃるから、少しでも時間があればここに顔をお見せになりたいのよ」

「でも、ここに来てまであんなに忙しそうにされなくても」

召使の一人がアリエルにそう言いながら、助けを求めるようにジェニーの顔を見る。

「そうね、いつにもまして慌ただしいわね」

ジェニーが彼女の肩を持つと召使たちはくすくすと笑った。

「まあ、ジェニー様まで。女官長様は実際にお忙しくて、気が急いておられるのですよ。城には滞在客もおられ、近く、大きな行事が控えておりますからね」

女官長を庇護しながらも、アリエルが召使やジェニーの笑いに誘われて表情を崩す。

一時期の落ち込みから比べると、ジェニーは比較的落ち着いていた。ここ数日、真夜中にジェニーの枕元に来るらしいケインの存在は心強い。それに加え、アリエルの説得が功を奏したのか、ジェニーは王の子とあえて意識をせずに、自分の妊娠について冷静に考え

られるようになりつつある。アリエルから追って教えられた“子の持ち方”を完全に理解し納得できたわけではないが、彼女が言っていた“子の始末”の処置を行わない限り――ジェニーはその選択をすべきかまだ迷っている――自分が妊娠している現実が覆ることもない。そう考えると、その現実を嫌悪感から否定しても何の意味もない。

退室していく召使たちの姿を見送って、ジェニーはアリエルとさっき交わしたばかりの会話をふと思い出した。

「――そういえば、剣技大会というのはいつ開催されるの？」

ジェニーが問うと、アリエルが首を傾げて問い返した。

「まあ、ご存知でいらっしゃったのですか？」

「ええ、ちょっと聞いたものだから」ジェニーが言葉を濁して扉の方に顔を振ると、アリエルも少し憤慨した様子で扉を振り返った。

「ジェニー様は剣に興味がおありですものね」アリエルが納得したように言い、ジェニーに視線を返す。「大会はたしか――今月の最終日が初日のはずですわ」

開催日から逆算すると、ジェニーとケインの脱出決行までは二週間足らずだ。それを認識するとジェニーの体が緊張して強張った。

「優勝者にはかなりの褒賞金が与えられますから、毎年、この大会には全国各地から勇士が集って剣の腕を競い合うのですわ。どの試合も見ごたえはありますが――ジェニー様、大会を観覧なさりたいのですか？」

「見物できるのでしょう？」

観覧する気はなかったがジェニーがそう答えると、アリエルが諭すような口調に変わった。

「ジェニー様のことですからそう仰せになると思ってはいましたが……今はお体のこともありますから、ご無理をさせるわけにはまいりません。今回はおやめくださいませ。王も、外出を許可されないと思いますわ」

アリエルの口ぶりは穏やかだが、表情はいたって硬い。
「そう……」
ジェニーが反論せずにいると、アリエルは安堵したように表情をやわらげた。
「剣の使い手といえば――あの王も出場するのでしょう？」
「王が？　まあ、めっそうもない！　王は剣に関しては秀でた才能をお持ちですが、そんな危険な場にお出になって出場者たちと剣を合わせるなどとんでもない！　王は、初日と最終日に観覧席で試合をご覧になるだけでございます」
「そうなの？　あの王のことだからてっきり、参加するのだと思っていたわ」
ジェニーが何気なく言うと、アリエルがジェニーの顔を不安そうにうかがい、ためらいがちに言った。
「ジェニー様、王は以前より常々、大会の上位進出者たちと交剣されることをお望みだそうですわ。王がその者たちに負けるとも思いませんが――後生ですから、ジェニー様から王に、出場を後押しするような発言はなさらないで下さいませ」
ジェニーは彼女の懸念を知って唖然とした。
「そんなこと、考えもしないわ。話す機会なんかないもの。あの人は近頃特に多忙で、私が接する機会すらないじゃない」
するとアリエルが意外そうに瞳を見開き、ジェニーを茫然として見つめる。
「どうしたの？」
「まあ。では、ジェニー様を起こされなかったと……？」
「……何のこと？」
アリエルは手で喉を押さえて深い息を吐き、切ない目をしてジェニーを見た。
「アリエル？」
「なんといじらしいこと。ジェニー様を……それほど想っていらっしゃるのですね」

「アリエル？　何の話なのよ、ねえ？」
問いに答えようとしないアリエルにジェニーが口を尖らせると、彼女は笑顔に戻って言った。
「ジェニー様、今日は昼寝をたっぷりしておきましょうか」
「昼寝を？　なぜ？」
アリエルはジェニーの問いには答えず、愉快そうに微笑むだけだ。

アリエルの勧めどおりに昼寝をしはしなかったが、ジェニーはその夜、王城脱出の日を思って人知れず緊張していたことと、アリエルの意味深な物言いが何となく気になっていたせいもあって、うまく寝付けなかった。身体は休息を必要としていて早く眠りに落ちたがっていたが、ジェニーの目はさえていく一方だ。
何度かむなしく寝返りを繰り返し、仰向けに姿勢を戻して、ジェニーは数度の深呼吸を試みた。ひんやりとして気持ちのよい空気が体内に取り入れられ、手足の先からゆるやかに力が抜けていくのを感じながらも、やはり、ジェニーが眠気に誘われることはない。
剣技大会の日取りを教えるためにケインを訪ねたいとも思ったが、隣室に控えている召使がいつジェニーの寝室を覗きに来るかもしれない。ジェニーの体調を案じて召使が当分の間は常駐するようになったと知ったのは今日のこと。思えば、夜中に訪ねてきていたケインと召使が部屋で今まで鉢合わせなかったのは、偶然とはいえ本当に幸運だった。
ジェニーは胸の上で両手を組み、天蓋を見上げる。
「大変、ケインにそれを警告してあげないと！」
階段に“合図”を置かなければ、とジェニーが身を起こそうとしたとき、寝室の扉のすぐ近くで誰かの話し声が聞こえ、ジェニーは慌てて寝台に身を戻した。声はまもなく消えたが、室外から扉の開けられる気配。
ジェニーは急いで横向きに体勢を変え、息をひそめて体の動きを止めた。扉が静かに閉まり、辺りをはばかるような靴音が室内を歩

いている――召使ではない。アリエルとも違う。

ジェニーは考えをめぐらせながらも、目覚めていることが相手に悟られないようにと目を固く閉じた。ほどなく、ジェニーの左側にある薄手のカーテンに何者かが触れた。

ジェニーは無意識に息を殺し、それが誰であれ、自分のもとから去ってくれるときを待った。天蓋から垂れたカーテンはいつまでたっても引かれない。だが、その場を去っていく靴音がしないため、その人物はカーテンの薄布一枚越しにジェニーと相対しているはずだ。

ジェニーは身を硬くして動かず、あまりに長く感じられるその瞬間の到来を待ち続ける。

突然に、それまで息づかいすらしなかったのに、湿ったため息がジェニーの背後で聞こえた。遠のいていく足音がそれに続き、木のきしむような音がしたので、ジェニーはその誰かが寝台近くの椅子に腰掛けたのだと判断した。そして、また、さっきよりは少し長い吐息。

ジェニーは両目をそっと開いた。胸の鼓動が早まっている。

ジェニーの寝室に出入りできる人間などほんの一部の者だ。それも、彼女の就寝中に。

寝台脇にいる人物の正体の見当がつくと、ジェニーの鼓動はさらに早く激しくなり、静まりかえった室内の空気を伝わって、当人に届いてしまうのではないかと思うほどに高鳴った。ジェニーは自分を必死に抑制しようと心の中で数を数えて、ごくゆっくりと息を吐いた。

できるだけ自然に見えるように、慎重に、ジェニーは寝返りを打って仰向けになった。寝台の左側の方に注意を向けていたが、椅子に座る人物が動き出す様子は感じられなかった。ジェニーは左目を少しだけ広く開け、カーテンの薄布を透して侵入者の正体を見極めようとしたが、淡い明かりの手前にいる人間の顔は影になっていて、

目鼻だちさえ確認できない。ただ、明かりの炎に照らされ、頭の輪郭が白く輝く線となって浮き立っている。

――ゴーティス王だ。

ジェニーは自分の目がとらえた彼の姿に半信半疑になって、抑えていた息を少しずつ吐いた。

就寝中のジェニーの部屋に入ってきた彼の意図は知らないが、下手に動くか音をたてるかして彼の注意を引き、不要な刺激を与えることはジェニーも避けたかった。

そのうちに、椅子の上で膝を立てていた彼がふと寝台の方に顔を向けた。驚きのあまりに声をたてそうになるところを何とか抑え、ジェニーは早くなった脈を弱めようと意識してゆっくりと息を吐く。

すると、それを合図にしたかのように、彼が椅子から床に降り立ったのがジェニーの視界の隅に映った。そして――彼は床を踏みしめるようにしてジェニーの方に歩いてくる。

足音が止んでカーテンが開かれるまで、数秒の間があった。彼の行動は不可解で不気味で、ジェニーは寝たふりをしてやり過ごそうとしか考えられなかった。ジェニーは目を強く閉じすぎてまぶたが震えないように力加減を調整するのがやっとで、体の上に出しっぱなしの手のことまで考えつく余裕はなかった。だから、お腹の上にあった自分の手に王の手が触れると、ジェニーは反射的に手を大きく震えさせてしまった。

王の手はジェニーの手の反応に驚くこともなく、彼女の手全体を手のひらに入れるようにして上から覆った。逃げようと思えば簡単にできるほどにしか彼の手には力が込められていなかったが、嫌悪や恐怖のせいでなく、ジェニーの手から力は抜けていた。王の手はジェニーのそれよりずっと温かく、彼の手に重ねられたジェニーの手の甲が、じわりと温かな熱を持っていく。

この温かで柔らかな手の感触と心地よさを、ジェニーは既に知っていた。

ここ数日間、不安ややり切れない思いにさいなまれていたジェニ

ーの心を支えてくれたのは、この夜中の手の温かさだ。
ジェニーは自分の思い違いに気づいて叫び出したくなった。
訪問者はケインではなかった。よりによって、王の手を好ましく思うなんて。
彼の手の体温と同じにまで温められたジェニーの手から、彼の手が離れていった。次に彼はその手を下に移動させ、ジェニーの臍のあたりにそっと置く。掛布をとおして彼の高い体温がジェニーの腹にも伝わってくる。
ジェニーは彼がいつ自分の服を剥ぎ取るかと警戒を強めていたのだが、彼の手はしばらく微動だにせず、やがて、彼女の手に触れたときと同じように、体の上からいきなり消えてなくなった。
揺れるカーテンの作った風でジェニーは目を開け、カーテンの向こうにゴーティス王の後ろ姿を見つけた。彼は明かりの置かれた台に近づいてそれを手に取ると、もう一度ジェニーのいる寝台の方に振り返った。ジェニーと王はお互いの顔を見てはいたが、室内の薄暗さから彼女が王の表情を確認できないのと同様に、彼の側からも彼女が目を開けているところまでは見えないだろう。王はそれから踵を返し、そのまま部屋を出ていった。
彼を見送ったジェニーは脱力して、彼の手に包まれていた自分の手に視線を向けた。
毎夜、毎回、男の手が慈しむように握っていた、彼女の手。
ジェニーは“狩猟の館”での王の告白じみた言葉を心より信じてはいなかった。最近になってジェニーへの態度を軟化させた女官長が時々、「王の寵愛を一身に集める」とジェニーのことを形容してもジェニーにはしっくりこず、最も信頼のおけるアリエルが言う「王に想われている」という台詞も説得力に欠ける、とジェニーは思っていた。彼の言動からは、ジェニーへの多少の関心は見えるものの、それは彼にかしずこうとしないジェニーに対する征服欲と言えなくもない。それに彼は、ジェニーの知る、わかりやすい愛情表現をすることはない。

ジェニーは、王が掛布の上から触ったお腹を手でなで、彼の出ていった扉のある方向を見た。ジェニーの体に触れた彼の手から下心は感じられず、むしろ、愛情の類を彷彿とさせた。

まさか、そんなはずはない、とジェニーは頭をよぎった考えを即座に否定して、首を振る。

王の愛人と称する女たちは、大人の魅力にあふれた官能的な美女揃いだ。彼にとってのジェニーは、珍しい退屈しのぎの一種に違いないのだ。

ジェニーは寝台の上に身を起こし、暗闇に慣れた目で隣室へ続く扉を見た。隣室も既に沈黙を守っている。部屋の静けさの中で、ジェニーの心音だけがやけに響いている。

「だけど、もしかしたら――」

ジェニーは目をつぶり、小刻みに顔を揺らしてその考えを振り払おうとしたが、自身を納得させられなかった。王の本心はわからないが、その仮定を事実だとすれば、解決される疑問点がいくつかある。もし彼が、彼自身が宣言したようにジェニーを愛そうとしているのなら、連夜にわたる彼の不可解な行動も彼女の顔をのぞきにくるためだと、説明がつくのかもしれない。

ここまで来てなぜ自分を起こさなかったのか、と想像したところで、ジェニーははっと気づいた。そして、全身に鳥肌が立ったかのような寒気を感じた。

ジェニーの父親が早朝から夜更けまで働いていた頃、幼いジェニーは起きている時間帯に彼と会えなくて、彼の帰宅時に自分を起こしてくれない母親をなじったとき、母親は笑顔で言った。

「あなたのパパは、あなたが幸せそうにぐっすり眠っているのを起こすなんてかわいそうでできない、って。寝顔でも何でも、あなたの顔が見られるだけでパパは幸せなのよ」

自分の手に視線を落とすと、ジェニーは手の甲に感じていた王の体温を思い出して、愕然とする。

でも、もし本当にそうだったら……？

王の出ていった扉を見つめて、彼の揺れる瞳を思い出すと、ジェニーの心臓が、一度だけ、大きくあえいだ。

第一部　6．短剣の持ち主－1

ライアンとの約束時間まではまだ間があったが、サンジェルマンは本館を通って彼と落ち合う場所に向かっていた。

今日は、ライアンとは旧知の仲であるユーゴ・ベアールが来城する日だ。

ベアールと彼が会えるようにとライアンが事前にとり計らってくれたため、今日、二人は初めて会話らしい会話を交わすことになる。

腰に差したジェニーの短剣の鞘に触れると、サンジェルマンは、王が彼女の人工的な流産を示唆された際に見せた躊躇を思い出す。それと同時に、いやな胸騒ぎも沸きあがってくる。

本館と違って多くの使用人が行き交う西館に踏み入るなり、サンジェルマンは、ベアールが既に来ている、と勘づいた。年若い下女から年配の召使女までが、どことなく浮ついている。ベアールは外見にも恵まれているが愛想もよく、良くも悪くも女に対しては平等なため、身分や年代を問わず、女たちの間での人気は大変なものだ。女たちの落ち着きのなさはベアールの出現によるものだろう。

「ベアール殿はどこに？」

試しに一人の女を呼び止めて彼が問うと、女は嬉しそうに笑い、あっさりと返答した。

「二階においでです。先ほどは女官長様とお話をされているようでした」

サンジェルマンは女を解放し、階上に続く階段に足を向ける。こんな用事がなければ一生関わりのない種類の男だろう、とベアールの顔を頭に思い描きながら。

女官長の部屋に近づくにつれ、普段とは声色の違う彼女の話し声がサンジェルマンの耳についた。どうやら部屋の扉は開放されているらしく、戸口付近で彼女がベアールと会話をしているようだ。

女官長室の出入口の木枠に寄りかかるようにして、一人の男が室内に顔を向けてしゃべっていた。背はサンジェルマンと同じか若干低いくらいだ。茶色に近いブロンドの髪が顎より少し下までゆるやかに流れ、半袖からのぞく上腕筋は、剣の使い手だけあって見事なものだ。日に焼けた筋肉質の腕や足に生成りの上下服がよく似合う。腰帯には彼の象徴ともいえる、黒と銀色の二色使いの鞘に入った剣が差してある。

サンジェルマンに気づいた女官長の視線を追うようにして、ベアールが髪を揺らして振り向いた。鼻筋がしっかりとしていて、大きな青い瞳を持っている。彼とベアールの視線がぶつかった。

「これは――サンジェルマン様ではないですか！」

彼が目礼すると、ベアールが、びっくりするほどに愛らしい笑顔を向けた。

「後ほどお話ができると楽しみにしておりましたが――ご無沙汰しております！　お元気でしたか？」

ベアールが笑顔をたたえたままで彼に歩み寄り、彼の前で止まると再び、大きな瞳を嬉しそうに揺らして笑った。彼はライアンと同年代の三十歳前後のはずだが、笑うとできる目尻の皺は、皺の持つ意味とは逆に少年のあどけなささえ思い起こさせる。女たちはこの笑顔に太刀打ちできないのだろう、とサンジェルマンはひそかに納得した。

「私は相変わらずだ。貴公も元気そうで何より」

「ええ、私は変わらず達者にしておりますよ！」

二人はひととおりの挨拶を交わすと、女官長に振り返った。彼女に視点をあてながら、ベアールが尋ねる。

「サンジェルマン様、女官長様にご用だったのでは？」

「いや。貴公がこちらにいると聞いて、寄っただけだ」

ベアールがサンジェルマンに視線を移し、にっこりと笑った。それから、女官長の方にその魅力的な唇を向ける。

「女官長様、私はサンジェルマン様とお話があるので、これにて失

礼させていただきます。お会いできて嬉しかった」

ベアールが腰をかがめて女官長の頬にキスをすると、彼女は残念そうな表情を浮かべ、サンジェルマンの方を恨めしそうに見た。

「ベアール殿に確認いただきたいことがあって、ライアン殿に頼んで彼に時間を作ってもらったのだ」

そうですか、と彼女は落胆を隠しもせずに言い、ベアールをもう一度見上げた。ベアールが彼女に片目をつぶってみせ、少し困ったように笑う。サンジェルマンはまるで自分に非があるかのような彼女の反応に気分を少し害したが、気を取り直して彼女に挨拶をした。

ベアールは機嫌が良いようで、近衛の控室へ向かう道すがらに出会った数人に明るく挨拶し、サンジェルマンには何度か政治情勢の話題をふった。ベアールは社交慣れしている人物らしくなかなかに博識で話の切り返しもうまく、人に合わせた会話の展開法を心得ているようだった。そして、サンジェルマンの隣を歩いている限り、ベアールは女たちの視線に追われていると知っていながら、完璧にそれを受け流していた。

二人がライアンとの待ち合わせ場所に入ると、やはり約束の時間より早くに来て、窓の前に立っていたライアンが驚いたように二人を見た。

「先ほど、偶然にお会いしたのですよ」

ベアールが先に口を開き、ライアンに近づいていった。彼らは既に会って挨拶を交わしていたらしく、一言、二言だけ何かを言い交わすと、サンジェルマンのいる入口の方に振り返った。

ライアンが人払いをした後らしく、部屋には三人以外、誰もいない。サンジェルマンは中央に置かれたテーブルに歩み寄り、椅子を引いた。その対面にはいく分緊張した面持ちでベアールが座り、ライアンは席を取ることを拒んでサンジェルマンの斜め後ろに立った。開いた窓から漏れてくる昼間の喧騒がなければ重苦しい沈黙ばかりが流れる空間に、サンジェルマンが腰帯から短剣を外す音が響いた。

「早速だが、ベアール殿に見てもらいたい物がある」
サンジェルマンがそう切り出して視線を上げると、ベアールが頷いた。「何でしょう?」
ライアンの体がサンジェルマンに近づき、ベアールの視線もライアンに走った。
「これを」
サンジェルマンが鞘入りの短剣を紋章のある面を表にしてベアールの前に差し出すと、ベアールはそれを一秒も見ないうちに、拍子抜けしたように彼に問い返した。
「この短剣がどうかしましたか?」
「……貴公の家の物か?」
「ええ。かなり古い物のようですが――」と、ベアールは短剣を手に取って、興味もなさそうにひっくり返し、消えかかった意匠を見つめる。「誰の持ち物かまでは私にはわかりませんがね。これは当家の、ベアール本家の短剣ですよ」
一度確認して知っていたことだが、その家の人間からあらためて証言されると言葉を失う。サンジェルマンが黙ったかわりに、ライアンが口を出した。
「それがベアール家の誰の物か、知る者はいるのか?」
「それは、何とも言えませんね」
次に顔を上げたベアールは、興味深そうにサンジェルマンとライアンの顔を見やった。
「何やら事情がおありのようですね。差し支えなければ――私にも少し、お聞かせ願えますか?」
ライアンはそれにまつわる事情を知らない。彼もこの短剣に興味を持っていることをサンジェルマンは知っており、彼がわずかながらテーブルの方へ身を乗り出したことに気づいたが、サンジェルマンはベアールへの返答を拒んだ。
「協力を仰ぐ立場で申し訳ないが、詳しい事情は語れない。私がこの短剣の持ち主を特定しようと動いていることも、他言しないでも

らいたい」
　失望の色を瞳に浮かべ、ベアールが短剣に視線を落とした。手の中で短剣をもてあそぶようにして、紋章と意匠部分を見ている。
「ベアール殿、必要とあればこの短剣を託してもかまわぬゆえ、貴公の家で……誰の持ち物かを突きとめてもらえぬだろうか？　それに、過去に紛失または盗難にあった短剣の存在もあわせて調べてほしい」
　ベアールは難色を示した。
「しかし、当家は特に剣の類は多数持っておりましてね。探すとなると――」
「私からも頼む」
　ライアンが口をはさみ、意外な応援を得たことにサンジェルマンは驚いた。
「貴公の手を煩わせることにはなるが、ここはひとつ頼まれてやってくれないか」
　ベアールはライアンの顔を見つめていたが、やがて苦笑して、言った。「わかりました、お二人に頼まれては私だって断れませんよ。これは私がお預かりしましょう。少し時間はかかるかもしれませんが――家の者にあたってみます」
「恩に着る」
　サンジェルマンが真摯に言うと、ベアールが微笑んだ。
　それからベアールは短剣をつかむと、腰につけていた布袋に無造作に放り入れた。サンジェルマンは彼のぞんざいな短剣の扱い方が気にかかったが、ともかく、それが一週間か一ヶ月か、彼の持ってくる結果を待つ以外にはない。

◇　◇

　カローニャの使者を送り出して二日目、剣技大会まで残すところ、あと三日。

王の執務室の隣にある部屋ではランス公が自分の順番を待っていたのだが、彼の前に入室していった者と王の案件が長引くと、時間を持て余したらしい彼がやはり同室にいたサンジェルマンに愚痴をこぼし始めた。ランス公は諸国との外交を担当し、前回のアストリアや今回のカローニャの使者との調整に一役も二役も買った張本人だが、その訪問の二回ともが双方の国に実りある結果をもたらさなかったことに、ある程度の納得はしながらも、落胆と責任を感じているらしい。それはランス公が責めを負うことではない、とサンジェルマンが言っても、彼の浮かない表情は一向に変わらない。

「カローニャは鉱物資源の豊富な国だ、縁者となっても良かったのでは……。もしも、十二歳の第二王女ではなく美女と評判の第一王女を妃にと差し出してくれれば、王の気も――変わったのであろうか」

「ランス公、王は妃候補が気に入らぬからといって議事を否決なさるお方ではありませんよ。諸事情を総合的に判断なさって、ご決断されたまでです」

サンジェルマンは彼を見て、静かに微笑む。

二国の使者はともにヴィレールへの同盟申し入れを目的として訪問したが、両国の国勢や自国にもたらされるはずの恩恵を考慮し、現時点では同盟締結をしない、という最終決断をしたのはゴーティス王だ。その二つの英断について、サンジェルマンは王を誇りに思うとともに、昨年以前の彼との変化をはっきりと感じている。

特にアストリアはヴィレールより財力が乏しく、実質、ヴィレールへの併合を念頭に置いた同盟の申し入れだった。以前の王であったなら、国土拡大のためにその国を吸収してしまう選択をしただろう。だが王は、「今のヴィレールには新しい国土より国力の充実が必要」と、戦に明け暮れて各地を制圧した日々とは真逆の発言をして、反対者たちを黙らせた。

また、婚姻によるヴィレールとの同盟成立を提唱したカローニャ

は、十二歳になったばかりの第二王女をゴーティス王の妃候補として挙げ、彼女より年齢的に王に近い第一王女が直前に婚約が整った件を言い訳のように説明した。それは、兄王子たちからの信任も厚い第一王女を悪名高いヴィレールにやりたくないがための防御策では、とヴィレール側にカローニャの誠意を疑わせる一件にもなった。そして、その兄王子たちは、祖父である現王が体調を崩して以来、後継を争って不仲だという説が流れている。

「たしかに、次王が決まるまではカローニャの情勢に不安はあるがね……」

渋々ながらもランス公がつぶやいたとき、執務室の扉が開いた。すると、それまでの暗い顔はどこへやら、彼は瞬時に表情を明るく変えてサンジェルマンに別れを告げる。

ランス公が執務室に消えていって間もなく、サンジェルマンは衛兵から、部下が面会したがっていると知らせを受けて部屋を後にした。部下は一階の衛兵待機室にいるという。階上まで上がることが許可されない階級に属する、彼の部下だ。

雑然とする衛兵待機室に足を踏み入れるなり、サンジェルマンは待ち人の顔を認識して息を飲んだ。その部下を任務地に派遣して二ヶ月も経っていない、予想外に早い帰還だ。

日の光がわずかにしか届かない部屋の隅に存在を溶け込ませるようにたたずむ男を見て、サンジェルマンは良くない知らせを予想して落胆する。男は戸口に立ったサンジェルマンに気づいてもにこりともせずに、数人の若い衛兵がたむろする室内を斜めに横切って、足早に彼に近寄って来た。

「無駄足だったか」

サンジェルマンの呟きが聞こえなかったらしく、男は彼の前で頭を下げて帰任の挨拶を丁寧に述べた。早かったな、と彼は声をかける。

だが、部下が顔を上げると、その瞳は意気揚々として輝いていた。

その表情の明るさで、サンジェルマンは自分の思い違いを予感した。

「サンジェルマン様、見つけましたよ！」

部下の声は談笑している衛兵たちの声に紛れてしまうほどの音量だったが、サンジェルマンは咄嗟に男の背後に目を光らせ、誰も自分たちを振り返っていないことを確認した。目をみはって部下を見ると、部下は無言で、彼から少しも目をそらさずに唇の両脇を小さく上げる。

サンジェルマンは驚きを隠し、慎重をきして、彼を外へと連れ出した。大きな宴を控えているせいで城内は普段より人の往来が多く、二人は静かに話ができる場を探して二転三転と場所を移ることになった。部下も心得ており、彼と廊下を歩いている間は一言も口をきかない。

召使に自分たちを邪魔しないように言い含め、サンジェルマンは階上の空き部屋に部下と入り、廊下に声が届かない窓際へと移動した。最終地のここに到着するまでの間に断片的に聞いた情報をつなぎ合わせれば、彼の報告の大筋は既にわかっていたが、それをあらためて確認する意味でも、サンジェルマンは事の次第の説明を彼に求めた。部下は眉にかかる前髪を指で無造作に払いのけ、その下から鋭気に満ちた目をのぞかせて、笑顔になる。

「ベルアン・ビルにジェニー様の叔母はおりました」

サンジェルマンがその意味をかみしめるようにして頷くと、部下はより低い声となって話を続けた。

「叔母ジョセフィーヌ・ゲンスブールは皆からはジャンヌと呼ばれ、夫を病で早くに亡くしてからは、村はずれの館に十歳の息子一人とひっそりと暮らしております。近くに住む老夫婦が毎日その館に通い、二人の世話をしている模様です。当地には、戦で夫を亡くした同じような境遇の女だけの世帯がいくつかありまして、彼女も最初は私を警戒して扉を開けてくれなかったのですが……私がジェニー様を保護する者の代理として彼女を捜索している旨を告げると、そ

れはもう、たいそうな喜びようで。ジェニー様の出身地が――ヴィレールによる統治に代わったと彼女は知っておりまして、行方不明となった家族の身を以前より案じていたようです。彼女は、ジェニー様の父親の妹にあたるとのことでした」

部下の声がかすれ、彼は用意されていた水に口をつける。サンジェルマンはそれを見守り、彼が続きを話し始めるのを静かに待った。

「残念ながらジェニー様の両親の安否はわからないのですが、彼女はすぐにでもジェニー様に会いたい、私に同行する、と言いはりまして――僭越ながら、私の判断で、こちらよりあらためて近いうちに出向く旨を取り決めてまいりました」

部下はサンジェルマンを仰ぎ見て、彼の返答を待っている。サンジェルマンは、彼を安心させるように微笑み、答えた。

「よくやった。近々、私が彼女の保護者としてベルアン・ビルに出向こう」

「は」

サンジェルマンは男が口をつけた杯の隣にあった杯に水を入れ、口にふくんだ。水はもうぬるかったが、喉全体にじわりと染み込んでいく。水が喉にふれて初めて、彼は、自分が驚くほど喉が渇いていたことに気づいた。

「ただ、サンジェルマン様、訪問される際にはご注意いただきたい点がありまして」と部下が控えめながらも力強い口調で言う。「彼女はヴィレールに並々ならぬ警戒を抱いているようなのです。我々がヴィレール人であることは伏せた方が賢明かと存じます」

「心得た。兄家族がヴィレールの犠牲になったとみなしているのだ、よからぬ感情を持つのも当然だろう」

「いえ、それだけが理由とはどうも言い切れぬようで」

「どういうことだ？」

しかし、部下にその根拠を尋ねても彼の所感としか言いようがないらしく、サンジェルマンは仕方なくそれ以上の追求をあきらめた。それから彼は、ジェニーの叔母の置かれている現状をしばらく聞き、

おおよその訪問日を決めた後に二人は会話を終了した。
彼らが小声でしゃべりながら階段を降りていく途中、サンジェルマンは階下から誰かが階段を自分たちの方に向けて上がってくる足音を聞いた。狭い踊り場が二人の前に現われると、そこに召使女の黒い頭が見え、それが二人の方にくるりと振り返った。
「ま、サンジェルマン様？　今、お知らせにあがろうとしていたところです」
顔を上に向けて彼女は言い、思い出したかのように膝を折って軽く挨拶をする。
「どうした？　城から何か連絡でも？」
「いいえ。急ぎとかで来客の方がおみえに――」と召使女は二人から彼女の背後に顔を向け、サンジェルマンもそれにつられて彼女の後ろに続く階段をのぞき見た。男の履く固い靴音が聞こえ、サンジェルマンの視界に入ってきた茶色に似た頭髪の持ち主が、上を仰ぎ見て彼に笑う。
「どうも、サンジェルマン様」
「……ベアール殿？」
ベアールはその場に止まり、サンジェルマンと視線が合うと、笑顔をぎこちないものに変えた。サンジェルマンは一瞬言葉につまり、隣にいた部下を思わず見ると、部下も何かを感じたらしく、顔をひきつらせていた。

第一部　6．短剣の持ち主－2

サンジェルマンと部下がついさっきまで密談していた部屋に三人が入ると、ベアールは部屋の隅にあった寝台まで進み、疲れた様子でそれに腰掛けた。二人はさっきと同様に窓際に歩み寄って、ベアールの様子を観察しながら、考えをめぐらせ合う。入室する際にもベアールはサンジェルマンの部下の存在を疎んじるような目線を向けたが、彼は再び、部下の男を困惑したようにちらりと見た。

「彼は今回の事情に通じている。気になさらないでもらいたい」

サンジェルマンがベアールを制すように言うと、彼は小さく息をついて、投げやりな調子で片手を上げた。

「そうですか。そうですね、ええ、ここでの話を口外しないでいただけるならね、構いませんよ」

サンジェルマンは部下と顔を見合わせる。

ベアールの陰りのある表情を目にするのは、サンジェルマンも初めてだ。彼は常に明るく得意げで、女たちが側にいれば艶っぽい表情に変わる。その彼がサンジェルマンの視線を拒み、寝台から壁、天井にと視線を次々にめぐらせているのは、既に直面してしまった事実から少しでも目を背けたいからのようにも思える。

サンジェルマンが口を開こうかとしたそのとき、

「サンジェルマン様はそのご身分にそぐわず、ずいぶんと質素な暮らしをされているのですね」と、感心したような、だがどこか呆れたような口調でベアールが言った。

「寝に帰るだけの場所だ、日々の暮らしには事足りる」

「ええ、そうでしょうね」

聞く前から彼の返事をわかっていたというように、ベアールは淡々と言った。そしてまた、彼は無言で室内を見まわす。

サンジェルマンは話を先延ばしされることに嫌気がし、窓際からベアールのいる寝台へ足を踏み出そうとした。すると慌てて、ベア

ールが言った。
「実は、本日こうして私が急ぎ参ったのは――」
サンジェルマンが立ち止まると、ベアールが幾分ほっとした顔となった。
「例の、短剣の件です」
ベアールにサンジェルマンが短剣を託してから、まだ十日にも満たない。
「まさか、持ち主がもうわかった、と？」
サンジェルマンは答えを全く期待せず、ベアールに問いかけた。
ベアールは、なぜか渋々といったふうに首を縦に振る。
「貴公に依頼してまだ十日も経たぬが？」
「ええ、そうなんですが、まあ」
「はっきりしないようだが、それはたしかか？」
彼が詰め寄るとベアールは寝台から音をたてて立ち上がり、両手を広げて言い放った。
「ええ、確かですよ。父がそう言うのだから、間違えようもない！」
サンジェルマンは、隠居間近と言われている現在のベアール家当主の顔を思い出した。息子ユーゴは、父親の外見上の特徴をよく受け継いでいる。
「父というと、ご当主が？」
「そうです」ベアールが頷いた。
「私の父が、私が遊戯台に置いておいた短剣を偶然に見かけ、私にその入手経路を問いただしたのですよ。その時の父といったら、それはもうすごい剣幕で――私は唖然としましたよ！　でも、私が入手方法を明かせないと知ると、これまたひどい落胆ぶりで。我が親ながら哀れに感じましたが、そこはやはり、サンジェルマン様との約束を破るわけにもまいりませんから――」
ベアールが笑みを無理にたたえてサンジェルマンを見上げたが、彼は笑い返さなかった。彼はまだ、肝心の短剣の持ち主を明かしていない。調査をすべきベアールが放置していた短剣を、父親が見か

けたために持ち手が判明したという、偶然の産物だったことは、この際目をつぶろう。

ベアールはすぐに真面目な顔になり、非常に居心地が悪そうな様子で話に戻った。

「まあ、私も父に問いただしたのです。そこまで父がこれに固執する理由は何かと。見たところ、何の変哲もない、単なる古い短剣だ。それほど立派な意匠でもなければ、素晴らしい切れ味を持った刃というのでもない。だが、サンジェルマン様は持ち手を知りたいとおっしゃり、父は入手先を知りたがる、いわく付きの短剣だ。それがベアール本家の所属である以上、次期当主となる私にも知っておく権利はある。それに、持ち主が特定できれば、本来あるべき場所にそれを返却することもできる――サンジェルマン様はそれをお望みではないかもしれませんが」

「そんなことはない。いずれは然るべき者に返す所存だ」

サンジェルマンの顔を見ていたベアールが眉を上げた。

「これは――既に持ち手をご存知のようですね」

「……現在の持ち手を知っているだけだ。本来の、ではない」

彼の返答に納得したかどうかわからないが、ベアールは目を伏せて、先を続けた。

「ともかく、そういった話をして父を説き伏せ、持ち手の名を出させたのです。父は、その名を口にするまで長いこと迷っておりましたが――正直、私も今申し上げるのを躊躇っておりますが――父は、私にようやく名を告げてくれました。と言いましても、その名を知らされても、私には誰のことかすぐにはわからず、家の者に尋ねてみてやっと記憶がよみがえったのですがね」

「その者とは？」

サンジェルマンはすかさず彼に尋ね、その表情のどんな変化も見逃さないようにと彼に視線を定めた。ベアールはひるんでサンジェルマンとその部下を一瞥し、少し言いよどんだ後、やがて腹を決めたように言った。

「アルベール、私の兄です」
ジェニーの父親と同じ名だった。だが、世にありふれた名前でもある。
「貴公の……兄？」
サンジェルマンの口に力が入らず、息だけに押し出された言葉が空中に浮遊していったように感じられた。
「はい」
「兄とは――ああ、不慮の事故で亡くなるまで、貴公の前に模範試合を担当していたという？」
ベアールがゆっくりと頭を左右に振った。
「それは二番目の兄ヴィクトールです。彼ではなく……私の長兄です」
ベアールが、いたたまれなくなったように窓際へ歩いていく。ベアールは眉をひそめて親指を唇に押し付けながら窓の外を眺めた。窓から入る光が、彼の髪を明るい色に戻していた。
サンジェルマンが窓の方に一歩近づくと、ベアールが顔だけを彼に振り向けて言った。
「サンジェルマン様、あの短剣をどういった経緯で入手されたのか、教えてはもらえませんか」
ベアールの隣にいたサンジェルマンの部下が、じろりとベアールに視線を向ける。
「それはできない」
サンジェルマンが答えると、ベアールが窓を背に彼に体をくるりと向けた。
「サンジェルマン様、極秘事項なのは承知していますが、私の家にも関わるかもしれぬことです。どうか、お聞かせ願えませんか」
サンジェルマンの目を見つめ、ベアールは嘆願する。けれど、サンジェルマンは事務的に答えた。
「悪いが、現段階では明らかにはできない。それがたとえ貴公の兄

の物だったとしても――誰かに与えられたか、盗まれた可能性もある」

ベアールは憤慨したようだったが、紳士らしくそれをさっと隠した。

「ええ、当然にそれは否定できませんよ。誰が持っていたかにもよりましょう。……誰が持っていたのです？　サンジェルマン様はご存知でしたね。それも、私には教えていただけないのですか？」

ジェニーの顔を思い浮かべながら、サンジェルマンは彼を見返した。

「持ち主は若い女だ」

「若い女……ですか」

彼の返答を聞いてベアールは眉をひそめ、心当たりを探そうとでもするように、目玉をぐるりとまわした。やがて、彼はやるせなさそうに深いため息をつく。どうやら、思い当たる節はないらしい。サンジェルマンは静かに彼に歩み寄り、行く手を阻むように彼の前に立った。

「それで――ベアール殿、その貴公の長兄とやらは今どこにおられる？　私はおそらく、面識がないと思うのだが？」

サンジェルマンが問うとベアールは肩をすくめ、ややこわばった顔をあげて苦笑した。

「私も兄とは数えるほどにしか会ったことはありませんよ。私と兄は十五も年が離れておりましてね。兄は近衛に所属していたために留守がちで、さらには私が物心つく頃までには家を出ていたこともあって、どんな顔をしていたかも思い出せない。今どこにいるか――さあ、どこにいるのか、はたして生きているのかどうか。それは私も、とりわけ私の父も知りたがっておりますよ」

ベアールの年から長兄の年齢を計算してそれがジェニーの父親として妥当な年齢だと分かると、にわかに現実味を帯びてきた可能性に行きついて、サンジェルマンの下あごが強張った。彼の前にいる

ベアールが不審そうに視線を斜めに変え、サンジェルマンを見返した。
「どうかされましたか？」
「何でもない」
サンジェルマンはベアールの疑問を払拭しようと笑みを浮かべたが、彼は簡単にはごまかされなかったようだ。
「サンジェルマン様、もしや――私の長兄の居場所に心当たりがあるのでは？」
「いや、残念ながら」
サンジェルマンが首を横に振ると、ベアールが下唇を少し噛み、さらに真剣な口調で尋ねた。
「私はサンジェルマン様が我が家の短剣を調査する意図は存じませんし、それを問う気もありません。けれど、サンジェルマン様はもしや、現在の短剣の持ち主というその若い女と長兄にはなんらかの縁があるとお考えなのではありませんか？　もしそうだとすれば、私どもベアール家も無関係ではなく、真実を知る必要がある。そうではありませんか？」
ベアールはサンジェルマンの部下にも挑むような目つきを向けたが、男はまったくの無反応で無表情を保っていた。それからベアールは、サンジェルマンに視線を戻して彼を見据える。
「無論」と、サンジェルマンはベアールの挑戦的な瞳を受けて微笑んだ。そして、彼を見ながら付け加える。「その仮定が正しければ」
ベアールが隠し切れない落胆と苛立ちを顔ににじませ、サンジェルマンに近づこうとしてその場に足を踏みとどめた。部下が警戒を強めて動き出そうとするのをサンジェルマンは無言で制し、ベアールが服の裾を手で握りしめる様を見つめる。
もしも身分の上下が逆だったら、サンジェルマンはベアールに殴りかかられていたのかもしれない。
「ベアール殿、逆にお教え願いたい」
「……何でしょう？」

ベアールの声は冷たかったが、彼は感情を必死で抑制しようとしているようだった。

「貴公の長兄はなぜ家を出られた？」

ベアールが気おくれしたように言葉を失い、サンジェルマンを無言で、そのどこまでも青い瞳で見つめ返す。

「長兄というからには家督を継ぐ立場であったはず。それをせずして家を出たとあれば――」

「流行病（はやりやまい）で隔離されたのですよ」と、ベアールが急に無表情になって彼の言葉を淡々とさえぎった。「その後にそこから逃げて行方知れずとなったそうで……いまだに、足取りはつかめておりません」

「行方知れず？」

サンジェルマンは彼の態度にどうにも腑に落ちないものを感じ、彼の説明が信じられなかった。サンジェルマンに見つめられ、彼が決まり悪そうに両手を広げてみせる。

「サンジェルマン様、ベアール家といえど、他家と同様にそれなりにやっかい者を抱えておりますよ。いったい、兄の失踪を知ってどうされるというのです？」

サンジェルマンの質問でベアールの警戒が一気に高まったことは確かだ。彼の反応に確かな手ごたえを感じ、サンジェルマンは先を続けた。

「私だとて貴家の事情をあれこれと知るつもりはない。ただ、場合によっては――失踪の真相のほどによっては、貴公の仮定が証明されるかもしれない」

ベアールが口を半開きにし、それから、真意を探るようにしてサンジェルマンを見る。彼もベアールの疑いのこもった目を静かに見つめ返した。その目が頼りなさそうに大きな迷いを映し出すまで、大した時間はかからなかった。

「場合によっては――」

ベアールが目を泳がせながら、心ここにあらずといった調子でつぶやく。サンジェルマンは彼の言葉を繰り返した。「場合によって

は」

ぼんやりとした目でベアールが彼を見る。

「ベアール殿、私は私の調査のためだけに尋ねているのであって、貴家の内情に興味はない」

サンジェルマンがきっぱりと言うと、ベアールが不意に窓際から離れた。サンジェルマンが反射的に退くと、彼はおぼつかない足取りで寝台に向かってふらふらと歩いていく。それから力尽きたように寝台に腰を降ろし、大きな息をついて正面の壁に目をやった。疲労が彼の顔に色濃く影を落とし、実年齢よりずっと老けて見せる。彼は斜め下に視線を落としては時おり意を決したように目を上げ、思い出したかのように何度か短いため息をついた。サンジェルマンは、彼がそうやって納得するまで躊躇するのを辛抱強く待つ。

ベアールが口にするのをそこまで気に病むお家事情を無理に吐かせるのは酷に思えたが、だからこそ、サンジェルマンの知りたい事実に重要な意味を持った理由なのだ、と感じられた。

ベアールが手のひらで片目をこすり、やっと視線を上げてサンジェルマンを振り返った。サンジェルマンが微笑むとベアールは彼の部下にも厳しい目をやり、くれぐれも口外しないように、と念を押した。サンジェルマンは部下が秘密を漏らすことはないと分かっていたが、ベアールの安心を増すためにも、「決して口外するな」と部下に申しつけた。部下は小声で返事をし、入口扉の近くに移動した。

膝の上で手を何度か組みかえ、サンジェルマンと目が合ったベアールは記憶の端をたどるように言った。

「兄が当家を“出ていった”のは二十数年も前のことです」

ベアールが唇を小指でなぞりながら、それとわかる作り笑いを浮かべた。

「しかし、兄は当時の流行病にかかって隔離されたとされました。兄が自発的に家を出たとするには、許されざる理由があったのです」

ベアールに彼のペースで話を進めさせようと、サンジェルマンは口を挟むことは避け、相槌だけを打つ。サンジェルマンが頷くのを待って、彼は、最初からお話しましょう、と静かに言った。

「ベアール家の他の人間の例にもれず、当時の兄も剣の名手で将来を有望視されていたそうです。当然、父もいずれは兄に家督を譲るつもりで、決まった許婚者もおりました。父が言うには、長兄は私の母によく似た風貌で父の性格を受け継いでいたとのことです」

ベアールが心なしか怯えたように体を収縮させた。

「ところがある日、兄はまるで散歩にでも出かけるように、身一つで突然に家から出ていきました。両親も家の者も、兄が任務で忙しくて帰ってこないものだとしばらくは疑っていなかったのです。そんなことが当時はよくあったそうで。それが、兄がどこにもいないと気づいたのは――兄の許婚者が、帰宅した彼女の兄、当時の兄の同僚に彼の行き先を尋ねられて初めて発覚しました。兄は近衛の詰め所にも隊の宿舎にも友人宅にも、どこにもいなかった。いきなり消えてしまった。そして、そのときまでには、兄が勤務に出てこなくなって二週間が経過していました。それを知った両親は――」

彼は咳払いを一度し、寝台の上で姿勢を正す。サンジェルマンは彼の唇を見つめた。

「そのとき、私の両親は兄が女と逃げたと知ったのです。つまり、駆け落ちですよ」

ベアールがサンジェルマンを見て自嘲的に笑う。

「兄はそれまでに度々、両親に婚約を破棄してその身分違いの女と結婚させてくれるように頼んでいたそうです。時には激しい口論にもなったとか。兄は、相手の女を愛人とすることに我慢ならなかったようですね。貴族らしからぬ、というか、愚直というか……私には到底理解できない行動ですが、ともかく、両親がその結婚を許すはずもなく、兄は恋に落ちたその女と手に手を取り、家も身分も全て捨てて、去ってしまったわけです」

駆け落ち自体は、貴族社会で日常茶飯事にあるとは言えないが、

特に身分違いの男女の場合においては起こりえることだ。長兄の行為は身内の恥だとはされるだろうが、ベアールにあそこまで躊躇させるには、何かが足りない気がする。

サンジェルマンの納得いかない様子に先手を打つかのように、ベアールが重苦しい口調で続けた。

「両親はそれを知ると激怒し、そして相手の女を知って――恐怖に打ち震えました。駆け落ちが不名誉だからと兄を勘当することはもはや叶わず、当時の流行病だった重い伝染病にかかって遠く隔離したことにしたのです。伝染病となれば誰も、許婚者でさえも会いに来ようとは思いませんからね。そうやって時を稼いでいる間に兄を見つけて家に連れ戻そうと考えたのです。兄の仕出かした事はそのとき既に兄一人だけの問題ではなく、ベアール家全体に関わるものとなっていました。両親は必死で兄を捜索したそうです。でも見つからなかった」

ベアールが落ち着きなく、両手の指を絡み合わせては解いている。口をきくのもはばかられる重い空気が部屋を鎮圧し、サンジェルマンの喉の底を緊張の塊がゆっくりと流れていった。

「相手の女というのがやっかいで」

「目上の、誰かの女だったのか？」

「え？　いいえ」

思わず尋ねたサンジェルマンに、ベアールは失笑して否定する。

「それなら兄が殴り殺されるだけで済むでしょう。その方が何倍もよかったかもしれません。女はもっとややこしい立場で……庶民ともいえず、貴族ともいえず――」

サンジェルマンはベアールのすぼめた口元を見つめた。言葉を慎重に選ぼうとしているのか、言い渋っているのか、ベアールの言葉の先がなかなか続かない。

サンジェルマンはジェニーの母親の名を頭の中で思い出した。ミレイユだ。

「女の名は？」

「名、ですか？　名など知りません」
不愉快そうに唇をゆがめ、ベアールが答える。サンジェルマンが肩をすくめると、ベアールは腹をくくったのか、すらすらとしゃべり出した。
「兄と逃げた女は――その当時にヴィレールと敵対していたフランドル王国をご存知かどうか。今はもう崩壊して一部はヴィレールに併合されておりますが、女はそこの……間者だったのです。そして、兄もそれは承知だったのだと思います」
間者との密通は大罪だ。国家反逆罪として関係者全員に重い罰が下る。
たぶん、サンジェルマンは事の深刻さに気づいて顔色を変えたはずだ。ベアールが焦ったように立ち上がり、彼に向けて数歩足を踏み出した。
「ああ、どうか誤解なされないで！　兄は間者の女と逃げたとはいえ、仮にもベアール家の者です、国を裏切ったりはしない！　もちろん、当家の誰一人として過去にも未来にも国家に背くような愚かなことはしません！　どうか、その点だけはどうか、ご信用いただきたい！」
ベアールの真剣で必死な形相から、彼の話した内容は事実だろうとサンジェルマンにも直感で分かった。二十数年昔のことだが、ベアールの長兄と間者の女は単に純粋に恋に落ちただけで、情報漏えいなど何もなかっただろう。何より、後者が目的であったなら、彼が女との結婚を親に求めることもなかったはずだ。
粉々に割れて飛び散った彫像の欠片が、一つずつ元の位置に戻って本来の形を取り戻していくようだった。ベアールや部下から今までに得た情報が、サンジェルマンがもしかしたら知りたくないかもしれない事実に向けてじわじわと到達していくのを肌で感じ、サンジェルマンは耳の奥に鋭い痛みを覚える。
ベアールはうな垂れていた。顔も曖昧だという長兄のせいで、自

分の家が存続の危機に晒されるかもしれないことを恐れ、それを自ら暴露してしまった悔いのようなものも見える一方で、彼はそれを真摯に受け入れている。サンジェルマンはそれを目にして、ベアールが一生関わらない種類の人間だと分類したことを撤回した。

「ベアール殿」

サンジェルマンが呼ぶと、ベアールは口を結んで顔を上げた。

「貴公にはもしや――行方知れずとなった姉か妹もおられないか？」

ほんのわずかに唇を開いたベアールの反応だけで、サンジェルマンは自分の当てずっぽうの推理が正しかったことを知った。

「何を……我がベアール家の何を、そんなに知りたいのです？」

ベアールの口調はずいぶんと気弱だった。こみ上げてきた胸の高まりを押さえ込み、同じように高揚しているらしい部下を黙殺すると、サンジェルマンはベアールの顔をのぞきこんだ。ベアールは大きな瞳を訝しげに細め、困惑したように彼を見返した。

「貴家の事情を知りたいわけではない。私はただ確認したいことがあるだけで――それには貴公の協力が多分に必要となる。貴公にとっても、有益になると思う」

「有益かどうかはともかく、ここまできたら協力などいくらでもしますよ。何をすればよいのです？　私だけで事足りるのですか？」

ええ、とサンジェルマンは笑って頷いた。ベアールもようやく、硬い笑みを返す。

「剣技大会を終えたその足で、私とともにベルアン・ビルに向かってもらいたい。会ってもらいたい者がいる」

「それはまた遠い地ですね。しかし……その者とは、私が知る人物なのです？」

「わからない。それを貴公に確かめてもらいたいのだ」

ベアールは煙に巻かれたように不思議そうに彼を見つめた。だが、彼が笑みを再び見せると我に返り、依頼を承諾した。

第一部　7．眼下に望む街－1

真夜中の王の訪問に気づいた日の翌朝、アリエルは通常より遅めにジェニーの部屋にやってきて、昨夜はよく眠れたかとジェニーに尋ねた。ジェニーが、朝まで一度も目覚めずに熟睡できた、と昨夜の出来事をふせて答えると、アリエルはわずかに間をあけた後に、そうですか、と小さく微笑んだ。

アリエルが王の毎夜の訪問を知っていたのは明らかだった。でも、その質問を最後に、今までの間、彼女はそれらしきことにふれもしない。

この数日間、ジェニーは王の顔を垣間見ることすらなかった。昼間はもちろんのこと、夜中にジェニーは何度か目覚めて寝室を見渡したが、彼の姿をそこに見つけることはなかった。誰もいない室内の暗闇を目にすると、王に手を触れられた夜のことが、まるで夢のように思えてくる。そういえば、ジェニーはしばらくの間、彼と面と向かって接してはいない。

ジェニーが、ケインに剣技大会の開催日を知らせる合図を地下階段の入口部分に置いたのも、その同じ日の早朝だ。ここ数日の就寝直後、召使が退室してから、ジェニーは毎日隠し扉を開いて、ケインが合図を見たかどうかを確認している。けれども、今のところ、彼がそこまで来たような形跡も返事もない。

ジェニーは、自分の“合図”が位置も変えずに放置されているのを見るたびに少しがっかりしたが、その毎回にケインとの約束を思いかえし、忍耐強く待とう、と心に決めていた。ジェニーの緊張感は、次第に高まっていった。

剣技大会が目前に迫り、それ以前の具合の悪さが嘘のように、ジェニーの体調はとても安定していた。ジェニーはまったく平らなお腹を見つめながら、もし自分が妊娠を継続すれば、子ども時代に近

所で見た妊婦と同じことが、いずれ自分の身に起こるだろう、と漠然と想像した。その妊婦は、少しずつふくらんでいくお腹を半年間はかかえていたように記憶している。

ジェニーにとっては妊娠自体が途方もなく未知のことで、それ以外、自分の体に具体的にどんな影響があるかなど、予想もつかない。女官長や侍医の定期的な巡回がなければ、ジェニーは自身の妊娠のことを思い出しもしなかった。

召使が手際よくテーブルを整える後ろ姿を何とはなく見ながら、ジェニーはケインの顔をぼんやりと思い起こす。彼は、ジェニーが意に反して居城しているとは知っていても、王の女として後宮に置かれた彼女の立場を知りはしない。彼は優しいが、ジェニーが王の子を宿したと知ってもなお、その優しさを保っていてくれるかどうか。

召使が振り返って、ジェニーに物問いたげに首をかしげた。ジェニーは、何でもない、と彼女に片手を上げて示す。

召使は膝を折って挨拶し、テーブルの反対側に回りこんで作業を続けた。ジェニーは、彼女の痩せた胸から続く平らな腹を見つめる。

逃亡後に、もしケインとの未来が待っているのなら、彼には真実を告げなければならない。ジェニーはそう思っている。それが、ジェニーの望む妊娠ではなくても、ジェニーが妊娠の継続を選択しなかったとしても。

けれど、とても――とても、ケインには話せない、とジェニーは思う。

朝食後、いつものように女官長が短時間だけ立ち寄った。十分な睡眠はとれているか、朝食は好き嫌いをせずにきちんととっているか、体調にどこか変化はないか。そんなことを、日課のように、ジェニーに念入りに確かめる。そのうえで、母体が健康に保たれることの重要さを、早口でまくしたてる。

その九割以上はここ連日繰り返されている口上で、彼女が次に何

を口にするかも、ジェニーたちには予想がついている。そしてその予想どおり、女官長はジェニーからアリエルや召使に向き直り、主人の体調を常に観察し、ほんの些細でも体調の変化をみとめたら侍医を呼ぶように、と彼女たちにくどくどと言い含める。それから、昨日と同様に、「ああ、忙しい」とため息をつくのだ。

アリエルが仕事に戻る女官長を扉の前まで見送り、忙しさにきりきり舞いの女官長の体を心配する言葉をかけると、女官長が微笑んだ。

「多忙さでいえば、王の比ではないわ」

その口調はいつになく誇らしげだ。アリエルの肩越にジェニーと目が合うと、彼女は目じりに多くの皺を集めて笑顔になった。

女官長が退室すると、アリエルが入口扉近くの台の上に置いた木皿を持って、にこにことした笑顔をたたえてジェニーの元にやって来た。ジェニーは、女官長が来る直前に用事から戻ってきたアリエルが何かを手に携えていたのは見ていたが、女官長の来訪で、それを彼女に問う機会を逸していた。

「何を持ってきたの？」

アリエルがひときわ大きく微笑み、ジェニーの前にそれを置いた。木皿の上には、薄い緑色の布に包まれた物が載っていた。

「なあに？」

「開けてみて下さいませ。きっと、お気に召しますわ」

ジェニーが布の端をつまみ上げると、香ばしい匂いが鼻をかすめた。ジェニーは期待しながら包みを大きく開け、そこに茶の単色の、後宮の食卓や茶会で見かける華美な物とはまったく違う、素朴な焼き菓子を見つけて息を飲んだ。二口ほどで食べられる大きさで、木の葉の形をしており、気泡の目立つ粗い生地の表面には、胡桃らしき実の粒が所々に顔を出している。その菓子が十個ぐらいだろうか、山となって薄緑色の布に包まれている。

「ノワ・パイ！　アリエル、これ、どうしたの？」

ジェニーは驚きの声をあげ、そのうちの一つを指でつまみあげてアリエルに掲げて見せた。アリエルが嬉しそうに白い歯を見せて笑う。

「やはりご存知でしたか。お懐かしいでしょう？　ジェニー様の出身地方の郷土菓子だとか」

「ええ、そうよ！　でも、どうしてこれがここに？」

「サンジェルマン様の部下にジェニー様の故郷付近を旅する者がいて、帰城途中にお求めくださったそうですわ」

「じゃあ、サンジェルマンがくれたの？」

「たぶん、きっと、ジェニー様はお喜びになるだろうからと――ええ、サンジェルマン様がくださったのです」

アリエルは振り返ったジェニーの顔をとらえ、妙にゆっくりと頷いた。

「美味しそうな匂いがしますわね」

「美味しいわよ」ジェニーはアリエルに言い、緑の包みを見やった。

「こんなにあるんだから、あなたにも食べてもらわないと」

アリエルは首を横に振ろうとして、何かを思い出したかのようにそれを止めた。

「そうですね、せっかくだから頂きますわ。ジェニー様、今召しあがるようでしたら、何か飲み物を用意させましょうか？」

「ううん、飲み物はいらないわ」

ジェニーは手のひらに置いたノワ・パイの葉柄をじっと見つめた。なつかしい菓子だ。それを日常的に口にしていた頃が自然に思い出され、胸の奥がきりりと痛む。

一家で各地を転々としたジェニーたちは根っからの地元民ではなかったが、中央の街の付近一帯で食されているノワ・パイは、ジェニーや兄ローリーの大好物だった。母が作るか、どこかの家庭からもらってきたノワ・パイを兄妹で分けて食べるとき、兄はパイを明かりの火であぶって、少し焦がしてから口に運んでいた。彼は、それが“ヴェスト流”の食べ方だ、とよく笑っていた。

「ジェニー様、どうかされたのですか？」
「何でもない」
胸の痛みが涙となってにじみ出そうな気がして、ジェニーは顔を勢いよく上げた。
「ただ……ただ、兄を思い出しただけ」
アリエルが同情的な色を表情にたたえた。
「お兄様のことは聞きましたわ。どこかで……生きていてくださることを願うばかりです」
ジェニーはむっとして、アリエルに振り返る。
「何を誰に聞いたか知らないけど、兄が生きていられるはずはないわ。あんな……あんなひどい状況で生きているなんてことは――」
傷ついた兄が自分を見ようと、顔を何とか動かそうとした情景を思い出し、ジェニーの声が震える。彼が落下してきた屋根の下に埋もれたのは、そのすぐ後だった。
「あんなむごい……」
ジェニーは、兄のためにも果たすべき復讐を投げ出す選択をしたことで、悔やみ始めていた。復讐が不可能である以上は王城からの逃亡が最良の選択だ、と砂を噛む思いで、自分の気持ちに一定の整理をつけたつもりだった。
頬がひきつるのを感じながら、ジェニーはアリエルの戸惑った顔を見つめる。さっきまでアリエルの顔に浮かんでいた同情心は、今は影を潜めていた。

アリエルが視線を何度か落ち着きなく行き来させた後、遠慮がちにジェニーに言った。
「あの……お兄様は、本当に亡くなられたのでしょうか？」
ジェニーは質問の意味がわからず、ぽかんとして口を開いたままに彼女を見返した。
アリエルが質問を繰り返した。
「お兄様は本当に亡くなられたのでしょうか？　ジェニー様は、お

兄様が亡くなられた時に居合わせたのですか？」

ジェニーは穴があくほどに彼女を見つめ、急に我に返って言った。

「いいえ。実際に見たわけじゃないわ。そうじゃないけど――」アリエルの質問の意図が捉えきれず、ジェニーは混乱する。

「でも、あなたは実際に目撃していないからそんなふうに言えるけど、彼は本当にひどい傷を負って、その後に落下してきた黒焦げの屋根の下敷きになったのよ？」

「ええ、その話は聞いております」と、アリエルはサンジェルマンの名を言いかけて、途中で口をつぐんだ。

アリエルがそれを誰から聞いたかなど、ジェニーにはどうでもいいことだ。

「わからないわ。それを知っているなら、なぜそんなことを言うの？」

アリエルは黒目がちな瞳を見開いて、ジェニーを見た。彼女のその反応は、ジェニーの方がおかしなことを言っている、とでもいうようだ。

「サンジェルマン様がおっしゃるには」と、アリエルは今度は情報源の主の名を隠しもせずに答えた。

「後でその場に戻った際、その瓦礫は既に崩されていて、下にいたはずのお兄様の姿は、影も形もなくなっていたそうにございます。自力でそこから這い出したか、それとも誰かの手助けがあったのかはわかりません。ですが、その周辺では見つけられず、連行された捕虜の中にもいなかったそうですわ。それが……お兄様が生きておられるという証しにはもちろんなりませんが、亡くなられた、という確証もないのではありませんか？」

数秒間、ジェニーの周囲の音は何も耳に入らなかった。無音の世界で、ジェニーはアリエルの唇が自分の名をかたどって動くのを見た。

「えっ……」

そのうちに目に力が入るようになり、ジェニーは、思い出したよ

うに瞬きをする。他人のまぶたを無理に動かしているように、不自然な感覚だ。ジェニーの耳の周りが温かくなって、その温かみが徐々に耳の内側に向かって広がっていく。

「ジェニー様？」

アリエルが顔を近づけてジェニーに呼びかけ、ジェニーは体を震わせて彼女を見返した。

「ジェニー様、大丈夫ですか？」

アリエルは心配そうにジェニーを見ながら、手の中に持っていたノワ・パイを木皿の横にそっと置いた。それはジェニーがさっきまで掴んでいた一つで、いつのまにか落としてしまったものを彼女が拾ったらしい。

ジェニーは、ええ、と返事をして頷いた。ヴィレール軍の奇襲による惨状があまりに衝撃的で、兄の残像があまりに鮮明すぎて、アリエルの話にある可能性など、ジェニーは今まで考えつきもしなかった。

ジェニーは、家族の誰の死体も見てはいないのだ。

アリエルの言った視点から考えれば、ジェニーの両親の生存だって大いにあり得る。可能性に期待し過ぎることはできないが、悲観的になり過ぎる必要もないのだ。

そう思いつくと、ジェニーは体の中にあらたな小さな力が生まれてくるように感じた。

午後遅く、アリエルが女官長に呼ばれて出かけていったため、ジェニーはアリエルが代わりにジェニーの側に付けていった召使とともに部屋に残された。ジェニーはそのとき、アリエルが不在の間にサロンに行ってみようと思い立った。いつかのように階段で転倒されては取り返しがつかないからと、女官長はジェニーが出歩くことに対していい顔をしないが、多少の日光を浴びることは大目にみてくれている。それは、アリエルの貢献するところが大きいのだが。

ジェニーがサロンに行くのはほとんどが午前中で、この時間帯に

サロンにいることはあまりない。召使にサロン行きを宣言するように伝えると、ジェニーは召使の反対を聞きもせず、部屋を出た。召使は彼女を独りにさせられないので、慌ててジェニーの後を追ってくる。

部屋の外の廊下は閑散として静まりかえっていたが、階段に近づくにつれ、階上か階下からの女たちの声が、空気を伝わって二人の耳にも届く。

ジェニーが階段口に差し掛かると、召使はジェニーの後方にぴったりと付くようにして周囲に注意をめぐらせた。以前の転倒事件――事故としてとりなされたが――からの教訓だ。一階の廊下が見えてくる頃になると、聞こえてくる声の数が増えたことに加え、忙しそうに動き回る者たちの気配が伝わってきた。ジェニーが廊下に降り立つと、ちょうど通りかかった中年の女が軽く頭を下げ、通り過ぎていった。

その女とは逆方向に直進すると、廊下の左手にサロンの入口が見えてくる。ジェニーの召使は、あきらめたように黙って、ジェニーの斜め後方を歩いている。扉のないサロンの入口は、周囲に比べて明るく光っていた。

小声でしゃべる女たちの存在に二人が気づいたのは、サロン入口の間近に着いたときだ。入口のすぐ内側で、おそらくは若い女が二人、ため息まじりの暗い口調で何やら話している。

会話の内容まではわからなかったが“王が”という単語を聞き取って、ジェニーはそこで足を止めた。ところが召使はそのまま進んでいこうとしたので、ジェニーはそれを素早く制する。立ち聞きするような趣味の悪い行為はしたくなかったが、ジェニーたちが立ち止まっただけで、女たちの話し声は意味を持った会話となって廊下に漏れてきた。召使が困惑したようにジェニーの顔を見たが、ジェニーは唇に指をあてて、もうしばらく待つように伝えた。

女たちはため息をつき、職を失ったらどうしよう、と盛んに心配していた。やっとの思いで城での仕事にありつけたのに、と片方の

女が嘆く。ジェニーは、王城勤務が女たちの憧れともなっている社会的風潮を知っている。

「ああ、いやだわ。あの方々が追放されたら、当然私たちも解雇よ！」

「そうよ。でもジェニー様の専属にでもなれば、話は別よ。ここ数日は王の姿をお見かけしないけど、毎夜、ジェニー様の所におみえになっていたんでしょ？」

ジェニーの両頬がかっと熱くなる。王が夜毎にジェニーを訪ねていたのは後宮中が知る事実で、知らないのは当人だけだった、とジェニーが気づかされた瞬間だ。

「だからって、追放の対象から外れるのかしら？　後宮はもともとは王妃のための住まいでしょ？　王のご結婚が正式に決まったら、相手国にも誠意を示さなきゃいけないから、後宮を未来の妃に明け渡すつもりなんじゃないかしら」

女二人が、同時に深いため息をついた。

王の結婚――。

独身の若いゴーティス王にとって当たり前の話だったが、彼に関していえば、それが突拍子もない非現実に思えて、ジェニーは今聞きかじった内容が信じられなかった。

王の結婚話が進行中で、もしそれが本決まりとなれば、後宮に住む愛人たちが一掃されるかもしれないということ。あの王が、特定の女一人の夫となるということ。

ジェニーには、それが現実のこととしてどうにも想像できない。

ふと召使の視線を感じてジェニーが振り向くと、彼女は真っ青に顔色を変え、怯えたようにジェニーを見つめていた。

第一部　7．眼下に望む街－2

開いた地下扉の下に階段が現われ、その段上にある“合図”が位置を変えているのを見たとき、扉を支えるジェニーの左手は大きく揺れた。ケインがついにここまでやって来て、彼女の伝言を知ったのだ。室内に誰の目もないことはわかりきっていたが、ジェニーは、背後をそっと振り返る。そこにはもちろん誰もおらず、朝の弱い光がゆらゆらと見えるだけだ。

ジェニーは口をすぼめて息を細く吐き、震える手を伸ばして合図として使っている木片を拾い上げる。それを裏返してみると、「予定どおりに決行」というケインからの短い返答が白い文字で記されていた。ジェニーはその一文字ずつをもう一度目で追って、ケインの意思を確かめる。とうとう、現実の脱出に向けて二人は動き出す。

ジェニーは早朝の淡い光が照らす床面の一部をしばらくぼんやりと見つめていた。昼間は汗ばむほどの陽気になる気候でも早朝の城内はひんやりとしていて、ジェニーの肌からは体温が少しずつ奪われていく。ジェニーは肌の表面が冷えていくのを気づいていながら、あと数日もすれば自分がこの城から去るという実感で胸が息苦しくなるまで、体を動かすことができない。

――もはや、王の子を堕胎させる猶予はない。

アリエルからの情報では、堕胎処置をすると母体の体調が一時的に非常に悪化するそうだ。数日間寝込むか、最悪の場合には死に至ることもある、とアリエルはジェニーを脅すように警告した。ジェニーが妊娠を途中で終わらせることを恐れてのアリエルの発言だろうが、彼女は事実を誇張して言いはしてもジェニーに嘘はつかないだろう。おそらくは体力を持続的に必要とする逃亡を前にむしろ体力の温存に努めるべきなのに、ジェニーに、そんな危険は冒せない。

男たちの話し声のような音が不意に耳につき、ジェニーはようやく顔を上げた。一つだけ開けられた窓から、後宮の裏で番をする衛

兵たちの会話が風にのって届いたのだろう。衛兵の交代時間には彼らがもっと騒々しい声をあげることから、ジェニーの起きている今は、それよりもっと早い時間にちがいない。

ジェニーは天井を仰ぎ、喉をしめつける息苦しさから逃れようと大きなため息をついた。

ケインはきっと、約束どおりに準備を整えてくれている。ケインと一緒に城を出たら、叔母の住むベルアン・ビルを目指せばいいともわかっている。

王への復讐心を忘れてはいないが、兄や家族がどこかで無事に生きているかもしれないという小さな希望がわいた今、城から脱出することにもう迷いはないはずだ。その希望がジェニーの背を押し、力を与えてくれる。

ジェニーは再び、力なく息をついた。

けれども、王城に永久の別れを告げることに未練などまったくないのに、ジェニーの心には一点の灰色の曇りが残って消えない。それが何なのか、ジェニー自身にも説明がつかない。そしてその陰りのせいで、ジェニーの足は床からいつまでも離れようとしてくれないのだ。

ぼんやりとしていたジェニーは、唐突に室外に響いた召使の声にはっとなり、思わず扉から手を放しそうになった。ジェニーがあわてて右手も扉にそえると、ジェニーの耳に召使ではない誰かの低い声が聞こえてくる。声の主も会話の内容も特定できなかったが、混じりあった複数の音がジェニーの寝室に近づいてくることだけはジェニーにもはっきりとわかった。ジェニーは焦り、地下扉を急いで、しかし慎重に床面に降ろしてぴったりと閉じ、その上に敷物を元通りの位置に敷いた。誰かが寝室の扉に手を触れ、押しあける。

平然とした表情を作って寝台横に急いで飛び出したジェニーの前に、扉の向こう側から誰かが頭をひょいと出した。白金色の髪が扉越しに揺れるのを見て、ジェニーの息はとまりそうになる。

室内に顔を出すなり不可解そうな顔を一瞬浮かべ、ゴーティス王

は寝台から天蓋に伸びる彫刻柱の横に立つジェニーを見つけると、驚いたように両目を見開いて立ち止まった。彼の瞳に出会ったジェニーの全身が、その場に凍りついたように身動きできなくなる。

王は視線だけで室内を素早くさぐってから、ジェニーに注意を戻した。ジェニーはきちんと敷物に隠したはずの地下扉の存在が気になって仕方がなく、緊張がいやでも高まってくるのを感じていた。王はジェニーの出方でも見るつもりなのだろうか、戸口から中に入ろうとしない。ジェニーは王を部屋に踏み込ませたくない一心で彼から目をそらさず、王はそれをすべて承知の上だというように、表情をやや硬くして彼女を見つめ返した。お互いに口をきこうともせず、お互いの軽率な行動で相手を無用に挑発しないよう、お互いに冷たく牽制し合っている。

半分だけ開いた扉の背後で召使らしき女の声がした。王は注意をそがれたらしく、顔を後ろに斜めに向けると、さがれ、と一言だけ言い放った。室内に視線を戻した王はまた無表情でジェニーを見つめ、何も言わない。やがて、ジェニーがそろそろと胸から手をおろすと、王はその手の動きをじっと目で追い、それがジェニーのお腹の上に運ばれるまで目をそらそうともしなかった。

ジェニーが緊張感に疲れて小さく息をもらしたのを機に王がゆっくりと視線を上げ、それまで半開きにしていた扉を後ろ手に静かに閉める。それから、王は開放されている窓の方を眺め、無表情だった王の唇の両端はわずかに上にあがった。

「・・・・・ずいぶんと早起きだな」

「あなたこそ」

王がジェニーの方に一歩、二歩と足を踏み出した。ジェニーはそれと同じ距離だけ後退したかったが、そうすれば地下扉に彼を誘導してしまうのではないかと危惧して、思いとどまる。ジェニーが動かずに王の歩みを見据えていると、王は満足そうに表情をゆるめた。早朝だというのに、ジェニーに歩み寄る王の全身はすがすがしい精気にあふれている。

「目が赤い」
ジェニーの前に来ると王は彼女の瞳をのぞきこみ、面白そうに目を輝かせる。「泣いたのか？」
「違うわ」
王が目をしばたたかせる。
「違うのか。俺が恋しくて泣いておったのではないのか」
ジェニーが王をむっとして見ても、王は意に介せず、といった調子で、ただ、ジェニーを見ている。
王が腕を組み、半袖からのぞく彼の上腕筋がもりあがった。ケインよりもずっと鍛錬を積んだ筋肉のつく、たくましい腕だ。半袖の下に見え隠れする腕が少し白かったので、夏に近い日の下で彼の腕が既に日焼けしていることがわかる。ジェニーがそこから目をそらすと、王と視線がぶつかった。王はジェニーに見られていたのを気づいていたらしく、眉をわずかに上げて瞳をきらめかせる。そんな王の目に対すると、ジェニーはなんだか落ち着かない気分にさせられた。
「こんな朝早くから、何をしに来たの？」
「これはまた、とんだご挨拶だな」王がジェニーに目を細める。「ここに来るのに理由が必要か？」
王が急に手を伸ばしてきたのでジェニーはそれを避けようとしたが、その前に彼の手がジェニーの頭を捕らえた。ジェニーは王の手に力任せに引き寄せられると予想したのに、彼はジェニーの頭を上からなで、耳まで届くその大きな手でジェニーの頬を包む。それから彼はジェニーの前髪を親指で払い、その髪を一束取って手の中でもてあそぶように触った。ジェニーに何かを無理強いさせるような行為はみられない。王のやわらかな視線が、彼が指でつまむジェニーの髪の毛先に注がれている。
ジェニーが反抗することも忘れて王を見ていると、彼がおもむろに視線をあげた。憂いをたたえた王の表情は、何かをジェニーに伝えたいようにも見えたが、逆にジェニーの言葉を待っているように

も見えた。王がジェニーに顔を少し寄せ、瞳をのぞき見る。王が彼女の手を慈しむように握っていた夜が思い出され、ジェニーの鼓動が大きく胸を打ち始めた。

やがて、王が口を開いた。

「おまえ、剣技大会を見るか？」

「えっ？」

剣技大会という言葉を耳にして、ジェニーはそれまでとは違う意味で激しく動揺し、思わず一歩退いた。王が首を左に少し傾げて、言う。

「おまえは剣に興味があろう。近々、国で最大の剣技大会が開催されることはおまえも聞いておるはずだ。おまえが見たいのであれば、席を用意してやる」

当然、王はジェニーとケインがその前夜に脱出を企てていることなど知りはしない。計画が漏れたのではない。ジェニーは自身にそう言い聞かせて平常心を取り戻そうとするとともに、王の口から出た、命令ではない、ジェニーに選択の余地を残した意外な申し出にひどく面くらう。

「あ・・・・・それは、王城の外で開催されるんでしょう？」

「そうだ。専用の会場がある」

そう返答してからジェニーの質問の意図に気づいたらしい王が、小さく眉をひそめた。「ただし、おまえには俺の目から見える場所に席を取らせる。当日は多数の人間が出入りするゆえ、通常の数倍も厳重な警備となろう。不測の事態が起きた場合、何人たりともその場から這い出せぬようにな」

そして王は不敵に笑い、ジェニーにもう一度確認をする。「見たいか？」

前夜に城を抜け出すジェニーに、そこに行けるはずもない。

ジェニーは再び心臓が騒ぎ出すのを感じ、咄嗟に胸を手で押さえた。王が、まつげをわずかにふせる。

「いいえ、行かないわ。女官長やアリエルも・・・・・・大反対だから」

ジェニーの目の前で王の顎が揺れた。

「ふん、そうか」

王はそう言い放ち、ジェニーのお腹あたりに視線を注ぐ。「女官長の言葉をきくとは、おまえも従順になったものよ」

それから、王はジェニーにくるりと背を向け、出入口の方に歩き出した。王が立ち去ると思ったジェニーだったが、彼は扉の手前で左手に折れ、テーブルの前に立った。テーブルの上には、ジェニーがサンジェルマンからもらったノワ・パイの載った皿が二日前からずっと置かれている。王はその薄緑色の包みに手をのばして中身を確認すると、そのうちの一つを指でつまみあげ、まじまじと眺める。ジェニーは、胸からお腹に手をおろした。

「おまえ――産む気か？」

だしぬけに聞こえてきた王の問いにジェニーがびっくりしていると、王がゆっくりと振り返った。彼はジェニーの視線を受けていると知りながらそれを無視しているが、視線の行き先は、ジェニーが手で庇うように守るお腹だ。

王が、感情を感じさせない口調でジェニーに尋ねた。

「俺の子だというに、おまえは産むつもりか？」

体内の血が逆流したかのように、怒りとも口惜しさとも言えない激情がジェニーの喉元までやってくる。その感情のほとばしるままに、ジェニーは叫んだ。

「違うわ、あなたの子なんかじゃない！」

「違う、だと？」王が声を荒げ、顔を上げた。「ならば、誰の子だ？」

いっそ、ケインの子だったらいいのに。

ジェニーはあえぎ、王を力の限りににらみつけた。王もまた大きく顔を歪め、不愉快そうにジェニーをにらみ返している。

「俺の子でなければ誰の子だ」

王が殺気だった声で問う。ジェニーは口惜しさで胸がいっぱいになり、もう一度あえいだ。

「あなたじゃなくて・・・・・私の子よ！」

そう言い放った直後、ジェニーはその発言をした自分に心底驚き、唖然となった。今の今まで、子の母親だという自覚は微塵も感じられなかったのに。

ジェニーは口を覆っていた手をお腹に伸ばしてそこにあった自分の右手をつかむと、顔の前にかざした。意識下で母親としての自覚など何もなかったのに、ジェニーが知る前に、彼女のその手はいつもお腹を気にし、我が子を護っていた。

一方の王は、呆れたような形相でジェニーを見ていた。王にそんなふうに見られると、彼に対する途方もない怒りがジェニーの中でどんどん膨らんでくる。

「は、そうか」

王が手を額にあて、何度か大きく瞬きをした。「まさに、おお、それは間違えようもない」

「何を――」ばかにするような言い方にジェニーが憤慨すると、王は下に向けていた顔をジェニーに上げた。彼は苦笑していた。それを隠すように手で押さえた彼の口元から、息に似た笑いがもれてくる。ジェニーの頬に一気に熱がこもる。

ジェニーがなおも王を苦々しい思いで見つめていると、王は口元から手を取り去って両頬をもっとゆるめ――それまでの苦笑を軽やかな笑顔に変えた。ジェニーが常に見てきた、唇だけにのった表面的な笑みではなく、瞳までが上機嫌に弧を描き、笑っている。夏の晴れた日の湖のように、瞳の中で笑みがきらきらと反射している。ジェニーが今まで王と接してきた記憶の中で、彼がこんなにも気持ちよさそうに笑う姿は今まで見たことがなかった。

ジェニーが茫然としていると、王がジェニーから唐突に視線をそらし、唇を指でこすった。どうやら、王はジェニーのそんな反応に気を悪くしたようだ。ジェニーが目を奪われた王の笑顔はすっかり

息をひそめ、彼の態度の変化でジェニーも我に返った。
「だけど子は・・・・・子を、始末することもできると聞いたわ」
ジェニーがやっとそう言うと、王が少し眉をひそめ、意外な驚きをもってジェニーに振り返った。
「ほう？　おまえの口から、人間を“始末する”などという言葉を聞けようとは」
ジェニーは彼を精一杯にらみつけながら、唇をかむ。王はジェニーの真意を探ろうとでもするようにジェニーを見ていたが、やがて目をそらし、それまで手に持っていた茶色の菓子を皿に戻した。王はまた無表情に戻っていて、胸の内がさっぱり読めない。ジェニーが唇を噛み続けていると、抑揚のない口調で王が言った。
「そうしたければそうするがよい」
「えっ？」
王の表情に変化はない。ジェニーは女官長やアリエルの顔を思い出し、反論した。
「私に、そんな選択肢が本当にあると思うの？」
ジェニーのとがめるような口調に、王は幾分冷たくも見える笑いを浮かべた。
「それは、おまえの子ではなかったのか？」
「ええ、そうよ」
「おまえは、女官長の指図どおりに子を産み、あるいは子を始末するのか？」
「いいえ、そんな気はないわ」
王はジェニーの返答に満足したようだった。
「ならば、おまえが決めろ」
ジェニーは戸惑って王を見つめた。すると、その戸惑いを納得済みとでもいうように、王は淡々と続けた。
「おまえが子を持たない選択をするのなら、サンジェルマンにその旨を伝えろ。おまえの侍女に――そうよな、ノワ・パイはもう要らぬ、と伝言させろ。あの男はそれで理解して、女官長にも誰にも知

られず、ごく自然にみえるように問題を対処する」
女官長やアリエルは過保護とも言えるほどにジェニーの妊娠を保とうとするのに、王はあまりにも簡単に、まるで他人事のように妊娠の放棄を口にする。
膝から力が抜けかけ、ジェニーは必死で力を入れて支え直す。
「もし、そうじゃないなら――」ジェニーが言いかけると、王は疑わしそうにじろりとジェニーを見た。
「逆の場合は、何も言わずにおればよいだけのこと」
王はまたノワ・パイの入った皿に視線を落とした。皮肉そうな笑みを口元にため、ほんの少し前に見せた、輝かんばかりの笑顔の持ち主と同一人物にはとても見えない。
ジェニーがあれこれと思案していると、王が振り返って彼女をじっと見た。
「おまえ・・・・・」
ジェニーが不審そうに見返すと、王はわずかに顎を上げて挑戦的にジェニーを見つめた。ところがすぐに、王はジェニーにあてた視線を横にそらすと、何かを言い出そうとして口をつぐんだ。王が何かにひるむ反応をジェニーに見せたのは、これが初めてだ。
ジェニーの足がふらりと一歩前進すると、それにはじかれたようになって王が顔を上げた。その目は、既に普段と同じ鋭い目に戻っていた。

第一部　7．眼下に望む街ー3

三日後の夜には盛大な宴、その次の三日間には年一度の剣技大会をひかえて、王城は誰もがそれぞれに準備に忙しく、そして、高まりつつある期待と緊張に満ちた日々を送っていた。

ゴーティスは、数年来その行事を欠席していた従兄弟フィリップが今年から出席すると知ってもそれほど驚きはしなかったが、彼が妻や弟を伴うと聞き及んで、驚きを隠せなかった。特に、フィリップの弟ジェラールは、小さい頃から臆病で気が弱い。風の噂にだが、ゴーティスが各地に戦に繰り出すようになってからというもの、常にゴーティスを恐れ、動向を気にし、やみくもに注意を向けられないように自宅にずっとこもっていたと聞く。従兄弟の一人なだけであるジェラールは、ゴーティスにとっては取るに足らない存在だったのだが。だがともかく、その彼の重い腰をフィリップは上げさせたのだ。

かくして、体調が思わしくない彼らの父ラニス公の代理として、フィリップたち三名が今日の夕方前に王城に参上するという。

フィリップからは、延び延びになっていたジェニーへの返礼を持って行く、と数日前に書状が届いた。そこには、ジェニーへの感謝があらためて表明されているとともに、彼女の行為に対するゴーティスへの感謝も添えられていた。彼の直筆の手紙文面のあちこちから、彼のあからさまなジェニーへの好意が読み取れる。

フィリップは、ジェニーに再会したいに違いない。

そこによこしまな思いは感じられなかったが、だとしても、ゴーティスにとって、決して面白くはない。

毎朝の剣の練習を終えてゴーティスが東館に戻ってくると、眼下に見えるサロンに濃い緑色のドレスを着た女の後ろ姿が見え隠れしていた。女は中庭の出入口付近に立っており、ゴーティスの立ち位

置からは女の顔や髪の色は見えない。付き添いの侍女らしき女の存在もない。

ジェニーにしてはめずらしい色の服装だと思いながらも、この時間帯にそこにいるのは、彼女以外に考えられない。ゴーティスは先日のジェニーの真面目な面持ちを思い浮かべ、自分が予想以上に混乱を味わった瞬間も思い出した。

「王、この後に朝食が――」

ゴーティスが部屋を去りかけると、室内で待機していた侍従長に声を掛けられる。振り返ると、彼は白髪の混じった眉を寄せ、わずかに心配そうに顔をくもらせている。ゴーティスは、彼が心配性で常に顔色がすぐれなかったこと、最近になって血色が良くなったと皆から言われ、顔をほころばせていた日のことを思い出した。

「長くはかからぬ」

ゴーティスが部屋の出入口の手前で立ち止まって侍従長を見ると、彼が眉を上げ、驚いたように目をみはる。

「はい……！」

侍従長の頬がバラ色に変化し、彼の隣に並んでいた召使の女たちも同様に驚いて、一同に戸惑っていた。侍従長が唇を震えさせながらも顔をくずし、泣き笑いのような笑顔となる。ゴーティスは、唇にのぼった笑みを噛んだ。

ゴーティスは彼らのいる部屋をあとにする。

ゴーティスが笑いかけると侍従長たちが幸福そうに微笑み返す日常があったのは、それほど昔のことではないのだ。

東館からサロンに行くためには、後宮につながる通路をたどるより中庭を突っ切る方が早い。

ジェニーと対峙するほとんどの場合が、彼の望まない、面白くない結果に終わるのに、ゴーティスは彼女がいる場所に足を向けずにはいられない。しかも彼女を前にしても、以前ならば躊躇なく組み敷いた彼女の体に、ゴーティスは手も出せずにいるのだ。

居並ぶ美女たちを尻目に、女と呼ぶには幼すぎる彼女に執心する自分の気が知れない、とゴーティスは自嘲する。ジェニーは幼稚といえるほどに真正直で、周囲の大人たちのような計算を知らず、皆が厚遇する王ゴーティスを心のままに冷遇し、反発する。だからこそ、彼女はゴーティスの機嫌を簡単に損ねる。だが、彼女の言動すべてが真実に基づくものだと、ゴーティスはよく知っている。

いつだったか、それと知らずに触れたゴーティスの手の感触に安心し、微笑むジェニーを目にしたとき、それが寝ぼけていた上での反応だったとはいえ、自分の行為で彼女が喜んだ事実はゴーティスの心を一瞬にしてからみ取った。彼女の本物の微笑を再び手に入れようと、ゴーティスは世の男たちの真似をして彼女の好きな書物や菓子を贈ってみたが、どうやら、彼女は目もくれなかったようだ。ゴーティスからの物品を遠ざける傾向もあったらしい。

……サンジェルマンの名をあげなければ、あのノワ・パイでさえ、口にしたかどうか。

彼女の反応に出会うと歯ぎしりするほどに口惜しく腹立たしいが、数日間と彼女の顔を見ていないとゴーティスの心はざわざわと波立ってくる。

まるで、自分の牢の鍵を自分で持っている囚人のようだ。不愉快な環境からはいつでも出られるのに、彼の自由意志で牢内にいつまでも留まっている。

衛兵のいるサロン出入口からゴーティスが中を眺めると、見慣れない侍女らしき者の後ろに、彼が東館から見かけた緑色のドレスを着た人物がみとめられた。その体格と髪の色を目にしたとたん、ゴーティスの歩く速度が劇的に落ちる。

「……王！」

ほとんど立ち止まった彼のもとへ、滑るようにオルディエンヌが走り寄ってくる。彼の愛人たちの内でも目立たない存在ではあったが、過去数ヶ月にわたって彼女の顔すらも見ていなかったために、彼女の印象はかなり薄れていた。地味ではあるが整った彼女の目鼻

立ちを見ながら、ゴーティスの期待と興奮は、あっという間に冷めていく。

「ここでお会いできるとは、思いもしませんでしたわ……！」

オルディエンヌは彼の側に急いで来てはみたものの、はじらうように顔をうつむけて微笑んだ。背の高い彼女は顔の位置がゴーティスにも近く、滑らかな肌の表面がよく見える。

ゴーティスが口を開かずにいると彼女が顔を上げ、彼にそっと近づいた。

「王……」

「おまえと――ここで会うのは初めてだ。おまえは、外を好まないと思うておった」

「まあ、そんな」オルディエンヌがにっこりと笑い、彼に目を合わせようと視線を上げた。「毎朝ではありませんが、私も……ここに来ているのですよ」

ゴーティスが知る限りでは、朝はおろか日中でも、オルディエンヌがサロンに降りてきたことはなかった。人付き合いを苦手とする彼女がジェニーのいる朝のサロンに合流した光景も目にしたことはなく、そんな噂も耳にしたことがない。彼女のわずかな言いよどみが、それが嘘だと物語っているようなものだ。

ゴーティスは彼女が笑みを作るために口角を押し上げるのを、見知らぬ誰かを見るように眺める。

「それは知らなんだ」

彼女が挨拶のキスをしようとゴーティスの口元に唇を寄せようとし、彼がわずかにそれをよけて頬を出すと、彼女はおとなしく頬に口づけをした。唇は柔らかく、冷たかった。

「よかった、お元気そうですわね」

オルディエンヌはゴーティスの腕と触れた体を離さず、目を細くして微笑む。露出しようとしなくても服に隠しきれないオルディエンヌの胸を一瞥し、ゴーティスは彼女の朱色の唇に気づいて、彼女が以前よりも濃い化粧をのせているのを不審に感じた。

「近頃はめっきりお忙しくなったと知り、王の身を案じていたのです。外国からお客様が来ていらしたとか？」
「もう帰った。だが、すぐに別の客人たちが城に来よう」
「剣技大会に参加される方々でございますね」
ゴーティスが頷くと、彼女はまたうつむいて小さく微笑む。
それを目にしたとき、ゴーティスは、彼女が、自分に誘いをかけているのだとようやく気がついた。彼の要求を拒みはしなくても、一度も欲求を表さなかった彼女が。驚いた。彼がそうやって見ていると、オルディエンヌは微笑んで彼を見上げる。
「王、今年は私も大会を観覧したいのですが……よいでしょうか？」
彼女の願いに、ゴーティスはまたもや耳を疑う。
「そんなに驚かないでくださいませ、王。私もたまには外で気分転換をしたいのです。その、他の方々も、観覧なさるのでしょう？」
「――他の者？」
ゴーティスが声をひそめると、彼女が胸を彼の腕から離し、言った。
「後宮にお住まいの方々――カトリーヌ様やジェニー様や……」
他の女への対抗心から、彼女にしては積極的な行動に出たのか。
オルディエンヌは話を続けようと努めていたが、ゴーティスが唇を引き締めたことに気づいたらしく、それ以上に続かなかった。それまでのさわやかな笑みが、ぎこちない愛想笑いへと変わっていく。
ゴーティスは、大会への出席を自らジェニーに提案し、断られたときの情景をよみがえらせた。その他大勢からは参加の許可を請われる一方で、王である彼が直々に申し出る唯一の相手には断られるとは、なんとも皮肉なことだ。サロンで彼女に会えると考えてのこのこと足を運び、勘違いだとわかったときのゴーティスの落胆をジェニーはわかりはしないだろう。
ひと気のないサロンの入口に目をやると、ジェニーが今にもそこに足を踏み入れそうに思え、ゴーティスの胸は熱くなる。ゴーティスは、自分をそんな状態に陥らせるジェニーがいまいましくもあり、

そんな自分に対しても、いまいましく思えてならない。
ゴーティスがオルディエンヌに注意を戻すと、彼女は不安そうに視線を泳がせた。たぶん、彼を寝所に誘おうとして失敗したことを自覚し、彼の機嫌を損ねたのではないかと心配している。
「大会に出席したくば女官長に話せ」
ゴーティスがそう言うと、彼女の頬が少しゆるんだ。
「よいのですか？　ありがとうございます、嬉しゅうございますわ」
「おお、どうせなら前夜の宴にも出席しろ。宴は華やかな方がよい。おまえたちの席を用意させておくゆえ、他の者にもそう伝えておくがよい」
「ま……あ。では、カトリーヌ様とジェニー様に――」
「ジェニーはよい」
「えっ？」
オルディエンヌが戸惑って彼を見上げる。
「あの女は宴の席にはいらぬ。おまえたちがおれば十分だ」
オルディエンヌはあきらかに戸惑っていたが、彼の返答が嬉しかったのか、照れたような笑みを表情に混じらせている。
彼女もまたジェニーの存在を気にしていたのだ。ゴーティスは、彼女の女の性を初めて垣間見たような気がした。
ゴーティスが東館に戻ろうと踵を返すと、王、とオルディエンヌに呼び止められた。ゴーティスは浅い息をつき、後ろを向く。
すると、彼女が華奢な手を彼の肩に伸ばし、体を寄せてきた。その柔らかな体の重みにゴーティスの手は彼女の腰に自然に伸び、彼女が自分の唇に口づけるのを許した。それから彼女は口を開いて舌を押しつけ――彼にそれ以上の展開を期待していたようだった――しかし、ゴーティスは彼女の欲求には応えないで、唇だけを表面的に受けた。彼女はとても肉感的なのに、何の官能も感動も得られない。ゴーティスは、この口づけが単なる物質的な触れ合いでしかないことを思い知らされた。
唇を離した後に、王、と彼女はもう一度囁き、ゴーティスの顔の

前で神経質そうにまつげを震わせる。ゴーティスは彼女の腰から手を離し、何も言わず、彼女に再び背を向けた。

◇　◇

明後日にせまった決行を前に、ケインは脱出に備えての準備に余念がなかった。ケインはジェニーと王城からの脱出を約束しながら口で言うほど実感がわいていなかったのだが、彼女からの決行日の知らせを実際に目にするなり、それは急に現実味を帯びた。

十八年あまりも慣れ親しんだ王城からいなくなるのがどんなことなのか、ケインには想像もつかない。ただ、ジェニーは彼とともに城を逃亡することを願い、彼らは本当に、ゴーティス王のもとを去ることになる。

突然に襲った武者震いに、ケインは体に巻きつけたぼろ切れのような毛布ごと、自分の体を抱きしめる。

水中の柵を壊す作業にはかなり苦労したが、それも何とかやり遂げた。地下牢から城外に通じる水中の出口までの経路を何度も往復し、その風景を目で見なくても覚えているくらい、彼らがたどるべき道はケインの頭の中にたたきこまれている。衛兵が城壁の周囲を見回るのは朝、夕方の日に二回で夜間はない。ただし、城壁の上には常駐の衛兵が当然いるだろうから、それが最大の障害になるはずだ。

衛兵に見つかる可能性を思うと、ケインは恐ろしくて仕方がない。万一の場合に備えて、今も足の下に隠してある短剣を携帯するつもりではあるが、ケインは今までの人生で人を傷つけた経験が一度もない。剣の練習は幼少時より義務的に重ねてきてはいても、自分が剣を手にとって戦う機会などないとふんでいたから、実際に衛兵と剣をかち合わせる事態になれば、自分が勝つ自信などまったくなかった。あの恐ろしい王に剣を向けたジェニーの勇敢さとは、とても比べものにならない。

それでも、ジェニーと一緒だと何とかなる、という根拠のない自信がケインの不安を和らげる。彼女と一緒にいれば強くなれそうな自分がいる。彼女が自分を頼りにしていることは知っているし、彼女のためにも、ケインは頼もしい自分になりたかった。

そのうちに“梟の男”の足音が聞こえ、ケインは毛布を頭からすっぽりと被って、体全体を隠した。男は牢内のケインに決して近づこうとしないので、彼の、囚人としては不自然な清潔さに目を留めることもなかったが、万事において慎重でいる必要がある。

ケインが牢の奥に退いて男の到着を待っていると、やがて、通路の扉が開けられた。男はいつもの食事のほかに、何か白い物を手に携えていた。

男は食事の載せられた盆をいつものように格子の間から押し込み、反対側の手に持っていた白い布のようなものを、その横の床に無造作に置いた。丸めて置かれたので、ケインにはそれが何なのか判別できない。

「服だよ」

しゃがれた声が牢内に響き、ケインは目を丸くして男を見た。男は斜視で、その目がケインを見ているのかどうか、よくわからない。

ケインがその白い服と男を見比べるようにしていると、男が牢内をのぞきこむようにして、ケインに言った。

「それは末の息子の服さ。まだ新しいがね、あんたにやるよ」

ケインは白い物体を見た。脱出を前に思いがけない贈り物ではあるが、男が自分に親切にする理由がわからない。

「それはありがたいけれど……なぜだ？」

ケインが問うと男が満足そうに笑った。

「うちの地域には、息子の無事を祈願して同じ年頃の恵まれない男子に服を施す、って慣わしがあるんだよ。あんたはまだ二十かそこらだろ？　だからさ。息子のために受け取ってやってくれ」

ケインはその服を手に取って礼を言いたかったが、そうするには男の間近で彼の体をさらすはめになる。不本意だがそれをあきらめ、

どこを見ているかわからない男の目を見つめて、ケインは礼を言った。

「そういうことならば、ありがたく頂こう」

男は満面の笑みでケインに頷いた。ケインも笑い返す。

ケインにとっては、幸先のよい出来事だった。

第一部　7．眼下に望む街－4

剣技大会の前日、後宮の朝はいつもと同じように明けた。ジェニーたちの門出を飾るにふさわしく、この日の青空はどこまでも澄みきって、からっとした夏の空気が城内でもはっきりと感じられた。フィリップを始めとする招待客は既に入城し、夜中まで繰り広げられる大きな祝宴をひかえ、本城の使用人たちは早朝から走りまわっているという。とはいえ、ジェニーが顔を会わせる面々は、普段の様子となんら変わりなく、後宮に居る限り、大会が目前に迫っている実感はわかない。

ジェニーが昨夜寝ついたのは日付が変わった後の深夜で、それ以降も熟睡できずに夜明け前までに何回も目が覚めた。ケインとの脱出を今夜にひかえ、自分が思う以上に緊張しているようだ。おかげで、ジェニーは体がぐったりとしていて食欲がわかない。

アリエルがそんなジェニーを心配して寝室で休息するよう勧めたが、ジェニーは自分が再び眠りにつけるとは考えられなかった。むしろ戸外に出て、体を覚醒させたい。

昼寝をするとアリエルに約束させられた後、ジェニーは彼女と連れ立ってサロンに向かう。二人が階段の降り口にさしかかると、上階に続く階段の途中で二人の女が何やら言い合い、対立しているのを見かけた。そのうちの一人はオルディエンヌの侍女で、ジェニーは、主人同様に後宮内で遭遇したことのない彼女が誰なのかわからなかった。彼女はジェニーたちが来たのに気づき、はたと会話を閉ざす。

ごきげんよう、とアリエルが先に挨拶をすると、彼女たちはあわてて姿勢をただし、ジェニーに挨拶をする。ジェニーが微笑み返すと、侍女が階段を降りてきた。

「お見苦しいところを失礼いたしました、ジェニー様。今から、サロンに行かれるのですか？」

「ええ」

アリエルが代わりに答えると、侍女が彼女に向かって言った。

「まあ、それはようございますわね。今日は天候にも恵まれて、さぞ気持ちがよいことでしょう。私どもは朝から準備で追われて――オルディエンヌ様が今夜の宴に出席されることになって、もう、目の回るような忙しさで」

侍女はそう言いながら、さっきまでいがみ合っていた背後の召使らしき女に微笑みかける。そしてジェニーに振り返った彼女は、肉付きのよい頬をくぼませ、さらに大きな笑顔へと変わった。その笑顔の中には、若干の高慢さが潜んでいる。

「そうなのですか。今夜の宴は盛大にとり行われるそうですね。オルディエンヌ様も、さぞかし楽しみでございましょう」

「ええ、それはもう。今夜の宴には王が――」

「今夜は、久方ぶりに王族の方々がご参集するとうかがいましたわ。準備も念入りになさいませんとね。ご存分に楽しんでくださるよう、オルディエンヌ様にはよろしくお伝え下さいませ」

アリエルがジェニーに振り返った。侍女が若干の不満を表情にたたえ、アリエルの視線を追ってジェニーを見る。アリエルは侍女に向けたのと同じ微笑を保ちながら、ジェニーを先へ進めさせるように促した。

ごきげんよう、とアリエルが侍女ににこやかに挨拶すると、彼女は膝を曲げ、おざなりにだがアリエルに応えた。ジェニーは彼女の前を通り過ぎ、階段を下へと降りていく。侍女の視線がジェニーの背中に突き刺さる。

今までに何度となく思ったように、ジェニーは、アリエルに護られている、と感じた。

母のようにジェニーを護ってくれるその彼女を裏切るような形で、ジェニーは今夜脱走する。彼女に会えなくなるのはとても寂しい。彼女もまた、寂しがってくれるだろうか？

アリエルとは一生涯会えなくなる可能性を強く感じながらも、こ

の別れがほんの一時だと捉え、いつか再会できるようにと、ジェニーは彼女の実家の所在地を把握してある。

「どうしました？」

サロンに差し込む光を見て眩しそうに目を細め、アリエルがジェニーに問う。ジェニーが首を横に振ると、彼女は笑い、もっと中庭に近い場所に移動しましょう、と言った。

ジェニーは中庭に面した窓から対面の東館を見上げた。日差しはもうすっかり夏のそれで、東館の壁がいつもよりずっと白く光って見える。壁にある窓は清涼とした外気を取り込もうと、ほとんどが外側に向かって開放されている。

ゴーティス王を何度か見かけた窓を見てみたが、そこに人影はない。中庭にもひと気はない。中庭の地面は濃い緑に様変わりし、中央に立つ木には青々とした葉がぎっしりとたくわえられている。

「この時間はたしか――王は剣の練習をしておいでですよ」

いつのまにか隣に来ていたアリエルが言い、ジェニーは息を短くついて、アリエルを軽くにらむように見た。

「あの人が何をしていようと、私は気にしてないわよ」

「そうおっしゃると思いました」

アリエルがくすくすと笑い、ジェニーは怒る気も失せる。

再び中庭に目を戻すと、突然、ジェニーは、この目の前に見える世界は今日を最後に二度と見られないものだと実感して茫然となった。サロンの出入口をふさぐ屈強な衛兵も、青々とした緑を縦断する小径も、そこをたどって颯爽と歩いてくるサンジェルマンの姿も、東館の窓からサロンを見下ろすゴーティス王の姿も、もう目にすることはない。

「ジェニー様、どうされたのです？」

「え？　ううん、何でもない。少し頭がぼんやりしてて……」

アリエルは心配そうにジェニーを観察するように見たが、彼女をとがめるようなことは何も言わなかった。彼女はただ黙って、ジェ

ニーの隣で同じように中庭を眺める。
「そういえば――昨夜、サンジェルマン様がおっしゃったのですが」
「サンジェルマン？」
ジェニーがアリエルに向くと、彼女の頬が少し赤らんだ。それがとても愛らしく見え、ジェニーの頬をゆるませる。アリエルとサンジェルマンは、まだ今もちゃんと顔をあわせているようだ。
「サンジェルマンがどうしたの？」
「あ、はい」アリエルが顎をあげ、話を続ける。「数日前のこと、王が指を火傷し、ちょっとした騒ぎになったそうでございます。その理由が、なんとも子どもじみた行為のせいだとかで。周囲の者は王に戸惑ったようですが、サンジェルマン様は楽しんでおいでのご様子でした」
そうやって、アリエルも無邪気な微笑みを浮かべる。ジェニーは、ゴーティス王が時おり姿をのぞかせる窓をちらりと仰ぎ見た。
「彼は何をしたの？」
「なんでも、お菓子を明かりの火であぶって焦がそうとし、あやまって人差し指に火傷を負ったそうでございますよ。王の傷は大したことはないそうですわ。行儀の悪い子どものようだ、とサンジェルマン様は王の行動を笑っていらっしゃいましたが、王がどうして急にそんなことをされたのか……首をひねるばかりで。ただ女官長様が大騒ぎだったらしく、なだめるのに苦労した、とサンジェルマン様がおっしゃっていました。ねえ、ジェニー様、女官長様のお姿が目に浮かぶようですわね？」
あの王が、お菓子を火であぶった……？
アリエルが楽しそうに微笑みながらジェニーを見て、不意に表情をくもらせた。
「ジェニー様？」
「アリエル――ノワ・パイは、サンジェルマンがくれたんじゃ……なかったの？」
「えっ？」

ジェニーがアリエルから目をそらさずにいると、彼女は動揺したように目線を下へ流した。その彼女の反応で、ジェニーは答えを確信する。

「ジェニー様、それは……」

「ちがうのね」

アリエルにがっかりしてジェニーが言い放つと、アリエルが気落ちした様子で顔を上げた。

「ジェニー様、申し訳ありません。あれは……王がご用意くださったものです。サンジェルマン様からの土産として差し上げるようにとの王のご命令で、やむなく――」

「なぜそんなこと？　アリエルに嘘をつかせる必要なんかないじゃない」

ジェニーがそう憤慨すると、アリエルが弱々しく笑って言った。

「そうしないと、ジェニー様がお菓子に手をつけてくださらないからですわ」

「え？」

ジェニーを見て、アリエルが頷く。

「ジェニー様は王に頑なに反発され、王からとなれば、ご自分の好物でさえ手に取ろうとなさいませんもの。王はそれをご承知の上で、せっかくの故郷の味を、王への反発心のためだけにふいにするのは忍びないと、あえて名を伏せられたのです。ジェニー様を喜ばそうとする一心の、王のご配慮ですわ」

アリエルの穏やかな口調の中に非難する響きを感じ、ジェニーは彼女を直視できなくなって、中庭の方を向いた。

アリエルの言うことは、少しは正しいのかもしれない。でも、ジェニーには彼の気遣いが到底、信じられない。

心臓は既に胸の中で大きく跳ね続け、大きくなった鼓動で周囲の音がかき消されていく。ジェニーは右手で自分のお腹をそっとさすった。

「あの人に……そんな気遣いができるとは思えない」

「ジェニー様が思われるより、王はずっと繊細なお方ですわ」
アリエルが断言し、ジェニーは彼女に振り向かされた。だが、アリエルのいやに自信たっぷりな口調とは反対に、彼女は今にも泣き出しそうな顔をしていた。
「一度でよいですから、王を正視なさってくださいませ、ジェニー様。王の真のお姿に目をお向けください。これは、私からのお願いでございます」
そしてジェニーの返答も待たず、アリエルは口をきつく結んで、サロンの奥の方へ歩き去っていってしまう。

昼寝の名目でジェニーを寝室に独り残すまで、アリエルはずっと言葉少なで笑顔もあまり浮かべなかった。ジェニーは彼女に賛同できかねたので、彼女にどんな言葉をかけたところで事態は変わらないと考え、必要以上の会話はしなかった。
部屋に独りきりになると、ジェニーは体にどっと疲れを感じた。ただでさえ睡眠不足だというのに、アリエルの言葉がきっかけとなって、胸には混乱がうずまいている。それがジェニーの体を不自由にしている。この疲労を心身に残したまま、今夜を迎えるわけにはいかなかった。
風にのって衛兵たちの陽気な声が室内に入ってきた。普段でも聞こえる場合はあるが、いつになく機嫌のよさそうな、明るい口調だ。彼らの会話はしばらく途絶えず、何度か笑いあう声がそれに混じる。

衛兵たちの笑いが起きるたび、ジェニーは王の笑顔を脳裏によみがえらせて、頭を振った。
王のことなど、考えたくない。
アリエルが何と言おうと、不可解極まりないゴーティス王の言動に頭を悩ますことは、ジェニーはしたくない。それにどちらにしろ、今日を最後に——彼の顔を見ることも永遠になくなる。
不意に腹が重くなり、ジェニーは掛布の下のお腹をやわらかく撫

でた。ジェニーの手のひらをつたわってくる体温は温かく、心地よい睡魔がジェニーを襲う。次に頭がふわりと軽くなり、ジェニーは自然に目を閉じた。

早めの夕食を済ませ、十分な休息をとりたいとアリエルに訴えたジェニーは、早々に独りの時間を勝ち取った。アリエルの態度は通常どおりに戻っていて、気遣うように寝床のジェニーに声を掛け、召使とともに退室する。

昼間の睡眠のおかげで、ジェニーの気力は元に戻っていた。体全体をおおっていた緊張感も薄れている。今夜の脱出に備えての準備は、数日間の逃亡に耐えられるだけの体力と心構え以外に特にはない。

ジェニーはそれほど眠いとは思わなかったが、ケインが現われるだろう真夜中まで、もう一眠りする時間は十分にあった。

眠りには落ちないだろうと考えていたが、ジェニーはいつのまにか、うつらうつらとしていた。日の長い夏の空が暗闇に移りかわり、窓から差し込む光も濃い青色だ。夢と現実の間で、ジェニーは召使かアリエルが枕元までやってきて、自分の様子を確認していく気配を感じた。扉が遠慮がちに閉められるかすかな音で、ジェニーは目を覚ます。

寝室は、夜の空気に包まれていた。ジェニーは耳をすましてみるが、扉の閉じる音を最後に闇夜を妨げるものはない。昼間には頻繁に聞こえてきた衛兵たちの会話も、今はまったく聞こえない。

ジェニーは勢いをつけて寝台の上に起き上がり、扉の向こうの様子を気にかけながら、床に静かに降り立った。そして、地下扉のある床面まで暗闇の中を歩いていく。

敷物の位置は変わりなく、扉が開けられた形跡はなかった。ジェニーは床にしゃがみ、敷物をはねのけて地下扉に手をかける。扉の下に階段が現われ、ジェニーは暗闇の中で目を凝らし、前回との変化を求めて視線をめぐらせた。だがそこには、ジェニーが前回そこ

に見たままの光景――同じ場所に同じ合図が転がっているだけだった。

ジェニーはあきらめて扉を閉め、長いため息をついた。

真夜中までにはまだ時間があり、見回りの看守をやり過ごした後でなければ、ケインも牢を抜け出せないのだろう。

ジェニーは寝台の上に戻った。ケインが顔を出すまでに、もうそれほどの時間を待つことはないだろう。

目はすっかり冴えている。

けれども――ジェニーは夜明けになるまで起きていたが、ケインはいつまでもたってもジェニーのもとに現われなかった。

ジェニーはいても立ってもいられなかった。ケインが約束を破るとはどうしても考えられず、彼がそうせざるを得ない危機的状況に陥ってしまったのではないかと、ジェニーは彼の身が心配でならなかった。ジェニー自らが地下の通路をたどって彼の無事な姿を確認したくても、そうするには、独りとなれる夜を待って行動するしかない。

その夜までの時間が、どんなに長く感じられたことか。

ジェニーの不安で落ち着かない様子は、元気がない、とアリエルたちには見えたようで、心配する彼女に侍医を呼ばれそうになるのを、ジェニーは苦労して押しとどめなければならなかった。

やっとのことで待ち望んだ夜が来て、召使が退室して早々に、ジェニーは明かりを手に地下扉へ向かった。命の価値が最も軽い囚人であるケインを、ジェニーが想像する最悪な状況で発見することだけは避けたいと願いながら、ジェニーは敷物を床から取り、木扉を引き上げる。

「あ……！」

扉の下に現われた階段の上に、昨夜見たのとは別の場所に木片が置かれていた。ジェニーはそれを急いで拾いあげ、ひっくり返して

裏面を確認する。ケインからの新しい伝言だった。
“ごめん。明日の夜、決行する”
ジェニーは心底安堵して、床に膝をついた。
ケインはまだ、生きている。
そこにケインの姿がないと知っていながら、ジェニーは彼の姿を求めて階段の奥を明かりで照らす。
彼に何が起きたのかはわからないが、無事でよかった、とジェニーはもう一度、安堵の息をつく。それから、手の中に握った彼からの新しい伝言を見やる。
明夜に決行。
それは、剣技大会の最終日前夜だ。聞くところによると、上位者ばかりが戦い、勝者が最終的に決まる最終日は、三日間の中でも最高の盛り上がりを見せるという。その前夜には誰もが興奮し、浮かれているにちがいない。
「私たちはきっと、ここから脱出する」
ジェニーはケインが間近にいるかのように囁きかけ、自分の心の中でもそう強く誓った。

決行当日となる剣技大会の二日目、ジェニーの心は驚くほどに落ち着き、揺るぎなかった。そんなジェニーの心情を反映するかのように、空は前日にも増して青く高く、気温は早朝からぐんぐんと上がっていた。そして、風向きのせいなのか、地響きのような群集の歓声が時おり後宮にも届き、大会はたしかに開催されているのだとジェニーにも実感させる。
アリエルの勧めに従って、ジェニーはその日も昼寝をした。昨夜の熟睡の後では昼寝もできないだろう、というジェニー自身の予想を裏切り、ジェニーは床につくなり、あっという間に眠りに落ちた。そして、どのぐらいの時が経ったのかわからないが、非常にすっきりとした気分でジェニーは目覚めた。室内はまだ、ずいぶんと明るかった。

ジェニーが違和感に気づいたのは、目覚めて間もなくだ。
ジェニーの目の前には鈍い銀色をした腰帯があって、濃紺の上質な生地が目に飛び込んできた。ジェニーが寝台から顔を浮かせてその生地を上にたどると、その濃紺の衣服に身を包んだ人物も横顔を動かし、寝台に横たわるジェニーを見下ろした。ジェニーと目が合うと――ほんの一瞬だが、わずかに緑色の瞳を見開く。
ジェニーはなぜか、そこにゴーティス王の存在をみとめても少しも驚きはしなかった。ジェニーは彼から目をそらさず、彼もジェニーを見つめて動かない。だが、そこに流れる沈黙は、緊張感も保っていなければ、威圧感を与える種類でもなかった。
「……寝顔を覗き見るのが趣味なの？」
ジェニーが先に口をきくと、王は少しだけ不愉快そうに眉を寄せたが、すぐに真顔に戻った。
「おまえが、こんな昼間から寝ておるとは思わなんだ」
それから、彼は唇の端を上に向かって上げる。
「おまえこそ、今日は寝たふりを装わぬのか？」
ジェニーの前で、王がおかしそうに頬をゆるめる。ジェニーは王の顔を見つめながら、その問いの意味するところに思い当たって、頬をかっと熱くさせた。

第一部　7．眼下に望む街－5

ゴーティス王はジェニーが掛布の中から這い出すのを興味深そうに見ていたが、何かをしゃべるわけでも、また、体勢を変えるでもなかった。いつかの夜の出来事を、頭の中で封じ込めようとすればするほど、あのときの記憶と感触がジェニーにあざやかによみがえる。ジェニーが動揺する必要もないのだが、体が言うことを聞かない。頬が熱くなるのを止められない。しかも、あのときのように、ジェニーのお腹は体温よりも熱を持っていて温かだ。

「あなたは今日も、大会を観戦するんだと思ってた」

動揺と自分への苛立ちを紛らそうとしてジェニーが王に言うと、彼はジェニーの顔をしげしげと見つめた後、大きくかぶりを振った。

「観戦するのは初日の冒頭試合と最終日だけだ。他人の交剣を見たところで、俺はそれほど楽しくはない」

そして彼はまた、ジェニーを観察するように見る。ジェニーがその視線で居心地が悪くなっていると、王が寝台から腰を浮かしながら、ジェニーに振り返って言った。

「それより、すぐに着替えろ。屋上へ行く」

「屋上へ？」

何のことかわからずにジェニーが問い返すと、王が面倒そうに頷いた。

「おまえは具合が悪いのではなかろう？　早く着替えてこい」

唐突な誘いだ。ジェニーがなおも黙っていると、王が少しだけ苛ついた様子で続けた。

「屋上からは大会の会場が見える。試合の様子まではさすがに見えぬが、サロンとは違って、屋上からはシエヌ河もヴィスコンデールの街も見渡せる。それゆえ――」

ジェニーを見た王が、焦ったように視線をすぐに外す。

「早く支度をしろ。俺は、待たされるのは好かぬ」

そう言うなり、王は手の甲で唇をこすり、ジェニーに背を向けた。そして、いつものように大股で扉まで歩き、ジェニーの寝室を立ち去って行く。

王が去って間もなく、今度はアリエルが入れ代わりに寝室に入ってきた。扉が開いた一瞬、隣の部屋でせわしなく動きまわる召使の足音がジェニーにも聞こえる。

「ジェニー様！」

ジェニーが寝台から降りるより前にアリエルが走り寄ってきて、嬉しそうな笑顔をひときわ輝かせてジェニーを見つめる。

「アリエル？」

「ああ、王の今のお顔をジェニー様にも見せて差しあげたかったですわ！　ジェニー様、王に反抗的な態度をおとりにならなかったのでしょう？　あんなに嬉しそうで――可愛らしいとさえ思わせる王の表情は、私も初めて拝見しましたわ！」

「……あの人が？」

「はい！」

アリエルのいつにない興奮ぶりには戸惑ったが、ジェニーは王の提案に驚かされながらも喜んだことで、反発しなかった自分の言動を振り返った。

彼は、自分には嬉しそうな素振りをまったく見せなかったのに。

王は隣の部屋で退屈そうにジェニーを待っているという。着替えを手にジェニーたちに合流した召使がアリエルと協力し、ジェニーをあっという間に外出できる格好へと変えた。

ジェニーは後宮から東館へ抜ける通路を経由し、王の居住空間だという東館に初めて足を踏み入れた。後宮のように行き交う使用人たちの姿が少ないせいで、館内は閑散としている。直線的な造作が多いが細部には凝っていて、廊下や扉の幅はゆったりとしており、全体的に整然とした印象だ。寒々とした景観になりがちな壁面は、色鮮やかな風景画や肖像画で飾り立てられている。ジェニーの目に

は後宮もかなり豪華な造りだったが、東館には後宮とはまた違った豪華さがあった。

屋上へ続くという階段に差し掛かると、正面の壁に、ゴーティス王と同じ髪と瞳の色をもった、彼よりはもっと年上の男性の肖像画が掛けられていた。顔立ちは王に似ていなくもないが、漂う雰囲気が決定的に違う。その優しそうで穏やかな笑みは、ジェニーの心の中に染み入ってくるようだ。

ジェニーがつい立ち止まってその絵を見上げると、先に歩いていた王が戻ってきて、ジェニーの腕をぐいと引っぱった。

「行くぞ」

王はジェニーと目を合わそうとしなかった。ジェニーは彼の腕に連れていかれながらも、気になったことをそのまま口にする。

「あの人は、あなたの――」

「先王だ」ジェニーに言い終わらせる前に王が口をはさむ。「俺の、亡くなった父親だ」

若い彼が王位についている現実から、彼の父親がこの世にいないだろうことはジェニーにも簡単に想像できた。ジェニーは先を急ぐ王の背中を見て、今のジェニーと同じ年頃だった彼がある日を境にそれまでの少年の世界と決別し、一国の主として歩み出すにはどれほどの犠牲を伴ったのだろう、とぼんやりと考える。

不意に王が立ち止まり、それまでつかんでいたジェニーの腕を放すと、今度はジェニーの手を握って彼の方へと引いた。

「先王は毒殺された」

「……えっ？」

ジェニーが驚いたのを冷ややかに見つめ、王はまた歩き出す。

「どこの王も暗殺の危険とは常に隣り合わせだ。同情はいらぬ」

それはまた、自分の置かれた立場も同じと言っているようなもの。

ジェニーは、今の今まで振りほどこうとしていた王の手を見つめた。彼の手を通じ、先王である父の死を悼み悲しむ想いなのか、父親と同じく暗殺が日常的に起こりえる環境下に孤高で居続けなけれ

ばならない彼の悲哀なのか、熱くも悲しい感情がジェニーにとめどなく流れ込んでくる。

ジェニーは、忌み嫌ってきた彼にも、当然ながら、自分と同じように何かを悲しむ感情があることに気づかされた。同情ともつかない痛みが、彼の顔にジェニーの視線を戻させる。だが、ジェニーの前を行く彼の顔には、何の感情も浮かんではいない。

二人の先導をしていた衛兵が階段の突き当たりにあった扉を開け、ジェニーの方にも明るい光が降り注いだ。王がジェニーに振り返り、扉に向かって顎をしゃくって言う。

「屋上だ」

彼の顔を見た瞬間に、ジェニーは、“王は繊細だ”と言ったアリエルの言葉を直感で信じた。

王の後に続いて出入口から屋上に顔を出すと、ジェニーはそこを吹き抜ける風をまともに顔で受けてしまい、両目を閉じて顔をそむけた。誰かがジェニーの手をつかんで――感触でそれは王だとわかったが、その手がジェニーを先へと誘導した。目を閉じていても太陽の明るさが感じられ、草の匂いを含んだ風がジェニーの両頬をなでていく。ジェニーは、ここ何ヶ月も肌で感じたことのなかった本物の外気に体全体を包まれ、思わず身震いした。

「目を開けろ、ジェニー」

いつのまにか強風が止み、ジェニーは王の言うままに目を開けた。ジェニーの胸の高さほどある城壁の向こうに、左右に広がる黄緑色の丘陵地帯、その合間に模様のように点在する濃緑の森や林がある。城から丘を抜ける白い道のずっと先には、塔らしき背の高い建物をぐるりと囲むように様々な建物が立ち並ぶ、大きな街が光って見えた。

「ああ……！」

ジェニーは目の前の城壁に両腕を掛け、少しでもその景色が近く感じられるように目を凝らした。正面に望む道の左手にある林の奥

が光を反射していることから、そこに川があるだろうことがわかる。丘陵地帯の一部には茶色の点がいくつか見え、それが干草の山だと確認できると、人々の生活感を身近に感じてジェニーはなんだか嬉しくなった。

「剣技大会の会場は向こうだ」

王に声を掛けられるまで彼が隣にいたことも忘れていたが、ジェニーは素直に彼の指差す方向に目をやった。

「どこ？」

「あそこに森が見えよう？　その先に白く光って見える建物だ」

ジェニーはつま先立ちになり、王の示す森の先にたたずむ、二つの四角から成る建物らしき物を見た。親指の爪ほどの大きさだ。ジェニーはこれまでに闘技場と称される建造物を身近で見た経験がないので、それがどんな姿をしているのか知らない。

「見えるけど、建物なのか何なのか、よくわからないわ」

ジェニーが振り返ると、王は無理やりに作ったような真面目な顔で頷いた。

「それは残念だ。では、反対側へ行くぞ。向こうにはシエヌ河が見える」

踵を返した王に引き続いてジェニーが振り返ると、屋上入口付近で待機していたアリエルがジェニーに微笑みかけた。いつもよりずっと嬉しそうな笑顔だ。彼女の左側には衛兵が陣取って周囲に目を光らせていたが、その男の隣には、いつのまにかやって来ていたサンジェルマンが立っている。彼の視線は王を追っていたが、ジェニーの視線に気づいて目礼し、アリエルと同種の笑みをジェニーに向けた。

反対側の城壁から望める景色は少し違っていた。民家といえるような建物がいくつかは発見できたが、集落は見えない。また、黄緑色の丘はどこまでも広がってはいたが、青い空を反映したゆるやかな川の流れが林の木々の切れ目に姿を現し、左斜めの方向に続いて

いた。人工的なものが少ない、自然の風景だ。
「あれがシエヌ河だ。城の水はあそこから供給される」
それを聞いて、ジェニーは息をついた。今夜の脱出でジェニーがケインと共にたどるのは、シエヌ河より城内に水を引き入れるために建造された水路だ。ジェニーの視界に見えるその川が、二人の救い手だ。
今の太陽の高さから逆算すれば、二人の逃亡まで、もう半日にも満たない。緊張が――体に走る。
「……こちらの景観は興味がないと見える」
「――えっ？」
ジェニーは我に返り、声のした方に振り返った。ジェニーの隣で、ゴーティス王が首を傾げて、ジェニーを覗き込んでいる。
「おまえは実にわかりやすい。こちらの景色には興味を持てぬのだろう？」
「え？　ええ、だって、こういった風景はたくさん見てきてるから――」
ジェニーの返答に満足したのかどうか、王はジェニーから反対側の城壁の方に目を向けた。
王に疑念を生じさせずに済んだことにとりあえず安堵し、ジェニーは近くにいる衛兵を何気なく見た。その衛兵は城壁に背を向けていたが、その先には城壁に沿って等間隔で衛兵が配備され、全員が外側に注意を向けていた。
城の全ての警備状況がそこから見えたのではないが、ジェニーは急に不安になる。夜の闇にまぎれて脱出するとはいえ、この警備をかいくぐるのは本当に可能なのだろうか？
不意に耳についた、空が割れるような群衆の声にジェニーの思いは中断する。ジェニーが闘技場のある方角を眺めると、王がジェニーを手招きした。「来い、ジェニー」
ジェニーが王の隣に行って闘技場のある方向を再び眺めると、歓

声がいっそう高まったような気がした。
「すごい歓声」
ジェニーが思わずつぶやくと、王がそれに反応して言った。
「今大会から庶民も観戦できるようにしたら、観客が大幅に増えた。そのせいで、ここまで歓声が届くのであろう。おまえは実物を見ておらぬから想像できぬだろうが、膨大な数の観客があの会場を埋め尽くす図は壮観だ」
そう説明しながら、王は城壁に背を向けて空を仰ぎ見る。
「前は、貴族だけのものだったのね」
ジェニーが言うと、王は嘲りに似た笑みを唇の端に浮かべた。
「貴族の暇つぶしの一つだ。いつから貴族限定にされたかは知らぬが、観覧席は半分以上が空席だった。その余った席をパン一つ相当の料金で庶民に娯楽として提供して、誰が困ろうものか。変更に不満を示しておった者どもも、昨日と今日の動員数を見て考えをあらためよう。これが財政にもどう影響するか――」
ジェニーを見て、急に王が話を止めた。そして、気まずそうに顔をしかめ、ジェニーにくるりと背を向ける。ジェニーは新鮮な驚きとともに、彼の背を見つめた。
「――信じられないけど……国のためにその変更をしたのね」
“信じられない”は余分だ！」
王が憤慨した様子でジェニーに振り返った。
「そう言われても、普段の言動からはとても信じられないわ」
「おまえ――」王が声を大きくし、衛兵たちの注意を引く。ジェニーは彼にとっての失言をしてしまったのだと気づき、次に彼が怒鳴るのだと予想して身構えた。案の定、
「おまえ、俺はこの国の王ぞ！　王たる者が王として為すべき事を為さずして――」
ところが、彼はジェニーにそう言っている途中で大声で笑い始めてしまい、後が続かない。高らかな王の笑い声に遠くの衛兵までもが振り返って見るぐらいだ。

何がそんなにおかしいのだろう？
ジェニーは彼の笑う理由が理解できず、唖然として、彼が膝に手をついて肩をゆすって笑い続ける様を見つめた。

少しして、笑いの治まったらしい王が顔を上げた。それでもまだ笑いの名残が王の表情に居座り、通常の迫力ある彼よりずいぶんと幼く見える。

ジェニーと目が合うと、王は膝から手を離し、風にそよいでいたジェニーの髪の束をつかまえた。彼はその手に力を入れてはいなかったが、それに引き寄せられるようにしてジェニーは城壁に歩み寄り、城壁に両腕を預ける。

王が曲げていた体を伸ばし、ジェニーの隣に立った。ジェニーが王を見上げると、彼は手に持っていたジェニーの髪を空中にふわりと飛ばす。その髪が風にのって流れる様子を見つめながら、ジェニーは、頭の中に沸いた質問を自然に口にしていた。

「同盟は、国のためを思って結ぶんでしょう？」

「……一般的にはそうであろう」

王は、突然のジェニーの質問に腑に落ちない様子ながらも返答した。

「どこかの国と――同盟を結ぶと聞いたわ。その証にあなたは相手国の王女と結婚して、後宮は妃に明け渡されるから皆は追放されるって、後宮では大騒ぎ。私は、あなたと同盟という平和的な行為がどうしても結びつかなくて――」

王の“平和的な”笑みが苦笑に変わり、ジェニーはつい口をつぐんだ。

「やはり、違ったのね」

「違うには違うが、俺が大臣の勧めに気まぐれで乗って、同盟を模索したのは事実だ。その条件として結婚があったこともまた事実。俺がもし妃を迎えれば、そのときまでに後宮を空にするだろうこともはずれてはおらぬ。だがそれも、同盟が締結されれば、の仮定の

話だ。実際には、ヴィレールはどことも同盟を結んではおらぬ」
　この王に平和的共存を求める考えはやはりないのだ、とジェニーは思い、顔を覗きこんできた彼をむっとして見返した。すると王はめずらしく、困惑した表情を見せる。
「じゃあ、いずれまた……戦を始めるのね」
「戦を――仕掛けられたのでなければ、こちらより始めはせぬ」
「えっ？」
「戦が続くと国力が弱まる。兵力も、土地も、経済も打撃を受ける」
　王はジェニーをちらりと見た後、眼下に見えるヴィスコンデールの街を指差して言った。
「見ろ、あれがヴィレールの首都だ。それほど大きくはないが活気のある街だ。幾多の戦を抜けて、今はまだ活力を保っておるが、今後もし戦が起きれば――他の地方都市と変わらぬ規模にまで衰退してしまうだろう。それは――王である俺が、それを阻止せねばなるまい」
　彼が宙で力強く拳を握っている。その横顔は清々しく、決意に満ちていた。
　この男は……誰だろう？
　ジェニーは、それがゴーティス王だとはどうしても信じられなかった。
「何だ？」
　突然に振り向かれ、ジェニーの心臓が大きく鳴る。
「あ、ええと……今日はなぜ、そんなに私にいろいろ話すのかと不思議で」
　ジェニーが答えると、王は目を細めて肩で息をつき、ジェニーを見据えて言った。
「そっくり同じことをおまえに言うてやろう。おまえがこうも俺と話すのは、これが初めてではないか？」
　ジェニーは王を見つめた。城壁越しに吹き上がってくる風で、王の髪がゆらゆらと揺れている。ジェニーの髪も風に吹かれて顔にま

とわりつく。
ジェニーがそれを指で払いのけてから王に視線を戻すと、それまでジェニーを見返していた王が、ジェニーの頭越しに遠くを見つめていた。

眩しそうに空を仰いだ後、王が口を開いた。
「俺はもとより――互いをよく知らぬ国同士の同盟など興味はなかった。お互いの国土に勝手に足を踏み入れぬためだけの約束など、俺にとって意味はない。俺は常日頃よりそう考えておった」
突然に話し始めた王の口調に躊躇いが混じっていて、ジェニーは怪訝に思う。
「それは……本来の目的ではないと思うわ」
「国政を知らぬおまえの方が、物事の道理をわきまえておる」王がジェニーを見てにやりと笑う。
「されど、俺はここ最近のおまえとの接触の中で、停戦をして、共に協力関係を模索するのも悪くないと思うようになった」
「どういうこと？」
ジェニーが問うと、王は一度何かを言いよどみ、首を小さく振って言葉を続けた。
「俺はおまえとおると、常に戦をしておる気分だった。それは、非常に面白い反面、俺の気力や体力を相当に奪う。だが、最近になって、おまえの態度が微かにだが軟化し、特に今日は――おまえと接する俺の心は安らかだ。今日のおまえも、心穏やかであるように思う。もしも、お互いの心の平安を図るために同盟が手段となるのなら――それは国も人も同じ――それもまた、悪くない選択ではないか」
王が動き、ジェニーを肩越しに抱きしめた。衛兵が多数いる場所で王に露骨に反抗はできない。ジェニーは両手をぐっと握り、肩を張って反抗心を示す。
「俺は……おまえとなら同盟を結ぼう」

ジェニーの心臓が激しく鳴った。

王のもう片方の腕がジェニーの肩にまわされ、その指先に火傷の痕を見つけると、ジェニーの体から力が萎える。ジェニーの故郷からの郷土菓子を、地元のやり方に沿って食べようとした証。彼女の心に近づこうとした証だ。

「俺を愛せ、ジェニー」

ジェニーは体を震わせ、自分の顔に押し付けられた王の横顔をうかがい見ようとした。視界の端で、彼の閉ざされたまつ毛が小さく震えている。彼の意外な心細さを見つけたようで、ジェニーの胸が大きく震える。

「俺のそばに……ここに、おれ」

彼に、今夜の逃亡を引き止められているような気がした。

開かれた彼の瞳と出会い、ジェニーはあえいで、遠くに光るヴィスコンデールの街を見る。ケインと城から脱出したら、真っ先に向かおうとしていた場所。

彼の腕が再び動き、壊れやすいものを扱うように、ジェニーの肩をやわらかく包む。側頭部につけられた王の頭が下に動き、彼の頬が髪を通してジェニーの頬にあたった。

「おまえの家族の行方なら、手を尽くして捜してやる」

ジェニーは王の約束など信用するつもりはなかった。なのに、心は彼の言葉を信じて、涙が沸きあがってくるのはどうしてだろう？

王の頬がジェニーから離れ、こめかみに王の唇が押し付けられた。ジェニーは歯をくいしばって、涙でにじんだ瞳で王を横目に見る。

王がほんの少しの戸惑いを見せた後、火傷のある方の手でジェニーの顎をそっと撫でた。そして、顔を寄せた王がジェニーの鼻先ではにかむような笑みを見せると、ジェニーは口から力が抜けて、小さくあえいだ。彼の笑みがまっすぐに胸に入ってきて、胸がきしむ。

いつものように、もっと乱暴に接してくれればいくらでも反発できるのに、彼のひとつひとつの動きが、あまりに繊細だ。ジェニーの胸は切なく縮むばかりで、彼の体を払いのけられない。

ジェニーは、王を見返した。

王は、ジェニーの唇に視線を注いでいた。ジェニーはその視線から離れられなかった。王はそれから――そこに彼の乾いた唇を、春の風のようにそっとのせた。

第一部　8．遠のく瞳－1

剣技大会の幕が降りて興奮さめやらぬうちに出発したベルアン・ビルへの旅も、今日が三日目だ。サンジェルマンが部下と宿で提供される夕食を静かに口にしている今も、ベアールは席を離れたきり、一度も戻ってこない。そして、それは、初日の夜からずっと連続している。サンジェルマンは、ベアールがほろ酔い加減で宿場の給女たちとふざけあう姿が視界の片隅で見えたとしても、もうそれほど気にならなくなっている。

最初こそ、彼らは金品を狙う盗人の目を引くのを嫌って、なるべく目立たないように旅をするつもりだったのだが、最初の宿場町に着いて早々に考えを変えた。その理由は同行者のベアールだ。彼がどんなにみすぼらしい身なりをしたとしても、その魅力的な容姿は例外なく女たちの目を引き、彼もまた彼女たちに愛想良く応えてしまう。彼が王城でサンジェルマンに見せた、抑制された行動とは大違いだ。

だが、彼の気楽さというか、危機感のなさに、サンジェルマンが苛立ちと不安を覚えたのは確かだが、彼の振舞いのおかげで一行が不審な旅行者とみなされず、宿での待遇が改善されるという思わぬ恩恵を受けたのもまた確か。サンジェルマンは唯一、女たちに囲まれる彼に難癖をつける者の出現を危惧していたが、運良く、今のところは、そんな困った状況には遭遇していない。

ベアールに酒をつぐ給女が彼にしなだれかかるのを見て、サンジェルマンは対面にいた部下に言った。

「彼は今日もどうせ戻って来ないだろう。今宵は寝台を使え」

「いえ、そんな。私は床に眠りますよ。明日は目的地に着く予定ですし、ベアール様も今宵は早く戻られましょう」

サンジェルマンは息をつき、部下の真面目な顔を見つめた。

「そんな男ではないと思うが――」
ベアールとはたった三日間しか行動を共にしていないが、サンジェルマンは、ずいぶんと彼について理解できた気がしている。
サンジェルマンがベアールのいる席に近づいていくと、その反対側で彼と話していたふくよかな女が目を上げた。「あら、いい男」
サンジェルマンは、悪印象を与えないだけの笑みを素早く作った。ベアールと、彼の腕に抱かれた女が後ろを振り向く。
「おや、これはサンジェルマン様ではないですか！　嬉しいな、我々のお仲間に？」
ベアールが明るく笑いながら席を移動しようとしたが、サンジェルマンはそれを笑顔でやんわりと止める。すると、ベアールにもたれている女がくぐもるような声で笑って、杯をサンジェルマンに差し出した。
「どうぞ。うちの自慢の酒をいかが？」
他の男の腕の中にいるくせに、女はサンジェルマンを媚びた目つきで見つめる。男好きのする、若い女だ。彼女にそんなまなざしを向けられると、サンジェルマンは数日前に別れたばかりのアリエルが妙になつかしく思い出された。
「いや、結構だ。私は、明日が早いからもう休むと彼に伝えに来ただけだ」
「やだ、まだ夜は早いじゃない。一杯くらいお付き合いなさってよ」
サンジェルマンが笑顔で女の誘いを断ると、後ろにいた女が小さく笑って彼女をたしなめた。
「やめなさい、いくら誘ったって無駄よ、無駄！　この人には故郷に大事な奥方がいるんだから」
「ええー？　何を言うか、このお方は私と違って、自由気ままな独り身だぞ！」
「まあ、あんたは既婚者なの？　……あらあら、こんな夫を持って奥方様はかわいそうに。だけど、ふうん、そうなの。私の目に狂いはないと思ったんだけど？」

ベアールが納得しかねるように渋い表情でサンジェルマンを見上げたが、サンジェルマンは何の返答もせずに、ただ微笑む。ベアールたちの向こう側から、おやすみ、とその女がサンジェルマンに手を振ってみせた。

次の日、ベアールは日の出前に部屋に戻ってきて、そそくさと出発準備に加わった。三人はそろってベルアン・ビルへと出発し、昇りはじめたばかりの朝日に向かっていく。

再び馬上の三人となった一行は、その後しばらく無言だった。目的地までの道は平坦でそれほど苦労はしなかったが、山脈の入口に位置するため、今まで経てきた地域よりも標高が高い。ゆるやかな上り坂に歩みを進めるごとに、空気の質が変わり、気温が低くなるように感じられる。

ほどなく、木もまばらな林を通り抜けた一行の前にベルアン・ビルの境界線を示す標識が現われた。集落は見えないが、青い山を背に数軒の横長の家が緑の広野に望める。広野の中で黄色の敷物のように見える一角は、ひまわり畑らしい。

サンジェルマンはいっそう暗くなった曇り空を眺め、さすがに緊張と興奮が高まってきた胸を落ち着けようとした。太陽が空に出ていれば、おそらくは、真昼の時間帯だ。

「もうすぐですよ」

サンジェルマンの部下が隣でそう言い、広野を斜めに横切ってひまわり畑に消える道を指し示した。サンジェルマンは旅の目的を達成する実感をかみしめて彼に頷き、彼の横にいるベアールを見た。彼はまだ疲労感をただよわせた顔色ではあったが、サンジェルマンに向けられた視線の意味をきちんと感じ取ったらしく、ひまわり畑の方を眺めて頷いた。

三人がひまわり畑の間を抜ける道を通っていると、左側の畑で作業をしていた農夫が彼らに手を振った。「やあ、こんちは！」

ベアールが当惑したようにサンジェルマンに振り返る。サンジェルマンは彼の向こうに見える農夫とその少し先にいる幼い少女が、笑顔で自分たちに手を振るのを見て違和感を覚えはしたが、旅人たちにも気さくに声を掛ける、平和な地域なのだろうと勝手に解釈することにした。

そこから少し先にいった二股の道を右折し、なだらかな坂道を上がっていく途中、彼らはまた地元の住民に挨拶をされた。道の脇に建つ小さな家の前で話していた中年女の二人で、そのうちの一人は彼らに搾りたての山羊の乳をくれようとした。一行は単なる旅行者である自分たちへの親切な申し出に大いに驚き喜びながらも、それを丁重に断る。遠慮なんかしなくていいのに、と笑いながら言う女の態度に、サンジェルマンは、ここはなんと平和で友好的な地なのだと感心する。

部下が馬を止め、サンジェルマンたちに振り返った。

「あそこがそうです」

丘をのぼりきった先に木立が見え、木々の隙間から背の低い建物がのぞいていた。サンジェルマンが馬から降りると、それにならって、二人も馬上から飛び降りる。

「ねえ、サンジェルマン様」

木立に入って、粗末な門扉が前方に見えてきた頃、ベアールがおもむろに口を開いた。

「その……一人の女を想うのって、どんな境地です?」

いきなり何だ、とサンジェルマンが彼を見返すと、彼が肩をすくめて言った。

「いえ、そのですね、ちょっと興味があるんですよ。私には妻がいますが、家を存続させるに必要な、ただの結婚相手に過ぎない。もちろん大事な存在には違いありませんが、だからって、たった一人に貞操を捧げるほどには――」

ベアールが気まずそうに言葉をにごした。その反応を目にして、

彼が、昨夜の女がサンジェルマンに言った内容を確認しようとしているのだ、とサンジェルマンはやっと気づく。

「貞操を――守るというより、単に他に目が移らぬだけだろう。貴公は、これまでの恋愛遍歴の中でそういった相手はなかったのか？」

サンジェルマンが前方の家の前で動く存在を見つけた後にベアールの方に振り向くと、彼は理解に困った様子で両手を広げた。

「そんな相手に遭遇したことはありませんよ。サンジェルマン様のように考えたことは、一度もない」

サンジェルマンは、後宮のアリエルを頭に思い描いた。王城にいるときにはほとんど意識しなかったのに、二人の距離が離れるたびに彼女の面影が頻繁に頭にちらつく。旅に出発する前に、彼女の顔を一目見ておきたかった。

彼女は常に身分の差を口にして限定的な関係をにおわせるが、それではもう満足しない、と痛感する。これまで具体的に考えたことはなかったが、サンジェルマンは、自分が彼女と結婚したいのだ、と悟った。

王城に戻ったら、彼女にそう告げよう。サンジェルマンはひとり、それを心に決める。

「仕方あるまい。人は、それぞれだから」

サンジェルマンが言うと、ベアールはじっと彼を見つめ、やがて深い息をついた。

「そうですね、仕方ない。でも、なんだか……そう思える人がうらやましい気がしますよ」

ベアールは明言しなかったが、サンジェルマンはアリエルの存在を見抜かれたようで恥ずかしくなり、彼から視線をそらした。

木立の終わるあたりで年老いた男が木にもたれて立っている姿を見つけたのは、一行が男の間近にまで接近したときだ。着ている服の色のせいだけでなく、老人は周囲の景色に同化していた。しかし、男は木立の間を歩いてくる三人にずっと前から気づいていたようで、

サンジェルマンの部下が挨拶をすると、男は彼を飛び越えてベアールに笑顔を向けて言った。

「やあ、お疲れさん。旅はどうだったね？」

そして木から離れて一行に歩み寄り、数歩近づいたところで老人は顔をこわばらせ、急に立ち止まる。

「あ、あんた？　あんたたち、誰だね……？」

三人が男の不可解な反応に顔を見合わせ、部下が男に訪問理由を説明しようとしたときだった。

「ローリー！」

甲高い子どもの声が聞こえ、三人は家の方を振り返って見た。三人の男女の子どもが庭におり、いちばん年長の少年が飛び跳ねながら、ちぎれんばかりに頭の上で手を振っている。少年は喜びいさんで三人の方に駆け出した。

「今回はすっごい早かったね！」

少年はけたたましい笑い声をあげ、両腕をぐるぐると振り回しながら走り寄ってきた。一行が不思議に思って少年の接近を見守る中、少年は脇目もふらずにベアールの前に飛び出した。そして、彼を見上げた少年の明るい笑顔が、本当に、瞬間的に、恐怖に取って代わる。

「……おい？」

ベアールが声を掛けると少年は両手で顔を隠し、そうかと思うと、一目散に元いた場所へ駆け戻っていく。

「何だ？　何なんだ、いったい？」

ベアールの疑問に誰も答えられないまま、サンジェルマンと部下は少年が家の中に逃げ込むのを見つめた。だが、その少年と入れ代わりとなるように、一人の女が扉から姿を現す。彼女の服の後ろに隠れるようにして、さっきの少年が、一行をにらみつけるように顔をのぞかせていた。

女はブロンドの髪を後ろでまとめ、くすんだ赤い服につけた白い前掛けのような物で両手をぬぐいながら、一行を不審そうに見た。

顎に少し肉がつきはじめており、見たところ、四十に入る少し手前のようだった。

――サンジェルマンが初めて会う、ジェニーの叔母だ。

「ジャック、お客さんなの？」

女の呼びかけに反応した老人を横目に見て、サンジェルマンは再度彼女を観察する。彼女はどこにでもいそうな、ありきたりの母親のように見えた。今のところ、ベアールは彼女を見ても気になる反応を見せていない。老人は何も返答しなかった。

「ゲンスブールさん、マークです！　お約束どおり、主人を伴って参りました！」

彼女にそれ以上の不信感をもたれないようにと、サンジェルマンの部下が声を張り上げた。すると、彼女の顔いっぱいに驚きと喜びが広がる。

「まあ、本当に？　じゃあ――」

彼女が前掛けを両手で握り、一行の方に歩き出した。彼らの背後をのぞこうとして、頭を一生懸命に動かしている。

「……サンジェルマン様、彼女が――そうですか？」

「ああ。行こう」

この女は何者なのか。

二人は同じ緊張感を共有していた。この瞬間のために、ベアールは剣技大会の最終夜の宴を欠席してまで、三日半もかけてヴィレールからやって来たのだ。隣に並んだベアールの表情を盗み見ながら、サンジェルマンは初対面のジェニーの叔母に近づいていく。

突然、ベアールが歩みを止めた。はっとして彼を見ると、サンジェルマンの隣で、彼がまるで息をし忘れたかのように彼女を茫然と見つめている。

「ベアール殿？」

サンジェルマンの声に彼は反応しない。それを目の当たりにして、サンジェルマンの喉が痙攣する。

「あなたは……！」

ほどなく、別方向から女の声も飛んだ。彼女の叫びに触発されたかのように、ベアールがふらついた足取りで前進し始めた。女のため息がもれる。サンジェルマンが振り返って、わざわざ確認するまでもない。

「なんて、なんて……父親そっくりなの！　あなた、あなたは……ユーゴ……？」

彼女の振り絞るような声が続き、サンジェルマンはようやく覚悟を決めて、二人の再会の場面に目を向けた。ベアールは背中しか見えなかったが、女は顔面蒼白となって彼を見上げ、迷いがちに両手を彼に伸ばそうとしているところだった。

「なぜ、こんなところに――」

「なぜだって？　そっちこそ、なぜここに……」

冷淡にも聞こえる口調でベアールは言ったが、彼女の手が肩に触れると体をかがめ、彼女をその体に抱きしめた。その光景を目にして、サンジェルマンは、冬の冷気に全身をさらされた気分になる。ジョー姉さん、と言う彼の声が、はっきりとサンジェルマンの耳にも届いた。

彼女はベアール家を追放されたユーゴの実姉だった。つまり、ジェニーの父親はユーゴ・ベアールの長兄ということだ。

ヴィレールを逃れて各地を転々としていた男のもうけた子どもが、何の因果かヴィレールに連れ戻されるとは。なんて奇妙な縁だろう。

サンジェルマンは判明した事実に気が遠のく思いがしながら、これをどうやってゴーティス王に伝えようかとしきりに考えていた。

ひとしきりの再会の抱擁を終えた後、家に招き入れられた一行をぐるりと見渡して、ジェニーの叔母は硬い表情となった。

「――ジェニーはヴィレールにいるのね？」

ジェニーを保護している主人と紹介されたサンジェルマンを、彼女は責めるような目つきで見る。

何の説明もしていないのに察しがよい、と彼女を感心して見なが

ら、サンジェルマンは彼女に隠し事をするのは賢明ではないと判断した。彼女の冷たい目を直視して、正直に答える。

「そうだ。彼女はヴィレールにいる」

彼女は絶句し、そして、それを聞いていたベアールが何かを思い出したようにはっとしてサンジェルマンを見た。

「――短剣の、現在の持ち主？」

「そうだ」サンジェルマンはベアールを見て、微笑んだ。「貴公のおかげで彼女の身元が判明した。身内とわかった今、貴公にも彼女を紹介せねばなるまいね」

「は。……え、いえ、そのような……」

ベアールは瞬きをせず、急に怖気づいたように首を小刻みに振った。その彼の態度で、サンジェルマンは、彼がジェニーの存在と立場を知っていると気がつく。

「ああ、彼女を――知っておられるようだね」

サンジェルマンが彼を覗き込むと、彼が青ざめた顔で微かに首を縦に振る。

「はあ、まあ……噂で」

この反応ならば、あらためて彼に口止めする必要もないだろう。

サンジェルマンが少し安堵したとき、屋内の彼らの耳にも明らかな、急を要するような馬のひづめの音が聞こえた。この家に通じる木立は細かな枝があちこちの方向に伸び、馬で駆け抜けるのは危険だというのにも関わらず、その大きな音はどんどん近づいてくる。

「サンジェルマン様！」

ジェニーの叔母の前では本名で呼ばないように口裏を合わせていたのに、屋外にいた部下は彼の名を扉越しに呼びかけた。サンジェルマンは不快な胸騒ぎに襲われる。彼女がサンジェルマンに振り返る中、彼は断りを入れて家の外に急いで飛び出た。

「マーク、いったい――」

サンジェルマンが部下を問い詰めるより前に、黒い馬に乗った、見慣れた男の顔が家の前に現われた。できれば、こんなところで見

たくなかった顔だ。
　男は手綱を勢いよく引いて馬を急停止させると、馬上から体をひらりと地面に着地させる。
「サンジェルマン様！」
　男の声はしわがれていて、サンジェルマンは不意に目の前が暗くなったように感じた。
「まさか――王の身に何かあったか！」
「いえ、そうではありません！　ジェニー様が――」
「彼女が、どうした？　まさか、体がどうかしたか……？」
　彼女の流産を望みながらも、彼女の体のことは心配だ。
　息も絶え絶えに言葉を操ろうとする王城からの使いを見ながら、サンジェルマンは最後に見たジェニーの表情を思い出した。王城の屋上で、彼女は王と恋人同士のように見つめ合いながら、泣き笑いのような顔を見せていた。
「いいえ！　ジェニー様が王城から……いなくなったそうです！」
　彼の部下は肩で激しく息をしながら、サンジェルマンの応答を待っている。二人の間に数秒の沈黙が発生した。
　――イナクナッタ？
「待て――何だって？　いなくなったって？　なぜ、彼女が城からいなくなる？」
「わかりません。剣技大会の朝より姿が見えず、後宮中を探しまわっても発見できなかったそうです。王が知る前にとアリエル様が私に極秘に教えてくださいましたが――おそらく今頃は、王の耳にも届いていると思われます！」
　ジェニーが失踪？
　サンジェルマンが必死に頭を回転させ、思考を働かせようとしていると、男がさらに付け加えた。「サンジェルマン様、緊急のご報告がもう一つ」
「何だって？　これ以上に何の緊急用件がある？」
　サンジェルマンが呆れ、苛立った声をあげると、男は声をとがら

せて答えた。
「五十二号が看守に負傷させ、牢より逃走いたしました。現在、王城内外を捜索中です」
「何……だって？」
この部下は、囚人五十二号が大罪を犯した人物とは認識していても、本来の身分を知らない。
重責と苦々しい口惜しさを感じながら、サンジェルマンは部下を見る。この脱走によって、サンジェルマンは、不本意だが、五十二号の命を奪わなければならなくなった。
「……王は、この件をご存知か？」
「いいえ」
ジェニーの失踪だけでも王には相当な痛手だろうのに、そのうえ、余計な心痛を与えたくない。
本当に――ケイン様逃げた……のか？
ジェニーの失踪、ケイン様の脱走。
ふと、サンジェルマンは、一見すれば別々の事件に思えるジェニーとケインの件が、実は関係があるのではないかと思えてきた。二人の接点は考えつかないが、失踪と脱走、あまりに時期が合いすぎている。
二人が共謀しているかどうかはわからない。しかし既に、ジェニーの失踪からは四日が経とうとしている。サンジェルマンは、王を欺いたジェニーに対する怒りと失望が沸々と吹き出してくるのを自覚した。
「すぐにここを発とう！　彼女はきっとここを目指しているはずだ、王より先に私たちが彼女を見つけなければ。途中で必ずくい止める！」
主人ジェニーを逃してしまったアリエルは、王の咎めを当然受けるはずだ。機転をきかせて知らせを走らせたアリエルのことを思うと、サンジェルマンはジェニーの侍女である彼女の身が心配でならない。彼女はまだ無事なのか、彼女と再び顔を合わせる機会が訪れ

るのか？

何としても、王より前にジェニーを確保せねば……！

第一部　8．遠のく瞳－2

剣技大会が無事に終了し、上位進出を果たした庶民の男たちが近衛兵として召抱えられることが観衆の前で約束されると、庶民が大多数を占める会場は大興奮の渦となった。群集は栄誉に陶酔し、力強い歓声はいつまでも止まず、青く高い空のあちこちから彼らの声が跳ね返ってくるようだ。

中央の席に座を取るゴーティスも、上機嫌でそんな民衆の高揚ぶりを眺めていたが、彼の心の高ぶりは群衆たちのように熱く激しいものとは違い、心地よい程度に温かく平穏で、どこか満たされている。

一昨日にジェニーと離れてから、ゴーティスは彼女のことばかり考えていた。

彼女の顔を心に思い描くと、柔らかでふわふわとした実体のない生き物が、胸の中で大きく膨らんでくるようだ。それは体内から時々飛び立とうともするが、大抵は、体いっぱいに広がって内側からゴーティスの胸や喉を切なく圧迫する。それはとても不安定で、彼をどうしようもなく浮ついた気持ちにさせる。だが、不思議となつかしい。そして、その感覚に襲われるたび、ゴーティスはジェニーを想って、会いたくてたまらなくなる。

その日、ゴーティスは帰城して真っ先にジェニーの顔を見たかったが、何かと忙しくて後宮に足を運ぶ時間がとれなかった。夜は大会への列席者でもあった王族や上流貴族を招いての宴が予定されている。そこで言葉を交わす機会のない来客たちは、その前にゴーティスと接触したがって、彼はこれまでに何人としゃべったかわからない。ゴーティスは意のままにならないそんな状況に苛立ちもしたが、国王としての責任を果たす姿勢をジェニーが評価していたことを思い返すと、ゴーティスの心が、穏やかに治まっていく。

夜の宴への出席者たちは剣技大会の余韻に浸りながら、大いに盛り上がっていた。きらびやかな貴族の女たちも出席し、カトリーヌやオルディエンヌといった彼の美しい愛人たちもそれに華を沿えた。出席者たちの服装も、並べたてられた食事も、全てが豪勢で華やかだ。

それなのに、ゴーティスの目には全ての要素から色が失われているように見える。女たちの中にはゴーティスにまとわりつくような視線を投げかける者もいたが、心動かされることはない。ゴーティスが宴の最中に唯一目を引かれたのは、ジェニーと同じ年格好で、同じ色の髪を持った女だった。しかも、それが一度や二度ではない。ゴーティスは間違えるたびに苦笑させられ、その一方で、胸を暖かく包む優しい感情に、静かに満足する。

空虚さと充足感の相反する二つを同時に経験しながら、ゴーティスは今夜を王として過ごし、明日の朝になったら後宮に足を向けよう、と心の中で決めていた。そして、ジェニーが彼を見て微笑みらしき表情をのぼらせるのを、今度はもう少し、長く見つめていたいと思う。

ゴーティスは前夜にあまり飲酒をしなかったこともあって、次の日は比較的早く目覚めた。前夜遅くまではしゃぎすぎた宴の出席者たちは、今もまだ深い夢の中だろう。

ゴーティスは今日の予定を確認した後に後宮に向かう心づもりでいたが、彼に緊急で相談したい件があるという大臣が既に待機していると知らされた。またもやジェニーと会う機会を先延ばしにされることに、ゴーティスはため息をついた。だが、連日の多忙さのせいか、非常に疲れた様子の侍従長と女官長をさっさと執務室から追いやると、代わりに、隣の控え室にいるその大臣を呼びつけた。

その後の朝食の席には、フィリップとその妻、彼の弟ジェラールが出席する予定だった。朝食の場に出る仕度を整えながら、ゴーティスが中庭に面するサロンを窓から見下ろすと、出入口にいる衛兵

の一人が首を背後に向け、サロン内の方に振り返っていた。ジェニーが来たのかとゴーティスが考えた矢先、出入口に茶色の頭がのぞき、衛兵はその女と話しているのだとわかった。その見覚えのある結い髪の持ち主は、ジェニーの侍女だ。ゴーティスは期待をこめてサロンの中に視線をめぐらせてみたが、ジェニーの姿は確認できない。

侍女は、単独でもサロンに何度も出没するのだ。

ゴーティスはうす曇の空をちらりと見上げ、侍女の存在を大して疑問にも思わずに、サロンから目を離した。

朝食を終えた後、多忙を理由にフィリップたちとの予定を取り消し、ゴーティスははやる心を抑えて後宮へ急いだ。屋上で涙をこらえていたジェニーの、一瞬だけ表情をくずして見せた笑みが、ゴーティスを何度も惹きつけてやまない。

後宮に向かう途中、交差する廊下の奥まったところで、侍従長と女官長が深刻な顔をして何やら相談していた。彼らは会話に集中しているせいで、ゴーティスが少し離れた廊下を通過しても気づかないようだ。

ゴーティスは彼らのせっぱつまったような様子が引っかかりはしたが、女官長は物事を大げさにする傾向があり、侍従長は心配性で、やはり、事を必要以上に深刻に受け止める嫌いがある。

彼らが言い出すまで待つ方が賢明だ。ゴーティスはそこを素通りした。

東館から後宮に伸びる通路入口に達したとき、ゴーティスは最初の違和感に出くわした。

通常はぴったりと閉ざされている入口扉が半開きになって、内側にある後宮の廊下が露見されている。ただし、そこを守る衛兵は扉前にかわらず常駐している。

衛兵たちはめったなことで動揺などの感情を態度に出さないが、

ゴーティスが接近するにつれ、二人が何かの理由で、いつにもまして緊張している様子が見てとれた。むしろ、怯えている、と表す方が近いかもしれない。それに、開放された扉をとおして人影は見えないのに、人々のざわめきや足音が普段より大きく響いている。

ゴーティスが後宮に足を踏み入れると、扉の裏側には十人近い数の女たちが並び、ゴーティスに対して一斉に頭を垂れた。その異様な光景に思わず足を止め、ゴーティスは居並ぶ女たちをざっと見たが、馴染みのない面々ばかりだ。彼女たちはなかなか頭をあげようとしなかった。

そのとき廊下の奥から衛兵の声がして、ゴーティスは不審に思って振り返った。姿は見えないが、数名の存在感がある。後宮は基本的に女だけが出入りを許可される場なので、衛兵がうろついている事態とは何か問題があったということだ。

ゴーティスが一歩踏み出して廊下の先をのぞこうとすると、左端に並んでいた女がちょうど顔を上げ、ゴーティスと視線が偶然にぶつかった。すると、女は不自然なほどに驚愕し、彼から視線を素早くそらせた。その顔は青ざめ、首筋が震えている。

「そこの女」

ゴーティスが呼んだとたん、彼女は上半身を大きく一度震わせて、深々と頭を下げた。

「も、申し訳ございません……！」

女の場違いなほどに大きな叫びを聞いて、ゴーティスは面くらった。横に並ぶ女たちの顔に、恐怖に似た歪みが駆け抜ける。

「なにゆえ、謝罪する？」

廊下の先から、衛兵たちの慌ただしい足音が近づいてきた。途切れがちながら、早口でまくしたてる女の声もどこかから聞こえる。

ゴーティスは背後の衛兵に振り返り、彼らが通路の先を見据えて微動だにしない様子を見た。女たちに再び振り返ると、彼女たちは誰ひとりとして、ゴーティスを見ようともしない。不愉快を通り越し、一抹の不安が生まれてくる。

女たちの様子を怪しんでいたゴーティスは、左端の女を再び見て、突然、脱力して膝から滑り落ちそうになった。頭に最初に浮かんだのは、ジェニーの身体のことだった。

「――ジェニーに何かあったか？」

誰もゴーティスに返答しなかった。ただ、さっき謝罪を口にした女が激しく嗚咽して泣き出して、ゴーティスはそれを目にするなり、横に付いて来ていた近衛兵を押しのけ、その場から走り出した。女たちの何人かが悲痛な声でゴーティスを呼び止め、後ろから追いすがる。廊下のずっと奥では数名の召使女たちが足を止め、その手前にいた衛兵二人がゴーティスの出現に驚いて、女たちと同様の恐怖を表情にのぼらせた。それもまた、ゴーティスの不安をあおる。

ジェニーは、ここ最近はずっと体調が安定していた。女官長やサンジェルマンからの報告でもそう聞き、ゴーティスの目にもそう映った。しかし、たとえ今までが順調だったとしても、妊娠している彼女の具合が急変する可能性は常にある。子が流れてしまう可能性もありえる。そしてその場合、彼女はかなりの苦痛を味わい、命を危険にさらすことだってありえるのだ。

ゴーティスは廊下から階段にまわりこみ、数段をとばして駆け上がった。今のこの時までジェニーの元に来られなかったことが悔やまれ、不安に追い立てられる。

生きて……生きておれ、ジェニー……！

数年前に宗教を拒絶して以降初めて、ゴーティスは神の名を繰り返し、ジェニーの無事を強く祈った。

ジェニーの命がまだ続いていることを切望しながら、彼女の部屋がある二階に一気に行き着く。ゴーティスは、予想に反してひと気のない通路を見て疑問に感じた。慌ただしく行き交う召使や侍医の助手がそこにいることを想像していたのだが、廊下はひっそりとして誰もいない。

ゴーティスはジェニーの部屋までの廊下をたどり、角を曲がった。

彼女の部屋の扉は開け放たれ、その前に衛兵が立っている。
衛兵には極度の緊張と動揺が見てとれた。走る速度を落としながら、ゴーティスは、ジェニーの体を心配するのとは別の不安が徐々に生まれ出てくるのを感じる。
「お、王、あの――」衛兵が行く手を阻むかのようにわずかに足の位置をずらしたが、ゴーティスは彼の前を難なく通過し、室内にすべり入った。
寝室に続く小さな部屋には二人の女の他には誰もおらず、静まりかえっていた。忙しく動く侍医や看病にあたる召使の姿はない。
うつむいていた彼女たちがゴーティスの登場にやっと気がついて顔をあげ、ゴーティスは片方の女が泣いた後のような赤い目をしているのを見つけた。彼女たちはゴーティスを見て、死人でも見たかのように、一瞬にして表情を凍りつかせた。
何か――とんでもない事態が起きている。
彼女たちに状況を確認する気など起こらなかった。ゴーティスは再び足を早めて部屋を突っ切り、寝室への扉の取っ手をつかむ。
扉を勢いよく開いたゴーティスの前に、そこにありえない者の存在が現われた。王以外の男がいるはずのないジェニーの寝室、テーブルの前に、衛兵が一人立っている。
怒りより先に混乱が勝ち、ゴーティスは無表情を保とうとしている衛兵を愕然として見つめた。それから寝台にジェニーがいないのを確認し、状況が読めないことにますます混乱して、衛兵の胸ぐらを力まかせに掴んだ。
「おまえは……ここで何をしておる!?」
彼の回答を得るより早く、寝台の向こう側から走り寄ってきた女がゴーティスの横に立った。ジェニーの侍女だ。目の下に薄茶色のくまが目立ち、皆とかわらず緊張感を漂わせていたが、他の者の態度と比べるとずいぶんとまともだった。
「王！」
「おまえの主人はどこだ！」

ゴーティスは彼女に尋ねながらその背後を見て、天蓋のカーテンの向こうに隠れた者の存在を察知した。直感でそれがジェニーではないと判断すると、漠然とした不安がゴーティスにのしかかってくる。

「申し訳ございません！　これには――」

「どけ」

彼女を押しやって、ゴーティスはそこへ向かう。ジェニーに関する問題を誰もが彼から隠そうとしていたことに気づき、腹が立って仕方がない。侍女がゴーティスを追いかけながら、謝罪の言葉を繰り返す。それにも、うんざりだ。

「謝罪などいらぬ！　いったい、俺の知らぬところで何が起きて――」

不意に目に飛び込んできた光景に、ゴーティスはぴたりと歩みを止めた。急に立ち止まったゴーティスの背中に、侍女がまともにぶつかる。侍女はまた謝罪を口にしたが、ゴーティスはそんなことは気にも掛けなかった。ゴーティスの視線の先にある石の床に、黒い穴がぽっかりと出現していた。

「これは、何だ……？」

黒い穴から下に伸びる石階段、壁の前にたたずむ顔色の悪い女、ジェニーの侍女を順繰りに見て、ゴーティスは誰に問うでもなく、つぶやいた。四角い穴には黒い木扉が付けられ、それが後宮にいくつか存在する抜け道の入口だとはゴーティスにもわかった。ただし、ゴーティスはこの部屋にも入口が存在することは知らなかった。

ジェニーの侍女がゴーティスの隣に来ると、女が、彼女にきびしい視線を走らせる。ゴーティスが彼女の理知的な黒い瞳を見ると、彼女は苦しそうに瞳を細め、ゴーティスに言った。

「王、実はジェニー様のお姿が――ずっと見えないのです。私がついていながらこんな事態になり、謝罪の言葉もございません。なにぶん好奇心の強いお方ですから、ここから地下へ入られ、入り組んだ通路を探索されているうちに帰り道がわからなくなってしまわれ

たのではないかと……。衛兵たちも後宮の者たちも、昨日より総出で行方を捜しておりますが、いまだに――」

「――昨日、だと？」

ゴーティスは地下への扉を一瞥し、たった今聞いた報告を憎々しく思って、彼女をにらみつけた。

「戯けたことを！」ゴーティスは怒鳴った。「既に丸一日が経っておるではないか！　一日をかけて今もって見つけられぬなど、おお、ようも、どの口でこの俺に言えたものぞ！　なにゆえ俺に黙っておるなど――俺がここに来なければ、いつまでも隠し通すつもりだったか！？　あの女は、普通の身体では……！」

ゴーティスはジェニーの事情を知らない女が側にいることを思い出し、そこで口をつぐんだ。ジェニーの身を案じ、ゴーティスの体が勝手に硬直する。侍女が悲痛な表情をして再度頭を下げたが、怒りが治まるはずもない。

ゴーティスが言葉を失って地下の入口を見ると、黒い闇だった空間が、奥の方からだんだんと明るくなってきた。ゴーティスは慌てて出入口にひざまずき、中を覗きこんでジェニーの名を呼ぼうとした。しかし、光とともに乱雑な靴音が近づいてくるのを耳にして、彼の心は急速に冷めた。

ほどなく、明かりを手にした一人の衛兵の顔が地下からのぞき、彼はゴーティスと遭遇して歩みを止めた。淡い光の中に、男の背後に続く狭い地下通路が浮かびあがって見える。地の底にまで続いているような、寂しい道だ。

それを目にし、不意につきあがってきた疑念を胸に、ゴーティスは無言で床より立ち上がった。

ゴーティスは、屋上でのジェニーの顔を思い出した。ジェニーはゴーティスの唇を拒まず、彼が唇を離して目を開けたとき、彼女のまぶたはまだ閉じていた。そしてそれが開くと、ジェニーは涙で濡れた瞳でゴーティスを見つめ、彼が笑うと、ほんの微かだったが笑

い返したように見えた。彼女の行動の裏に、あさましい計算があるとは思えなかった。

「王、どうか……。私どもが全力でジェニー様を捜し出しますゆえ」

「当然だ」

ジェニーは彼女の侍女を信頼していた。悲しそうに深く頷く彼女を、ジェニーが裏切るとは思えなかった。

けれども、ジェニーの正直さを信じたい思いと逃亡を疑う心の間に、ジェニーの不在という鉄壁の現実が横たわっている。

もし、ジェニーが侍女を裏切ることができたとすれば、そのときは――ジェニーは、ゴーティスなど、いとも簡単に欺いてしまうだろう。

隣の部屋を誰かがばたばたと走る足音がし、次に寝室の扉が乱暴に開け放たれた。転がりこむように入ってきたのは、女官長とライアンだ。非常時ということで、女官長が特別にライアンを後宮に連れてきたらしい。

ゴーティスは、ジェニーが引き起こした騒動に後宮だけでなく近衛隊までもが振り回され、そして、自らが最も動揺した状況に笑い出したくなった。

なんと滑稽で、ぶざまなのだろう！

ジェニーは好奇心旺盛かもしれないが……戻る方法を考えないほど、頭が悪いわけではない。

「よいところに来た、ライアン」

女官長が話し出そうとするのをとめてゴーティスが言うと、ライアンはゴーティスを見て少し驚いたように眉を上げた。

「事情は聞いておるな。おまえには、ジェニーを捜し出してもらう」

「ははっ。心得ております」

ゴーティスは押しあがってきた嘲笑を隠すことなく、続けて言った。

「王城だけでなく、敷地内の召使棟も隈なく捜せ。城から外に出る者は全員の顔を確認し、大きな荷があれば中身を全て調べろ。あの

女の逃亡に手を貸した者がおれば、容赦なく、殺せ」

ライアンも女官長もゴーティスの命令に驚きを表したが、ジェニーの侍女がひときわ目を大きく丸くしていた。信頼していた侍女の目を欺くなど、なんとあっぱれな娘だ。

「何をそう驚く？　おまえ、ジェニーがまことに道に迷うと思うのか？　……あの娘はそれほど愚かではあるまい、逃げ道をあらかじめ把握しておったはずだ。これは――計画的な逃亡だ」

「まさか、そのような！　そんな素振りなど、少しもありませんでしたのに！」

ゴーティスは彼女の思い込みを鼻で笑い、胸の内で自分の愚かさを呪った。ついさっきまで身を切らすほどジェニーの身を案じていた自分が情けなく、彼女を想って幸福感に浸っていた二日間が猛烈にむなしかった。

「それが、こちらを油断させるジェニーの狙いであったろう」

「そんなお方では――」

「ジェニーはここより逃亡したのだ！　既に王城の外におるやもしれぬ！」

侍女が衝撃を受けたように黙った。一瞬にして発火したかのように、ゴーティスの胸は燃えるように熱かった。胸に受けた悲しみの倍だけ、ジェニーへの憎しみが募った。

ゴーティスはライアンに向き直る。

「ライアン、おまえの名誉にかけて、ジェニーを何としても捜し出せ！！　小娘の分際でこのヴィレール王を謀ろうとは――よくぞ、俺をここまで愚弄しおって・・・・・・！　ライアン、ジェニーを見つけたら必ずや生け捕りにしろ！　多少痛めつけてもかまわぬ、息の根がまだあるうちに、あの娘を俺の前に引きずりだせ！　俺がこの手で……あの娘の首の骨をへし折ってくれる！」

ライアンが最敬礼して、ゴーティスの命令を遂行するために急いで退室していった。室内は恐怖で冷え切った空気が充満し、誰もかれもが暗い顔をして口をつぐんでいる。

ジェニーの侍女が、思いつめたような顔をして床面を見つめていた。ゴーティスが侍女の顎をつかんで引き上げると、彼女は初めて心細そうな顔色を見せた。ゴーティスは、それが自分への恐怖ではなく、ジェニーに対する落胆の類だろうと想像をつける。

「主人の逃亡を許したおまえを、本来なら、このまま生かしはせぬが、ジェニーが俺の前に連行されるまでの間、おまえには猶予を与えてやる。あの女に自分が犯した罪の大きさを認識させるために、おまえは彼女の目の前で処刑されることとなろう。おまえの処遇を恨めしく思うなら……おまえの主人を恨むことだ」

「ジェニー様はそんな――」

侍女が言いかけた言葉を最後まで聞かず、ゴーティスは女の顎を突き放した。

主人ジェニーに似て強情な彼女が、いまいましかった。

第一部　8．遠のく瞳ー3

白々と明けていく外の闇を窓越しに見つめ、ジェニーは、一時は落ち着いた鼓動が再びゆっくりと高まっていくのを感じていた。ジェニーはしばらく前に目覚めてから目が冴えて眠れずにいるが、隣に横たわるケインの胸は規則的に小さく上下している。ジェニーから顔をそむけるように横に向けられた彼の顔は安心しきっていて、彼が逃亡の夜からずっと眠れないでいたことを知るジェニーは、胸の内でほっと息をつく。

昨日の夕方遅くにいきなり降られた雨のせいで、ジェニーとケインはずぶ濡れとなった。ケインがずっと焦っていたせいもあって、二人はそこまでの道中をほとんど休まずに歩いていたのだが、二人を容赦なく濡らした雨は、歩きどおしで体中にくすぶっていた疲労をあからさまに重くした。

ジェニーが森の入口にあったこの廃墟を偶然に見つけたときは、ケインですら一直線にそこに向かい、扉を破り、何の迷いもせず雨宿りすることを選んだ。道を越えてずっと向こうにはひしゃげた家が数軒並んでいたが、周辺にひと気はなく、ジェニーたちを脅かすような存在は見当たらなかった。ジェニーは、雨が止むまでの一時でも、屋根のある場所で体を休められることがとてもありがたかった。

すぐにあがると思っていた雨は霧雨に変わり、小屋の中の気温も下がっていた。深い夜がゆっくりと近づいていた。

ジェニーは体がだるかった。足腰が重い。おまけに、野いちごにありつけた早朝からろくに食べ物を口にしていないので、ひどく空腹だ。空腹過ぎて、お腹の音さえももう鳴りはしない。

ジェニーは空腹を忘れようとベルアン・ビルに着いた後のことを考えたが、何も思いつかなかった。ケインも、元は椅子だった木の

板に座り、何かを考えているように無言だ。
「ケイン」
ケインが顔を上げた。彼が後宮のジェニーの部屋に来たときからそうだったが、表情に余裕がなく、全身に緊張感をみなぎらせている。
「なに？」
「今夜はここに泊まらない？」
ケインがすっと口を閉じた。彼が一刻も早くヴィレールから出たがっているのは痛いほどわかっていたが、ジェニーは彼の体にも相当の負荷がかかっていると知っている。
彼は地下牢を脱出する際、なぜか戻ってきた看守と鉢合わせ、突発的に刺してしまったそうだ。ジェニーと会ったときの彼は、血のついた短剣をまだ手にしていた。人を殺めてしまった可能性に怯え、想定外の事件によって逃亡の発覚を早めてしまう可能性を恐れ、ケインは極度の興奮状態に陥っていた。それから、二人は一言も言葉を交わさずに地下扉をくぐったのだ。
「でも、まだ国境まではずいぶん距離がある。国境に面するラニス公の領地にも入っていないし、もっと遠くに行かないと」ケインは小屋の扉に目をやり、硬い表情で首を横に振る。「この国から早く出たい」
彼は追っ手に捕まるのを非常に恐れていた。ジェニーは彼の罪状を尋ねたことはなかったが、彼は重い罪で投獄されたようで、彼が行方を追われるのは避けられないことらしい。もちろん、逃亡した罪人が捕まれば命がないことくらい、ジェニーだってよくわかっている。
「そうだけど、あなたも私もすごく疲れてるわ。ここで少し休んでいった方がいいと思う。それに、この霧雨の中を移動するのはあまりいい考えとは思えないわ」
ケインはジェニーをじっと見た後、小屋に一つしかない小さな窓の方を見た。窓を通して見える世界はもう真っ暗だ。雨は砂が舞う

ようなさらさらとした音をたて、屋根に降りそそいでいる。ケインが疲れた顔をしてため息をついた。
「わかった。いいよ、そうしよう。きみの顔色も悪いから心配だ。ここで少し休んで、明日以降に備えよう」
それから、二人は協力して、昔は寝台だった場所を、せめて一夜だけでも居心地よく過ごせるようにきれいに整えた。

ジェニーと組んだ手をあげ、隣に寝ているケインが小声で呼んだ。
「ねえ、ジェニー」
「うん？」
ジェニーが顔を傾けると、ケインはあおむけにしていた体を横向きに変えながら、言った。
「一緒に逃げたこと……後悔してない？」
その瞬間、ジェニーの脳裏に、屋上でのゴーティス王の笑みがよみがえった。ジェニーを眩しそうに見て、悪意のない笑顔を向け、誓うようにジェニーの耳元で囁いた彼の声を思い出した。彼が間近にたたずんでいるように思え、ジェニーの体の芯が震えた。
あのときは、普段の王とは似ても似つかない、と感じたものだが、今思い返してみると、彼のそういった兆候はそれ以前にところどころで目にしていた。
もしかしたら、彼の放った言葉の数々は、全て本心だったのかもしれない。
「ジェニー？」
ケインの声に不安がこもり、ジェニーは彼と組んだ手に力をこめた。
「ううん。追っ手が怖い、とは思っているけど……後悔はしてない」
ケインが手を握り返し、ジェニーを見てほっとしたように頬をゆるめる。「それならよかった」
王城の地下水路をたどる間、ジェニーは脱出の成功を願う一方で、自分たちが成功を目前にして捕らえられる光景を、なぜかずっと想

像していた。現実に脱出を決行していながら、ジェニーは王城の外に出られる瞬間を予想できなかった。だからなのか、衛兵の目をすり抜けて城壁の外についに出られたとき、脱出を成功できた喜びと同時に、奇妙な喪失感で胸がいっぱいになった。でも、城から一刻も早く離れなければならなかったジェニーに、その不思議な感情の理由を考え、感傷に浸っている時間は、当然ながら一秒もなかった。

――もう、王城には戻らないのだから。

手を組んだのとは逆の手をのばし、ケインがジェニーの額に触れる。ジェニーがケインを見上げると、彼はジェニーに顔を寄せようとして、途中で顔をくもらせた。

「このままじゃ、そのうちに追いつかれる。ジェニー、どこかで馬を調達しよう」

ジェニーは、ヴィスコンデールの街に入る前に、農家の裏庭に干してあった洗濯ものから男女の服を拝借したときのことを思い出した。二人が風にはためく服を取り去るのを幼い子どもに見られたが、その子は二人に怯えきっていて、泣き声すらあげなかった。

「もちろん、その方が絶対にいいと思うけど――」

ジェニーが、ケインの背中にある火傷の痕を目にしたのもそのときだ。肩甲骨の上に残るその痕は、罪人の証でもある焼き印だった。彼が罪人という事実をあらためてつきつけられ、衝撃的だった。

「でも、服のときのようにはいかないわ」

ジェニーが自分の服に触れて言うと、ケインから小さな笑いがもれた。

「うん。たぶん、あんなに簡単にはいかないね。……ちょっとの間、拝借させてほしいだけなんだけどな」

ジェニーが目を上げると、ケインが普段の和やかな笑みを復活させていた。それにつられてジェニーは笑い、そして、ほっとする。

ケインがジェニーの唇の脇に口をつけた。それは横にすべるようにしてジェニーの唇につけられ、ジェニーは彼の唇を黙って受ける。それは温かく湿って柔らかだったが、ジェニーが前に触れたときと、

どこか感触がちがった。なんとなく、落ち着かない。
ケインが口を離してため息をもらし、再び、ジェニーの呼吸を奪う。唇をふさがれたとき、ジェニーは細く開いた唇の表面に彼の舌を感じて、自分でもびっくりするぐらいに戸惑った。強烈な違和感だった。ジェニーは思わず、目を開けた。
ジェニーが握っていたケインの手を押し戻そうとすると、ケインがはっとしたように顔を離した。「ごめん」
彼が気分を害すと思っていたジェニーの予想に反し、ケインは照れたように笑い、ジェニーの顔を手のひらで包んだ。
「顔を見ていたら、つい触りたくなって……。ごめん、今日はゆっくり休まないとね」
ケインは名残惜しそうにジェニーの唇を見つめたままだったが、ジェニーを覆っていた彼の体を離した。
「できれば明日にでも馬を手に入れて、国を早く出よう。きみの叔母がいるベルアン・ビルになるべく早く着きたい」
王城からの脱出に成功した後、ジェニーは何度かケインに彼の親類の当てを尋ねたが、彼が頼っていけるような親類はいないようだった。ケインの言動からジェニーは彼が貴族だろうとは考えていたが、話が家族に及んだとたんに彼は言い渋る。両親は既に他界し、三人の姉は遠方に嫁いでいて、すぐ上の兄とは昔から仲違いをしているということ以外、身の上を明かしてはくれない。
「きみの叔母さんは私を歓迎してくれるかな？」
「きっと大歓迎よ。あなたもきっと、彼女を大好きになると思うわ」
ケインが嬉しそうに笑って、寝台の上にひっくり返った。お腹の上で両手を組んで目を閉じるが、微笑は絶やさない。その姿は、すっかり元通りの彼だ。
彼を眺めているだけでほほえましい気分になり、ジェニーも彼にならって目を閉じた。眠さはあまり感じなかったが、体が疲労している感覚が戻ってくる。
「――ねえ、ジェニー、お腹が痛いの？」

「え？」

心配そうな声が隣で響き、ジェニーは目を開けた。ジェニーがケインに顔を向ける前に、彼の手が躊躇いもなく、ジェニーのお腹の上に置かれた。彼の手は繊細で、ジェニーの肌より冷たい。

彼の細い手の指がそこに見えると、ジェニーは、そわそわと落ち着かない気分にさせられた。生理的に嫌だというのではない。彼に触られることが、どういうわけか、しっくりこないだけだ。

「どうもしないわ。どうして？」

ジェニーがさりげなく体の位置を動かすと、ケインもさりげなく手を引っ込めた。

「何でもないならいいんだ。きみがお腹を時々さわっているのを見かけたから、ちょっと気になっただけ」

ジェニーには今のところ、アリエルや女官長に散々脅されてきたような体調の悪化はまったくない。逆に、自分の体力が増強されているような気さえする。ジェニーがお腹に手を触れると、手と接した面から活力をもらえるような不思議な感覚がある。だが、ケインの手がそこに繋がれるのは何かがちがった。その手はここに所属しないという異質さで、下腹に勝手に力が入る。

「痛くないけど……でも、お腹はすごく空いてる」

ケインに感じた異質さを頭から消そうとして言ったジェニーの言葉は、ケインを和ませたようだ。彼は、次の町にたどりつく前に食物を絶対に探し出す、とジェニーに約束した。

体の疲れに身を任せ、眠気に脳が降伏するまでの間に、ジェニーはこの二日間で考えもしなかった王城のことを急に思い出した。あの窮屈な生活に戻りたいとは思えなかったが、ジェニーが好んだ日常も一部にはあった。完全に心を許してなどいないが、サンジェルマンは誠実な人間で、アリエルは親切で理解のある人物だった。あの二人の仲がどう発展するかも、見届けたかった。

朝がまた始まれば、ジェニーとケインはここから移動しなくては

ならない。

――あの王は、私を捜して追ってくる……？

ジェニーには、ゴーティス王が彼女の逃亡を知って怒り狂う様も想像できたが、彼がジェニーに愛想をつかし、捨て置く様も想像できた。そしてそのどちらを想像しても、胸のずっと奥のどこかで、小さな傷が疼くような不快な痛みを感じる。ジェニーがケインと地下階段を駆け降りていた頃から、胸の中では小さく鋭い声があえぎ続けているが、それがケインを求めているのか、ゴーティス王なのか、誰なのか、何なのか、ジェニーには今もわからない。

ただ、もしゴーティス王の追っ手がやって来たら自分の命はない、とジェニーは思っていた。彼は、彼の保護の下から逃れたジェニーを、決して許しはしない。

ただ生き延びるために、ジェニーは逃げ続けなければならないのだ。

◇　◇

サンジェルマンと部下は街道を夜通し進み、国境の手前で馬を換え、ラニス公の領地にようやくたどり着いた。ラニス公の領地は東西に細長く、国境と接する北部には低い山が連なる。人目を忍んで国境を越えるには山道を行く方が無難だが、それがひとり旅だった場合、山賊や予期せぬ危険を回避するためにも、ふもとを抜ける遠回りの道をたどっていった方が断然いい。

山に続く右手の道の先を眺めながら左手の道をとり、まもなく見えてくるだろう小さな宿場町を目指して、二人はその後も無言で馬を走らせた。後ろからは明るい朝の光が二人を追いかけ、二人は進行方向に細く伸びる自分たちの影を追いかける。

サンジェルマンは、王城からの逃亡を果たしたとはいえ、ジェニーが今もなおヴィレール内に潜んでいる、とふんでいた。若い女が旅をするには常に周囲から身を守って進まなければならず、馬もな

い彼女の場合、体力的にも一日で移動できる距離は限られるはずだ。それに、彼女はあまり自覚していないようだが、お腹に子どもがいるのだ。体力は相当に奪われ、歩みも遅くなっているだろう。

まっすぐに西に伸びる一本道の先に家がいくつか見えてきて、サンジェルマンたちは馬の速度を落とした。夜が明けたばかりの家並みに、腰の曲がった老婆がひとり歩いていた。一軒の家の裏に、白っぽい鶏が数羽放たれている。そののどかな風景を通りすぎてなおも直進すれば、数軒の宿や店が連なる界隈が見えてくる。

遠くなるにつれて裾が広がるように、通りの両側に町ができていた。サンジェルマンは自分たちの乗る馬のひづめの音だけを耳にし、その小さな町を見渡した。まだ朝早いせいか、サンジェルマンたちの進む道の先に、人影は見えない。

町の中央に来て共同の水飲み場に行き当たり、サンジェルマンは馬に水を与えていた。街はまだ完全に目覚めておらず、水のはねる音以外に音はなく、ひっそりとしている。

そのとき、まだ馬上にいた部下が、殺気だった声で彼を呼んだ。

「サンジェルマン様！」

振り向くと、彼が看板の出ている宿屋の方を指差して言った。「あの裏に若い女が！」

「何だって？」

サンジェルマンは彼が指差す先に目を向け、宿屋と隣の店の隙間から見える、裏通りを見た。

誰も、何も見えない。

「たしかに今、娘が走ったんですよ！」部下は焦ったようにサンジェルマンに言う。

宿屋にいる、ただの下働きの女なのかもしれない。

そうは思ったが、何か虫が知らせ、サンジェルマンは全ての可能性を追おう、とそのときに決めた。

「確かめよう」

手綱を操り、サンジェルマンは急いで馬に乗る。それから、部下が女を目撃したという裏通りを目指し、宿屋の角を曲がり、馬が通れるだけの脇道に入った。辺りは静かで、二人の起こす音は間違いなく住民の迷惑だ。

しかし、二人が馬で乗り入れた雑然とした裏通りにはひと気がなく、風が吹き抜けているだけだった。通りの左右を先の先まで見渡しても、住民が扉を開ける気配すら感じられない。

「無駄足、か……」

サンジェルマンは、困惑したように辺りをきょろきょろと見回す部下を見た。彼の見間違いとも思えないので、たぶん、ここにいたという女は、宿屋か付近の店で働く地元の娘なのだろう。そんなに簡単に、広大な国土の中でたった一人の娘を見つけ出せるわけもないのだ。

こんな思いを何度味わうはめになるのか、とサンジェルマンが今後の捜索を憂い、部下から目をそらして、山のある方角に目をむけたときだ。立ち並ぶ家々の裏、そのずっと奥に、茶色の物体がさっと動くのが見えた。それはほんの一瞬のことだったが、その直後、馬のいななきが空気をきって小さく聞こえてきた。部下が息を飲んで振り返るのと、サンジェルマンが言葉を発したのは同時だった。

「行くぞ！」

何か、勘のようなものだった。

二人のいる通りから馬のいななきが聞こえてきた方角に行く道は、なかなか見つからなかった。どれも細すぎて馬では通れない。胸騒ぎとともに焦りが高まって、サンジェルマンの全身に熱い血が駆け巡る。

やっとのことで通れる道を見つけてサンジェルマンがその角を曲がると、その先に川の水面が見えてきた。橋は、かかっていない。

川の手前で視界が開け、サンジェルマンの馬が川岸の急な傾斜に躊躇して立ち止まった。川幅はそれほどないが、水深がありそうだ。

サンジェルマンは体勢をくずさないように馬を何とか操りながら、川の対岸を走る二頭の茶色い馬と、馬上にいる人物に気づく。山に続く道を、馬を急がせて駆けていく。

一人は赤茶色の服を着た村娘のような若い女で、もう一人は金髪の痩せた若い男だった。女の乗った馬はすぐに向きを変えてしまったためにその顔が確認できなかったが、男の方は、対岸にいるサンジェルマンにずっと前から気づいていたとでもいうように、彼に顔をゆっくりと向けた。

声が――驚きのあまり、声が出なかった。

馬を落ち着かせようとしていた手綱の手をいきなり止めたので、サンジェルマンはあやうく落馬しそうになり、あわてて手綱を引いた。隣に追いついた彼の部下も、急に止まった馬の上で姿勢をただそうとしている。

「あれは……？」

部下の放った声で我に返り、サンジェルマンは視界の先に小さくなっていく二人の後ろ姿を絶望的に見つめた。

「サンジェルマン様？」

サンジェルマンは部下を見つめ――見つめ過ぎて、部下が不審に思ったのだろう、彼が眉をひそめるのを目にして、ようやく口をきけるようになった。

「あれは……ジェニーだ」

「ええっ！？」

女の顔は確認しなかったが、サンジェルマンにはそうとしか考えられなかった。

部下が二人の姿を目で追い、サンジェルマンも、山の緑に消えていく小さな黒い二つの影を見た。男の挑戦的な顔を目にしてもなお、サンジェルマンには、今見たことが現実だとは信じられない。

「では、すぐにでも追いませんと！」

「……ああ」

サンジェルマンは川に架かる橋を探して視線をさまよわせたが、

動く気になれなかった。数年前を最後に顔を見ていなかったが、頬の肉がこけて体がひとまわり小さくなっていても、馬上の彼がケインであることはすぐにわかった。

王命で地下牢にずっと閉じ込められていた、五十二号。

幼い頃から体が弱く、母親の愛を独り占めにし、屈託のない態度で皆から好かれていた、王の実弟。牢内で早々に亡くなるだろうという予想を裏切り、彼が数年をそこで生き続けているのはサンジェルマンも知っていた。

ジェニーと一緒とは――。

皮肉な巡りあわせに、サンジェルマンは心の底から恐ろしくなった。久しぶりの恐怖を感じた。

王は、他の誰よりもケインに敵意を覚えるはずだった。二人が一緒にいることは、おそらくまだ誰も知らない。王にこの事実が知られる前に、ケインを確実に仕留め、ジェニーと引き離さなければならない。

「あちらに橋があります！　行きましょう！」

サンジェルマンは部下の示す小さな橋を見た。馬首をそちらに向け、部下の後に続く。

第一部　8．遠のく瞳－4

人間二人がすれ違うには狭すぎる地下階段が暗闇の奥に伸びていく光景を思い出すたび、ゴーティスは屈辱と怒り、とほうもない悲しさで胸がふさがれる。後宮内にあるどの地下通路も王城の外に直結してはいないが、東館か本館か、ともかく、いずれかを経由して、ジェニーは王城の外に脱け出たのだ。狭く暗い通路を通っての脱出も、彼女の勇気をもってすれば難しいことではない。

ジェニーの侍女はまだそう信じている口ぶりだったが、ゴーティスはジェニーが地下のどこかでさまよっているとは全く考えなかった。賢い彼女は地下にはりめぐらされた迷路のような通路を長時間かけて調べ――ゴーティスには彼女にそれほどの用意周到さがあるとは考えにくかったが――そして、経路を突き止めたに違いない。彼女はその手間さえいとわず、埃っぽく真っ暗な地下通路を延々と歩くことを選んでまで、ゴーティスのもとに留まるのを拒んだのだ。

「あの、王……？」

前方から掛けられた声に、ゴーティスはテーブルに落としていた目線を上げた。焦点のあったゴーティスの目に、近衛兵の証である青い制服が目に入る。そして、ゴーティスと目が合うと、男がひるんだように慌てて頭を下げた。

ライアンからの遣いとして、執務室に入室許可を与えられた男だった。どれぐらいの空白の時間が過ぎたのかは知らないが、男はそこでしばらくつっ立っていたらしい。

ゴーティスは目の前に誰かがいながら思考が飛んでいた自分に腹が立ち、短くため息をついた。男が何度も瞬きして動くまつ毛を目にして、ゴーティスは体を伸ばし、椅子の背もたれに背を預ける。

「ライアンの報告とは？」

ゴーティスが口をきくと、男ははっとして顔を上げた。男の表情から、ジェニーが見つかったという報告ではない、とすぐに悟る。

「申し上げます」彼は敬礼し、言った。「国の全ての関所で、女と同じ身体的特徴を持つ者は全員拘束するように伝令を出しました。ラニス公領地にある国境沿いの山々には捜索隊を派遣し、また、ベルアン・ビルと旧ヴェスト地区にも別部隊を向かわせ、到着次第、あちらでの捜索を開始する予定でおります」

たかが一人の女のためだけの、大掛かりな捜索。

それは口惜しくもあり、ばからしくもあるが、皆が恐れるヴィレール王ゴーティスを手玉に取ったジェニーにはそれもふさわしい気がする。

「捜索方法は任せる。俺が欲しいのはあの女の身柄だけだ。俺に差し出される瞬間まで意識が残っておれば、それでかまわぬ」

「ははっ」

男がうやうやしく返事をした。

「報告はそれだけか？」

ライアンらしからぬ報告だ、と思いながら、ゴーティスは男をうかがい見た。捜索状況を伝えるためだけに早馬を走らせるような彼ではない。

「いえ、もう一件。その、それが例の女だという確かな証拠はないのですが……気になる目撃情報がありまして」

男は歯切れが悪いだけでなく、その顔には恐怖が入り混じった緊張を浮かび上がらせていた。ゴーティスは男を促すように頷いた。

「聞こう」

「は。女の姿が消えた日の早朝のこと、ヴィスコンデール近郊の農家の庭先に干してあった服が何者かに盗まれたと役所に届け出がありました。ちょうど家の裏手にいた幼い息子が、まだ若く、明るい色の髪で、上等な服を着ていた女を目撃しております。その服は農夫が売ってしまったとかで手元には残っていませんが、ただ、その、彼女には連れがいまして……。その、共にいたのは痩せた金髪の男で、背中の、肩の近くに痣があったそうです。痣の位置から、それが罪人の証である焼き印ではないかと農夫が疑い、役所に報告した

ために今回の件がわかりまして――」
男はゴーティスと目が合い、顔をこわばらせて口を閉じた。ゴーティスは彼をちらりと見ただけなのだが、彼はゴーティスから顔をそらすように顔をうつむかせる。
ゴーティスは、しかし、男がもたらした情報にそれほど驚かされはしなかった。いや、正確に言えば、驚きはしたが、ジェニーの逃亡した事実以上に衝撃を受けなかった。誰かの手引きがなければ王城からの逃亡は完遂できない、と想像していたゴーティスの考えをあらためて裏打ちされただけだ。
あの女は――どこまで驚かせてくれるのだろう。
報告を聞き、ゴーティスは腹が立ちはしたが、一連の行動をやってのけた彼女を崇(あが)めるような気持ちすら覚えた。今頃になって、自覚していた以上に彼女が好きだったのだ、と気づかされた。そして、ゴーティスは今、彼女がますます好きだった。
「それを、ライアンはジェニーとみなしているわけか」
「は、はい」
「その可能性は高かろう」
近衛の男が驚いたように顔を上げた。
「ジェニーを国境の外に絶対に出さぬよう、捜索を続けろ。その罪人は、見つけ次第、必ず殺せ」
男は返事をし、退室していく。
扉が閉まり、ゴーティスは窓の外に目を向けた。広大な青空には、白い雲が一つだけ、ゆっくりと手前に流れてきている。後尾を指で引っぱられたような、雫の形にも見える雲が、ゴーティスの方に向かってだんだんと近づいてきていた。だが後部の丸い部分はいつまでもそこに留まり、雲が流れてくるにつれ、先端部分が細く長く尖っていく。
ふと、ゴーティスは、ジェニーの捜索など中断し、彼女の望むままにさせた方がいいのではないか、という思いにとらわれた。この捜索の末に彼女が捕らえられれば、彼女は間違いなく断罪される。

王である夫に手をかけた母親のときと同様に、ゴーティス自身が彼女の断罪を選択することになる。

母親の場合は許されざる罪を犯した経緯があったにしても、一般論としてはどうであれ、ジェニーに対してそれがはたして正しいことなのかどうか――。

数日間、ゴーティスは迷い、考えていた。ジェニーが城内にいないと確信しつつも、そのときはまだ、頭の片隅のどこかで、ジェニーがそのうちにひょっこりと顔を出すのではないかという虚しい幻想を抱いていた。王命により閉め切られたサロンの扉を見れば、サロンも主人ジェニーの出現をひたすら待っているかのように思えた。

ゴーティスはジェニーを待っていたのだ。

もしもジェニーが突然にゴーティスの前に再び現われて、地下で迷って困っていた、などと言おうものなら、ゴーティスは彼女をすかさず怒鳴りつけ、文句を散々わめき散らした後で、死ぬほど心配した、と恥をしのんで言ってやるつもりでいた。

そして、ジェニーが行方不明となって一週間が経とうとする頃、ゴーティスはサンジェルマンの部下の訪問をひっそりと受けた。国外にいるサンジェルマンが出先でジェニーの逃亡を知り、捜索隊に合流するという連絡だろうか、と予想しながら初対面の男の前に出ると、男は厳しい顔を崩さず、ゴーティスへの挨拶も早々にこう告げた。

「王、五十二号が逃亡いたしました」

男のはっきりとした口調が、ゴーティスが記憶の底に沈めていたある男の存在を無理やりに引き上げた。

思い出したくもなく、口にものぼらせたくない存在だ。

「何を――言うておる？」

一度は腰を浮かせた椅子に何とか体を落ち着かせ、ゴーティスは不快な思いをさせた男に苛立って、彼をにらみつけた。しかし、彼

はゴーティスの反論など聞き入れないというように態度を崩さず、厳(おごそ)かな口調で繰り返した。

「五十二号が逃亡したのです、王。看守に傷を負わせて脱獄しました。城内のあらゆる場所を捜し回ったのですが、いまだ、行方がつかめておりません。我々の不徳の致すところで……誠に申し訳ございません」

ささくれだった冷たい手で心臓を掴まれることがあれば、きっと今のような気分だ。

ざらついた胸の内が、冷たさと接した面から急激に体温を上げていくのをゴーティスは他人事のように冷静に感じとった。

「それはいつの話だ」

男は垂れた頭をあげ、ゴーティスに答える。

「剣技大会の最終日前夜です」

ゴーティスは胸にわきあがる熱い気に耐えられず、額を押さえて椅子から立ち上がった。静かに起きたはずが、椅子は彼の足の後ろにひっくり返って倒れた。椅子が床とぶつかる衝撃音が耳に届くと、強烈な怒りがゴーティスの胸の中全体にあっという間に広がる。

ゴーティスは男の横を通り抜け、執務室の扉を開け放った。「誰かおらぬか！」

室内での物音に反応したらしい近衛兵が二人、控え室に待ち構えていた。それに加え、侍従長が心配そうに両手をすり合わせている姿も見える。

「おまえたち、今すぐに馬を用意しろ！　今すぐに、だ！　俺もライアンの部隊へ合流する！」

侍従長は何か言いたそうだったが、ゴーティスは彼をまるっきり無視した。男たちが走りさり、それから、ゴーティスは室内にまだ残っているサンジェルマンの部下に振り返る。彼の他の部下たちと同様に肝のすわった男なようで、ゴーティスの怒りを目の前で見ても怯えた様子は見せない。ゴーティスは男につかつかと近づいた。

「おまえたちは何をしておったのだ！　あんな腰抜けに脱走を許す

とは何たる失態！　よいな、どんな手を使うても五十二号を捕らえ、確実に息の根を止めろ！　絶対に逃すでないぞ！　五十二号を殺すまで城に戻れると思うな！　よいか、万が一、もしもあの男を仕留められないときには、おまえたちは――その一家全員も、死に目に遭うと心得るがいい……！」

出発の準備が整えられるまでのほんの短い時間、ゴーティスは自室に戻り、部屋にある窓から空を見上げた。王城の建つ地方は、夏の期間はほとんどが晴天で青空が広がることが多い。今日もまた抜けるような青空で、ゴーティスから見える空には雲ひとつ浮かんでいない。

そうやって空を見上げているうち、ゴーティスはなぜか笑いが止まらなくなり、体がそれに伴って震え始めた。晴れ上がった青空に目がくらんだ。ゴーティスは視界からそれを隠すように両手で目を覆い、両目に押し付けられた手には体の震えが伝わってくる。

「よもや――ケインと逃げるとは！」

その後もしばらく、笑いは続いた。体の震えも止まらない。だが、ゴーティスは無駄に体の欲求に逆らうことはしたくなかった。笑いたいなら、笑えばいい。

戸口で誰かがゴーティスを呼ぶ声がし、出発の準備が済んだことが知らされた。ゴーティスは顔を覆った手の下から返事をした。そして、窓辺から離れようとしたそのときになって初めて、視界がかすみ、手のひらが冷たくなっていることに気づいた。ゴーティスが不思議に思って手のひらをよく見ると、両手ともに、透明な水で濡れている。ゴーティスは、泣いていた。

ゴーティスは唇を噛み、窓の外に再び目を向けた。青空を目にするとあらたな涙がにじみ、彼の視界はいっそうぼやける。体も震えた。それでも、この眩しい青空から目をそらさず、脳裏にこの光景を焼きつけておかねばならない。

――自分のものにならぬジェニーを、自分の手で殺してしまうた

めに。

◇　◇

遠目から見た低い山は、実際に入っていくと緑が深く、どこまでも上り坂が続くように思えた。そのせいで広野を駆け抜けるのと同じ速度で馬を進めることはできないが、徒歩で山越えをするよりはずっと速い。ケインによると、この山を越えた先の国境には関所が設けられているそうだ。ただし、関所を避けて越境する者は後を絶たないらしい。

ケインが一緒にいてよかった、とジェニーは心の底より思っていた。彼の存在があるおかげで、ジェニーは身の安全が確保され、寂しさを感じずに旅を続けてこられている。二人であるために、旅行者として不自然に映らない。そして、彼はこの地方に度々来たことがあるらしく、近辺の事情にも通じている。土地勘もないジェニーだけでは、何日たってもヴィレールから抜け出せなかっただろう。

山に入ってから休憩もとらずに馬を進ませ、服の下にうっすらと汗をかいてきた頃、ジェニーと併走していたケインが不意に振り返って、手招きした。ジェニーが馬の手綱をしめて足並みを止めつつ彼を見ると、彼が、獣道のような脇道にそれていこうとしている。

「どこへ行くの？」

「道は悪いけど、こっちの方が近道なんだ」

ケインがにっこりと笑ってそう教える。

ジェニーは彼の背後にある獣道の先を眺めた。二人のいる場所は日光がさんさんと降りそそいでいたが、その先は木々の濃さが徐々に深まっていく。

「来て、ジェニー」

ジェニーを急がせるように、めずらしく苛立ちを含んだ口調で彼が言う。

「うん」

ジェニーが馬の腹を蹴るのを見届け、ケインは自分の馬を促し、先導をとって脇道に入る。彼が馬を操る仕草で、ジェニーには彼がまた焦っていることがわかった。国境を前にして気が急いているのに違いない。

日なたより日陰が多くなってくると、それまでの疲れが心地よい気だるさとなってジェニーの手足の先に充満していった。辺りは静かで、小鳥のさえずりや動物の動きまわる音がしない。馬が草や落ち葉を踏みしめる音のほかに、何も聞こえなかった。山が静まりかえるというのはなんだか奇異に感じられる。山は侵入者の二人の存在を知って、じっと息をひそめているかのようだ。

二人の通る道はそれまでと比べて道幅が極端に狭く、体の間近にまで伸びてきている枝をよけながら行かなければならないのに、ケインの歩みは速かった。彼の進む速度はそれまでとほぼ同じだ。そして、彼はジェニーに一度も振り返らない。

「もう少し待って、ケイン！」

馬五頭分ほどの差をつけられたとき、ジェニーはついに前方の彼に叫んだ。すると彼はすぐに手綱を引いて馬を止め、くるりと後方を振り返った。それから、彼の右手に広がる林の方を、何かを探すように見つめる。

「ケイン？」

彼に近づきながらもう一度彼の名を呼ぶと、ケインが無言で、唇に人差し指をつけた。ジェニーははっとした。急に彼の性急さの理由を理解したように思え、彼がそうしたように、右側の林の中をそっとうかがい見てみる。光が細長い線となってところどころに差し込む木々の間には誰も何もおらず、動く影もなく、特に異常は見られない。ジェニーがケインに視線を戻すと、彼はジェニーの馬の足取りを注意深く見つめていた。

「ごめん、ジェニー。少し気が急いていたみたいだ」

ジェニーがケインに追いつくと、彼が申し訳なさそうに小声で謝った。それはいいの、とジェニーは言い、彼が気にする、右側に傾

斜していく林を再び見やる。
「それより、何か――誰かいるの？」
「……裾野の方から馬が二頭、それに、上の方にも何頭か――数はわからないけど、たぶん、さっきの道を移動してきてる」
ジェニーが驚いてケインの目を見つめると、彼はジェニーに小さく頷いた。
「追っ手かもしれないってこと？」
ジェニーが訊くと、ケインはやるせなさそうに息を吐いて空を見上げ、口惜しそうに答えた。
「下からの二頭はそうだと思う」
「ケイン、でも、なぜそれが追っ手とわかるの？　あなたの耳がいくらよくても、音だけじゃ――」
「さっきの町でサンジェルマンに会ったんだ」
ケインはジェニーの問いをさえぎって言い、ジェニーが驚いた反応を見せると、苦笑した。ジェニーは言葉が出ず、ただただ驚いて、彼を見つめる。
「彼を当然知っているよね？　私はさっきの町で彼に顔を見られた。彼がきみの顔を見たかどうかまではわからないけど、彼は私が王城から逃れたことを知ってしまったんだ、必ず私を追ってくる。私に王城の外で生きていられては困るんだ。彼は私を捕らえ、今度こそきっと、亡き者にしたいはずだ」
ケインは自分の身に迫る危険を人ごとのように淡々と説明する。ジェニーは迫りくる不安に寒気を覚え、鳥肌のたった腕を押さえた。
「上から近づいてくる者たちは誰なのかわからない。旅行者か地元の者か、それとも山賊なのか。どちらにしろ、用心にこしたことはないと思う」
「……ええ、そうね」
急ごう、とケインはジェニーを促し、背中を向けた。ジェニーも彼に続いて、馬を進ませる。
ジェニーは彼の無言の背中を見つめ、それから、自分の背後に広

がる木立をこわごわと振り返った。明るい林は静まりかえっている。それを目と耳で確かめると、ジェニーは前方を行くケインの背中をまた見つめた。

“サンジェルマンが、追いかけてくる”

「ケイン」

ジェニーが辺りをはばかって呼びかけた小さな声は彼の耳に届いたようだ。ケインが馬を止めずに振り返る。

「ケイン、あなたは……何者なの？」

ジェニーの投げかけた質問に、ケインは困ったように笑った。少しうつむいた彼の表情が、ジェニーがどこかで見たことのある男の顔に重なる。

「私が怖い？」

「ううん、そんな意味じゃないの。でも、サンジェルマンから命を狙われるなんて――」

ケインが遠くを見つめるような目をして、だがすぐに、嫌なものから目をそらすように両目を閉じた。

「ごめん、今は何も言えない。でも、国境を越えたらきっときみに事情を話すよ。約束する」

彼の困ったような、悲しさを含んだ笑顔を見て、ジェニーはそれ以上、何も追求できなかった。

ケインが選んだ近道を通り、二人は遅くともその日の夕方には二つ隣の山に渡り、国境を越える計画でいた。ところが二人は、次の日も、そのまた次の日の朝も山中にいた。ケインにひどい腹痛と発熱があり、途中で足止めをくらったのだ。

今の季節の山は食料にはことかかない。ケインを介抱する合間に、ジェニーは近くの野いちごや木の実を採集し、今までの空腹を取り戻すかのように夢中でそれを口にした。空腹が満たされるにつれ、ジェニーは自分が相当に疲れていたことに気づかされた。この機会に乗じて休息できることをありがたく感じた。

その後、ジェニーが心身ともに癒され、ケインの熱が下がって何とか移動できるまでに回復したのは、ジェニーがケインに折り重なるようにして眠りに落ちて目覚めた、二日目の朝のことだった。

それから二人は、それまでの遅れを挽回しようと進行速度を上げ、隣の山に移動した。この山の麓が二人の目指す国境だ。

周囲に気を配り、なるべく人目につかない道をとって二人が進んでいくと、途中から湿った空気に変わった。馬の歩く道が湿り、そのうち、濡れた地面に移り変わる。ジェニーの真上にある空はもう青かったが、こちらの山では雨が降ったのだ。濡れた土の匂いが地面からたちのぼっている。

「ここで待ってて」

ジェニーを残し、ケインが山を下る道を確認しに見晴らしのよい地点に行った。この山の反対側は国境とつながっている。二人が自由を勝ち得るまで、あとほんの少しの辛抱だった。

ほどなく、ケインがひどく落ち着かない様子で小走りで戻ってきた。その彼の青ざめた顔を一目見るなり、ジェニーの胸に鈍痛が走る。

「何かあったの？」

ケインは衝撃を受けたように顔をあげ、ジェニーをそのまま見つめた。遠くからは小鳥が幸せそうにさえずる声が聞こえてくるのに、ケインはなんて悲しそうな顔をしているのだろう。

「ジェニー」

ケインの声を聞くとジェニーの鼓動は一気に加速した。一言も聞きもらさないようにと、ケインの唇を注視する。

ケインは泣いてはいなかったが涙をぬぐうような仕草をし、ジェニーを避けるように地面を見つめた。その沈黙が耐えられない。ジェニーが、もう一度彼に声を掛けようとしたときだ。

「麓に青い制服姿の部隊が見えた。あれは近衛隊、それも、たぶん……王軍だ」

ジェニーは言葉を失い、ケインも無言で、気が抜けたようにお互

いを見つめた。頭の中が空白に変わり、手をどう動かして手綱を扱い、足をどうすれば馬から降りられるのかさえ、そのときのジェニーにはわからなかった。

「ジェニー」

ケインの声で我に返り、ジェニーはとっさに後方を振り返った。後ろからはサンジェルマン、前方には近衛隊。国境線は、近衛隊の向こう側だ。

ここで、ぐずぐずしてはいられない。

でも――じゃあ、私たちは、どちらに進めばいい……？

第一部　8．遠のく瞳－４（後書き）

ここまで読み続けていただき、本当にありがとうございました。
いよいよ、次回が第１部の最終話となる予定です！
次回の話は少し長くなってしまうかもしれませんが、最後までぜひぜひおつきあいくださいませ♪

第一部最終回　8．遠のく瞳－5

歩みの遅れより人目につかない方を優先し、ジェニーとケインは馬を捨てた。

二人はさらに隣の山に渡り、乱立する木立の間に身を隠すようにして進んでは、茂みがあればその陰に移動し、周囲の様子をうかがって、危険がないと確認できるとまた歩いた。

山は通常の営みをしている。小鳥たちは楽しそうに声高に歌い、風はそよそよと木の葉を優しく揺らし、吹き抜けていく。ジェニーは突然の小動物の出現に何回か肝を冷やしたが、それは近くに侵入者がいないことを表しているようなものだ。

ケインはそれまでにもまして耳に神経を集中させているようで、ジェニーとは必要以上に口をきかなかった。二人には短剣一本しか武器がなく、戦いに秀でた近衛兵に見つかったら最後、二人の命はないと同じだ。今のところ、ケインが麓で見たという近衛隊の接近は感じられなかったが、見えない敵に怯える時間が二人の神経をすりきらせている。

こんな移動の仕方を続けていたら、体力より先に精神が尽き果ててしまう。

ジェニーは、二人の精神が消耗されてしまう前に人知れず国境を越えるか、姿を隠してくれる夜が早く来て欲しかった。

二人は何度目かに茂みの陰で腰をおろし、ジェニーは首筋にかいた汗を手で拭って、少しでも心穏やかになれるようにと深呼吸をした。ひと呼吸ごと、心臓の音が速度を落としていく。隣で膝を抱えるケインの視線は、木立の奥に固定されたままだ。

「……大丈夫？」

つぶやくようにケインが言い、ジェニーに振り返った。その顔色は真っ青で、唇に血の気がない。

「少し疲れたけど平気。それより、あなたこそ大丈夫？　顔色がすごく悪いわ」

ケインは唇を押し上げて笑ったが、そのひきつった笑顔はとても大丈夫な様子には見えなかった。まだ具合が回復していないのだ。

ジェニーが彼の額に触れようと手を伸ばすと、彼はそれをよけ、少しむっとしたように口をとがらせて「心配いらない」と囁くように言った。それから、進行方向に目を移す。

ジェニーは左右を見渡し、二人のたどってきた後方をそっと振り返った。遠くの物音も聞き分けようと耳をすましたが、草木が風にそよいでいるだけだ。日は真上から少しだけ西に動き、明るく地上を照らしている。ジェニーの視界にある全てが自然で、不自然なのは、むしろ二人の存在の方だ。

ジェニーはふと、王軍は本当に自分たちを追って山に入っているのだろうか、と疑問に感じた。

国境付近で二人が出てくるのを待ち構えているだけではないか？　ケインが、国境警備隊か何かを王軍と見間違えた可能性だってある。それに……あとどれぐらい歩けば国境なんだろう？

「――ここをまっすぐに行って、主道を越えて下っていくと、川に突き当たる。川の向こう側が国境だよ」

ジェニーの心を読んだかのように、ケインが不意に言った。彼はまだ、前方にぼんやりと目を向けたままだ。

「じゃあ、もう少しで国境なのね？」

ケインは小さく首を振った。横顔が、なんだかとても疲れている。

「ねえ、ジェニー」

「うん？」

「ここからは……別々に行こう」

ジェニーがはっとして息を飲むと、ケインがジェニーを見て弱々しく微笑んだ。

「私はここで少し休憩していくから、先に行って。きみは一人でも大丈夫だよね？　私もすぐに追いつくから、国境の向こうで再会

しよう」
ジェニーはケインの色素を失った唇を見た。
彼をここに置いていけ、と？
「だめよ、そんなの」
彼が、肩で大きく息をつく。
「なにもここでお別れっていうんじゃない。別々に国境を越えるだけだよ？」
「……いや」
「ジェニー」
「いやよ！　それなら、休憩してから二人で一緒に行くわ！　国境を目前にしてあなたひとりを残していくなんて、できるわけがないじゃない！」
「ジェニー、静かに」
ケインが目を細めてジェニーを見つめ、その両手首をつかんだ。手首にまわる彼の指が冷たい。
「ケイン、具合が悪いなら――」
「ジェニー、言い争ってる時間はないんだ」
そう告げたケインの顔はとても寂しそうだ。彼が冷たい指に力をいれ、ジェニーの手首を握る。
彼の瞳の奥をじっと見つめているうち、ジェニーは愕然とした。彼がもうずいぶんと前から追っ手の接近に気づいていたのだ、と悟って息が止まりそうになる。ジェニーがまったく勘付かなかった敵の気配に気づきながら、おそらくはジェニーを怯えさせないように、彼はここまで黙っていたのだ。
ジェニーが自分の至らなさや追いつかれる口惜しさに思わずあえぐと、ケインがジェニーの額に唇を置いた。彼の唇も、肌にあたる頬も冷たい。唇を離すとき、彼は、大丈夫、とジェニーに囁いた。
「……あなたを置いてはいかない」
ジェニーがそう言うのを、ケインは頷いて聞いていた。しかし、一緒に行くつもりがないのは明らかだ。ジェニーはケインの手を引

き、自分の温かな手の中でそれを握り締める。
「早く行って、ジェニー」ケインがその手を押し戻して言った。「もうまもなく、追っ手が二、三人やってくる。このまま川まで走っていくんだ。きみ一人なら……きみなら、たとえ見つかったとしても、王は命まで奪いはしないだろうから」
あの王が、直下の女に鼻を明かされたままでいられるとは到底思えない。ケインが見た王軍は、ジェニーに対しての、王の報復心の表れではないだろうか。
「一緒に来て。それに……あの王は私に相当に腹を立ててるはずよ、殺されるに決まってるわ」
ジェニーはケインの手を引いて起き上がらせようとしたが、ケインは首を振り、その手をふりほどこうとした。
「行って」
「早く立って」
「行くんだ」
「ケイン、立って！　こんなところで殺されたいの！」
ケインが上目使いにジェニーを責めるように見上げ、言った。
「きみは……殺されないよ。だって、王は、前にもきみを殺さなかったじゃないか」
ジェニーは彼にあっけにとられるとともに、ゴーティス王を彼の顔に重ねて思い出した。黄色のかった彼の瞳に、王の濃い緑色の瞳の光がきらめく。でも、王は、もう既に過去の存在なはずだ。
「……あのときとは事情がちがうわ」
ケインにそう答えると、“狩りの館”で殺されかかったときの王の囁き声がジェニーの耳によみがえり、王城の屋上での彼の言葉ひとつひとつが、あのときと同じ調子で甘い熱を持って語られていたことに気づく。
そうすると、一刻を争うこんな場にいるのに、ジェニーは屋上のあの場に戻って、彼の肌を背中に感じているような気がした。彼と触れた背中から、心臓の鼓動が聞こえる。離れたいのに、離れると

不安に思える。ジェニーには、今いるこの現実の方が夢の中のようだった。

「早く行って、ジェニー」

半ばあきらめたようなケインの口調にはっとし、ジェニーは彼に反発して言い放った。

「ケイン、早くして！　むちゃだってことはわかってるわ、でも、ここで死ぬわけにはいかないの！　追っ手がとりあえずは二、三人なら、なんとか逃げ切れるかもしれないでしょう！」

「相手は武装した近衛兵だ、私たちが――」

「来て！」

ジェニーは両手に渾身の力を込め、彼の腕を引っぱった。彼が体勢をくずして地面に転がりそうになって、ジェニーを呆れたように見上げる。

「なんて頑固なんだ、きみは」

「ここまで来て、あきらめたくないだけよ」

ジェニーがケインを見つめていると、彼は大きく息をつき、それから、地面に手をついてジェニーの前に起き上がった。ジェニーがなおも彼を見つめていると、彼は服に付いた土を払いながら、ジェニーに言った。

「追いつかれたら、二人とも殺されるよ」

「追いつかれる前に、逃げ切るの」

ジェニーは勇気を振り起こして、笑った。

「国境を越えたら休めるわ、ケイン」

ケインがジェニーの手を取った。同意の印というように、その手を力強く握る。

ジェニーは追っ手の迫る後方に振り返り、その姿がまだ見えないことを確認して前を見た。斜面の向こうには自由な未来へと続く道。川を渡って国境を越えてしまえば、ゴーティス王の影響力がない土地だ。

二人はやっと、再び道を進み始めた。最初は歩き、そのうちに早

足になり、周囲を気にしながら駆け出した。ジェニーの手に触れるケインの手は、まだそれほど温かくない。

斜面を降りていくと水の流れる音が聞こえてきた。ジェニーが予想していたより大きな音で、木々の合間からは白いきらめきがのぞいている。ジェニーはケインをちらりと見てみたが、彼は硬い表情で行く手を見つめているだけだ。

追っ手はまだ来ていないが、ケインが力尽きる前に、どうしても川を渡りたい。

二人は山肌から主道に降り立った。主道からさらに山肌を下ると川岸に行き着く。坂道の上下に目をこらしてみるが、誰の姿も見えない。ジェニーが下を眺めてみると、二人の目指す川が見えた。川幅はおよそ二十メートルだろうか、だが、深さがありそうだ。川の水が茶色く濁っているのは、雨で増水したからだろう。

ケインがジェニーの手を一度放し、今度は腕を取った。ジェニーがケインに振り向くと、彼は緊張をたたえた顔でジェニーをじっと見つめている。

ジェニーは、自分の心臓の音を意識した。胸の高さから、音を放つ位置がどんどん上にのぼって、そして、それは胸騒ぎのような切なさに変わっていく。鼓動と連動して、お腹も熱く波打っていることをジェニーは意識する。ただ、痛みや不快感とは少し違う。

お腹に手をまわし、ジェニーは左右と前後、天に向けて伸びていく木々の上にのぞく空を見た。

ジェニーの胸を打つ鼓動は、緊張と不安からのものだけではない。

ゴーティス王が、近くに来ている。

ゴーティスはラニス公領地の国境にいた。ジェニーの故郷や他の国境線の選択は、ゴーティスの眼中にはなかった。ケインと一緒であれば国境を越えるほかなく、彼はこの周辺の地理に通じていて、この地の延長線上にはジェニーの親類が住む地方がある。

ゴーティスが追跡班に途中合流したことは、領地を治めるラニス公にも、隊全体にも知らされなかった。ライアンは、最初こそ身の危険を案じて反対を唱えたが、ゴーティスの決意の固さを知ると何も言わなくなった。ゴーティスを迎えた一部の近衛兵たちも、何も言わない。

手の内から逃げた女を追うことで彼らのいい笑い者になっているだろうことを想像しながら、ゴーティスはその屈辱を舐めてでも、ジェニーとケインを自らの手で捕まえ、亡き者にすることを優先した。逃亡する直前に心を開いた素振りを見せたジェニーと、ゴーティスが好きな者を目の前からいつでも簡単に奪っていくケインが、許せなかった。

馬上のゴーティスは、川岸に迫る国境の川の流れを見るでもなく見ていた。昨夜か今朝に上流では雨が降ったらしく、水位を増し、濁った川の水が小枝や枯葉を押し流していく。流れは一見ゆるやかに見えるが、実際は見た目よりずっと急流のはずだ。川を挟んで向こう側には、なだらかな平野が一面に広がっている。その開けた広野を切り裂くように、馬のひづめの音が響き渡った。

「女がいました！」

ゴーティスは川面から顔を上げた。振り返ると、ライアンの正面に馬が一頭、走り寄ってきていた。王、とライアンに呼びかけられるまでもなく、ゴーティスは知らせを持ってきた近衛の男の元へ馬を近づける。

「どこだ」

「この上の道にいます！　ちょうど今追い詰めているところですので、直に捕獲できるかと……！」

「案内しろ」

ゴーティスが馬首を山に入る道に向けると、男が助けを求めるようにライアンに振り返った。ゴーティスはライアンから制止されるかと思ったが、彼は何も言わなかった。ゴーティスがこの瞬間を待っていたことを知っているのだ。しかし、ゴーティスが馬を動

かすと、ライアンはその横にぴったりと張りつくように馬を寄せてきた。男が、ゴーティスを見て、こちらへ、と馬を先に進める。

「男も一緒か？」

「いえ、女ひとりだけです！」

「――ひとり？」

馬を走らせる直前、ゴーティスは木立に挟まれた坂道の先を見た。深く暗い山ではないが、女ひとりで移動するには危険すぎる。

ゴーティスたちは坂道を駆け上がった。近衛兵らしき男の声が風に乗って聞こえてきて、手綱を握るゴーティスの手のひらが熱くなる。その手は、ジェニーの肌を覚えている。

ゴーティスは彼女を殺すために会いにいくのに、もう一度、彼女に触れたくてたまらなかった。

はたして、ジェニーは――そこにいた。山の急斜面を背に大きな木の陰に立ち、おそらくは武器もないというのに、男たちに三方向から包囲されつつあっても降伏する素振りを見せていない。

彼女もまた、ゴーティスたちの接近に気づいた様子だった。だが、後から現れた一行の中にゴーティスが混じっているとは気づいていないようだ。ゴーティスは、その目立つ色の髪を覆って、隠している。

ゴーティスは、ジェニーをその目で見る瞬間まで、彼女が本当に王城から逃亡したのだと心の奥底では信じられずにいたようだ。彼女が逃亡を果たして無事でいる事実がどうにも口惜しく、けれど、その無事を知って、ほっとしている。

ゴーティスは、ジェニーの体から香り立つ気高さのようなものに圧倒されかけていた。彼女の放つ生気に心が揺らいだ。そこに堂々と立つ彼女を、自分が手にかけてよいものかどうか、わからなくなる。

だが、隣のライアンが背中から弓矢を取り出す様を見て、ゴーティスは王城の自室での決意を思い出し、現実に戻った。

「それを貸せ」
ゴーティスが手を伸ばすと、ライアンは躊躇うように弓を持った手を後ろに引いた。
「よこせ！」
ゴーティスが苛立って言うと、ライアンは弓と矢を両手に揃え、ゴーティスに手渡した。
ゴーティスはジェニーと自分の間をはばむ物のない地点を探しだし、馬上で弓を構えた。ゴーティスたちに背を向けていた男がそれに気づき、少し右によける。ジェニーは木の陰から左半身を見せ、男たちの接近に備えている。彼女は、体をほとんど動かしていない。
ゴーティスは弓を引き、ジェニーの心臓の位置を狙って矢を構えた。迷いを生じさせる前に、矢を放ってしまうしかない。ぎりぎりと弦の張る音が耳に痛かった。だが、そのおかげで、他の雑音は耳に入らない。ゴーティスはジェニーの胸だけを見据えて、矢をつかんでいた指をついに離す。
ところがまさにその瞬間、ゴーティスの左側からジェニーに矢が飛び、彼女が小さな叫び声をあげて体を地面の上に滑らせた。矢が彼女の体に当たったのか、かすめただけなのか、その瞬間に何があったのかは、わからない。彼女が地面に落ちていくのしか、見えなかった。そして、彼女が体を沈めた瞬間、ゴーティスは手に持った弓矢を放り投げ、馬から飛び降りた。
地面はゴーティスが踏みしめた足元から崩れるように滑ったが、ゴーティスは斜面を斜めに駆け降り、立ちはだかる木を寸前でよけ、地面をつかもうともがきながら山肌を落ちていくジェニーを必死に追った。ジェニーは斜面に抵抗しており、ゴーティスは彼女に追いつけないとは考えなかった。
ゴーティスは転びかけながら、彼女が上に向けて伸ばす腕に手を伸ばした。手は何度か空をつかみ、ジェニーの指がすぐそこにあるのに、彼女の手を掴めない。だが、絶対につかんでみせる……！

「ジェニー！」

ゴーティスの左足が斜面で滑り、臀部が地面にぶつかって、体が山肌を加速して落ちていった。そのおかげで、ゴーティスはやっとジェニーの手をつかむことに成功する。そして、彼女の体を巻き込むようにして自分の体の方に引っぱり、全てのものから彼女を保護しようと、その全身を腕の中に包んで固定した。ジェニーの生身の体が温かかった。その手触りがなつかしく、愛しかった。

ジェニーの無事に安堵したそのとき、ゴーティスは背中に衝撃を受け、二人は急斜面の上でようやく止まった。

背中はひどく痺れていた。自分のうめき声に混じり、遠くで自分を呼ぶ複数の声がゴーティスに聞こえてくる。

埃か土が顔にかかり、ゴーティスは数度咳き込んだ。すると、腕の中でジェニーが動き、力の萎えた彼の腕をそっと押すようにして、ゴーティスの前で身を起こした。

ゴーティスがなんとか片目を開くと、無傷のジェニーの顔がそこにあった。

……どうやら、彼女は無事らしい。

「ゴーティス王、どうして……？」

ゴーティスには答えられなかった。背中の痛みで口が開けられず、自分で、なぜ彼女を救おうとしたのかがわからなかったせいだ。

彼女は……無事だ。

ジェニーの瞳がまばたきするのを見て、ゴーティスの手足から力が抜ける。

もう一度目を閉じると、ジェニーの手がゴーティスの顔に触れ、鼻や口の脇にあった土を払いのけた。それから、頬にジェニーの長い髪がぱさりと落ちてくる。顔の上に、ジェニーの吐息がかかった。

「王、ご無事ですか！」

ライアンの声が近くですると、ジェニーの髪がゴーティスの頬からさっと離れた。斜面を降りてくる何人かの土を蹴る足音がし、

それを合図にしたように、ジェニーがゴーティスから離れる気配があった。男たちの声と地面を滑る音が次第に大きくなり、ゴーティスはジェニーが座っていた場所に手を伸ばし、目を細く開いた。しかし既に、彼女の姿はそこにない。

「女を捕らえろ！」

ライアンの命令がゴーティスの頭上に飛んだ。背中の痛みがうすれつつあり、ゴーティスが両目を開けると、正面に立っていたライアンがまた叫んだ。

「女は生け捕りにしろ！　男の方は罪人だ、殺せ！」

ゴーティスが身震いしてライアンの視線の先を見ると、小さくなっていくジェニーの向こうに誰かがいた。金髪の男だ。

顔までは見えないが、数年ぶりの再会となる、弟ケインに違いなかった。

ケインは右腕に傷を負っていた。ひどい傷ではなさそうだったが、服の上腕部が裂け、赤い血が布地ににじんでいる。左前方を行くケインを追いながら、ジェニーは彼の体に何本も矢がかすめるのを目にした。

近衛隊たちは、本気で彼を殺そうとしている。

山肌の斜面がさらに急角度になり、ジェニーたちは左上を走る主道に近づかざるをえなくなった。正面を見ると、木立が途切れ、そこだけ明るい光の当たる、開けた地がある。その地の向こうには青い空が見えた。ただ、そこには、ジェニーたちを護る盾となり、追っ手の視界をふさいでくれる木々がない。でも、そこに向かう以外に道がない。

ジェニーはケインを呼び、ケインの隣に寄った。ジェニーを生け捕りにするように命じられた彼らは、少なくとも、自分を瀕死の状態にさせるような攻撃はしないだろう。ジェニーの体はケインの盾となる。

それが効果的に働いたかどうか定かではないが、彼らは二人に矢

を放ってこなかった。

二人の男が先回りしていたが、なぜかジェニーたちに近づいてこなかった。ジェニーがその空地の端に沿ってケインと歩き、顔を上げると、彼らとは別の男たちが逆方向からも近づいてきていた。近衛兵四人だ。

ジェニーたちを見つけると、仲間の動向を気にかけながら、彼らと同様に弓を手にする。二人に逃げる余地を与えないように、だが、二人とは一定の距離を置いて、それぞれの足を止める。

隣を歩くケインの息が荒かった。ジェニーも疲れていたが、ケインの体が心配だった。

その彼の呼吸の合間に水流の音が混じるのを耳にし、ジェニーは、彼の体越しに右側をなにげなく見た。ケインのすぐ向こうは崖で、ジェニーから見えた空の下には、茶色く濁った川が音をなして流れていた。喉が急につまった。

二人にはもう、後がない。

ジェニーはそれをあらためて知った。

近衛兵たちと睨み合うように崖の前に立ったジェニーたちの前に、彼らに遅れること少し、数頭の馬に乗った男たちが現われた。先頭にいるのはライアンで、馬上から、氷のように冷たい目でジェニーを射抜く。狩猟の館での紳士な態度とは一変している。

彼は、ジェニーたちに容赦しない種類の男だろう。

ジェニーはケインを後ろ手にライアンを見返した。すると、ジェニーから目をそらしたライアンが訝しそうに眉をひそめ、次に、茫然としたように動きを止める。

彼の視線がケインに向いていると知り、ジェニーは不思議に思って、そっとケインに振り返った。ケインはぎこちない微笑を一瞬だけジェニーに見せたが、すぐに強いまなざしと変わって、正面に顔を向けた。ジェニーが前に振り返ると、ライアンの後方から、今度は髪を見せたゴーティス王が男たちの間を割って現れた。王自ら馬を操っているので、体に怪我や異常はなさそうだ。

彼がなぜ自分を助けたのかは、今もジェニーにはわからない。彼が自分を愛しているからだと甘い期待を持つほど、彼を信用してはいない。それどころか、彼という人をそこまでよく知らない。

それでも、ここで彼と対峙することになるだろうと、彼にさっき助けられたとき、ジェニーは予感していた。というより、期待していたのかもしれない。

王はちらりとジェニーに視線を走らせたが、彼の興味はむしろケインのようだった。ジェニーが初めて見るような、暗い怒りをこめた表情でずっとケインを睨みつけている。ケインもたぶん、王を睨み返している。王が何の命令も発しないため、ジェニーたちを取り囲む男たちも弓を構えた姿勢で動かない。

そんな状態が続くと、命の危機を感じる前にジェニーは混乱する。ケインは何者で、ケインとゴーティス王の間に何があるのだろう？

「……おまえとは二度と会わぬと思うておったが、五十二号」

やがて、王が低い声でそう切り出すと、背後のケインの体に力が入るのがジェニーにもわかった。

「私は五十二号なんて名じゃない。ケインという名があるんだ！」

ジェニーの前で近衛兵の何人かに動揺が見られた。とりわけ、ライアンの動揺が激しい。

「勝手に囚人番号をつけられて、それも、五十二という数字！　私があなたに何をした？　私が、母上の死に責任があるとでも言いたいのか！」

ゴーティスがジェニーに視線を投げ、それから唇を歪めて皮肉そうに笑った。

「おお、おまえは思うたほど頭が悪いわけではないらしい。その通りだ」

ケインがいきりたったように息を吐いた。

「母上に手を下したのは、王、あなたじゃないか！」

王が嘲笑した。

「俺が好き好んで殺したとでも？　……あの場合、断罪するほかなかろう！　忘れたか、おまえの母親は夫を殺したのだぞ？　あの女は、おまえに将来の道筋をつけるために大臣たちと密通し、実権を掌握し、おまえに家督を継がせる気のなかった夫を亡き者にした。おまえは、あの女の間近にいて何も気づかなかったのか？　――気づかなければ、おまえの無知、気づいておったなら、おまえの怠慢が、あの女をあそこまでの行動に駆り立てたのだ。おまえの父親がどれほど家を大事にしておったか……。その誇りを踏みにじったのは、他ならぬおまえであろう！」

「でも、自分の母親を手にかけるなんて！」

「そのおまえの甘さが事態を招いたのだ！　一度ならず、二度までもあの女の家につけこまれおって！」

――実の母親を殺した？

ケインと王の母親が……同じ？

二人は、兄弟……？

ジェニーは耳にした事実に衝撃を受け、体を大きく震わせて、王を見た。ケインに向けられていた彼の瞳がジェニーに素早く動く。哀しみを映し出していると思った彼の目は、ジェニーの予想に反して冷たいままで、彼の感情は、そこから読み取れない。

王がケインを見据えて、言う。

「……今回もまた女の背に隠れるのか、ケイン？　母親と、その姪ルイーズと、今はジェニーと」

王の顔に浮かんだ一瞬の哀しさを目にして、ジェニーは、一度は治まっていた胸のあえぎを再び聞いた。王は、射るような目でジェニーを睨んだ。

「なぜルイーズの名なんか？　彼女はあなたが好きだったじゃないか、よくそう話してたよ！」

「――おまえは、物事を知らなさすぎる！」

王が吐き捨てるように言い、ライアンの手から弓矢をむしり

取った。王の顔色が赤く変わっていた。

「そこをどけ、ジェニー！」ケインに狙いをつけながら、王が怒鳴った。「あのときにおまえを殺しておくべきだった！　こうなる前に――おまえが俺の元から全てを奪い去ってしまう前に、殺すべきだった！」

ジェニーは王を見上げ、ケインを庇って手を広げた。ケインがジェニーの肩に手を置いて名を囁いたが、ジェニーは譲ろうとしなかった。

「どけ、ジェニー！」

「いやよ！」

ジェニーが言い返すと、王の顔に驚愕が広がった。だがその直後、彼はうめき声をあげ、弓を持ち直してジェニーたち二人に向けて狙いをつけた。

ジェニーはその矢の先から目をそらさなかった。上げた両手もおろさなかった。恐怖はほとんどなかった。彼に命を奪われることが、不思議なくらいに自然に思えた。彼を見ると、ただ、温かな想いが胸全体に広がっていくだけだった。

王は怒りの形相で矢を二人に向けていたが、なかなか矢を放たず、やがて、短く叫んで馬から滑り降りた。ジェニーたちに歩み寄りながら、腰から彼の剣を勢いよく引き抜く。彼の後ろで、ライアンも馬上から飛び降りた。ケインがわずかに後ずさり、ジェニーは背後を気にして振り返る。

二人の前に来た王は、剣を両手で握り、二人を交互に見据えて言った。

「おまえたちが共にいる姿など、夢にも想像しなかった。俺の元からジェニーを奪うのは、さぞや気分がよいことだろう、ケイン？」

ケインがまた、わずかに後退した。

「ジェニーはあなたのものじゃない。それに、私のものでもな

い」

王が失笑した。

「おまえ、俺に説教するつもりか」

「そうじゃない」

ケインの穏やかな口調がかえって王を怒らせているようだ。彼はケインからジェニーに目を移し、いっそう怒ったように顔を歪めた。

「おお、では両名ともに覚悟はできておるということか。俺の目を騙し、欺いた罪を悔いてはおらぬと？」

王が剣を振り上げる前に、ジェニーの腰にケインが後ろから手をまわす。そして、ジェニーの耳の後ろから、ケインが言った。

「誰もあなたを欺いてなんかいない。全て――逆恨みじゃないか」

王が逆上して剣を振り上げ、ジェニーは今度こそ斬られる、と覚悟を決めた。だが、彼は急に驚愕した顔を作ると、一度上げた剣を宙で止めた。

「……ジェニー、おまえ……よもや、その腹の子は……？」

王の視線はジェニーがケインの腕に重ねた手で止まっていた。ジェニーの手の下でケインの腕がびくりと動き、ジェニーは茫然としている王の顔を見た。衝撃を受けたその顔を目にすると、ジェニーは身が切られる思いがした。王の誤解を知って即座に否定しようとしたが、ジェニーの口からは、言葉がひと言も出てきてくれない。

やがて、王が顔を上げた。

「……おのれ、ようもここまで愚弄しおって……」

王があらたな怒りに身を任せ、剣を握り直す。すると、力の抜けていたケインの腕に力がこめられ、ジェニーは彼に思い切り引き寄せられた。

ジェニーは背後から抱きしめられ、耳元でケインの囁き声を聞いた。

「きみを、死なせはしないから」

彼が後ろにさがっていったが、二人の背後にそんな余地はなかったはずだ。

「待って！　待って、ケイン――」

ジェニーが焦って正面の王を見ると、彼がジェニーの前で初めて、その顔に恐怖をたたえた。

「あ……」

ジェニーの足が地面を離れ、体が不安定になる。

ジェニーと王の視線が絡まり、彼が走り寄ってきた。ジェニーが自由のきく上半身を必死に起こして彼の差し伸べた手に手を伸ばそうとしたが、その前に、ジェニーの世界は青空にいきなり変わった。ジェニーの手は、後ろからケインの腕に引き戻された。

「いや――」

「ジェニー……！」

風が空を切る音が響き、ジェニーの髪が天に伸びていく。

「ゴーティス王……！」

王の声が風のごう音にかき消されて聞こえなくなると、ジェニーはついに王と離れるのだと知って、胸の真ん中に大きな亀裂が走ったように感じた。胸の奥をずっと騒がせていた声が、胸の内に収まりきらない。

ジェニーは胸が熱くなり、目が熱くなった。離れていく空に透明な滴がいくつか散らばり、それがゴーティス王の緑色の瞳に見えて、ジェニーは無我夢中で手を伸ばした。

ジェニーは彼の瞳を見失いたくなかった。彼を、失いたくなかった。ここで、離れたくなかった。

でも、届かない。彼の声はもう届かず、ジェニーの声も届かない。

丸い滴は遠くで光り続けるだけで、ジェニーがいくら手を伸ばして掴もうとしても、決してそこには届かなかった。

……あなたと、離れたくない！

「ゴーティス王……！」

ジェニーの流したいくつもの透明な滴は、やがて、ジェニーの視界を全て覆いつくしていった。

第一部（完）　第二部へ続く

第一部最終回　8．遠のく瞳－5（後書き）

長々と、第一部の最後までお付き合いいただき、どうもありがとうございました！！
お話は第二部に続きます。第二部で完結です。
ちょっと休憩してＧＷ明け頃に更新を再開しますので、またぜひともお立ち寄りくださいませ♪

第二部　1．出口のない森－1（前書き）

長らくお待たせしました、第二部のスタートです！（たぶん、待ってくださっていたと…笑）
お待ちくださっていた皆様、休憩中に激励コメントをくださった方々、本当にどうもありがとうございました。

この作品は、第二部で完結です。第一部より少しだけ、短くなる予定です～。
今後も、第一部のときと同様に、できるだけ週1ペースで更新していくつもりですので、気長におつきあいくださいませ♪
よろしくお願いします。

＊第二部は、第一部の最後でジェニーとケインが崖下に転落してから、若干（？）の時間が経過しています。

第二部　1．出口のない森ー1

今日もまた、真夏のような空の青さだ。

ゴーティスは執務室の窓から見える空を見上げ、四月にしては暖かすぎる空気に手を伸ばした。太陽の光は眩しかったが、その日差しはまだ、手にやわらかい。

この頃は、朝も、早い時間から明るくなる。この一週間ほどはずっと快晴の日が続いている。つい先日までの曖昧な曇り空がようやく影をひそめ、どうやら、長く寒い冬は完全に終わったようだ。

「あの……王？」

ゴーティスは室内にいるランス公に注意を返した。彼は外交担当の大臣だ。対応に困ったように、ゴーティスの様子をうかがっている。彼の申し出た提案にゴーティスが反応を見せないため、苦慮しているのだ。

（……この反応の鈍さで、俺からの色好い返事をあきらめればよいものを）

ゴーティスはランス公が根負けすることを期待していたが、彼は、困惑しつつもそれを撤回しそうな気配がない。部屋の隅にはサンジェルマンと女官長もいるが、二人は、ゴーティスにもランス公にも、口を添える気がないようだ。

「……静養など、俺に必要だとも思えぬが？」

「いえ、静養と申しますか――」ランス公が、自らの過ちを訂正するかのように慌てて言った。「その、この時期は、外出されるには良い季節ではありませんか？　たまには、あちらで狩りや野駆けにいそしむのも、よろしいのではないかと……。せっかくですから、この機に乗じて王妃様にヴィレールの田舎をご覧いただき、ラニス公ご一家との親睦も深めていただければと思いまして……」

ゴーティスはまた返事をしなかった。

臣下たちの気遣いが鬱陶しい。だが、それをむげに却下してしま

うのもあとあと面倒だ、とゴーティスはとっくに分かっている。分かっていながら、返事を先延ばししたいだけだ。ゴーティスが“ラニス公地”に過敏に反応すると知りながら、サンジェルマンと女官長が沈黙を守る姿もまた、彼の苛立ちをつのらせる。

亡き父親の一年の喪が明け、ラニス公として最初の春を迎えることとなったフィリップが、ゴーティスとその妃を彼の居城に招待していた。フィリップが、数年間に渡るゴーティスと彼ら一家の溝を埋めようと、ゴーティスとその新しい妻を彼らの地でもてなそうと起案したらしい。

人の和を好む、いかにもフィリップらしい考えだ。おそらく、それはゴーティスの妻にとっても歓迎される事だろう。ゴーティスにしてみても、フィリップの誘いをわざわざ拒む気はない。

ただ――その訪問地が、問題だ。

ランス公が、ラニス公地にまつわるゴーティスの事情をどこまで把握しているかは、わからない。

ケインの存在は頑なに伏せられ、ジェニーの逃亡に関する詳細は、近衛隊の間でも公言が固く禁じられている。

ゴーティスとカローニャの第二王女カサンドラが婚儀をあげたのは、半年ほど前だ。

一年ほど前にカローニャの第二王子が王位を継いだ折、彼らは再び、一度は同盟を断られたヴィレールに同盟を持ちかけた。良質な塩などの天然資源に恵まれた、豊かで広大な国は、ヴィレールにとって大きな魅力だった。塩は黄金の価値にも匹敵する。その上、ヴィレールを恐れるカローニャの王が提示した同盟条件は、ヴィレール側に有利なものだった。

同盟条件の一つには、二国間が親類関係になることが含まれていた。ごく一般的な条件だ。妃候補のカローニャの王女は十三と幼かったが、ゴーティスは、彼女が黒髪と青い瞳を持つと聞いて、その

同盟を最終的に承諾した。ゴーティスは、妃が美人か否かには関心を払わなかったが、妻となる女に対して譲れない、容姿上の絶対条件があった。第二王女の容姿は、彼にとって、魅力的だった。いやでも顔をつきあわせ、肌を合わせるべき女がジェニーの姿形と重なっては、毎日が耐えられない。

かくして、ヴィレールはカローニャの王女を得て、二国は同盟を結んだ。

妻カサンドラの顔を思い浮かべようとして、ゴーティスは、ジェニーが自分を見上げる顔をうっかり思い出してしまった。

普段は極力、忘れようとしている女の顔。王城の屋上で、彼女が涙をこらえ、微笑もうとする顔だ。まつ毛を濡らす涙も、口惜しそうに見上げる眼差しも、抵抗しながらも上向こうとする唇の形も、あのときゴーティスが見たままのジェニーの顔が、彼の前にはっきりと現れる。

ゴーティスは彼女の幻から目を背けるように、窓辺を見た。

あれからもう――二年近くも経過している。

ジェニーは、川やその近辺のどこを探しても発見されなかった。目撃者もいなかった。捜索はしばらく続けられたが、彼女の痕跡は何ひとつとして見つからなかった。彼女の着ていた服の一片さえ。

当時の彼女は身重で、川に落下した際の衝撃にすら耐えられなかったとしても、何の不思議もない。一連の捜索の結果、ジェニーは、増水した川の濁流にのまれ、死んだものと片付けられた。ケインも同様だ。

あのときと同じような澄みきった青空を眺めると、ジェニーが思い出される。

ジェニーを想うと、ゴーティスがひそかに胸に隠しておいた柔らかな魂が、少しずつ削り取られていくようだ。手でむしり取られるような瞬間的な痛みとは違い、薄片がそがれ、剥ぎ落とされるまで鋭い痛みが続く。涙は出ないが、どこかで、彼の分身がすすり泣く。

肉をそがれた胸の痛みと失った彼女への渇望で、ゴーティスはいても立ってもいられない。自分の弱さに面して激しい憤りと苛立ちが巻き起こり、呼吸がからめ取られていく。

その苦痛をどこかにぶつけようと、ゴーティスは昔のように戦に逃げ道を求めようとしたが、どうしても始められなかった。戦に没頭して日々をやり過ごせば、やり切れない虚しさが増していく。自らの高揚した血は鎮められるかもしれないが、その代償に、彼の治める国は混乱する。そしてそれは、もはやゴーティスの望むところではないのだ。それに、戦を続けたとしても、それでジェニーが彼の手に帰ってくることは、ない。

彼女が行方不明になって以降、実際の死体を目にしないことで、ゴーティスもしばらくはその生存に希望を抱いていた。引き続き捜索を行っていたサンジェルマンから、思わぬ朗報を受けられる日を待ちわびていた。けれど、その日はいつまでもたっても訪れず、数ヶ月が黙って過ぎた。そして、いつの頃からかゴーティスはあきらめ始め、ついには、その望みを捨てた。

希望を持ち続け、待ち続けることより、彼女をあきらめたほうがらくだ。同盟の話が舞い込んだのは、ちょうどその頃だった。

「……現ラニス公も、王にお会いしたいのではないでしょうか」

それまで無言を貫いていた女官長が、ランス公に控えめに加勢した。彼女は諸々の事情を把握しているはずだ。

「ええ、それはもう！」

ランス公が大げさに相槌を打ち、女官長に笑う。彼女が隣のサンジェルマンに一瞥を投げたが、彼は今もなお口を結び、黙ったままでいる。

ラニス公の名を聞くと、必然的に、その地で失ったジェニーの姿がゴーティスの脳裏に描かれる。ひとつひとつの情景があまりにもくっきりと鮮やかに、悪夢のようによみがえる。

地面に倒れたゴーティスが顔を上げたときの、あの無念さ。

彼女が消えた後、ゴーティスの面前に広がった、あの無情な青空。

ジェニーを思い出したくないからこそ、あの土地との接触をずっと避けていたというのに。

ゴーティスはまだ、ケインの腕の中から、助けを求めるかのように伸ばされた、ジェニーの腕を覚えている。彼女を失うと感じたあの恐怖は、ゴーティスから、その呼吸をいつでも奪う。崖から転落する彼女の手をつかもうとして、ライアンに背後から膝をつかまれて倒された足の痛みは、昨日のことのように覚えている。

目の前で彼女をさらわれた衝撃。それを阻止できなかった悔恨。彼女を道連れにしたケインへの憎悪が、日に日につのる。ジェニーの体が浮いた、あの一瞬に彼女の顔に浮かんだ表情は、ゴーティスを求めていたようにも見えた。

ゴーティスは、弟と共に自分を裏切ったジェニーを殺そうと、そこまで追い詰めたはずだ。二人を――ジェニーを、許せるはずがなかった。だが、彼女の足が地面から離れたあの瞬間、ゴーティスは、彼女が生きていてくれることを望んだ。彼女の命を狙いながら、彼女の死など願いもしていなかった己の心を知った。ゴーティスは、ジェニーを失いたくなかった。

そんな感情があいまって、あのときから――ゴーティスの胸は大きく引き裂かれたままだ。ジェニーを失ってから季節がいくつも過ぎているのに、彼女の残像は時とともにさらに鮮明となり、ゴーティスの苦痛は増していくばかりだ。

こういった感情は、時間が解決してくれるものではなかったのか――。

ゴーティスは何度も時の流れに逃れようとしているのに、今のところ、どうやっても逃げおおせない。

ゴーティスが窓から中庭を見下ろすと、中央にある木に近づくようにして、三人の女が歩く後ろ姿が見えた。真ん中にいる、すらりとした細身の若い女。豊かな黒髪を後ろで結い、その髪によく映え

る朱色のドレスを揺らし、両隣の女に守られるようにして歩んでいる。それが、ゴーティスの選んだ妃だ。

静養として提案された、ラニス公訪問の真の目的は、ゴーティスにもよくわかっている。王城とは異なる環境に身を置き、いつまでも不自然なまでによそよそしい、ゴーティスと妻の仲を深めさせようという魂胆だろう。これが一般の夫婦だったらそこまで問題視されないだろうが、国同士の政略結婚で夫婦となったとあれば、その関係は国の行く末を左右する。その事情がわかるだけに鬱陶しく、最後には同意すると知りながら、ゴーティスは返事を保留しているのだ。

ゴーティスは現実に対面するために振り返り、憔悴しきったランス公を見た。

「――よかろう。妃にもそう話しておけ」

ランス公が喜びに顔を輝かせる反面、サンジェルマンが顔を少し沈めるのがわかった。

「は！　それでは、早々に準備を整えさせます！」

意気揚々と、彼はゴーティスの前を去っていく。女官長とサンジェルマンが顔色を窺うようにゴーティスを見たが、ゴーティスは二人ともさがらせた。

ゴーティスが中庭を再び見ると、妻が中央付近で立ち止まり、二人の女と談笑していた。

ゴーティスの妻は、気弱で遠慮がちな、自分の意見などひとつも主張しそうにない少女だ。容姿も性格も、何もかもがジェニーと違う。だからこそ、彼女を妃として娶ったのだ。

ところが、彼女はジェニーとは対照的すぎて、その言動は逐一、ゴーティスにジェニーを思い起こさせる。どうにも皮肉で、やっかいな状況だ。妻といつまでも距離を置くのは、そのせいもあるだろう。

ゴーティスは、妻となったカサンドラには、何の情も持っていない。妻に対する思いやりで、ラニス公地での静養を決めたのではな

い。妻という立場の女が傍らにいる状況は息苦しく、いつまでも慣れはしない。けれども、表面的にでも、王妃を敬う姿勢を見せる必要がある。

ラニス公地に行けば様々な思いが交錯するかもしれないが、王城の日常から解放され、思わぬ気分転換になるかもしれない。

ゴーティスは、八方塞がりの現状を打破したかった。いつまでも過去に囚われている自分に、嫌気がさしていた。

◇　◇

ゴーティスの不安に反し、ラニス公地に踏み入っただけでは、ジェニーの面影が目に浮かぶきっかけにはならなかった。春を迎えた公地内は緑にあふれ、森や林の近くに湖や川が点在していて、散歩や狩りにこと欠かない。その環境にむしろ、ゴーティスは癒された。

ゴーティスとカサンドラがラニス公居城に到着した初日、フィリップこと現ラニス公と彼の妻、弟ジェラール、彼らの母、幼い妹たちが勢ぞろいして二人を迎えた。一人一人がとても礼儀正しく二人に挨拶し、二度目の再会となった王妃カサンドラを賛美する。おとなしい彼女も、温和な彼らには笑って接していた。そのカサンドラの姿は再びジェニーを彷彿とさせ、ゴーティスは、彼女から目を背けることを余儀なくされる。

歓迎の宴があった次の日の朝、ゴーティスたちは公地内の小城に向かった。新婚の夫妻がなるべく二人で過ごせるようにと、フィリップが独立した小城を用意していたのだ。フィリップの心憎い配慮といったところだろう。

小城は、室内だけでなく庭園も整備され、何不自由のないように人員が配置されていた。南向きに建てられた城の室内は明るく、女性好みに可愛らしく改装されている。ゴーティスにとっては室内の装飾など取るに足らないことだったが、カサンドラの様子から、どうやら彼女はここが気に入ったらしいことが見てとれた。彼女の母

国からついてきた侍女も、満足したようだ。

午前中の日がよく入る一室で、カサンドラが侍女と話をしている間、ゴーティスは長椅子に座って窓の外を眺めていた。さっさと野駆けに出かけたかったが、妻が、いかにも退屈そうな茶会を開くとかで、彼の外出は止められていた。初日くらいは妃の希望につきあうようにと、ゴーティスはサンジェルマンから苦言を呈されたばかりだった。

妻という存在は、なぜこんなに面倒なのだろう？

そして今夜は、二人の寝室はまるで新婚初夜のようにあつらえられているのが、容易に想像できる。元々がそれを意図する小旅行であったから仕方がないが、全く気乗りのしないゴーティスは、幼い妻の全身を眺めながら、さらに小さくため息をつく。

夕食は素晴らしく豪華で、美味な酒で満たされていた。地元の古酒はいい味だった。寝室に用意されていた寝酒も、甘く爽やかだった。

味覚の満足感と慢性的な欲求不満から、その夜、ゴーティスは妻を抱いた。相手は誰でもよかった。前夜の宴に同席していたフィリップの妻が寄せる、なめるような視線や、王妃付きの衛兵がカサンドラに向ける熱い視線を、ゴーティスは頭にぼんやりと思い描いていた。

ゴーティスの妻になるまでは生娘だったカサンドラは、女としての悦びにいまだ目覚めておらず、夫のなすがままに体を預けていた。彼女の両手は、しっかりと枕を握っている。ゴーティスの息づかいと寝具がこすれる音だけが、うつろに部屋に響いている。黄褐色の肌と時々不快そうに眉間に寄る皺、ぴったりと閉じられた彼女の瞳。ゴーティスは不意に苛立ちを感じ、体を起こした。

「……後ろを向け」

突然のことに彼女は驚いたようだったが、彼の意向に逆らうはずもなく、素直にその言葉に従う。棒のように真っ直ぐに伸びた彼女

の手足は、女性特有の丸みに欠けていて、長い髪がなければ少年のようだ。

（今から成長しようとする少女の体なのだ。仕方あるまい）

ゴーティスは自分をひとり納得させ、彼女の足を開かせると、その上にゆっくりと体を重ねる。

興ざめした自分の体を奮起させようと、ゴーティスは過去の愛人たちとの情事に思いをはせた。だが、愛人の存在を思いだせば当然、ジェニーの姿もよみがえる。彼女を思い出す時は毎回そうであるように、今度も愛憎の念をかきたてられる。ゴーティスの喉の奥がひきつった。

（喉が熱い、焼けそうだ……！）

喉の底から、あの日の濁流が轟音とともにゴーティスを襲い、大波にのみ込まれそうになって、必死に逃げる。だが、逃げても逃げても、濁流は追いかけてくる。ジェニーは見えない。ケインも見えない。ゴーティスはたった独り、濁流に足をとられ、叫び声をあげることさえできずに、川底に引きずりこまれる。

泥の味が口いっぱいに広がった。ゴーティスはもがきながら、何度も何度も水を吐き出すが、いくら吐き出してもそれは留まることをしらない。

ジェニーの自分への裏切りや彼女と通じた弟ケインに対する憎悪の深さより、彼女を永遠に失ったことへの激情があまりにも大きかった。彼女を失うまで、ジェニーへの想いの大きさを自覚していなかった。

後悔がほとばしって、ゴーティスは激痛にあえぐ。

それでもジェニーからすれば、憎い仇の手にかかって死ぬよりも、あの自然の水の中で息絶えた方が数倍幸せだったに違いない。彼女は、愛する男と一緒だったのだ。

ジェニーやケインの顔を思い出し、その場にいた自分の感情の起伏がよみがえってきた。恐怖、悲しみ、後悔の全てが一度に襲い掛かる。あまりに激しすぎて、ゴーティスは、それを受け切れない。

ゴーティスは激情のおもむくままに感情の波にのまれ、妻の中で一気に果てた。

次の日は早朝から激しい雨が降り続いていた。朝だというのに辺りは真っ暗で、この地域ではめずらしい強風が野山を吹きつけ、外出を企てていたゴーティスは出鼻をくじかれてしまった。

朝食室に行くと、ひと足先に起きていたカサンドラが侍女に茶を入れてもらっていた。部屋の前にはいつものように彼女付きの衛兵が立っていたが、ゴーティスの姿をみとめ、これまたいつものようにさりげなく、彼の視界から外れていく。その若い衛兵は、王妃に淡い恋心を抱いている。

部屋に入ってくる夫の姿をみとめると、カサンドラが笑顔になって嬉しそうに言った。

「まあ、王、もうお目覚めですか？　まだお疲れでしょう？　ゆっくりお休みになってらっしゃればよいのに」

何度となく自分に向けられたことのある、妻の恋する瞳。

ゴーティスはその視線が嫌いだ。純粋な恋心を差し出されるのは、ゴーティスには疎ましい。愛情を捧げられるのは御免だった。欲望に彩られた視線の方が、ずっとましだ。

カサンドラは、昨夜のことを思いのほか喜んでいるようだった。王妃の役目は世継ぎを産むことで、それも無理はない。彼女がゴーティスに嫁いで以来、数えるほどにしか夫婦関係のない状況下では、彼女の喜びもひとしおだろう。

その嬉々とした彼女の様子は傍目にも明らかで、勘のよい若い衛兵にも夫婦の間に起きた事情が伝わっているはずだ。衛兵は、部屋のすぐ外で室内の様子に聞き耳をたてているとみて間違いない。ゴーティスは意図的に、妻に優しい言葉をかけた。

「俺は平気だ。それより妃こそ、疲れておるのではないか？　ここへは休養に来たのだ、ゆっくり休むがよいぞ」

彼女はまた明るい顔で微笑んだ。それから、侍女に彼の分のお茶

を用意するように指示する。

ゴーティスが腰掛けた寝椅子の横に彼女を誘うと、彼女は恥ずかしそうな笑顔でやって来た。お茶を入れ終わった侍女は、気をきかせたのか、二人だけを部屋に残して退室した。

その夜、ゴーティスはまったく気が進まなかったのにも関わらず、昨夜に引き続いて妻を抱いた。行為の最中はひと言も口をきかずに、ただの動物的本能のつき動かすままに。雨で屋内に閉じ込められ、鬱憤がたまっていたせいだ。

第二部　1．出口のない森－2

父であるラニス公が一年半ほど前に突然亡くなり、その死を嘆き悲しむ暇もないうちに、フィリップはその爵位を継いだ。喪に服していた一年間はあっけないほどに早く過ぎ去り、それが明けたかと思うと、今度は、ヴィレールとカローニャの同盟成立という事態が彼を待ち受けていた。

同盟の成立、つまり、カローニャの王女とゴーティス王の婚儀から、半年となる。王夫妻との再会を一週間後に控え、フィリップは、二人を迎える準備の最終確認に余念がなかった。

二人の訪問に備え、一ヶ月前から、フィリップは二人を迎える準備に明け暮れている。王は以前ほど激昂する事態はあまりない、と聞いてはいたが、どんな些細なことが彼の気に障るかわからない。また、王妃にいたっては、今回が彼らの地への初の訪問となる。フィリップの熱が入るのも当然だ。

庭園を見ながらフィリップが考え事をしていると、黄緑の葉が目立つ垣根に沿って、妻ヴィヴィエンヌが一人で歩いてきた。ゆったりとした足取りで、微笑みを絶やさず、彼女は近づいてくる。朝にしてはやけに上機嫌な彼女の様子に、フィリップは、彼女が昨夜も友人たちと宴をしたのだろう、と想像をつけた。

王夫妻を迎える準備で皆が飛び回っているのに、この時期に宴を開くのはあまり感心できることではない。フィリップとしても賛同しがたいのだが、妻の相手をする時間のない彼は、彼女の行動に目をつぶることにしていた。それで妻が多少はめを外したとしても、退屈を嫌う彼女が多忙な皆の邪魔をしないのなら、その方が都合がよい。彼女の催す宴は少人数であり、使用人の手をそれほど煩わせはしない。

彼女が夫を見つけ、機嫌よさそうににっこりと笑った。フィリップも、反射的に妻に笑い返す。

「フィリップ様」
彼女が丁寧な呼び方をするときは、彼女に何らかの思惑がある。
彼女の笑顔を慎重に観察しながら、フィリップは彼女に返事をした。
「おはよう、ヴィヴィ」
彼女の頬に唇をつけながら、フィリップは、彼女がほんの少しだけ酒の匂いをまとわせていることに気づく。それが、昨夜からの酒か、朝の酒かを確かめる気は毛頭ないが。
「気持ちのよい朝ね。私、今日は朝から気分がいいの。ねえ、少し歩きませんこと？」
「ああ、そうしよう」
フィリップは彼女に腕を突き出した。彼女が、そこに自分の腕をからめる。

今日は朝から爽やかな陽気だった。最近は天気の崩れる日が少なくなり、晴れ間ののぞく確率が多い。この頃の天気のように、王夫妻の滞在が平穏に過ぎることを、フィリップは願わずにいられない。
「王をお迎えする準備は、順調？」
ヴィヴィエンヌが眩しそうに空を見上げた。
「そうだな。小城の庭の手入れが終われば、準備万端だ」
「そう。それはよかったわ」
彼女がにっこりと笑う。
フィリップは、彼が取り仕切っている準備に、妻が関心を払っているとは思っていない。彼女は、今のこのときまで、夫が進める準備作業について口にのぼらせたことはない。
しかしフィリップは、彼女が王夫妻の訪問を気にしていることは知っている。気にする、というより、彼女は、王と間近に接する機会を心待ちにしている。フィリップは口に出してこそ言わないが、彼女の関心が美しいゴーティス王一人に向いていることを、よくわかっているつもりだ。
子どもを二人産んでもなお、なまめかしい色気を放つ彼女を見て

いると、彼女がフィリップに笑いかけた。
「ところで――ご存知でいらっしゃいました？　あのモーリス、ほら、北の森の向こうにある農園の管理人モーリスのこと」
新しい玩具を手に入れた子どものように、彼女が意気揚々と言う。
「皆の噂を知っておりまして？　彼に、やっと再婚の兆しが見えてきたそうですわ。既に自宅に女を住まわせているとかで……。彼、前妻にはかなり苦しめられましたものね。もうそろそろ、彼も幸せになってもよい頃ですわ。ね、そう思いません？」
モーリスはフィリップが少年時代から所有している農園の管理人で、彼との交流は深い。それを知っている彼女は、フィリップからもっと詳しい情報を引きずりだしたいのだ。フィリップの背中に、一筋の汗が流れた。
なにも、こんなときに。
フィリップは、その話題にふれたくなかった。彼は、切り出された話題への衝撃と焦りをひた隠し、彼女の興味津々の瞳を見つめた。
「モーリスにそんなことが？　……知らなかったな。それが本当なら、喜ばしいことじゃないか」
フィリップは嘘をつくのが得意ではない。
その重い口調で、彼の妻は何かを感じたらしかった。ふっくらとした彼女の唇が不快そうに尖る。
「あら――いやだわ、フィリップ様ったらご存知だったのね？　モーリスのことなら、私だって知らない仲ではないのに。どうして教えてくださらなかったの？　そりゃあ、ええ、使用人のことだから……私がそこまで関心を持つわけではないけれど。だけど、そんなふうに、私に隠し立てをしなくても良いではありませんか」
「隠し立てとはひどい言い方だな。彼の個人的な事情なんて、今聞くまで本当に知らなかったよ。いくら交流があるといっても、私だって、彼の生活全てを把握してやしないよ」
彼はいつものように穏やかに微笑もうとした。だが、彼女は納得せず、顔をくもらせたままだ。

「本当に？　だって、よく彼の元へおいでになっていたじゃありませんか。だから、絶対にご存知だと思ったのに」
「……考えすぎだよ、きみは」
フィリップは妻をなだめるように笑い、庭園の端に目をやった。そうなの、と呟くように言った彼女が、フィリップに絡めた腕にぎゅっと力をこめる。
「じゃあ、フィリップ様？　今度、彼の館に訪問するとき、私も同行させてくださいな。彼とはしばらくお話をしていませんもの、ぜひ会いたいわ」
ほんの一瞬だがフィリップは考え込み、しかしすぐに、彼女に頷いた。
「そうだな。でも、しばらく行く予定はないから……彼が城に来たら、きみをぜひ呼ぶことにしよう」
すると、彼女がフィリップの手を離し、にっこりと大きく笑った。
「ええ……そうね。そうしてくださると嬉しいわ」
それから、彼女はフィリップにくるりと背を向けた。

◇　◇

王夫妻を迎えてから四日目の朝、弟や妻とともに二人の滞在する小城を訪ねたフィリップは、王妃の沈んだ顔にすぐに気づいた。フィリップたち訪問者にできるだけ愛想よく挨拶をしているつもりらしいが、頬に笑顔がのりきらない。もとより彼女はおとなしそうだが、何かの思いを心にため、我慢しているように見える。ゴーティス王が元気そうなのとは対照的だ。
フィリップの妻が王と嬉しそうにはしゃぐ姿を後にし、フィリップは、広間前の廊下にいたサンジェルマンを見つけて足を止めた。彼はフィリップの知らない黒髪の男と立ち話をしていたが、フィリップに気がつくと、静かに頭を下げた。
「サンジェルマン、少しいいか？」

フィリップが声をかけると、彼が近寄るより先に、サンジェルマンの方が早く歩み寄ってきた。少し心配そうに眉をひそめて。
「ラニス公、王のことで何か……？」
「いや。王には今そこでお会いしたが、お元気そうだった。こちらで、何か不自由はないか？」
「ああ、それでしたら」サンジェルマンが、表情を明るくさせて笑った。「ラニス公のご配慮のおかげで、王は何不自由なくお過ごしになっておりますよ。昨日も、北の森の手前まで馬で行かれたそうで――緑豊かなこの環境に満足なさっているご様子です。日頃のご公務から解放され、この滞在が良い気分転換になっておられるようですよ」
「そうか。それを聞いて、安心した」
フィリップは後ろを振り返り、そこから見えるはずもない王の姿を思い浮かべた。
「今日の狩りは東の森でしたね？　王も初日から楽しみにしておいででしたよ。今日は、ジェラール様の腕の見せ所ですね」
「ああ。今日は、ジェラールもめずらしく張り切っている」
サンジェルマンの笑みにあわせて、フィリップも笑う。だが、サンジェルマンのその笑みが不意に翳った。
「……どうされたのです、ラニス公？　何かほかに、気になることでもおありですか？」
サンジェルマンの瞳がフィリップの背後をさっと巡り、すぐさま彼に戻ってくる。王の様子を日頃から細かく観察しているだけあって、サンジェルマンは些細な変調を鋭く見抜く。フィリップは、口が堅く、人々の信用に厚い彼に視線を返した。
「あるといえば……あるな。たとえば、王妃様のご様子だが――」
フィリップが水を向けると、サンジェルマンは、大したことではない、というように軽く頷いた。
「少しお疲れになっている、と聞いております」
夫ゴーティス王と接することで疲れているのだろう、と口まで出

かかったのを飲み込み、フィリップは同意を示した。
「旅のお疲れが出たのかもしれないな。王妃様に何かご入用な物はないか？　私としても、我らが国を担っていく王妃様にはできるだけのことをしてさしあげたい」
サンジェルマンは数秒間だけ彼をじっと見たが、そのうち、柔和なその顔に微笑みを宿らせた。
「ラニス公には既に十分にして頂いているとは思いますが――そうですね、私からも王妃様に確認してみましょう。王妃様には、なるべく快適にお過ごしいただかなくては」

フィリップが王のいる場に戻ると、妻が王妃の隣に陣取り、何やら一方的に話しかけていた。妻がまた、くだらない噂話を延々と聞かせているのだ。王妃は彼女の剣幕にひるんでいるようだったが、あくまで行儀よく、話に付き合っている。
フィリップは妻をそこからつまみ出したい気分になったが、王妃が隣にいる王に関心を向けたくなさそうだと勘付いて、その考えを捨てた。皆の噂どおり、王夫妻の仲はぎくしゃくしているらしい。
王がフィリップとサンジェルマンに気づいて、眉を上げた。「いつでも出発できるぞ、フィリップ」
彼らの馬が用意され、護衛たちも近くで控えている。フィリップが下男たちに合図を送ると、数頭の馬が曳かれてきた。
「ねえ、あなた」
普段とは似ても似つかない甘えた声で妻に呼ばれ、フィリップは何ごとかと驚いて振り返った。彼女が、王妃の細い腕をその手に携え、いつになく可憐な笑顔でフィリップを見つめている。
「私たち、こちらで皆様の帰りをお待ちすることにしましたわ。狩りは、殿方だけでお楽しみくださいな。本当は私たちも森まで同行するつもりでしたけれど……王妃様とご一緒する機会なんて、めったにありませんもの。私たち女同士、ゆっくりと楽しませていただきますわ」

フィリップは二重に驚いて王妃を見、その後に王を思わず見た。王はフィリップと目を合わせはしたものの、何も反応せず、二人の女の方に視線を移す。

「それは――王妃様がそうお望みなら構わないだろうが……。ヴィヴィ、王妃様は王の勇姿をご覧になりたいのではないか？」

フィリップの横で、王が、くすっと小さく笑った。

「我が妃殿は、狩りなどという野蛮な行為をその目で見るのがお嫌らしい。旅の疲れも少々出ておるようで、今日は、公妃のご厚意に甘えさせてもらうそうだ。よかったな、妃殿？　女同士、男の俺とはできぬ話も存分にできよう。フィリップ、おまえの妻を、しばしの間借り受けるぞ」

フィリップの妻に代わって答えた王は、しかし、彼の名を呼びかけながらも、視線を彼の妻に向けていた。対する彼女は媚びた目で王を見上げ、まるで男を寝床に誘う娼婦のようだ。二人は視線を合わせ、微笑みを共有している。それが夫のいる前で図々しくも繰り広げられたことに、フィリップは、妻に怒るとともに気恥ずかしくなった。

（これだから、王夫妻を居城に滞在させることは避けたのだ。同じ屋根の下にいれば、妻は隙を見てきっと王に言い寄り、王は従兄弟の妻だからという理由だけで、その誘いを拒みはしない）

フィリップが王妃を見ると、彼女は両目を張り、不愉快な光景から目を逸らすように地面を見つめていた。十四かそこらの少女でも、彼らの間に交わされる視線の意味は分かるはずだ。分かっていながらその屈辱に耐える幼い妻は、他人の目から見ても哀れだ。

彼女は、フィリップの妻と行動を共にすることを望んでいるようでもなかった。ただ、理由はともかく、彼女は、夫の王と距離を置きたがっているように感じられた。

「……夕方の早いうちには帰ってくる。それまで、王妃様を頼んだぞ」

フィリップが仕方なく口を開くと、妻が満足そうに唇の両端を上

げた。
「もちろんですわ。心置きなく、狩りを楽しんでいらっしゃいませ」
妻を残していくことには不安だらけだ。だとしても、王妃本人が同意しているのだから、フィリップには口をつぐむしかない。
一行の前に連れてこられた馬に軽々と乗り、出発するぞ、と王がフィリップをけしかけた。その後方では、ジェラールも既に馬上の人物となっており、サンジェルマンも馬の鐙（あぶみ）に片足を掛けているところだった。
「行ってらっしゃいませ！」
王妃の隣で、妻が明るい声を張り上げた。とびっきりの笑顔をたたえているが、それはゴーティス王だけのために作られたものだ、とフィリップは一目で判断した。妻のあけすけな言動に、フィリップは落胆した。

「良い妻を持って幸せだな、フィリップ」
彼らを見送る妻たちに手を振り、馬を進め始めて、王が意味深な笑みを見せた。
「美しいことはもちろんだが……明るくて、気が利く」
王は機嫌がよさそうで、くすくすと笑っている。王の言葉がどこまで本気かは判断がつかなかったが、フィリップは王に曖昧に微笑んだ。妻の本性をわざわざ告げるために王の言葉を否定し、彼の機嫌を損ねる気はない。
「――のう、ジェラール、おまえも早う結婚したくなったであろう？」
「……え？」
ジェラールはサンジェルマンとのんびりとした会話を楽しんでいたらしく、突然に王の注目を浴び、フィリップの隣で身をすくめた。王がそれを見て、軽い笑い声をあげた。
「おまえは今年いくつになる？　たしか、俺より年上ではなかったか？　相手に困るのならば、俺がいつでも見つけてやるぞ」

王のからかい気味の口調に、心ない近衛兵たちの顔にかすかな嘲笑がのぼった。ジェラールが誰に対しても強気になれず、女性にも怖気づく性格なのは有名な事実だ。フィリップは、弟が王の発言にまた傷ついたのではないかと心配して、彼をそっとうかがった。

王がにやにやと笑いながら、さらに彼を揶揄する。

「どんな女がよい？　豊満な体を持った女が好みか？　それとも――」

「いいえ、結構です、私には相手が……！　あ……まだ結婚は……わ、わかりませんが……」

弟が王に反論したのは、フィリップが知る中ではこれが初めてだ。フィリップが驚愕してジェラールを見ると、めずらしく、ジェラールは気分を害した表情を前面に出している。彼がそんな反応を王に示すとは、フィリップは夢にも考えなかった。

そして、ジェラールに反撃された王は、唖然としていた。何かを思案するようにゆっくりと口を閉じ、ジェラールを目で探り始める。王の瞳がジェラールを捕らえるのを見ると、フィリップは底知れない恐怖を感じた。背中を、むずむずとした焦燥感が走り抜けていく。

「――おまえに恋人がいたとは」

少しして王が放った声に、フィリップは戦慄した。

別の話題をふって注意を転換することも、フィリップの頭をよぎった。しかし、王は話の腰を折られることをとても嫌う。そんなことを、できるはずもない。そして、ジェラールがいくら注意して王の追及をかわそうとしたところで、ジェラールの完敗は目に見えている。ジェラールは、王の追及にまともに対応できるほど、強くはない。

フィリップは、必要とあれば、王の質問をジェラールの代わりに全て受けて立つつもりでいた。無意識のうち、ジェラールは、王の欲しがる情報をやすやすと与えてしまう。王に答えることで、ジェラール当人も知らない事実を暴露してしまう可能性がある。

ジェラールは良くも悪くも純粋だ。それによって深く傷つくジェ

ラールを、フィリップは見たくない。
「……恋人、というか……」
消え入りそうなジェラールの呟きに、王が忍び笑いをする。
ところが、なぜか――王はジェラールに何の質問も浴びせなかった。フィリップが見たところ、ジェラールの恋に興味は失っていないようだったが、獲物を狙うときのように、王が目を輝かせることはない。
「では――せいぜい、その女を大事にすることだな」
王がちらりとフィリップを見て、含み笑いをした。その瞳は、フィリップのためにジェラールへの追及をあきらめた、と告げているかのようだった。
結局、それ以降、王はジェラールの恋の話については一言も言及しなかった。

第二部　1．出口のない森－3

小城にいると、気分がすさむ。

ゴーティスの苛立ちの元凶はカサンドラだ。王妃であり、彼の妻。王城にいれば日々に忙殺され、注意も散漫となれるのに、ここでは、ゴーティスはカサンドラに向き合わざるをえない。彼女は常に夫に従順だ。腹の中にたまった不安や不満を決して表さず、あくまで貞淑な妻として、ひたむきにそこにいる。夫が他の女と消えようが、冷淡な態度をとられようが、彼女は動じないふりをする。傷ついた心を抱えながら、そのくせ次の瞬間には、夫の翻意を期待して、彼女は潤んだ瞳を彼に向けるのだ。

（あんな目で見るならば、文句の一つでも言えばよい。ジェニーのように）

カサンドラの一挙手一投足がジェニーと対比され、妻への鬱陶しさがつのる。

ジェニーを彷彿させなかったら、彼女の存在はゴーティスにとって取るに足らないものだ。結婚など契約の一つなだけ、それ以上でもそれ以下でもない。けれども、未熟な少女であるカサンドラは、国同士の提携の上に成り立つ結婚に、情を交えようとする。ジェニーとは反対に、彼を恐れながらも、愛そうとする。

日を追うごとに、妻への煩わしさが、殺意にじわじわと形を変えていく。ゴーティスは平常心を保つのに必死だ。底なし沼の淵にたぐり寄せられている。沼につま先が触れてしまう日が迫っている。

ゴーティスは王城に早く帰りたかった。人込みの中で、彼女をその他大勢のうちの一人に変えてしまいたい。

（フィリップの妻のように、物欲と性欲を満たせばよいのなら、この結婚はもっとうまくいくだろうに）

この二日間、ゴーティスは妻とまともに顔を合わせていない。昨夜にいたっては、彼女の待つ寝室にも戻らなかった。

王城からは、ヴィスコンデールの街を遠くに望むことができる。山も森も川も一通りあるが、ここの景色や空気は、故郷のそれとはやはり異なっている。全てが新鮮だ。標高の高い山脈が視線の彼方にどっかりと腰をおろし、その山頂は万年雪をたたえている。森の木々は天につき抜けるように立ち、緑が果てしなく濃い。首都より北方に位置する土地のせいか、空気が澄んでいて、鋭い。

ゴーティスは馬を走らせながら、気分が次第に高揚していくのがわかった。

目指していた平原は、思いのほか、遠かった。一面にひろがる森の存在が、人々の距離感を奪っていたらしい。目的の平原に到達するには、この気味の悪い“北の森”を抜けて行くほかはない。

ゴーティスと護衛たちは、鬱蒼とした、暗い森の中に入った。ところが、いったん中に入ってみると、森は予想外に手入れがよく行き届いていた。木々は適宜に間引きされていて、馬車が通れるほどの道が確保されている。明るい日光は木々の間をすり抜け、地面にまで届いている。朝方の雨でぬかるんだ地面には、まだ新しい何頭かの蹄の跡が残っていた。森のうす気味悪い外観から予想されるほど、そこは人間を寄せつけない雰囲気ではない。

湿った風が耳にふれ、ゴーティスはふと、カサンドラ付きの衛兵の顔を思い出した。人見知りの彼女が心を許す、数少ない人間の一人だ。

今朝、ゴーティスが外出する際に妻のいるらしい部屋の前を通り過ぎると、その衛兵が一瞬だけ目を強め、ゴーティスを一瞥した。衛兵の目には悪意があった。ゴーティスが、衛兵にとっては主人である王妃を冷遇するのを快く思っていないのだろう。衛兵は、見た目だけでいえば王妃と同じくらいの年齢で、その若さゆえに感情の抑制がきかないらしい。

とはいえ、その衛兵はヴィレールの近衛兵であり、本来の主人は王であるゴーティスだ。気に染まぬからとの理由で主人を睨むなど、

どうやっても許される行為ではない。しかし、ゴーティスは文句も言わず、彼の前を素通りした。

（ジェラールといい、衛兵といい、恋にかまけていい身分ではないか）

二人の、熱にうなされたような視線を思うと、口の中にざらりとした苦味がかすかに混ざる。その種の視線が自分に注がれることを、ゴーティスはどれほどジェニーに求めていたことか。

ゴーティスは、恋する対象がこの世に存在する二人が羨ましかった。実体のない骸（むくろ）を心に抱き続け、過去に恋を置き去りにした彼自身とは大きな違いだ。

（あの女は……いつになったら、ここから去ってくれよう？）

恋というには重過ぎる、苦い古傷をかばうように、ゴーティスは片手で胸をゆっくりと押した。

頬にぶつかる湿り気のある外気は、彼の目に飛び込んでくる世界を、たちまち、違う風景にと変えていく。髪の中を抜けていく森の空気が、ゴーティスにあの忘れられない夏の日をよみがえらせる。ゴーティスは馬を煽って速度を上げ、方向転換をして、木立の中へ走り入った。

行く手にある景色が、彼女を追って山に入ったときの木立が、互いに溶け合っていく。くらくらと目眩がした。虚勢を張った心に、風穴が開く。幻影と現実のはざまに、体が吸い込まれていく。

ゴーティスは奥歯を噛んで、過去に必死で抵抗した。次から次へと頭に流入してくる想いに心を乱され、体が今にも破裂しそうだ。追ってくる護衛たちが口々に何かを叫んだが、馬の操縦に集中していなければ、ゴーティスは、すぐにでも発狂してしまうだろう。

ゴーティスは何も考えたくなかった。何も心に侵入させたくなかった。だが、何を見ても、何を感じても、全てがジェニーに結びついてしまう。

思い出さずにいるにはどうすればいい？

この苦痛を、どう乗り越えればいい？

ゴーティスが欲しいのは、確固とした答えだ。過去を切り離してくれる、救いの手だ。

運悪く、その日のゴーティスには、サンジェルマンもライアンも同行していなかった。ゴーティスが快適な日々を過ごしていると安心し、二人ともが揃って、別件でラニス公の居城に出かけていた。二人のうちのどちらかがいれば、ゴーティスの暴走を止められたのだが。

ゴーティスは、実際にはそこに在りはしない川を目指していた。追いすがる護衛たちの声が風の叫びに同化する。視界の先にある風が、幾重もの声となってゴーティスを呼び寄せる。ゴーティスは馬を駆り立てた。

もっと早く、もっと急げば、今度こそジェニーの手を逃さずにすむ。ライアンに地面に倒される前に、彼女の手を掴まなければ……。

「ああっ……わあああああっ……！」

突如、耳をつんざくほどの獣のような鳴き声が辺りに響き渡り、ゴーティスは我に返った。ゴーティスの見ていた山の斜面が風の中にかき消され、周囲の景色が急に迫ってくる。

ジェニーとケインを追う近衛兵の姿が、消えた。ゴーティスの全てが、この場の現実に戻っていく。あのときと違って、ゴーティスが今乗っている馬は黒い。木々の色も、空気の温度も、あの日とは別ものだ。崖の前に立つジェニーは、もういない。

ゴーティスが冷静に返って手綱を引くと、馬が停止したのと前後して、近衛兵が一人、息せききって隣に馬をつけた。

「王！」

男はゴーティスを見て、ほっとしたように白い歯を出して微笑んだ。ここ半年の間に彼の担当となった、新入りの護衛だ。現実が、ゴーティスに追いついた。

「ご無事ですか、王？」

胸の動悸はまだ安定しない。だが、知人に似た笑い方をする近衛兵を目にすると、ゴーティスの追い続けた過去の遺物たちが、遠くへ遠くへと流されながら、波間に消えていく。

「……無事だ」

幻から解き放たれ、小さな落胆を感じてはいたが、ゴーティスは胸をなでおろした。

そして、間髪入れず、また、野太い悲鳴がゴーティスの耳に届いた。今度ははっきりと聞き分けられる。

人間の男の声だ。

◇　◇

夜明け前まで降り続いていた小雨のせいで、朝一番の空気はしっとりと濡れていた。館の裏にある林は、辺りにたちこめる真っ白い靄に埋まって、その上にあるべき空との境界線が見えない。どんよりと重い空は、いつ再び雨を落とそうかと意地悪く笑っているようで、朝が訪れたというのに、すでに一日の終わりを告げる日の弱さだ。山や森と近接するこの地方は、一日のうちで何回も、天気が気まぐれに変わる。

モーリスは敷地内に留まっているマリーを案じ、せめて午前中だけでも天気がもってくれればよいが、と、好き勝手に動く灰色の暗雲をうらめしく眺めた。王夫妻のラニス公訪問に伴い、モーリスの農園では使用人たちの外出が規制されている。緊急な用件でなければ各自の家から離れないように、というラニス公直々のお達しだ。モーリスは使用人全員と、特にマリーに対しては厳しく、その命令を守るように言い含めてあった。

マリーは気立てがよく、皆を退屈させない娘だ。貴族の女にありがちな高慢さが微塵もない。ラニス公ことフィリップと彼の弟ジェラールは、両名とも、片田舎の貴族の末裔だという彼女に執心だ。人付き合いを敬遠したがるジェラールが、何かと些細な用事を見つ

けては、月に一度の割合でモーリスの農園にやって来る。彼がマリーを慕っていることは、その態度から一目瞭然だ。ただし、臆病な彼は、本人にその気持ちを伝えていない。

そして、彼の数倍以上に多忙なはずのフィリップは、弟を上回る頻度でモーリス宅に顔を見せる。その訪問の半分以上は彼女と会う目的といえるだろうが、弟と恋の火花を散らすような関係にあるかというと、それはモーリスにも断定できない。フィリップが彼女に接する態度には、敬愛が多分に込められている。

モーリスは、自分の娘ほどの年かさであるマリーを、とても可愛がっていた。

ヴィレール王夫妻の滞在もあと三日。ここまでの四日間は、一日が過ぎるたび、次の日はいつも前日より長く感じられていた。

別棟の戸口に立ったモーリスは、ついさっきドゥーヴルから預かったチェス盤を持ち直し、扉を押し開けた。焼けすぎたパンの香りが鼻につく。奥では、使用人の女たちが大笑いし、賑やかにしゃべっている。彼女たちも、以前とはすっかり様変わりして明るくなった。それもこれも、マリーが来たおかげだ。

モーリスが廊下をたどっていると、「おはようございます、旦那様」と、服の裾で両手を拭きつつ、使用人の女が出てきた。

「おはよう」

「今朝は肌寒いですわねえ。旦那様、マリー様をお探しですか？」

「ああ。いるかね？」

「マリー様でしたら、子馬の具合が良くないとかで、先ほど馬舎に行かれましたよ」

「おやおや、またか。彼女は、馬が本当に好きなのだね」

「ええ、ほんとに。乗馬もお得意なようですからねえ」

マリーの話題が出ると、誰もが嬉しそうに笑う。

「よかった、彼女はそれほど退屈していないのだな」

「ええ。カミーユ様もいらっしゃいますもの」

女が目を細め、階上へ続く階段の方に振り向いた。
「そうだな。では、私もカミーユと会ってくるとしようか」
女が満面の笑みでモーリスに言った。
「上にいらっしゃいますよ。外で遊べないジャンヌたちもカミーユ様に会いに来ています。後でお茶をお持ちいたしますわ、旦那様」
そう言って、丸い顔をさらに丸くして笑顔になると、彼女は奥へと戻っていった。
モーリスが階上へと向かう階段を数段のぼると、今度は子どもたちの騒ぐ甲高い声が聞こえてきた。ジャンヌの声もそれに混じっている。天気が悪いと、使用人の子どもたちは皆、この別棟の二階に集まるのが習慣化している。二階は、マリーが日常を過ごす部屋だ。
階段の半分を上がったところで、モーリスは階下から大声で呼ばれた。
「旦那様！　旦那様、こちらにおいでですか！」
聞き慣れた下男の声だ。彼がモーリスを呼びに来たということは、急な来客でもあったか、誰かが怪我でもしたか、どちらかだ。
モーリスは階上に行きかけた気持ちを戻して、仕方なく元来た道を戻る。玄関扉の前に、下男がそわそわと落ち着かない様子で立っていた。
「どうした？」
「お客人がお見えになっております、旦那様。初めてお会いする方ですが、ラニス公から緊急のご使者だそうで」
この時間帯にモーリス宅に到着するには、ラニス公居城を夜明け前に発つ必要がある。そして、ラニス公からの緊急の知らせは、これまでのモーリスの人生でたった一回きり、前ラニス公の訃報だけだ。
何か、一刻を争う変事があったのか。モーリスの胸が、意図せぬ衝撃で急に冷えた。
再び降り始めた雨の中、小さな平屋建てのドゥーヴル宅に着いた

モーリスは、体に付いた雨の雫を軒先で軽く払い落とすと、戸口を小さくたたいた。すると、扉の内側からは何の反応もなかったが、同じ壁面にある小さな四角形の窓に人の動く気配を感じた。誰かが、来訪者の彼の姿を確認しているのだ。

彼は戸を再度たたき、扉越しに自分の名を告げた。今度は、そこに人の吐息が感じられた。

「モーリスだ、ドゥーヴル。私一人だ。ここを開けてくれ」

もう一度言うと、躊躇するような一瞬の間の後、戸が細く内側に開けられ、中から彼のよく見知ったドゥーヴルの顔が現れた。モーリスを見て、彼が緊張を解く。

「旦那様……！」

彼に二の句をつがせず、モーリスは開けられた戸と壁の隙間をするりと通って、中に入った。そして、急いで後ろ手に戸を閉め、用心深く鍵をかける。それからやっと、息を潜めて彼を見ていた他の家族たちの視線にぶつかった。彼の妻、息子二人、娘二人、そして、マリー。マリーの無事な姿を確認するなり、モーリスは長い安堵の息を吐いた。

「一体何があったんです、モーリス様？」

事態を把握していないマリーが、彼を心配そうに気遣い、近づいてきた。ドゥーヴルの妻が水差しを手に、彼女の横に優しく寄り添っている。

「詳しく説明している時間はないが――」

モーリスは水をもらい、一息でそれを飲み干した。それまで気づいていなかったが、緊張のあまり、喉が干からびるほどに乾いていた。

「モーリス様、私の事で何か、ご面倒をおかけしているんですね？」

一同を代表してマリーがそう口にすると、彼は目をつぶって天井を仰いだ。

「モーリス様。どうか、何があったのかお話しください」

人の心にまっすぐに入ってくるような彼女の瞳に、モーリスはと

ても抗えない。ドゥーヴル家族も不安そうに、心配そうに事の行方を見守っている。モーリスはマリーの茶色の瞳に再び出会い、彼女が微笑むのを見てから、口を開いた。

「……理由ははっきりとはわからないが……マリーの身が狙われている」

一同に緊張が走った。

しかし、マリー本人がそれほど驚いていなかったように見えたのは、モーリスの気のせいだろうか？

「さっき、ラニス公の名を語る使者が来て、彼女を引き渡すように言われた。しかし、どうもおかしいところがあってね。用心のため、彼女の代わりに、マリアンヌを差し出したのだよ。彼らはなんら疑わず、マリアンヌを連れて帰っていった」

マリーが、困惑したように視線を揺らしている。

「取り急ぎ、ラニス公には知らせを走らせた。今日か、遅くとも明日中にはラニス公の使者が来られるだろう。だが、それまでの間は、我々だけで……彼女を危険から守らねばならない」

一同は黙って彼を見つめていた。彼自身と一同の緊張をほぐすため、彼はぎこちなく笑い、一人一人の顔を順番に見ていく。最後にマリーを見ると、彼女は怒りのような強い光を瞳に宿らせ、彼をまっすぐに見つめ返した。

「当分は、彼女には本宅に居てもらおうと思う。執事には、男たちを何人か配備させるように伝えてある。おまえたちも、他の者たちと共同で辺りに気を配っておいておくれ。いいね？」

「もちろんです、旦那様」

ドゥーヴルの妻が何度も首を縦に振る。その手は、マリーの手に力強く握られていた。マリーは青ざめてはいたが、あまり動揺してはいないようだ。

「モーリス様、あの、カミーユは今、どこに……？」

けれども、カミーユに話が及ぶと、マリーの顔は不安そうに変わる。モーリスは彼女に必要以上の動揺を引き起こさないよう、言葉

を慎重に選んで切り出した。

「彼女は……アントン家に一時期だけ預かってもらうようにした。マリー、心配なのはわかっているよ。しかし、カミーユが一緒では目立ってしまう、それはわかるだろう？　運のよいことに、相手は彼女の存在を知らない。アントン家にいれば、彼女はそこの一員だとみなされるだろう。この状況下では、きみとは別々に居た方が安全だ。私だってこの選択は辛いが……マリー、わかってくれるだろうね？」

マリーが納得して頷くまでに数十秒が過ぎた。彼女にとっては受け入れ難い、耐え難い選択だろうが、たぶん、他に良い方法はない。モーリスがここに来るまでにも、再三考えたのだ。彼女もそれを最後には理解したのだろう。

「カミーユを……お願いします、モーリス様」

モーリスは、彼女が泣きわめく種類の女でないことを感謝した。

第二部　1．出口のない森－4

落馬した近衛兵の顔は血だらけだった。馬で駆けるときに枝をよけきれず、顔面に直撃させたらしい。その上、落馬した際に足を骨折したらしく、男は大声をあげて痛がっていた。

戦場ではもっと醜い人間の有様を見てきたが、久しぶりに見る血は、ゴーティスの胃の奥をひきつらせた。胃に食物を入れてからは数時間がたっているのに、消化不良の固形物が逆流しそうだ。一度に多くの感情を交差させたせいで、胃も打撃を受け、弱ってしまったのか。手足の先端から疲労が抜けない。

森小屋が、ゴーティスの歩幅ほどの清流を流れに沿って歩いた先に建っていた。丸太で組まれた四角形の小さな小屋の前には、冬でもないのに薪が大量に積まれ、木の台に斧が放置されていた。小屋に向かって右手には、形ばかりの馬小屋がある。その手前には馬をつなぐ場所があり、栗毛と黒毛の馬が一頭ずつ繋がれていた。静かに水を飲んでいた二頭はゴーティスたちの姿をみとめ、甘えたように小さく鼻を鳴らす。

ゴーティスは馬留めの柱に体を傾け、水筒の水を飲んだ。乗馬しているときよりも格段に気分はよかったが、胃痛の波が定期的に彼を襲う。視界があやふやに揺れる。時間が、のろのろと過ぎる。

「森番は留守のようです」彼のもとに帰ってきた案内人が言った。「でも、小屋には入れます。どうぞ、こちらに」

ゴーティスは体を浮かし、男の後ろに続いた。一度何かに預けた体からは力が萎え、一歩踏み出すごと、体から気力が流れ落ちる。馬上の負傷した近衛兵は、少し前まで罵倒するように声をあげ続けていたが、今は呻き声しか漏れてこない。息づかいが荒くなっている。それを見ると、せっかく静まってきた不快な痛みが呼び戻されてしまいそうだ。

小屋の室内に入るなり、ゴーティスは最初に目についた椅子に重

い体を降ろした。椅子に腰掛けると、体の重量がさらに増したかのように、下に沈んでいく。

「すぐに休憩場所を用意しますので、少々お待ちを！」

護衛たちは、負傷した男を数人がかりで小屋に運び入れていた。まだ痛みの残る腹を押さえてゴーティスが顔を上げると、ちょうど対面で、案内人の男が壁面についた扉を勢いよく開けるところだった。扉の奥にはもう一つ部屋があるらしく、男の足の間から床が見える。

ところが、男はその部屋に入っていかなかった。扉を手で押さえ、頭をやや左に傾けて、動きを止めている。それから、今度は、開けたときとは逆に音をたてないように扉を静かに引いて、そっと閉めた。その行為は、ゴーティスの気を引いた。

「おまえ」

振り返った男は、ゴーティスに動揺を見せた。

「今のはなんだ？　その扉の奥に、何かあるのか？」

「え？　……いえ、ここは――」

ますます不審な反応だ。ゴーティスは立ち上がった。

「森番がおるのか？　そこは何だ？」

「あ、いえ、森番はおりません。この奥は彼の寝室になっておりまして。その……女が一人、眠っているのです」

「女が？　ここに一人でか？」

こんな森の中で女と出会うとはめずらしい。

昨夜ゴーティスの相手となった若い召使女は、カサンドラの侍女が今夜までに小城からたたき出してしまうだろう。そうなると、滞在期間の残り三日、ゴーティスが相手にできる女は誰もいなくなる。

「若い娘か？」

「眠っているのでよくは見ていませんが……若いようには見えました」

ゴーティスの食指が少し動いた。「そうか」

ゴーティスが腹痛も忘れ、一歩踏み出すと、男がなぜかほっとし

たように道を譲る。
「森番の妻ではないのか？」
「いいえ。彼は独身です」
案内人の男が答えた。といっても、この答えがゴーティスの行動に影響を与えることはない。彼にとっての女は、彼が気に入るか気に入らないかのどちらかの種類しかない。
ゴーティスは寝室への扉に手をかけようとしていた。もちろん、案内人の男には何の異存もないだろう。
「では、森番の女に挨拶でもしてこよう。森番が来たら、そう引き止めておけ」
「はい」
男の返事を聞き届ける前に、彼はもう扉の奥に消えていた。

◇　◇

ここ数日間、フィリップの毎日は緊張の連続だ。はてしなく、疲れている。ジェラールではないが、マリーの顔を見て、ほっと一息つきたい。
昨夜遅くに、近衛隊隊長から、「この人手不足の折、第三部隊にだけ単独行動を許可するのはどうかと思う」と愚痴めいた小言を言われた。隊長から苦言を呈されるのは、これが二度目だ。フィリップ自身、彼の特別対応が近衛の規律を乱しているのは、重々承知している。分かってはいるが、目先の利益だけを考え、あえて、その矛盾に見て見ぬふりをしているのだ。
その第三部隊が護衛するヴィヴィエンヌは、昨夜からへそを曲げていた。フィリップは彼女の子どもっぽさを可愛いと思うことが時々あるが、今回は、ほとほと呆れはてた。開いた口が塞がらないとは、こういうことを言うのだ。彼女が不機嫌なのは、昨日の晩餐の際、ゴーティス王が彼女ではなく、給仕の女に興味を示すのを見たことにある。王は、当然といえば当然のはずだが、ヴィヴィエンヌ

を誘うことはなかった。フィリップたちは、晩餐後に早々に帰された。もう少し残って、心ゆくまでお二人と語りたかった、とヴィヴィエンヌは殊勝なことを言っていたが、本心では、王に相手にされず、召使の女に負けたことが相当に口惜しかったらしい。

昼過ぎの今になっても彼女が姿を見せないのは、たぶん、叔母たちと未明まで宴を繰り広げ、憂さ晴らしをしたからだ。彼女の夫は、朝から晩まで王夫妻の護衛から彼らの遊興問題に気を配って、くたくたになっているというのに。

そこへきて、よりによってこの時期に、“ドゥーヴル問題”とは。使者の顔色を見れば、良い知らせでないことは想像がつく。

だが、不幸中の幸いだった。モーリスの身辺に興味を示しすぎる妻は、今も顔を見せない。頭痛の種である彼女の遊び癖も、たまには役に立つときもあるのだ。彼女に、モーリスの使者が来ていると知られずに済む。

「一体、何事だ？」

フィリップの声に疲れがにじむ。使者の男は素早く頭を下げた。

「は、お手間をとらせて申し訳ありません。モーリス様より急ぎの知らせを申し上げます！」

フィリップは彼の面を上げさせた。またもや、面倒を背負い込むのだ。普段は決してそんなことをしないが、疲れ過ぎて、椅子に横たえた体を起こす気もしない。

「一刻を争う事態でございます！　本日朝、ラニス公の名を語る使者三名が我が主人宅を訪問し、マリー様の御身を即日引き受ける旨を申しつけられました！」

「……何だって？」

思わず体を浮かせた彼に気づかず、使者は続けた。

「使者は近衛隊の制服を着用し、正規の紋章をつけていましたが、初めて拝見する面々でした。ただ早急にマリー様の身を引き渡すように要求されましたのを、主人が怪しみまして、マリー様ではなく、

身代わりの者を引き渡した次第にございます！」
何だって。
男が口上を言い終わったとき、フィリップはしばし茫然とした。
使者はもちろん、ふざけてはいない。
頭が混乱した。頭の中を、男の言葉がぐるぐると飛びまわる。
（近衛隊の紋章をつけた使者？　それがなぜ、私の名を語り……？）
思考がふと立ち止まり、フィリップは眉間を指でつまんで、独り言のようにつぶやいた。
「……私は……そのような使者など出していない」
たった一人の女を略奪しようと、仮にも王族の端くれである彼の名を語るなど、大胆不敵すぎる行為だ。卑劣すぎる。マリーの愛くるしい笑顔を踏み潰そうなど、誰が、何のために？
フィリップの頭が冷静になるにつれ、大きな怒りがぞくぞくと生まれてきた。
「私の名を語ろうとは……誰が、そのような大それたことを！」
「はい……！」
「ああ、モーリスの機転には何と助けられたことか！　では、少なくとも今はまだ、彼女は無事でいるということか！」
「はい。それでも、その偽者どもがいつ引き返してくるとも限りません」
フィリップは同意した。
「そのとおりだ。すぐにでも、彼女を別の安全な場所に移さねばなるまいな」
「はい。宅は使用人たちで護衛させておりますが、農夫である私どもは武器の扱いには慣れてはおりません。何卒、ラニス公の早急なご支援をお願いしたいのです！」
「当然だ、承知した。では、私の信用する近衛隊員を、おまえと一緒にモーリス宅に向かわせることにする。これはモーリスもよく知った屈強な衛兵たちだ。彼女を、リノンに一時的に移すとしよう。その後の場所は、今後あらためてモーリスに連絡する」

「はい、了解しました！」

使者をその場に待機させ、フィリップは近衛兵たちを呼び寄せて手短に要点だけを説明した。彼らはフィリップと一緒に複数回モーリス宅を訪問したことがあり、マリーの顔も知っている。使命を受け、近衛兵たちは使者と一緒に早々に旅立っていった。その後、別の側近を身近に呼びつけ、フィリップはリノン宛に使者を出す手はずを整えた。

全ては、フィリップの周囲の人々に疑いを持たせないうちに――とりわけ、ヴィヴィエンヌに気づかれないように心を砕いて――滞りなく、執り行われた。“ドゥーヴル問題”は、フィリップの計画が結実するその日まで、隠密に推し進めなければならない。

しかし、その“日”は、本当にやってくるのか。

その日がやってくることを、本当に望んでいるのだろうか？

フィリップは目を閉じながら、自分の頭の中に、弟ジェラールやマリー、そして妻の姿が、現れては消えるのにまかせた。マリーと最初に会った日、モーリス宅の厨房で、彼女が笑いながら自分に振り返ったときに受けた衝撃。ジェラールが誰の力も借りずに一人で彼女に話しかけたときの、楽しそうな顔。宴の席で、ゴーティス王をちらちらと盗み見ていた妻の横顔は、彼の中に強烈な記憶となって刻まれている。

淡い後悔が押し寄せてきて、フィリップは思わず目を開いた。

周囲に誠実でいようとし続けてきたフィリップは、何かが自分たち夫婦の歯車を狂わせ出したことに、少し前から気づいていた。それに目を留める直接のきっかけとなったのは、フィリップは、マリーの存在だと思っている。

マリーのことは好きだ。彼女に対して、好意的な感情を抱いていることは否めない。彼女といると、心が癒される。

けれども、それは決して恋愛感情ではない。周囲がどう思おうが、フィリップは、彼女と男女の関係に発展することなど望んではいな

い。彼女は、弟のためだけに取り置いているのだ。
――この一件には、妻が関わっている。
フィリップは自分を奮い立たせ、椅子から跳ね起きた。
フィリップに呼ばれた使用人が彼の前に現れた。うやうやしく頭を下げて彼の前に立つ男を見て、フィリップは舌先まで出かかった言葉を何度も飲み込んだ。自分の身から出た錆ともいえる、悔しさが消えない。自分のとる行動が正当だと承知していながら、彼は躊躇した。一度口にしてしまえば、取り返しがつかない。醜い嵐が吹き荒れるだろう。言いたくない。言わずにすめば、どんなにいいことか……。
なかなか指示を与えられないことで、男が不可解そうに頭を少し上げた。
「……近衛隊隊長を呼んでくれ」

◇　◇

森はいつまでも終わらない。
これが夢ならば、と仮定することはもはや無駄だ。彼女を窮地から助け出す救世主がどこかからふってわき、男たちを蹴散らしてくれる――。そんな有りもしない望みをかけることは、この際、意味がない。振り返れば、彼女が直面する今の恐怖が、息せききって追いかけてくる。恐ろしさに打ち震えて泣き出すほど、マリーの状況に余裕はない。
「速く！　もっと速く走って！　もっと急いで……！」
マリーの切実な訴えに応え、彼女を背に乗せた馬が森を疾走する。マリーは前かがみになって腰を浮かせ、狂ったように手綱をふり続ける。
彼女の馬は、とびきり足が速い。
マリーは素早く頭を後ろに向け、さっきよりは小さくなった追っ手の姿を確認した。追っ手は男二人だ。当初は三人だったが、この

大きな森に入ってすぐ、マリーが短剣で切りつけた際にその男は落馬し、それ以降、その姿を見ていない。

マリーは馬を操り、霧の隙間に現れた脇道にそれた。数メートル先の道が見えない。霧雨と霧が混ざり合い、白濁した空気がいっそう濃くなってマリーの視界をはばむ。既に、いや、最初から、自分の向かう方角はわからない。

視界が悪いせいで、過ぎ行く風景がどれも同じに見える。もしかしたら、同じ地帯をぐるぐるとまわっているだけかもしれない。恐怖と焦りが増す。道は森の出口に通じているのか、奥に向かっているのか。そんなことは知らないし、知らない以上、考えてみても仕方がない。

ここは、マリーも初めて足を踏み入れた場所だ。

深い森だった。少なくとも、マリーが入口に差し掛かったときには、そう見えた。直線距離では農園と近いのだが、その中間に大きな畑が広がるせいで、かなりの回り道をしてやっとたどり着く。乱暴で変わり者と評判の森番がいるそうで、農園の女たちは森に寄りつかない。マリーもそうだった。

濃霧に手を焼いているのか、追っ手の気配が遠のいていく。

どうして彼らに追われるのだろう？

何十回も自問いした質問だ。その答えは、マリーも、モーリスにも心当たりがない。

“必ず彼らを振り切って、ここに戻ってきます”

マリーが、今は追っ手となった男たちとモーリス宅を去るとき、彼と彼女自身の心に誓った言葉だ。

彼女を見送るモーリスの目に涙がにじんでいた。青緑色の制服に包まれた男たちは、モーリスの背中に刺々しい視線を投げていた。彼女を最も気にかけてくれたドゥーヴル夫妻が、執事や他の女たちに腕を押さえられ、泣き声をひそめてマリーを見つめていた。

玄関脇の花壇には、男たちに絶命させられた下男の死体がうつぶ

せに転がっていた。男たちが手を下したのは、下男一人だけではない。マリーやモーリスを守ろうと、農夫たち二人が彼らの剣の犠牲となった。マリーがモーリスの隙をついて、外に飛び出さなければ、犠牲者はもっと増えただろう。男たちが引き返してきたとき、一緒についていったはずのマリアンヌたちの姿はなかった。マリーの身代わりとして連行された彼女と付き添いの下男も、農夫たちと同じ運命をたどったはずだ。

人間の命を軽々しく扱うあの男たちに追いつかれれば、マリーの身などひとたまりもない。温情とは縁遠い男たちだ。怒り狂った彼らに手ひどい傷を負わされた後、むごたらしく殺されるに決まっている。その前に、男たちは彼女を陵辱するかもしれない。

死にたくない。

捕獲されたときをあれこれと想像すると、どうしても生き抜きたい、と切実に感じる。殺される理由さえわからないまま、こんなところで命を落としたくない。絶対、死にたくない。彼らから逃げ切り、館の前で見送ってくれた面々と笑顔の再会を果たしたい。

(私は、必ず生きて帰る……!)

それまで心の大部分を占めていた恐怖がうすれ、固い決意と逆転する。

マリーには、モーリス宅に戻るべき理由がある。

第二部　1．出口のない森－４（後書き）

メッセをくれた方々、どうもありがとうございます！
宛先がないので返信できてませんが、ちゃんと読んで、励ましてもらってますよー

第二部　1．出口のない森－5

急激な方向転換についてこられなかったのか、後ろに迫ってくるはずの蹄の音が聞こえない。

だが、マリーは後ろを振り返りはしなかった。その時間すら惜しみ、ただひたすら、霧の奥へと彼女の馬を走らせ続ける。

速く――もっと遠くへ！

木々はマリーの横を走り抜け、水滴をたわわに含んだ枝から大粒の滴がしたたり落ちる。小雨か霧かわからない濡れた空気で、マリーの髪はびしょ濡れになった。体全体が森の空気と同じくらいに冷えている。指先が硬くなりつつある。髪は冷たく、顔も冷えて強張ってきた。

マリーは白い霧のはれる場所を目で探しながら、額から流れる水滴を急いで拭った。周囲の景色に大きな変化はない。濡れた手で手綱を握り直そうとすると、曲げようとした指が心細く震えた。必死に意識をそらし続けている、恐怖のせいだ。その恐怖に加え、焦る気持ちが先走って、手綱がうまく握れない。

（いつになったらこの森を抜けられる……？）

思い通りに動かない自分の指にも苛立ち、マリーは手綱を握る手にぎゅっと力を込めた。彼女をあざ笑うかのように、手の下で手綱が滑る。

「どこに……どこに行けばいいの……！」

そのとき、どこからともなく、マリーの親指の付け根に大きな水滴が落ちてきた。不意に、マリーは体に鈍い衝撃を受け、胸の中央にぽっかりと大きな穴があいたような気になった。

（……なんだろう、この感覚）

馬の茶色のたてがみをふと見やると、なぜか急にお腹が重くなり、その違和感で、マリーは思わずお腹に手を添えた。お腹が手の下で熱を持ち始め、その温かさがじんわりと広がっていく。不思議な安

心感に包まれているのに、鼻の奥がつんとし、泣き出したくなる。
自分の気持ちに戸惑いながらも、マリーはやっと後ろを振り返った。視界はふさがっているが、やはり、追っ手の気配は感じられない。
マリーは顔を素早く拭い、目の上に垂れてくる水滴を指で払った。霧はあいかわらず、途切れてはくれない。本当なら上に見えるはずの空も、霧の彼方に埋もれている。いつまでも、マリーは自分が森の中をあてもなくさまよっているように感じた。
せめて、太陽だけでも上空から照らしてくれれば、向かう方角がわかるのに。
（でも、私を追うなんてなぜ……？）
同じ疑問がまた、ついて出た。
モーリスの農園でつましく暮らしてきた彼女が、誰かの恨みを買ったことがあっただろうか？
すぐには思いつかない。彼女は農園の外にはほとんど出ず、知り合いもいない。
それまで感じたことのない孤独感に襲われ、マリーの胸が切なさにしぼんだ。農園の人々はとてもよくしてくれるけれども、彼女の家族ではない。カミーユを除けば、マリーは家族も親戚もいない、天涯孤独の身だ。
マリーは正面を向き、白い霧に見え隠れする景色に目を凝らす。
（でも、もしかしたら――）
急に思いついた考えに、マリーは混乱した。
――もしかしたら、消えた過去に遡れば、追われる訳が見つかるのだろうか？
恐怖はほとんど失われていた。
マリーは、馬の速度を少しだけ落とした。背後から追いかけてくる音はなく、左右からも何も聞こえてこない。追っ手の男たちを振り切れた、とみなしていいのだろうか。

（なぜ私はまた追われてるんだろう？）

低くなる鼓動を気にかけながら、自分の内なる声に、マリーははっとした。

（“また”？　また、ってどういうこと？）

戸惑いに、胸がつまる。

マリーはまた、馬の歩みを遅くした。白い霧に、半分または一部、その姿を隠す木々が両側を流れていく。天に昇るように伸びていく真っ直ぐな幹。何かが、無遠慮に心に押し寄せてくる。不安定な闇に押され、息が詰まる。

（まただ。何だろう、この感覚？）

既視感？

でも、この森に来たのは、マリーは今日が初めてだ。

前方の木々が途絶え、雲のような霧が薄まって明るくなっている地点が見えてきた。ちょっとした広場がありそうだ。

それを目にすると、それまでの不安な気持ちが、とてつもない緊張感に成り代わった。それから、畏敬に近い温かな想いがマリーの全身にあふれ出してきた。なつかしくて、胸が膨らんで、心が騒ぎ出す。

馬の揺れに体を合わせきれず、マリーの体がふわりと浮いた。

急に不安定になった体を封じ込めようと、馬のたてがみにしがみついたマリーの顔に、大きな水滴がかかった。そのとき、それまで飛ぶように脇をすり抜けていただけの木々が、ゆっくりした動きをとって、マリーの目に飛び込んできた。どこかで、たしかに見た光景だ。木々が心に迫り、枝の先端についた、透き通った雨の滴がきらきらと光りながら、マリーの胸に降りかかってくる。

「あ……！」

意識が朦朧とした。

薄くなった霧の奥に、青い、真っ青な空が見えた気がした。

斜面に幾重にも続く木立、崖の下を流れる濁流、一斉に弓を構えた青い制服姿の近衛兵たち。

いつかどこかで目にした光景が順番に現れては失われ、そのたび、マリーの心臓は悲鳴を上げる。再び、マリーの鼻の頭に水滴がかかり、顔の前で細かな滴となって散らばった。前方を、抜けるような青空が占め、マリーはついに、実際に悲鳴をあげた。

（ああ、私は……！）

なつかしく、狂おしい痛みでマリーの体が宙で縛りあげられた。手を伸ばした先で、正面にいた緑色の瞳の男が、突然、消えてなくなる。彼の面する恐怖は、彼女の恐怖だ。その次の瞬間、彼女は生ぬるい水の中にいた。

“ジェニー！”

その男のあげた叫び声に、マリーの身が水中から一気に引き上げられる。

「ゴーティス王……！」

彼の姿を胸に描いただけで、体のあちこちから涙が静かに流れ出す。

空に、緑色の涙が舞った。

マリーは無我夢中で両腕を空に高く伸ばした。涙は空中で浮き、揺れている。雫を透した光が、彼女に笑いかけている。彼女を待っているのだ。あとほんの少しだけ、ほんのちょっと手を伸ばせば、指の先に触れる。もう少しでつかめる。あの瞳をこの腕に抱きしめられれば、何もかもが、今このときから救われる。

おぼろげな光が近づいてきた。霧の切れ間に揺れる光は、彼女に差し伸べられた彼の腕だ。それはいつでも、どんなときでも、彼女に温かい。

会いたかった。

ずっと会いたかった彼が、やって来る。

目が涙でにじみ、マリーは光に手をせいいっぱい伸ばした。彼女の手が、指の先が、彼の温もりに届く。それは優しくて、とても温

かい。

触れただけで、マリーの胸の中で彼への愛しさが弾けた。

はっとして飛び起きた彼女は、自分が、見知らぬ小さな部屋に寝かされていたのを知った。部屋に明かりは射さず、小さな窓からは濁った景色しかのぞけない。寝台から起き上がりざま、彼女は自分の全身が濡れていることに初めて気づいた。

「あの川に落ちて……！」

だが、彼女はそれが間違いだとすぐに訂正した。霧のたちこめる森で、逃走の末に追っ手をまいた、かすかな記憶が残っている。

男たちから逃れられたと知って、彼女は安堵し、ひそやかな息をつく。

隣の部屋には誰かいるらしく、床の上を歩く靴音が聞こえてきた。食べ物のような、油の混じった匂いが扉越しにもれてくる。人の存在、誰かがいるという安心感。何者かが、彼女を助けてくれたらしい。

彼女はあらためて安堵し、それとともにモーリスの館を思い出した。彼女に、温かい寝床と惜しみない愛情を与えてくれた家。自分とは違う名前で過ごした日々。記憶が入り混じることに少し戸惑いを覚えたが、試しに、彼女は自分の名前を呟いてみた。

「……ジェニー」

その名は唇に馴染む。耳で聞いてみても、違和感は残らない。そのことに、彼女はもっと安心する。

（……ここはどこ？）

冷えと疲労から来る眠気に耐えられず、彼女は再び温かい毛布の中へもぐりこんだ。目を閉じると、白い霧の中でさまよった時間が思い出される。

（ここはどこだろう？　私はなぜ追われたの？）

森の中で、ゴーティス王の悲痛な叫びを聞いたことを思い出す。森を駆け抜けた記憶は曖昧なのに、それだけが鮮烈だ。耳には今で

も彼の声が残っていて、胸に小さな棘がささっているように痛む。
あれからどれだけの時間が流れたのか、はっきりとはわからない。
でも、彼の手だと感じたのは、彼女を助け出してくれた別の誰かだったのだ。全ては、遠い昔に過ぎ去ったことなのだ。
彼女はあきらめ、眠気に誘われるままに目を深く閉じる。
（カミーユは？　ケインは、生きているんだろうか……）
扉の開く音が、ジェニーの頭の中に反響した。

森番の寝室は居間の半分にも満たない大きさだった。小さな窓が右側に一つあるだけの、暗い部屋だ。左側の壁面には三段の棚が造り付けてあり、乱雑に小物が放り出されていた。寝床の隣にある小さな台には、水の入った容器と赤いショールが無造作にかけられている。部屋の大部分を占める寝床の真ん中には、女が毛布を被り、ゴーティスの方に背を向けて寝ていた。長い髪は茶色っぽく見え、毛布の上であちこちの方向に乱れ飛んでいる。あまりに静かで動かないので、まるで死人のようだ。
女の間近に行くと、彼女の肩がわずかに上下しているのがわかった。長い髪が濡れ、ところどころで束になって固まっている。擦り切れた毛布の下からは女のうっすらと赤い唇がのぞき、ゴーティスは期待感で体を震わせた。
少女のような――いや、若い娘だ。
ゴーティスはほくそ笑み、彼女を覆う毛布に手を伸ばそうとした。が、髪で半分隠れた彼女の横顔をのぞき見ると、ゴーティスは伸ばしかけた手を不意に止めた。
薄く小さな唇の形に見覚えがある。
口から鼻につながる曲線を、ゴーティスはどこかで見た記憶があった。
（……誰だ？　一度ではない、何度となく――）
心当たりに思いをめぐらせ、すぐにたどり着いた答えに、ゴーテ

ィスは到底納得できなかった。強烈な驚きで、口がしばらくきけなかった。

（だが――よもや――今さら――）

頭に浮かぶのは否定ばかりだ。否定したがる一方で、呼吸が熱を帯び、ゴーティスを激しく急きたてる。

ゴーティスは寝台横の床に膝を落とし、人差し指の腹を女の口元にかざした。女の息吹が、彼の震える指を温かく湿らせる。

彼女は、生きている。

ゴーティスは寝台に手をつき、崩れそうになる体をどうにか保った。

彼女は生きている……！

あの日以降、繰り返し見た夢の中で、ゴーティスは落ちていく女の手を何度も掴みそこねている。そのたびに後悔し、自分を責め、ケインを呪った。

彼女が、今再び、ゴーティスの前にいる。

一度彼女に触れたら、塵と化してしまうかもしれない。彼女が目を開けたら、このはかない夢も終わってしまうのかもしれない。

彼女を二度までも失うのは怖かった。音をたてて張り裂ける胸の痛みを、二度も経験できるとは思えなかった。彼の本能は答えを確信しているのに、間違いと分かったときの落胆に怖気づいて、彼女の顔にかかる髪を払いのけられない。

たった二年で、自分はこんなにも臆病だ。

面前に横たわる彼女をじっくりと見て、ゴーティスは細いため息をもらす。

彼女の細い肩が小さく上下に揺れていた。ゴーティスは自分の手のひらを見つめ、それを握り締めた。爪が手のひらにくいこみ、色が白く変わる。これは、夢ではない。

手のひらに血が通っていくのを見ながら、ゴーティスは萎えた勇気を奮い起こした。そう、今度こそ、それが今目の前にあるのなら――今、彼女の手を掴むべきなのだ。

意を決し、ゴーティスは女の濡れた髪を指で払った。青白い横顔がゴーティスの手の下から現れると、室内中の空気が、一度に、彼にわっと押し寄せてきた。

誰が、彼女は死んだと言ったのか……！

ほとばしる熱気に目がくらみ、組んだ両手の上で、ゴーティスは自分の感情に飛ばされないよう、必死に耐えた。

質素な森小屋が後宮の一室に姿を変える。二年前の日々が彼の瞳に駆け上ってくる。毎日の務めが終わった深夜、寝台で健やかに眠る彼女を、ゴーティスは飽きることなく眺めていた。何もせず、ただ見つめているだけで、心は平安だった。伽の対象なだけではない女が存在することを、ゴーティスに気づかせた女だ。彼女のことを、片時も忘れたことはない。

生きることに貪欲な彼女が、そうそう簡単に死ぬものか……！

王ゴーティスにたてつく女が、そうもたやすく死ぬものか！

「ジェニー……！」

外に飛び出していって、大声で宣言してまわりたいぐらいだ。ジェニーは死んでなどいない、と。

ジェニーは以前より少し日に焼け、顔の肉が落ちていた。身に着ける服は質素なものだが、彼女に変わりはない。顔色は悪いが、ジェニーは生きている。ちゃんと生きているのだ。

ゴーティスはジェニーの寝顔を見た。よく眠っている。以前と同じように、唇を少し開いて、静かに眠っている。ジェニーが、生きている。

（二年も俺を放置したこの女を、どうしてくれよう……！）

その頬に触れようとゴーティスが手を伸ばすと、彼女の体が震えた。が、それは彼女が震えていたのでなく、ゴーティスが感極まって震えているだけだった。

彼女との再会に感動し、ゴーティスの手足の端々までが痺れ、歓喜にむせび泣いていた。辛い現実に降伏し、彼女を一度はあきらめたことを、ゴーティスは、心の中で彼女に懺悔した。

目の前に、白くぼんやりした物が見えた。白くて、華やかな何かだ。だが、至近距離にありすぎて、目の焦点に合わない。

ジェニーが目を凝らして確認しようとすると、その白い物体がさっと取り払われ、代わりに、温かな柔らかい何かが口と顎を覆った。咄嗟のことで驚いたが、唇に押し付けられた感触から、ジェニーはそれが人間の手だと答えを出した。

戸惑うジェニーの耳に、息に似た男の声が早口で囁く。「騒ぐな」

そうは言われても、男の手で口を塞がれたと知って、ジェニーは一気に目が覚める。うす暗い室内に男の不鮮明な影が浮かびあがり、ジェニーは恐怖でひるんだ。男の手をつかみ、慌てて体を起こそうとする。

「騒ぐな」

声が近づいて再び命令し、ジェニーの肩が押さえつけられた。ジェニーは焦り、必死でそれを取ろうともがいた。

「う……う……！」

「騒ぐでない！」

男の息が顔にあたり、ジェニーは体を揺らして抵抗するのをやめた。男の独特な口調と懐かしい響きに、体の内側から純粋な驚きが生まれてくる。

（この声！　でも、まさか……？）

まだ夢の途中かもしれない、とジェニーが混乱していると、小屋全体に響き渡るほどの怒鳴り声が彼女を現世へと呼び覚ました。

「森番！　森番、早く開けろ！　おまえが中にいるのはわかっておるぞ、さっさとここを開けろ！」

追っ手だ！

ジェニーは男への抵抗を再び試みようと体を起こそうとして、目の前の人物がくるりと頭を揺らす様にぶつかった。

（――これはまだ……夢の続き……？）

ジェニーは絶句し、息をするのも忘れて、自分を振り返った男の光る瞳を見つめた。

また会えるとは思わなかった。

もう二度と、会うことはないと思っていた。

ジェニーは、彼の手が自分の顔に触れているとあらためて知ると、その手にまた会えたことに感動して、胸がつまった。彼の瞳に自分が映っているのをみとめると、嘘のような再会が現実に今起きているのだと思い知らされて、泣きたくなった。約二年前、青空の下でジェニーが永遠に失ったと感じた、緑色に輝く瞳だ。ゴーティス王だ。その二つの瞳が今、ジェニーを真上から見返している。

「う……」

ジェニーが呻くと、彼は、彼女の口を塞いでいた手をわずかに浮かせた。その手の温かさは、以前とまったく変わりない。

肩まで届いていた彼の髪が、耳が見える短さとなっていた。直毛だとばかり思っていた髪が、ゆるやかにうねって顔の輪郭を覆っている。険しい形相はあいかわらずだが、以前よりずっと、精悍で男らしい印象だ。なつかしさと愛しさに、ジェニーの胸が甘く泣く。

ジェニーが二年ぶりに再会した王を見つめ続けていると、彼が、やや怪訝そうに眉をひそめた。親愛を含んだ眼差しを期待していたわけではないが、彼の瞳には、ジェニーへの情も怒りもない。醒めた目だった。

大声が再び乱暴に繰り返された。

「開けぬのなら、この扉を蹴破るぞ！　我らはラニス公の使者である！　ある女を捜しているのだ、匿うと承知せぬぞ！」

ジェニーは凍りついた。

やはり、追っ手だ。

こんなところにまで追ってくるなんて！

森を駆け抜けていたときの恐怖が戻ってきて、ジェニーは喉をつまらせる。

ジェニーに再び振り返った王が、彼女をじろじろと見た。商品を

値踏みするかのような、ぶしつけな見方だ。彼はまだ、言葉を発しようとしない。

ジェニーが身じろぎもせずにいると、戸口の向こう側から、くぐもった男の囁きが聞こえてきた。

「王。お聞きですか、王？　ラニス公の使者とのことですが、どうされます？　相手は近衛兵のようですが？」

ジェニーの心拍数がいっそう上がる。王が扉の方に目をそらした。しんと静まりかえる室内で、王の手をつかむジェニーの手が勝手に小刻みに震え始めた。ジェニーはそれを止められない。彼の視線が、ちらりとそこに流れた。あいかわらずの冷たい目だ。

彼の冷たい瞳を見ているうち、ジェニーは愕然とした。

（――まさか、ラニス公からの偽の使者は、王が放った刺客では……！）

あらたな恐怖で、ジェニーは彼を直視できない。

（ああ、まだ、まだ死にたくない……！）

ジェニーが王の手の中で苦痛の息をもらすと、肩から彼の手が離れ、扉の方に声が投げかけられた。

「戸を開けてやれ」

引き渡される――。

ジェニーは観念して目を閉じた。男たちが、乱暴に小屋に押し入り、床を踏み鳴らして歩く音がジェニーの耳にもはっきりと届いた。

「声をたてるな」と王が耳元で囁いたような気がした。

第二部　1．出口のない森－6

男たちの足音が突如、ぱったりと止んだ。

『や、これは、王城近衛隊の皆様でしたか……！　ご無礼をお許しください、てっきり、ここの森番がいるものと思い――』

『いやいや、かまわん。私たちも負傷者を抱え、仕方なく、留守宅に勝手に入ったのだ。今ちょうど、この者の手当てをしていたところでな』

『それは災難でございました。怪我の具合はいかほどです？　本城にまで行けば、良い医師がいるのですが』

『おお、それは何よりだ。応急処置が済んだらこの者を連れ帰るゆえ、その際、その医師の助けをお借りしたい』

『ははっ！』

王はジェニーの存在を男たちに表明しなかった。

会話の成り行きから、王と男たちが無関係らしいと感じ、ジェニーはうっすらと目を開いた。王の顎が間近にあり、すべすべとした肌がジェニーの目に入ってくる。彼は微動だにせずに扉の方向に顔を向け、隣室の様子をうかがっていた。彼の保つ緊張が、きつく結ばれた唇から伝わってくる。

その唇に手を触れたら、彼はどうするだろう？

恐怖が弱まった分、彼の身近さを意識して、ジェニーの胸が熱く高鳴る。

『ところで、そちらは人捜しとか？』

ジェニーの動揺を読んだように、王が彼女を一瞥した。醒めた目だ。彼の視線が、ジェニーの心に冷たく染み入り、突き刺さる。

彼はジェニーの目に恐怖を見ただろうに、何の反応も見せなかった。彼は、隣室での展開を注意深く聞き入るつもりのようだった。彼の無関心に面し、ジェニーは傷ついた。

『女を捜していると言ったが、尋常ではなかったぞ。どのような女

を捜しているのだ?』

『は……。そのような……』

近衛兵の問いに、ジェニーを追ってきた者の気後れしたような対応が続く。言葉尻が小さく消え入り、最後の方はよく聞こえなかった。

男たちは何を答えているのだろう?

ジェニーが不安になってつい王を見上げると、彼も顔を動かし、彼の手の下で息をひそめるジェニーを見た。ジェニーははっとして息を止め、彼を見返した。気のせいかもしれないが、彼の瞳に熱が戻っているように見える。

彼に見つめられたのは、どれぐらいぶりだろう? いつもこんな目をしていただろうか?

ジェニーの鼓動が早まる。

それから、ジェニーの瞳に見入るようにして、王の顔がゆっくりと降りてきた。間近で緑色の煌きがまたたくと、彼の指に触れたジェニーの唇に熱が集まり始める。彼の指なのか、ジェニーの唇なのか、彼の手と触れた唇の面で鼓動が熱く波打っている。

王はまだ何も言おうとしない。

彼はなおもジェニーを見つめ続けている。心なしか、視線がやわらかく変化したようだ。彼の瞳が放つ光の中で、気が遠のきそうだ。彼がまつげを閉じて瞬きすると、ジェニーもそのたびに目を閉じ、彼の唇が降りてくるのを待ちたくなる。これで、もし彼がはにかむように笑ってくれたら、ジェニーは、嬉しくて泣いてしまうかもしれない。

ジェニーの耳は隣室に張り付いていたが、瞳は正面にいる王から離れられなかった。

『おお、心配されるな、我らが秘密を漏らすようなことはないぞ。所属は違うが、同じ王家の近衛同士ではないか。近衛隊がそこまで血相を変えて捜すぐらいだ、その女は何か重大な問題を引き起こしたのだろう?』

『は。まあ……その、我々の捜している女は、性悪な娼婦でございます。名はマリーと申しまして』

王の顔がジェニーからふいと離れ、その目が疑いを帯びて、ジェニーに注がれた。

――人違いか、勘違いか、何かの間違いだ！

彼に、自分が娼婦だと誤解されたくない。娼婦と誤解されるような行動さえ、ジェニーはとったことがない。

ジェニーは衝撃を受け、必死に首を振って彼に否定した。だが結局、彼が次に視線をそらすまで、その瞳から疑惑は消えなかった。

『なに、娼婦？　娼婦ごときを貴殿たちが追うなど、その女はよほどの悪事を働いたのであろうな』

『え、ええ。いや……その、こちらにいないのなら、よいのです。私たちは先を急ぎますので――』

男たちが去ろうとしている。

ジェニーは少しだけほっとし、堪えていた息を吐いた。

（早く、早くどこかに行って……！）

祈るような気持ちで、ジェニーは王の体越しに隣室に続く扉をのぞいた。

――ガラン！

いきなり、固い物が落下したような衝撃音がジェニーの耳元で鋭く響いた。王もジェニーもはっとして、おそらくは隣室の者たちも、音のした方向に注意を引きつけられた。

沈黙を守るべき状況下では、主張しすぎる音量だ。ジェニーはその瞬間、何が起こったのか、すぐにはよくわからなかった。ジェニーが唖然として王を仰ぎ見ると、彼は下方を見ていた顔を上げ、呆れたような眼差しをジェニーに返した。ジェニー、と彼の唇が恨めしそうに動いたが、声はない。

力の抜けた王の手の下で、ジェニーは顔を右に傾け、おそるおそる寝台脇の床を見下ろした。水の入った容器が転がり落ち、床と王

の膝を濡らしている。ジェニーが王を再び見上げると、彼は、苛立った面持ちで、ジェニーの口を手のひらでしっかりと押さえた。ジェニーは、自分のひじが、寝台脇の台にあった容器を押し出してしまったのだと、そのときになってようやく知った。

耐え難い沈黙の後、隣室で人が動く気配があった。

『他にも、どなたかいらっしゃるので？』

『いや、あちらには……』

『まさか、とは存じますが、どなたかを匿っておられませんでしょうな？　いくら王の近衛だとて、我々の追う女を、そちらの都合で勝手に匿うことは許されませんぞ？』

『何だと？　王城近衛兵の我らを疑う気か？』

性急な靴音がジェニーたちのいる寝室に向かってくる。

ああ、万事休す――。

すると突然、ジェニーの口から王の手がするりと消えた。王の背中が扉に向かっていくのを目にし、ジェニーはさらに驚いた。

『ラニス公の使者ども。おまえたちの要望どおり、出てきてやったぞ。そやつが匿っていたのは、この俺だ』

『王！』

ジェニーは我に帰り、王の背中が消えた扉の前に素早く駆け寄った。隣室の会話はつつぬけだったが、ともかく、耳を扉に押し当てた。

『こっ、こっ、これは、ご無礼を！　王がおられるなぞ露知らず……！　どうか、どうかお許しを！』

『お、お許し下さいませっ！』

『おまえたちの話は聞いた。娼婦を捜しておるとか？』

『は、ははっ！』

『娼婦となれば、当然に女の手管を使い、悪事を働いたのであろうな。その女は何をした？』

『ははっ。しかし、なにぶん、娼婦のした事ですゆえ、詳細につい

ては大変申し上げにくく……』

『そうであろうな。だが、言うてもらおう。俺の安全が脅かされた上に、近衛隊を動かしてまで捜索せねばならぬ状況とあれば、それ相当な悪事が行われたに他ならぬ。王族の安全を危ぶめたのなら、俺だとて把握しておく必要がある。そうは思わぬか、ラニス公の使者殿？』

その返答が、ジェニーが追われた理由だ。

不気味な沈黙があとに続き、ジェニーは息を殺して耳をすました。

『おまえたち、王に返答いたせ！』

王の近衛兵が怒鳴ったが、相手は無言だった。冷えた素足が床の上で震え、ジェニーはすとんと床に膝をつく。ジェニーは耳を扉に密着させるように、ぴったりと押し付けた。扉一枚を隔てた向こう側で、誰かが床をきしませて歩いている。

『なるほど、答えられぬか』

足音が止まった。

『ふん……。まあ、残念だが、それも仕方あるまい』

『王？　されど、この者たちは無礼極まりない――』

『構わぬ。この者たちには、主人の命を明かせぬ、正当な理由と真っ当な忠誠心があるのであろう』

『おお、王！　なんという慈悲深きお言葉！　恐れ入ります、ありがたきことにございます！』

『王、しかし、それでは……』

困惑が男の声ににじみ出ている。ジェニーは、王が彼らを許そうとしていることが、何となく腑に落ちなかった。

『行け。おまえたちの忠誠心に免じて、この場は許してやる。……どうせ今宵はフィリップに会うのだ、その席で、我が従兄弟殿にこの件を直に尋ねる』

『お、王……！』

『おまえたちにはもう去れと言うたであろう？　去るがよい！』

鋭い怒鳴り声の振動が隣室の扉にまで届き、ジェニーは反射的に

耳を扉から離した。
その後、ジェニーは、素直に退散していく使者たちの重い足取りを聞いた。ジェニーが急いで窓に移動してみると、森でジェニーを追い回していた男たちが、小屋の方を振り返りつつ、馬にまたがろうとしていた。

王がいれば、彼らは戻ってはこられない。
心ならずも王に助けられる形となったが、とりあえずは一難去ったことで、ジェニーは深い安堵の息をつく。これで、あの男たちからは完全に逃げおおせたと言っていいだろう。
（よかった。本当によかった……）
ジェニーはもう一度、大きなため息をついた。
それからジェニーが、静寂を取り戻した隣室の方に向くと、彼女の胸が勝手にざわめいた。
（でも、こんなところで、まさか……まさか、王と出会うなんて）
恐ろしいのに、胸が高鳴る。顔を会わすのが怖いのに、顔を見たいのだ。以前はあんなに嫌っていたのに、いつのまにか変わってしまった自分の心を、ジェニーは自分でもてあましてしまう。
（王は、私をどうするんだろう？）
王とジェニーが別れたとき、彼はジェニーを殺そうとしていた。ジェニーの恐怖の瞬間にこそ彼は手を伸ばしたけれども、その直前まで、殺すつもりでいたのは確かだ。
王に殺されてしまうかもしれない――。
ジェニーは、王城を逃げた時点で、彼に斬られることを受け入れていた。逃げることは王への裏切りだ。今考えてみれば、ジェニーはあのときに本当に逃げたかったのかどうか、よくわからない。
でも、彼に殺されても仕方がないとどこかであきらめる一方で、彼の顔を見て生きていたいとジェニーは望む。さっきのように、彼と見つめあうときがまたあってほしい、とジェニーは願う。
すごく勝手なのかもしれない。けれども、二つの気持ちがジェニ

ーの心の中でしのぎ合い、彼の顔をこの目で見てしまってからは、相反する思いがいっそう強まっている。

しばらくの間、王は部屋に戻ってこなかった。隣室では、男たちが話す低い小声が続いていた。

ゴーティスが隣室に戻ったとき、ジェニーは木の窓枠に手をかけ、それを外そうとしている最中だった。また、逃げようとしていたようだ。ゴーティスが感心するほど、彼女は諦めることを知らない。

「ジェニー」ゴーティスが約二年ぶりに彼女に呼びかけると、彼女は大げさすぎるぐらいに驚いて、彼を見た。

「おまえは娼婦なのか、ジェニー？」

「私が？　そんなはず、ないじゃない！」

久々に経験した反発に、ゴーティスは懐かしい手ごたえを感じて安堵した。彼女の反抗的な口調や強気な眼差しは、昔と同じだ。何も変わらない。二年の月日など、一切、存在していないかのように。

彼女の答えなど、訊く前から分かっていた。

「であろうな。問うてみただけだ」

ゴーティスが納得して頷くと、ジェニーに張り詰めていた緊張感がうすれ、かすかな戸惑いが現れた。ゴーティスがジェニーを静かに見つめると、心なしか、彼女の反発心も次第に失われていくようだ。彼女は黙ってゴーティスを見返している。

なおもゴーティスが見つめ続けると、ジェニーの瞳が不安定に揺らいだ。王城の屋上で彼女が最後に見せた眼差しに似ていて、ゴーティスの胸が愛しさに苦しめられる。そして、時間が遡っていくように、穏やかな静寂が二人を包んでいく。

ゴーティスはジェニーに数歩近づいた。

「おまえはなぜフィリップに追われておる？　何をやりおった？」

彼女が素直に返答した。「私は何もしてないわ。……それに、あの人たちは、偽の使者だと聞かされたわ」

「偽の？　あやつらは、正真正銘、フィリップの近衛だぞ。誰がそ

のようなことを？」

疑念が、ゴーティスの頭の中を急旋回し始める。彼女は心もとなさそうに、唇を指で触った。

「でも、そう言われたわ。私もそう思う。でなければ、あんな――」

何か不快なことを思い出したのか、ジェニーが顔をしかめて俯く。

ジェニーの表情の移り変わりを見ていると、ゴーティスは、この“娼婦捜索”がますますうさんくさいものに思えてきた。

フィリップの使者たちの捜すマリーは、間違いなく、このジェニーだ。ゴーティスが追い払った男たちには、捜索とは言いながら、彼女を抹殺する意志がありありと出ていた。フィリップは血なまぐさい事柄を非常に嫌うというのに、この捜索には、彼の嫌悪する血の匂いがぷんぷんする。裏に、何者かの並々ならぬ敵意が感じられる。何か陰謀めいたものが、確実に絡んでいる。つまり――黒幕はフィリップではない。

ゴーティスが寝台を回ってジェニーに近づこうとすると、彼女は部屋の奥に後退した。

「ジェニー」

ジェニーが彼を見返した。ゴーティスにゆっくりと追い詰められていくのに、彼女はゴーティスを見上げるだけだ。ゴーティスに、怒りや憎しみといった、負の感情は少しも湧き上がってこなかった。甘い気持ちだけが呼び覚まされた。

“おまえが目の前に現れるのを、ずっと待っておった”

口にできない思いを心の底で反芻しながら、ゴーティスは壁際に追い詰められたジェニーを見た。彼女に実際に触れられる瞬間に刻一刻と近づいている、その嬉しさに、顔がほころんだ。

「今までどこにおった？　どこで暮らしておったのだ？」

「山中よ」

「この公地内にある、どこかの屋敷か」彼女の返答を信じず、ゴーティスは笑う。「フィリップはおまえの存在を知っておるのか？」

ジェニーは何も返さなかった。だが、それこそが彼女の返事だ。

「あいもかわらず、強情な女だ。あの者どもと同じで、おまえにも返答する気がないとみえる」

ゴーティスがにやりと笑うと、ジェニーが、怒ったように顔を赤面させた。

「これは……フィリップに詳しく事情を訊かねばならぬようだな」

ゴーティスがようやく部屋の隅に着くと、ジェニーが静かな怒りをたたえ、彼を見上げた。彼女の頭の位置は以前と変わりない。そう分かると、ゴーティスの胸が二年ぶりに安堵し、ひっそりとため息をもらす。

彼女が自分を見上げる、瞳の角度さえも愛しい。しっとりと濡れた髪に覆われて、ジェニーの顔が頼りなさそうに見えた。彼女の目も鼻も口も、耳も全て、自分の手が覚えていたままかどうか、自分の同じ手と指でたどって確かめたかった。今すぐにでも抱きすくめ、その体温を腕に感じたい。二年の空白を埋め、これからの時間を、実在する彼女の記憶で埋められるように。

だが、ゴーティスの視線は、無意識に彼女の腹へさっと移動した。それに続き、ジェニーの手が彼女自身のお腹を守るように覆う。

当然だが、彼女のお腹はふくらんでいない。あのときの転落で、子どもを失ったか、産んだのか――。

強張った胸の内を囲いながら、ゴーティスはジェニーの瞳をもう一度見た。彼を見返す彼女の目に、反抗的な光が戻っている。

ゴーティスがジェニーの鼻先に顔を近づけても、彼女は視線をそらしはしなかった。しばし消えていた、不愉快な、ありとあらゆる思いが沸々とゴーティスにのしかかる。

「子はどうした？　あの川で、ケインとともに死んだか？」

「死んでなどいないわ！　……ケインだって、きっと……！」

ゴーティスは高らかに笑い声をあげた。

ゴーティスが彼女の身を心配し、嘆く必要などなかったのだ。彼女は天を味方につけている。彼女が簡単に死ぬことはないのだ。彼

女は川に転落して命を落とさなかっただけでなく、そのとき腹にいた子どもまで無事に産みおとしたのだ。

また、ジェニーが言いよどんだことで、ゴーティスはケインと彼女が生き別れたことを知った。なんて残酷で喜ばしい事実だろう！

ケインと彼女が幸せに並んでいる光景など、ゴーティスは想像すらしたくなかった。ケインは彼女ほどの強運の持ち主ではないから、もしかしたら既にこの世にはいないかもしれない。だが、彼の生死自体は、そんなに重要なことではない。二人が一緒でなければよいのだ。

「おまえという女は、どこまで悪運が強いのか……」

ゴーティスはジェニーの顎に手を伸ばした。手に、彼女の肌の柔らかさが馴染む。その肌を知る男が他にもいたと思うと、ゴーティスの指が震え、彼女の顎にくいこんだ。

「身重の体でありながらあの濁流を生き延び、子さえ失わなかったとは……。子の父親が命を投げうって、おまえを救った甲斐があるというものだ」

ゴーティスが瞳を覗き込むと、彼女は衝撃を受けたように両目を広く見開いた後、叫び返した。

「彼は死んでないわ！」

「では、どこにおる！　おまえは、一度でもその姿を目にしたのか！」

ジェニーの絶句がゴーティスへの答えだ。ゴーティスは嘲笑した。彼女が傷ついた表情を見せ、そのことに胸が痛まないはずはない。だが、ゴーティスは、ケインがその死によって彼女を手放さなければならなかったことを、心の底から喜んだ。あの日以降に何百回と味わった、ゴーティスの苦痛と後悔を、ケインが体験することはないだろう。彼はいつでも簡単に欲しいものを手に入れる。だからこそ、ケインにその機会が訪れないのなら、いっそ、この世から消え失せてほしい。

ケインと――ケインの血を受け継いだ者も。

「ケインの子はどこだ」
ゴーティスが問うと、彼女の顔がゴーティスを凝視し、信じられないものを見たときのように驚愕した。
「あの子は……彼の子じゃない！」
「おお、そうだ、そうであった、おまえの子だったな。そのおまえの子はどこにおる？」
ジェニーが茫然としたようにゴーティスを見つめ、顔を小さく左右に振った。
「違う……違うのよ……」
「ジェニー、おまえの子はどこだ？」
ゴーティスがもう一度ジェニーの顎を引き寄せると、彼女が眉をひそめ、呟いた。
「それを知ってどうするの……？」
だが、ゴーティスが答える前に、ジェニーがさっと顔を強張らせ、叫んだ。
「そんな！　あなたって人は……！」
ジェニーはまっすぐにゴーティスを見返す。カサンドラが目を伏せるのとは、まるっきり反対だ。
精気のあふれる目だった。ゴーティスの求め続けた、彼女の瞳だ。その反抗的な瞳を見つめ続ければ、いつか、自分の視線と溶け合うときが来るのだろうか？
ゴーティスはジェニーに囁いた。「俺が――どんな人間だと？」

窓から差し込む光が、さっきより眩しくなっていた。空にかかっていた雲が消え去り、森全体を明るく照らそうとしている。この短い春が過ぎれば、あっという間にヴィレールにも夏がやってくる。湖は本来の水色を取り戻し、美しい光がそこかしこに反射する。
果てしない青空が広がる夏が、またやって来るのだ。

第二部　1．出口のない森－7

北の塔にある部屋に通じる階段付近に、見張りの衛兵の姿はなかった。ゴーティスが指示したとおり、衛兵が持ち場を離れたのだ。照明となる松明の少ない北の塔は暗く、狭い螺旋階段の先は暗がりに消えている。細い階段をのぼっていった突き当たりが、ゴーティスの目指す一室だ。足音を消して階段を上がるゴーティスの前方で物が擦れるような小さな音がし、ゴーティスは唇の端にあがってきた笑いを抑えた。

予想どおりの展開だ。誰かいる。

ゴーティスがもっと先に進むと、わずかな弱い光が暗闇に射しこんだ。頂上の部屋が近いのだ。ひそやかに動く何者かの影が、壁面に、やはり弱々しく映っている。

ゴーティスが息を殺してそっと近づくと、その影を作る人物が、部屋の前の暗がりの中に輪郭を現した。男だ。彼は背伸びをして、扉に付く小窓から室内を覗きこんだり、小窓の端ぎりぎりまで移動したり、何とかして室内の様子を見極めようとしているようだった。背後に迫ったゴーティスの気配にも気づかないらしく、その必死ぶりは滑稽だ。

ゴーティスが立ち止まって男の動向を見守っていると、男は何度かためらうような仕草をした挙句、部屋の木の扉に手をかけた。

「――そこで何をしておる？」

男が飛び上がった。

ゴーティスの視線の先にいる男は、頭だけをまわすようにして振り返り、怯えきった顔を見せた。カサンドラの衛兵だ。

「俺が連れてきた娘を、妃のために偵察に来たか？」

「いっ、いえ！　申し訳ございません、私のつまらぬ好奇心からでございます……！」

「ほう？　妃に忠誠心の厚いおまえが、自らの好奇心を満たすため

だけに持ち場を離れたのか？」

「……」

衛兵が素早く頭を垂れた。若すぎる彼が、王に対する不満を隠すにはそうするしかない。

ゴーティスが壁から背を離すと、衛兵はあわてて戸口の前から身を離し、道を譲った。といっても、螺旋階段は、二人が体を触れ合わなければすれ違うことができない幅だ。彼はゴーティスとは反対側の壁面に体をはりつけ、顔を背けて、視線を床に落とした。彼の頭が小さく揺れているのは、王に反抗できない口惜しさに歯を食いしばっているからかもしれない。

衛兵の前でゴーティスが扉に手をかけると、彼の目がすかさずそこに動いた。

「今宵は、この小城にフィリップたちを招待して遅くまで飲む予定だ。中の娘はフィリップへの土産。妃もおまえも、案ずることは何もない」

衛兵の頭の揺れが止まった。その頭を見つめつつ、ゴーティスは扉を押し開け、部屋と衛兵の間に立ちふさがった。

「妃に問われたらそう伝えるがいい。今宵の席に妃は呼ばぬ」

内々だけで酒の席を持ちたいと、昨日顔を会わせたばかりの王から三人が急な招待を受けたのは、晩餐前のことだ。

のんきな妻と気弱な弟は、王の申し出に応え、早々に出発した。二人を先に行かせることは気がかりだったが、フィリップはもっともらしい理由をつけ、遅れて訪問することを決めた。

フィリップは、少しでも長く自宅に残りたかった。そのときの彼は、今にでもモーリス宅から連絡が入るかもしれない事態で、それどころではなかったのだ。モーリスたちがいわれのない襲撃に遭っているかもしれないのに、のんきに酒を飲んでいる気分ではない。なぜこんな一大事のときに呼び出すのだ、と彼の事情を知らない王に軽い苛立ちさえ覚えた。マリーの無事を確かめるまで、フィリッ

プは気が気ではなかった。

待てるぎりぎりの時間までフィリップは自宅でねばったが、ついに彼の待ち人は現れなかった。夜も更けた頃になって、妻やジェラールに遅れ、フィリップはゴーティス王の滞在する小城に入った。大きな不安は頭から抜けなかった。そして、王のいる一室に通される直前、フィリップは居城から追ってきた使いの者に引き止められた。

「今……聞くべき内容か？」

はい、と使者は答えたが、尋ねるまでもなく、近衛隊隊長がわざわざ小城にいるフィリップに使いを遣わすというだけで、事の重大さはわかっている。

彼女の死。モーリスの死。

胸騒ぎどころではない。最悪の事態を想定して、フィリップの目の前が灰色に変わる。

しかし、彼にもたらされた報告内容は彼の予想より少し外れていた。一部、想定外の事実さえ判明した。

あと五分、使者の到着が遅れていれば、知らなくて済んだ報告だった。フィリップは、それを知ったうえで王に対面するはめになったことが、心から恨めしく思えた。

王の隣にはヴィヴィエンヌが当然のように席をとっていた。彼女はおそろしいほど上機嫌で、遅れてやってきたフィリップに優雅な笑みを投げかけた。そうしていると、まるで、彼女こそが王の妻のようだ。二人の対面にいるジェラールは、それまでずっと肩身の狭い思いをしていたのだろう、兄を見ると大きく安堵し、笑顔に変わった。そして、フィリップがよく知る王の瞳は、恐ろしいほどに明々と燃えていた。彼が知る限り、これはゴーティス王以外の者たちにとって悪いことが起こる前ぶれだ。

フィリップはジェラールの隣にある空席に座った。彼の斜め前に

いるヴィヴィエンヌは既に少し酔っているようで、頬が赤く色づいている。王妃の姿はどこにもなかった。

「今宵は王妃様がいらっしゃらないようですが？」

フィリップが王に尋ねると、ヴィヴィエンヌが王をちらりと見て意味深に笑った。

「妃はまだ酒が楽しめぬゆえ、今宵は呼んではおらぬ。心配は無用だ、俺が不在でも困らぬよう、子守をつけておいた」

「まあ、意地悪なことを。王妃様はまだお若いだけですのよ、王」

男に媚を売る女を見るのは気分がよいものではないが、それが自分の妻ならなおさらだ。

王の腕をたしなめるようにたたく彼女に呆れ、フィリップは天を仰ぎたくなる。気まずそうに、ジェラールも義姉を見つめていた。

フィリップの杯に酒がつがれると、ヴィヴィエンヌの目には夫の姿がますます映らなくなったようだ。彼女はその目にありありと好奇心をのぞかせ、隣の王に体を寄せて言った。

「王、これで全員が揃いましたわ。今宵は何を見せてくださいますの？　私、もうすっかり待ちくたびれましたわ」

「おや、俺だけでは不足か？　それは残念だな」

「まあ、そのような意味ではございませんわ！　王にはたいへん楽しませていただいておりますわ。そうではなく――」

「なに、わかっておる。――余興をここへ」

王が部屋の入口にいた衛兵に合図すると、正面の扉が開けられた。

広く放たれた扉から、一人の娘が両脇を衛兵に支えられるようにして姿を現した。長い髪には櫛が通っておらず、一般的な村娘が着るような萌黄色のドレスは所々が汚れていた。ヴィヴィエンヌが、場違いのような彼女の登場にあからさまに顔をしかめた。

娘は疲労困憊している様子だった。娘の頼りなさに、誰もが口をつぐんで彼女のふらつく足取りを見守っている。二人の衛兵は、彼女をまっすぐに王のもとへと連れていこうとした。フィリップは、

彼女が背後を通り過ぎていく際にその横顔をさりげなく見上げ、はっと息をのみそうになった。

彼女だ――。

フィリップは再び彼女を盗み見て、人知れず安堵の息をついた。フィリップがやきもきしてその安否を心配していた、マリーこと、ジェニーだ。彼女は生きていたのだ。

だが、心の底からの安心は、次に、強い戸惑いと動揺をフィリップにもたらした。彼女が危機を切り抜けたことは本当に嬉しい事実だが、なぜ彼女がここにいるのか、その理由がフィリップにはちっとも理解できない。

彼女は――用なしとなって、王に後宮を追放されたのではなかったのか？

王がジェニーを見る眼差しに、彼女に対する何らかの情の類が残っていることは、フィリップには意外だった。ますます混乱した。

（王はこの彼女が不要だったのではないのか？）

彼女が王城から出られたとしたら、王の寵愛を失って追い出されたとしか考えられなかった。それとも、王は彼女とどこかで偶然に再会し、昔の情がわきあがって、手元にまた呼び寄せたくなったとでも言うのか。

だが、もしそうであるなら、彼女をフィリップたちの前にわざわざ晒す必要はない。

予想外の不安がのしかかり、フィリップは妻の手を引いてこの場を逃げ出したくなった。王が不穏な企みを心に持っていることは、間違いなかった。

「……この娘は何ですの、王？」

彼女を蔑むように見ていたヴィヴィエンヌが、複雑な思惑のからむ沈黙を破った。

王は彼女にただ笑い、連行されてきたジェニーに告げた。「彼らに挨拶を」

すると、ジェニーがわずかに顎を上げた。王は彼女に手を伸ばしたが、彼女は無反応だった。髪に隠れていて彼女の横顔がのぞけなかったが、フィリップの目には、二人の間でしばし、視線だけによるせめぎ合いがあったように感じられた。

「挨拶を」

王はジェニーを見上げたままでもう一度そう言い、彼女にさらに手を伸ばした。ジェニーは衛兵にせっつかれ、王に向かって、手をそろそろと上げる。王がその手をつかんで引き寄せると、彼女はよろめき、王の膝に手をついた。その弱った姿に、フィリップの胸がきりりと痛んだ。

王がジェニーの腕を支えて直立させると、彼女はついに顔を上げた。ジェラールが彼女を指差し、何かを言いかけ、呆然として止まる。

「マリー、皆に挨拶を」

王の口からそう紡ぎ出されたとたん、フィリップの体から血の気が引いた。

ヴィヴィエンヌはジェニーとは初対面だったが、王の脇に佇む彼女を見て、それまでのにこやかな笑顔を醜く一変させた。その豹変ぶりには寒気が起きるくらいだ。ヴィヴィエンヌが、会ったこともない彼女に対して、理不尽で不愉快な思いを抱いているのは明らかだった。

「おまえが……マリー？」

フィリップが制止する間もなく、軽率にも王の前で、彼女は敵意むきだしの形相でジェニーを睨みつけた。

「ヴィヴィ！」ヴィヴィエンヌは、困惑して彼女を見つめるジェニーにつかみかかろうという勢いで椅子からいきり立ったが、フィリップの制止でそこにかろうじて留まった。が、ヴィヴィエンヌは感情が抑えきれないらしく、こめかみに青筋をたてて、彼女を見据えている。

「おまえが……おまえが、モーリス宅にいたマリーなのね……！」

ジェニーには戸惑いと緊張が見え隠れし、どう返事をすべきかと迷っているようだった。ヴィヴィエンヌの気迫に押され、その場に流れる奇怪な緊張に恐れをなしたのか、ジェラールの目が助けを求めるようにフィリップにすがりつく。ただ一人、王だけは顔色ひとつ変えず、ヴィヴィエンヌとジェニーを交互に見つめている。

王はどこでどうやって彼女と会い、いったい、何の目的で彼女をこの場に連れてきたのか。

王の無表情がフィリップには恐ろしく、いつにもまして、王の真意がはかりかねる。

自分たちに何をさせるつもりなのだろう？

おもむろに、王がジェニーの腰を引き寄せた。

「フィリップ、おまえにこやつを紹介する必要はなかろう？」

フィリップが一人だけ驚いて王をうっかり見てしまうと、王はゆっくりと笑顔をたたえてみせた。

「のう、おまえだけが全ての事情に通じておるようだ。ここにおる全員にわかるよう、事の次第を説明してもらえような？」

王の落ち着いた口調はそれだけで恐怖をそそる。

フィリップがほかの三人をうかがい見ると、不審そうな、戸惑った瞳が返ってきた。ジェニーがひときわ大きな戸惑いをもって、彼を見つめ返した。

「フィリップ、公妃の誤解ももっともだ。この女を人知れず保護しておったのは、おまえであろう？」王が言った。

つまり、王の急な招集はそれについての釈明を聞くためだったのだ。

フィリップは力尽きた。

「……はい」

「フィリップ様……！」

王の手にはむかうように体を横に揺らした彼女を、フィリップは長年悩まされていた胸のつかえがとれたような気分で見つめた。

「ああ……。ああ、よかった、ようやく記憶が戻ったのだね」
「――記憶が？」
「彼女はずっと記憶を失っていたのです、王」王と皆の不可解な表情に応えるように、フィリップは説明した。「彼女は私の顔も名前も覚えていなかったのです。これまでずっと――あなたは私を名で呼んだことはなかった。私を、“ラニス公”としか認識していなかったね？」
「……はい」
フィリップがジェニーに笑いかけると、彼女は瞳に涙をにじませて頷いた。
「なるほど」
王は椅子に背を預けながら、フィリップに尊大な口調で言った。
「では早速、おまえの説明を聞くとしよう。こやつがおまえの保護下に置かれることとなった経緯を、最初から話せ。無論、この女と俺の受けた襲撃についても、おまえは把握しておろうな？　それについても、嘘偽りなく、ここで全てを明らかにしてもらう」
フィリップの近衛兵たちが北の森で王に遭遇した一件は、この部屋に入る直前に報告を受けていた。だが実際にそのことを王に突きつけられてみると、目に見えない何かに周囲を隙間なく包囲されたようで、彼の背中は恐怖で痙攣した。

ついさっきまで息巻いていたヴィヴィエンヌは、フィリップ以上に、“この女と俺の襲撃”との件（くだり）に敏感に反応していた。それを目にして、それまでわずかに残っていた彼女への望みは、フィリップの中でこっぱみじんに砕け散った。
嫉妬にかられた女の、なりふり構わぬ愚行。個人の身勝手な理由で近衛を動員する罪の重大さは、王族の一員である以上、彼女も知っている。
フィリップが妻に哀れみを含んだ怒りを向けると、彼女はうろたえ、ひどく青ざめた顔をしていた。彼の目と出合うと、彼女は夫が

事情を知っているのだと悟ったのだろう、ひるんで唇を震わせた。
今頃になって慌てたところで、もう十分に遅い。
だが、妻をそんな行動に飛躍させてしまったフィリップの後悔も、もう遅い。
フィリップを庇ってか、口を開こうとしたジェニーを目で制し、フィリップは王に告げた。
「王の御身を危険にさらした責任は、私にあります。私が知ることを……全てお話しいたします」
王が眉を小さくひそめて頷き、椅子に身を深く沈めた。
フィリップは、王が自分の釈明を静かに聞く姿勢でいることにまず驚いた。そしてまた、王が、座れ、と隣のジェニーに椅子をあてがったのを見て、王が今でも彼女を慕っているのだと知り、そのことに二重に驚かされた。

第二部　1．出口のない森－8

モーリスの農園で働くドゥーヴルの息子が、群れを離れた家畜を追う途中、川原をふらふらとさまよう娘を見つけたのは、およそ二年前のことだ。

「こやつが一人でか？」

フィリップが語り始めてすぐ、王が口をはさんだ。そう聞いております、とフィリップが答えると、王は疑わしそうに、小さく眉をひそめた。だが、王はほかに質問を重ねはしなかった。

「続けろ」

「私の部下モーリスが、記憶を失っている娘を助けたと私に連絡してきました。当時の彼女は粗末な服を身に着けていたそうですが、唯一持っていた水晶細工がそれは素晴らしい物で、彼は、彼女がもしかしたら貴族の令嬢ではないかと考えたようです。それから早速手元に届けられた装飾品を確認したところ、西方の貴族間で流行している意匠が彫り込まれているのが分かりました。それが盗品とも疑いましたが……私はなんとなく、気になったのです。ともかく、試しに一度娘に会ってみることにしました」

遊戯室は水を打ったように静かだった。いったんは王に反発する態度をとったジェニーも、彼の隣でフィリップの話に耳を傾けている。

「ところが、ちょうどその頃は、父の具合が急激に悪化したときで……。父の代わりを務めねばならなくなった私は多忙となり、モーリスとの約束を一度、反故にしました。その後まもなく父が亡くなったこともあって、私は、モーリスの依頼などすっかり忘れてしまったのです。ですから、実際に彼女に会えたのは、私の周辺が落ち着きを取り戻した頃、彼の依頼があってから数ヶ月も経った時期です。その間、彼女はモーリスのもとで暮らしておりました。

私は当然、ひとりの娘の身元を特定できるなど予想もしていなかっ

た。西方の貴族とて若い娘は何十名もおりますし、私は社交界に積極的に出る方ではありません。会ったことのない者の方が多いくらいですから」

ここまではジェラールも知っている話だ。

フィリップが彼を一瞥すると、彼が、緊張とも興奮ともいえるような強張った顔でフィリップを見た。フィリップにも緊張が高まり、彼は胸にためた息を一気に吐いた。

「しかし実際に会ってみると……驚くべきことに、彼女は以前会ったことのある娘でした。一度会っただけでしたが彼女の印象は強烈で、その後も私がずっと再会を願い、再会がかなわずにいた者でした。まさか――ええ、まさか、こんなところで彼女に再会するとは、万に一つも思わなかった。そのときの私の衝撃がおわかりいただけましょうか？　それなのに、彼女は……私を全く覚えていなかったのです」

フィリップがジェニーを見ると、王の瞳もジェニーの方に動いた。

「それで？」

「本当に、彼女の記憶はきれいに欠落していました。彼女は王の名や王城はおろか、自分の名前さえ覚えていませんでした。私は、彼女がいるべき場所は王城だと思っていたので……、王にご報告すべきなのかどうか、彼女の扱いについては、実に迷いました。正直に申し上げれば、私は、処遇に困る彼女に公地内にいてもらいたくはなかった」

ジェニーがその頃のことを覚えているかどうかは定かではない。彼女は眉を寄せ、何かを考えているようだった。彼女が椅子の肘掛に置いた手を、王の手が上から押さえつけるようにして掴んでいた。

フィリップが彼女と顔を会わせた頃までには、彼女はマリーという名で呼ばれ、モーリスをはじめ皆によく慕われていた。前妻との悲惨な結婚生活から精神的に回復しきれていなかったモーリスや彼の農園の人々が、目に見えて明るく変わっていた。それが、突然に

彼らの土地に出現した彼女の影響でなくて、何だったろう？

彼女は記憶を失い、見知らぬ土地にたった一人きりだった。彼女が農園で暮らすことは、彼女と農園の人々の双方にとって、利をもたらしている。彼女も幸せそうだった。さらに言えば、フィリップは彼女に厚い恩義を感じていた。彼女の置かれた立場に何の不都合もないのなら、彼女の当面の生活保障をすることくらい、彼には何の問題もなかった。

「そして、私はふと思いついたのです。王城にいるべき人間が独りでここにいることがあるのかと。行方知れずとなった彼女の捜索が行われるという通達も、噂も、私の耳には入ってきませんでした。――総合的に考えて、彼女は、何らかの理由で王城を去ることとなった身分なのだろう、と私は思ったのです」

それは、王が彼女に飽きて、後宮を追放したことを意味している。

フィリップはその考えに何の疑いを持たなかったし、王が結婚を機に後宮に住まう女たちを退去させた時点で、それは立証されたとみなした。

また、フィリップが彼女の扱いに困っていた期間に、ジェラールが、たまたま彼女と会う機会に恵まれた。彼女の正体を知らないジェラールが、内気な彼にはめずらしく彼女に声を掛けた場面を目撃したとき、フィリップは、彼のためにも、彼女の面倒をみようと心に決めたのだ。

誰に、何の迷惑がかかろうか？　彼女は今後の長い人生を生き抜いていかねばならない。ジェラールが女性に歩み寄る態度をとったのは良い兆しで、いずれ、もし彼女が彼のもとで日々を過ごす立場になったとしたら、それはそれで、二人にとって幸せなことではないだろうか。ジェニーは安住の地を得て、ジェラールは愛する人を得るのだ。

「彼女はとある貴族の末裔だということにして、モーリスに彼女の当面の世話を命じました。彼は非常に誠実で、信頼のおける人物です。それに、彼の館は本城から離れすぎず――適度に距離があって、

私も安心できました。私は、余分な騒ぎや面倒を起こさないようにと、ほんの一握りの者にしか彼女の話はしませんでした。然るべき時期が来るまで、私は何の問題も起こさず、万全の態勢でその日を迎えたかったのです」

王は、瞬きもせず、フィリップの説明を聞いていた。ジェニーを保護したフィリップの意図を知っても、不機嫌になる様子はなかった。ジェニーが表情をくもらせ、ただならぬ気配を察したジェラールが青ざめるのとは、対照的だ。

ヴィヴィエンヌが急速に元気を失くしていた。フィリップは彼女の軽率さを責めたくもあったが、気分屋でも基本的には沈んだ顔を見せない彼女が、不安そうに表情を翳らすのを見るのは、いたたまれなかった。

「家督を継いで以来、私は多忙を極めており、妻の抱える孤独を知りながら、見て見ぬふりをしていました。妻はずっと不安定でした。それゆえ、私のこの計画に妻を巻き込むことは不安で、私は口をつぐむ選択をとったのです。妻の耳に入らぬように気を配っておりましたが……それがまた、いらぬ不信を生んだのかもしれません。ジェラールの為とはいえ、私が面倒をみる彼女に対し、歪んだ感情を持つようになったのでしょう」

王の態度を見ている限り、フィリップには、王は既に事件の概要を知っているように思えた。

包み隠さず、王に何もかも告げた方がいい。下手に釈明しない方が身のためだ。

「私は……妻の暴走を止められなかった」

一方的なヴィヴィエンヌの思い込みで引き起こされた、身勝手で短絡的な事件だ。嫉妬に狂ったヴィヴィエンヌが近衛を動かし、夫の浮気相手とみなしたマリーをモーリス宅で襲撃した。数人の使用人が死んだ。マリーは近衛に連行されたが、隙を見て彼らから逃亡した。そして彼女を追う近衛兵たちは、不運にも、たまたま森にい

た王と出くわしてしまったのだ。

妻が欲求に正直で独占欲が強いことは分かっていたが、まさか、彼女がそこまでの行動を起こそうとは、フィリップは想像もしなかった。夫を責めるのではなく、怒りの矛先が相手に向き、相手を殺そうとまでする。フィリップがのん気で知らないだけかもしれないが、そんな嫉妬の表現をほかの女に見たことがない。何より、男女の情事など貴族社会には溢れかえっていて、ほとんどの夫婦はお互いがお互いに目をつぶっているのではないだろうか。フィリップが――ヴィヴィエンヌは夫が気づくはずがないと見くびっているようだが――彼女の度重なる不貞を容認しているのと同じように。

「私の至らなさゆえ、王の御身にまで危害を及ぼしかねない事態になりましたことを、心からお詫びいたします。厳罰は覚悟のうえ……王、どうぞ、ご処分を」

フィリップは王に向けて頭を下げはしたが、それはジェニーに対する謝罪でもあった。今回の件で、彼女には何の落ち度もない。完全な、とばっちりだ。頭を下げる前にジェニーを盗み見たところ、彼女は青ざめ、言葉を失っているように見えた。

王は何も返さなかった。だが、フィリップは頭を上げようとは思わなかった。彼の怒り心頭の形相も、不敵な笑みも、冷たい嘲笑も、今のフィリップには目にする余裕がない。

（願わくは、ヴィヴィエンヌも王に頭を垂れていてくれたら……）

ヴィヴィエンヌが動き出す気配はなかった。彼女は誰かに謝罪するという発想に乏しい。ただ、彼女に好意的に見るなら、彼女は単に自分の犯した罪に茫然自失となっていて、そんな気までまわらないだけなのだろう。

何の反応も示さない王を不安に思い、誰もが息を殺して事の行方を見守っているはずだ。フィリップは、時間ばかりが無駄に過ぎるように思え、下げた頭をいつまでも上げられずにいた。

やがて、王が膝の上で組んでいた足を降ろし、言った。「おまえ

は何か……大きな思い違いをしておるな」
「はい？」フィリップは思わず顔を上げた。
「俺は怒ってはおらぬぞ。皆の誤解が解けてよかったではないか」
「……ええ、そうではありますが……？」
合点のいかないフィリップは、王の妙に晴れ晴れとした表情にさらに矛盾を覚えた。
「俺と出くわした近衛兵の一件は、この娘の世話を長期に渡ってしたことで相殺としてやろう。俺はある理由から……この娘を密かに捜しておったのだ。今日までの間、ほんの一つの手がかりも掴めずにおったのが、いきなり、こうして生き会えたのだ。この公地内で発見されておらねば、こやつは生きてこの場におらなかっただろう。……俺は逆に、おまえに感謝すべきであろうよ」
フィリップよりも大きな当惑を顔に映し出し、ジェニーが王を見上げた。
「ゴーティス王――」
「俺は、“余興”と最初に言うたはずだ」
ジェニーの硬い声をさえぎり、王が彼女の手を肘掛に押さえつけた。
「今日より、この娘の身は俺が引き受ける」

小城での最後の夜、ついに朝まで熟睡できなかったカサンドラは、気だるい体を無理に起こし、寝台から降り立った。広い寝室はがらんとしていて、彼女を包む空気までが寒々としている。
（私は妃なのに、どうして……なぜ、一緒にいてくださらないの？）
カサンドラの予想どおり、夫である王は昨夜も部屋に戻ってこなかった。二夜連続だ。
彼と共に夜を過ごしていたらしいラニス公たちは、深夜前には各部屋へ戻っていったのをカサンドラは知っている。使用人たちが彼

らを連れて通路を歩く気配で、眠りの浅かった彼女は何回か目を覚ましたのだ。彼女は物音を耳にするたび、部屋の扉が開いて王が姿を現すだろうと期待して、寝台から飛び起きては扉を見つめた。それは夜中に何度か繰り返された。しかし今の今まで、結局、扉が開けられることは一度もなかった。

召使を呼ぼうと呼び鈴に手を伸ばしかけ、カサンドラは深いため息に襲われた。昨日の夕方に王が娘を連れ立って帰宅した件は、侍女から聞いた。

新婚の妻と来た旅先で、妻の居る城に女を連れ込むなど、そんな夫がいるだろうか？

王の怒りを恐れて誰もが口を閉ざすため、連行された娘がどんな風体なのかはわからない。でも王が連れてくるなら、若い娘に決まっている。

おとといの夜、小城で唯一の若い給仕女が、晩餐後から朝まで行方をくらました。同じ夜、王は晩餐後に移動した遊戯室へ、彼女に酒を運ばせている。王もカサンドラの待つ寝室には帰ってこなかった。カサンドラの侍女が、今日の王の外出を待って、給仕女を城の外へと追い出した。

王が娘を連れてきたのは、それを見越した行動だろう。あの王は、どこまで女好きなのだ。こんな田舎のどこをどう探せば、若い娘など見つけてこられるのか。

（そこまでして……王は妻である私と一緒にいたくないということ？　私は……王には若すぎるの？）

カサンドラの息に嗚咽が混じり、彼女は震える足を何とか交互に引きずって、一人で寝るには広すぎる寝台に戻った。寝不足のために体が冷えているが、心の方がもっと寒がっている。

カサンドラを心配した衛兵ジルが、娘がいるという北の塔に様子を見に行ってくれたが、ついに会えずじまいだったそうだ。王によると、その娘はラニス公たちのために連れてきたとのこと。でも、“案ずることはない”という王の言葉を、どうしてそのとおりに信

じられよう？

なぜ、ラニス公たちとの語らいの場に、妃の自分を呼んでくれなかったのだろう？　皆の前でその娘を見れば、カサンドラの胸がこんなにも不安になることはなかっただろうに。

結婚後半年にして早くも、カサンドラには、夫ゴーティス王に対する不信とあきらめの気持ちが芽生えてきていた。カサンドラの故郷からついてきた侍女二人も、王の浮気性には腹を立ててはいるが、男はそんなものだ、とどこか納得しているようで、王やヴィレールの側近たちに文句を言う気まではないようだ。カサンドラにしても、本国の兄に彼の不貞を報告するつもりはない。知らせたところで、正妃としての座があるのだからそれでいいだろう、と一笑に付されるに決まっている。妻のつまらぬ権利を持ち出して、二国間の関係を危うくさせるな、とでも諭されるかもしれない。兄は頼りにならないし、カサンドラ本人も、政略結婚の実情をあちこちで耳にするにつけ、結婚とはこういうものなのだ、と自分自身をなだめすかす毎日だ。

ただ、カサンドラはこの半年間の王の態度を振り返ってみて、疑問に感じることがある。

侍女にも告げていないことだが、王と彼女との接触は嘘のように少ない。王は、たとえ寝所を共にしたとしても、彼女に触れずに休んでしまうことの方が多いのだ。正妃には世継ぎを産んでもらいたいはずなのに、王は、まるでそのことに興味がないようにみえる。

カサンドラには納得がいかない。ほかの女と数多く接していたとしても、仮にも王であるなら、世継ぎ問題には力を入れるはずではないだろうか。

（……もしかして、そんなに――そんなにも、私のことが嫌い……？）

カサンドラは溢れてきた涙を拭った。

女の存在のことは、まだ我慢できた。王が別の女といるのを見た

り誰かから聞いたりすれば、カサンドラもその都度傷ついたが、回数をこなせば、そのうちに慣れてしまえるように思えなくもない。結婚とはそんなものだと、割り切ってしまえる日がくるかもしれない。

（でも、王を思うこの気持ちがどこかに消えてくれるかどうか……）

カサンドラは、初めて王に対面した時の衝撃と胸の高鳴りを思い出していた。カサンドラが初めて間近で見た王は、神々しく、たくましく、あまりに美しかった。人々の噂で聞いていた恐ろしさを、カサンドラは一瞬にして忘れてしまった。冷血だと聞かされていたが、彼の笑顔は輝くほどに明るく、触れた指先はとても温かかった。彼の手に握られたカサンドラの手は感覚をなくし、彼の手と一体化しているような錯覚さえ覚えた。その夜、彼が隣に寝ていた寝台は、とてもせまく感じられた。

王が振り向いてくれることより、自分の感情が消える日を待ちわびながら、どれだけ孤独な夜を送ればいいのだろう？　王が自分を見てくれることを夢見て、今までの毎日はむなしく過ぎている。食事のとき以外、顔を見ない日もある。どこかですれ違っても、彼がカサンドラに優しく笑いかけてくることはない。王が何かの用事で女官長と話をしていたのを見かけ、彼女の代わりにその場に立ちたいと、カサンドラはどんなに焦がれたことか。

カサンドラは、ゴーティスに会ったその日から、彼に恋してしまっていた。

第二部　2．決意－1

ゴーティスとの再会の前に実際は何があったのか、ジェニーは頑として口を割ろうとしなかった。面倒をみてくれたフィリップに義理立てしたからだろうが、彼女が疲れきっていて、口をきくのも辛かったせいもあるだろう。なにしろジェニーは、フィリップたちの集う場でいつのまにか眠りに落ちていたのだ。ゴーティスの腕に押し付けるようにして寄りかかってきた彼女の頭を、ゴーティスは息をするのもはばかって、しばし見つめた。

その小さな体で、彼女は死と隣り合わせの恐怖をくぐり抜けてきた。武装した近衛兵から、命からがら逃げてきたのだ。

そう思うと、ゴーティスは胸をぐっと突かれ、彼女をそんなめにあわせたフィリップの妻や近衛兵への怒りで腹が煮えたぎった。ゴーティスは、ジェニーの世話をしたことで彼らの罪を相殺、とは言ったが、それは単に、彼らを激情の赴くままに罰することを避けただけだ。彼らに対する怒りは、消えはしない。

ヴィヴィエンヌとジェラールが先に引き上げた後、ゴーティスが

「あの女とは離婚しろ」

と言うと、フィリップは、当然といったように頷いた。だが、次に続いたゴーティスの指示に、フィリップは驚愕していた。彼からそんな権限を委ねられようとは、フィリップは夢にも思っていなかったようだ。

「ただし、処罰が妥当でなければ、俺があとから口を出す。無論、おまえに対する処遇もな。これをどう裁くか……おまえの手腕をとくと見させてもらう」

ゴーティスがフィリップにそう告げると、彼は再び驚きの声を上げた。

ゴーティスは、フィリップが厳罰をもってこの事件に対処するだろうことを予感していた。フィリップには王族としての誇りがあり、

王族の地位を汚されることに妥協を許さない。フィリップの哀しい怒りをたたえた表情に、ゴーティスは彼の強固な決意を垣間見ていた。その点だけを信用し、ゴーティスは、事件へ関与した者への処罰をフィリップに一任する気になったのだ。

◇　◇

ジェニーの頬の温もりがゴーティスの手にまだ残っている。

ゴーティスはそれを確かめるように手のひらを指でなぞった。彼の指がジェニーの名残をたどる先から、手のひらが、体が、幸福感にじわりと包まれていく。ジェニーが傍にいないときまで幸福感に満たされるのは、何度経験しても、どうにも不思議な感覚だ。

ジェニーと接すると、ゴーティスは、それまで知りもしなかった感情と次々に出会う。時に、直面した己の感情にゴーティスは自分が自分ではないような気がして怯えもするが、その出会いのひとつひとつを、彼は戸惑いながらも素直に受け入れている。そうすることで、闇夜に小さな明かりが浮かびあがるかのように、ゴーティスの胸には、ほのかな炎が点々と灯されていく。そして、そこから発せられるやわらかな光は、ゴーティスが心の奥に隠し持つ谷間にも届き、そこに広がる暗闇をやさしく照らしてくれるのだ。

昨日とは比べようもないくらいに、ゴーティスの胸の内が安定していた。不安から解放されたゴーティスは微笑をたたえ、目の前に広がる世界をゆったりと眺められる。ジェニーが側にいると思っただけで、ゴーティスの足はしっかりと地面を踏みしめ、彼の前で、世の中に生きとし生けるものが力強い息を吹きかえす。

つい昨日までの、彼女と再会するまでの約二年の歳月、自分はどうやって暮らしてきたのだろう？

たった一人の人間が側にいるだけで世界は劇的に一変することを、今まで誰も、ゴーティスに教えてはくれなかった。

ジェニーを休ませた部屋から夜明け前に引き上げ、それ以降、ゴーティスはずっと物思いに耽っていた。今日に至る過去を思い、今日の日の意味を考え、今後について思いをめぐらせ、ゴーティスは一睡もしなかった。

ゴーティスの選択を貫くためには――ジェニーを、あらゆる外敵や危険から守らなければならない。

彼女を守るために、王という地位は有利でもあり、ときに、どうしようもなく非力だ。弊害、障害が山と積まれている。

だが、それが何だというのだ。そのどれもこれもが、ゴーティスが一度つかんだジェニーの手を離す理由にはならない。その一切合財をふまえ、ゴーティスは人知れず、未来の自分に誓いをたてる。

ゴーティスとは違う意味で妻カサンドラは眠れぬ一夜を過ごしたが、そんなことを、彼は知る由もない。

誰かが扉をたたき、ゴーティスはぼんやりと見つめていた指の先から目を上げた。軽快な男の声が室内に割って入ってくる。

「王、こちらにおいででしたか！」

それが他でもなく腹心サンジェルマンだったことに、ゴーティスはほっとした。

「おまえか。今、戻ったのか？」

「昨夜遅くです。予定より長引きましたが、ライアンと共に無事戻りました」

「そうか」

サンジェルマンは瞬間的に微笑みを翳らせたけれど、あくまでにこやかに、ゴーティスに近づいてきた。

「私が留守の間に何か不都合は――」

「サンジェルマン」

二人の問いかけが重なり、二人はお互いを見て言葉を止めた。

ほどなく、はい、とサンジェルマンがゴーティスの次の指示を待つ姿勢を見せた。ゴーティスの前に立つサンジェルマンの笑顔は揺

ぎない。
　ゴーティスがサンジェルマンの名をもう一度呼ぶと、彼は返事をし、椅子に腰掛けているゴーティスの前に来て、床に膝をついた。彼の金色の髪が、ゴーティスの前でふわりと揺れた。
「おまえにひとつ任務を与えよう。なに、たいして、難しい務めではない」
「何なりと」
　サンジェルマンの前で、ゴーティスが膝の上で交差した足が落ち着きなく揺れている。それを見ていると、何だか、それが他人の足のように見えてくる。動揺しているのだ、と、ゴーティスは部下に命令を下す自分を他人のように憐れんだ。
「サンジェルマン、おまえは今から、北の森の先にある農園の管理人モーリスの館へ行け。フィリップの側近が案内人として同行する」
「はい」
「館とここまでは往復で半日近くかかるが、今出発すれば、遅くとも夜には戻れよう」
「はい」
　ジェニーのせっぱつまった顔が眼前にちらつき、ゴーティスはそれを振り払うように頭を軽く振った。
「そちらで、私は何をすればよいのです？」
　サンジェルマンが顔をあげた。
「簡単だ。おまえは、その館で生後約十二ヶ月の乳飲み子を探し出せ。おそらく、幼子は他にはおるまい。そして、それが男であれば――」
　サンジェルマンが小さく首を傾げる。ゴーティスは、ケインへの怒りと嫉妬が自分の喉を焼きつくす前に、言い切った。
「――男ならば、迷わず殺せ」
　サンジェルマンの瞳が驚きでやや見開いた。が、彼はゴーティスに何らかの意図があると感じたらしく、黙って首を縦に振った。
「それでは、王、もしそれが女児であれば……どうされます？」

“女だとしたら？”

その問いにゴーティスは鼻息を荒くした。

女であれば――。

その可能性は選択肢に含めたくなかった。だが、ゴーティスの口は勝手に、サンジェルマンに淡々と告げた。

「それがもし女ならば……そのまま連れて来い。その幼子を王城に迎える」

めったなことで顔色を変えないサンジェルマンが、青ざめていた。

「王城へ？　子どもを王城に迎えいれる……のですか？　そのようなこと、ああ、まさか、本意ではございますまい？　いったい、どういった事情で――」

「子が女だった場合だ」

「ええ、つまり、半分の確率でありえることです」サンジェルマンが彼自身を落ち着かせるように、短く息をついた。

「王、急に子を迎えようなど、どういうお心づもりです？　王妃様のおられる今、それがどんな混乱をもたらすのか、おわかりでしょう？　どのような事情があるにしろ、王だけのご意思でどこの誰ともわからぬ子どもを入城させるのは、並大抵のことではありませんよ。その子はいったい何者で――」

急にサンジェルマンが息をのみ、目をみはってゴーティスを見た。彼の目は驚き、疑い、少しひるんで、最後にまた疑いに戻って、ゴーティスの上で止まった。彼が“誰”を想像したかまではわからなかったが、彼の薄青い目に宿る感情の変化を見ていると、ゴーティスの怒りがじわじわと増幅した。

「……まさか……？」

「子に王族の血は入っておる」

そんなことは問題にならないとでもいうように、サンジェルマンがなおも強張った顔で、ゴーティスのその先を待っていた。

不愉快だった。自分の舌の上にケインの名をのせなければならないのは、不快だ。ゴーティスは口の中にたまった唾を吐き出すよう

に、言った。
「それが何者か？　それは……ケインの子だ。疑いはない。ジェニーが産み落とした、あの男の子どもだ」
「そんな……まさか！」
サンジェルマンが叫び、床に両膝をついた。
「まさか、そんなはずは――彼女は崖から落ちて水流にのまれてしまったはず！　あれほど捜索しても発見できなかったのに、まさか、彼女は生きていて、そのうえ、子どもまで産んだとおっしゃるのですか……？」
サンジェルマン自身はジェニーが転落する現場には居合わせなかった。だが、ゴーティスを必死に守ったライアンや近衛兵たちから事細かな報告を聞いたらしく、彼はまるでその場にいたかと思えるほどに、状況を熟知している。
「悪運の強い女だ」
ゴーティスが乾いた声をあげると、サンジェルマンは大きくかぶりを振った。
「信じ……られません」
「では、二階のいちばん奥の部屋に行き、自らの目で確かめるがよい。あの女はそこにおる」
「ジェニーが……？」
サンジェルマンは顔を両手で拭い、天井を見上げてしばし目を留めた。ゴーティスにたがわず、彼にも思うところは多々あるらしい。
サンジェルマンがジェニーの生存を知って喜んでいるかどうかは、喜怒哀楽をあまり表さない彼の顔からは読み取れない。彼が、ジェニーに友情めいた情を抱いていたのを、ゴーティスは知っている。彼が目をすがめるのを、ゴーティスは冷たく見つめた。
「サンジェルマン」
主人の呼びかけに顔をあげた彼は、いつもの忠実な部下の顔に戻っていた。

「それゆえ、おまえは一刻も早くモーリスの館に行き、ケインの子どもを探し出せ。それが息子ならば――王位継承権のある男児なら、いつどこでどんな火種となり得るかわからぬ。危険な芽は、早いうちに摘まねばならぬ」

「ええ、承知しております」

サンジェルマンの瞳には暗い光があったけれども、明快な口調だった。彼は、同行するフィリップの側近にも気づかせず、手際よく、男児をこの世から抹殺してしまえるはずだ。

「けれど……王？　子が女児だったとして、入城させてどうなさるおつもりです？　女児であろうと、その存在は問題になりえるのではないでしょうか。それならば、いっそのこと」

ゴーティスは首を振った。それは、散々、ゴーティスが考え抜いたうえでの選択だ。

「いや、女児であれば生かしておく。どうせ王位は継げぬが、無事に成長すれば、他国との取引材料として利用価値が出よう。――俺は、その娘を“王の子”として入城させるつもりだ」

言い終わったとたん、ゴーティスは自分が誤った判断をしたように思えて気分が沈んだ。同時に、たとえそれが間違った決断であったとしても、選択するほかはない、と感じていた。

こうすることでしか、ゴーティスはケインに対抗できない。

サンジェルマンは彼に反対しなかった。だが、幾分、寂しそうに見える笑みを浮かべた。

「それで……本当によろしいのですか？」

「何が言いたい？」彼の心配そうな声の響きに、ゴーティスはむっとした。「俺は自分が何をしておるかわかっておる」

「子を迎えるというのは、王のご意思に関係なく、日常的にその子の姿を目にするということですよ」

「それは、女児だった場合のことだ！」

ゴーティスが椅子から跳ね起きると、サンジェルマンも立ち上が

った。

「聞け！　俺は、ケインの子が娘だとしたら、それを手の内に置くために王城に入れるのだ。ケインが今も生きておるかどうかは知らぬが、万が一生きておったとしよう。さすれば、あの男は何とかして自らの子の居場所をつきとめ、取り戻そうと考えるはずだ。されど、その娘が王城内で“王の子”として成長したとすれば、どうだ？　あの男も王城には容易には近づけまい。たとえ近づけたとしても、その頃までには、その娘は真の父親のことなど何一つ覚えておらぬだろう。そうして成長した娘は、国益の為、俺の為、ケインが手の届かぬ、どこかの敵国に供与される。そして二度と、あの男と顔を会わすことはない……！」

気の長い、残酷な復讐の話だ。

サンジェルマンに説明しているうち、空しさを伴った怒りがゴーティスを支配した。だがゴーティスは、自分の内なる感情に気づかないふりを決めこんだ。

サンジェルマンは沈黙を貫いており、その寂しそうな微笑は変わらなかった。やがて、彼が瞳を物憂げに揺らした後、ゴーティスをじっと見つめた。

「おまえの意見に耳を傾ける気はない」

「……ええ、そうでしょうね」

彼からの反論が来ないことで少し拍子抜けしたが、ゴーティスは彼の返答に満足した。

それから三十分も経たないうちに、サンジェルマンは小城の玄関にいた。ゴーティスは彼より一足先に外に出て、早朝の光が斜めに差し込む庭をなにげなく見つめた。刈り込まれた低木が朝露で濡れ、雨が降った後の森のような匂いを放っている。ゴーティスがつま先で地面を軽く蹴ると、その匂いがいっそう濃くなった。夏の、草いきれの匂いだ。

夏の匂いはすぐにジェニーと結びつき、ゴーティスは彼女を想っ

て、城の二階にある右端の窓を見た。彼女はそこにいる。もう手の届かない場所ではない。ゴーティスの手が触れられる場所で、まだきっと、熟睡している。

玄関のすぐ外には、サンジェルマンの道先案内人となるフィリップの側近がたたずんでいた。こんな早朝の出発と予想していなかったらしく、眠そうにあくびをかみ殺している。サンジェルマンが玄関扉をすり抜け、外に出てきた。

「行ってまいります」

ゴーティスはサンジェルマンに頷いてみせた。

「あまり遅くなるようであれば、本城まで来なくともよい。ここにも誰かが残るはずだ」

「はい、そうします」

今夜はラニス公の居城で、滞在最後の夜を締めくくる宴が予定されていた。ゴーティスたちは午後にはこの小城をあとにし、宴の後は本城に泊まる。そして、明朝には王城に向けて出発するのだ。

サンジェルマンが背後の小城を振り返り、二階の窓を見た。

「彼女を……彼女も、王城へ連れていくおつもりですか？」

「それは今から考える」

ゴーティスの心は彼女に再会したときに決まっていたが、彼には本心を隠した。ついに念願叶ってその手を捕らえたというのに、どうしてまたジェニーと離れられるというのだろう？　しかし、そうですか、と答えたサンジェルマンの顔は笑っていなかった。彼がゴーティスの返答をまったく信用していないことが、ゴーティスにもよくわかった。

「では、王、くれぐれも熟考なさってください。私は彼女を許しておりませんし、城の皆も同じです。彼女が王城の門を再びくぐろうものなら、その瞬間から、彼女の命は狙われましょう。誰にとっても、当然、ジェニーにとっても、良いことはありませんよ。それをどうかお忘れなく」

サンジェルマンはゴーティスの心を知っているかのように、彼に

言い含めるようにそう言った。対峙したサンジェルマンの瞳はちらりとも泳がず、瞳の表面が凍りついているようで、冬場の湖に張る冷たい氷を思い起こさせた。

痛いところを突かれたが、ゴーティスは彼の真剣な顔から目をそらしはしなかった。ジェニーを取り巻く状況を、彼女が直面するだろう危険を、ゴーティスが逐一考えなかったはずがない。

「ようわかっておる」

むっとしたゴーティスに、彼も屈しはしなかった。

「そうでしょうか？」

「何だと？」

彼に反論したいことは山ほどあったが、ふと、彼が過去にもこういった、挑発ともとれる言い方をしたのをゴーティスは思い出した。数年前、先王が身罷った日のことだ。サンジェルマンがゴーティスの腹心となって、数ヶ月が過ぎたばかりの頃だ。

当時、ゴーティスは無力な王子だった。父の死に際の遺言で王位を譲渡されると決まったものの、周囲は全員敵のようなものだった。当夜、ゴーティスが考えに考えた末にある計画を実行しようとした際、それに対する覚悟を試すように、サンジェルマンは冷淡にも見える態度で彼に臨んだ。それはおよそ、主人に対する物の言い方ではなかったため、ゴーティスが彼の忠誠を疑ったほどだ。

だが、そのときの突き放すような彼の態度があったからこそ、ゴーティスは、単身で計画を遂行する覚悟を固められたのだ。そして、見事にやり切った。実際には、サンジェルマンはゴーティスの大きな助けとなったのだが。

彼は、挑戦的な態度の裏で、ゴーティスとジェニーの身を心配している。そう悟ったゴーティスは、あえて、胸に積もった悔しさを全て飲み込んだ。

「早う行け」

サンジェルマンはわずかに頭を下げ、ゴーティスの前を立ち去ろうとした。二人のやり取りを離れて見守っていた、フィリップの側

近がサンジェルマンに歩み寄ってきた。
「私は――」耳元でサンジェルマンの囁きが聞こえ、ゴーティスは振り向いた。彼は驚くほど悲しそうに笑った。「私は、子が男であることを願っておりますよ」
行ってまいります、とサンジェルマンが微笑んだ。それはいつもの彼の笑みではあったが、ゴーティスの頭には一抹の疑いがよぎる。サンジェルマンは、ジェニーの子がたとえ女児でも、それを男児として葬り去るつもりなのではないか、と。
サンジェルマンと男が門に続く道をたどり、小さな後ろ姿となって消えていく。ゴーティスはしばらくの間、二人の遠くなる影を見送っていた。

第二部　2．決意－2

ラニス公地での滞在最後の夜、フィリップが主催する宴が終わる時点でも、サンジェルマンはまだ戻ってこなかった。ゴーティスは席から立ち上がりざま、出入口をさりげなく振り返ってみたが、開いた扉の向こう側の廊下には、行き来する使用人たちしか見えなかった。サンジェルマンも、彼の部下らしき者の姿もない。

彼がゴーティスに命じられた任務を終えて帰るには、少し時間がかかっているようにも思える。

男児を抹殺するのに手間取っているのか、幼い女児を伴う旅程に時間をかけているのか――。

ジェニーの子は、男と女、どちらなのだろうか。

それが男だとしたら、サンジェルマンによって亡き者とされる。

ゴーティスは母親としてのジェニーの姿を知らないが、男児の死は、ジェニーを深く悲しませ、不幸のどん底に突き落としてしまうだろう。彼女はゴーティス側の都合を理解できるはずもなく、彼に怒り狂うだろう。だから、彼女の息子がどう死んだのかは、永遠に封印されなければいけない。

だが、ジェニーの子が女だとしたら？

ゴーティスはフィリップの幼い娘を目に浮かべ、軽く頭を振った。女児であろうと男児であろうと、ジェニーとケインの二人が愛を交わした結果が子の存在だ。そう考えると、ゴーティスは、嫌悪感から吐き気をもよおした。ケインがいくら憎いとはいえ、どうしてその子を引き取ろうなどと考えたのだろう？

ゴーティスは自分がたまらなく愚かに思えた。顔を見たその瞬間に子に手をかける自分を、ゴーティスは、あまりに簡単に想像できる。

ゴーティスはテーブルに手をついた。意識が遠のくように感じら

れたのだ。それから顔を上げると、テーブルの対面に立つカサンドラと視線がかち合った。

今回もそうだが、彼女は、思いつめたような、何かを求めてすがるような目つきでゴーティスを見て、気まずそうにさっと目をそらす。おそらくは、共に部屋へ引き上げようと、ゴーティスから声を掛けられるのを待っているのだ。彼がそういった気遣いをすることは、今までに一度もないのに。

ゴーティスは早くこの席を去り、階上の一室で休んでいるジェニーのもとに行きたいと思っていた。具合の悪かったジェニーを小城から無理に本城へ移動させたため、彼女の体調がずっと気がかりだった。彼女には医師を付き添わせ、体調に急変があれば、ゴーティスのもとに知らせが飛んでくることになっていた。けれども、そんなことは単なる気休めでしかない。ゴーティスは彼女の顔色を直に見て、自分の手で、彼女のその冷たい唇や冷えた体を暖めてやりたかった。彼女の紫色の唇が、ゴーティスの頭にこびりついて、離れない。

カサンドラがフィリップに挨拶を受けたのをいいことに、ゴーティスは彼女を無視して歩き出した。すると、そのフィリップが彼をあわてて呼び止めた。

「何だ」

一晩でげっそりとやつれたような彼を見て、ゴーティスは足を止めた。

「少しだけ、よろしいですか?」フィリップは無理やりに頬を上げたような、おざなりの笑顔を向け、部屋の奥を示す。

例の事件の話だろうと思い、ゴーティスはフィリップについて歩いていった。フィリップが立ち止まった地点で、ゴーティスが部屋の扉の方を再び見ると、カサンドラがそわそわとしながら出入口の脇にたたずんでいた。外の通路には、彼女の若い衛兵も控えている。彼女は何も言わないが、ゴーティスから注意を向けてもらえること

を、ひたすら待っているようにも見えた。
用があるならなぜ自分から口を開かないのかと、妻の依存体質はゴーティスを苛々とさせ、意地悪な気持ちにさせる。
フィリップがカサンドラの存在を気に留めたのを機に、ゴーティスは彼女に目配せし、退室するように促した。すると彼女は明らかに落胆した顔をし、しかし反論はせず、すごすごと去っていった。

寝室に続く廊下の手前でフィリップと挨拶して別れた後、彼とは逆方向に曲がったゴーティスは、その行く手にカサンドラの姿を見つけて立ち止まった。二人は約十五分前に晩餐の場で別れ、彼女は衛兵と連れ立って寝室に引き上げていったはずだ。だが今、彼女は共の者を誰も連れず、一人で彼を待っている。
二人の休む寝室は反対方向にあり、この廊下の奥には、ジェニーが医者と共にいる部屋がある。カサンドラはそれをなぜか知っていて、ゴーティスの先回りをしたのだ。先に休むふりをしておきながら、夫の行く先で待ち伏せしたカサンドラの行動力は意外だった。
ゴーティスは何事もなかったかのように、彼女の方に向かって再び歩き始めた。ここでカサンドラに何かを責められたとしても、ゴーティスには彼女をまともに相手にする気はない。ましてや、彼女を思いやって、彼が今ここにいる理由を優しく説明してやる気もない。彼女が、所在なさげに下を向いた。
「迷うたのか？」
いつもと同じくおどおどした彼女を見つめ、ゴーティスは自分の背後を指差した。
「部屋は向こうだ。先に戻っておれ、俺はこちらに用がある」
「……あの……！」
すれ違いざま、自分の手をぎゅっとつかんだカサンドラに、ゴーティスは驚いた。ゴーティスがその瞳を見ると、彼女ははっとして手を離し、頬を真っ赤にさせて彼から顔をそむけた。
「王、あ、あの……私……」

思い切った行動を起こしたくせに、彼女ははっきりとした文句を口にしない。

ゴーティスはいつものように、カサンドラに苛立った。ゴーティスが彼女を見ていても、彼女はいつまでも顔を上げない。ゴーティスが苛立ちを抑えきれずに唇の隙間からため息を漏らすと、彼女はますます顔を硬くし、俯いた。

いらいらして怒鳴りたくなるのを堪え、ゴーティスは、体を縮めているせいで子どものように小さくなっている彼女を見下ろした。カサンドラは、ジェニー以上に華奢で、折れそうなくらいに手足が細い。それからゴーティスは彼女をやり過ごそうと、震える彼女に向かって身を傾け、右頬に軽く唇を押しつけた。

「これで満足したか、妃殿。明日は出発の日だ、早く休むがよい」

ゴーティスはそう囁き、カサンドラの横を通り過ぎようとした。

「王！」

「まだ、何か用か」

うんざりしながら振り返ろうとすると、ゴーティスの背中にカサンドラが飛びつき、彼女の腕が後ろから彼の腰に巻きついた。泣き声にも似たカサンドラの叫びが、通路の冷えた空気を切り裂いた。

「どうか……どうか、お待ち下さいませ……！」

おとなしい彼女がゴーティスの腰にすがりついて、彼の足は引き止められた。

「今宵は部屋へ……部屋へお戻り下さいませ！　お部屋に……！」

彼女は思った以上に力強くゴーティスの腰を引っ張り、ゴーティスは呆気にとられて、腹の前で結ばれた彼女の手を無感動に眺めた。

「どうか、王……」

ゴーティスは、聞き分けのない幼児さながらの彼女の行為にため息をつかされた。すると、彼女の手がゴーティスの腰にいっそうきつく縛りついた。

「お……願いでございます……！」

「カサンドラ」

ゴーティスは通路の突き当たりにいる衛兵に目をやった。その男の背後にある部屋に早く足を踏み入れ、ジェニーの無事を確かめたかった。

「おまえは先に部屋で休んでおれ。我が妻の願いとあれば俺も聞き入れてやりたいところだが、今宵は用事がある」

「いいえ、いいえ……！」

「わがままを申すな。一国の王たる俺にはすべき任務が山ほどある。今宵だとて、同様だ」

「でも、今日だけは……今宵だけは……」

「さっさと部屋に戻れ」

ゴーティスの背に触れていたカサンドラの顔が離れた。ゴーティスが動こうとすると、彼女のほそい声が通路に響いた。

「ああ、王！　私にも、私にだって……王、私には、この国の世継ぎを産む使命があるのです！　そのためには、王にも……王のご協力がないと……！」

声は弱々しい嗚咽に変わり、彼女はまたゴーティスの腰にしがみついた。

夫の顔色を常にうかがうカサンドラが、決死の行動に出たといえよう。これまでの彼女の行動を鑑みれば、賞賛に値する行為だ。

ゴーティスは廊下の奥にいる衛兵を見つめ、冷めた心でため息をついた。これがほかの男相手なら、彼女の行動も功を奏していたことだろう。世間一般の夫なら、妻がそこまで精神的に追い詰められていたのだと、彼女に優しい言葉の一つでも掛け、抱きしめてやるところだ。

けれども、誰か一人の女のために動く心臓は、ほかの誰かのためにやすやすと動きはしないのだ。涙ながらの彼女の訴えは、ゴーティスの心を捕らえることはなかった。逆に、ジェニーの居場所に向かう寸前で足止めされた状況に、ゴーティスは腹が立った。

ゴーティスは自分の腰にかけられたカサンドラの腕に手を触れた。そのとたんに嗚咽が止み、彼女の腕から力が衰える。

「世継ぎを、な」
ゴーティスは両手を使って彼女の腕を取り去った。
「そうだ、王妃の役目は子どもを産むことだ。おまえは正しい」
カサンドラの腕をはぎ取ってゴーティスが彼女に向き直ると、彼女は鼻をすすりあげながら彼を見上げた。彼女の両目には涙が溢れ、頬に伝わった涙の跡が通路の明かりに照らされていた。期待感だろうか、彼女は顔をほころばせかけたが、ゴーティスは彼女の腕を無情に押し戻した。
「だが、今宵は協力できぬ。一人で部屋へ戻れ」
「でも、私の任務は一人ではできないのです……！」
「手を放せ」
「ああ、どうか！　部屋に独りでいるのは、もう十分で――」
ゴーティスはカサンドラの腕を振り払った。
「ならば、おまえ付きの衛兵でもかまわぬ、誰か別に相手を見つけろ！　俺は狭量ではないゆえ、一度、二度ならば目をつぶってやる！　さあ、向こうへ行け！」
カサンドラは、目をひん剥いたかと思うと、数歩後ろによろめいた。
ゴーティスが彼女をよけて歩き出すのと、カサンドラが逆方向に走り出すのは、ほぼ同時だった。

頭上で女がしのび笑いをしているような気配を感じ、ゴーティスははっとして目を覚ました。見慣れない部屋の窓の外は、夜の闇がいっそう深くなっている。壁面に掛かった絵画の中の婦人像を目にし、ゴーティスは今も夢か幻に身を置いているように思えて、さっと周りを見回した。室内には、ゴーティスと、寝台に眠るジェニーしかいない。
「……気のせいか」
医者と入れ代わりにジェニーの傍につき、ゴーティスは知らない

間に眠ってしまったらしい。ゴーティスの手の先には、ジェニーの手があった。自分の手が彼女の手に繋がっているというだけで、ゴーティスは安心する。

ジェニーの手は温かく、彼女は安心しきったように眠っていた。処方された薬のせいで彼女の眠りは深く、ゴーティスのいる間、彼女は一度も目を開けない。目を開けて自分を見てほしいとも思うが、この平和で静かなときが破られるのを惜しんで、ゴーティスは沈黙を保つ。

しかし、ふと、ゴーティスはジェニーの額にかかる前髪を触った。彼女に、特に反応は見られない。次にゴーティスは、彼女の存在を実感しようと、ぎゅっと強めに力をこめて彼女の手を握った。すると今度は、彼女は顔をわずかにそらせ、眉間に小さくしわを寄せた。彼女は、眠りを邪魔されるのが気に入らないらしい。その正常な反応に気をよくして、ゴーティスは笑う。

ジェニーのいない日常を、もう受け入れたくない。自分の視界に彼女の姿を毎日組み込まなければ、気が済まない。

ゴーティスは、ジェニーを王城に戻すつもりでいた。彼女を引き入れようとすれば、王城から大反対されることは分かりきっていたが、ゴーティスには何の迷いもなかった。

ジェニーはもう、モーリスの館には戻れない。ゴーティスがそれを許さず、フィリップも彼の意思に倣うからだ。彼女は自分の帰る場所はほかにあると思っているから、ゴーティスは、激しく、大きな抵抗に出合うだろう。だが、彼女が何と言おうと、彼女の帰する処はゴーティスのいる処だ。彼女の意思など、どうでもいい。

サンジェルマンの帰着の知らせはまだなかった。彼が小城に留まっているかもしれない、とは、ちらりとも思わない。ゴーティスは、彼はどんなに遅くなろうとやって来る、と確信に近い思いを抱いていた。彼は、“女児”を伴って現れるのだ。

ゴーティスの鼓動が胸を大きく打ち始めた。

ゴーティスは子どもなど要らないし、興味もない。興味を持とうとした過去はあるが、それは、自分の一部がジェニーに受け入れられた結果として、子を受け入れてみようと思ったからだ。ただ、当然、子の父親が誰であれ、ジェニーが、その子の母親である自覚は変わらないはずだ。彼女は、昨夜うなされていた無意識下で、「殺さないで」と何度も子の助命を嘆願していた。

ジェニーには、物理的に、帰る場所はもうないが、それがどこであろうと、彼女が帰りたがるのは子の居場所である。つまり、もし彼女の子が王城にいるのなら、彼女が帰る場所もまた、おのずとそうなるということだ。

女児の方が都合がいいと気づいてから、ゴーティスには胸やけに似た、はっきりとしない不快感が渦巻いていた。

ちょうどそのとき、王、と、部屋の外から控えめな男の声がし、ゴーティスはその声から来訪者を特定して、つい身構えた。静まりかえった部屋で扉がきしんで開く。サンジェルマンがゴーティスを見て、普段の笑みを浮かばせた。

「遅かったな」

「は。申し訳ございません」

ゴーティスがジェニーと繋ぐ手に、彼の視線がちらりと注がれたようだったが、彼は何も言わなかった。彼は、床を一歩一歩踏みしめるように、ゴーティスの方に歩いてきた。

「幼児を連れての旅では、どうしても歩みが遅くなりまして」

“幼児を連れて”。

予想どおりの返答だった。

これで――子を盾に取って、ジェニーを王城に連れていける。

ジェニーを得られた嬉しさと、子どもを得た嫌悪で、ゴーティスの心が二つに割れた。

「つまり、娘だったわけか」

「はい」

想像でしかなかった未来図が、ごとり、と大きな音をたてて動き、現実の将来へ進んでいく。緊張で、ゴーティスの下腹が鈍くうずいた。

「お会いになりますか？　とても元気で、それは美しい御子ですよ」

「顔を見る気はない」

サンジェルマンが優しい笑みを浮かべた。

「そうですね、城に戻ればいつでも会えましょうから」

その笑顔は、小城を出発するときの彼の印象から考えると、ゴーティスには不可解に映る。ゴーティスは片方の眉を上げ、サンジェルマンを重く見据えた。

「どうかされましたか？」サンジェルマンが言った。

「……おまえは、ジェニーの子が娘だったとしても、殺すものだと思うておった」

ゴーティスが答えると、まさか、と彼は目を細めて笑った。

「その方がよかったですか？」

からかうような軽口は、むしろ不愉快だ。ゴーティスが無言で見返すと、彼は小さく肩をすくめた。

「ああ、王には参りましたね。――そうですね、当初は、私もそのつもりでおりましたよ。子の存在は何かとやっかいですからね」

彼が悪びれずに言うのを、なおも不可解に思ってゴーティスは見つめる。

「ふん。では、何ゆえ？」

室内に入ってきて初めて、サンジェルマンがジェニーを見た。

「私に、王の御子は殺せません」

「――なに？」

「王、子の父親について、彼女に尋ねたことはおありですか？　ジェニーの娘は、王の瞳を持ち、王にもよく似ております。あの娘が王以外の父親を持つとは、とても思えません」

「幼少の頃のケインと俺は、見分けがつかぬほど似ておったそうだ。子が俺と似ておっても、何ら不思議はない」

「ですが、あの御子は――」
「こやつは否定しなかった！」
ケインとジェニーを追い詰めた崖の手前で、彼を庇ってゴーティスの前に立ちはだかる彼女は、ゴーティスが彼女の胎内にいる子に言及したとき、何も言い返さなかった。ケインの子ではない、と反論しなかった。そのときにお互いを支えあうように重なっていた二人の手が、ゴーティスの目に焼きついている。
その光景を思い出すだけでも苦痛だ。そしてそれは、ゴーティスにとって信じる以外にない、揺るぎない真実だ。
ゴーティスが声を荒げたせいで、ジェニーが低くうめいて、顔を左右に振った。
「王」
「それはケインの子だ」
「王、せめてジェニーに――」
「黙れ」
ゴーティスは彼女の手を握りなおし、サンジェルマンを睨みつけた。思い出したくもない苦痛とどす黒い嫌悪で、ゴーティスの口の中がからからに乾いていた。
「今度その話を持ち出してみろ、サンジェルマン。そのときは……娘の命は俺が葬りさる」
ゴーティスの視線の先で、サンジェルマンが、あきらめたように、開きかけた唇を結んだ。

第二部　2．決意－3

ラニス公本城の庭園は、ちょうど春の装いに変わりつつあり、白やピンクといった淡い色の花が咲き乱れていた。山から下りてくる空気は涼やかで、朝の空気はまた特別に心地よい。ジェニーがここに来て既に一週間、今朝も、彼女は屋内で召使たちに構われるのを厭い、庭園をあてもなく歩いていた。毎日庭に来るジェニーの姿に見慣れた庭師たちが、作業の手を休め、口々に挨拶をする。ジェニーも挨拶を返す。彼らの誰もがにこやかに接するが、ジェニーは、彼ら全員が彼女を追う監視の目だと、とっくに気づいている。

ジェニーが本城へ移動した次の日の朝、ジェニーと顔を会わすこともないうちに、王はいつのまにか城を発っていた。

衝撃的な再会のわりに、あっけない別れ。

彼との再会そのものが白昼夢のようにも思え、予想外の淡々とした最後に、ジェニーは、自分が望んだほど彼は自分との再会に喜んだわけではないのだと落胆し、それを当然のこととして受け入れようとした。ところがその矢先、「王はあなたを王城に迎え入れるつもりだ」と、ラニス公から告げられたのだ。ジェニーは驚きのあまり、しばらく口がきけなかった。

ラニス公によると、王城からの迎えが来る日までジェニーを城で手厚くもてなしてもらいたい、というのが、ゴーティス王のたっての願いなのだそうだ。しかしその本意は、彼女が一人で逃亡することがないように、ラニス公に身辺を注意深く見張らせる、ということだ。王は、ジェニーを足止めする切り札を手に入れているというのに、それでもなお、彼女が逃亡するのではないかと疑っている。そして、王の勝手で一方的なその要求は、律儀なラニス公によって、忠実に実行されているのだ。

（カミーユを捕らえられて、私が逃げるはずがないじゃない……！）

ゴーティス王は、ジェニーの娘カミーユを奪い去った。ジェニーの心の拠り所であり、弱点である彼女を、王は拘束したのだ。ジェニーは激怒した。

王城に引き取られた、とラニス公は表現したが、母親であるジェニーの知らぬうちに娘を連れ去るという乱暴さは、誘拐とどこが違うのか。どんな事情があろうが、それが子の父親であろうが、王であろうが、許される行為ではない。子どもを勝手に連れていかれて、怒らず、悲しまずにいる母親が、どこにいるというのだろう?

王の子なのだから王の手に渡って当然、というラニス公には、ジェニーの怒る様が奇異に映ったようで、困惑しきりだった。ジェニーが心情を説明すれば彼は穏やかに耳を傾けてくれたが、ジェニーの常識は通じず、彼はいつまでも彼女を理解できず、二人の会話はどこまでも平行線をたどって決して交わりはしなかった。お互いに困惑を深めるだけだった。王城でジェニーが接した人々と同じ考え、同じ反応だ。王という絶対的な壁の前に、独立した個人は、為すすべもなく立ち尽くすしかないのだ。

だが、王に猛烈に怒り、理不尽で一方的な彼の行動に反発しているのに、ジェニーは彼の顔が見たくて仕方なかった。ジェニーが王を思い出して唇を震わせるのは、憤りと恋心からだ。彼を見れば怒りを感じる自分がいるのに、彼を近くに感じられるところに居たい、と思う自分もいる。

ラニス公は、「王はあなたを愛しておいでだから」と度々、口にした。けれども、王は不可解で気難しく、心の内をさらけ出さない。彼の言動の裏にはいつも何らかの含みがある。通常なら、側に呼び寄せることが愛情の表れだとしても、ラニス公の言葉をうのみにするのは、ジェニーにとって、簡単なことではなかった。

王に憤慨し、口惜しさに涙をにじませ、心をときめかせた一週間と数日が過ぎ、ついに、王城からの使者がやって来た。ジェニーはラニス公に呼ばれ、使者が待つという部屋に向かった。戦いに出向

く前の兵士のように、ジェニーの気分は高揚していた。
王城に入ることが嫌でも、抵抗するだけ無駄だ。それに今は、カミーユもそこにいるのだから、ジェニーは、彼女を取り戻すためにそこに行くしかないのだ。
ジェニーと娘は、今までに一日たりとも、お互いから離れたことはない。毎日、違う感情がジェニーの心を行き交ったけれども、日を追うごとに増してきたのは、カミーユと離れた寂しさだ。カミーユは元気すぎるほど元気だが、彼女がちゃんと食事をしているのか、お腹をこわしていないか、ぐっすり眠れているのか、母親が恋しくて泣いているのではないか、毎日毎日、ジェニーは彼女のことを思って心配した。毎時間毎分、彼女を腕に抱きしめたくて、寂しくて、どうしようもなくなる。そして、二人が離れる原因を作ったゴーティス王には、毎日、新しい怒りを感じていた。

開かれた扉の先、ラニス公の隣に、二年前と変わらない微笑をたたえたサンジェルマンが立っていた。ジェニーは扉をすり抜けようとし、サンジェルマンの対面に立つ男を何気なく見て、男に目が釘付けとなった。ジェニーと目があって、男が軽く会釈した。
「ああ、嘘……！」
――兄ローリーだ……！
ジェニーは感極まって、男に駆け寄ろうとしたが、あらためて男の容貌を目にして、立ち止まった。男はジェニーの記憶にある兄よりは体格がよく、濃い青い瞳を持っていた。ジェニーと同じ茶色の瞳ではなかった。
ジェニーが足を止めると、男の瞳がサンジェルマンに動き、困ったように笑った。笑い方も、ローリーとは異なった。
（ローリーじゃなければ、誰？）
ジェニーが男の存在に戸惑ってサンジェルマンを見ると、彼は胸に手をあて、ジェニーに礼をした。
「久方ぶりだ、ジェニー嬢。お元気そうだ」

彼は以前のような柔和な笑顔を見せたが、ジェニーにはなぜかその言葉が本心ではないと思え、かすかな寒気を感じた。

「こちらはユーゴ・ベアール殿だ」

ジェニーが聞いたこともない名前を持つ男は、ジェニーに歩み寄って、その手に口づけを落とした。

「初めまして」

ベアールが破顔し、彼の顔面いっぱいに笑みが広がる様子を見たジェニーは、彼はやはりローリーとは別人なのだと、がっかりした。すると、彼の大きな笑みは苦笑いに移り変わった。

「妹にまで間違われるとは、たいしたものだね。私とあなたの兄は、本当にそっくりらしい」

「――私の兄のこと、知ってるの？」

ジェニーが驚いてベアールを見ると、彼は肩をすくめた。

「私が実際に彼に会ったことは一度もないのですがね、彼を知る者たちが私を見て、あなたと同じように勘違いしたのですよ。私の姉はさすがに間違えませんでしたが、彼と私の父がよく似ている、と言っておりました。私は父に生き写しですから、そこはやはり――同じ血筋を引く者同士、なのでしょうね」

ベアールがサンジェルマンに振り返って、笑う。

ジェニーはひどく混乱した。ベアールの口から流れ出た数々の言葉は、一本の繋がった筋となって、ジェニーの頭にすんなりと入っていかなかった。サンジェルマンがベアールに笑みを返し、そして、ジェニーにすかさず言った。

「ジェニー嬢、すまなかった。まだあなたには、あなたの“家”について説明していなかった」

また、自分の知らないうちに、何かが勝手に進行している。

サンジェルマンの事務的な口調に不安と不信感を覚え、ジェニーは彼に眉をひそめた。

「私の家って、私の故郷のこと？」

「いえ、あなたの父親の実家、つまり、ここにおられるベアール殿

の家のことだ」

ベアールは、紋章の入った帯止めと剣の鞘を身に着けている。紋章入りの物品を所有し、装着できるのは、貴族だけだ。そしてサンジェルマンに同行してきたのだから、ベアールはヴィレールの貴族だ。サンジェルマンは、ジェニーがベアール家の一員だと言っているのだ。

「……そんなの、ありえないわ」

ジェニーがサンジェルマンを見上げると、彼は彼女を覗き込むように見つめながら、ゆっくりと頷いた。気づけば、ラニス公やベアールが、心配そうに二人を見守っている。

「にわかには信じ難いだろうが、事実だ。ジェニー嬢、あなたは正真正銘、ベアール家の血をひく一人だ」

ジェニーは、とんでもない、と自分の内で叫び、真っ向から彼の言葉を否定した。

「ちがうわ、そんなこと、あるわけない。私は貴族なんかじゃないわ！　それもヴィレールなんかの――」

おもむろに、サンジェルマンが腰のあたりから短剣を出した。古ぼけた鞘の形状や絵柄に、ジェニーははっきりと見覚えがあった。ジェニーが紛失したものと嘆いていた、彼女の短剣だ。彼が何の目的でそれを出したのかは分からないが、ジェニーは否応なしに目を引きつけられた。

「それは……私の短剣だわ」

「そう、あなたが父親からもらった短剣だ」

サンジェルマンは同意し、ベアールを呼び寄せて、彼の剣を差し出させた。彼の剣の鞘には、ジェニーの短剣にあるのとまったく同じ図柄の、剣（つるぎ）の紋章が彫られていた。

「だから？　同じ紋章入りの物を持っているからって、私がその家の出身だってことにはならないわ」

「ええ、私だってそうは思わなかった」

サンジェルマンは再び、柔和な微笑を見せた。

「ジェニー嬢、あなたにはベルアン・ビルに叔母がおられるだろう？　未婚ながら息子をもうけ、そこでひっそりと暮らしている、ジョセフィーヌという女性。あなたの父親の妹だ」

「ええ、そうよ」

「私とベアール殿は彼女に会ったのだ。それで、判明した。彼女はベアール殿の実姉で、あなたの父親は、家を飛び出して行方不明となっていた、彼の長兄なのだと」

「そんなの……嘘よ」

「いや、事実だ」

とても信じられなくて、ジェニーは両手で顔を覆った。指の隙間からベアールと視線が合うと、彼の目が同情を含んだ眼差しに変わった。彼がそんな表情をすると、まるで兄に見つめられているようだ。兄が生き返ったように感じられ、なつかしくて、ジェニーの胸が痛んだ。

「――それゆえ、私は今から、あなたをベアール家にお連れする」

次にサンジェルマンが放った科白を不審に思い、ジェニーは尋ねた。

「でも、カミーユは王城にいるんでしょう？　王城に行くんじゃないの？」

「いえ」サンジェルマンが否定した。「テュデル宮の改装が終了するまでの間、あなたにはベアール家で過ごしていただきたい。それほど大掛かりな改装ではないゆえ、ほんの一月ほどだ。離宮は、王妃様のおられる後宮ほど手は行き届かぬかもしれないが、あなたにはむしろ都合がよいだろう。何不自由なく生活できるよう、整えさせるつもりではいるが――」

思いがけない単語を耳にし、ジェニーの心が端から内側へと一瞬で凍りついた。

（王妃？　彼は、“王妃”と言った……？）

「……どうかされたか、ジェニー嬢？」

サンジェルマンに呼ばれた自分の名前が耳の中でくぐもって鳴り響き、やっと、ジェニーは我に返ることができた。けれども、自分の体を直立させる二本の足の感覚が、戻ってこない。

「王は……結婚したの？」

怪訝そうにジェニーを見た後、サンジェルマンがちらりとラニス公を見た。「――知っていると思っていたが？」

ジェニーは首を振った。

「知らなかったわ」

だがジェニーはそう答えながら、約二週間前、まだモーリス宅にいた頃、「ヴィレール王ご夫妻が当地を訪問されるため、外出を控えるように」とモーリスに命じられたことを思い出していた。過去の記憶が消えていた当時、ヴィレールの王は、庶民のジェニーが一生関わることのない、無縁の存在に過ぎなかった。遠すぎる存在で、気にかけもしなかった。だが、ゴーティス王がジェニーにとってどんな存在かを認識していなかった頃から、ジェニーは既に、彼が妻帯者だと知識として知っていたのだ。

王が、どこかの女と結婚した。

二年前にも同盟による政略結婚の話が出ていたぐらいだ、少し頭を働かせれば、彼がいつまでも独身でいないだろうことは、ジェニーにも想像できたはずだ。王が結婚したのは、ヴィレールが他国と同盟関係を結んだ結果だろう。彼が結婚したのは国益のためだろうと頭では理解できるが、ジェニーの心が納得できるはずがない。

ゆっくりと流れこんできた悲しみが、速度を増して、ジェニーを襲った。今にも押しつぶされそうな胸の痛みに、ジェニーの息が乱れた。鼓動が全速力で体中を駆け巡って、悲痛な思いが体の隅々まで行き届く。

王が昔言った「おまえとなら同盟を結ぶ」という言葉が、ジェニーの胸のうちにむなしく響いた。それには、彼がジェニーを信じ、彼女とだけは心を通わせようとした想いが込められている。その頃と今の自分の気持ちが違うからこそ、わかる真実がある。

（私は、彼が好き……！）

ジェニーは立っているだけで苦しくて、呼吸ができなかった。胸のうちを叫び出したかったが、何から言えばいいのか、ジェニーにはわからなかった。胸には涙が溜まり、膨張し続けるのに、実際のジェニーの目からは本物の涙は出ない。悲しすぎて泣くことすらできないとは、こういうときを言うのかもしれない。

ジェニーが言葉を失っていると、サンジェルマンが言った。

「ラニス公、ベアール殿、少しだけ、席を外していただけますか？」

ジェニーが無理やりに顔を上げると、サンジェルマンの微笑みがわずかに暗い翳を帯びた。

ラニス公とベアールが退室するなり、サンジェルマンの顔から笑みが引いた。

「王が結婚されていることが、そんなにも衝撃的だったのか」

彼にはめずらしい、少し高圧的な言い方に違和感を覚えながら、ジェニーは彼を見返した。

「あの人はまだまだ結婚しないと思っていたの。……勝手に」

「あの方の立場をわかっていない、都合のよい考えだ。王はこの国のために結婚されたのだ」

それはジェニーにも理解できる。

「されど、どういった心境の変化だ？　“おまえ”は王のもとから他の男と逃げ出したというのに、王が結婚されたと知って、一度失った地位が惜しくなったのか？」

「そんなの、そんなことは一度だって思ったことはないわ！　私はただ、王が結婚するとは思っていなかったの、ただ、それだけよ……！」

ジェニーがケインにどんな種類の気持ちを抱いていようと、王とは別の男と王城から逃亡した事実は消えない。言い訳すらできないことが口惜しくて、ジェニーの目にうっすらと涙がにじんだ。サンジェルマンは彼女の涙に気づいたらしいが、何も言いはしなかった。

それから、サンジェルマンは手近にあった椅子に腰掛けた。そして、抑揚を感じさせない口調で、ジェニーに言った。
「いっそ、おまえが死んでくれていたらよかったと、私は時々思う」
ジェニーは衝撃を受け、サンジェルマンの無表情にも見える顔を見つめた。彼は、にこりとも笑わなかった。
「どうして」
「理由ぐらい、賢いおまえなら想像がつくだろう」
「私がいると、いろいろと不都合だから？」
王妃にとって、王の愛人など邪魔なだけだ。王城にとっても、ジェニーは面倒な人物との認識しかないだろう。
ほら、分かっているじゃないか、というように、サンジェルマンが眉を上げた。
「カミーユを返してくれれば、私は……どこかに行くわ」
行く当てなど当然ないが、王に妃がいる今、ジェニーは彼の愛人の一人になるために、王城に出向きたくはなかった。カミーユさえいれば、ジェニーは何とか、どこででも生きていける。
サンジェルマンが目を細めてジェニーを見て、力なく、首を振った。
「それは無理だ。あの娘は王の御子だ、王城で面倒をみる。それに、おまえを自由にするわけにはいかない」
「サンジェルマン、彼女は私の娘だわ！」
「王の娘でもある」
「ええ！　だけど、彼女は私の娘なのよ！」
サンジェルマンが、にっこりと笑って言った。
「子は渡さない。“ジェニー”、おまえにあるのは、王城に行くか――死んで行けなくなるか、そのどちらかの選択だけだ。私としては後者を望むが……おまえは、どうしたい？」

第二部　2．決意－4

ジェニーを迎えにラニス公地に発つ前日、サンジェルマンは女官長、侍従長とともに、ある一室で王妃の到着を待っていた。

王夫妻が旅から帰宅して、まだ一週間だ。

ラニス公地でジェニーを偶然に発見するという劇的な出来事が影響してか、王はここ最近、ずっと穏やかな面持ちだ。彼が王妃を見るとき、その顔に常に浮かんでいた苛立ちが、いつのまにか消え去っている。ところが、一方の王妃は、以前にもまして王に怯えた態度で接し、彼女の側から夫を遠ざけているように皆の目には映っている。王妃が語ろうとしないので真相は分からないが、ジェニーの出現だけが二人の不仲に拍車をかけたのではなさそうだ。

数日前、女官長はサンジェルマンの実家でジェニーの娘カミーユとの対面を果たした。女官長は直前まで気乗りしなかったようだが、カミーユは物怖じせず、突然に現れた女官長に向かい、にっこりと笑いかけた。それから、サンジェルマンと初めて顔を会わせたときのように、女官長に小さな指のついた手を伸ばし、鼻をつかんだ。カミーユが彼女を魅了し、懐柔した瞬間だ。女官長を説得する文句を何通りも用意していたサンジェルマンは、「王の娘に相違ないわ」と諸手をあげての歓迎ぶりを示す彼女を見て、力強い味方を得た、と、そのとき安心した。

その女官長が、今この場で、王妃にカミーユの存在と入城を告げる。

昔からずっと待ちわびていた王の子を胸に抱けることで、カミーユと会ってからの女官長は上機嫌だが、王妃にとって、庶子は歓迎される存在ではない。まして、王との間にまだ子が誕生していない王妃には、なおさら不愉快だろう。

サンジェルマンが同席していることに動揺した王妃は、女官長が

彼女の顔面に投げつけるようにして言い放った発言に、いきなり、静止した。

「ですから――」発言を繰り返そうとした女官長の肩をつかみ、サンジェルマンは彼女を制した。

王妃には、驚愕の事実を受け入れさせる時間が必要だ。王妃も彼女の侍女も、次の句が継げず、ただただ女官長を見つめている。

静寂がしばし流れ、王妃がようやく口を開いた。

「……あの、王に……子がいるって……？」

サンジェルマンの許可を得るように女官長が振り返り、彼は小さく頷いた。

「はい」女官長が王妃に答えた。「訳あって、今まで別の場所で暮らしておりましたが、それはそれは可愛らしい、一歳数ヶ月の女の子ですわ。あんなに小さいのに、王にそっくりでいらして……！」

王妃が首をぶるぶると振った。

「……そんな、ばかな……」

サンジェルマンは冷静に王妃を見ていた。王妃は唇を噛み、顔を伏せる前には、彼女の目尻に涙が光っているようにも見えた。

「あの、でも……」

女官長からサンジェルマンに王妃の注意が移り、彼は王妃を見返す。王妃が躊躇したように目を一瞬そらした。

「本当に……王の庶子なのですか？」

「本当ですよ」

「王自らがそう証言なされているのです、王妃様。私も御子の顔を拝見しましたが、彼女は王の幼い頃そのままです。間違いはございませんわ」

サンジェルマンの後に女官長がそう続けると、王妃は言葉に詰まり、うな垂れた。そのときはさすがに、彼も王妃に若干の同情を覚えた。

「そう……そうなの……」

「御子は一週間後に後宮に入ります」

「王城で育てるのですか！」
「王の御子です、当然にございましょう？」
女官長の態度は、彼女が王妃の立場と逆転したような、そんな錯覚をサンジェルマンにおこさせた。
「でも、私という存在がありながら、どうして……。私が子を産めば、庶子などここには必要ないのではありませんか」
女官長が王妃にたたみかけるように言った。
「王妃様、ヴィレールでは、王の御子は王城で育つのです。それに、庶子は女児で、王位継承権はありません。王妃様が心配なさる事も、気にかける必要もございませんわ。――私どもは、この後宮に王の御子が入るという知らせを、王妃様にお伝えしたかっただけにございます。この件で、王妃様のお手をわずらわす事は一切ございませんわ。御子の面倒は私どもでみますので……」
女官長はサンジェルマンに誇らしげな笑みを向けた。
「どうか、王妃様はご世継ぎを早くお産みあそばすことだけをお考えください」
王妃が王に嫁いで以来、耳が痛くなるほど聞かされてきた科白だろう。結果的に子に恵まれていない王妃は、何も反論できなくなったようだ。
サンジェルマンは王妃を見て微笑み、女官長の言葉をさらに強調するように言った。
「王妃様、どうか早く、ご世継ぎをもうけてください。王も王妃様もお若いのです。お二人が協力なされば、それもすぐにでも叶いましょう」

王妃が去り、王妃に同情的な態度を見せた侍従長が去り、サンジェルマンと女官長の二人が部屋に残った。王の子を入城させる日について、二人は簡単な確認をする。女官長の指揮下で、後宮は幼子を迎え入れる準備を着々と進めつつある。乳母や世話係も選ばれ、抵抗が予想される大臣たちと子の対面も計画されている。王妃への

報告も、ついさっき済ませた。女官長が先んじて配慮し、関係者たちに根回しをした結果、サンジェルマンが動く必要はほとんどなかった。

「女官長、ヴィレールでは、いつから王の子全てが王城で育つようになった？」

彼女が、さも当然と王妃に断言した言い回しを持ち出し、サンジェルマンは笑った。

「まあ、私は“全ての子”とは言っておりませんよ？」

女官長はそう言い返し、彼と一緒に笑った。

「でも、あの子ときたら……本当に驚きましたわ。王が幼い頃に戻られたような姿で」

「ああ。王によく似ている」

サンジェルマンが頷くと、彼女が彼をじっと見つめて言った。

「あの子は……本当にあのジェニーが？　ジェニーが生きていたなんて、私は、今でもとても信じられません」

サンジェルマンにしても、信じられず、受け入れ難かった事実だ。彼はジェニーの生存に信じられないでいたが、彼女を失って苦悩してきた王が決して放そうとしなかった彼女の手を見て初めて、“彼女は生きている”と実感できたのだ。実物の彼女を目にしていない女官長なら、信じられなくて当然だ。

「王妃様にも、ジェニーの件を話さねばならないな」

既に改装工事の始まっているテュデル宮を思い描き、サンジェルマンは女官長に告げた。そうですね、と、さっきまでの陽気さを消し、彼女が小さく頷く。

「――それにしても、ジェニーを王城に再び住まわせるなど、私は、夢にも思いませんでしたわ」

「私も驚いている」

「サンジェルマン様、あのジェニーなのですよ？　ここを逃亡したあの娘ですわ。それを、王はどうしてお許しになるのです？　しかも、離宮までお与えになって！」

「……王は彼女を愛しておいでなのだろう」
「ええ、それはそうでしょうけれど。でも王は、あの娘のことで長い間ひどく苦しまれたのです。それはあなたもご存知ではありませんか。それを何の咎めもなく……。ああ、サンジェルマン様、王は彼女をお許しになられても、私はとても無理ですわ！　あなただって――」
「私もジェニーのことは許してはいない」
「そうであれば、サンジェルマン様？　王と王妃様のために、彼女が入城を果たせない状況を作ってあげればよいのです。できれば……永久に」
サンジェルマンが彼女の希望を察し、その瞳を見つめると、彼女が期待に顔を輝かせた。彼女の希望は、サンジェルマンがジェニーと王の再会を知ってから、ずっと心に抱いていた彼の願いでもある。
「皆のためには、ジェニーはこの世にいない方がよいのです、サンジェルマン様」
ジェニーが今度再び王の前から消えたら、と考えると、サンジェルマンは女官長に即答できなかった。

当初の計画どおり、サンジェルマンは自宅で一時的に預かっていたジェニーの娘を連れ、王城へと戻った。事前に女官長たちが奔走したせいで、王城はそれほどの抵抗も見せず、幼子を受け入れた。ゴーティスは子の入城に立会いはしなかったが、その知らせは、サンジェルマンによって彼にもたらされた。子との対面も期待されたが、ゴーティスはそれをむげに断った。その後も、サンジェルマンや女官長がゴーティスのために対面の場を何回か設けようとしたが、彼は逐一、それを拒むか、無視を決めこんでやり過ごした。
王城の人々がカミーユに自然に慣れる一方で、ゴーティス以外に唯一、彼女に決して近づこうとしない人物がいた。王妃カサンドラだ。彼女は同じ棟に住んでいながら、ちらりともカミーユの顔を見

に行かないそうだ。そして、彼女はゴーティスの前で無関心なふりを通し、子について、質問のひとつも向けなかった。同郷の侍女たちから行動を制限されているせいかもしれないが、それは、彼女のささやかな自負の表れだろう。

だが、カミーユと同じ後宮に住むカサンドラは、子の存在に逆上し、怪我をさせたり、毒を盛ったり、忌まわしい過ちを犯すとも限らなかった。彼女はおとなしいが、同郷の侍女にそそのかされ、発作的にそんな行為をしかねない脆さを抱えている。ゴーティスは、子が早死にしようが怪我をしようが気にはならなかったが、ジェニーを王城に引き止めておくために、子に少なくとも一年は生きていてもらいたかった。

そんな中、カミーユの入城後初めて、ゴーティスは後宮の扉をくぐった。王が夜以外の時間に後宮を訪ねないことを知る女たちは、彼の唐突な登場に浮き足だった様子を見せたが、彼は娘やカサンドラのいる階上には向かわず、その足でサロンに直行した。

ジェニーが好んで過ごしたサロンから足が遠のいて、ゴーティスがサロンに来たのは本当に久しぶりだった。彼女の息吹がそこかしこに残る場所に、苦痛を感じずに立っていられるのが、ゴーティスには嬉しかった。彼女を思い起こさせる全てのものから目を背けていた日々が、ようやく過去となったのだ。

サロンには誰もおらず、中庭への降り口に、衛兵の後ろ姿が見え隠れするだけだった。この時期はいつまでも外が明るいので、晩餐前のこの時間帯でも、室内にはまだ日が明るく射している。ゴーティスは日光と中庭の緑の匂いがするサロンをゆったりと歩き、開放された窓から、対面の東館を感慨深げに眺めた。

ゴーティスが今目にしている風景は、かつてジェニーの目に映っていたものだ。陽のあたる棟の壁面、規則正しく並ぶ窓。目に入るものを一つずつ、ゴーティスは記憶に留めようとしていく。

ジェニーは今ゴーティスが立つ位置から、東館をよく見上げてい

た。彼女は窓辺のゴーティスに気づくとサロンの奥に入ってしまうことも多かったので、ゴーティスはあえて窓辺から一歩下がり、彼女が建物を眺める様をひそかに見守った。ゴーティスは彼女が日の光の中にいる姿が好きだった。太陽の光を浴びる彼女には、生の力がみなぎっていた。だから、ゴーティスが二階の執務室からサロンを見下ろし、そこに朝の日差しに照らされた彼女の顔を見られると、彼の唇には自然に笑みがこみ上げてきたものだ。

あと数週間で、ジェニーの顔を見られる。

「……早う来い、ジェニー」

王城での再会が決まっているからこそ、その日が待ち遠しく、ジェニーを恋しく思う。会えないでいた期間の長さを思えば、比較にならないほどわずかな日数だというのに、彼女との思い出が次々に頭に思い出され、残りの日々に我慢ならなくなる。

彼女とこの地で再会したとき、最初にどう声を掛ければよいのか、何から話せばよいのか、何をすればよいのか。どうすれば彼女は笑うだろう？

ゴーティスはいつまでも迷い、考えがまとまらなかった。そんな些細なことで迷い悩む自分が、彼には信じられなかった。

そのうちにサロンに誰かが入ってくる気配があって、ゴーティスにはそれがジェニーだと思えて、鼓動を高鳴らせた。彼の居場所は後宮の出入口からは死角となっており、その人物は彼の存在に気づかないようだ。衣擦れの音が近づくにつれ、ゴーティスの期待感も高まる。彼はゆっくりと振り返った。靴音が近づいてくる。

ほどなく、柱の陰から黒い頭髪が現れ、霧がはれて視界が広がるように、ゴーティスはジェニーへの慕情からすっと覚めた。そこには、夫を見つけ、彼と同じように驚いているカサンドラがいた。ジェニーの幻影がかすんで消えた。

「……王？」

カサンドラが、困惑と恐怖を顔に映し出した。

「どう……されたのです？　こちらで何か……？」
ゴーティスにとって、このサロンはジェニーに所属するものだ。カサンドラの吐いた問いはゴーティスが言うべきことで、彼は彼女にジェニーの居場所を侵害されている気がした。
「あ……私、部屋に戻って着替えないと……」
ゴーティスの無言の返答に恐れをなしたのか、カサンドラが焦って退こうとする。
彼女の臆病な態度を見ても、ゴーティスは以前ほど苛つかなかった。彼女が踵を返し、来た道を戻ろうとした背中を見て、ゴーティスはふと思い立って彼女を引き止めた。
「待て」
「……はい？」
恐々と後ろに振り返ったカサンドラに、ゴーティスは数歩近寄った。
「そう慌てて行かぬでもよい。おまえに話がある」
「……はい」
ゴーティスはカサンドラの前に立ち、彼女を覗き込むように見つめた。彼女から恐怖は消えなかった。
「おまえ、子には会うたか？」
「えっ？」
カサンドラがひどく動揺して、視線をあちこちに散らした。「い、いいえ……ちょうどよい機会が作れませんでしたので、まだ……」
それがまったくの嘘なのは明白だったが、ゴーティスは腹も立たなかった。そうか、と彼が素っ気なく言うと、カサンドラが戸惑った瞳を返した。
「……あの、今日はもしや、御子に会いに来られたのです……か？」
「俺が？　何ゆえ？」
カサンドラはますます戸惑ったようにゴーティスを見つめたが、彼が見返すと、彼女はさっと目を逸らした。
「その“娘”のことだ、妃殿。ひとつ、頼まれてくれぬか」

「そんな、王が頼みごとなど……。どうか、何なりとおっしゃって下さいませ」

カサンドラの瞳が自分に戻り、ゴーティスは満足して、微笑んだ。ゴーティスが笑うと、彼女は彼の顔から目が離せなくなるかのように、目をわずかに細めて彼を見つめる。

ゴーティスは彼女に言った。

「おまえに、娘の名をつけてもらいたい」

「……えっ？　でも、御子には……もう、お名前があるはずでは……？」

「改名させたいのだ。おまえには、その名を考えてもらいたい」

夫の提案に驚き、彼女は大きく目を見開いたままだ。

「あ、でも……そんなことをしたら、御子の母親がどう――」

「あれは俺の娘だ。この後宮においては、おまえがあの娘の母親も同然。娘には、おまえの好きな名をつけるがよい」

勝手に娘を改名されたことで、ジェニーが怒り狂う様子が目に浮かんだが、ゴーティスは目の前にいる妻の表情の変化を気にした。

――子に手を出させないためには、その子に愛着を抱かせればいい。

カサンドラの硬さが解け、まばたきの回数が多くなるのを見て、ゴーティスは心の中でほくそ笑んだ。彼女からの快諾を予想し、ゴーティスは彼女の肩に手を置いた。

「よいな？」

彼女が反射的に頷いた。

カサンドラの横を通り過ぎ、後宮への出入口に差し掛かるまで、彼女はゴーティスをずっと見送っていた。

それがもしジェニーだったなら、ゴーティスは何度も後ろを振り返り、最後には我慢できなくなって、彼女の元に駆け戻ったかもしれない。

ジェニーへの想いがほとばしり、ゴーティスはサロンから逃げる

ようにして、後宮の廊下を歩いていった。

第二部　2．決意ー5

ジェニーは今、ヴィスコンデール郊外にあるベアール家の館にいる。ここに来ることとなった経緯を考えると、ジェニーはゴーティス王の身勝手さに腹が立ち、自分の無力を思って、口惜しくてたまらない。

カミーユはまだ一歳を超えたばかりで、まだまだ母親を必要としている。カミーユに王族の血が半分流れているからといって、なぜ王城に入れる必要があるのだろう？　王城にいれば完璧に世話をしてもらえると言うが、そんな幼い子が母親から引き離され、他人の間で暮らすことがどんなことなのか、王は一瞬でも想像しなかったに違いない。何もかもを意のままに操る彼の立場では、ジェニーの怒りなどちっとも理解できないだろう。

しかし、ともかく、ジェニーは一ヶ月後に、カミーユが引き取られた場所、ゴーティス王が君臨する王城に行く。そう決意するしかなかった。カミーユには一刻も早く会いたいし、彼女を力いっぱい抱きしめたい。王に会えばあらたな怒りが燃え上がるだろうが、カミーユがこの手に帰るなら、この際、それでもいい。

窓枠に切り取られた景色だけを見ていると、自分がこの世でたった独り、忘れ去られた存在のように感じる。けれども、いったん窓を開けて外を見渡すと、上方に果てしなく広がる空、はるか遠くにかすんで見える山並み、丘陵の向こうにある街や自分の今いる屋敷、その全てが、お互いのどこか一部と繋がりあい、ひとつの大きな世界を構成していると分かる。独りきりのように見えて、実は、世界の何もかもと自分は繋がっているのだ。

窓を開けて、ジェニーはヴィスコンデールの街並みがあるはずの方向に目を凝らした。真夜中を過ぎた街には明かりの一つも見えず、その周囲を見渡してみても、何の変哲もない暗闇が静かに横たわる

だけだ。屋敷は眠りに落ち、人々の作り出す音が止んでからしばらくの時間が経っている。ときどき、思い出したように吹く夜風に近くの木々がささめいて、目の前の世界はひそやかに息をしているのだと、ジェニーに気づかせてくれる。

「……ジェニー？」

部屋のすぐ外から男の小声が聞こえ、ジェニーは慌てて窓台から滑りおりた。

「誰？」ジェニーの問いに返事はなく、部屋の扉が押し開かれる。声の主が手に持っていた明かりで、室内が大きく照らされた。明るさを増した室内でジェニーと目が合うと、ユーゴ・ベアールが小さく微笑んだ。

「ベアール様」

彼は唇に人差し指を立て、背後の廊下を気にしながら言った。「言ったよね？　私のことはユーゴと呼ぶんだよ」

彼は微笑み、扉をそっと閉めた。

サンジェルマンと別れるなり、口調にも態度にも気安さを見せた彼に、ジェニーは好感を持っている。兄ローリーによく似ている風貌には、あっという間に親近感を覚えた。だが、寝間着からのぞく彼の腕や首のたくましさは、ジェニーの兄とはやはり違う。

ジェニーが視線を上げると、彼はまたきゅっと唇を持ち上げた。

「どうしたの、眠れない？」

「ええ。色々と……考えることが多くて」

ユーゴが窓辺のジェニーにまで歩いてきて、夜風にさらされてひんやりとした彼女の額に手を触れた。それからジェニーの頭を両手で押さえ、彼女の額にぴったりと唇を押し付ける。

「時間はたっぷりある、ジェニー」

今日はあまり考えない方がいい、と囁いたユーゴの指の弾力は、ジェニーになぜかゴーティス王を思い起こさせた。彼と王とは、まったく似ていないというのに。

ラニス公の城で別れてからずっと、カミーユを思うのと同じ頻度

で、王のことが勝手に頭に浮かんでくる。彼に腹を立てているのに隣にいてほしくて、ジェニーの胸の奥はずっと、小さく震えて鳴き続けている。でも同時に、彼の横には王妃がいるのだと思うと、彼の姿なんか見たくない、という逆の気持ちも芽生える。

ジェニーはユーゴの手から逃れ、窓の外に体を向けた。

「王城は、どっちにあるの？」尋ねると、彼女の横でユーゴが腕を外に突き出した。「あっちだ。街とは反対方向にある」

向かって右手の方向には林があり、暗い影が見えるのみだ。木々が揺れ、ざわめいている。

ジェニーが身をのりだそうとすると、その肩をユーゴの左腕が支えた。室内の光が届かない彼の瞳からは青みが消え、その横顔だけを見ると、ジェニーは兄の腕に抱かれているようだ。

彼によく似た、兄ローリー。

ラニス公地からベアール家に向かう道中、ジェニーは、故郷がヴィレール軍の襲撃を受けた後に、兄ローリーがベルアン・ビルの叔母宅を何度か訪ねていたと知らされた。ジェニーは耳を疑い、何度もユーゴに問い返したが、答えは同じだった。兄は、どうやってか、あの修羅場を抜け出し、たくましく生き抜いていたのだ。叔母によれば、彼は片手が不随らしいが、仲間と行商をして各地をまわっているそうだ。ユーゴがサンジェルマンと叔母を訪ねて以降、ローリーが彼女の家に立ち寄ったことは一回もないそうだが、それは疑わしい、とユーゴは言う。ヴィレールとの関わりを嫌う叔母は、実際にはあった訪問をユーゴに伏せているだけかもしれないそうだ。

「王城は昼間でもここからは見えない」

ユーゴの声を聞いて、無性に、ジェニーは本物の兄に会いたくなった。

「……いつか、兄に会いたいわ」

ジェニーが呟くと、ユーゴが振り返った。彼の瞳が明かりで照らされ、本来の青い光が戻る。

「いつかきっと、会えるわよね？」

ユーゴが頷いた。
「きみが生きていると知ったら、きっと、彼の方から会いに来るさ」
同じ空の下のどこかで、兄は無事に生きている。
実際に会えないのはとても寂しいが、どこかで元気に生きていることさえ分かれば、ジェニーはそれで満足だ。
「うん。そうよね」
ユーゴがジェニーの肩を抱き寄せ、彼女の頭を彼の胸に押し付ける。彼の体を感じると、ジェニーは兄が生きていることに何の疑いも持たなくなる。兄を身近に感じさせてくれるユーゴの存在が、ジェニーには嬉しかった。
ジェニーがユーゴの背中に手をまわすと、彼の体が大きく揺れた。笑っていた。
「こんなところを見られたら、きみに手を出したって王に激怒されて、私は八つ裂きにされるな」
「あなたに嫉妬するっていうの？　あの王は、そんなことしないと思う」
ジェニーを見たユーゴの瞳が、おかしそうに笑った。
「ジェニー、王はきみを独り占めしたくて離宮に閉じ込めるんだから、それぐらいするさ。ああ、王も普通の男だと思うと、なんだか安心するな。あ、今の発言は、王にもサンジェルマン様にも内緒にしていてよ」
王の本心は、いつまでたっても、ジェニーにはよく分からない。
ジェニーは王の顔を宙に思い描こうとし、結局まとまらず、それは途中で消えてしまった。もう一度試してみたが、結果は同じだ。会いたいと願う人の顔ほど、それを思い浮かべようとしたとき、鮮やかに現れてくれない。
ジェニーは王が差し伸べる腕を思い出し、ユーゴの胸に顔を預けた。
「やっと眠くなった？」

ユーゴの低い声がジェニーの耳をくすぐる。

王の顔はうまく思い浮かべられないのに、ジェニーは彼の手の感触をはっきりと覚えている。彼の指がジェニーの手のひらの上を滑り、彼女の指にたどりついてゆっくりとからんでいく、その動きも。ジェニーはその手が好きだ。ジェニーは彼に会い、彼女を安心させてくれるその手と繋がりたかった。王妃がいたとしても、やはり、彼の顔を見たいのだ。

それからジェニーは兄の顔を思い起こそうとし、王のときと同様に失敗した。代わりに思い出せたのは、ゴーティス王の剣が兄の肩に振りおろされた情景だ。悪夢の瞬間だ。兄の苦痛に歪む顔、王の剣に飛んだ返り血を、ジェニーは今でも忘れていない――。そのときの心臓が縮み上がるような痛みがよみがえり、ジェニーは思わず目をつぶった。

兄はかろうじて生き延びたけれども、王は、兄の仇であることに変わりはない。兄の不自由な片手は、おそらく、王と剣を交えたときに負った大怪我の後遺症だ。兄は、王を憎悪していることだろう。ジェニー自身がずっと、王に復讐を誓っていたように。

兄と王の間で行きつ戻りつして、ジェニーの心は定まらない。心臓が早鐘を打ち、ジェニーは急に心もとなくなって、ユーゴの服の裾をつかんだ。

ジェニーは怖かった。王を慕うのは、兄や家族に対する裏切りなのかもしれない。

◇　◇

ユーゴがジェニーの後に続いて馬車に乗り込もうとしたとき、サンジェルマンは、本当に同行する気か、と彼に尋ねた。当然ですよ、と笑いながら答えた彼は、「私がいれば色々と助かるはずだよ」とジェニーに囁き、完璧な笑顔をサンジェルマンに向けた。ユーゴと過ごしたこの一ヶ月を通し、この完璧で魅力的な笑顔のほとんどが、

計算し尽くされた愛想笑いだとジェニーは知っている。それに、彼の言葉は、彼女への純粋な親切心から生まれたものでもない。

それでも、ジェニーは誰かが王城まで同行してくれることが心強かった。サンジェルマンは王の命令を義務的に果たし、ジェニーを無事に送り届けはするだろうが、ジェニーの入城に決して賛成はしていない。まだ見ぬ王妃はもちろんのこと、女官長や、ジェニーとケインを国境近くで追い詰めた王の近衛隊たちも、ジェニーをすんなりと受け入れるとはとても思えない。誰にも歓迎されない場所に向かうのは、相当の勇気が必要だ。

テュデル宮の佇まいは、ジェニーが記憶にとどめていた姿とほとんど変わりなかった。変わっていた点といえば、屋内を行き交う人々が増え、広間の装いが変わり、裏庭にあった垣根の高さが以前の半分にまで刈り込まれ、庭がずいぶんと明るく開けた印象になっていたぐらいだ。ジェニーが気に入っていた図書室も健在だ。

ジェニーのために庭園を整えなおし、図書室の蔵書を増やした、とサンジェルマンが話すと、彼女の隣に付き添っていたユーゴは胸に手をあて、うやうやしく頭を下げて礼を述べた。続けて、姪はこういったご厚意には慣れていなくて、とユーゴが笑みを浮かべて周囲の使用人たちを見ると、無表情の女たちに人間らしい感情が戻った。彼は、自分の笑顔がどう効果的に働くか、よく自覚している。

ユーゴに脇をつつかれ、ジェニーは彼に倣って礼を言ったが、ユーゴも王も、彼女がどんなことで喜ぶのか、わかっていない。ジェニーにとっては、カミーユと一緒でありさえすれば、住む場所がどこでどんな所であろうが構わないのだ。それなのに、ジェニーはテュデル宮に入ってから、彼女の気配を少しも感じられない。

ジェニーは、居室に向かおうとした召使頭の女の言葉をさえぎった。

「カミーユはどこにいるの？」

「“カミーユ”……様でございますか？」

女が首を傾げた隣で、サンジェルマンが会話に割って入ってきた。
「ご心配なく。あとで会わせよう」
彼は微笑みをたたえたが、その後、彼がユーゴと交わしあった視線はジェニーを不安に陥らせた。
「あとって、いつ？」
すると、サンジェルマンはおもむろに女たちに合図をし、彼女たちを散らせた。人払いをされた室内には、ジェニー、サンジェルマンにユーゴ、テュデル宮の召使頭が残された。ジェニーの胸騒ぎが始まった。
「何かまた、私に隠し事があるのね？」
ユーゴが渋面を作ったが、サンジェルマンは顔色ひとつ変えなかった。
「あなたに、ひとつ、お知らせしておきたいことがある」
「カミーユのことで？」
「“カロリーヌ”様だ。御子は、王族にふさわしい名に改名された。王妃様が名を考えてくださったのだ」
そう言って、サンジェルマンは微笑む。
「名を変えた……？」
「ええ」
ジェニーの前でユーゴが気まずそうに肩をすくめた。彼は、ジェニーの娘が改名された事実を既に前から知っていたのだ。ジェニーはそんな重大な事を教えなかった彼に腹が立ち、挨拶でもするように淡々と事実を告げるサンジェルマンに腹が立ち、何より、彼女から娘を勝手に取り上げただけでなく、名前まで変更させたゴーティス王に腹が立った。
「どうしてそんな勝手なことができるのよ！　あの子の名前はカミーユよ、カミーユ以外の何でもないわ！　カロリーヌなんて名前、絶対に認めない！」
「認めぬも何も、名は既に改名されている。カロリーヌ様は、庶子とはいえ王族だ。あなたがとやかく口を差し挟めることではない」

「王族の血が入ってるから何だって言うのよ！　カミーユは私の娘だわ！」

「ジェニー！」横からユーゴの腕に引き寄せられ、ジェニーは彼の青ざめた顔に直面した。ジェニーが今まで彼と接した中で、彼のこんなにも切迫した様子は見たことがない。

「非礼をお許しください、サンジェルマン様。彼女は少し興奮して、そんな戯言を言っただけでして」

「でも、ユーゴ様、これは――」

「いいから黙って」ジェニーの手首をつかみ、ユーゴがむっとしたように囁いた。

サンジェルマンは機嫌を損ねた様子もなく、二人のやり取りを目にしても、何も言わない。ジェニーが怒りの治まらないままにサンジェルマンを見ると、彼が、彼女の後ろにある椅子を指し示した。

「話はまだ終わっていない。とりあえず、座っていただこうか」

ユーゴがジェニーの腕を引き、有無を言わさず、彼女を椅子に沈めた。

サンジェルマンに怒鳴っても、ユーゴに怒りをぶちまけても、状況は変わらない。カミーユはジェニーのいない後宮で生活し、新しい名で呼ばれている。城の皆からとても可愛がられているそうだ。だが、ジェニーが彼女と一緒に暮らす日は来ないのだ。

王族の子は後宮で育つ、それだけのこと。サンジェルマンの言葉が、ジェニーの胸に突き刺さってとれない。彼の説明はジェニーには少しも理解できなかった。母と娘が別々に暮らさなければならない理由を、自分にもわかるように、誰か説明してほしい。

「あなたには子を産んでくれる王妃がいるじゃない！　どうして、カミーユが必要なの……！」

王城の王に向けてそう叫ぶと、拭っても拭いきれない涙があふれてきて、ジェニーは目を閉じた。

王の仕打ちに衝撃を受け、怒り心頭のときが過ぎると、カミーユ

がいないという実感がやって来た。ベアール家で過ごした一ヶ月間に感じていたものとは違う、一時的ではない喪失感が、ゆっくりとジェニーを侵食した。ジェニーが、座っている寝台から顔を上げて窓の外を見ると、青い闇が見えた。細長い窓はベアール家の窓より小さくて、ジェニーは自分が逃げ場のない世界に閉じ込められたように感じた。カミーユが側にいないと分かった今、ジェニーは孤独だった。

王城には自由に出入りできず、当然ながら、後宮にも入れない。ジェニーがテュデル宮に着いてから三日目となったが、初日に来訪が予定されていた王は、いまだ来なかった。

まだお見えにならないんだ、とジェニーの前に二日ぶりに姿を現したユーゴが驚いていた。

「……来ないでくれた方がいいわ」

王の顔を見たら、何をするかわからない。

「まあまあ。そんなにすねないで」ユーゴが侍女たちにウインクしながら、苦笑した。既にすっかり馴染みとなった彼女たちも、ユーゴに笑い返す。

「心配しなくても、そのうちお見えになるよ。まあ、それまでは私が暇つぶしに付き合うから、ね？」

彼はベアール家の利益を第一に考え、ジェニーの立場を利用しようとする傾向にあるが、彼女にも情を持ちつつあるようだ。

「庭園に出ないか、ジェニー。きっと、とっても綺麗に花が咲いてるはずだよ」

ジェニーにとって、その庭園は記憶から消したい事件の場だ。ユーゴに断ろうとすると、それを察した彼に腕を引かれ、外に連れ出された。

ジェニーの予想に反し、庭園は以前とはがらりと様変わりしていた。視界を邪魔する背の高い垣根はなく、白い優雅な花があちこちで束となり、風に揺れている。むせかえるような濃厚な薔薇の香り

の代わりに、甘く爽やかな香り。
「……きれいだわ」
ジェニーがふらふらと歩き出すと、後ろでユーゴがくすくすと笑った。「そうだね、きれいだね」
ユーゴがジェニーに追いつき、笑いかけた。彼が自分の隣にいることには、ジェニーは違和感を覚えない。彼はジェニーの肩や腰によく手をまわすが、彼はもともとが女性の扱いに慣れている人だし、彼からは何の危険も感じなかった。
そのときも、ユーゴは花びらをつまみあげてジェニーに見せながら、彼女の肩を抱いていた。ジェニーは笑っていた。それから、不意に周囲の音が消えたと思った次の瞬間、二人の背後から男の声が飛んだ。
「どけ、ベアール」
二人がはっとして振り返ると、数歩離れたところに、眉間に皺を寄せ、険しい表情をしたゴーティス王が立っていた。
「王！」
ユーゴが飛びのくと、王はじろりと彼をにらみ、そして、ジェニーに視線を据えた。彼女を責めるような目つきで、険しい表情はまったく変わらない。
「――久方ぶりに会うても、挨拶もなしか？」
ジェニーは口を必死でつぐみ、王を見返した。顔を見た瞬間に、どんなに彼に会いたかったかを痛烈に感じたというのに、一度口を開いたら、罵倒する言葉と怒りだけがほとばしりそうだ。
ジェニーがなおも黙っていると、王は唇を結び、ジェニーの方へ足を踏み出した。彼の険しい形相を目にすると、ジェニーの怒りが再燃し始める。彼に言い放つ文句が頭の中でぐるぐると旋回する。
カミーユを返し、私をここから出して――。
目の前に来た王を見上げ、ジェニーは怒りにまかせて、彼にそう言おうとした。が、王の手がジェニーの肩を後ろからつかみ、彼の胸に勢いよく引き寄せられて、ジェニーの視界は失われた。彼の匂

いや胸の感触が、自然にジェニーに入りこんでくる。ジェニーの頭に押し付けられた彼の顔が小刻みに震えていて、ジェニーは怒りも忘れ、反論することもせず、その一瞬だけ、彼を受け入れた。

（こんなにも怒っているのに、彼を憎みきれない……）

彼の息に似た声が、遠くであえぐのを聞いた気がした。

ジェニーがやっとのことで顎を動かすと、王の肩越しにユーゴの顔が見えた。勝ち誇ったような笑顔だ。彼はジェニーを見返すと、満足そうに眉を上げてみせた。

第二部　3．王城に住む女ー1

ゴーティス王の体からはいつも清涼感のある香りがするが、今日の彼は、夏の濃い日差しを吸い込んだ大地の匂いがする。ジェニーの故郷、彼女の暮らしていた街と似た匂いが、彼の体から立ちのぼっている。

ジェニーの手は王の背中にまでは伸びず、脇腹に残されている。彼は感情を抑えきれないとでもいうようにジェニーを抱きすくめたが、ジェニーは、素直に抱き返せなかった。一ヶ月ぶりに彼と会えたことは純粋に嬉しかったが、カミーユやまだ見ぬ王妃の顔がジェニーの脳裏に映り、様々な負の感情に邪魔されたのだ。

ジェニーの肩をつかんでいた王の手の力がゆるみ、ジェニーの頭に押し付けられていた彼の顔が離れた。彼の顔が密着していたジェニーの髪に風が通り、急激に冷えはじめる。彼は顔を上げようとしているのだ。

ジェニーはどぎまぎとして、熱が頬に集ってほてり始めるのを感じた。

ああ……どうしよう？

王はジェニーの両肩を押さえるようにつかんだまま、ジェニー、と彼女がやっと聞き取れる大きさの声でつぶやく。彼の顎が面前に迫り、ジェニーはうろたえた。赤面しているだろう顔を、彼に見られたくなかった。

王の顎が降りてきて、ジェニーの視界に彼の赤い唇が現れた。「ジェニー」

囁き声に誘われるようにジェニーが目を上げると、ジェニーの鼻の頭に、王の唇がやわらかく触れた。彼の唇の表面がジェニーの鼻に接触する、その一瞬を前にジェニーは身構えたのだが、いざ触れられると、頬にこもっていた熱が一気に上に押しあがって、ジェニーの頭はぐらりと揺らいだ。

予想もしなかった優しさだ。ひんやりとした彼の唇が、ジェニーの鼻の上を滑っている。ジェニーの頭の中が、ゆらゆらと揺れる。

ジェニーはその感触に感動した。ため息がこぼれそうになり、唇をきつく結んだ。たったそれだけの行為なのに、ジェニーの鼻をたどる王の唇は饒舌に愛を語る。その同じ唇は、愛の言葉を囁きはしないというのに。

ジェニーは愛されている。

王からの愛を感じたのは、ジェニーにとって、これが二度目だ。一度目は、二人が王城の屋上に上がった際、彼がジェニーに「彼にとって唯一の同盟」を申し出たときだ。そしてその直後、ジェニーは彼から逃走したのだが。

ジェニーは知らないうちに王の腕をつかんでいた。彼は、ジェニーの高揚に気づいたのかどうか、彼女の肌にのせた唇の動きをふと止めた。だが、口を開き、何かをしゃべりだしそうな兆しはない。

王もジェニーも動かず、庭園にそよぐ風の音ばかりがジェニーの耳についた。

少しして、王がジェニーの顔の前で囁いた。「……何か話せ、ジェニー」

ジェニーは目を上げ、そこで出会った王の瞳の中に自分の姿を見つけて、思わず泣き出しそうになった。

ジェニーの前に実際に王が立っているように、王の前にも自分がいる。ジェニーの瞳にも彼は映っているはずだ。二人はどちらも、幻ではない。ジェニーが北の森で見た、幻影のゴーティス王ではないのだ。

「ジェニー」

王の声に懇願するような響きが混じり、彼がジェニーの頬を手の甲でなでた。

彼の目はジェニーから離れない。ジェニーは彼の瞳を見つめた。誰かと見つめ合えるのは、こんなにも幸せなことだったんだろうか？

ジェニーは心地よさに目を閉じかけた。
「何でもよい、何か話せ。この小城のことでも……ここは気に入ったか？」
いきなり冷水を浴びせられたように、ジェニーは我に返って王から離れた。
「ジェニー？」
「――気に入ったか、ですって？」
娘カミーユを奪われ、娘が住まう場を目の前にしながら手が届かない――そんな口惜しさと空しさにあふれた毎日をジェニーに強いておきながら、ジェニーが独りで住む場所を気に入ったかどうかなど、彼は、よくも訊けるものだ。
怒りは別の怒りを呼び、ジェニーは伸びてきた王の手からまた遠ざかった。彼が不審そうに眉根を寄せる。
「どうした？」
「カミーユを返して」
ジェニーが怒りを込めて王を見ると、彼は顎を上げ、瞳を細めた。
「カミーユを返してよ。あの子がいないところに、私がいる必要はないわ。あの子を今すぐ返して」
王が鼻で笑うように、唇をゆがめた。
「子はすぐ近くに居住しておるではないか。何が不満だ」
「あなたは私に黙って、勝手にあの子を連れ去ったのよ？　あんなに小さな子を私から引き離して、勝手に王城に住まわすなんて、どうかしてるわ。あの子はまだ私が必要なの。私たちは親子なのに、こんな近くにいるのに会えないなんて……どう考えたっておかしいじゃない！」
王が腰に手をあて、首を振った。「おまえは娘の件で感謝してもよかろうものを……。逆に、俺を責めるとは」
恐れ入った、と王は笑ったが、彼が機嫌よく笑ったのではないことは、ジェニーにも分かった。
「あの子を返して」

「無理だ」
「ゴーティス王！」
ジェニーが叫ぶと、彼はジェニーの両手首をつかんで引き寄せた。
「何を言おうと無駄だ。あの娘は“王の子”として、安全な環境下でそれに見合った教育を受けさせる。おまえは娘には自分が必要だと言うが、実際、おまえの娘は、城で何不自由なく、恵まれた暮らしを送っておる。後宮の女どもはおまえの娘に夢中だ。おまえがおらぬでも、娘は無事に育つだろうよ」
「そんなの、勝手すぎるわ！」
衝撃を受けたジェニーの口からそう漏れると、王は呆れたように首を振った。
「ジェニー、よいか？　おまえは娘を産んだ母親だが、俺の妃でもなく、王族でもない。王族である娘と庶民出のおまえが別々に暮らすことに、何らおかしいところはないのだ。おまえは、娘のすぐ近くに居をとれるだけ、ありがたいと思うがいい」
王の口ぶりはまるで、当事者でもないジェニーが見当違いの非難をしている、とでもいうように聞こえた。
ジェニーは口惜しかった。彼は、ジェニーの気持ちも、カミーユの気持ちも、まるっきり考えてはいない。
さらに、王の口から飛び出した「妃」という言葉が、ジェニーの胸の中央をまともに貫いていた。
ほかの誰の口から王の結婚を聞いたときよりも、ジェニーは動揺していた。ジェニーは王妃の姿を目にしていないため、彼が既婚者だという認識に欠けているのだ。王妃がどんな姿なのかをつい想像しそうになって、ジェニーは必死に抵抗した。
ジェニーは胸に手をあてた。痛みは何も感じないが、冷たい風が胸の空洞を通り抜けているのがわかる。やがて、それをふさぐように炎が燃え盛り、ジェニーが熱さを感じる前に、炭化した胸の破片がぼろぼろとこぼれ落ちていった。ジェニーは左右に舞う黒い欠片

をすくい上げようとして、自分の手の上に涙がぽろぽろとこぼれるのを見た。

実際にそんな形で胸が壊れることはないし、ジェニーは泣いてもいない。けれども、ジェニーの体は、ばらばらに砕け散ってしまいそうだ。

彼には人生をともにする正式な伴侶がいる。

一般の夫婦の場合とは違い、国同士の結びつきである王と王妃の結婚が簡単に破綻することはない、とジェニーにも想像できる。ジェニーがどんなにあがいても、その事実はひっくり返ることはない。ジェニーはそれを忘れていたかっただけだ。考えたくなかっただけ。

ジェニーがそう気づくと、悲しみが次にやってきた。

悲しみというのは、支配的で、濃い灰色をしている。山の上空で発達した雨雲があっという間に空を埋め尽くすように、ジェニーの視界が暗く塗りつぶされていった。王も、その後ろにあるテュデル宮も、周りを囲む緑の垣根も、灰色の靄の中に融合して消えてしまう。

ジェニーには自分の立つ位置も曖昧だった。足の下にある地面の存在さえ不確かで、ジェニーはまごついた。確かなものといえばジェニーの手首をつかむ王の手だけで、そのおかげで、ジェニーはどうにかその場に立っていられる。

だが、彼のその手は、王妃に所属するものだ。ジェニーが思い焦がれた彼の手は、ジェニーに繋がれてはいても、目に見えないところでは繋がっていない。

胸の痛みが、容赦なく、ジェニーを襲った。

ジェニーはやっとのことで振り返って、王城を眺めた。ジェニーが入城を決めたのは娘との生活のためだったのに、この先もずっと、娘の顔を見られないのかもしれない。

カミーユのいる同じ後宮内には、王妃が住んでいる。母親であるジェニーはカミーユとまだ一度も顔を合わせていないのに、カミー

ユにいつでも会える環境に、彼女の母親ではない王妃がいる。そして当然、王妃は王ともいつでも会えるのだ。それなのに、ジェニーは、娘にも王にも自由に会えない。

ジェニーは自分をこの環境下に置いた王に、怒りもまた感じていた。妃がいながらジェニーを城に引き入れたことは、ジェニーと彼の妃の両者に不誠実だ。こんな状況が続くのは、ジェニーはとても耐えられない。ジェニーはせめて、カミーユを手元におきたかった。

ジェニーが王を見つめると、王の眼力が弱まった。

「カミーユを返して、ゴーティス王」

「無理だ、と言うたであろう」

ジェニーの声色が弱まったせいか、彼の声も小さい。

「返してよ、私の娘なんだから」

王が眉を一瞬ひそめ、そっけなく拒んだ。

「できぬ。おまえは俺の話を聞いておらぬようだな。おまえの娘は王城で預かる。名も、カロ……何だったか、妃が考えた名で改めさせたゆえ――」

「名前を勝手に変えるなんてひどいわ！　あの子にはカミーユって名前があるの！　何の権利があって、あの子の名前を変えたりできるのよ！」

「権利だと？」ジェニーに顔を近づけた王が、そう言うなり、呆れたように笑い出した。「おまえ、俺に何の権利をふりかざすつもりだ！　よもや、母親の権利とやらが俺に通用すると思うておるのか？　この国の王である俺に！　この俺に通じる権利など、何ひとつ存在せぬ」

王がジェニーの瞳をのぞきこむ。

「まったく……ベアール家で少しはまともな態度を身に付けたと思うておったが、向こう見ずな性質は直らぬようだ」

「私は間違ったことは言ってないわ。カミーユを私から取り上げて、名前まで変えてしまうなんて、あなたがあんまり勝手だからよ」

王が、ジェニーが彼とここで最初に会ったときと同じ険しい形相

に戻った。
「おまえは誰に口をきいておるのか、わかっておろうな？　幼いとはいえ、たかが子ひとり、離れて暮らしたから何だというのだ！　娘は王城で豊かな暮らしを送れるのだぞ。それを何ゆえ、おまえは、そうも俺に逆らおうとする！」
「逆らってるんじゃないわ！」
王は、ふん、と鼻を鳴らした。
ジェニーは娘と一緒にいたいだけだ。ジェニーは娘に物質的に恵まれた生活を保障したいのではない。この王にはやはり、ジェニーの言い分は通じない。
彼に期待をしていたのではないと思っていたのに、落胆は大きかった。
「私はカミーユと一緒に居られればそれでいいの。でも、あなたにはきっと――こんな気持ち、わからないわ」
「何だと？」
王は眉間の皺を深くして、ジェニーを見返した。ジェニーは無駄な抵抗だと分かっていながら王の手から逃れようとしたが、彼は苛立ったように、手に力を込めた。
「放して」
「放せば、おまえは逃げよう」
「逃げないわよ。私はここから、逃げられないじゃない！」
カミーユを置いて、ジェニーが逃げる場所などどこにもない。

ふと、カミーユの声が耳に届いた気がして、ジェニーは膝から崩れ落ちそうになった。すると、苦りきった顔でジェニーを見ていた王に、不意に、戸惑いが浮かんだ。
「……おまえ、何を泣く？」
ジェニーを凝視している彼の手から力が抜けていて、ジェニーは、彼の手をすかさず振り払った。
状況を打破できないことに直面して、ただ口惜しかったのかもし

れない。が、ジェニー自身、泣いている理由がひとつに特定できなかった。ジェニーは両目を手で拭った。

「もう帰って」

あきらかに、王がむっとした。

「おまえに命令される覚えはない」

「でももう、話すことは何もないわ」

ジェニーが面を上げると、王がジェニーを冷たく見据えていた。

「俺はおまえとこんな話をしに来たのではない」

王の顔は硬直したままだ。

ジェニーだって、こんな話をして、彼から凍えるような視線を向けられたくない。

「私にはこの話しかできないわ。だから、もう帰って」

「おまえの指図は受けぬ」

ジェニーは一歩横に踏み出した。「じゃあ、私が行くわ」

「待て！」

ジェニーは王の制止を無視し、脇によけて歩き出した。王が怒って追ってくるかと思ったが、なぜか、追いかけてこない。

ジェニーはそのときになるまで気づかなかったが、ユーゴが庭園の入口に立っていた。二人のやり取りを一部始終見ていたらしく、困惑しているような、不審そうな表情を浮かべている。

ジェニーと目が合うと、ユーゴは目を鋭くして、ジェニーを呼んだ。彼はきっと、王への無礼きわまりない態度をあらため、王にすぐさま謝罪するように、と言いたいのに違いない。だが、ジェニーは今にも涙があふれそうで、この場から早く立ち去りたかった。彼も無視した。

「待つんだ、ジェニー！」苛立ちを含んだ口調でユーゴが叫び、ジェニーは荒々しく振り返った。「あなたももう帰って！」

ジェニーが叫び返すと、ユーゴは両手で頭を抱える仕草をして、ジェニー、と怒鳴った。

「きみって人は、どこまで強情なんだ！」

ユーゴが怒って歩み始めたとき、王の怒鳴り声がその場を貫いた。
「ベアール、おまえはさっさと家に帰れ！」
彼はちらりとジェニーに視線を走らせ、恐怖で固まっているユーゴを睨みつけた。だが、彼はそれ以上、ユーゴに何も言わなかった。
「俺は城に戻る」
二人のどちらに告げるでもなく、王はそう言うと、あっけなく踵を返した。王の表情は、ジェニーからは確認できなかった。

新しい寝室で慣れないせいもあり、ジェニーはその日、寝つけなかった。いつにもまして、カミーユに会いたかった。
ジェニーは寝台から起き上がった。この寝室からは庭園を望めるが、王城は見えない。廊下をずっと下った先にある、館の端にある部屋からは王城が見える。ジェニーは初日にそれを見つけ、毎夜、カミーユのいる王城を眺めていた。
ジェニーが押した扉は、今夜も鍵がかかっていない。ジェニーを待っていてくれたかのように開いた扉の隙間から身を滑りこませ、壁面についた窓に駆け寄った。
月の半分が雲に隠され、暗い夜だった。だが、窓の向こうにはジェニーの視界をふさぐものは存在せず、正面に、ジェニーの切望した王城の輪郭が浮かびあがっている。
「カミーユ……」
ジェニーは手を組み、月に祈った。カミーユが毎日を健康に過ごせるよう、ジェニーを恋しがって泣かないように。
自分のことを、ジェニーはあえて願わないようにした。自分のことを願ってしまえば、ジェニーは今の境遇を振り返るしかなくなり、口惜しさと悲しさに覆い尽くされてしまうだろう。
しかし結局、その努力も無駄だった。王城を眺めているうち、ジェニーの目からは涙が流れ出した。悲しみというより、空虚さからだ。カミーユはおらず、今後も、ジェニーのもとに戻る可能性は極

めて低い。
　ジェニーは自分が今ここにいる意味が、見つけられなかった。こんな思いは初めてだ。これからどうすればよいのか、見当がつかない。

　ジェニーはぼんやりと外の景色を眺めていたのだが、ふと、王城の近くで揺らめいていた松明の光が、移動しているのに気づいた。ジェニーから見える範囲内には、他にも複数の光が見える。だが、その一つの光は――こちらに向かってくる。
「衛兵が移動してるのかしら」
　ジェニーが不審に感じたとき、屋内のどこかで大きな音が反響し、ジェニーは心臓が止まりそうになった。続けて、ばたばたと慌ただしい足音。二人以上の足音、それが二階に駆け上ってくる。二階の住人はジェニーだけだ。
「ジェニーさまぁ！」
　ジェニーの召使の声だ。
（まさか、カミーユに何かあったんじゃ……！）
　急を要する叫びに、ジェニーは部屋を飛び出した。
「コレット！」ジェニーが廊下を走って彼女に叫ぶと、明かりを高く掲げた彼女が、ひどく驚いた顔でジェニーを見た。「ジェ、ジェニー様！？」
「どうしたの！　カミーユに何かあったの？」
　コレットと、年配の召使がぽかんとした顔でジェニーを見た。
「カミーユ……。いえ、ジェニー様、王が、王が今から来られると、たった今連絡が入ったのでございます！　早く着替えてくださいまし！　ああ、とにかく、部屋にお戻りになって！　ぐずぐずしていたら間に合いませんわ！」
「王が？」
　ジェニーは昼間会ったときの王を思い出し、彼の再来の意図がわからず、面くらった。

「――王が来られるって？」

廊下の奥から聞こえた声にジェニーが振り向くと、暗闇からユーゴが姿を現した。ジェニーを見て、大きな口を広げて微笑む。

「はい。だから早く仕度なさらないと――」二人の召使はジェニーを部屋に押し込めようとした。

「まあ、そんなに慌てないで」召使をさえぎり、ユーゴはにこにこしながら、ジェニーの前に立った。ジェニーが少し警戒して彼を見ると、彼は微笑みながら腰をかがめ、ジェニーの耳に囁いた。

「昼間、あんな別れ方をしたから仲直りをしたいのさ。やっぱり、きみにえらくご執心だね。……今度は優しくしてあげるんだよ、ジェニー」

「そんな簡単なことじゃないの」

ユーゴはジェニーの頬に口づけ、例の完璧な愛想笑いを浮かべた。

「簡単だよ」

そしてユーゴは、一族のためにね、と付け加えると、ジェニーを召使たちの手に引き渡した。

第二部　3．王城に住む女ー2

昼間の不愉快なやり取りのせいで、ジェニーはすっかり疲れていた。王に腹を立て、王の背後に感じられる王妃の影に傷ついて、それだけで心が真ん中で裂けそうだというのに、カミーユに今後会えないかもしれない可能性に、ジェニーの心の整理がついていない。体力も気力も奪われている。

今夜、ジェニーは王に会いたくなかった。ジェニーは王の存在を一時的にも忘れ、カミーユへの想いだけに人知れず浸っていたかった。王も、ジェニーの“悪態”に機嫌を損ねたはずだと、ジェニーは思っていたのだが。

「さあ、出来ましたわ、ジェニー様」

ジェニーは無邪気なコレットの顔を見て、がっくりとうな垂れた。王に会う心の準備など、ジェニーには全然できていない。

自分の髪から香る甘ったるい香水の匂いをかいで、ジェニーは目眩を覚えた。このまま気を失って、倒れてしまえばどうだろう？そうすれば、今日の一夜だけでも、ジェニーは王の前から逃げ出せる。

ジェニーは内心で、深いため息をついた。

こんなに遅い時間の王の再訪は、ユーゴの言うような、仲直りのつもりであるはずがない。あの高慢な彼が、誰かに申し訳ないと思うことがあるだろうか？　ジェニーのご機嫌うかがいに来るなんて、もってのほかだ。彼が夜、女の部屋を訪問する目的は、一つに決まっている。

隣室に続く扉が無情にも開放された。椅子のきしむ音が、寝室にいるジェニーの耳にも響く。

王だ。

緊張が高まる。ジェニーの喉が激しく収縮している。

コレットが膝を曲げて退室の挨拶をすると、ジェニーは彼女の腕をつかみ、引き止めたくなる衝動に何度もかられた。できるなら、彼女と一緒に行ってしまいたい。彼女の背中を絶望的に見つめながら、待って、と何度も心の中で叫んだ。今夜、ジェニーはこの場に一人、王を待つために取り残されたくなかった。いくら王が好きでも、彼の快楽のために伽の相手となることは、どうしても受け入れられない。

ジェニーはコレットが部屋を去るのを見送り、それから、夜の明かりの中で、隣室の奥から静かに現れたゴーティス王と出会った。

王はジェニーを一瞥しただけで、歩みを止めず、まっすぐに寝室に踏み込んできた。王が自分の前を通り過ぎ、その後ろで扉が閉められるのを、ジェニーは最後の望みが消えていくような気持ちで見送るしかなかった。

彼は中央に据えられた寝台に直進し、天蓋をしばらく眺めていたが、その後、くるりとジェニーに振り返った。

「いつまでそこに立っておるつもりだ？」

王は挑むようにジェニーを見る。

彼の夜の相手を求められるくらいなら、夜通し、つっ立っていたっていい。

ジェニーが唇を噛んで王を見返すと、彼が冷たい笑い声をあげた。

「あいかわらずの反抗期か。俺が手を引かねば、おまえは寝台にも上がれぬのか？」

「いいえ。でも、私はここにいるわ」

王は不快そうに顔をしかめたが、それから寝台に腰を降ろし、彼の座る隣をたたいてみせた。

「ここへ来い」

「行かないわ」

「来い、ジェニー」

「いや」

王が聞こえよがしにため息を吐いた。
「おまえは今、いやだ、と言うたか？　妃でさえ、俺に対しては拒まぬというに」
王妃。
ジェニーはまた、彼の口から妻の存在を突きつけられてしまった。
夜の寝室にいるこの状況では、自分たちの姿になぞらえて、王と王妃が夜を共にする場面が、ジェニーにはありありと想像できる。夫婦なのだから、それは何の違和感もない情景だ。でも嫌だ、考えたくない。
王が王妃である女性と並ぶ姿を想像するだけで、ジェニーの胸は痛む。いつか夜な夜なジェニーを慈しんだように、王のあの手は王妃にも触れているのかもしれない。そう想像すると、ジェニーは目も耳もふさぎたくなる。
「ジェニー？」
だが、王妃は彼の妻だ。彼にそうされて、当然の立場にいる女性。
「早う来い」
王の手招きに、ジェニーは首を振った。
「……こんな遅くにあなたが一緒にいないなんて、きっと王妃様は悲しんでるわ」
一瞬の間のあと、王はジェニーを不審そうに見た。
「おまえには関係なかろう」
彼はあっさりと切り捨てたが、ジェニーをなおも不審そうに見て、尋ねた。
「妃が気になるか？」
――当たり前だ、彼の妻なのだから。
ジェニーが答えに窮した一瞬で、王はそれまで彼の身にまとわせていた緊張感を一瞬で解き、顔をほころばせた。
「そうか、気になるか」
「あなたは誰かの夫だわ。こんなところにいないで、妻のもとに帰るべきよ」

「それは、おまえが気にする必要はない」
王は機嫌よさそうに答えたが、それは逆にジェニーを苛立たせた。
「私じゃなくて、あなたが気にすべきことよ！」
和やかだった彼の表情が、ジェニーのその一言で翳った。
「何が言いたい？　俺は夫としての義務は果たしておるぞ」
誰かの夫であるという事実を、彼の口から何度も聞かされるのは御免だ。
どうして？
どうして、彼は結婚しているんだろう？
「でも、夫としての義務に、ここに来ることは含まれてないはずよ」
「ジェニー！」
王が寝台を手でたたき、怒鳴った。ジェニーは恐怖に身震いし、思わず、壁づたいに彼から少し遠ざかった。
「俺と妃の問題など、どうでもよいだろう！　あれは国が決めた妻だ、俺と妃の夫婦関係がどうであろうと、おまえが口を挟める問題ではない！」
そんなことは、言われなくても分かっている。王の結婚が国同士の結びつきを示すことは、ジェニーも頭では理解している。だが、彼が結婚をどう捉えていようが、ジェニーにとっては、彼が既婚というのは不変の事実だ。彼の隣は、ジェニーではない女のためにある。彼が笑い、手を差し出す先には妻がいるのだ。単純に、ジェニーはそれが嫌で悲しくて、理解したくないのだ。
ジェニーの胸に熱い血がどくどくと流れ込み、ジェニーがそれまで何とか庇っていた傷を押し広げた。傷口からは熱い鮮血が流れ出し、ひきつるような痛みにジェニーはもがくしかない。痛くてたまらなかった。誰か、胸からあふれ出る血を早く止めてほしい。
王はジェニーを睨みつけていたが、ジェニーは胸にためた言葉を言わずにいられなかった。
「国が決めようと、妻は妻だわ」
「黙れ、ジェニー！」

王が激昂して怒鳴り、立ちあがった。ジェニーが身構えた直後、彼は両手で顔を覆い、再び寝台に腰を降ろした。ジェニーはそれを見て、自分も床にしゃがみこみ、感情にまかせて泣き出してしまいたかった。でもなぜか、ジェニーの膝には力が入らない。

やがて王はおもむろに顔を上げ、独り言のようにつぶやいた。「俺はこんな話をしたかったのではない」

彼はもう一度手招きした。「ジェニー、来い」

それは有無を言わせぬ口調だったが、ジェニーは小さく首を振った。「いやよ」

「いや、だと？」

「話なら、ここで……ここで聞くわ」

そう言いながらも、王の目的は自分と会話するためではないと、ジェニーには分かっている。

それでも、ジェニーは彼に帰ってもらいたかった。せめて今夜は、彼の姿を見ないで過ごさせてほしい。

ジェニーに動く気がないと分かったらしく、王は黙り、膝に手をついて俯いた。横顔がかすかに笑ったようにジェニーには見えた。

「……なるほど。おまえは俺の側に来たくないということか」

俯いたまま、王が言った。

そうじゃない、と言い返しそうになって、ジェニーはその一言が彼の感情を爆発させるのではないかとふと感じ、思いとどまった。

彼はどこか、様子がおかしい。気が抜けたように正面の壁を見つめている。

急に、恐怖がジェニーの足元から這い上がってきて、膝を前後に強く揺すった。ジェニーの膝は今も力が入らず、体勢を崩して前に倒れそうになる。王が振り返り、ジェニーはそこに自分の恐怖の理由を見つけ、息をのんだ。

「手を、ジェニー」

ジェニーに向けて手を差し出し、無表情の王が立ちあがる。ジェ

ニーがよろめくように扉に寄りかかると、彼はジェニーに向かって歩き出した。

「ゴーティス王……？」

彼はジェニーに手を伸ばし、彼女の前で立ち止まる。ジェニーは差し出された手を見つめた後、自分の腕を後ろにまわして彼を見上げた。

「俺に手をとらせぬつもりか？」

彼の目がジェニーの意思を探る。

一縷の望みをかけてジェニーは言った。「今日は……今日は帰って」

「帰れ？　ここまで出向いて来た俺におまえは帰れと言うのか？」

ジェニーの足がふらりと一歩退くと、王の視線がジェニーの足元に流れた。

「帰って」

彼の顔が不機嫌そうに歪んだ。ユーゴの声が「王に優しくするように」とジェニーの耳に囁きかけたが、もう遅い。

「手をよこせ、ジェニー」

ジェニーが避ける前に、王の手がジェニーの二の腕をつかんで引っぱった。ジェニーが抵抗すると、彼はむきになって、ジェニーが体の後ろに隠した手を引き出そうとする。

「手を出さぬか！　手をとらせるぐらい、何でもないだろう！」

「そんなに乱暴にするからよ！」

王が、衝撃を受けたように目を丸くしてジェニーを見た。

何をそこまで驚くのだろう？　ジェニーは戸惑い、一気に力を失くした彼の手を見つめる。

ジェニーが彼の様子をうかがいながら動こうとすると、弾かれたように彼が我に返った。再び彼の手には力が戻り、彼の瞳に光が宿るのを見て、ジェニーは警戒する。

「……ケインならば、おまえも容易に手をとらせるだろうに」

今度はジェニーが驚く番だった。
「ケインって――なぜ、ケインの話が今出てくるの？」
王が唇を上げ、嘲笑した。
「あの男は、乱暴な言動をするのもされるのも嫌いなはずだ。ケインは、寝所でもおまえに優しかったか？」
ジェニーは耳を、二度も疑った。
「何……あなた、何を言ってるの？　どうしてケインが？」
王が鼻の頭に皺を寄せ、ジェニーを鋭く見返した。
「おまえは子まで産んでおるではないか」
その誤解はまだ解けていないのだ。彼は今もなお、ジェニーの産んだカミーユの父親がケインだと、ひどい誤解をしている。
ジェニーは慌てて首を振った。
「ちがうわ、カミーユはケインの娘じゃない！　私とケインはただの一度だって――」
「では誰の子だ？　よもや、俺と言うのではあるまいな？」
ジェニーは衝撃を受けた。その言い方は、ジェニーが数多くの男と肌を合わせていると、彼が確信しているようではないか。後宮という外部との接点を遮断された場にいて、ジェニーの知る男は、彼一人だというのに。
ジェニーが震えながら王を見ると、彼の目が不審そうに細くなった。
「カミーユは……あなたの娘よ」
「ほう？」
ジェニーは彼の口ぶりに絶望的な気分になった。彼はジェニーの答えを頭から信じていない。
「本当よ。ほかには誰もいないわ。そんな人は誰も、いない」
王はジェニーをじろりと睨んでから、ジェニーが背後にまわしていた手を取った。ジェニーは抵抗しなかった。彼はジェニーの手の甲に口を付けながら、またジェニーを見る。
「では、なにゆえ、あの男と逃げた？」

ジェニーが王城脱出に若干の迷いを抱きながらも逃げたのは、衝動的だったともいえる。あのとき、人を殺めたと動揺していたケインに同情したせいが、多分にある。ケインはジェニーを孤独と絶望から救い出してくれた人だ。彼との約束があったから、ジェニーはその日への希望を胸に、後宮での生活を送ることができたのだ。

ジェニーの顔色をうかがっていた王は、ジェニーが口を開くと顔を上げた。

「ケインと約束したからよ」

王が声をひそめて笑った。

「おまえが逃亡する前日、俺も約束のつもりでおまえに言うたことがあるが――なるほど、ケインの約束が優先されたわけか」

「そうじゃなくて――」

「来い、ジェニー」

ジェニーは王にぐいと手を引かれ、それを抜き戻そうとした。

「いやよ、放して」

「来いと言うておる！　おまえとケインの娘の命が惜しくばな！」

ジェニーが驚愕して王を見ると、彼が冷笑した。

「どうして！　あの子はケインの子じゃないわ！」

「そんな嘘は俺には通じぬ。早う、寝台に上がらぬか！　おまえがここにおる役割を果たせ！」

王の指し示す白い寝台を見て、ジェニーは怯えた。

（私がここにいるのは、彼の夜の相手を務めるためなの？）

だとしたら、ジェニーが今日の昼間に王から感じた、愛情のかけらは何だったのだろう？

「いやよ！　絶対にいや……！」

だが、カミーユは王に捕らえられた人質だ。

ジェニーは王の手に屈する以外、選択の余地がなかった。

天蓋が揺れるのをぼんやりと眺め、ジェニーは悪夢から覚めるときを待っていた。ジェニーは王の体をまともに見ないようにしてい

たが、彼の動きを、ジェニーの体は感覚的に覚えている。悪夢の終わりは、もうそろそろ訪れる頃だ。

ユーゴは伽が大好きだと言う。彼は恥ずかしげもなく、あけすけに、その楽しさと快感をジェニーに語った。もう少し経験を積めばジェニーにも理解できるはず、と彼は笑ったが、これのどこに魅力があるのか、ジェニーにはまったく分からない。王もユーゴと同じ性的快感を求めているのかもしれないが、ジェニーが知る限り、彼が楽しそうに行為に耽っていたことはない。彼はその最中に、一度も笑ったことがない。

二年ぶりの伽は、精神的苦痛だけでなく、身体的な苦痛までもたらしている。脚の間が痛い。王のたてる息づかいも、肌にはね返る彼の感触も、何も感じたくない。彼専用の娼婦のような立場を憂いたくない。五感全てを鈍らせないと、ジェニーの心と体のあちこちで、たちまちに悲鳴があがる。

天蓋が何回か大きく揺れて見え、ジェニーの肩をつかんでいた王の手から力が抜けていった。

やっと、終わったのだ。

ジェニーはほっとし、目を閉じて、以前のように彼が隣に転がるようにして離れる瞬間を待った。

「……？」

王がなかなか体から降りないことに疑問を感じ、ジェニーがおそるおそる目を開けると、彼が肩で息をしながらジェニーを見下ろしていた。それも、なぜか、泣く寸前の子どものような顔で。

「……ゴーティス王……？」

王が手を伸ばし、ジェニーの頬に触れた。彼の震える指先が、ジェニーの目から溢れた涙の跡を伝う。それから彼の顔が降りてきて、ジェニーの目じりと頬に一度ずつ、彼は唇を押し当てた。

いつもながら、彼は不可解だ。あんな乱暴にジェニーを扱っておいて、その次には、愛情表現ともとれる行為をする。どちらが本心なのか分からず、ジェニーは混乱する。

ジェニーが王の体の下から這い出そうと動くと、待て、と彼が囁いた。ジェニーはむっとして彼に振り返った。

「私はもう、役目を果たしたんでしょう?」

彼は困惑したようにジェニーを見返したが、ジェニーには、彼がそんな表情をする理由が読めない。ジェニーに彼の性欲のはけ口を無理強いしたのは、彼自身だ。満足したことはあっても、困ることは何もないはずだ。

ジェニーがなおも彼の下から抜け出そうとすると、王の腕がジェニーの眼前をさえぎった。

「待て、ジェニー」

ジェニーが王の手をどけようとすると、彼はその手をつかんだ。ジェニーは、どこまでも自分の自由を奪おうとする彼に、我慢ならない。

「どうしてよ? あなたの気は済んだんでしょう?」

ジェニーは、いつまでも彼と寝台にいたくなかった。彼の快楽以外に何も存在しない、こんな場所からは一刻も早く出ていきたい。そして、ジェニーが自分の存在価値を思って泣き出す前に、彼には王城に帰ってもらいたかった。彼には二度と、ここには来てもらいたくない。

「違う、そうではない。俺は……おまえに共にいてもらいたいだけだ」

「今まで一緒にいたじゃない! どいてよ、もう十分でしょう!」

ジェニーが堪えていた涙が溢れ出た。王から逃れようと振りかざしたジェニーの手はことごとく彼の手に捕まえられ、体の自由を失って、ジェニーは奇声を発した。

「ジェニー、おまえにここにいてもらいたいだけだ」

王の囁きに、ジェニーはあらたな涙を流した。これ以上、彼は自分に何を求めようというのか。

「放してよ! もう……もう、いいじゃない……」

ジェニーの言葉が涙に埋もれると、王は彼女の手を放し、彼女の

頭を腕の中に抱いた。ジェニーが抵抗して腕を振り回しても、体をよじらせても、彼の体勢は少しも崩れはしない。彼の望みが本当は何なのか、ジェニーには、さっぱり分からない。

彼が、ジェニーの頭のてっぺんに口づけを落とした。

「このまま……少しでよい。俺は、おまえが側におるのを感じたいだけだ」

ジェニーは王の発言に驚き、顔を上げて彼を見た。

表情はさっきと変わりない。泣き出す前の子どものような――いや、涙を流さずに泣いている子どもの顔だ。

彼はまさか、自分のしたことを悪いと思っているのだろうか？

「行くな、ジェニー」

真相は分からないが、ジェニーが反抗しなくなると、王がもう一度ジェニーの頭に唇をつけた。今度はずいぶんと長い。まるで、そこから二度と離れたくないように。

そのときになって初めて、ジェニーは王の心臓の音に気づいた。ジェニーの耳が密着した彼の胸から、力強い律動が伝わってくる。

その安定した音色に、ジェニーは緊張した自分の体から力が抜けていくのを感じた。

第二部　3．王城に住む女ー2（後書き）

都合により、来週の更新はお休みさせていただきます。
すみません～～～。

みなさま、よい夏休みを♪♪♪

第二部　3．王城に住む女ー3

ジェニーが小城に入って、約二週間が経過した。王はこれまでに何度か彼女を訪ねているが、彼女はほとんど外出せず、ひっそりと暮らしているので、彼女の存在感はそれほど際立ってはいない。

心配された王妃の反応だが、彼女は常に憂鬱そうな顔つきではあるが、表立っては文句の一言も口にしないそうだ。どこの君主にも一人、二人の愛人がいるもので、初心な王妃も、夫の愛の対象は妻の自分ではないと受け入れ始めたらしい。そんな状況下では、王夫婦の間は依然として一定距離が保たれたままだが、どちらも改善する気はないようだ。二人の不仲が続けば、「王妃様より先にジェニーが男児を産むかもしれない」と女官長は嘆き、そんなことが起こってはならない、とジェニーに怒りをあらわにする。

サンジェルマンも女官長とまったく同意見だ。というより、王妃より先であろうと後であろうと、ジェニーには、跡目争いの種となりえる、王位継承権のある男児を産ませてはならない。

王は避妊を怠りはしないはずだった。仮に今ジェニーが妊娠すれば、彼女の胎児は当然のこと、彼女自身の命さえ、王妃派に狙われかねない。ジェニー暗殺が、今よりもっと現実味を帯びるのだ。王はその危険性を理解しているだろうから、ジェニーの身を守るため、彼女の妊娠を未然に防ぎたいはずだ。以前、彼女の子を流す決断に迫られたときの王の動揺を考えれば、王は彼女に堕胎させる選択も取りたくはないだろう。

その朝、王がだしぬけに言い出した命令ともいえる指示は、とりわけ女官長の猛反対を招いた。しかし王はというと、彼女に怒りもしなかったが、彼女の説得に応じる素振りもみせなかった。彼にとっては、単に決定事項を伝えたに過ぎないのだろう。

興奮状態の女官長を侍従長の手に託し、彼ら二人を執務室から追

いやると、サンジェルマンは、ぼんやりと中庭を見下ろす王の背中を眺めた。念願叶ってジェニーを手元に呼び寄せたわりには、王が浮かない顔をしているのが気がかりだ。彼女が入城するのを待っていた頃の方が、王はずっと明るい表情をしていた。

「おまえたちは騒ぎ過ぎだ」

王は部屋に残ったサンジェルマンを冷たく見て、軽く首を振る。

「騒ぐのも当然ですよ、誰だとて驚きます。ジェニーに剣を習わせようなど……」

「何が問題だ。あの女は元々、剣の覚えがあるではないか。女だてらに、と言うのであれば、世にはいくらでも女の傭兵がおる」

「おお、まさか、彼女を兵士として育成し、王の身辺を守らせるとでもおっしゃるのですか？　お戯れを！　王、何があったのです？　なにゆえ急に、このようなことを？」

王が窓面に背を預け、再び中庭に視線を落とした。

朝のこの時間には、ジェニーの娘が乳母たちに連れられて中庭に出てくる。今はまだ甲高い笑い声が聞こえないが、もう間もなくだ。

彼女は目覚めてすぐに母親を求めて大泣きするらしく、その大音量に辟易とした女たちが、ある朝、苦肉の策として彼女を外へ出したところ、彼女はついに泣きやんだそうだ。それ以来、中庭を転がるように歩く幼女の姿は、王城の朝の風景として、人々の目を和ませている。

サンジェルマンを見つめ、王が大きくかぶりを振った。

「急ではない。以前より、考えておったことだ」

「彼女に剣を握らせるのは危険です」

「俺の命を狙う、と言いたいか？」

「いいえ、それはないでしょう」

サンジェルマンは、ジェニーが王の結婚を知って、動揺していた様子を思い出しながら答えた。

王が訝しそうに目を細める。

「王、彼女は武器を手に周囲を脅し、娘を奪い返して、ここを再び

逃亡しようと考えるかもしれませんよ」
「だが、それはできぬだろう」
「無理ですが、彼女ならやりかねない。そして、それをもし実行したら、それはすなわち、彼女の死を意味します」
王は返事をしなかった。けれども、サンジェルマンの意見に同意したに違いない。

中庭にひときわ高い声が響いて、二人は、ジェニーの娘が朝の散歩に現れたことを知った。いつものように、王は窓際から離れ、部屋の中央に歩いてくる。
娘が王城に入って一ヶ月以上も経過し、王妃でさえも彼女と何回か会っているというのに、王はいまだに彼女との対面を果たしていない。王が子ども嫌いだという噂が城内に蔓延し、彼が頑として娘との対面を拒否するたび、王城の住民の不審を買っている。
王は窓の外を指差して、サンジェルマンの前で宣言するように言った。
「あの娘が俺の手の内におる限り、ジェニーが武器を手にはむかうことはない」
その揺ぎない態度で、サンジェルマンは自分の説得があえなく失敗したと気づかされた。
王がサンジェルマンに背を向け、サンジェルマンはその背中に問いかけた。
「王、なにゆえ、そこまでして、彼女に剣を習わせようとなさるのです？」
王は壁際の椅子に腰を降ろすと、わずかに頬を強張らせた。
「あの女にも暇つぶしが必要だ」
「暇つぶしなら、若い女にふさわしいものが他にいくらでもありましょう。剣など、物騒な。誤って怪我を負うかもしれませんよ？」
「ジェニーは剣に熱中する。危険だろうが物騒だろうが、それが、あの女にふさわしいものだ」

王がそれまでとは違う、やわらかい笑みをたたえるのを見て、サンジェルマンは口をつぐんだ。ジェニーが剣術に熱を入れるだろうことは、容易に想像できる。いつだったか、アリエルが、狩りの館で偶然に見つけた剣をジェニーが手に取り、嬉しそうにしていたと話していた。もしかしたら王は、ジェニーに日々を楽しく送らせるために、周りの反対をものともせず、彼女に剣の手習いをさせようと言っているのかもしれない。自分以外の者を思いやっての発言だとしたら、いい兆候ではないだろうか。

「指導はライアンがすればよい」

だが、王の口からライアンの名が出たことで、サンジェルマンは愕然とした。てっきり、ジェニーの身内で剣の達人でもある、ユーゴ・ベアールの名が出てくると思っていた。

「ライアン殿ですか？」

サンジェルマンの驚きを予想していたように、王は頷く。「そうだ」

ライアンは近衛隊の中でも剣術に長け、後輩の指導者としても定評のある人物だ。王の練習相手も務めているので、王の口から彼の名が挙がるのは、実は、それほど不思議ではない。女の暇つぶしの為であろうと、王の要求とあれば、彼は確実に最後まで遂行するはずだ。

ただし――。

「不満そうだな」

「彼は多忙な立場におります。一人の女に剣を教えられるような時間はないでしょう」

ライアンはジェニーを毛嫌いしている。サンジェルマンと違って、王がジェニーと別れる最後の瞬間までを直接目にしてきたせいもあるのか、彼はジェニーの名を耳にするたび、怒りと不快感で身を震わせるそうだ。近衛隊はジェニーの護衛につかなくていい、と王が言ったとき、ライアンは、当然だ、と王の英断を喜んでいた。裁かれるべき女をなぜ保護する必要があるのか、と、彼は今でも思って

いるだろう。その彼が、喜んでジェニーに剣の指導をしたいはずがない。

サンジェルマンの思いを知ってか知らずか、王は小さく笑う。

「では、ベアールに頼むか？」

「ベアール殿は、なりません」

王が興味深そうに、サンジェルマンを見返した。

「ほう？　おまえは、ライアンよりベアールの方を薦めると思うておったが？」

「彼はなりません」と、サンジェルマンはきっぱりと言い切った。

「彼は姪のジェニーに会うと理由をつけ、ここ最近は特に、王城に足繁く通っております。しかし、ほとんどの場合、彼はテュデル宮のジェニーのもとに長居はせず、本城に入り浸りなのです。彼にはこれ以上、王城へ立ち入る正当な理由を与えてはなりません」

ユーゴ・ベアールが王城の人々に愛想良く話しかけるおかげで、彼の姪で王の愛妾ジェニーへの反感が薄れているのは事実だが、大した用事もないのに、王城勤めでもない者が城に頻繁に顔を見せるのは、決していい傾向ではない。

王は、サンジェルマンが詳しく説明をしなくても、彼の意図するところを理解したらしい。

「あの男は女の人気取りに勤しんでおると思うたが、ふん、その手の野心があったか」

「どの程度の野心かはまだ分かりませんが、王の御子を産んだジェニーは、ベアール家にとって貴重な王家との絆です。王家との縁は家の繁栄に繋がりますゆえ、彼がジェニーの立場を最大限に利用しようと考えたとしても、少しも不思議ではありませんよ。そしても し、彼女が男児でも産んだら――」

「おまえの懸念はわかっておる。その点は抜かりない」

苦々しげに王は言い放ち、中庭から聞こえてくる高らかな笑い声に気をとられ、さらに顔をしかめた。

「王、ジェニーの身を心配なさる前に、王妃様との間に早くご世継

ぎをもうけることです。女官長が、王は王妃様よりジェニーを訪ねる方が多いと嘆いておりましたよ」

「あの陰気な顔をした、幼稚な女を抱け、と？」王は大げさに嘆くふりをした。

「どんな方であれ、王妃様は王の御子を産んでくださる方なのです。ご世継ぎが必要なことは、王もよく分かっておいででしょう？」

サンジェルマンがたたみかけるように言うと、王はふてくされたように、上目づかいに彼を睨んだ。

「子ができぬのは、俺のせいだけではない」

「わかっております」

王が天井を見上げ、いまいましそうに何かを罵った。

「ならば、あの女の化粧をもっと濃く、派手にしろ！　寝所でも、それなりに成熟して見えるようにな！」

はい、とサンジェルマンが微笑むと、王はうらめしそうな目つきで彼を見上げ、短いため息をついた。

「では今宵、後宮をお訪ねいただけますか？」

「明日だ」

吐き捨てるようにそう言ったあと、王はサンジェルマンをじっと見つめた。

「ジェニーには剣を習わせる。ライアンに、俺が子どもの頃に使用していた剣を渡しておけ」

サンジェルマンの予想以上に、ライアンは王の要望を彼から伝えられると、あからさまに嫌悪感を表した。そして、断罪されて然るべき女を王が特別扱いすることを嘆き、王にそんな行動をとらせるジェニーに対して再び、ライアンは強烈な怒りを爆発させた。彼は、絶対にお断りだ、と声を荒げ、サンジェルマンが彼に先立って話をした女官長のように、なぜ王の翻意を成し遂げなかったのか、とサンジェルマンを激しく責めたてた。

「彼女に剣を習わせるのは、彼女に自分の身を守らせるためです。彼女個人には、一人の護衛もついていないことをお忘れですか？」

サンジェルマンはライアンを説き伏せようとそう言っておきながら、それこそが、王がジェニーに剣の手ほどきを受けさせようとした本来の理由ではないか、と不意に思った。彼女がまだ後宮の住人だった頃は、一歩でも外に出れば、衛兵がついてまわったものだ。だが今、小城の周囲をまわる衛兵は数多くいても、ジェニーに個人的に付く衛兵はいない。それは、緊急時以外は彼女のために近衛兵を遣わさない、という王の指示に基づくものだ。

サンジェルマンの指摘を受け、ライアンが呆れたように両手を上げた。

「当たり前だ、あの女に近衛隊から護衛を出すものか！　サンジェルマン、どうしてもあの女に剣の指導をつけるというなら、ベアール殿に頼め！　王も、身内の彼に彼女を任せた方が何かと安心だろう！」

「王は貴公を指名された。王の信用は貴公にあるのです」

忠義なライアンが口の中で唸り、サンジェルマンの前でぐるぐると円を描いて歩き回る。

サンジェルマン自身、王の希望を叶えることに完全に賛成しているとはいえない。まだまだめずらしいといえる、女に剣を扱わせることや、有能なライアンを指導にあたらせることは、良くも悪くも、皆の関心をジェニーに集めるだろう。その一方で、彼女に剣の覚えがあれば、その身がやたらに狙われる機会も減り、多少は安全になるとも考えられる。王の心労も少しは軽くなるはずだ。だが、サンジェルマンが最終的に王の要求をのんだのは、王が王妃のもとを訪ねるという「約束」の交換条件のようなものだ。

「ライアン殿、ジェニーにと、王が昔使っておられた剣を預かっております。後ほど、貴公にお渡ししましょう」

「私は引き受けるとは言っていない」

ライアンは足を止め、ひきつった顔でサンジェルマンに反論する。

彼の顔に去来する表情を見て、サンジェルマンは彼のやるせない思いを切々と感じた。

だが、彼が王の要望を聞き入れるしかないことは、サンジェルマンには既にわかっていた。意を決したように、ライアンが振り返る。

「わかった。いいだろう、王のご意思を尊重する。あの女が気まぐれで剣を習いたいというなら、稽古をつけてやろう。されど、万が一、私の手元がくるって女の心臓を剣で貫いたとしても、それはあくまで事故ということ。それでも構わぬなら、私はいつでも師となってやる」

ライアンは、抜けがけや不誠実な行為を許せない性分だ。脅し文句を口にしながらも、彼は王の期待を裏切れない。

サンジェルマンとライアンの視線が宙でぶつかった。ライアンの目が訴える無言の反抗に、屈してはならない。サンジェルマンは彼に笑みを送った。

「貴公が引き受けたとなれば、王はさぞお喜びでしょう」

ライアンの眼光がおとろえ、強張ったその顔が、上下に弱々しく揺れた。

ライアンの了解を取りつけたその足で、次に、サンジェルマンは西館に向かった。今日もまたユーゴ・ベアールが王城を訪ねており、彼が女官長室に向かったと聞いたからだ。サンジェルマンは彼をテュデル宮に同行させ、彼を同席させた場でジェニーに会って、剣の指導の件を伝えるつもりだった。

ところが、目的の女官長室は閉まっていた。ちょうど通りかかった女官長の小間使いによると、ユーゴは女官長や顔見知りの侍女と一緒に階下へ行ったそうだ。残念だが出直そうとした矢先、無人のはずの女官長室から床がきしむ音がして、サンジェルマンは小間使いを咄嗟に見た。彼女の目が泳いでいた。

「女官長！　私だ、サンジェルマンだ。ジェニーの件で緊急に話がある。ここを開けてくれないか！」

サンジェルマンは、室内に女官長がいるとは考えていなかった。誰かいるとしたら、それはユーゴと彼の知り合いの女だ。それを分かっていながらも呼びかけたのは、情事を隠し身をひそめていたいユーゴでも、ジェニーに関する情報は知りたがるに違いないと思ったからだ。

案の定、扉が内側から細く開けられ、隙間からユーゴが顔を出した。髪が乱れている。部屋の奥にも誰かがいるかもしれなかったが、もし女官長がいたなら、ユーゴは姿を隠し、彼女が先に顔を出しただろう。主人不在の部屋で事におよぶ彼の非常識さと節操のなさに、サンジェルマンは腹が立った。

「女官長はこちらにはおりませんよ、サンジェルマン様」

「彼女がいない部屋で、貴公は何をしている？」

ユーゴはサンジェルマンの問いかけを笑顔で無視し、逆に質問した。

「サンジェルマン様、ジェニーに何があったのですか？　急な体調の変化でも？」

サンジェルマンも彼の質問をあっさりと受け流した。

「ちょうどよいところで貴公に会った。ジェニーに用事があるのだ。私が一人で出向くわけにはいかぬゆえ、貴公にご同行願いたい」

「ジェニーにですか？　ええ、喜んで！」

ユーゴが目を輝かせ、廊下に飛び出てきた。

その後、サンジェルマンはユーゴの執拗ともいえる質問をやり過ごし、ジェニーが王城に来た初日以降初めて、テュデル宮の玄関をくぐった。そして、二週間ぶりに再会したジェニーに驚愕した。彼女はおよそ信じられないほどにうつろな様子で、庭にぼんやりとたたずんでいる姿は、王の浮かない表情と重なりあう。

「ジェニー！」

ユーゴの呼びかけに反応し、振り向いたジェニーが彼の隣にいるサンジェルマンにも気がついた。だが、無表情の彼女に笑顔がとも

ることはない。

娘と会えない日々がジェニーの精気を奪い、ひいては、王の精気も奪っているのだ。王の唐突な発言は、娘への執着からジェニーの目をそらし、彼女の精気を取り戻すためでもあったのだ。

第二部　3．王城に住む女ー３（後書き）

お待たせしましたー、二週間ぶりの更新です♪

第二部　3．王城に住む女ー4

それは、またもや一方的な通告だった。サンジェルマンが、三日後からライアンが剣の指導に来るとジェニーに告げたのだ。「剣の得意なあなたの為と思って、王が特別に取り計らってくださった」と彼は言うが、ジェニーはこんな場所で剣の練習に励む気はなかった。剣を習わせてほしいと、王にも誰にも言ったことはない。そもそも、何の為にジェニーが剣を習うはめになるのか。

疑問と怒りがジェニーの中でふくらみかけたが、途中であっけなく立ち消えた。王や王にかしずく人々にジェニーの考えを言っても、受け入れられはしない。ここでは王の意思が最優先され、それがどう利己的であろうが、それに沿うのがここの人々の常識だ。

ジェニーが反抗をあきらめると、代わりに、ユーゴが少し不満そうな声を出した。

「そういうことなら、ひと言ご相談くだされればよかったのに。私は身内です、いつでも彼女に剣を教えますよ。お忙しいライアン様の手を煩わせる必要はありませんよ、サンジェルマン様」

ユーゴがジェニーの頭を引き寄せて額にキスすると、サンジェルマンの目がわずかに厳しさを増した。だがすぐに、彼は普段の微笑みを戻した。

「ライアン殿は王城内に毎日おられる。貴公は王城勤めでもないゆえ、その都度、王城まで足を運ばねばならないだろう？　家での仕事もあるだろうに」

サンジェルマンがそう説明すると、ユーゴの笑顔がぎこちなく変わった。

「ライアン殿を遣わすのは、貴公の負担や他の様々な状況を鑑(かんが)みた結果だ」

男二人の間に奇妙な緊張感が漂ったようだったが、ジェニーの視線と出合ったユーゴが肩をすくめると、それはぷっつりと途絶えた。

そして彼は、ジェニーの額にかかる髪に触れながら、サンジェルマンを見もしないで、そうですか、と呟いた。

「ライアン様は近衛隊の中でも腕がたちますからね」

その後の彼の言葉は、ジェニーには、負け惜しみのように聞こえた。

そして今日は、ライアンがジェニーに剣の指導をする初日だ。ところが、ジェニーにはやる気などまったくおきない。

この三日間、王はジェニーの前に現れなかった。とうとう彼も愛想を尽かしたのだ、とジェニーは思い、寂しさと、それを上回る安堵感を噛みしめた。王が訪ねてきた最後の夜、寝台の上でうとうとしていたジェニーは、彼が窓辺にたたずんで、いつまでも庭を見下ろしていたのをおぼろげながら覚えている。

二人が小城で再会してからの最初の一週間、ほぼ毎日、王はジェニーを訪ねて小城にやって来た。大抵は夕方か夜、召使たちが去った部屋に二人きりで残されると、王はジェニーの顔を数秒間眺めては、頬をかすかにゆるめた。王のそんな態度を目にすると、彼は肉体関係を結ぶためではなく自分に会いたいのだ、とジェニーは毎回思ったものだ。半信半疑ながら、ジェニーが彼の想いに応えてその瞳を見返していたのも、ちょうどその頃だ。

しかし、甘いひとときは長続きせず、ジェニーがひとたび口を開いて娘の話題にふれようものなら、二人の間は不毛な言い争いに発展した。激した王はジェニーの反抗を力ずくで押さえ込み、二人の諍いはいつも寝所の中で強制的に終わった。

王と会うたび、ジェニーは無口になり、彼も口数が減った。当然ながら、口げんかはなくなったのだが、それでも王は、何かに憑かれたように黙々とジェニーを抱いた。ジェニーは抵抗しようとすらしなかった。今のジェニーには、王の床にはべる愛人という立場以外に何もないのだ。それからすぐに、ジェニーは、目の前の世界が次第に遠のくような、奇妙な感覚を持つようになった。今までに経

験したことのない虚脱感に体が支配され、それが「無気力」だとジェニーは気がつきもしなかった。王が腕に抱くのはジェニーの体ではあったが、既に、ジェニー自身ではなかった。

いつにもまして、コレットの慌てた声が響き渡る。ユーゴが“小さな女官長”と呼ぶ彼女は、実際には女官長より立派な体格をしているが、話し好きでせっかちなところは同じだ。

「ジェニー様、早く着替えてくださらないと、初日から遅刻しますわ！　ライアン副隊長は時間に厳しくて有名なんですよ！」

コレットが青ざめてジェニーを叱咤した。彼女の両手をふさいでいるのは、少年用の乗馬服だ。

「あなたがそれを着て、代わりに行ったらどう？　その方はきっと、人違いだって気づかないわ」

「まあ、こんなときに冗談をおっしゃらないで下さいまし！　ライアン副隊長はジェニー様をご存知ですわ！　以前“王の森”に狩りに出かけられた際、中毒騒動がありましたでしょう？　そのときにジェニー様の介抱を受けてらっしゃるそうですわ！」

突然、ジェニーのみぞおちのあたりが冷たくなった。急に記憶がよみがえったのだ。

ライアン――近衛隊副隊長のライアンとは、国境近くでケインとジェニーが追い詰められたとき、馬上から氷のような眼差しでジェニーを見つめていた、あの男だ。

ジェニーはますます、剣を習う気が失せた。そんな男が、どうしてジェニーに剣を教えてくれるのか？

今日はユーゴも来ていない。いいかげんな人ではあるが、彼がいると場が和む。こんな日こそ、ジェニーは彼に側にいてもらいたかったのだが、サンジェルマンと彼が二人でここに来た日以来、ジェニーは彼の姿を見かけていない。小城の使用人たちもユーゴには会っていないそうだ。

ジェニーが追い立てられるように乗馬服に着替え、しぶしぶ庭に

出ると、近衛の制服をまとったライアンが腕組みをして彼女を待ち構えていた。彼の冷え切った眼差しは今も健在だ。折しも季節はあのときと同じで、彼の着る制服の青さがジェニーの目に痛かった。

彼は慇懃にジェニーに会釈した。

「ライアンだ。そちらは私を覚えていないかもしれないが」彼はそう言うと、ジェニーの頭からつま先までを疎ましそうに眺めた。「以前と変わりないようで、安心した」

言葉とは裏腹に、その言下には彼の怒りが押し留められているようだ。王に忠実らしきライアンは、ジェニーを許せないに違いないのに、王の命令で彼女に剣を教えるのだ。ジェニーは、サンジェルマンの「おまえは敵に周りを囲まれているようなものだ」という声を思い出し、ライアンもまたその「敵」の一人なのだと悟った。

サンジェルマンによると、ジェニーが口にする食事は毒見が試食しているそうだ――つまり、ジェニーには毒殺される危険がつきまとっているということだ。王妃や王妃派はジェニーの存在が邪魔なだけだろう。それに、ジェニーが後宮を逃亡した事実を知る女官長や一部の者たちは、ジェニーに並々ならぬ怒りを覚えており、隙あらば、彼女の命を奪いたいと思っているそうだ。サンジェルマンはジェニーを散々そうやって脅しておいて、おまえが死んで喜ぶ者のひとりが私だ、とジェニーを突き放した。

（じゃあ、剣なんか、なぜ私にやらせるのだろう？）

ジェニーの問いに、王がそうお望みだ、とサンジェルマンが冷ややかに即答した。「剣を扱えるようになれば、自己防衛ができる。私はおまえの味方ではないが、王の意向には沿う」。

そしてサンジェルマンは、ジェニーの瞳をまっすぐに捕らえて言った。

「王は唯一、おまえが死ねば、嘆き悲しむ人物だ」

ジェニーの胸のずっと奥で、か細いながらも生命の炎が揺らめいている。少し前までは、生きようが死のうがあまり重要ではなかっ

たのに、ジェニーは今、生きたいと願っている。

自分が死んだらゴーティス王は悲しむ、と聞いても、ジェニーは実感がわかなかった。彼は自分を愛していると何度も思っても、彼に力でねじ伏せられる日々が続くと、ジェニーのその考えはいつしか説得力がなくなった。そして今、王が三日も続けて姿を見せないのは、彼のジェニーへの興味が薄れた証拠だと、ジェニーは考えている。

けれども、もしジェニーが死ねば、娘のカミーユは母親の死を悲しむ。

今は離れ離れになっていても、いつかきっと、カミーユと再会できる日が来る。カミーユを自分の腕に取り戻すまで、ジェニーは生きていたい。その日まで、ジェニーは生き永らえなければならないのだ。カミーユがいないことを憂い、寂しがってばかりはいられない。ジェニーを狙う者たちは、彼女が弱っていると知れば、ここぞとばかりに牙を向けるかもしれないのだから。

ジェニーの正面に立ったライアンも、実はジェニーを倒す機会をうかがっているのかもしれない。

彼の気迫に負けないよう、ジェニーは彼を見返した。剣を習うことにどんな意図があったとしても、いつかきっと、ジェニーの役に立つはずだ。

緊張で硬くなった膝を少し曲げ、ジェニーは彼に挨拶を試みる。

「もちろん覚えています、ライアン様。私に剣を教えてくださること、感謝しています」

ジェニーが何とか笑顔を作ると、彼は唇を横一文字に結び、不愉快そうに眉をひそめた。彼が不本意ながら剣の指導を引き受けたのは、その態度から明らかだ。だが、そんなことは、ジェニーの大願の前では取るに足らないことだ。

ライアンは毎朝決まった時間にテュデル宮の庭に現れ、決まった時間に去っていった。彼はジェニーに冷淡で、指導は厳しかった。

時には召使たちをはらはらさせる、彼の罵声も飛んだ。彼らはライアンがジェニーに敵意を持つ経緯を知らないため、彼の厳しさに恐れをなし、誰も彼に話しかけようとしなかった。ジェニーが剣の練習をしている噂は王城内に広まっていたが、興味本位で二人を見物していた衛兵を、ライアンが神経質に怒鳴りつけたこともあって、二人の朝の日課は誰にも邪魔されることなく、ひっそりと行われていた。

ジェニーが剣の指導を受けるようになって一週間が経っても、王がジェニーを訪ねてくることはなかった。ライアンのまばゆい髪色を目にすると、同じような頭髪を持った王を思い出したが、ジェニーが彼の不在を思って深く落ち込むことはなかった。一週間前と比較すると寂しさは倍増していたが、ジェニーは、あのまま王の床の相手だけに甘んじていたら、と考えると、彼の訪問が途絶えてよかったと思っていた。ジェニーは、心を少しずつむしばんでいた闇に飲み込まれる前に、助かったのだ。

そしてある朝、王と同様に姿を見せなくなっていたユーゴが、久しぶりにジェニーの前に顔を見せた。ジェニーが庭におりると、めずらしく、ライアンが誰かとしゃべる声が聞こえたと思ったら、彼の隣にはユーゴがいた。ジェニーが二人に近づくと、ライアンはいつもどおりに硬い顔に変わり、ユーゴは彼女に手を振って笑った。

「ジェニー！」

ユーゴは大きな音をたててジェニーの頬にキスをし、顔を見て、再び笑顔になった。人懐こい笑顔を目にするのは気分がよく、ジェニーも彼に自然に笑い返した。

「よかった、元気そうだ。顔色がすいぶん良くなったよ。……この格好、なんだか勇ましいね」

彼が一歩退いてジェニーの服装をじろじろと眺め、半分呆れたように息をつくのを見て、ジェニーは思わず笑った。

「男の子の乗馬服なの。少しでも動きやすい服装がいいからって、コレットが調達してきたのよ」

「ああ、あの“小さな女官長”ね」
ジェニーはまた笑った。
「しばらく顔を見なかったけど、元気だった？」
「元気だったよ。家の方でいろいろと忙しくてね。私もあんまり家を不在にできないから、これまでみたいに、ここには頻繁に来られないな」
彼は心から残念そうにそう言い、ジェニーはその姿に和まされた。仕方ないじゃない、と答えると、ユーゴはもう一度、さっきとは反対側のジェニーの頬にキスをした。
「じゃあ、今日は何か用事があって来たの？」
「ああ、剣技大会の打ち合わせさ。私は今年も模範試合を担当するからね。今月末に開催される全国大会で――知ってるよね？」
ユーゴの背後で、ライアンの目が、一際、ぎらりと光ったように感じた。
剣技大会を知っているも何も、二年前、ちょうどそれが開催されていたときに、ジェニーはケインとこの王城からの脱出を果たしたのだ。その直前には、王がジェニーを王城の屋上へと連れ出し、光の点にしか見えなかった会場を一緒に眺めた。あのときの王は、ジェニーがそれまで知っていた彼とはまるっきりの別人に感じられた。彼を信じてもいいのかもしれないと、ジェニーの魂が揺さぶられた日から、もう二年も過ぎている。
あの日のことを思い出すと、ジェニーの胸は今でも疼く。王とは二度と再会できないと覚悟した脱出の夜、それから二年後の同じ日をまさか王城で迎えるとは、ジェニーは夢にも思わなかった。
ケインとあのとき逃亡しなければ、今と同じ状況がジェニーを待っていただろうか？　王はもっと優しく、ジェニーに接してくれたのだろうか？　ジェニーが王に対し、時にねじれた感情を抱くこともなかったのではないだろうか？
どれもこれも正答は出ないが、少なくとも、王がカミーユをケインの娘だと疑うような状況だけは、避けられたに違いない。きっと

何年たっても、この胸の疼きはジェニーを苦しめ続けるのだろう。
「知ってるけど、剣技大会をこの目で見たことはないわ」
ジェニーがユーゴに答えると、彼は子どものように目を輝かせた。
「じゃあ、今回は見物したら？」
「ジェニー殿！」
ライアンの苛々とした声が二人の会話を遮った。
「私は暇を持て余している人間ではない、無駄話をいつまでも続ける気なら、私は引き上げるぞ！　今日は剣の練習をするのかしないのか、どちらだ！」
ユーゴが一瞬だけ戸惑ったように、ジェニーを見た。
「ごめんなさい、話はあとにするわ」
すかさず、ジェニーはライアンに言い返した。ユーゴが彼に反論しそうになる気配を察し、ジェニーはそれを急いで止める。
「ユーゴ様、じゃあ、またあとでね」
「ジェニー、でもね――」ユーゴの不満そうな呟きを制し、ジェニーは無理に笑った。「またあとで話しましょう、ユーゴ様。来てくれてありがとう」
ジェニーがライアンを見やると、彼はすでにジェニーに背を向け、二人が練習場としている地点へと歩き出していた。

しばらくの間、召使たちの控える隣で、ユーゴは二人の様子を見物していた。ライアンが彼に文句を言うかとジェニーは心配したが、ライアンは何も言わなかった。ジェニーの視界の隅に見えるユーゴは、いつもの笑顔をすっかり消して、いたって真剣な顔つきだ。
ライアンは、ジェニーには本物の剣をまだ持たせてくれない。ジェニーの腕がライアンの認める基準にまで達したら、彼は剣を授けるそうだ。それまではもっぱら、二人が使うのは剣に見立てた木の棒だ。
普段にもまして、ライアンは手加減をしなかった。ジェニーはライアンの攻撃を避けるのに精一杯で、心に余裕がなかった。ほどな

く、相手が剣に込める力をまともに受けるな、と口を酸っぱくして注意をされていたのにも関わらず、ジェニーはライアンの木棒を受け止め、あっさりと、それを遠くに飛ばされた。

「何度同じことを言わせる気だ！　おまえは男の力にかなうと思うのか！」

ジェニーは自分の棒を取りに走り、ライアンの怒鳴り声を背中越しに聞いた。彼の罵声にはもう慣れたが、召使たちが同情のこもった瞳で自分を見ることに、ジェニーはいつまでも慣れない。

ジェニーが棒の飛ばされた方向へ小走りで向かうと、小城の建物の陰に、三人の女と衛兵一人がいつのまにか立っているのに気づいた。四人も、ジェニーが彼らに目を留めたことに気づいた。女たちは全員が立派なドレスを着ていたが、中央にいる黒髪の少女は特に豪華なドレスを身につけている。ジェニーは、その三人の誰とも面識はなかった。

誰だろう、と疑問に思いながらも、おそらくは貴族の女性たちだと考え、ジェニーは膝を曲げて挨拶した。すると、少女の両脇にいた二人の中年女たちの顔に、怒りか不快感のような、好意的ではない表情がはっきりと表れた。

「これは、王妃様ではないですか！」

ユーゴの明るい声が軽やかに響き、ジェニーは反射的に黒髪の少女を見つめた。

「……王妃様？」

ジェニーが想像していた王妃像より、彼女はずいぶんと年若い。細長い手や華奢な肩は、十代の少女の体つきで、きっとジェニーより年下だ。彼女は大陸南部の人々に特有な蜂蜜色の肌をしており、尖った鼻を持っていた。けれども、凛々しいとも呼べる顔つきに反し、年若い王妃は、怯えたようにユーゴの方を見たあと、ジェニーを気弱そうに見返した。

ジェニーの視線の先にいるのは、平均的な容貌の、おとなしそうな少女だ。王妃はもっと高慢で鼻持ちならない、成熟した女性だと

想像していたので、彼女のひかえめな態度に、ジェニーは戸惑った。彼女が王の隣に席をとる図が想像できなかった。だからなのか、彼女に対し、嫉妬心は生まれなかった。

だが彼女こそが、後宮に住む、ゴーティス王の妃なのだ。

「待って！」

顔を手でおおって去りかけた王妃を、ジェニーは咄嗟に呼び止めた。ジェニーが彼女を追って走り出すと、彼女に付いていた衛兵が振り返り、剣を抜いてジェニーを威嚇した。

「待って！　待ってください、王妃様！」

衛兵の前で立ち止まり、ジェニーは手にしていた木の棒を自分の背後に放り投げた。衛兵は血走った目でジェニーをなおも睨みつけ、剣をちらつかせてジェニーを脅した。

「王妃様、待ってください……！」

ジェニーが衛兵の陰から必死に叫ぶと、王妃はやっと立ち止まった。王妃が振り返ると、その顔に浮かぶ恐怖の色だけで、ジェニーは足がすくむように感じた。

第二部　3．王城に住む女ー5

走り寄ってくるユーゴに振り返る前に、ジェニーは背後から誰かにいきなり肩をつかまれた。

「王妃様に話しかけるとは、なんと無礼な！」

頭上から、ジェニーの聞きなれた、ライアンの怒鳴り声が落ちた。

「おまえごときが相手にできるお方ではない！　早く練習に戻れ！」

「ライアン様！　彼女が礼を欠いたのは事実ですが、その言い方はないですよ！」

「彼女を甘やかす気か、ベアール殿！　この女は貴公の一族ではあっても、庶民の育ちで礼儀知らずだ！　本来なら貴公が教育すべきところだぞ！」

「それは私だって心得ております！　彼女の至らない点は認めますよ、でも――」

ジェニーは頭上でやり取りされる二人の会話を尻目に、王妃を目で追った。王妃はジェニーの視線に気づくと、また、焦ったように顔をそむける。

「待って、王妃様！」

男二人の会話が中断した。王妃が顔を強張らせ、ジェニーの叫びに縛られたように、その場に立ちつくす。

「行かないで下さい、お願い！」

ジェニーは王妃に去られたくなかった。

王妃は後宮に住んでいるのだ、ジェニーの娘が住むのと同じ場所に。

ジェニーとカミーユを結ぶ唯一の鍵は王だった。しかし、王は強固にジェニーの願いを退け、今や、彼はジェニーの前に姿すら見せない。ジェニーはいつかきっと娘に会うという望みを持ち続けていて、今すぐにでも、娘に会う準備はできている。どんな機会でも、それがジェニーをカミーユと繋ぐ接点になりさえするのなら、たと

え王妃を通じてでも、ジェニーはいつでもそれを掴む覚悟でいる。
ライアンが再びジェニーの肩を強く押さえたが、ジェニーはそれを振り払った。
「お願いがあるんです！　王妃様でなければできないことがあるんです！　どうか、だから行かないで！」
「ジェニー！」
今度はユーゴも青くなってジェニーを止めたが、ジェニーは王妃から目を離さなかった。彼女に迷いのような表情がよぎったが、それは直後に彼女の前に立ちはだかった女たちの体の陰で、ジェニーの前から消え去った。
「王妃様に頼みごとですって！　いくら王のご寵愛を受けているとはいえ、なんと図々しい！」
「あなたのような人を相手にする時間は、王妃様には一秒たりともありませんよ！」
女たちは軽蔑したような眼差しをジェニーに投げ、二人で背後に隠した王妃に何かを囁いた。
「待ってください！　王妃様は後宮に住んでいるんでしょう？　カミーユの、あなたが改名した私の娘がいるのと同じ場所に！」
ライアンがジェニーの腕を引っぱったが、ジェニーは必死で抗った。
「私はもう二ヶ月も、娘に会ってないんです！　元気だってことは聞くけど、でも心配でたまらない。どうしても、ひと目だけでいいから、娘に会いたいんです。だからどうか、お願いです、彼女に会わせてください！　ひと目だけで構わないから……！」
まあ、と呆れたように女たちが叫び、ジェニーは背後から伸びたライアンの腕に上半身を抱えこまれた。
「図々しいにも程がある！」
ライアンの腕の中でもがきながら、ジェニーはなおも王妃を求めて叫んだ。
「お願いです、王妃様！　私はここに来て以来、娘に一度も会って

ないんです！　それまでは毎日一緒にいたのに、もうずっと、一度も顔を見ていないんです！　ほんのちょっと、ひと目だけでも会えればそれでいいんです！」

ライアンは怒って押し黙り、彼の隣について歩くユーゴも、今は同情的にジェニーを見るだけだ。

（せっかく、やっとのことで、後宮への扉が見えたのに……！）

ジェニーが掴みかけた希望が細りはじめ、それをあきらめるしかないのかと、口惜しさでジェニーの目頭が熱くなった。と、そのとき、

「……それは王にお願いなさればいいでしょう？」

遠慮がちな、かわいらしい声がジェニーの耳に入り、彼女を連行していたライアンの足も止まった。振り返ると、二人の女たちの間から王妃が顔をのぞかせている。しかしジェニーと視線が合うと、彼女は顔を伏せた。

「私は彼女とほとんど会うこともないのよ。だから……あなたが王にお会いになったとき、直接にお願いなさったら？」

ジェニーは王妃が答えてくれたことが嬉しく、呼吸が荒れた。希望の花がもう一度ふくらみ出すのを感じた。

「王は私の願いなんか、聞き入れてくれません。それに、しばらく、私は王の顔を見ていないんです」

王妃の顔に驚きが浮かんだが、それはすぐに失われた。

「王が聞き届けてくださらないとしたら……私にはどうにもできないわ」

「でも、後宮の主は王妃様でしょう？　私はただ娘の顔をひと目見たいだけで――窓越しに見るだけでもいいんです。それだけでも、王妃様の権限でできないのでしょうか？　母親が娘に会いたいと思うのは当然です。それさえも……叶わないんですか？」

「来るんだ、ジェニー殿！」

「いやよ、待って！　ああ、王妃様、お願いです！」

一度は足を止めたのに、ライアンはジェニーの肩を引き寄せ、体

を引きずっていく。ジェニーの抵抗など、今度こそ、意味がない。
「王妃様！」
最後にジェニーが叫ぶと、気弱そうな声で、無理よ、という王妃の返事が聞こえた。ジェニーはその声を耳にするなり、はかなくも潰えた希望を思って、目の奥からとめどなく涙が溢れ出すのを感じた。

次の日、ライアンは多忙を理由にジェニーへの剣の指導を休んだ。彼の怒りが治まらなかったのだろう。その次の朝も練習は休みだとジェニーは予想していたが、彼は定刻にやって来た。機嫌はよさそうには見えないが、いつもと比べ、特に悪いようにも見えない。彼は律儀なのだ、とジェニーは思った。彼は王の命令に決してそむかない、忠実な男なのだ。
ライアンとの普段どおりの練習が終わって、休憩をとっていたときのこと、ジェニーは思わぬ来客を受けた。一度会ったきりだが、顔は鮮明すぎるほどに記憶している。それはたぶん、相手側も同じだろう。二日前にジェニーを剣で威嚇した、王妃付きの若い近衛兵だ。
「……本当、なの？」
表情を崩さなかった近衛兵が、ジェニーの問いに思い切り顔をしかめてみせた。
「本当です。王妃様がお呼びです」
ジェニーは顔を両手で覆った。
王妃がジェニーを内々に呼びつけたのだ。用向きは伝えられなかったが、ジェニーは王妃と対面する目的で、カミーユのいる後宮に行けるのだ。王妃付きの彼が、中庭を通って後宮のサロンまでジェニーに随行するそうだ。
「ああ、カミーユ……！」
嬉しさのあまり、ジェニーはもう少しで床に膝をつくところだった。彼は体勢を崩しかけたジェニーを助け起こし、気まずそうに顔

をそらして、ジェニーから離れた。
「仕度が必要なら、多少は待ちますが？」
「いいえ、今から行けるわ」
早く、一刻も早く、カミーユに会いたい。彼女が元気なのか、成長しているのか、自分の目で確かめたい。
ジェニーはついにカミーユに会える喜びで胸がいっぱいだった。興奮しすぎて、コレットに、ジェニーに危害を加えようとする何らかの罠かもしれない、と指摘されるまで、そんな可能性はちらりとも脳裏をかすめなかった。

黄土色の土の道を歩き、王城の中庭への中継口を通り抜ける。中庭に抜ける前、ジェニーの行く手を阻んでいた番兵たちは、王妃付きの近衛兵を一瞥したあと、彼女たちに大きく道をあけた。途中ですれ違った使用人や衛兵に、ジェニーの見知った顔はなかった。
ジェニーが最後に目にしたときとまったく変わらない空間が、目前に静かに広がる。日なたに香る土と草の匂い、緑の濃さ、庭を彩る色の配分まで同じだ。左奥にあるサロンの外観にも変化はない。中庭に人影はなく、気配を消した衛兵がサロン前に構えているだけだ。彼らの正面には、王の居住場所である東館が建っている。
王は、あの棟のどこかにいる。
ジェニーは棟を見上げ、心臓を絞られるような痛みを覚えた。
王の度重なる卑劣な仕打ちには耐えられない。でもこのまま、彼と二度と会えなくなったとしたら、どんな気持ちになるだろう？おとなしくて人のよさそうな王妃に情を持ち、王がいつしかジェニーの存在を忘れてしまったら？
信じられないことだが、そのとき、ジェニーは彼と永遠に会えなくなることが想像もつかなかった。ユーゴに「王はもう来ない」と怒鳴っておきながら、本当は、彼がジェニーの日常から出て行くときが来ると、少しも考えたことがなかった。ジェニーが今気づく前に、彼は、ジェニーの日常の一部と化していたのだ。

目をそむけたい現実があると、頭はときどき心に嘘をつくものだ。王の顔を何日も見ずにいて、平然としていられるわけがないのに。

王には正妃がいて、彼が望めば、ジェニーのほかにいくらでも女を持てるのだ。まだ若い彼がジェニーに飽きること自体、現実にはいくらでも起こりえる。そう考えつくと、ジェニーの胸がぐんと重くなる。

もし王が永久に去ってしまったとしたら――平静を保っていられないだろう、とジェニーは思う。きっと寂しくなる。そのときが来てみないと実際には分からないが、たぶん、ジェニーが想像しているよりもはるかに、ずっと、寂しくなるだろう。

サロンの手前で、ジェニーの先導は侍女の手へと移った。王妃付きの近衛兵もそうだったが、侍女もまた、ジェニーへの嫌悪感を丸出しだ。彼女は「本当に来るとは」とジェニーにひどく呆れ、コレットに顔をしかめさせた。だが、侍女の木で鼻をくくるような対応は、ジェニーには気にもならない。いよいよカミーユと会えるのだと、緊張と興奮とで、ジェニーの足はうまく上がらない。侍女はそんなジェニーを侮蔑したようにじろりと見て、二人を後宮へと招き入れた。

勝手知ったるサロンをジェニーが見回す間もなく、ジェニーとコレットは後宮の廊下を歩き、階上に続く階段をたどる。どこもかしこも、ジェニーがいた頃とまったく変わりない。変わったのは住人だけだ。今やジェニーはここにはおらず、ジェニーの娘カミーユと王妃が暮らしている。ジェニーが今歩いている廊下や階段を、ゴーティス王は妻の元に参じるために、たどるのだ。

カミーユには会いたくてたまらないが、王妃には会いたくない。カミーユと対面できる機会を作ってくれたことは感謝するが、ジェニーは、後宮で何不自由なく幸せに暮らす、王妃の顔を見たくなかった。会うことは避けられないと、分かってはいるが。

階段を上がったところで侍女が立ち止まり、誰かに挨拶した。廊

下の先に、王妃が立ち、こちらを見つめている。ジェニーと視線が合うと彼女はぎこちなく笑い、ジェニーは膝を折って挨拶した。

「いらしたのね」

「はい、ご招待ありがとうございました。あの、王妃様、先日は失礼なことを――」

「いいの、そんなことは気になさらないで」

王妃は硬い笑みを浮かべ、ジェニーを見返した。ジェニーが安堵して同じように彼女を見つめ返すと、彼女は動揺したように瞳を揺らす。ジェニーが近くで見る王妃は、澄んだ青い目をしていた。

「……こちらにどうぞ。今日は、あなたに見せたいものがあったの」

沈黙を避けるように王妃がしゃべり、二人の目の前にある扉を指した。

「見せたいもの、ですか？」

「ええ。正確には、物ではないけれど……」

王妃の前で扉が開けられると、ジェニーの鼻を懐かしい匂いがかすめた。香水や花の類ではない。モーリス宅の自室に漂っていたのと同じ、乳幼児のいる家庭に独特な、乳の入り混じった温かみのある匂い。

ジェニーが息をのむと、そのさらに奥の部屋から、子どもの甲高い泣き声が聞こえてきた。が、泣き声と思ったそれは途中で愉快そうな笑いに変わり、大人たちの笑い声がそれに続く。

カミーユの声だ、間違いない。

ジェニーは思わず王妃を振り返り、彼女が静かに頷くのを見た。

「本当？　本当に……？」

王妃は答える代わりに、ジェニーに奥の部屋へ行くように指し示した。

「ありがとう！　ありがとうございます……！」

ジェニーが王妃に駆け寄り、その両手を取って額をつけると、王妃はジェニーから手を抜こうとした。だがそれは一瞬だけで、ジェニーの涙に気づいたらしい王妃は、早くお行きなさい、と囁いた。

（カミーユに会える……！）

ジェニーは奥の部屋に走った。足がもつれて途中で転びそうになった。こんなに興奮した覚えは、本当に久しぶりだ。

ジェニーが部屋に飛び込むなり、室内の女たち三人が一斉に振り向いた。年配の女が座る寝椅子の隣に、低いテーブルが置かれている。そのテーブルと女の服の裾につかまり、ジェニーの目指すカミーユが立っていた。

ジェニーが娘の名を呼ぶ直前に、カミーユはジェニーに振り向き、驚愕して大きく口を開いた。

「カミーユ！」

「マー……！」

ジェニーは笑い、そして走った。涙を拭い忘れたのでジェニーの視界はくもっていたが、カミーユが一所懸命に自分に向かってくるのははっきりと見えた。その数秒後だ、ジェニーの腕に娘の確かな感触が戻ったのは。ジェニーが抱きしめると、彼女は必死で抱きついてきた。

「マー！」

「ごめん、ごめんね、カミーユ」

皆の耳をつぶそうかという勢いで、カミーユが大声で泣き出した。それさえも心地よく、ジェニーは、我が子をついに腕に抱いた幸せを噛みしめる。

――王を失うことがあったとしても、カミーユは、絶対に失いたくない。

（いつか必ず、カミーユをこの手に取り戻そう）

ジェニーは涙に濡れた娘の頬に何度も触れながら、心の中であらたに誓う。

自分を頼る、この小さな手を実感して生きていけるなら、この先にどんな試練が待っていようと、王に去られたとしても、きっと乗り越えられるはずだから。

沈黙していた女たちがジェニーの前から消えていたのに気づいたのは、そのときだ。優しい王妃が気をきかせ、人払いをしてくれたのだ、とジェニーは思った。ところが、

「おまえはここで何をしておる」

怒りを抑えた低い男の声が背後から聞こえ、ジェニーは飛び上がらんばかりに驚いた。

「……ゴーティス王！」

振り返ったジェニーは、うな垂れた女たちの前で、彼が自分を見据えている姿を見つけた。

「王、なぜ、ここに！」

「ここは俺の後宮だ。おまえこそ、ここで何をしておる？」

ジェニーが会いたかった王は、ジェニーに怒りの面しか見せてはくれない。

彼の鋭い目はジェニーから彼女の横にいるカミーユに移り、ジェニーは慌てて娘を背後に隠した。

「おまえは娘に会いたいがために、妃にまで取り入ったか！」

「違うわ！　それに、王妃様は厚意で私を呼んでくれただけよ！」

「ただの偽善だ。おまえは不憫な女と思われて、平気なのか？」

王の背後に続く隣室には、俯いているらしい王妃の頭が見える。王妃の本音は知らないが、彼女は単なる厚意で、ジェニーをカミーユに会わせただけのように思える。

ジェニーは娘の小さな手を握りしめ、彼と対峙する勇気を奮い起こした。

「そんなの……平気よ。この子に会えるんなら、どう思われたって平気」

カミーユがジェニーのドレスの裾に抱きついた。ジェニーが注意をとられ、それから王に視線を返すと、カミーユと同じ色の目がじっとジェニーをうかがっていた。

「王、お願いだから、この子を私に返して」

王があざ笑う。「その話はとうに決着がついておる」

「いいえ、まだよ！」
ジェニーはつい叫び返し、王の顔色の変化に、はっとした。ジェニーが咄嗟にカミーユを抱き上げると、彼がわずかに眉根を寄せた。
「その娘をよこせ、ジェニー」
「いやよ」
王が近づいた歩み分だけ、ジェニーは後退する。
「その娘がおるゆえ、おまえはいつまでもあきらめぬのだ。俺に娘を渡せ」
彼の右手が腰に差された剣に伸びるのを見て、ジェニーは衝撃を受けて首を振った。
「この子はあなたの娘なのよ……？」
「俺に子はおらぬ」
王の淡々としたつぶやきに、ジェニーは二の句を失った。
「娘を渡せ、ジェニー」
王の剣が光って現れ、ジェニーはカミーユを腕にきつく抱きしめた。ジェニーが力を加減しなかったせいで、カミーユが痛がって声をあげ、それがまた王の機嫌を悪化させたようだ。
こんなことって、あるだろうか？　彼が手にかけようとしているのは、彼自身の子どもだ。彼はいまだにケインとジェニーの仲を邪推し、カミーユの出生を決して信じようとはしない。ジェニーが何度言ったところで、疑いは簡単には晴れないのだろう。あまりに悲しくて、ジェニーの目に涙がこみあがってくる。
「ジェニー」
王の指がジェニーを呼んだが、ジェニーは彼に背を向けた。
「この子には手を出させないわ」
王が殺そうとしているのは、彼の娘であり、ケインだ。王はカミーユを通してケインを追っている。
ジェニーは王の剣からカミーユを庇って逃げた。異常な事態に不安がったカミーユが、ジェニーの腕の中で泣き声をあげる。
幼い子が実の父親に殺される危機に瀕しているのに、女だらけの

後宮では誰もが王を恐れ、彼の横暴を止めてくれる者はいない。ジェニーはついに王の手に捕まって、剣の刃を突きつけられた。カミーユが空に突き抜けるような高音で泣き叫び、王がひどく顔をしかめる。

「娘をよこせというに！　おまえも共に殺されたいのか！」

「そうすればいいわ！　あなたには私だって必要ないじゃない！」

ジェニーが叫ぶと、王は瞬間的に放心したように、全身の動きを止めた。

そうだ、彼は自分を必要としていない――。

ジェニーの腕にくいこんだ彼の指から力が抜けていき、ジェニーは頬に、熱い涙がゆっくりと流れ落ちていくのを感じた。

第二部　3．王城に住む女ー6

十五年以上も前のことだ。

ゴーティスは、馬車の荷台が下り坂を転げ落ち、凄まじい轟音をたてて、脇にあった建物に激突した場面に出くわしたことがある。壁面にぶつかった荷台は、おのれの重みにわずかに抵抗してみせたが、あっという間にたわみ、大破してしまった。その一部始終を目撃していたゴーティスは、自分が実際には傷ついてもいないのに、自分の体が壁面と荷台に挟まれて圧死しそうな気になった。体のあちこちに激痛すら覚えた。

昼間、後宮でジェニーに会ったときのことを思い出すと、そのときと似た感覚が呼び覚まされる。あなたは私を必要としていない、というジェニーの叫びが、ゴーティスの胸に押し迫る。涙で光るジェニーの瞳に追い詰められて、ゴーティスのたわんだ体は今にも砕け散りそうだ。

ジェニーがなぜそう口走ったのか、ゴーティスには理解できない。

ゴーティスは、自分を裏切ったジェニーを再び城に呼び寄せた。王である自分を欺いた彼女は、拷問されたうえに死罪とされても、文句は言えない立場だ。ゴーティスが彼女を生かした、その事実だけでも、自分が彼女を必要としている証明になると思うのだが。

ゴーティスは、与えられるだけの環境をジェニーに整えている。ジェニーのために城を用意し、彼女の好むように室内をあつらえ、庭園も設計し直した。彼女に敵意を抱くだろう近衛隊や後宮から、彼女を意図的に遠ざけてもいる。ゴーティスが彼女に剣を習わせているのは、彼女にとっての気晴らしでもあるが、ライアンが彼女の指導にあたることで、彼がそれと気づかず、彼女の護衛役を果たすことにもなるからだ。

ジェニーと会わずにいるときでも、ゴーティスの心の中にはいつも彼女がいる。夫の務めとして妻を抱くとき、ゴーティスが心に想

うのはジェニーだ。ゴーティスの生活から、ジェニーが抜け落ちることなど絶対にありえない。寝ても覚めても、ゴーティスが彼女のことを考えない日は、一日とない。

それでもジェニーは、ゴーティスに必要とされていないと言ったのだ。しかも彼女の叫びは、怒った際の売り言葉に買い言葉というより、胸の内にあった本音だったように聞こえた。ゴーティスの思いのほども知らず、彼女は勝手に思い込んでいる。それがまた、ゴーティスには腹が立つ。

そして、ジェニーは泣いていた。ゴーティスは彼女の泣き顔をこれまでに何度となく見てきたが、どれもこれも、口惜しさや怒りから生じた涙だったと思っている。

だが、今回の様子は少し違っていた。彼女は静かに涙を流していた。彼女の挑発的な口調に反して、ほとばしる憤怒やこみあげる口惜しさは、少しも読み取れなかった。

人の涙を目にして、心に深く突き刺さるような痛みを感じたことは初めてだ。ジェニーの誤解ぶりに怒ってはいても、ゴーティスは彼女に反論できなかった。

昨夜の晩餐の際、ゴーティスはカサンドラから、彼女の軽率な行動について謝罪を受けた。

彼に無断でジェニーを後宮に呼んだこと、娘に会わせたこと。娘はそれ以降、母親を恋しがって情緒不安定になってしまっていること。

カサンドラはひどく恐縮していた。夫の怒りをかったと思い、怯えていたようだ。

現実に、彼女は女官長から厳しい説教をされたらしい。おそらくは、ジェニーも。ジェニーの方が女官長から手ひどく責められたはずだ。

ゴーティスの前に立ち、カサンドラは涙を目に浮かべていた。彼女は必死に謝罪の言葉を並べたが、それは夫の機嫌をなおそうとし

ているとしか、ゴーティスには思えない。同じ涙だというのに、ジェニーのときとは違い、彼女を見ていると苛立ちしか生じてこない。

実情がどうであれ、正妃のいる後宮で騒ぎを起こしたジェニーは悪者になる。ただでさえ反感をもたれる存在であるのだから、この先、ジェニーへの風当たりが強くなるのは必至だ。カサンドラがその影響をふまえ、ジェニーを意図的に後宮へ招いたかまではゴーティスは知らないが、彼女が謝罪すべき相手はジェニーであって、夫ではない。

ゴーティスは、それを妻にいちいち説明する気はなかった。また、怒りにまかせて怒鳴ったところで、彼女は怯えきって身を硬くするだけだ。それを目にすれば、ゴーティスの気分はさらに殺伐とする。

ゴーティスは彼女を一瞥し、「あの娘の母親はおまえだと言ったはずだ」と一言残しただけだった。

ゴーティスが不機嫌なときに何度も繰り返されてきた状況が、今もひろがる。周囲の者は凍つくような緊張感をみなぎらせ、彼の機嫌を悪化させるのを恐れて、誰もが彼を腫れ物に触るように扱う。

昨日の昼間に後宮で起きた騒ぎを、皆は伝え聞いているのだろう。態度に大きな変化がないのは、サンジェルマンぐらいなものだ。

しかし、ゴーティスは怒っているわけではなかった。自分の気持ちを理解しないジェニーや軽はずみな行動をとった妻への怒りは当然あるが、想定外の騒ぎがジェニーの身に悪影響を及ぼすかもしれない、憂いの方が大きかった。

朝の執務室にサンジェルマンだけが取り残されたとき、ゴーティスは、またか、とため息をつきそうになった。ゴーティスの機嫌が悪いとき、言いにくい事柄はサンジェルマンが伝える役割を果たすことが多い。

「後宮での騒ぎのことか？」

ゴーティスは彼に尋ねられる前に、口火を切った。

そうですね、と、サンジェルマンはさほど驚いた様子も見せず、

頷いた。ゴーティスはうんざりしたが、彼を手招きした。
「今朝は早くから予定が入っておる、手短にしろ」
はい、と彼は返答し、ゴーティスの座る席に歩み寄ってきた。
いつものごとく、彼の微笑みは諸々の感情をひた隠し、彼が心の底で何を思っているのか、ゴーティスには想像がつかない。
「王、“死に神の楽団”を覚えておいでですか？　以前、ニーナ嬢がジェニーを亡き者にしようとした際に雇った、暗殺者たちの一団です。いえ、正確には、大金を積まれれば殺人もいとわない“冒険者”と呼ばれる者たちの集りです」
彼らがジェニーの命を狙っているということだろうか。ゴーティスは声をひそめた。
「存在は知っておるが、それが、何だ？」
「彼らは殺しもしますが、基本的に、金を払えば何でもこなすのです。遠方の者に荷を届けたいといえば荷を運びますし、山越えをする旅人の護衛もします。それに見合う報酬さえもらえれば、彼らは長期間ひとつの任務にも就くこともあるのですよ。たとえば、身分を偽って城に住み込む、というのも彼らの仕事としては成り立ちましょう」
つまり、ジェニーの護衛として彼らを小城に常駐させてはどうか、というサンジェルマンの提案だ。ゴーティスが後宮での騒ぎをきっかけに、ジェニーの身を案じたのと同じように、彼もどうやら同じ心配をしているらしい。
ゴーティスの心が動いたのは確かだ。だが、まるっきりのよそ者を王城の敷地内に入れることに、ゴーティスにはかなり大きな抵抗感がある。
そしてもう一つ、ゴーティスが同意しかねる理由は、金で動く暗殺者が、元々の雇い主を上回る金を提示されてジェニーの暗殺を依頼されたら、その時点で、ジェニーの命は消えるに等しいだろうということだ。
ゴーティスがサンジェルマンを黙って見上げると、ゴーティスの

返事を聞く前に、彼は納得したように何度か小さく頷いた。
「彼らを完全に信用できるかといえば、そうとは言い切れません。ただ、そういった選択肢があるのを、覚えておいて下さい。今の環境下ではジェニーは危うい立場におりますゆえ――誰か、彼女も王も信用の置ける人物が側にいれば、状況は変わるのでしょうが……」
ゴーティスに思い当たるのは、唯一、サンジェルマンだ。だが、仮にも王の側近である彼をジェニーに付ければ、どこまでも特別扱いされる彼女への逆風が吹き荒れ、さらには王の弱みとして、彼女の身がますますつけ狙われるはめになってしまう。
――サンジェルマンでないとすれば、ベアール？
次に頭に浮かんだ人物を、ゴーティスは即座に否定する。ベアールはジェニーの親類で、剣の腕もある。彼はジェニーを守るだろう。ただしそれは、ジェニーがベアール家に恩恵をもたらしてくれる存在である限り、だ。今のところ、ベアール家の名は社会的に上がっているかもしれないが、だからといって、王家が彼らに特別な計らいをしたこともなければ、今後も、するつもりはない。それほど頭の悪くないユーゴ・ベアールも、遠からぬ将来、その事実に気がつくだろう。
あらためて考えれば、ジェニーの周囲に彼女の味方はほとんどいない。
重い心持ちでゴーティスがサンジェルマンに注意を戻すと、彼がなぜか、心ここにあらずといった様子で壁の一点を見つめていた。
「サンジェルマン？」
ゴーティスに呼びかけられて、彼は肩を大きく震わせ、瞠目した。
「何だ、心当たりでもあったか？」
「は……あると言えば、あると……」
彼の歯切れの悪さをゴーティスは怪しむ。
「言いよどむとはおまえらしくもない。誰だ？　俺の知る者か？」
ゴーティスの前で、サンジェルマンが平常心を取り戻そうと微笑

んだが、めずらしく、不自然な笑顔に終わった。
「名まではご存知ないでしょう。以前、城に勤めていた者です。ただし、今、彼女は……」
「その女が今どこにおるかは問題ではない。誰だ？　ジェニーも当然、知る者であろうな？」
「は。よく知っておると……たぶん、ジェニーが彼女を覚えていれば、ですが」
サンジェルマンの奥歯に物が挟まったような話し方に苛立ち、ゴーティスは彼を問い詰めた。
「ジェニーには身近に味方が必要だ。その女は、ジェニーも、おまえも信用できる人物であろうな？　名は何だ？」
サンジェルマンが王の瞳に屈し、観念したように言った。
「アリエルです」
「アリエル？」
ゴーティスは、変わった名だ、と口に出そうとして、過去にまったく同じ台詞を言った日のことを、突如思い出した。後宮のサロンにはジェニーとそのアリエルがいて、サロンの壁面を挟み、中庭にはサンジェルマンがいた。そして同時に、ジェニーの逃亡が発覚した当日、ジェニーの裏切りを信じようともしなかった侍女アリエルの、頑なな態度も思い出した。地味だが聡明そうな女だった。
「あの――侍女か」
サンジェルマンが驚いた瞳を向けた。
「覚えておいでですか？」
「おまえの恋人ではなかったか？」
ゴーティスの問いに、サンジェルマンが気後れしたように首を振った。
「いいえ、彼女とはそんな間柄ではありません」
二人の関係が何であろうと、彼らの間に愛情が通い合っていたのは、ゴーティスにも分かっていた。そしてどうやら、それは現在進行形だ。サンジェルマンの頬が赤く染まりつつある。

「ジェニーが去って以来、その女も行方をくらましたようだが、今も生きておるのか」

二年前、ジェニーを失って帰城したゴーティスは、彼女の当時の侍女だったアリエルにどんな処罰を与えたのか、覚えていない。そもそも、彼女を処罰する命令を下したかどうかも、定かではない。

その頃のゴーティスには、侍女の処遇がどうなろうと興味はなかった。ジェニーの生死以外、何も気にしていなかった。ゴーティスはジェニーのいない場所を目にするのが辛く、しばらく後宮に寄りつこうともしなかった。彼が後宮を不在とした期間に、女官長がジェニーの部屋の改修に手をつけ、関連した人々を一掃してしまった。次にゴーティスが後宮に訪れたとき、そこに行き来する女たちの顔ぶれが、ずいぶんと様変わりしていた。

アリエルを責めるつもりでゴーティスは言ったのではないが、サンジェルマンは唇を引き締めた。

「今はアンヴァリッドで――王に祈りを捧げて、日々を過ごしているそうです」

アンヴァリッドとは、有名な鉱山のある、国境付近の小さな町だ。住民のほとんどはその鉱山で働き、その劣悪な環境で文句も言わずに働く彼らは、隣接した人屋に住む囚人たちだ。ジェニーの逃亡に気づかなかった彼女は、命こそ失わなかったものの、囚人の一人としてそこに収監されたのだ。

「あの侍女はアンヴァリッドにおるのか？」

「はい」

男でも過酷な労働だろうのに、女が生活できる場であるのだろうか。

ゴーティスの疑問をかき消すように、サンジェルマンが穏やかに言った。

「重労働に変わりはありませんが、彼女は男たちとまったく同じ仕事をしているのではありません。生きていられるだけで幸せだと、

彼女はそう言っているようです」

あの侍女がジェニーの傍らに付く――。

ジェニーは喜ぶだろう。ジェニーは彼女を頼り、慕っていた。それはゴーティスの目にも明らかだった。あの侍女には、ジェニーを外敵から守っていける強さがある。

しかしはたして、当人の侍女は、ジェニーの近くに戻ることを良しとするかどうか。

「されど、その女はジェニーのせいで現在の境遇に身を落としたのだ。ジェニーに恨みを抱いておってもおかしくはない」

おまえも、と言いかけて、ゴーティスは舌を止めた。不意に、サンジェルマンが持ち出した全ての話が、ジェニーへの壮大な復讐劇のように思えたのだ。彼の恋しい相手を辺境に追いやり、どん底の生活を強いておいて、ジェニーがぬくぬくと幸せな生活を送っているのは、サンジェルマンには許せないに違いない。彼はあの侍女を取り戻し、二人で、もしくはどちらかが一人で、ジェニーに報復する――その可能性は、十分にある。

サンジェルマンですら疑い、ゴーティスは警戒を強めて彼を見た。

「アリエルは、彼女は、ジェニーの裏切りを信じようとしないのです。ジェニーがならず者に誘拐されたと信じて疑っておりません。彼女は自らの過失で王とジェニーの間を裂いてしまったと、いつまでも自分の非を責め、王とジェニーに詫び続けているのです。彼女がジェニーに恨みを抱いていることは、ありません」

「その女もおまえの前ではいい顔をしたいだろう。口では、何とでも言える」

「彼女はそんな類の人ではありません。それに、今お話したことは私が看守や使いの者から聞いたことで、私が直接に見聞きしたことではありません」

幾分、反発するような調子でサンジェルマンが返した。

「彼女は、私とは面会もしてくれません。今は使いの者との対面さえ、叶いません。かろうじて手紙だけは受け取るようですが、返事

がきたことは今までに一度もありません」
「要は、おまえとの関わりを絶ちたいということか」
ゴーティスがいささか興奮気味のサンジェルマンを見据えると、彼は焦ったように口を拭った。
「彼女は今や囚われの身でありますゆえ……」
「おまえの名に傷がつくと案じておるのか。なんとも健気な。おまえの方は、女がどんな身分であろうと一向に気にしておらぬというに」
サンジェルマンが言葉に詰まる。
ゴーティスは彼の反応のほころびに人間らしさを見て、思わず苦笑した。
「王、私が言いたいのは――」
「サンジェルマン、その元侍女の言動が真実だとして、おまえが女と対面できたとしたら、そのときは女を俺の元に連れて来い。時と場合によっては、その女に特別任務を与えてやらぬでもない」
サンジェルマンが瞠目した。
「王？　彼女は囚人ですが……よいのですか？」
「特別任務に値する人間であれば、恩赦を与える。だがそれも、おまえが女と対面できてこそだ。あの女はジェニーと同じで、頑固者だったように記憶しておる。そう簡単にはいかぬだろうよ」
「……は！」
サンジェルマンが破顔し、次に赤面するのを見て、ゴーティスはなぜかジェニーを思い出した。

その三日後。
テュデル宮から、サンジェルマンを経由して、ゴーティスの耳に急ぎの知らせが入った。それは表沙汰にはされず、サンジェルマンの判断でジェニーにも知らされなかった。
その日、ジェニーの夕食を毒見した女が、ひどい痙攣と腹痛を起

こして倒れたのだ。彼女は命を取り留めたが、結局、小城に二度と戻ることはなかった。

第二部　4．再会－1（前書き）

実は、今回のお話を前話で書きたかったのですが、思いがけず、前話を長々と引き伸ばしてしまいました。
前回のはもっと、さらっと済ませたかったんですが（汗）。
ごめんなさ～い。

第二部　4．再会ー1

不定期に訪れる鈍い眠気。もう、何度めだろうか？

ジェニーは浅い眠りに落ちようとしていた。だが、また、まぶたに力を加え、ジェニーはそれに抵抗する。最後には眠気に屈してしまうのをわかっていながら、視界が自分の前で閉じないよう、何度も何度も、ジェニーは必死に抵抗する。

むなしい努力を繰り返して、既に四日目だ。睡眠不足がたたって疲れてはいるが、体力は何とか保っている。

問題は気力だ。

一見しただけでは何の変化もないが、ジェニーの心の一部分が光の侵入を拒み、四日前から沈黙している。時が経つほどに沈黙は濃くなり、その周りを少しずつ侵食し始めるはずだ。じわじわと、沈黙の影はジェニーの心に緩慢に入りこむだろう。そしてそれは、ある時点で、今は大部分を占める明部と逆転する。

そのとき、身体はどう変わるんだろう？　心とともに、肉体も内側から弾け飛んでしまうのだろうか？

その可能性を本能的に察しているだけに、昼間の喧騒が遠のき、光が失われる暗い夜にジェニーは怯えていた。だが夜になれば、毎朝の剣の練習で休息を必要としている体は、ジェニーの意思に関係なく、眠くなってしまう。

体の力が萎えていくのは心地よかったが、暗闇に溶け出していくような感覚が恐ろしかった。目をつぶってしまったら、もう二度と光を見られないのではないかと、ジェニーは怖くてたまらない。

夜が来ても初夏の日は長々と大地を照らし、暗くなったのも、つい二時間ほど前だ。

今夜も、ゴーティス王は来なかった。毎日のように現れていた彼がジェニーの部屋を訪ねなくなって、どれぐらいになることか。

だが正直に言って、ジェニーが王とここで会いたいかというと、すぐには肯定できない。かといって、そうではない、とも否定できない。

ジェニーは毎日、王の顔を思い浮かべ、王城でどう過ごしているだろうかと想いを馳せる。顔をいつでも見られたら、どんなにいいだろう。彼の視線と出合い、動揺しながらも、見つめ返してみたい。彼の手に、自分の手をそっと伸ばしてみたいとも思う。

ジェニーの記憶にいつまでも新鮮な王の手は、温かく、慈愛に溢れている。あの手がひどく懐かしく思える。

けれども、王がジェニーのもとを訪ねるときには、いつも、苦痛も伴う。ジェニーが大嫌いな、伽。肌の重なり合い。

寝所以外で彼に抱きしめられたときには、労わりや愛情が感じられたこともあるのに、寝台の上では、彼はジェニーを手荒に、ぞんざいに扱う。彼の欲望のおもむくまま、性急に、まるで何かに追われるように、彼は果てる。そこに至るまでのジェニーの心身の痛みなど、まるで無視だ。

酷な男だ、と思う。

どうして、いつのまに、好きになってしまったんだろう。

ジェニーが王を最後に見たのは、後宮でジェニーがカミーユに対面できたときだ。こともあろうに、彼は自分の娘を手にかけようと剣を振り上げた。殺されそうになった娘をジェニーが庇い、私も必要ないのだから殺せばいい、と口を滑らせても、彼は責めるようにジェニーを見返しただけだ。ジェニーが聞いた彼の最後の言葉は、女をつまみ出せ、という、冷ややかな命令だった。

その命令は、ジェニーの言葉に対する、王の肯定だろう。硬く尖った王の声が、ジェニーを暗闇の中に置き去りにする。

ジェニーは眠りの世界に引き込まれるのを自覚しながら、目頭が熱くなるのを感じた。

放り出したいのなら、この小城から放り出せばいい。今すぐに。

ジェニーは自分の身を哀れんで泣くのは嫌いだ。世の中で最も悲

しい泣き方だと思っている。でも、無関心な王に、存在を半ば忘れられたように小城に捨て置かれるのは、哀れな身分と呼んでもいいのではないか。

ジェニーは、歯がみをしたいほど口惜しかった。たかが男ひとりの些細な反応で、立ち上がる気力さえ持てない自分自身に。

眠りに落ちて視界を失うのと、ジェニーの目が涙でかすんで視界が濁るのは、どちらが早いだろう？

目頭から押し出されたひとつぶの涙が、一瞬にして冷え、ジェニーの頬をつたう。

ふと、ジェニーは目覚めた。やはり、いつのまにか眠ってしまっていた。

目を閉じても、そのまま死んでしまいはしなかった。目覚めてもなお生きている自分に、ジェニーはほっと息をつく。

部屋はまだ暗がりの中で――ジェニーが眠ってしまう前、室内はこんなに明るかっただろうか？

ジェニーは不思議に思って寝返りをうち、何気なく室内を目でさぐって、仰天した。窓が細く開いており、その手前に人影がある。黒っぽい色の服に包まれた広い肩、見慣れた腕の形。白く、眩い髪。窓からこぼれる光を上半身に浴び、男は空を見上げている。青い暗闇に浮かび上がる髪が幻想的だ。

ジェニーには、その後ろ姿からでも、男がゴーティス王だとすぐに認識できた。半信半疑なまま、ジェニーは自分の心臓の高鳴りを意識する。緊張か、恐怖か、心臓が助走をつけ、速度を次第に上げていく。

ジェニーは王に気づかれぬうちに、この場から逃げ出したかった。彼に会いたかった毎日はあったのに、今この瞬間、ジェニーは彼とは顔を会わせたくなかった。とりわけ、真夜中の、逃げ場のない寝室では。

ジェニーの起きた気配に気づいたのか、王が振り返った。ジェニーの息は喉の途中で凍りつき、思わず、服の裾を両手でぎゅっと握る。

陰となった顔半分が見えなかったが、王は特段、驚いた表情をしていなかった。彼はごく自然にジェニーを見た。

「……何をしに来たの？」

ジェニーの出した声が掠れていて、王はその言葉がうまく聞き取れなかったようだ。が、すぐに質問を理解したらしく、つっけんどんに答えた。

「俺が来て、おまえがその問いを発しないときはないな」

ジェニーが警戒して寝台の上に起き上がると、彼は再び窓の方へ視線を戻した。

「いつからそこにいたの？」

「さあな」

あいかわらず、不可解な人だ。今さら、何をしに来たんだろう？

ジェニーが戸惑って王を見つめていると、彼はジェニーを一瞥し、もの静かに言った。

「眠っておれば、おまえは憎まれ口もきかぬ。顔を、見にきただけだ」

王に、正面きって、そんな言葉を言われたことはない。嬉しいというより驚きで、胸が痛くなる。

彼の真意をつかもうと、ジェニーは、疲れが残るその横顔を見つめた。

「それだけが、理由？」

王がやや顔をしかめ、振り返った。ジェニーの質問に同意しかけ、苦りきった笑いを見せる。

「おまえの望みとあれば、考えぬでもないが」ジェニーが彼の示す意味を知ってひるむと、王は小さく首を振り、言った。「今日は顔を見にきただけだ」

その言葉どおり、王には攻撃的な面が見えない。妙な孤独感がま

とわりついている。そのせいなのか、ジェニーは王に反発を覚えず、逆に、彼と会えた嬉しさがひそかに募ってくる。

何か、城で嫌なことがあったのだろうか？　それとも、王妃様と何かあったのか……？

夜中に二人の上に降りる沈黙は、ジェニーに警戒心を覚えさせる。王は寝服に着替えてはいない。なぜか、窓辺から離れる様子も見せない。が、だからといって、彼が寝台にいるジェニーに向かってこないとは言い切れない。

ジェニーは緊張を解けなかった。気まぐれに部屋を訪れた王は、ジェニーの軽率な言動をきっかけに、伽に走るかもしれない。

ジェニーが疑いをもって王を見ていると、彼はおもむろに振り向いた。彼の視線と出合い、ジェニーは激しく動揺する。彼が、思いつめた瞳でジェニーをまっすぐに射抜いたからだ。

彼の瞳が、ジェニーの緊張した体をすり抜けてくる。ジェニーの体のあちこちに押し入り、強張った手足から力を奪う。それに代わってジェニーの体を駆け抜ける鼓動は、緊張や恐怖よりも、興奮に近い。

ジェニーは王から目が離せなかった。彼の視線にジェニーを怯えさせる欲望はないように思う。体中が、熱を持ったように甘く痺れ始める。

彼の力にねじ伏せられたくはなかった。でも、あんなに彼の腕に屈服させられて屈辱だったのに、今、ジェニーは全てを投げ出したくなって、彼に屈しそうになる。彼には触れられてもいなかったが、今もし近寄られたら、ジェニーは彼に抵抗しきれる自信がない。

ジェニーが激しく葛藤していると、王の方が先にジェニーから目をそらした。そして、窓の外を指差した。

「おまえ、夜中にここから外を見たことがあるか？」

「えっ？」

突然の問いにジェニーが訊き返すと、王は顎で窓の方を示した。

「ここからは庭がよく見える」
小城に来た最初の数夜、途切れがちだった眠りの合間に、ジェニーは窓際から外を眺めた。眼下にある庭は整然としていたが退屈な風景で、ジェニーが今までに庭を見下ろしたのは、数回だけだ。ジェニーは、夜よりも、緑の映える昼間の庭を好む。ジェニーはむしろ、カミーユのいる王城の方をよく眺めた。
王は答えを待つように、ジェニーを見ていた。
「何回か見たわ」
「それで？」
「それで、って？」
ジェニーの反応に、王は不満そうだった。
「庭を見た感想は？」
ジェニーは困惑した。庭園は以前のような華やかさはないものの、緑の低木から成る垣根は手入れが行き届き、薔薇に代わって白い花々が垣根から顔をのぞかせていた。昼間の日光の下で見る庭園は緑も目に鮮やかで、その緑を形づくる垣根は三つの弧となって輪を描き、中央の噴水を幾重にも囲むように配置されている。
ただし、花の開く昼間とは違い、夜の庭園は逆に殺風景だ。低木の緑は闇にかすみ、規則的に並んだ弧の中央にある、白い噴水だけが目立つ。ひと気がない、開けた空間には不気味さも漂う。それほど、眺めていたい景色ではない。
「……夜の庭園はなんとなく怖い雰囲気だから、昼間の庭の方が私は好きだけど」
「幻想的ゆえ、怖いとも感じられよう」
「あれが幻想的？」
幻想的とは、月光下にたたずむ王の姿のようなことを言うのだ。現実と呼ぶには儚く、触れるのもはばかられるように脆く、崩れ去りそうなもの。
ジェニーの視線が、王のそれと絡む。彼の呆れたような表情が、たちまち、不可解そうに変わった。

「ジェニー、ここに立ってみろ」
彼の近くには行きたくない。
だが、ジェニーは王の怒りや興奮を呼びたくなかった。渋々と寝台から降り、彼に譲られた場所に立つ。
「立ったわ」
そこから庭を見下ろすが、ジェニーが覚えている景色と特に変わりはない。整然とした庭園一帯はがらんとしていて、青白い噴水に溜まる水が光っているだけだ。
王が不審そうにジェニーを見て、庭に目をやる。
間近で見る彼の横顔は、思ったよりずっと、疲れていた。やはり彼に何か起きたのだと、ジェニーの胸が切なくざわめく。一度は引いた体内の熱が、ジェニーの中で再び上昇していく。
王が、納得がいかないというように首をひねった。
「何か、いつもと違うのね？」
「ここからの景色のために庭を設計し直したが……おまえにはわからぬか」独白のように彼が呟く。
ジェニーは窓枠に寄りかかり、庭を見下ろした。それから後ろを振り返って、王を見上げる。
「いつもの庭だわ。昼間ならもっと綺麗なんでしょうけど」
王が突然、はっとしたように顔色を変えた。そしてジェニーの肩をつかみ、腰をかがめて、ジェニーの顔の横に彼の顔を並べる。ジェニーが彼の手の重みに動揺していると、王は眉間に深い縦皺を寄せ、ため息まじりに言った。
「そういうことか……」
王が何かを考えるように目を閉じた。それからいきなり、彼はジェニーの脇の下に手を入れて、彼女の体を持ち上げた。
「やめて！　降ろしてよ！」
ジェニーが腕を振り回すと、王は顔をしかめてそれを避けながら、言い放った。
「ジェニー、俺でなく、庭を見てみろ！」

「何よ、ただの庭でしょう！」

ジェニーは叫び、庭園に目を向けて、言葉を失った。

眼下には、青白く光る層を含んだ深い緑の弧が、これまた青白い噴水の手前に、幻想的に浮かび上がっていた。垣根の下層を占める青白い光は、地面を這うように咲き誇っている大柄な白い花だ。噴水の手前の垣根群に花がないことを、ジェニーは何度か不思議に思ってはいたが、突き詰めて考えたことはなかった。

ジェニーが思わずため息をこぼすと、王はジェニーの体を窓台の上にのせた。

「おまえは白い花を好むだろう？　夜に咲く花が開けば、垣根には緑と白の二層ができる。月光を浴びれば白色は青みを帯び、まるで別世界の風景だ。夜中に目覚めたときに眺めれば――多少でも、気はまぎれるだろう」

王に教えた覚えはない、でも、ジェニーが好きなのは白い花だ。彼はジェニーのことを思い、この庭を造ったのだ。彼はジェニーを必要としていないどころか、必要だからこそ、部屋から見える庭の景色でさえ、気にしたのだ。

（ばかだ、私）

ジェニーは一人よがりを悔やみ、恥じた。

（――でも、ばかなのはこの人も同じだ）

王がジェニーに暴力的になって、伽に訴える理由は理解できない。彼と肌を重ね合わせることに、喜びなどとても見出せない。けれども、彼が自分の欲求を満たしたあと、ほんの一瞬だけ見せる哀しさの片鱗は、ジェニーもよく覚えている。言葉少なく、明るい表情に乏しい彼の言動から、彼の本心はのぞきにくい。だがその裏には、ジェニーが思いつきもしない、彼なりの複雑な原理があるのだろうと思う。

この人は、自分を恋しく思っている。

ジェニーは庭の白い層を見つめ、体の芯から溢れ出す震えに身を

任せた。ジェニーの体が不安定に揺れると、腰に添えられた王の手に力が入る。

狭い窓台に腰掛けたジェニーの体を支える手。一糸まとわぬ肌に触れられると、嫌悪しか感じなかった。だがその手を見つめると、ジェニーは、それがいつまでも自分の体から離れないようにと願っている自分に気づく。

彼がいて、その隣に自分がいること。

会いたくないなんて、どうしてそう思えたんだろう？　一度顔を見れば、離れるのがこんなにも惜しくなるのに。

月明かりに照らされ、王の髪が青白く透き通り、光っていた。彼が、感慨深そうに言う。

「庭園の設計には、俺とおまえの背の違いを考えなかった。目線が異なるだけで――見える景色がこうも違うとは」

窓の外に向いていた王の目が、ジェニーに移る。ジェニーに目を留めると、彼はわずかに目を泳がせた。

「……何だ、その涙は？」

ジェニーは上を向き、手のひらで目を拭った。

「口惜しいのよ」

「口惜しい？　この景色に気づかぬことが口惜しかったのか？」

「そうじゃない」

わかりにくく、さりげない王の愛情表現に気づくほど、ジェニーは敏感ではない。王の気持ちに気づかなかったことが、あまりにも口惜しい。

ジェニーはもう一度涙を拭い、王を見下ろした。彼の眉間に寄る皺は、ジェニーの反応を不審に思っているからだろう。

「私が目にする、この眺めのためだけに、あなたが庭園を設計し直したなんて」

王が驚いた面持ちで、ジェニーを見上げた。「考えたのは設計士だ」

「でも、あなたの発想なんでしょう？」

王はジェニーに返事をせず、無言で窓の方に振り向いた。はずみで髪が揺れ、その軌跡が、群青色の闇に銀色の鱗粉のように舞う。

宙にさらさらとこぼれ落ちる、その光の粉を手のひらにつかもうと、ジェニーは手を伸ばした。ジェニーが体重を少し移動させると、王の手がすかさずジェニーの腰を支える。それから彼は、彼に接近していくジェニーの手を未知のものを見るように見つめ、だが逃げようとはせず、彼女の手の思うようにさせた。ジェニーの指が王の頭の地肌に触れると、彼が一度だけ、長い瞬きをするように目を閉じた。

彼の髪は絹糸のようにやわらかかった。何度か触れたことはあるのに、初めての感触だ。

ジェニーは王の髪を手でそっとすき、髪の束が自分の指の間でそよぐのを見つめた。それは、ずっと前からジェニーの手に馴染んでいるように、柔らかく、ジェニーの手に押し返ってくる。王はじっとしていたが、伏せられたまつ毛の下に見え隠れする瞳は、落ち着きなく動いていた。

指に残る感触が心地よい。心地よい、というより、思いがけず、ジェニーを幸せにする。

「ありがとう」

息に似た呟きだったが、王の耳には届いたらしい。王が頭を上げた。ジェニーと目が合うと、彼の眉間にあった縦皺が消えてなくなる。

彼の顔から険しさが抜けるのは久しぶりだ。ジェニーにはそれが嬉しい。

ジェニーは頬に流れてきた涙を拭い、王に笑った。ジェニーを見上げていた彼の、唇の端が、わずかながら上に吊り上げられた気がする。

王がジェニーに一歩近づく。ジェニーが黙って見守っていると、彼が、窓台に腰掛けたジェニーの足の部分に顔を寄せてきた。心臓

が跳ね、今にも口から飛び出しそうだ。それでも、彼が躊躇いがちにジェニーの膝に顔をのせるのを、ジェニーはただただ見つめた。

嫌悪感はまったくなかった。服を通して王の体温を感じ、彼の安心した横顔を目にすると、ジェニーには満ち足りた気持ちが広がった。

王の唇が何かを囁く。ジェニーはそれが自分の名をつむいだのだと知って、再び彼の頭に手を伸ばした。そうするのが、いちばん自然に思えたからだ。

王は目を開いてジェニーをちらりと見たが、またすぐに目を閉じた。ジェニーの手が彼の頭を撫でると、今度はさっきよりもはっきりと、彼の唇の両端が上向いた。

第二部　4．再会－1（後書き）

次回より、更新は火曜日0時以降とさせていただきます。
基本的に週1ペースで続けていこうとは思いますが…、今後もどうぞ、よろしくお願いします～。

第二部　4．再会－2

二人の間に生まれつつある新しい感情の溶け合いを、どこまでの人間が正しく把握しているだろう?

王に取られた手をジェニーが振り切らず、弱々しく握り返したのを見た瞬間、サンジェルマンは、二人の距離がいつのまにか縮まった事実に圧倒された。ジェニーの鋼の心を溶かす、劇的な何かが起きたらしい。

ジェニーの心情の移り変わりをもっとも痛切に感じている者は、王を抜かせば、おそらくサンジェルマンだ。ラニス公の館で彼女が王の結婚に動揺しているのを見て以来、この展開をどこかで予想してはいたが――実際にそれが目の前で起きてみると、どうにも複雑な気分だ。

この数週間、王はたびたび昼のテュデル宮を訪ねているという。もちろんジェニーに会うためだ。小城の庭園を歩いたり、馬に乗って周辺を闊歩したりする二人の姿が、衛兵たちに目撃されている。

彼らは今までにも愛人関係にあったが、愛し合っていたわけではない。少なくとも、ジェニーは王を拒んでいた。ところが今、二人の間に存在していた刺々しい雰囲気が見事に消えている。ジェニーは王と一緒にいても平気そうだ。王の方はというと、若干硬い表情をしてはいるが、決して威圧的ではない。

庭園を進む王は、一方的にジェニーの手を引っぱって歩いているようにも見えるが、ときどき彼女を見ては歩調をゆるめている。ジェニーが隣に並んで王を見上げると、王は彼女を見返して微かに頬をゆるめ、また前を向いて歩き出す。ジェニーもそれに合わせる。

二人は積極的に会話を交わしてはいない。だが、静寂は気まずい沈黙にはならず、静穏な時間の到来に、彼らはゆったりと身をゆだねているようだ。

ジェニーは一度、王を不幸のどん底に突き落としている。
王の側にいることで、彼女はそれと気づかず、王をさらに不幸にするかもしれなかった。サンジェルマンはそれを恐れた。王の身に危害を及ぼし、王を不幸にするのなら、たとえ王が愛する女だとしても、ジェニーの身などいつでも葬ってやる気でいた。王に妃がいる今、ジェニーが何らかの失態をやらかし、自分の手で彼女を正当に抹殺する機会を、サンジェルマンは心の内でずっと願ってきた。
しかし、それと平行して、サンジェルマンにはひそかに待っていたものがある。言ってみれば、その希望のためだけに、ジェニーの命に猶予を与えていたようなものだ。
王は以前、戦地で拾ってきたジェニーに接し、笑い声をあげるまでになった。その彼がジェニーの裏切りに遭い、彼女を失い、意気消沈とする様は、とても見るに堪えなかった。もし行方知れずとなっていた彼女に再会することがあるのなら、彼女の死体か、王に愛を誓う彼女の姿しか、サンジェルマンは受け入れたくなかった。王が永久にジェニーをあきらめざるを得ない状況か、彼女が王の愛に応え、幸福へと導く姿。その二者択一だ。当時、ジェニーが発見される可能性は極めて低く、後者は非現実的だった。
ところが、奇妙な縁のなせる業(わざ)で、王とジェニーが再会した。王は、かつて愛し、自分を裏切った女のように、ジェニーを斬り殺しはしなかった。代わりに、ジェニーを再び彼の元に受け入れた。彼女を許したのだ。
『ジェニーがいれば、王は笑う』
ジェニーの入城を心待ちにしていた王を見ては、王の笑顔が戻る日は彼女次第なのだと、口惜しいながらも、サンジェルマンは痛烈に感じたものだ。
今の王は薄く笑っているだけだ。だが、彼女といる王は、幸せそうだ。
かつてのように、王が大きな笑い声をあげる日も、実は、すぐそこに来ているのかもしれない。

＊　＊

女官長とライアンが王妃付きの衛兵の件で話すのを聞いているうち、サンジェルマンは女官長の口調に不快そうな苛立ちを感じ取って、彼女の話をさえぎった。彼女は興奮してくると、声がより甲高く、大きくなる。彼女は自分の話を中断されて不満そうだったが、サンジェルマンが女官長室の扉の外を確認してから戻ると、心配そうに眉を下げた。

「まさか、誰かいたのですか？」

「いいえ、ご心配なく。念のために確認しただけです」

女官長よりもライアンに向けてそう言うと、サンジェルマンは二人に話の再開を促した。

ライアンが、現在の王妃付きの衛兵が王妃に親身になり過ぎるという理由で、衛兵を一度は担当から外したのだが、王妃のたっての希望で、元の配置に戻したのだ。それが、女官長には気に入らないようだ。

「ええ、王妃様はこれまでにわがままをおっしゃったことはございません」

既に鼻息荒く、女官長が先に口を開く。

「王妃としての威厳に欠けてはおられても、無理難題なことをおっしゃらない、常識ある方だと思っておりましたのに。ですが、唯一のご希望が、気に入りの若い衛兵をお側におくこととは、なんと嘆かわしいことでしょう！　ただでさえ、王との不仲が取り沙汰されているのです、これが皆に知られれば、その衛兵との間によからぬ噂もたちましょうに……！　どうも王妃様は、ご自分の立場をわきまえておられないようですわね」

「言いすぎだ、女官長殿」

サンジェルマンが冷静に口をはさむと、彼女は額に血管を浮き上がらせ、言い返した。

「サンジェルマン様、あの王妃様は、王のご世継ぎをお産みいただくために輿入れされたのですよ？　王と結婚されてもう少しで一年になりますわ、普通の夫婦なら、とっくに子どもを授かっていてもおかしくない頃です。ですが、いまだに王妃様がご懐妊されている兆候はございません。

　気に入った者を周りに集めて、仲良く遊んでいる場合ではありませんわ。王妃が世継ぎを産まないで、ほかに何の役目があるというのです？　あのジェニーでさえも、一年を待たずにカロリーヌ様を妊娠していたのですよ！」

「王妃様はまだお若い。ご結婚されてまだ一年なのだから、もうしばらく待ってもいいだろう」

「“既に”一年が経とうとしているのですわ、サンジェルマン様！」

　サンジェルマンが肩をすくめると、彼を当てにできないと見限ったのか、女官長はライアンに振り返った。

「ライアン様、何とか理由をつけて、その衛兵の役をすぐに解いて下さいませ。いずれ王妃様がご懐妊された際に――当然、王妃様が石女（うまずめ）でないことが前提ですけれど――子の父親について、くだらぬ疑いをかけたくありませんわ」

　ライアンがむっとしたように眉を震わせた。

「口を慎まれよ、女官長」

　女官長は口をつぐんだが、一向に反省しているようではない。

「女官長の心配は理解するが、仮にも近衛の一隊員が、畏れ多くも王妃様に、そのような行動をとるとお思いか？　少しは、我ら近衛を信用していただきたいものだ。

　彼は王妃様の信任も厚く、カローニャの言葉も解する。彼には、我々の懸念と近衛の本分をよく言い聞かせたつもりだ。我々も今後の彼の動向には十分に注意して、必要とあれば、他の者も同行させる。女官長には不本意だろうが、それでしばらくは様子を見てもらいたい」

女官長室から解放されたサンジェルマンとライアンは、どちらからともなく、長いため息をついた。サンジェルマンがライアンを見て苦笑すると、彼も気まずそうに笑い返した。

「きっと、あの調子で王妃様にも小言を言ってるんでしょうね。王妃様には同情しますよ」

「同感だ。あれでは、王妃様が女官長を苦手とされるのも無理はない」

階下からやって来る女たちの声が聞こえ、二人の会話はそこで途切れる。

ライアンが先に立って歩き始め、サンジェルマンは彼を追うようにして階段に足を伸ばした。階段をのぼってきた女たちが途中で立ち止まって二人に挨拶し、彼らが通り過ぎるのを待っている。左側の女に、サンジェルマンは見覚えがあった。ユーゴ・ベアールが懇意にしている女だ。

彼らのいた西館を抜けると、ライアンは外へ通じる出口を指し示した。兵舎に行くという。

「新しく入った、ベアール家からの上官見習いはなかなか気概があるぞ」

「それは何よりです」

ジェニーが入城して以降、ベアール家の者が立て続けに二名、近衛隊に入隊している。

サンジェルマンは、ベアール家が不相応に社会で台頭する可能性を、ライアンに告げていた。ライアンは、それを聞く前に既に何かしら予兆を感じ取っていたらしく、サンジェルマンの心配を否定しなかった。ベアール家の人間には剣技に長けた者が多く、近衛隊にとっても不利益は被りそうもなかったが、ともかく、ライアンは彼らの動向に目を光らせているはずだ。

「ところでベアール家といえば、例の園遊会とやらに、貴公はやはり出席しないのか？」

「ええ。私はああいった社交の場は苦手ですよ。ベアール殿は顔が

広いですからね、多くの方々にお会いできそうですね」
「それはそうだろうな。今回は、久しぶりに大規模な会だと彼も興奮していた……」
“園遊会”と銘打って、ユーゴがベアール家と親交のない人々までを自宅に招くつもりだと明らかになったのは、剣技大会の最終夜だ。名門中の名門とはいえないベアール家だが、ユーゴは剣技大会での英雄であり、王の愛妾となった女を出した家だ。そこが主催するという園遊会には、いやでも皆の注目が集った。その時点ではジェニーの出欠は未定だったが、あとになって彼女の出席が決まると、皆の“園遊会”への関心が一気に高まった。
ベアールが今の時期に大掛かりな会を設ける理由ははっきりしなかったが、サンジェルマンは、彼の計画の裏にひそむ思惑に警戒していた。そのため、ベアール家の招待を受けたライアンに、ジェニーに同行し、彼女がベアールに都合よく利用されないようにと、監視役を依頼したのだ。当然、ジェニーを嫌う彼はその頼みをむげにはねつけたが、結局は使命感に負け、サンジェルマンの要求をのんだ。
「普段なら交流できない方々も来られましょう。せっかくの機会を楽しんでいらして下さい」
「あの女含めて、ベアール家の者たちが何も問題を起こさねば、私もそうするつもりだ。……断っておくが、女の身を危険から守る気はないぞ。私は護衛ではない」
「彼女の身は同行する侍女が守ります」
サンジェルマンが笑うと、ライアンは目をすがめたが、ああ、と納得したように呟いた。ジェニーには、数週間前から、侍女に扮装した護衛が付いている。金で雇われた、いわゆる冒険者の一人だ。彼女の正体は限られた立場の人々しか知らない。女官長や王妃には、知らされていない。
ライアンが踵を返し、通路の先に歩き去っていった。その背中を眺めながら、彼はきっとジェニーのことを思い出して、苦々しく思

っているだろう、とサンジェルマンは予想をつける。
ジェニーの隣にいるライアンの姿は、多分、彼女の存在をひけらかしたい、ベアールの望むところではないだろう。ライアンは、ベアール家の来客たちに無言の圧力を与えるはずだ。ベアールはまさか、ライアンがジェニーと一緒に行動するとは思ってはいまい。
そして、ライアンはジェニーを守らないと明言しているが、いざという時には、彼は反射的に敵の喉をかき切ってくれる、とサンジェルマンは信じている。彼はジェニーを嫌ってはいるが、王には絶対の忠誠を誓っている。王の意に染まないことを、彼ができるはずもないのだ。つまりは、ジェニーが傷つく事態を、彼は阻止するしかないのだ。

ジェニーの斜め前に座るライアンは、目を閉じていてもなお、不愉快そうだ。せっかくの整った顔立ちなのに、いつも不機嫌な顔をしているのはとてももったいない、とジェニーは思う。ジェニーが今までの人生に出会った男たちの中でも、ライアンは際立って上品で、女性のように繊細な美しさを持つ。
ジェニーは自分がライアンに嫌われていると知っている。理由もわかっている。だからこそ、彼がジェニーと同じ馬車に相乗りしている、今の状況が納得できない。彼は昨日、実家に今日の装いを取りに戻ったそうだ。実家からベアール家までは、王城からよりもかなり近いらしい。そこから直接に会場へ向かえば、ジェニーと今ここで顔を突き合わせる必要もなかったのに。
けれども、彼が不機嫌な訳はジェニー一人にあるのではないようだ。
ライアンの隣に席を取るコレットが彼に遠慮して沈黙していたのは、馬車に乗り込んだあとの数分間だけだった。元来おしゃべりな彼女は、気に入っているユーゴと会える嬉しさも手伝ってか、朝早

くから興奮し、早口でまくしたてている。皆が彼女の話を聞いていようがいまいが、お構いなしだ。ライアンは閉口し、彼女から顔をそむけるようにして、反対側に体を傾けている。

コレットの際限なく続くおしゃべりのおかげで、車内の気詰まりな空気が解消されている。ジェニーはそれを歓迎したが、ジェニーの新しい侍女はそう取っていないようだ。コレットをときどき迷惑そうに見て、馬車が大きく揺れるたびに入口の扉を気にしたり、ぴったりと閉じられた窓に目をやったりしている。

ちなみに、彼女は寡黙な女だったが、ライアンには、おしゃべりの量に関係なく、どちらの女もお気に召さないようだ。女三人に囲まれながら、誰に対しても煙たそうな視線を送る彼を見ると、彼が女性を毛嫌いしているという下世話な噂は、信憑性が高いのではないかと思えてくる。

三ヶ月前にジェニーが王城へと向かった道を、今日は逆方向に辿っている。ずいぶんと王城から離れたようにも思えるが、外の風景が見えないため、王城からどの程度の距離を走ったのかが分からない。外気の匂いさえ遮断され、実はまだ王城内をぐるぐると走り回っている、と教えられても、ジェニーは驚かないだろう。

ライアンは今も一言もしゃべろうとせず、目をつぶったままだ。彼の髪の色は王によく似ている。そして、同じように無愛想だ。ジェニーは彼を目にすると、いつも王を想う。

ベアール家で開催される園遊会に、ジェニーは当初行くつもりがなかった。貴族社会の催しに興味はそそられないし、その場に自分はそぐわない。

ただ、ジェニーは王城の外には出たかった。ジェニーの祖父で、年老いたベアール家の当主にも再会したかった。

無理を承知でジェニーが話を持ち出すと、案の定、王はむっとした。ジェニーが、祖父に会いたいこと、外に出たいことを説明する

と、彼はますます機嫌を悪くした。彼はそのままジェニーに背を向け、足早に先に歩いて行ってしまった。

ところが、少しして戻ってきた王は、ジェニーの前に立ちはだかって、「必ず戻ってこい」と言ったのだ。ジェニーが何のことかと当惑していると、彼は声を荒げ、「必ず戻れ」と言い放った。

王が、ジェニーを王城の外へ出す許可をくれるとは思いもしなかった。

ジェニーは驚き、彼が自分の存在を強く求めていると表してくれたことが、今までになく嬉しかった。

だが、帰ってくる、とジェニーが返事をしても、王は腕組みを解かなかった。王は、ジェニーが戻りたいという理由にカミーユを挙げ、怒ったようにジェニーを見下ろしていた。

王がそんな表情になるのは、怒っているのではなく、不安なだけだと気づいたのは数日前のことだ。彼はまさか、ジェニーが今でも、彼から逃げたがっていると思い込んでいるのだろうか？　ジェニーは彼のもとを離れたくないし、ほかのどこにも行く気はない。

日に焼けた王の腕に金色の体毛が光るのを見ていると、大人の体躯で、幼い子どものように不安がっている彼が、たまらなく可愛く思えた。彼への愛しさが、募る。

「私は戻ってくるわ。あなたがいるから、戻ってくる」

王の、固い腕組みがほどけたのは、そのときだ。

王はジェニーを穴が開きそうなほど長く見つめた。そのまっすぐな視線にジェニーはたじろぎ、周囲が沈んで消え去るような錯覚にとらわれた。ほんの数秒間が何時間にも感じられた。ジェニーが何とか我に返ると、彼は眉間にまた皺を寄せて、ジェニーを見ていた。

「……早う戻って来い」

王の唇の隙間から漏れた声は、ジェニーが耳をすましてやっと聞き取れる大きさだった。そのあとに、彼が数秒間だけのぞかせた微笑を、ジェニーは誰にも渡したくない、と今でも思っている。

馬車が大きく方向転換し、ライアンが目を開けた。
「そろそろ、ベアール家だ」
数分後、ジェニーたちを乗せた馬車はベアール家本宅に到着した

第二部　4．再会－3

王城の庭園に慣れたジェニーの目には、ベアール家の庭園はひどく手狭に見えた。といっても、ジェニーの住む小城にある庭園と比べれば、その二倍以上の面積はあるだろう。一面に広がる緑の地には、夜宴よりは軽装だがそれでも豪華な服装に身を包み、紳士淑女たちがあふれかえっている。招待客たちの波間には、ジェニーが滞在していた頃にはなかった、数体の白い彫像が見え隠れする。庭園の中央奥に設置された噴水も、真新しさを感じさせる白に塗り換えられていた。

独特のきらびやかな雰囲気に、ジェニーはやはり馴染めない。場違いだ。

ジェニーと接した誰もが、非常に礼儀正しく、好意的な笑顔でジェニーを迎えてくれた。だが、ジェニーがどこかに動こうとするたび、好奇の目がさりげなく、ジェニーの行く先々まで追ってくる。来客たちはジェニーの立場をよく知っているのだ。ジェニーにとって初めての園遊会は、居心地がよいとはとても言えなかった。

ユーゴは誰とでも旧知の仲のように会話を楽しんでいるようだったが、ジェニーを同伴して話した人たちとは、ほとんどが初対面だという。彼はもっとジェニーを招待客に紹介してまわりたいようだったが、ジェニーの隣には影のようにライアンが付いて歩き、不自由さを覚えたようだ。ユーゴは彼をさりげなく追いやろうとして失敗し、少し前に妻に呼ばれたのをきっかけに、ジェニーの前から退散していた。

ジェニーは、来客たちを退屈そうに眺めるライアンを見上げた。彼は楽しみを享受するために、この会に参加したのではなかったのか。ジェニーを嫌いなはずのライアンは、馬車を降りたときからずっと、ジェニーの隣について歩いている。

「……何か？」
ライアンは鬱陶しそうにジェニーを見て、目を細めた。
「ここにはあなたの知り合いも多くいるんでしょう？　皆のところに行ってください」
「ほとんどは知り合いだ。なにも今、ここで話す必要もないだろう」
彼はまた庭に目を移す。
「じゃあ、あちらの女性たちも？　彼女たち、あなたとお話がしたいようだけど」
ライアンは、ジェニーの示す、木陰にいる若い女三人を一瞥し、興味もなさそうにジェニーに注意を返した。
「女たちが交流を持ちたいのは、私よりおまえだろう」
「私？　私と知り合っても得することなんかないもの、あなたの方でしょう？」
ライアンが小さく息をつき、目をそらした。
「せっかくの園遊会なのに、誰ともしゃべらないなんてもったいないわ。もし私を気遣ってくださってるなら――」
「私がおまえに気遣いなどするか！　私は女たちの退屈な話に付き合わずに済むように、ここにいるだけだ。……とりあえず、おまえは、くだらぬおしゃべりはしないようだからな」
ライアンは突き放すように冷たく言ったが、普段のように、憎らしそうにジェニーを見て、顔を歪めはしない。
ジェニーが女たちを再び見てみると、彼女たちはまだこちらを気にしているようだった。彼女たちの恥じらいぶりは、好きな男を見て照れている少女そのものだ。
ジェニーが木陰の女たちの前に進むと、ライアンは当然のように隣に立った。女たちは緊張しつつも彼を意識している。
こんにちは、とジェニーが彼女たちに第一声をかけたときだ。
「やあ、ジェニー、ここにいたか！　探したよ」
さっき姿を消したユーゴが、失礼、と女たちに笑いかけながら、

ジェニーと彼女たちとの間に割って入った。
「ジェニー、私の一番上の姉がさっき着いて――ほら、今あそこで父と話している女性が見える？　彼女にきみを紹介したいから、ちょっと来てくれないか」
ユーゴの姉というと、ジェニーの父の妹だ。
父を知る人に会える、そう思うと、ジェニーはいても立ってもいられなくなる。
ジェニーが館の方に振り返ると、庭園に向かって広く開放された窓の近くに、祖父とふくよかな女性が長椅子に腰掛けて会話をしているのが見えた。彼女の顔はジェニーからはよく見えなかったが、祖父やユーゴとは違う、濃い茶色の髪をしている。父と同じ髪だ。
「姉の方がきみの父をよく知ってる」
ユーゴがジェニーに顔を近づけ、瞳を覗き込んで笑った。
失礼します、とジェニーは女たちに断りを入れ、ライアンに振り返った。
「ライアン様、すぐ戻ってくるから、ここにいてもらえますか？」
彼はジェニーと一緒に彼女たちの前から去ろうとしていたのか、出鼻をくじかれたように、不満そうに顔をくもらせた。
「私が？」
「ええ、ぜひ彼女たちのお相手をお願いしますよ、ライアン様？」
ユーゴが今にも吹き出しそうになって言うと、ライアンは睨みつけるようにユーゴとジェニーを見たが、何も反論せず、二人に背を向けた。

よく響く女の声に、祖父の楽しそうな笑い声が重なって聞こえてくる。他の人々の声も屋内から漏れてくることから、外の陽光を避け、室内で静かに会話を楽しんでいる者たちもいるらしい。
ユーゴは祖父たちの談笑する場には正面から近づかず、開かれた扉の陰にジェニーを誘い入れた。館の脇に立つ大木が、ジェニーの顔に当たる直射日光を遮り、涼しい風だけを運んでくれる。

姉は会話を遮られるのを嫌う、とユーゴはそこからは見えない彼女を指差して、ジェニーに耳打ちした。
「姉の機嫌を損ねないように、私がうまく声を掛けてくる。ここで少し待っていて」
「わかったわ」
「すぐ戻るよ」
ジェニーが笑うと、ユーゴはジェニーの肩を軽くたたき、ジェニーから離れていった。

ジェニーの位置からライアンは見えなかったが、ジェニーが声を掛けた女が嬉しそうな笑顔でいるところを見ると、彼はあの女たちとその場に留まっているようだ。ジェニーは満足した。
ジェニーは今まで、ライアンが女たちと喜んで会話する光景を目撃したことがないが、彼が女嫌いという噂は、やはり嘘なのだろう。彼はきっと、単に女性が苦手なだけだ。そもそも、女を嫌うんであれば、男女の出会いの場ともなる、こんな園遊会には出席しない。
地面を踏む足音がジェニーの背後から聞こえ、ジェニーの鼻にユーゴのつける匂いが香った。
「ユーゴ様、もう――」ジェニーは振り返り、自分の前に立った人物を見て、目を疑った。
「静かに」
男は囁くようにそう言い、ジェニーの隣に並ぶと、警戒して周囲をさっと見回した。
「ああ、でも……！」
「何も言うな。おまえは興奮すると大声で叫ぶから」
隣に立つ彼の存在があまりに信じられなかったのだが、震えるジェニーの前で、彼は顎を引きながら、ジェニーがよく知る独特の笑い方をした。
「それとも、今はもう大人になって、叫ばなくなった？」
ジェニーを見つめる瞳は、ジェニーと同色の、彼女たちの父親か

ら引き継いだ瞳だ。
正真正銘のローリーだ。
でも、まさか。まさか、こんなところで。
ジェニーは必死で口をつぐみ、大きく首を横に振った。少しでも口を開こうものなら、ジェニーは彼の名前を叫び、泣きわめき、庭園中の人々の注目を引いてしまいそうだ。彼の首にかじりついて、抱きつきたいのに、そうできない状況が恨めしい。
ジェニーを見ていたローリーの目が優しく揺れ、困ったような笑顔が広がった。
「……泣くのもだめだ、ジェニー。皆が不自然に思うよ」
「そんなこと言ったって……無理よ！」
ジェニーは唇を噛み締め、ローリーの右腕をつかんだ。彼は、抱き返してはくれなかった。だが、彼はジェニーを見つめると、頬にゆっくりと唇を押し付けた。
「ジェニー……」
ジェニーが彼の乾いた頬にキスを返すと、その頬が小刻みに震えた。
「会えてよかった」
心の底から安堵したような兄の口調に、ジェニーは耐え切れなくなって、彼の背中に手をまわした。
「会いたかった……！」
「ジェニー、離れて」
「いやよ、離れない。やっと、やっと会えたんだから！」
「周りに聞こえるよ、静かに」
「心配しなくても、皆はあなたをユーゴ様だと勘違いするわ」
ローリーの目にうっすらと涙の膜が張り、ジェニーの体はローリーの胸に押し付けられた。
「ジェニー……！」
ローリーの腕に体を締め付けられ、ジェニーの脇腹が痛んだ。耳がこすれて痛む。でもその痛みは、ローリーの実体がジェニーを抱

きしめているという、確かな証だ。
ユーゴの香水をつけたらしい首筋から香る匂いを別にすれば、兄は数年前と何も変わらない。肩の温かさも、ジェニーの頭を支える手の大きさも。
ジェニーは涙と嗚咽が外にもれないように、兄の肩に深く顔をうずめた。

それから一分もしないうちに、ジェニーの背中にきつく巻かれていたローリーの腕が、一度大きく揺れたと思うと、直後に解かれた。
ジェニーがはっと顔を上げると、彼は鋭い目で辺りを見渡し、ジェニーを見て短く息をついた。それから、何かを思い出したように顔をほころばせる。
「どうしたの？」
ローリーは、ユーゴの今日の服装に似せた自分の格好を指し、くすくすと笑う。
「彼と僕はよく似ているね。ジャンヌ叔母さんにそう言われても信じられなかったけど、実物に会ってみて驚いた。おかげで、こっちは何かと助かったけどね」
「祖父にはもう会った？　ユーゴ様にそっくりなの、だからローリーにも」
「会ってない」
ローリーはジェニーの言葉を遮ると、やわらかな笑みを消して、祖父のいる方向を見つめた。
「僕がここにいることを知ってるのは、僕をこっそり家に入れてくれたユーゴだけだ。僕はジェニーに会いに来たんだ、ほかの誰かに会う気はないよ」
ローリーが背後の庭園を素早く見やり、ジェニーの手を引いて館の壁面近くに移動した。
「ジェニー、今まで一人で心細かったろう。事情は……ジャンヌ叔母さんから、いろいろと聞いた。まったく、ひどい話だ！　おまえ

が抵抗できないのをいいことに――どんなにか、おまえも辛かったろう……！

ごめん、ジェニー。もっと早く来られればよかったけど、今のおまえの状況だと、僕もそう簡単には動けなかった。今日を待つのが精一杯だった」

兄の悲しげな口弁に、ジェニーの頭の中がぐるぐると高速で回り出す。

一人で心細く辛い毎日を送ったのは本当だ、兄に会いたくて涙した日も一回や二回ではない。今の兄のように憎悪に燃え、反発し、屈辱的で嫌な思いをしたことの方が圧倒的に多い。ジェニーは今でもその思いを忘れていない。そのときどきの、王や王城の人々のいる情景を鮮明に覚えている。

でも、あれほどに否定し反発していた日々が、今ではときどき、遠くにかすむ。ゴーティス王が一庶民であるジェニーの心に歩み寄ろうとする姿を知るたび、彼を家族の仇とみなして許さないことに、どれだけの意味があるのだろう、とジェニーは疑問に思う。だからといって、彼の罪を帳消しにするのではないが。

時は進み、人の心は移ろう。兄が知る、ジェニーの身に降りかかったことは事実かもしれないが、兄が思う、ジェニーの現在の心は、彼の想像とは違っている。ローリーの知るジェニーは、彼らが生き別れたあのときから、成長が止まっている。そして、ローリーの時間もたぶん、あのときで止まっている。今のローリーには、きっと、ジェニーの心は解ってもらえない。

ローリーの左手がジェニーの手をぎゅっと力強く握り締め、彼はまたジェニーの額に唇をつけた。

「今まで一人にして、ごめん」

ジェニーは兄の顔が直視できず、弱々しく首を振った。

「私は、大丈夫だったわ」

「これからはずっと一緒だ、ジェニー」

ジェニーが驚いて顔を上げると、彼が小声で囁いた。「屋敷の近

くで仲間が待ってるんだ。人の出入りの激しい今なら、僕たち二人くらい、難なく抜け出せる」

ジェニーは咄嗟に後ろを振り返って、ライアンの姿を探した。が、ライアンは見当たらず、庭園に出ている人々も彼ら自身の会話にますます熱中しているようで、誰もジェニーたちに関心を向けていない。

「でもローリー、それは危険だと思うわ」

「危険には慣れてる。さ、見つからないうちに早く。この裏手をまわれば近道だから」

ローリーがジェニーの手を取って、館の裏手へと促す。ジェニーは立ち止まり、彼の手に抵抗した。

「ジェニー？」

「ローリー、私は行けない」

ジェニーが兄の左手を押し戻そうとすると、彼は唖然としたようにジェニーを見つめた。

「私は行けないの。ローリーが知ってるかどうか……私には、カミーユって娘がいるの」

「ああ、知ってるよ、ヴィレール王の子どもだろう？　そんなことは、国中の皆が知ってる」

ローリーは苦々しげに唇を斜めに曲げ、ジェニーの手をもう一度掴んだ。

「だから何だっていうんだ。ああ、おまえがあの王にそんな酷い仕打ちを受けたって想像しただけで、はらわたが煮えくりかえる！　あんな王の子どものことなんか、おまえが気にする必要はないよ。そんな呪われた子ども、ヴィレール王にくれてやればいい」

ローリーの嫌悪を目の当たりにして、ジェニーは激しく動揺した。

「父親が誰でも、私の子どもなのよ、ローリー」

「おまえが産みたくて産んだんじゃないだろう？」

ジェニーが唇を噛んで俯くと、ローリーの手がジェニーの肩を軽く撫でた。

「ジェニー、今行かないと、もう二度と僕たちは会えないかもしれない。さあ、早くここを出よう。生活は楽じゃないけど、おまえ一人くらいは僕も何とか養っていけるから」

ジェニーの肩にあった手がジェニーの頬に移り、ローリーが笑う。

彼の指が頬を滑るのを感じていたジェニーは、ふと、彼がさっきから左手ばかりで自分に触れていることに気がついた。ジェニーを抱きしめたのも、手を握り締めたのも左手だ。彼の利き手は右手のはずだったが……。

――そして、ジェニーは思いだした。ジェニーの故郷がヴィレールの急襲に遭ったとき、ローリーはゴーティス王の剣を右肩に受けた。ローリーが血を流しながら地面に倒れ、無念の唸り声をあげていた、あの瞬間だ。

「ローリー」ジェニーは自分の予想が外れることを祈りつつ、尋ねた。「まさかとは思うけど……もしかして、右手が不自由なの……？」

彼の指がジェニーの頬の上で止まった。

「動かないよ」あっけらかんと、ローリーは返答する。「ヴィレール王に斬られた、あのあとからね」

でも左手があるから、と言った彼の横顔を目にして、ジェニーの胸がつまる。

兄に剣傷による後遺症があるとは、思いもしなかった。よく考えれば、重傷を負った彼が五体満足で生きていることの方が確率としては低かったのだ。利き手である右手が使えないとあれば、自慢だった剣は当然使えず、日常生活でさえ、ローリーはずいぶんと不自由を強いられてきたことだろう。

ジェニーは、小城の庭園内で、「必ず戻れ」と言った王の顔をぼんやりと思い起こした。ローリーへの同行を拒否して王のもとに戻るのは、本当に正しいことなのだろうか……？

「ジェニー、早く」

ローリーが焦りをにじませて、ジェニーを急がせる。ジェニーは無意識に彼の手をよけ、後退した。
「ジェニー、どうしたんだ」
「やっぱり行けない」
ローリーが苛々として、ジェニーの手を引っぱった。
「迷ってる時間はないんだ。おまえがどうしても子どもが必要だって言うんなら、あとで取り戻すことを考えよう。ともかく、来て」
ジェニーは彼の手を振り切ろうとし、彼の驚きを呼んだ。
「行けない。行かないわ、ローリー。一緒に行きたいけど、私は行けないの」
「ジェニー、困らせないで」
ローリーの真剣な表情を見れば見るほど、ジェニーは辛くなる。王と残るのが正しいのか、兄と一緒に行くのが正しいのか、実のところ、ジェニーには判断がつかない。どちらも正しく、どちらも間違っているように思う。ただ、ジェニーは王に「帰る」と約束したのだ。ジェニーはもう一度、王のあの笑みを彼から引き出したい。
ジェニーの手を引きずっていこうとしたローリーが不意に立ち止まり、ジェニーを凝視した。
「……ジェニー、おまえはまさか――ヴィレール王が好き……なのか？」
好きだ、どうしようもなく。
王の顔を思い出すと、ジェニーの目に勝手に涙がにじんだ。彼の前から何も言わずに消えるようなことだけは、絶対にしたくない。
「王城なんかにいるから、おまえもおかしな考えになるんだ。ジェニー、僕と一緒に行こう。ジャンヌ叔母さんもおまえに会えるのを楽しみに待ってる」
ローリーの手にいっそう力がこもり、ジェニーはそこから逃れようとして、体をねじった。その反動で、ジェニーの瞳から涙が流れ落ちる。
「ローリー、やめて」

「黙ってついて来るんだ」
「私は行かないの、放して」

ジェニーたちが押し問答となっていると、急に周囲に複数の足音が聞こえ、騒がしくなった。そしてそれと前後して、ローリーの背後に、剣を手にした男たちがいきなり現れた。
「そこの男、ご婦人から手を放せ！」
ベアール家の使用人ではない、招待客の男たちだ。ジェニーがローリーの背後に見たのは二人だったが、ローリーが身を硬くして見つめている先には、あと三人、やはり招待客の若い男たちが剣を抜いて控えていた。その後ろには、ジェニーの侍女が短剣を持って身構えていた。
「ジェニー様、ご無事ですか？」
そのうちの一人が放った言葉に、ジェニーは彼らが近衛の者だと確信する。
近衛を動かせるのは王だ。彼が園遊会に出席するジェニーを心配し、近衛を動員して、身辺警護にあたらせたのだろうか？　だから、ジェニーにぴったりと付き添うように、ライアンが王城から同行してきたのか。
ジェニーが何も問題ない、と答えても、彼らのローリーに対する疑いは晴れないようだ。
「本当に何もないの、ちょっとした行き違いがあっただけ」
庭園にいる人々の注目を浴びたくなかったジェニーは、男たちの後ろから、ライアンが歩いてくるのをみとめて、ほっとした。彼は事態を収拾してくれる。
だが、ライアンが口を出す前に、ユーゴが慌てて飛び込んできた。彼はローリーを腹違いの弟と説明し、ローリーの軽率さを謝罪し、ジェニーの前からローリーを急いで奪い去っていった。あっという間の出来事だった。
ジェニーは、ライアンが近衛の男たちに何かを指示しているのを

見ていて、突然、彼らの任務はジェニーを守ることではなく、ジェニーの逃亡を防止することにあったのだと気づいた。ベアールの家には護衛担当の者たちが各所にいるし、園遊会という平和な場で、何人もの男がジェニーを守る必要はない。ライアンが、嫌いなジェニーと共に窮屈な馬車に揺られて来ることも、彼女を監視するためにほかならない。

王は今でも、ジェニーが逃亡すると疑っているのだ。

第二部　４．再会－４（前書き）

いつもより、ちょっと長文です。ごめんなさーい！
できればＰＣで読んでもらった方がいいかもしれません。。。

第二部　4．再会－4

ローリーと数年ぶりの再会を果たし、感動していた時間が嘘のようだ。

ジェニーはコレットに適当に相槌を打ちながら、ぼんやりと、昨日の出来事を考えた。つい昨日のことなのに、兄と触れ合った時間があまりにも短かったせいか、記憶までがおぼろげな気がする。

兄はもう、ジェニーを残してどこかに行ってしまった。ジェニーと兄が近衛に囲まれ、窮地に陥った彼をすんでのところでユーゴが連れ去ってから、すぐのことだ。兄は、ユーゴが目を離した、ほんの少しの隙をついて行方をくらましたそうだ。ジェニーがライアンの追及から逃れたときには、既に兄の姿はどこにもなかった。

ユーゴはローリーがジェニーを連れ去ろうとしていたと知り、怒り心頭だったようだ。兄が彼の厚意を仇で返したと、ユーゴは、金輪際、彼を家に入れないとジェニーに宣言した。ジェニーは、兄を家に引き入れたユーゴが自分の立場が危うくなることを恐れ、兄を追いやったと疑っている。彼は、それを決して認めはしないのだが。

ジェニーは兄がいなくなった実感に乏しく、今は寂しさをそれほど感じていない。でも、こうなることは、ジェニーには薄々わかっていた。兄が言うとおり、彼とジェニーは今後二度と、顔を合わせることはできないかもしれない。

王城暮らしはジェニーには窮屈で不便で、不安だらけだ。兄や叔母たちに囲まれた、自由で平和な暮らしに憧れる。王城を出れば、どんなにか楽しい生活が待っていることか。今は想像すらできないが、兄と永遠に別れるのは、身を引きちぎられるような思いがするのだろう。

兄と逃げなかった選択が正しかったかどうか、きっと、いつまでも答えは出まい。ただ、ジェニーは自分のとった選択を心の底から悔やんではいない。少なくとも、今の時点では。

あのとき、王と二度と会えなくなることは、ジェニーの選択肢にはなかった。ジェニーに、王のもとを去る気はなかった。この決断を下した自分自身が信じられなくもあるが、ジェニーは、そのときの自分の心に従ったまでだ。

それなのに、王は近衛を来客たちに紛れ込ませ、ジェニーの行動を見張らせた。ジェニーはその考えを思い過ごしだと思おうとしたが、ライアンの言動もふまえれば、疑いはどうしても拭いきれない。

王は、人を信じることに関しては、重症と呼べるほどに臆病だ。信じて裏切られることを恐れ、人を最初から寄せつけない。ジェニーはそれに気づいたばかりで、だからこそ、彼の不安をいたずらに煽りたくないと思っているのに。

王がジェニーの頬の上に落とした吐息を思いおこしながら、ジェニーは苦い痛みを堪えようと奥歯を噛みしめる。

戻ってくる、と言ったのは、ジェニーの本心だ、偽りはない。王がジェニーの言葉を信じなかった、とは思いたくない。だが、ライアンたちが王の命令で監視役となっていたのなら、ジェニーの本意がどうであろうと、王はそれを信用しなかったということだ。

（……戻るって言ったじゃない）

ジェニーは王を疑いたくなかった。王城で見た彼の笑顔に、ジェニーへの疑いは何も見えなかった。彼に早く会って、自分のつまらない誤解を正したかった。

馬車が急激に速度を落とし、男たちの威勢のよい声が響く。王城の門に着いたのだ。王に会えるときも、もうすぐだ。

傷ついて沈んでいたジェニーの胸が、彼に会える期待でにわかに騒ぎ出す。

ジェニーが王城に戻って三日、王がその日の晩餐後に訪ねてくる、とジェニーは知らされた。目覚めて、間もなくのことだ。王の顔を

最後に見たのは五日前で、のろのろと過ぎる時間に、ジェニーが痺れを切らせ始めた頃だった。

王に会えるときを待ちわびていたジェニーは、彼の来訪を知って嬉しかったが、彼が昼間でなく夜の時間を選んだことに、不安と戸惑いを覚えた。

王は当然、朝までジェニーの部屋に留まる気だろう。彼は以前のように、ジェニーを手荒に扱いはしない。だが彼は、ジェニーを決して寝所から逃してはくれない。そして、その間に、彼に会話らしい会話を求めるのは不可能に近い。

ジェニーは窓から差し込む朝の光を見つめ、朝食の席から立ち上がった。

何らかの誤解が、どちらか一方、または双方にあるかもしれないと、あれこれ疑うのはもうたくさんだ。それが何であれ、彼に直接尋ね、疑いを晴らしたい。話がしたい。けれども今夜、ジェニーが王とまともな会話を持てるとは考えられない。

「ジェニー様、どちらへ？」ジェニーが玄関へ向かうのを見咎め、侍女が問う。

「剣の練習場へ行くのよ」

頷きかけた侍女が、えっ、と驚いたようにジェニーを見た。

「近衛隊の練習場でございますか？　あそこは女人禁制ですよ」

「違うわ、王の練習場よ。今なら、いるだろうから」

ジェニーが笑って答えると、侍女が慌てて駆け寄ってきた。「あそこは王と側近しか近づけませんよ」

それは百も承知だ。

だが、王と話す機会がないのだから、作り出すしかないのだ。ジェニーは自分が待つ身の立場だと承知しているが、もともと、待つのが得意な方ではない。

ジェニーは、王がそのほとんどの時間を過ごす王城への出入りを厳しく制限されている。だから、そこが無理なら、ほかの場を探すしかない。限定された者しか入れない剣の練習場は、王とひそかに

接触するにはうってつけの場所だ。

王城の裏手にある美しい庭園を横切ると、低い生垣の向こうに石造りの塀が見えてくる。ジェニーと侍女が近づいていくと、入口らしき場所に、大柄な衛兵が二人構えていた。手前の衛兵がジェニーに気づき、隣の男に何かを囁く。

塀は成人男性が手を伸ばしてやっと届くほどの高さで、ところどころに王家の紋が彫られている。ジェニーは塀に沿って歩きながら、この塀の向こうに王がいると想像して、唇に笑みをのぼらせた。彼の驚く顔が目に浮かぶ。

だが王と対面を果たす前に、ジェニーには越えねばならない難関がある。ジェニーと侍女を前にして、衛兵たちが視線だけで二人を威嚇した。

「今、王はこちらでしょう？　御目通りをお願いします」

「残念ながら、それは無理です。ここをお通しすることもできません。どうか、お引取りを」

「急用なんです、お願い」

「申し訳ありません。急用であれば、しかるべき方にその旨をお伝えし、王にお取次ぎいただいて下さい」

事務的な答えだ。が、ジェニーはここで引き下がるわけにはいかない。

「本当に急いでいるんです。そんな悠長な時間はないんです。だから、どうかお願い」

ジェニーがあきらめないと悟ったのか、衛兵たちが抵抗する構えを見せる。

ジェニーは衛兵の後ろにある入口から中を覗いた。数メートル先まで石畳が続き、その向こうに土色の地面が見える。数人の人の気配はあるが、王はおろか、誰の姿も見えない。剣のかちあう、小さくて鋭い音だけが聞こえる。

ジェニーの隣にいた侍女が、ジェニーの腕を控えめに引いた。「

ジェニー様、出直しましょう」
「ちょっと待って」ジェニーの目に、近衛の制服を着た、細身の背の高い男が石畳と土色の地面の境を歩くのが、見えた。「ライアン様！」
死人に呼ばれたかのように驚愕した彼の顔が、みるみるうちに、怒りに変わる。
ライアンは王に似た白っぽい金髪をなびかせ、軽やかな足取りでジェニーに駆け寄ってきた。
「……おまえは！」
ジェニーの胸ぐらを掴みかけ、ライアンはその直前で、口惜しそうに拳を丸める。ジェニーが笑いかけると彼はいっそう憤慨して、入口を塞ぐように立ちはだかった。
「おまえはいったい、ここで何をしている！　ここをどこだと心得ておるのだ、おまえの立ち入りが許される場ではないぞ！」
気品ある顔立ちだからこそ、ライアンが怒ると相当な迫力が増す。彼は押し殺した声でジェニーにすごんだあと、次に衛兵たちを睨みつけた。
「女一人も追いやれないのか、おまえたちは！　それでどうして近衛が務まる！」
「ライアン様、この人たちは悪くなくて――」
「おまえはいちいち口を出すな！　何の用があってここに来たかは知らぬが、早く帰れ！　ここは王専用の……」
衛兵たちの顔が強張り、ジェニーとライアンは彼らの視線の先にゴーティス王がいるのを見て、口をつぐんだ。王はライアンを見て、そして、ジェニーに注意を向けた。ジェニーと視線が合っても、彼の頬は弛みはしなかった。
王はジェニーの数歩先の地点から動かず、手の甲で額を拭った。もう片方の手には、剣が握られている。
「何の用だ」

王の硬い声がジェニーを傷つける。ジェニーが答えを言いよどむと、彼は薄く笑った。

「今宵行くと伝えたはずだ。夜まで待てなかったか？」

ジェニーは察した。彼は“何か”を誤解し、苛立っている。

ライアンがジェニーを軽く睨んでから、身を引いた。王とジェニーの間を阻むものが何もなくなると、ジェニーには、王の体に薄い緊張の膜がまとわりつくのが見えた。

「そう聞いたわ」ジェニーは反抗的にならないよう注意し、王を見返した。「でも、話がしたかったの。夜だと話ができないかもしれないから」

王が眉を上げ、笑いを漏らした。

「おお、そうよな、寝所では話をする猶予などなかろう」

塀の向こうで小さな失笑が起き、衛兵たちが笑いを噛み潰す。ジェニーは顔が赤らむのを感じたが、嘲笑する王を必死で見返した。

「大事な話なの」

「ほう？　では、話すがよい。俺にとって大事とあれば、ここの皆にも大事なことだ。皆が知る必要がある」

王はジェニーの切り出そうとする話題に警戒し、予防線を張ろうとしているようだ。ジェニーから見えない位置に何人が控えているかは知らないが、ジェニーは王の挑発に乗る気はなかった。

「あなたと私のことだから、皆の前では言えないわ」

「俺は構わぬぞ」

「私は嫌なの」

王が目を細めて顎を上げ、ジェニーを冷たく見返した。

「俺は忙しい。おまえの我がままには付き合うてはおられぬ」

「我がままじゃなくて、あなたが何か誤解しているようだから、それを話したいだけよ」

王が眉間に指を当て、鼻を鳴らした。

「おまえは、俺が何を思うておるか、全て分かるのか？　おまえこそ何を勘違いしておるか知らぬが、俺は、おまえのつまらぬ妄想に

振り回されることなど願い下げだ」
「私の勘違いかどうか、確かめてみなきゃわからないじゃない」
「なに？」
王の機嫌が損なわれた様子に、衛兵たちが萎縮する。王は怒鳴ろうとしたようだったが、代わりに肩で大きく息をつくと、ジェニーにそっけなく言い放った。
「おまえとこれ以上話す気はない。城に戻れ」
ここまで来ておいて、すごすごと帰れるものか。
ジェニーは王の突き刺すような視線を受け止め、ゆっくりと首を横に振った。ジェニーのそんな反応を、王は予想していたようだ。
「そうか、では仕方あるまい。そこでいつまでも俺を待てばよい。だが、俺はおまえの相手はせぬぞ」王があきれたように低く笑いながら、ジェニーに背を向けた。
「逃げるの？」
王を引きとめようと咄嗟に言ってしまってから、ジェニーは慌てて口を押さえた。辺りは静まりかえり、ジェニーの先で、王がぴたりと立ち止まる。次にジェニーに振り返ったその顔は、怒りで醜く歪んでいた。
「俺が逃げる？」王は前髪をかきあげ、ジェニーに厳しい面を向けた。「――逃げようとしたのは、おまえだろう！」
王の手の中にある剣で喉を貫かれたように、鋭い痛みがジェニーの喉に走った。
やはり、王はジェニーの逃亡を疑っていたのだ。
ジェニーが衝撃で口がきけないのをどう理解したのか、王はジェニーを睨み続け、吐き捨てるように言った。
「危うく、おまえの口車に乗せられるところだったわ。俺がベアール家にまで近衛を付けておらねば、おまえは今この場におらなかったであろうに！」
熱い血の塊のようなものが、ジェニーの喉元にこみ上げてきた。
王は今、ジェニーが信用ならない、と堂々と言ってのけたのだ。彼

は、自分の発言がどれだけジェニーを傷つけたか、分かっていない。
「私の言ったこと……信じてなかったのね」
「おまえの何を、どう信じろと言う！」
言外に、王はジェニーとケインの逃亡のことを示している。でもジェニーは、ケインのことを時折思い出しはするが、恋焦がれることはない。
ジェニーは一生、ケインとの仲を王に疑われ続けるのだろうか？彼と逃げた事実は消えないが、それはいつまで、王との間に立ちはだかるのだろう？
ほんの些細なことで、王の心は結晶化してしまう。ジェニーに心を開きかけてくれた彼が、また以前のように、心の殻を固く閉ざしてしまうかもしれない。そのことが、ジェニーには何よりも辛い。
「私は逃げようなんてしてなかったわ」
王はジェニーの返答を相手にもしない。彼の心の扉は、そんなにも硬くて分厚いのだ。
ジェニーは泣き出してしまわないように心を奮い立て、もう一度、言った。
「私は逃げようなんてしていない。これからもそうよ。私は、ここにいる」
衛兵たちは、ジェニーが塀の中に足を踏み入れても、止めようとはしなかった。王の隣にいたライアンがジェニーを阻もうとしたが、王の手が揺れ、彼を遮った。
王の険しい顔の前に立つと、ジェニーの足が震える。彼の手にある剣が銀色の光を放ち、その光が自分の肌に吸い込まれる瞬間さえ思い浮かんで、ジェニーは恐怖に身をすくませた。でも、恐怖と言うなら、王を失う恐怖の方がずっと大きい。
「私はここにいるわ」
「言葉では何とでも言える」
そうね、とジェニーは頷き、俯くふりをして、目の端に盛り上がってきた涙を隠した。

「でも、私は戻ってきたわ。私はここにいるのよ、そっちの方が真実だわ」

ジェニーを見つめる王の緑色の瞳は、奥底まで澄んでいる。澱(よど)みも何もない。でも、彼はジェニーにその瞳を見つめさせてはくれても、ジェニーにその心の奥底までは覗かせてくれない。

王はジェニーをしばし見つめていたが、結局、何も言いはしなかった。ジェニーは打ちのめされ、その場から去る以外なかった。

そしてその夜、約束の時間が過ぎても、王はジェニーを訪ねてこなかった。代わりに、夜もだいぶ更けた頃になって、明日の早朝、王城中庭への連携口に来るようにと伝えられただけだった。

なぜ急に後宮に来ようとしたのか、ゴーティスには説明がつかない。しかも、ジェニーの娘がいる部屋の前だ。

剣の練習場を去る際、ジェニーはあきらかにゴーティスの態度に傷ついていた。彼女の方からわざわざゴーティスに会いに来たのは、それが初めてだった。あの場で彼女を見たとき、ゴーティスは彼女が本当に愛しかった。だがゴーティスは、自分を責める彼女を無言で追いやるしか方法を知らなかった。

ここに、何の助けを求めるというのか。

乳母や世話係の女たちは、王の初めての訪問に大喜びだ。室内は静かだった。ジェニーの娘は眠っているとかで、彼女たちは囁き声で会話をしていた。

ゴーティスは、カロリーヌの顔など見る気もしなかった。一度見たら最後、彼女の心臓に剣を突き立てて絶命させたくなるだろう。ジェニーの子であろうが、その顔にケインの面影を見るのは御免だった。

だが、ゴーティスが目を引かれたのは、子の眠る、小さな寝台だ。木製で、白地に青線で模様が描かれている。ふと見ると、白い色が

剥げかかっている箇所もある。子が庶子とはいえ、中古の家具を使い回すとは。

女官長よりも年のいった女が、ゴーティスが目を留めていた寝台の横に立ち、微笑んだ。「気がつかれました？　そちらは王が幼少の頃に使われていたものですよ」

「俺の？」

「ええ、ずいぶんと気に入っておられたので、今まで大事に保管しておいたのです。カロリーヌ様もとても気に入っておいでですよ」

ゴーティスは、子を見るつもりはなかった。だから、カロリーヌの顔が視界に入ったのは、単なる偶然だ。

――衝撃だった。そこにいたのは、ほかでもない、ジェニーだったからだ。

髪の色は違うが、ジェニーと同じ唇の形をして、同じように、唇を細く開いて眠っている。ジェニーはときどき、お腹の前で何かを抱えるような格好で眠ることがあるが、この小さなジェニーも、まったく同じような姿で、すこやかな寝息をたてている。

ゴーティスは寝台に近づき、カロリーヌを覗き込んだ。

薄黄色の柔らかな服から、真っ白でふっくらとした肌がのぞいている。頬は桃色だ。目も鼻も口も、掛布の上で組み合わさった手も、驚くほどに小さい。ぴったりと閉じた睫毛は濃い金色で、先端がくるりと上向いている。肌よりわずかに濃く、ゴーティスと同じような白金色の髪が、まるで綿毛のように彼女の頭半分を覆っている。

城の住人たちが騒ぐのも納得できるほど、可愛らしい容姿だ。睡眠中でさえもそうなのだから、目を開いたら、もっと愛らしいに違いない。

「……母親にそっくりだ」

ゴーティスが感想を漏らすと、女たちが笑った。

「まあ、カロリーヌ様は王によく似ておいでですわ！」

そのうちの一人があげた声が甲高く、カロリーヌが呻いて寝返り

を打った。それから、真上を向いた彼女が、ぱっちりと両目をあけた。

驚愕のあまり、ゴーティスの体が凍りつく。

いきなり、背後から奇襲に遭ったときのようだ。

ゴーティスにまっすぐに向けられたのは、光り輝く緑色の目だ。

無垢な、幼い娘の――先王と同じ瞳。

全身の動きを一瞬にしてからめ取ったカロリーヌの瞳から逃れようと、ゴーティスは必死に抵抗した。が、どんなに逃げようとしても、先王の瞳はゴーティスをくい入るように見つめる。体の、魂の奥まで、どこまでもくい込んでくる。どこまでも。

ゴーティスは、先王が妻であった王妃の脆さに怒り、哀れに思いながらも、愛していたことを思い出した。先王を支え守る立場の彼女が、その弱さゆえに周囲につけこまれ、第一王子だったゴーティスに不遇な少年時代を送らせ、結果的に先王の命を奪うはめになったことを、彼女は死してなお、気づいていないだろう。

ゴーティスには母の弱さや脆さが許せなかった。けれども、慈悲深い先王は、最後の瞬間に妻を許していた。死に向かいながら、ゴーティスに苦渋の決断を課すことで、先王は彼にも母親を許すように訴えていた。

こと切れる直前の、先王の満足そうな瞳が忘れられない。

ゴーティスは先王の期待どおりに母を断罪したが、彼の望んだように、母を許すことはできなかった。それは今でも同じだ。ゴーティスを追うカロリーヌの瞳は、先王がゴーティスの罪を見透かして、嘆き悲しんでいるかのようだ。

「この娘はなにゆえ、俺から目を離さぬ」

「幼子は見慣れぬ物や人を目で追うものですよ」

カロリーヌの瞳がゴーティスに押し迫る。

父は今も、ゴーティスに母を許せというのだろうか。父を殺し、ゴーティスが母親として接したことが一度もない、他人と呼ぶに近い女に対して。

不意に、吐息のような笑い声が聞こえ、ゴーティスは女たちを睨んだ。さっき彼に声を掛けた、年長の女が慌てて口を塞ぐ。

「何がおかしい」

「いえ、あの……御子と初めて対面された際の言葉が先王妃様と同じで、やはり、親子でいらっしゃると――」

ゴーティスの前で先王妃の話題は厳禁だ。

隣の女が肘をつつき、女もさすがに気づいたらしい。女は肩を縮め、ゴーティスの視線から逃げるように頭を垂れた。

「は、あの女はさぞかし、俺を気味悪がったことだろうよ」

「めっそうもない！　先王妃様は、王をとても誇りにしておいでしたわ。毎日おいでになって、それはそれは大変なかわいがりようで。何年も待った末の、待望のご嫡男ですもの、可愛くないはずがありませんわ。古くからの慣例を嫌われ、ご自分で王の世話をされたいとおっしゃっては、私どもを何度も困らせたものです」

興奮した女は一気にそうまくしたてると、我に返ったのか、焦った顔になって再び俯いた。

ゴーティスはこれまでにそんな話を耳にしたことはない。

意外だった。女の口ぶりから、それは事実なのだろう。

だが、それが事実だからといって、すぐにそれを正として飲み込めるほど、ゴーティスの母に対する負の記憶は薄くない。ゴーティスは母親の腕に抱かれた記憶が一切ない。物心ついた頃には、彼女の世界の中心はケインだった。彼女から、ゴーティスは愛情の一片も感じたことはないのだ。

カロリーヌが寝台の柵に手をかけ、ゴーティスに細く小さな腕を伸ばした。ゴーティスは、素早く一歩退く。

「カロリーヌ様は王と仲良くなりたいのですわ。どうか、お手を」

小さな唇を開き、カロリーヌが笑う。

“手を取るがよい、ゴーティス”

ゴーティスはカロリーヌの小さな手のひらを見つめた。
ジェニーの笑顔で、先王の瞳が、ゴーティスに問いかけている。

第二部　4．再会ー5

朝食前で空腹なせいだけではなく、早朝だというのに、ジェニーの頭はすっきりとしていた。今朝も早くからいい天気で、こんな日は、人々は湖や川にでも出かけたいに違いない。敷地内を歩く庭師はにこやかで、機嫌よさそうに歌を口ずさんでいる。

風向きのせいか、かすかな鐘の音が風にのって聞こえてくる。何かを祝福するようでも、新しい時代の始まりを告げるようでもある、神聖な響きだ。今まで気にもしていなかったのか、王城にいてジェニーが鐘の音を耳にするのは初めてのように思える。

ジェニーと侍女が王城中庭に通じる出入口の前に連れ立って現れても、衛兵たちは眉ひとつ動かさなかった。侍女はそこに着くまで王の伝言の真偽を疑っていたのだが、彼らの奥に続く通路にライアンをみとめたとたん、周囲に張り巡らしていた警戒を解いた。ジェニーも彼を見てほっとする。ライアンはジェニーに気づくと、奥に進んでくるようにと、ぞんざいに手招きした。

「王はまもなくお見えになる」

ジェニーが挨拶する前に、ライアンがさらに奥の扉を示して言った。一人の衛兵が立つ、中庭と直結する入口は片方の扉が半分ほど開き、薄暗い通路に明るい光を差し入れている。

ジェニーは辺りを見回した。「あの、ここで何をするんでしょう？」

ライアンの淡い青い目がぎょろりと動き、ジェニーに注がれた。

「それは知らぬ。私はここで王を待ち、おまえがこの先に入らぬようにするだけだ」

彼は剣の束を握り、ジェニーに、彼が本気だ、ということを示す。

でも、王城に入れないことは、ジェニーはとっくに承知している。王妃の手引きで王城に入り、女官長に厳しく責められ、脅された日

から。
ジェニーはライアンから離れ、壁に寄りかかった。
「毎朝、あなたはここに王を迎えに来るのね」
「今日が初めてだ」
ライアンの返答を聞いたジェニー以上に、当人の彼が戸惑っているようだ。
「じゃあなぜ今朝は――」
ジェニーが彼の訝しそうな顔を見つめたときだ。突然、けたたましい、大きな喚声が、二人の前のひんやりとした空気を貫いた。
ジェニーが驚き、彼と顔を見合わせたのは一秒にも満たない。
ジェニーが衝動的に駆け出すと、両手を広げたライアンがその行く手に立ちふさがった。
「ライアン様！」
「ここは通さぬ」
ジェニーは絶望的な気分になって、半開きとなった扉を見た。喚声は、くすぐったそうな笑い声に変わっている。女たちが幼子をあやす声がそれに重なる。
「でも、その向こうにいるのはカミーユだわ！」
ジェニーが出した手を鋭くねめつけ、ライアンは頑として彼女の前からどこうとしない。
「おまえはこれより先への進入を許されていない」
ジェニーが娘の名を叫ぼうと息を吸い込むと、すかさず、ライアンが手をジェニーの口に貼り付けるようにして覆った。そして彼は、ジェニーの背後から腕を伸ばし、ジェニーの肩を押さえるようにして体の自由を奪った。ジェニーは焦り、肩で後ろの彼に体当たりして抵抗を試みたが、何の効果もなさない。
（すぐそこに、手の届く場所にカミーユがいるのに……！）
ジェニーは頭をずらし、斜め上のライアンを見上げた。細面に、冷ややかな瞳が鏡面のように光る。怒りも焦りも映さない顔で、彼はこうやって、はむかう敵をあっさりと殺してしまうのだろう。

ところがライアンは、ジェニーの口を塞ぎ、腕に彼女の体を封じ込めたまま、後ろ向きに中庭への扉の方にジェニーを無理やり引きずっていこうとした。ジェニーは驚いた。はたと、彼の手を押し戻そうとするのをやめる。

ライアンは閉ざされた扉に背中を押し付け、ジェニーの体をさらに彼に引き寄せた。敵の陣地でも窺うように、ライアンは横目で、手前に開いた扉の先を見る。陽光がジェニーの目に眩しい。ふかふかな緑の地面が目を奪う。

女たちの笑い声がした。途切れがちに聞こえるのは、舌足らずで明瞭な発音にならない、カミーユの歌だ。歌というより、ただ喚いているようではあるが、あれはれっきとした彼女の歌声だ。あいかわらず彼女の音程が狂っていて、ジェニーは笑いを誘われる。

娘はいつもジェニーの心の中にいる。忘れたことは一瞬たりともない。

最後にカミーユに会ったのはいつだったろう？　一年前？　半年前？

彼女にあったときが、はるか昔のように思えてならない。でも、王妃がジェニーに彼女を引き合わせてくれたのは、たった二ヶ月前だ。

ジェニーが固唾をのんで待っていると、女に手を引かれ、カミーユが地面の上を跳ねるように歩いてきた。

カミーユは元気だった。彼女にしか理解できない歌を歌いながら、満面の笑みを浮かべ、弾むように歩いている。小さな手足はよく動き、少しは成長しているように見える。

前は、足をあんなに高く上げて歩いた？　あの柔らかな髪は、あんなに長かった？

ジェニーの目から見る限り、カミーユは皆に大事にされ、幸せそうだ。

ジェニーは安心し、体の端々から力が抜けた。

（よかった。本当によかった……）

ジェニーが瞬きすると、瞳から落ちた涙がライアンの手につたわり、ジェニーの口を覆う彼の手が、ほんの少しだけゆるんだ。

扉の隙間からカミーユの姿が見えなくなると、ライアンとジェニーはどちらからともなく、その場から動いた。既に、ライアンはジェニーの体を拘束していない。

「ありがとう」

ジェニーが彼に礼を述べても、ライアンは歩みを止めなかった。彼の耳に声が届かなかったと思い、ジェニーが再度感謝を表すと、彼はむっとしたようにジェニーを見た。

「勘違いするな。私は、おまえの進入を防ぐという己の任務を果たしたまで」

彼は、開いた扉に振り返った。「あの娘は、毎朝この庭を散歩するのが日課となっている」

そして、それは当然、王も知っていること。

ジェニーが次の言葉を期待して待つと、ライアンはゆっくりと振り返った。

「おまえをここに呼んだのは王だ」

そうだ、ジェニーは王の伝言を聞いて、この時間にここまでやって来た。それがなければ、カミーユを間近で見られなかっただろう。

ええ、と返答したつもりのジェニーの声は、あふれ出した涙ににじむ。

「もう……王は来る？」

「おそらくは」

ライアンが、まるで次の展開を予期していたように壁際に退く。すると、半開きになっていた扉が大きく開き、明るい光の中からサンジェルマンが現れた。彼はジェニーに目を留め、ライアンと目礼を交わすと、後ろに振り返る。

彼が扉を押さえた、その後ろに、ゴーティス王が続いた。何の飾

りもない簡素な白い上衣を着て、膝丈の下衣を穿いている。剣の練習がしやすい、動きやすい服装だ。彼は普段と同じように、眉を少しだけひそめている。日光を受けて揺れる頭髪が、カミーユとそっくりだ。

ジェニーは王に向かって駆け出し、彼に腕を伸ばした。ジェニーが胸に抱きつくと、王はわずかに後ろにのけぞった。

王の軽装のおかげで、ジェニーは頬の下で彼の胸筋が固く締まったことまで感じ取れた。彼の温かい肌から、いつもの爽やかな香りが立ちのぼっている。

ジェニーは大きく息を吸い込んだ。

彼の腕の中は安心できる。兄ローリーに再会して以来、ずっと心を暗くしていた罪悪感がかすめ飛ぶ。

（もう、いい。ローリーに理解されなくても、王と一緒に兄の仇となろう）

「どうした」

王は驚きをあっという間に隠し、ジェニーの背に手を伸ばして、えらぶって尋ねる。

だが、王の瞳には困惑がかすめ、彼が身につける服の薄い生地を通して、その力強い鼓動がジェニーの体にまで響いている。それはジェニーよりも速く、いつまでも鳴り止まない。言葉より、彼の心にずっと正直だ。

服の上から王の胸に唇をつけると、ジェニーは彼を抱く腕に力を込め、彼を見上げた。彼は真上からジェニーを黙って見下ろしている。さらりと額に落ちてきた前髪の奥から、彼はジェニーを見つめている。視線だけでジェニーをここまで喜ばせる人など、今までにいただろうか？

「俺がそうも恋しかったか？」

王はにやりとした笑みを浮かべ、ジェニーを引き寄せる。

ジェニーがさらに近づいた彼の顔をのぞくと、その瞳に熱情や怒

りはなかったが、戸惑いの名残を見つけた。彼の尊大な態度はただの照れ隠しで、ジェニーが彼に会えて嬉しいように、彼もまた嬉しいのだ。

ジェニーがなおも王を見つめていると、彼は唇を細く開け、戸惑いの色を濃くしてジェニーに視線を落とした。ジェニーは王の顎に手を伸ばし、髭の跡が残る、顎の輪郭をなぞる。前にジェニーに髪を触られたときのように、彼は動かない。

「そうよ、会いたかった」

触っているだけで、なぜこんなに胸が高鳴っていくのだろう。その波動だけで目がかすみ、音の余韻で酔ってしまう。

ジェニーは王に笑ったが、彼は笑い返さなかった。何も答えはしない。彼は、瞳を見開いたかと思うと、眩しそうに目を細め、ジェニーを見つめるだけだ。

「私の言うことは信じないのね」

「……いや」

王は顔を傾け、何かをさぐるようにジェニーを見る。まだ、笑わない。

ジェニーは王の背から腕を離し、その肩に手を掛けた。

「ちょっと、かがんでくれる」

ジェニーの囁きに王は怪訝そうに眉をしかめたが、ジェニーの目線にまで腰を落とした。

「何が――」

王の唇がまだその言葉を言い終わる前に、ジェニーは彼の顔を両手で挟むと、彼の声を奪った。ジェニーの唇の上で彼の唇が固まる。が、やがて、安心したように彼の唇が解けていく。

ジェニーがそっと唇を離すと、今度は、王がジェニーの頬を両手で挟んだ。それからすぐにジェニーの顔は引き寄せられ、彼の唇がジェニーに乗せられる。

性急な、伽に向かう口づけとは違う。もっと優しくて、温かだ。興奮と湧き上がる嬉しさに、ジェニーは唇を合わせながら笑う。

「会いたかった」
ジェニーが唇を離して呟くと、彼はまっすぐにジェニーを見た。また無言だ。
「本当よ。王城の外に出られたときも、早く戻ることばかり考えてた」
彼の眼差しが、何かを我慢するように鋭くなる。
王の反応に不安になり、ジェニーは彼の頬に手をのばした。
「信じない？」
王が強張っていた顎をゆるませた。何かを確かめるようにジェニーを見て揺れていた彼の瞳が、恐る恐る、警戒心を解いていく。それから、輝きにあふれた彼の瞳が細くなる。
王が両手でジェニーの顔を支え、はにかみながら微笑んだ。
「……おまえの顔が見たかった」
ジェニーは驚きで胸を詰まらせ、近づく王の顔を見つめた。ほとんど心情を吐露しない彼が、気持ちを漏らすのはまれだ。
王がジェニーと額をつき合わせ、その顔が間近すぎて焦点が合わなくなっても、その瞳は自分を追っていたとジェニーには分かっている。彼はジェニーの鼻に唇をつけ、耳に唇を押し当て、頬を触れ合わせながら、ジェニーを抱き寄せた。ジェニーはいつまでも彼の顔を見て、彼を近くに感じたかったが、その唇に抵抗できるはずもない。
ジェニーが目を閉じる直前まで、王は小さく笑っていた。ジェニーも低く笑いながら目を閉じる。幼い子どもたちが、二人だけの秘密をこっそりと囁きあうように。

何回かの口づけを交わしたあと、ジェニーはまだ王の腕の中だった。走った後のように、二人とも息が乱れている。心地よい疲れだ。心地よく、甘い疲労感。
すっかり穏やかな顔になった王を見て、ジェニーは言った。「またここに来てもいい？」

ジェニーが中庭に続く扉に目を向けると、王の視線も同方向に動いた。「中には絶対に入らないから」

ジェニーは期待感に胸をはずませ、王を見た。が、彼は無情にも首を横に振った。

「それは許可できぬ。今朝はたまたま、ここまでおまえを呼び出しただけだ」

「ゴーティス王」

「おまえは王城に近づくな」

ジェニーが落胆し、扉の方を再び見ると、王の手がジェニーの頭に触れた。

「どうせ、あと一週間もすれば、おまえがここに来る意味もなくなる」

ジェニーは驚いて王に振り向いた。

「それ、どういうこと？」

王はジェニーの瞳を見つめ、そこから歩くように促す。彼の無言の返答にジェニーは焦った。

「ねえ、言って！　どういうことなの？」

そのときになって初めてその存在を思い出したサンジェルマンに振り返り、ジェニーは懇願した。が、彼は腑に落ちないような顔で王を一瞥し、ジェニーには何の返答もくれない。王はあやふやに笑う。

そして、サンジェルマンが一歩踏み出し、王に言った。

「王、もし私の考えが正しければ――私から、女官長に何か伝えることがあるのでは？」

彼の言葉に、王が満足そうに微笑んだ。

「おお、女官長に伝えるがよい。あの娘は小城に、母親のもとに戻す」

このときほど、ジェニーが喜び、興奮した瞬間はない。

ジェニーがまたもや王に抱きつくと、王はひどく驚いたように両手を広げた。

「本当に！　本当にそうしてくれるの！？」
王はジェニーに答える代わりに、得意げに眉を上げた。
「やっとあの子と一緒……」
カミーユと離れていた日々を思うと、この急展開は嘘のようだ。この王に何度頼みこんでも聞き入れられなかったのに、彼はたった今、ジェニーに娘を戻すと告げたのだ。ついに、やっと、カミーユを取り戻せる。彼の心変わりのきっかけが気にはなるが、それよりも、嬉しさのあまり、ジェニーは呼吸ができなくて涙が出る。
「嬉しければ笑え」
王が不機嫌そうに口を尖らす様子にさえ、ジェニーは彼の気遣いを感じる。
「笑ってるわ」
ジェニーは涙も拭かず、王の首に飛びつき、その顎に唇をつけた。王はジェニーを片腕で抱きとめると、ジェニーの顔に貼りついた髪を指ではねのける。
「本当よね？　本当に返してくれるのね？」
「娘はおまえの手に戻す」
ジェニーが興奮して頷くと、彼は思いのほか真面目な顔をし、諭すようにジェニーに言った。「それゆえ、おまえは王城に近づこうとするな。俺に用があるにせよ、剣の練習場にも顔を見せるな。あそこは、俺とごく限られた者のみが許された場だ」
「あの……突然あんなところに行って、悪かったと思ってるわ。でも、そうでもしないと会えないと思ったのよ」
「おまえの無謀さは知っておる。俺はそれも嫌いではない。だが、自由に振舞うのは小城だけにしろ」
王の顔も口調も、さっきより硬直している。ジェニーは突如、心配になった。
「もしかして王城で何かあったの？　急に私にカミーユを戻そうとしたり……」
「何も。思い立っただけだ」

ジェニーが王を見上げると、彼はおざなりに唇を押し上げた。
「……私のこと、心配してくれてるの？」
王は素直に頭を縦に振らない。だが、そのふてくされた表情を見て、ジェニーはそれを同意と取った。
彼の警告の背景となる事情は分からないが、彼がジェニーの身の安全を思って言ったのは確かだろう。そっけなく冷淡な態度は温かな感情の裏返しだ。彼は、本当は、情の深い人間に違いない。
「わかったわ、気をつける」
「そうしろ」
「その代わり、お願いがあるんだけど」
「なに？　交換条件など聞かぬ」
王はジェニーから体をそらし、立ち去りかけていた。王の前に立って歩いていたライアンが、ジェニーに振り返る。
ジェニーは急いで王の腕をつかみ、体を寄せた。恥ずかしさが大挙して押し寄せる前に、ジェニーは彼に素早く言った。
「もっと会える？」
王が唖然としてジェニーを見返した。
「私からは会いに行けないから、あなたに来てもらわないといけないんだけど……」
彼はまだ呆然としてジェニーを見続けている。ライアンとサンジェルマンも、二人の動向を気にして立ち止まっている。
（ああ、どうしてそんなに驚くの？　そんな反応されたら、こんなことを口にした私がばかみたい）
ジェニーが一度俯き、顔を上げると、王の白い頬がカミーユのように薄く赤らんでいるのに気づいた。彼はジェニーの発言に怒っている？　それとも、照れている……のだろうか？
王の視線が動き、ジェニーは彼の返答に備えた。
「よいだろう」
再び、尊大な口ぶりだ。
ジェニーは王の表情にその本心を探す。すると、彼はやや声を落

とし、言った。「毎日は無理だが、考えておく」
ジェニーを見る彼の視線がやわらぐ。
彼はジェニーに応えてくれたのだ！　ジェニーは、こみ上げる嬉しさを唇で噛みしめた。
「うん」
ジェニーは耳に王の手が触れるのを感じた。その手が後ろに伸び、頭を支え、彼はジェニーに顔を寄せる。

第二部　4．再会－6（前書き）

先週は突然の体調不良につき、更新をお休みさせてもらいました。
ご心配・ご迷惑おかけしました。
今後もできるだけ週1ペースで更新は続けていきますので、末永くお付き合いください～♪

＊更新情報についてはブログで公開していますので、もしよかったらチェックしてみてくださいね。

第二部　4．再会ー6

ジェニーがカミーユの姿を見てからきっかり十日後、カミーユと彼女の世話係たちは、ジェニーの暮らす小城に引っ越してきた。それは実に、母娘が不本意な別れを経験してから、五ヶ月後のことだ。

毎朝の散歩の延長のようなつもりで小城にやって来たカミーユは、庭でジェニーの顔をひと目見るなり、大声で泣き出した。静かでのどかな庭園を突き破る大音量。いったい誰に似たのか、周囲の誰もが耳を塞ぐくらいの大声だ。

娘の姿を目にしているのに、ジェニーはまだ夢でも見ているようだった。だが、カミーユの特徴的な大声が近づくにつれ、ジェニーの夢うつつだった頭が目の前の現実に急速に追いつき、ジェニーの全身が激しく震え始めた。

でも実際に、カミーユが自分の手に戻ると信じられたのは、ジェニーがカミーユの肌に触れたその瞬間だ。

やっと――やっと彼女を取り戻した。

父親の外見上の特徴をよく受け継いだ風貌に感心すらしながら、ジェニーはカミーユの頬に自分の頬を押しつけた。触れるほどにやわらかく、ジェニーが切望し続けた感触だ。

こんなにも愛しいのに、娘の顔をほとんど見ず、今までよく持ちこたえたものだ。

カミーユはジェニーの耳をつぶそうという勢いで泣き声を上げ、数ヶ月も母親から放置された怒りからか、小さな拳を作って、何度もジェニーの肩や胸にたたきつける。金色と呼ぶには白すぎるカミーユの髪が鼻をくすぐると、ジェニーは堪えきれなくなって、彼女の顔に何度もキスをした。

「ごめんね」

ジェニーが顔を離すと、カミーユは頬を膨らませながら、謝罪されて当然とでもいうように、ジェニーに満足そうに頷いてみせる。

なんて偉そうな態度だろう。

その仕草も、どこまでも、父親に似ている。髪も瞳の色も王と同じ。カミーユが王以外の男の血をひくなど、ありえない。カミーユが大きな目をこらして物を見る目つきは、王にそっくりだ。

その前夜、王がジェニーを訪ねた。カミーユがやって来る次の日の朝を、彼は一緒に迎えるつもりなのだとジェニーは思ったのだが、それは間違いだとすぐに気がついた。

王はいつもより神経が高ぶっていたようだった。彼はジェニーに、「娘は明日ここに来る」と言ったきり、カミーユの話をそれ以上させはしなかった。用意されていた酒に口をつけもせず、彼は普段より激しくジェニーを求めた。

そして当日の朝、ジェニーが目覚めたときには王の姿は消えていた。彼がいたはずのジェニーの隣は既に冷たく、彼のいなくなった寝台を見ると、ジェニーの胸には漠然とした不安が広がった。カミーユの身が心配だった。

ジェニーはもちろん、カミーユを返すという王の翻意が嬉しかったが、彼がまた何かのきっかけでそれを反故にするのではないかと、ずっとひそかに思っていた。ジェニーは、王がジェニーにカミーユを返そうとした意思は信じたが、彼の繊細さゆえの不安定さの方をもっと信じていた。些細なきっかけで王の怒りが暴発してしまったら、彼はジェニーとの約束を守るどころか、カミーユを手にかけてしまうかもしれない。

罪のないカミーユが自分の知らぬ間に殺されてしまうことを、何にもまして、ジェニーは恐れていた。娘がジェニーを王城に留める道具だと理解しながらも、王はいつか娘の命を奪うかもしれない。それは、ジェニーの心の中でずっとくすぶり続けていた不安だ。

王とジェニーの関係が変化してからも、程度の差こそあれ、ジェニーにその不安が残ることに変わりはなかった。王はジェニーを受け入れはしたが、ジェニーの娘までは受け入れていない。それはつ

まり、彼のジェニーに対する誤解が拭いきれていないからだ。ジェニーの数度にわたる弁明は王の心にまで届かず、彼は口に出してこそ言わないが、いまだに、カミーユの父親はケインだと信じている。

王がケインを嫌悪する様は尋常ではない。ジェニーとケインの仲を邪推しているという理由だけではなく、王とケインの兄弟の間には、もっと複雑で根が深い問題が長年横たわっているようだ。

王はカミーユにケインの姿を重ね合わせている。以前、カミーユに向かって剣を一度振り上げたように、王はケイン憎さから、カミーユを代わりに殺してしまう可能性も十分にありえた。ジェニーはそれが怖かった。

だが、王はカミーユをジェニーの手に戻した。

ジェニーの願いを拒み続けた王が、ここにきてなぜ急に意を翻したのか、今のところ、ジェニーにもよく分からない。彼に何度か問いかけてはみたが、「親子は共に暮らした方がよい」という、彼にはおよそ似つかわしくない答えが返されただけだ。

王の誤解はおそらく解けてはいない。王城で変事があったとか、カミーユの脅威となる状況になったとか、彼の心変わりの原因になり得ることもないようだ。

では、ほかに何があるのか？　彼はその心に何を抱え、どうしてカミーユを返す気になったのだろう？

ジェニーは答えが知りたかった。王に問いただし、彼の建前上の発言の裏に隠された、本心を聞きだしたかった。

けれども、ふと、ジェニーは昨夜の王の神経質そうな様子を思いおこす。

彼は苛立ち、ジェニーの視線から逃れ、目を合わせようとはしなかった。ジェニーが心配して尋ねても、彼は表情すら変えず、心配ない、と答えただけだ。今思えば、彼は何かに葛藤していたようでもあった。

それでも――王はジェニーに宣言したとおり、カミーユを王城か

ら解放した。

（……今はまだ、問いただされない方がいい）

曖昧な状況を嫌うジェニーには、結果が表れるまで気長に待つのは簡単なことではない。でも、王に限っていえば、ジェニーの思ったままに彼を問い詰めることは、時として、彼を追い詰めることにも繋がる。やみくもに物事の白黒をつけるより、時がその色をはっきりと示してくれるまで、待つ方がいい場合もある。

今は、王がそれを決断した理由に悩むより、言葉どおりに行動を起こした事実を尊重すればいい。

娘をやっと取り戻し、王が彼の言葉どおりに約束を果たしてくれた、二重の嬉しさと安堵感で、ジェニーの胸はあふれんばかりに満たされている。

所用で王城に来たユーゴが小城に寄り、カミーユの顔を見て、ため息をついた。

「驚いた、本当に王にそっくりじゃないか」

子どもが好きではないと言うわりに、二児の父親でもあるユーゴがカミーユをあやす様子は手慣れたものだ。彼女に返す笑顔も愛想笑いとは思えない。カミーユも彼にはすっかり懐いたようだ。

「この子はおっそろしく美人だね。そりゃあ、女官長も可愛がるわけだ。王もこの子が可愛くてたまらないんだろうな」

ユーゴは満足そうに笑い、カミーユに求められるままに、彼女を高くかかげる。カミーユは高い声で笑いながら、ユーゴに、もっと高く、とせがむ。ジェニーは返答に窮し、黙って肩をすくめた。

「――ところで、次の子の予定はないの？」

使用人も誰もがふれようとしない話題を、ユーゴはあっさりと口にする。ジェニーが驚くと、なんでそんなに驚くんだ、と彼は無邪気に笑った。

「そんなのないわ」

「そう？　王は頻繁に来ているらしいし、それも自然な流れじゃないの？　私は、次は男の子がいいな」
「彼は子どもを欲しいなんて思ってないと思う」
ユーゴが大笑いした。
「やだな、欲しいに決まってるさ！　きみは王を何だと思ってるんだ？　王には子どもがいなきゃ困るんだよ、それも男の子がね」
乳母や女たちの焦りを引き起こしたことを充分に承知し、ユーゴは不敵に笑う。
「世継ぎのことなら」ジェニーはそう口にし、頭から追い払っていた王妃の存在を思い出した。姿を見ないだけに、王妃の存在を忘れるのは簡単だ。だが、一度思い出すと、苦痛はなかなか抜けない。
「それは私がどうにかすることじゃないわ」
「ああ、本来ならね」
「“本来なら”？」
ユーゴは意味深にジェニーに頷いただけで、明確な返答はしない。心なしか、室内の女たちの緊張が高まったようだ。また、ユーゴは何かよからぬ考えを抱いている。
「私に、一族とか政治の話をしようとしても無駄よ」
「政治じゃなくて、愛の話だろ。きみ、王との伽が嫌いなの？」
「やめて！」
「……そうなんだ、もったいない。まだ良さが分からないのか」
小城に寄っては使用人の女と情事を持つ、ユーゴの不埒な恋愛哲学など理解できなくてもいい。
ジェニーの怒りを知っても、彼はのんきに笑っている。

＊

ヴィレールが戦をしなくなって約三年、この頃は周辺国でも目立った諍いは起こらず、国内外ともに比較的安定している。カローニャとの同盟締結後は、ヴィレールにも良質な海塩が豊富に流通する

ようになり、商業も盛んになって、国はますます繁栄していく一方だ。

塩の力は偉大だ。生活必需品でありながら採れる地域が限定されるため、どこの土地でも高い値がつく。十年ほど前に岩塩が発見されたという山間の小国マキシムは、塩の取引だけで莫大な富を得ているという。海塩や岩塩に恵まれない国々は、カローニャやマキシムのような産出国からそれを購入するしかない。

（あとは世継ぎさえできれば――）

サンジェルマンは閣議中の王を横目で見て思う。

周囲の期待と圧力に無頓着なわけではないが、王は国の主としての義務である世継ぎを持つことに、そこまでこだわっていないように見える。それとも彼は、“今の”妃との間に世継ぎをもうけようと考えていないだけなのか。

結婚後一年が経とうというのに、王妃懐妊の知らせがない今、城内では、現王妃は子どもを持てないという噂がひそかに渦巻き始めている。

ジェニーの娘を小城に移すという突然の王の決定は、サンジェルマンが警戒したほど、城の住人たちに大きな波紋を投ずることにはならなかった。特に、女官長からの猛反発を想定していた彼は、彼女が案外と素直に王の命令をのんだことに、拍子抜けした。

たしかに、彼女はそれなりに気落ちし、ジェニーの娘が王城にいない毎日に慣れることに苦労していた。だが、それも一ヶ月も経てば、彼女はすっかり元の調子に戻っていた。

そしてこの一ヶ月間、王城はかつてないほどに安穏としている。最近の王には、今までにない充足感がみなぎり、言動の一つ一つに力強さとぶれない安定感がある。

王のその変化の裏にジェニーの存在があるのは、今や誰も否定はしない。

今のところ、ジェニーの存在は王に好意的に働いているようだ。

城の住人や女官長たちがカロリーヌをジェニーのもとに戻し、大きな文句も言わないのには、ジェニーの王に対する影響力を目の当たりにしていることも一因だろう。

サンジェルマンは、王が特定の人物から良くも悪くも強い影響を受ける、ということを不安に思わないわけではない。王がどこまで自覚しているか、ライアンがいつか漏らしたように、王はジェニーに夢中と言ってもいい。その状況を知り、ジェニーを利用したいと思う人間が、今後いつ出てきてもおかしくはないだろう。ジェニーの叔父であるユーゴのように、けれども、必ずしもジェニーに友好的ではない、さまざまな種類の人間が。

閣議室では、今秋から開催の復活が決定した、「闘技大会」と呼ばれる定例行事の詳細をつめているところだ。先王の時代、秋の「闘技大会」は、夏の「剣技大会」に並び、国中を巻き込んで盛り上がっていたものだ。その大会がおよそ八年ぶりに再開されるとあって、閣議室の面々はいささか興奮気味だ。

側近の一人が声高に王に意見する姿を横目に、サンジェルマンは閣議室をそっと出て、本館にある衛兵控え室に向かった。アンヴァリッドからの使者が帰城したのだ。前回、これ以上自分に関わるなと、アリエルから最終通告とも取れる返答があったが、サンジェルマンは彼女に再び使者を送っていた。

本館の中央階段を降り立ったところで、サンジェルマンは、聞きなれない、子どものような声に呼び止められた。

「サンジェルマン様」

サンジェルマンが怪訝に思って振り向くと、そこで会うには意外な人物が通路の中央に立っていた。

「――王妃様？」

王妃は来客をもてなす等、よほどの用事がないと本館には現れない。

今日の彼女は、艶やかな黒髪を肩に垂らし、少女が着るような装飾の少ない、淡い色合いのドレスを身につけているせいで、普段よりさらに子どものように見えた。

サンジェルマンが近づこうとすると、王妃は気後れしたように顔を強張らせ、だが足を踏ん張って、その場に留まろうとしているようだった。どうやら、彼女にとって大切な用事らしい。

「どうされたのです？　王に何か緊急なご用でも？」

王妃の小さな顔から、頬の肉がさらにこそげ落ちたようだ。頬骨が以前より目立ち、アーモンド形の大きな瞳が際立って大きく見える。もともと肉付きのよくないやせ型の彼女は、間近で見ると、若い娘というよりも思春期初期の少年だ。

「いいえ、サンジェルマン様。あなたに少し話を……と思って」

王妃が答えると、彼女の脇にいた侍女たちが後ろに少し下がった。

「“様”は不要です、王妃様」彼女の気弱さを鑑み、サンジェルマンは彼女に緊張感を与えないようにと微笑む。「どんなことでしょう？　私でお役に立てればよいのですが」

サンジェルマンは王妃に気づかれないように周囲を見渡して、間近に誰もいないことを確認し、彼女を見た。王妃の青い瞳はサンジェルマンの視線に合って少しひるみ、その声はか細くなる。

「あなたに相談があるのです」

声に切実さが如実に表れていて、サンジェルマンは無言で頷いた。

「……テュデル宮のカロリーヌのことです」

王妃の口からジェニーの娘の名が出るのは、なんとなく不思議に感じた。が、王妃が娘を可愛がっていたというのは、後日談でサンジェルマンも最近耳にしたばかりだ。

だが、カロリーヌのことで、なぜ自分に相談があるのだろう。

王妃はサンジェルマンを見て、躊躇するように視線を下に外した。

「あの子が実の母親と共に暮らすのは喜ばしいことです。あの子も、ジェ……彼女も、その方がずっと幸せだと思います」

「王妃様はお優しいのですね」

王妃が否定するように首を振った。
「けれど、今も私は、あの子と一緒に居られたらと願ってやまないのです。あの子は王に本当にそっくりで！　……容姿も、仕草もですわ。あんなに愛らしい子はそうそうおりません。
いえ、でも誤解なさらないで。私は彼女とあの子を引き離すつもりは毛頭ないのです。あの子が母親に駆け寄ったときのあの顔……今でも私の目に焼きついて離れません。子は母親のもとで暮らすのが、いちばん幸せですものね」
まるで、彼女が彼女自身を説得するような口ぶりだ。
サンジェルマンは、王妃の言葉の裏に、抑圧された悲しさを読み取った。
「カロリーヌ様がおられなくなって、寂しい思いをされているのですね」
図星だったのだろう、王妃は目を上げ、彼に激しい動揺を見せた。
「王妃様のご心痛を和らげるのに、私に何ができましょう？」
王妃はまた口をつぐんだが、サンジェルマンがなおも促すと、やっと堅い口を開いた。
「あなたの……王のお側にいるあなたのご意見を、うかがいたいのですけれど」
「私でよろしければ、何なりと」
王妃は苦しそうに目を細め、後ろに控えた侍女にちらりと視線を走らせた。
「カロリーヌに……あの子に会いに、テュデル宮に行きたいと思うのです」
王妃よりジェニーが寵愛を受けているのは周知の事実だ。夫に愛されず、子を産まぬ妃と陰で囁かれている状況は、当人の王妃が身にしみて知っているに違いない。それにも関わらず、彼女は夫の愛妾の暮らす場に出向いてまで、夫の庶子であるカロリーヌに会いたいという。
「ああ、でも、女官長は王妃の私が小城に出向くことに良い顔はし

ません。私はただ、カロリーヌに会いたいだけなのです。……何も、あの子に会う以外には何も、他意はありません。彼女に迷惑をかけるつもりだって、ありません」

サンジェルマンは少年のような王妃の目を見つめた。わがまま放題に育ちがちな王女とは違う、健気で健全な精神の持ち主だ。夫にきちんと愛されるべき女性だ。でも、だからこそ、ゴーティス王を夫に持った王妃が哀れだ。

王が、ジェニーでなく彼女を愛すればどんなによかったことかと、サンジェルマンは思わずにいられない。

「王も、私が彼女のもとを訪ねることを……お喜びにはなりませんわね……」

王妃なのだから、もっと堂々と、ジェニーにその存在を誇示してもよいのだ。誰の断りも聞き入れず、自分の欲求を突き通して、小城でもどこでも訪ねればよいのに。

サンジェルマンはそう口に出しかけ、王妃の瞳が潤んでいるのに気づき、言うのをやめた。王や女官長が苛立つという王妃の気の弱さは、彼女の優しさでもある。

「私にはそれは分かりかねます。王にお訊きになってはいかがです？」

「……そんな……」

「王はそれほど“わからず屋”ではありませんよ」

サンジェルマンは笑ったが、王妃は笑顔を固まらせ、無言で俯いた。

第二部　5．生と死の境界線－1

ライアンによる剣の訓練は今も継続している。毎朝、ほぼ同じ時間帯だ。妥協を許さない彼は、剣士でもないジェニーにも手加減はせず、指導は厳しい。それは体力的にもジェニーを疲れさせるが、練習が終わったあとの爽快感はたまらない、とジェニーは最近になって感じ始めていた。

ライアンが一貫してジェニーに冷淡に接することに変わりはないのだが、一つだけ、興味深い小さな変化が起きている。それは、コレットに接近されると、彼はジェニーに用があるふりをしてコレットから離れ、彼女をやり過ごそうとすることだ。ジェニーは以前からなんとなく気づいていたが、女嫌いと評される彼は、おしゃべりな女が特に苦手らしい。剣の練習を始めた当初、彼はジェニーをその視界に入れることさえも嫌がっていたように見えたことから考えれば、小さな態度の変化ではあっても、大きな前進だ。

数日前のこと。

ライアンは、剣の稽古中に突然訪ねてきた女官長に接した際も、コレットに対するのとほぼ同じ反応をとった。女官長もコレットに負けず劣らず、いや、それ以上におしゃべりな人間だ。彼が女官長を苦手としても、不思議はない。

ジェニーと口をききたくないらしい女官長はライアンの存在を頼りにしたかったようだが、彼がそんな調子で、すっかり当てが外れたようだ。彼女は一気に不機嫌に転じた。

そしてその女官長だが、小城の誰一人として彼女に尋ねないうちから、「庶子であれ、王の娘の成長には自分も責任がある」とか何とか、ジェニーを含む、彼女を出迎えた者たちを前にして、突然の来訪理由をもったいぶった調子で伝えた。

だが、女官長がカミーユの顔を見たくてやって来たのは、誰の目

にも明らかだ。威厳を保とうと努めていたらしい女官長は、カミーユの邪気の無い笑顔に接すると、いとも簡単に、あっという間に相好を崩した。

女官長が敵視するジェニーの娘だったとしても、彼女は、カミーユを心の底より可愛がっている。

ジェニーは女官長がカミーユを大事そうに抱きしめる姿を目の前で見て、文句なく、嬉しかった。ジェニーを牽制するようなきつい言葉を放っていても、彼女はカミーユに対しては本物の祖母のように優しい。彼女に再会して興奮したカミーユ以上に、彼女は溶けそうなほどに甘い顔に一変した。

だけど一言、カミーユに会いたかった、と口にしてくれたらもっと嬉しかったのに。

女官長の訪問によって中断した剣の練習にジェニーが戻ったとき、ライアンはジェニーの呟きを聞き咎めるように眉を震わせた。

「おまえは忘れておるようだが」と、彼は木剣の先をいじりながら言った。「女官長はおまえが城から逃亡した事実を忘れてはおらぬ。私と同じように――彼女はおまえが誰と逃げたかまでは知らぬが――到底許せぬ行為だと今も憤慨している。あの女官長がそんなおまえと顔を会わせることも厭わず、ここに出向いたことに、私は感心すら覚えたが」

ライアンにわざわざ教えられなくても、ジェニーは自分が彼女に疎まれ、敵視されていることを認識している。ケインとの逃亡事件はいつまでも尾を引き、王側にいる人間から見れば、ジェニーの信用はなかなか回復されないだろう。それもよく分かっている。

事件が誰かの口にのぼるだけで、ジェニーの胸は痛みに疼く。だが、正直なところ、女官長やライアンたちから嫌われ続けたとしても、実際にはジェニーにはそれほど堪えなかった。王に心を閉ざされないだけ、ジェニーはまだ救われている。

「女官長が私をよく思ってないのは知ってます。カミーユに会いに来てくれたことは驚いたけど……嬉しかった」
「おまえは女官長にそれを伝えたのか？」
「ええ。信じてはもらえなかったけど」
「おまえが何を言おうと、そう簡単には信じまい」
ライアンは責めるような眼差しをジェニーに向け、木剣を宙で大きく振った。空を切る音がして、彼の髪が耳の上でふわりと揺れる。ジェニーが木剣を両手で持ち直すと、彼がそれに気づき、ジェニーの正面に立って目をすがめた。
「女官長の主人は王城におられる王妃様だ。その主人を残して個人の感情だけでここに出向くのは、彼女の沽券に関わること」
「私の娘に会うことが、なぜ問題になるんでしょう？　あの子は今まで王城で育てられていたのに」
「場所の問題だ」分かりきったことを訊くな、とでも言うように、ライアンが唇を曲げる。「女官長がカロリーヌ様を可愛がっていたのは周知の事実だ。さりとて、彼女が王の庶子を産んだ女のもとに出向くのは、王妃様もいい気分はされないだろう。会いたいから会うなど――皆が皆、おまえのように単純な考えの持ち主ではない」
めったに歯を見せないライアンがにやりと笑ったように見えたのは、ジェニーの見間違いだろうか？
王妃の存在を示され、ジェニーが暗い気持ちに覆われてしまう前に、ライアンが木剣をジェニーの面前に突きつけた。
「再開するぞ」
ライアンの目が細くなり、唇が横にすっとのびて、真剣な面持ちに変わる。ジェニーはその顔を見ると、どちらかといえば恐怖を感じるのだが、コレットは、その顔を見ただけで一瞬にして恋に落ちる、と表現する。
「どこからでも来い」
ジェニーは、王妃の面影を頭から消し去った。

ライアンはあいかわらず遠慮なく怒鳴り、ジェニーを褒めたことは今までに一度もない。だが、この日、彼は練習の終わりに、もう少し稽古をつけたら本物の剣を持たせるとジェニーに告げた。

本気だろうか？

ジェニーはこの発言にはかなり驚いた。ライアンはこの訓練をジェニーの暇つぶしとみなし、ジェニーに木剣以外を持たせる気がないのだとジェニーは日頃から思っていた。しかし、彼は冗談も世辞もめったに口にする人間ではない。だから、それはたぶん、ジェニーなりに腕が上達してきたと、彼が認めたということだろう。

真夏の強い照り返しはもうすっかり過去のもので、小城でもっとも日が入る南の一室は、午後ののんびりとした時間を楽しむにはちょうどよい暖かさだ。この時間帯はカミーユも昼寝している。ここ数日の王は多忙で、昼間にジェニーを訪ねはしない。図書室から持ち出した本を手に、ジェニーは部屋の中央に置かれた椅子の上でうとうとしていた。

どれぐらいそうしていただろうか。近くに人の気配を感じ、ジェニーはふと目を覚ました。

「コレット？」

目覚めたジェニーを見て、コレットがほっとしたように顔をゆるませる。が、すぐに、彼女は部屋の入口を振り返りながら、言った。

「大変でございます、ジェニー様！　今しがた、王妃様が急に来訪されまして」

「王妃様が？」

数日前の女官長に引き続き、今日は王妃まで。

ジェニーはすぐには、王妃の来訪を信じられなかった。王妃は一度だけ庭に現れたことがあるが、それはたぶん、王が離宮に住まわせている愛人がどんな女かを確認したかったためだ。だが、ジェニ

ーを見知った今、彼女がここに来る理由が見当たらない。
まさか、女官長のようにカミーユの顔を見たかったから、というのでもないだろう。王妃は王の愛人の産んだ娘など、目にしたくないに違いない。
じゃあ、なぜ急に？
以前の後宮に住んでいた女たちのように、激しい嫉妬心から、ジェニーを威圧するために来たというならまだ理解できるが、王妃はそういった行動はとりそうもない。彼女はおとなしく、ジェニーを娘に引き合わせようとした親切な人間だ。
ジェニーは本を脇のテーブルに無造作に置き、立ち上がった。とにかく、訪ねてきた王妃を無視するわけにはいかない。
「行きましょう」
だが、ジェニーの心は複雑だ。立場が今と違ったら、もしかしたら王妃とはいい友人になれるかもしれない。王妃の人の良さを感じるだけに、彼女に敵対心を持ちにくい。
でもその一方で、王の隣を正当に占めることのできる彼女の立場そのものには、激しい反発を覚えている。王も王妃も、二人が夫婦となるのは国の定めたことであって、自分たちの選択ではなかったはずだ。二人はそれを望んでもいなかったはずなのに。それでも、ゴーティス王の隣にはあの王妃が正式な妻として存在している。
優しそうなあの王妃は、同じように、こんな思いをしているのだろうか？

コレットと最初に駆けつけた広間に王妃はおらず、召使の示すままにカミーユの部屋に移動したジェニーは、そこで小さな寝台を覗き込んでいる王妃の姿を見つけた。その白い寝台の中では、カミーユが午後の昼寝を楽しんでいるはずだ。ジェニーは、王妃がカミーユの側にいることが腑に落ちず、ひどく面食らった。
でも……カミーユを見る王妃は、なんて優しそうな顔なんだろう。
「あ！」振り返った王妃がジェニーを見つけ、思わず出してしまっ

た声を抑えて、口に手をあてる。
　こんにちは、と、カミーユを起こさずにすむように、ジェニーは囁き声で挨拶し、王妃に頭を垂れた。すると、王妃は名残惜しそうに背後を振り返った後、ジェニーの方に慌てて歩み寄ってきた。
「突然お邪魔してごめんなさい」
　可愛らしい少女の声がジェニーの耳の中を転がる。
　前はもっと化粧をのせていた王妃の顔が、今日は素肌に近く、ジェニーより三、四歳若いという、年相応の少女に見える。日に焼けたような色の肌に、ユーゴと同じとはいかないまでも、王妃の深い青い瞳はよく映えた。そのすらりと細長く伸びた手足には、瞳の色とほぼ同色の青いドレスをまとっている。黒く濃いまつげと同じ色で、ドレスの手首部分や襟口には手の込んだ刺繍が施されていた。
「いいえ、王妃様。お会いできて嬉しいです」
　ジェニーの前に立つ王妃は、ぎこちない笑みを浮かべ、ジェニーを見た。彼女の来訪に戸惑い、ジェニーが返した笑顔も、恐らくはぎこちなかっただろう。
　前回会ったときより、王妃の目線の位置がわずかに高くなっていた。王妃はジェニーより背が高く、彼女に向かうと、ジェニーの目線は彼女の鼻のもっとも高い部分にぶつかる。聞いたところによると、王妃は今も成長期らしく、身長が伸び続けているそうだ。王と並んでも、彼女は少し背伸びをするだけで、王の唇にキスできるだろう。
「……お元気そうね」
　王妃の弱々しい笑みを見たとき、ジェニーは、やはり彼女を嫌えない、と感じた。ジェニーが知る貴族の女たちにあるような、高飛車な態度は王妃にはない。むしろ、彼女に同行してきた侍女二人の方が、ジェニーへの蔑みの感情を隠そうともせず、つんとしている。
　その侍女の一人が、ジェニーに手土産の存在を示した。ノワ・パイだ。ジェニーの好物だとどこかで情報を仕入れ、王妃が用意した

のだという。
　気の利く人だ。ジェニーが王妃に礼を述べると、彼女は、自分もそれを口にして好物になった、と微笑んだ。
「王妃様もお元気そうですね」
　王妃はそれには答えず、後方のカミーユのいる寝台の方に振り返った。
「一緒に住めるようになって、あの子も喜んだでしょう？　なんといっても、あなたはあの子の母親なんですもの」
「王妃様、娘に……会いに来てくれたのですか？」
　ジェニーが王妃の発言に戸惑いながら問うと、彼女は一瞬言葉をつまらせ、ええ、と首を縦に振った。
「あの、お邪魔かとは思ったのだけれど」
「そんな、まさか！　娘を可愛がってくださるなんて……とてもありがたいことだもの」
「まあ」王妃の笑みが深まった。「この子を可愛がらない人がどこにおりましょう？　こんなにも愛らしいのですもの」
　王妃はカミーユに目を移し、微笑んだ。王妃がカミーユを眺める目つきは、母親のような愛情に満ちている。彼女は、カミーユが大好きなのだ。
　娘が愛されていると知るのは、本当に嬉しい。
「ありがとうございます」
　ジェニーは幸福感に包まれかけたが、次に続いた王妃の科白を聞き、思いがけず愕然とした。
「あの子は、姿形だけでなく、仕草まで……本当に王にそっくり」
　そして、王妃がうっとりとしたようにため息をつき、カミーユに愛情のこもった眼差しを向ける――彼女は何を……誰を見ているの？
　ジェニーはさらに衝撃を受けた。ついさっきまで母親の情が込められていた王妃の瞳には、誰かを愛しく思う女心が映し出されている。見つめていたい、でも、見つめるのが辛くもある、そんな切なげな視線だ。

予期せぬ場所で転んで、胸を思い切り地面に打ちつけたときのように、ジェニーの息が詰まる。

政略結婚に恋愛の情など絡まない、とジェニーは思っていた。ジェニーには理解できない、結婚の成り立ち。会ったこともない他人同士が結婚する、家同士または国家間の取り決め。

王妃が恋焦がれる誰かとはもちろん、彼女の夫であり、ジェニーの愛するゴーティス王だ。

――王妃が王を愛しているなんて。

ジェニーがゴーティス王の言動を見る限り、少なくとも、彼は妻に対して特別な感情を持ってはいない。彼は国家間での結婚を王としての義務としか考えていない。ジェニーは、まったく同じことが王妃にも当てはまるのだと考えていた。

ジェニーは信じたくなかったが、王妃の顔を見れば信じないわけにはいかなかった。王妃はカミーユの寝顔を大切な宝物のように見つめながら、王に思いを馳せている。王によく似たカミーユが可愛くて仕方がないのは、王を愛するがゆえだ。国としたらそれは喜ばしいことだろうが、ジェニーはとても喜べない。

喉がうなり、心臓があまりにも大きな音をたて、ジェニーを揺らす。ジェニーは王妃からそっと顔をそむけた。

王妃が小城を去ってしばらくしても、ジェニーの胸のざわめきはしばらく消えなかった。食欲が今ひとつわかず、王妃がジェニーのためにと持ってきた好物のノワ・パイも、今の今まで手をつけずじまいだ。

多忙と聞かされていた王が晩餐前に来る、と知らされ、ジェニーはさらに動揺した。王妃の存在が心に重くのしかかり、ジェニーは王に会う心の準備ができない。ジェニーはそれまでも王妃の存在を思うと憂鬱だったが、今日の今ほど、苦にしたことはなかった。

ジェニーは自分の置かれた立場をあまり深く、客観的に考えたこ

とがなかった。日陰の身分だと呼ばれても、今ひとつ、現実味がわかなかった。王の顔を見られれば、幸せだった。

けれども、会いたいと思ったときに王に会えて、好きなだけ彼を見つめていられるのは、ジェニーではなく王妃だ。いつもいつも、王妃はあんな一途に王を見ているのだ。彼は王妃のそんな眼差しに接して、何とも思わないのだろうか？　王はきっと、妻に愛されていると気づいているだろう。

私は、王と結婚がしたいのだろうか？

ジェニーは返答に迷う。王との結婚は起こりえない夢物語だと一笑に付される前に、ジェニーは、彼と一緒にいられるだけいたい、と思うだけだ。ただ、だからこそ、王に会いたいと願ったときに行動できない立場にいることに、ジェニーは、口惜しさと途方もない悲しみを覚えるのだが。

夕日のあたる一室でジェニーが外を眺めていると、廊下を歩く複数の靴音がした。おそらく、ゴーティス王が到着したのだ。

王はジェニーのいる部屋の入口から颯爽と現れると、窓際にいたジェニーを見つけ、不敵にも見える笑みを浮かべた。彼は、機嫌がいいようだ。

ここ一週間で、日が弱くなると急に冷え込むようになったせいだろう、王は濃赤の長袖に腕を通していた。袖口からは白いフリルのような飾りがのぞいていて、王が前髪をかきあげると、彼の白金色の髪とともに優雅に揺れる。王と同じような髪を持ったライアンは白や淡い色がよく似合うが、王は色の濃い服装に身を包むととても華やかだ。つい先日会ったときとは比べられないほどに、成熟した雰囲気だ。彼に会う準備が整わなかったはずなのに、ジェニーの胸は、それまでの不安とは違う音を発している。

ジェニーの前に来ると、王はジェニーの耳に手を触れながら、顔をのぞきこむ。ジェニーと会えずに数日間を過ごしたあと、彼がジェニーに会って最初に必ず行うことだ。そして、納得するまでジェ

ニーを眺めたあと、ようやく、彼は頬をゆるめるのだ。いつもならば。

だが今日は、王はジェニーと視線を合わせながら、既に笑い出していた。

「おまえに土産がある」

王はいたずらを企む子どものように目を光らせ、ジェニーの頬を人差し指で撫でた。彼のこんな表情を目にしたのは、ジェニーは初めてだ。近頃の彼は毎回新しい表情をジェニーに見せ、そのどれも見逃したくなくて、ジェニーは彼から目が離せない。

「土産って？」

やっとのことでそう問い返しながら、ジェニーは王妃のくれたノワ・パイの盛られた皿になにげなく振り返った。コレットがテーブルの上に用意してあったのだ。

「あれはノワ・パイではないか」

ジェニーの肩越しにノワ・パイに目を留めた王が、ジェニーに説明を求めるような目を向けた。

「そうよ、もらったの」

「誰からだ」

王の声には咎めるような響きがあった。ジェニーが返答を迷うと、彼の疑いはさらに深まったらしい。

「誰だ？」

王に不要な心配をかける前に、ジェニーは思いきって言った。「王妃様よ」

王が問い返すまで、ひと呼吸あった。「妃が、あれをおまえにやったのか？」

ジェニーは頷き、王の不審そうな顔を見返した。

「今日、カミーユの顔を見にこちらまで来られたの。そのときに――」

「待て。あの女がここに来たのか？」

驚いていた王の顔が次第に不快そうに歪み、ジェニーは返答する

ことも忘れて彼を見つめる。

そのとき、

「王！　ジェニー様！」

と、厨房で働く召使女が、息せき切って二人の前に駆けこんできた。

「ジェニー様、まだあのお菓子は召し上がっておりませんね！　王もまだ……！」

そして彼女はテーブルの上のノワ・パイを見つけると、ジェニーの体を押しのけるようにしてテーブルに突進した。

「何ごとだ！　誰がおまえに入ってよいと言うた！」

「こっ、これでございます！」召使女は青くなりながらも、ノワ・パイを指し示した。「これを口にしたら、王もジェニー様も、コレットのように死んでしまいます……！」

“死んでしまう”？

ジェニーと王は顔を見合わせた。そして、召使女がつまみ上げた、一見どこも変わったところのない菓子ノワ・パイを、恐怖と緊張をもって見つめた。

第二部　5．生と死の境界線－2

ジェニーは未知の物体を見るように、テーブルの上にあるノワ・パイを見つめていた。楕円形の金皿に盛られるには似つかわしくない、素朴な菓子は、ジェニーが子どもの頃から日常的に親しんできた、一枚の葉をかたどった小さな焼き菓子だ。それが人間の命を奪う道具に使われることは、ジェニーのいる日常とは大きくかけはなれている気がする。

しかも、それは王妃がジェニーに土産としてくれた代物だ。ジェニーの好物として、彼女が取り寄せたもの。親切でひかえめな王妃の像は、殺意という激しい意志に相反し、両者がどうしても結びつかない。

しかし、召使女はさっき、「コレットのように死んでしまう」と犠牲者の存在を口にした。暗殺の危険に晒されている、と知らされてはいても、他人の口から聞かされる恐怖と死の恐怖を自ら経験するのでは、大違いだ。

ジェニーが音をたてて息をのむと、王がちらりとジェニーを見た。

「本当なの？　コレットは本当に、これを食べて……？」

「はい！」

「そんな、だってあれは――」ジェニーはすっかり混乱し、言葉を喉でつかえさせた。「これに毒が入ってたっていうの……？」

召使女は泣きそうになりながら、上半身を激しく揺するようにして何回も首を縦に大きく振った。

ふと、王がジェニーの肩をつかむ。ジェニーが思わず王を見上げると、彼は少しだけ目を細めてジェニーを見返した。ジェニーと比べ、暗殺という行為に身近な王はずいぶんと落ち着いていたが、ジェニーに返す視線には暗い怒りが含まれている。

顔の見えない暗殺者を思い、ジェニーは焼き菓子を見て、思わず

身を震わせた。すると、王がジェニーの額に唇を軽く押し付けた。だがそれは、王がジェニーを安心させようとした行為ではなく、ジェニーが動き出そうとしたのを遮っただけのようだ。彼は召使女を一瞥すると、隣室に続く入口に向かって声をはりあげた。

「アリエル、そこにおるのだろう！」

「……はい！」

返された女の声にジェニーは驚き、王に振り返った。「今、“アリエル”って言った？」

王はただ、ジェニーに入口を見るよう、促しただけだ。隣室から性急な足音が近づいてくる。ジェニーは驚きに打たれた胸を押さえ、期待を否定しながら、部屋の入口を見た。

まさか、あの彼女なはずはない……！

主人を城から逃がした罪を問われ、城から追放されたアリエルの行く末は期待できるものではなかった。女官長は、彼女の生死すら分からない、罪人に明るい未来があるはずがない、と、ジェニーに彼女の死をほのめかしていた。

ところが、ジェニーを安心させる、あの低音の落ち着いた声が室内に通る。

「御前に、王」

ジェニーは入口に現れた女をひと目見て、呆然とした。

「アリエル！」

入口を通り抜けて来たのは、かつてジェニーの侍女だった、アリエルだ。ジェニーが最後に彼女を見たときと比べると、全体的に痩せ細り、顔色が悪く、艶やかだった茶色の髪は輝きを失っていた。目の下には薄茶色のくまが目立ち、実際より老けた印象を与えたが、知的な瞳は今も変わらない。ただ、今までの生活は楽ではなかったのだろう、王の前で頭を下げた彼女の首の後ろは骨の形がはっきりと分かるほどに痩せていて、ジェニーは胸を締め付けられた。

「あなた、生きていたの……！」

アリエルは王に向けたその顔をジェニーに移し、それまでの真剣

な顔を瞬時にほころばせた。
「はい、お久しぶりでございます。ジェニー様の無事なお姿を拝見できて……感無量でございます」
ジェニーは感動で声が震えるのを抑えられなかった。
「ああ、アリエル！」
ジェニーがため息を漏らすと、王がジェニーの肩を放した。ジェニーが見上げると、彼は少し眉をひそめ、無言でジェニーを見返す。
「……彼女を探し出して連れてきたのは、あなたよね？」
王はジェニーに何の返事もせず、得意そうに微笑みもしなかった。が、これが王の仕業でなくて、何だというのだろう？

アリエルは、側に寄ったジェニーを温かな笑顔で迎えいれ、膝を落としてジェニーに礼を取った。
「女官長は、あなたがもうこの世にいないかもしれないって言ってたわ。ごめんなさい、あなたに迷惑が及ぶなんて……私は何も考えなくて。私のせいで、もう二度とあなたとは会えないんじゃないかと思ってた。でも、よかった。あなたが生きていてくれて、本当によかった……！」
「ジェニー様が謝罪するようなことは何もありませんわ」アリエルは毅然とした態度を見せ、そして、ジェニーを見つめた。「私はこうして無事に生きておりますわ、ジェニー様」
「ええ！　こうやってまた会えるなんて、本当に嬉しい！」
「私もでございます」
アリエルはジェニーに同意すると、目の周りに笑い皺を深く刻み、心から幸せそうに微笑んだ。
「それだけで幸せなことですのに、私は再び、ジェニー様のもとで過ごすことを許されたのです。そのうえ、常日頃から願ってきた、王とご一緒のジェニー様、それにお二人のお子様の姿まで見られるなど……私は本当に幸せ者でございますわ」
アリエルを見つめるのが恥ずかしくなり、ジェニーはふと王に目

を移した。彼はノワ・パイに視線を再び返していた。なにげない、地面に落ちている小石でも眺めるような目だ。その表情からは、ジェニーと顔を見合わせた一瞬に見せた怒りも、戸惑いも失われている。

だが、王の無表情こそ、彼が「何か」を思案している証拠だ。

本当なら王は、ジェニーの変わりはてた姿を目にするはずだった。ジェニーが食欲を失っていなければ、王が訪ねてくる前までに、間違いなく、ジェニーはコレットを殺した毒を含んだノワ・パイを口にしていた。ジェニーは王妃が犯人とは信じていなかったが、王妃か他の何者か、ジェニーを快く思わない誰かが、ジェニーが口にする菓子に毒を仕込んだのだ。

殺意が全身からみなぎっているような人間より、殺意のひとかけらものぞかせない者が、実は自分の命を狙っている方が、はるかに恐ろしい。誰かに武器を突きつけられれば、視覚的な恐ろしさは増すが、心理的には、死への恐怖の度合いは少ないように思う。もちろん、恐怖が消えることはありえないが、誰かから殺意を見せられることで、自分は死ぬかもしれないという、覚悟に似た予感は持てる。

でも、人生の途中で、自分以外の誰かの意思によって命を終わらせるなんて嫌だ。

カミーユと、王と永遠に離れるなんて、絶対に嫌だ。

アリエルが穏やかにジェニーの思考に割って入ってきた。

「私は今回、ジェニー様をお守りするためにお側に参ったのでございます」

ジェニーと目が合うと、アリエルは唇を結んで、ゆっくりと頷いた。

「じゃあ、これからはずっと側にいてくれるのね？」

「常に」

「私……まだ死にたくない」

「もちろん、そんなことはさせませんわ」
ジェニーが気丈に微笑むと、アリエルも微笑み返した。
ジェニーはカミーユの顔を頭に思い浮かべた。娘は無防備でか弱い子どもだ。自分はともかく、彼女が巻き込まれないことを、ジェニーは強く願う。
「嬉しいわ。あなたがいてくれると、私も心強い」
侍女の一人が護衛の役目を担っているのはジェニーも今は知っているが、誰がジェニーを狙っているか知れないこの状況下では、本当に信頼できる人間が必要だ。暗殺者は、すぐに自分の計画が失敗したことを知るだろう。そうすれば、間髪入れず、第二の魔の手をジェニーに伸ばしてくるに違いない。そうしたとき、ジェニーとともに立ち向かい、ともに戦ってくれる仲間が、友が、いてほしい。

アリエルの視線が揺らぎ、ジェニーは王が近づいたことに気づいた。彼は、手に数個のノワ・パイを載せている。
「ジェニー」
王はもうここを去る気だ。
ジェニーは急に寂しさを感じたが、彼が素早く寄せた唇を頬に受け、彼の手の中にある菓子を見つめた。
「それを持っていくの？」
「食べはせぬ。もっとも、誤って口にしたとしても、俺は毒に慣れておるゆえ、少々の量では倒れぬが」
王はまたジェニーに顔を近づけ、ジェニーの唇に彼の唇をゆっくりとのせた。不安が胸に渦巻いているとき、彼の温もりはジェニーをほっとさせる。
「これは“土産”として城へ持っていく。おまえは俺からの土産を存分に堪能しろ」
王が意味深に視線を送った先は、アリエルだ。ジェニーはびっくりして、彼を見返した。
「あなたの土産って、アリエルのことだったの？」

「正確にはサンジェルマンの土産だ」
王は囁き、ジェニーの頭を抱きかかえるようにして、彼の胸に押し付ける。
「俺はむこう一週間、ここには来れぬだろう。だがジェニー、俺のおらぬ間に勝手に倒れでもしてみろ。そのときは、おまえの娘もこの女も、小城におる全員の命も消えると思え。おまえは皆のために毒などに屈するわけにはいかぬのだ。わかっておろうな？」
素直でない王は面倒そうな口調を装い、「皆のため」と理由づけ、ジェニーの無事を切に願っている。
ジェニーは、彼に正直に「心配している」と明かしてもらいたいと望みつつも、彼の言葉から、小城で働く者たち全員の命を懸けさせるくらい、自分の身の危険は脅かされているのだと察した。
怖かった。ジェニーの目に入る王の濃赤色の服が、胸に広がっていく血に見える。
ジェニーは顔を上げ、恐怖を隠すため、わざと不服そうに王に言った。
「そんなのって横暴だわ」
ふん、と王は鼻を鳴らし、不満そうにジェニーを見下ろした。そして、「横暴で卑劣なのはおまえを狙う者の方だ」と口走り、ジェニーの前で鼻に皺を寄せながら、目線を上げる。
ジェニーが王の胸を両手で押してその体から離れると、彼はジェニーに視線を落とした。怒りに支配された鋭い目つきのままで。ジェニーと目が合うと、彼は気まずそうに視線をそらした。
ジェニーは暗殺の可能性に恐怖を感じてはいたが、王が自分のために感情的になる様を目にできたことは予想外だった。嬉しかった。
「私はそんなに簡単には殺されないわ」
ジェニーが宣言するように告げると、彼はジェニーを見もせず、わかっておる、と呟いた。彼は、その言葉どおりに事が運ぶとは考えていないのだろう。そして、「されど、何ごとにも油断するな」とジェニーに言った。

それから王はジェニーの手を放し、アリエルに振り返った。
「おまえは周囲に細心の注意を払え」
はい、とアリエルは胸に手をあて、王に答える。
王が室内をぐるりと見渡した。そして彼は、手の中のノワ・パイを忌々しそうに見つめ、それを壊さない程度の力で握り締める。
「絶対に、許しはせぬ」
怒気を秘めた声で王がつぶやくと、アリエルが彼に声を掛けた。
「王、差し出がましいようですが」
ジェニーが振り向くと、彼女は優しい微笑みでジェニーに応え、そして、王の方に向き直った。
「何だ」
「王のなさることに間違いがないと分かっておりますが、くれぐれも先方を刺激なさらないよう、ご配慮くださいませ」
王は眉をひそめてアリエルの進言を聞いていたが、彼女が頭を垂れると、低い声で笑った。
「言われずとも、よう心得ておる」

ゴーティスは晩餐の席に遅れて到着した。最近はほぼ毎日、ゴーティスは妻カサンドラと食事をとることにしているが、この場に来る前にジェニーのもとに寄ったことを、彼女には伝えていない。
既に到着していたカサンドラは、細長いテーブルの対面に着席していた。結いあげた黒髪が彼女の細い首には重そうだ。
ゴーティスが席に着くと、給仕たちが料理を黙々と並べ始め、儀礼的で退屈な晩餐が始まりを告げる。
カサンドラはさっきまでゴーティスが着ていたような濃赤のドレスを着て、胸にたっぷりと付いたひだ飾りを指でもてあそぶように触っている。ゴーティスに挨拶してから、彼をまともに見ることもなく、動きまわる給仕や並べられる皿を気にしている。落ち着きの

ない様子だが、彼女はたいてい、夫の前ではそんな調子だ。ゴーティスの目には、口数が少なく、明るさの足りない彼女にどこも変わったところは見つけられなかった。

誰が考案したか知らないが、ある程度声を大きくしなければ対面の相手と会話できない、晩餐用テーブルの長さを決めた者には、感謝したい。そこまで親密ではなく、だが共に食事をする必要がある相手に対し、その長さは絶妙な距離だ。

だがそれは、ジェニーを感じる距離としては遠すぎ、もどかしい。ゴーティスはこれまでに数えるほどにしか、ジェニーと晩餐を一緒にとったことがない。しかし、二人の数少ない食事の場は、ゴーティスとカサンドラが今着席しているように、長いテーブルの端と端で向かい合いはしていない。

ゴーティスはジェニーの席を隣につくらせた。貴族社会の礼儀に疎い彼女はそれを下品だとは呼ばず、自然に受け入れた。

ジェニーもそれほど口数が多い方ではないが、二人の会話が多少途切れても、ゴーティスはちっとも苦にならなかった。彼女と間近で視線を合わせ、笑みを交えながら料理を口にするのは、空腹を満たすための日常的な時間を特別な瞬間の連続に変える。

何を食べるかより、誰とどう食べるか。

過去に経験したジェニーとの数回の食事は、ゴーティスの晩餐に対する見方を変えた。

――それに対し、この時間のなんと無駄なことか。

「後宮で何か変わったことは？」

ゴーティスは決まりきった科白をカサンドラに義務的に投げかける。彼女は、いいえ特には、と前置きした後、その日の来客や彼女が何をして過ごしたかを、かいつまんで説明するのが常だ。

カサンドラは、小城にジェニーを訪ねた件を口にしなかった。

胸にわいた疑いを慎重に抑えこみ、ゴーティスは給仕の一人がテ

ーブルの中央に浅い銀皿を置くのを見守った。銀皿には白い清潔な薄布が敷かれ、茶色の焼き菓子が盛られている。色鮮やかな数々の果物が積まれた皿の隣で、焼き菓子の見た目が地味なだけに逆に目立つ。

ゴーティスがカサンドラの視線を追うと、彼女はあらたな焼き菓子の登場に気づいて、瞠目した。

「アンヴァリッドから戻った者が、俺の好物と知って、途中で入手してきた郷土菓子だ」

ゴーティスの説明に、カサンドラは驚いたように息をのんだ。

「まあ、王もそうでしたか……」

「俺“も”？」

ゴーティスがすかさず問うと、カサンドラの目が不意に不安定に揺れた。ますます疑わしい。

「おまえがその菓子を知っておったとは、初耳だ。それはヴィレールでも一部の地域でしか入手できぬ、地方菓子だ」

ゴーティスは給仕の男に合図し、銀皿を持ってこさせた。カサンドラは顔色を失くしてゴーティスを見ていたが、ゴーティスが皿の菓子の一山から一つ取っても、何も言わない。その菓子の半分ほどをゴーティスは口に含んだ。

「欲しくば持っていけ。女どもは菓子を好むだろう」

ゴーティスは菓子を歯で割り、口の中で噛み砕いた。カサンドラはそれを見ながら、テーブルの上で手を握ったり開いたりしている。

突然、彼女が口を開いた。

「王。実は、先日私は、あの……私は、このノワ・パイを取り寄せたのです。小城にお住まいの、あのお方に差し上げたいと思って……。その、それがあの方の好物だと、うかがったものですから」

「ほう？」足元から上がってくる冷えとは異なる、不気味な冷気でゴーティスの胸がひんやりとした。「おまえがジェニーに？　おまえたちの間に親交があったとは意外だな」

「いえ、そうではないのです、そうではなくて……手土産がないと、

小城に訪ねにくかったものですから……。でも、王がこれを用意なさっていたのでしたら、私は何か別の物を差し上げれば――」

「つまり、おまえはジェニーを訪ねたということか」

カサンドラが勢いよく顔を上げ、テーブルの向こうからゴーティスを見つめた。ゴーティスが見返すと、彼女は即座に視線をさけ、また俯いた。

「ああ、お許しを！　私は王に何の断りもせず、王がお怒りになると分かっていながら、小城に参ったのでございます！　どうしても……どうしても、カロリーヌに会いたかったのです……！」

「カロリーヌだと？」ゴーティスはジェニーの娘が話に出てきたことに驚いた。「おまえがなにゆえ、あの娘に会う必要がある？」

カサンドラは顔を上げ、一度言いよどんだ。

「……後宮で少し前まで、私は、あの子の母親代わりだったのです。王の血を受け継いだあの子は本当に愛らしくて……かわいくて。ああ、今や、カロリーヌは私の娘同然なのでございます。離れているのが寂しくて、毎日がとても耐えられないのです。あの子の母親は別にいるのだと、分かってはおります！　でも……でも……！」

カサンドラが取り乱すのをどう捉えればよいのだろう。

彼女を注視しながら、ゴーティスは言った。

「他人の娘より、己の“子”について考えるのが先ではないか？」

ゴーティスの問いを受け、カサンドラが衝撃に目を見開いた。世継ぎの件で周囲から散々せっつかれている彼女も、夫からは今まで一言も責められたことはない。

カサンドラが気落ちし、うな垂れた。「……はい……」

「されど、母親がおらねば、おまえは再び娘を育てられよう」

不思議そうに顔を上げたカサンドラは、ゴーティスの言葉を反芻するように繰り返したあと、首を振った。

「母親からまた引き離されれば、あの子は深く悲しみますわ。そんなこと……とてもできません。あの子は母親と一緒だと、とても……とても幸せそうですもの……」

そうして、カサンドラは重いため息をつく。
ゴーティスは妻の暗い顔を眺めながら、二個目のノワ・パイを口に入れた。

晩餐が終わり、夫婦が別々の方向に歩いていくと、ゴーティスの横にサンジェルマンが追いついた。ゴーティスは足を止めず、彼に小声で告げる。
「あの菓子を妃の侍女どもにくれてやれ」
「はい」
「女官長のところにもだ。残りはおまえが取れ」
「は、私がですか？」
サンジェルマンが意外そうに問い返すので、ゴーティスは彼に振り返った。
「あの女からの土産だとて、ジェニーはあの菓子をしばらくは見たくもなかろう。おまえが貰うのなら、あの女も文句は言えまい」
サンジェルマンがわずかに動揺する姿を楽しみながら、ゴーティスはアリエルと会ったときのジェニーの喜び様を思い出した。彼女が心底喜ぶ様子はゴーティスを和ませる。少しずつだが、ジェニーが何をもって喜ぶのか、ゴーティスは理解してきた気がしている。
本館の入口が見えてきた頃、ゴーティスはサンジェルマンに命じた。
「女たちの反応に注意しろ」
「はい。王妃様は、よろしいのですね？」
「あれは……今のところは、よい」
カサンドラには、ケインに似た純粋さがある。純粋で、どす黒い感情がその裏に渦巻いていても気づきもしない、鈍感さだ。
ケイン。
あの男はまだ息をしているのだろうか？　……だとすれば、今どこで、何をしているのだろう？

第二部　5．生と死の境界線－3（前書き）

最初にアップした文を訂正した際、うっかり、話の最後の部分を消してしまってました。すみませんー！！
ちょっとだけ手をくわえましたが、再度アップし直しましたんで、お時間あるときにでも目を通してやってください～。

第二部　5．生と死の境界線－3

青みの褪せた秋の低い空を見上げ、サンジェルマンはふと立ち止まり、西に流れていく雲を目で追った。あと数週間もすれば、ヴィレールに初雪が降るだろう。

彼はついさっき、女官長をジェニー毒殺未遂犯候補の名簿から消し去ったばかりだ。彼女が疑わしいとはあまり思ってはいなかったが、それが今日ようやく判明して、サンジェルマンはほっとしている。

女官長はジェニーをひどく嫌っているが、現時点では、彼女の死までを願っていない。ジェニーが死んでしまうことで、王や彼の周辺が被る不利益の方をもっと重要視しているようだ。

既にジェニーの暗殺未遂を知っていた女官長は、王妃を疑っていた。彼女は王妃を嫌ってこそいないが、個人的な感情を含めた複数の理由から、疎ましく思っている。サンジェルマンは女官長に会って、その傾向はますます強まっている、と感じずにはいられなかった。

毒殺未遂は今回で二回目だ。同一犯かどうかは、まだ分からない。その二回の機会とも、ジェニー本人に被害は及ばなかったが、一回目では彼女の毒見役の女が半身不随に、二回目は、小城でもっとも騒々しい女の口を永遠に封じてしまった。

確固とした証拠が出て、犯人が決定的になったわけではないが、暗殺未遂事件を知る者たちは、王妃が事件に関わったと疑っている。おとなしく、物静かな人間という王妃の評判は城の住民の間には根付いているが、それが王妃の犯人説を覆す理由にはならなかった。王妃がくれた土産の菓子に毒が含まれていたのだから、彼女が疑われるのは、当然といえば当然だ。なにより、ジェニーが王妃の夫で

あるゴーティス王の寵愛を独占し、彼の妻である王妃がいまだ為しえない、彼の子をもうけていることが、王妃がジェニーを殺める強い動機となる。

秋空から目を離すと、庭園に続く小道の途中に、ライアンと一人の近衛兵が歩いているのが見えた。ライアンもサンジェルマンに気づき、二人は数秒間、お互いを探りあうように視線を交し合った。

サンジェルマンは、それと約束をしてはいなかったが、ライアンを探しているところだった。そしてどうやら、それは彼も同じだったらしい。

ライアンから男が離れると、サンジェルマンは息をゆっくりと吐き、彼のもとへと歩き出した。彼に合流すると、二人はどちらからともなく、小道を外れた。

数年ぶりの闘技大会を十日後に控え、ヴィスコンデールの城下町は期待と興奮に沸いている。冷気と白い雪に閉じ込められる長い冬を迎える前の、ちょっとしたお祭り騒ぎだ。各地からの参加者や見物者が続々と集ってくるのも、もうすぐだろう。

警備に頭を悩ますライアンは、闘技場に何回か足を運び、近衛の編成や配置を考えているのだという。その行き帰りに、彼は市街地にある衛兵隊の詰所に寄り、不審者や不審行為の情報を仕入れ、目にする街の様子にも目を光らせているそうだ。

息をつき、鼻の付け根を指でほぐしているライアンの顔には、目尻に細かな皺が増えていた。気苦労の多さが原因だろう。眉間と鼻の頭にはうっすらとそばかすがあるが、あいかわらず、きれいな白い肌だ。三十を越して数年が経った彼の年齢を考えると、羨ましがる女たちは多いだろう。

ライアンが急に目を上げ、サンジェルマンを見て、肩をすくめた。

「王の庶子がまた現れたそうだ」

「……またですか」

ジェニーの娘の存在が明るみに出て以来、これで二件目だ。
王が子を為せないと噂されていた頃、そして、王が恐怖の存在だった当時には、ちらりとも出てこなかった問題だった。良くも悪くも、王が人々に身近になったのだ。
「今回の女は、以前、わずかの期間だが、王城務めをしていたらしい」
「では、そのときに王の目に留まり、王のお子をもうけたと主張しているのですね」
サンジェルマンは驚きもせず、ライアンの次の言葉を待った。
「そうだ。名はファビアンヌといったか……メゾネ殿に身請けされて王城を出たが、その後に妊娠に気づいたらしい。時期から考えて王のお子に間違いない、と」
王城に出入りし、過去に王の相手を務めた女たちはそれこそ数え切れないが、当時、庶子の存在を恐れていた王は必ず避妊処置を行っていた。しかも、既にこの世にいない女たちも多いのだ。それを知らない女たちが、図々しくも、王の子の存在を盾に自分たちの権利を要求するのだ。
サンジェルマンは微笑んで、ライアンの一抹の不安を吹き飛ばした。
「ありえませんね。王の子でないという根拠があるのです。王の子を語ろうとは、よくも……。その女には厳罰を処しましょう」
ライアンが力強く了解した。
「ライアン殿、今後そんな女が現れたら、王の臍の左右、どちらにほくろがあるのか、担当の者から女に訊いてもらうように伝えてもらえますか？」
「伝えておこう。で、答えはどちらだ？」
サンジェルマンは笑った。
「どちらでもありません。王の臍の周りに、ほくろなどないのですよ」

ライアンが近衛隊の練習場に向かうと言うので、サンジェルマンも足を向ける。サンジェルマンが話を切り出そうかとした矢先、ところで、とライアンがまた口を開いた。

「近頃の街では、マキシムの塩が安く手に入るそうだが、聞いていたか？」

マキシムとは北方の山脈にある小国だ。同じ塩でも、海塩で有名なカローニャとは違う、岩塩の産地だ。

サンジェルマンは、ライアンの顔に一瞬だけ浮かんだ、気まずそうな表情が気になった。

「いいえ。でも、塩なら、カローニャ産の方が断然安いはずでは？」

「それが、専門の行商が出入りしていて、カローニャ産の塩と比べると、約三分の二の値で入手できるらしい。塩を大量に使う食材屋や飲食店は軒並み、マキシム産に切り替えているという噂だ。このままでは、少なくとも商売人どもが使う塩は、マキシム産になってしまうだろう」

カローニャの塩を直接買いつけているのは国だ。格安で仕入れた塩は指定業者に卸され、国中に供給される。独自の購入経路をもつ他の民間業者でも、国から出回る塩に匹敵するほどの安値では、塩を販売できない。国が販売する塩が市場をほぼ独占しているのだ。その立場が脅かされている――国の財政を揺るがしかねない、とライアンは言いたいのだ。

ライアンの危惧はもっともだったが、サンジェルマンは首をひねった。

「ご心配は分かりますが、それは私に言うよりも、まず大臣たちに――」

ライアンが人差し指を振って、サンジェルマンを遮った。

「彼らにはもう話した。貴公に聞いてもらいたいのは、その先の話だ」

ライアンがわずかに声を落とし、背後を気にするように視線をさっと動かした。つられてサンジェルマンも周囲を確認したが、彼ら

の近くには、衛兵たちも歩いてはいない。
ライアンが唇を軽く舐めるのを見ると、サンジェルマンにも緊張が伝染する。
「話とは？」
「その行商のことだが」と、ライアンは言った。「比較的新しい、三、四人からなる行商隊だそうだ。取り扱う物は塩以外には、北方の毛皮や皮、多くはない。行商者たちには珍しくないが、そのうちの一人にいくつもの言葉に堪能な男がいて――ユートリア語まで話せるとか」
ライアンの視線がちらりと自分に飛び、サンジェルマンは奇妙な胸騒ぎを覚えた。
「昨日、彼らがヴィスコンデールに入ったのを目撃されている。滞在場所は不明だが、護衛らしき者たちも一緒だ。私が話した男の話では、行商人の一人は片手が不自由で……ベアール殿によく似ているそうだ」
サンジェルマンの胸騒ぎが落ち着き、次に警告を放つまで、ほんの一瞬の間があった。考えをまとめるだけの、わずかな時間が必要だったのだ。
「では、その男は」ライアンに頷かせる間も与えず、サンジェルマンは断言した。「ジェニーの兄ローレンですね」
サンジェルマンはジェニーの兄を実際に見たことはないが、彼の容貌の特徴は聞いている。ジェニーが兄の手を振りきって王城に残る選択を取ったことも、当時は半信半疑ながら、ライアンから聞いて知っている。
そのライアンがしっかりと頷いた。
「彼は妹のことをまだあきらめてはいまい。大会時の混乱に乗じて、彼女を再び取り戻しに来たのかもしれない」
その意見にはまったく同感だ。
運悪く、ジェニーは大会観覧のため、王城を出て闘技場に向かう。

彼女のいるのは貴族席で、庶民とは画されているとはいえ、王城よりはかなり手が届きやすい場所にいることになる。

今のジェニーは、王と同様に、王とは離れたくないようだ。お互いに側にいたいのに、離れていることを選ぶ自分とアリエルとは逆だ。

不意に舌先ににじんだ苦味に顔をしかめ、サンジェルマンはアリエルへの想いを振り払った。無理やりに、闘技場にいるジェニーと、そこへ彼女の兄が乱入する情景を想像する。

（ユーゴ殿には片時もジェニーから離れずにいてもらわねば。もしくは、最初から最後まで、彼女とは離れた場所にいてもらうか……。誰かが、ジェニーの兄をユーゴと勘違いして彼女の席まで案内してしまわないように）

ユーゴはジェニーの兄に反感を持ち、彼女を手元に置きたがっている。サンジェルマンやライアンに協力的な態度をとるだろう。

その後、サンジェルマンは、ライアンが続けた言葉に耳を疑った。

「彼女の周囲には、観客に身をやつした近衛を数人配備する」

驚きだ。ジェニーの護衛に近衛を使うのはまっぴらだ、と怒鳴っていた彼にあるまじき、ジェニーに好意的な科白だ。だが、彼は冗談を言っているようにはとても見えない。

「本人にも短剣を持たせ――サンジェルマン、どうされた？」

「いえ。……近衛を配備するのですか？」

「貴族席に見知らぬ顔が入りこむことは少なかろうが、念のための処置だ」

ライアンは神妙な表情でサンジェルマンを見返した。彼は大真面目だ。

――そういった意味ではないのだが。

サンジェルマンは戸惑ったが、ライアンが自分の放った言葉の意味にまったく気づいていないようなので、それ以上の追求を避けることにした。

ライアンが近衛兵たちの練習場を指し示し、サンジェルマンに尋ねた。

「今日は誰に用事だ？」

ちょうど通りかかったベアール家出身の近衛兵をやり過ごし、サンジェルマンは笑顔で答えた。

「久しぶりに一戦、交えてみませんか？」

ライアンは首をかしげてサンジェルマンを見つめていたが、それから、長い息を吐き出した。

「わかった。練習場内の休憩場で話を聞く」

二人は練習場に入った。十人以上の男たちが二人組となって練習に励んでいる。二人に気づいた彼らは、最初こそ軽く目礼したが、ほとんどは自分たちの練習に集中していた。練習場に近衛兵以外には当然誰も入ってこず、多数の者に囲まれながらも、二人の会話は干渉されないのだ。

日除けの屋根に丸太の表面を削っただけの椅子を置いた、休憩場とは名ばかりの場所で、ライアンは長い椅子の端に腰掛けた。屋根の下で、秋の午後の光を遮断されるだけで、ずいぶんと肌寒く感じられた。頬にふれる空気は、昼間でも十分に冷えている。厚手の上着が恋しくなる日も、そろそろだ。

立っているとライアンを見下ろす格好になるので、体ひとつ分あけ、サンジェルマンも彼の隣に座る。彼が怪訝そうにサンジェルマンを見た。

「深刻そうだが、まさか、女の話か？」

サンジェルマンは彼の言葉にまた驚かされた。彼とは二十五年以上の付き合いがあるが、子ども時代から数えても、彼から家族以外の女の話題を挙げられたことは、一度もない。それが冗談だと分かるまで、三秒は要したと思う。そして、生真面目な彼が冗談を口にした事実に、サンジェルマンは驚きをあらたにした。

「いえ。そういった話なら、日が暮れてから話しますよ」

ライアンは、彼の切り返しに含み笑いで応えた。

サンジェルマンは緊張感を抑えるため、軽く咳払いをした。慎重にならざるを得ない話題だ。正面で剣を手に動きまわる男たちの姿を目にしながら、サンジェルマンはライアンに言った。

「五十二号の件です」

ライアンの膝が動揺したように大きく揺れた。サンジェルマンが彼に向くと、目の前で、彼が顔を引きつらせている。

「……五十二号？　ああ、ケイ――」サンジェルマンはライアンの横に滑り寄り、素早くそれを制した。「名前は口にされないで下さい」

ライアンははっとして、口を閉じる。

「彼は五十二号というのです」

言い聞かせるようにサンジェルマンが告げると、ああ、と気後れしたように、ライアンが間延びした声を出した。

彼には、必要に迫られて、王弟ケインが生存している経緯を簡単に教えてある。同時に、きつく口止めもしてある。だが、ケインとジェニーが死んだとみなされた後、もう一年以上も、サンジェルマンとライアンはケインの話題からは遠ざかっていた。

「五十二号がどうしたって？」

いく分、元気を回復したようにライアンが訊いた。

「王命で、貴公が彼の捜索を続行しているのは知っている。まさか……遺体でも見つかったか？」

ライアンは死体でなく、遺体と言った。罪人相手なら決して使わないだろうが、やはり、彼は気兼ねしているのだろう。サンジェルマンはさりげなく言葉を訂正した。

「いいえ、今のところ、死体は見つかっていません」

ライアンの顔がゆるむのを、サンジェルマンは気づかないふりをして見逃した。

「では、新しい情報でもあったか」ライアンは声をひそめる。

サンジェルマンは彼の目を見て頷き、再び、彼の部下たちが練習に熱中していることを確認した。

「新しいといっても、つい先日入ってきた情報に関しては、真偽のほどは定かではありませんが」と、前もって断り、サンジェルマンは話を続けた。「彼の行方について有力な情報を得たのは、私がカロリーヌ様を引き取りに、ラニス公所有の農園を訪れたときです。ええ、そうです、川で衰弱していたジェニーを発見し、その後世話をしていた農園主からです」

疑わしそうに、ライアンは彼の顔を見つめる。それも、無理はない。

あの日、モーリス宅でジェニーの娘を初めて見たときのサンジェルマンの感動は、数分後に農園の主人から語られたなにげない言葉で、あっという間に打ち砕かれた。幼い娘を見て、父親にそっくりだ、娘に会えばきっと喜ぶ、と洩らしたサンジェルマンを前に、主人は人のよさそうな笑顔を向け、こう言ったのだ。

「おお、それはよかった、ご無事だったのですね。うちの使用人が発見したとき、それはひどい怪我を負っていたようでしたが、どうしてもマリーを先に救助するようにとおっしゃられたそうで……。その後川に戻ってみたら、ご主人はどこにもおられず、皆で心配していたのですよ」

その目撃情報がそのまま、ケインが今も生きている証にはならない。重傷を負ったのなら、誰からの救助も受けられず、川に流されていってしまったのかもしれない。

サンジェルマンは思わぬ衝撃を受け、動揺した。

だが、彼らの持つ情報はそれだけだった。モーリスがジェニーの夫だと勘違いしていた男が、主人への腹いせに彼女を誘拐した罪人だと、サンジェルマンはモーリスの間違いをやっとのことで訂正した。そして、もし同じ男を見かけることがあれば、真っ先に連絡し

てもらうよう、モーリスに強く頼んだのだ。
ジェニーとケインが落ちた崖から川までの距離はあったが、川は雨水で氾濫しているとはいっても、普段はそれほど深く大きな川ではなかった。二人が行方不明となった川を、サンジェルマンは実際に何度か目にしている。川面を見るたび、二人にあざ笑われるような気分に陥ったのを、彼は今でもよく覚えている。
王のもとに戻る道すがら、馬に揺られながら、サンジェルマンはケインが生存している可能性を、自分の心だけに秘める決心を固めた。ケインのためではなく、王の心を安らかに保つために。

モーリスからの書簡が、数日をはさみ、続けて届いた。二通目の書簡は三日前だ。サンジェルマンが急いで開封すると、「失踪」という言葉が目に飛び込んできた。
「……では、その田舎貴族の夫の方が、もしかしたら五十二号だということか？」
ケインを川で見つけたドゥーヴル親子が、国境に近い山地で居を構えている三流貴族の主人が、彼とそっくりだとモーリスに報告したそうだ。三年前に大病を患ったという主人は、治療のため半年間ほど家を空けていて、家に戻ったときには、様々な記憶が欠落していたという。
ケインが行方知れずとなった時期とはぴったり合うが、その妻も使用人たちも口をそろえて、彼はドゥーヴル親子の探す男とは違うと否定した。その夫婦が、行き先も告げずにいきなり消えたのは、親子が貴族の館を訪ねてから三日後のことだ。
「今となってはわかりません。昔から仕えている使用人たちが、多少おかしな部分があっても、彼を主人と信じていたのですから、五十二号ではないのかもしれません」
モーリスからの第一報を受けた時点で、サンジェルマンは辺境に住む貴族の館に、部下を放っていた。部下には、彼らの身辺を探る

ように命じてある。
　ケインには生きていて欲しくなかった。生きていれば、サンジェルマンは再び、彼に手を下さねばならない。身を持ってジェニーの命を守ったと満足しながら死んだ方が、ケインも幸せだ。
　サンジェルマンが足元の地面から顔を上げると、ライアンが眉をひそめ、額に手をやりながら彼に鋭い視線を返した。
「国境を越えたと考えるべきか……それとも、こちらに向かっているのか」
「こちらに？　なぜです？」
　ライアンが不満そうに眉を押し上げる。
「もうすぐ闘技大会が開かれる。もしその男が本当に五十二号だとすれば、おそらくは、かつて一緒に逃げた女が今は城に連れ戻されていると知っているだろう。混乱に乗じて“彼女”に会いたいのは、兄だけとは限らぬのではないか？」
　考えもしなかった展開だ。だが、妙に説得力がある。
「そうですね、もし――もし男が五十二号であれば」
　ケインが死んでいる、という希望は捨てていない。だが、それは今や、願望に近いものに変化してきている。
　嫌な予感だった。王がときどき呼ぶように、ケインはその優しそうな外見に似合わず、「しぶとい」人間かもしれない。

　警備をいっそう強化する、とライアンが言った。サンジェルマンは、ケインが近衛隊の手にかかって死ぬようなはめにならないことを願いながら、ライアンに協力を要請する。
　サンジェルマンの依頼を快諾したあと、ライアンがぽつりと言った。
「しかし、女というのは解せぬ生き物だ」
「はい？」
「ほかの男と手を取り合って逃げておきながら、しばらくたてば、別の男に心変わりしている。一途なように見えても、時がたてば、

再び同じことをやりかねぬとは……恐ろしい！　私にはとても、理解はできぬ」

ライアンの妹でサンジェルマンの恋人だった女が亡くなって八年あまり、それ以降、ライアンがくだけた調子でサンジェルマンに話をするのは、これが最初だ。しかも話題は、ライアンが嫌っているはずのジェニー。

ライアンは不愉快そうに顔をしかめ、頬を指で掻いていた。最初は呆気にとられたサンジェルマンも、ライアンの様子には微笑みを禁じえない。

「そんな女性ばかりでもないと思いますよ」

サンジェルマンが心に思い描いたのは、もちろん、誠実なアリエルだ。

ライアンが不信そうに眉を寄せた。サンジェルマンがそれを目にすると、なぜか唐突に、ケインに手をひかれ、ジェニーが名残惜しそうに王城を立ち去る情景が胸に迫った。

「――ですが、当の彼女と五十二号が心を通わせていたかどうかは、私は疑問です。特に五十二号の方は……無意識かもしれませんが、王から彼女を奪いたかっただけだと私は思っています」

ライアンは納得しきれない表情だ。

だが、実はそれが真実に近いのだと、サンジェルマンは、ケインとジェニーが二人でいる印象を口にしてみて初めて、胸に抱き続けていた疑問がやっと解決されたような気がした。

第二部　5．生と死の境界線－４（前書き）

自分でも時々忘れますが、この作品はＲ－１５です。
多少、オトナな描写が出てきますので、ご注意くださいね。

第二部　5．生と死の境界線－4

女官長はごくまれにだが、病的と思えるほどに興奮して手がつけられなくなるときがある。

それでも、彼女は世継ぎに恵まれない王妃カサンドラに苛立ちを募らせながらも、ここしばらくは小康状態を保ち、節度とある程度の敬意をもって接し続けていたようだ。ところが、闘技大会もあと十日とさし迫った日の夜のこと、王妃に対する女官長の怒りが炸裂した。

といっても、カサンドラが女官長に何か特別なことをしたり、言ったりしたのではない。それは過去数ヶ月間も繰り返されてきたことで――だからこそ、女官長の我慢が限界を超えたのだ、と言う者もいる。

カサンドラの月経が決まった周期でおとずれることはこれまでにもあまりなかったが、それが狂うたび、王城の人々はそれが待望の懐妊の兆候ではないかと期待を抱き、そして同じ数だけ、がっくりと肩を落とし続けてきていた。

だが今月、彼女の月経は予定より二週間近く遅れていた。今まで、二週間もずれたことはない。

今度こそ――。

女官長が、もっとも期待をかけていたに違いない。

しかし、残念ながら、カサンドラの月経はおとずれた。

古い世代の者たちの間では、月経が不安定な女は石女（うまずめ）である場合が多いと信じられている。そんな女たちが何人も子をもうけている例は多数あるが、女官長はその考えを支持する一人だ。王城の人々には、気難しくて冷淡な夫に接することで王妃は心が弱り、それに伴って体も不安定になっている、という同情的な見方があるが、女官長に言わせれば、一年近くも夫に怯え続けること自体がおかしい。

女官長の剣幕に怯え、カサンドラは泣き崩れたそうだ。侍女たち

も女官長の迫力に負けて、貝のように口を閉ざし、表向きは王妃の体調不良を理由に部屋に引きこもっている。当然ながら、カサンドラは、ゴーティスのいる晩餐の席に現れなかった。

世間では、結婚後一年過ぎてもなお妻に子どもが授からない場合、夫側から離婚を言い渡しても構わないとされている。王家も同じで、どんなに長くても二年、王妃が一人の子も妊娠しなければ、離縁されても文句は言えない。

女官長は臆せず、ゴーティスにカサンドラとの離婚を勧める。

「離婚しろ、と？」

女官長の青い顔をまじまじと見て、ゴーティスはそれを一蹴する。ゴーティスにとってカサンドラは疎ましい女ではあるが、彼女は浪費家でもなく、政治に口も出さず、不妊体質だとはっきり証明されたわけでもないのだ。何より、彼女の背後には、宝の山である塩の利権がひかえている。

世継ぎはもうけなければならないが、たとえ不妊を理由に離婚するとしても、もう一年くらい、彼女を妃に据え置いていた方が、国にとっては都合がよい。

ゴーティスの考えとほぼ同じ内容を、側にいたランス公が女官長に説明していた。ランス公はゴーティスの反応も気にしていたが、彼が食事に専念するのを見て、彼にも異存はない、と捉えたらしい。

皿に残った鹿肉の切れ端を黒い煮汁に浸していると、ジェニーの顔がゴーティスの頭をよぎった。

最近ではめったに思い出しもしない、彼女が目にいっぱいにためた涙をこらえながら、ゴーティスを強気に見上げ、何とか笑顔をつくろうとする表情だ。かつて一度だけ、ゴーティスが王城の屋上へ彼女を連れていったとき、ゴーティスに向けた顔。ゴーティスが、誰かと「同盟関係」を結んでもいい、と初めて考えられたときのことだ。

その後に起きたジェニーの失踪により、結ばれることのなかったゴーティスと彼女の「同盟」は、つい最近になって繋がり、その絆は徐々に太く固くなりつつある。それに対し、カローニャとの同盟の絆が頼りなく、か細くなりつつあるのは、なんとも皮肉なことだ。

ゴーティスがジェニーに求めたのは個人としての繋がりで、ヴィレールとカローニャのような国同士の同盟とは性質が違う。ジェニーという人間を信じたゴーティスは、カローニャとの同盟にあたっては、彼らが貴重な天然資源を投げ打って自己保身を図ろうとする、彼らの中にあるヴィレールの脅威を信じたのだ。

同盟の条件として婚姻関係を結んだカローニャの王女カサンドラとは、たとえ夫婦だとしても、ヴィレール対カローニャという国家としての絆しかない。お互いの国に魅力がなくなったら、国家間もろとも、夫婦関係が解消となりえる。そして、カサンドラと離婚したあとは、どこかの王女、もしくは有力な貴族の女がゴーティスの妻の座に納まるだけのこと。

今度は、ゴーティスの脳裏にユーゴ・ベアールの陽気な笑い顔が浮かんだ。そして、その次に不意に浮かんだ考えに、ゴーティスは驚き、失笑する。

（国のしがらみがなければ、一庶民の身分だとすれば、俺は迷わず、ジェニーを妻としただろう）

しかし、王の結婚は国の利害関係に基づくものだ。その概念に、ゴーティスは何の疑いも抱いていない。

ゴーティスは、ジェニーを妃にしようとは一度も考えたことはなかった。ジェニーの実家となるベアール家は王家にとって魅力的ではなく、彼女がゴーティスの手元にいる限り、彼女を妻にする必要性はまったく感じていない。

妃とは、愛情を注ぐ対象ではない。

その夜、ゴーティスはジェニーを訪ねようとして、彼女が月経だ

と知らされ、出鼻をくじかれた。月の半ばにさしかかり、そろそろだろう、と予期はしていたのだが。

女の月経時に伽を試みるのは、あとあとの始末が面倒でもあるし、ゴーティスは好きではない。伽そのものを喜ばないジェニーは、こととさら、嫌がるはずだ。それに、今日が月経の初日だという彼女は、ときどき、腹痛を訴えているという。

ところが、ジェニーもカサンドラも相手にできないというのに、今日に限って、身体的な興奮が冷めやらない。

ゴーティスは周囲にいる女たちを一人ずつ値踏みするように見た。覚えているだけの後宮に仕える女たちを候補に挙げてみた。が、不思議なことに、対象が定まらない。一夜の相手など誰でもよいはずが、誰にも決められないのだ。

どういうことだろう？

不可解な自分への苛立ちもあいまって、ゴーティスの体の火照りはひどくなる一方だ。

当初、ゴーティスは小城へ向かうのを断念するつもりだった。だが、夜も更けた頃、ゴーティスはジェニーの部屋の前に立っていた。

ゴーティスと顔をあわせたときから、ジェニーは困惑し、反抗心をのぞかせていた。アリエルが主人を気遣いながら退室したあとは、ジェニーはいっそう険しい顔となった。彼女がゴーティスにあからさまに抗う姿勢を見せたのは、久しぶりのことだ。妙な話だが、そのこともゴーティスの体を熱く刺激した。

「私、今日は無理だから」

「何が無理だ？」

ジェニーが下唇を軽く噛み、むっとしてゴーティスを見上げた。

ジェニーの目は普段よりずっと深い茶色で、ふっくらとした唇は化粧していないのに赤く湿ったように見える。今夜のジェニーには妖艶とも呼べる色気が備わっている。頬はつややかに光っていて、ゴーティスが見つめていると、だんだんと赤らんでいった。

「嫌なの」
「嫌だと？　何が？」
ゴーティスは片手でジェニーの肩を引き寄せ、赤みを帯びた頬に唇をぴったりとつけた。ジェニーからは、たきしめた東洋の香のような匂いがした。もう片方の手でジェニーの腰を自分の体に押し付けると、ジェニーは抵抗して、上半身が激しく揺れた。
「放してよ！」
「ジェニー、静かにせぬか」
彼女はゴーティスの顔を遠ざけようとでもするように、顎を両手で押した。
「ゴーティス王、私、したくない……！」
「俺は何かをするとは言ってはおらぬぞ」
ジェニーが目をみはって自分を見たので、ゴーティスは抑制のきかない下半身を意識しながら、苦笑して付け加えた。「口ではな」
ジェニーの表情に恐怖が混じった。
「やめて！　今日は無理なの、したくないって言ってるじゃない！」
ゴーティスはジェニーの両手を自分の顔から難なく外した。
「無理ではない」
光の加減のせいで茶色く見えるジェニーの髪の上から、ゴーティスは彼女の耳に息を吹きかけるようにして囁く。彼女は身をすくめ、唇を噛み締めてゴーティスから顔をそむけた。
「……今日はやめて」
うんざりとしたジェニーの口調に、ゴーティスの口調も尖る。
「今日だけではあるまい」ゴーティスの声が掠れた。「おまえはいつも、伽をしたくないだろうに」
瞳を怒りに輝かせて、ジェニーは顔を上げた。
「それが分かってるなら、何もしないで」
ゴーティスは声をあげて冷たく笑い、ジェニーを腕に抱き上げた。
「今日は無理だ」

寝台の深紅の掛布の上に降ろされて、ジェニーは右脇を下にして横たわった。無駄な抵抗をあきらめたらしい。ジェニーの背中まで届く髪が深紅の掛布の上にゆるやかに広がり、大地をぬって走る川の流れのように、鈍い金色に光っている。

ゴーティスは急いで自分の寝着を脱いだ。床近くの空気はまだ冷たさを残しているが、暖炉の熱で暖かすぎる室内では、服を着ていなかったとしても、あまり寒さは感じない。

ジェニーは目を閉じたままで、ゴーティスが寝台に膝をのせたことに気づいただろうのに、何の反応も見せなかった。故意に、ゴーティスの行動を無視しているのだろう。ゴーティスはジェニーの無反応に腹が立ったが、無視を返すことに決めた。

淡い桃色をした寝着をゴーティスがジェニーの肩から落とすと、彼女は身じろぎ、背中を少し丸めた。だが、ジェニーはまだ頑固に無視を決め込むようだ。ジェニーの腰から脇腹に至る曲線をゴーティスの指が追い、彼女の肩にかかる髪を手で払う。それでも、ジェニーには動き出そうとする気配が見えない。

ジェニーの髪を指でかき分け、ゴーティスは彼女の耳を空気に触れさせた。その大きさも、唇への感触も気に入っている。ゴーティスが彼女の耳半分を口に含むと、くぐもった声がジェニーの口から洩れた。

ゴーティスはジェニーの反応を引き出して満足し、顔を上げた。すると、片目を開けたジェニーが、か細い声で再び何かを呟く。

「……たい」

彼女の言葉は聞き取れなかった。

ゴーティスが触れたジェニーの肩は、ついさっき触れたときより冷たい。ジェニーの呟きを無視しようにも、彼女が不自然に瞬きするのが気にかかる。

「何と言うた？」

ゴーティスは、再び閉ざされたジェニーの目を見つめ、答えを促した。

「……お腹が痛いのよ」

そんな返答でこの場をしのげると思うのは、大間違いだ。

ジェニーの浅はかな抵抗に呆れながら、ゴーティスはずり落ちた彼女の薄い寝着の隙間に手を入れる。ジェニーのいつもより温かな肌にそって手を滑らすと、その体が縮むように一度揺れた。それからすぐ、ゴーティスの手は、予想もしなかった、ひんやりとした肌面にたどり着いた。

ゴーティスが確かめるようにジェニーのお腹に手を当てると、吐息をもらすように、ジェニーが小さなうめき声をあげた。彼女のお腹は張っていて、冷たかった。

ジェニーの囁きを、また聞き逃す。

だが、ゴーティスは聞き返したりはしない。ゴーティスの手を押さえるようにして重ねられたジェニーの手もまた、体温を失っている。

ゴーティスは口の中でうなり声を震わせた。

寒風に吹きさらされたのではないのに、愛する人間の肌が冷たいと、ゴーティスは不安になる。もう何年も味わったことのない種類の不安だ。ジェニーの息遣いがほんのわずかに速まるだけで、ゴーティスは、彼女がいつかの父のように息絶えてしまうのではないかと、恐怖に急き立てられる。

性欲も体の疼きも、とたんに消えた。

ゴーティスが添い寝するように隣に体を横たえると、ジェニーが両目を開け、顔を後ろに傾けるようにしてゴーティスを見た。その顔に映し出される戸惑いを目にすると、ゴーティスは、自分が腑抜けになったような気分に陥る。

ジェニーの腹に手を伸ばし、ゴーティスはその肌の冷たさを手のひらで必死に吸い取ろうとする。そうすることで、ついに最後まで戻らなかった父の体温を取り戻せるかのように。

ゴーティスの焦燥感が限界に達する前に、滑らかなジェニーの肌

はゴーティスの体温となじんで、少しずつだが熱を取り戻していった。そして、それとともに、ジェニーの体からは強張りが抜け、耳に赤みがさしていく。

「温かくて……気持ちがいい」

快楽に熱いため息をもらすようにジェニーが言い、ゴーティスは正気に戻る。

ゴーティスは彼女の体を腕に抱きしめた。

ほっとした。手の下で、活発となったジェニーのお腹が低音で鳴いている。

「体を冷やしたのだ。……許せ」

ジェニーがくるりと振り返り、口を小さく開けて、ゴーティスを怪訝そうに見つめる。

何を不思議に思うのだろう？

だが、彼女のその瞳が嬉しそうに柔らかく微笑むまで、数秒もかからなかった。

「うん」

ジェニーが笑うだけでゴーティスの息は奪われ、その一方で、胸はこんなにも軽くなる。

ジェニーがゴーティスの手首をつかみ、頭をゴーティスの首元に押し付けた。ようやく沈静化した性欲が呼び覚まされるのを恐れ、ゴーティスは彼女の顔から目線をそらす。

「温かくなるまで、もう少しこのままでいて」

ジェニーの言葉に、ゴーティスは呆れてため息をつく。

「半裸のおまえを腕にしながら、ただ抱きしめろと――おまえは、それを男の俺に求めるのか？」

ジェニーが微笑んだ。「じゃあ、何か話をしてもいいわ」

「話だと？」

ゴーティスが半ば怒りながら言うと、ジェニーはゴーティスの手を軽く握った。

「あなたがこうやっていてくれるなら、夜通し話をしたって平気」

「戯けたことを。寝所にいて、何もせぬ男女がおるか。女とて、好きな男にはすすんで身を投げ出すものであろう。おまえは違うのか？」

「私は……」ジェニーが口ごもった。「あなたのことは、大好きよ」

ジェニーが顔を赤らめるように、ゴーティスも自分の頬が熱くなったのを自覚した。

「でも、それとこれとは話が別なの。私はあなたと一緒にいたいけど、でも、伽はなくていい」

それもジェニーの本心だ。だが、少しも理解できない。好きな男に身を預けられないというジェニーの発言は、ゴーティスには受け入れられない。

数時間後、自分の腕の中で眠りに落ちたジェニーを起こさないように、ゴーティスは彼女にからめていた手足をそっと抜いた。

結局、彼女が眠りにつくまで二人がしていた事といったら、ユーゴの噂話と、アリエルを探し出したサンジェルマンの苦労話、それに、月末に迫った闘技大会の話だけだ。全てはジェニーの望んだとおりだ。彼女は満足していたようだが、ゴーティスは何となく腑に落ちない。

けれども、ジェニーがお腹を抱えるようにして眠る姿は、ゴーティスの幸福だ。寝顔に笑みがのぞくのは、ゴーティスの手柄と呼んでいい。

ジェニーの腕に唇をつけようとして、ゴーティスは突然、彼女を揺り動かそうとする衝動に襲われた。

心の平安は得られていたが、身体的な欲求不満は今もまだ残っているのだ。しばらく歩き回って、体内に残っているざわめきを放出しておきたい。

廊下に出て、ゴーティスは階段をたどって一階に下る。

暗闇に反響する声を最初にとらえたのは、ゴーティスに付いてき

た近衛だった。
「何だ？」
反射的に剣の柄を握り、ゴーティスはふと立ち止まった男の背中を見た。
「は。何やら、声のようなものが聞こえまして」
男が聞いたという声は、廊下のずっと奥の部屋から発せられているようだ。耳をすましたゴーティスは、夜中に不気味に響く声の主を特定した。この小城のもう一人の主人、カロリーヌだ。
癇に障る幼児の泣き声は、ゴーティスの動物的で破壊的な血を刺激する。
ジェニーを訪ね、彼女の娘までを訪ねたことはないが、ゴーティスは子ども部屋の場所を覚えている。彼らの歩く廊下の突き当たりに近い部屋だ。

子ども部屋の扉の前に立ってみると、娘の泣き声は実際にはすすり泣きに近いことがわかった。ときどき不満そうにあげる声が廊下にもれて、甲高く響くのだ。

ゴーティスが初めてカロリーヌと対面したとき、彼女はゴーティスに向かって手を伸ばし、体勢を崩して小さな寝台から落下しかかった。
床に頭を打ちつけて死ねばよい。
幼子の死を願った心とは反対に、ゴーティスは咄嗟に彼女の足首をつかんだ。不本意ながら、彼女の命を救ってしまったのだ。
騒ぎたてる乳母たちを尻目に、カロリーヌは逆さ吊りの状態だというのに、声をたてて楽しそうに笑った。床に降ろされると、彼女はゴーティスを遊び相手だと認識したのか、笑いながらゴーティスの足に抱きついた。怒りで、ゴーティスの頭はかっとなった。
だが、カロリーヌを蹴り飛ばしたい衝動は、ゴーティスの体が覚えている懐かしい感覚に邪魔された。

ゴーティスの足に触れる、幼い娘の柔らかな腕。

その弾力は、ゴーティスがそれまでの人生で決して思い出さなかった、母親の肌の触感だ。母親に、たしかに抱きしめられた記憶。

ゴーティスは茫然とした。彼自身に、無意識下に封じ込めていた母親の記憶があることに。それが、先王やジェニーを彷彿とさせるカロリーヌから感じ取れたことに。

膝から力が抜けそうだった。先王とジェニーの特徴を受け継ぎ、先王の声だけでなく母親の記憶までも伝えたカロリーヌに、ゴーティスは一種の神々しさと畏怖を覚えた。

カロリーヌには、カサンドラや女官長、ゴーティスが侵してはいけない何かがある。

彼女は、ジェニーや先王に所属している。

ゴーティスがカロリーヌをジェニーに返すべきだと悟ったのは、その瞬間だ。

近衛が室内に王の来訪を告げると、カロリーヌの泣き声がぴたりと止んだ。

第二部　5．生と死の境界線－5

扉が引かれたとたん、ゴーティスは、近衛の体の向こう側から、床を滑るようにして自分に突進してくる白い物体に目を奪われた。部屋の二隅が照らされているだけの暗い部屋で、ゴーティスはその正体を見極めぬまま、ほとんど反射的に剣を引き抜く。

「何……者！」

体は自然に臨戦態勢に入り、両手は勝手に剣を構える。

「マーマ！」

ゴーティスが、ひらひらとはためく白い布の下に二つの瞳を見つけたのと、その下にある小さな唇がそう叫んだのは、ほぼ同時だ。女の脇をすり抜けた白い布の塊が、ゴーティスの正面で急停止する。全てのものを見通すような、先王と同じ緑色の瞳――カロリーヌだ。

息を詰め、ゴーティスは今にも振り上げようとしていた手を止めた。

喉に詰まっていた息を一気に吐き出しながら、ゴーティスはカロリーヌから視線をそらさずに、剣をゆっくりと下ろす。彼女の瞳を見つけるのがあと一秒でも遅ければ、ゴーティスの剣は彼女の体を真っ二つに切り裂いていた。

不審者でなかったことをゴーティスは安堵するが、同時に、いっそのこと、娘を剣で斬り殺してしまえなかったのかと、若干の口惜しさを覚えた。

カロリーヌはジェニーが愛する娘ではあっても、ゴーティスにとっては、いなければよい人間だ。この幼い娘に、愛情を抱いたことはない。亡くなった先王に通じる、カロリーヌが持つ一種の神々しさも、ゴーティスは苦手としている。

娘の死を出会い頭の不幸な事故として片付ければ、誰からも文句は出まい。しばらくは城中の皆が悲しみに暮れたとしても、いずれ、

彼らは庶子のことなど忘れ去ってしまうだろう。

ゴーティスの邪悪な思惑など知らず、カロリーヌは首にからまる白い布を邪魔そうに引っぱると、ゴーティスの足の上に放り投げた。ゴーティスはむっとし、彼女を見下ろす。

「マー？　マー……？」

カロリーヌは、きょろきょろと扉の周りに視線をさまよわせた。母親を探しているのだ。それから、カロリーヌはゴーティスを見上げ、頬の上に落ちそうなほどに瞳を大きく見開いた。

カロリーヌの上気した赤い頬には涙の跡がいっぱいだ。髪は全体的にしっとりと湿っているが、耳の脇にある髪が濡れ、顔にべったりとくっついている。かなりの長時間、カロリーヌは泣き続けていたようだ。

「離れろ」

大人には効力のあるゴーティスの眼力が、子どもには効き目がないようだ。ゴーティスの不機嫌な瞳に合っても、この幼い娘はまったくひるみもしない。彼の剣は、まだ鞘に納められていないというのに。

ふと、カロリーヌの視線が彼女の頭上にある剣に移った。それから、彼女は何のためらいもなく、剣の切っ先を手でつかもうとした。

「触れるな！」カロリーヌの大きな瞳は動揺したように揺れ、そして、あっという間に涙であふれた。「これは遊び道具ではない」ゴーティスは叫び、剣を持つ手を上げた。

カロリーヌの唇が小刻みに震え、ゴーティスは彼女が大声をあげて泣き出すのかと、うんざりした。彼女の泣き声を間近で聞いたことはないが、それがどんなにはた迷惑な音量か、女官長や大臣たちから聞いて知っている。

ところが、カロリーヌは泣き声をあげなかった。無言で大粒の涙を流し、ゴーティスに慰められるのを待つように、彼をじっと見上げている。

ゴーティスは静かに剣を納め、小さな娘を見下ろした。目の縁にたまった涙が照明に照らされて光っている。睨みつけても、彼女はまだ言葉を発せず、ゴーティスに何かを訴えるような視線を返すだけだ。

彼女の視線に対するにつれ、苛つきが増す。世話係の女たちはその場の緊張感にのまれているのか、二人の間に割って入ろうともしない。

「オオ……オウ？」

カロリーヌの口から洩れた声に、ゴーティスは一歩退いた。すると、彼女はゴーティスの足にもたれかかるようにして、彼の膝に両腕を回した。

「……どけ」

カロリーヌはゴーティスの足を放すどころか、その脛にまとわりつく。

大事な息子を守るように包み込む、やわらかな腕の感触。――また、母の優しい腕の幻が、ゴーティスに触れる。

母に懐かしさを感じることに、ゴーティスは狼狽した。

カロリーヌもろとも母の記憶を蹴散らそうと、ゴーティスはつま先に力をこめ、彼女の体を浮かそうとした。が、カロリーヌはゴーティスの足の上に、すとんと腰を下ろしてしまう。

「女」ゴーティスは手近にいた世話係を呼びつける。「この娘をどかせ」

「は、はい！　ただいま！」

駆け寄った女がカロリーヌを抱き上げようとすると、

「イヤァ！」

カロリーヌはゴーティスの膝とふくらはぎにぎゅっと抱きつき、激しく首を左右に振って抵抗した。ゴーティスがむっとして足を振ると、彼女はやにわに笑い出し、ゴーティスを見上げた。

ゴーティスは通常、小さな子に好かれることはない。子どもたちは小さいながらも、彼の放つ威圧感に気圧されるのだ。なのに、こ

の娘ときたら、なんと怖いもの知らずなことか。
恐れを知らないという意味では母親ジェニーと同じだが、ゴーティスにはカロリーヌの行動がいちいち腹立たしい。これがケインの娘でないならば、もう少し態度を軟化できたかもしれないが。

カロリーヌの手がゴーティスの膝の裏をたたいた。
「オオ」
唐突に、彼女が何回か口にしていた言葉が、「王」、つまり、自分を示すものだと、ゴーティスは気づく。
冷風が背中を駆け抜けた。
この娘に……自分の存在を覚えてもらいたくはない。
真っ白に見える、産毛のような頭髪、明るい光を散らす緑色の瞳。瞬きするたびに、濃く長い睫毛が存在を主張する。
カロリーヌを近くで見れば見るほどに、きれいに整った顔の造りだ。成長すれば、各国から引く手あまたの美しい娘となるだろう。いずれ、ヴィレールにとってもっとも良い条件を提示する国の王子に、彼女を結婚相手として引き渡せばいい。
利用価値のある娘。彼女はただ、それだけだ。
ゴーティスは一語一句、はっきりとした発音で言った。
「おまえはもう言葉がわかろう？　怪我をしたくなくば、そこからどけ」
カロリーヌはぽかんと口を開けていた。その口の形がジェニーそっくりだ。カロリーヌに疎ましさを感じながらも、ゴーティスは彼女を抱きしめたい衝動にかられ、自分の感情をもてあます。
「どけ、と言うのが分からぬか」
だが、カロリーヌは意味不明の言葉を何か呟きながら、ゴーティスに向かって手を伸ばした。瞳には涙の粒が光ってはいるが、彼女は笑ったままだ。
ゴーティスは彼女の小さすぎる手を見つめた。
前回、彼に伸ばされたその手を、ゴーティスは取らなかった。

それは幼子の手であるが、単なる子どもの手ではない。カロリーヌの手を取ることは、母やケインを受け入れ、許すことだ。それは、ゴーティスがずっと抱いてきた裏切り者たちへの思いを否定し、彼らに屈服する気がする。

ジェニーと通じた男をどうして許せよう？

「母を許せ」という、ゴーティスにとって尊敬に値する父の頼みでさえ、ゴーティスを説得できはしない。

カロリーヌは満面の笑みをたたえ、ゴーティスに握ってもらえるのが当然というように、手を差し出している。

――誰が、その手を取るものか。

ゴーティスが沈黙を貫いていると、いきなりカロリーヌが飛び跳ね、彼が腰に当てていた手をつかんだ。咄嗟にそれを払いのけようとして、だが、カロリーヌの体温を感じたゴーティスの手は、不意に、抵抗する気を失った。

カロリーヌの小さな両手に引きずられるままに、ゴーティスの手は腰からあっさりと離れてしまう。彼女が喉の奥で声を転がすようにして、愉快そうな笑い声をあげた。

カロリーヌとゴーティスの目が合った。

ただ楽しそうに、真っ赤になって笑っていたカロリーヌの顔が、ゴーティスを見つめながら、ごくゆっくりと、親しみをこめた微笑みに変わる。子どもらしくない笑顔だ。母親ジェニーの笑顔とは異なる。

どこかで見たような笑い方だったが、さっぱり思い出せない。だが、それを見ると、ゴーティスの胸には、何か熱いものがぐっと迫ってくる。

目に見えない不思議な力に誘われるように、ゴーティスはカロリーヌの両脇の下に手をいれ、彼女の軽い体を持ち上げた。不思議に、カロリーヌの感触はゴーティスの手にも違和感がない。カロリーヌ

は笑顔だったが、さっきまでのような無邪気な笑い声をあげなかった。

猫が喉を鳴らすようにカロリーヌが低くうめくと、誰かが、ひそかに息を飲む音がゴーティスの耳に聞こえた。

「……そこにおるのは誰だ」

ゴーティスは振り返りもせず、わずかに開いている扉の向こう側に静かに問いかけた。すると、また、誰かが小さく息を吸い込む気配が伝わってきた。

数分前から、誰かが扉の外で室内の様子をうかがっていることを、ゴーティスは勘付いていた。それが、おそらくは女だということも。

ゴーティスはカロリーヌを左腕に抱き、腰にある剣に手をそろそろと伸ばす。近衛の男もそれに倣った。不審者が小城に潜んでいるとは思いたくなかったが、先日のジェニー毒殺未遂の一件から、ゴーティスはいつも意識のどこかで、暗殺者の出現を警戒している。

近衛の男が扉に手を触れたとき、扉は外側から押されて開いた。そして、女の白い服の裾が、扉の中にさっと進入してくる。

「私よ」

「マーマ！」

ゴーティスの腕の中で、カロリーヌが興奮して暴れた。ゴーティスに留まった女の視線はカロリーヌに動き、その微笑に出会って、甘く溶ける。

ゴーティスは、扉をすり抜けて入ってきたジェニーを見つめた。今夜はずっと血色の良くない顔色をしていたが、まだ青白い顔をしている。真冬に着るような分厚い上着を羽織っているが、内履きからのぞく素足はいかにも寒そうだ。

ゴーティスは、やっと母に会えて狂喜しているカロリーヌを苦々しく見つめた。ジェニーに、カロリーヌを腕に抱くこの場面を目撃されたくなかった。

「眠っておるものとばかり、思うておったが」

カロリーヌに手を伸ばし、ジェニーが弱々しく笑った。
「あなたこそ。部屋にいなかったから、もう帰ったものだと思ったわ」
ジェニーの口調や表情から、それが嫌味でも文句でもないことはゴーティスにもよく分かった。どちらかというと、彼女は小城に残っているゴーティスに会い、ほっとしているように見える。
「朝まで城に戻りはせぬ」
カロリーヌにしがみつかれながら、ジェニーが嬉しそうに笑った。

ジェニーの手に渡ったカロリーヌは、目を輝かせて、早口で何かをまくしたてていた。そのほとんどが意味をなさない言葉の連続だったが、ジェニーには娘の言わんとする内容が全て理解できているようだ。娘を見つめるジェニーの眼差しは、ゴーティスが今までに目にしたことがないほど、とてつもなく優しい。
カロリーヌの部屋でジェニーと遭遇した気まずさに加え、軽い嫉妬を覚えて、ゴーティスは母娘から目をそらした。
「待って、ゴーティス王」
黙って部屋を去ろうとしたゴーティスは、ジェニーに声を掛けられて振り返った。
「俺は部屋に戻る」
「待って」ジェニーが再び引きとめる。「私がこの子を寝かしつける間だけ、もう少し、ここで待ってて。泣き疲れてるから、きっとすぐに眠ってしまうわ」
待つ時間の長短は問題ではない。
冗談ではない。いまいましい幼子の部屋で、彼女が眠りにつくまで時間をつぶして待て、と?
ジェニーの無神経で身勝手ともいえる頼みに、ゴーティスは憤慨した。ジェニーは、ゴーティスに依頼しているというより、一方的に通告しているだけだ。それがまるで、彼の義務の一つかのように。
ゴーティスが娘を嫌っていることぐらい、ジェニーは知っている

はずだ。ゴーティスが小城でジェニーと過ごす際、彼は必ず、カロリーヌを二人から遠ざけておくように命じている。

だが、ジェニーの頼みをはねつけようと彼女を見て、ゴーティスはそれが叶わないと悟った。ジェニーはカロリーヌをあやすように体を揺らしながら、白金色の娘の髪に頬をくっつけて、小さな子どものように笑っている。その幸せそうな顔を見せつけられれば、ゴーティスはもっと長く、そんな彼女を見つめ続けていたくなるだけだ。

（仕方あるまい。今宵はジェニーが主人の夜だ）

寝所でジェニーに腕をまわしながら、彼女に請われるままに、話をしていた数時間をゴーティスは思いおこす。

今日のジェニーに、ゴーティスは抗えないらしい。

カロリーヌが規則的な寝息をたてるまでに、ゴーティスが気を揉むほどの時間は必要なかった。幼い娘は母親の顔を見て安心したのか、ものの数分もしないうちに、深い眠りに落ちたからだ。

世話係の女たちに娘を託した後、ジェニーはおそらく心残りだったろうが、ゴーティスとともにカロリーヌの部屋をあとにする。ゴーティスもジェニーも、近衛二人も無言だったが、気詰まりな沈黙ではなかった。

一行が階段に差し掛かったところで、ジェニーが立ち止まり、壁についた最上段の装飾窓を見上げた。正面玄関の対面にある本階段には、月光が幾筋も斜めに差し込んでいる。空気中に舞い上がった埃が月明かりに照らされ、光を発しながら、大理石の冷たい階段に向かって落ちていく。

「あれは、女神エクリシフェなのね」

ジェニーの指差す窓枠には、真下の階段に半身を乗り出すようにした女の彫像がついている。頭のてっぺんに付いた透明な球に月光が乱反射して、複数の細かい光が天井に様々な模様を作っている。

ゴーティスはジェニーに指摘されるまで、女神像の存在をすっかり忘れていた。月の明るい夜、月光を屋内に取り入れて楽しめるようにと、先王妃が特別に造らせた、月の女神エクリシフェ像。

ゴーティスは像から顔をそむけた。

「そうだ。ヴィレールに生まれたのではないおまえが、よう知っておるな」

「父に……よく聞いてたのよ」

ちなみに、とある地方の言い伝えにすぎなかった、幽閉されていた自分の娘を月の神が救出する話を、神話にまで高めて国中に広めたのは、先王妃だ。ゴーティスが生まれる前、教会の力が強かった当時だからこそ為しえた、荒業(あらわざ)だ。

「あのお話は好きだったわ」

ゴーティスは嫌いだった。

「俺はこの女神が好きではない」

ゴーティスが女神を嫌う理由は単純明快だ。エクリシフェの女神像は先王妃を模造しているとも言われ、その名を聞けば、ゴーティスは母をいやでも思い浮かべる。

ジェニーが女神像をしばし眺めたあと、ゴーティスを見つめた。

「ゴーティス王、あなたの母親って、どんな人だった?」

――その手の質問には、数年来、答えていない。いや、先王妃が罪人として死んだ事実を知る者は誰も、ゴーティスにその質問を投げかけないので、答える機会に恵まれなかったともいえよう。

ゴーティスは階段の先に立つ近衛たちに振り返った。「おまえたちのどちらか、先王妃について説明してやれ」

だが残念ながら、両名ともが非常に強張った顔で口をつぐんだ。

それをみとめ、ゴーティスは笑いを押し殺した。

「ゴーティス王」と、ジェニーがゴーティスに近寄り、腕に触れた。

「私はあなたに訊いてるのよ?」

ゴーティスは彼女に負けず劣らず、不機嫌な顔を作ったつもりだ。

「おまえも、先王妃が夫殺しの罪で処刑されたことは知っておろう。ほかに何が知りたい？　……大司教と姦通したことか？　王家の土地をいつのまにか実家名義の土地にしておったことか？　それとも、王位を継ぐ気のない王子に何度となく毒をのませたうえ、自害に見せかけて殺そうとしたことか？」

ジェニーは虚をつかれたようで、何も返答しなかった。当然だ。

「あの女は俺に王位を継がせたくなかったのだろうが、先王が身罷られたことによって、その当時ただ一人、成人だった俺が跡目を継いだ。俺を放っておいてくれれば、俺はいずれ王家を出るつもりでおったのに。

だが、ともかく、先王の身罷られたその夜、俺はヴィレールの王となった。俺は、なんとしても、その夜が明けるまでに先王を死に至らしめた犯人をあげたかった。実際、翌日の正午までには、事件に関わった全ての者を断罪した。無論、先王妃も含まれておるが――俺の死を願っていた女が、俺によってその一生を終わらされるとは……なんとも皮肉な話であろう？」

ゴーティスは、最上部の窓で、月の青い光を浴びているエクリシフェ像を眺めた。あの当時の母親が持ち合わせていた勢力を思うと、その窓は小さく狭く、彼女にはとても窮屈そうだ。

だが、月光がなければ存在感もないエクリシフェの像は、実は、王妃の本来の姿に似ている。

彼女自身に力はなかったのだ。彼女にあったのは、虚栄心と、都合よく夢を見る能力。

彼女は、ゴーティスが同情してやる対象なのかもしれない。

ゴーティスの指に、ジェニーの冷たい指がからんだ。

ゴーティスが女神像から目を離すと、ジェニーが唇の端を小さく上向けるようにして微笑んだ。彼女には、ゴーティスへの同情心は見えなかった。

「冷たい手だ」

ゴーティスがジェニーの手を握ると、彼女が小さく笑った。
「あなたの手が温かいから、いいじゃない」
ふん、とゴーティスは鼻を鳴らす。「それとて、俺は常におまえの手を握っておるわけにはいかぬ」
「そうね」
ジェニーの冷たい手がゴーティスの手を握り返し、どちらからともなく、二人は唇を寄せ合う。

ゴーティスは再び、てっぺんの窓で孤独に耐える女神像を見上げた。当然だが、彫像は動かず、何も語らない。こちらがいくら声を掛けようと、反応することはないのだ。ゴーティスの頭にちらりとよぎった同情すら、一切通じない。
急に、一抹の寂しさがゴーティスの胸にこみ上げてくる。

第二部　5．生と死の境界線－6

ヴィレールが冬に入る直前のこの季節、数年ぶりに復活したという闘技大会を前に、ヴィスコンデールの街は人々でごったがえしているという。見物客だけでなく、首都に集まる人々を目当てに、商人たちも各地から続々とつめかけているらしい。

二日後に開催される大会のために宿屋はどこもかしこも満室で、娼館まで大繁盛だ、と、ユーゴが普段以上に賑わう街の様子を語った。彼は王城に来る前にヴィスコンデールにまで足をのばし、その目で実際の街を見てきたのだ。

しばらくの間、ユーゴは小城には来ていなかった。彼は新しく侍女として入ったアリエルをめざとく見つけ、愛想良く挨拶し、それとなく観察して、すぐにジェニーに話を始めた。どうやら、アリエルはユーゴの恋愛対象には入らないようだ。彼は、ジェニーの暗殺未遂の報告を受けながら、今日まで訪ねてこられなかったことを率直に詫びた。

ユーゴは機嫌がよかった。彼はいつでも気楽に構えている方だが、今日は特に笑顔が明るい。訊けば、彼はライアンに直談判し、闘技大会会場でのジェニーの席を変更してもらった、という。

ジェニーは、会場の席が指定だということさえ、初耳だった。けれども、広い闘技場の中で自分の席がどこであろうと、ジェニーにはたいした問題ではない。どこにしても、ゴーティス王の隣に席を確保できはしないのだ。彼の隣の席は王妃が占める。公の場で二人が並ぶのを、できることなら、ジェニーは直接目にしたくなかった。

「もっと中央寄りの前列にしてもらったよ」と、ユーゴは自慢げにジェニーに言う。「私と妻もきみのすぐ隣に座る」

ジェニーは彼の誇らしそうな笑顔を眺めながら、そうなの、と頷いた。ジェニーの隣では、何か頭に引っ掛かることがあったのか、

アリエルがわずかに首をかしげている。
「いい席なんだ」
「それは、サンジェルマン様もご存知なのですか、ベアール様？」
アリエルがユーゴに問い返し、ほんの一瞬、ユーゴは彼女を咎めるように眉をかすかに震わせた。だが直後、彼女ににっこりと笑いかける。
「今頃、ライアン様から聞いてるさ」それから彼は、ジェニーにその笑顔を移す。「席の移動くらい、サンジェルマン様だってとやかく言わないだろ。王の席に近くなればなるほど、警備も厳重になるからね」
アリエルはまだ何かユーゴに言おうとしていたが、
「ジェニーは今や有名人なんだから、彼女を見たいって人が詰めかけたら困るじゃないか。“それなりに”警護は必要だよ。それはサンジェルマン様も理解されてると思うけど？」
彼が笑顔を止めてこう言うと、彼女はわずかに睫毛を伏せ、口を静かに閉じた。

闘技大会をひかえてライアンが多忙なため、今朝から三日間、剣の稽古は休みだ。カミーユを連れて庭園に出ると、ジェニーは日ごとに冷たさを増す朝の空気に身を震わせた。外遊びの大好きなカミーユは、庭園の緑を目にしたとたん、乳母と世話係の間から、彼女たちの手を振り切って走り出す。
アリエルがくすくすと笑い声をもらした。「まあ、お元気なこと」
アリエルと微笑みあったジェニーが、カミーユの悲鳴とも歓声ともつかない大声に振り向かされたのは、その直後だ。
「カミーユ！」
見れば、生垣の途切れたあたり、カミーユの数メートル先に、金髪の男がジェニー達の方を向いて、たたずんでいる。カミーユは興奮した声をあげながら、その彼めがけて突進しているのだ。

「あれは……？」

男はそれほど大柄ではないが、頭が小さいため、肩が広くがっしりとして見える。暗褐色の上衣の裾からは、剣の長い鞘がのぞいていた。

ジェニーたちに視線を向けられたことに気づいたらしく、男が軽く頭を下げる。

「サンジェルマン様ですわ」ジェニーと同様に目をこらしていたアリエルが微笑んだ。だが、彼を見つめるアリエルの瞳には、若干の不安が漂っている。「でも、こちらに独りでおいでになるのは、めずらしいことですわね」

サンジェルマンは、王と一緒でなければ、めったに小城まではやって来ない。ジェニーが覚えているかぎり、彼が単独で来たのは、ジェニーを小城に連れてきた初日と、ライアンによる剣の指導についてジェニーに伝えにきたときの二回だけだ。

彼はあえて、ジェニーとは頻繁に接触しないようにしているという。王の腹心である自分がジェニーと接触することで、彼女の方が王妃より力があると皆に思われてはならないと、彼はかつてアリエルに語ったそうだ。

そのサンジェルマンは、駆け寄ったカミーユの背丈にあわせて膝を地面につき、大人の女性に接するように、彼女に紳士的に手を差し伸べている。

ジェニーは、彼に非常になついている様子のカミーユを見て、不思議に思った。ゴーティス王と同様に、彼もカミーユにあまり接していないとばかり思っていたのだ。

ジェニーの戸惑いを察してか、年配の世話係がジェニーの横に来て、言った。

「サンジェルマン様は、カロ……いえ、カミーユ様のいちばんのお気に入りなのですよ。サンジェルマン様もお忙しいでしょうのに、中庭でよく遊んでくださいまして」

カミーユがサンジェルマンの肩に飛びつこうと、何度も繰り返し

飛び跳ねているのを見れば、女のその説明も納得だ。
王とは異なり、彼はカミーユの出生に疑いを抱かず、彼女を王の子として素直に受け入れている。
ジェニーはほっとし、今はもう自分には友好的ではない彼が、笑顔でカミーユに話しかける姿に心温まる思いがした。
（王もそのうち、カミーユに自然に接してくれるようになればいいけど）
先だっての真夜中、王がカミーユを腕に抱いているのを目撃したときの衝撃は、ジェニーは今でもはっきりと覚えている。それが即ち、彼が娘の存在を認めたということにはならないが、彼はジェニーがその場でカミーユの面倒をみることを黙認した。カミーユが眠りにつくまでの時間を、彼は黙って耐えた。彼はいつでも――実物の姿でもその話題でも――カミーユを彼の前から排除したがるのにも関わらず。

サンジェルマンがカミーユと手をつなぎ、ジェニーたちの前に現れた。ジェニーに挨拶し、アリエルにも同じ儀礼的な微笑みを送る。
「お元気そうだ」
カミーユを乳母に引き渡そうとして、サンジェルマンはカミーユに猛烈な勢いで抵抗されていた。苦笑しながらジェニーがカミーユに手を差し出すと、彼女はサンジェルマンと母親の間で真剣に迷った挙句、不満の残る表情のまま、ジェニーの手を取った。
「私もこの子も元気にしてるわ」
ジェニーの返事の真偽を確かめるように、サンジェルマンがアリエルを見やる。それを受け、アリエルが答えた。
「特に変わりはございません。お二人とも、つつがなく過ごしていらっしゃいます」
「それはよかった」
サンジェルマンはあくまで礼儀正しく、普段と変わらぬ笑みを浮かべている。

ジェニーは、アリエルが彼への想いを胸の内に封じ込めようと努めているのはよく知っているが、彼もまたアリエルへの想いをまったく見せないことに驚いた。彼とアリエルの間に行き交う視線や微笑は、恋人というより師弟の間柄のようだ。

なんだか、悲しかった。お互いへの信頼関係は見え隠れするのに、相手に優しく触れるような温かな視線が、二人からはすっかり消え失せている。

「サンジェルマン様、もしや、王城で何かあったのですか？」

アリエルの問いに、ジェニーは我に返る。

「王城で？　いえ、特には」彼はアリエルの質問の意味を理解しかねたようだが、すぐさま、ああ、と頷いた。

「今日は彼女に渡す物があって、こちらまで来た」

と、彼は腰帯を手で探ったが、ジェニーの隣にいるカミーユを気にして手を止めた。

ジェニーは乳母を呼び、カミーユと部屋に戻るように耳打ちした。お菓子を先にもらっておいて、とカミーユに囁くと、彼女はジェニーの手を離れ、差し向けられた乳母の手をさっと握った。

「さすが、母親だ」

サンジェルマンは感心したようにジェニーとカミーユを交互に見たあとに、腰帯から何かを取り出した。ジェニーたちの前に差し出されたのは、剣の紋章が束に彫られた、年季の入った短剣だ。

「返さねばと思いながら今日になってしまい、申し訳ない。これはあなたに所属するものだ。お返しする」

ジェニーが、父アルベールからもらったもの。

ジェニーは感極まって、それを両手で受け取った。何年も使っていないはずだが、鞘も束もきれいに磨かれている。サンジェルマンが大事に手入れしてくれていたのだろう。

ジェニーが嬉しさを共有しようとアリエルを見ると、彼女はなぜか頬を硬直させ、目を上げようとしなかった。

「そうそう使う機会はないだろうが、いつでも使えるように刃は研

いである」
ジェニーは短剣を鞘から抜き、刃先を日光に反射させ、鋭利なきらめきを確かめた。その刃先が誰かの肉体に沈むことは想像もしたくないが、恐ろしいほどに切れ味がよいはずだ。
「ありがとう」
サンジェルマンは顔の前で手を振り、ジェニーの礼を遠慮した。
「ほかにそちらでの入用がなければ、私はこれで失礼する」
用事が済めばすぐにでも帰りたいという、いつにもまして、事務的であっけないサンジェルマンの物言いだ。ジェニーは彼を引き止める気もなかったが、彼にくるりと背を向けられると、さすがにむなしく感じた。
「では、二日後の闘技大会の会場にて。観覧する気が当日まであれば、だが」
「剣を使わない戦い方を見るのもいいだろう、って王が言ってたわ」
ジェニーがサンジェルマンの背中に向かって答えると、彼は振り返り、肩をすくめてみせた。
「女がそれを参考にできるかどうかは疑わしいが……今のところ、観覧する気でいるということか。
承知した。競技中、いつ気分が悪くなってもよいように、迎えの馬車は近くに待機させておく。ただ……私だったら、好き好んで、殴り合いの醜い喧嘩など見物しには行かぬだろうな」
数日前にもアリエルに同じように意見されたが、ジェニーは彼女にも、サンジェルマンにも賛成しはしない。
彼らにはわからない。
ジェニーは、肉体の激しいぶつかり合いや流血場面を見たくて、闘技場に行くのではない。ただ、王城の外の空気を吸いたいだけだ。ジェニーがもともと過ごしていた世界と同じ空気を感じるためだ。
ジェニーの抑圧された心を少しだけ理解しているから、王は、ジェニーを闘技大会へと送り出してくれる。

今日は来客の多い日だった。朝食後に来たユーゴを皮切りに、女官長が立ち寄り、サンジェルマンがやって来て、今度は、多忙を極めているはずのライアンと共に、王までもジェニーを小城に訪ねた。剣の練習をした後なのか、彼の額や首筋に汗が残っている。

ジェニーは王の思いがけない来訪が嬉しかったが、彼も、そしてライアンも、どことなく張り詰めているような雰囲気なのが気に掛かった。大会を前に、会場の警備に神経を尖らすライアンの緊張が高まっているのは理解できるが、王は逆に興奮していてもよさそうなものなのに。だが、王は不機嫌というわけではなさそうだ。

ライアンは眉をひそめてアリエルに何かを囁いていた。彼女は驚いたように彼を見返したが、すぐに口を結び、ジェニーを置いてどこかに行ってしまう。

ジェニーは彼らの醸し出す異様な空気の中でも、頬に笑みを保ち、王の前に歩み寄った。

「今日も忙しいんでしょう?」

ジェニーが笑いかけても、王はジェニーの瞳をのぞきこんで笑うことはない。

笑っていない彼の顔は、眉や鼻、唇までも直線的で、実年齢よりもずっと大人びて見える。唯一やわらかな印象を与えるのは、ふんわりとした、絹糸のような彼の髪だ。無駄な贅肉のない彼の顔を、白い髪がやわらかく照らすように包んでいる。

ジェニーが赤みの残る彼の頬に手を近づけると、彼の視線がジェニーに降りてきた。冷気を放つ視線だ。ジェニーは不安になるが、彼の瞳がジェニーの手を捕らえると、それは次第に常温に戻っていく。

「今日はどうしたの?」

「王は稽古の成果をご覧になりたいそうだ」ライアンが王に代わってジェニーに返答した。

「稽古って、剣の?」ジェニーは驚き、しゃべり方を忘れたかのよ

うに口を開かない王を見た。「まさか、今から？　私はまだ実際の剣を握って練習してないし、ライアン様だって大会直前で忙しいのに――」

「俺だとて忙しい」

王が苛立って、不満そうに口を挟んだ。

「じゃあ、別の日にしてもいいんじゃない？」

「俺は常に忙しい。俺が今見たいのだ、おまえはそれに従えばよい」

王はときどき、ひどく横柄な態度をとってジェニーを憤慨させるが、今回もまさにそれだ。王はジェニーが腹を立てたことに気づき、喉の奥を鳴らして笑い声をあげた。

「おお、いい表情だ。そのまま、俺を敵だと思うてかかってこい。おまえの相手は俺が務める」

揺れた前髪の下から、灰色に変化した王の瞳がジェニーをあざ笑う。

誰も、ジェニー自身も、ジェニーがゴーティス王に剣で勝てるとは思っていない。勝敗はライアンの判断で、という王の言葉は、聞いた者たちの耳に入った瞬間に忘れ去られていただろう。ジェニーは過去に一度だけ王と剣を交えたことがあるが、王の命を狙って振り降ろしたジェニーの剣はあえなく飛ばされ、二人の力量の差を見せつけられた結果となっている。

王に勝てるとは思わない。それどころか、ジェニーは彼と剣をまともにかち合わせることもできないかもしれない。

なぜ彼は今、剣の練習の成果など見たがったのだろう？

何度めかに向き合ったジェニーの対面で、今も、王はジェニーをよろめかせる。

だが、王の何に腹が立つかといえば、彼はジェニーにどこから木剣を向けられたとしても、いちいち胸の正面でそれを受け止め、ジェニーがむきになって体重をかける様をじっと見ることだ。彼がそ

の気になれば、ジェニーの木剣を力ではね返すことだって、いとも簡単にできるはず。

王は一筋の汗すら、額ににじませていない。ジェニーは無駄に呼吸をしているような気がしていた。一方的に体力を浪費している自分が、ジェニーは口惜しくてならなかった。

「おまえは……ライアンの教えを何も聞いてはおらぬな」

木剣が重なった交差部分の上から頭を出し、王がジェニーに言う。

「何がよ？」

ジェニーがかっとして言い返すと、王が薄く笑った。

「その反応だ。おまえのように頭に血がのぼっておる者が、戦場では真っ先に死ぬ」

「私は戦場になんか行かないわ」

「どこでも同じことだ」

王は呆れたように言い、頭を引いた。同時に木剣も引いたので、ジェニーは木剣を構えたまま、彼の硬い胸にぶつかる。

「頭を冷やせ。ライアンはおまえに何を教えた？」

ジェニーは陰が差すと灰色に見える王の瞳を見上げ、ライアンの怒鳴り声が「相手の力を利用しろ」と繰り返し叫んでいたことを、ようやく思い出す。そして、他にもいくつか話していた、小柄なジェニーならではの対戦方法。ジェニーの小さな体は不利だと思われがちだが、それが相手の油断を誘うこと、また、相手の腕を逃れ、その体に密接に近づける、という利点も彼は言っていた。

ライアンの教えどおりに、一瞬の隙をついて相手の胸の前に入り、脇腹に致命傷を与えられれば――もしそれができたなら、王にさえ勝てるかもしれない。

ジェニーは王を再び見返した。彼の瞳には熱が戻ってきていて、ジェニーはその瞳を見つめていると、耳の感覚を失い、肌に触れる空気の冷たさも忘れていく。

突然、王がジェニーの木剣をつかんで、瞳を近づけた。

「思い出すのに時間がかかり過ぎだ。おまえは、もう死んだ」
「待って……！」
王が木剣を押したので、ジェニーの体は必然的に地面に押し倒された。肘や背中に痛みを感じる前に、王が放り投げた木剣がジェニーの腹に降ってくる。
ジェニーが急いで起き上がろうとすると、王が服についた土埃をはらいながら、ジェニーを冷ややかに見下ろした。ジェニーは彼に冷淡な態度をとられる理由が分からず、混乱して、彼をただ見つめ返す。
王が腕組みをし、さらに冷たい視線をジェニーに送った。
「助かりたければ、一瞬たりとも油断するな。おまえが迷い考えておる間に、相手はおまえの命を奪う。おまえが勝手に窮地に陥ろうと、ほかの人間は――俺は、おまえを助けはせぬぞ」

第二部　5．生と死の境界線－7（前書き）

ちょうどいいところで切れず、ちょっと長めの回となってしまいました。
ごめんなさい～！

“晩餐の間”に入る手前で、通路の向こうから歩み寄ってきたサンジェルマンの顔をひと目見たとたん、ゴーティスは、彼らが任務を失敗したのだ、と予想をつけた。

だが、予想どおりの結果でも、ゴーティスはがっかりもしなければ、彼を責めるつもりにもなれない。ゴーティスはその任務を彼に命じた時点から、既に心のどこかで、それがうまくいかないだろうと感じていたのだ。決してサンジェルマンの失敗を願っていたのではないが、ゴーティスには、その“相手”を捕らえられる気がまるでしなかった。

王、と呼びかけられる前に、サンジェルマンの口から語られる事実を知るため、ゴーティスは重厚な扉の前で立ち止まった。

「申し訳ありません」

口を開くなり、サンジェルマンは低く囁いた。ゴーティスが無言で先を促すと、サンジェルマンの小声が続いた。

「彼らは邸宅にはおりませんでした。私どもが踏み込む直前に、クレマン家の者が彼らを逃がしたものと思われます。無論、クレマン家の当主は彼らとの関係は何も認めませんが」

それはある意味、当然の結果なのだろう。

自分の予想が事実と変わっても、やはり、ゴーティスは驚かなかった。怒りも突き上がってこない。

「奴らも必死だ、そう簡単に尻尾は掴ませまい。……クレマン家については、引き続き調査しろ」

「御意」

ゴーティスの前でサンジェルマンは頭を下げ、その揺れた髪のすきまから、冷え切った外気が立ちのぼる。彼のくすんだ金髪と色をなくした唇を見ると、ゴーティスは急に、すぐそこまでやって来ている冬を感じた。常にどんよりとして灰色に染まった空、身を切る

ような寒さ、どこまでも続く白い無の世界。根拠のない不安がゴーティスの胸を埋めていく。

寒さと雪で何もかもが不自由となる冬に突入しないうちにと、カサンドラとゴーティスが結婚したのは、ちょうど一年前だ。その当時も幸せな結婚生活はまったく期待していなかったが、子どもの一人ぐらい、この一年で恵まれると思っていた。だが残念ながら、カサンドラは今までに一度も妊娠していない。ゴーティスの長年の習慣で、ときどきは妻の体外に子種を放出してしまったこともあるけれど、皆が囁き合うように、彼女は子どもができにくい体質なのだろう。ジェニーとは違って。

いや、何より、ゴーティスは義務的な伽に辟易していた。相手が絶世の美女や豊満な肉体をもった女ならともかく、妻は大人になりかけの少女だ。

ジェニーはカサンドラとは違って、既に子がいる。つまり、ジェニーは子が産める体だ。

どこの国でも、王に子がいないのは大きな問題だ。ジェニーを妊娠させるのは、ゴーティスにも難しくはないだろう。ジェニーにひそかにその都度飲ませている避妊薬を、一時的にやめてみたら……？

「おそれながら、王」

ゴーティスはサンジェルマンの声にはっとした。彼に心の内が見えるはずもないが、ゴーティスは慌てて、胸に膨らんでいた邪道な思いを押しつぶす。視界の端に、カサンドラの護衛であるジルの横顔がかすんだ。

「まだ何かあるのか？」

「明日の闘技大会の件です。やはり、彼女の出席は見合わせた方がよろしいのではありませんか？」

「奴らがジェニーを奪い返しに来るとでも？」

はい、とサンジェルマンは腰帯にさがっている布袋に手を触れた。そこにはおそらく、ジェニーの兄ローレンが人を介してジェニーに

渡そうとし、彼女が受け取る前に没収された手紙がある。手紙の中で、彼は妹に闘技大会の場での再会を約束していた。そしてその再会は、兄妹がただ会うだけでは終わらないことだと、サンジェルマンもゴーティスもよく分かっている。

「クレマン家以外にも彼らに協力している貴族はありましょう。ローレンの仲間がその家の者と貴族席に入って、そこで彼女と会話しようとも、誰も何の疑いも持たないでしょう。その場でちょっとした騒ぎでも起こし、その混乱に乗じて彼女を連れ去ろうと計画しているかもしれませんよ」

「それを阻止するための警備ではないか。それにジェニーとて、やすやすと兄の手を取りはせぬ」

ゴーティスはそう断言したあとで、自分自身が、そこまで自信を持って彼女を信用していることに驚いた。いつかジェニーが「あなたのもとを去って、兄と一緒に行くことはない」と言ったとき、ゴーティスは心の奥底からは彼女を信じはしなかったのだが、今は、彼女が自分以外の誰かの手を取ることが、到底、思いつかない。

「何もかも予定どおりだ」

これ以上の確かなものはないというようにゴーティスがサンジェルマンを見返すと、そうですか、と彼は諦観したように呟いた。

「されど、もし……ジェニーの前に奴らが現れたときは、その機に、一人を残して全て一掃しろ」

「ローレンを、ですか？」

「そうは言っておらぬ」

ローレンはジェニーの兄ではあるが、塩の商いに携わる彼とその仲間は、ヴィレールにとって害でしかない。クレマン家のように、国内では既に、彼らの塩取引の融通を図っている貴族が出ているのだ。このまま彼らを暗躍させておけば、国内にマキシム産の塩の流通が拡大するのもあっという間だろう。

兄が死ねばジェニーが悲しむのは分かっていたが、国益を考えれば、ゴーティスに迷いはなかった。だが、できることなら、彼女の

目にその惨劇が映ることは避けたいと思う。
そして、その気持ちを見越したように、サンジェルマンが言った。
「王、今もなお――彼女を出席させるご意向は変わりませんか？」
「しつこい」
「彼女は様々な危険に晒されましょう」
「ふん。起こらぬかわからぬ危険を恐れて、あの女を後生大事に城に閉じ込めておけば、俺が世間に何と言われるか分かったものではない。妃のように、ジェニーはか弱い女でもなかろう」
「……は」
サンジェルマンは顔を上げなかったが、ゴーティスは扉前の衛兵の脇にいる近衛ジルをちらりと見た。頑強な衛兵たちと並ぶと子どもにしか見えない彼が、王妃付きの侍女がジェニーを闘技場で襲撃する計画を母国語で話していた、とライアンに報告したのはつい数日前のこと。カサンドラに心酔しているジルは、あくまで彼女の無関係を強調したそうだが。
カサンドラが計画自体に関わっているかどうかは、ゴーティスには重要ではない。彼女側にとって、ジェニーが殺したいほど目障りな存在だと思われていることの方が、ずっと問題だ。貴族の誰もが参加する闘技大会に、ジェニーを皆の目から隠すように、出し惜しみでもするような扱いをすれば、王妃側はさらにジェニーを憎々しく思うことだろう。
「彼女の警護を徹底させるよう、ライアン殿に伝えておきます」
そうだ。いかなる有事に備えて。
ゴーティスはサンジェルマンを去らせると、“晩餐の間”の扉を開かせた。
しかし、ゴーティスは、サンジェルマンがケインの来襲まで懸念していることを、まだ知らない。

ジェニーが王城の屋上から眺めた、親指の爪ほどの光でしかなかった闘技場。風にのって流れてきただけだった歓声が、ジェニーがあてがわれた席に座った今、狂喜の喚声となって、あちこちから大波のように打ち寄せてくる。鼻先をかすめる空気はあきらかに晩秋のそれだが、人々の熱気で会場全体の温度は確実に、二、三度は上がっている。競技そのものはまだ始まってもいないのに、民衆のこの興奮ぶりは驚くべきものだ。

一般席の雰囲気とはまるで異なり、貴族席にいる人々はぶどう酒を片手に、優雅な会話にいそしんでいた。豪勢な食事がないだけの宴と、どこも変わりはない。女たちは競い合うように着飾っていて、一般席から眺める貴族席はさぞ色彩豊かに見えることだろう。ジェニーは自分が普段より派手に着付けられ、化粧をきっちりとほどこされた理由に合点がいった。また、屋外だというのに、女たちのまとう香水がいくつにも混ざりあって、貴族席一帯に充満していた。

ユーゴは出席者の者たちとの交流に余念がなかったが、彼らのほとんどは、ユーゴが声を掛ける前に自ら挨拶に出向いてきた。ユーゴはごく自然に、だが意図的に、ジェニーに彼らを紹介した。彼らも最初からそれを期待していたようだった。そのうちの何人かはジェニーとも面識があったらしいが、ジェニーは彼らの顔をいちいち覚えてはいなかった。

愛想笑いの下に隠れる好奇心や嫉妬、不自然にへりくだった口調。ジェニーはそれらが自分の上を通り過ぎるたびにどっと疲れ、競技が早く開始され、皆が席に落ち着くときが待ち遠しくて仕方なかった。

王と王妃はまだ姿を見せていなかった。貴族席の空席はなくなりつつあったので、王たちが会場へ登場するのももうすぐだろう。王が現れ、開会宣言をした後に、この大会はやっと始まるのだ。

ジェニーと王夫妻の席の間には、二十席以上の距離が開いている。夫妻の席の後ろには木製の高い防護壁のような物が立っていて、空席となっている後方の数列には、強面の近衛たちが陣取っていた。

最前列を占める夫妻の姿は、前から五列目の並びにいるジェニーの場所からは、見ることができない。ジェニーは、二人が並んだ光景を見逃せることに、ほっと胸をなでおろした。

ひっきりなしに訪れていた人々の波がひと段落して、ユーゴがジェニーの右隣の席にようやく腰を落ち着けた。彼の愛想のない妻はジェニーの左隣に座り、その隣の中年男の話に退屈そうに耳を傾けている。ジェニーのもう一人の侍女であり、護衛でもある女はジェニーの真後ろに席を取っていた。彼女の左には出席者の装いをした近衛兵が、反対側にはアリエルが座っている。ジェニーの前列にも何人かの近衛兵がまぎれているそうだが、誰がそうなのか、ライアンからは知らせてもらえなかった。

「ユーゴ・ベアール様！」

男の軽快な声がして、ジェニーもユーゴも振り返った。席の前の通路を、既に座っている者たちに謝りながら、黒髪の若い男と背が低く小太りの女が歩いてきている。

「お久しぶりです、ベアール様！　僕を覚えておいでですか？　ああ、ベアール様は九年前とまったくお変わりありませんね！」

ユーゴは愛想笑いを見せたものの、男の顔に目を留め、首を傾げている。

男は二十代半ばのように見え、顔も手もよく日に焼け、小麦色の肌をしていた。無造作に伸ばした黒髪を後ろで一つに束ね、口角が上向いた唇の上に薄く髭を生やしている。はれぼったい、一重にも見えるまぶたの下には、琥珀色のつぶらな瞳が見えた。ユーゴと並ぶと彼は数センチは背が低いようだが、胸板は厚く、ふくらはぎにも瘤のような筋肉がついていた。その立派な体躯に、青地に金と白で網目の模様が縫いこまれた服を身につけ、白い毛皮付きの黒い上衣を掛けている。男に黒い色はよく似合った。

ユーゴが困ったように笑い、肩をすくめた。

「どこかで会ったような気はするんだが……。九年前というと、た

ぶん、きみはまだ少年だったんだろうね？」
「ええ、十四歳です」
男は感じのよい笑いを浮かべながら、ジェニーに視線を移し、にっこりと笑った。
「こんなに色も黒くありませんでしたし、僕がお分かりにならないのも無理はありませんね。ベアール様、僕はクレマン家の次男マルセルです。九年前に叔父について東方の国へ行ったのですが、つい最近になって戻ってきたのです」
「クレマンか、そうだ！　きみのその瞳、母上にそっくりだ」
二人の男は力強く握手し、旧友のように肩を抱き合った。それから、マルセルは連れてきた小さな女を、旅の途中で知り合って結婚した妻だと、ユーゴに紹介した。彼の妻は夫とは反対に、おとなしくて気難しそうな女だった。頬骨の高さや鼻の形から、女には北方の血が入っていることが見てとれた。
「ところで、そちらの女性は？」
マルセルが興味深そうに、ユーゴの隣にいるジェニーを示した。新しい奥方ではありませんよね、というマルセルの発言に、ユーゴの妻が不愉快そうに眉を上げる。
「あはは、違う、違う。彼女はジェニーだ、私の姪だよ」
マルセルはジェニーの手を取り、指の先端に口づける。優雅で慣れた動作だ。彼は礼儀正しかったが、彼の武骨な手に触れられると、ジェニーはなぜか心もとなくなる。
「お目にかかれて光栄です、ジェニー嬢」
閉じていた黒いまつげが勢いよく開かれると、ジェニーはますます動揺して、彼から手を引き抜こうとした。だが、マルセルはジェニーの手をつかんだ太い指に力を入れ、笑う。
「以後、お見知りおきを」
ジェニーの目には、マルセルの笑顔が皮肉そうに歪んだように見えた。

三試合が終わり、正午をまわった頃だった。闘技場の上空だけ、ぽっかりと穴が空いたように雲が切れ、太陽はその真ん中に堂々と居座っている。競技開始前の安穏とした雰囲気はどこへやら、貴族の女たちはともかく、男たちはすっかり競技に熱中している。一般席の人々が「勇者の詩」という競技者を鼓舞する歌を大声で歌い、観客の熱気は頂点に達しようとしていた。

ジェニーも周囲の女たちの例に漏れず、眼下の競技場で繰り広げられている肉弾戦には興味がわかなかった。男たちがそこまで白熱して大歓声を上げる気持ちが、ジェニーにはわからない。ユーゴが野蛮な戦いと呼ぶように、競技者たちの対戦は、素手で殴り合うか、剣以外の武器なら何でもありの派手な喧嘩にしか見えないのだ。気分を悪くする女たちが続出する、というアリエルの説明もあながち間違いではなかった。ジェニーの席からは競技者たちの顔の造作まではよく見えず、たまに骨が折れる音が高々と響いたとしても、負傷の程度が確認できないせいで、まだ救われた。

ジェニーの隣で、ユーゴは早々に観戦を中止し、隣に席を取る初老の白髪混じりの男性と話しこんでいた。ユーゴが深く頷いたり、何度も相槌を打っていたりすることから、男は彼が親交を深めたい立場の、それなりの身分を持った者なのだろう。

ジェニーはユーゴから目をそらし、前列に座る女が夫らしき男の肩に頭を寄せるのを何気なく眺めた。男の手が女の肩を撫でるのを目にすると、王に恋焦がれてジェニーの胸が痛む。そのとき不意に、会場全体が静まりかえったように思えた。

五、六人の近衛兵が一斉に、剣を手に競技場の中央に突進していく――ジェニーが不審に思った矢先、人々のざわめきの中を女の甲高い悲鳴が貫いた。

「今の何――」

ジェニーが声のした方角を振り返ろうとすると、重いものが何か

に激突して割れたような、豪快な音が。男の野太い怒声がした直後、今度は複数の女たちの短い悲鳴が続いた。ジェニーは驚き、思わず席から飛び跳ねた。最前列席の前の通路を、大勢の近衛兵が血相を変えて駆け抜けていく。

「ああ、王！　王はご無事なの……！」

ジェニーも聞き覚えのある若い女の声が叫び、ジェニーは息をのんで席から立ち上がった。王妃の切迫した金切り声と前後して、最前列にいた貴族の男が叫ぶ。

「暗殺だ！　何者かが王に矢を放ったぞ！」

ざわめきはどよめきに変わり、ジェニーは胸の激しい痛みで息ができなくなって、両手で胸を押さえた。

息の――呼吸の仕方を忘れてしまった。息を吐くのが先か、吸うのが先だったのか。口を使えばいいのか、鼻ですべきなのか。

半狂乱の王妃の声が耳にこびりついていた。きっと、きっと彼は死んではいないだろうが、彼の生死を今すぐに確かめなければ、王の身が心配で、ジェニーの胸は今にも砕け散ってしまう。

王のいる場に走ろうと足を踏み出そうとして、ジェニーは前列にいた男に行く手を止められた。さっきまで女の肩を撫でていた男だ。

「そこを通して」

ジェニーは男にあからさまに怒りを向けた。すると、男はジェニーの態度に多少ひるんだようだったが、ジェニーの前に出した手はどけなかった。

「ご心配でしょうが、ここはどうかお留まりください」

「どうして！　私は王の無事をこの目で直接確かめたいのよ！」

「王を狙った犯人の仲間がその辺に潜んでいるかもしれません。騒ぎが落ち着くまでは、危険ですから、私どもと一緒にいてください」

ああ、彼はライアンが配したという近衛の一人なのだ。ジェニーの身の安全を保障するという、護衛。

自分の身などどうでもいいから、彼らには王の身を完璧に警護してほしかった。

「でも、私はあそこに行きたいの……！」
王が無傷でも、瀕死の重傷を負っていても、ジェニーは彼の姿を自分の目で見たかった。王だって、ジェニーの姿を真っ先に目で探しているはずだ。
「ジェニー、彼の言うとおりだ。しばらく、ここにいるんだよ」
後ろからユーゴに肘を掴まれ、ジェニーは呆然として、王の席の周りに黒い人だかりが形成されていくのを見た。肝心の王の姿はちらりとも見えず、王妃や女たちの泣き声が漏れてこなければ、ジェニーは彼がその群衆の中心地にいるとはとても信じられない。
（私は、王の近くに行くことも許されない……の？）
いつでも王の隣にいられたのなら、ジェニーが身を挺して彼を庇うこともできたのだろうに。
ジェニーは自らが置かれた立場の無力さを呪って、嗚咽をもらした。

それからほどなく、歓声の途絶えた闘技場にライアンの大声が通った。
「男をここへ！」
一度は静まりかえった闘技場が、あらたな劇的展開に面して息を吹き返し、大歓声に埋まる。
ジェニーはあふれた涙を拭いながら、王の席の間近から下の競技場を見下ろし、部下の近衛たちに指示を与えているライアンを見た。いつのまにか、眼下の競技場には近衛が数十人集っており、そのちょうど中央には、両脇を彼らに抱えられた若い男が立っている。ついさっきまで競技をしていた男で、男の右頬と右腕には血の痕が残っていた。
ライアンが左後方に振り向き、王、と言った。ジェニーの聞き間違いではない、確かに彼はそう言った。
幾層にもなった人垣の向こうに、真昼の太陽のような色をした髪

が動いていくのが見えた。
（ああ、彼は生きている……！）
会場の熱波が一気に押し寄せ、現れた王の迫力に屈し、押し戻される。
一見したところ、王に怪我はなさそうだ。まったくの五体満足。
「あいにくだったな」王は通路の壁に片足をのせると、拘束された暗殺未遂犯を上からのぞきこんだ。「獲物を一度で仕留めねば、自らが命を落とすとは聞いておらぬか？」
「はん！　どうせ殺すんなら、つべこべ言わずにさっさと殺せ！」
王が笑った。
「威勢のよいことよ！　望みどおり、おまえには死を与えてやろうぞ。今回の試みが、誰の差し金かを明らかにした後にな！」
「誰かの差し金だって？　はは、ばからしい！　俺はあんたが憎いから矢を放ったまでだ！」

ライアンも貴族席の者たちも、誰もが王と暗殺未遂犯のやり取りを見守っていた。ジェニーも事の行方を慎重に見守っていたのだが、ふと、アリエルの横でジェニーの侍女が座って居眠りしているのに気づいて、びっくりした。
この騒ぎの最中に、仮にもジェニーを守る役目を担う人間が、よくもまあ、のんきに眠れたものだ。貴族の者たちはほぼ全員、席から立ちあがって競技場を見ているのに。
それからジェニーは、彼女が膝に掛けている赤いショールに目を留めた。ジェニーがかつて彼女にあげた物だと思ったのだが、それにしては大きすぎるのではないか？
ジェニーがそれを手に取ろうとしたときだ。
「動かない方がいいな」ジェニーの背後で、挨拶でもするような軽い口調で男が囁いた。
「えっ？」
ジェニーはそれが自分に向けられたとは思いもしなかったのだが、

緑色の服に包まれた腕が背後から伸び、誰かの胸に押し付けられたとき、侍女の赤いショールには血の染みが広がっているのだと、ジェニーははたと気づいた。ジェニーの頭に唇を押しあて、男が囁くように笑っている。

「……あなた、誰？」

ジェニーは男を刺激しないようにと、さりげない口調で尋ねた。

「当ててみな」

男はジェニーに笑い、ジェニーの体をさらに彼の方に押し付けた。彼の腰に下がる剣が、ジェニーの体に当たる。彼はいつだって――ジェニーを殺せるのだ。

ジェニーが恐怖に直面して体を震わせると、男の背後から女の悲鳴がとどろいた。

「その男を解放してもらおうか、ヴィレール王！」

男の唐突な叫びに、ようやく、貴族たちも非常事態に気がついた。王も貴族席の方に初めて振り向き、男の腕に拘束された状態のジェニーと、今日初めて、視線を合わせた。

「ヴィレール王、これが目に入らないのか！　愛しい女の命が惜しければ、その男を自由にしてもらおうか！」

男が剣を抜き、あまりに鋭い刃先がジェニーの面前に突きつけられる。

ジェニーは必死に首を動かし、自分を拘束する男の顔を見ようとした。男の口元は笑っており、ジェニーはその顔を見て、小さく息をのんだ。彼は、ジェニーをこの場に足止めした、近衛だとばかり思っていた男だった。

第二部　5．生と死の境界線－8（前書き）

【注意】

残酷または不快に感じられるかもしれない場面が出てきます。
読まれるときは十分にご注意くださいませ。

第二部　5．生と死の境界線－8

刃面にある無数の細かなひっかき傷から注意をそらそうと、ジェニーは必死に男の名を思い出そうとした。今日が初対面だったような気もするし、面識があった者のような気もする。たしか、ジェニーたちが席に着いたときには、男は既に前列に座っていた。周辺にいた全員と簡単な挨拶は交わしているので、男も名を名乗ったはずだが、名前は覚えていない。

男の腕に顎を押し上げられ、剣の刃がジェニーの顔面にいっそう近づいた。ジェニーが怯えるよりも前に、声も出さずに、周囲の何人かが恐怖に息をのむ。

ジェニーは、男がこれまでにいくつもの命をその剣で奪ってきていることを、感覚的に分かっていた。下手に反抗する素振りを見せれば、この男は確実にジェニーに危害を加える。指先はまったく自由だったのに、ジェニーは力を入れられなかった。

「ヴィレール王、俺は本気だぞ！」

男が声高にもう一度怒鳴る。しかし、誰の声も返ってはこなかった。ジェニーの周囲で人が動きまわる音だけが聞こえる。

ジェニーは剣を手にしたユーゴの姿を男の刃の向こうにみとめ、やっと、緊張の糸を切らした。ユーゴの左右には、数人の制服姿の近衛兵たち。彼らはきっと、男のほんの一瞬の隙を狙っている。ジェニーから王の姿は見ることができないが、王は、虎視眈々と逆襲の機会を待っているのだ。

夏場の閉め切った納屋のように、貴族席を包む暑く重苦しい空気は動かない。誰も何もしゃべらない。ジェニーの頭の真上で、男が熱く湿った息を吐き出した。どこかの言葉で何かを呟いた後、また、短く息を吐いた。彼は苛立っている。ジェニーに密着する男の体が発する熱が、さらに熱くなったように感じた。

その瞬間、ジェニーの両足は浮いて、視界ががらりと変わった。女たちが抑えた悲鳴をあげ、恐怖にかられた男女が、ジェニーたちの前から慌てて走り去っていく。次にジェニーの足が地に着いたとき、男の腕越しに見えていたユーゴたちは消え、代わりに、王やライアンのいる最前列の風景がジェニーの目に飛び込んできた。

彼らはそこにいた。周りに近衛兵の数が増えてはいたが、ジェニーが最初に見たときと、まったく同じ位置だ。王にいたっては、前の壁に片足をかけた体勢のままだ。女たちの悲鳴で眼下の競技場から顔を上げはしたが、まるで壁にかかった静物画でも見るような、興味もなさそうな表情でジェニーを見る。彼の背後に影のように立つサンジェルマンの姿を見るなり、ジェニーの胸は驚愕と失意に握りつぶされた。

（ああ、そんな……！）

「その男を放せと言っただろ！」

ジェニーの想像どおり、王からの返答はない。

男の腕に締めあげられ、ジェニーの顔はまた上向いた。体の自由がきかないことは恐怖と呼ぶ以外ないけれど、皮肉にも、ジェニーは自分の体が拘束されているのをありがたいと感じていた。今、ジェニーが王の顔を見れば、彼の意思を確かめるはめになる。死に直面した状況そのものよりも、王がそれを理解しながら、ジェニーを見捨てるつもりでいる、と知るのが怖い。

楕円形の短辺側にある一般席が、上へ上へと連なっているのが見えた。広い闘技場は満席で、上段に席をとる者たちは無数の黒い粒にしか見えない。彼らは、貴族席でジェニーが死に向かい合っていることなど、知りもしないだろう。風にのって運ばれてくる人々の話し声は、森の木々がのんきに囁いているかのようだ。

ジェニーはいつまでも森の木々が奏でる音を聞いていたかった。ジェニーは現実逃避が好きではないが、現実を見つめたくないときもある。現実に面するには、いつだって勇気が要るからだ。

静かな木々の囁きに、女たちの小さな悲鳴と、ジェニー様、と叫

ぶ悲痛な声が混じった。彼女がどこにいるかジェニーには見えないが、アリエルだ。

ジェニーは、顔を覆う暑い空気が急激に冷え、その冷たさが顎の一部から発生しているのだと気づかされた。空気が顎に触れ、冷たさが痺れるような痛みに変化する。

血だ。男の剣がジェニーの顎に細い傷をつけたのだ。

ジェニーの体は、男の腕によってまた引きずられた。

「ヴィレール王、今度はこんなものじゃ、済まされないぞ！　この女の命を奪われたくなければ、早くその男を放せ！　聞こえないのか！」

王が、呆れたように宙を仰いだ。

「うるさいぞ。何度も言わぬでも、聞こえておる」

そして、あくまで面倒そうにそう言葉を発した。

「なっ……！　なら、この女が死んでもいいのか？　この女はまだ若い、死なすにはまだ惜しいだろう！」

王はにやりと笑い、男を見た。

「そやつにはそろそろ飽きていた頃だ、死のうが惜しくはない。おお、ちょうどよい機会だ、女はおまえにくれてやろう。剣の切れ味を試すなり、床に連れて行くなり、好きにするがよい！　俺には新しい女が必要だ」

そうして、王はジェニーにも同じ笑みを向けた。ジェニーの心臓が縮んで、これまでのような愛情のかけらもない、彼の下卑た笑いを目にして、息が止まりそうになる。

――新しい女が必要？

王が激務の合間をぬって、三日とあけずにジェニーに会いに来た意味は何だったのか。言葉足らずでぶっきらぼうでも、彼がジェニーを見つめる視線から、必ず愛情が溶け出していたのに。

――死んでも惜しくはない？

真夜中の寝所で半裸で抱き合いながらも、ジェニーが望まない伽はせずに、彼が話を続けてくれたことは何だったのだろう？　最近

になって、ごくたまにだが、彼は幼少時の話をぽつりぽつりと漏らすようになってきたところだった。ジェニーはそれが、彼が自分に心を許しはじめた結果だと信じていたのだ。

王の放った一語一句が信じられない。

残酷な言葉の数々も、敵を油断させ、ジェニーを救うための演技だと考えたかったが、王に動揺は見えなかった。ジェニーが彼と初めて出会った頃のような、乾いた冷淡さがはっきりと見える。王に代わって行動するだろうサンジェルマンは、王の背後で辺りを注意深く見回しているが、ジェニーの方へと動き出そうとする兆しはない。

貴族席の人々は、ジェニーを拘束する男や王をいたずらに刺激することを恐れてか、呼吸さえもはばかって、誰一人としてその場から動こうとしない。ジェニーがどれだけ見つめても、見えるものは何も変わらない。

ジェニーを押さえる男の腕が震えていた。男の腕を包む濃緑色の服に、黒っぽい染みがある。ジェニーの顎から流れ出た血だ。

男が剣を構え直し、ジェニーはあらためて男の顔を見る機会に恵まれた。たぶん、初対面だ。艶のある黒髪は肩先まで届き、ジェニーと似た色の瞳を持っている。琥珀色に見える。秀でた額に角ばった顎は意志の強さや頑固さを感じさせるが、瞳が小さめでくぼんでいるためか、今ひとつ、迫力に欠ける顔つきだ。首には縄のような形をした金の首飾りがかかっている。

男はジェニーをじろじろと見る。

「あんたもあの時にロハンと逃げればよかったんだ。そうすりゃ、目をつけられることもなかったのに」

「ロハン？　ロハンって誰？」

しまった、と男が顔をゆがめ、ジェニーの口を腕で塞いだ。「あんたには関係ない」

ジェニーは空気を求め、男の腕から逃れようと首を振った。と、

貴族席の群集の後部で、揉めているらしき二人の男女、その仲介に入っている男の姿をジェニーは見つけ、目が釘付けとなった。

仲介役の男は、ユーゴに挨拶にも来た、クレマン家のマルセルだ。女は彼の妻。ジェニーが見ている先で、女が男の顔面に頭突きをした。

「ロ……！？」

ジェニーの声はあえなく、男の腕の中で失われた。彼に伸ばそうとしたジェニーの腕も。

女と揉めているのは、地味な衣装に身を包んだ、兄ローリーだ。彼は服装によって印象ががらりと変わるが、彼がどんな服装をしていようと、ジェニーが彼を見分けられなかったことは、一度たりともない。

彼はこんなところで、いったい何をしているのだろう！

マルセルの妻に頭突きされ、ローリーは怪我をしたようだ。だが、それでも尚、ローリーは彼女に抵抗を試みたらしく、マルセルの腕に後ろから抱えこまれた。彼女がローリーの口を両手で押さえている。

ふと、マルセルがジェニーを見下ろし、歪んだ笑顔になったように見えた。

下の競技場で男たちが走る不規則な足音がして、木が軋むような不快な音が響く。王が暗殺未遂犯の男を示し、吊るせ、とライアンに告げた。

「王よ！　では、この女の命はもらい受けてもよいのか？　脅しなどではないぞ！　女の命が絶えてから、後悔することになるぞ！」

「好きにせい」

王の酷な返答を耳にして、ジェニーは歯を食いしばり、男の腕が首にくい込むにまかせた。

頭の真上に、真昼の明るい太陽が望めた。太陽を囲むように、薄

い雲がその周りを覆っている。王の髪色に似た、その眩しい光を受けると、ジェニーはどうしようもなく泣きたくなる。

古い神話に、ある男が太陽に近づこうとして、蝋で造った翼で空に舞い上がったところ、太陽に近づきすぎて蝋が溶けだし、翼をなくして海に落ちて死んでしまった、という話があるが、ジェニーもまた、太陽に近づきすぎたのだろうか？　日は皆の上に平等に照っているのに、ジェニーが都合よく解釈し、自分だけに約束された光なのだと思い込んでいただけなのか。

“おまえが勝手に窮地に陥ろうと、俺はおまえを助けはせぬぞ”

数日前、突然に小城にやって来て、唐突にジェニーの剣の相手をした王が言い放った、ジェニーを混乱させた捨て科白。

（――勝手に私が窮地に陥ったから助けない、とでも言うの？）

それとも、頼りなさげに悲鳴をあげたら、彼の気が変わるとでもいうのか。

だが、すぐさま、ジェニーはそのばかげた考えを拒絶した。王はさっき、ジェニーに飽きたと言ってのけたのだ。彼の気を引くために悲鳴をあげようなど、どうして考えついたのだろう。

それからジェニーは、自分自身に腹を立てた。

いつのまに彼の助けを当てにし、救い出してもらおうと考えるようになってしまったのだろう？　いつもいつも、ジェニーは自分で窮地を切り抜けてきたはずだ。今までも――これからも。

心の側面から血が滴り落ちるのを見て見ない振りをし、ジェニーは涙を必死で堪えた。涙を流したら最後、今立ちあがろうとしているジェニー自身が、足元から崩れそうな気がした。何とかして、無事にこの場を逃れきってしまえるまで、涙を遠ざけておきたかった。泣くのは全てが終わってから、思う存分すればいい。

この男の手から逃れなければ。

私はまだ死にたくない。

それまでは絶対、泣くものか……！

ジェニーは目をみはり、現状を打破できる何かを求めて、周囲を

観察した。ライアンと目が合ったが、彼はジェニーを訝しそうに見返しただけだ。ユーゴはおそらく、ジェニーたちの後方にいる。

アリエルは？　アリエルはどこにいるのだろう？

ジェニーを拘束する男は、周りを剣で威嚇しながら、ジェニーを後方に引きずっていった。

貴族席の前列部分からはすっかり人が消え、上段の席に人々がひしめきあっていた。ユーゴとアリエルは、最前列席の前に並んで立っている。ユーゴは剣を手にはしているが、まるで使う気がないように下に降ろしていた。アリエルは胸の前で大事そうに何かを抱えている。ジェニーにも見覚えがある――それもごく最近、見た記憶がある――当然だ、それはサンジェルマンから返却されたばかりのジェニーの短剣だったから。

ジェニーは小さな頃から剣に親しんではきたものの、誰かに大怪我をさせたり、人の命を奪ったりした経験は皆無だ。正式に剣を習い始めてから、ジェニーは本物の剣を握ることを実は好まないのだと、実感した。練習だけで満足だ。実践などしたくない。

だが、誰もがジェニーが傷つけられることを恐れ、ジェニーを助けてくれない。そして、ジェニーの手は、ある程度の自由がきく。

アリエルが持つ短剣を見つめながら、ジェニーは決意を固める。自分で自分の窮地を救わなければならないなら、ほかに、どんない い方法があるのだろう？

アリエルがジェニーの思いを察したらしく、短剣をドレスの裾でそっと隠すようにして、ジェニーたちのあとをついてくる。

二列目の突き当たりにまで行き着くと、男はジェニーを腕に抱えて止まった。

「くだらない考えは捨てることだ」

男の言葉にジェニーは動揺するが、男はアリエルの隣に立つユーゴの剣を見て言っていた。

「あんたの剣の腕はもっと別の機会に取っておくべきだ、こんな女に使うことはないぞ」
「仮にもベアール家一族の者、私の姪に対して、なんと失礼な！　それに、非力な女性を人質にとるなど卑怯だろう！　恥を知れ、恥を！」
「この女は本当に非力か？」
「何だって？」
男はユーゴを黙らせ、ジェニーの顔をのぞきこんだ。
「あんたの力が肥大化する前に始末しろ、という声もあるんだ」
「私に何の力があるの？　思い違いか、人違いだわ」
ジェニーは、アリエルが後ろに両手を回すのを見て、短剣が手渡される瞬間への覚悟を決めた。武器を手にした直後にそれを使わなければ、ジェニーの命は無残に散るだろう。行為の正当性に迷ったり、王に見捨てられた身を嘆いたりする猶予はない。
それはきっと、天の助けだった。
男の背後でユーゴとアリエルが目配せし合ったとき、身の毛もよだつような女の大きな悲鳴が貴族席中に響いた。男もジェニーも、ユーゴもアリエルも、王やライアンまでもが声のした方向に振り向いた。だが、驚いた男の手がジェニーから浮いた一瞬を、ジェニーもアリエルも見逃さなかった。
ジェニーは嘘のように落ち着きはらっていた。アリエルの手からジェニーの手へ滑るように移ってきた短剣は、最初からそうなる運命だったかのように、男の体を守る上等な絹を切り裂き、脇腹に吸いこまれていった。ジェニーはライアンに言葉で教えられたとおりに、柄の部分まで刃が男の体内に埋まるのを待ち、両手でそれを右側にぐるりと回転させる。
男は喉を踏まれたかのようなあえぎ声をあげ、ジェニーは両手を柄に固定しながらも、地面に腰を素早く落とした。男がうめきなが

らもジェニーに手を伸ばそうとしたところで、すかさず、ユーゴの剣がそれを遮った。男は吼えるような悲鳴をあげ、ユーゴの剣が奪った手首の断面から、鮮血が溢れ出した。

「ジェニー様！」

アリエルの腕が背中側から伸びて、ジェニーは地面を転がるようにして彼女の腕を探し求めた。アリエルはジェニーの腕をたぐり寄せると、ジェニーの肩を力いっぱい抱き締めた。

「ああ、ジェニー様！　よくぞ、よくぞ、ご無事で……！」

ジェニーはアリエルの温かな体にしがみついた。今、ジェニーが頼れる存在は、彼女しかいなかった。涙は喉の底まで到達し、感極まって言葉もつむぎ出せなかったが、ジェニーはまだ泣けなかった。

「よくやった。お手柄だ、ジェニー殿！」

いつのまにか加勢していたライアンが、ユーゴの隣でジェニーに振り返る。

ライアンに教えられた方法でジェニーが倒した男は、血まみれだった。止まりそうもない勢いで噴き出す真っ赤な血が、川のように座席の足元を流れていく。いくつかの血の支流は、前列の席にまで伝わっていこうとしている。

ライアンが男の脇にしゃがみ、ため息を漏らすのが聞こえた。

「これは……クレマン家の次男だな」

ジェニーの両手も生温かい血にまみれていた。短剣の刃を通して戻ってくる重い肉の感触は、ジェニーのその手が今もはっきりと記憶している。さらにはっきりと覚えているのは、男に短剣を向けた際、ジェニーの頭に指示し続けたゴーティス王の声。

「ジェニー様、王城に戻りましょう」

ジェニーが見つめていた手はアリエルの緑色のショールにくるまれた。

「王城へ戻る……？」

「はい」
ショールを見つめていると、不意にジェニーの目頭が熱くなる。
王との剣の稽古で、「おまえはもう死んだ」と彼がジェニーを突き放したとき、ジェニーはそこで“死んだ”のだ。彼の中でジェニーは“死んで”しまったのなら、ジェニーが王城にいる意味もないだろう。
「どうして？　私はもう戻る必要がないじゃない」
「そんなことをおっしゃらないでくださいまし」
ジェニーが目をあげると、アリエルの瞳も濡れていた。
「ひとまずは戻りましょう、ジェニー様。戻って、ゆっくりと湯浴みをなさいませんか？」
アリエルの優しさがいつものように心に染みない。
ジェニーが返事をしないでいると、二人の前に男が立ち、二人とも顔を上げた。ライアンだった。
「近衛を付けるゆえ、王城に戻ってはどうだ？　ベアール家の者なら安心だろう。今日はユーゴ殿にも滞在してもらえばいい」
「ええっ、ライアン様が滞在許可をくださるんですか？　いやー、それは嬉しい。ついでに、王城の特大風呂にも入らせてもらえます？」
ライアンは顔をしかめたが、ユーゴの頼みを拒みはしなかった。

第二部　5．生と死の境界線－8（後書き）

次回の更新は1月6日（水）となる予定です。

第二部　5．生と死の境界線ー9（前書き）

今回は2話アップしてます。
ちょっと重い回ですが、ごゆっくりお楽しみください～。

第二部　5．生と死の境界線－9

目立つ容貌でないのは得だ、とサンジェルマンは常日頃から思っている。特に、身分を知られずに動き回ることが必要とされる、彼のような立場では。

大陸のどこを旅しても、見上げるほどに背も高くなく、灰色の混ざった金髪に青い瞳という外見の男は、街中に溢れている。そしてそれは、二日に渡った闘技大会を終え、王城の大広間で行われている宴の場でも同じだ。サンジェルマンが気配を消し、人々の背後をすり抜けていっても、気づかれることはほとんどない。

サンジェルマンは、部屋の奥に席を取る王と王妃を見た。王はラニス公と会話しており、王妃はラニス公の母親と顔を寄せて話をしている。和やかにも見える彼らの様子だが、普段はめったに警備に出てくることがない近衛隊隊長が彼らの後方に控えており、昨日起こった暗殺未遂の緊張感を今も感じさせる。

新しい酒と料理を手にした給仕たちが大広間の入口に現れ、サンジェルマンは彼らの一人一人に目を向けた。目は無意識に黒髪の男を探すが、該当する男はいない。どの給仕も、今夜の宴が始まって以来、一度は見かけた顔だ。

（男がのこのこと王城に現れるはずもないな。今頃は安全な場所に身を潜めているだろう）

会場をぐるりと見回したところで、サンジェルマンは入口から顔を出したライアンに気づいた。彼が、わずかに首を左に傾ける。サンジェルマンを呼んでいるのだ。

前に立ちはだかった中年の女性を笑顔でやり過ごし、サンジェルマンは壁際に沿って静かに移動する。出席者たちの談笑で彼の足音がかき消される。彼が王にもう一度振り返ると、王は杯に口をつけながら、ラニス公の話を聞いているところだった。

サンジェルマンが近づくと、ライアンは彼を室外に招き寄せた。指を性急に動かす動作が、ライアンの苛立ちを物語っている。
「新しい情報でもありましたか？」
サンジェルマンの問いに、ライアンは無念そうに息をついた。
「男が死んだ」
「どの男です？」
「王に矢を放った男だ。口を割るまで今少し生かしておきたかったが……もたなかった」
第三試合に出場した、筋骨隆々とした、若いわりに額が禿げ上がっていた男だ。数年前にヴィレールに併合された東南部の国境に近い地方出身で、妹が肌を売るヴィスコンデールの娼館で数ヶ月前から用心棒として働いていたそうだ。
「それは残念なことを。では、今回の黒幕はまだ分からないのですね」
「そうだ。男が誰かに金を貰い受けて今回の事件を起こしたのは確かだが、娼館でそれを突き止めるのは無理があるだろう。男の妹はとっくに行方をくらましている。だが――」
ライアンが声を落とし、サンジェルマンは眉を寄せた。ライアンが小さく咳払いする。
「どうやら、男とクレマン家の次男に直接的な接点はないようだ。彼は男を救おうと人質まで取ったのに、男は、彼が見も知らぬ自分を庇おうとする理由が皆目見当もつかない、彼とは無関係だ、とずっと主張していた。
我々はそれを信じようともしなかったが、ここへきて、私にはどうにも腑に落ちない点がある。そういえば、彼は男の解放を要求したわりに、王に拒否されるとあっさりと引き下がった。仲間であるはずの男を見捨てたと言っていい。しかも、ユーゴ殿が聞いたところによると、男は『彼女の力が肥大化する前に始末した方がいい』と発言したそうだ。もしやとは思うが、クレマン家の次男は、最初から、彼女の命が目当てだったのではないか？」

「彼女を殺したところで、彼らが何の恩恵を受けるというのです？」
「それは分からぬが」と、ライアンはわずかに非難めいた視線をサンジェルマンに向ける。「彼女の死が、王に打撃を与えられると考えたのだろう」
「ですが、クレマン家は――」ライアンが小さく首を振ったため、サンジェルマンは言葉を止めた。
「彼女の兄が取引相手だからといって、クレマン家次男が彼女に義理立てするとも限らぬだろう。
二人にどの程度のつきあいがあったのかは不明だが、クレマン家当主によれば、次男は金に困っていたということだ、大金を積まれれば、仲間の目を欺いて、仲間の妹であるジェニー殺害を引き受けてもおかしくはない。問題はその依頼主は誰かということだが、その――クレマン家次男を名乗った男を捕らえられれば、もう少し事態は解明できそうなのだが」
ユーゴにクレマン家のマルセルだと名乗った、謎の黒髪の男。死んだ本物のクレマン家の次男と似通った容貌をしていたそうだ。おそらくは、二人は何らかの形で関わっている間柄だろう。
ジェニーが、男と彼の妻と名乗った女に、兄ローレンが無理やりに拘束されるのを貴族席で目撃したそうだ。ローレンが二人に抵抗していたことから考えると、あくまで想像だが、彼はクレマンたちの企みを知らされずにその場にやって来て、事件に遭遇した可能性が高い。さらに言えば、彼らは今回の件で仲間割れをし、ローレンは彼らにとって不都合な存在として、口封じのために既に殺されているかもしれなかった。
状況証拠だけをつき合わせればライアンの推理は正しいのだが、サンジェルマンは、どうしても納得がいかなかった。
なぜ今、国家に背いた塩取引に密かに協力していると疑われている時期に、クレマン家はわざわざ自らが目立つような事件を起こすのだろう？　王の暗殺はそれが未遂で終わろうとも大罪で、暗殺犯

の出身である家は例外なく、一家滅亡の憂き目に遭う。塩取引で今から富を築きたいはずの一家が、どうしてそんな愚かな行為に走るだろう？

「死んだあの男は、本当にクレマン家の次男なのですか？　その行方不明となった男こそが本物ということは？」

「一年半前にクレマン家の長男が死んだ際、その葬儀で私は彼に会っている。それに昨夜、当主である彼の父にも死に顔を確認させた。間違いはない」

「そうですか……」

謎は深まるばかりだ。現時点で手元にある情報を繋ぎ合わせても、サンジェルマンを納得させられるだけの答えは導き出されない。

ちょうどそこへ黒髪の給仕が通りかかり、二人は揃って彼に注意を移した。しかし、給仕はサンジェルマンが数年来知る男だ。男が大広間に消えていくと、ライアンが床を見つめ、呟いた。

「黒髪の男の捜索に全力をあげよう。真相解明には、それしか方法がなさそうだ」

男が死んだ、と告げたときより、ライアンはずっと口惜しそうだ。

そうですね、とサンジェルマンは同意し、彼とともに大広間に足を再び戻す。涼しい廊下から入ると、大広間は人々の熱気でむせかえるほどだった。

宴への出席者を見たところ、サンジェルマンの見知らぬ顔、王城へ来たのがまったくの初めてという出席者は十人足らずだ。ただし、その全員が正式な招待状を持ち、誰かの成人した息子だったり、親類筋だったりする。身元が不確かで正面から疑って然るべき者は、今夜の大広間にはいない。

つい先ほどから宴に参加していたユーゴが妻と分かれ、人々の波間を泳ぐようにして挨拶をして回っている。彼は社交場では人気者だ。彼が寄る先々で、明るい笑い声が湧き上がる。

ユーゴはジェニーを連れていなかった。彼女も今夜の宴の招待客ではあったが、昨日の事件のあとだ、精神的な動揺は今も続き、宴を欠席したのだろう。アリエルと接する時間も取れない今、サンジェルマンにジェニーの状況は測りしれない。

会場を一回りして戻ってきたライアンと入れ替わるように、近衛隊隊長が出席者たちの間に入っていく。王妃の席の後方で、ライアンが右肩をまわしているところを見ると、会場内で特に問題は見とめられなかったようだ。

サンジェルマンは、王と話をするために並ぶ人々をざっと見た。王と接見するには丸腰でいる必要があり、当然、どの男たちも剣は身に着けていない。彼らに同伴されている女たちには、羽の付いた扇くらいしか持ち物はない。指に重りのようにはまる大きな宝石のついた指輪が武器になりそうではあるが、完璧な装いに飾り付けられた彼女たちは、自分たちの大切な石が傷付くような行為を決して許さないだろう。列の最後の方には、いつのまにかユーゴが並んでいた。

ユーゴの順番が近づき、サンジェルマンは王の脇に静かに移動した。ユーゴが問題行動を起こすような非常識な人間ではないと理解してはいたが、彼が王に何を言い出すつもりなのかが気になった。思いは同じなのか、ライアンも王の真後ろに歩み寄ろうとしている。

ユーゴが目の前に跪いても、王の顔色は変わらなかった。ただ、隣の王妃はひきつった表情を隠せなかった。彼女の横に並ぶ侍女たちにもユーゴに対する敵意のような鋭い感情が浮かんだが、彼女たちはすました態度をとることで、それをうまく覆い隠すことに成功した。

「おお、昨日の立役者、ユーゴ・ベアール殿ではないか」

王はユーゴに顔を上げさせた。

「お会いできて光栄にございます。王、そして王妃様には、ご機嫌麗しゅう」

「堅苦しい挨拶はよい。昨日は見事であった。さすが、剣の誉れと名高いベアール家だけのことはある。ちょうど、おまえとおまえの姪には褒美を取らせようと考えておったところだ」

王妃の伏目がちな視線が、ユーゴの頭を飛び越え、後ろに並ぶ人々に届く。彼女の手が不安そうに黄金のドレスの前で動いている。彼女はそこにいるはずもないジェニーの姿を探しているのだ、とサンジェルマンは見当をつけた。

「お褒めに預かり、光栄です。ですが、姪も私も、王の御為に当然の事をしたまでにございます。そのようなこと、どうかお気になさらないよう」

「遠慮は無用だ、おまえたちの働きは賞賛されて然るべきもの。欲しいものを何なりと申しつけるがよい」

「ははっ。ありがたき幸せに存じます。あいにく、姪は昨日の事件のことで動揺が激しく、この場からご容赦いただきましたが、姪にも王からのお言葉を伝えておきます」

王が細く唇を開いて笑った。

「そうしろ。おまえから彼女が希望する品を訊いておけ」

サンジェルマンの目にも王のジェニーへの慕情が読めなかったのだから、ほかの人々も同じだろう。

ユーゴは胸に手を当てて恭しく王に頭を垂れ、次の男に順番を譲った。

サンジェルマンが大広間を一巡りして王の元へ帰ってくると、ちょうど、王妃が侍女たちに付き添われて宴を去ろうとしているところだった。王妃の頬は赤らんでいるが、気分が悪いのか、口を白い布で押さえている。侍女の一人が、黒い小さな扇で王妃を扇いでいた。

「王妃様はお加減がすぐれないのですね」

サンジェルマンの心配を鼻であしらうように笑うと、王は言った。

「なに、いつまでも娘気分が抜けないだけだ。俺の隣が気に入らぬのだろうよ」

「また何か、意地悪なことをおっしゃったのではないでしょうね？」

最近の王は、サンジェルマンがこれぐらいの軽口をたたいたからといって、神経質に怒鳴ることはほとんどない。王は目を細めてサンジェルマンを見つめると、ふん、と毒づいた。

「妃を見ろ、泣いてはおらぬだろう。――少なくとも、この室内で涙は見せるな、と言うてある」

サンジェルマンは、出席者たちに心配そうに声を掛けられながら退室する王妃に振り返った。彼らにいちいち返事をしているので、彼女は多分泣いてはいない。

サンジェルマンが王に注意を戻すと、王は顎を手で押さえながら、宙の一点を見つめていた。

「王妃様と喧嘩をなさったのですか？」

「あの女が俺と喧嘩できるはずもなかろう？　妃は俺に何も口答えできぬことが耐えられず、自らを哀れみ、宴も列席者も捨てて退室するのだ。あの女はこの国の妃でありながら、八年ぶりに再開された国家行事を祝うこの宴に、何の敬意も払っておらぬと見える」

サンジェルマンは王の言葉に感銘を受けた。

最近の王は、自分が王であること、王として為すべきことを、人一倍、自覚している。いや、最近ではない、彼ははるか昔から、ほかの誰よりも王位に敬意を示し、即位する頃には王としての自覚に目覚めていた。混迷した数年のときはあったが、王はようやく、即位した当時の誇り高い彼に帰りつつあるのだ。

サンジェルマンが王を感慨深く見つめていると、それに気づいた彼が顎から手を離した。サンジェルマンを見て、不審そうに彼の眉が動く。

「それでも、王妃様が気分を害されるにはそれなりの理由があるでしょう。何をおっしゃったのです？」

王が淡々と答えた。

「妃は、俺にジェニーの様子を見に行けと言うたのだ。暗殺犯とはいえ、人を傷つけて平気ではいられないだろうから、とな。自分も彼女を心配しているが、彼女はきっと俺に会いたがっておるゆえ、この宴の喧騒にまぎれて、俺にジェニーに面会しに行ってはどうか、と言いおった」

「……王妃様はお優しい方ですね」

「気弱な妃にしてはよう言うたと思うが、俺はそれを優しいとは呼ばぬ。女に会うために俺に宴を抜け出して小城に行けなど、仮にも一国を預かる王の妃が言うことか？

それゆえ、ジェニーが心配ならおまえが面会に行け、と妃に告げた。自分の身を心底心配してくれるのなら、ジェニーはそれが誰であろうと喜ぶだろう。俺は行く気がないゆえ、おまえがジェニーを訪ね、彼女の労苦をねぎらってやるがよい――そう言うたところで、あの女は俺に顔をそむけた。具合が悪いと聞いたのは、そのすぐ後だ」

サンジェルマンにも、そのときの王妃の青ざめた顔が容易に目に浮かぶ。王の突き放した態度に、それこそ、王妃は心臓を矢で射抜かれたような衝撃を受けたことだろう。

新しい酒を注がれ、王が杯を軽く舐めるようにして味を確かめた。彼の体に染み込んでいる習慣の一つだ。その舌で、酒に異質なものが混ざっていないかどうかを確認している。

王が酒を口に含んだあと、ぽつりと言った。「あの女は乗り越えるだろう」

サンジェルマンは、ジェニーのことですか、と問い返そうとして、口をつぐんだ。王が杯をサンジェルマンに掲げていた。

「そうは思わぬか？」

サンジェルマンは答えに迷った。奇妙だが、確信めいた予感があったのだ。王にここで同意すれば、王とジェニーの間には簡単には埋まらない、暗く深い溝ができるだろう。

いまだに彼女の存在を認めきれないサンジェルマンは、彼女自身が王から去ってくれるような状況を、どこかで常に期待していた。そして、たった今訪れたこの機会に彼が口をつぐむことが、そのきっかけとなるように思えてならない。

誰かの手がサンジェルマンの前に伸び、杯が差し出された。サンジェルマンがそれを手に取ると同時に、給仕が白く濁った酒を満たす。強い、発酵酒の匂いが鼻についた。

「八年ぶりの闘技大会に」

王が瞳を艶かしく輝かせ、サンジェルマンの杯に自分の杯を軽く当てた。その小気味よい音が頭の中に響きわたったとたん、サンジェルマンの口から、思ってもみない言葉が自然に押し出された。

「彼女はいずれ、この危機を無事に乗り切るでしょう。ただし、何の誤解もない状況で、というのが前提条件です」

「……誤解だと？」

王が意外そうに目を見開くのと同様に、サンジェルマンも自らの発した発言に驚く。

「はい」

「誤解するような状況があるか？」

「彼女は公然と王から捨てられたわけですし、そのあたりを彼女がどう捉えているのか……誤解がないとは私には言い切れません」

「俺があの場で、妃でもないあやつを助けられるはずがなかろう？それぐらい、ジェニーも理解しておるはずだ」

「ええ――そうだと良いのですが」

なぜ、ジェニーの味方となるような意見を口にしてしまったのか。サンジェルマンは不思議だった。だが、なぜか、黙っていることの方が悪だと、そう切に感じた。

王はあくまで怪訝そうにサンジェルマンを見つめ、そして、呆れたように首を振る。

第二部　5．生と死の境界線－9（後書き）

リアルタイムで読んでくださっている方々、明けましておめでとうございます！
今年も引き続き楽しんでもらえるよう、頑張って書き続けたいと思いますので、よろしくお願いいたします♪

※次回以降、更新はこれまでどおりの火曜日0時以降となります。

第二部　5．生と死の境界線－10

涙を流していないから悲しんでいないなど、どうしてそう判断できるのだろう？　父の遺体に抱きついて号泣するケインと、彼と母を遠巻きに眺めて立ちつくすしかなかったゴーティスに、悲しみの差なんてあるはずがないのだ。

だが、通夜の仕度を、と大臣に指示したゴーティスを、母は罵倒した。実の父が亡くなったばかりなのに、なんて淡々としているのか、と。

ゴーティスは自分のすべきことをしたまでだ。父が事切れる直前に彼から譲り受けた王位と彼の遺志に、ゴーティスは忠実に応えようとしただけ。父は、家族から嘆かれ悲しまれることを望んではいなかった。

いつも父の隣にいながら、母はなぜ彼の想いがわからなかったのだろう？　彼の望みは唯一つ、腐敗し汚れた者たちから、尊い王位を守ることだった。彼の誇り高い意志は、そのための犠牲はいとわなかったのだ。それがたとえ、自分の命だったとしても。

父の亡くなった日の夜を思い出したのは、ゴーティスが窓から見上げる空が、当時と同じように青い雲で覆われていたせいだ。灰色の雲は月の青い光を通し、不気味なその光は地上にまで届いて、寒々とした一帯をゴーティスの前に浮き上がらせる。

窓に指で触れると、雪解け水のように冷たかった。つまり、屋外はそれほどまでに気温が下がっているということだ。冬は間もなくヴィレールに訪れる。

宴の出席者のほとんどは帰宅し、王城に残っているのはラニス公など王家の縁者だ。興奮冷めやらぬ人々は、大広間から別室に場所を移し、今もまだ杯を片手に大声で笑い合っていることだろう。

ゴーティスは真夜中を越える前に自室に引き上げた。暖炉には勢

いよく火が焚かれ、部屋は大広間と変わらない暖かさに保たれていたが、ひと気のない室内は寒気を感じさせた。とりわけ、皺一つなく整えられた寝台は空虚に映る。深紅の敷布の上に置かれた、ベージュの毛皮でできた掛布。誰にも使われていない寝台はそこだけ、寒風が吹き抜けているようだ。

この部屋には妃であるカサンドラさえ入れたことはないのだが、ゴーティスはふと、その寝台の上にジェニーが眠っていてくれればいいと思った。

彼女が自分に気づかなくてもいい。部屋に彼女の気配を感じるだけで、ゴーティスは満足するだろう。

（……おまえは今頃、何をしておるのだろう？）

ジェニーが自分の手を汚して人を殺したのは、今回が最初だろう。それが故意でも偶然でも、初めて他の人間を手にかけたときには、どんな者もかなりの動揺に身を晒される。戦場で数え切れない相手を死に追いやった経験があるといっても、ゴーティスも、己の身を守るために初めて人間の喉を掻き切ったときには、相当な心理的苦痛を強いられている。

ゴーティスはジェニーが心配だった。カサンドラにたきつけられなくとも、ゴーティスはジェニーに会い、彼女の無事を確かめ、彼女をその腕にしっかりと抱き締めたかった。

ジェニーが暗殺犯の仲間の手に取られたとき、ゴーティスは、体から狙いが外れたはずの矢で心臓を深くえぐられたような気分に陥った。彼らが、ジェニーがゴーティスの弱みだと確信しながら犯行を遂げたのは明白だ。

その彼らに苦痛に歪んだ顔を見せ、彼らの狙いどおりだと証明するような行為は、ゴーティスは断じて避けなければならなかった。さもなければ、ゴーティスが先王の遺志を継いで守ってきた全てが、一瞬にして崩れ去ってしまう。ゴーティスには、何物にも脅かされてはならない王の権威を守る義務がある。それに、王であるゴーテ

ィスが仮に彼らの要求に屈すれば、ジェニーはゴーティスと共にある限り、王位や王家の力を欲しがる者たちから永遠に狙われ続けることになるだろう。

苦痛に顔を歪めていないからといって、ゴーティスが苦しんでいないということにはならない。

暗殺犯の黒幕の正体が分からない今、ゴーティスに軽率な言動は禁物だ。実行犯が取り押さえられ命を落としたとしても、宴の出席者たちの誰かが黒幕であるのなら、ゴーティスの弱点がジェニーだと悟られるような、不注意な真似はできない。感傷的な思いだけで行動し、ジェニーが再び死の危険に遭遇したとしたら、ゴーティスはそのときこそ本当に、後悔してもしきれないだろう。

「俺は、おまえをこの世から失いたくはない」

ゴーティスの声は、冷えた窓にぶつかって儚く消える。

ゴーティスはジェニーの強さを信じていた。彼女の土壇場の力に懸けていた。ジェニーは、生きることに執着しているからだ。

ゴーティスが期待したとおりに、否、それ以上に、追いつめられたジェニーは暗殺犯を相手に颯爽と立ちまわった。ゴーティスが微かに抱いていた死の不安を一掃し、彼が彼女に惚れ直すほどに見事な立ち回りだった。

ジェニーがゴーティスの期待に応えたのは、彼女が彼の意思とその裏にある葛藤を読み取ったからだと、彼は勝手に信じているのだが。

（くだらぬ誤解とやらを――よもや、してはおらぬだろうな）

サンジェルマンの懸念に苦笑し、ゴーティスは自分の手を握りしめる。ジェニーの手を感じることのないゴーティスの手は、もはや、自分のものであって自分のものでないような気がする。

手をいつでも繋げたら幸せ、とジェニーは言ったが、ゴーティスと彼女は、それさえままならない環境にいる。手をいつも繋いでいたいとは幼い子どものようだ、とゴーティスはジェニーを笑ったが、

それがどれほど貴重で幸せなことか、彼女の笑顔を思い描き、ゴーティスは今、思い知る。

ゴーティスが王である以上、越えられない高い壁があるのだ。万が一、昨日と同じような状況が再び起きたとしたら、ゴーティスは、たとえ愛していなくても同盟国出身の妃の身は救うが、愛してはいても、一人の女なだけであるジェニーを公然と救うことはないだろう。一個人の男としてなら当然な行為を、彼は最初からあきらめなければならないのだ。

ジェニーの手を、ゴーティスは握りたかった。彼女はまた手を冷たくさせ、困っているに違いない。

ジェニーの冷えた指先を温めるのは、ゴーティスだけに与えられた特権だ。彼女の手を取り、自分の体温が彼女に溶けていくのを感じ、自分の手の先には彼女が繋がっているのだと、ゴーティスは実感したい。そして、それが叶ったら、繋がった二人の手にゴーティスが言葉にできない想いを込め、ジェニーに伝えよう。

彼女を人質にとられた際の衝撃、自ら反撃できない無念さ、敵を立派に撃退した彼女への賞賛を。それから、惨劇の全てが終わったあと、彼女がまだそこに生きて立っている事実に、ゴーティスがどれほど安堵し、天に感謝したかということを。

青白い闇は、窓の外に広がる世界を包んだままだ。色に乏しい景色は、白い雪に息を閉ざされた冬の風景に似ている。それを眺めれば眺めるほど、ジェニーとの間を遮断されたような気になって、ゴーティスの胸は苦しくなる。

彼女に会える夜明け――何日後かは分からないが――その瞬間を想い、ゴーティスは高まる胸の動悸を必死に抑え続ける。

＊　＊

ユーゴは闘技場での王の対応をまったく問題視せず、あの状況では「仕方がない選択」と表した。大観衆と王妃を前に、一人の愛人のためだけに、王が悪漢に屈するわけにはいかないのだ。自分だって同じことをする、とユーゴは王のとった行動を讃えた。

ただ、一人の女に執着しないユーゴが王と同じ立場にいたら、それが自分の妻だったとしてもユーゴはあっさりと見捨てそうで、彼の説明は今ひとつ説得力に欠ける。だが、アリエルは彼の意見に異議を唱えず、深く頷いていた。

たぶん、ユーゴの言うとおりなのだろう。敵を欺くにはまず味方からと、王がジェニーに向けた侮蔑もそれで説明がつくのだろう。闘技大会が終了してもジェニーは小城を追い出されず、退去勧告を受けているわけでもない。王の訪問は、いっこうにないけれど。

訪問だけでなく、王からの連絡は一切途絶えていた。王城では毎日、人々を招いて宴を開催しているのに、ジェニーに声がかかることはない。王の顔を見られない日々は、必要以上にジェニーの不安をかきたてる。

王に会いたい。

ほんの数分でいい、彼の横顔だけでも十分だ。

アリエルや小城の皆は、事件に巻き込まれたジェニーを心配してあれこれと世話を焼くが、王は、ジェニーが事件で動揺しているとは考えないのだろうか？　選択の余地がなかったとはいえ、ジェニーは一人の人間を手にかけてしまったのだ。幾多の戦場をくぐり抜け、人の命を奪うことに慣れている彼とは違う。

ジェニーは、自分が闘技大会での事件後に深く落ち込んでいるとは思っていないが、あの日以降、何かがおかしかった。ジェニーが見る全ては霞がかかったように濁り、耳に入るのはくぐもった音ばかり。アリエルが甘すぎると評した菓子も、ジェニーには味付けが薄いとしか感じない。音程を外すので歌を歌うな、とカミーユからは文句らしき声があがった。だが、眠りは浅くても睡眠はとれてい

るし、肉は口にできなくなっているが、ジェニーは食事もきちんと取っている。事件前後で、ジェニーの毎日に大きな変化はない。

ただ、ジェニーは一日のうちに何度か、空白の時間を経験している。それは朝だったり、夕方や真夜中だったり、時間帯はまちまちだ。記憶に残らない真っ白の時間は突然にジェニーの頭に入り込み、ジェニーが気づかぬうちに、いつのまにか去っている。

闘技大会が終了して数日後、王城を数ヶ月ぶりに訪れていたラニス公が小城にジェニーを訪ねた。彼の元妻が起こした襲撃事件によるわだかまりが完全に払拭されたわけではないが、ジェニーは彼との再会を喜んだ。彼はカミーユとも久しぶりに会い、彼女の成長ぶりに目を細めていた。彼もジェニーとの再会を嬉しがっていた。

ラニス公の話では、王城にはまだ滞在客が何組も残っており、夜毎、大小の宴が開かれているそうだ。王は彼らの相手に毎日忙しくしている、と、ラニス公は王を擁護するように話した。ラニス公は口に出して言わなかったが、ジェニーが王と会えない日々に不安になっていることを察しているようだった。

だが、ジェニーの不安要素は、実は、王からの音沙汰がないことだけではない。兄ローリーの安否も心配だった。ライアンやユーゴには、兄が偽の“クレマン家の次男マルセル”に連れ去られた可能性を話したが、その後、兄の消息がつかめた様子はない。近衛隊は男を暗殺犯の仲間として捜索しているらしいが、それが事実なら、兄の身も危険ということになる。

ジェニーはどこかで兄が生きていることを願い、灰色に近い水色の空を見上げた。北東の空はどんよりとした暗雲に隠れている。その空の下では既に降雪していることだろう。

ふと、ジェニーは名を呼ばれたような気がして、建物の方に振り返った。

「ラニス公？」
ジェニーが足を踏み出すと、ラニス公は歩調を速めて近寄ってきた。そして、ジェニーの前で立ち止まり、今日の空の色に似た瞳をにこやかに揺らす。
「きみにそう呼ばれるのはどうもしっくりこないね。フィリップでいいよ」
「――フィリップ様」ジェニーが呼び直すと、それでいい、と彼は頷きながら笑った。
「外の空気は爽やかだけど、寒くないかい？　きみは寒さに弱いと私は記憶しているんだが」
そういえば、と思い出したようにジェニーが腕をさすると、彼が苦笑した。
「中に入ろう。今日は娘たちも連れてきたんだ。城ではそろそろ彼女たちも飽きてきてね、今、カミーユと遊んでいるよ。娘たちは彼女が可愛くてたまらないようだ。三人でいると、まるで姉妹みたいだよ」
たしか、ラニス公の娘たちは十歳と七歳だ。彼の居城で会った、ラニス公と同じ金色の髪をした娘たちを思い出して、ジェニーは微笑む。大人ばかりの王城で一週間以上も滞在すれば、遊びたい盛りの彼女たちが暇を持て余すのも納得がいく。
ラニス公が出した腕をジェニーは抵抗もなく受け入れ、彼と並んで庭園から屋内へと歩いていく。彼が、ジェニーがさっきまで眺めていた北東の空を仰ぎ見た。
「明日、私たちはどうやら、雪道を帰らねばならないようだ」
ジェニーも彼に倣い、同じ方角を見上げる。
「ああ、あちらは冬が早いんですよね。どうか、道中はくれぐれも気をつけてお帰りください」
ありがとう、とラニス公はジェニーを見つめ、一瞬の間のあと、微笑んだ。
「ジェラール様にもよろしくお伝えください。フィリップ様が戻る

頃までには、ジェラール様も風邪から回復されていればいいですね」
「ありがとう、私もそう願っているよ」

小城の入口に差し掛かり、ラニス公は開いた扉にジェニーを先に入れる。そこは常に外気を通す場所なのに、屋外に一歩入っただけで庭園より随分と暖かい。
「ジェニー」
ラニス公が穏やかな声音でジェニーを呼んだ。彼に名を呼ばれると、ジェニーは父親に話しかけられているような気分になる。ジェニーの隣で、彼が歩みをやや遅くした。
「ジェニー、ここ数日間、私は考えていたのだが」口調は穏やかだが、硬い表情でラニス公が言葉を続ける。
「はい」
通路に声が冷たく響くので、ジェニーは声を抑える。ラニス公が硬い笑顔を作りながら、口を開いた。
「きみさえ構わないなら……きみと、可能ならカミーユも、二人で私のもとに来たらどうだろう?」
ジェニーの足が止まる。
「……えっ?」
ジェニーの微笑みが一瞬にして失われたのに慌てたらしく、ラニス公はジェニーの前に立ち、弁解めいた口調で言った。
「もちろん、今すぐどうこうしようなんて話じゃない。王の許可も必要だろうし、きみにも考える時間が必要だろう。あんな襲撃事件を起こしておいて、本当ならこんなことを言えた義理じゃないが、ただ、きみさえ良ければ、そして事情が許すなら、私はいつでもきみを受け入れる気がある。そう知っておいてもらいたいんだ」
ラニス公の真剣な表情に嘘はない。彼は嘘をつけるような人柄でもない。
ジェニーが驚きのあまりに彼を見つめると、彼は困ったように瞳を細めた。

「なぜ急に……なぜ、そんなことを言うんですか？　そんなことを言うなんて、まるで私がもう――」

ジェニーは喉まで出かかった言葉を、必死に食い止める。

――“王はジェニーを見捨てた”。

ジェニーは口を押さえた。でなければ、ジェニーが心に抱くばかばかしい考えが、ジェニーの声にのったその瞬間に現実と変わってしまいそうだ。

ジェニーがなおもラニス公を見つめ続けると、彼の瞳に苦悩と哀しみが混じった。そんなもの、ジェニーは見たくなかった。

「私の言ったことは単なるひとつの提案だ。状況次第ではそんな選択肢もあるかもしれないと、その程度に考えてもらえばいい。返事は急いでいないから」

「フィリップ様、もし私を哀れんでいるなら――」

「哀れんでなどいないよ。以前、きみがいた日々は平穏で楽しかった。それを、妻に欺かれた哀れな男がまた手に入れたいと願っているだけだ。多少の難はつきまとうだろうがね、きみは今や真の貴族の身分なのだから、私のもとに正式に迎え入れたいと考えている」

ジェニーの心臓があらたな驚きに飛び跳ねる。

「フィリップ様の？　ジェラール様ではなくて、ですか？」

「ジェラールの？」ラニス公は瞠目し、ゆっくりと首を振った。「彼は来春に結婚することが決まっている。きみを迎えたいのは、この私だよ」

ラニス公はジェニーの瞳をまっすぐに捕らえ、それまで緊張に強張っていた唇を静かにゆるめた。

「フィリップ様の……？」

ジェニーが思わずそう漏らすと、彼は、今度ははっきりとした笑顔を見せた。

「そう。きみはいくつだったかな、十九？　私は十歳以上も年上で娘も二人いるが、きみが気にしないでくれるなら、きみが厳寒期を無事に越せるように居城の暖房を強化して、城で待っているよ。い

つでもきみを歓迎する」
ラニス公の温かな微笑みを見ているうちに、ジェニーの視界がぐらりと不安定に揺れた。瞬きする前の視界が白く濁る。
「ジェニー？」
ラニス公に触れられたせいではない、ジェニーの手が熱い。
「ジェニー、大丈夫かい？」
彼の質問の意味を理解もせず、ジェニーは激しく首を振る。
「……大丈夫」
――でも、何が大丈夫なのだろう？
光を放ちながら床に落ちていく水滴を見て、ジェニーは自分が泣いているのだと知った。今まで、どうやっても涙を流せなかったというのに、ジェニーは声もたてずに泣いている。
ラニス公の申し出に心が動かされたわけではない。彼の優しさも、ジェニーを支えてくれる彼の手もありがたかったが、ジェニーが渇望していたのはそのどれでもない。
ジェニーが欲しかったのは、王から必要とされている実感だ。ラニス公のように、ジェニーの不安を拭い去ってくれる明白な意思。たったそれだけだ。
ジェニーの肩をそっと抱いてくれるラニス公の手は愛情に溢れている。でも、それがジェニーの心を震わせることはない。衣越しに感じる体温が、感触が、王とはまったく違う。
「泣かないで。何も心配ないから」
囁くラニス公の声は川のせせらぎのようにジェニーの耳に入り、何の感動も与えず、淡々と流れ落ちていく。
情けない。
王に会えないというだけで、ジェニーはどうしてここまで不安に思うのだろう？　ジェニーの心はいつからこんなに弱くなってしまったのか。
ジェニーは王が好きだった。
彼がもう自分に背を向けていたとしても、ジェニーはまだ彼を見

ていたい。

ジェニーがラニス公の一件を黙っていたにもかかわらず、次の日の夕方までに、ユーゴはそれを知っていた。彼は既に帰宅したものと思っていたジェニーは、彼がまだ王城内に滞在していたのも驚きだったが、彼がラニス公の申し出の内容を克明に把握していると知って、さらに驚いた。

「いい話じゃないか！」

数日前には、王を信じろ、と声高に語っていたくせに、ユーゴはラニス公の突然の申し出にかなり興奮している。アリエルはユーゴに腹を立て、今回の一件が王の耳に届くことを恐れて、室内の召使たちを部屋から全員閉め出した。だが、ユーゴはアリエルの怒りなど、まったく気にしていない。

「だって、正式な王家の一員だよ？　正妻になれるんだよ、正妻！」

ユーゴは何気なく口にしただけの言葉だろうが、今のジェニーの心にはそれが鋭く突き刺さる。

再び言い合いとなったアリエルとユーゴを部屋に残し、ジェニーは一人で庭園に出た。日没をひかえた庭園は、晩秋の弱い日差しをかろうじて受け、濃緑色に光る。冬も間近になったこの季節、この時間帯、庭園を彩る花はない。王がジェニーの窓辺からの風景のためにと植えた、夜に咲く白い花も、夏が終わると同時に散ってしまった。

ジェニーが午前中に見上げたときより、空がいっそう低くなっている。雪雲に似た暗い色をした雲が、北東から王城の方に近づいてきていた。ラニス公の住む地方は、まもなく雪に埋もれてしまうだろう。

「フィリップ様」

ジェニーの背後で、地面に生える草がつぶれる音がした。

「……フィリップ？」

ジェニーがはっとして振り返ると、真後ろに、怪訝そうに彼女を見下ろすゴーティス王が立っていた。

第二部　5．生と死の境界線－１０（後書き）

次回より、更新は火曜日０時以降となります。

第二部　5．生と死の境界線－11

驚いたジェニーの顔が自分を見て嬉しさにほころぶ――。ゴーティスは当然のようにそう予想していたが、彼女の頬はいつまでもほぐれなかった。沈みゆく太陽の日差しを右側から受け、ジェニーの髪は鈍い黄金色に輝き、瞳が明るい茶色の光を放っている。彼女の顔色は、寒さにあえぐ手の白さとほぼ同じだ。声までも凍えているのか、何も言おうとはしない。

「フィリップがどうかしたか？」

ジェニーに尋ねはしたが、ゴーティスは彼女の返答に興味はなかった。ジェニーは冷たそうな手をぐっと握り締め、彼女にしてはめずらしく、愛想笑いのような笑顔を一瞬返す。

ジェニーの普段とは少し異なる様子が気になりはしたが、約十日ぶりに彼女の顔を見られたことにゴーティスは興奮していた。彼女は闘技場での危機を生き抜き、ゴーティスの目の前に立って、確かに息をしている。ゴーティスはまったく信心深くないが、神に彼女を讃えるよう、懇願してもいい。

ジェニーは後方にある北東の空に、ちらりと視線を走らせた。

「……今頃はきっと、彼の故郷では雪が降ってる」

ジェニーの声が耳に通ると、ゴーティスの胸が彼女を求めて震えた。

「俺に会えず、寂しかったか？」

ジェニーが息をのんで顔を上げ、ゴーティスは反射的に彼女に腕を伸ばした。彼女の肩を抱こうと一歩近づくと、飛び跳ねるようにして、彼女は一歩後退した。

「ジェニー？」

ジェニーは戸惑ったように視線をそらした後、下唇を噛んだ顔を上げ、挑むようにゴーティスを見返した。おかしい、とゴーティスが感じたのはこの時だ。

「今頃……来るなんて」
「なに？」
ジェニーの批判めいた口調にゴーティスは驚いた。だが、ゴーティスの驚きが怒りに移る前に、彼女の挑戦的な表情がほっとしたように弛んだ。それから、彼女は両手で顔を覆う。自分と再会できた感動で泣き出したのかとゴーティスは思ったが、彼女の肩は揺れ、指の間から継続した笑いが漏れていた。
「どうした？」
ゴーティスがジェニーの肩に手を置くと、ジェニーの体の揺れが止まった。ジェニー、と名を呼ぶと、ジェニーは両手に隠した顔を現し、ゴーティスをゆっくりと見上げる。まだ唇を噛み締めていたが、ジェニーの顔に涙の跡はなかった。
「もう会えないんじゃないかって……ときどき、そう思った」
「何だと？　なにゆえ、そんなくだらぬ発想をする？」
ジェニーの顔が曇る。彼女の不機嫌そうな顔は、彼女が生の時間を刻んでいる証だ。
「くだらない？　でもね、ゴーティス王」
「少し黙っておれ」
ジェニーはまだ言い足りなさそうだったが、ゴーティスはいきなり、彼女を腕の中に抱き寄せた。ジェニーが腕で体を押し返そうとしたため、ゴーティスは、自分の胸の中で彼女が身動きできないように、両腕で彼女の体を縛りつけるように抱き締めた。
頬に触れるジェニーの髪は冷たかった。彼女の服はもちろん、彼女の手も冷え切っていた。ゴーティスが不在だった毎日、ジェニーの体は常にこの状態だったのだ。ジェニーの体が温かさを取り戻し、自分の体の熱が彼女の隅々に染み入ったのだと満足するまで、ゴーティスは彼女を放す気はなかった。
「よう無事で……あの場をよくぞ切り抜けた」
ジェニーの頭上で囁くと、彼女の腕から力が萎え、彼女の文句はゴーティスの胸の前で湿ったため息に姿を変えた。

ゴーティスが目を開けると、彼の手で顔を固定されて動けないジェニーが名を囁いた。ゴーティスは彼女の頭を撫で、彼女の顔が動けるだけ、わずかに体を離す。彼女の下睫毛に涙の粒が光っていた。

「あなたにまた会えて、本当によかった」

血の気を失っていたジェニーの唇は生気を取り戻し、ゴーティスに会って幸せな弧を描く。ジェニーを見つめていると、ゴーティスの体の芯が熱くなる。

「城には大勢の来客がおったゆえ、今日まで来られずにいた。おまえの身を……心配してはおったが」

ジェニーの瞳が嬉しそうに揺れる。

「心配してた？　あなたから私には何の連絡もなかったのに」

「俺は毎日、客の相手をしておったのだぞ。俺が多忙を極めておると、おまえにも想像できたであろう？」

「でも、手紙や伝言って手もあるのよ」

「この近距離で手紙を？」

ゴーティスが幾分呆れると、ジェニーがむっとして言った。

「あなたと会えない間に、余計なことをいろいろと考えたわ。一言でも連絡をくれてたら、二度と会えないかもしれないなんて誤解、きっとしなかった」

彼女の笑顔に落ちる翳りが、彼女の心を侵す不安をゴーティスの胸に切々と伝える。くだらない、とゴーティスは彼女の勝手な思い込みを一言で切り捨てられはしなかった。

ジェニーが口を尖らす様は、彼女から甘えられているようだ。ゴーティスがジェニーへの想いを募らせていた間、彼女もまた、ゴーティスを恋しく想う日々を送っていたのだ。ゴーティスの胸が詰まった。

「……俺はおまえが心配だった。おまえが無事でおるかどうかを、毎日、考えておった」

ゴーティスが来る日も来る日も、ジェニーの心配をしていたのは

本当だ。彼女に心配している旨を“連絡”しようとは考えつかなかったが、実際に彼女と顔を突き合わせるときが早く訪れるのを毎日願っていた。

ジェニーの頬にかかる髪を指でつまみ、ゴーティスは彼女に顔を寄せた。

「……つまらぬ誤解をさせたようだ。許せ」

ゴーティスの口から滑り落ちた言葉に、ジェニーが顔を上げ、彼をじっと見つめる。彼女の茶色い瞳はまだ潤んだままだ。

想いを寄せる誰かがいるのは、なんと幸せなことだろう。その幸せを感じるだけで、必ず来るとも限らない明日も、ゴーティスは必死で生きてみたくなる。

ゴーティスを見返す茶色い光が、細く、小さくなった。ジェニーの手が肩に触れるのを感じる前に、ゴーティスは冷たさの残る彼女の唇に唇をのせる。

ゴーティスの唇がジェニーの肌を離れると、彼の鼻を冬の匂いがする空気がくすぐった。

「すぐに日が落ちる。部屋に戻るぞ」

温かさとともに湿り気を取り返したジェニーの唇にもう一度、ゴーティスは短い口づけを落とした。彼女の瞳を見つめ、その唇に触れると、ゴーティスはそのまま彼女を抱きすくめ、誰に邪魔されることもない未知の場所へ彼女を連れ去りたい衝動にかられる。その衝動に足をすくわれないうちに、ゴーティスはジェニーを冷気から逃れられる屋内に連れていきたかった。

「うん」

ジェニーが伸ばした手を取り、ゴーティスは彼女に笑いかける。自分の笑みに応え、彼女が笑顔に変わる瞬間がゴーティスは好きだ。彼女が笑う理由が自分だと、ゴーティスは自身を納得させられる。

だが突然、ゴーティスを見て笑ったジェニーの顔が、無表情に硬直した。そして、恐怖に怯えたようにジェニーは目を丸くし、ゴー

ティスの手から即刻逃れたいというように、結ばれた手を激しく振る。

「放してよ……放して！」

ジェニーの突然の変貌ぶりにゴーティスは唖然とし、握っていた彼女の手を咄嗟に放した。彼から自由になった手をドレスで拭い、ジェニーはその両手を見つめて茫然とする。

「ジェニー、どうした？」

ゴーティスがうっかりジェニーに手を伸ばそうとすると、彼女はそれを避け、再び手をドレスで拭く。まるでその手が汚物に浸かったかのように、ごしごしと強く。

「手が、どうかしたか？」

ジェニーがはっとして顔を上げた。ゴーティスは手を動かしかけたが、彼女の神経質な拒絶に遭うことを恐れ、手を止める。ジェニーに今何が起きているのか、何がきっかけで今のジェニーの状況があるのか――さっぱり掴めなかった。

ゴーティスがジェニーの様子をうかがっていると、ゴーティスから逃げるように彼女がよろめき、両手を顔の前に掲げた。

「血が……血が消えない……！」

ジェニーは十五分ほど前、自室の寝台で眠りについた。ゴーティスの手を拒否した彼女は召使たちに抱えられて自室まで運ばれ、そこでもやはりゴーティスが近づくのを許さず、アリエルが現れるとようやく、ほっとしたように頬をゆるめた。

ジェニーのおかしな言動はゴーティスが着ていた濃緑色の上着のせいではないか、とアリエルが気づいたのは、ジェニーが気を失うように眠りについた直後のことだ。ジェニーが手にかけた男は、ゴーティスと同じ色の、似通った模様の入った服を身に着けていたという。男を思い出したのでは、と、アリエルは眠っているジェニー

を気遣わしげに振り返った。
代わりの服を用意する、というアリエルの勧めを断り、ゴーティスは白い上服姿で、ジェニーの寝室にある背もたれのない椅子にまたがった。薄着で風邪を召されては、とアリエルは心配したが、ジェニーほど寒がりではないゴーティスにとって、彼女の寝室は上服だけで十分に過ごせる暖かさだ。
続き部屋では侍医を迎える準備が進んでいるらしく、召使たちのせわしい足音が行ったり来たりしている。その不規則に刻まれる物音は、ゴーティスが物思いに沈む邪魔となってちょうどいい。
「ジェニーはずっと様子がおかしかったのか？」
寝台の反対側でジェニーを見守るアリエルに、ゴーティスは問う。
「そうですね……。あの事件の後しばらくは動揺されていて、少し元気がないご様子でした。私どもも注意してきたつもりでしたが、時々ぼんやりなさることはあっても、通常と変わりないお姿で。今日のようなジェニー様を私は初めて見ました。事件から今までずっと……気が張っておられたのかもしれません」
アリエルとゴーティスの見守る先で、ジェニーは暖かな毛布の中ですこやかな寝息をたてている。ゴーティスがアリエルに振り返ると、彼女は目に浮かんだ涙を手でそっと隠した。
「ジェニーが勇敢とはいえ、人を一人、殺しておるのだ。普通の人間であれば、平常心ではおられぬ」
「はい」
ゴーティスは椅子から腰を上げ、寝台に横たわるジェニーの体の脇に腰掛けた。ジェニーの顔の前にかざしたゴーティスの手に、彼女の口から出される温かな呼気があたる。
「王」
「何だ」ゴーティスはアリエルに振り返らず、小声で返事をする。ジェニーから視線をそらしたくなかった。
「王、ジェニー様は……王にお会いになれず、寂しがっておいでで

した」
「知っておる」
「今思えば、ジェニー様は不安でいらしたのだと思います。王に再びお会いできないかもしれないと、そう感じておられたのです」
侍女ごときに、なぜジェニーの思いを代弁されなければならないのか。主人を思うあまりの親切だろうが、ゴーティスにはアリエルの思いやりが鬱陶しい。
「知っておる。俺と会えぬ間に余計なことを色々と考えた、と本人が言うておった。誤解があったことは知っておる」
口調に苛立ちを混じらせ、ゴーティスはアリエルを一瞥した。ゴーティスの答えを聞き、彼女があからさまに安堵するのがまた、ゴーティスの苛立ちを募らせる。
「そうですか、それはようございました……！　差し出がましい真似をお許しください。あの事件の際、ジェニー様は『自分はもう王城に戻る必要がない』と気落ちしておられ、私はとても心配していたのです」
「なに？」
自分はもう王城に戻る必要がない、とジェニーが言っていたとは、ゴーティスは初耳だ。彼女は、人殺しをして衝撃を受けている彼女をゴーティスが放置したことを根拠に、“王に捨てられた”と誤解したのではなかったか？
「ジェニーはそんなことを言うておったのか？」
にわかに胸に沸いた混乱がゴーティスの声を上ずらせる。ゴーティスに向けられたアリエルの表情にも、戸惑いがありありと見えた。
「はい。あの、誤解は解けたのでは……？」
彼女の視線が寝台のジェニーにちらりと動き、ゴーティスは苛立った。だが、その苛立ちは、彼女に対してなのか、自分自身に対してなのか、判断ができない。
「何ゆえにそのような誤解をする？　俺がいつ――」ゴーティスはサンジェルマンの懸念を思い出し、はっとした。取るに足らない心

配だと、相手にもしなかった彼の意見。「――あの言葉を鵜呑みにしたか」

ゴーティスのひとり言だったが、アリエルが頷いた。

「この俺が正妃以外を助けるはずもなかろう！　この女にはそれぐらいの常識はあると思うておったぞ」

ゴーティスはジェニーから顔を上げた。アリエルの静かな微笑みは、寝台の上のジェニーからゴーティスに向けられる。

「はい。ですが……それはジェニー様にとって、常識ではなかったのではないでしょうか？」

再びジェニーを見て微笑んだあと、彼女はゴーティスにそう問いかける。

「ジェニー様は、本来の身分は貴族でも、庶民としてお生まれになっているのです。ジェニー様の常識には時々、私もひどく驚かされることがございました」

アリエルの意見は一理ある。だからジェニーは、ゴーティスと会えない日々を大げさに心配していたのだ。

なんと愚かな女。

ゴーティスは、彼女が闘技場でのゴーティスの言葉に傷つき、今日まで不安に苛まれていたことを思って、再び、身分や立場に左右されないどこかへ彼女を連れ去りたくなる。

毛布から出ている頭や肩は、夜中にジェニーが目覚めると、驚くほど冷えていることがある。寒さが一段と厳しくなるこれからの時期は、室内をもっと暖めてもらわねば。

王城のあるこの土地で寒さに震えていて、もしラニス公の住む地方にでも移り住んだら、どうやって冬を凌げるのだろう？　ラニス公の城は国の北東部に位置し、山の裾野にある。過去に二回、ジェ

ニーはかの地で冬を経験したが、いずれの寒さも厳しかった。

ジェニーは暗闇で目を覚まし、大きく二度瞬きをした。今日は顔が冷えていない――いや、それどころか、頬がとても温かい。アリエルがまた、“湯たんぽ”をひそかに忍ばせてくれた？

布にくるまれた湯たんぽの容器を手で探ろうと、ジェニーは顔に密着する白い布地に手を伸ばした。しかしそれは、ジェニーの手が届く前に、大きく震える。

「起きたか？」

男の低い囁き声に、ジェニーの頭は完全に目覚める。

「誰？」ジェニーの発したはずの声は、息づかいにしか聞こえない。喉がからからに乾燥していた。

ジェニーの額に温かな手が触れ、小さな笑いが頭上から降ってきた。「喉が渇いておるだろう。水を飲め」

ああ、この口調と低い声は――ゴーティス王だ。

もちろん、ジェニーの寝室に侵入できる男は彼しかいない。ジェニーの顔を温めていた“湯たんぽ”もどきは、彼の腿だった。

よかった、彼と再会できたのは夢ではなかったのだ。

ジェニーは起き上がり、王自らが水差しから入れた水を受け取った。両手で水の入った杯を支え、ジェニーはそれを口に流しこむ。ゆっくり飲め、と彼はジェニーに念を押す。冷たい液体はジェニーの乾いた舌を濡らし、喉の奥に染み渡って、ジェニーを生き返らせる。

ジェニーが水を飲み干して大きな息をつくと、王がジェニーの杯を奪い去った。暗闇に、王の二つの瞳が瞬いて光っている。

「腹が減っておるなら食い物もあるぞ」

空腹かどうかまで、ジェニーのぼんやりとした頭では分からない。ただ、彼が自分の世話を焼こうとすることが、不思議に思えた。

「お腹が空いてるのかよく分からないけど……今は何もいらない」

ジェニーは、一つだけカーテンの閉められていない窓から夜空を見た。真っ暗だ。王と会ったのは日没前だったはずだが、今は何時

なのだろう？

その疑問を読み取ったように、王が言った。「真夜中まではまだ数時間ある。だが、このまま眠るがいい。俺も今宵はここにおる」

王は枕を整え、毛布をめくり、ジェニーをそれまで眠っていた心地よい場所へ戻そうとする。ジェニーは彼の手を拒みはしなかったが、彼のやけに親切な接し方が気になった。

「……今日はなんだか優しいのね」

ジェニーを毛布に押し込む手を止め、王は不愉快そうに唇を下げる。

「今日だけ俺が優しいような口ぶりだな」

しかし、王の瞳は笑っていて、ジェニーは顔に乱暴に毛布を掛けられた。ジェニーが急いで頭を出すと、彼は床に降ろしていた片足を寝台の上に上げ、両膝を抱えた。

「あなたの優しさは、いつももっとさりげないから」

「ふん、うまい言い方をしおる」

王は満足そうに笑ったが、その瞬間的な笑みはすぐに消え去った。彼が膝に顔を預けると、反動で、闇夜に銀色に見える前髪が揺れ、彼のまつげに降りかかる。彼が、隣に横たわるジェニーを見下ろした。

「寒くはないのか？」

「大丈夫」

同じような問いをフィリップから昨日受けたことを思い出し、ジェニーはなんとなく後ろめたい思いにかられ、王の瞳からさりげなく目をそらした。彼の腕の線を目で追い、筋肉の張ったふくらはぎを抱える手に何気なく視線を移す。

服の裾からのぞいた王のふくらはぎを目にすると、寒気からではなく、ジェニーの背中がぞくりと震えた。不自然に動悸が激しくなる。説明のつかない高揚が胸を駆け巡った。

王が膝から顔を上げ、ジェニーは彼の横顔を見る。

「されど、俺はさして優しい男ではないだろう。不安がっておる女に何と声を掛け、どう扱ってよいのか分からぬ。こんなときには、ベアールの方がよほど頼りになるだろうよ」

どうしたんだろう？　普段の王らしくない発言だ。不安になっていたのはジェニーの方なのに、彼の投げやりな言葉の端々に、不安と孤独がにじんでいる。

ジェニーは毛布の下から手を出し、彼に向かって手を伸ばした。彼はにこりともせずに、ジェニーの手を見る。そして、膝に回していた手を浮かせ、彼はジェニーの手を掴んだ。

「でも、あなたはこうやって一緒に居てくれるじゃない。ユーゴ様は、誰か一人の傍らで何時間も過ごすなんてことは絶対にしない。王のあなたはほかにやるべき事だってたくさんあるのに――私が眠っていたときもずっと側にいてくれたんでしょう？」

王が膝を動かし、右膝を寝台の上に伸ばした。ジェニーの奇妙な胸の高鳴りは、まだ続いている。ジェニーを掴む王の手に力が込められ、ジェニーは毛布から這い出そうとして、彼に制止された。

「俺が十四で初めて人を殺したときも、俺の側で共に過ごした人間がいた。先王だ。俺は単に、そのときの先王と同じことをおまえにしておるだけだ。

俺は、その長い夜のことをよう覚えておる。俺は一晩中すすり泣き、ときどき思い出したかのように眠った。先王はそんな俺を責めも慰めもしなかったが、俺が浅い眠りから目覚めたときは常に、先王の――父の手があった。目覚めるたび、俺はその感触に安心した。嬉しかった。生身の人間の体など金輪際触れたくないと思う一方で、俺はその温かさが恋しくて仕方がなかったのだ」

王がジェニーの手を握り直した。いつでもジェニーを安心させる温もりだ。これが彼の父親譲りだったとは、今の今まで知らなかったが。

ジェニーは、彼が自分の心細さを知り、励まそうと傍らにいてくれたことが嬉しく、彼が父との逸話を語ってくれたことも嬉しかっ

た。彼の存在がどれだけ力になるのか、彼にその全てを口に出して言いたかったが、言葉にすることが果たして正しいのか、よく分からなかった。限られた単語を連結するだけでは、ジェニーが伝えたい想いが半分も彼に届かないように思えた。だから、ありったけの思いを込めて、王の手を握り返す。

王の声が乾いた空気を振動させた。

「ジェニー」

「うん？」

王がジェニーを見つめて微笑む。

「おまえ……フィリップのところに行くか？」

「えっ？」

王の笑顔に溶かされたばかりの、ジェニーの心が凍る。

第二部　5．生と死の境界線－１２（前書き）

【注意】話の展開上、性描写の場面が登場します。あからさまな表現はまったくありませんが、ご注意くださいませ～。

第二部　5．生と死の境界線－12

王家と親戚関係を結びたいユーゴが、フィリップからの申し入れを軽々しく口にするとは考えにくい。フィリップが王にジェニーの身請け許可を願い出るにはまだ早すぎるが、故郷へ発つ前に、彼は王にそれらしいことをにおわせたのだろうか？

フィリップの笑顔が、ユーゴの上気した顔が、ジェニーの脳裏に浮かんで、消える。たぶん、その時間は一秒にも満たなかったが、ジェニーを見ていた王の笑みは弱まった。

「フィリップ様がもう、何か……話したの？」

一度は衰えた王の笑みが復活し、彼は首を横に振った。

「いや、フィリップからは何も聞いてはおらぬ。ここへ二度来たことは知っておるが――あの男はおまえに好意的だ、王城の宴にも姿を見せぬおまえの様子が気に掛かったのだろう」

久方ぶりにおまえの娘の顔も見たかったのだ、と王は言う。

「ええ、そう言ってた」ジェニーは王を見上げ、安堵の息をついた。「でも、誤解しないでほしいんだけど、私とフィリップ様の間にやましいことは何もないわ。フィリップ様は私の恩人で、カミーユにも本当によくしてくれたの。私は、今も感謝してる」

ジェニーが力説すると、王は目を細めて笑った。今夜の彼は、よく笑う。

「知っておる。フィリップもおまえが心配なだけであろう」

「じゃあ、どうしてフィリップ様のところに行けって言ったの？」

「俺は命令してはおらぬ」

「あなたが言うと命令になるのよ」

ジェニーが毛布の間から抜け出そうとしても、今回は王に止められなかった。王は膝頭に顎を乗せ、ジェニーが寝台に手をついて起き上がる様を眺めている。彼の体躯も顔の造りもどこからどう見ても男性なのに、金色の睫毛の下にある瞳はどこか妖艶で女性的だ。

ジェニーは、彼の視線に魅入る。
ジェニーが王の隣に起き上がると、彼が顔を上げて、膝を崩した。
「命令ではない、提案したまでだ。察するに、フィリップはおまえを引き取るようなことを言うたのではないか？　ここの者どもが俺を見る様子がおかしかった。おまえも、フィリップの城の暖房について何やら寝言で言うておった」
ジェニーが鼻白むのを見て王は微笑み、再び、膝を立てる。
「フィリップは温厚で誠実な男だ。あの男はやや面白みに欠けるが、夫となればおまえを守ってくれるだろう。――俺が命ずれば、おまえはそれに従うか？」
王の何気ない口調で発せられた言葉が、ジェニーの耳の奥に突き刺さる。数時間前には、ジェニーに会いたかったとつむいだ同じ唇が、フィリップを夫にしろ、とジェニーに言う。
ジェニーを心配して傍らに付き添っていたはずの彼の、あまりに酷な仕打ちだ。闘技場で王の言葉を聞いた際に受けた衝撃が、ジェニーに鮮烈によみがえる。
「……嫌よ」
ジェニーの返事を耳にしても、王の視線は揺らがなかった。その真剣な光を受け止め、弾き返すのに、ジェニーは、残り少ない勇気をかき集めなければならなかった。
「私はフィリップ様のもとには行かないわ。私はあなたが好きで……フィリップ様はいい人だけど、愛してもない人と結婚はできない」
「愛情は必ずしも結婚に必要ではない」
「嫌よ、私はそんな結婚はしない！　ゴーティス王、もしあなたが私に飽きて、やっかい払いしたいんだったら、こんなまわりくどいことをする必要はないわ。あなたは王なんだから、出て行けの一言で済むのよ。私の気持ちがどうであろうと、私はそれに従うしかないんだから！」
「ここを出てどうするというのだ。おまえが信頼でき、おまえを受け入れようという男がおるのだぞ？　それも、王家の一員であるフ

ィリップの家となれば、おまえは、一生遊んで暮らせる」
「私はそんなもの欲しくない……！」
ジェニーは王の手を振り切った。
「ここを出た私がどこに行ってどう生きるかなんて、私が決めることよ！　城から放り出した女の行く末なんて、今まで気に掛けたことなんかないでしょう！」
「俺はおまえをやっかい払いするのではない！」
「じゃあどうして！　私はあなたと一緒にいたいだけなのに、どうしてそんな酷いことが言えるのよ！」
ジェニーに怒鳴り返そうとした王が、口をつぐんだ。それを見ると、ジェニーは、自分がたまらなく惨めに思えた。誤解させて悪かったと彼に抱き締められてから、たった半日も経っていない。自分を哀れに思って涙するのは大嫌いなのに、今泣かなければ、ジェニーは自分がもっと惨めになるような気がした。

王が躊躇いがちに伸ばした手を逃れ、ジェニーは、悲しさに負けて溢れ出した涙を無造作に拭う。
「優しくなんかしなくていい」
「俺は優しくはない」
だが、王の視線はジェニーを気遣うように見守っている。
必死に涙を堪え、ジェニーは王を見返した。
「なぜ、来たの？　どうして今までここに居てくれたの？」
一瞬の躊躇いのあと、王が言った。「おまえの顔が見たかった。おまえが、心配だった」
「……矛盾してる」
いっそのこと、彼がずっと訪ねて来なければよかったのだ。彼との再会を果たせないうちにフィリップとの結婚を命令されれば、ジェニーはもっとすんなり王をあきらめただろう。
冷たい涙が頬を滑り落ち、ジェニーは手の甲でそれを拭う。
「フィリップは、おまえを泣かせはせぬだろう」

穏やかなフィリップが、ジェニーを悲しませ、泣かせることはないだろう。そしてその一方で、フィリップといて、ジェニーが感動のあまりに涙することもないだろう。

王は解っていない。たとえフィリップに彼と同じことを言われようと、ジェニーは傷ついて泣きはしない。王だからこそ、ジェニーは気持ちを解ってもらいたくて、涙を流すのだ。

何もなくとも、何もしゃべらずとも、王が隣にいるだけで幸せだと感じられる。王の瞳と同じ瞬きを星空に見つけては胸を躍らせ、会えるときを待ち焦がれ、幸せな気分のままに眠りにつく。彼の存在を日常に抱き締めると、ジェニーの毎日は予想外の感動に彩られる。そんなかけがえのない日常を、ジェニーはフィリップのもとで味わえるとは思えない。

「あの男はおまえを守ってくれよう」

ジェニーは思わず失笑した。

「私は誰かに守られなきゃならないほど弱いの？　もう、一人の人間をこの手で殺してるのに」

ジェニーが両手の手のひらを広げると、王の手がそれを覆った。

「あれが最初で最後の経験だ。……すまぬことをした。あのとき、俺はおまえが一人でも必ず切り抜けると信じておったが――それは今も変わらぬが、あんな場面に出くわすのは、俺は二度と御免だ。おまえはか弱くはないが普通の女だ。あんな危機とは、無縁の人生であっていい」

王は普段より饒舌だ。そして、その一語一句に痛々しい思いやりが込められている。

「ゴーティス王、私の身が……心配なの……？」

半信半疑ながら王に問うと、彼の瞳の中を不安そうな揺らぎがすり抜けた。ジェニーは確信した。

「ゴーティス王、私は平気よ。今回のことは衝撃的だったし、怖かったけど、こんなことは一生のうちに何回も起こることじゃないもの」

「おまえのこれまでのような人生であればな」王が眼光を強め、嘲笑をにじませる。

「今回の暗殺犯は、最初からおまえを標的にしておった可能性もある。おまえが俺にとって何であるか、よう知った上での犯行だ。今回はうまく難を逃れたが、この先、おまえはまた――何度も、命を狙われるやもしれぬ。そのたび、おまえは相手を斬り殺すのか？　幸運はそう何度も続きはせぬ」

ジェニーは、無意識に入っていた肩の力が抜けていくのを感じた。

「まさか……だから、フィリップ様のところに行けって言ったの？　その方が安全だから？」

王は、頷きはしなかったが、事も無げに言った。「俺のもとよりは、おまえは普通の人生を歩める」

「そのために、私があなたから離れることになっても？」

ジェニーは言葉が続かなかった。王の手を見つめ、そこから顔を上げられなかった。もう、涙を止める努力すら、しようとも思えなかった。

王は小さなため息を何回かついた後、ようやく、声を絞り出すようにして言った。

「俺はおまえを離したくはない」

「じゃあ、なぜ！　私だってあなたから離れたくない！」

「分かっておる！　されど、おまえが俺を必要としても、俺は常におまえの側に駆けつけられるとは限らぬ！　おまえの命が懸かっておろうと、俺はそのために国を危険に晒すことはできぬ、見て見ぬ振りをすることもあろう！」

王はジェニーの涙で濡れた目を間近からのぞきこみ、大きく息を吐いた。

「ジェニー、俺には国内外で敵が多い。数年前に大幅な領土拡大をして以来、かつてのおまえのように戦で親・兄弟を失くし、俺に仇討ちを試みる者が少なくない。俺は、常に暗殺の危険につきまとわれておる。

一連の戦が残虐で、行き過ぎな面があったことは認めよう。俺の幼稚さゆえの侵略行為を正当化する気はないが、俺は、その全てを後悔しておるわけではない。無論、多少の罪悪感はあるが、国土は広がり、国は全般的に豊かになったのだ、俺はその結果を歓迎する。

ジェニー、おまえなら想像できようが、家や家族を突然奪われた者たちから、悲しみや恨みはなかなか消えぬ。その恨みつらみは、国の王である俺に集中する。だが、王である俺がその一人一人に自ら頭を下げ、謝罪して歩くことはできぬのだ。俺はむしろ、彼らの拠り所を一方的に制圧した者として、彼らの住む地を潤すことで謝罪の代わりとするしかない。今や、併合された地域でもヴィレールの統治下で逆に安定したところも多いはずだ。

されど、その思いが通じるとは限らぬ。いや、通じぬ場合が多いからこそ、俺は今後も命を狙われ続ける。それは俺の過去の代償であり、この国の王に生まれた宿命だが、それをおまえが……ともに背負う必要はない」

彼は王として国と国の民に尽くし、責任を全うする覚悟でいるのだ。彼はどこまでも王として生きようとしている。そして、そんな姿勢を貫く彼を、ジェニーはどうして嫌いになれようか。

だが、ジェニーが側にいることは王の負担になるのだろうか？

かつて、ジェニーが王とともに兄の仇となろうと思ったのは、一時の気の迷いではない。ジェニーは彼と一緒にいたいだけだ。それが、どんなときでも。

王がジェニーの両手を握る。ジェニーが胸を詰まらせながら顔を上げると、彼が、晴れやかな笑顔に変わった。

「おまえの寝顔を見ながら、俺は思った。俺にはいつでもおまえが必要だ、だが、そのためだけに、おまえに死と隣り合わせの人生を強いるのか？　俺が王であり、おまえがここにおる限り、おまえは俺の代わりに狙われることもあろう。今回は敵の目を欺けたとしても、俺はそれをいつまで阻止しきれるか分からぬ。ジェニー、俺は

おまえが……フィリップでもケインのもとでも、それがどこであれ、生きてさえおればよい」

「そんなことを言うなんて、ずるい……！」

でも、王がジェニーを遠ざける目的でそんな言葉を使ったのではないことくらい、ジェニーには分かっていた。彼がめったに表に出さない、彼の心の奥底にある本当の気持ちだ。王の想いはなんて深いのだろう。

そしてジェニーは、王の心変わりを疑って自分の身を一心に心配していた間、彼がジェニーから皆の注意をそらそうと心を砕いていた、ということも気づいた。ジェニーは、彼に自分が心配されているかどうかしか考えず、彼の心にまで思いを馳せなかった。なんて自分勝手で考え足らずだったのだろう。繊細な彼は、事件に傷つき、苦悩していたのに。

ジェニーは涙を飲み、王の肩に頭をつけた。

「私はどこにも行かない」

ジェニー、と王がジェニーの肩を揺り動かす。「俺の望みは言うたはずだ。おまえはここを去り、フィリップのもとで安泰に生きろ」

「ただ呼吸をするのが生きることなら、それもいいかもしれない。でも、私の望みも聞いて。私はここであなたと生きたいの。あなたの声を聞いて、一緒に笑いたい。あなたが王として守りたいと思うものは、私も一緒に守っていきたいと思う」

「ここにおるのは危険だと言うたであろう！　俺の話を聞いておらぬのか！」

「聞いてるわ！　でも、あなたの話は私が死ぬことが前提なんだもの、素直に聞き入れられるわけないじゃない！」

「おまえを心配しておるのが分からぬのか！」

「心配しすぎよ！　私はそんなに簡単には死なないって、あなたはよく言ってるわ！」

王が口惜しそうに目を剥いた後、小さく呻く。

「俺は、おまえを死なせたくないだけだ」

「私は死なないし、どこにも行かない」
「なんと頑固な……」
ジェニーは、王が呆れて口を押さえる姿を見上げた。
「私は、あなたが王としてどう生きて、何を成し遂げるのかを見たいの。命を狙われるのがその代償なら、私はそれを運命として受け入れる」
王がジェニーの顔をまじまじと見つめ、深く重いため息をつく。
「……おまえがともに背負う必要はないと、言うたであろう？」
ジェニーは王の瞳を見つめた。
「必要はなくても、背負うかどうかは私が決める。私は、それを背負いたいだけだから」
王の唇から熱い息が震えて漏れた。しっとりとした彼の唇を目にすると、ジェニーにあの奇妙な興奮が再び舞い戻ってくる。
ジェニーが体を寄せると、王はジェニーの肩から手を放し、寝台に手をついた。彼は呆れたように頭を左右に振っているが、ジェニーから隠すようにそむける彼の瞳が、白い光でにじんでいる。
「私はあなたといつまでも一緒にいる。どこにも行かないわ」
王の肩がわずかに揺れた。
「……愚かな女」
その呟きは、王がジェニーの反論を受け入れたという返事にほかならない。ジェニーは笑った。

「ゴーティス王」ジェニーの呼びかけに、王が顔を上げる。
王は、ジェニーが顔を近づけて唇を寄せると、潤んだ瞳を静かに閉じた。彼のかすかに震える睫毛を見て、いつになく、ジェニーの鼓動が激しく胸を打つ。ジェニーは王の唇に自分のそれを軽く押し付けた。
「……ジェニー？」
王が目を開けたのは、ジェニーが彼の顔を手で支え、その唇に深

く入り込もうとしたからだ。ジェニーが荒くなった自らの息づかいに驚いていると、彼が怪訝そうにジェニーを見つめた。

王の瞳に誘われたのか、ジェニーの意思で動いたのか――。

「ジェニー？」

王の戸惑った視線を感じながら、ジェニーは毛布を蹴り、彼の膝をまたぐ。王はあきらかに驚いていたが、彼はジェニーにのしかかられた重みで後ろへ倒れかかった上半身を保ち、残った片手をジェニーの腰にまわした。

「急にどうした」

そう訊かれても、ジェニーにも自分の行動は説明できない。

「わからない」

ただ、王の温かい体に触れたいだけだ。触れれば触れるだけ、ジェニーはきっと、彼に近づける。

ジェニーの指が顔を這い、唇が彼の顔に近づく。王はジェニーの瞳を見つめ、とっておきの秘密を打ち明けるように囁いた。

「おまえに襲われる日が来ようとは」

ジェニーの腰にあった王の手が、背中を滑り上がっていく。寝服越しでも、ジェニーは王の五本指が作る軌跡全てを意識する。彼の指がなぞった線に沿って、ジェニーの背に熱い何かが溶け出していくようだ。

（――蝋の翼だ）

王の吐息を唇の間に感じながら、ジェニーは思った。それは、ジェニーの伸ばす手が太陽に届くまで、ジェニーを空高く羽ばたかせてくれるもの。

ジェニーは王の体に寄りかかり、二人は寝台の上に倒れた。彼の肌は熱く、その体温を感じれば、ジェニーの背に生えたばかりの蝋の翼は溶けてなくなってしまいそうだ。

王が手を広げ、ジェニーは、彼の首から肩にかけての筋肉に手で触れた。ほどけたジェニーの髪が王の胸に落ち、それをたどって、彼の手がジェニーの首の後ろにまわる。やはり彼の手も熱く、ジェ

ニーは、彼と接した部分から体が溶けていくのを感じ、焦った。
「あなたの近くに行きたい」
王の唇の前でジェニーが言うと、彼が、一度は閉じた瞳を開いた。
「おまえはいつでも俺の近くにおる」
「そうじゃなくて、もっと、近くに……」

何度それを掴みかけ、逃したことだろう。
夜に昇る太陽にあと少しという高さまで迫りながらも、ジェニーの手は届かなかった。王がくれた蝋の翼は溶け始め、液体に変わろうとしている。消え失せてしまうのも、もう時間の問題だ。
ついに手に触れた念願の感触に、ジェニーが歓喜の叫び声を上げながら目を開けると、その真上にはゴーティス王がいた。ジェニーの手が捕らえたのは、太陽より白く光り輝く彼の髪だ。ジェニーが感じていた熱い液体は、ジェニーが流した涙であり、王の体から滴る汗だった。
「ゴーティス王……」
ジェニーの声は枯れていた。王はジェニーに髪をつかませたままで顔を寄せ、ジェニーが見つめると、陽光の中に浮かぶ小さな二つの星空をジェニーに向ける。
「俺はここにおる、ジェニー」
最初、王が何のつもりで言ったのか、ジェニーには理解できなかった。それを察したのか、彼は腕に抱えたジェニーの膝に口をつけ、再び顔を近づけて、言った。
「俺はおまえと共におる」
ジェニーは感動にあえぎ、王の唇を引き寄せた。彼を引き入れれば、ジェニーは彼に限りなく近づけるような気がする。
ジェニーの体は焼けるほど熱く、自分の吐息で喉が焼ける。降り注ぐ光の眩しさにジェニーの目がくらむ。ジェニーの目指す太陽が近づいているのだ。
でも大丈夫だ、翼が完全に溶けて天から堕ちてしまう前に、ジェ

ニーはきっと白金の太陽に到達できる。ジェニーが近づけば、王はその熱をゆるめ、天上から手を差し伸べてくれるだろう。

王の声は熱い吐息と混じり、ジェニーの耳元で名を囁く。

「ゴーティス王……」

目の前が一段と眩しくなって、ジェニーは手を伸ばした。その手を王につかまれ、ジェニーは、目もくらむような生の世界へと引き上げられる。

第二部　6．春が訪れる前に－1

闘技大会後に最後まで王城に残っていたラニス公が帰った九日後の早朝、その冬初めての雪が、王城や首都ヴィスコンデールに降った。雪の降る中で朝から作業していた人々の吐く息は一際白くにごり、王城の城壁にはうっすらと雪が積もった。風が吹くと、城壁からは白い粉が舞い上がった。城壁にかぶった白い雪は昼前には溶けてしまったが、日光が届かない敷地内のあちこちには、午後遅くまで湿った雪が残っていた。

王は元気だ。冬にはいつも機嫌を悪くすることが多かったが、今のところ、彼が理不尽な理由で怒ったり、突然に滅入ったりすることはない。以前より口数が増え、人の話をよく聞いている。毎朝行う剣の練習も欠かさず、最近では、各地方を治める自治管理官たちに付ける、中央からの補佐官選びに余念がない。

それに対し、王妃は陰鬱な様子だ。温暖な土地で育ち、寒さに慣れない彼女は、ヴィレールで過ごす二回目の冬にいまだ苦労している。室内の気温が上がりきらない午前中、王妃はほとんどの時間を自室で過ごすそうだ。同郷の寒がりな侍女たちも、室内で屋外用の厚い上着をはおり、毎日のように後宮の寒さに不満を漏らしては、女官長やほかの使用人たちの眉をひそめさせている。

サンジェルマンは王妃を心配していた。もともと、引っ込み思案の年若い王妃とその取り巻きである高慢な侍女たちは、王城に集う大臣や貴族たちと深い交流を持たず、王城に住まう人々とも仲が良いとはいえない。王妃には味方も友人も少ないはずだ。彼女と侍女たちは、自分たちが王城で浮く存在になりつつある状況を敏感に感じ取っている。

そしてまた、王との結婚から丸一年が過ぎ、懐妊の気配さえ見せない王妃に、女官長はますます強気の姿勢で、「早く世継ぎを」と迫っているそうだ。

闘技大会後に開かれた連日の宴では、列席した有力貴族たちの中に、彼らの年頃の娘を同伴して王に挨拶に現れる者たちが少なくなかった。闘技場で王が言い放った「新しい女が必要だ」という発言を、彼らは娘たちを王に紹介するきっかけにしようとしているのだ。

王妃が世継ぎをいまだに設けていないのは明白な事実だ。彼らは王妃にそれ相当の敬意を払いながらも、彼女が王妃の座を追われる可能性を視野に入れている。

午後の短い日差しを浴びようと中庭に出てきた王妃と、その脇を固めるようにして歩く侍女二人、数歩離れて付いて行く近衛ジル。ジルはヴィレールの近衛でありながら、すっかり王妃の側の人間だ。サンジェルマンは彼女たちを見て、ヴィレールと彼女たちの間に、無視できない大きな溝があることに気づく。

王妃たちは、忍び寄る孤立化の影と世継ぎ問題への重圧に怯え、焦り、正妃を軽視しているとも取れる貴族たちの行動に憤慨している。彼女たちは後宮の寒さにかこつけ、表立っては口に出せない不満を、我々にぶつけているのだ。

初雪から一ヶ月あまりが過ぎ、降雪は毎日見られないものの、泥土と化した雪が地面にいつまでも残るようになった。日を追うごとに寒さは厳しさを増し、明るい空がのぞく日も少なくなっている。その日は、昨夜遅くに降った雪が大地を白く覆い、人々が行き交った跡が黒い線となって、その無地の地面を縦横に走っていた。

王がジェニーの小城を訪ねた日の翌朝は、サンジェルマンの一日の始まりが若干遅い。といっても、普段より二時間程度だが。一ヶ月半ほど前に一度きり、剣の練習開始時間を大幅に過ぎても王が姿を見せなかったことがあったが、それ以外、彼はほぼ定刻どおりに執務室に現れる。

今日も、王はサンジェルマンのほぼ予想どおりの時間に執務室に入ってきた。王の頬は赤らんでおり、体にまとわせていた冷たい外

気も一緒に室内に持ち込まれる。
　王が来る前からそわそわと落ち着かなかった女官長が、王が席に着くやいなや、サンジェルマンが事前に聞かされていなかった一件を単刀直入に切り出した。
「王、そろそろ、ジェニーに御子を持たせてもよいのではありませんか？」
　サンジェルマンが驚いて女官長を振り返ると、彼女は不機嫌そうに彼を一瞥した。彼女の隣にいる侍従長は驚いていないので、彼女の提言を事前に把握していたようだが、顔は緊張に強張っている。
　王が、平然とした口調で彼女に返した。「ジェニーには既に子がおる」
「ええ、ですから――」と、彼女はまたサンジェルマンをちらりと見た。「ジェニーには、今度は男の御子を産んでもらうのです、王。彼女も王の御子とあれば、まさか、嫌とは言いますまい。王妃様として、ほかの知らない女ならともかく、彼女相手となれば、そこまでの文句を言いはしないでしょう」
　女官長はジェニーが王妃を差し置いて男児を妊娠することを恐れ、ジェニーに避妊薬を服ませている王の配慮を評価していたはずだった。王はサンジェルマンを見たあと、笑みを浮かべて女官長を見返した。
「おまえはジェニーを嫌っておったであろうに、どういった風の吹き回しだ？」
　彼女が少しひるんだ。「いえ、嫌っている、というほどではありませんが……」
　サンジェルマンは、ジェニーを毛嫌いしていたはずの彼女の弱々しい反論に驚く。
「王、私はただ、国の今後を心配しているのですわ」
　王は女官長の憂いを笑い飛ばした。
「俺だとて考えておる」
「そうであれば、王？」

「だが、世継ぎに関しては妃にもう少し任せておけ。妃が城に入ってまだ一年ではないか。先王は俺が生まれるまでに八年も待ったと聞くぞ？」

「先王は王の前に五人の御子――そのうちのお二人は数日で亡くなられたにしても――それだけの御子に恵まれておいででした。結婚後一年を経過しても最初の御子を懐妊されない王妃様とは、事情が違いますわ」

王が頭の後ろで手を組み、背もたれに体を寄せた。椅子のきしむ、小さな音が室内の沈黙を裂く。王が、女官長をまっすぐに見つめて言った。

「おまえが焦るのはわかるが、今は時期尚早だろう。俺は妃の国に、妹をないがしろにされたと文句を言われたくはない。ともかく、あと一年は様子を見ろ」

「……そうでございますか。王のご寛大なお言葉を聞けば、王妃様もどんなにかお喜びでしょう。ええ、結構ですわ、承知いたしました」

王がサンジェルマンに一瞬だけ視線を走らせる。

「ですが、王？　私どもはジェニーがもし王の御子を懐妊しても――」女官長の嬉々とした声を遮り、王が言った。

「ジェニーに庶子を産ませる必要はない。あの女もそのつもりだ、訊いてみるがよい」

女官長は肩を落とし、はい、と沈んだ声で返事をする。王は満足そうに微笑んだ。

王は今や、ジェニーに対して全幅の信頼を寄せている。恋しいとか愛しいとか、女に対する一般的な感情とは異なるものだ。少し前までの、王の夢見心地な表情や態度が消えている。それは、サンジェルマンの読みが正しければ、王が昼近くまで王城に戻らなかった日を境に変わっている。

その前夜、王とジェニーは寝室で激しい喧嘩を繰り広げていたそ

うだ。そのときに隣の続き部屋にいたアリエルが、当日の昼前、王を探して小城まで来たサンジェルマンに教えてくれた。

大きな喧嘩なら暴力沙汰になったのではないか、と心配するサンジェルマンを、アリエルはきっぱりと否定した。仲直りなさったはずですよ、と彼女が顔を赤らめながら言うと、王付きの近衛兵たちの頬もほんのりと色づいた。

激しかった喧嘩のせいなのか、激しかったその後の仲直りの賜物なのか、その日に起きた何かが、王とジェニーの結束を強くしたようだ。

そして、時を同じくして、ジェニーの側でも王と似たような変化が起こっていたらしい。

サンジェルマンや侍従長と執務室を退いた女官長が、困惑を隠せない様子でサンジェルマンを見た。世継ぎ問題については彼女はあきらめが悪く、王の命令に納得していないのだろう。

「サンジェルマン様、最近、ジェニーに会ったことはございますか？」

女官長は過去二ヶ月ほど、一週間に一度の頻度でジェニーのもとを訪ねている。以前は王妃に気兼ねして小城に出向くことはなかった彼女だが、今は堂々とジェニーの娘に会いに行っている。

サンジェルマンは自分の記憶をたどった。彼はめったに小城を訪ねない。

「ここ一ヶ月ほどは顔を見ていないな」

ジェニーを最後に見たのは、彼女が小城の庭園で娘と遊んでいたときだ。彼女に声を掛けてはいないが、娘と手をつないで飛び跳ねていた姿は無邪気な子どものようだった。特に変わった様子はなかった。

「彼女が何か？」

「ええ。彼女、前と少し変わったような……以前から怖いもの知らずなところはありましたが、何と言いましょうか、最近は肝が据わ

ったような印象を受けるのです。
実は――王に申し上げる前に、先だって私はジェニーを訪ね、彼女に王の御子を産むように諭したのです。ああ、勝手なことを、と責めるのはお止めくださいませ！　私はご世継ぎの件を本当に心配しているのです。ジェニーは既に王の御子をもうけているのですから、彼女に期待をかける私の気持ちもおわかりでしょう？」
ジェニーに期待をかけることは理解できるが、王の知らぬところで、彼の気に沿わない状況を作り出そうとした彼女に、サンジェルマンは憤りを感じた。女官長の言い分は一方的だ。ジェニーは女官長の突然の頼みに戸惑っただろうし、その行為を知れば王妃は傷つく。
「褒められる行動ではないな、女官長」
サンジェルマンが語気を強めると、彼女はうな垂れ、あっさりと同意した。
「そうですわね。それとまったく同じことを、ジェニーにも言われましたわ。それに、王のご世継ぎについては王妃様が関知する問題だから、と彼女からは断りの返事も貰いましたわ。王が仰っていたように、彼女は王の御子を産む意思がないのです」
愛人の分際で生意気な、と彼女が息巻くのを予想していたサンジェルマンは、彼女が意外に落ち着いていることに驚いた。彼女は自室の机の前まで歩き、くるりとサンジェルマンに振り返る。
「それに、こうも言われたのですよ。娘を気に掛けてくれるのはとても嬉しいけれど、女官長が仕えるべき方は王妃様なのだから、小城にはあまり立ち寄らない方がいい、と。
ジェニーは微笑んでおりましたわ。私はなんだか……威厳すら感じました。あんな小賢（こざか）しい娘なのに」
――王とジェニーの間に何があったのだろう？
サンジェルマンが考えを巡らす隣で、女官長は、「まるで、彼女の方こそが王妃のように気高かった」とため息をつく。

＊　＊

雪によって屋内に閉じ込められ、来客もない日が続くと、気分が塞ぎがちになる。

ジェニーは本格的な冬が来る前にそう思ったのだが、自分自身を含め、小城の人々は比較的楽しく過ごしている。図書室は蔵書であふれているし、もともとが遊びに興じるために建てられた小城は、退屈しのぎの遊び道具が豊富に用意されている。天真爛漫なカミーユの存在も、小城を明るい雰囲気に保っている。

常に王や要人に囲まれている王城とは違い、庶民出身の主人ジェニーを持った使用人たちは、のん気なものだ。ジェニーは彼らと一線は引くものの、屋内で彼らと一緒に過ごす和やかな時間を存分に楽しんでいる。

雪が断続的に降り続いた一週間が過ぎると、小城から見える一帯は白一色の景色へと様変わりした。殺風景でもあり、神秘的ともいえる雪景色だ。ジェニーは鎧戸が閉められずにいる部屋に移動し、寒さに凍えながら、雪景色が赤みを帯びる夜明け前に外を眺めるのが好きだ。廊下の突き当たりにある一室からは、真っ白い世界に浮かびあがる、冷厳そうな王城も見える。

寒々とした佇まいの王城を見ると、王に会えずにいる寂しさが増す。だがその一方で、彼への愛しさが増すのも確かだ。

ある日、細かい雪がひっきりなしに降る中を、兵舎に向かう途中だというライアンが小城に寄った。それまで屋外で続けていた剣の練習を屋内に切り替えてから、彼は小城に毎日は来ない。来客に飢えていた小城の人々はライアンを引きとめようとしたが、彼は王から預かったという「書状」をジェニーに渡すという目的を果たすと、十分も経たないうちに去っていった。

「緊急用件でしょうか？」

王が、王城と目と鼻の先に住まうジェニーにわざわざ紙に書いてまで伝えるのなら、かなり重要なことに違いない。

「とにかく、見てみないと」ジェニーは急いで封を解き、書状を広げた。

緊張しながら紙の最上部を見ると、“近況報告”といった文字がジェニーの目に飛び込んできた。角ばった、大きな文字だ。数行分の空間の下に、黒い字で書かれた文が続いている。ジェニーは、王が書いたであろう文面を目で追った。

「――ジェニー様、どうなされたのです？」

「……えっ？」

ジェニーは突然我に帰り、王のくれた書状の上にアリエルの顔を見つけて、慌ててそれを丸めた。顔が火照って、熱かった。

「良い知らせだったようですね」

アリエルには何でもお見通しだ。でも、王からの“近況報告”に目を通しながら、ジェニーは嬉しそうな顔をしていたに違いないのだ。

ジェニーは、王と会えない間に手紙でも伝言でも何らかの連絡を貰えていたらよかった、という先日の訴えを王が覚えていてくれたことに、静かに感動していた。彼に会いたくなって胸がときめくが、彼が自分と会えない時間に自分を想っていたと思うと、ジェニーはなんだか幸せな気分になる。“近況報告”ともったいぶった題名をつけ、王がどんな顔をしてこの文面を書いたのかと想像すると、笑みが止まらない。

「アリエル、今から地下の貯蔵庫に一緒に行ってもらえる？　欲しいぶどう酒があるの」

「まあ、ジェニー様をそんな場所になど行かせられませんわ。私が取って参ります」

「ううん、自分で行くわ。手に取って、見てみたいのよ」

王は、地下の貯蔵庫にある、右端から三番目の樽にあるぶどう酒を王城に持っていったそうだ。飲み口が軽くて甘く、酒の苦手なジ

ェニーでも楽しめる味だという。彼の書状によると、王城での今夜の晩餐に、そのぶどう酒を用意させるつもりらしい。

彼の書状は、こう締めくくっていた。

『晩餐をともにするのは叶わぬとも、同じ夜に同じ酒を口にしておると思えば、多少なりとも気分がよいとは思わぬか？』

ジェニーが王からの初めての手紙を受け取った日の翌日、ラニス公からの手紙がジェニーに届けられた。ジェニーがラニス公に宛てて書いた、彼の申し出を断る手紙への返事だ。

ラニス公はあくまで優しかった。ジェニーからの早すぎる返事に、彼は封を切る前から答えを予感していたそうだ。非常に残念だがジェニーの意思を尊重する、と彼は手紙の中でも紳士だった。そして、自分はしばらく独り身だろうから、気が変わったらすぐにでも知らせてもらいたい、とも言っていた。

ジェニーは、手紙の文面のあちこちから滲み出るラニス公の温厚さに、ほっとさせられた。勝手かもしれないが、彼とはいい関係を保っていたい。ジェニーにとって、彼は結婚相手というより、むしろ、父親像に近いのだ。

ラニス公の手紙には、もう一通の手紙が添えられていた。ラニス公の手紙より粗悪な紙に書かれたそれは、モーリスが差出人だ。ラニス公直属の農園の管理人で、ジェニーを一時期保護してくれた男性。

懐かしさに胸を突かれ、ジェニーはごわついた紙の封を解く。

ジェニーは紙全体をびっしりと埋める黒い文字を予想していたのだが、丸められた手紙の中からもう一つの手紙が転がり出てきて、びっくりした。同じように粗悪な材質の紙だ。モーリスが用心深くて包みを二重にしたのか、手紙の内容に重大な秘密でも書かれているのか。

朱色の蝋で閉じられた手紙を見て、ジェニーは胸騒ぎを覚えた。

紋章を示す封印は形がつぶれている。アリエルは部屋の隅で編み物をしているが、ジェニーの方を注意して見てはいない。

ジェニーは封を丁寧に取り除くと、音を立てないようにして手紙を開いた。どこかでいつか見たことがあるような筆跡が、ジェニーの前に現れる。

『女神エクリシフェに共に誓った同士、ジェニーへ』

第二部　6．春が訪れる前に－2

女神エクリシフェに共に誓った同士、ジェニーへ

この手紙をきみが読んでいるのなら、あのモーリスという男は本当に誠実な人なんだね。

あえて、名前は書かないけれど、私が誰かわかるよね？

そう、私は生きていたんだよ。驚いた？

きみと生き別れてからもう二年半くらいになるんだね。

きみがモーリスに助けられ、子どもを無事に産んだことは本当によかったと思ってる。でも、風の噂で、きみが王城にまた連れ戻されたと知って、驚いたよ。どこでどうやって、あの王に見つかってしまったんだろう？

私は、きみが再び王のもとで苦渋に満ちた生活を強いられていると思うと、すごく心苦しい。王がきみを見つけ出す前に、どうしてきみを捜しあてられなかったのかと、私はとても悔やんでいる。

だけど、きみのことだから元気で暮らしているよね？　以前とは違って、王に正妃がいる環境では辛いことも多々あるだろうけれど、きみには守るべき子どもがいるんだもの。

モーリスが言うには、とても可愛らしい女の子だってね。たぶん、王によく似ているんだろう。ああ、でも、モーリスは子どもの父親が王だとは知らないよ。きみが今どこに住んでいるのかも、ラニス公からは知らされていないから。

ああ、ジェニー。

私はきみに会いたい。きみを今すぐにでもそこから救い出したい。

でも、ジェニー、私は今、国外にいて、しばらくは国内に戻れないんだ。罪人である私を追って、私が身を寄せていた家にまで捜索

の手が及んで、少なくともこの冬の間は、私は国外で身を潜めていなきゃならない。それに私は、私を匿ってくれた女主人、名義上の妻である女性と一緒だ。

彼女はいい人だよ。川原で倒れていた重傷の私を救ってくれ、彼女の行方不明の夫として、私を家に受け入れてくれた。彼女は本当によくしてくれるよ。彼女のおかげで私は今まで生きてこられたんだ。私はとても感謝している。

彼女は、きみの存在も承知しているんだ。私がきみをとても大切に思っていると知って、きみと再会できるように協力すると言ってくれている。

ジェニー、春がやって来ると、王城では大勢の客を招き、大規模な祝いの宴を開くんだ。私の妻がその招待状をどうにか入手するから、私たちはその宴の場で会おう。そんな公の場に姿を現すのは危険かもしれないけれど、大勢の招待客でごったがえす宴の席は、私たちが再会するのに願ってもない機会だと思う。

夜空に浮かぶ月を見上げると、いつもきみのことを思い出す。女神にきみの無事を祈っている。

ジェニー、きみにもう一度会いたい。

王城生活は決して楽ではないだろうけれど、どうか、再び会える春の宴の日まで待っていてほしい。

私はきっと、きみをそこから救い出す。

◇　◇

手紙には名前も署名もなかった。

だが、それはケインからの手紙だ。ずっと音沙汰のなかった彼は、どこかの婦人に助けられ、今も生きている。

ジェニーは長いため息をついた。実際には数分だろうが、手紙を

読み終わるのに数時間が過ぎ去ったような気がしている。そして、ケインと会い、逃亡していた日々が十年以上も過去のような気さえする。

彼が無事でよかった。

心の片隅にいつも刺さっていた小さな棘が、今ようやく、静かに抜け落ちたようだ。

ケインはジェニーの仲間であり、友達であり、そして恩人だ。追っ手から逃れるために川に転落したとき、ケインはその全身でジェニーを衝撃から守ってくれた。おかげでジェニーは傷ひとつ負うこともなく、濁流の中で彼とはぐれても、自力で川岸にたどり着けたのだ。その後二年近くも記憶を失ったジェニーには、ケインを捜し、安否を確かめることはできなかったけれど。

ケインのことは、いつもどこかで気に掛かっていた。毎日思い出すことはなかったが、月の明るい夜は、ジェニーは彼のことをよく思い出した。彼との逃亡生活は飢えと疲労に悩まされたが、彼といると、ジェニーはいつも穏やかな気持ちになれた。そして今も、ジェニーの胸のうちには、そよそよと暖かい風が吹いている。

（……ケインが生きていてくれて、本当によかった）

ジェニーは再び安堵の息をつき、手紙の最後の行を読み返す。

『私はきっと、きみをそこから救い出す』

文面から、ケインの熱意が伝わってくる。

ケインはジェニーが王のもとで苦痛の日々を送っていると勘違いしているようだが、大変な誤解だ。ケインと王城を脱出した当時はそうであっても、今のジェニーは自分の意思で王のもとに留まり、ケインに救い出されるような状況にない。でも、国外で身を潜めているというケインに、どうやって誤解を解いたらよいのだろう？

王とともに生きることを決意したジェニーに、城を去るつもりはない。ケインには会いたかったが、彼が危険を冒して王城に来る必要はないのだ。今もなお彼を嫌悪する王の膝元で、二人が再会を果たすのは危険すぎる。

考えあぐねた末、ジェニーはモーリスにケイン宛の手紙を託すことにした。春になって国外に戻ったケインがモーリス宅に寄るとは限らない。だがほかに、どんな方法があるのか。ジェニーには、ケインへの伝手はないのだ。

何日かぶりに王が訪ねてきた日の翌朝、ジェニーは肩に冷気を感じて目を覚ました。ジェニーのぼんやりとした視界の半分を、何かが邪魔している。

温かな温度を保ったそれは、王の右腕だった。ジェニーの顔にかかった彼の腕はあまり重くはなかったが、ジェニーが顔をずらそうとしても、ぴくりとも動かない。ジェニーの右隣にいる王の姿を横目で見ると、彼は顔半分を枕に押し付け、静かな寝息をたてていた。熟睡しているらしい。

王が熟睡している姿を目にするのはこれが二度目だ。彼は常にジェニーより早く起き、ジェニーが夜中にふと目覚めてしまったときでも、王はジェニーのその気配を感じてすぐに目を開ける。彼は眠りが浅く、人の気配に敏感なのだろう。だから、夜通し起きていた彼とジェニーが朝方眠りにつき、昼前まで眠ってしまった日まで、ジェニーは彼の寝顔をしっかりと見たことがなかった。

そのせいで、ジェニーが初めて王より早く目覚めた日、ジェニーは彼の寝顔を見て、彼が死んでしまったのではないか、と一瞬心配になった。その前夜の彼は普段よりずっと幸せそうに笑っていたが、二人が抱き合うごと、彼の息遣いが荒くなっていったのも確かだ。彼が呼吸困難で死んでしまうのではないかと心配し、ジェニーは彼に笑われた。だが、ジェニーには、彼が疲労困憊しているように見えたのだ。隣に体を投げ出した彼の胸が激しく上下する様子は、ジェニーの目に今でも焼きついている。

王の眠りの邪魔をしないように、ジェニーは彼の腕をそっと押し

た。彼はまだ、安心しきって眠っている。

ジェニーは王の寝顔を見つめた。彼の緑色に輝く瞳が閉ざされているのは残念だったが、ジェニーが心置きなく彼を見つめられる、こんなうってつけの機会はそうそうない。彼の無防備な寝顔を目にすると、ジェニーは、彼を胸の中に抱きしめたくてたまらなくなる。

そのうち、王の喉が痙攣するようにわずかに動いた。ジェニーが息をひそめていると、王の眉間にしわが寄り、彼の唇から低いうめき声がもれる。

「おはよう」

やっと両目を開いた王に、ジェニーは声をかけた。室内はまだ暗かったが、彼の視点はジェニーに一度定まった後、何かを求めるように宙に移る。

「……もう起きたのか」

王が言った。まだ眠り足らない、とでもいうように大あくびをする彼は、子どもそのものだ。

王は枕に突っ伏していた顔を上げ、ジェニーにさっきまで伸ばしていた手で自分の額をさする。柔らかすぎる彼の髪は頭の左半分が乱れ、耳の横や額の生え際に豪快な寝癖がついていた。

「まだ早いだろう。もうひと眠りできるぞ」

そう言いながら、王はジェニーの首に手を伸ばし、彼の体に引き寄せる。

ジェニーが王の首に手をまわすと、彼の唇がジェニーの額に触れた。それから、彼はジェニーの体を包みこむように抱くと、ジェニーの耳元で小さな笑い声を漏らす。

「どうしたの？」

「いや……おまえは声が大きいと思うてな」

王が笑いを噛み潰す。

「そうね、声が小さい方ではないと思うけど」ジェニーは顔を傾け、王を見た。「一一なぜ急にそんなこと言うの？」

ジェニーが訊き返すと、王が瞠目した。
「おまえ……自分で気づいておらぬのか？」
「気づくって、何に？」
ジェニーが不審に思って王を見つめると、彼は唖然としてジェニーを見つめ返した。何をそんなに驚くのだろう？　だが、その彼の呆れた表情も長くは続かない。
「よい、気にするな。おまえが我を忘れておるのなら、その方が俺は満足だ」
王は相好を崩し、あまりに嬉しそうな笑顔を目の当たりにして、ジェニーは彼に問い返す機会を失う。
「おまえの血を受け継いだ娘も声が大きいわけだ」
王が呟いた。
王は同じ室内にカミーユがいても、もう文句は言わない。その方がジェニーが喜ぶからだ。だが彼は、依然としてカミーユを自分の娘とは認めていない。
ジェニーは王の背中にまわした手に力を込めた。
「カミーユはあなたにもよく似てるわ」
「そうであろう」
王がそう発する前の一瞬に、ジェニーと彼の唇の間にあるほんの数センチの空気が凍りつく。
王がジェニーの視線を捕えて、言った。「同じ血筋だ、似ておるのも不思議ではない」
ジェニーは王の視線を受け止め、もう幾度口にしたか知れない、王を不機嫌にさせる科白を言った。
「ゴーティス王、何度も言ってるけど、あの子はあなたの娘よ」
王がうんざりしたように顔を歪め、頷いた。
「そうだ、俺の娘として引き取った。娘はここでも俺の娘として大切に育てられておるはずだ。おまえはそれ以上、何を望むのだ？」
ジェニーは胸に鈍い痛みを覚えながら、なおもくいさがる。「ゴーティス王、ケインと私は……」

王がジェニーの瞳をのぞきこんだ。
「おまえの口からその名が出るのは不愉快だ。俺の前でその名を二度と口にするな」
王から投げかけられたのは、一切の反論を受けつけない、冷たい視線だ。
ケインのことが絡むと、王はどうしてここまで意固地になるのだろう？
ジェニーは彼のそんな反応に驚き、そして、憤りと寂しさを感じた。ジェニーはケインについて深く知っているとは言えないが、彼は、誰かから恨まれたり憎まれたりする人間ではないように思う。無邪気で素直で、どちらかというと、虫も殺せない種類の人間だ。その彼がなぜ、罪人として地下に幽閉されるはめになったのだろう？　王はなぜ、弟の彼に対してそこまで神経質になるのだろう？
王の手がジェニーの首から頬へと滑っていく。心地よい感触の中で自分を見失わないうちに、ジェニーは王に尋ねた。
「ゴーティス王、あなたとケインの間に、何があったの？」

＊　＊

サンジェルマンがライアンから相談を受けたのは、深夜に降った冷たい雨が、夜明け前になって雪に変わった日の朝だ。ただし、ライアンからの相談は、相談というよりはむしろ、事後報告だった。
近衛兵たちの利用する食堂で、「彼を担当から外した」とライアンは最初に言った。王妃の護衛を務める、若い近衛兵ジルのことだ。ジルは色が白く、痩せ型だが鍛えられた太い手足を持った、赤毛に近い金髪が印象的な近衛兵だ。まだ十五、六という彼が王妃付きの護衛に抜擢されたのは、若いながらも剣の腕が確かで、王妃の出身国の言葉を話せたためだ。

「このところの彼の言動には、ヴィレール国の王付き近衛隊員として、目に余るものがある。王妃様と親交を深めるなとは言わぬが、我々は王妃様の友人ではない。彼はまだ若く、自制心がきかないのだろう。口さがない者たちの間では、王妃様と彼の仲が面白半分に取り沙汰されている。ああ、もちろん、そういった事実はないが、用心するに越したことはないだろう？　……王妃様はご不満だろうが、昨日付けで彼の職を解いた」

つまり、王妃は今日の朝、ジルが護衛から外れたことを知るのだ。彼女の落胆は相当なものに違いない。きっとまた、王妃から抗議を受けるだろう。

苦りきった顔をするライアンに、サンジェルマンは同情する。

以前にもたびたび、ジルをめぐる同じ問題は浮上している。だが、そのたび、王妃は彼を職に留まらせるよう、必死にライアンたちに頼みこんできていた。ヴィレールの民ではあるが王妃と同郷の言葉を操り、彼女と同年代でもあるジルに、王妃は並々ならぬ親近感を抱いているのだ。ジルもまた、護衛として必要とされる以上に王妃に尽くしていた。皆が噂するような恋愛関係に発展する可能性は低そうだが、王妃にとって、特に親しい者がいない環境下では、彼のような存在は貴重だろう。

「そうですか。ではそのうち、王妃様から何かしらの反応がありましょう」

「そうだな。だが何と言われようが、この決定を覆す気はない。王妃様には、護衛担当との好からぬ噂が出ているとお伝えするつもりだ」

「ええ。そう聞けば、王妃様もあきらめてくださると思います」

そしてライアンは、彼がこの苦渋の選択をするきっかけとなった出来事をサンジェルマンに語った。

一昨日の朝、ジェニーの住む小城にジルが一人で現れたのだという。雪は降っていなかったが、その日は朝からかなり冷えこんでい

た。ジルの吐く真っ白な息で、彼自身の顔が見えなくなるほどだったそうだ。

「ちょうどそのとき、私は剣の練習を終えて地下から戻るところだった。ジェニー殿も一緒だ。玄関で靴についた泥をはらっていたジルは、私を見つけると、ひどく動揺した。私がそこにいるとは思わなかったのだろう。私が来訪理由を問うと、彼は、ジェニー様に何かご入用のものがあるか訊いてきてほしい、と王妃様に頼まれたと言うのだ」

「王妃様はそういったお心遣いをされるお方でしょうが……彼がそんなことまでするのですか」

「彼が王妃様の伝言役となったことは過去にもあったらしい。だが、王妃様がジェニー殿にそんなことを尋ねるためだけに、わざわざジルを出向かせたかどうかは疑問だ。彼が勝手な行動に出ただけというのもありえる。私がもしそこにいなかったら、ジルはどう出たのか……彼は敵意剥き出しの目でジェニー殿を見ていた」

二人は同時に、背後の人の存在を確かめた。食堂には、彼ら以外に誰もいない。

「ジェニーに危害を加えようとした、ということですか？」

「王妃様にとって、ジェニー殿は疎ましい存在だろう。彼は王妃様に傾倒している。王妃様のためを思い、彼が彼女を殺そうとしたとしても、私は少しも驚かない」

サンジェルマンはジルとほとんど会話をしたことがないが、彼が王妃を敬愛していることは感じ取っていた。彼の目はいつも王妃を追っている。彼女のためになるのなら、ジルは喜んで命まで差し出しそうだ。

「ともかく、ジルは王妃様の護衛から外れた。王妃様を大事に思うばかりに、彼は女官長にも意見したらしい。これ以上、彼に王妃様の身辺にいさせるわけにはいかないだろう」

それにはサンジェルマンも同意見だ。あとは、王妃がこの決定をすんなりと受け入れてくれればいいのだが。

午後の日差しが中庭の中央にある雪を溶かし、そこだけ土色の地肌がのぞいている。風がなく、日光が入るせいで、中庭はそれほど寒くはなかった。サンジェルマンが降り立った出口から、中庭を斜めに突っ切るように歩いた足跡が白い雪の上に残っている。男三人の足跡だ。王とその護衛たちだろう。

サンジェルマンは、冬季は窓を閉ざすサロンになにげなく目をやり、その出入口からも、足跡が中庭に続いているのを見つけた。衛兵が出入口の前に立っているが、彼の足跡ではなさそうだ。その足跡をさらに目で追うと、王たちが残した足跡に合流している。足跡は、サンジェルマンが立つ位置から対角線上にある、両開きの扉にのびていて、その前に赤い色の物体が横たわっているのが見えた。

（また、雪かきの道具を置き忘れたか）

雪の日が続くと、たまに、雪かきをした男たちが道具をその場に置き忘れていくことがある。ただ、王が出入りする中庭や東館の周辺では、めったに起こらないが。

（王が戻る前に誰かに片付けさせよう）

サンジェルマンは息をつき、赤い物体を目指して歩いた。雪を踏みしめるたび、冷気が足元から立ち上ってくる。

中庭の中央に植えられた木を通り過ぎた頃、ふと、サンジェルマンの歩みが止まる。

「何だあれは？」

赤い物体から、何かのぞいていた。目を凝らして見ると、小さく、細い人間の足のようだ。

サンジェルマンは急いで、扉の前に駆け寄った。

「……王妃様！」

サンジェルマンの叫び声に、扉にもたれて足を投げ出していた王妃が、はっと顔を上げる。

「サン……ジェルマン？」

王妃の服は雪にまみれ、髪もびしょ濡れだった。顔も濡れていたが、どうやら、それは雪のせいだけではなさそうだ。彼女の目は充血し、化粧ののった頬の上に涙の跡が残っている。

「こんなところでどうなさったのです！　大丈夫ですか？　どこもお怪我はありませんか？」

サンジェルマンが王妃の前に跪くと、彼女が顔をそむけた。

「ええ、私は……」

それから、彼女はまた息を飲み、上半身を起こす。

「ああ、サンジェルマン！　私は……私は大変なことを……！」

「王妃様？」

王妃はサンジェルマンの腕にしがみつき、気の毒なほどに震え始めた。

「王妃様、いったい何があったのです？　どうされたのですか？」

「ああ、どうしましょう！　私はどうしたらいいの……！」

王妃は首を振り続け、嗚咽を漏らすばかりで何も答えない。

嫌な胸騒ぎがした。そして、往々にして、サンジェルマンのこの悪い予感は的中する。

ほどなく、扉の向こうから、全速力で走ってくるらしい足音が聞こえてきた。

第二部　6．春が訪れる前に－3

湿った地面を蹴って近づくその足音を聞くと、サンジェルマンの脳裏には、同じように王城の廊下を走っていた、約五年前のある日の午後が思い出された。サンジェルマンの人生の中で、最も長い一日のことだ。

なぜ今、この瞬間にそんなことを不意に思い出したのだろう。思い当たるとしたら、今朝、アリエルから突然の訪問を受けたことしかない。

アリエルがわざわざ出向いてくるときは、良くない知らせの場合が多い。サンジェルマンは彼女と顔を会わせられて嬉しかったが、彼女はいつにも増してかしこまり、彼に深々と頭を下げた。

「サンジェルマン様の口から、ジェニー様にご説明いただけないでしょうか」

アリエルがサンジェルマンに求めたのは、皆が口にのぼらせようともしない、王の実弟についての情報だ。王に殺されたとする弟がどんな人間で、王とはどんな関係にあったのか。

王が弟に屈折した感情を抱き苦しんでいることに、ジェニーは心を痛めているそうだ。王弟のことを知れば、王の苦しみを少しでも取り除けるかもしれない。主人の様子を見かね、アリエルは無理を承知で、事情に通じていそうなサンジェルマンのもとにやって来たのだ。

けれども、サンジェルマンはアリエルの依頼を断った。彼女が落胆するのを見るのは忍びなかったが、王と王弟ケインの関係はサンジェルマンも本当の意味では把握しておらず、また、簡単に立ち入れるものでもない。ケインが実は生きていて、ジェニーとかつて王城から逃げた相手であることを、アリエルは知らない。小城の者たちにも、知らされていない。

ゴーティス王とケインは二歳違いの兄弟だったが、昔から仲がよいとはいえなかった。決して嫌い合っていたのではないが、二人が語り合ったり、一緒に遊んだりすることはほとんどなかった。生まれたときから別々に育てられた環境のせいだろう。

サンジェルマンが二十歳を迎える頃、彼は、二人のうちの兄の方、当時はまだ王子だったゴーティス王に仕えることが決まった。突然の命令だ。数年前より剣の練習相手を務めるなど、サンジェルマンは彼のことを知ってはいたが、まだ若輩の自分が第一王子の傍らに付くことには、戸惑いと驚きが隠せなかった。両親や兄弟も同様だったはずだ。

だが、王城にあがってみて、サンジェルマンはその意外な人事の理由を知ることとなった。王子は衛兵や使用人たちには人気があったけれども、大臣やその当時はまだ存在していた司教たち、すなわち、実際に政治を動かす実力者たちには嫌われていた。本来ならば次期国王として丁重な扱いを受けるはずの彼は、その存在を軽視されていた。彼は、即位できる成人となる日を目前にして、身近で信頼できる誰かを必要としていた。そしてその役割を、王は、中立の立場を保つサンジェルマン家に求めたのだ。

サンジェルマンが第二王子であるケインに会ったのは、王城にあがった初日のことだ。ケインは兄の新しい側近サンジェルマンを見つけると、彼自ら近づき、笑顔で挨拶した。王子という身分でいながら、彼は気さくな人物だった。二人の王子たちの母である王妃、彼女と親交のある有力貴族たち、貴族の若い娘たちなど、ケインはどこにいても多くの人に囲まれていた。彼は明るく、いつも笑っていた。

当時、王城の人々は対照的な兄弟を比較し、兄の境遇を哀れんでいた。第一王子として生まれようと、実際の政治を操る者、特に司教に疎まれれば、次の王とは認められないだろう――。当人のゴーティス王子はそんな風潮はとっくに知っており、気にかけてもいな

いようだった。王位にはあまり興味がない、と、彼は事あるたびに言っていた。医学書を読んでいた彼が「東の国で医学の勉強をするつもりだ」と笑いながら言うのも、あながち冗談ではなかったのかもしれない。

そんな兄弟に第一の転機が訪れたのは、彼らの父が死んだ日のことだ。その日、王であった彼らの父は妻である王妃に毒を盛られて殺された。彼女の共犯として名があがったのは、彼女が親しくしていた司教だ。二人が愛人関係にあったことも同時に暴露された。

二人とも、ケインが慕い、深く信頼していた者たちだ。父の跡を継いだゴーティス王が二人を翌朝に処刑すると、ケインは衝撃のあまり、それから数日間、寝込んでしまった。その後、何とか立ち直ったケインは兄の対応に理解を示す態度を見せたものの、実際のところ、心情的には納得していなかったようだ。

二人の間の微妙なわだかまりはその後も継続したが、ゴーティス王はそれを重要視していなかった。若くして王位についた彼には、ほかにすべき事が山積みだったのだ。勢力を増し過ぎていた母の実家を取り潰し、司教の権限を制限し、王家の権力の回復に必死だった。彼は、それが父から託された使命だと思っていた。サンジェルマンはそんな彼を誇りに思い、できる限りの力となろうと彼に尽くした。

日々は移ろい、一時は王を哀れんでいた人々の目が尊敬を含んだ眼差しに変わり、王城も社会も、平常を取り戻しつつあった。サンジェルマンがひと息つく暇もなく、時は瞬く間に過ぎていった。

そして、あと数ヶ月もすればケインが成人を迎えようとする頃だ、王が盲目的な恋に落ちたのは。

その女は、交友関係の広いケインの友人の一人として王城に出入りしていた。王よりいくつか年上で、背が低く、長い茶色の髪をいつも同じ形に結い上げていた。どちらかというと地味で飾り気がな

く、物静かで利口そうに見える女だった。ただ、王を見るときの彼女の大きな水色の瞳は、なぜか、なまめかしい色気にあふれていた。

王は肉体的にも精神的にも若く、女性経験も乏しかった。それに、愛情にも飢えていた。

女が一度王に応えると、王はすぐに彼女にのめりこんだ。サンジェルマンの忠告にもまったく耳を貸さなくなった。王は、彼女を愛している、とサンジェルマンに言った。今考えてみれば、王は彼女の甘言にだまされ、与えられる肉体に夢中になっていたに過ぎないのだろうけれど。

だが、王と彼女の関係が三ヶ月に及ぶ頃、二人の別れは突然に訪れた。同時に、王と成人に達したばかりの弟の間も決裂した。

惨劇は、いきなり起きた。その第一報が伝えられたとき、王がめったなことでは暴力をふるわないと知る王城の誰もが耳を疑った。サンジェルマンも信じられなかった。王が、愛していたはずの女やケインの取り巻き連中、側近たちを剣で斬り殺したのだ。

事件の起きたケインの部屋は血の海と化していた。床面を覆いつくすように、人々の死体が散乱していた。誰もがほぼ一撃で命を奪われている中、王の恋人だった女だけが首を切られ、腹をえぐられていた。サンジェルマンは室内の惨状に呆然となった。床に倒れた血だらけの男の体の下から、声を押し殺して泣いているケインを引きずり出すのが精一杯だった。

王の暗殺を謀ったかどで、女の一家は貴族社会から完全に姿を消した。計画に関わったとされたケインは惨劇で死亡したとされた。

王に何らかの策略があったのか、それとも、王と女、もしくはケインとの間に何らかの行き違いがあったのだろうか？

事件後、ケインと彼女の仲を王が邪推したのではないか、とサンジェルマンがケインに問いかけたことがあるが、彼は「心外だ」と否定した。サンジェルマンが、王が誤解した可能性をなおもケインに尋ねると、彼は憤慨して言った。「王だって遊びだったんだろうから、たとえ私たちがそうだったとしても、気になんかしてないよ」

事件の一部始終を知る王は口を閉ざし、実際には惨劇を生き残ったケインは、恐怖を思い出したくないと、何も語らなかった。
王が逆上した理由も、ケインの部屋で何があったのかも、今もって謎に包まれている。

勢いよく開かれた扉から覗いた女の顔が、サンジェルマンを見つけて狼狽する。
「サンジェルマン様……！」
「どうされた？」
サンジェルマンが目をすがめると、王妃の侍女の一人である女は、救いを求めるように王妃に気弱な視線を送った。
「王妃様をこのような状態で放置されるとは、いったい、どれほどの重大事があったのだ？」
「は、はい！　あ、いえ、その……」
王妃が地面から飛び起きた。
「ジルは！？　ジルはどうしたの！」
王妃に飛びつかれた女は、目を見開いて王妃を見つめ、頬に赤みをのぼらせた。サンジェルマンが女に一歩近づくと、彼女は唇を細かく震わせた。
「ああ、王妃様！　王が……ジルが、王を……！」
「王……って、あの、彼女では……？」
王妃が駆け出す前に、サンジェルマンは女を押し退け、扉を広く押し開いていた。薄暗い通路の先に開けた視界は真っ白だ。中庭とは違う、痛いほどに冷たい空気を耳に感じながら、サンジェルマンは通路を全速力で疾走する。後ろから追ってくる足音は、王妃とその侍女だろう。
サンジェルマンは王の無事な姿を求め、眩しいほどに白い雪景色を焦って見渡した。自分の呼吸音が遠のき、鼓動の激しさに、胸が

打ち抜かれそうだ。五年前のときのように、すべての惨劇が終わったあとの場で、なす術もなく呆然と立ち尽くすしかない無念は、二度と味わいたくない。

右手にある庭園へと、雪を蹴散らして数人の衛兵が走る姿が確認できた。サンジェルマンが彼らの向かう先へ足を向けようとすると、小城の方角から、青いドレス姿の女が同じ方向へ一目散に走っていくのが見えた。顔までは見えないが、おそらくはジェニーだ。その数メートル後ろを追いかけていくのは、サンジェルマンが今朝見たばかりのアリエルだ。

雪をかぶったなだらかな丘にしか見えない庭園の先、近衛隊の剣の練習場に通じる小道の途中に、衛兵たちと青い制服姿の近衛兵たちが七、八人集まっていた。白金色の髪が見えたが、それはライアンだ。

サンジェルマンがなおも目を凝らすと、彼らの陰にもう一人の白金色の男の頭が垣間見えた。彼は、サンジェルマンより先に駆けつけたジェニーに手を伸ばしている。ゴーティス王だ。

ああ、神よ、王はまだ生きている……！

「王、ご無事ですか！」

ライアンや数人の男たちがサンジェルマンに振り返った。その場の全員が、怒ったような、強ばった表情だ。動いた男たちの向こうに、ジェニーの肩を抱いた王の元気な姿が確認できる。

腹の奥底から生まれた安堵の息が喉を通ると、サンジェルマンの目に、真っ白な地面に浮かび上がる鮮やかな赤い染みが飛び込んできた。不審に思ったサンジェルマンがライアンを見ると、彼は唇を噛みしめ、弱々しく首を左右に振ってみせる。

近衛兵たちの足下にある赤い染みは、赤一色ではなく、黒に似た色が混ざっていた。地面に倒れた男の青い制服が赤い血に染まり、黒っぽく見せているのだ。その脇に立つ近衛兵二人の顔にも、小さな赤い点がいくつか付着している。彼らは赤く変色した剣を手に持

っていた。
「……なんということ……」
血だらけの死体の顔をわざわざ見なくても、サンジェルマンにはその正体が分かった。王妃の護衛を解任されたばかりのジルだ。
男たちに合流したサンジェルマンが驚きの息を漏らしても、王もライアンも注意を払っていなかった。彼らの視線はサンジェルマンを通り過ぎ、背後にまっすぐと向けられている。
「きゃあああああっ！」
サンジェルマンが振り向いたと同時に、風が吹き抜けるかのように、彼の横を王妃が走り抜けた。男たちの足下で変わり果てた姿となったジルを見て、彼女がまた甲高い悲鳴をあげる。
「どうして！　ジル、どうしてあなたがこんなこと……！」
王妃は血だまりに浸かるジルの体を掴み、何度もジルの名を叫んだ。ジルを抱き起こした王妃の腕に彼の血が移ったが、彼女はかまわず、彼の冷たくなった肩を抱いてむせび泣く。その姿はさながら、恋人の命を奪われて悲しむ女のようだ。サンジェルマンも王も、その場にいた誰もが、王妃の激しい嘆きように目を見はった。

薄着のジェニーが冷風にさらされてくしゃみをすると、それを合図にしたかのように、王妃の侍女が慌てて主人に駆け寄った。その頃までに、ジルと王妃を囲む人数は二倍に膨れあがっていた。
青ざめた面をあげた王妃は、王とジェニーを見ると再び目に涙を浮かべ、ジルに視線を落とした。彼女の手もドレスも血に浸かり、真っ赤に変わっている。
「彼はいきなり王に斬りかかったのです、王妃様」
ライアンが異様な沈黙を破り、王妃に言った。だが、王妃はジルを見つめたまま、何の反応も示さない。
「王がいなくなれば王妃様は幸せだ、と生前の彼は言い放ったそうです。王妃様、失礼を承知で申し上げますが……これは、彼の独断による行動でしょうね？」

「どういう意味ですか、それは！」
王妃の侍女がライアンに叫び返したが、当の王妃はぼんやりとライアンを見上げただけだ。ライアンは顔色を変えず、侍女を見返した。
「私は事実を確認しているだけだ。されど、まことに失礼ながら、王妃様の反応は、皆に疑われても仕方のないものと思うが？」
「まあ、なんと無礼な言いぐさです！　王妃様がこの男と通じていたとでも疑っているのですか！　この男が勝手に王を襲っただけに決まっているではありませんか！」
サンジェルマンは王妃がジルと通じていたとは、一瞬たりとも疑わなかった。彼女は王に一途に恋していたはずだ。だが、雪の上で凍りはじめた赤い血を愛しそうに拭うさまは、王妃の心がいつのまにかジルに移ってしまったのではないか、とサンジェルマンに思わせる。
「王妃様、何とかおっしゃってくださいませ！」
侍女にせっつかれた王妃は再び顔を上げたが、取り囲む人々をぐるりと見回すと、またもや涙を流し始めた。王妃はライアンに反論しなかった。

王妃が涙を拭って王を見上げたとき、王はジェニーの手をつかんでいた。王妃は数秒間、王かジェニーのどちらかをじっと見つめているように、サンジェルマンには見えた。王が不審そうに王妃を見る目つきは、最初からずっと変わっていない。ジェニーは青白い顔をしていて、王妃から少しも目をそらそうとはしなかった。
「ライアン副隊長」
王妃のか細い声に呼ばれ、ライアンが王妃の前に足を踏み出した。
「御前に」
「ジルは……どうなるのです？」
「どうなる、とおっしゃいますと？」
ライアンが怪訝そうに問い返す。

「彼の亡骸はどうなるのです？」
ライアンだけでなく、その場にいた全員が彼女の質問に困窮したはずだ。犯罪者はその生死に関わらず、まともな人間扱いをされることはない。
ライアンは困惑していたが、王妃にはっきりと告げた。「罪人の死体のことなど、王妃様の気にかけることではございません」
「罪人……」
「彼は王を亡きものにせんとしたのですよ、王妃様」
ライアンがその事実を再度突きつけるように言うと、一瞬だけ、王妃がぎこちなく笑った。
「その男に情けは無用です」
ライアンが王妃をジルから引き離そうとすると、彼女ははっきりとした意志を持って、彼の手を拒否した。
「副隊長、彼の遺体は私が責任を持って、然るべき場所に埋葬します」
「王妃様！」
侍女が青ざめて叫び、人々がざわめいた。王が眉間に皺を寄せ、ますます不審そうに王妃を見つめる。
「彼は私の大事な友人……味方でした。私は彼を埋葬したいのです」
ライアンが事務的に言い返す。
「それは無理というものです、王妃様」
「王妃の私が頼んでもですか？」
ライアンを見返す王妃の視線は、いつになく反抗的なものだった。ざわついた人々は静まりかえり、事態が次の展開を見せるのを待っている。
次に言葉を発したのは、それまで二人を静観していた王だった。
「カサンドラ、それがどんな意味を持つのか、おまえはわかっておろうな？」
王が真意を確かめるように問うと、王妃は俯き、目を閉じた。
「王である俺に剣を向けた男を、妃であるおまえは埋葬したいとい

うのか？」
　王はジェニーの手を離し、王妃に近づいた。王妃が顔を上げ、涙に濡れた目で王を見つめる。
「ジルは私の……貴重な友人でした」
　王は唇をきつく結び、彼女を見据えている。
「ジルは私にとても……とても、よくしてくれたのです」
　王が苛ついて、短い息をついた。
「誤解を招くような言い方だな」
　王妃はジルに視線を向け、目から大粒の涙をこぼした。そして、嗚咽を抑えながら、彼女は言った。
「友人以上の関係だったとおっしゃりたいのなら、それでも……私はそれでも、かまいません」
　王は王妃の返答に動じはしなかったが、皆が驚きに息を飲む音が辺りに響いた。
　王妃の目は王ではなく、彼の後ろにたたずむジェニーを見ていた。涙を流してはいても、その瞳には、悲しみより、静かな怒りがあふれている。

「なっ、何をおっしゃるのです、王妃様！」
王妃に駆け寄った侍女が、王に向かって声を張り上げた。
「王、どうか、王妃様のお言葉を本気でおとりにならないでくださいませ！　王妃様は、この男を哀れんでいるだけでございます！」
だが、王は眉ひとつ動かさず、何も答えなかった。日がかげり、冷たく湿り気のある風が人々の間を吹きぬけていく中、侍女の声だけがその場にむなしく響く。
「王妃様、こともあろうに、この男は王妃様の名を出して、王のお命を狙ったのですよ！　王妃様の今までのご厚意を無にするような行為です、こんな者に情けなど必要ないではありませんか！」
王妃が目を細め、明るさの落ちた空を見上げた。
「でもジルは、よく尽くしてくれたでしょう？」
「おお、王妃様……！」
王妃は白い息を吐いて、彼女の手を押し戻した。侍女が母国語らしき言葉でなおも責めるように何か言ったが、王妃は首を振り、取り合おうとしない。
それから、王妃はジルの体を雪の上にそっと横たえると、視線を上げ、ジェニーを見た。今まで、ジェニーへの嫉妬心や対抗意識を見せたことのない彼女が、静かな闘志を含んだ目でジェニーを見ている。ジルの死を、まるでジェニーの責任とみなしているかのようだ。
王妃の視線に応えてか、ジェニーが緊張した面持ちで足を踏み出した。雪が踏みしめられる小さな音に、王が振り返る。
「おまえは小城に戻れ」
ジェニーは意外そうに王を見返し、王妃を一瞥したあとに口を開いた。「いえ、私は――」
王は反論しようとしたジェニーを止めるように手を上げ、穏やか

な口調となって、彼女にもう一度言った。
「戻っておれ」
その後、二人は数秒間お互いの顔を見ていたが、ジェニーは王の作った表情を見て、引き下がる気になったらしい。
「……はい、ゴーティス王」
ジェニーは青いドレスを両手でつまみ、膝を曲げて、頭を軽く下げた。そして、彼女は王に向けたものと同じ微笑みをたたえ、やや深く頭を垂れて、王妃に同じ挨拶をした。アリエルも主人ジェニーに倣った。王妃の瞳にある鋭さは、それでもやわらぎはしなかった。
ジェニーとアリエルが白い大地を歩いていくのを見送り、サンジェルマンは王妃に振り返った。彼女の肌から赤みが消え、唇が色を失くしている。この場に駆けつける前から濡れていた体が、冬の外気に容赦なく晒され、冷えているようだ。彼女の斜め前に立つ王は、怒りに燃えているようではないが、緊張したように強張った顔つきだ。王がライアンを呼んだ。
「事情は城で聞くとする。妃を後宮へ連れていけ」
「は」
ライアンが王妃に近寄ると、彼女が強張った声音で言った。
「副隊長、私のことはどうかお構いなく」
ライアンは王妃の発言を無視し、二人の近衛兵に彼女を連れていくように指示した。
「王妃様、そのままのお姿では凍えてしまいます。私どもと後宮に戻りましょう」
「そうですわ、王妃様。まずは後宮に戻って着替えませんと」
「私は平気です」
侍女が王妃の側を離れ、歩み寄ってきた男二人が王妃の両隣に跪いた。
「……何をするのです！　手を離して！」
王妃は暴れたが、華奢な女の抵抗など頑強な男たちの脅威ではな

い。二人の男が王妃のそれぞれの腕を引き上げると、彼女は雪の上に残されたジルの死体を求め、自由のきかなくなった手を必死に伸ばそうとした。

「ジル……！」

「お連れしろ」

ライアンが無情に命令を下すと、男たちの間に挟まれた王妃の顔が苦痛そうに歪んだ。

「ああ、やめて！」

王妃の悲痛な声を聞き、人だかりに混じっていた数人の女が彼女から目をそむけた。だが、ほとんどの者は、困惑したように顔をくもらせるか、怯えた形相で遠巻きに彼女を見つめている。

王は硬い顔だ。腕組みをし、王妃がジルの名を呼び続けるのを、黙って見守っている。

王妃が激しく頭を振る様子を見ていると、サンジェルマンは、先王妃が暗殺容疑で連行された数年前のことを思い出す。先王妃はもっと気性が激しかったが、彼女のように衛兵の腕にその細い体を拘束されると、気が触れたように甲高い声で叫んでいた。先王妃の金切り声が響きわたる中、王は今と同じように無言を保ち、彼女の一挙手一投足を見守っていた。

サンジェルマンが王妃たちに道をあけようと王の脇に寄ると、王がじろりと彼を見た。王の目尻がかすかに震えていた。彼は、怒りを必死に抑えているのだ。

男たちに連れられた王妃が、先に立って歩くライアンに叫んだ。

「待って！　私がいなくなれば、ジルの亡骸をどこかに捨ててしまうのでしょう！」

「いい加減にせぬか！」

王妃の背中を見ていた王の怒鳴り声が、彼女を追う。

「カサンドラ、主君を襲った者の末路はおまえの母国でも変わらぬだろう！」

男たちがぴたりと歩みを止め、王妃が身を縮めながらも王に振り返った。

「……でも、彼は……」

王妃が口を開くと、王は肩で大きく息をついた。

「おまえは、ヴィレールの王妃ではなかったのか？」

王がそう投げかけると、王妃の顔が急に硬直した。そして、目をぎゅっと閉じると、震える声で王に問いかけた。

「私が……私が、あなたの妃だったことなどあるのでしょうか……？」

サンジェルマンが王妃の質問に驚いたように、周囲の者たちも彼女の突然の反撃に驚いていた。王の反応に怯えた。ところが、王の顔色は依然変わらず、それまでとまったく同じ調子で彼女に尋ね返す。

「おかしなことを言う。この一年、おまえはこの国の王妃であったと思うが、違うのか？」

ライアンの命令によって拘束を解かれた王妃が、王に向き直った。すると、王は険しい表情に変わり、何者をも貫くような視線を王妃に注ぐ。王の怒りを感じとり、口を挟もうとする者は誰もいない。王妃は王の目から逃れるように地面を見つめ、薄紫色に変わった唇を細く開き、呟くように答えた。

「王には……王には小城にお住まいのお方が、いらっしゃいます……」

王が呆れたように息をつき、腕を組みなおした。

「それは、おまえが妃ではないという理由にはならぬ」

「……でも、でも――」王妃が両手を胸の前で握りしめ、顔を上げた。王と目が合うと、彼女は一度、言いよどんだ。頬がまだらに赤くなっていた。

「“でも”　――何だ？　言いたいことがあれば、遠慮なく言うがよい」

王が王妃を挑発するように笑うと、彼女は震えて唇を噛んだ。そ

してその直後、彼女は一気に言い放った。
「王は妃の私より、彼女にご執心ではないですか……！」
王妃は溢れ出した涙を隠すように両手で目を覆い、下を向いた。
サンジェルマンは王を見た。王は皆の予想を裏切って口をつぐんでおり、眉間にしわを寄せ、不審そうに彼女を眺めている。
不意に、王妃が地面に横たわるジルの方に振り向いた。ライアンと近衛二人は彼女の動きに警戒する姿勢をとったが、彼女はすぐに王の方に振り返る。静まりかえる人々の前で、彼女は寂しそうな笑みを口元に浮かべた。
「……王に相手にされない哀れな妃が、それでも健気に――夫だけを見つめていたとお思いですか？」
これまでの、従順で貞淑な王妃らしくない発言だ。皆の目には、王が妃の自分に注意を払わないのだから、ジルと不適切な関係に陥ったのだと、どこか開き直った態度にも映ったことだろう。サンジェルマンには彼女の態度の変化が意外で、不可解だった。彼女の侍女でさえ、あんぐりと口を開き、呆然として彼女を見つめている。
だが、王は動揺したようでもなく、王妃を見つめながら、自分の顎を手でゆっくりと触っている。王が激さず、言葉を発しないのは、逆に恐ろしい。王がジルの死体に目をやると、王を見つめていた王妃は急に笑みを失くし、俯いて震え始めた。
王はそんな王妃に注意を戻し、ライアンに淡々と命じた。「ライアン、妃が凍える前に後宮に戻せ」
「はい」
ライアンと近衛兵が動く前に、王妃が数歩退いた。
「王妃様？」
「後宮に行く前に、彼の遺体をどこかに安置してください」
それまで寛大ともいえる態度で王妃に接していた王が、彼女の上で視線をすっと冷たく固まらせた。
「おまえは……自分が一国の王妃だということをすっかり忘れておるようだ」

王はそう言い放つと、背後に立つ男が持っていた上着を奪い取るようにつかんだ。

「おまえはいったい何者だ？　おまえは自分がここにおる理由を忘れたか？」

男が王に上着を着せようとする手をはねつけ、王は自ら、袖に腕を通し始める。

「俺は、おまえの個人的な事情には何の興味もない。だが、それが何であれ――おまえの申し開きは城で聞く。その女を後宮に早う連れていけ、ライアン！」

ライアンが男たちに合図を送ると、王妃は再び体の自由を奪われた。王妃の目が王にすがりついたが、彼は彼女には目もくれず、逆方向にさっさと歩き始める。

「サンジェルマン、剣の相手をしろ。手加減はいらぬぞ！」

王に手招きされ、サンジェルマンは彼の後に続く。

王城の敷地内で近衛兵による王の暗殺未遂が起きてから、今日で三日が経つ。今朝は風もなく穏やかだったが、細かい雪が空から舞い落ちていた。雪はこの後数時間、降り続くだろう。

王の訪問はなく、手紙も届けられなかったが、ジェニーはそれが、彼が王妃の処遇を慎重に検討している最中だからだろう、と思っていた。それほどの不安は感じていなかった。ジェニーが最後に見た王の瞳は、彼が冷静に、公正に、今回の件に対処するだろうと物語っていたからだ。

今頃、王城にいる人々は上を下にと大騒ぎしていることだろう。ジェニーには一切の情報が入らないが、今回の事件が皆に与えた衝撃は大きいだろう。あの場での王妃の言動を目にすれば、事件は痴情のもつれで起きたのだと、ほとんどの人間は考えるに違いない。

だが、王妃のような人物があんな恐ろしい事件に関わっていると

は、ジェニーは今も信じていなかった。王妃に会ったことは数回しかないが、彼女が王を愛していることは、ジェニーにもはっきりと分かっていた。あの事件の場で王妃が向けた目には、ジェニーへの嫉妬の炎が揺らいでいた。

それなのに、王妃はあのとき、護衛の男に心を移したかのように振舞っていた。それが、ジェニーには腑に落ちない。男が誠意を尽くしてくれたからといって、王妃はそんなに簡単に心を動かされる人だろうか？

「ママー？」

カミーユの温かな手に腕をとられ、ジェニーは我に返った。カミーユは布地の切れ端を丸めて作ったボールをかかげ、大きな口を広げて笑っている。

「なあに？」

ジェニーがカミーユの背に合わせて腰をかがめると、彼女はボールをジェニーの手のひらに押しつけ、言った。

「アイアン、来ないー？」

カミーユのいい遊び相手として、ぎこちない笑顔で彼女に接するライアンを思い出して、ジェニーは笑った。

「ライアン様は、今日は来ないのよ」

「サンエルマーは？」

「サンジェルマンも忙しいの」

ジェニーが答えると、カミーユは両頬に空気を入れて膨らまし、最大限に不満を表す。乳母たちがそのカミーユを見て、愉快そうに笑い声を上げた。

娘の無邪気さは救いだ。次々に変わる彼女の表情を見ていると、ジェニーも小城の人々も、笑顔にならずにはいられない。

「ね、ママだけじゃだめなの？」

「ウーン」

カミーユは手をそれぞれ反対側の脇の下に挟み、最近になって覚えた、腕組みの体勢をとる。王が何かを考えているときに無意識に

とる姿勢だ。カミーユは、同じ室内にいることが多くなった彼の仕草をよく観察している。ただ、遊んでくれる相手ではないとみなしているようで、彼がいても、カミーユは彼にまとわりつくことはない。

ジェニーがカミーユの手からボールを抜き取ると、カミーユは目を輝かせてジェニーを見上げた。

「オォは？」

「えっ？」

「オォー」

カミーユはジェニーからボールを奪い返し、ジェニーの周りをぐるぐると走り出した。思わず、ジェニーは王の姿を探して部屋の扉を見たが、そこに彼が立っているはずもない。乳母と世話係の女が、ジェニーに同情したように、形ばかりの笑顔を見せた。

「……王も忙しいのよ」

カミーユは興奮して笑っており、ジェニーの小さすぎる呟きには気がつかない。

王は今頃、何をしているのだろう？　王妃はあの後、どうなったのだろう？

カミーユがジェニーのもとから、乳母の女の方へ走り出す。ジェニーが走り回るカミーユから視線を上げると、世話係の女が躊躇いがちに歩み寄ってきた。

「ジェニー様、お話したいことがあるのですが……」

ジェニーは彼女から話しかけられたことに驚いた。先王の代、つまり、ゴーティス王も面倒をみてきたという元乳母である女は、親身になってカミーユの世話をしてくれるものの、庶民出であるジェニーとはあまり会話をしたがらない。他の貴族の女たちのような、ジェニーを見下した態度をとりこそしないが、彼女が不本意ながら自分に仕えていることに、ジェニーは当初から気がついていた。

「王のこと？」

彼女はジェニーに頷き、カミーユと戯れる乳母をちらりと見た。
「ジェニー様、王に好ましくない噂が出ているのをご存知ですか？」
「いいえ。どんな噂なの？」
ジェニーの返事を最初から予想していたように、彼女は二度頷く。
「ジェニー様は、先王妃がなぜ亡くなられたのか――王に聞いておられますね？」
「ええ。辛い……決断だったと思うわ」
「はい。罪の重さを鑑みれば、他にどうしようもないご決断でした」
二人は中央に据えられた長椅子に移動し、腰を降ろした。女が、暗い表情で口を開く。
「ですが、三日前に起きた事件――それを、心無い誰かが、それは先王妃の呪いのせいだ、と言い出したのです。処刑された先王妃が息子である王を今も赦していないから、王は先王と同じように、自らの妃に命を狙われるのだと」
不吉なことがあると呪縛や因縁のせいにする人々がいるが、ジェニーはそんなものは信じない。
ジェニーが呆れると、彼女の硬い表情がややほぐれた。
「私もそんなくだらない考えは信じておりません」
「当たり前だわ。でも、王はその噂を知ってるの？」
「ご存知だと思います。王が噂を信用されることはないでしょうが、それでも、おそらく、先王妃の事件のことは思い起こしておられるでしょう。王城の皆は、二代続けて王妃が不名誉な事件を引き起こしたことに動揺し、怯えております」
そのとき、突然に大声を発したカミーユに、ジェニーと世話係の女は振り向かされた。乳母のドレス越しに、カミーユが彼女の足にしがみついて笑っている。
カミーユに何事もないことがわかると、ジェニーはほっとして世話係の女に注意を戻した。白髪混じりの黒髪に青い瞳の彼女を見ると、ジェニーの脳裏に、王妃の怒りのこもった瞳がちらつく。
「あの近衛兵と王妃様は本当に関わりがあったの？　本当に、あの

王妃様が王の身を狙ったの？」
　ジェニーが尋ねると、彼女は困ったように眉を下げ、深いため息をついた。
「王妃様は男との関係を否定なされなかったそうです。ジェニー様、お気持ちは察しますが、あのお方は以前、この館でもジェニー様に――」
　数ヶ月前、王妃がジェニーに土産としてくれた焼き菓子をつまみ食いして、コレットが死んだ。菓子に毒が入っていたのだ。世話係の女は、王妃が殺人を犯しかねない人物だと、そう言いたいのだ。
「ママー！」
　カミーユの得意げな声がジェニーを呼ぶ。乳母のドレスを引っ張って遊びながら、カミーユがジェニーに手を振っている。ジェニーが笑顔を作って手を振り返すと、カミーユは嬉しそうにその場で飛び上がり、手をさらに大きく振ってみせた。
「ジェニー様」
　ジェニーが世話係の呼びかけに振り返ると、女が真面目な顔で見つめていた。笑顔の止まった彼女の顔は疲れが目立ち、とたんに老けて見える。彼女は突然、ジェニーに頭を垂れた。
「どうしたの？」
「どうか、王を支えてくださいませ」
　ジェニーがびっくりしたのはもちろんのこと、乳母も唖然として女を見つめている。ジェニーは、自分の母親より年上の女の肩を軽くたたいた。
「心配しなくても、王は大丈夫よ。彼はそんなに弱い人じゃないわ」
「分かっております。でも、ジェニー様がおられれば、王はずっと心強いことでしょう。……女官長様も、そうおっしゃっておりましたわ」
　そして、自尊心の高いはずの彼女が、ジェニーにもう一度頭を下げる。

ジェニーは自室に戻り、王に短い手紙を書いた。伝えるのは、彼を心配しているということ、自分は元気でいるということ、それに、王妃と話をしてみたいという願い。

ジェニーの姿を目にするだけで、王妃は逆上してしまうかもしれない。だが、それ以前に、王はジェニーに彼女と会わせようとしないかもしれない。

でも、ジェニーは事件の真実が知りたかった。

皆の目から見た事実が、いつも真実とは限らない。

第二部　6．春が訪れる前に－5

久しぶりに空から灰色の雲が去り、太陽が顔をのぞかせた。冬の太陽が放つ光は弱々しいが、寒さに凍える日々を送っている者たちに、十分すぎる暖かさを与えてくれる。そのせいか、今日は屋外で作業する使用人たちの姿が目立つ。カミーユも今朝早くから外に出て彼らと雪で遊び、はしゃぎ疲れて、今は眠ってしまっている。

今日もライアンはジェニーの前に現れなかった。暗殺未遂事件の処理とかでジェニーの剣の指導が中断され、既にはや一週間が過ぎようとしている。だが、練習再開の日はまだ伝えられていない。ジェニーは、指導が途絶えた期間もなるべく体を動かすようにしているが、王や王妃のことを考えると、どうしても練習に身が入らない。

剣の練習を早々に切り上げたあと、ジェニーは南面から採光できる大きな窓のある部屋に行き、その窓際で、アリエルを相手に絵合わせの遊びをしていた。裏返しに広げた四十枚のカードの中から、同じ絵が描かれたカードを二枚ずつめくり当てる遊びだ。間違ってカードをめくった時点で、対戦相手に順番が移る。

気掛かりなことがあるため、ジェニーは集中力に欠け、アリエルに負けていた。ジェニーが数日前に王に宛てて書いた手紙に、返事は未だ来ていない。彼が忙しくてまだ手紙に目を通していないのか、手紙を読みはしたが返事に窮しているのか、それとも、書かれた内容に呆れて無視しているのか。王妃の処遇について何か決まったという報告も入らない。

アリエルの手元には、四組ほどのカードがたまっていた。ゲームが始まってから、ジェニーは一組のカードも取れていない。ジェニーの番がきて、テーブルの上に残ったカードを見てどれを選ぼうかと迷っているとき、執事が戸口に現れて来客を知らせた。

部屋に通されたのは、サンジェルマンだった。黒い外套も脱がず、底の厚い靴には白い雪が付着したままだ。彼の目の下に青い影のよ

うなくまがうっすらとできている。
王からの返事だ。ジェニーはサンジェルマンの突然の登場に思った。彼は挨拶もそこそこに、ジェニーとアリエルを見ながら切り出した。
「王がお呼びだ」
ジェニーが椅子から腰を浮かすと、彼はアリエルの方に向き、ジェニーの都合など関係ないといった調子で続けた。
「すぐに仕度をしてもらいたい。王城まで私が同行する」

何の用事か、と尋ねても、サンジェルマンはジェニーに決して答えないだろう。彼は小城を出てからずっと無口だ。途中で出くわす衛兵たちに敬礼されても、無言で頷き返すだけだ。彼が口をきかないため、ジェニーもアリエルも会話を慎んでいる。
小城から王城まで、徒歩で行けば十分もかからない。三人は小城からまっすぐに伸びた小道を歩き、中庭への入口に通じる小道を右手に見て通り過ぎた。それが王城に入るのにもっとも近い入口なのだが、サンジェルマンはなおも建物に沿って歩き続ける。
空にある太陽は今も地上を照らしていた。朝と比べると雲は広がっていたが、日光を遮るまではいかない。ジェニーが肌に感じる空気は前日よりかなり暖かだ。ジェニーが城壁を見上げると、窓枠に積もっていた雪が溶けて流れ出し、壁にいくつもの水流の跡ができていた。
何組めかの衛兵たちとすれ違うと、その先に、建物を背にして立っている衛兵たちが見えてきた。手に持った長槍の銀色に光る矢尻を空に向け、正面を見据えている。彼らの背後に、王城の棟への出入口があるのだ。
ジェニーにとって、数ヶ月ぶりに足を踏み入れることとなる王城だ。王妃の現在の処遇はどうであれ、彼女の陣地だ。城に来た当初からジェニーは本城へ入ることを拒まれているが、本城に近づかなかったからこそ、ジェニーは王妃の影をずっと意識せずにいられた。

王に呼ばれた理由が、王妃とジェニーを会わせるためかもしれないと考えると、ジェニーの緊張は否が応でも高まる。

衛兵たちが一行に気づいたようだが、彼らは正面を見つめたままだ。すると、サンジェルマンがおもむろにジェニーに振り返った。そして、ジェニーが小城に移って以降初めてともいえる、彼特有の柔和な微笑みを浮かべた。

「緊張しなくていい。王がおられる部屋に行くまで、おまえが会うのは衛兵だけだ。ほかの誰にも会いはしない」

ジェニーたちは、すんなりと入城を許された。

棟の二階に行き着くと、サンジェルマンが示す部屋の前に、ジェニーの見慣れた王の近衛兵がいた。ジェニーたちが立ち止まると、その場の全ての音が止む。廊下は静まりかえっていて、扉を挟んだ室内に人がいるとはとても思えない。

「サンジェルマン、ちょっと訊きたいんだけど」

ジェニーが小声でそう口にすると、サンジェルマンはジェニーをじっと見て、軽く頷いた。

「王妃様なら、後宮のご自身の部屋におられる。食事も口にされているそうだ」

それがおまえの訊きたいことなら、とサンジェルマンは頭を斜めに傾け、そう付け加えた。

「そうよ。誰も何も話さないから、王妃様が無事かどうか気になってたの。……よかった、元気なのね」

ジェニーは安堵して笑ったが、サンジェルマンは表情をゆるめなかった。

「王妃様は今までとお変わりなく、後宮で過ごしておられる」

サンジェルマンは淡々と、しかし、ジェニーにそれ以上の追求を許さないとでもいうように言った。それから、「王がお待ちだ」と、ジェニーとアリエルに先を急ぐように促す。

王のいる部屋の前に立つと、ジェニーの胸にそれまでとは別の緊

張感が広がった。顔をあわせるのは例の事件以来、約一週間ぶりだ。だが、話をするという意味で王と最後に会ったのは、それよりもっと前だ。ジェニーがケインの話題を持ち出し、憤った王が無言で小城から去った日だ。ほんの少しだけ、気まずい。それでも、彼の顔が見たくて、ジェニーの鼓動は早まった。

「王、連れてまいりました」

サンジェルマンが扉をたたくと、ジェニーには聞こえなかったが、王の返答があったらしい。扉は内側に開かれた。

ジェニーが入った部屋は思ったより狭く、壁面を飾る物が少ない、質素な部屋だった。扉の対面に細長い窓が間隔をあけて二つ並び、右側の窓の手前には、書物が乱雑に広げられた長方形のテーブルが置かれている。その飾り気のないテーブルと背面の濃赤の壁に挟まれるようにして、王が椅子に座っていた。王はジェニーが入室したときに顔を一度上げたが、手元の文書を目で追う作業を中断しなかった。

「狭くて驚いたか？」

ジェニーが壁面に唯一掛けられた風景画を見ていると、王が尋ねた。ジェニーは王に視線を戻したが、彼はやはり目を上げていない。

「そうね……。それに、もっと立派な家具とか装飾品が溢れかえってると思ってた」

王が視線を下に向けながらも、唇の端を小さく上げた。

「俺は日常品に金をかけぬ主義だ」

一つの文書を読み終わったらしく、王は次の文書に手をかける。

「忙しいなら出直すわ」

ジェニーが言うと、王は片方の眉を上げ、ジェニーを指で呼び寄せた。「呼んだのは俺だ」

ジェニーがテーブルの前に立つと、王はジェニーに向かって手を伸ばした。ジェニーがその手を取ると、彼はようやく顔を上げ、満足したように微笑んだ。気まずい別れをしたことなど全く覚えてい

ないような、彼の普段の表情だ。
「これが最後だ。すぐに終わる」
王が指し示した文書には、ヴィレールの言葉ではない外国語の文字が並んでいる。
「フランドル語ね」
ジェニーが言うと、王は腕でさりげなく文書を隠しながら、ジェニーを見上げた。
「そうか、おまえはフランドル語ができたのであったな」
ジェニーは頷き、明るい窓際を指差して言った。
「あなたが読み終えるまで、私はそっちで待ってるわ」
王が、ジェニーの手を放した。

部屋が殺風景でも居心地よく感じられるのは、明るい日光が室内に降り注いでいるからだ。
窓を通して、反対側に建つ棟が見えた。ジェニーがさらに窓に近づくと、眼下に、見覚えのある景色が広がっていた。中央に生える大きな木の枝ぶり、建物に沿って植えられている、雪をかぶった低い生垣——後宮とつながった中庭だ。窓の正面を真下に見ると、ジェニーが昔好んで通ったサロンの屋根が見えた。屋根だけでなく、今は閉め切られているサロンの窓部分もこの窓際からはよく望める。
ジェニーがサロンにいたとき、王がジェニーを見下ろしていたのはこの部屋だったのだ。彼が当時立っていた、まさにその場所にジェニーは今立っている。そう思うと、とても感慨深い。
「ここ……だったのね」
ジェニーの独り言に、王の声が返ってきた。
「そうだ。そこからはサロンが見える」
ジェニーが振り返ると、王は読み終えたばかりの文書を丸め、金色の房が端についた紐でそれを結わえているところだった。
「悪天でない限り、おまえはほぼ毎朝サロンに現れた。俺はほぼ毎日、そこからおまえの姿を見た」

ジェニーは毎朝王の顔を見かけたのではなかったが、サロンから見上げる窓辺の奥に、彼の存在を常に感じていた。

席をたって歩いてきた王にジェニーが手を伸ばすと、彼はジェニーを腕の中に抱きしめた。

「……あなたに抱きしめられるって、久しぶりな気がする」

全身に安心感が広がっていく感覚に、ジェニーはうっとりした。

「そんな顔をするな」

王の唇がジェニーの額に触れる。

ジェニーが目を開けると、王はくすくすと笑いながら、「ここが寝所でないのが残念だ」と、指で探し当てたジェニーの唇に口づけを落とす。

ジェニーが唇を離すと、王がジェニーの視線を捕らえて言った。

「おまえの手紙は読んだ」

ジェニーは口づけのために堪えていたのではない吐息を漏らし、彼の真面目な瞳を見返した。

「王妃様と話をさせてもらえるの？」

「何のためだ？」

「私は王妃様があなたを狙ったとは思えない。あの護衛の彼との間に何かあったなんて、全然信じられないの。私から見た王妃様は……あなたを愛していたから」

王は唇の隙間から白い歯をのぞかせ、小さく笑った。

「それを確かめたいか？　あれが誰を愛しておったのか、俺にはよう分からぬ。俺とて事件には驚かされたが……されど、独占欲から愛する者の命を奪う輩は、世にいくらでもおる。自分のものにならぬのなら、いっそのこと殺してしまえ、と――」王はジェニーから目をそらし、体を離した。

「じゃあ、あなたは王妃様が本当に事件に関わっていると思うの？」

「当人が関与を否定せぬ」

王がそっけなく答え、ジェニーの心臓が驚きに弾んだ。

「……王妃様はどうなるの？」
王はジェニーの問いに応じなかった。彼の瞳も不安定に揺れてはいない。ジェニーの胸の中で、焦りにも似た緊張感がじわりと高まる。
「あなたは、王妃様の事件の関与を信じているの？」
王が不審そうに目をすがめた。
「おまえは何ゆえ、友でもない妃を気にかける？　嫌い合うてもおかしくない間柄ではないか」
「でも……立場が違ったら、友人になれたと思う」
王が呆れて目を天井に向けたが、ジェニーは構わず続けた。
「王妃様が事件に関わってるなんて納得できない。何かほかに理由があるんだわ。私は、あなたもそう考えてるものだとずっと思ってたんだけど……違うのね」
王はジェニーを見て、眉をつり上げた。
「興味本位で首をつっこむな。おまえは、妃と話せば何か変わるとでも思うのか？　だとすれば、ひどい思い上がりだ。おまえに頼まれようと、俺はおまえを妃に会わせる気はない」
「ゴーティス王、私は――」
よいか、と王がジェニーを制し、背後を親指で示して言った。
「おまえが目にした文書だが、あれは、フランドル語で書かれたものではない。よう似ておるが、カローニャの言葉だ。無用な戦を避けるため、妃が兄のカローニャ国王に宛てて書いた書簡だ」
ジェニーは後頭部を打たれたような衝撃を受け、王の顔を見つめた。王もジェニーを見つめ返した。彼の表情から、険しさが次第に薄れていく。
「世間は既に騒ぎ始めておる。おまえが妃と話し、真実を知ったところで、事態はもはや何も変わらぬ」
王の瞳を見ていて、ジェニーは悟った。彼は、ジェニーが知らない“何か”を知っている。
「あなたは王よ。真実が世間の言う事実と違ったら。何とかできる

んでしょう?」
「王は万能なようで、ときに、歯噛みをしたいほど無力だ。俺は何もできぬ。それに、俺の意思が反映されることを、妃は望んでおらぬだろう」
ジェニーは息をゆっくりと吸い込んだ。
「王妃様と話をしたのね?」
王は何を知り、何を感じ、それがどんなものであれ、どうやって彼の心にある選択をするまでに至ったのだろう?
王はその質問には返答せず、ジェニーの手を引いた。
「どこに行くの?」
「来い。おまえを連れていきたい場所がある」
ジェニーの一抹の不安を吹き飛ばすように、王がジェニーのこめかみに唇を押し付けた。
「俺はおまえを妃に会わせる気はなかったが、妃はおまえに会いたいようだ。妃が後宮でおまえを待っておる」
ジェニーが足を踏み出すのを待って、王は隣に並んだ。
王妃の望みとは、もしかしたら、それがこの世で最後の願いなのかもしれない。

後宮は、訪問者に息をひそめているどころか、死んでしまったかのように沈黙していた。入口で出会った衛兵のほかに、ジェニーと王は誰ともすれ違わない。女たちのしゃべり声さえ響いてこない。
閑散とした状態は、王妃の部屋がある三階でも同じことだった。ただし、ジェニーたちの進む通路の先では、背の高い近衛兵二名がある扉の前でひかえている。
王に続いてジェニーが入った部屋には、中央の丸テーブルを囲むようにして、三人の女が座っていた。闖入者に驚いて二人の女が慌てて立ちあがり、ジェニーたちに背を向けていた黒髪の女が振り向いた。王妃だ。喪服のような黒いドレスをまとっている。目の上が

くぼんで茶色く見え、唇には血の気がなく、病人のような顔色をしていた。

まあ、と王妃はジェニーに微笑み、王に感謝の意を伝えるべく、頭を下げた。

「嬉しゅうございます。本当に彼女を連れてきて下さったのですね」

王妃の外観に反し、声は元気だった。王は尊大な態度で王妃に告げた。

「こやつにはもともと後宮の出入りを許可してはおらぬゆえ、長居はさせぬ」

「まあ。私が一緒だと彼女の身が心配なのですか？」と、王妃が目を細めて、にっこりと笑った。「でも……それも仕方ございません。ご心配なら、彼女に剣を持たせてはいかがです？」

ジェニーは、王を挑発でもするような王妃の態度に面食らった。彼女はもっと気弱で、こんなにはっきりとした口調で話せる人間ではなかったように思う。

王妃の侍女二人は主人の発言に恐れをなし、顔色を失くしていた。しかし、王は怒らなかった。

「その必要はない。話はなるべく手短に済ませろ。終わった頃に迎えに来る」

王妃が深々と頭を垂れると、王はジェニーを勇気づけるように軽くジェニーの背をたたき、王妃の前に押し出した。顔を上げた王妃は、ジェニーを見ると、やわらかく微笑んだ。

「カロリーヌは元気にしている？」

娘の名はカミーユだ、と訂正したかったが、ジェニーは王妃に素直に頷いた。

「元気です。おしゃべりも上手にできるようになりました」

そう、と王妃は寂しそうに見える笑顔をたたえると、部屋を去ろうとしている王に振り返った。王は王妃を見たあとに、ジェニーを見る。すると、王妃の口元にのっていた微笑みが、暗く翳った。

王妃が寝室として使っている部屋に二人が入ると、王妃はジェニーを窓辺に誘った。三つある窓のうち、脇の二つは濃い緑色のカーテンがかけられていたが、中央の広い窓からは明るい外の光が入ってくる。奥行きの深い窓枠部分に、分厚い本が三冊重ねて置かれていた。いちばん上の本は、ヴィレールの歴史書だ。王妃が自分の嫁いだ国の歴史を勉強し、国に馴染もうと努めていたのだろう。そう思うと、彼女が王を殺そうとしたというのは、今ひとつ説得力に欠ける。

ジェニーの視線の先を見たのか、王妃は肩にかけていたショールを本にかぶせた。

「あなたはたぶん――私がどうしてあんな事件を起こしたのか、不思議に思っているのでしょう？」

「本当に関わっているのですか？」

ジェニーが訊き返すと、王妃の顔がくもった。

「王から聞いたのでしょう？　そのとおりよ」

「本当に？　私にはとても信じられないんです。なぜ王妃様が、愛している王の命を狙わなきゃならないんでしょう？」

ジェニーが問うと、王妃は不快そうに眉を寄せ、何度か瞬きをした。ジェニーの前に突き出すようにして握る王妃の両拳が、小刻みに揺れている。

肌にぴったりとした黒いドレスを着ているせいで、痩せ型の王妃はさらに細く見えていたのだが、ジェニーがあらためて彼女を見ると、手首がほっそりとし、頬もずいぶんとこけている。サンジェルマンは王妃が毎日食事をしていると言うが、彼女は食事もろくに採れていないのではないだろうか。

「……哀れみはもうたくさんだわ……」

王妃が細い指を広げ、手のひらをジェニーに見せた。皺の少ない、年若い娘の手だった。

「あなたは、先王妃の呪いをご存知でしょう？」

「噂のことなら――はい」

王妃がいきなり笑い声を漏らし、ジェニーは驚いた。王妃の反応は、意外というより不可解だ。追いつめられて発狂でもしてしまったのかと、ジェニーは彼女を見つめる。

ジェニーと目が合うと、王妃は笑顔を保ちながら、少女の可愛らしい声で言った。

「その噂は私が流させたの」

第二部　6．春が訪れる前に－6

激しい炎が揺らめく釜を覗き込んだときのように、ジェニーの首から耳にかけての肌が、かっと熱くなった。嘘だ、とジェニーの口に出かかった一言は、熱をもった舌先で、音とならずに蒸発してしまう。

王妃はジェニーを見つめ返し、笑顔を一瞬にしてなくした。

「……怖い顔をなさるのね」

ジェニーはこみ上げた怒りにまかせ、王妃につい不躾な態度をとってしまったことを反省した。彼女から一歩下がり、ジェニーは膝を曲げて頭を下げる。

「申し訳ありません」

だが、ジェニーは戸惑ってもいた。ジェニーが知る王妃は、お人好しと呼ばれる行為はしても他人の心を平気で傷つけるような行為はしそうもなかった。王妃がさっきまで見せていた笑顔はあどけなく、汚れを知らない少女のようだ。彼女の清い心を映したような澄んだ瞳も健在だ。でも王妃からは、気弱そうな、おどおどした態度がなくなっている。

王妃の手がジェニーの前に差し出された。ひとさし指に、小さな緑色の宝石を抱いた銀色の指輪がはまっている。王妃は、面をお上げなさい、とジェニーに言った。

「いいの。嘘をつくなんて……あまり褒められることではないもの。王のために怒ったのでしょう？　王が実のお母様である先王妃を処刑なさったこと――当然あなたもご存知でしょうから、私が広めた噂をお聞きになった王が、おかわいそうと思ったのね」

「はい」

ジェニーが迷わず即答すると、王妃は苦笑し、口元を手で覆った。

「正直なお方ね。庶民の方々は皆、あなたみたいに率直にしゃべるの？　でも……残念だわ。私がカローニャの王女に生まれなければ

――どこかの町の娘として生まれ、王妃でなかったら……私はあなたとは仲良くなれたように思えてならないの」

ジェニーは王妃の言葉に身震いし、またもや不躾にも彼女を見つめてしまった。

「そう言っても、あなたは信じないわね」

「畏れながら、王妃様。私も以前から、同じことを感じていました」

ジェニーが言うと、王妃の微笑みから穏やかさがすっと消えた。王妃は瞬きすら忘れたように、大きな深い青い瞳を見開き、ジェニーを見つめる。

王妃の瞳に涙がにじみ出すと、ジェニーは彼女の秘めた想いを感じ取り、胸が重くなった。王妃は王をまだ愛しており、彼の暗殺を謀った護衛の男と王妃は、人々に後ろ指をさされるような関係ではなかったのだ。このとき、ジェニーは自分の考えが正しかったと確信していた。

では、どうして？　王妃はなぜ、自らの立場を追い込むような証言をしたのだろう？

一度俯き、指で涙を拭いとった王妃は、ジェニーの視線に応じようとしなかった。ジェニーと向き合えば号泣してしまうと、彼女は分かっていたのだろう。

「王妃様、王がかわいそうだと分かっていながら、どうしてそんな噂を流したんですか？」

だが、ジェニーがそう尋ねると、王妃の沈痛な表情は怒りを抑えたような顔に一変した。

「王がおかわいそう……？　でも、王には心の拠り所となってくれるあなたがいるわ。あなたが罪人に誘拐されて行方不明となったあと、王は私と結婚してからも、手を尽くしてあなたを捜索したと聞いたわ。王があなたを深く愛しておられること……私は、心ではそれを認めたくなかったけれど、理解していたつもりなの。

でも……あなたが羨ましかったわ。私が一緒でも、王の心は常に

あなたのもと。私が妃としてふさわしくなれるように努めたとしても、王の心は少しも動かないの。王のお気に召すようにと化粧や外見を変える努力もしてみたけれど……無駄だった。王のあなたへの想いは強くて、私はそれを知るたび、いつも打ちのめされた。それに、私は王妃なのに、あなたのように王の御子がもうけられない……。最近では、私の顔を見れば『ご世継ぎを』と言っていた女官長も、何も口にしなくなったのよ。女官長の言葉があんなに重荷だったのに、いざ聞けなくなると……」

王妃は言葉に詰まり、細い二つの眉を寄せた。黒い眉が震えていて、王妃は涙を見せまいと必死に我慢しているようだった。王妃が堪えている悲痛な叫びが、目に見えない振動となってジェニーにも伝わってくる。

ジェニーは王妃が肩を大きく上下させて深呼吸したのを見て、口を挟むのをあきらめた。王妃は、皆に語らなかった真相を明かそうとしている。

「あなたがいなかったら、この状況はきっと違っていた。……何回もそう思ったわ。王に妃として愛されなかったとしても、あなたがいなければ……あなたがいなかったら、王があなたを想う姿を私はこの目で見ずにいられる。あなたがいなければ、どんなによかったか……」

ジェニーだって、王妃がいなければよかったのに、と何度となく思ったものだ。ジェニーと違って王妃は、彼女が望めば、自ら王に会いに行ける。王に会えない時間をジェニーは今でこそ楽しめるようになったが、王のいない時間と空間を寂しく感じ、我慢する日々が過去にはあった。

王妃が大きなため息をつき、ジェニーに引きつった笑いを見せる。

「あれはたしか、闘技大会の少しあとよ。晩餐を終えて部屋を出たところで、私は、王がサンジェルマンから何か手渡されたのを見たの。――ええ、あなたからの手紙。王は緊急用件だと思われたのか、急いでそれを開いたわ。そして、私は見たの。それを読まれている

ときの、王のなんてお幸せそうな顔……！」

その場面を思い出して感極まったのか、王妃は両手で顔を押さえてしゃがみこんだ。ジェニーは同じようにしゃがみ、彼女の震える背中に手を伸ばしかけ、思い直して手を止めた。王妃にむやみに触れることは失礼にあたり、彼女に同情していると取られたくもない。ジェニーは彼女の細く小さな背中を見つめた。

数分後、ジェニーは躊躇いながらも王妃に声をかけた。やっと顔をあげた王妃は泣いてはおらず、涙を流した形跡もなかった。

「あなたが死んでしまったらいい、と思ったのは、そのときよ……」

ジェニーが驚愕すると、王妃は鈴の音のような軽い笑い声をたてた。

「自分でも、そんなことを思った自分にびっくりしたの。人の死を願うなんて神に背くことよ、私は自分を責めたわ。ずっと苦しかった。……でも、その思いは頭からずっと離れなくて……」

王妃は床に手をついて立ち上がり、しゃがんだままのジェニーを見下ろした。窓から入る日差しに照らされた王妃の顔は、まったくの無表情に見える。

ジェニーは不意に感じた恐怖をひた隠し、王妃を見つめ返した。それから、彼女を刺激しないように、ゆっくりと床から立ち上がる。

ジェニーが王妃の前に立つと、彼女はジェニーの背後にちらりと視線を動かした。ジェニーは王妃から目を離したくなかったので、音だけで背後の様子をうかがったが、特に気になる物音はしなかった。王妃が口を開いた。

「あなたが過去に遭った毒殺未遂は、私とは関係ないの。本当よ。……ごめんなさいね、それは私の侍女たちがよかれと思って、私に無断で実行したことだったの」

ジェニーは死んだコレットを思い出し、無念さに胸をつかれた。

「あのお菓子を食べて亡くなった、コレットという者がいるんです。ご存知でしたか？」

「誰か死んだの？　まあ……。主人の身代わりとなったのね……」

王妃は、彼女の侍女が勝手にやったこととはいえ、仕方がない結果だったとでも言いたげな口調だった。お気の毒に、と王妃は目を伏せたが、巻き添えとなって死んでしまった者の命を悔やんでいるようではない。ジェニーは、これまで王妃に抱いていた、親切で人のよい人物という彼女への印象が急に揺らぎ始めるのを感じた。

「でも」と王妃は袖についた波状の飾りに手を触れ、ジェニーに言った。「……死ぬのはジルじゃなくて、あなたの方だったのよ」

ジェニーは王妃の言葉にあまり驚かなかった。

「あの近衛が狙ったのは、実は王じゃなくて、私だった――ということでしょうか？」

「いいえ」

王妃は笑い、ゆっくりと首を横に振った。

「ジルが飛び出して行ったとき、私はてっきりあなたのところへ行くものだと思ったの――私は以前から彼に、『あなたがいなければ私の人生は違ったかもしれない』とよく話していたから。でも、たぶん彼は、最初から王を襲うつもりだったのね……。

私の侍女たちは、私を正妃としてたててくださる王に、あまり不満を抱いていなかったわ。でも私は……辛かった。ジルは、親身になって私の話をよく聞いてくれたものよ。でも彼は、責めを負うのはあなたではなく王で、王は私をないがしろにしている、とよく言ったわ。王の近衛兵という立場で、とても許される発言ではないわ。だから、私は彼をその都度いさめたけれど……私は、私の苦しみを解ってくれる味方がいる事が、本当に嬉しかった」

王妃は、これまで見せてきた以上に幸せそうな微笑をジェニーに投げかけた。ジェニーはその笑顔を見ると、逆に、彼女が耐えてきた孤独と苦痛を見せられた気分になる。喉の奥が絞りあげられたように痛く、息が詰まるように感じた。

「でも、もしそうであれば――」ジェニーがかすれた声で言うと、王妃はジェニーから顔をそむけ、窓から空を見上げた。

「私が、王の暗殺未遂に関わっていない、とおっしゃりたいのね」
「はい」
そうね、と王妃は肯定とも否定ともつかぬ返答をする。ジェニーは王妃に一歩近寄った。
「王妃様、事件に関与していないのなら、どうしてそう話さなかったんです？　王の暗殺は重罪です、たとえ王妃でもその罪から免れることは……できないかもしれません」
王妃は振り向き、ジェニーの瞳をまっすぐに見つめた。
「知っているわ。先王妃のように処刑されるかどうか――それはまだ分からないけれど、私が遠隔地にある牢に搬送されることだけは知っているわ、王がそう言っていたから……。でも、それでいいの」
「無実の罪をかぶって？　そんなの、だめです……！」
王妃はジェニーの反応に驚いたようだったが、静かに、いいのよ、ともう一度繰り返した。
「よくありません」
ジェニーがなおもそう主張すると、王妃は困ったように微笑み、また窓の外に目を向けた。王のことを想っているのか、ジェニーに説明を試みようと考えを整理しているのか、何かを思案しているようだった。
「ねえ、ジェニー」
王妃に友人のように呼びかけられたとき、ジェニーは、興奮して胸につかえていた息を長々と吐き出しているところだった。
「はい」
ジェニーの注意を引くと、王妃はジェニーに両手を伸ばし、ジェニーの手を取った。
「知っていた？　王は私の手をあまり取ろうとしないのよ。でも、あなたと王はいつも手を繋いでいるでしょう？　――実は、ときどき小城に見に行ったのよ。王は、あなたといつでも繋がっていたい

のね」
そう話しながら、王妃はジェニーの手を感慨深そうに見つめ、両手でそれを握る。王妃はジェニーの手を通じて王を思い出しているのか、大事そうに触れる王妃の両手を見て、ジェニーは彼女に何も言えなかった。
「ジェニー、私はあなたが嫌いではないけれど……できれば、王の近くにいてもらいたくなかった。あなたも同じようなことを、たぶん、私に思っていたでしょう？」
「――いえ」
ひと呼吸の言いよどみを、王妃は好ましく思ったらしい。王妃は頬をゆるませた。
「あなたとはいつか……いいお友達になれたのに」
「私でよければ、いつでも」
ジェニーは王妃の瞳を見上げながら同意したが、王妃は静かに首を横に振り、そっとジェニーの手を放した。
「……無理よ。私がしたことを聞けば、あなたは私をきっと許せないわ」
王妃の口調があまりにも自信に満ちていて、ジェニーは不審に思う。
ジェニーが王妃を許せないとしたら、何が理由になるのだろう？
そして、ジェニーはふと、思い当たった。
「――王に何かしたんですか？」
王妃が再び、ジェニーの後ろに視線をそらした。今度はジェニーも背後を振り返ったが、室内には誰もいない。扉は入室したときと変わらずに細く開いているものの、隣室にも人の気配は感じられなかった。
ジェニーが王妃に視線を戻すと、それを待っていたように彼女は言った。
「私は、結婚した夫婦には愛情が通い合うと思っていたの。それが国の決めた相手でも、毎日一緒にいれば、いつかはそうなるものだ

とずっと……ずっと思っていたの。でも、私がどんなにがんばっても、王は私に……見向きもしない。さっきも言ったけれど、私は、王に深く愛されているあなたが本当に羨ましかった。私は王の妃だけれど、自分が王と結婚しているなんて、いつも思えなかった」

王妃はため息をつき、力なく笑った。

「闘技大会での事件のあと、侍女たちはあなたを救出しようとしなかった王の姿勢を讃えたわ。でも、私はもっと別のことを思って憂鬱になったの。あの男たちは、あなたの命が危険に晒されれば、王を従わせることができると考えたのよ。王妃の私を狙わなかった。あんな……あんな者たちにまで、王が愛するのは妃でなく、あなただと知れ渡っているの……？」

王妃が口にするのは、王への愛を裏打ちする内容ばかりだ。彼女の想いにあらためて驚かされたが、ジェニーは口を挟まなかった。

「王があなたからの手紙を読む姿を見たのは、その少しあとのことよ。私はジルにその話をしたの。彼は王に憤慨していたわ。……それから少し経った頃、ジルが解任されて――あの事件が起こったの。ジルが死んでしまうなんて、今でもまだ信じられないわ。あの血だらけの死体が、ジルだなんて……！」

彼の変わり果てた姿を見たときの私は、正気でなかったかもしれない。でもあのとき、私は王があなたの手を掴んでいるのを見たの。私がたった一人の友人を永遠に失ったというのに、王とあなたの絆は永遠に続きそうに見えた。私は王から、一度も妃としてみなされないのに……」

「……王はいつも、王妃様をヴィレールの王妃として見ていました」

「ああ、私は王に私のことを想ってもらいたかったの、あなたを想うように強く！　でも……無理な願いだった……！」

王妃は窓枠の上からショールを掴み取り、その下に現れた本を手で振り払った。分厚い本はジェニーの足に当たり、床に転げ落ちていく。ジェニーがそれを拾おうと手を伸ばすと、すかさず、王妃の手がそれを阻んだ。

「王妃様？」

「ライアン副隊長からジルとの仲を疑われたとき、王のお母様のことが頭に思い浮かんだの。王は、先王妃に強い思いを抱いておられるわ。それは憎しみだけかもしれない、でも……私がもし先王妃を彷彿させるような人間であれば――そうすれば、王が先王妃を思い出すときは必ず、私のことも思い出す。そうでしょう？　私がかつて妃だったことが、王の心にずっと残るの」

それから王妃はジェニーを一瞥し、そのために先王妃の呪いの噂が必要だったの、とさらりと呟いた。ジェニーは自分の唇や頬が強張ったことを自覚した。ジェニーの喉が震えていた。

王妃がジェニーの横から床に手を伸ばし、落下した本を拾い上げる。ジェニーは、王妃が背を伸ばし、本を窓枠に置き直すまで、まともに呼吸ができなかった。

ジェニーが怒りを抑えきれず、嗚咽のような声を漏らすと、王妃が同情したように表情をくもらせた。

「王が私のことをいつまでも覚えているなんて、あなたはいい気分がしないでしょう？」

「そんなこと、どうでもいいんです！」

喉から滑り落ちるように出た声を、ジェニーは抑えられなかった。

「王が先王妃のことで苦しんだ過去をご存知なんでしょう？　なのに、どうしてそれを蒸し返すようなことをするんです？　王を愛しているならなおさら、どうして王が苦しむようなことをするんです！」

「……あなたに……王に愛されているあなたには、解らない。私が耐えてきた孤独と愛されない苦しみが、あなたに解るの？　少しだけよ……ほんの少しでいいから、王に私のことを想ってもらいたいだけなの。好きな相手に自分のことを考えてもらいたいと思うのが、そんなにも悪いこと？」

「ずっと苦悩してきた王をまた苦しめたいんですか？　そんなの身

勝手です！　王が来たらすぐ、事件への関与を否定してください……！」

ジェニーの意思に背いて、涙が流れ落ちた。泣くつもりなどなかった。でも、王が苦悩した過去が、王の注意をひくための道具として利用されたのが、ジェニーには口惜しく、許せなかった。

ジェニーは奥歯を噛み締めながら涙を我慢したが、無駄な努力に終わった。熱い涙は、豊富な源泉のように、あとからあとから湧き出て止まらない。王妃は、予想以上に興奮したジェニーの反応に茫然としているようだった。

ジェニーが頬の涙を拭い、王妃にもう一声かけようとしたとき、隣室から大きな物音が聞こえてきた。二人は見つめあい、それから、開いている扉を見る。

「王妃様！」女の声が叫んだ。「王がお見えです！」

それに引き続き、ジェニーが聞きなれた、王の足音が近づいてくる。

王妃は王に何も告げなかった。王は、ジェニーに何も語らせなかった。王はジェニーの赤い目に気づいたはずだが、その理由を尋ねなかった。

ジェニーを連れ、王は執務室のある棟の二階にある、広い部屋に入った。部屋の壁際には、重厚な趣の箪笥が二つ据えられている。部屋の中央寄りに置かれた丸テーブルと二脚の椅子。ほかに、家具らしき家具は置かれていない。丸テーブルの上には、光沢のある半透明のクリームが塗られた、甘い匂いを放つ丸いケーキが用意されていた。王はテーブルの前にある椅子の一つに座り、ジェニーを目で隣に呼び寄せた。

「……ここはあなたの部屋？」

「殺風景だと言いたいか？」

ジェニーが小さく笑うと、王は彼の後ろにある幅広の扉を示し、にやりと笑った。
「寝室はもっと装飾品であふれておる。あとで見せてやろう」
ジェニーが頷くと、王は満足そうに深く頷いた。
それから、王は腰帯から短剣を取り出すと、それを使って器用にケーキに切れ目を入れていった。ケーキの生地に作られる細い筋を眺めていると、ジェニーはなぜか無性にむなしくなり、唇を噛んで俯いた。
「――妃と話しても、どうにもならぬと言うたであろう」
王の何気ない口調に、ジェニーは顎を上げる。
「あなたは、何もかも知っていたの？」
「何もかもとは、何のことだ？」
王は、切り分けたケーキの一つに短剣の先を突き刺し、持ち上げた。「これは、王である俺が最初に食べる」
ジェニーは、王がケーキに直にかぶりつく様子をぼんやりと見つめた。
「あなたは私に何も訊かないのね」
口に含んだケーキをのみこんでから、王は眉を寄せ、ジェニーに言った。
「訊いたところで何が変わる？　おまえが何か証言したとしても、妃が何も語らぬのであれば、事態は一向に変わらぬ」
「だけど、あなたが――」
「ジェニー、おまえの涙は何のためだ？」
王は指でジェニーの涙を拭い、短剣に突き刺していたケーキを皿の上に置いた。
「俺は今回の件で、それほどの痛手を被ってはおらぬ。噂に惑わされることもない。先王妃と今回の事件を結びつけて考えることもない。……いや、結びつかぬこともないぞ。両者とも、実際には夫を殺そうとしなかったという点では」
「……えっ？」

王は、ひとさし指を唇の前に立てた。
「事実は必ずしも真実とは限らぬ。おまえが手紙に書いたとおりだ。だが、真実が明かされる方がよいとも限らぬ。真実を伏せておいた方が、幸せな場合もある」
ジェニーが王妃の震える眉を思い出し、重いため息をつくと、王がジェニーの涙の跡を指でなぞった。
「おまえは、俺のことを思うがゆえに、そうやって気に病むのか？」
ジェニーは少し考え、それを否定した。
「あなたの気分が滅入らなくていいように、代わりに私が沈んでるの」
「おまえはまた……変わった考え方をする」
王は呆れたように笑ったが、決してばかにした笑いではない。
王がジェニーの背に手をまわした。ジェニーが王に体を預けると、彼がさっき食べたばかりの、甘く香ばしい菓子の匂いがした。
「もう泣くな。俺を思い、俺のために涙を流すことはない」
「うん」
「俺の代わりに涙を流そうと思うな」
ジェニーは頷かなかった。
「だが――」
ジェニーが顔を上げると、王は焦ったように瞳を揺らし、ジェニーの頬に顔をくっつけて言った。
「だが、それをするおまえだからこそ、俺はこの世で……おまえをいちばん愛しいと思う」

第二部　6．春が訪れる前に－7

昼を少し過ぎると気温はぐっと下がり、細かい雪がちらつき始めた。窓から見える景色が全体的に白く濁っている。そんな悪天候にもかかわらず、ユーゴはジェニーを訪ね、小城にやってきた。彼が自宅を出発する頃はまだ暖かく、雪が降りそうな空模様ではなかったそうだ。ユーゴに続き、数人の男たちに抱えられた三つの大きな箱がジェニーのいる部屋の床に置かれると、彼は王に挨拶するように恭しく胸に手をあて、「きみに贈り物だよ」と得意げに笑った。

ユーゴが持ってきた箱の中からは、毛皮の帽子・襟巻き、防寒用手袋、艶やかな色のドレス用生地が多数、香水、それから、カミーユとほぼ同寸の女の子の人形が次々に取り出された。毛皮の帽子と襟巻きはカミーユの分までである。この倍の様々な贈り物がユーゴの自宅にあるそうだ。宝石類もあるが、今回は持ってこなかった、と彼は言う。王城の正門では入城者への検問を以前より厳しく行っているそうで、荷物の多かったユーゴは少し手間取ったそうだ。

「こんなにたくさん、どうしたの？」

「まあ、話はあとでゆっくりね。とりあえず、熱い、はちみつ割のぶどう酒をくれないか？　ここまで歩いてくる間に体がすっかり冷えきった」

ユーゴがジェニーの頬につけた唇は、たしかに冷たかった。

王妃が明日の早朝に王城を出る、とジェニーが知らされたのは、ユーゴが杯に口をつけたすぐあとのことだった。

「皆が王城にやって来る前に、西門から出発されるそうです」

アリエルはジェニーの耳元で囁くと、いつもの微笑みを表情にのせ、何ごともなかったかのように姿勢を正した。ジェニーの席の反対側では、上機嫌なユーゴが召使の女に酒の名をあげさせているところだ。

「――もしかして、彼はそれをもう知ってる？」
ジェニーがユーゴのことをほのめかすと、
「あの方のことですから、どこかで耳にされているかもしれませんね」
アリエルはユーゴをちらりとも見なかったが、ジェニーの問いにそう答えた。
城内に住む複数の女性と関係があるらしいユーゴなら、一般的には知りえない情報も簡単に入手できそうだ。ユーゴの明るい笑顔の裏には、いつも何らかの意図が隠されている。彼は王妃の退去を知っているからこそ、この時期にジェニーに会いにやって来たのだ。
「ジェニー、きみもりんご酒飲む？」
彼の誘いをジェニーは遠慮した。
「それよりもユーゴ様、この……贈り物？　服なら足りてるし、あなたからこんなに貰う理由がないわ」
ジェニーが箱やテーブルの上に広げられた品物を指し示すと、ユーゴは召使女に笑いかけた顔をジェニーに返し、肩を小さくすくめた。
「私からじゃないよ。皆がくれるって言うんだから、まあ、貰っておいたら？」
「皆って、誰が私にくれるの？」
「そりゃあ――」
嬉しそうに笑ったユーゴは、ジェニーが戸惑っているのに気づくと、口を閉じた。それから、彼が隣に立っていた召使女に小声で何か耳打ちする。すると、彼女はジェニーに挨拶をし、そそくさと退室していってしまった。部屋には、ジェニーとユーゴ、アリエルだけが残された。
「うーん、きみは賢いのか鈍いのか……」
ユーゴは酒の残りをぐいと飲みほすと、ジェニーの横に立つアリエルに目を向けた。
「ねえアリエル、きみは世間に流れてる噂を聞いてるよね？」

ジェニーがアリエルを見ると、彼女はジェニーに微笑みながら言った。

「申し訳ございません。私は城外にはあまり出ないので、世間の噂には疎いのです」

ユーゴは落胆したように息をつき、やれやれ、と首を振る。

「アリエル、きみはさ、本当に主人思いだよ。まったく――きみの恋人サンジェルマン様とそっくりだ」

ジェニーがびっくりしてアリエルに振り返ると、彼女が頬に力を入れ、ユーゴに強い視線を向けた。

「……サンジェルマン様と私とは、何の関係もございません」

「ふうん？　じゃあどうして、私を拒んだとき、サンジェルマン様の名を呼んだりしたの？」

「えっ！？」

ジェニーが驚きの声をあげると、ユーゴはジェニーを一瞥し、厳しい形相となってアリエルを見返した。アリエルも一歩も引くことなく、身分的には彼女より上であるユーゴを見つめ返す。

「そのことと……サンジェルマン様とは、一切関わりがございません」

「なるほどね。きみが一方的に好きってことか」

ユーゴがからかうように言うと、アリエルの手がドレスの前できつく握り締められた。

「サンジェルマン様は誰もが尊敬なさる、立派なお方でございます」

「ああ、高貴なお方だからね。まあ、それだから、きみはふさわしくないって自ら身を引くのか。なんともくだらない美徳だね」

「ユーゴ様、言いすぎだわ！」

ジェニーが怒って叫んでも、ユーゴは止めなかった。

「あー、もったいないな。サンジェルマン様が今も独り身なのって、きみのせいだろ？　きみさえ態度を軟化すれば、サンジェルマン様はすぐにでも結婚を申し込むよ。そうすればきみの将来は安泰じゃないか、何が問題なの？　私だって、きみがサンジェルマン様の妻

となれば、そう簡単には言い寄ることもできないさ」

アリエルはユーゴをじっと見つめ返していたが、何も言わなかった。身分上反抗できない、と権威に屈したのかもしれないが、サンジェルマンとは関係ない、と最後まで言い切ることだって、彼女にはできたはずだ。

ユーゴが女に悪態をつく姿はめずらしく、彼はにこりともせず、アリエルを不服そうに見返している。ジェニーはアリエルが冷静さを失っている様子を見て、彼女をユーゴの前から去らせることにした。

ユーゴはふてくされ、テーブルに頬杖をついて窓の外を眺めていた。窓の内側はくもっていたが、外の樹木や地面を覆う白い雪が、太陽のような眩しさとなって室内を照らしている。ジェニーがユーゴの前のテーブルを指でたたくと、彼は面倒そうにジェニーに振り向いた。

「悪かったよ、言いすぎた」

口調は投げやりで、ユーゴはいつになく不機嫌だ。陽気な彼しか知らないジェニーは、彼の様子が普段と違うことを不審に感じた。

「今日はどうしたの？」

「何が？　どうもしないよ」

ユーゴはジェニーの顔を見ようともしない。ジェニーは彼の隣の椅子に腰掛けた。

「ねえ、アリエルと何があったの？　私、ユーゴ様は彼女に興味がないんだとずっと思ってたのに」

ユーゴがジェニーを見て、ゆっくりと微笑みを作った。

「ああ、彼女は好みじゃないよ。地味で華がない。頭も良さそうだし」

「じゃあ、どうして手を出そうとしたの？」

ジェニーがむっとすると、ユーゴは子どもをあやすようにジェニーの頭を手で撫でて、笑った。

「言い寄っただけで手は出してないよ。真面目そうだったから、ちょっとね、からかってみたかっただけ」
「もう、手当たり次第に――」
「それ、アリエルにも言われたな」
ユーゴは肩をすくめると、アリエルの出て行った扉に目を向けた。
「恋するって面倒だなあ。独り占めしたくてたまらなくなる。いっそ、手が届かない存在にでもなってもらえれば、あきらめもつくってものだけど」
ユーゴはそれからジェニーの手を取って、その甲に唇をつけた。数秒間、そこから動こうとしない。そして、彼はやっと唇を離したかと思うと、ジェニーの手の上に長いため息を落とす。
ジェニーはユーゴの寂しそうな様子に茫然とし、手を彼に預けたまま、その精気が抜けたような表情を見つめた。
「……ユーゴ様、アリエルのことが好きだったの？」
ユーゴがジェニーを睨むように視線を上げ、そして、呆れたように笑った。
「きみはやっぱり鈍いな」
「ユーゴ様が――嘘でしょう？　本当に？」
ジェニーが信じられないでいると、ユーゴは苦笑した。
「まあ、自分自身でも途中まで気づかなかったからね」
ユーゴの視線が再び、扉の方にちらりと動いた。
「でも、ユーゴ様は結婚してるじゃない？」
「きみからそんな言葉が出るとは意外だな」
ユーゴは傷ついたようにジェニーを見て、口を尖らせた。「王だって既婚者だろ？　……今までは」
今までは、というユーゴの言葉に、ジェニーは王妃の面影を思い起こして、胸が締めつけられた。王妃が今すぐに処刑されることはないようだが、彼女は国の法に則って離縁され、辺境の地に幽閉されることが決まっている。
王妃は衝撃的な事件を起こした張本人として、忌み嫌われる悪女

となって世間の人々の記憶に残るだろう。そして当然、王の心にもいつまでも残るだろう。憎しみや同情だったとしても、王から関心を向けられるという意味では、王妃の目論見は成功したのだ。彼女がその心境に到達するまでの境遇を思うと、ジェニーはいたたまれなくなる。だが、だからといって、許せることばかりではない。

「“今までは”だよ、ジェニー」

ジェニーの沈黙を気落ちしていると取ったのか、ユーゴがジェニーを励ますようにジェニーの手の甲をたたいた。

「国も王も、王妃には名誉を傷つけられたけど、その穴埋めにカローニャから塩田をもらったんだし――王は今や独身だ。結果的に王には好都合だったじゃないか。きみにとっても」

王が王妃の部屋にジェニーを迎えに来たとき、彼は一瞬だけ、同情したように王妃を見た。ただし、王妃はおそらく、彼のそんな表情には気づいていない。ジェニーはそれを思いだし、首を横に振った。

「王はそう考えてないと思うわ」

なんで、とユーゴは怪訝そうにジェニーを見る。

「王はもう妻に気兼ねしないできみに会えるんだ、きみを自由に本城にも呼べる。嬉しいに決まってるじゃないか。ジェニー、きみは正妃がいなくなって嬉しくないの？」

嬉しいも何も、ジェニーは今のこの瞬間まで、暗殺未遂事件や王への想いに追われていた。王妃が王城を去ることで自分の日常が変わる可能性を、一切考えていなかった。

「あ、王に……会いにも行けるのね」

「そうだよ」

初めて入室を許された王の部屋を隅々まで見て、深呼吸した日をジェニーは今もはっきりと覚えている。あの日、彼がジェニーを自室に入れたのは、王妃の目を気にしなくてよくなったからだ。にわかに胸に湧き上がった実感に、ジェニーの頬が火照った。

ジェニー、とユーゴがジェニーの肩を揺り動かした。

「しっかりしてくれよ、ジェニー。きみには、ベアール家のためにこれから一肌脱いでもらわなきゃいけないんだからさ」
「私がベアール家のために何をするの？」
「ああ、もう！　頼むよ、ジェニー！」
ユーゴが椅子から立ち上がり、テーブルの上に置かれた生地の一つをさっと取り上げた。
「これが何のためにここにあると思う？　きみにこうやって貢ぐ連中は、この先の将来を見越して、きみに取り入ろうとしてるんだよ。これから、こういった贈り物はもっと増えるはずさ。なぜって、きみは、この国の次の王妃になるかもしれないんだから」
予想もしなかったユーゴの言葉に、ジェニーは彼を唖然として見つめるしかなかった。
「ねえ、まさか、自分なんか王につり合わないって自分を卑下してるんじゃないだろうね？　もしそうなら、それこそ、私がさっきアリエルに言った同じ文句をきみにも言ってあげるよ。王がきみを愛してるのは周知の事実じゃないか。王が望めば叶わないものはないよ。それにね、さっき言ってた、世間での噂がきみには追い風になりそうなんだよ」
「噂って、先王妃の呪いのこと？」
「そう。先王妃の呪いのせいで、ヴィレール王は代々、王妃から命を狙われる運命にあるっていう噂。ばかばかしいだろ？　でも、それに怯える人たちが言ってるんだ。同盟を結ぶための政略結婚だと、次の王妃はまた王を亡き者にしようとするかもしれない。だから次は、国内の有力貴族から候補をたてるべきで、それが――」
ユーゴがさっきとはうってかわって興奮したように目を輝かせ、ごくりと喉を鳴らした。
「それが、王を愛し、王が信頼するきみであれば、王は王妃から暗殺される心配はない。しかも、きみは既に王の子をもうけていて、子どもが産める体質だってことも証明されてる。いい？　きみは次の王妃の筆頭候補なんだよ……！」

春先にはベアール家の当主を継ぐというユーゴは、ことさら、その話を推し進めたがっていた。だが、彼の話にジェニーは現実味を感じられない。ジェニーは、王がいずれ再婚する必要に迫られるだろうことは分かっていたが、その相手が自分であるとはどうしても思えなかったのだ。

ジェニーは、王城に呼ばれた夜、王が寝室で話したことを思い出していた。ヴィレールが軍事強国だとしても、国境線が常に塗り変えられる世の中では、他国と提携していなければ生き残ってはいけない。そのためには、隣接する国のどこかと婚姻による親戚関係を結ぶことが、もっとも手っ取り早いのだ。現王妃がいなくなっても、それは、どこか他国の王女が取って代わるだけのこと。

王は、義務でする結婚を理解しろとは言わない、とジェニーに言った。王はゴーティスという個人の男ではあるが、ヴィレールという一つの国でもあるのだ。個人としてはジェニーを必要としていても、国が生き延びるために彼が必要とするのは、ジェニーではないだろう。

王が正妃を持つことに、ジェニーはまだ完全には割り切れていない。だが、王が王であろうとするのなら、彼が別の誰かと結婚することは仕方のないことだ、とジェニーは思っている。そしてそれは、我慢とは厳密には少し違うものだ。

ジェニーは王の結婚で多少傷ついたとしても、きっと彼を追い、彼を愛さずにはいられない。

昨日より暖かいせいで、今朝は雪でなく小雨が降っていた。雨粒が窓に当たる音はそれほど大きくないが、眠りの浅かったゴーティスは早々に目覚めた。たぶん、まだ夜明け前だ。カサンドラが人目をはばかって、王城を出発する時間帯。

寝室を抜けると、隣室ではサンジェルマンがゴーティスを待っていた。ゴーティスは驚いた。

「おまえ、いつからここにおった？」

「数分前です。間に合ってよかった。王、行かれるのでしょう？」

ゴーティスが否定したところで、サンジェルマンはどうせ彼に同行する気でいるのだ。ゴーティスは無駄な抵抗は止め、そうだ、と答えた。

「では急ぎましょう。先ほど、迎えの者が後宮に向かうのを見かけました」

サンジェルマンが踵を返し、ゴーティスに向けた背中は、ゴーティスが王位に就く直前に見たものと同じだ。今のゴーティスは彼より背が高く肩幅もあったが、それは当時と変わらず、広くて頼りがいのある男の背中だった。

夜明けに差し掛かる頃だったが、雨のせいで視界は悪かった。雪が溶けて地面は滑りやすく、西門に伸びる小道には、所々に小さな水たまりができている。空から落ちてくる小粒の雨は冷たく、ゴーティスたちの身に着ける外套がしっとりと濡れていく。

西門に近づくにつれて衛兵の数は増え、周辺は異様な緊張感に包まれていた。人だかりがあるのに、話し声が何も聞こえない。ゴーティスとサンジェルマンが姿を見せても、彼らは無言で敬礼するだけだった。使用人たちの通用門として使用される西門だが、使用人らしき男女の姿は一人も確認できなかった。

二人は西門の庇の下で雨を避け、薄暗い空から降ってくる弱い雨を見上げた。夜が明けたのかどうかすら、判断がつかない。

それから五分も経たないうちに、二人の前に居並ぶ衛兵たちの動きがぴたりと治まった。見ると、彼らが整列した先から、四人の衛兵に四方を囲まれた小さな人間が、門の方に向かってまっすぐ歩いてくる。地面に引きずりそうに長い、黒っぽい外套を頭からすっぽりと被り、終始うつむき加減だ。ゴーティスの立つ位置からは、そ

の顔の目鼻立ちが鮮明には見えないが、それが彼の元妻でなくて他に誰だというのか。

整列していた衛兵の誰かがゴーティスの存在を四人の衛兵に知らせたらしく、元王妃を連行する一行は、ゴーティスの数歩先で遠慮がちに歩みを止めた。俯いていたカサンドラが、衛兵の一人に危うくぶつかりそうになって、ふと立ち止まる。怪訝そうに目線を上げた彼女が、サンジェルマンの隣に佇むゴーティスに気づいて、怯えたように息をのんだ。

ゴーティスがカサンドラに最後に会ったのは、一週間前だ。そのときの彼女は、一週間で十歳は老け込んだような印象だった。ゴーティスは、彼女はその後さらにやつれ、疲労の色が濃くなっているだろうと予想していたが、彼女を見て、正直、驚いた。彼女は唇に朱色の紅をさし、頬はふっくらとしていて、むしろ健康的に見えたのだ。

カサンドラはゴーティスから視線をそらすと、周囲をぐるりと見渡した。何かを探していたようだが、目当てのものは見つからなかったらしい。

「……哀れな女を笑いに来たのですか？　雨の中を、こんなところまで……」

彼女は力なく笑ったが、ゴーティスもほかの誰も笑わなかった。

「それとも――まさかとは思いますが、罪人の私をお見送りくださるのでしょうか？　私は王を殺そうとしたというのに……。それでも、最後くらい……最後くらいはせめて、妃だった女に情けでもかけようと……？」

ゴーティスは一歩前へ足を踏み出した。庇に守られていた顔や体に、冷たい雨粒が降りかかった。

「俺は、先王妃が処刑される一部始終を見届けた。見ておって気持ちのよい光景ではないがな、それを最後まで見ることが俺の義務だと思うたからだ。俺がおまえをここで見送るのも、同じ理由だ。カサンドラ、おまえの罪状は姦通だ。王妃の姦通は殺人に次ぐ重

罪だ。この先――もしおまえが処刑されることとなれば、俺はそれを見届けよう。おまえが入所先で逃亡することがないよう、くだらぬ問題を起こさぬよう、かつて王の妃であったおまえの動向に、俺は常に目を光らせておる。それゆえ、刑期を終えるまで……おまえはせいぜい達者に暮らせ」

ゴーティスを見つめていたカサンドラが瞠目し、突然、濡れた地面に膝をついた。

「王、私は……！」

カサンドラは、ゴーティスが彼女のついた嘘を知っていると気づいたに違いない。ゴーティスは濡れた襟を首に引き寄せ、小さな両手で顔を覆って泣き出した元妻を見つめた。

「お許しください、どうか王、お許しくださいませ……！　私は王になんというひどい仕打ちを……王を、王を傷つけるつもりなど、なかったのでございます！　私は、ああ、私はなんと身勝手な……！」

興奮したカサンドラがゴーティスに伸ばした手は、衛兵によってむげに遮られた。

「申し訳ございません、王！　どうか、どうか私をお許しくださいませ……！」

雨と涙に濡れたカサンドラの顔をゴーティスが見ると、彼女はひときわ高い嗚咽を漏らした。彼女は今になってようやく、自分の犯した愚かな行為に気が付いたのだろう。だが彼女は、自分の行為が結局は自らを苦しめるだけだということに、まだ気がついてはいないだろう。

サンジェルマンが訝しそうにカサンドラを見て、ゴーティスを見た。だが、勘のよいサンジェルマンでも、彼女が本当は何に対して謝罪しているのか、分かりはしないはずだ。ゴーティスは、ジェニーを彼女の部屋に連れていったとき、立ち去った振りをして部屋に残っていたからこそ、事情に通じることができただけだ。

雨に濡れた顔を手で拭い、ゴーティスは去っていくカサンドラを

見送った。彼女は不憫だが、自分自身の苦しみを自覚していないだけ、まだ幸せだ。

ゴーティスは、今すぐにでも、ジェニーに会いたかった。

第二部　7．王の帰郷－1（前書き）

ついに、といいますか、ようやく、最終章に入ります。
でも、この章も長くなるかもしれません。
気長にお読みください～。

第二部　7．王の帰郷－1

三月に入って一週間以上が過ぎ、雨は何度か降ったが、雪は一度も降っていない。大地を覆い隠していた雪を雨が数日間をかけて押し流すと、常緑の生垣と土色だけの寂しい庭園風景が窓の外に広がった。カミーユは久しぶりに再会した大地を見て喜んでいたが、それもほんの一時のことで、すぐに、雪が恋しいと不平を言い出した。カミーユにとって、雪にまみれて皆で遊んだことは、かなり楽しかった記憶として残っているらしい。

今年は冬が明けるのが早そうだ、と農夫たちがこぼしているという。ジェニーはヴィレールの気候に馴染みがないため、彼らのような実感がわかない。暖房に守られた屋内にいると、外の寒さには鈍感だ。チーズ作りやパンを焼くことに縁のなくなった今では、わずかな気温の変化で四苦八苦することもなく、ジェニーは季節の移り変わりを敏感に感じ取れる機会がほとんどなくなっている。

女主人を失くした王城がどんな営みをしているか、ジェニーはあえて気にしないようにしているが、この一ヶ月、王には来客や閣議が多く、普段にもまして忙しかったようだ。だが、王は忙しい時間を縫ってジェニーを訪ね、二人はそれまでと変わらぬ頻度で会っている。

王妃が流布した“先王妃の呪い”によって、次の王妃候補をめぐる争いが国内の貴族間で始まろうとしているようだが、王とジェニーの関係はそれまでと変わりないか、むしろ、良くなっていた。王はジェニーに、春が来たら生まれる予定となっている子馬の一頭を与える、と約束した。王は、ジェニー自らが子馬の世話をするという申し出には色よい返事はしなかったが、管理の行き届いた“王の森”であれば、ジェニー単独でも自由に出かけてよい、と言い、ジェニーを歓喜させた。

だが、その一方で、ユーゴとジェニーの関係は次第に悪化していた。ジェニーはほぼ毎週、近衛に所属するベアール家の者から、ユーゴより預かったという、ベアール本家が数々の家から受領した贈り物の目録を渡されていた。王は他国と縁組する必要がある、とのジェニーの考えを、ユーゴはまるっきり無視しているのだ。

ジェニーが「賄賂を渡すのも受けるのもやめてもらいたい」とユーゴに頼むと、ジェニーを次期王妃にと大臣たちに接近し、口添えを働きかけている彼は、「一族の繁栄に貢献しないつもりか」と強く反発する。そして、かつてジェニーの父親が身元の知らない間者の女と結ばれるために家を捨て、ベアール家に大きな迷惑をかけた件を持ち出し、今度は娘のジェニーがその埋め合わせをする番だ、と熱心に説くのだ。ユーゴはジェニーに一歩も譲ることはなく、二人の溝は深まる一方だった。

カミーユの機嫌がひどく悪く、乳母たちの手をてこずらせていたのは、今にも雨が降り出しそうな、真っ暗な空模様の日の朝だった。毎朝、ジェニーは食事の前に娘の顔を見ることにしているが、ジェニーが子ども室に向かう廊下の途中ですら、カミーユの大きな泣き声は聞こえてきた。

「どうしたの?」

カミーユは乳母の手を振り払おうと暴れていたが、ジェニーの顔を一目見ると、乳母のドレスの裾にもぐりこむようにして母親から身を隠そうとした。

「ね、ママに顔を見せてくれないの?」

ジェニーがカミーユに近づくと、カミーユは遊びの邪魔をされたくないときに必ず見せる、拳をつくった手を突き出して、ジェニーを牽制した。

「困った子ね。どうしたの? 何があったの?」

ジェニーに反抗するように背を向ける、カミーユの小さな体。

世話係の女がジェニーに歩み寄ってきた。

「昨夜は何度もお目覚めになって、よくお眠りになれなかったのです。きっと、こんな天気のせいですわ。小さな子は天候に敏感ですもの」

そういえば、カミーユの不機嫌が長く続くのは雨降りの日であることが多い。

「そうね、今日はこれから天気が崩れそうだわ」

カミーユは乳母のドレスにまとわりつき、ときどきしゃくり上げながら、つたない調子で乳母に何かを訴えている。それを見て、世話係の女は、雨が降る日の朝は王も私どもを困らせたものですよ、と昔を懐かしがって、ジェニーに言った。

「王があんなふうにぐずる姿なんて、とても想像できないわ」

「ええ、今のお姿からはそうでしょう。でも、あんな時期もあって――それはもう愛らしいお子様でした」

ジェニーの前で彼女は目を細め、カミーユを見つめて優しく微笑む。

「本当にどこからどこまでも……王によく似ていらっしゃること。王もきっと、それは自覚なさっておいでですわね。ただ、ご自身の血を分けたお嬢様にどう接すればよいのか、どう声を掛けたらよいのか……王は戸惑われているだけなのでしょう。でもジェニー様？　いつか必ず、それほど遠くない未来に、王はカミーユ様に打ち解けてくださると思いますわ」

王がカミーユは弟ケインの娘だと疑っているとはつゆ知らず、カミーユを抱き上げようともしない王を知っている彼女は、ジェニーを力づけるようにそう話す。

王は今のところ、ジェニーがケインと通じたという過去を誤解だと考える気はないらしい。いや、ジェニーの不貞を信じるというより、ケインが王のものであるジェニーに手を出さないはずがない、と固く信じているようだ。ジェニーは自分とケインの名誉のため、カミーユのために、王の誤解をどうにかして覆したかったが、今の

ところは毎回失敗している。
王とケインの過去を知り、向き合い、誤解を今度こそ正さなければ。
決意もあらたに、ジェニーは真相を知らない世話係の女に笑い、ありがとう、と応えた。彼女は目尻を下げて笑い返し、ジェニーの手を力強く握る。

ジェニーが朝食を済ませた頃、今ではすっかり顔なじみとなったベアール家の一員、ジェニーより数歳年上の男が訪ねてきた。ユーゴと同じような青い瞳を持ち、色は違うが明るい茶色のうねるような髪を持っている。はきはきとしゃべる口調が初々しく、新しい青い制服がまだ板についていない、近衛の新人だ。彼が大事そうに胸に抱いている手紙は、ユーゴが彼に託した、贈り物という名の賄賂が記載されている目録だろう。
「いらないから、そのまま持って帰って」
目録を受け取らなかったからといって、ユーゴが既に受け取った贈り物の存在は消えないが、ジェニーは自分の姿勢を示すため、その若い近衛に強く言った。
「それは私が困ります。どうか、受け取ってください」
「あなたが困ることはないわ。私の気持ちはユーゴ様ももう知ってるのよ。あなたは、私への取次ぎも拒否されたって言えばいいの」
男はジェニーの指示を聞くべきか、判断に迷っているようだった。困惑する彼の様子を見て、ジェニーは、彼にこんな役目をさせるユーゴに腹が立った。
「待って。ユーゴ様には私から断りの手紙を書くわ。申し訳ないけど、それを目録と一緒に彼に渡してもらえる？」
男がほっとしたように顔をゆるませた。
ジェニーが部屋に一度引き上げ、ユーゴ宛の手紙をしたためるま

で、十五分とかからなかったはずだ。ジェニーが手紙を持って階下に下りていくと、使いの男が待つ部屋の前で、召使女が待っていた。

「ジェニー様、つい今しがた、ライアン様がおみえになりましたわ！」

時間は少し早いが、彼が剣の指導に来るのは予定どおりだ。雨が降っていなければ、久しぶりに屋外で練習できる。

「わかったわ。ライアン様は中でお待ちなの？」

「はい」

ジェニーが部屋に入ると、男二人がジェニーに勢いよく振り返った。ライアンは怒ったように硬い表情で、彼の前に立つ近衛の男は、恐怖で凝り固まったような顔をしている。無愛想なライアンが笑顔を浮かべないのはいつもどおりだが、それにしても、彼は不機嫌そうだった。

「お待たせしました」

ジェニーは二人に向けて、なるべく明るい声で言った。ライアンが軽く会釈をした。

「ごめんなさい、ライアン様。手紙を書いていたので、まだ準備をしていなくて――もう少しだけ待ってもらえますか？」

ライアンはジェニーが持つ手紙にちらりと鋭い視線を向けた。

「私が予定より早く来ただけだ。私は適当に時間をつぶすゆえ、仕度をしてくれ」

「はい」

ジェニーが手紙を持って男に近づくと、彼はようやく表情をやわらげた。上官であるライアンと二人きりで部屋にいた時間が、彼にはかなり重荷だったようだ。ライアンはユーゴのように気さくではなく、用事でもない限り、ライアンの方から相手に話しかけることはまれだ。

ジェニーは男の手に、書きあげたばかりのユーゴ宛の手紙を押し付けた。

「この手紙をユーゴ様に持っていって。それも一緒に返してね」

男は目録を見て困惑していたが、ジェニーは手紙を彼の手に落とした。

「あなたは何も気にしなくていいの。必ず渡して」

ジェニーが念を押すように男を見上げたとき、不意に、ジェニーは背後からライアンに呼ばれた。ジェニーが振り返ると、ライアンはそっけない口調でジェニーに尋ねた。

「ジェニー殿、見たところ、そちらのベアール家からの手紙は封が切れていないようだが、内容を確認する必要はないのか？」

ライアンの指が示すのは、ベアール家がどこの家から何をいくつもらったのかが箇条書きで書かれている目録だ。ほかの一切の説明は省かれているため、それが何を意味するのかは一見して分からないだろうが、ライアンやサンジェルマンであれば、大概の予想はつくだろう。政治事情に疎いジェニーではあるが、それを彼らに見られたら、ユーゴの立場が危うくなることぐらいは想像がつく。

「内容はわかってるから、見る必要はないんです」

ライアンはジェニーの返答に満足したようではなく、男の手にある手紙から冷え冷えとした視線をそらさなかった。だがジェニーは、ライアンにそれ以上の説明はせず、そわそわとしてこの場を去りたがっている男に向き直った。

「もう行って。お祖父様にくれぐれもお体をお大事に、って伝えてね。来月のお披露目会には出席するからそのときに会いましょうって、ユーゴ様にもそう伝えて」

ジェニーが微笑みかけると、彼はつられて同じように微笑み返した。が、ジェニーの頭越しにライアンを見たのか、彼は笑みを慌てて振り切って、威厳を保とうとでもするように顎を上げた。

飾り気のまったくない、単純な作りの少年用の乗馬服に着替え、髪をきりりと結う。ただ束ねただけの髪は練習中に揺れて邪魔になるため、きっちりと一つにまとめておく。その結った髪さえなけれ

ば、ジェニーが剣の練習に挑む姿は、大人の身体に変化する前の思春期の少年だ。

ジェニーは、部屋の隅にたてかけられている剣に目をやった。剣は二本ある。

闘技大会の事件で暗殺犯を仕留めた褒美にと、ジェニーは専用の剣を一本もらっていた。鞘は一部金色だが、重くなるので黄金はあまり使われていない。刃は、ジェニーの身長にあわせて通常の大人が使用する剣よりも短く、軽さを出すために細めで薄い。とはいえ、殺傷能力は充分に備えている。

その隣に置かれた剣は、長さはもう一本とほぼ同じだ。鈍い銀色の鞘は地味に見えるが、近くでよく見ると、全体的に精巧な彫りが施されている。柄に近い部分には、ヴィレール人の誰もが一度は見かけたことのある、王家の紋章が刻まれている。それは、ライアン経由で渡された、王が少年時に使っていたという剣だ。ジェニーが別途もらった剣と比べると、ずいぶんと重量がある。

ジェニーは王の剣を初めて見たとき、どことなく見覚えのある気がしたのだが、庶民にすぎないジェニーが一国の王子が所有する剣を見る機会など、あったはずもない。もし彼と過去のどこかで出会っていたなら、男にしては美しすぎる彼の顔をジェニーは忘れはしないだろう。

身支度が全て整うと、ジェニーは部屋を出る前にもう一度だけ、二本の剣を見た。ライアンはジェニーに王の剣をくれたが、本物の剣で指導をつけることはない。ジェニーも本物の剣を使う機会が来ることを、心の底では望んでいない。望んではいないが――。

「まあ、とうとう雨が降ってきてしまいましたわね」

召使女が部屋の窓の外を眺め、残念そうな声を出す。窓の外は濃い灰色に変わっていた。

「これでは外に出られませんわね……。残念ですわ」

ジェニーは二本の剣から目をそむけ、部屋を出た。廊下をたどり、階段にさしかかると、窓にあたる雨音が耳に入ってきた。大降りで

はなさそうだが、風が出てきたらしい。
　自分の足が踏む、下に続く階段を見ていると、ジェニーは闘技大会の日のことを思い出した。会場の熱気、階段状の観客席、ユーゴの陽気な笑い声、黒髪の男が隣の女の肩をなでる手。その同じ手が次の瞬間にジェニーを襲い、ジェニーは、短剣で男に反撃するしかなかった。
　そのときの選択を、今は後悔していない。けれども、いつか再び我が身の危険が迫ったとき、今度は、本物の剣を取らざるをえないのだろう。ジェニーは漠然とそう思っていた。
　王は敵に屈しそうになったジェニーの心を助け起こしてはくれるが、敵から身を救うのはジェニー自身しかいない。その瞬間のために、ジェニーはいつでも剣を手に取れるようにと、二本の剣を部屋の目に見える場所に出しているのだ。

　ジェニーが戻った部屋にライアンはいなかった。ライアンの相手をしてくれているはずだったアリエルの姿もない。
　ライアンは、カミーユのいる子ども室にいた。室内は静かで、扉の脇に立っていたアリエルがジェニーに微笑み、無言でカミーユの寝台の方を指し示した。寝台横にはライアンが立っており、ジェニーに気づくと、気まずそうに目を伏せた。彼の腕の中には、カミーユが彼の肩にしがみつくような体勢でうとうとしている。
　ジェニーが忍び足でアリエルの隣に向かうと、アリエルがジェニーに顔を寄せて囁いた。
「もう少しで眠ってくださいますわ」
　ライアンが世話係の女に頼まれ、体をゆっくりと揺すりだす。その行為が彼の意思ではないとライアンは渋面で主張しつつ、カミーユにときどき向ける眼差しは微笑んでいる。ライアンがカミーユを気にして俯くたび、彼の白く明るい髪も揺れる。
　ライアンがカミーユを抱く光景を見つめていると、ジェニーの胸はきつく締め上げられる。ライアンの姿は、王がカミーユを娘とし

て認め、あやしているように見える。
あれが王で、カミーユをあんなふうに見つめてくれたら、どんなに幸せだろう。
ほどなく、白く柔らかな服に包まれたカミーユの手が、ライアンの腕にぶらりと垂れた。
「……よかった。眠ってくださったようですね」
アリエルの囁きに、ジェニーは我にかえる。
「あの子、昨夜はあまり眠れなかったようだから、少し長いお昼寝になるかもしれないわ」
ジェニーたちの視線の先で、ライアンは規則的に左右に体を揺らしていた。
少しして、ライアンがカミーユを乳母の手に渡した。彼はあくまで事務的な表情を保っているが、この室内にいる全員が、彼がカミーユをとても気に入っているのだと知っている。
ジェニーに振り向いたライアンは、怪訝そうに眉をしかめてみせた。
「顔色がすぐれぬようだが、気分でも悪いのか？」
「いいえ」
ジェニーは、さっき思い出して、今もまだ拭えない血の感触を頭の隅に追いやり、ライアンに答えた。
「それより、どうもありがとう。あの子、今朝は寝不足でずっとぐずっていて、ライアン様のおかげでやっと眠ってくれたんです」
礼には及ばない、とライアンはわざとらしく咳払いをした。頬と鼻がほんのりと赤くなり、それが照れ隠しなのは明らかだ。ライアンが、寝台の中で寝息をたてるカミーユに振り返った。
「あの子は本当に、ライアン様が大好きなのね」
ジェニーが言うと、ライアンは眉を少しひそめ、扉を指さした。
「彼女が起きる。我々はもう外に出よう」
アリエルが少女のような微笑みを手で隠した。つい数週間前にジェニーが聞いた、ライアンは王の小さな娘を自分好みの女性に育て

ようとしている、という不名誉な噂は、彼のこんな言動から生まれたに違いない。

子ども室から一歩外へ出ただけで、外の雨音が聞こえた。玄関かどこかの窓が開放されているらしい。どうやら、小雨から本降りになりつつあるようだ。

「寒くなったようだ」

ライアンがジェニーをちらりと見た。顔色が悪い、と口にするのかと思ったが、ライアンはジェニーを見て、苦笑いをした。

「子どもというのは顔が変わるものだな。貴殿に似てきた」

特に口のあたりはそっくりだ、とライアンは王と同じことを言う。

「娘が私に似てるって言われたことは、あまりないんです」

「王の方に似ている部分が多いのは確かだ。だが、貴殿にも似ている」

それからライアンは廊下の先を見据えた。その先の玄関から、執事が下男に窓を閉めるように指示する声が流れてくる。大きな足音が廊下にも響くと、ライアンが眼差しを鋭く変えた。

「ジェニー殿」

「はい」

ライアンの視線は真正面に向けられたままだ。

「……貴殿は、後宮に入らぬのか？」

「――後宮に？」

ジェニーが足を止めても、ライアンは正面を向いて歩き続ける。

「どうして私が？　ライアン様、後宮は王妃様のために空けておくものでしょう。今は王妃様がいなくても、またいつか、どなたかが住むことになるはずです」

ライアンは顔をしかめ、歩みを止めた。

「前王妃の一件があって、貴族たちはこぞって、次期王妃は国内から輩出すべきだと騒いでいる。恒例の春の宴では、妃候補の若い娘たちが王の前に勢ぞろいすることになるだろう。私の家も然り、と

なれば、王のご寵愛を受ける貴殿をかかえるベアール家も黙ってはいまい。貴殿は、王妃になる気がないのか？」

「でも、王妃とは個人が希望してなれるものですか？」

ジェニーが問うと、ライアンはジェニーを見つめ、小さく首を横に振った。予想どおりの答えに、ジェニーは笑う。

「ライアン様、ベアール家が国内でどんな位置にいるのか、私は残念ながら知りません。でもきっと、ライアン様の家のように、もっと王家に貢献できる家があるんじゃないかと思います。ただ、私は、王妃となるのなら、国内ではなくて国外の、ヴィレールが恩恵を受けられる他国の王女を選ぶべきだと思っているんです。王も同じ考えのはずです。敵国の干渉を最初からはねつけることのできる、力のある国と縁組した方が絶対にいい」

ライアンが何かを言い返そうとして口をつぐみ、アリエルを見た。アリエルは胸の前で祈るように手を組み、ジェニーをじっと見つめている。

「……だが、それではユーゴ殿は納得しまい」

「国の繁栄に繋がる縁組を祝福できないのなら、私は彼に何も言うことはありません」

ライアンはまた黙った。ジェニーの言葉の意味を反芻しているようだ。

「大体、私が王妃となって、この国にどんな利をもたらすんでしょう？」

ジェニーは自分を卑下しているわけではない。単純に、ヴィレールという国にとってのジェニーの価値を考えれば、他国の王女やもっと良家の娘の方が勝っている、と言いたいだけだ。

ジェニーの視線に出合い、ライアンが仏頂面となって、口を開く。

「少なくとも――そうだな、衣装や装飾品代は浮くだろう。遊興費もかからなそうだ。輿入れの持参金は期待できぬとしても、それ以上に財政面の負担が軽減されるだろう」

ライアンがジェニーに好意的な発言をするとは、ジェニーは思っ

てもみなかった。
ジェニーの驚きに気づき、ライアンは小さく肩をすくめる。
「妻の浪費がもとで財政が破綻した家は、いくらでもある。浪費家でないというのは良い条件だ」
ライアンはアリエルを見て、硬い表情をわずかに解いた。
「だが、何物にも代えがたいのは、ジェニー殿が王妃となれば、ヴィレールの王が幸福になれることだ。近頃の王は常に安定していて、常に王らしい自信に満ち溢れている。私が生きてきたこの半生で―王があそこまでお幸せそうなのは、私は今までに見たことがない」
ライアンの思いがけない言葉にジェニーは感動で胸が震えたが、ジェニーの信念までは揺るがない。
ヴィレールを守るために王がとるべき道は、他国との提携だ。
ジェニーがふとアリエルを見ると、ジェニーとライアンから顔をそむけるようにして、アリエルが静かに一筋の涙を流していた。

第二部　7．王の帰郷ー1（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました。
完結は（一応）４月末を予定しています。
それまで体調崩さないように祈っててくださーい。

第二部　7．王の帰郷－2

四月まであと数日と迫った、ある日の夕方のことだ。北の国境の警備隊から、クレマン家の次男によく似た男が国境沿いの街で目撃されたとの知らせが、サンジェルマンに届けられた。闘技大会の会場でユーゴに“クレマン家のマルセル”と名乗った男のことだ。

男は仲間の男二人と連れ立って、“冒険者たち”のたまり場となっている宿屋にいたそうだ。彼らが冒険者かどうかは定かではないが、宿屋の主人の話では、全員が初めて見る顔で、首都ヴィスコンデールに向かうような話をしていたという。

その翌日の朝、サンジェルマンは別の部下の口から、ジェニーの兄ローレンらしき人物がラニス公地の城下町で目撃された、との情報を得た。ローレンを含む総勢四人で旅をしていて、そのうちの二名は雇われた護衛らしい。部下が探ったところでは、彼らは北東の関所から入国し、首都に住む貴族に注文された品を運ぶ途中のようだ。

サンジェルマンは、ジェニーの兄の生存を知って胸をなでおろす前に、仲間割れをしたとみなしていた二人が時をほぼ同じくしてヴィスコンデールを目指していることに、強い警戒心を抱いた。闘技大会のあと、彼らは仲違いをしたと見せかけ、ローレンが仲間から逃亡する形をとって、別々の方向に散ったのだろうか？

今、頃合を見計らって二人が別々に国内に入ったなら、首都のどこかで落ち合うかもしれない。ローレンの運ぶ荷がマキシム産の塩の流通に一役買っている黒幕で、二人の再会する場所である可能性が高い。

彼らがそれぞれ目撃された日から既に何日も過ぎているが、彼らを追跡する者からは、その後の行方をつきとめたという連絡はない。首都に住む一般の民からの通報もない。

闘技場での王の暗殺未遂事件のあと、ライアンが作らせた“偽マ

ルセル”とローレンの人相書きは、首都にある多くの店や宿屋にばらまかれ、彼らの首には賞金がかけられている。

王の暗殺未遂の罪で既に取り潰されたが、クレマン家はライアン家の流れをくむ名家の一つだ。近衛隊副隊長ライアンの父親の従姉妹が現当主の最初の妻で、今は亡き長男の母親だ。

事件に関わったマルセルは当主の三番目となる妻の息子で、粗暴な彼の扱いに困った当主が、修学という名目で十年近く前に彼を外国に放り出したそうだ。マルセルは約一年前に帰国し、そりの合わない父親を嫌って、母親の実家である商家で東方の国との取引を始めたようだ。しかし実際には、彼は働かずに飲み歩いてばかりで、飲み代などの借金が嵩んでいたようだ。彼がローレンと知り合ったのは、ここ一年の間だろう。

複数の証言によると、塩取引を介して、クレマン家の懐は潤っていなかったようだ。むしろ、当主の妻の実家が利益を得ていたらしく、この半年間で、商家の主人が急に羽振りがよくなった、という声も出ている。また、この商家を贔屓にする貴族の家がいくつかあって、そのうちの二つの家が、最近になって金回りがよくなったという噂がある。

ローレンの目指す家はそのどちらかの家ではないか、とライアンは、塩取引をめぐる捜査であらたに判明した情報を説明したうえで、サンジェルマンに言った。

サンジェルマンが部下から得た情報は、ライアンにも同様にもたらされていた。彼も、ローレンたちの仲違いには疑問をもっている。

彼らがヴィレールの首都で何をやるつもりなのか、彼らの行動を注意深く監視していなければなるまい。そのためには、一刻も早く彼らの居場所をつきとめる必要がある。

その点で同意をみたサンジェルマンとライアンだったが、ライア

ンが「もう一つ、気がかりな点がある」と、緊張した面持ちで切り出した。その表情の厳しさを見て、サンジェルマンは同席していた部下を退室させようとしたが、ライアンはそれを遮った。

「その者にも心得ておいてもらいたい」

サンジェルマンの部下はライアンに目礼する。

「貴殿も知っておるだろうが、彼らが街に入る頃にちょうど、ベアール本家で祝賀会が開催される。ユーゴ殿が正式に家督を継ぐこととなって、その披露の場だ。私も招待客の一人だが、ジェニー殿も出席する予定となっている」

その祝賀会にはサンジェルマンも招待されたが、多忙を理由に断った。出席すれば、王の側近サンジェルマンもジェニーを次期王妃候補として認めているのだと、ユーゴに巧みに利用されることだろう。

「そのようですね。ユーゴ殿も、彼の姪であり、次期王妃として有望と言われる彼女をもって、家を盛りたてていきたいはず。彼女を擁立したい者たちが集う場に、彼女の出席は欠かせないでしょうね」

「そうだ、彼女は欠席できぬ。ローレンはこの祝賀会の件をどこかで知り、その機に彼女にひそかに接近しようと首都に入るのではないか？　奴の出現は、偶然にしてはできすぎている」

「ジェニーは兄が追われる身分とは知りません。実は彼女が兄と連絡を取り合っていて、今回の件を知らせていたのでは？」

すると、ライアンがサンジェルマンを不満そうに見返した。

「それはないだろう。彼女は心から兄に会いたがっている。もし兄と連絡が取り合える状況にいれば、兄を心配して沈んだ表情になることもなかろう」

彼女を擁護するようなライアンの意見は、サンジェルマンには意外に感じられた。

「物憂げな表情が演技ということも考えられますよ」

女ですからね、とサンジェルマンが続けると、ライアンが不愉快そうに頬を強張らせた。

「彼女はそのときの気分がそのまま顔に出る。彼女の作る表情に嘘はない」

そしてライアンは、女ではあるが、とサンジェルマンに突きつけるように言った。

彼のその言動から、サンジェルマンは、彼がついにジェニーを受け入れたのだ、と痛感した。曲がったことの嫌いなライアンのことだ、ジェニーに懐柔されたのではないだろう。もとより、ジェニーは誰かを懐柔できるような器用さは持ち合わせていない。ライアンの指摘したとおり、ジェニーは心で思ったことが正直に顔に出る人間だ。演技など、もともと出来ないのだ。

心の奥深くではずっと分かっていたことに、サンジェルマンはあらためて対峙する。

「今後、ローレンからジェニー殿に連絡が来ることもあろう。彼女のもとに届けられる品や手紙には逐一、目を光らせておこう」

ライアンの言葉に、サンジェルマンも部下も異論はない。

「ええ。アリエルにもよく頼んでおきましょう」

「侍女のアリエルか？　彼女はジェニー殿の味方だ。今回のように兄妹の再会を阻む件で、協力を得られるのか？」

「もちろんです。彼女は信頼できますよ」

アリエルの信用を疑われ、サンジェルマンの声に力がこもる。

「彼女はジェニーの侍女とはいえ、本来は王のために仕えているのです。心配りのできる、頭のいい女性です。王に恩義もありますし、我々にとっても心強い味方ですよ。彼女は期待に応えるだけの働きをしてくれるはずです」

サンジェルマンは、そう言い切ったところで部下の男と目が合った。彼の瞳は何も語らず、視線はさりげなく下に移ったが、サンジェルマンは些細なことにむきになった自分を恥じた。だが、サンジェルマンらしからぬ熱弁に、ライアンはそれほど不思議に思わなかったようだ。

「貴殿がそこまで申すのであれば、では、それについては貴殿に一

任しよう」
「はい」
その後、ライアンと事務的な話を少しして、サンジェルマンと彼は別れた。

＊　＊

ジェニーがユーゴ宛に書いた手紙に効力があったのか、それ以降、祝賀会の招待状以外、彼からの連絡はぱったりと途絶えた。アリエルは王城でユーゴと二回会ったそうだが、その両日ともに、彼は小城まで足を伸ばしていない。彼は、彼の計画に非協力的なジェニーに腹を立てているのだろう。

月が変わり、日没が遅くなりつつあった。先月下旬には雪が数回舞ったが、ジェニーが今見上げる空は淡い水色で、ゆっくりと漂う柔らかそうな白い雲一つとっても、雪を降らせそうな要素はない。

カミーユの昼寝の時間に入った頃、ジェニーはラニス公の遣いである男の訪問を知らされた。ラニス公から荷物が届いているという。

遣いの男が「ラニス公の贈り物」と長方形の箱を紹介したとき、ジェニーはベアール家に贈られた数々の贈り物と重ね合わせ、身構えずにはいられなかった。だが、ラニス公の身分を考え、すぐに思い直す。王の従兄弟であるラニス公が、ジェニーに取り入ることはないだろう。

ジェニーの手でも抱えられる箱を開けてみると、ジェニーがモーリスの家で好んで使用した、何度聞いても名前を覚えられない花の香水の匂いが、室内に広がった。農園の使用人が作っていた香水で、売り物ではない。その懐かしい香水の大瓶に加え、生成りの厚手のおくるみが三枚、カミーユが初めて着た白い絹の服、カミーユがお守りのように握って放さなかった木彫りの人形が箱の中に詰まって

いた。それは全て、ジェニーがモーリスの家に残してきた、大事な思い出の品だ。

「ラニス公より、お手紙を預かっております」

ジェニーが品物を順番に見て手を止めていると、遣いの男が言った。ジェニーは男に渡された手紙を素早く開き、最初の文章を見て、息を詰まらせた。

ジェニーへ

きみがいつか私のもとでこれらの品を眺めることを夢見ていたが、

そのような状況はもはやなさそうなので、きみに返そうと思う。

ジェニーは手紙の文字から目を離し、涙で曇った目で隣にいるアリエルを見た。ラニス公の落胆ぶりが痛いほどに伝わってきた。ラニス公のもとにも、ジェニーが次期王妃候補として取り沙汰されている現状が伝わっているのだ。

ジェニーは思い出の品と再び会えたことが嬉しく、彼の心遣いに感謝したが、とても手放しで喜べる気分にはなれなかった。ジェニーと王は何も変わらないのに、周りだけが勝手に騒いでいる。

「あとでゆっくりお読みになったらいかがです？」

アリエルがジェニーの震える手に彼女の手を添え、開いたばかりの手紙を巻き戻した。それから、ジェニーを励ますように微笑む。

そうね、とジェニーは彼女に頷き、手紙を箱の中に入れた。

次の日から数日間外出する予定で、ジェニーは朝から忙しかった。いよいよ、ユーゴがベアール家の家督を継ぐ日を迎えるのだ。彼との関係が悪化しているとはいえ、彼はジェニーの数少ない親類だ。ジェニーはこれを機に、彼との関係を改善したいと考えていた。

その日の午前中、数週間ぶりに女官長が小城にやって来た。ところが、来客を常に歓迎するカミーユなのに、その日に限って、かつてないほどに機嫌が悪い。女官長が彼女を抱き上げようとしたところ、彼女は大声で泣いて、女官長の手から逃げたそうだ。乳母が外遊びに誘っても、新しい玩具で機嫌をとろうとしても、カミーユの機嫌はなおらない。

ジェニーがどうにか時間を作り、子ども部屋にようやく寄ったときだ。

「……ママー！」

手にあったボールを放り出して、カミーユがジェニーに駆け寄ってきた。

「カミーユ、いい子にしてた？」

ジェニーにたどり着くと、カミーユは片手でジェニーのドレスを掴み、もう片方の手を精一杯に上に伸ばして、床の上でぴょんぴょんと跳ねる。ジェニーが笑いながらその体を抱き上げると、カミーユが首にしがみついてきた。大人より体温の高いカミーユの肌がジェニーの首に触れ、ジェニーは娘が心から愛しく思える。

「マーマー」

ジェニーはカミーユの背を軽くたたき、尋ねた。

「今日はいつもより甘えん坊なのね。どうしたの？」

カミーユは頬をジェニーの首にすりつけて、母親を逃さないようにとジェニーの首にしがみつき、ジェニーの胸まわりに両足をからめようとする。

「ジェニー様が明日から外出されることに勘付いておいでなのですよ。だから、落ち着かれないのでしょう」

乳母が近寄ったことに気づき、カミーユは彼女に向かって手を突き出した。カミーユなりの警告のつもりだ。ジェニーはカミーユの体にまわした手に力をこめ、空気に揺れる彼女の髪に唇をつけた。

「カミーユ、ママは少しだけいなくなるけど、すぐにここに帰ってくるわよ」

すると、カミーユは疑いを含んだ目でジェニーを見上げる。その目の細め方はゴーティス王を思い出させる。カミーユはいつのまにか、王のそんな仕草まで模倣するようになっている。

「ねえ、ママと一緒に外にお散歩に行く？」

今朝の日は弱いが、空気は冷たくない。明日から、数日間とはいえカミーユを置いていくことを思えば、ジェニーはなるべく長い時間を彼女と過ごしたかった。

カミーユは唸り、ジェニーの首に頭をつけた。「ママ、行くー」

予想していたことだが、カミーユはジェニーの腕からちっとも降りる気はないらしい。

アリエルは明日の外出の準備に戻り、ジェニーとカミーユには、女官長と乳母、世話係の女が同行した。太陽は薄い雲の向こうに隠れていたが、外はやはり寒くなかった。庭園は庭師たちが整備している途中で、掘り返された土の湿った匂いが空中に漂っている。外が大好きなはずのカミーユだったが、まだすねているのか、ジェニーの手から降りようとしない。

ジェニーが建物に面する生垣の前に立つと、風向きのせいか、馬の蹄の音が風にのって聞こえてきた。音の大きさからして、馬がいる場所は小城に近い。それに興味を示したらしく、カミーユが顔を上げた。

そのとき、裏口から走り出てきた女が声を張り上げ、ジェニーを呼んだ。

「ジェニー様、王がお見えでございます！」

馬に乗っていたのは、彼だったのだ。

女の後ろにある裏口をジェニーが見ていると、王が二人の男とともに現れた。王は、ゆったりとした白い上衣に黒っぽい色の腰帯を締め、薄茶色の布地に包まれた脛の半分まで届く、茶色い靴を履いている。

王はジェニーに向かって直進してきたが、女官長たち三人の女が

並ぶ前まで来ると、足取りをゆるめた。王の視線はカミーユに注がれている。カミーユも、王を見ている。

「この春初めての乗馬ね」

ジェニーが言うと、王はカミーユから注意をそらした。

「そうだ。おまえも乗りたいかと思うたが――」と、王はカミーユを再び見て、唇を結ぶ。

カミーユは一言の言葉も発さず、放心したように王を見ていた。王に特に変わった点は見られないが、カミーユの目を釘付けにする何かがあるらしい。

ジェニーから王に近づくと、カミーユがジェニーの肩をぎゅっと掴んだ。王の足が止まる。

「……そやつ、蝉のようにおまえにしがみついておるぞ」

「ひどいわね」ジェニーは笑いを堪えながら言う。「この子、明日から私がいなくなるのを察して、不安になってるみたいなの。だから、こんなにべったり」

「そのわりには嬉しそうな顔ではないか」

ジェニーはカミーユの頭に唇を押し付けて、王に笑った。

「娘に甘えられて、嬉しいのは当たり前じゃない」

王は釈然としない表情だった。彼はジェニーの頭に手を伸ばしかけ、カミーユが体勢を変えようと動くと、その手を空中でぴたりと止める。

「ゴーティス王？」

「……俺だとて、おまえが数日間でも城を留守とするのは……面白くはない」

王の伸ばした手の下にジェニーは動き、苛立ちの混じった彼の瞳を見上げた。ジェニーの不在を寂しがってくれるのは嬉しいが、彼のそんな顔は見たくない。

「私もあなたに会えないのは寂しいわ」

王の手がジェニーの頭に触れ、ジェニーは満足する。ジェニーが

ベアール本家に滞在するのは四日間だけだが、出発する前に王の顔が見られてよかった。
　王の手の心地よさにジェニーが目をつぶると、彼が口惜しそうに低く呻いた。
「おのれ……」
　ジェニーが目を開くと、王が敵意のこもった目でカミーユを見つめていた。カミーユは、今はもう王に背を向け、ジェニーの肩にもたれて、のんきにあくびをしている。
「どうかしたの、ゴーティス王？」
　王はジェニーの問いかけなど耳に入らないかのように、低い声で言った。
「この娘、俺の場所を占有しおって……。もう十分であろう。そこをどけ」
　ジェニーは王の放った言葉に唖然とした。
（娘のカミーユに嫉妬してる？）
「そこをどけ、カロリーヌ」
　カミーユは二つの名のどちらを呼ばれても振り向く。だが、王の声に振り向いたものの、カミーユはすぐにまたジェニーの首にかじりついた。
「……イヤ」
　王が怒りに顔を歪め、カミーユの小さな肩を掴んで怒鳴りつけた。
「そこをどかぬか！　おまえが生まれるずっと前から、そこは俺のものだ！」
　ジェニーの驚きより、王の背後にひかえていた女官長や近衛たちの驚きの方がはるかに大きかっただろう。カミーユは王の大声に驚いたようだが、泣きはしなかった。大きな瞳を見開いて、口も同じように大きく開けて、王を見つめている。
　ジェニーの瞳と合い、王は正気に戻ったようだ。王は怒りの表情をすぐには消せず、下唇を噛む。そして、カミーユの肩にかけていた手を戻して、両手で目を覆った。

手で覆われていない頬に赤らみが広がり、彼が恥ずかしがっているらしい、とジェニーにも分かった。ときに尊大で、ときにふてぶてしい彼なのに、こんなに可愛い一面を持っているなんて、反則だ。

ジェニーはカミーユを腕に抱きながら、王に近づいて、彼の二の腕に口付けた。王は顔から手を浮かせたが、完全に手を取り去りはしない。

「ねえ、知ってた？　あなたはいつも私の胸の中にいるのよ」

王が唇を細く開き、長い息を吐く。

「私がどれだけあなたを大事に思ってるか、想像できないでしょう？　私はあなたが大好きなの。だから、私の胸の中に住むあなたは、どこにも行きはしない」

王の手が、彼の視線とともにジェニーに静かに降りてくる。

「おまえこそ、俺がどれほどおまえを愛しておるか、分かってはおらぬ。現実の俺もどこにも行きはせぬ。それゆえ、おまえも――どこにも行くな」

王はカミーユの存在にひるんだが、ジェニーは彼女を胸に抱いたまま、王の唇を求めて手を伸ばした。彼はカミーユの存在を気にしながらも、ジェニーの唇の位置を探す。二人の体に挟まれたカミーユは、ジェニーの予想を裏切って身動き一つせず、二人が口付けを交わす間、ずっと黙っていた。

「私はどこにも行かないわ」

ジェニーが王の鼻先で囁くと、王は目を閉じ、嬉しそうに微笑んだ。カミーユが、ジェニーの胸の中で動き出す。

「……カミーユ、“オオ”に抱っこしてもらう？」

すると、王は片目を開き、非難するようにジェニーを睨んだ。

だが、王の腕はジェニーの背にまわる。彼はジェニーの体ごと、カミーユを抱き締めた。

第二部　7．王の帰郷ー3

ジェニーが次の王妃になっても構わない。

女官長の呟きをサンジェルマンが聞いたのは、ジェニーがベアール家に出発する日の朝、王の執務室から出た直後だ。

女官長の口からジェニーへの非難が聞かれなくなり、それから間もなく、王妃が悪夢のような事件を起こして王城を追放された。それ以降、女官長がいつそう言い出すのだろうと、サンジェルマンはこの瞬間を指折り数えて待っていたぐらいだ。驚くことはない。

その日の女官長は、サンジェルマンが最初に会った時点から、やけに言葉少なだった。彼女が王の娘に会った次の日の朝は、サンジェルマンが耳を塞ぎたくなるほどに彼女はしゃべりっぱなしなのに、今朝はそれがない。

彼女が無口だと物事が早く進んで都合がいいのだが、なんとなく、調子が狂う。女官長の異変を気にしていたのは、侍従長も同じだったようだ。

「具合でも悪いのか？」

女官長は長年の友でもある侍従長を見ると、恋に悩む少女のように瞳を翳らせ、吐息をもらした。

「エレーヌが泣いていたのです」

その名前を知らないサンジェルマンに、王の娘の世話をしている、王の乳母だった女性だと侍従長が教えてくれた。

「幼少時の王が元気で明るかったこと、覚えておられます？　王がカロリーヌ様にうまく打ち解けられないのは、王の不遇な少年期に原因があると、彼女はずっと気に掛けておりましたわ。でも、王がここにきてやっと、カロリーヌ様を御自らの手でお抱きになったのです。カロリーヌ様が伸ばした手を拒まれなかったのは、これが初めてのことですわ。親子三人が並ぶ姿を見て、エレーヌは、それはもう喜んで……！

ねえ侍従長、王は先王と同様、もともとは愛情深いお方ですわね？　その本来の王がようやく帰ってきた、と彼女は感動し、涙しておりましたわ。そして、そのお姿に帰してくれたのは……ジェニーをおいて、他にないではありませんか」

女官長が涙ぐむのを見て、侍従長が肩を優しくたたいた。王が生まれる前から王城に勤め、王の幼少期を知る彼らには、それは感慨深いものなのだろう。

サンジェルマンにとっても、王が誰かを心の底より愛し、その相手からも同じように愛されることは、ずっと切望してきたことだ。だが、王が個人的に幸せだから彼が治める国も幸せになるという、安易な幸福の図式は成り立たない。

次の王妃選びに、女官長のように感傷から生まれた意見を反映させるわけにはいかない。

“先王妃の呪い”などという、根拠のない噂が国内の貴族間に蔓延している。保守的な一部の層からは、他国の王女を妃として受け入れることに抵抗感が出ている。それにかこつけ、貴族たちは自分たちの娘を次期王妃にさせようと、早くもあちこちでしのぎを削っている。

また、ベアール家を中心とした、ジェニー擁立の動きも見逃せない。次期王妃候補に担ぎ出されているジェニーだが、彼女の兄ローレンが反逆者とみなされていることが公になれば、彼女が実際に王妃になるのは難しいだろう。彼の暗躍は、ユーゴにさえ知らされていない。

王は次期王妃候補をめぐる争いをほぼ把握しているが、貴族間の対立が激化しないかぎり、あくまで静観する気でいるようだ。もっとも、王は、次の妃も他国から娶る考えを変えていない。前王妃を決めた際に検討期間が短かったことを反省し、今度はもっと慎重に、もっと長い時間をかけて決める、と王は宣言している。

ジェニーはというと、王の意思に倣い、次期王妃は国外から選ぶ

べきとの考えを表明しているそうだ。そのせいで、本家のユーゴとは確執が生じている、とサンジェルマンは聞く。ユーゴは彼女を足がかりに一族の地位を上げたいのに、頼みの綱の彼女がそんな姿勢では、彼が腹を立てるのも無理はない。

今日の午後、次期王妃をめぐって、ユーゴとはいわば正反対の意見を持つジェニーが、彼や彼の仲間たちの前に姿を現す。ライアンが彼女と同じ馬車に乗り、同行する予定だ。サンジェルマンの義兄も祝賀会に参加を決めている。彼らから、会場での様子をあとでじっくりと聞かねばなるまい。

執務室から女官長室に向かう。

そこで、サンジェルマンはアリエルと会うのだ。ジェニーのベアール家出発を前に、彼女にはいろいろと頼んでおくことがある。

西館に入る手前で、サンジェルマンは追いかけてくる足音に気づき、振り向いた。二十歳前後の近衛の若者だ。ライアンがときどき、彼に伝言を託してくる。

「ライアン様より緊急の伝言がございます」

案の定、男はサンジェルマンにそう告げた。ジェニーが出発する日の朝だ、緊急用件と聞けば、いやでも緊張させられる。

「今朝早くに、“マルセル”の身柄が拘束されました。仲間はなく一人で、街の外れにある宿屋を出たところを第八部隊所属の者が捕獲しました！」

彼が女官長の存在を気にしたため、サンジェルマンは彼と廊下の反対側に移動する。

「ほかに何かあるのか？」

「は。ローレンが、街の北部に現れました。こちらは四人で、彼らは途中で荷を捨て、今もまだ街の中に潜んでいると思われます。我々は彼らが街の外に出られぬよう、街の全域に警備を敷いて、追跡しているところです。それゆえ、本日、ライアン様はジェニー様に

同行いたしません。代わりの近衛を同行させるとのことです。郊外にある家々――ベアール家も安全かと思われますが、くれぐれも注意を怠らぬよう、他の同行者にもお伝えいただくようにとのことでした」

ほっとして肩の荷が降りたような、それでいて落胆したような気分だ。数ヶ月間も追っていた彼らを捕らえるときは、こんなにもあっけないものだろうか？

彼らに翻弄された過去を思い、サンジェルマンはなんとなく腑に落ちないものを感じる。だが、“マルセル”の確認に向かったライアンが王城に戻れば、サンジェルマンの混沌とした気持ちも晴れてくれるのだろう。

きっと、遅かれ早かれ、ローレンも近衛たちの手に落ちる。

ローレンがまだ荷を持っていたのなら、偽マルセルとは再会を果たしていなかったのだろう。彼らが運んでいた荷の受け取り主は、いまだ謎のままだ。国内にマキシム産の塩を流通させた真の反逆者を、ローレンの口から必ず吐かせなければならない。

サンジェルマンは男をさがらせ、心配そうに自分を見る女官長に微笑んだ。

いったい、反逆者は誰なのか。

ローレンに口を割らせるため、王は、ジェニーに兄との辛い再会を強いることになるのかもしれない。

それは、ジェニーたちを乗せた馬車が王城を出発し、数時間経った頃だった。執務室の前にいるサンジェルマンとランス公のもとに、一人の衛兵が大きな体を左右に揺らし、廊下を駆けてきた。

ランス公には、偽マルセルとローレンの件を話したばかりだ。とうとう、ローレンが捕らえられたのだろう。

サンジェルマンは男からの報告を期待し、姿勢を正した。

「サンジェルマン様！」

男が発した言葉で廊下がたわむかと思うほど、彼の声は大きかった。

「ライアン殿の遣いが来たか？」

「ライアン様の？　いえ、ジェニー様に同行した近衛からです！　大変でございます、サンジェルマン様！　一行がベアール家に向かう途中、何者かの集団に襲われ、ジェニー様が乗る馬車ごと拉致されました！」

ゆるやかに流れていた時間が、何の前触れもなく、サンジェルマンの前で急停止する。

「何だって？」

「ジェニー様だと知ったうえでの誘拐です！　かろうじて王城に戻った近衛一人のほかに、護衛も御者も生存者はなく……」

そのとき、ランス公の後ろにあった執務室の扉がきしみ、細く開いた。執務室前を守る近衛兵たちの頭が動き、ランス公が喉をつまらせて咳をする。

扉の内側からのぞいた王の視線は、知らせを持ってきた男を経由して、サンジェルマンにたどり着いた。

「騒がしいぞ。“ジェニー”と聞こえたが、何ごとだ？」

サンジェルマンは、めずらしく言葉に詰まった。

王が揺ぎない自信をもって、「あの女はどこにも行かぬ」と呟いていた言葉が、サンジェルマンの心に突き刺さる。

――それより数時間前のこと。

ジェニーが王城を出発する時間になっても、カミーユは駄々をこねなかった。昨日の朝以降、カミーユはずっとご機嫌だ。母親に十分に甘え、お気に入りのライアンの顔を拝めたせいもあるだろう。

でも、ずっと疎遠ではあるが気になって仕方がなかった王に、昨日、

ほんの五分だったが抱き上げてもらったことが大きいとジェニーは信じている。

ジェニーを玄関で見送るカミーユの表情は、余裕にあふれている。ジェニーがカミーユの額に長くキスをすると、彼女は「大げさだ」とでも言うように、ジェニーの顔を手で押し戻した。

「ママは行ってくるから、いい子にしててね」

「……オォ、来る？」

カミーユが王を気に入っていると分かってジェニーも嬉しいが、娘としばし別れる寂しさを抑えて旅立つ今、彼女には母への愛を前面に押し出して欲しかった。でも、それではカミーユに嫉妬した王と変わらない。ジェニーは自分の勝手な思いに笑った。

「そうね、“パパ”は来るかもしれないわね」

「パパ？」

首を傾げるカミーユの額に、ジェニーはもう一回キスをする。

「“オオ”のことよ。オオはあなたのパパなの」

カミーユは腕組みをし、今度はさっきよりも深く首を傾げる。

ジェニーがカミーユに王のことをそう教えたのは、今日が初めてだ。もっと早くにこの単語を聞かせておけばよかったと、ジェニーはちょっと後悔する。

「ジェニーはあなたのママでしょう？　オオは、あなたのパパなのよ」

ジェニーが自分の胸に手を当てて言うと、カミーユの目が輝いた。

「パパー！」

カミーユが言葉の意味を理解したかどうかはさておき、その音の響きを彼女は気に入ったらしい。ジェニーの手を振りきり、カミーユは「パパ」と何回も口ずさみながら、乳母の周りを回りだす。

ジェニーにだって、王が本当の意味でカミーユを娘だと認めたのではないのだと分かっている。でも、これまで、頑としてカミーユに触れようとしなかった彼を思えば、昨日の出来事は大きな前進だ。

ジェニーは、即興で“パパの歌”を作って歌うカミーユを見つめ、

淡い期待を抱く。

もしかしたら、ジェニーが小城を留守にする間、王はカミーユを訪ねてくれるかもしれない。

ジェニーが見上げる空には雲が多かったが、雨が降りそうではない。空気には春の緑の匂いが充満している。

ベアール家までの道のりは平坦で、雑然とした街に入ることもない。ジェニーを待ち受けるユーゴや彼の追従者たちと顔を会わせるのは、ジェニーも憂鬱だ。だが、ベアール家に行けば、優しい祖父に会える。

ジェニーとアリエルは馬車に乗り込んだ。急用ができてライアンは祝賀会を欠席するとかで、以前、ユーゴからの目録を毎週持ってきていた、同じベアール家の近衛の男が代わりに同乗する。

小城を空けるのはたった四日間だ。

同じ王城の敷地内にいても、それと同じ期間、王と顔を会わせないことは何度もある。それなのに、王城を離れるというだけで、ジェニーは彼と永遠に離れてしまいそうな気がしていた。

王城からベアール家に向かう最初の曲がり角までは、緩やかな下り坂がしばらく続く。すれ違う馬車や荷車もなく、遠くで聞こえる牛や山羊の鳴き声が、閉ざされて見えない戸外ののどかな風景を想像させる。ベアール家に到着するまでに、まだ一時間はかかるだろう。

やがて、次第に、和やかに続いていた車内の会話は途絶えていった。近衛の男があくびをかみ殺すと、それがジェニーにも伝染する。春の陽気は眠気を誘うのだ。馬の闊歩する音に合わせた絶妙な間隔で、馬車が規則的に揺れる。まどろみ始めたジェニーの視界が、途切れがちになる。

ジェニーが次に目覚めたのは、誰かに強く手を握られたからだ。

「早く逃げろ！」

外でせっぱ詰まった男の怒鳴り声がして、ジェニーが状況を把握できないうちに、馬車が急発進した。馬車は前方に一度大きく揺れ、傾いたジェニーの体を隣から伸びた腕が支える。

「ジェニー様！」

ジェニーは、自分を支え、激しい揺れに自らも必死に耐えているアリエルを見た。

「アリエル、いったいどうしたの！」

「私にもよく分かりません！　後続の荷車が襲われたようです、貴族の馬車を狙う盗賊の一団かもしれません……！」

荷車に載せていた品はジェニーの衣装や装飾品ばかりだ。カミーユに雪の城を造ってくれた、荷車を扱う御者の命が助かるなら、その全部を盗られてもジェニーに悔いはない。

馬車は全速力で走っていた。車輪が地面にぶつかりながら、今にも壊れそうな音をたてている。車体が揺さぶられ、ジェニーは席から滑り落ちるのを防ぐだけで精一杯だ。

馬車と平行して駆ける複数の馬は、護衛の近衛兵なのか、追っ手なのか。

小さな四角い箱に閉じ込められたジェニーたちは、音だけを頼りに、最悪な事態に怯えて口をつぐむ。

ジェニーはふと、がたがたとひっきりなしに揺れ続ける馬車の扉に目をやった。

（もし追っ手に馬車を止められて、車内に押し入られたら？）

ジェニーは今さらながら、自室に備えておいた剣を持ってこなかったことを、深く後悔した。馬車の中には、近衛の彼が腰に下げる剣一本しか武器がない。相手側が何人いるか知らないが、近衛の彼がもし倒されたら、ジェニーたちには、ほかに対抗する手がない。

ジェニーは馬車が速度を落としてくれる瞬間をひたすら待っていたが、御者が狂ったように馬に打ち続ける鞭の音は、まだ鳴り止まない。それはつまり、ジェニーたちがまだ追われていることに他ならない。

馬車は走り続け、激しい揺れはしばらく続いた。向かう方向はおろか、時間の感覚さえ鈍くなっている。極度の緊張感を経て、近衛の男やアリエルも憔悴しきった顔をしている。

やがて、馬車はその速度を落とし始めた。

馬車がようやく止まった頃、男の力強い声が外からジェニーを呼んだ。たぶん、護衛である近衛の誰かだ。

「ジェニー様、お怪我はありませんか！」

ジェニーは安堵して、アリエルと手を取り合い、笑った。

「私たちは大丈夫よ！　何があったの？　ほかの皆は平気で――」

いきなり、ジェニーの前に明るい日差しが現れた。車内にいた近衛の男がジェニーの前を阻む前に、ジェニーは、扉を開いた黒髪の男の唇が大きく横に開き、赤い舌がちらつくのを見た。

「それはよかった」

「何者だ！　断りもせずに扉を開くとはなんたる無礼な！　こちらのお方を誰だと心得る！」

男が小さく舌打ちした。

「うるさいな。誰だか知ってるからここまで連れてきたんだよ。おまえこそ、状況が分からないくせに一人で騒ぐなよ。そのご立派な剣もさっさとしまえ。ここには、おまえたちの味方はだーれもいないんだ」

男の姿がさっと消えると、近衛の男が息を飲んだ。ジェニーの席からも、彼の体の向こうに三人の頭が垣間見える。

「あ……ジェニー様、五人、いえ、あの男を含めて六人おります……！」

近衛の彼が無念そうにもらす口調で、ジェニーは、王城から同行していた護衛たちはおそらく殺されたのだろう、と虚しい思いで悟った。

またもや、恐怖と緊張の暗い影が忍び寄ってくる。殺しに慣れた彼らに、丸腰の女二人と近衛一人では相手にもならない。

黒髪の男が高笑いし、再びジェニーの視界に戻ってきた。
「その女を傷つけやしないよ、心配しなくていい。ちょっとだけ俺たちに付き合ってもらいたいだけさ。用が済めば家にすぐ帰してやるよ」
アリエルに引き止められたが、ジェニーは外の男に言った。
「二人に危害を加えないと約束するなら協力するわ。私は何をすればいいの？」
男が笑った。
「さすが王の女だ、物分かりがいい」
男が車内を覗き込もうとし、ジェニーは近衛の男をその場から退かせた。
「あなた、あのときの……！」
男は意味深に笑い、馬車の入口に足を乗せると、ジェニーの手を素早く取った。武骨な彼の手に触られると、ジェニーは不快で寒気がした。ジェニーが彼の唇を拒もうとして手を抜き去ろうとすると、すかさず、彼の手にぐっと力が入る。
前回と同じだ。男は微笑みをたたえながら、つぶらな瞳を閉じて、ジェニーの手の甲に唇を柔らかく付ける。ジェニーはぞっとして、彼から目をそむけた。
「覚えていただいてたとは光栄だね。そう、“マルセル”だよ」
「マルセルなら、私が、私がこの手で死なせたわ！」
「そっちが偽者なんだ。はは、でも、俺の偽者は何人もいるらしいね」
ジェニーがやっとの思いで彼の手を振り切ると、彼は呆れたように肩をすくめる。
「俺にそんな態度とって、いいと思うのか？」
「……ローリーをどうしたの？　彼はまだ、生きてる？」
不可解そうにジェニーを見つめていた彼の、下向きだった唇がにやりと笑う。
「ああ、誰のことかと思ったら、ロハンのことか。そうか、彼の話

は嘘じゃなかったんだな。はは、彼なら元気に生きてるよ。会いたい？」

ローリーが生きているならジェニーはもちろん会いたい。だが、「ローリーが生きている」という言葉も彼と会わせてくれるという言葉も、この男の場合、どちらも信用ならない。

ジェニーが沈黙すると、男の目が冷たく変わった。

第二部　7．王の帰郷－４（前書き）

今回の話は長いです。
二回に分けようとも思いましたが、続いているお話ですし、目次が長くなるのも見にくいので、一回にしました。
休み休み読んでくださいね～。

第二部　7．王の帰郷ー4

ベアール家と近衛隊が必死になってジェニーの捜索を行っているが、行方はまだ掴めていない。ジェニーが襲撃に遭った頃、ヴィスコンデールに入る道は近衛隊によって全てが封鎖されていたため、彼女を拉致した集団は街を避け、郊外にまわったとみられる。

ジェニーの馬車に同乗した近衛の男は、馬車に足を轢かれ、骨を砕かれる大怪我をして道に倒れていたところを農夫に発見された。男が意識を失う前、襲撃した一団には六人の男がいたと証言したそうだ。一団の主は“マルセル”の名を語る男で、ジェニーはその男を見て咆驚していたという。

今朝早くにヴィスコンデールで捕らえられた“マルセル”は、ゴーティスたちの捜し求めていた男ではなかったのだ。人違いだった。本物は捜索の網をかい潜り、今、ジェニーとともにいる。

闘技場での事件に引き続き、彼らは誰かの命令に基づき、動いている。

誰だ？　なぜ今、ジェニーを連れ去るのだろう？

ジェニーの命と引き換えに、ゴーティスに何か――例えば、莫大な身代金を要求するつもりなのか。ヴィレール王ゴーティスの命が望みなのか。

それとも、ジェニーの命そのものを奪うことが目的なのか。

ゴーティスを憎むあまり、その憎悪が彼女に向けられたのだろうか？　今であれば、ジェニーが王妃候補として名を連ねるのをよしとしない貴族の誰かが、強硬手段に出たという場合もある。

けれども、どんな理由があったにしろ、ジェニーを拉致するのは卑劣で卑怯だ。正々堂々とゴーティスに対峙すればいい。

行き場のない怒りに体が蝕まれ、どうにもできない現状に、何もできない自分に、ゴーティスは地団駄を踏む。

早く時が経って、ジェニー発見の知らせを手にしたい。そう思うと、時間はあまりに遅々として進まない。だが、その知らせはゴーティスが待ち望んでいるものだとも限らない。こうしている間にも、ジェニーが死に瀕していることもありえる。そう思うと、少しでも時間が遅々と過ぎ、彼女が死から逃れられるようにと、ゴーティスは願わずにいられない。

常に自らの死が身近だと感じているゴーティスにとって、ジェニーの死を想像する方がはるかに難しく、ずっと恐ろしい。自分が死ぬことを怖いとも感じないのに、ジェニーの死は、こんなにも自分を怯えさせる。

ヴィスコンデールの街がある方角を眺めると、ゴーティスの心は急に、恐怖にすくむ。

何の手がかりも得られないうちに夜の帳（とばり）が落ちた。小城でゴーティスに会う者たちは、全員が言葉少なく、沈痛な面持ちだ。気のせいか、屋内の照明さえいつもより暗い。

ゴーティスは階段をゆっくりと上がり、ジェニーの寝室に入った。空気の流れが止まり、静まりかえっている。最近になってこの小城に加わった匂い、可憐な花の香りがかすかに残っている。

ジェニーのいないときにゴーティスがこの部屋に入るのは、彼女を小城にあげるのを待っていた期間、彼女に見せるための庭をひとりで眺めたとき以来だ。今と同じ季節だった。あれから、早一年が過ぎようとしている。

部屋の中央に置かれた寝台に腰掛け、ゴーティスは室内をぐるりと見回した。丸テーブルの位置も二脚の椅子の向きも、ゴーティスの目が覚えているとおりだ。壁を飾る横長の風景画、金の鏡、箪笥の上にある香水の瓶の並べ方も、何も変わってはいない。

普段と変わりない室内の様子を確認すると、ゴーティスはほっと

安堵する。実際には何の説得力もないが、ジェニーの部屋に何の異常も見られないのなら、主人の彼女もまた無事だと思えるのだ。

だが、彼女の部屋の片隅には、二本の剣がそっくり残っていた。ライアンの見立てによれば、ジェニーは力で男と競り合うことは無理でも、剣をうまくかわし、反撃できる程度の腕はあるそうだ。六人の敵に囲まれていても、剣の一本があるだけで、心強さはまったく違っただろうのに。

近衛に周りを固められ、ジェニーは少し油断したのだろう。いや、ジェニーだけではなく、彼女の周囲もゴーティスも、ベアール家までの比較的安全な道のりについ油断をしたのだ。迂闊だった。

ゴーティスは、以前は自らに属した剣の鞘に指でそっと触れた。十四の年、ゴーティスが初めて人を殺めた剣だ。ジェニーはまだ実際に使ったことはないだろう。その隣にある、ベアール家の家紋が入った剣も。

じわじわと胸に迫りくる焦りを何とか抑え、ゴーティスは剣から手を引いた。そしてそのとき、ゴーティスは気づいた。剣の隣に据えられた箪笥のいちばん下の引き出しが、わずかに開いている。

普段なら興味も引かれないだろうが、ゴーティスは迷わずそこに手を伸ばした。手紙らしき巻物が二つ、置き去りにされたように、がらんとした引き出しの中に入っていた。

「……手紙？」

両方とも上等な、同じ材質の紙だ。破かれた封印の家紋はもう確認できないが、おそらく、フィリップからだ。

他の男からの可能性を完全に否定しきれず、ゴーティスは手前にあった手紙を取り出し、それを開いた。現れた文字は、ゴーティスが見知ったものだ。やはり、フィリップだ。

ところが、ゴーティスがほっとしたのも束の間、その手紙には、もう一通の手紙が巻き込まれていた。

ゴーティスは数秒間、フィリップの手紙に隠されていたその手紙を見つめた。漠然とした不安とジェニーへの疑惑がじわりと胸に湧

く。

しかし、その手紙自体には何も書かれていなかった。

そこに包み込まれていた第二の手紙が登場すると、ゴーティスの胸を侵す不安が胸騒ぎに移り変わる。

『女神エクリシフェに共に誓った同士、ジェニーへ』

ゴーティスは、皆の知らないケインという男を知っている。ケインは、周囲にいる者全てが彼の味方であり、好かれていると思いたい男だ。愛されない状況が想像すらできない。受け入れられない。だから、彼は天真爛漫に、無意識に、相手に彼自身を愛するように強要する。

過去の女たちはことごとく、ケインの無邪気な魅力に屈した。気骨のあるジェニーまでがケインに屈したのはゴーティスには許しがたい事だったが、ゴーティスは、ジェニーよりケインがどこまでも許せなかった。

ジェニーは過去に何度もゴーティスを説得しようとした。ジェニーはケインと逃亡を果たしたが、彼とはただの一度も男女の関係になったことはない、と。

最初にジェニーの娘に会ったサンジェルマン、女官長、王城の誰もが、“王にそっくりな”ジェニーの娘の出生に疑いを抱かなかった。皆の認識とは違うが、ゴーティスも娘の出生を疑いもしなかった。ゴーティスは自分の想いだけを頼り、自分こそが正しいのだと、皆の思い込みを心の中で疎んじた。

――たぶん、王によく似ているんだろう。ああ、でも、モーリスは子どもの父親が王だとは――。

ケインの書いた文だ。手紙を見て、怒りと嫉妬に心を奪われた瞬

間から、わずか一分足らずで、ゴーティスはその文章を見つけた。
ケインのそっけない文章からは、娘への愛情の片鱗など、微塵も感じられない。それはつまり、彼が、ジェニーの娘は自分の血を分けていないと確信しているからだ。
その下に続く文面には、ジェニーに対するケインの気持ちが綴られていたが、ゴーティスは、二人の間柄を心配することはなかった。ゴーティスの愛したジェニーは、ケインに惑わされような女ではない。
（……俺は何を怖がり、何から目を背けたかったのだろう？）
兄弟の確執の間で、ジェニーはゴーティスの偏った思いから娘の存在を拒否され、どんなに辛かったことだろう。
ゴーティスは手紙を強く握りしめ、顔を上げた。
ジェニーに会いたい。
誤解が解け、後悔の念でいっぱいのゴーティスが今すぐ会いたいのはジェニーなのに、彼女はどうしてここにいない？
ジェニーをゴーティスの前から奪ったのは、彼の頑なな心だろうか。彼女の訴えを拒否し続けた報いだろうか。
ゴーティスはジェニーの顔が見たかった。
だが、どうして、ゴーティスがこんなに強く願っても、ジェニーはゴーティスの腕の中に現れないのだろう？
「早う戻ってこぬか！　どこにも行かぬと俺に約束したであろう……！」
ゴーティスは手紙を床にたたきつけた。
彼女の耳にはもはや――ゴーティスの謝罪さえ、届かないのだろうか？

夜の子ども部屋は静かだったが、カミーユはまだ眠っていなかった。彼女が就寝中であることをゴーティスは期待していたのだが、部屋に踏み込んでおいて今さら、後戻りもできない。

ジェニーの留守中に顔を出したゴーティスに、乳母も世話係の女も驚愕していた。たまたま居合わせた召使の女も驚いていた。乳母の膝に寝転んでいたカミーユだけが、ゴーティスを見つけても驚きもせず、間延びした声を出した。

「オオ……オオオオ？」

カミーユは目をこすりながら、ふらついた足取りでゴーティスに向かってくる。長い服の裾を踏みそうな、不安定な歩みだ。

彼女の朝日のような髪はゴーティスと同じだ。瞳の緑色の濃さも同じ。

ゴーティスは少し躊躇したものの、カミーユに向かってまっすぐに歩き始める。

カミーユは、ゴーティスと面する一歩手前で立ち止まった。それから、ジェニーと同じ形の口を広げ、大きなあくびをする。

ゴーティスはカミーユを見ながら膝を折り、彼女の前にしゃがみこむ。彼女の目線はゴーティスのそれより下だ。ゴーティスが床に膝をついてもなお、彼女は小さかった。

「カロリーヌ」

名前を呼ばれると、彼女は口を開けたまま、眠そうな目をゴーティスに向ける。

彼女に見られると、ゴーティスは先王から容赦ない視線を浴びているような気になり、落ちつかないことが多かった。だが今、彼女の目を見つめても、ゴーティスはそんな気分には陥らない。

鏡を見ているようだ。ゴーティスがのぞきこむ瞳は、先王からゴーティスが受け継ぎ、ゴーティスから娘へと受け継がれたもの。

「カロリーヌ……いや、おまえの名はカミーユであったか」

「ウン」

カミーユが得意そうに眉を上げ、ゴーティスは吹き出した。子どもに威圧的なゴーティスを前にしながら、ふてぶてしいまでに平然としていられるのは、この娘ぐらいだ。ゴーティスはこの厚顔さを母親譲りだとみなしているが、おそらくジェニーは父親の血だと主

張して、二人は喧嘩となるだろう。
「オォ、ママはー？」
だが、カミーユの無邪気な問いが、ゴーティスを幸福な幻想から現実に引きずり降ろした。
「……まだだ。おまえの母親はまだ出かけておる」
カミーユが思い切り不満そうに鼻にしわを寄せた。だが、ゴーティスにしても、彼女の不本意な不在にはまったく納得していない。
「カミーユ、おまえの母親に会いたいか？」
「ウン！」
カミーユがゴーティスの膝につかまり、大喜びでその場で何度か跳ねた。彼女のくったくのない笑顔を見ると、余計に、ジェニーの無事を願う気持ちがゴーティスの中で膨らんでくる。
「そうか。だが、もう少し辛抱しろ。……この父も、おまえの母の帰りを待っておるのだ」
召使の女が手で顔を覆うのを、ゴーティスは視界の隅にみとめた。
「ウーン？　チチー？」
カミーユが眉間にしわを作り、腕組みをしてゴーティスを見上げた。
「ああ、父だ」
乳母たちの視線が集まるのを意識しながら、ゴーティスはカミーユの目をのぞきこむ。
「おまえの母親がジェニーで、父はこの王だ」
カミーユの顔がぱっと嬉しさに輝く。
「パパー！」
「……パパだと？」
面食らうゴーティスに追い討ちをかけるように、カミーユがゴーティスの腕に飛び込んでくる。カミーユの軽く柔らかな髪がゴーティスの顔に触れ、両手がゴーティスの胸元を掴む。
歌詞の一部に“パパ”と組み込んで歌うカミーユの声が、ゴーティスの耳の中で弾けて、飛んだ。彼女の声に導かれ、遠い昔に閉じ

込めた記憶が、ゴーティスの頭の中にそよ風のように広がる。彼女の腕の優しさを、ゴーティスの両手が覚えている。

『あなたはパパにそっくりよ』

ゴーティスが知っている声よりずっと落ちついた、楽しそうな口調。

『あなたは世界一かわいい息子よ。愛してるわ、ゴーティス』

「パパー？」

カミーユの声はゴーティスを癒し、その耳にすんなりと溶けていく。

ゴーティスは手に触れるカミーユを、今は亡き母を想って抱きすくめた。その体温を肌で受け入れると、ゴーティスは、母親が自分をあやしながら子どものようにはしゃぐ笑い声を思い出す。ゴーティスは、あの母親に愛されていた。

（俺はあの場所へ帰ることができるだろうか。母の愛を疑いもしなかった、あの頃の俺に）

カミーユがゴーティスの髪をいじり始め、ゴーティスはそれをやんわりと遮る。カミーユは不満そうだったが、逆にゴーティスが彼女の髪に触れると、猫のように喉を鳴らして目を閉じた。頭を撫でられ、心地よさに目をつぶるジェニーと同じ反応だ。

「……エレーヌ、俺の髪はこんなにも柔らかだったか？」

名を呼ばれた世話係の女が、言葉を詰まらせながら答えた。

「ええ……王がカミーユ様と同じ年の頃はとても……絹のように柔らかだったと覚えております」

ゴーティスがカミーユの瞳を見つめると、彼女は母親ジェニーと同じように、真っ向からゴーティスを見つめ返す。

「母親がおらぬと寂しいか？」

カミーユは“寂しい”という言葉が理解できなかったらしい。小さく首を傾げた。

「愚問だったな。俺が寂しいのだ、幼いおまえはもっと寂しかろう」
ゴーティスはカミーユを抱き上げた。
「パパー、ママどこ？」
「そうよな、カミーユ。父は、おまえの母を取り戻さねばなるまい」
カミーユが首を傾げ、ゴーティスは渋々、言い直した。
「……わかった、パパだ。おまえのパパは、母を必ず取り戻す」

＊　＊

光沢のある紺色のカーテンの隙間から、明るい光がこぼれ落ちている。ジェニーとアリエルがまんじりともできないうちに、長い、長い、一夜が明けたのだ。
室内には見張りとして二人の女がいたが、大柄な金髪の女の方が窓に歩み寄り、カーテンをめくり上げた。部屋には眩さが広がり、夜の暗さに目が慣れていたジェニーは目を細める。
ジェニーたちが、隠し持っていた短剣を取り上げられ監禁されたのは、しばらくの間は人の住んでいない、貴族の別荘らしき館だ。館の玄関口、暖炉に彫られていたらしい家紋は見事にえぐり取られ、所有者は不明だ。ジェニーもアリエルも、館の周囲は一切目にしていない。耳をすませて聞こえるのは、風が吹きつける音と廊下を時おり行き交う靴音だけだ。
ジェニーたちのいる部屋には、別の場所から運びこまれたらしい粗末なテーブルと長椅子があるだけだ。だが、かつてこの館に住んだ人々は、それなりに身分がある人たちだったのだろう。部屋の造りは贅沢だ。重厚な扉には金箔が剥がされた跡があり、アーチ型の天井を埋め尽くすように、古代の神々が戦う場景が色鮮やかに描かれている。
ジェニーたちがこの一室に押し込まれてから、ゆうに半日は経っ

ている。ジェニーはもちろん、一行の誰一人としてベアール家にたどり着いていないだろう。馬車に同乗していた近衛は“マルセル”が車外に突き落とし、ジェニーたちの重みがかかる車輪に轢かれ、絶叫していた。ジェニーの紛糾を“マルセル”は「事故だ」と笑い、相手にもしなかった。

そんな乱暴な彼ではあるが、ジェニーとアリエルの扱いは思った以上に丁寧だ。二人に危害は加えず、むやみに体に触れることもない。食事も水も十分な量が用意された。ただ、二人を部屋から一歩も外に出させないだけだ。

「おはよう、ジェニー」

“マルセル”の笑顔は、ジェニーのぐったりした体に、反抗心という気力を湧かせる。

彼はジェニーを見て苦笑し、テーブルの上に手をつけられずに残っている食事を見て、これ見よがしにため息をついた。

「なんだ、せっかく美味いものを用意させたのに食べてないのか。俺が、大切なあんたが口にするものに毒でも仕込むと思ったのか？」

「あなたからの施しは受けないわ」

彼は水の入った杯を持ち上げ、ジェニーを鋭く一瞥する。それから、水を一口だけ口に含むと、残りの水を食事の上にぶちまけた。

「まあ、いいさ。俺の腹が減るわけじゃなし」

彼は見張りの女に食事の皿を託し、ジェニーに振り返って笑った。

「それより、あんたにお願いがあるんだ」

ついにきた。

ここにいればいい、と告げられ何の説明もされないまま、不安にもがいて一夜が過ぎた。今やっと、彼らに監禁された理由が分かる。

ジェニーは隣のアリエルの手を軽く握った。“マルセル”が底意地の悪そうな笑みを浮かべる。

「その服、脱げよ」

アリエルがジェニーの手を押さえ、椅子から立ち上がった。

「そういったことであれば、この私が服を脱ぎます！」
「あんたは引っ込んでろ。誤解するな、俺はその女の服が欲しいんだ。宝石が縫いこまれた、金になりそうな服がな。その中にある、王の手垢がついた体なんか要らないね」
アリエルの真っ赤な顔を見ながら、彼は肩を揺らして笑う。
「ジェニー様、早く脱げよ」
彼はなおも笑いながら、ジェニーに迫る。
「……わかったわ」
「ジェニー様、お止めくださいませ！」
服を脱ぐ間も男が居座るだろうことは、ジェニーは承知のうえだ。だがジェニーは、自分が彼を怯えていると思われたくなかった。
ジェニーは服を脱いだ。男は興味深そうにジェニーを眺めていたが、男の目が好色そうに変わることは最後までなかった。
「いい度胸だ。あんたは女だけど、気に入った」
男はジェニーが差し出したドレスを奪い取ると、意気揚々として部屋を去っていった。

館に来て二日目、一日の時間はさらに長く感じられた。食事も睡眠も満足にとらず、ジェニーとアリエルは疲弊していた。疲れて口数が減り、視線を交わし合うことでお互いをなんとか励ましあった。
“マルセル”は昼前に部屋に来て、ジェニーが昨夜あてがわれた粗末な衣装をまとっているのを見て、満足げに笑った。彼は夕方にも部屋に訪れ、ジェニーたち二人が長椅子にもたれて座っているのを、薄笑いを浮かべて眺めていた。
その二度の訪問の際、ジェニーは彼に、自分を拘束した目的を尋ねた。何が望み？　私たちはいつまでここに監禁されるのだろう？
「俺はあるものを待ってるんだ。あんたを傷つける気はない。あんたは黙って、ここで好きに過ごしてればいいだけさ」
彼はきっと、ベアール家かゴーティス王に、ジェニーの身代金、

または、捕らえられた仲間の釈放を求めているのだ。
二度目の夜が近づくのを感じ、ジェニーはカーテンが閉めきられた窓を見た。ユーゴもゴーティス王も、今頃はジェニーをやっきになって探しているだろう。
部屋に凶器となりえそうな物はない。見張りの女たちは、男に見劣りしないほど、隆々とした筋肉を持っている。ジェニーやアリエルが素手でまともに向かったとしても、勝ち目はなさそうだ。
どこか、何か、逃げ道がないものか――。
ジェニーは焦り、考えた。何もしないまま、ゴーティス王に何も伝えられないまま、むなしい夜がまた来てしまう。

異変があったのは、三日目の午後のことだ。
死んだように静かだった館の一階で、豪快な笑い声に続き、はやしたてる男たちの声がした。夜の飲み屋で、酔った男たちが大声で笑い、しゃべっているような騒ぎだ。
ほどなく、興奮して何かを叫びながら、“マルセル”が廊下を駆けてきた。
『やった！　ついに手に入れたぞ！』
扉を開け、彼が発した第一声は、これまで彼が話していた言語ではない。だが、驚くべきことに、ジェニーが理解できる外国語だった。
『何もかも俺の計画どおりだ、こんなに早く手に入るなんて、おまえたち、信じられるか？　ああ、レオポルド様がどんなにお喜びか……！　あれさえ手に入れば、こんな場所にもう用はない。さあ、来いよ！』
望みの金か仲間の身柄を手に入れ、彼は気がゆるんだのだろう。発音には訛りがなく、それは彼の母国語に違いなかった。ユートリア語だ。
「……聞いたことのない言葉ですわね……」

アリエルの言葉を聞きとったらしく、“マルセル”が不敵に笑った。その反応を見て、ジェニーは咄嗟に彼女への返答を変える。
「ええ、そうね」

見張りの女たちを“用事”と称して外に誘い出し、“マルセル”はジェニーの前から姿を消した。廊下には見張りの男が立っている、と彼は念を押したが、ジェニーは信じなかった。彼らは館を立ち去るつもりなのだ。

一時間と経たないうちに、階下の騒ぎは嘘のように静まった。これまでのように、それまで以上に、全ての物音が静かな館に飲みこまれている。音が存在するとしたら、ジェニーの胸が打つ鼓動だ。
「行きましょう」
ジェニーが扉に手をかけると、アリエルが慌てて止めた。
「ジェニー様、外には見張りが――」
廊下には、まったくひと気がなかった。
「これはいったい……どういうことでしょう？」
戸惑うアリエルの手を引き、ジェニーは廊下に出た。足に今ひとつ力が入らなかったが、ともかく、足を前に動かすしかない。
「さっき、あの男が“ここにはもう用はない”って言ってたの。何か欲しかった物を手に入れて、ここを出て行ったのよ」
「まあ……！　あの言葉を理解していたのですか、ジェニー様？」
「ええ。でも、あの場では理解できない振りをした方がいいと思ったの。あれは、ユートリアの言葉よ」
ユートリア語圏は広い。政治的には崩壊している広大な北方の国ユートリア、その周辺に位置するいくつかの地域。もとは国土の一部で、塩の権利を独占したがった貴族が建てた、マキシム王国も含まれる。“マルセル”はそのどこかから来たのだろう。
でも――彼のことは、今はどうでもいい。

見渡す限りの丘陵に、王城への道しるべはない。
でも、天はジェニーの味方だ。沈んでいく太陽を追って二つの丘を越えると、川面の光がジェニーの前方に現れた。王城の近くを流れるシエヌ河の支流だ。
王城へ。
ゴーティス王のもとへ。
ジェニーとアリエルは土手沿いにひたすら歩いた。日が暮れて足元が見えなくなっても、二人の歩みは止まらない。
ジェニーは早く帰りたかった。空腹も、足の痛みも、ジェニーの想いには打ち勝てない。
ジェニーのいないこの三日間、王は死ぬほど心配していただろう。なぜ剣を持っていかなかった、と怒鳴られるかもしれない。危機感が足りない、と怒られるかもしれない。
でも、怒られても、怒鳴られても、構わない。ゴーティス王の顔を見られるのなら、それで構わない。
夜が深く濃くなり、ジェニーは我慢していた涙をようやく流した。緊張がほどけた安堵感と、王にまた会えるという安心感からだ。
涙は、塩辛かった。

ジェニーとアリエルを乗せた荷馬車が王城の西門に着いたのは、夜明けをわずかに過ぎた頃だ。西門の門番たちはジェニーの顔を知らないが、アリエルとは面識がある。アリエルが門番に何かをしゃべったあとは、怒号が乱れ飛び、騒然となった。
「ジェニー様、すぐに手当てをして差し上げますからね」
朦朧とするジェニーの意識の中でも、歩き過ぎて腫れた足が熱を持っているのが分かる。でも、ジェニーを気遣うアリエルの足だって、同じような状態だ。王城に荷を納入する業者に拾われたのは、本当に幸運だった。

「私、ひどい顔じゃない？」
「いいえ。いつもより少し勇敢に見えるだけですわ」
アリエルが笑い、荷台に寝るジェニーの髪を手で梳いた。ありがとう、とジェニーが言うと、アリエルはまた笑った。
「……まあ？　サンジェルマン様がお見えになりましたわ」
荷馬車は止まり、ジェニーはアリエルの手を借りて半身を起こした。サンジェルマンの後ろに、ゴーティス王の姿を期待する。
「アリエル！」
サンジェルマンの顔が、アリエルを確認して一気にゆるむ。だが、彼の後ろには誰もいなかった。
「アリエル！　ジェニー！　二人とも無事だったか！」
満面の笑顔でサンジェルマンは荷馬車の脇に駆けつけ、アリエル、ジェニーの顔を見て、二人の背後に視線をめぐらす。宙をさ迷った彼の視線は戸惑いに変わり、ジェニーに向けられた。
「……ジェニー、王はどこだ？」
「えっ？」
サンジェルマンが不審そうに顔をくもらせる。
「王は昨日ひそかに城を抜け出し、おまえを救出に向かった。おまえがここにいるのなら、王が一緒なのだろう？　王はどこにおられる？」
サンジェルマンが不安そうにアリエルを見る。
「サンジェルマン様、ジェニー様と私は、昨日までずっと監禁されていたのです。二人だけでした。王とは……ああ、王とは、城を出て以来、一度もお会いしておりません……！」

春先の肌寒い風が、ジェニーの肩を撫でるように吹き抜ける。昨日の午後に耳にした、ユートリアの言葉。
『やった！　ついに手に入れたぞ！』
彼らが待ち望み、手に入れたものとは何だったのだろう？

いやだ、想像したくもない。

でも、彼らがジェニーと引き換えに手に入れたものは、もしかすると――。

第二部　7．王の帰郷ー5

迂闊だった。

本当に、迂闊だった。

まさか、ジェニーを救うために王自らが動こうとは――。

ジェニーの捜索から一時的に引き上げ、城に戻ったサンジェルマンを待っていたものは、王が城から消えたという、信じられない知らせだった。王城は上を下にの大騒ぎだった。

王がサンジェルマンに宛てた書置きには、「三日で戻るので王の不在を大々的に知らせないように」という指示と、「三日経っても戻れないときは連絡を入れる」という短い文がつづられていた。王の向かった場所も、それをほのめかす内容も、何もない。

王が「三日」と断言しているのは、彼が王城を出立する時点で、ジェニーの居場所を把握していたということだ。だが、その頃はちょうど、貴族の町屋敷から別荘まで、捜索隊は彼女がいそうな場所をしらみつぶしに当たっていたときだ。サンジェルマン以下誰一人として、ジェニーの居場所を突き止めてはいなかった。それに、王城にいる人間も、ジェニーの身柄と引き換えに何かを要求するような連絡は一切受けていなかった。にも関わらず、王はどこからか彼女の情報を知りえていたことになる。

ただでさえジェニーの誘拐で揺れていた城中は、帰城したサンジェルマンを離そうとはしなかった。サンジェルマンはすぐにでも王の行方を追いたかったが、混乱を鎮め、皆の落ち着きを取り戻すには、王城に留まるほかなかった。

ジェニーの誘拐は綿密な計画の上に実行されたものだ。

ジェニーたちの証言をもとに、二人が監禁されていた郊外の館を割り出し、捜索した。六年前に没落した、とある貴族の別荘だ。

だが、館はもぬけの殻だった。ごく最近、暖炉で火を使った形跡があり、人の出入りがあったことは確かだが、手がかりになりそうなものは探し出せなかった。いや、首謀者である“マルセル”が、手がかりを残すようなへまをしなかったのだ。

ジェニーの出発に先立って、“マルセル”の偽者を確保させ、皆の気を逸らせたのも、計画の一部だろう。そうなると、近衛が今も追うローレンにしても、本物かどうかは疑わしい。

“マルセル”とはいったい、どこの……何者だろう？

彼はユートリア語を話し、“レオポルド”という男の命を受けているようだ。彼がユートリア語を話すとなれば、それを母国語とするマキシム、塩の国に、疑いはますます結びつく。

（王、どこにおられる……？）

ジェニーは、彼女の代わりに王が彼らの手中に落ちた、と思っている。ジェニーの置かれていた状況を聞けば、彼女が王を誘き寄せる生餌として利用され、王は彼らに捕らえられた、と考えてもつじつまは合う。

けれども、何の物証も目撃情報もない今、王が彼らに拘束されたとみるのは、まだ早すぎる。ジェニーを救出しに行った王は、単に彼女と行き違いになった可能性も十分にあるのだ。

サンジェルマンが顔を上げると、向かいに立つ近衛隊隊長と視線が合った。張りのない肌、目の下にあるたるみに、影のようなくまが目立つ。

「今日一日だ」

合言葉のように交わされる言葉が、サンジェルマンのはやる心を抑えとどめる。

あと一日。

今日一日だけ、王の帰りを待ってみよう。

サンジェルマンたちが決めた、待機時間はそろそろ終わりを告げようとしていた。ジェニーが拉致されたときの状況を知る、唯一の生存者が数時間前に亡くなり、各方面に散っている捜索隊からの報告も途切れた。

状況は膠着していた。一室にこもっている者たちに疲れが目立ち始め、交代で短い休憩を取り出した頃だ。

「――誰だって？」

門番からの伝令を持ってきた衛兵に、サンジェルマンは質問を繰り返した。

「おまえが言うローレンとは、あのローレンのことか？」

「はい、ユーゴ・ベアール様によく似た男です。庶民の男が彼を捕まえたとかで、正門前に連れて来ております。彼を見たことのある者が、ローレン本人だと証言しました」

それが事実なら、ローレンは彼を死にもの狂いで追う近衛隊たちの裏をかき、大胆にも王城まで現れたことになる。

近衛隊は何をしていたのだろう？　ジェニーをむざむざと奪われ、王が城を抜け出すのを許し、お尋ね者であるローレンまでも逃したとは。

サンジェルマンは近衛隊への怒りを抑え、衛兵に言った。

「わかった。ローレンを城に入れ、彼を捕らえた男には十分な褒美をもたせて帰してやれ」

「は。ですが、その庶民の男、サンジェルマン様に直接お会いしたいと言うのですが……」

「私に？　こんなときに私が一庶民に会えるような時間はない。追い返せ」

サンジェルマンが語気を荒げると、衛兵が背筋を伸ばし、敬礼した。

「私どもも何度もそう言ったのですが、自分は王の古い知り合いだ

からサンジェルマン様もお会いしたいはずだ、と言ってきかないのです。サンジェルマン様に直接お会いできるまで門の前からどかないと、正門前に座りこんでおります」

「そんな男は放っておけばいい。庶民に王の知り合いがいると思うか？　褒美の額をつり上げたいだけだ、おまえたちはローレンを男から引き離せ」

「ははっ」

まったく、馬鹿げている。王城に暮らし、庶民の生活など垣間見たこともない王に、庶民の知り合いがいるはずもないのに。

引き上げる衛兵の背を見つめ、サンジェルマンは、ジェニーの帰城を知っていたかのように、この時期にローレンが出現した意味を考えた。ローレンを連れてきた男は、庶民という身分のくせに、国の頂点にいる王と知り合いだと語る。

王は庶民と知り合う機会すら、ないのに――。

「……待て！」

衛兵が部屋を去る直前、サンジェルマンはすんでのところで彼を引き止めた。

（いや、一人だけいる……！）

「はい？」

衛兵が振り返る動作に、サンジェルマンの記憶の断片が重なる。先王の葬列を見送る群集の中、驚愕してゴーティス王を見つめる大柄な男だ。

「ローレンを連れてきた男はどんな男だ？　三十代前半で、背が高く、大きな男か？」

「は……はい、図体のでかい男です。髪は茶色く、“アドレー”と名乗っておりましたが……？」

サンジェルマンは大きく頷いた。

王が十三の年、今回のように皆の目を盗み、たった一度だけ王城を抜け出したことがある。そのとき、首都の街で王の面倒をみてくれた男だ。王は男への感謝の印として、その数年後、ずっと行方が

知れなかった彼の妻の妹を捜し当てている。

ひと目見て、サンジェルマンはその男がアドレーだと分かった。

「ローリー！」

サンジェルマンがその場に呼んだジェニーが、衛兵の間に挟まれた若い男に向かって駆け出した。ライアンから聞いたのとは違う、濃い茶色の髪をした、ユーゴに似た男。衛兵たちは、ジェニーと彼女の兄の間を阻もうとしたが、サンジェルマンはそれを制した。

「ジェニー、おまえ……？　おまえ、生きていたのか……？」

ローレンにはかなりの動揺が見え、ジェニーに体に飛びつかれると、うろたえて声を漏らした。

「生きてるわ！　ちゃんと生きてる！　ローリーこそ！　もう死んでしまったんじゃないかって、ずっと、ずっと心配してたのよ！」

ジェニーに肩を揺さぶられると、ローレンは目を閉じ、がっくりとうな垂れた。

「……ああ……」

「ローリー、会いたかった……！」

ジェニーがローレンの首にしがみつくと、彼は後ろで縛られた手をもどかしそうに動かし、天井に向かって長い息を吐いた。それから彼は小さな嗚咽をもらし、涙をぽろりとこぼして、顔をジェニーの髪にうずめた。

「……生きてたか。そうか、おまえ、生きていてくれたのか……」

水を打ったように部屋は沈黙し、ジェニーとローレン以外、誰も動こうとはしなかった。二人を見つめるアリエルの瞳には、大きな涙の粒が盛り上がっている。ローレンの後ろで、アドレーが満足げに笑いながらジェニーに抱きしめられた彼を見下ろしていた。感動的な、兄妹の再会の場面だ。

だが、サンジェルマンは二人の作り出す雰囲気に飲まれはしなかった。ジェニーのためによかったとは思うが、ローレンはあくまで、ヴィレールにとっての危険因子。

王が行方不明の今、彼が王城に現れたのはただの偶然だろうか？

サンジェルマンが抱擁する兄妹からアドレーに視線を移すと、人のいい笑顔を浮かべて二人を見ていた彼が、サンジェルマンの視線に気づいた。一見、強面な男だが瞳が優しく穏やかだ。よく日に焼けた、角ばった顔に、肩まで伸びた茶髪がまとわりついている。二メートル近い長身で、鍛えられた衛兵たちより一回り大きな体躯だ。顎から伸びた首は顔とほぼ同じ幅で、腕は女の腿ぐらいありそうだった。

「あんたが王の側近のサンジェルマン様？」

男はにっこりと笑った。人好きのする笑顔だ。サンジェルマンが笑い返すと、彼はさらに大きく笑った。

「俺は“シヴィル”の友人アドレーだ。ほんとはシヴィルに先に会いたかったが、そう頼んでもここの連中は俺を通しちゃくれないと思って、あんたの名前を出した。あんたは俺を知らないかもしれんが……やっとあんたに会えて嬉しいよ」

アドレーがサンジェルマンに向かって足を踏み出すと、衛兵たちが剣に一斉に手を伸ばした。

「止めないか。この方は王の恩人だ」

サンジェルマンは衛兵たちを遠ざけ、アドレーに近寄っていく。彼の前に立ち、敬意を表して胸に手をあてると、アドレーは目を丸くしてサンジェルマンを見つめた。

「貴殿のことは王から何度も聞いている。一度、貴殿には実際に会ってみたいと思っていた」

「いや、貴殿なんて……おいおい？　そんな、貴族さんが俺に頭を下げるなんて、やめてくれって！」

アドレーはほとほと困った様子で言うと、助けを求めるように辺りを見回した。ジェニーとローレンが彼を見ているのに気づくと、アドレーはとたんに白い歯を見せ、豪快に笑ってみせた。

「ははっ、あんた、よかったなあ！　ほんとに“王のジェニー”が

あんたの妹だとはなあ……。会えてよかったな！」
「……ああ。ありがとう……」
ローレンが弱々しい笑顔を見せ、ジェニーをちらりと窺うように見た。

「知り合いなのか？」
二人の間に交わされた会話をサンジェルマンが不審に思っていると、アドレーは首を横に振った。
「サンジェルマン様、つまり、こういうことだ。王に会いたい俺と誘拐された妹の身を心配したそいつの、利害が一致したんだ。城に行ったところで、庶民の俺は門前払い、そいつは妹の事情を知る前に首をちょん切られるかもしれんだろ？　まあ、俺はあんたに会えればあとは何とかなると思ったから、お尋ね者のそいつを捕獲したって言えば面会できると思ってな。で、そいつにしてみても、王の側近であるあんたに会えれば、有無を言わさず殺されることもないと俺は思ったんだ」
「のんきだな。彼の話を疑いはしなかったのか？」
「殺されるかもしれんのに、一人で王城に出向くなんてのは、本当に妹が心配じゃなきゃできない芸当だろ」
それに、あんたは話の分かる奴だとシヴィルは言ってた、とアドレーはサンジェルマンににっこりと笑う。それから、ジェニーの方を見たアドレーの表情から、笑みがすっぽりと抜け落ちた。
「ローリーが殺されるって……どういうこと？」
ジェニーは自分の放った言葉さえ信じられないと言うように、呆然として首をゆっくりと左右に振る。
「彼がどうして、こんな扱いを受けるの？　ねえ、ローリーが何をしたって言うの？」
ジェニーはローレンの手首に巻かれた縄の結び目をほどこうとしていた。だが、それは特殊な結び方がされていて、簡単には解けないようになっている。

結び目と奮闘するジェニーが次第に焦っていく様子を眺めながら、サンジェルマンは彼らに歩み寄った。
「私の質問に答えたら、彼を自由にしてやってもいい」
「ローリーがこんな扱いをされる理由はないわ！」
サンジェルマンが見つめたローレンは、彼を全身で拒否していた。ジェニーと同じ瞳が怒り、サンジェルマンをその場に留まらせる。もう一歩でも彼に近づけば、彼は野犬のようにサンジェルマンに噛みつきそうな勢いだ。
「……おまえたちに教えることなんか、何もない」
ローレンの瞳は本気だ。サンジェルマンが初めてジェニーに出会ったときのように、全てをはねつけようとする意志が透けて見える。
サンジェルマンは扉の近くに控えていたアリエルを呼び寄せた。
「彼女の役目は終わった。もう連れて帰ってくれ」
「おい、せっかく再会できたってのに、そりゃああんまりなんじゃ……」
ジェニーが青ざめ、叫んだ。
「いやよ、行かないわ！」
「ジェニー、この男は闘技場で王の暗殺を企てたのかもしれないのだぞ！」
「俺は関わってない！」
サンジェルマンが振り返ると、ローレンが気まずそうに視線をそらした。
「関わっていないって？」
サンジェルマンの問いに彼は無言を貫いた。だが、
「本当ね、ローリー……？」
ジェニーが確かめると、彼は口惜しそうに唇を震わせた。
「あの王を殺してやりたい気持ちはあるが、でも、関わってない。本当だ。俺は闘技場での計画だって知らなかったんだ。奴らがおまえまで狙うなんて……」
サンジェルマンがローレンの前に立つと、彼は眉をひそめ、唇を

閉じた。
「ジェニーを誘拐したのはそのときと同じ連中だ」
ジェニーが頷くのを見て、ローレンが口を開く。
「事件を最初に聞いたとき、そう思ったよ。それから、ジェニーの捜索が難航してると知って、見当はずれの場所を探してるんだと思ったんだ。俺が単独で動いたんじゃ時間がかかるし、時間がかかればかかるほど、ジェニーの身は危ない。だから、城に来ようと思ったんだが――」
「彼女は自力で脱出した」
「自力で脱出なんかできるのか？」
ローレンは驚愕し、気が抜けたように笑った。
「事実、やってのけたから彼女はここにいる。ローレン、おまえの妹の身を危険に晒したその連中は、どこの何者だ？　彼女の話では、彼らはユートリアの言葉を話し、“レオポルド”という主（あるじ）の命令で行動しているようだ。何か心当たりはないか？」
ローレンはサンジェルマンを見ていなかった。だが、サンジェルマンの目は、彼の瞳をよぎった狼狽を見逃さなかった。
「知っているなら……ジェニーのためにも、今言った方が賢明だ」
「ローリー、これは本当に大事なことなの。お願いよ、教えて」
ローレンは妹ジェニーに弱い。
サンジェルマンが願ったとおりに、ジェニーの懇願が続く。

日付が変わるまで、あと一時間もないだろう。夜は静かに満ち、王を待つ期限が限りなく近づいてきている。
ローレンはまだ何もしゃべらない。妹を狙われ、もはや仲間とは呼べない彼らに対して、彼は何を迷うことがあるのだろう？　答えを渋る兄に、ジェニーの焦りと苛立ちが募っているのが、サンジェルマンには手に取るように分かる。
そんなとき、サンジェルマンは近衛隊隊長からの至急の呼び出し

を受けた。この時間になって、王の伝令が届いたという。
サンジェルマンは、近衛隊隊長が既に向かったという、衛兵の詰め所に走った。事の重大さを予測してか、ジェニーも無言でサンジェルマンに付いてくる。彼女には、ローレンと残り、彼から情報を引き出してほしかったが、彼女はそれを聞き入れようとはしなかった。

普段は衛兵たちが押し込まれ、騒がしい詰め所だが、深夜の今、室内には数人の衛兵に混じって大臣が数名、部屋の右隅に二人の女がいるだけだ。部屋は広いが、明かりは入口と女たちの立つ付近の二箇所しか灯っておらず、顔が確認できないほどに全体的に暗い。衛兵たちの腰にある剣の鞘が部分的に光ってみえるのが、どうにも不気味だ。

サンジェルマンが部屋に踏み入ると、女たちの足元で床にしゃがんでいた近衛隊隊長が大声で彼を呼んだ。空洞のような部屋では、囁き声でも十分に耳に届きそうなのだが。

近衛隊隊長の前には、床に寝ている男の足があった。まだ生きている証拠に、痙攣したように片足が小刻みに跳ねている。逆の足は黒い泥にまみれている。

「おお、ジェニー様も来られたか！」

泥で汚れた足が大きく飛び跳ねた。

「ジェ……ジェニー様と……？」

ひどく掠れた男の声に応えるように、ジェニーが近衛隊隊長の隣に膝をついた。

「ええ、ここにいるわ。王はどこにいるの？　無事なんでしょう？」

「ジェニー様……う……本物……？」

「本物よ！　王はどこ？　どこにいるの！」

そのとたん、床に寝かされていた男ががばっと起き上がった。唇には裂傷が目立ち、顔の左半分がべったりと血で染まっていた。

「な……ぜ！　なぜここにおら……るので！　ジェニー様は人質に

とられ……」
「ジェニー様は自力で監禁場所から逃げてこられ、昨日城に戻ったのだ」
「おお、ばかな……！　では、我々が見た……あの女……？　ジェニー……と王が……ああ、王は手も足も出せな……」
男はそこまで言うと力尽き、床に突っ伏した。
「待って！　王は？　王は無事なの……！」
ジェニーが倒れた男に叫ぶと、近衛隊隊長が沈んだ口調で言葉を次いだ。
「王はご無事です、ジェニー様。大きな怪我はない、今のところは……。奴らは北に進路をとって、王の身柄をどこかに移すつもりなようだ」
奴らとは、ジェニーを誘拐した集団だ。彼らには王の身柄そのものが目的で、王を傷つける意思はないようだ。でも、彼らがジェニーに見立てた女を人質とし、王の心の自由までを奪っているのなら、王はなすすべもなく彼らに連行されるしかない。
ジェニーは床に倒れた男をじっと見て、背中を震わせていた。サンジェルマン以上に、彼女は無念に思っているはずだ。彼女の存在が王にとっての罠となり、足かせとなってしまったのだから。
「私……戻らないと」
状況が把握できた今、彼女にはとりあえずの休息が必要だろう。
サンジェルマンに、ジェニーがくるりと振り返る。
「ああ。部屋に戻って少し眠った方がいい」
「いいえ、眠ってる暇はないわ、サンジェルマン。ローリーのところに戻るのよ」
ジェニーは今にも泣き出しそうな表情だったが、瞳だけ、意気ようようと輝いていた。それは闇夜をこうこうと照らす月に似ている。
早く、とジェニーがサンジェルマンを急きたてた。
サンジェルマンは、王が憧れていた、月の女神であり、戦いの女神エクリシフェを思い出した。

第二部　7．王の帰郷ー6

足が一歩前へ踏み出されるたび、ジェニーは、自分と入れ替わりとなって敵の手に落ちたゴーティス王を思う。

今、どこにいるのか。

虐げられてはいないのか。

「王は無事」と言うけれども、あの“マルセル”のことだ、信用できたものではない。

なぜ、王は城を抜け出してしまったんだろう？　彼は、王自らが危険に身を投じることは国を危険に晒すことにもなると、よく知っているはずなのに。

王がとった単独行動の理由。

ジェニーの身を案じたから、という答えだけでは、ジェニーは到底納得しない。

窓越しに見えるのは、真っ暗な空だ。この角度から見える空には、王の瞳をのぞきこんだときに見えるような星の瞬きは確認できない。

ジェニーは兄やアドレーの待つ部屋に入る前に、廊下にある小さな窓から空を見た。

王もどこかで、この空を眺めていてくれるだろうか？

息をひそめて耳をすませてみたけれども、この空は王のもとにも絶対に繋がっているのに、彼の笑い声も匂いも、ジェニーには一切何も届けてくれない。

ジェニーとサンジェルマンが戻った部屋は、思いがけず、和やかな雰囲気に変わっていた。椅子に座ったアリエルの前で、アドレーが床に胡坐をかいて座り、肩を揺らして笑っている。だが、帰ってきた二人を見るなり、ジェニーの兄からは笑い声が消えた。

「ああ、勇敢なジェニー様のお帰りだ！」
アドレーは陽気に声をあげたが、ジェニーは彼の前を通り過ぎ、兄の前に立った。
「ローリー、質問に答えてほしいの」
王の身が心配でたまらないけれども、彼の身を案じてただ祈りを捧げるだけなら、ジェニーでなくてもできるだろう。
ジェニーを盾に王をおびき寄せ、連れ去った一味の真の狙い。行き先。今のジェニーの役目は、それを突き止めること。
兄ローレンが若干寂しそうに微笑んだ。
「内容によるな。ヴィレールの利益になるようなことなら、俺は何も知らないよ」
「そんなはずはない。ローレン、おまえは何かを知っているはずだ」
ジェニーと並んだサンジェルマンが口を挟むと、ローレンはすげなく答えた。
「ヴィレール王の犬に話すことは何もない」
サンジェルマンは無言だったが、怒った様子はない。
「ねえ、ローリー？　彼らを知ってるのに、仲間じゃないのに、どうしてそうやって口をつぐむの？　お願いだから私に話して。あの“マルセル”って男は何者なの？　レオポルドって誰なの？」
「……俺は商売人だからね、こっちにだって都合があるんだよ、ジェニー」
「つまり、マキシム産岩塩の商売に絡む人間ということか」
サンジェルマンが横やりを入れると、ローレンはじろりと彼をにらんだ。
「だが、ローレン。そういうことなら、気兼ねは無用ではないか。おまえがここに捕らわれた時点で、おまえの商売は既に終わっている。――奴らはマキシムの人間なのか？」
また、沈黙だ。
ジェニーは一歩前に出て、兄の瞳を見上げた。幼い頃から見つめ続けた、ジェニーの大好きな優しい眼差しを。

「ローリー、彼らはユートリア語をしゃべってたわ。彼らは、マキシムの人間なの？」

ローレンが短い吐息をつく。

「ジェニー、なんでそれを知る必要がある？　おまえはこうして無事に戻ってきてるんだ、奴らが何者だろうが、放っておけばいいじゃないか」

ジェニーが無事に生還できたのは、彼らの興味が、彼らの前に突如現れた王に移ったからだ。自分の身代わりとなった王を、ジェニーは放っておけるわけがない。

「そうはいかないのよ」

せっかく会えた兄に対しての情を押さえつけると、ジェニーの目には涙がにじみそうになる。

「ローリー、もし私の質問に答えてもらえないんだったら、あなたは――王を拉致した彼らの共犯として、投獄されることになるわ」

「なっ……んだって！　シヴィルが拉致されたのか！？」

驚きの大声を出したのはアドレーだ。が、ローレンは反応が薄く、あまり驚いていないようにも見える。

「……拉致、か。過去の行いを考えれば自業自得だ。少しくらい痛い目にあって、弱者の気持ちを学んだ方がいいよ。そうすりゃ、謝罪のひとつでも出てくるだろうさ」

「ごめんなさいって言うことだけが謝罪じゃないわ。彼は過去を反省して、王として国に尽くすことで皆に謝罪をしてるのよ」

王の拉致を知ったときより、ローレンが激しく動揺した。

「ジェニー、おまえ、あの王のせいで父も母も……この俺の腕も動かなくなったのを、おまえはまさか忘れちゃいないだろうな？　あいつは仇だぞ！　それでも、おまえはあの王を愛するのか……！」

もうずっと前から、ジェニーの気持ちは定まっている。

何の迷いもなく、ジェニーはそう答えられる。

「私はこれからもずっと、あの人を愛すると思う」

ローレンは茫然としてジェニーを見ていた。その彼の背中を、ア

ドレーの大きな手がはたく。
「よう、シヴィルを連れてったのはどこのどいつなんだ?」
「ローリー、彼らはどこの何者なの?」
ローレンは言葉に詰まり、やがて、抵抗を諦めたのか、ジェニーに向き直った。

＊　＊

幌馬車はほぼ一定の速度で進み続けていた。馬車の揺れはひどく、幌の隙間から入る風は、疲弊したゴーティスの体に沁みる。
小休憩のときや野宿する場で、ゴーティスは見覚えのある風景や目印を探して周囲を見渡すが、見えるものはいつも同じだ。山脈に続くなだらかな丘と果てしなく伸びる一本道。馬車の向かう先は見当もつかないが、森の木々に針葉樹が混ざり始めたため、彼らは北に進路を取っているように思う。
ゴーティスが横たえていた体を起こすと、見張りの女たちが剣をつかんで身構えた。彼女たちの体には、村娘の衣装にそぐわない、見事な筋肉がたくわえられている。数々の危険な仕事をこなしてきた、経験による自信もみなぎっている。
用足しだ、とゴーティスが言うと、金髪の女が冷淡に笑った。彼女は外の御者席にいる“カイル”に大声で知らせ、それに応えるように馬車は停車する。
カイルとはゴーティスを捕らえた一味の主導者だ。彼と女たち二人が話す言語で、「下界の番人」という意味らしい。幌がめくり上がり、カイルのにやけた顔がのぞいた。
ゴーティスが馬車を降りると、前方の空に雨雲のような暗い群が発達しているのが見えた。このまま進めば、ゴーティスの乗る馬車

は雨の中を通り抜けるはめになりそうだ。
それからゴーティスは、下車するたびに繰り返したように、後続の幌馬車を見た。御者の席に男が二人乗っている。行商隊になりすましているカイルたち一味は、交易の品をそこに積んでいるのだ。
「ゴーティス王、早くしろ」
ゴーティスが幌馬車を見つめていると、カイルがゴーティスの肩をつかんで、にやりと笑った。何度見ても虫唾が走る、下品な笑い方。
「心配しなくても、あんたがおかしな行動をとらなけりゃ、彼女はちゃんと無事だ。長い道中、あんたの大事な彼女を退屈させないように、俺の仲間たちも気を使って遊んでやってる」
「おまえ……！」
ゴーティスがカイルの手を捻りあげると、彼は大げさに声をあげて痛がった。
「おまえ、俺が手に入ればジェニーに用はなかろう！　女相手に卑劣なことをしおって！」
「はは、各地に侵略を繰り返した王が俺を卑劣と呼べるのか？　あんただって、戦地じゃいい思いをしたんだろ！」
「あの女は、俺が過去にしでかした戦とは何の関係もない！　俺に恨みがあるのなら俺に向ければよいではないか！」
「女なんか！」
カイルが吐き捨てた。
「あんたほどの王が、たかが女ひとりのことでここまで騒ぐなんて、くっだらない！　女なんか、放っておけばいいじゃないか！」
たかが女ひとり。
“たかが”……。
ジェニーはただの女ではない。彼女は、ゴーティスの娘を産んだ人間だ。ゴーティスを個人として愛し、王としてのゴーティスをあるがままに受け入れている。彼女ひとりの存在価値は、ほかの誰にも匹敵しない。ゴーティスが愛し、心の裏側まで信用できる人間は、

彼女のほかにはもう、ゴーティスの人生に現れないかもしれない。

「……ジェニーを解放しろ」

ゴーティスがカイルの胸元を掴み上げると、彼は不機嫌そうに目をすがめ、彼の服を掴むゴーティスの手をじろりと見た。

「この手はなんだよ」

ゴーティスは怒鳴り声を必死に抑え、カイルの服を放した。鍛錬を積んだ体を持つ仲間たちと違って、彼は若い割に腹まわりに肉がついており、動きが少し鈍い。

ジェニーさえ彼らの手に渡っていなければ、カイルのような男は、ゴーティスが素手で仕留めてやったというのに。

御者席の男が一人、ジェニーが監禁されている幌内に入っていくのを見とめ、ゴーティスは乾いた唇を噛んだ。胸を焼き尽くすような痛みで目の前が見えなくなる。

カイルと最初に会った館で、開いた扉越しに見えた複数の男たち。彼らは中央のテーブルを囲み、愉快そうに笑っていた。一人の男の膝が見え、ゴーティスは男たちの野蛮な行為をすぐに理解した。

その直後、目を凝らしたゴーティスは男たちの間に見たのだ。王城を出る際にジェニーが着ていた、宝石が散りばめられた、淡い黄色のドレスを。

ジェニーを助け出そうと動いたゴーティスは、二人の女に腹を蹴られ、床に倒れた。ゴーティスはジェニーの名を叫び、なおも立ちあがろうとして、カイルの囁きに絶望的に反抗をあきらめた。ゴーティスの反応ひとつで、彼らのジェニーへの扱いが変わってしまう。

彼は、ゴーティスをある場所に連行することと引き換えに、ジェニーの命は保障する、と一方的な約束をした。そして、その瞬間から、ゴーティスは深く後悔している。

ゴーティスは、ジェニーが死の淵に佇む姿を二度と見たくなかった。心に深い傷を負う姿も見たくなかった。

ジェニーが何と言おうと、ゴーティスはフィリップのもとに彼女

を追いやるべきだったのだ。ジェニーに一生恨まれたとしても、彼女がこんな酷い事件に巻き込まれる可能性は徹底的に潰しておけばよかったのだ。

力を込めたゴーティスの歯の下で唇の皮がぷつりと切れ、血の味が舌ににじむ。

あの幌の中で彼女の身に降りかかったことで、ジェニーは人生に悲観しているかもしれない。人生を諦めようとするかもしれない。

でも、生きてさえいるなら、ジェニーは最終的には娘のもとに帰ろうとするはずだ。一人で荒野に放り出されようと。多少の傷を負ってはいても。

「おまえたちの狙いが俺というなら、もうあの女を拘束する必要もないはずだ。城に送り届けろとは言わぬ。この場でいい、あの女を自由にしろ」

カイルはじろじろとゴーティスの顔を見て、不敵に笑う。

「へえ、ほんとだ。あんたが苦痛にあえぐのって、へえ……美しいね」

「カイル！」

ゴーティスに呼ばれると、彼は、ゴーティスが握り締めた拳に目を移した。

「うるさいな。あんた、あの女がそんなにいいのか？　そりゃあ、いい度胸をしてるのは認めるけど、所詮、女じゃないか」

ゴーティスは何も答えなかった。

「まあ、でも、頼みは聞けないね。あんたに途中で逃げられても困るから、女は目的地まで解放しない」

カイルは笑い、ゴーティスの顔を下から見上げた。

「ああ、それから、死のうなんてばかな考えは持たないことだ。あんたには無事に目的地に着いてもらわないと、こっちが困るんでね。もし何かの手違いであんたが死んだりしたら、あんたの愛しい人にはそれなりの責任を負ってもらう。拷問をしないって約束も、その時点で反故にさせてもらうよ」

殴られたり、蹴られたりした方がずっとましだ。

彼らは「拷問はしない」と繰り返すが、男たちの慰み者にされることは、ジェニーにとっての拷問でなくて何だというのか？

ゴーティスは前方の空を見上げ、暗雲が広がっていく姿を見た。大きな、激しい嵐に見舞われればいい。男たちが馬車の制御に必死になり、あわよくば、馬車が横転でもしてくれれば、ジェニーを逃がす機会が訪れる。

ゴーティスは慎重に、自分が乗せられている馬車と後続の馬車を見て、一味の人数をあらためて確認した。女たち二人にカイル、後続の御者席に二人、中に一人。最低でも六人はいる。

――だが、その中に、ケインの存在は感じられない。

事件へのケインの関与を疑い、ゴーティスが王という公人の立場を脱ぎ捨て、ただの男に戻ろうとした三日間の期限。

ジェニーを兄弟の確執の間に巻き込みたくなかった。彼女に有無を言わさず巻き込もうとするケインを、今度こそ自分の手で永遠に消してしまいたかった。

けれども、ゴーティスはケインには一度も会っておらず、その気配すら感じとれない。

そうだ、ケインは大それた計画など実行できず、人の殺し合いから可能な限り離れていたい人間だ。そもそも、いくらジェニーを拉致するためだとはいえ、ケインが護衛たちを皆殺しにするようなことはしない。これはケインの手口とは違う。

ケインは、関わっていない。

ケインはたしかに、ジェニーに会う計画を立てていた。ジェニーの今の気持ちなど何も知らず、何も知ろうともせずに。

ゴーティスはふと、過去に愛した女のことを思い出した。今でこそ、彼女が愛したのはゴーティスの身分だったのだと理解しているが、当時は、彼女に愛されていると思いこんでいた。

だから、ケインがおそらくは軽い気持ちで彼女に言い寄り、次期王の地位により近いと噂されていた彼に彼女が傾いたのは、自然な流れだったのだろう。二人は欲望に忠実だったのだ。

当初、ゴーティスの怒りように、ケインは面食らっていた。彼にはゴーティスの怒りの理由が理解できなかった。ケインには、仮にも王子である身分の男が二流貴族の娘に本気で入れ込むなど、ありえなかったのだ。

ケインの目は彼が見たいものしか見ず、彼の耳は聞きたいことしか聞き入れなかった。ケインが女を遊びの対象と見たように、兄ゴーティスもまた同様だとしか考えなかった。兄の気持ちなど知らず、知ろうともせず。

だが、彼はゴーティスの気持ちを知ろうとしない代わりに、傷つけようとする意図もなかったはずだ。今なら、ゴーティスにもそれが理解できる。

なぜならケインは、兄に対してほとんど、興味を抱いていなかったのだから。

王城に残してきた書置きに記した期限、三日間は、とっくに過ぎている。

ゴーティスが逃がした近衛が無事に王城に着いたのなら、王が思わぬ危機に陥ったと知って、サンジェルマンが動き出すだろう。

王の受けるべき責めをジェニーが肩代わりしているのなら、彼女の苦痛を取り除き、敵に報復することは、国の義務であっていい。

◇　◇

ジェニーへ

妻の伝手で予定より早く国内に戻ったよ。
春の宴の招待状ももう手に入れた。
妻はもとが商家の娘とかで、あちこちに顔がきくんだ。本当に頼りになる人だよ。

これから当分の間、ブルマン地区にある別荘に滞在するつもりだ。
首都の近くで、シエヌ河も望める、美しい場所らしい。
いよいよきみの近くに行けると思うと、今からなんだか落ち着かないよ。

ジェニー、今度きみが私に会うときは、私はパトリス＝ロジェ・オルセーという名だ。
どうか覚えていて。

◇　◇

レオポルドと名のつく男は、マキシム王国に大勢いるそうだ。というのも、彼らの国王に倣い、多くの国民が子どもたちに国王と同じ名を付けたからだ。
ジェニーと王を次々に拉致した男は、塩職人の息子カイルだそうだ。マキシム王国では塩に関わる人々は地位が高く、このカイルも例外ではないという。
ローレンは、カイルの主人も命令内容も知らなかった。ただ、ゴーティス王の行方不明に少しでも関連づけられるものがあるとすれば、マキシム国王だ、と重い口を開く。国王には変わった収集癖があり、毎年「数人」が彼のもとに集められるそうだ。ゴーティス王はその対象になってもおかしくない、と、ローレンは言う。

王を捜し、北へ向かおう。

王のいそうな場所が絞り込めていないのに、ジェニーが立ちあがると、アドレーが同行を申し出た。庶民の彼は剣を使えないが、その圧倒的な存在感と腕力があれば、十分に戦力になる。

ジェニーが自ら捜索に乗り出すことに、アリエルとローレンは猛反対だ。だが、意外なことに、サンジェルマンは反対意見を述べなかった。彼は、捜索範囲をもっと狭めるのが先決だ、とジェニーを諭し、旅に備えて少しでも休むように、と言った。

日付は既に替わり、カミーユは深い眠りに入っていた。娘の安心しきった寝顔を見ると、ジェニーの決心が崩れそうになる。

（私がいなくなってしまったら、この子はどうなってしまうんだろう？）

死ぬのは怖くない。

でも、カミーユをあとに残して死ぬのは……嫌だ。

ジェニーが留守の間に、王がカミーユに会いに来たそうだ。彼はカミーユをあやし、月の女神にジェニーの無事を一緒に祈っていたそうだ。それがあったからなのか、カミーユはもう、王を“オオ”とは呼ばなくなっている。

王を“パパ”と慕うカミーユに、“パパ”として彼女に応えてくれた王。カミーユに、”パパ”である王をまた会わせてあげたい。

（待っててね。ママはパパを助けに行ってくるわ）

カミーユの寝顔に引き止められないうちに、ジェニーはやっとの思いで彼女から目をそらす。

自室に上がり、ジェニーは王の剣を鞘から抜いてみる。

彼の剣を引き抜くのは、これが三度目だ。心身ともに疲労が濃いせいか、剣はジェニーの腕にずっしりと重い。

――今度こそ、本物の剣を使う機会が来てしまうかもしれない。
でも、ジェニーの不安感は予想したより弱かった。王の剣は重かったが、ジェニーの手になじみ、王の手に添えられている安心感があるからだ。
――王を見つけるまで、泣きはしない。
ジェニーは剣を鞘に戻し、何気なく隣の箪笥を見た。いちばん下の引き出しが、ほんのわずかに開いている。その中にはラニス公の手紙を入れてある。それから、同封されていたケインからの手紙も。
おそるおそる引き出しを引くと、中にあった二通の手紙が、握りつぶされたかのように丸められていた。

夜が明けると、今度はローレンが捜索への同行を表明した。彼の場合は、王の捜索というより、ジェニーを外敵から守りたいという想いからだ。
そして数時間後には、一度帰城したライアン、王城にやって来たユーゴが加わった。ライアンはローレンの存在に顔を引きつらせたが、彼が旅先案内人になると知ると、ジェニーのために目をつぶってくれた。
だが、サンジェルマンは、ジェニーの隊に加わるとは言い出さなかった。彼は近衛隊隊長たちと本館に引きこもり、一日中、ジェニーとは顔をあわさない。
だが、その日夕方遅くなって、サンジェルマンが小城に集まっているジェニーたちのもとにやって来た。
「カラントでカイルに似た男のいる行商隊が目撃された」
カラントとは、首都からまっすぐ北上したところにある小都市だ。具体的な地域が出たことに、一同がどよめく。
「すぐに向かおう」
皆をたきつけるサンジェルマンにアドレーが問う。
「あんたも同行するのか？」

サンジェルマンは不思議そうに彼を見返す。

「当然だ、なぜそんなことを訊く？」

サンジェルマンにとって、王の捜索はわざわざ言い出すまでもなく、当然に行うものなのだ。

第二部　7．王の帰郷－6（後書き）

本作品を読んでくださって、どうもありがとうございました。
当初の予定では4月末の完結でしたが、5月のGW中になりそうです。
あと残りわずか、楽しんでよんでもらえると、嬉しいです。

＊4／21　一部内容を修正・追加しました。

第二部　7．王の帰郷ー7

この馬車で、今日で何回めの朝を迎えたことだろう？

なぜか、頭が異常に重い。

すっきりとしない頭を振り、ゴーティスは幌布から透けて見える光を眺めた。

馬車に押し込められた日以降、ゴーティスは夜間には眠らず、昼間に睡眠をとるように努めている。一味の集中力が落ちる夜に反撃し、ジェニーを奪還する機会をうかがっていたためだ。しかし、昨夜はうっかり眠ってしまったらしい。

「おはよ」

朝日を遮るように、金髪の女の顔がゴーティスの前で笑う。薄暗さの中で徐々にはっきりとしていく彼女の顔は、骸骨に似ている。女の頬骨は高く、その年頃の女なら誰でも持つ、柔らかな頬の肉がそぎ落ちている。まばらな金色の眉毛の下にある大きな水色の玉が、ゴーティスの動きを冷静に監視している。

「あんた、昨夜はよかったよ」

意味深に笑いながら、女はゴーティスの太腿を下から手で撫であげた。

ゴーティスの記憶はおぼつかないが、それでも、彼女が暗にほのめかすように、自分が女と関係を結んだとは思わない。大体、彼女の手はゴーティスの体を愛撫しているつもりだろうが、彼女の硬い手のひらは、剣の鞘を触っているのと何も変わらない。

「やめておけ」

ゴーティスは女の手が股の付け根に届く前に、彼女の手首を掴んで止めた。

「なんでよ？　あんた、今もできそうじゃない？　私は今からだって平気だよ」

「朝だからだ。おまえ、男の体には興味がないだろう」

女の瞳が憤慨したように縮む。
女はゴーティスが眠っていると思っていたのかもしれないが、夜中に何回か、ゴーティスは彼女ともう一人の女がひそかに抱き合っているのを見たのだ。

その日最初の小休止で、ゴーティスは外に出て驚いた。緑の牧草地、遠くに見える山脈など、目に入る風景は変わらない。ところが、ゴーティスが今まで常に右前方に見ていた山脈が、方角を変えている。いつのまにか、彼らはその山脈に向かって馬車を進めていたのだ。山脈の奥にある、雪を頂く山がこれまでより近くなっている。
昨日からの記憶をたどって、ゴーティスは夕方に出された食事をたいらげた後、強烈な眠気に誘われたことに思い当たった。ゴーティスは体力を保っておくため、飲食物には基本的に手をつけていた。主人に病的に忠実なカイルが、生かしておくべき者に提供する飲食に毒を含ませることはないだろう。
しかし、カイルは毒こそ入れなかったが、昨日の食事に眠り薬を混ぜたのだ。ゴーティスを眠らせる必要がある、何かの為に。
ゴーティスが見渡してみても、一味の顔ぶれに変わりはない。後続の馬車は、ゴーティスが乗せられていた馬車の隣に停車している。
(何か起きたのか?)
ゆっくりと、落ち着いて、曖昧な記憶の内を探る。
食事の後、ゴーティスは荷物の山に背を預けた。気分が良くなり、眠りに落ちたのはその前後だ。その後しばらくは記憶が途切れ、馬車の大きな揺れで、ゴーティスは一度、目を覚ました。
そのときのゴーティスは床に寝ていた。辺りは暗くなってはいたが、まだ日は残っていた。馬車の外では馬の嘶きや人々の話す声がして、騒然とした様子だった。宿場町に着いたのだろう、とゴーティスが顔を上げようとすると、いきなり、誰かの体に覆いかぶさられた。その体の下で、ゴーティスは幌の天井が明るく照らされるのを見た。

「オルセー様の品か」
薄れる意識の中で聞いた声を不意に思い出し、ゴーティスは愕然とする。
（国境を越えたか……！）
ゴーティスの覚えている会話は、通関の際のやり取りに違いない。一味は、関所の役人の前を、彼らの王とともに堂々とすり抜けたのだ。
ゴーティスはもう一度、正面に居座る山脈に目をやる。その山々は、国の北東の国境と接するラニス公地から望めば、北西の位置にある。その距離は、ここからゴーティスが眺めるのと、ほぼ一緒ではないだろうか？

＊　＊

カラントは、北の国境と首都を結ぶ一本道のちょうど中間地点にあたる。王を奪った一味がマキシム王国を目指しているのなら、彼らは北の関所を抜けようとするはずだ。
王を連れて関所を抜けるのは無理だ、とライアンがローレンに反論すると、ローレンは、これだから無知な貴族は困る、と彼を痛烈に批判した。
「関所の役人が王の顔なんか知ってるのか？　奴らは通行証を持ってるし、あんたたち貴族からの正式な依頼書があれば、国境は簡単に出入りできるよ。関所に顔がきく貴族との商取引なら、なおさらだ。デュポワール家、オルセー家とか……」
ジェニーがローレンに振り向くと、彼はそれまでの苦い表情をとたんにほころばせ、笑った。
「なに、オルセー家と言ったか？　オルセー家が塩取引に関わっていたとは、知らなかった」

「あそこが塩取引をしてるなんて言ってないよ。オルセー家は、マキシム王国が作る水晶をほぼ買い占めてる上顧客なんだ。同じ貴族のくせにそんなことも知らないのか？」

ライアンがむっとしたように眉を上げる。

ジェニーは不愉快な会話が飛び交う場を逃れ、先頭にいるサンジェルマンに馬を並べた。彼はジェニーに気づき、馬の歩みをやや遅くする。

「どうかしたか？」

王城を出て以来、彼がジェニーに話しかけたのはこれが最初だ。首都の街が後方に去ってからしばらくの時が経っているが、彼はどこか上の空で、ほかの人間を寄せつけない雰囲気だった。それが、彼がアリエルとの別れを惜しんだ余韻に浸っているせいだと皆は思っていたが、ジェニーは彼の顔を見て、即座に「違う」と悟った。

「気になることがあるの」

ジェニーが切り出すと、サンジェルマンはジェニーをじっと見た後、ちらりと後方の仲間たちを振りかえった。

「私もだ。あの者たちの前では、言えないが」

ジェニーが馬首を揃えるのを待ち、彼はジェニーの話を促す。

「私の話もそうよ」ジェニーは声をひそめた。「さっき、ローリーが“カイル”一味の顧客にオルセー家があると言ったんだけど」

「ああ、聞こえた。昔からの名家だ。それが？」

ジェニーはサンジェルマンの真面目な表情を見て、一瞬だけ口ごもった。

ケインから届いた手紙の結びにあった、偽の名前。握りつぶされた手紙。

王の失踪に、ケインがまさか関わっていることはあるのか――。

「パトリス＝ロジェ・オルセーって名前に聞き覚えはある？」

サンジェルマンは顎に手をつけて考えていたが、いや、と首を横に振った。

「当主や息子たちの名は知っているが、そのどれとも違う。ほかの者たちの名までは知らないが……今回の件に、その男が絡んでいるというのか？」

「わからないわ。でもその名前――少し前、私がもらった手紙の最後に書かれていたの。今度会うとき、自分の名前はそれだからって……ケインが」

サンジェルマンは驚いていたが、ジェニーが予想していたほどではなかった。

「おまえとあの男は、今も会っていたのか？」

「まさか！　生き別れてから一度だって会ったことはないわ。でも、数ヶ月前に初めて彼から手紙が来て……それで、彼はまだ生きてるって知ったの」

サンジェルマンがいきなり黙り込み、前方を見つめる。

「彼は、春になったら会いに来るって、手紙に書いていたわ」

「それを……王が知っていた可能性はあるか？」

「あるわ」ジェニーが確信を持って答えると、彼が不審そうに振り返った。「私の留守中に誰かが手紙を読んだ形跡があるの。きっと、王だわ」

ジェニーたちの背後でアドレーの大声がした。といっても、彼は怒っているのではなく、喧嘩になりかかったローレンとライアンをいさめただけのようだ。アドレーの態度に腹を立てているユーゴがライアンの加勢をし、喧嘩が再び勃発するかのように見えたが、アドレーが道化を演じたおかげで、諍いは収束に向かう。

彼の存在は頼りになる。彼が一行に加わってくれたおかげで、ジェニーやサンジェルマンは仲間同士の不和を調整する回数が減り、道中で笑顔となる回数が増えている。

ジェニーがサンジェルマンに視線を戻すと、彼が長く重い息をついた。

「私にはずっと不思議に感じていたことがある。王がおまえを心配

していたのは事実だ、だが、なぜ王は近衛隊に捜索を任さず、自らおまえを救出に向かったのだ？

城を出発する前、私は再度、私が不在だった期間の王の様子を皆に訊いてまわった。当時は見逃した手がかりが、今聞けば、見つかるかもしれないと思ったからだ。されど、誰に訊いても返答は同じだった。皆、王の異変にはまったく気づかなかったと口々に言う。

だが、皆に状況を確認しているうちに、ある者が、一味には“五十二号”と呼ばれる罪人がいる、という証言を思い出してくれた。ああ、そうだ、“彼”のことだ。負傷した男を運んできた農夫が、『男の言葉として』伝えたそうだ。

ただし、五十二号という罪人は登録上存在していない。いくら調べようと、それが誰か分からぬはずだ。それゆえ、皆の記憶からはすぐに消えてしまったのだろう。……だがその後、その“些細な”情報は、大臣の一人によって王に伝えられたようだ」

握りつぶされていたケインからの手紙。

でも、ジェニーが見たカイルの仲間たちに、ケインや彼に似た人物はいなかった。

王はジェニーの部屋でそれを発見し、誤解して、激昂したのだろうか？

「……じゃあ、王は彼が関わっていたと思って……」

サンジェルマンはあっさりと同意した。

「関与していると考えただろう。それでなければ、王は単身で城を出ることはない」

ケインの手紙に居場所を特定するような記述はなかったかと訊かれ、ジェニーは「あった」と答えた。サンジェルマンには、それで王の行動の理由に納得がいったらしい。

ブルマン地区にある別荘。

でも今さら、そこが王の最初に向かった場所だと知っても、何の役にも立たない。

ああ、どうしてあの手紙をあんな見つかりやすい場所に入れてお

いたのだろう？
　それこそ、今さら悔やんでも仕方がないが、ジェニーはケインからの手紙を焼き捨てておくべきだったと、強く思う。
「でも……ケインは関わってないわ」
「全員の顔をしっかりと見たのか？　そこまで断言できないだろう」
「彼じゃない」
　ジェニーが知っているケインは、笑いながら誰かを馬車で轢くような残酷な行為を許す人間ではない。
　サンジェルマンは反論したかったようだが、背後の何かに注意を引かれたようだ。ジェニーの後方で、ユーゴとローレンが言い争う構えを見せている。
　ジェニーが腰につけた王の剣にそっと触れると、それに気づいたサンジェルマンが目を細めた。
「私は誰が相手だとて容赦はしない」
「それは私も同じよ」
　王の剣は、ジェニーに前へ前へと進み続ける勇気をくれる。王の剣に触れてそう誓えば、彼の耳にもジェニーの声が届きそうな気がする。
「彼らが誰でも、どこにいても、王を絶対に取り戻すわ」
　ジェニーを静かに見ていたサンジェルマンが、言った。
「城を出る際、私はアリエルに一つだけ約束した」
　小城を発つ間際のほんの一時、彼とアリエルは会話を交わしている。玄関で一行を送り出そうとしていたアリエルのもとから、サンジェルマン以外を強制的に連れ去ったのはユーゴだ。ユーゴの機転がなければ、二人は相手への心理的負担を思いやってばかりで、自分の感情に一生向き合おうとしなかっただろう。
　ジェニーは頷いた。
「私の無事は約束できない、だが、私は王とおまえだけは何としても無事に生還させる。王は当然のこと、おまえが無事に戻らねば、王もアリエルも悲しみ、私を恨むに違いない。私は二人のために、

おまえも必ず無事に城へ帰還させる」
ジェニーがサンジェルマンを見返すと、彼はかすかに口角を上げてみせた。
「あなたもよ。あなたも無事に帰るのよ」
「そう願うが、私の使命は王とおまえの無事を確保することだ。私の命など、この際問題ではない」
決して死に急いでいるのではない、とサンジェルマンは弁解するように言う。
「でも、あなたは無事に帰るわ。ここには最強の勇者たちが揃ってるのよ？　剣技で有名なベアール一家の者が三人もいるわ。ここにいる全員で、王を必ず奪還して城に戻るの」
ジェニーが力説し、王の剣の鞘に再び手を触れると、サンジェルマンが目を閉じて頷いた。
「もちろんだ。私とて、進んで死ぬつもりはない」
そして、目を開けたサンジェルマンは、破顔した。

カラントの街に入った一行は、とある宿屋に部屋をとった。王の安否は気になるが、ここから先の王の足取りについてこの街である程度の情報収集をし、追跡計画を練らなければならない。体の疲れを癒し、馬も休める必要がある。
宿屋に着いて早々に、喜んで街に飛び出して行ったのはユーゴだ。情報収集と名を打っての外出だが、王にそれほどの忠誠心がない彼が向かう先は、遊べる女がいる場所だろう。商売仲間がいるというローレンも外出し、アドレーは宿屋の一階で体格に見合うだけの見事な食いっぷりを披露していた。

夜が更けるのはあっという間だ。各一室に三人ずつ、ジェニーと兄、彼の監視役としてライアンが同室となり、残りの三人が広いもう一室を使っている。壁を隔てた隣の部屋からは、アドレーらしき

轟音ともいえるいびきが聞こえてくる。ユーゴが室内にいれば文句の嵐だろうが、彼はたぶん、部屋にまだ戻ってきていないのだろう。ローレンもまた、ジェニーとライアンのいる部屋には帰ってきていない。

ライアンは無言で、さっきからずっと剣の刃を研いでいた。決して広くはない部屋で、王でも兄でもない男と二人きりでいる時間はジェニーを落ち着かなくさせる。

でも、そう思ったのも最初の五分間だ。ジェニーは気がついたのだ。ライアンは、王の安否を思う不安感から普段にもまして無口で、何かに集中して心を落ち着けようとしている。王が心配で不安なのは、彼も同じなのだ。

「ライアン様、これも研いでもらえますか？」

振り向いた彼は、ジェニーの差し出した王の剣を見て、顔をしかめた。

「この剣を研ぐ必要はない」

だが、ジェニーはその剣を彼に渡した。彼は不可解そうにジェニーの顔を見ながらも、それを黙って受け取る。

「王がその剣を使っていた頃を知っているんでしょう？」

「……そうだな。王はこの剣をいたく気に入っておられた。成人を迎えられ、背が伸び始めてこの剣では物足りなくなるまで、王は肌身離さずこの剣を持っておられた」

ライアンは剣を鞘から抜こうとはせず、両手でそれを掲げたまま、感慨深そうに剣に見入っている。

「この剣には王の思い出が詰まっている。……妙な感覚だ。王が今もなお、この場におられるような気がする」

次に顔を上げたライアンからは不安な装いが拭われていた。

「その剣を手にすると、私も同じことを思うんです」

幅の狭い、寝具がなければ細長い板にしか見えない寝台に腰掛けるライアンは、ジェニーを見つめながら、手にあった剣を寝台の上にそっと置く。

薄明かりの中でジェニーがライアンを見るのは、今夜が初めてだ。ジェニーが視線の先をわずかに移動させると、それに応じて彼の水色の瞳が左右に揺れた。色に乏しい空間で、王と似た髪の色が闇に映える。

不躾に見つめられ、ライアンが不機嫌になるとジェニーは思ったが、彼は黙ってジェニーを見ていた。沈黙していても気詰まりにならないのは、ライアンの瞳が普段のように硬直していないからだ。

王は今どこにいて、何をしているのだろう？

「……王はご無事だ」

ジェニーを見返したライアンの瞳が、いつになく頼りなさそうに、俯く。

ちょうどそのとき、扉が遠慮がちにたたかれた。

「ジェニー、いる？」

兄の声だ。

「いるわ」

ジェニーが答え、扉を開けようと歩みだしたときだ。ライアンの手がジェニーを阻んだ。

「もう一人誰かいる」

ライアンは囁き、扉の陰に隠れて、腰にある剣を静かに引き抜いた。彼の瞳はすっかり殺気だった瞳に変わり、ジェニーに部屋の奥に移動するように目で促す。

扉が内側に開くと、室内に縦に光が伸びた。そこにローレンらしき人影が映り、その背後に、たしかにもう一つ、人間らしき影が重なって伸びる。

「ジェニー？　うあっ！？」

ライアンは室内に入ったローレンの面前に剣を突きつけた。

「危ないな！　何するんだよ、あんた！」

「おまえは危機感がなさすぎる！　おまえの連れだろうが、私は見知らぬ者を部屋には入れぬぞ」

「ったく、あんたって奴は！　こいつは情報提供者で――」
ジェニーに背中を向けていたライアンの動きがぴたりと停止した。
「……ん？　なんだ、あんたたち、知り合いなのか？」
ライアンは男に剣を向けられもせず、かといって、剣を納めることもできないようだ。
「古い知り合い――みたいなものだよね、ライアン？」
ジェニーが聞き覚えのある、若い男の声。
廊下にいたらしき人物が、一歩、二歩、と室内に踏み入ってくるにつれ、濁流にも似た轟音がジェニーの耳を塞いでいく。男はライアンの肩越しにジェニーを見つけ、嬉しそうに笑った。
「ジェニー」
しかし、彼の特徴的な無邪気さは、その笑顔からすぐに消える。
「本当にここで会えるなんてね。……驚いたよ。噂どおり、きみが王を救うべく、皆と旅をしているなんて」
金色の髪は輝きを増し、こけた頬を覆っていた灰色の髭はもうない。ジェニーが覚えている猫のような黄色い瞳は、血色を取り戻した健康そうな肌の上に健在だ。以前とは比べようもないほどに暮らしぶりが向上したことは、ひとまわり大きくなった彼の体が物語っている。清潔な白い着衣も、今の彼にはよく似合う。
ジェニーは言った。
「……元気だった、ケイン？」

第二部　7．王の帰郷ー7（後書き）

本作品を読んでくださって、ありがとうございました。
次回以降のお話は、ＧＷ中に複数回にわたって更新します。
最終回もＧＷ中となる予定です。

＊更新情報はブログにも掲載します。

元気だよ、と笑ったケインがジェニーの正面に立つ前に、もう一人の闖入者の声が部屋に轟いた。

「五十二号！」

ライアンとローレンの間に突如現れたサンジェルマンは、既に剣を抜いていた。

「だめよ、サンジェルマン！」

ジェニーの制止など全くものともせず、サンジェルマンは剣を構え、足を踏み出す。

「だめ！　ライアン様、彼を止めて！」

ライアンはジェニーの声に反応したが、彼を止めようとはしない。

「なんだよ、どういうこと？　皆、こいつと知り合い？」

ローレンにサンジェルマンが言い放った。

「こいつは逃亡犯だ。怪我を負いたくなければ、どいていろ！」

ジェニーに背を向けていたケインが、腰につけていた剣を軽々と抜いた。ジェニーが過去に数度目にしたときとは違い、彼の身構えが様になっている。彼の携帯する剣は、もう飾りではなくなっているのだ。

「ジェニー、危ないからどいていて」

ジェニーはケインの放った言葉に耳を疑った。彼は、剣を含めた暴力行為全般を嫌っていたはずだ。

「これは……剣の腕を上げられたか」

サンジェルマンが言うと、ケインが笑顔になった。

「そうかな？　妻に少し教えてもらったぐらいだけど」

「ケイン、サンジェルマンも、こんなところでやめて！」

「サンジェルマン、剣を降ろしてくれないかな。私は同胞とやり合うのは好まないんだ」

ケインが間合いを詰めると、サンジェルマンがいっそう声をひそ

めて答えた。
「同胞――であったのは、遠い昔のこと」
まさに一触即発だ。
ジェニーが二人を止めようと少しでも動けば、それがきっかけとなって死の決闘が始まってしまう。ライアンに二人を止めようとする意思はなく、ローレンは急展開に戸惑い、間に入るという考えすら忘れているようだ。
ジェニー側に向けられたサンジェルマンの顔には、普段の柔和さの欠片も見えない。怒り狂ったときのゴーティス王以上に恐ろしい迫力だ。ケインの隙を狙って集中している彼の全身に、冷たい炎が揺らめいているように見える。
間違いなく、彼はケインを殺す気でいる。そして、ケインはそれを受ける覚悟だ。
どうすれば、二人の争いを穏便に止められる？

そのときのことだ。
「うるせーぞ！」
爆音が天井から降ってきた――いや、姿はないが、部屋を揺らす勢いの男の大声だ。
地響きのような声に、剣を突き合わせようとしていた二人の緊張の糸が切れたようだ。
続いて、
「睡眠妨害だ、眠れやしない！　決闘したけりゃ、外でやってこい！」
度肝を抜くような大声の持ち主は、隣室で鼾をかいていたはずのアドレーだ。
彼の大きな足音を廊下に感じ、ジェニーはほっとした。ほどなく、彼が戸口にその巨体を現す。
「よう、サンジェルマン様！　あんた、俺が庶民だからって、睡眠を邪魔しても構わないと思ってないか？」

サンジェルマンは面くらい、振りかざしていた剣を降ろした。
「いや、そうではない」
アドレーは室内に入り、初めて会うケインににこりと笑った。
「よう、新入り。俺はアドレーだ。あんたも俺たちに合流するつもりなら、くだらん仲間割れで夜中に騒ぐな。俺は、睡眠の邪魔をされるのがいちばん嫌いなんだ。わかるよな？」
アドレーはあくまでにこやかだったが、瞳の奥で凄んでいる。それでなくても、壁のような巨体に迫られ、ケインはすっかりたじろいだようだ。彼もサンジェルマンと同様、剣を下げた。
「悪かった。騒ぐつもりはなかったんだ」
「ああ、いいさ。今後気をつけてくれりゃあな」
「今後って……私は別に、一緒に行くつもりでは――」
満足そうに笑って、引き上げかけたアドレーが、足を止めた。
「あんた、何か情報を持ってるんだろ？　ここにいる奴らとも古い知り合いじゃなかったか？　……だったら当然、一緒に行くよなあ？」
アドレーはケインに向けて言ったのだが、それはまた室内にいる全員に突きつけた言葉でもある。

＊　＊

まだ日が高いうちに、カイルとその一行はある城に入った。カイルは城の玄関ではなく、どこかの裏口から屋内に入ったようだ。ゴーティスが国境を越えたと知ってから、二日目のことだ。
ゴーティスは城内を注意深く観察し、自分のたどる道筋全てを覚えようとした。だが、なんと殺風景で、全てが無機質なのだろう。屋内は一様に暗くて、灰色の石でできた壁面はどこまでも飾り気がなく、頑丈そうな木扉が延々と続く。

城内で働く人々の生気はどこにも感じられず、城自体が死んでいるように静かだ。出会う衛兵たちでさえ、死人の仮面でもかぶっているように、誰の表情も喜怒哀楽を映さない。個性のない城内の様子に、ゴーティスは異世界にでも迷い込んだように感じた。

それから、ゴーティスがカイルに最初に連行されたのは、地下に備えられた浴場だ。設備はヴィレールの王城とほぼ変わらない。体を洗うために使用する”泡立ち草”も同じ種類だ。

やはり無表情な女たちが数人がかりでゴーティスの体を洗ったが、彼女たちは大陸で広く共用語となっているユーロ語が話せないらしく、やり取りの際には、その場に立ち会ったカイルが逐一通訳した。女たちの話す言葉は、ゴーティスが聞いたこともない言葉だ。

ゴーティスは裸体を大勢の前にさらすことにあまり抵抗はないが、カイルの視線だけは妙に気に掛かった。城の衛兵など男たちはほかにもいたのだが、カイルは、ねっとりとからむような目でゴーティスの全身を見つめる。彼は通訳する以外にほとんど口をきかなかったが、ゴーティスが浴槽の縁に腰掛けたときに一言だけ、「いい体だな」と感心したように言った。そしてその後、彼は浴場をあとにするまで、ゴーティスに近寄りはしなかった。

ゴーティスが次に連れて行かれた場所は、城の上部にある一室だ。部屋の奥に向かうにつれて幅が狭くなる、台形の部屋だ。壁は白に近い灰色で、天井にほど近い部分には青の幾何学模様が二重の線となって走り、部屋を一周している。

入口の正面には小さな明り取りの窓がある。ちょうどゴーティスの顔の高さだ。だが、小さいとはいえ、眩しすぎるほどの光がそこから室内に溢れだしている。そして、窓の外には、深緑色の山と青々とした水面が額縁の中に納まる絵のように鮮明に見える。水面の穏やかさから考えれば、それは川ではなく湖だろう。

開いている窓から入る風はあまりに清々しく健全で、ゴーティスを誘拐した何者かの邪悪さとは正反対だ。空気の冷ややかさにも、

心を洗われる。
この居城の主人はこんな新鮮な空気を毎日吸って過ごしながら、どうして一国の王の誘拐など考えついたのだろう？　性根が腐っていてもおかしくない。
ゴーティスが入口の前に立つカイルに振り返ると、彼は再びあの熱い視線をゴーティスの体に注いでいた。ゴーティスはなるべくさりげなく、開いた襟を寄せて胸を隠す。
「ジェニーはどうした？」
ジェニーの名をつむぐだけで心が痛むが、ゴーティスは訊かずにはいられない。
カイルが、またか、と呆れて笑った。
「あんた、二言めにはその名だな」
「ジェニーはどこにおる？」
ゴーティスの質問にカイルは不機嫌そうに毒づいた。
「心配しなくたって、あの女なら今頃は飯でも食ってるさ」
「信用できぬ。ここがおまえたちの目的地なら、ジェニーはおまえたちにとってもう用無しだ。俺はこの目であの女の顔を見て、無事かどうかを直接確かめたい」
カイルが大きく肩で息をした。
「あんたも案外しつこいな。もう、女なんかどうだっていいじゃないか。女は金がかかるし、役立たずのくせに文句ばかり言うし……」
この男は女嫌いだ。旅の道中、そして現在も、ジェニーが敬意をもって扱われているとは到底思えない。
ゴーティスの目と合ったカイルが、やや動揺したように両手を上げた。
「わかった、いいだろう。レオポルド様に許しを得て、あとで女に会わせてやる」
カイルが主人の名を明かしたのはこれが最初だ。だが、それが誰なのか、ゴーティスには一人の心当たりも思い浮かばない。
「それで……俺を強制的にここに招待したおまえの主人レオポルド

に、俺はいつ会える？」
　ゴーティスが笑うと、逆にカイルの顔が不快そうにくもった。
「レオポルド様はあんたを晩餐に招くつもりでいる。今夜には会えるさ。豪勢なもてなしを受けるはずだ」
「ほう、嬉しいね。俺を殺す前に最後にもてなしてくれるわけか」
　主人に心酔しているらしいカイルは、ゴーティスの言葉に顔を強張らせた。
「レオポルド様にあんたを殺す気はない。我が主人に認められ、晩餐の席につけることはこの上ない名誉なことなんだ。この部屋だって、美しいゴーティス王には美しい景色のある部屋が似合うとおっしゃって、レオポルド様が特別に用意されたんだ。あんたは……何も分かっちゃいない」
　それはどうも、とゴーティスが口先だけで感謝を述べると、カイルはますます憤慨した。
「だがわからぬ。俺の命が狙いでないのなら、おまえの主人の目的はいったい何だ？」
　ゴーティスが顔をしかめると、それまで雄弁に語っていたカイルの口が止まった。腹痛でも堪えるように腹に手を当て、口惜しまぎれともとれる口調で、ゴーティスに答える。
「今に分かるさ」

＊　＊

　狭い一室に、大男アドレーを含めた大の大人が六人も揃うと、熱気がこもる。ケインのもたらす情報を聞き逃すまいと、ローレン以外は身を乗り出している。
「カイルの向かった先はマキシム王国だ」
　誰かが、ごくりと喉を鳴らした。

でも、それは誰もが予想していた場所だ。何ら、新しい情報ではない。

ケインは反応をうかがうように皆を見回すと、話を進めた。

「彼はマキシム王レオポルドの忠実な部下だ。彼はマキシム王の収集品を各地から調達する役目を担っているんだ。でも、“収集品”とはいっても、マキシム王が集めるのは、物じゃなくて人だ。王の審美眼にかなう、見目麗しい男。王は……ゴーティス王は、今回、その対象となって誘拐されたんだ」

ケインはひときわ気遣うように、ジェニーを見やる。

一瞬の静寂のあと、奇声を発したのはアドレーだ。

「げーっ、人を何だと思ってやがる！　そりゃあ、あの王さまはたしかに綺麗な顔つきだがな、手元に置きたいから連れてくなんて、身勝手にもほどがあるってもんだろ！」

「マキシム王は変わり者という噂なんだ」

アドレーは乱れた髪を両手でかきむしり、うちの娼館のばーさんでもやらなかったのに、と叫んだ。

「ジェニー、大丈夫？」

ケインがジェニーの顔をのぞきこんだ。だが、ケインはジェニーを心配するというより、反応をうかがっている様子だ。

ジェニーがケインに微笑むと、対面にいたサンジェルマンが事務的に尋ねた。

「それは信頼できる情報でしょうね？」

敵意や反発は浮かばなかったが、落胆したような表情がケインの顔を支配した。

「当たり前だよ。それは妻の情報だ。妻は過去の一時期、彼らの仕事仲間だったことがあるんだ」

サンジェルマンが不審そうにライアンと顔を見合わせた。

「彼女が今も仲間でないという証拠は？」

「それは……ないけど」

ケインが口をすぼめると、サンジェルマンが彼に詰め寄った。

「では、その彼女をこの場に連れてきてもらいましょうか。彼女に直接話を聞いて、事の真偽を判断させていただきたい」
「それは無理だよ。彼女の身に危険が及ぶかもしれないから、既に彼女には安全な場所に移ってもらったんだ」
ライアンが眉間に皺を寄せて首をひねる。
「もし女が今も奴らの仲間なら、我々のことを仲間に知らせに走ったかもしれぬな。それとも、仲間を見捨てて先に逃げたか……」
ライアンの意見にサンジェルマンが同意すると、ケインが反発した。
「彼女はそんな人間じゃない！　彼女は時間があれば庭いじりをしているような、おとなしくて真面目な女性だ。きみたちは奴らの仲間だと疑うけどね、私はこの三年間彼女と一緒にいたけど、彼女が三日と自宅を留守にしたことはなかったよ。
ジェニーが王の救出に向かったと聞いて、私に協力するように勧めてくれたのは彼女なんだ。ジェニーを絶対助けなきゃだめだって、私を説得したんだよ。
カイルの手下には、ヴィレールの王城でかつて牢番をしていた男がいるみたいだ。カイルに、王にとって都合の悪い五十二号の存在を教えたのはその男だよ。五十二号は、王を誘き寄せる格好の材料となったはずだ。特に、ジェニーを拉致だなんて言えば――前例のある彼なら、それもやりかねないと思われるだろうからね。
……私の誤解を解くために、ジェニーを手助けするために、妻は昔の仲間を裏切るような形で情報提供をしてくれたんだ。彼女は本当に寛大で、親切な女性なんだよ。私が王の救出に協力するなんて信用ならないんだろうけど、でも、この情報は本物だよ」
サンジェルマンやライアンの緊張はほぐれなかった。二人は、ケインの思い入れが色濃く入った説明に説得されたようには見えない。彼らはまだ真偽をはかりかねているのだ。
けれどもジェニーは、この場に及んで、ケインがわざわざ嘘を並べたてたとは思えなかった。

「マキシム王の城へ向かえばいいのね」
ジェニーが漏らすと、アドレーが鼻を指でこすりあげながら、笑って同意した。
少なくとも、これで、ジェニーたちが目指す目的地が決まったと考えていい。あとは一刻も早く、現地を目指すべきだ。

宿は、寝返りの音さえはばかられるほどに、ひっそりと静まりかえっていた。ジェニーの眠る部屋には三人の男がいるはずだが、呼吸すらしていないかのように静かだ。隣室のアドレーの鼾もいつのまにか治まっている。
でも、その静寂とは正反対に、ジェニーの心中は騒がしい。王城を出立した際とはまた違った緊張感と興奮だ。明日からは、ジェニーの歩む一足ごとに、王に確実に近づいていく旅となる。今までの、王の捜索が目的だった旅は王の救出へと形を変えるのだ。
はやる心に急かされるように、ジェニーは暗闇の中で身を起こした。脇に置いていた剣を取り、兄を起こさないようにそっと床に降り立つ。
「ねえ」
闇に溶けるような囁き声がジェニーの足を止めた。
「外に行くなら一緒に行くよ」
ジェニーの先で、ケインが目を開く。彼はジェニーの返事を待たずに、寝台から転げ落ちるようにして床に降りた。
「起きてたの？」
「まあね。サンジェルマンにいつ襲われるかと思うと、なかなか寝付けないよ」
ケインも剣を取り、ジェニーの横に並ぶ。以前と比べても彼の肩の高さは同じなのに、痩せて華奢だった体に厚みが加わっている。その変化がジェニーに時の経過を感じさせる。
ケインが扉をゆっくりと開いていたときだ。低い男の声が二人を引きとめた。

「どこに行く？」
ジェニーがはっと振り向くと、隅の寝台でライアンが体を起こしているところだった。彼はケインを一瞥したあと、ジェニーを疑わしそうに見据えた。
「その男とどこに行くつもりだ？」
ライアンの手は剣の柄を握りしめていた。それはまるで、ジェニーの返答次第では、二人に斬りかかろうとでもするように。
「ちょっと外に……眠れないから風に当たりに行こうと思って」
しかし、ジェニーの返答はライアンの疑いを一掃するまでには至らなかったらしい。彼の手は剣から離れず、彼の視線もジェニーから動かなかった。
「ライアン、私は逃げないよ」
静けさを破り、ケインが小声で言った。
ジェニーがケインを見上げると、彼はにこりと笑い、ジェニーの肩に手をまわす。
「ジェニーだってどこにも行かないよ。それぐらい……きみにも分かってるはずじゃないか」
次にジェニーが見たライアンからは、威圧的な眼光が失われていた。だが、彼の手はあいかわらず剣の柄を握ったままだ。ジェニーと視線がぶつかると、いいだろう、と彼は仏頂面で頭を振った。
「すぐに戻ってきます。あまり遅かったら、様子を見に来て下さい」
ライアンは胡散臭いものでも見るように、ケインにちらりと視線を動かした。
「承知した。あまり遅くなるな、ジェニー殿」

宿の裏手には周辺の宿屋と共同の水場と馬屋がある。建物の壁面に沿って蒔が高く積まれていて、土の地面には数個の桶が転がっていた。人の気配はなく、雑然とした印象だ。
戸外に出るまで沈黙を守っていたジェニーとケインは、水場の水受けにたまった水面に反射する月光を見て、どちらからともなく顔

を見合わせる。数年前の逃避行の際、二人が馬を黙って拝借したのもこんな夜、小さな宿屋の裏にあった馬屋からだ。

だが、懐かしさに浸る間もなく、ジェニーは馬屋の前にいる先客を見つけた。壁を背に、地面に足を投げ出して座っている大きな男。

ジェニーとケインが男の正体を見極める前に、男が手を振った。それから、彼は二人に向かって、大きく手招きする。

「アドレーだ」

二人がアドレーに近寄ると、彼は嬉しそうに笑った。

「興奮して眠れないんだろ?」

彼は二人を交互に見たが、その言葉はジェニーに向けられたようだ。少し、とジェニーが返すと、彼は愉快そうな笑顔に変わった。

「心配すんな、シヴィルにはすぐに会える」

「シヴィルって誰のこと?」

ケインがジェニーに振り返る。

「ゴーティス王よ」

答えながら、ジェニーは彼の名を言うだけで胸が高鳴る自分に気づく。彼の姿を、彼の気配を感じない日々が続いて、ジェニーの心が彼を渇望しているのだ。

昼間の陽光がないおかげで、ジェニーの頬に広がっているだろう赤らみは、二人の男に見えはしないだろう。ジェニーはそう思っていたが、アドレーの目は、ジェニーのそんな胸の内を見透かしているかのようだ。穏やかで温かい微笑をたたえているが、ごまかしの通じない瞳だ。

ジェニーは自分から注意をそらせようと、ケインに言った。

「王が子どもの頃、王城を抜け出して街に出たことがあったの。王とアドレーはそのときに知り合ったのよ。そのときに王が名乗った名前がシヴィル。彼は、王を助けてくれた恩人なの」

ジェニーがそう説明すると、アドレーが首元を指でかきながら、居心地が悪そうに二人から目線をそらした。

「いや、まあ、助けられたのは、どっちかっていえば俺の方だ。ド

ノヴァンのことも、エレノアの妹のこともさ――」
と、不意に、アドレーがジェニーの腰に差された剣の鞘を掴んだ。
「こいつはシヴィルの剣じゃないか！」
アドレーは食い入るように剣を見つめ、剣を放そうとしなかった。
「よーく覚えてるぜ。ちょうど十年くらい前か。あいつはあんたくらい、いや、もう少し小さいぐらいの背丈で、この立派な剣を持ってた。街を出歩くにはこんなたいそうな剣が邪魔でしかないのに、シヴィルはどうしても手放そうとしなかったんだ。命と同じくらいに大切だ、って言ってな」
アドレーは当時を懐かしむように鞘を大事そうにさすり、彼の前にたたずむジェニーを見上げた。
「この剣は王から貰ったの。とても大事にしていた、って私も聞いてるわ」
ジェニーが剣に手を伸ばすと、アドレーは手を開き、ジェニーに剣を譲った。ジェニーの手が剣の柄から鞘に移り、表面の意匠を触っていく様を、アドレーは静かに見守っている。
「私も、この剣を大事にする」
指先に感じられる鞘の凹凸は、ジェニーにゴーティス王の眉や鼻筋の感触を呼び覚ます。その愛すべき感触を失ってから、早どれぐらいの時が経つのだろう。
アドレーが、ジェニーを励ますように腕を軽く叩いた。
「あんたが剣を大切に扱うなんてことは、シヴィルはあんたにそれを渡す前から、よーくわかってるさ」
アドレーの誇らしげな笑顔を見ると、ジェニーは不覚にも涙をこぼしそうになる。王を取り戻す瞬間まで、それまで、ジェニーは誰にも涙を見せないと誓ったのに。
アドレーは、ジェニーのそんな我慢を心得ているようだった。
「シヴィルがいないときでも、その剣はあんたの身を守ってくれる。あいつはあんたが大事なんだな。あんたがシヴィルを大事に思うように」

ジェニーは素早く頷いた。そして、剣を眺めるふりをして、アドレーから目をそらした。それ以上に彼を長く見続ければ、涙が怒涛のように溢れ、きっといつまでも止まらない。

ジェニーが一連の高ぶる感情をどうにか抑えこんで顔をあげると、隣にいたはずのケインは、既にその場から消えていた。

「あんたの恋人にはなれないって分かって、先に部屋に戻ったのさ。だけどまあ、あの手の男は、実はたいして傷ついちゃいないね」

アドレーはのんきに欠伸をし、雲の合間から再び姿をのぞかせた月を見上げる。

「あんたも早く部屋に戻って寝た方がいい。送ってやろうか？」

「ううん、大丈夫。あなたはまだ戻らないの？」

「ああ、俺はまだな」と、彼は夜空を見上げ、目を閉じた。「今日は、エレノア――妻の月命日なんだ。もう少しここであいつとしゃべってくよ」

ジェニーが驚いたのに気づいて、アドレーは目を開き、肩をすくめてみせた。

「もともと体が丈夫じゃなかったからな。医者には、長生きした方だって言われたよ」

「奥さん……いつ亡くなったの？」

それまで笑みが決して絶えなかったアドレーの唇から、一切の笑みが消えた。

「一ヶ月前だ。最後の最後の瞬間まで、あいつはシヴィルに感謝して、会いたがってたよ。

でも、エレノアは幸せだったよ。幼い頃から家族が散り散りになって、一生のうちで二度と会えることはないと思ってたのが、シヴィルが苦労して捜し出してくれたおかげで、あいつは妹に再会できたんだ。最後の二年は一緒に暮らせたし、妹はあいつの死に目に会うこともできた」

そして、彼はあまりに寂しそうな笑顔を浮かべる。

「唯一のエレノアの心残りは、シヴィルに感謝の意を表せなかったことだ。あいつにできなかったことは、俺が何とかして叶えてやりたかった――と言っても、俺たちの身分じゃ、シヴィルに会うことさえままならない」

だから、アドレーは褒賞金のかかるローレンを捕らえた者として、まずはゴーティス王のいる城に入ろうとしたのだ。ところが、肝心の王は何者かに誘拐されてしまっていた。

ジェニーがアドレーの頬にキスをすると、彼が唖然としてジェニーを見上げた。

「あんた、俺はただの庶民だぜ？」

「私もそうよ」

ジェニーは全身をかけめぐる精気を心地よく感じながら、彼を見つめ、言い聞かせるように言った。

「王に会って、直接お礼を言ってあげて」

王を救い出す理由が多ければ多いほど、王が無事に帰郷できる確率もきっと上がる。

私たちは必ず、王を助け出してみせる。

第二部　7．王の帰郷－8（後書き）

とりあえず、GW終わりがけですが、1回目の更新。
GW中に予想外に時間がとれず、最終回は次の週末頃になりそうです。
すみませーん。

第二部　7．王の帰郷－9　（前書き）

【注意】

不快に感じられるかもしれない描写が出てきます。

すっとばしてもらいたいところですが、必要な場面ですので、ご容赦ください。

第二部　7．王の帰郷ー9

カイルが去ったあと、部屋に一人取り残されたゴーティスは、小さな四角い窓から外を眺めた。青い湖面、その背景となる深緑色の木々が密集する山。だが、正面の山の両隣にあるのは禿山だ。周辺には、断層が目立つ険しい山塊が広がっている。

首を伸ばして窓から顔をのぞかせたゴーティスは、その窓の下が崖であると気づいた。崖面の下方には、黄土色や明るい茶色の屋根が連なる、小さな集落がある。どの家も小さく、建物の間が非常に狭い。湖と崖に挟まれ限られた平地に、家を無理やりに詰め込んだような町だ。人は一人も見えず、通り道すら、ゴーティスの目では確認できなかった。

「失礼します」

おもむろに聞こえた女の細い声で、ゴーティスは入口に振り返る。入ってきたのは女が三人、いずれも若い娘ばかりだ。先頭に立つ、灰色に近い金髪の女がゴーティスに軽く膝を曲げ、挨拶した。

「王の着替えをお持ちしました。晩餐会にはこちらの服をお召しください。私どもが着替えを手伝います」

強い訛りはあるが、流暢なユーロ語だ。

女は目と目の間がやや離れていたが、灰色がかった青い瞳が印象的だった。えらが目立つというほどではないが、比較的四角い顔をしている。肌の色は驚くほどに白い。

彼女はゴーティスの視線に気づき、濃い眉毛を少し寄せて、恥らうように頬を染めた。

ゴーティスが異国調の装いに着付けられた頃、これまで旅商人の軽装でしかなかったカイルも黒と赤の服に身を包み、ゴーティスを迎えにやって来た。ゴーティスを一目見るなり、彼は満足そうににやりと笑う。

「我が主人がお待ちかねだ」
黒塗りの大きな扉を抜けると、給仕らしき男女が壁に沿って一列に並んでいた。部屋の中央には、扉と同じような、黒塗りの楕円形のテーブルがある。テーブルの短辺側ではなく長辺側に、お互いが向かいあうように、皿が二名分用意されていた。しかし、部屋のどこにも主人らしき姿はない。
ゴーティスが席で待つこと数分、主人の到着が知らされた。
とうとう、レオポルドとの対決のときが来たのだ。
カイルが扉を開くなり、まるで走ってきたかのように息を切らし、髪の分け目に白髪が目立つ男が入ってくる。
男の口髭と眉毛は濃く茶色かったが、髪の生え際はほぼ真っ白だ。しかし、えらのはった顔はたるみが目立たず、肌にはつやがある。唇も血色がよく、周りに皺があまりない。一見、孫のいる世代にも見えたが、彼の実年齢は若そうだ。
男はテーブルの前で立ち止まると、丸く大きな灰色の瞳をさらに大きく見開いて、ゴーティスを見た。
「おお、ゴーティス王！」
ゴーティスは彼の顔をもう一度よく注視し、心当たりを総ざらいしてみた。だが、目の前の男にゴーティスは面識がないように思う。
男は両手の指にはめた水晶をきらめかせ、興奮したように数度、手を打った。
「これはまさに……近くで見れば見るほどに、麗しい王……」
男はゴーティスの正面に席を取り、ゴーティスと視線が合うと、口元をだらしなくゆるめて笑顔になる。彼の視線が、ゴーティスの顔や体に無遠慮にまとわりつく。
吐き気がした。浴場でカイルに感じたときと同じ不快さが、ゴーティスの背に走る。
「以前から群を抜く美しい少年ではあったが……おお、噂に違えぬ麗しい王に成長されたこと。王にこうして直にお会いできて光栄だ。ゴーティス王、我が国は王を歓迎する！　私はマキシム王レオポル

ドだ」
　マキシム王がゴーティスに敬意を表して頭を垂れたが、ゴーティスは返事をしなかった。ここは一貴族の住まいにしては立派だと思っていたが、一国の王が住む居城だとは夢にも思わなかった。まさか、仮にも国を預かる立場の人間が、他国の王であるゴーティスを白昼堂々と誘拐するとは、思いもしなかったのだ。
　だが、マキシム王は、ゴーティスが呆れようが怒ろうが、気にしていない。ただ目尻を下げてゴーティスを見るだけだ。
「我が国の衣装がよう似合う」
「お褒めにあずかり光栄だ」
　ゴーティスが初めて口を開くと、マキシム王は目を輝かせた。
「気に入られたなら何着でも用意させよう」
「せっかくだが結構だ」
　ゴーティスは頭(かぶり)を振った。
「マキシム王、国に招待いただけるのは嬉しいが、やり方がいささか乱暴ではないか？」
　マキシム王の視線が入口付近にいたカイルに流れた。
「おや、私の部下が礼を欠いたか？　私はあの男を信頼して一任しておったが……失礼があったならお詫びしよう」
　カイルは床を見つめていたが、マキシム王が頭を下げると、ひどく苦痛そうに顔をしかめた。
「謝罪は結構だ。マキシム王、この国への正式訪問はあらたに調整させてもらうとして、ここはひとまず、俺が本国に帰る手はずを整えてもらえぬか？　王の俺が突然いなくなれば国も困る。統治者である貴殿であれば、それもご理解いただけよう」
　マキシム王は納得しかねる様子で、椅子に腰を降ろした。
「ふむ……。だが、数日間くらいよかろう？　正妃がおらぬ自由な身だ、せっかくの機会を存分に楽しめばよいのに」
　ゴーティスはまた頭を振った。
「日程については事前に調整させてもらいたい」

ゴーティスが念を押すと、マキシム王は不思議そうに首をかしげた。

「私に合わせて日程を調整した結果、本日の対面になったのだが…いけなかったか？」

「……なに？」

マキシム王の発言にゴーティスが眉をひそめると、彼はカイルに何やら合図を送った。カイルを見送り、ゴーティスがマキシム王を見ると、彼は満面の笑みでゴーティスの視線を迎えた。

「王にお渡しするものがあったことをすっかり忘れておった。今、奴に取りに行かせたゆえ、しばし待たれよ」

カイルは間もなく部屋に戻り、マキシム王の席の隣に立った。彼は主人を見惚れるように見つめ、マキシム王が耳打ちすると、幸せそうに微笑む。ゴーティスが不審に思ってカイルを見ていると、それに気づいた彼の唇に、悪意に満ちた笑みがいっぱいに広がった。

突然、カイルがテーブルの上に何かを放り投げた。淡い黄色に赤い斑模様の、重量のある物体。その端が皿にぶつかって騒がしい高音が発せられ、ゴーティスは思わず目をつぶった。

目を開くと、ゴーティスの前にある皿の上に、鞘に納まったままの短剣があった。見覚えのある剣（つるぎ）の図柄、そして、ゆるやかな曲線を描く鞘の形。

（これはジェニーの短剣だ）

短剣の先を目で追ったゴーティスは、その柄をしっかりと握る血まみれの女の手を見とめ、息を飲みそうになる。女の小さく細い指がつく手には、肘より先がない。その腕は、ジェニーが拉致された日に着ていた、淡い黄色の服にぴったりと包まれている。

カイルが笑った。

「はは、あんたの大事なジェニーだよ！」

ゴーティスが怒りを込めてマキシム王を見ると、彼は眉を下げ、申し訳なさそうに肩をすくめた。

「この男は短気でね。聞けば、王の愛妾ジェニーとやらは少々勇ましい女とか？　カイルの短気さゆえに、いや、ちょっとした手違いが生じてしまったようだ。まことにすまない」

ゴーティスは彼の表面的な謝罪を無視し、短剣を握る女の手に目を移した。その手の小ささはジェニーと変わらないが、どの指もゴーティスが覚えているジェニーとは違う。爪の形も違う。ゴーティスは殊更、彼女の手のことならよく知っている。

「……酷いことを」

ジェニーの身代わりとなって、腕の半分を切り落とされた女がいる。だが、その事実は、彼らがジェニーを手の内においていないと示すものだ。本物がいれば、ここにある手はジェニーであるはず。

ジェニーは城内にはいない。おそらくは、城に入ってもいない。

ゴーティスは卓上に投げ出された、哀れな女の片腕を見つめた。血はすっかり乾き、黒に近い色に変わっている。

「こやつはジェニーではない。ジェニーをどうした？　この国に入る前に山中で捨てたか？」

ゴーティスが顔を上げると、それまでにやけていたカイルが唇を閉じた。

ジェニーがこの城内にいないことは確かなようだ。そして、城にいないのなら、彼女の命が既に消えてしまっている可能性も高い。

彼らが、女に対する最悪の拷問の末にジェニーを死に至らしめたのなら、ゴーティスへの謝罪など無意味だ。自分の身だけ気に掛ければいいとすれば、ゴーティスがこの城に滞在する目的は一つしかない。彼らの末路も、一つしかない。

ゴーティスは、見知らぬ女の手が握る、ジェニーの短剣にかけて誓う。

このヴィレールの王を居城に連れてきたことを、彼ら自身が死んだ後にまで、必ずや後悔させてやろう。

四日間が何ごともなく過ぎた。マキシム王の意図は掴めずじまいだが、彼はゴーティスを解放する気だけはないようだ。

初日以降、マキシム王と面会する機会はなく、ゴーティスが部屋から出ることもなかった。カイルも一度も姿を見せない。食事は毎日提供されたが、毒を隠しにくいパン以外には口をつけなかった。

窓から見える景色はちっとも変わらなかった。青い湖と緑色の山、その色の濃淡もまったく同じ。崖下を見下ろしてみても、やはり人影は見えない。

窓の正面に見える山を毎日眺めていると、ゴーティスは、山中に無残に捨てられたジェニーの体が朽ちていく様を想像する。

自分と関わったばかりに、ジェニーが不本意な死を遂げる――。

気が狂いそうだ。ジェニーが行方不明だった二年間で、ゴーティスは一生分の苦痛を負ったはずなのに。

ジェニーと再会して二度とその手を放すまいと決めたのに、マキシム王はいとも簡単に、ゴーティスと繋がれた彼女の手を切り去ってしまった。カイルがテーブルの上に投げた、あの女の手のように。

マキシム王とカイルの命を奪っても、ジェニーは帰らない。

だが、それでも、たとえ彼女が戻らなくても、ゴーティスは二人に報復してやろう。何度も、何度でも。何百回彼らを殺したとしても、殺し足りないだろうけれど。

そして、五日目の夜、事件は起きた。真夜中のことだ。

心身ともに消耗していて、ゴーティスは寝台の上で眠りに落ちかかっていた。夢に足を踏み入れる一歩手前で、ゴーティスは扉が小さくたたかれる音を聞く。

「ゴーティス王……？」

開いた扉から体を滑りこませてきたのは、ユーロ語を操る女だ。

ゴーティスは咄嗟に寝台の隙間に手を伸ばし、武器として代用できる“串”を取り出した。

「何の用だ」

女は寝台に座ったゴーティスの前で、床に膝をついた。
「レオポルド王より、王をお慰めするよう、仰せつかってまいりました」
ゴーティスはその言葉を疑い、女の全身に目を走らせた。女の身に着ける薄い生地の下に武器は隠せないだろうが、油断は禁物だ。
「俺に慰めは必要ない」
女は頭を深く垂れ、懇願した。
「どうか、お願いでございます。今宵は私をお側に……」
「帰れ」
女の肩がひどく揺れていた。緊張しているのか、固く握り締められた彼女の手も、気の毒なほどに震えている。
女が顔を上げ、ゴーティスは後ろ手に持った串を強く握った。女が立ち上がりながら、肩から服を滑り落とす。薄手の白い服の下から、女の白い肌が現れた。
「俺に近寄るな」
ゴーティスが立ち上がっても、女は止まらなかった。
「ゴーティス王……」
女の手がゴーティスの胸に伸び、反射的に、ゴーティスは彼女の両手首を捻りあげて、床に押し倒した。女の顔にはっきりとした恐怖が浮かびあがったが、それはゴーティスに対してではない。女は“何か”にひどく怯えていた。
そのとき、ゴーティスはかすかな異音を耳にして、入口扉に振り返った。人の気配だ。ゴーティスが感じた異変は、扉の外に存在する見張りの衛兵ではない者を感じとって、強烈な警戒心にすり変わる。
すると、扉の上部に付いた小さな覗き窓が横に開いた。ゴーティスが不審に思って見ていると、そこに二つの目玉が光り、ぎょろりと動いた。その不気味な目がゴーティスと合ったとき、ゴーティスは隠し持っていた鉄の串をそれに向かって思い切り投げつけた。
「ぎゃあっ！」

「レオポルド様！」
廊下で衝撃音がして、その直後、カイルが烈火のごとく怒り、入口扉から乱入してきた。ゴーティスは女を盾にして身を守ろうとしたが、間に合わなかった。
「くっ……！」
「おまえ、レオポルド様に何をする！」
カイルに胸ぐらを激しく揺さぶられ、寝台で強打したゴーティスの頭の中がぐらついた。肘に焼けるような痛みの感覚があるのは、カイルに飛びかかられた瞬間に床にぶつけたからだ。
ゴーティスのぼやけた視界の真ん中に、丸い顔に埋めこまれたような、黒く小さな瞳が見えた。カイルの荒い息が鼻の頭にかかり、ゴーティスは顔をそむける。彼がゴーティスの体に馬乗りになっているせいで、足が自由に動かない。
「……覗いておったとは悪趣味な……」
「うるさい！　女好きなおまえの為に、レオポルド様はご親切にも女を用意してくださったのだ！」
「……俺が女をどう抱くか、見たかっただけだろう」
「何を抜かすかっ……！」
カイルの手がゴーティスの顎にかかると、マキシム王の声が飛んだ。
「私に怪我はない！　カイル、王に手を出してはならん！」
カイルの手が脱力した。
「ああ、なぜです！　この王はレオポルド様を侮辱したのですよ！」
再び彼の手がゴーティスに伸びると、マキシム王は彼を怒鳴りつけた。
「カイル、王の美しい顔に傷をつけるつもりか！　ならん、それだけは絶対に許さんぞ！」
カイルは吼えるように短く叫び、ゴーティスをにらみつけた。そして、ゴーティスの体から降りた直後に、彼はゴーティスの痛めた腕を足で踏みつけた。あまりの痛みに、ゴーティスの気が遠のいた。

「カイル！」

痛みを堪えて止めていた息を吐くと、ゴーティスの肩と腕に強烈な痛みが戻ってきた。肘から下が痺れている。床にぶつけた肘は、骨にひびが入ったかもしれない。

「すまなかった、ゴーティス王。奴は乱暴な男でな……。怪我の手当てをさせよう」

マキシム王がゴーティスの横にしゃがんだ。

彼の手がゴーティスの腕に伸び、ゴーティスは咄嗟に逃れようとした。だが、彼の手はゴーティスの負傷した腕を押さえつけ、もう片方の手で、ゴーティスの二の腕から手首にかけて指で触る。虫唾が走る感触だ。そしてその間中ずっと、マキシム王の瞳はゴーティスの顔から離れなかった。

＊　＊

カラントの街から合流したケインにユーゴは最初こそ愛想良く話しかけていたが、北の関所のある町に入る前には、彼は最後尾にいるサンジェルマンの隣に移っていた。彼はいまだにケインの正体に気づいていないが、ようやく、ケインが逃亡した罪人の身分だと知ったようだ。ケインがオルセーという貴族を名乗っていても、姪ジェニーの知人だとしても、ユーゴにとって彼は懇意にする対象ではないのだ。

サンジェルマンはカラントを発って以来、一行の最後尾にずっと留まっていた。その位置にいれば、たとえケインが不審な行動をとったとしても、真っ先に目につく。

サンジェルマンはケインの言葉全てを鵜呑みにはしていない。王に恨みを抱いていてもおかしくないケインが、彼が好意を持つジェニーの為とはいえ、王の救出に動くかは甚だ疑問だ。むしろ、逆で

はないか？　いつのまにか剣を使えるようになっていた彼に、サンジェルマンはさらに懐疑的になっている。

ケインの方もサンジェルマンの疑いを察してか、常に距離をとり、前方にいるジェニーやアドレーの近くから離れようとしない。宿屋でも休憩時でも、彼はサンジェルマンとの接触を極力避けている。必要でない限り、二人は一言も言葉を交わしていない。

先頭を行くジェニーたちの頭の向こうに、町のはずれにある関所の門が見えてきた。町の外からでも望める黄土色の壁が、国境の存在を皆に知らしめるようにそびえ立っている。サンジェルマンが今目にするその門を抜け、カイル率いる一行は王を国外に連れ去ったのだ。

（王を国外に連れ去るなど、よくもできたものだ……！）

サンジェルマンは沸々とこみあがってくる怒りを、手のひらの中に閉じ込めた。隣に並ぶライアンに注意を向けられたのに気づき、サンジェルマンは手を握り締めたまま、前方でローレンと談笑するアドレーに視線を移した。

王城を出発してから、サンジェルマンはその行為をもう幾度繰り返したことか。強く握りすぎて左手が震える。呼吸を整えつつ、怒りが抑制できるところまで落ち着くのをひたすら待つ。

でも、そのうちに、サンジェルマンの怒りが手のひらの中に収まりきらなくなる時が、必ず来る。

国境の町でサンジェルマンたちは宿をとった。宿屋にライアンとジェニー、ケインを残し、残りの者たちは、食料と野宿用の品を確保するため、街に出かける。

約一週間前、オルセー家の依頼を受けた商人たちが北の関所から出国したと確認された。何度か出入国を繰り返している商隊だという。行き先はフランドル地方と申告したらしいが、ローレンが以前

話したように、彼らはマキシム王国を目指している線が濃厚だ。
マキシム王国は陸の孤島と呼ばれる場所だ。岩塩のとれる山塊の切り立った崖を背に、静かな湖との間にあるわずかな平地に建立された小さな国。国に入るには、山側に一ヶ所しかない関所を通り抜けるか、船で湖を渡る。そして、そのどちらを選択するにしろ、山越えを伴う。
夕方前に宿屋に戻ってきたサンジェルマンは、反対方向から歩いて戻ってくるユーゴを見つけ、驚いた。カラントで深夜戻ってきたユーゴをライアンが一喝してから、彼はさすがに夜遅くまで出歩くことはなくなった。だが、活気のあるこの街には飲み屋も娼館も多く、ユーゴは誘惑に勝てず、多少遊んでくるだろうとサンジェルマンは思っていたのだ。
宿屋の前で会ったユーゴは落ち着かない様子だった。
「街の声をお聞きになりましたか、サンジェルマン様?」
「いや。何か気になる噂が?」
ええ、とユーゴは頷き、二人は宿に入る。
宿の主人は少し前に来たばかりらしい旅人にちょうど対応中だった。二人は一階を奥に進み、裏口に通じる扉に向かう。ユーゴが先に立って扉を押し、二人はまだ明るい外に出た。
「サンジェルマン様、私の入った店の先々では、王の誘拐の噂で持ちきりでしたよ」
別にそれほど驚くことではない。いくら隠し通そうと、遅かれ早かれ、どこかから漏れてしまうのは予想の範疇だ。
「ライアン殿が城に連絡し、軍の部隊を動員させている。もうこちらに向かっているはずだ。軍が動けば、王の不在も人々の知るところになろう」
ユーゴが首を激しく振った。
「いえ、皆は、ジェニーが一部の共を連れて王の救出に向かったことを知り、騒いでいるのです。彼らはなぜか、私たちが北の関所を通過することを知っているのですよ! 自分たちもジェニーに続け

と、彼らは武器を手に取り、関所の前に人が集まり始めています」
街は様々な人と荷物が行き交う。その活気の裏で、非日常の事態が起こっていることなど、サンジェルマンはまったく気がつかなかった。
「それは本当か、ユーゴ殿?」
二人の脇から、男が会話に割り込んできた。ライアンだった。
「この町の部隊ではなく、一般庶民からそんな声が出ているということか?」
ライアンは汗に濡れた額を腕で拭いながら、ユーゴに確認する。
「そのとおりです。関所に向かう途中で、ジェニーが彼らの言う“王のジェニー”と分かれば、我々は民に囲まれますよ」
ライアンが不可解そうに眉を寄せ、後ろを振り返った。彼の後方に、ケインとローレンが並んで立っていた。そしてそのもっと奥にある水場では、そのジェニーが手を洗っていた。

ヴィレールの国境を越える前夜、旅を通して決して協力的でなく、友好的でもなかったローレンが、全員を一室に集めて話し始めた。
「マキシム王国に着くまで、たぶん、二日だ。俺以外にあの国を訪れた者は……ここにいないだろう? 入国するにあたって、ひとつ提案がある」
ローレンは荷物の入った袋に手を入れ、白い石のような塊を取り出した。手のひらに収まる大きさだ。片面が平らに削られ、赤と黒の幾何学模様が細かく彫られている。彼はそれを、マキシムの通行証だと紹介した。
「ああ、でも、提案じゃなくて指示か。ここにいる皆、それに俺たちを追ってきてるヴィレール軍にも、今から言うことに従ってもらいたい。でなきゃ、余所者を歓迎しないあの国に入るのは無理だ」
立地的にも孤立している国は、近隣諸国から攻撃や干渉を受けない代わりに、外部の人間が流入することも少ない。マキシム王国が

閉鎖的なのは有名だ。商品価値の高い岩塩や水晶といった天然資源に恵まれているのに、彼らはごく限られた相手としか貿易を行わない。そして、その希少さゆえに、商品の値はつり上がるのだ。

サンジェルマンは居並ぶ面々の顔を見た。ライアンからの反論もなかった。

ローレンはジェニーを見てにこりと笑い、ライアンに向いた。

「まず、ヴィレール軍だ」

ローレンは、テーブルに広げた地図上にあるマキシム王国の関所を指差した。

「軍は山方面からじゃ国に入れない。一部は山にある関所付近に残ってもいいけど、湖の対岸から船で来るんだ。どれだけの人数が来るのか知らないけど、千人ぐらい――」

ライアンがその倍以上の人数に訂正し、ローレンは肩をすくめた。

「そんなにいるなら、マキシムを湖側から封鎖できる」

ライアンはにこりともせず、淡々と返した。

「わかった。すぐに手配しよう」

それから、ローレンの指は地図を移動し、関所の隣にある山の上に置かれた。

「これがマキシム王のいる城の裏手にある山だ。ここは岩塩の採掘が行われていて、塩坑が何本か通ってる。当然、そのどれもマキシム側からでないと入れないし、途中で行き止まりになってるんだけど、二本だけ、外に通じている塩坑があるんだ。山の反対側、つまり、国外だよ。しかも、その二本とも、入口は城の地下にある」

アドレーが口笛を鳴らした。

「城からの抜け道か！」

「そういうこと」

ローレンは笑い、仲間を見回す。

「だから、一本の道は通れないように破壊して、もう一本の塩坑を抜ければいい。道は険しくて曲がりくねってるけど一本道だ、城まで迷うことはないよ。俺は、皆が塩坑をたどっている間に、関所を

通って城に入る。皆が着く前に、誰かが城側の入口の鍵を開けておかなきゃならないから」

「でも、それじゃ、ローリーが危険だわ」

隣で心配するジェニーを、ローレンがじっと見つめた。

「危険には慣れてるよ」

「だけどローリー、剣だってうまく扱えないでしょう？」

「前よりはね」

ローレンが左手を上げて笑っても、ジェニーは納得しない。彼はさらに笑って、妹の頬を手で撫でた。

「ここにいる全員が、おまえだって、かなり危険なことをしようとしてる。おまえは俺が止めたところで行くのをやめないんだろう？……だったら、その危険を少しでも減らすぐらいしか、俺にできることはないよ」

ローリー、と呟いたジェニーが兄の胸に抱き寄せられた。ローレンは硬い表情で彼女の頭に唇をつけ、彼女の背を撫で続けている。

旅の途中、サンジェルマンはジェニーが涙を堪える姿を何度も目にしてきたが、このときばかりは、兄の思いやりに接して彼女も泣き出すだろうと思った。彼女の瞳はたしかに震えていた。

しかし、ジェニーは泣かなかった。

壁面の一点を見つめるジェニーの瞳には、無事な王の姿しか映っていない。涙で瞳をにごらせ、彼女は王の姿を見失いたくないのだ。実際に王を目の前にするまで、彼女は、涙に屈するつもりはないのだ。

「私が一緒に行こう」

サンジェルマンの放った言葉に、ローレンが驚いて顔を上げた。

「私の顔を知る者がいるか？　いなければ、私が同行する」

「冗談じゃない！　あんたに守ってもらうほど、俺は落ちぶれちゃいない！」

「誰が守ると言った？　私が同行するのは、おまえが敵に寝返らず、約束どおりに入口を開けるのを見届けるため。私は王を救い出した

いだけだ」

ローレンはその申し出をはねつけ、必死で抵抗した。だが、彼が最終的にサンジェルマンの同行を受け入れたのは、ジェニーが説得したからだ。

ジェニーは旅を始めるときから、サンジェルマンが兄の強力な協力者となることを、既に知っている。

第二部　7．王の帰郷ー９　（後書き）

お話を読んでくださって、ありがとうございました。

なんだかんだと忙しく、更新が予定より遅くなってしまいました。

一応、完結までは残り2話です。

遅くても次の週末が終わるまでには、最終話をアップしたいと思います。

第二部　7．王の帰郷－１０（前書き）

更新が滞ってしまいまして。
とりあえず、１話分のみアップします。
次回の更新がラストとなります。

第二部　7．王の帰郷－10

北の関所前は出国する人々でごったがえしていた。旅行者や行商隊が多く、街の市場並みの混雑だ。手続きを待つ人々が長い列をつくり、待ちくたびれた老女が疲れた様子で地面に座っている。

関所の門の脇ではこの地区の軍の者たちが集結し始め、武器を手にした庶民たちの姿もちらほらと見えた。だが、国境沿いの町は軍の部隊がいる日常に慣れていて、彼らの物々しさは街の喧騒の中にすっかり溶け込んでいる。ユーゴが心配したような、興奮した民にジェニーが囲まれる騒ぎは起きなかった。

国境線を踏み越えても、ジェニーの周りに広がる風景に何ら変わりはなかった。行き交う人々の顔に違いがあるとも思えない。だが、国をまたいだというだけで、ジェニーが吸い込む空気は微かに冷たく、そよぐ風はヴィレールのように優しくない。

ローレンの道案内に従い、一行は東に道をとった。進む道の正面には万年雪を冠る高い山、それを守るように山が連なっている。目指すマキシム王国はその山脈の中だ。山の小国はヴィレールより標高が高く、春を迎えたばかりの季節らしい。

“ジェニー”

急に王に呼ばれた気がして、ジェニーは山脈を見渡した。頂上だけに緑が生い茂り、青々とした木々をむしり取られた後のような白い山肌が見える。緑に覆われた山ばかりではない。

“ゴーティス王？”

ジェニーが心の中で王に呼びかけ、山脈の端々まで目で追っても、彼の姿は現れない。声も聞こえない。他の仲間たちは、何も感じていないようだ。

ジェニーは目を瞑り、左手で王の剣の柄を握った。

（私たちが行くまで、絶対に無事でいて）

王が目にしただろう、白い雪を頂く山を見て、ジェニーは彼の無事を強く願う。

小さな滝の裏側にあった城へ通じる道への入口は狭く、周囲を崩し、落木で隙間を詰めることで穴は完全に塞がれた。ジェニーたちが、そこから山腹にある第二の入口に移動できたのは、既に日が傾いた頃だった。

ローレンは直立する大木のてっぺんを指差し、皆に言った。

「あそこに月が見えたら塩坑に入っていい。それまでは、採掘者たちが作業しているはずだ」

ローレンは幾分緊張した面持ちで、ジェニーを見た。夕暮れが近づき、木々の上にある狭い空の青さは薄れていたが、月はどこにも見えなかった。

「俺たちは今夜のうちに城に入る。鍵を開けるのは城中が寝静まる真夜中だ。それまでは入口付近で待機してるんだよ」

ジェニーは息を鎮め、兄に頷いた。

「わかったわ」

その返答を聞き、ローレンの瞳が笑う。

「ジェニー、今ならまだ引き返せるぞ。その気はないのか？」

ローレンは笑っていた。妹の頑固な性格を、彼は幼い頃から理解している。ジェニーから“やめる”という返事を引き出せないことは、彼はとっくに分かっているはずだ。ジェニーは首を横に振った。

「ないわ、ローリー」

そうだろうな、とローレンは呟き、ジェニーの手を取った。

「本当に、おまえは一度言い出したら人の意見を聞かないな。……あのヴィレール王はそこが気に入ったのかな」

「それはわからないけど、頑固だ、とはよく言われるわ」

ローレンは肩をすくめ、ジェニーの手を引き寄せた。

「そうだな。頑固で困るよ。ママにそっくりだ」

ジェニーは兄の肩をそっと抱き締めた。すると、ジェニーの手を取る彼の左手に、力が加わる。

兄が、ヴィレールの襲撃以降、一度も顔を会わせたことのない両親に思いを馳せていることは、ジェニーにも痛いぐらいに分かった。そして、妹ジェニーの為とはいえ、仇であるヴィレールの王救出に力を貸す役割を担うことで、彼が旅の間に何度も葛藤していたのを、ジェニーは気づいている。

「ローリー、入口の鍵を開けたら……その足で城外に逃げてね」

兄の体が大きく震えた。

「おまえを置いて？」

「うん。私には皆がいるから大丈夫。ローリーは私たちを城内に入れてくれるだけで十分よ。だから、私たちが通ってきた塩坑から外に逃げて」

ジェニーが背後に並ぶ仲間たちに振り返ると、アドレーが笑顔で大きく頷いた。ケインもユーゴも納得した様子だ。ライアンは渋面だったが、異論はなさそうだ。サンジェルマンもジェニーに同意して、ゆっくりと頷いた。

「そうしてもらおうか。剣を持てぬなら、逆に我々の足手まといになる」

顔を上げ、サンジェルマンを見たローレンの瞳がにわかに凍った。だが、彼は反論しようとしない。

それからローレンは、ジェニーの額に唇を寄せ、ジェニーを抱き締めた。

「いいよ、おまえの言うとおりにしよう。俺が命をかけて仇を救う義理はないからな。おまえたちと入れ替わりに俺は外に出る」

「うん」

「でも、ジェニー、もし何かの手違いで俺たちが会えなかったときは……いいな、城の最上階を目指すんだ。マキシム王は大概、その階にある部屋に収集した奴らを閉じ込めてる。ヴィレール王がいるのもおそらく、そのうちの一室だ」

「わかったわ。万が一、ローリーに会えなかったときはそうする」
ローレンが笑顔を作った。寂しそうだが、誇らしそうな笑顔だ。
「おまえの無事を祈ってるよ、ジェニー。気をつけて」
「ローリーも気をつけてね」
ジェニーはローレンの体に両腕をきつく巻きつけた。子どもの頃から、ジェニーの不安を取り除いてくれたのはいつも兄だった。ヴィレールの襲撃前夜、不安だったジェニーがもぐりこんだのも兄ローレンの寝床だ。兄の温かな体に安心し、優しい笑顔で落ち着きを取り戻した経験は、それこそ数え切れない。
ローレンは最後にジェニーの瞳をのぞきこむと、感傷的な想いを振りきるようにジェニーの体から離れた。サンジェルマンが彼の横に並んだ。
「城内で会おう」
ライアンの言葉にサンジェルマンが微笑んだ。
「気をつけてね」
サンジェルマンはジェニーにも同じ笑顔を向けた。
「そちらこそ」
マキシム王国の関所には、日没までには着けるという。サンジェルマンとローレンは馬に飛び乗った。
塩坑の入口前で、皆は二人を見送った。下り坂を行くサンジェルマンは馬上で二度、仲間たちに振り返った。しかし、彼の隣にいるローレンはずっと仲間に背を向け続け、一度も、後ろを振り返ることはなかった。

岩の裂け目のような穴から入った塩坑内は水があちこちから滴り、ジェニーは小さな水溜りに足をとられ、何度も滑りそうになった。だが、その都度、先頭を歩くケインが振り返り、ジェニーの無事を確認してくれた。地下牢に幽閉されていた数年間の経験から、彼は

暗闇に目がきき、誰よりも早く遠くの物音も聞き分けられる。

思い起こせば約三年前、追っ手を恐れ、正面に現れるべき出口を求め、二人は必死に王城の地下を歩いていた。ケインは後ろを歩くジェニーを気にして、今と同じように何度も振り返った。そのときのお互いが置かれた状況、お互いに対する気持ちは今とはまったく違うけれども、二人がこうやって再び暗闇を進むことになろうとは、ジェニーは思いもしなかった。

「なんだか……懐かしい気がするよ」

振り返ったケインの顔は、彼もジェニーとこの場にいることが信じられない、と物語っている。懐かしいと口にしながら、ケインが決して望んでいなかった状況だ。

ケインが旅に合流した当初、彼は何回か、「王の救出は軍に任せればいい」とジェニーを説得しようとした。国境を抜けてから、彼がジェニーを説き伏せようとしたことは一度もないが、彼が王救出に乗り気でないことは、ジェニーが彼と交わす会話の端々から感じられる。でも、彼の過去を鑑みれば、それは無理もないことなのだ。

ケインは王家に生まれた者として、明るい日の光の下でどんな不自由とも無縁な生活を送るはずだった。それを突然に一変させたのは、兄であるゴーティス王だ。ケインは「今はもう憎んでいない」と言うが、王に好意的な感情を持ってはいない。

兄である王を窮地から救出するため、ケインが自らの不遇な時期を思い出させるような暗闇をこうして辿るのは、彼にとって納得がいかないことだろう。

ジェニーが地面に腰を降ろし、何時間が過ぎただろう？　それとも、数十分？

明かりがないというだけで時間の感覚が狂う。だが、突入の時間が刻一刻と迫っているのは確かだ。坑道の天井からときどき滴り落ちる水の音が、皆の間にはりつめた緊張をかろうじて和らげている。

皆が会話を控えているのは、敵国の城の住人たちに気配を悟られるのを恐れるというより、高まる緊張のせいだ。ケインが伏せた顔をあげたり視線を扉に向けたりするたび、皆の緊張が一気に引き上げられる。しかし、現在までのところ、ケインが立ち上がりそうな様子はない。

坑内は冷えており、地面に密着するジェニーの足や腰から次第に熱が奪われていった。一行の中でもっとも寒がりなのは、間違いなく、ジェニーだ。

「あんた、もっと俺にくっついていいよ」

ジェニーの肩に触れたのはアドレーの腕だ。暗闇に慣れたジェニーの目が彼の視線を受けると、彼は自分の腕をたたいてみせた。

「寒いんだろ？　俺の体はあったかいからさ、くっついたらいい。シヴィルの未来の嫁さんに風邪でもひかれたら困るからな」

「ありがとう」

礼を言う前に、ジェニーの冷えた腕はアドレーの温かさに吸い寄せられ、ジェニーは彼の体に寄り添った。

「でも、私が彼と結婚することはないと思うわ」

アドレーがジェニーを見つめ、眉をひそめる。

「結婚しないって、なんで？　あんたは貴族だったよな。身分的にも特に問題ないんだろ？」

鋭く細い棒で突かれたときのように、ジェニーは喉に小さな痛みを感じた。そのせいか、次に出たジェニーの声はどこか弱々しかった。

「結婚は彼が決めることじゃないもの」

アドレーが目を丸くした。

「なんだそりゃ。あんたたちは愛し合ってるんだろ。国王だって一人の人間だろうに、シヴィルはそれでいいのか？　あんたも？」

「二人とも承知してるわ」

ジェニーが即答すると、扉の逆側からケインが口を挟んだ。

「アドレー、王の立場ともなると、庶民には理解しがたい事情があ

るんだよ。結婚相手に恋愛感情があるかどうかなんて重要じゃない。国益や王家のことも考えなきゃならないんだ、仕方ないよ」

アドレーは憤慨し、だが、大声をあげるのだけはかろうじて抑えたようだ。ケインに振り返り、これ見よがしに深いため息をつく。

「庶民の俺には貴族さまの考えは理解できないね」

「そう？　けっこう単純だよ。家を守り、一族を繁栄させるために結婚するんだ」

「そりゃあつまり、彼女の家はシヴィルにふさわしくない家格ってことか？」

ケインは慌てて否定した。

「そうは言ってないよ。王は特別な立場だから、結婚にも政治的配慮が必要なだけだ」

「へえ？　じゃあ王以外、たとえば王弟なら、彼女との結婚にそんなに障害がないわけだ？」

アドレーはケインを見ていた。事の成り行きを気にしてか、ライアンがジェニーに一瞥をくれる。

ケインが王の実弟であることは、アドレーに伏せられていた。彼だけでなくユーゴやローレンにも。ケイン本人も自分の正体を明かしていない。

「うーん、そうだな、王みたいな問題はないけど……」

ジェニーがアドレーの体越しにケインを窺うと、ちょうど、彼がにっこりと笑うところだった。

「でも王弟は、自分を見てくれない女性を妻にしたくないはずなんだ。彼は、妻に愛情を感じなくても平気かもしれないけど、妻からは気にされて愛されたいんだよ。勝手な人なんだ。

でも、ほら、ジェニーは王しか見てないから――もうずっと前から王だけを見てるから、王弟はそんな女性を結婚相手には選ばないよ。彼をよく知る私が保証する」

ジェニーはアドレーの体の陰に再び隠れ、息を止めて、暗い天井を仰いだ。喉が急に渇いて、ジェニーは上から滴り落ちてきそうな

水滴を目で探す。だが、扉の前に広がる天井は平らに削ってあり、水滴らしき光はどこにも見えない。

“そんなに大切？”

ジェニーが王の剣の柄の先端に唇を押し付けていたとき、ケインが尋ねた。北の国境沿いの町で、ジェニーがライアンと剣の練習をし終わったあとのことだ。

王の剣を実際の剣と初めて合わせたその日、ジェニーは異常なほどに気分が高ぶっていた。国境を前にしたせいかもしれないし、王の剣を扱う緊張感があったのかもしれない。その高揚を鎮める意味で、ジェニーは王の手助けを借りようと剣に口づけたのだが、ケインは違う解釈をしたのだろう。

“そんなに大切？”

ケインはジェニーにそう問いかけ、からかうように笑っていた。今思い出してみれば、彼が「王の救出を軍に任せればいい」と口にしなくなったのは、それ以降だ。ジェニーは毎夜、剣に王の無事を祈っていた。ケインも、その光景を一度や二度、目撃したことがあるはずだ。ジェニーが剣に願いをかける姿を見て、ケインは、ジェニーにとって王がどれほど大切なのかを実感したのだろう。

あのとき、ケインは「そんなに王が大切？」とジェニーに尋ねたのだ。違う解釈をしたのはジェニーの方だったのだ。

（どうかお願い、無事でいて。お願いだから……）

ジェニーが王の剣の柄にひそかに手を触れると、急に、それが熱を発したように感じられた。

＊　＊

サンジェルマンとローレンは、何の苦もなく国境を越え、マキシ

ム王の城にすんなりと通された。関所と王城の門番はローレンと顔見知りで、彼らはローレンに通行証の提示すら求めなかった。ローレンは勝手知ったる自宅のように王城の廊下を歩き、厨房近くの狭い一室にサンジェルマンを呼び入れた。

あまりにも簡単に入城が許されたことで、逆にローレンが疑わしく思える。サンジェルマンは人々の話す言葉をほとんど理解できず、彼らと自然に会話するローレンを見ると、彼が本当はマキシム側の人間だと思えてならなかった。彼がサンジェルマンたちに指示した突入計画は、実は失敗することを前提に練られた、マキシム側の策略ではないのか？

部屋にいた下働きらしき少女が退室する際、同情するようにサンジェルマンの顔を見上げた。城内に入り、人々の顔に感情らしき感情を見たのは、それが初めてだ。

「さっきの女……同情したように私を見なかったか？」

ローレンが靴を脱いでいた手を止めた。脱げた靴を床に転がし、彼は不敵な笑みを漏らす。

「ああ、彼女はあんたがマキシム王への献上品だって知ってるんだよ。ここでは余所者が警戒されるし、あんたも悪くない外見だから、そういった扱いにしたんだ。もちろん嘘だけど。おかげで、どこも俺たちを簡単に通してくれた」

「それは――おまえが献上品となる男を連れて、普段から頻繁に王城を訪れているという意味か？」

ローレンはもう片方の靴と格闘するのをやめ、じろりとサンジェルマンを見返した。

「それはカイルの分野だ、俺じゃない。ただ、新規取引を持ちかけるときは、王に献上品を持参するのが定例なんだ。俺がそうしたところで、ここの奴らはちっとも驚かない」

ローレンはサンジェルマンの後ろにある木の長椅子を指し示した。

「真夜中までまだ時間がある。長い夜になりそうだから、少し休めば？」

「眠るつもりはない。王の安否がわからぬのに眠れはしない。おまえから目を離すわけにもいかない」
ローレンはサンジェルマンをちらりと見ると、苦労して脱いだ靴を長椅子の下に放り込んだ。
「王ならまだ生きてるよ」
サンジェルマンは瞠目した。
「生きておられるのか！」
安堵したあまり、大声が滑り出て、サンジェルマンは外を気にして扉に振り返った。だが、扉の外を通る誰かの足音は彼の声で止まることはない。扉は固く閉ざされたままだ。
サンジェルマンはローレンの瞳をのぞきこんで、声をひそめて尋ねた。
「嘘ではなかろうな？　王が今も無事だというのは本当だな？」
ローレンは目をそらさず、サンジェルマンを見つめ返した。いかにも不愉快そうだ。彼の瞳の放つ輝きがジェニーと共通している。
「ああ、残念ながらな、本当だ。さっきの彼女がそう言ってた。思ったとおり、王は最上階の突き当たりの部屋にいる」
「……そうか！」
サンジェルマンは喜び、両手を組んで神に感謝の意を述べた。すると、ローレンがサンジェルマンの組まれた両手をじっと見つめながら、ひとり言のように漏らした。
「王が生きてると知ったら、ジェニーもあんたみたいに喜ぶんだろうな」
ジェニーの身を案じているのだろう、ローレンは顔をくもらせ、サンジェルマンの視線に合うと、気まずそうに目をそらした。
「死ぬかもしれないのに、あんな男のためにこんなところにまで……」
そして、妹が仇を愛する事実を現実から閉め出そうとでもするように、ローレンはぎゅっと目を閉じた。目をそむけたところで事実は変わらないのに。細かく揺れ続ける彼の閉ざされた瞼は、彼が胸

に抱える葛藤だ。
サンジェルマンは背後にあった椅子に静かに腰を降ろした。剣を椅子の上に置く音に反応し、ローレンが顔を上げる。
「そもそも、おまえが『あんな男』と呼ぶ王は、御自らジェニーを救おうとされたために、こんな城に連行されたのだ。おまえの妹はそれを知りながら、王の帰りを黙って待つような女か？」
ローレンが目をすがめた。サンジェルマンも同様に目をすがめた。
「……いや、黙って待つなんて、ジェニーには無理だろうな。あの子は純粋で、一途な子だ」
サンジェルマンは同意した。
「王も同じだ。一途さゆえ、今回のような事件に至ったのだろう」
ローレンが失笑した。
「王が一途だっていうのは、あんたが、あの逃亡犯だか王弟だかに話してるのを聞いた。それを信じる気はないけど、もし全てが本当だとしたら、王は、世間の評判どおりにジェニーを愛してることになる。……でも、とても信じられないね」
それから彼は、サンジェルマンからの一切の質問を拒むように背を向け、床に敷かれた毛足の長い敷物の上に体を横たえた。

極度の緊張感の中では、時間の流れなど、あってないようなものだ。隣接した厨房から完全に音が消え、廊下が無音の世界に変わるまで、サンジェルマンとローレンは何時間待ったのだろう。
地下に通じる階段付近はひと気がまったくなかった。サンジェルマンの剣もローレンが刃先に毒を塗った短剣も、出番がない。ヴィレールの王城とは異なり、衛兵の数が少ないようだ。
サンジェルマンは今もなお、ローレンをどこかで信じきれない。だから、彼が隠し持つ短剣がいつ自分の喉元に食い込むのかと、ずっと警戒している。
二人は地下にある貯蔵庫のような一室に忍び込んだ。サンジェル

マンが見張りを担当し、ローレンが秘密の抜け穴に入る扉の鍵を開ける。開けるといいながら、実際は、ローレンは扉を壊すのだと言う。彼は動かない右手で扉を押さえ、自由がきく左手のみで器用に蝶番を外している。

サンジェルマンが何気なく扉を眺めたときだ。

いきなり扉が開き、長身で手足が長く、痩せた衛兵が現れた。二人が部屋を出て、最初に出会った人間だ。足音がまったくしなかった。

男が何か叫んだ。サンジェルマンには理解できない言葉だ。

サンジェルマンが剣を上げた、その横を、ローレンが何かを叫びながら男のもとに駆けていった。ちらりと振り返った彼の顔は――なんて得意げなのだろう！

「待て、ローレン！」

サンジェルマンは剣を手にローレンのあとを追う。

（なんてことだ、まんまと奴に騙されるとは！）

衛兵は繰り返し何かを言いながらローレンを手招きし、サンジェルマンに注意を向けた。手の長さ、つまり、剣の届く範囲の広さでは、サンジェルマンが絶対に不利だ。

が、ローレンを迎え入れた衛兵が、不意に前傾姿勢をとる。

「ローレン！」

ローレンが、横にいた衛兵が振り上げようとした剣を避け、その腹を手で押した。衛兵は剣を落とし、後ろに倒れていった。その喉には銀色の小さな煌きが見えた。

サンジェルマンがローレンのもとに駆けつけると、彼は左手で腰の剣を抜いた。剣の扱いにすっかり慣れている、無駄のない動きだ。それから、ローレンはサンジェルマンの顔を見ることもせず、開放されていた扉の外に出た。

――誰かいる――！

サンジェルマンが人の気配に気づいたのと、ローレンが剣で何かを振り払ったのは、ほぼ同時だった。声もあげずに床に崩れ落ちた

のは、二人目の衛兵だ。見事な剣の腕前だ。
「あんたに守ってもらう必要なんか、ないんだよ」
だが、ローレンの得意そうな顔も数秒ともたなかった。どこから湧き出てきたのか、次の敵たちが階段を駆け降りてきたのだ。サンジェルマンは剣を構えた。
「ローレン、鍵はどうした？」
ローレンは、にやりと笑った。
「もう開いてる」
そして、今度は、彼はサンジェルマンを力任せに突き飛ばした。
「奴らをここから引き離せ、サンジェルマン」
囁いたローレンは、再び、サンジェルマンには理解できない言語で何かを叫びながら、敵に向かって走っていく。
サンジェルマンは急いで床から立ち上がった。一人、二人、剣を持った衛兵は三人だ。彼らの持つ明かりに照らされた顔がどれも同じに見える。表情がないのだ。
彼らはローレンを通り過ぎ、一目散にサンジェルマンに走り寄ってくる。

第二部　7．王の帰郷－10（後書き）

読んでくださって、ありがとうございました。

最終話－1（前書き）

【警告】

暴力シーンが出てきます。不快に思われる方もいるかもしれませんが、展開上必要ですので、なにとぞご容赦を。。。

最終話－1

扉を伝って聞こえてくる音がぱたりと消えてから、数分。扉にぴったりと耳をつけたケインは視点すら動かさず、彼を見守る仲間たちはじっと息をひそめている。辺りは静か過ぎて、時の流れさえ止まってしまったように感じられる。

何か予想外の出来事があったらしいことは、ケインの表情の急変を目にすれば明らかだ。扉の鍵をこじあけたローレンの身に、何か降りかかったのだ。

ケインが異変を察知した瞬間、皆をその場に留めたのはライアンの判断だ。彼はジェニーの兄やサンジェルマンを救うことより、王救出のため、戦力を残しておく方を優先した。

それはきっと、正しい選択だ。サンジェルマンも、ローレンに同行すると申し出た瞬間から、こんな事態を覚悟していたことだろう。そしてたぶん、ローレンも。

ジェニーはライアンを見た。ケインの行動に注目していた彼が、ジェニーに視線を返す。

行き場のない怒りや不安、ジェニーの胸の内を全て心得ているといったように彼は頷き、もう少し待つようにと、手振りでジェニーに示す。

でも、いつまで待てばいいのか――。

ジェニーがやきもきしながら待っていると、やがて、ケインが扉から静かに耳を離した。

「もう誰もいない。入っても大丈夫だと思う」

一行が塩坑に入る前、ローレンは、お互いが会えなかった場合を想定して、城の最上階を目指すようにとジェニーに告げた。ジェニーが“万が一”と言ったのに、塩坑と城を繋ぐ扉越しに兄の気配をたしかに感じていたのに、今、彼はいないのだ。

アドレーに続いて城内に入ったジェニーは、彼が突然立ち止まったために、その背中に衝突した。ジェニーが静まりかえった真っ暗闇に目をこらすと、アドレーが「ここの衛兵だ」と囁く。

部屋の入口付近でうつ伏せに倒れ死んでいる男が一人。開いた入口扉の外側で倒れている男がもう一人、いるようだ。

ジェニーが部屋の中央に進んでいくと、暗闇の中央を動く、白っぽい光があった。ライアンだ。

「あの男は剣で斬られて死んでいた。サンジェルマンか、ローレンか――どちらかによるものだろう。つまり、二人はまだ無事だ」

ジェニーがほっと胸をなでおろすと、めずらしく、ライアンが微笑んだ。ぎこちなさのない、まったく自然な笑みだ。

「我々もすぐにあとを追わねば」

ライアンに振り向かれ、ジェニーの隣に立ったケインがとたんに凍りついた。

「私が先頭……じゃないよね？」

「先頭には私が行きましょう。されど、暗闇に強いあなたは私のすぐ後ろにいていただきたい」

ライアンはケインの返答を待たず、ユーゴに、最後尾につくように指示を出した。ユーゴが快諾し、ユーゴの前にアドレー、その前にジェニーという順番で城内を進むことが決まる。

死体となった衛兵の体から拾いあげた剣を、ライアンがアドレーに差し出した。剣の使い方を知らないアドレーは遠慮したが、

「持っておけ。剣には突き刺すという使い方もある。役に立つぞ」

次にライアンはジェニーに向き直った。

「私の教えを忘れるな。我々はできるだけ貴殿を守るが、我々の真の目的は王を救出することだ。できる限り、自分の身は自分で守ってもらいたい」

「ええ。それは最初から心得ています」

ジェニーの返事を確認し、ライアンは残りの仲間の意思を確かめるように、ゆっくりと各々の顔を見る。誰もが真剣な面持ちでライ

アンを見返し、一言も発しようとしない。ついに動き出すときが来たのだと、全員が覚悟を決めた瞬間だ。

どうか、王も皆も、全員が無事に帰還できますように――。

緊張は高まり、胸を打つ鼓動はあまりにも早い。負傷することも、死に瀕する可能性も、ジェニーはすべて覚悟している。でも、覚悟はしていても、怖くないこととは違う。王奪還の旅に出たジェニーは“勇ましい”と民衆に思われているようだが、実際の自分は違う。自分の身が次にどうなるかと考えれば、怖いに決まっている。

でも、時が過ぎるだけ、ゴーティス王の命が削られていく。王をこの世から失うかもしれない恐怖が、ジェニーの足を押し上げる。ジェニーの中で膨らみきった恐怖が破裂するとき、彼の命も露と消えてしまいそうに思えて、それが怖くて、ジェニーはただ前に進み続けるのだ。

ジェニーが最初に出会った、生きたマキシム人は若い女だ。女はちょうど部屋を出たところにジェニーたちと遭遇し、悲鳴をあげている最中にライアンに倒された。彼は素手で女を気絶させただけだ。彼は武器をもたない女を殺すつもりはないようだった。ジェニーはほっとした。

だが、そんなジェニーを見ながら、ケインが苦笑する。

「残念だな。階段も見つからないのに、もう来たか」

ほどなく、ジェニーたちの後方から荒々しい足音がなだれこんできた。声はせず、靴の音だけだ。足音が廊下に反響するせいで、攻めてくる敵の数がはっきり分からない。

「ジェニー、走れ！」ユーゴが剣を抜きながら叫ぶ。

ジェニーたちの向かう先には敵の姿はなかった。ゴーティス王が監禁される部屋に続く階段は、まだ見えてこない。それでもケイン

は剣を抜き、前方を走るライアンも剣を引き抜いた。
ジェニーはほんの一瞬だけ、後ろを振り返った。ユーゴの数歩後ろに黒い集団が迫っている。黒っぽい衣装を身にまとい、ほの暗い廊下に青白い顔だけが浮き上がる。彼らは焦りも怒りも顔にのせず、無言でジェニーたちとの距離を狭めていく。
彼らの手にする剣が白く光り、ジェニーは朝露に濡れて光る蜘蛛の巣を思い出した。草木の葉の陰にひそむ蜘蛛だ。獲物が罠にかかるときをずっと待ち、音もたてずにその背後に近づく、黒い生き物。
ジェニーの後方で鋭い金属音が響いた。
「ジェニー、止まるな！」
だが、ジェニーは止まった。ユーゴとアドレーが六人の男に応戦している。すぐに、ライアンとケインがそれに加わった。
一人を一撃で倒したあと、ユーゴが丸腰のアドレーに言った。
「ここは私だけで十分だ。先に行け」
「はあ？　いくらあんたが強くたって、あと五人もいるんだぜ？」
次に降りかかってきた男の剣を払い、ユーゴは悠然と体勢を整える。
「私は仮にもベアール家の当主だぞ。剣の腕にかけたら右に出る者は――」
ユーゴの得意満面な顔のすぐ横に、アドレーの拳が飛んだ。すると、その拳の向こうで、顔面が血だらけとなった男が声もあげずに倒れていく。
「剣の腕が何だって？」
アドレーがにやりと笑うと、唖然としていたユーゴははっとして敵に向き直る。
「さすが庶民だ。乱暴だな」
「笑えるな、剣を使えば乱暴じゃないって言うのか？　とにかく、敵を倒せばいいんだろ」
アドレーは次に襲いかかってきた衛兵の剣を扱い慣れない剣で受け、男の股間を蹴りあげた。男は悲鳴とも奇声ともとれる声を上げ、

床に突っ伏して震え始める。
ユーゴが眉を上げ、アドレーをじろりと見た。
「まだ来るぞ。そんなやり方じゃ、最後までもたない」
そして、ユーゴは彼の背後の空間を眺めた。廊下の奥から響いてくる靴音がさっきより大きい。
「だが、この三人を片づけるのが先だ！」
ユーゴの剣が、衛兵の剣と激しくぶつかる。アドレーが突いた剣は男の脇をかすめ、逆に男の剣がアドレーの右腕をえぐった。
「アドレー！」
「ジェニー、あんたは早くシヴィルを助けに行け！」
「ライアン様、ジェニーを連れて先に行ってください！　ここは私とこの男で対処します！」
アドレーが衛兵の顔に肘をくらわせながら、ユーゴに笑う。
「承知した！　先に行くぞ！」
ライアンがジェニーの肘をつかみ、真剣な目で瞳を覗きこんだ。
「ジェニー殿、王がお待ちだ」
ジェニーは彼を見つめ、ゆっくりと頷くしかない。ジェニーは後ろを向かず、二人に言った。
「ユーゴ様、アドレー、城の外で待ってるわ！」
「ああ、夜明け前に会おう！　王に会ったら、ベアール家は王のために素晴らしい働きをしたって、必ずそう伝えてくれ！」
「エレノアが会いたがってるんだ、あんたは絶対にシヴィルを連れてくるんだぞ！　わかったな！」
「約束する！」
その直後、アドレーが怒鳴った。
「くっそ、何しやがる……！」
ジェニーが振り返り、見ると、アドレーの左腕には衛兵の剣が貫通していた。
「いってーな！」
アドレーが叫び、彼は右手にあった剣で、目の前にいる相手の首

にそれを突き刺した。アドレーの負傷に気づき、加勢したユーゴの剣が同じ男の左胸を貫く。

アドレーの手首に不似合いな、彼の妻エレノアが残した形見の首飾りが揺れていた。妻を汚したくないと、彼が毎日埃を拭っていた首飾りが、彼の腕から溢れ出る血に染まっていく。

アドレーは左腕の怪我などかすり傷だというように、ジェニーに笑顔を見せた。だが、ジェニーに体の正面を向けた彼の、右足の肉は大きく裂けている。

息を飲んだジェニーの肩を、ライアンが掴んだ。

「ちょっと……ちょっとの間、これを預かっててくれ……」

アドレーが手首の首飾りを外し、ジェニーに投げる。

ジェニーが手を伸ばした先、廊下の奥に、敵の黒い姿が見えてきた。その人数はたぶん、五、六人。

やっと見つけた階段を、ジェニーは駆け上がった。仲間を見捨てなければならなかった無念さと罪悪感を彼らとともに置き去りにして、ゴーティス王が閉じ込められた部屋のある最上階を目指して、ひたすら走る。

窓を通して見える暗闇は青く変わり始めていた。これから闇が深まることはなさそうだ。でも、町に面する湖がヴィレール軍の船で埋め尽くされるはずの日の出は、もう少し先だろう。

階段の終わりが見えてきた頃、猛進するジェニーの前で、ライアンとケインが急停止した。ケインの足が階段を一段、後退する。廊下の奥から突如現れた二人の衛兵が、ジェニーたちの行く手を塞いでいた。

躊躇することなく、ライアンが剣を抜く。彼に遅れて、ケインも剣を抜く。ライアンがジェニーに振り返って言った。

「奴らを引きつけている間に、貴殿は先に進め！」

ところが、騒ぎをかぎつけたらしい衛兵が一人、階段を上がって

きた。
『何者だ！』
衛兵が明りをジェニーに投げつけた。それを難なく避け、ジェニーは二人の仲間が戦う階上へ走っていく。男もジェニーを追いかけてくる。
階段を上がりきろうとして、ジェニーはまたもや立ち止まった。階段の上り口でライアンが敵と激しく競り合っており、階上に上がれないのだ。ケインもまたその後方で、もう一人の男と互角の戦いを展開している。
ジェニーは剣を手にくるりと振り返った。足元の不安定なこの階段で、男とどう対戦すべきか――？
“日常的に剣を使う男とまともに戦おうとしてはならない”
真後ろに迫っていた男が剣を上げ、その一瞬で、ジェニーは彼の力を受け流すことを考える。
剣を通して腕にかかった男の力を、ジェニーは押し返したりはしない。少しだけ剣を左に傾け、倒れる男の下敷きにならないように、右側に素早くすり抜けるだけだ。
男の剣がジェニーの剣の上を滑っていく。
男の顔には驚きと焦りがありありと出ていた。ジェニーは急いで体をかわし、男の転倒に巻き込まれないよう、壁面にぴたりと体をはりつけた。
その次の瞬間だ、ライアンの声とともに、揉み合った二人の男たちが転がり落ちてきたのは。
ジェニーの前で転倒した男の体の上を、二人の男が滑り降りる。二人に不意につぶされた男が悲鳴をあげた。
まさに間一髪だ。二人に引きずられて転がり始めた男の手がジェニーの足にぶつかったが、ジェニーは階段に尻もちをつき、数段を落ちるだけで済んだ。
「ライアン様、無事ですか！」
ジェニーは男たちを追って階段を駆け下り、途中で一本の剣を拾

う。

階段の曲がり角で、折り重なって倒れる男の中で最初に身を起こしたのは、いちばん上にいたライアンだ。その下で、ジェニーに剣を向けた男の背中が動くのに気づき、ジェニーは急いだ。背を丸めたライアンは手であちこちを触り、剣を探している。

『ぐ……うぇっ！』

ライアンの前で動く男の背中に、ジェニーは思いきり剣を突き立てた。二度と経験したくなかったはずの、肉の重みだ。男の頭が浮き、恨みがましい目が向けられる。

男の手がジェニーの腕に伸びる前に、ライアンがジェニーに渡された剣を男の腰に沈めた。男が大きく体を反らせ、長いうめき声のような悲鳴をあげる。

ジェニーが剣から手を離して膝をつくと、ライアンが顔を上げた。額が汗でびっしょりと濡れ、ジェニーと同じく、呼吸が荒れていた。

「よくやった。怪我はないか？」

「ええ。ライアン様は大丈夫？」

「かすり傷だけだ」

そう言って笑ったライアンの手のひらが真っ赤だ。ジェニーは彼の手の傷を見ようとして、彼が逆の手で左胸を押さえているのに目を留める。赤い血が一筋、指の間からゆるやかに流れ落ちていた。

「刺されたのですか、ライアン様！」

「刺し違えた。意外に出血しておるようだが、平気だ」

手の血を服で拭い、ライアンは涼しい顔でそう告げる。

「それより……どうやら私は、足をくじいたようだ。これでは足手まといになるゆえ、貴殿は先に行け」

それは嘘だ。彼は、足をくじいたぐらいで任務を投げだす人ではない。足を骨折しようと、彼は這ってでも王を救出しようとするはずだ。彼は責任感が強く、忠節を尽くす人間だ。

「先に行け。貴殿が心配するのは私ではなく、王であるべきだ。先

に行って王を救い出せ」
「でもライアン様、その傷では――」
「私の傷を心配する間に先に進め。たった一人になろうとも、王を奪還しろ。我々がここにいる目的を遂行しろ！」
ジェニーは彼の輝く瞳に面し、自分がひどい誤解をしていたのだと気づく。
負傷した仲間を見捨てると思うのは間違いだ。なぜなら、彼らは最初から死を覚悟した上で、この場に臨んでいるからだ。また、彼らを敵中に置き去りにすることに迷い、罪悪感にさいなまれることも間違いだ。むしろ、負傷した彼らを憂いて王の救出が遅れることにこそ、罪悪はある。
ジェニーが剣を取って立ち上がると、ライアンが表情を和らげた。
「安心しろ。私はともに行けぬが、ここに留まり、貴殿が王を連れ帰るまでこの場を守り切る。たとえこの私が右腕一本になろうとも、これより先には決して、誰一人として通しはせぬ」
ジェニーはライアンの決意に満ちた瞳を見つめ、力強く頷いた。
「必ず王を救い出して戻ってきます。それまで……ご無事で」
「それでこそ、私の弟子だ」
ジェニーがなおも見つめていると、ライアンの瞳に涙が浮かんだ。
「……気が抜けたせいか、涙まで出る」
彼が息を吐いた拍子に、それがこぼれ落ちた。
「私が女に泣かされたのは、貴殿で二人めだ。……一人めは妹だった。可愛がっておった妹が突然死に、亡骸を埋めた日のことだ。私は、妹と離れたくなかった。これで妹と会えるのが、最後かと思うと……」
ライアンは涙を隠そうともせず、ジェニーを見上げた。彼の涙はとても澄んでいる。
ジェニーが自分の唇に触れた指をライアンの額に置くと、彼は苦笑した。
「変わった女だな。私が怖くないのか？」

「厳しいけど、怖い人とは違うから」
彼が瞬きをすると、また、涙が彼の頬をつたった。
「……残念だ。貴殿のような女と会っていれば、私は……もっと早くに結婚できていたのだろう……」
ジェニーが再びライアンの傍に跪こうとすると、彼はそれを止めた。
「ジェニー殿、早く行け。無礼な口をきくのもこれが最後だ、早く王を救いだせ。そして、王とともに少しでも早くヴィレールに戻れ。……そうしたら、そのときには、私は喜んで……貴殿に仕えよう……」
どこまで――ジェニーは何度、押し寄せてくる涙を堪えていればいいのだろう？
ライアンの息は今も続いているが一定ではなく、不愉快な雑音が混じる。ジェニーが迷い、悲しむ時間はないのだ。
ジェニーは王の剣を握りしめ、立ち上がった。

＊　＊

ゴーティスは隣に眠る女の、うっすらと開いた瞳を見た。瞳はわずかに細く開いてはいるが、彼女は眠っている。この数日間、彼女は夜通し起きているゴーティスと同様にあまり眠っていないはずだ、疲れているのだろう。
ゴーティスは寝返りをうつ振りをして、扉の覗き窓をちらりと見た。それは今はぴったりと閉まっているが、夜中に何度か、マキシム王の目が室内の様子を窺う。ゴーティスが女に手をかけるときを、彼は手ぐすね引いて待っているのだ。男色らしいマキシム王は、ゴーティスの肉体に触れるよりも観賞する方を好むようだ。
ゴーティスは女がいない昼間に睡眠を断続的に取っているが、食

事もろくにしていないせいで、疲労は全身に蔓延している。疲れは蓄積されていた。敵に囲まれた、気を抜けない環境にいることも、ゴーティスの気力と体力を容赦なく奪っている。

女が何かを呟きながら、肩を動かした。寝台に落ちる女の長い金髪を見ていると、ゴーティスは女の体を押さえつけ、肉体的な欲望に自らを任せたくなる。

ジェニーを奪われたゴーティスの想いの全てを、一時的にでもぶつけられる相手がいるのなら、それを求めて何が悪いのだろう？

マキシム王の意図を知って以来、ゴーティスはなぜ娼婦やもっと成熟した女をよこさないのかと、彼の選択に首を傾げたものだ。男をその気にさせたいのなら、彼女たちは素人の若い娘の比ではないだろうに。

だが、マキシム王の判断は正しい。日を追うにつれ、疲れて朦朧とするゴーティスの目には、女の細い肩がジェニーに見えてくるから不思議だ。カイルの仲間に凌辱され、おそらくは暴行を加えられ、山中に捨てられたジェニーがここにいるはずもないのに。

それでも、ゴーティスをかろうじて抑制するのは、ジェニーへの貞操というより、ジェニーを奪った者たちへの復讐の誓いだ。現実との区別がつかずに女を腕に抱いたら、その瞬間に、ゴーティスは背中に剣を突き立てられ、命を落としてしまうかもしれない。マキシム王やカイルに復讐を果たす前に死んでしまうことだけは、ゴーティスはどうしても避けたかった。

でも、はたして、その想いがいつまで保たれるのだろうか？

正気でいられないときが近づいてきているのは、薄々感じている。体力が落ち、気力が萎え、死期がごくゆっくりと近づいてきている。性欲に屈しそうになるのがその証拠だ。ゴーティスは、焦り始めていた。

月明かりに照らされた床の一部を眺めると、ゴーティスはジェニーの無事を祈って、娘カミーユとともに月の女神像の前に跪いたこ

とを思い出す。

母を思い起こすからという理由で避けていた月の女神を、実は、ゴーティスは子どもの頃からずっと憧れ続けている。孤独に閉ざされたような闇の世界を、月の女神はその光で明るく照らし、迷う者に道筋を与えてくれる。

女の髪に触れそうになったゴーティスの手が止まる。

ジェニーは、ゴーティスが長年憧れ続けた月の女神に似ている。静かだが、動じない強さがある。混沌とした闇を何年も漂っていたゴーティスを、一筋の光でもって救い出してくれたのはジェニーだ。

ゴーティスがジェニーと会うのは圧倒的に夜が多い。だが、彼女は昼間の光の下がよく似合う、とゴーティスは常日頃から思っている。彼女はときどき、ゴーティスを太陽になぞらえるが、それはまったく逆だ。彼女が眩しすぎて、目を細めることが多いのはゴーティスの方なのだ。

（……違う。あれは一筋の光などではない）

ゴーティスはこの瞬間まで、それが一筋の月光だと思い込んでいた。でも、あの眩しすぎる光は、月光とは違う。太陽が照らす光だ。闇の後ろにある太陽から漏れた光だったのだ。ジェニーは、明るい太陽の下で笑っているべき存在なのだ。

もっと、彼女を陽のあたる場所に立たせるべきだった。

ほとばしる悔しさが抑えられず、ゴーティスは目を拭った。

（ジェニー、おまえはなぜここにおらぬ……！）

ジェニーを失うことは、ゴーティスの半分が欠けるということ。マキシム王とカイルが許せなかった。二人を殺しても、ゴーティスの魂の均衡を取り戻せはしないが、彼らをこの地にある湖の底に沈めてやらないことには、ゴーティスの煮えたぎった血は治まらない。

ゴーティスは女の体を見ながら寝台に起き上った。そのとき、ふと、衛兵たちの話し声を耳にした気がして、ゴーティスは扉に振り返る。

ゴーティスが話し声だと思った音は、性急な足音に変わった。誰かが廊下を駆けてくる。

ゴーティスは部屋を横切り、水差しが置かれた棚を壊して、外れた板をつかんだ。寝台に残されていた女が怯えた顔で立ち上がるのとほぼ同時に、部屋の扉が勢いよく開けられた。

「おお、そこにいたか、ゴーティス王！」

剣を振り上げ、大口を開けて笑うのはマキシム王だ。この部屋に来るまで全速力で走ってきたのか、息が切れている。彼はゴーティスが手に持つ、武器と呼ぶには頼りなさすぎる板片を目にして、再び大声で笑った。

「この剣にそれで立ち向かおうというのかね？　はっは、素晴らしい！　それでこそ、軍事大国であるヴィレールの王だ！　しかも、いつのまにか我が娘を味方につけられたようで――」

ゴーティスは驚き、自分の傍らに立つ女を見つめた。

「この女はおまえの娘なのか？」

「おお、そうだとも。数年前、そやつを我が国の力でそなたの妃にと思うておったが、同じ塩の産出国であるカローニャに先を越されたな。あのときは、それはもう口惜しゅうてな！　だが、数ヶ月前、そなたの妻が城を追放されたというではないか。

願ってもない幸運だ。されど、今度こそと思うたのも束の間、なに、ヴィレールはカローニャから塩田を手に入れたと聞いたのだ。塩の産出国となったヴィレールに、もはや我が国の塩は魅力的ではなかろう。

この娘がもっと器量よしで、諸国に評判が高い女であったなら、そなたは最初から娘の夫となっておったはずなのだ。おお、我が婿！　麗しいそなたが我が婿になる日をどんなに待ち望んでおったことか！」

マキシム王は口惜しそうに膝を手でたたいた。

「だが、もはや、それも叶わぬとは！　まことに……そなたを若く

して亡くすことは、まことに残念だ。されど、そなたにはここで死んでもらわねば……」

彼がなぜ突然にそう思ったのか、理由はわからない。だが、ともかく、ゴーティスは木片を構えた。

「のう、ゴーティス王。そなたの愛しい女の近くにいくのだ、異論はなかろう？」

マキシム王が剣を持った腕をあげ、鼻をすする。

「そうだな。おまえとカイルを殺したあとであれば、俺には何の異存もない」

「ほっほ、怒った顔も美しいのう」

マキシム王の剣が動き、ゴーティスは素早く横に移動した。マキシム王の振り下ろされた剣をゴーティスは難なく逃れた。しかし、それは代わりに何かを捕らえていた。

「あ……王……」

女がゴーティスに手を伸ばし、力尽きて床に膝をついた。女の左肩から鮮血がほとばしり、彼女が床についた腕を伝って血が流れ落ちていく。

「おお、なんたる呆れた娘！」

マキシム王は女の体を足で払おうとしたが、彼女はその足に両手ですがりついた。

「逃げて……逃げてください、ゴーティス王！」

「どけっ！　ええい、どかぬか！」

マキシム王は剣を再び振り上げ、今度は娘の腹にそれを突き立てた。その反動で彼女の片手はマキシム王の足から外れたが、残った片手はしっかりと足を掴んだままだ。

「逃げて、王！　おやめ下さい、父上、やめ……」

「離せ！　どけ！　この死にぞこないめ！」

「やめろ、マキシム王！　おまえの実の娘だろう！」

「おお、どこまでも私の邪魔をする気か！　こうなったのは、何もかもおまえのせいだ！」

マキシム王は血だらけとなった娘の腹から抜いた剣を、彼女の腕に振り下ろした。それによって彼の足は自由になったが、彼はなおも娘の脇腹に剣を突き刺した。彼女は呻き声をあげて体を反らせたが、マキシム王はさらに彼女の体のあちこちを剣で突く。まるで狂ったように、彼女の体を切り刻むことに喜びを見出しているかのように、笑っている。

そのとき、別の誰かが戸口に立つ気配があった。室内の惨状に気を取られ、ゴーティスは次に迫っていた危険にまったく気がつかなかった。

「ロハン！」

ゴーティスと同じく、入口に振り返ったマキシム王が愉快そうに笑った。

ロハンと呼ばれた若い男は、左手に剣を持ち、ゴーティスを鋭い視線で貫いた。服装から衛兵ではなさそうだが、マキシム王の反応と彼の態度から、ゴーティスにとっては歓迎できない登場人物だろう。

男と今までに会ったことはないが、ゴーティスに馴染みのある顔だ。見れば見るほどに、ユーゴ・ベアールによく似ている。

まさか――とゴーティスは自分の考えを疑った。ユーゴにそっくりでマキシム王国と縁がある人物といえば、ジェニーの兄ローレンではないのか？

男は無言で部屋に進んでくると、マキシム王の足元で血の塊と化した彼の娘を一瞥した。何の同情も含まない目だ。彼女から目をあげた男は、ゴーティスに剣先を向けた。

「あんたに再会できる日をずっと待ってたよ、ヴィレール王」

ジェニーの兄だ。彼の瞳は、ゴーティスが求めてやまない、彼女の瞳そのものだ。

「おまえは……ローレン？」

すると、ローレンの横にいたマキシム王が笑い出した。

「そうだ、そなたの愛妾の兄だ！　こやつはな、その右腕だけでなく、大事な妹も奪ったそなたを、ずっと恨みに思うておる。よいところに来たな、ロハン！　おまえの思いのたけを込め、おまえの仇に存分に報復してやれ！」

「ええ、言われなくともそのつもりですよ」

ローレンは剣先を床につけて固定し、柄を握りなおした。マキシム王の上機嫌に笑う声が、夜の静寂を引き裂く。

「待て、ローレン！　この王はジェニーを――」

ゴーティスは反論しようとして、ローレンが持ち直した剣がマキシム王の喉に埋まるのを見て絶句した。

「ロ……ハン……？」

ローレンは足でマキシム王を床に蹴り倒し、さらに剣を喉の奥に押し進めた。既に声をたてられないマキシム王は、両手両足を使ってローレンから逃れようとし、ローレンの顎は彼の爪に引っかかれて赤い筋が出来た。

マキシム王はいつまでも暴れていた。だが、ローレンは終始落ち着いていて、彼の腹に両膝をのせ、その体の自由を奪う。剣を握る左手に体重を移すようにして、剣を固定している。

マキシム王の喉を貫通した剣先が床石と当たり、ぎりり、と不快な音をたてた。ローレンの利き腕だったはずの右腕が不自由となって以来、ここまで左手を自由自在に操れるようになるには、彼は相当な鍛錬を重ねたに違いない。

最終話－1（後書き）

数週間ぶりの更新です。しばらく経った上に、長い。。。
最終話は2回に分けましたので、ゆっくり、いつもよりさらにゆっくり、お読みください。

最終話－2（前書き）

ついに最終回です。
パート1に引き続いて、暴力シーンがありますので、ご注意を。。。
ともかく長いので、休憩入れながら読んでやってください。

最終話－2

最後まで抵抗していたマキシム王の腕が床に伸びると、ローレンはやっと彼の体から降りた。マキシム王が掴んでいた指の痕が、ローレンの動かない右腕に赤く残っている。

「これは……どういうことだ？」

ゴーティスが尋ねると、ローレンは立ち上がり、右腕に残った痕を不快そうに見つめた。

「この王には俺にも何かと恨みがある。あんたのためじゃない。この王国が崩壊するかもしれない機会に、俺の復讐を果たしただけだ」

ローレンはちらりと後ろにある入口に振り返ると、マキシム王の死体の脇に放り出された剣をゴーティスに示した。

「マキシム王の剣をとれ。衛兵たちが押し寄せてこないうちに、ここから早く脱出するぞ」

「俺を助ける気か？」

ゴーティスは怪訝に思いながらも、床に転がった剣を拾い上げる。

「俺が復讐を果たすまで、あんたには生きていてもらわなきゃ困るんだ」

彼は決して好意的ではない視線をゴーティスに向けた。

「ジェニーのために、この城から出るまで俺はあんたに手を出さない」

彼が妹思いだということは、ゴーティスも伝え聞いている。この男は、マキシム王がジェニーを死に追いやった事実を、まだ知らないはずだ。

「わかった。俺がカイルに報復したら、そのあとは、おまえの復讐でも何でも受けて立とう」

「カイルに報復する？　一連の事件に腹は立つだろうが、あんな奴、放っておけばいい。どうせ、この国と一緒に自滅するさ。あんたの国の軍もそろそろ湖岸に着く頃だ」

軍が動いた――ああ、ゴーティスが逃がした近衛兵は、役目を果たしたということだ。

ゴーティスは感銘を受け、白み始めた窓の外を眺めた。湖の上には灰色の霧がかかり、ゴーティスの目には何も見えない。

「急げ！　ここでのんびりしてる間に、あんたを救おうと城内に忍び込んだジェニーが命を落とすかもしれない。早く剣をとって仲間に合流しろ！」

ローレンの声に、ゴーティスは立ちすくんだ。

「ジェニー……だと？　ジェニーは、生きておるのか？」

「当たりまえじゃないか！」

ローレンが憤慨して怒鳴った。

「あんたのために、ジェニーは今頃、ここの奴らと剣で戦ってるんだ！」

ローレンはそう叫び、ゴーティスの手から滑り落ちた剣を見て、不審そうに眉をひそめる。

「まことか？　死んではおらぬのか？　あやつは今も生きて……息をしておるのか？」

ローレンの返答はなかったが、ゴーティスを不可解そうに見返す彼の目が、ジェニーの生存を物語る。彼女の絶対の味方である彼が、ジェニーの生死について嘘をつくわけはない。

「生きて……おる……」

ゴーティスは大きく息をついた。安堵のため息はあまりにも深く、ゴーティスが床に落ちた剣に手を伸ばすと、眩暈を覚えた。

だが、剣に触れたゴーティスの手には不思議な力がみなぎる。ゴーティスの指の先が触れたそれは、剣の形をとった勇気だ。

ゴーティスは小城にある月の女神像を思い浮かべ、彼女に短い祈りを捧げた。

――ジェニーに加護を。

――我が国に勝利を。

でも、祈りはしたものの、ゴーティスには予感があった。ジェニ

ーがこの城内にいるのなら、勝利はもうヴィレールの手の内だ。月の女神はまた、戦の神でもある。それはまた、ジェニーも然り。

だが、部屋を出る直前で二人は足止めをくらう。入口前の通路に倒れた衛兵を跨ぎ、顔を赤くしたカイルが入って来たのだ。彼もまた、その手に剣を握っていた。

カイルは後ろにもう一人、衛兵らしい男を従えていた。

「ロハン、この裏切り者め！」

カイルは肩をまわすと、剣をまっすぐにローレンに突きつけた。

「ヴィレールと通じて奴らを引き入れたのはおまえだろう！　おまえはどれほどこの国に恩義があるのか、忘れたわけじゃないだろうな？　レオポルド様は、俺が決して招かれない寝所にさえおまえを呼び、特別に目をかけておられたのに！」

ローレンが顔を引きつらせて笑った。

「俺はヴィレールと通じてないし、こいつが俺の仇なことに変わりはない。でも俺は、この国に恩義なんか感じちゃいない。あの変態王め、いつも足元を見やがって……！　俺はこの国の塩にしか、興味はないんだよ」

「なっ……なんて恩知らずな！」

激昂したカイルの小さな目が、突然、瞠目する。彼の目は、床にあるマキシム王の死体にくぎづけだ。

「……おまえ、まさか……まさか、その手でやったのか？　それとも……」

ローレンの剣は当然ながら、ゴーティスの持つマキシム王の剣も血で汚れている。二人の剣を見比べたカイルが、剣先を床にたたきつけながら、唸った。

「あああ、レオポルド様！　くっそう、おまえたち二人とも、生きてここを通れると思うな！」

カイルの剣が二人の間を割り、ローレンとゴーティスはそれぞれ

左右に避けた。すると、疲労した体が急な動きに反応しきれないのか、ゴーティスはよろめいて、床に膝をつく。床面が前後に大きく揺れたように感じられたのは、ゴーティスだけの錯覚だろうか。

カイルの低い笑い声が響いた。

「はは、ゴーティス王、動きが鈍いじゃないか！　でも仕方ないか、あんたが毎日飲んでた水には少量の毒が混ざってたからな。今頃になって利いてきたんだよ」

カイルの歪んだ笑顔から振り出された剣を、ゴーティスはかろうじて防いだ。普段なら剣を弾き飛ばせる力が、ゴーティスの腕に少しも集まらない。息切れがする。多少の毒に慣れているはずの体が想像以上に弱っている。

だが――ここで死んでなるものか。

故国の軍が、彼らの王を奪ったこの国に集結しようとしている。ジェニーが生きている。

愛する男を救うためだけに敵地に乗り込んだ、向こう見ずで勇敢な女の顔をもう一度見るために、ゴーティスはこの場を生き抜く必要がある。

剣の交わる音がゴーティスの頭の中に反響し、動悸がして、ゴーティスは弱い吐き気に襲われた。ちょうど、カイルの背後で、ローレンが衛兵の剣を頭上で受け止めたところだ。

カイルの振り切った剣がゴーティスの腕部分の服を裂いた。肉まで裂かれたような衝撃だったが、白地の服には血が薄く滲み出しただけだ。

「死んだ女なんかに操を捧げないで、さっさと女を抱いとけばよかったんだ。そうすりゃ、あんたが楽しんでる間に、俺が女ごとおまえを串刺しにしてやれたのに！」

「ほざけ、ジェニーは死んでおらぬ！」

すると、逆上したらしいカイルがゴーティスに剣を振り下ろし、応戦したゴーティスの剣に一気に体重をかけた。その力を押し返し、押し返され、ゴーティスとカイルは一歩も譲らずに、立ち位置をぐ

るりと変える。
と、ゴーティスは突然、何かに足をとられて体勢をくずした。足が滑り、体勢を立て直すこともできずに床に落ちた。剣は床に打ちつけられる前に何かの物体に刺さり、無情にもゴーティスの手から離れていく。
倒れたゴーティスの顔の横に見えたのは、血だまりに浸かったマキシム王の娘の体だ。ゴーティスは彼女の服の裾に足をとられたのだ。
「ははははは！　おまえの運もここまでだ、ゴーティス王！」
明るさを増した室内にカイルの笑い声がこだました。ゴーティスが見上げる彼の口が、やけに赤く見えた。
「地獄に堕ちろ！」
カイルの腕が剣を振り上げ、ゴーティスは娘の体に刺さった剣に手を伸ばした。
生きることをあきらめはしない。祖国が、ジェニーが、娘カミーユが、ゴーティスが生きることを望んでいるのだ。

ゴーティスが剣の柄を掴み、襲いかかってくるだろうカイルの剣を満身の力ではね返そうと構えたとき、カイルの剣が宙で揺れて止まった。怒りに染まっていた彼の顔が戸惑い、その目がゴーティスから逸らされ、別のあらたな怒りが彼の唇から暴発した。
「こっの……ローレン！」
怒り狂ったカイルが振り返ると、その腰から真っ赤な血が溢れ始めた。そしてその直後、ローレンの背後にいた衛兵の剣が、ローレンの背中に襲いかかる。
「ローレン！」
ローレンは顔をしかめて右足を大きく一歩踏み出し、ゴーティスを見た。
だが、彼は勇者だ。すぐに衛兵に振り返り、鮮やかな剣さばきで男に致命傷となる一撃を与える。ローレンの背中には、右肩から斜

め下に向かって、大きな長い傷が走っていた。
「ローレン、危ない！」
だが、反撃を果たしたローレンを待っていたのは、カイルだ。振り返ったローレンにカイルが体当たりする。
ゴーティスが起き上り、カイルの体に伸ばした剣は届かなかった。苦痛に歪んだローレンの顔がカイルの震える肩先から見えなくなったのは、そのすぐ後だ。
「おのれ、カイル！」
ゴーティスが次に伸ばした剣はカイルの背中を斜めに斬った。カイルは悲鳴をあげて床に膝をつき、ゴーティスの攻撃から逃れようとして床を転がる。それを追おうとして、ゴーティスは、床に崩れ落ちたローレンの腹から湧水のように血が噴き出しているのを見て、言葉を失った。

「……あいつを逃がしていいのか？」
カイルが消えた入口を見たあと、ゴーティスはローレンの怪我に視線を戻した。
ひどい出血だ。カイルを追っている間にローレンの命が果てるかもしれない。
「血を止めようとでも思ってるんだろうが……無駄だ。この傷の深さは、自分でもよくわかってる。カイルにしてはよくやったよ、致命傷だ」
「よい、もうしゃべるな。今少し耐えれば、おまえの妹に会えよう」
ゴーティスがローレンを助け起こそうと彼の肩に触れると、彼はその手を押し戻した。
「仇の情けはいらない」
ローレンが咳きこみ、赤い唾を吐きだした。彼は急いで口を拭ったが、唇の周りに血が残っている。
ゴーティスが隣に跪くと、ローレンは反抗的な目で見返した。今や懐かしささえ感じる、ジェニーと同じ反抗的な態度だ。

「……なにゆえ、俺を助けた？」
「俺はあんたを……この手で殺したかっただけだ」
ゴーティスが見つめ返していると、彼の目が次第に戸惑いを帯びてくる。
「では、今しばし生きて、殺せばよい」
疑わしそうにゴーティスを睨んだローレンの体から力が抜け、ゴーティスはその頭を手で支えた。ローレンは抵抗しなかった。震えながら深い息を吐き、いまだに出血し続けている腹を手で拭う。
「おまえを殺せば……俺がジェニーに、殺される……」
ゴーティスはジェニーの顔を思い出し、思わず微笑んだ。ともに勇敢な兄と妹が剣を交わらせる姿は圧巻だろう。ローレンがゴーティスを見て微笑むのは、彼が同じ女の顔を思い浮かべているからに違いない。
「だが――それでは、おまえは俺への復讐を果たせまい」
「いや……」
目を閉じたローレンの顔色が土色に変わっていた。ゴーティスがこれまでに何十回と見てきた、死人の顔に近づいている。
「ローレン？　ローレン、眠るな！　まだジェニーと会っておらぬではないか！」
「うる……さいな」
ローレンは顔をしかめて瞼を開き、ゴーティスを非難するように見た。
「……復讐は果たせるさ。あんたがジェニーと一緒にいる限り、顔を見るたび……あんたは、俺に救われた今日を思いだす。ああ、いい気分だね……あんたはずっと、俺に感謝して生きるんだ……あんたは俺に一生、頭が上がらないんだよ……」
「待て、まだ行くな！」
眠るように静かに閉じていくローレンの瞼を見て、ゴーティスは彼の体を揺さぶった。彼は目を開けなかったが、眉が不快そうにひそめられる。彼の意識は、まだ残っている。

でも、この世が彼を引きとめられる時間はもうわずかだ。彼の息があるうちに、ジェニーと何とか引き合わせなければ――。

ゴーティスが剣を掴んで立ち上がると、窓の外に広がる薄い闇の向こうに、霧がはれた湖が見えた。湖上に、おびただしい数の白い物体が浮かんでいる。

それが何かを特定すると、ゴーティスの目頭が熱くなった。萎えた膝に力が戻ってきた。

ゴーティスの見慣れたヴィレールの国旗が掲げられた船が、びっしりと並んでいた。彼らの王を奪ったマキシム王国に報復しようと、湖から国を包囲したヴィレール軍だ。

ところが、そんなとき、ゴーティスの耳に廊下を疾走してくる足音が聞こえた。相手は一人だ。

こんなときに。

こんな大事なときに。

「すぐに戻る」

ゴーティスは寝かせたローレンに言い残し、剣を手に、部屋を走り出た。

＊　＊

ジェニーは廊下の角を曲がり、暗闇を反対方向から向かってくる影に気づいた。男だ。この国はいつまで、ジェニーをゴーティス王から阻もうとするのだろう。

「お、おまえは、ジェニー……！」

剣を掲げたその男は、カイルだ。ゴーティス王を拉致し、この城に連行した張本人。

「会いたかったわ、“カイル”」

ジェニーは身構え、剣をカイルに向けた。日常的に剣を扱う男と

まともにやり合うのは利口ではないが、怪我を負った男なら、それも当てはまらないだろう。カイルは返り血も浴びているが、彼の服が腰の部分で横に裂けていて、一帯が血で染まっている。彼が右側をかばうように歩くのは、彼が傷を負っている何よりの証拠だ。

「はは、こんなところにまで現れるとは、なんと勇ましい愛妾だ！　王と一緒にわざわざ死にに来たか！」

「死ぬのはあなたの方よ！」

ジェニーが繰り出した剣をカイルが受ける。彼がジェニーの力に負けることはないが、ほかの男たちと比べれば、彼の衰えは明らかだ。どちらも一歩も譲ることなく、二人はその場をぐるぐると回る。

「この女！」

ジェニーの剣を押し返すことにやっとのことで成功し、カイルは肩で激しく息をつきながら、ジェニーを睨みつけた。

「動けば動くほど傷が広がるわ。早くらくになった方がいいわよ」

ジェニーがカイルの腰の傷を示して言うと、彼はむくんだ顔を怒りでさらに膨らませた。

「俺は女が大嫌いだ。同じ空気を吸うのだって嫌だ。あんたはあんな生き物と少し違うみたいだが……それでも、女にやられることだけは絶対に許せない！」

再びジェニーに襲いかかった彼は、剣を合わせながら、顔を醜く歪めた。

「知ってるか？　あんたの兄は俺がこの手でさっき殺したんだよ」

ジェニーは信じなかったが、そのわずかな動揺をカイルに突かれ、剣を押し返されて床に転倒した。

彼は嘲笑したが、でも、ジェニーがそのまま反撃しないと思ったことが間違いだ。ジェニーはすぐさま剣を拾うと、床を転がりながら、彼の足をその剣で振り切った。

「ぎゃあああっ……！」

雄たけびのような悲鳴とともに、カイルの体がジェニーに降ってくる。ジェニーは手をついて逃れたが、髪を何かに引っ張られ、再

び床に転がった。背後でカイルの笑い声が高く響いた。
「カイル……！」
ひとつに小さく束ねていたはずのジェニーの髪がほどけ、その先端をカイルの手が掴んでいた。
「女ってのはやっぱり不便だな！　男の気を引くつもりか知らないが、こんなに長く髪を伸ばすからだ！　大体、女が戦いの場に出るなんて、俺は――」
カイルの手は引っ張る対象を失い、ジェニーが剣で振り切った髪の先を掴んだまま、ひっくり返った。
「おまえ！　髪を、髪を切るなんて……！」
ジェニーの放った剣の先がカイルの首元にめりこんだ。彼が目を白黒させ、剣の埋まった箇所から血が勢いよく流れ始める。
「髪なんか伸びるわ。いつまでもしゃべりすぎよ……」
だが、必死で抗おうとするカイルの手は、ジェニーを引き続き襲う。カイルは暴れ続け、ジェニーは彼の力に引きずられて仰向けに転がった。剣を保つ腕に力が入りきらなくなって、ジェニーは剣を両腕で支え、振動に耐える。
（早く、早く、王のところに向かわせて……！）
そのときだ。
カイルの胸に、剣の刃が上からまっすぐに突き立てられた。
「間に合ったか！」
ひときわ大きなカイルの呻き声に続き、男の声がした。ジェニーが見上げると、サンジェルマンが笑い、ジェニーの横にしゃがみこんだ。
かつて、これと同じ風景があった。ジェニーが危機に瀕したときに駆けつけた、サンジェルマンの笑顔。
サンジェルマンはカイルの腕のまわりに散乱したジェニーの髪に目をやり、ジェニーに再び笑う。
「もう大丈夫だ、援軍が到着した。おまえの兄があちこちで起こした火事のおかげだ。燃え盛る火を見て、予定より早く軍が城に突入

してくれた」
「ローリーが？」
サンジェルマンは頷き、ジェニーを助け起こす。
「ジェニー、王はこの突きあたりの部屋にいるはずだ。早く向かえ」
ジェニーは廊下の先を見た。
この先に王がいる。
今頃になって、ジェニーは王が死んでいるかもしれない恐怖で身が縮んだ。
彼の死体を目にすることになったら……どうすればいい？
ジェニーが立ちすくんでいると、サンジェルマンがジェニーの背をそっと押した。
「早く行け、ジェニー。王がおまえを待っておられる」
でも、ジェニーの不安を、サンジェルマンの笑顔は払拭してくれる。

待っていて。
私が行くまで待っていて、ゴーティス王。

駆け出したジェニーの目に涙がにじむ。王の顔を直接見るまで泣かないと誓ったのに、涙が押しあがってくる。
突き当たりの部屋の前には、男が一人倒れていた。城の衛兵だ。
ジェニーはさらなる敵の登場に備え、剣を抜いた。でも、正直なところ、もう、ジェニーには戦う力がそれほど残っていない。
その倒れた男の手前に、滑るように、男が部屋から躍り出てくる。
「あ……」
ジェニーの駆ける速度が落ちた。ジェニーの様子を窺う男の手には剣が光っている。でも、彼の頭は、その鈍い光とは違うやわらかな輝きを放っている。
「ああ！」
男が足を踏み出すより先に、ジェニーは剣を投げ捨て、全速力で

走りだした。この瞬間までずっと溜めこんできた涙が溢れだすが、ジェニーの目は彼をとらえて離さない。
「……ゴーティス王！」
「ジェ……ニー！」
ジェニーが飛びつくと、彼の体はぐらりと揺れて後ろに倒れた。でも、倒れてもなお、彼の腕はジェニーの背を抱きしめ、ジェニーの頭をいたわるように抱きしめる。
「怪我は？　怪我はどこにもない？」
ジェニーが顔を上げると、王の顔の上に、ジェニーの涙がぽたぽたと落ちた。王はジェニーの涙で濡れた顔を手で拭い、顔を引き寄せて口づける。
「おまえは？　よくぞ無事で……こんなところまで来おって！」
ジェニーは王の頭を抱きしめた。王がジェニーの背骨を砕きそうなほど、腕に力をこめ、ジェニーを抱きしめる。
「よくぞ生きて、よくぞ生きておってくれた……俺のために、おまえはカイルから死ぬほどの苦痛を強いられただろうに」
王の口づけをもう一度受けながら、ジェニーはふと彼の誤解を思いだした。
「ゴーティス王、あなたが私だと思ってた人質は、私じゃなかったのよ」
「何――だと？」
王が瞳を近づけて、真偽を確かめようとジェニーの瞳をのぞきこむ。
「本当よ。私はカイルに監禁されたけど、アリエルと一緒に逃げ出したの。私たちが王城に戻ったときには、あなたは既にいなかった」
ジェニーは笑い、呆然とする彼の瞼にそっと唇を押しつけた。唇に触れる、彼の感触が愛しい。
「会いたかった。あなたが無事で……本当によかった」
王はジェニーを腕に抱き、長いため息をもらした。
「……そうか、おまえではなかったか。俺はてっきり……」

王は弱く笑う。彼の瞳も、涙に濡れてきらきらと光っている。
「愛してるわ。もう、どこにも行かないで」
「どこにも行かぬ。どこにも行かせぬ。おまえはずっと――」
ふと、ジェニーを抱く彼の腕が離れた。
「ジェニー、おまえの兄がここにおる！」
王はジェニーを胸に抱きながら身を起こし、ジェニーに彼が飛び出してきた部屋を指し示した。
「今ならまだ間に合う！　早く――」
ジェニーは王の言葉を待たずに飛び起きた。

ジェニーの兄ローレンは幸せそうに微笑んで眠っていた。顔に一切の傷はなく、今にも大声で笑い出しそうだ。腹を真っ赤に染める傷がなければ、彼はただ、深く熟睡しているだけに見える。
ジェニーは膝をつき、家族に愛された兄の頬にそっと手で触れる。まだ温かかった。ジェニーが呼びかければ、彼は文句を言いながら、きっと起き上がってくれる。
ジェニーの隣に並び、王が膝をつく。ジェニーが彼の肩に顔をつけると、王は静かにジェニーの背をたたいた。
「この男は俺をカイルから救ってくれたのだ」
そうだ、そうだろう。彼はジェニーのために、ジェニーが愛する王を守ってくれたのだ。
ジェニーは何度も頷いた。
王のためだけにとっておいた涙は、もう枯渇したはずだ。涙を流す機会なんて、もうないはずだった。そんな機会など、要らなかった。なのに、どうして、ジェニーの涙は止まってくれないのだろう。
「ローリーも一緒に連れて行って」
「もちろんだ」
王が動こうとすると、サンジェルマンが二人の前に跪いた。「私がお連れします」

王がジェニーの肩を抱き、ふと、不審そうにジェニーの頭を見た。
「男に見えるように髪を短く切ったのか？」
「それは“名誉の負傷”ですよ、王」
サンジェルマンが振り返って、二人に言う。
「彼女は見事に兄の仇をとったのです」

サンジェルマンがローレンを担いで歩き出し、ジェニーと王が踵を返すと、部屋の戸口にケインが気後れしたように立っていた。
「無事に会えたんだ。よかったね」
ジェニーと目が合うと、ケインが笑った。
ジェニーの心配に反し、王はケインに怒鳴らなかった。怒っている様子も見せなかった。それにはケインも気づいたようで、彼は、王にぎこちなく笑いかける。王が、静かに頷いた。
「ご無事で何よりです」
「……こんなところにまで、よう来たな」
ケインは驚いたように眉をあげたが、すぐにいつものような笑みに戻った。
「だって、あなたはヴィレールの王じゃないですか」
「おまえは――俺を許さぬと思うておったが」
「うーん。まあ、そう思ったことはあるけど……私の兄だし」
王は眉をひそめ、彼から床に視線を落とす。
「……そうだな。今後は、もっと兄らしくなることを考えよう」
「そんなこと、いいよ。私の代わりに面倒な王位を継いでくれてるんだから、それで十分。私はとてもじゃないけど、兄上みたいに国や民のことを考えて行動なんかできないよ。私は好きな場所で好きな人たちだけに囲まれて暮らしたい。まあ、そりゃあ……ジェニーを失うのはとっても残念だけど」
ジェニーを見て、ケインは笑う。
王が咳きこみ、ジェニーの肩にまわされた彼の腕に重みが増した。
「城内に煙が充満してきたのかもしれません。王、早くここから脱

出しましょう」
ああ、と王はサンジェルマンに答え、ケインに顔を上げた。
「ジェニーに俺の体は負担だ。……ケイン、おまえの肩を貸せ」
数秒間、ケインは王の顔を見て沈黙した。王も無言で見つめ返している。
やがて、ケインがこわばった表情で王に歩み寄る。
ケインに腕をとられても王は何も言わなかった。二人は言葉を交わさない。
だが、王がケインに肩を預けると、ケインは王を見ながら微笑んだ。王は目を閉じ、ジェニーと繋いだ手をゆっくりと握りしめた。

ライアンの守る階段までたどり着くと、そこは既にヴィレールの兵士たちによって占拠されていた。しかし、ジェニーが探すライアンの姿はそこにはなかった。
「ライアン殿は兵士たちに先に連れていかせました」
ジェニーに語りかけるように、サンジェルマンは言う。
「王、あとで彼にお会いになってあげてください。ご立派でしたよ。ジェニー、彼が最期まで離さなかった剣は、あなたが貰ってやってほしい」
ジェニーはライアンと最後に会った、数人の死体が置き去りにされた階段の壁際を見た。彼がジェニーを見上げ、最後に流した純粋な涙は、まだジェニーの脳裏に焼きついている。
「残りの者はまだ捜索中です」
――ユーゴとアドレーの安否はまだ不明なのだ。
ジェニーは腕に巻きつけていたアドレーの首飾りを外した。
「ゴーティス王、アドレーから預かってる物があるの」
「アドレー、だと？」
ジェニーが差し出して見せた首飾りを、王は目を細めて見つめる。
「これは……エレノアの首飾りではないか」

「そうよ。彼の一カ月前に亡くなった奥さんの形見なの」
王が驚いた。
「エレノアが死んだのか？」
「そうよ。だから、アドレーは彼女の代わりにあなたに直接お礼を言いたいって……ここまで一緒に来たのよ」
その先を、王はジェニーの口から聞かなくても察したようだ。ジェニーの手から首飾りを受け取ると、彼はしばらく、それをじっと眺めていた。
「アドレーはいい人ね。カミーユともいっぱい遊んでくれたわ」
「あの娘は俺に似て可愛い。かまいたくなるのも当然だ」
ジェニーの前で決して認めなかった娘との親子関係を、彼はあっさりと口にする。ジェニーがつい唖然とすると、王はジェニーに手を伸ばした。
「カミーユに弟を作ってやろう。おまえの息子ならきっと、賢く、たくましく育つ。王としてふさわしい人間に育つだろう」
王と手を繋ぎかけ、ジェニーは立ち止った。胸が鋭く痛んだ。
「……私は王妃にはならないわ」
王は優しく、微笑み続ける。
「俺は、おまえにこのゴーティスの妻になれと言うておるだけだ。王妃ではない」
「同じことよ」
「同じではない」
「同じよ！」
「あいかわらず頑固な女だな。この俺の妻になるのが嫌なのか？」
王に肩を貸すケインが二人の会話を聞き、おかしそうに笑う。
「ジェニー、何が問題なの？　妻になれば王に毎日会えるんだよ。食事も一緒だ。王の寝室だって、入りたい放題」
妻の座にこだわりはなくても、どれもこれもジェニーが切望するものだ。彼と目覚め、彼と同じ食卓につき、毎日を笑いながら過ごすのは、どんなに素敵なことだろう。会いたいときに彼が手の届く

近さにいることは、ジェニーがずっと、いつも、願い続けてきたことだ。

ジェニーと繋いだ手を、王はぐいと引き寄せる。

「ジェニー、何が不満だ？」

「あなたにはもっと条件のいい妃候補がいるはずでしょう？　その方がヴィレールの為になるの、だからよ」

先に進んでいたサンジェルマンが振り返った。

「ジェニー、王と結婚した方がいい」

ジェニーと視線がぶつかると、彼はにっこりと笑った。

「あなたは王とヴィレールの国のことを想い、民からも想われている。あなたの行動に感銘を受け、今回の援軍にどれだけの一般の民が志願したのか――あなたはわかっていないだろう。つべこべ言わないで、素直に王と結婚なさい」

彼の驚きの発言にジェニーが王に振り返ると、彼はいたずらっ子のように笑って、眉をつり上げた。

「サンジェルマンの許可が出たぞ」

ジェニーは口を押さえた。視界が涙で消えていく。

「このゴーティスの妻になれ、ジェニー。よいな？」

ジェニーが王に首を縦に振る前に、彼は笑いながらジェニーの唇に唇を押しつけた。

湖から吹き抜ける風の轟音とばかり思っていた音は、ジェニーたちが階下に向かうにつれ、人々の声だとわかる。

かなりの人数だ。前方に見えてきた玄関を通し、大合唱が聞こえる。彼らが歌っているのは「勇者の詩」だ。ジェニーが闘技大会で耳にした、勇者を讃える歌。

「ケイン、もうよい」

王がケインの手から離れ、一人で歩こうとした。だが、ここに着

く途中から言葉を発しなくなった彼は、実はかなり弱っているようだ。ケインの支えを失い、王の足が大きくふらついた。
「まだ無理だ、兄上！」
「構うな！」
王は厳しく言い放ち、壁に手をついて呼吸を荒げる。
「そんなこと言ったって……」
なおも王に手を貸そうとするケインを、ジェニーはやんわりと止めた。
「いいの、ケイン。王は、ここからは自分の足で歩いていかなきゃならないの」
「なんで？　あんなに具合が悪いんだよ？」
「彼はヴィレールの王なのよ。いいの」
「いいのですよ」
サンジェルマンが、ジェニーを見て微笑んだ。
呼吸を整えながら、王がジェニーに振り返って、弱々しく笑う。

足をひきずるように歩いていた王が、朝の光に溶けるにつれ、背をまっすぐに伸ばしていく。
大歓声だ。彼らの求める、彼らの王が姿を現し、大合唱は城にとどろくほどの大歓声に変わる。王が手を振ると、彼の無事を喜ぶ歓声が山のあちこちに反響して、ジェニーの立つ石の床が振動する。
ジェニーは王の背中を見つめ、腕の鳥肌をなでた。
彼を愛せるだけでも幸せなのに、これから先の彼が創りだす人生に付きあえるなんて、わくわくする。彼の一歩一歩を、ジェニーは追っていけるだろうか？
「王が帰れたのはあなたのおかげだ」
ジェニーは、隣に立つサンジェルマンの誇らしそうな笑顔を見上げた。
「私だけじゃないわ。あなたやライアン様……みんなの力よ」
彼は笑いながら、否定する。

「私が言ったのはそういう意味じゃない」

歓声がいつのまにか自分を呼ぶ声に変わっていた。弱い朝日の中で、王の手がジェニーを呼んでいる。彼の髪は朝日と同化して、まるで天使のようだ。

彼が放つ光はあまりに眩しくて、ジェニーは目を細める。でも、ジェニーが伸ばした手を、彼の手は確かに導いてくれる。

ああ、きっと大丈夫だ。

彼が一緒なら、きっと大丈夫。

彼が起こす奇跡の一片一片を、ジェニーはこの先も必ず、ずっと見守っていける。

最終話－2（後書き）

ここまでお読みくださったみなさん、まずはお疲れさまでした。
そして、こんな長い作品を最後までお付き合いいただきまして、ありがとうございました！

約2年も続いたこのお話は、これにて終わりとなります。
これまでにお読みくださった方はもちろん、拍手・メッセで激励してくださったみなさん、感謝してもし足りません！
本当に、どうもありがとうございました。
もしコメントなどいただけたら、今後の糧とさせていただきます。

－ＴＨＡＮＫ　ＹＯＵ－　ＸＸＸ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0771e/

王の帰郷

2010年10月8日10時31分発行